

平成30年度発掘調査報告

(第4分冊)

北条小町邸跡

西瓜ヶ谷遺跡

山ノ内上杉邸跡

安国寺跡

田楽辻子周辺遺跡

名越ヶ谷遺跡

材木座町屋遺跡

材木座町屋遺跡

材木座町屋遺跡

平成31年3月

鎌倉市教育委員会

平成30年度発掘調査報告

(第4分冊)

北条小町邸跡

西瓜ヶ谷遺跡

山ノ内上杉邸跡

安国寺跡

田楽辻子周辺遺跡

名越ヶ谷遺跡

材木座町屋遺跡

材木座町屋遺跡

材木座町屋遺跡

平成31年3月

鎌倉市教育委員会

ご あ い さ つ

本市は、市域の6割以上が埋蔵文化財包蔵地であり、多くの市民が埋蔵文化財の眠る土地で生活を送っています。そのため、家屋や店舗の新築や建替え等に伴い、埋蔵文化財に影響を及ぼす工事が行われることも多くあります。このように、私たちが日々の生活を送っていく上でやむを得ず失われる埋蔵文化財について、記録を保存し後世に残すことは、現在を生きる私たちの責務であると言えます。

鎌倉市教育委員会では、昭和59年度から個人専用住宅の建築等に係る発掘調査を実施しています。本書は平成17～23・25・26・29年度に実施した、個人専用住宅の建築等に伴う発掘調査28か所の調査記録を掲載しています。

本書に収めたひとつひとつの調査成果は、武家政権発祥の地であり、今もその歴史を継承し、文化を発信する鎌倉の貴重な文化遺産です。これらの成果を広く知っていただくとともに、研究資料として活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、関係者の皆様に深い御理解を賜るとともに、さまざまな御協力をいただきましたことを心からお礼を申し上げます。

平成31年3月29日

鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成30年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書(第4分冊)である。
- 2 本書所収の調査地点は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施し、報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

第4分冊 目次

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成20・21・22年度発掘調査地点一覧	V
調査地点位置図	VI

19 北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目421番1地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第二章 堆積土層	10
第三章 発見された遺構と遺物	10
第四章 まとめ	19

20 西瓜ヶ谷遺跡 (No.213) 山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	36
第二章 堆積土層と発見された遺物	40
第三章 まとめ	42

21 山ノ内上杉邸跡 (No.170) 山ノ内字東管領屋敷179番39地

第一章 遺跡と調査地点の概観	51
第二章 堆積土層	56
第三章 発見された遺構と遺物	57
第四章 まとめ	84

22 安国寺跡 (No.174) 山ノ内字東管領屋敷147番9外地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	118
第二章 堆積土層	120
第三章 発見された遺構と遺物	124
第四章 まとめ	159

23 田楽辻子周辺遺跡 (No.33) 浄明寺一丁目652番8地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	192
第二章 堆積土層	197
第三章 発見された遺構と遺物	198
第四章 まとめ	225

24 名越ヶ谷遺跡 (No.231) 大町六丁目1708番23外地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	247
第二章 堆積土層	252
第三章 発見された遺構と遺物	253
第四章 まとめ	262
25 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目919番19地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	277
第二章 堆積土層	283
第三章 発見された遺構と遺物	283
第四章 まとめ	293
26 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目893番9地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	308
第二章 堆積土層	314
第三章 発見された遺構と遺物	314
第四章 まとめ	317
27 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目742番4外	
第一章 遺跡と調査地点の概観	327
第二章 堆積土層	333
第三章 発見された遺構と遺物	333
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について	348
第五章 まとめ	349

本誌掲載の平成 20・21・22 年度発掘調査地点一覧

第 4 分冊

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	遺跡種別	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
19	北条小町邸跡 (No. 282)	雪ノ下一丁目421番 1	個人専用住宅 (柱状改良工事)	城 館	27	平成 22 年 3 月 29 日 ～平成 22 年 5 月 21 日
20	西瓜ヶ谷遺跡 (No. 213)	山ノ内字瓜ヶ谷980番 3 外	店舗併用 個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	54	平成 21 年 2 月 16 日 ～平成 21 年 3 月 16 日
21	山ノ内上杉邸跡 (No. 170)	山ノ内字東管領屋敷 179番39	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	33	平成 20 年 10 月 15 日 ～平成 20 年 11 月 28 日
22	安国寺跡 (No. 174)	山ノ内字東管領屋敷 147番 9 外	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	社 寺	46	平成 22 年 2 月 12 日 ～平成 22 年 5 月 7 日
23	田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)	浄明寺一丁目652番 8	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	67	平成 20 年 10 月 10 日 ～平成 21 年 1 月 29 日
24	名越ヶ谷遺跡 (No. 231)	大町六丁目1708番23外	個人専用住宅 (杭基礎工事)	都 市	21	平成 22 年 5 月 14 日 ～平成 22 年 6 月 30 日
25	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座一丁目919番19	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	28	平成 20 年 6 月 27 日 ～平成 20 年 7 月 16 日
26	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座一丁目893番 9	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	13	平成 20 年 7 月 24 日 ～平成 20 年 8 月 1 日
27	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座六丁目742番 4 外	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	45	平成 21 年 7 月 21 日 ～平成 21 年 8 月 26 日

鎌倉市全図

本書掲載の平成20・21・22年度発掘調査地点(19~27)
※遺跡名は一覧表を参照





北条小町邸跡 (No.282)

雪ノ下一丁目421番1地点

例 言

1. 本報は「北条小町邸跡」（神奈川県遺跡台帳No.282）内、鎌倉市雪ノ下一丁目421番1地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年3月29日～同年5月21日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約27㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 山口正紀
調査員 本城 裕・小野夏菜
作業員 倉澤六郎・佐野吉男・鈴木啓之・大塚尚城
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を山口正紀、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「HK22」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲
遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第1節 調査に至る経緯と経過	5
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	5
第3節 周辺の考古学的調査	6
第二章 堆積土層	10
第三章 発見された遺構と遺物	10
第1節 第1面の遺構と遺物	11
第2節 第2面の遺構と遺物	13
第3節 第3面の遺構と遺物	15
第4節 第4面の遺構と遺物	18
第四章 まとめ	19

挿図目次

図1 遺跡位置図	7	図15 第2面 ピット出土遺物	14
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	8	図16 第2面 遺構外出土遺物	15
図3 調査区位置図	9	図17 第3面 遺構分布図	15
図4 調査区配置図	9	図18 第3面 礎板建物1	16
図5 調査区西壁 土層断面図	10	図19 第3面 礎板建物1 出土遺物	16
図6 第1面 遺構分布図	11	図20 第3面 礎板建物2	17
図7 第1面 掘立柱建物1	11	図21 第3面 土坑6～8	17
図8 第1面 土坑1～4	12	図22 第3面 土坑6 出土遺物	17
図9 第1面 土坑3 出土遺物	12	図23 第3面 ピット出土遺物	18
図10 第1面 ピット出土遺物	13	図24 第3面 遺構外出土遺物	18
図11 第1面 遺構外出土遺物	13	図25 第4面 遺構分布図	19
図12 第2面 遺構分布図	13	図26 第4面 土坑9	19
図13 第2面 土坑5	14	図27 第4面 構成土出土遺物	19
図14 第2面 ピット60・62	14		

表 目 次

表 1	北条小町邸跡 調査地点一覧……………	6	表 5	第 4 面 出土遺物観察表 ……………	22
表 2	第 1 面 出土遺物観察表 ……………	22	表 6	遺構計測表 ……………	22
表 3	第 2 面 出土遺物観察表 ……………	22	表 7	出土遺物一覧表 ……………	23
表 4	第 3 面 出土遺物観察表 ……………	22			

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地点近景(西から)……………	27	3. 第 3 面 土坑 6 (西から)……………	30	
	2. 西壁土層断面(北東から)……………	27	図版 5	1. 第 1 面 土坑 3 出土遺物……………	31
図版 2	1. 第 1 面西側(北から)……………	28	2. 第 1 面 ピット出土遺物……………	31	
	2. 第 1 面東側(北から)……………	28	3. 第 1 面 遺構外出土遺物……………	31	
	3. 第 2 面西側(北から)……………	28	4. 第 2 面 ピット出土遺物……………	31	
	4. 第 2 面東側(北から)……………	28	5. 第 2 面 遺構外出土遺物……………	31	
	5. 第 3 面西側(北から)……………	28	6. 第 3 面 礎板建物 1 出土遺物……………	31	
	6. 第 3 面東側(北から)……………	28	7. 第 3 面 土坑 6 出土遺物……………	31	
図版 3	1. 第 3 面 礎板建物 1 (南から)……………	29	8. 第 3 面 ピット出土遺物……………	31	
	2. 第 3 面 礎板建物 2 (北から)……………	29	9. 第 3 面 遺構外出土遺物……………	31	
図版 4	1. 第 3 面 礎板建物 1 ピット 4 礎板 出土状態(北から)……………	30	10. 第 4 面 構成土出土遺物……………	31	
	2. 第 3 面 礎板建物 2 ピット 1 柱検出 状態(南から)……………	30			

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市雪ノ下一丁目421番1で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である北条小町邸跡（神奈川県遺跡台帳No.282）の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成21年10月13日～平成21年10月14日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約27㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、山口正紀が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年3月29日～同年5月21日までの2ヵ月ほどである。現地表面の標高は約8.5mを測る。廃土処理の都合から調査区を2区に分け、西側をⅠ区として平成21年3月29日～平成21年4月21日、東側をⅡ区として平成21年4月21日～5月21日まで調査を実施した。調査はまず重機により約80cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、中世に属する第1～4面の合計4面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして5月21日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（X = -75525.081、Y = -24994.010）、（X = -75530.227、Y = -25007.170）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

北条小町邸跡（No.282）は、鎌倉の中心軸である若宮大路の東側、鶴岡八幡宮前面（南側）の一辺約200mの略方形区画にあたる部分が埋蔵文化財包蔵地として周知されているもので、遺跡範囲は、西辺を若宮大路、北辺を横大路と鶴岡八幡宮境内、東辺を小町大路に画されている。今回の調査地点は図2に示したように遺跡範囲の南西隅部付近にあり、南側は宇都宮辻子幕府跡（No.239）と接している。JR横須賀線鎌倉駅から北東に約500m離れている。地形的には鎌倉の沖積平野の北東部に立地しており、遺跡の東側には市内最大河川である滑川が南流している。現地表面での標高は約8.5mを測る。

神奈川県遺跡台帳によれば、本遺跡の北東側には政所跡（No.247）、西側は国指定史跡若宮大路を挟んで北条時房・顕時邸跡（No.278）、南側は宇津宮辻子幕府跡（No.239）、南東側は若宮大路周辺遺跡群（No.242）、北東側は北条高時邸跡（No.281）といった周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接している。

鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、御所を鶴岡八幡宮東側の大倉に定め、以来、將軍の御所は大倉にあって、この地域が政治の中心であった。『吾妻鏡』によれば第3代執権北条泰時執政時の嘉祿元年（1225年）に若宮大路の東側、宇津宮辻子の北側に「新御所」の移転が行われたとされ、これにより政治的中枢が

八幡宮の東側から若宮大路一帯に移動したと考えられている。その後、嘉禎2年(1236年)には幕府と持仏堂などを「若宮大路東頼」に新造したと記されており、政治中枢が若宮大路一帯のなかで移動をしていることが知られている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。

遺跡内では今までに20ヵ所近くの調査が行われてきているが、図2でその分布をみると、商業地である若宮大路沿いの調査密度が特に高く、次いで遺跡西辺の小町大路沿いが多い。このうち、遺跡の東辺、若宮大路に面した①～⑧地点では、いずれも若宮大路の東側側溝とみられる溝および、側溝の木組枿材が検出されており、遺構の重複関係や遺構面の先後関係から、各地点で数時期の変遷が把握されている。そして側溝は、幅約3.0m(1丈)、深さ約1.5mの規模を有することが推定され、若宮大路の西側にあたる北条時房・顕時邸跡(No.282)の数地点で検出された側溝との比較検討から、大路の幅は両側溝の心々間で計測すると33m(11丈)であったことが推定されている(馬淵 1987、馬淵ほか 1996)。また、若宮大路に関連した遺物としては、③地点で木組側溝の底面から出土した「一丈伊北太郎跡」、「一丈南くくの井の四郎入道跡」と書字が残る墨書木簡2点があげられる(馬淵 1985a)。この2点は御家人とみられる「伊北太郎」、「くくの井の四郎入道」の所領相続者が側溝一丈分の作事を負担したことを示すものと解釈されており、若宮大路が当時どのように維持・管理されていたのかを知るうえで重要な資料となっている。③地点の側溝底部からは、屋敷の出入り口に当たる橋脚基礎の礎板が検出された。側溝の東側には屋敷の塀と思われる柱穴列が側溝に平行して穿たれる。また、屋敷内の大路沿いには小規模な掘立柱建物や竪穴状遺構が検出される傾向にある。なお、①地点では、事業者の厚志により中世地山面で検出した遺構の型取保存が実施された(小野田・熊谷 2018)。これが新築された店舗内の一角に展示されており、現在も発掘調査時の姿を間近にみることができる。

遺跡の西辺、小町大路に面した⑨～⑬地点では、小町大路の西側側溝が検出されている。現小町大路の東側にあたる若宮大路周辺遺跡群で検出された東側側溝との比較検討により、小町大路の道幅は21～24mを測り、おそらく22～23mが平均的な数値と考察されている(馬淵ほか 2010)。

表1 北条小町邸跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目421番1地点	
①	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目378番1・5地点	小野田・熊谷 2018
②	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目377番7地点	馬淵ほか 1996
③	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目372番7地点	馬淵 1985a
④	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目371番1地点	馬淵 1985b
⑤	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目370番1地点	宗臺・土屋 1998
⑥	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目369番外地点	瀬田 1991
⑦	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目369番1地点	原ほか 1998
⑧	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目367番1・368番1地点	宮田・森ほか 2000
⑨	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目395番地点	菊川 1989
⑩	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目400番1地点	馬淵ほか 2002
⑪	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目432番2地点	松尾 1983
⑫	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目432番2地点	菊川ほか 1989
⑬	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目440番の一部地点	馬淵ほか 2010
⑭	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目401番5地点	馬淵ほか 2003
⑮	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目403番14地点	押木 2017
⑯	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目407番3の一部地点	原ほか 2005
⑰	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目374番2地点	玉林 1986
⑱	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目427番2外地点	沖元 2015
⑲	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目419番3地点	玉林 1987

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

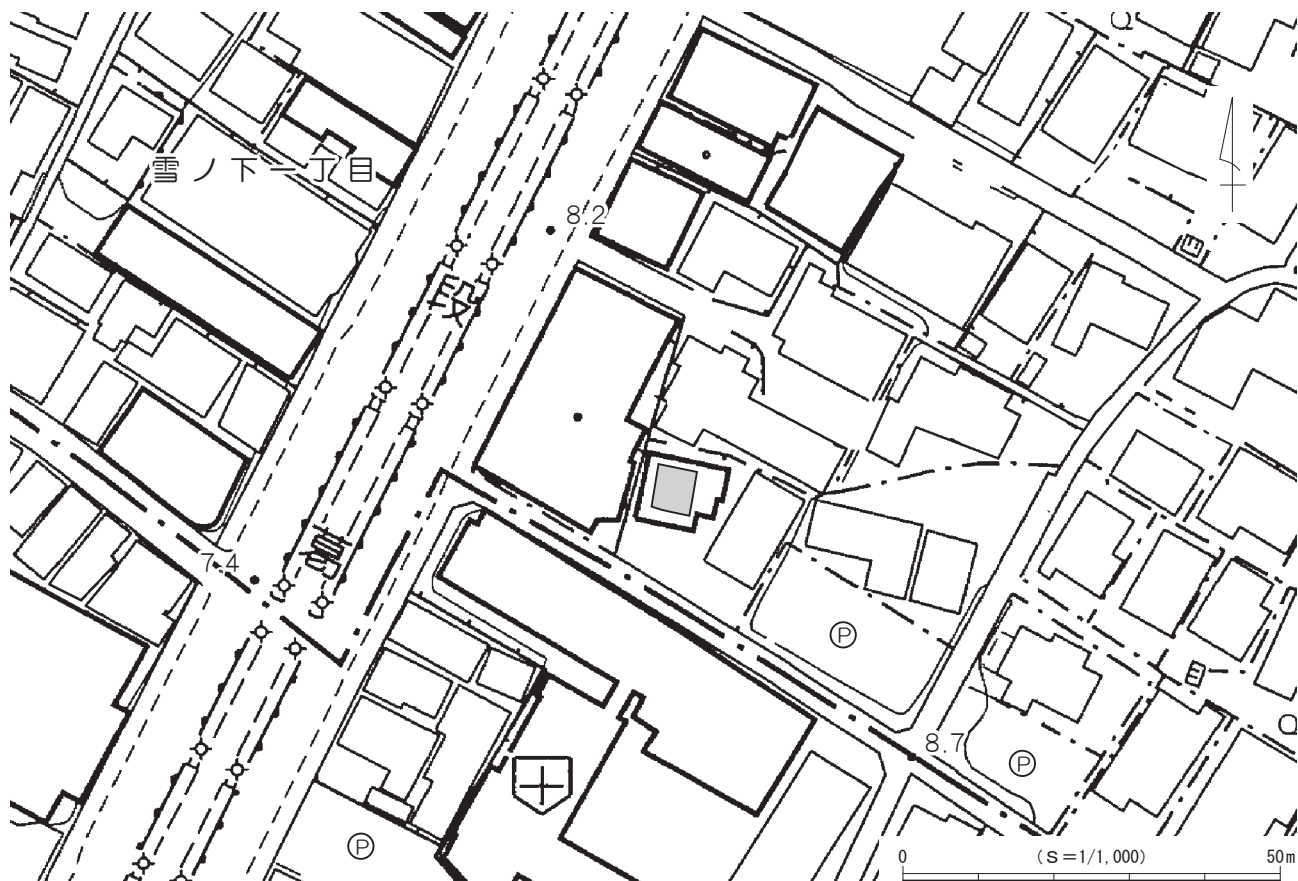


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

次に遺跡内部の様相についてみると、⑭地点では東西方向に延びる両側溝、⑮地点では東西溝と東西柱穴列、それらと直交する南北柱穴列、⑯地点では東西溝と直交する南北溝などがそれぞれ検出されており、これらの延伸方向や角度の整合性から遺跡内に方格区画が施行されていることが想定されている(押木 2017)。そのほかに⑰地点では庭と考えられる玉砂利を敷きつめた地業面が発見されており(玉林 1986)、今回調査区の北東側に隣接する⑱地点では、若宮大路に平行ないし直交する小規模な掘立柱建物が検出されている(玉林 1987)。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～4面までの合計4面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約8.5mを測り、最上部には層厚80～95cmの表土(1層)が堆積している。遺構確認面の第1面は表土を取り除いた2層上面で検出した。確認面の標高は約7.7mを測る。2層は微量の泥岩と炭化物を含み、締まりのややある暗灰色粘質土による整地層で、層厚10～20cmである。第2面は3層上面で確認し、確認面の標高は7.5～7.6mを測る。3層は微量の炭化物を含み、締まりのある暗灰色粘質土による整地層で、層厚5～15cmである。第3面は4層上面で確認し、確認面の標高は7.4m前後を測る。4層は少量の細砂と多量の鉄分を含み、締まりのある黒褐色粘質土による整地層で、層厚10cm前後である。第4面は中世の地山層である5層上面で確認し、確認面の標高は7.2～7.4mを測る。5層は少量の細砂を含み、非常に締まる黒褐色粘質土で、層厚20～40cmである。5層の下位には、灰褐色砂質土を主体とする地山層がつづくが、遺構は確認されなかった。

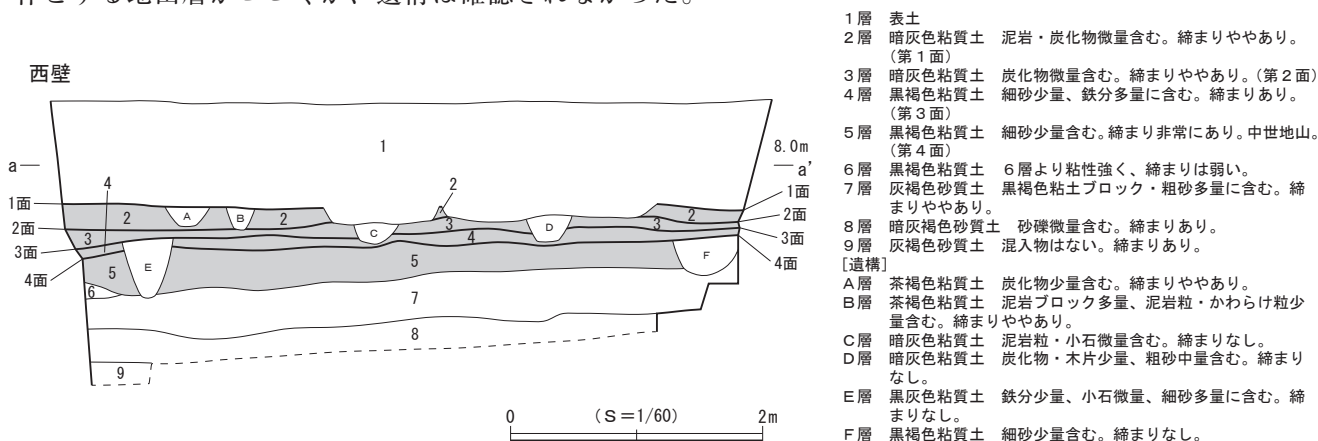


図5 調査区西壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～4面までの合計4面である。遺構確認面はいずれも中世に属し、検出した遺構は、礎板建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑9基、ピット105基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して3箱を数える。なお、残土置場の都合から調査区を東西に二分して調査を行ったが、報告に際しては一つの調査区として記述した。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～4面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の2層上面で検出され、確認面の標高は約7.7mを測る。2層は微量の泥岩と炭化物を含み、締まりのややある暗灰色粘質土による整地層である。この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑4基、ピット47基である(図6)。部分的な攪乱が多く及んでおり壊されている遺構もあると思われるが、全体に遺構密度が高いなかで調査区北壁付近は希薄になる様相がみられる。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品、木製品などが出土している。時期幅のある近世～中世遺物が混在しており、詳細な時期を決定することは難しいが、本面は大枠として近世の18～19世紀前葉頃に属すると考えられる。

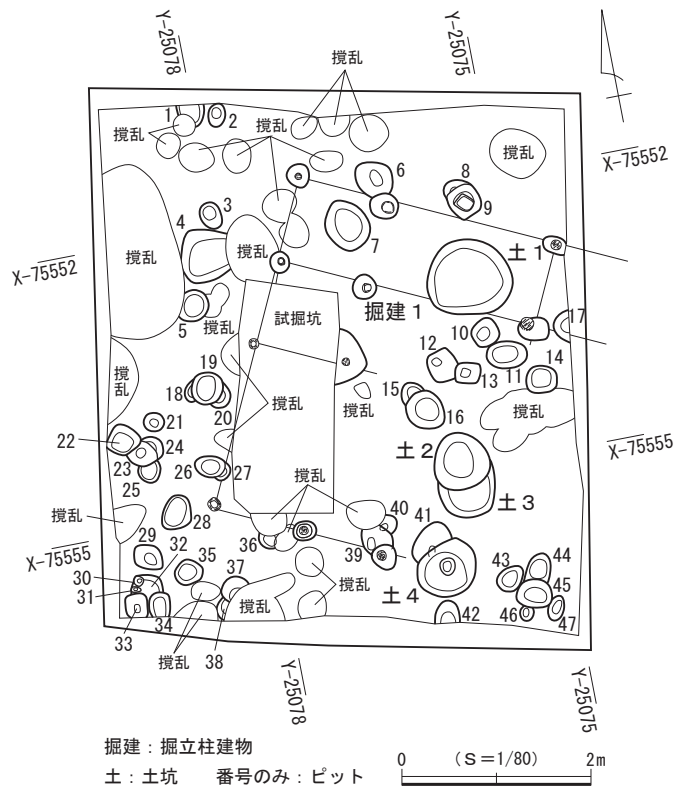


図6 第1面 遺構分布図

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物 1 (図7)

調査区の中央から東側にかけて位置する。調査区外の東側へ展開していると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内では柱が11本遺存しており、このうちの9本から掘り方が検出された。

本址は北東-南西方向が3間で、北西-南東方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で北東-南西列が北東から90cm、90cm、1.75m、北東面の北西-南東列が北西から1.0m、1.8m、南西面の北西-南東列が北西から1.0m、0.85mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-25°-Eである。

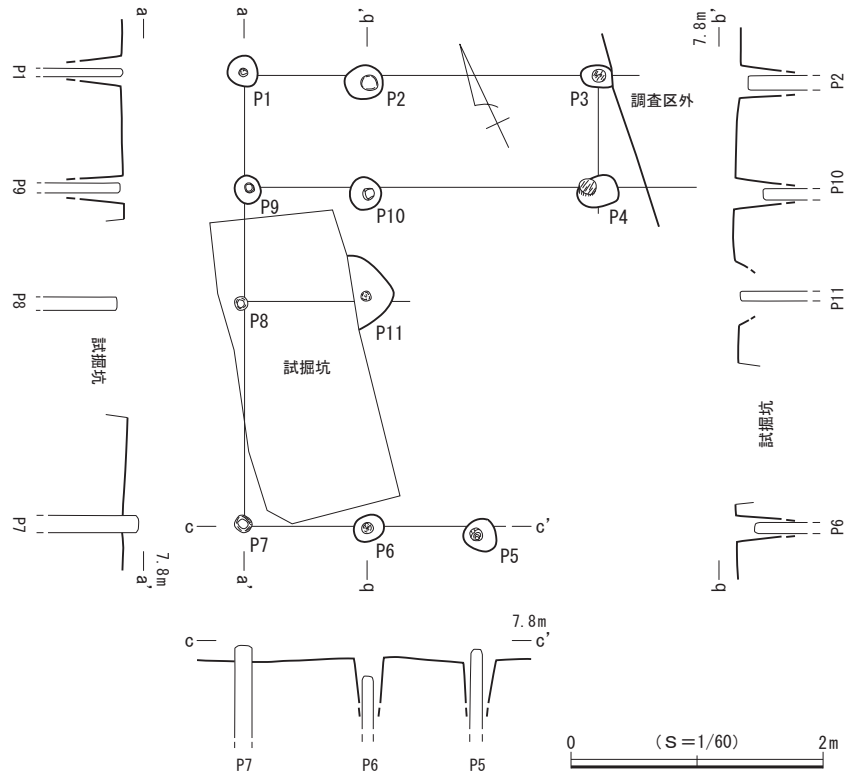


図7 第1面 掘立柱建物 1

柱の大きさは、径6～13cmを測り、上面の標高は7.46～7.77mである。掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模はP11のみ径50cmと大きく、その他は20～34cmの幅に収まる。

遺物は出土しなかった。

(2) 土 坑

土坑1 (図8)

調査区の中央北東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状に近い形状を呈する。規模は長軸89cm、短軸79cm、深さ11cmである。坑底面の標高は7.58mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

土坑2 (図8)

調査区の中央南東寄りに位置する。南側で土坑3と重複し、全体の半分以上を壊している。平面形は略円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形に近い形状を呈する。規模は直径60cm、深さ18cmで、坑底面の標高は7.50mを測る。

遺物はかわらけ2点が出土した。

土坑3 (図8)

調査区の中央南東寄りに位置する。北側で土坑2と重複して全体の半分以上が壊されているため、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長54cm、短軸61cm、深さ9cmで、坑底面の標高は7.53mを測る。主軸方位はN-7°-Eを指すと推定される。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ1点、陶器1点、木製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は木製品の栓である。

土坑4 (図8)

調査区南壁付近の中央東寄りに位置する。北側でピット41と重複し、南壁の一部を壊している。平面形は略楕円形を呈し、底面は湾曲して中央が窪み、長軸17cm、深さ11cmの小ピットが確認された。壁は

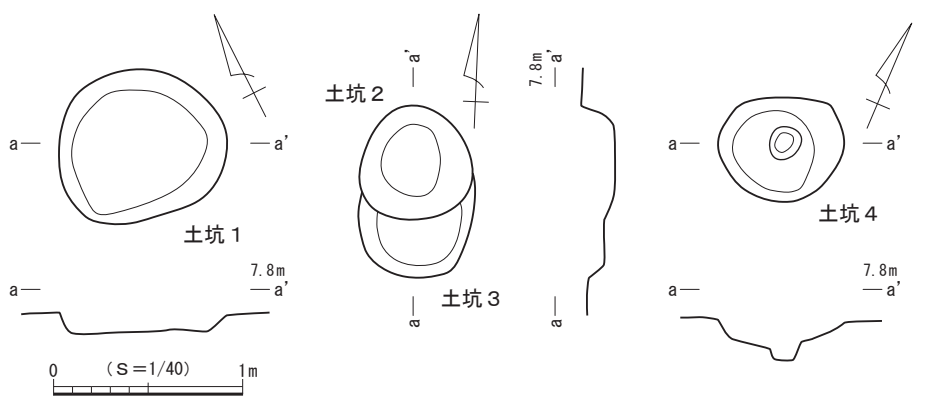


図8 第1面 土坑1～4

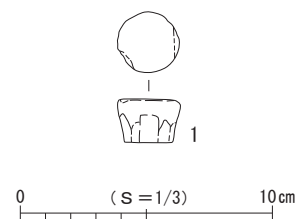


図9 第1面 土坑3出土遺物

大きく開いて立ち上がり、断面形は丸底形に近い形状を呈する。規模は長軸67cm、短軸54cm、深さ12cmで、坑底面の標高は7.50mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

(3) ピット

第1面では、47基を検出した。調査区全体に比較的高い密度で分布し、南西部では重複するものも多く認められる。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形・楕円形・隅丸方形を呈し、規模は長軸10～56cm、深さ6～30cmを測り、深さは20cmに満たない浅いものが多い。

出土遺物(図10)

第1面検出の47基中、13基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は京・信楽産の灯明皿である。ピット43から出土した。

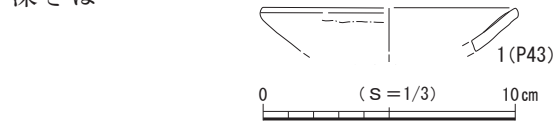


図10 第1面 ピット出土遺物

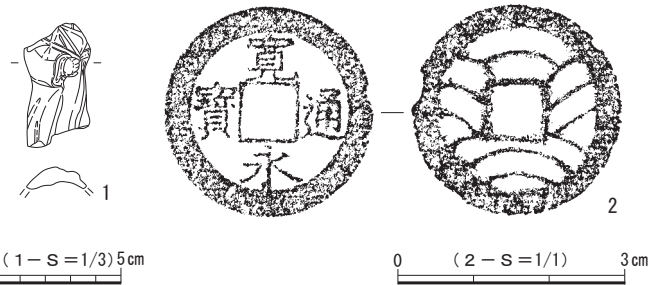


図11 第1面 遺構外出土遺物

(4) 第1面 遺構外出土遺物(図11)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち2点を図示した。

1は京都系と思われる土製人形、2は銭貨で寛永通寶(1768年初鑄)の四文銭である。

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は約7.6mを測る。3層は微量の炭化物を含み、締まりのある暗灰色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、土坑1基、ピット26基である(図12)。北西部に小ピットがまとまって検出されているが、全体に遺構分布はまばらである。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

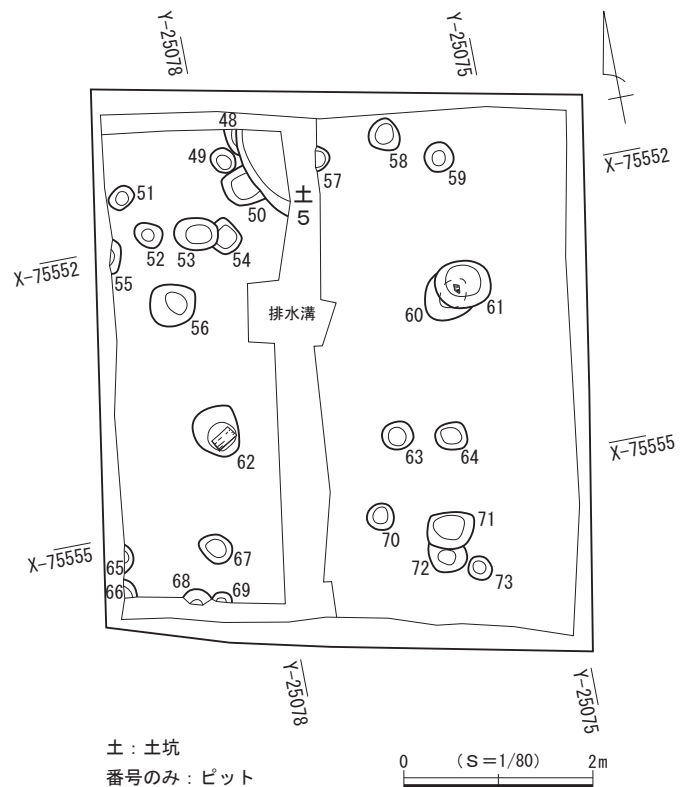


図12 第2面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑5 (図13)

調査区北壁際の中央西寄りに位置する。北側と西側で調査のための排水溝によって全体の2/3以上が壊されていると考えられ、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長1.07m、東西現存長47cm、深さ6cmで、坑底面の標高は7.40mを測る。

遺物は出土しなかった。

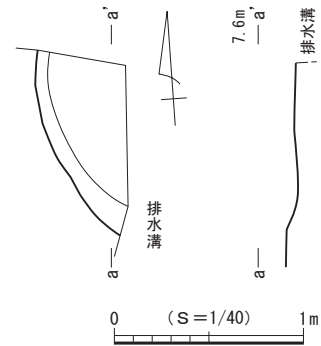


図13 第2面 土坑5

(2) ピット

第2面では、26基を検出した。調査区北西部に分布がややまとまるが全体にまばらで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形、隅丸方形のものがあり、規模は長軸26~58cm、深さ3~36cmを測る。

以下、礎板が据えられたピット2基を図示し、説明する。

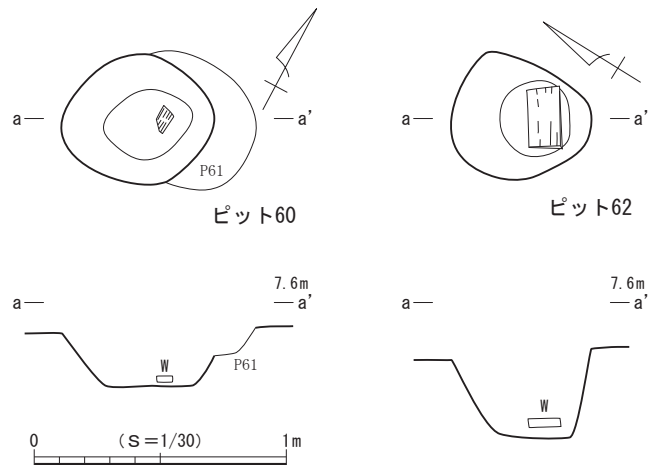


図14 第2面 ピット60・62

ピット60 (図14)

調査区の中央北東寄りに位置する。ピット61と重複して上部東半が壊されている。平面形は不整形円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸59cm、短軸51cm、深さ24cmを測り、礎板がピット中央北東寄りの底面に据えられていた。礎板の大きさは長さ8cm、幅5cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は7.31mである。

ピット62 (図14)

調査区の中央南西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は北東が突出した不整形円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸55cm、短軸51cm、深さ36cmを測り、礎板がピット南壁寄りの底面から4cmほど浮いて据えられていた。礎板の大きさは長さ22cm、幅13cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は7.16mである。

ピット出土遺物 (図15)

第2面検出の26基中、10基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。ピット53から出土した。

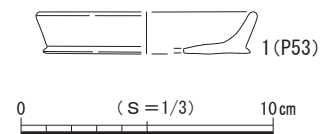


図15 第2面 ピット出土遺物

(3) 第2面 遺構外出土遺物(図16)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち5点を図示した。

1は銅製品で鑿と思われる製品である。2～5は木製品で、2は櫛、3～5は箸状である。

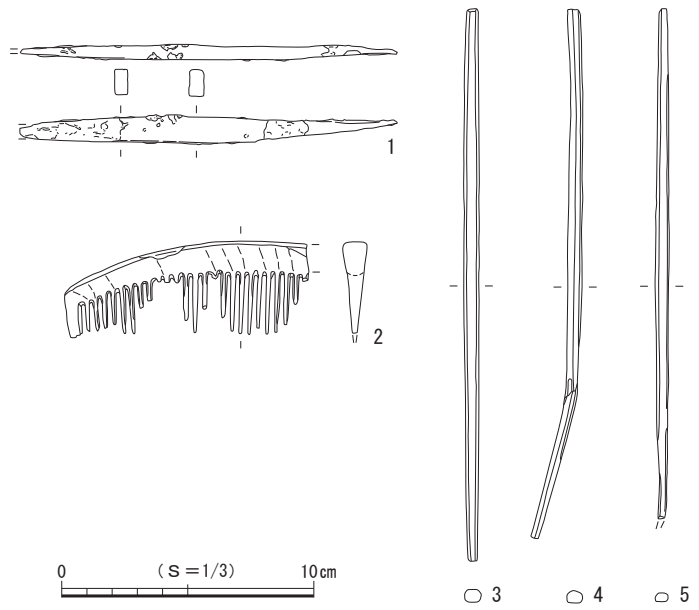


図16 第2面 遺構外出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は約7.4mを測る。4層は少量の細砂と多量の鉄分を含み、締まりのある黒褐色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、礎板建物2棟、土坑3基、ピット30基である(図17)。遺構はピットが主体で調査区全域に分布するが、規則的な配置により建物として認定できたのは2棟のみであった。礎板建物と掘立柱建物は軸方向がほぼ揃っており、調査区の北西から南東方向に展開して調査区外へと延びている。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎板建物

礎板建物1(図18)

調査区の北西から東端にかけて位置する。調査区外の北側と東側に展開すると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが17基検出され、このうち5基(P1～5)が礎板をもつ。ピットは重複が認められることから、建て替えが行われたと推定される。

本址は北西-南東方向が2間以上、北東-南西方向が1間以上の規模をもつ建物と考えられ、現状での規模は北西-南東方向で4.2m、北東-南西方向で2.3～2.4mを測る。柱間寸法は心々間で北西-南東列が2.1m等間、北東-南西列が2.3～2.4mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-58°-Wである。

礎板の大きさは長さ15～20cm、幅10cm内外、厚さ1～4cmを測る。ピット1とピット4は礎板を3枚

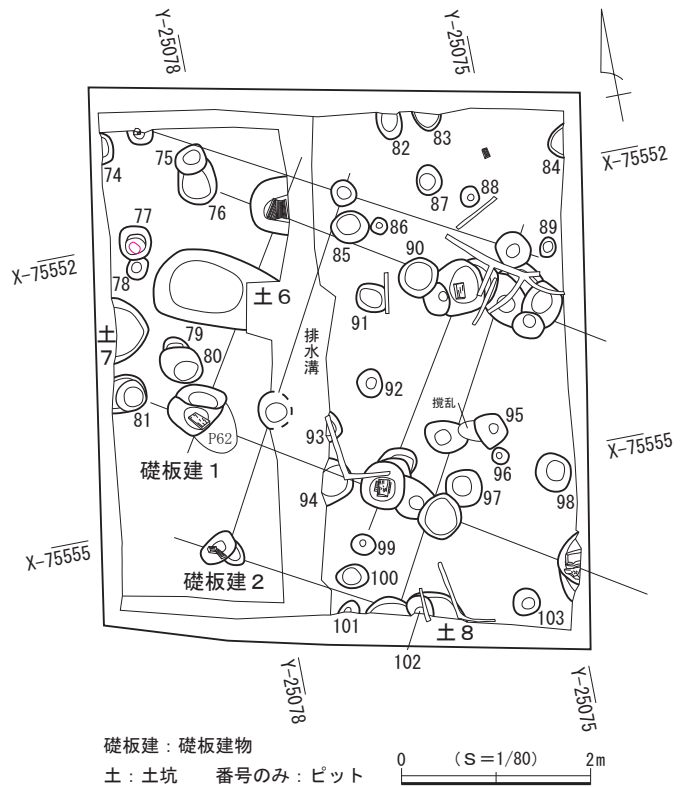


図17 第3面 遺構分布図

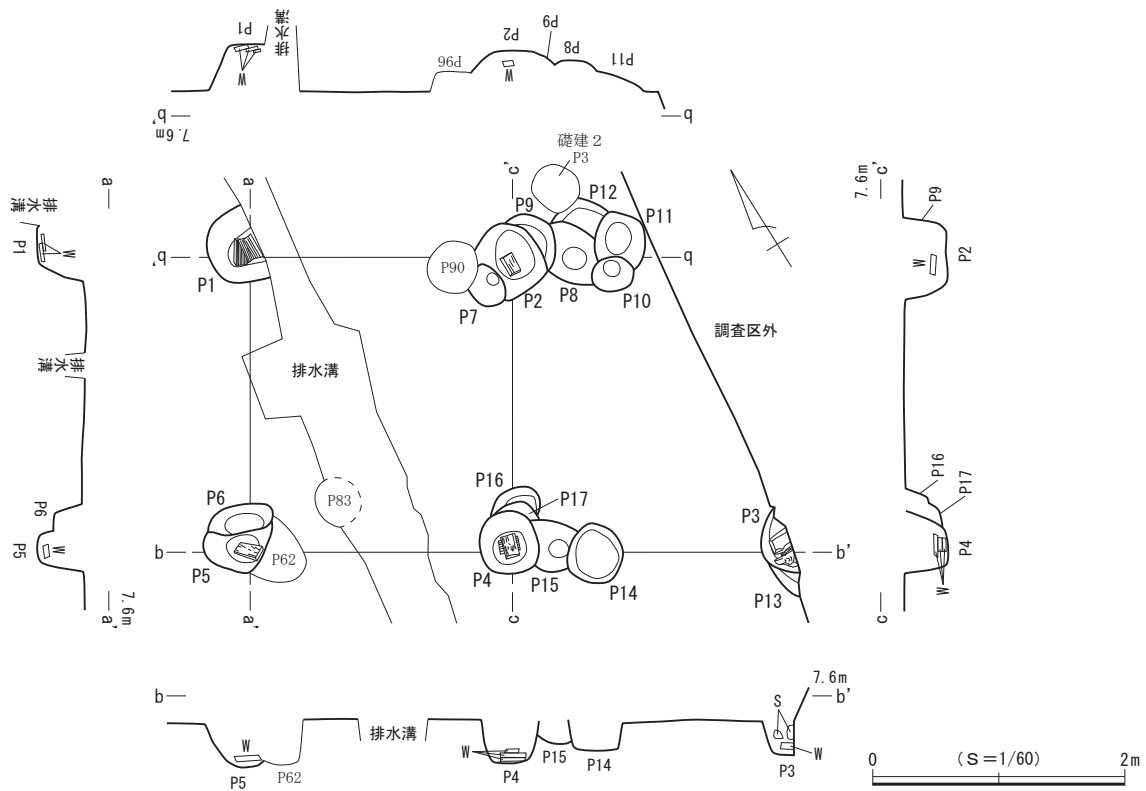


図18 第3面 礎板建物1

ずつ重ねて使用しており、礎板上面の標高は7.04～7.25mである。

出土遺物 (図19)

本址の8基のピットからは少数ながら遺物が出土した。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は龍泉窯系青磁碗 I - 2類である。

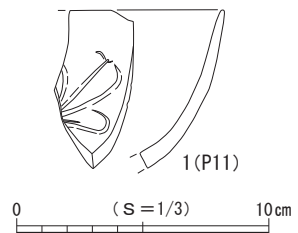


図19 第3面 礎板建物1 出土遺物

礎板建物2 (図20)

調査区の南東から北西の広い範囲にわたって位置する。調査区外の南側と西側に展開していると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが8基検出され、このうち北西隅に位置するピット1に柱が立った状態で遺存していた。また、南西隅にあるピット6からは礎板が2枚出土した。

本址は北西-南東方向が2間以上で、北東-南西方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で東面の北東-南西列が2.0m等間で、その西側の列が北から2.4m、1.6m、北面の北西-南東列が西から2.3m、1.9mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、礎板建物1とほぼ同じN-61°-Wである。

ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長軸25～45cm、深さ10～40cmとやや幅がある。ピット底面の標高は、7.00～7.35mを測る。ピット1に遺存していた柱は、大きさが径8cm、残存長は30cmを測り、下端が掘り方底面から5cm上方に位置している。ピット6から出土した礎板は、大きさが長さ10cmと12cm、幅と厚さは同じで6cmと4cmを測る。底面に対して水平ではなく傾いて出土していることから、原位置は保っていないと考えられる。

遺物は出土しなかった。

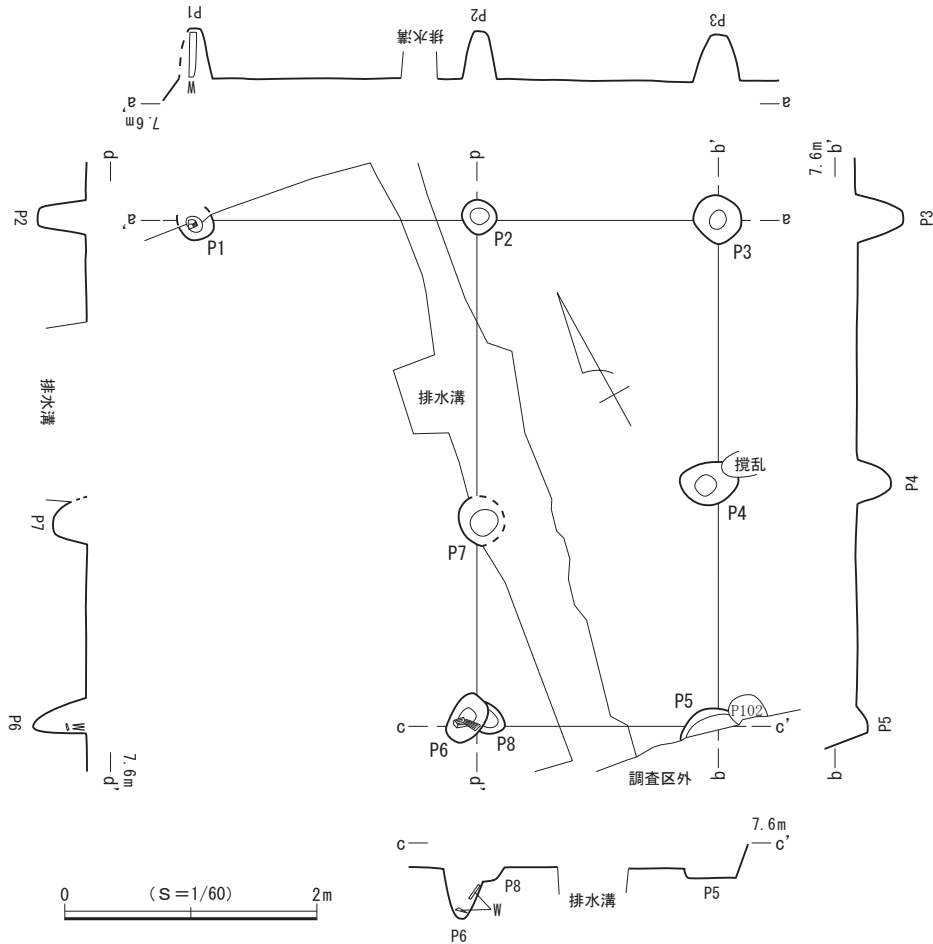


図20 第3面 礎板建物2

(2) 土 坑

土坑6 (図21)

調査区の北西部に位置する。調査時に設定された排水溝によって東壁が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は西側よりも東側がわずかに高く中央部に段をもつ。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形に近い形状を呈する。規模は長軸現存長1.21m、短軸75cm、深さ36cmで、坑底面の標高は7.01mを測る。主軸方位はN-62°-Wを指す。

出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ12点、磁器2点、木製品11点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2は手づくね成形によるかわらけである。

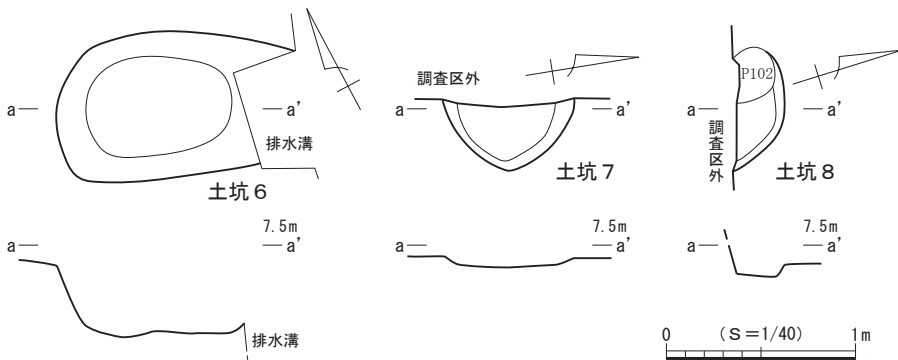


図21 第3面 土坑6～8

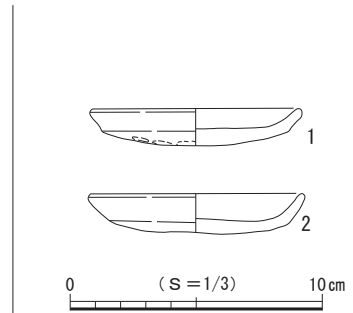


図22 第3面 土坑6出土遺物

土坑7 (図21)

調査区西壁際の中央に位置する。西側が調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長66cm、東西現存長37cm、深さ5cmで、坑底面の標高は7.40mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑8 (図21)

調査区南壁際の中央東寄りに位置する。西側でピット102と重複して壊され、南側は調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長24cm、東西現存長63cm、深さ8cmで、坑底面の標高は7.35mを測る。

遺物は出土しなかった。

(4) ピット

第3面では、30基を検出した。調査区全域に満遍なく分布するが、密度はややまばらである。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径18~45cm、深さ2~46cmを測る。

出土遺物 (図23)

第3面検出の30基中、10基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。ピット81から出土した。

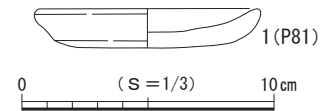


図23 第3面 ピット出土遺物

(5) 第3面 遺構外出土遺物 (図24)

第3面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち2点を図示した。

1は混入遺物と思われる堺・明石産の播鉢、2は常滑甕の口縁部小破片である。

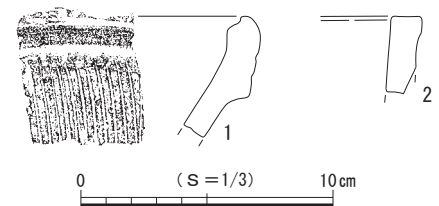


図24 第3面 遺構外出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の5層上面で検出され、確認面の標高は約7.3mを測る。5層は少量の細砂を含んだ非常に締まった黒褐色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット2基のみで、遺構密度は非常に希薄である(図25)。

遺物はかわらけ7点のみの出土であり、詳細な時期を判断する材料に乏しい。3面以下ということをお勘案するならば、本面は13世紀後葉以前に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑9 (図26)

調査区東壁付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は西側がやや尖った不整円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸63cm、短軸53cm、深さ21cmで、坑底面の標高は7.11mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

第4面では、2基を検出した。調査区北東部と北西隅に1基ずつ位置しており、礎石や礎板は伴わなかった。ピットの平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸33cmと34cm、深さが16cmと8cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図27)

第4面構成土中からの出土遺物はきわめて少なく、そのうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。口縁部内外面に油煤が付着していることから、灯明具としての使用が認められる。

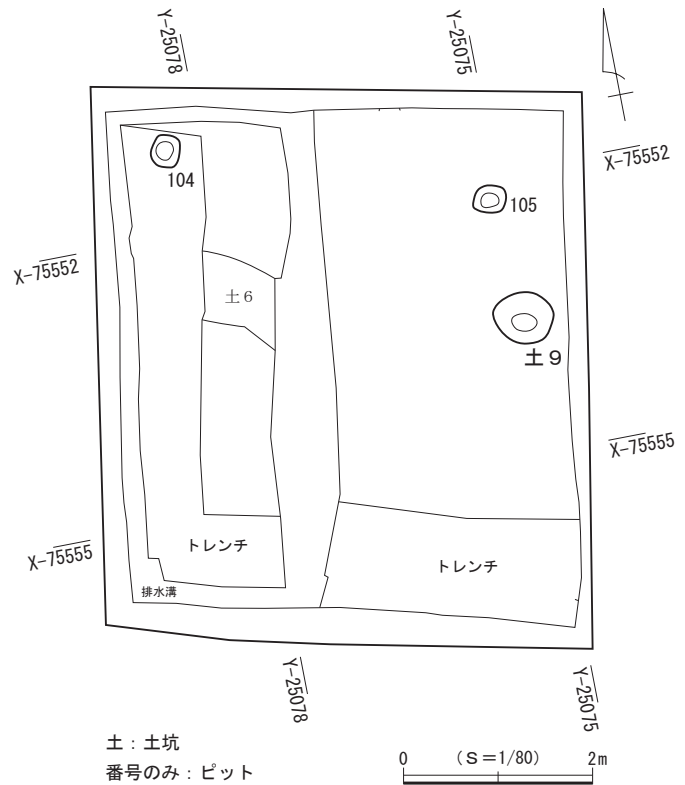


図25 第4面 遺構分布図

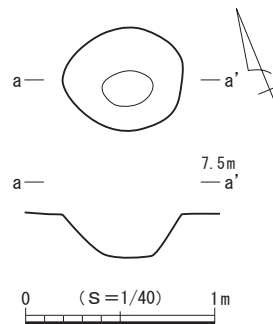


図26 第4面 土坑9

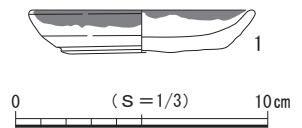


図27 第4面
構成土出土遺物

第四章 まとめ

今回報告する雪ノ下一丁目421番1地点は「北条小町邸跡 (No.282)」の範囲内に所在する。遺跡の中では南西端付近に位置し、南側では宇都宮辻子幕府跡 (No.239) に隣接しており、西側約30mには若宮大路が存在する。今回の調査では第1～4面までの合計4面で、調査面積は27㎡と狭小であった。検出した遺構は礎板建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑9基、ピット105基である。遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して3箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高は約7.7mを測る堆積土層の2層上面で検出された。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑4基、ピット47基である。狭小な調査区の中なかでも全体的に遺構密度は高く、調査区北壁付近に向かい密度が希薄になる様相がみられる。

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は大枠として近世の18～19世紀前葉頃に属すると考えられ、鎌倉では数少ない近世の遺構群である。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高は約7.6mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は、土坑1基、ピット26基である。北西部に小ピットがまとまって検出されているが、遺構密度は希薄である。

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高約7.4mを測る堆積土層の4層上面で検出された。検出した遺構は、礎板建物2棟、土坑3基、ピット30基である。ピットを主体とする遺構群で、調査区全域に分布する。その中から規則的な配置により建物として抽出できたのは2棟のみであった。建物の軸方向はほぼ一致しており、調査区の北西から南東方向に展開しつつ調査区外へと延びている。

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は標高は約7.3mを測る堆積土層の5層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット2基のみである。

遺物はかわらけ7点のみの出土であり、詳細な時期を判断する材料に乏しい。3面以下ということをお案するならば、本面の数少ない遺構は13世紀後葉以前に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

沖本 道 2015「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目427番2外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書31』平成26年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

押木弘己 2017「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目403番14地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

小野田 宏・熊谷 満 2018『北条小町邸跡(No.282)発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下一丁目378番1・5地点』株式会社博通

菊川英政 1989「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目395番地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘緊急調査報告書5』昭和63年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

菊川英政ほか 1989「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』昭和63年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

宗臺富貴子・土屋浩美 1998「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目370番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』平成9年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

瀬田哲夫 1991「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目369番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

玉林美男 1986「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目374番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』昭和60年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

玉林美男 1987「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目419番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』昭和61

年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

- 原 廣志ほか 1998「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目369番1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』平成9年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 原 廣志ほか 2005「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目407番3 の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』平成16年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 松尾宣方 1983「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2 地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』昭和46年度～昭和52年度 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1985 a「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目372番7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』昭和59年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1985 b『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1 地点』北条泰時・時頼邸跡発掘調査団
- 馬淵和雄 1987「北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目233番9 他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』昭和61年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 1996「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目377番7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』平成7年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2002「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目400番1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』平成13年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2003「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目401番5 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』平成14年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄ほか 2010「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目440番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘緊急調査報告書26』平成21年度発掘調査報告 (第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 宮田 眞・森 孝子ほか 2000『北条小町邸跡 (泰時・時頼邸) 発掘調査報告書 雪ノ下一丁目367番1、368番1』北条小町邸跡発掘調査団
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廢寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑3 出土遺物 (図9)							
1	木製品	栓	上部径 2.5	下部径 1.9	高 1.8		完形

ピット出土遺物 (図10)

1	陶器	京・信楽 灯明皿	(10.0)	-	現 1.7	内面-灰釉 胎土:微砂 色調:胎土-灰白色、釉-灰色 出土遺構:ピット43	口縁部片
---	----	-------------	--------	---	----------	---------------------------------------	------

第1面 遺構外出土遺物 (図11)

1	土製品	京都系 人形	長 4.9	幅 2.6	厚 0.7	底面-指頭ナデ消し 内底-ナデ不明瞭 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	小片
2	金属 製品	銭貨	直径 2.8	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-寛永通寶(四文銭・1768-) 書体-楷書	完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

ピット出土遺物 (図15)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.5)	7.8	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:灰黄色 焼成:良好 出土遺構:ピット53	1/4
---	----	---------------	-------	-----	-----	--	-----

第2面 遺構外出土遺物 (図16)

1	金属 製品	鑿	現長 15.0	幅 1.1	厚 0.6	先端部欠損 重量:30.0 g 鉄製鑿	略完形
2	木製品	櫛	現長 9.7	幅 3.7	厚 1.0	櫛歯 20 本残存	2/3
3	木製品	箸状	長 21.9	幅 0.6	厚 0.5		完形
4	木製品	箸状	長 21.2	幅 0.6	厚 0.5	一部折れている	略完形
5	木製品	箸状	現長 20.2	幅 0.5	厚 0.4	下端部欠損	略完形

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

礎板建物1 出土遺物 (図19)

1	磁器	青磁 碗	-	-	現 6.3	外面-ヘラケズリ 内面-花文 色調:胎土-灰色、釉-暗オリブ色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類 出土位置:P11	口縁部片
---	----	---------	---	---	----------	---	------

土坑6 出土遺物 (図22)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.2)	-	1.5	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2弱
2	土器	手づくね かわらけ・小	8.4	-	1.6	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調:灰白色 焼成:良好	略完形

ピット出土遺物 (図23)

1	土器	手づくね かわらけ・小	8.6	-	1.6	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好 出土遺構:ピット81	1/2強
---	----	----------------	-----	---	-----	--	------

第3面 遺構外出土遺物 (図24)

1	陶器	堺・明石 播鉢	-	-	現 4.8	胎土:微砂、白色粒 色調:褐色	口縁部片
2	陶器	常滑 甕	-	-	現 3.1	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:外面-褐灰色	口縁部片

表5 第4面 出土遺物観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第4面 構成土出土遺物 (図27)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	6.0	1.8	内外面口縁部に煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-----

表6 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
掘立柱建物1	第1面	355	280	-	ピット8	第1面	〈24〉	-	11	ピット20	第1面	24	21	14
土坑1	第1面	89	79	11	ピット9	第1面	33	-	14	ピット21	第1面	21	19	9
土坑2	第1面	60	60	18	ピット10	第1面	28	-	7	ピット22	第1面	32	31	16
土坑3	第1面	〈54〉	61	9	ピット11	第1面	43	28	12	ピット23	第1面	28	26	30
土坑4	第1面	67	54	12	ピット12	第1面	33	30	11	ピット24	第1面	27	-	12
ピット1	第1面	〈24〉	23	17	ピット13	第1面	27	22	10	ピット25	第1面	〈24〉	23	16
ピット2	第1面	25	18	29	ピット14	第1面	32	28	22	ピット26	第1面	32	22	13
ピット3	第1面	28	22	7	ピット15	第1面	25	〈20〉	15	ピット27	第1面	19	-	14
ピット4	第1面	56	〈52〉	10	ピット16	第1面	43	38	13	ピット28	第1面	39	31	17
ピット5	第1面	34	〈30〉	20	ピット17	第1面	34	〈17〉	18	ピット29	第1面	30	25	22
ピット6	第1面	〈43〉	37	12	ピット18	第1面	〈21〉	〈17〉	6	ピット30	第1面	11	10	20
ピット7	第1面	54	44	12	ピット19	第1面	33	-	13	ピット31	第1面	10	6	20

【瓦質土器】		
火鉢		1
【土製品】		
京都系 人形		1
【金属製品】		
銭貨		1
		合計 57

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 2

攪乱		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	28
かわらけ	手づくね成形	16
【陶器】		
瀬戸	壺	1
	入子	1
	挿鉢	1
常滑	甕	4
	器種不明	1
【木製品】		
	箸状	5
	櫛	1
	棒状	1
	端材	1
	用途不明	3
【金属製品】		
	銭貨	1
	鉄製工具(タガネ?)	1
		合計 65

第2面

ピット49		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	4
		合計 5

ピット50		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計 1

ピット52		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
		合計 1

ピット53		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	2
		合計 3

ピット56		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
【土器】		
土師器	坏	1
【木製品】		
	用途不明	1
		合計 4

ピット58		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

ピット62		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
【陶器】		
常滑	甕	1
【木製品】		
	礎板	1
		合計 4

ピット67		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

ピット71		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計 1

ピット73		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	7
かわらけ	手づくね成形	40
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
【青白磁】		
	合子蓋	1

【陶器】		
瀬戸	壺	1
	碗	1
	皿	1
常滑	甕	14

【瓦】		
	平瓦	4

【木製品】		
	箸状	3
	櫛	1
	棒状	1
	端材	1
【金属製品】		
	鑿	1
		合計 77

第2面 構成土		
産地	器種	破片数

【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	24

【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
	皿	1
	器種不明	1

【陶器】		
瀬戸	壺	1
常滑	甕	6

【土器】		
	土師器	2

【瓦質土器】		
	火鉢	2

【金属製品】		
	釘	1
		合計 39

第3面

礎板建物1 ピット1		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	碗	1
【木製品】		
	礎板	3
	棒状	1
		合計 5

礎板建物1 ピット3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計 1

礎板建物1 ピット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	2

【瓦質土器】		
	火鉢	1
		合計 5

礎板建物1 ピット5		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	1
		合計 1

礎板建物1 ピット9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	器種不明	1
【木製品】		
	礎板	1
		合計 4

礎板建物1 ピット11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
かわらけ	手づくね成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗I類	1
		合計 4

礎板建物1 ピット12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
かわらけ	手づくね成形	6
【陶器】		
瀬戸	盤	1
常滑	甕	2
		合計 17

礎板建物1 ピット15		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	3
		合計 3

土坑6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	2
かわらけ	ロクロ成形	10

【白磁】		
皿		1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【木製品】		
	箸状	1
	棒状	1
	折敷	2
	草履芯	1
	端材	1
	用途不明	5
合計		25

ビット75		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	1
	柱	1
合計		2

ビット76		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		1

ビット81		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	2
合計		4

ビット83		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ 手づくね成形	2
【木製品】		
	礎板	1
	用途不明	1
合計		5

ビット92		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
【瓦質土器】		
	器種不明	1
合計		3

ビット94		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		2

ビット96		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	4
【陶器】		
常滑	器種不明	1
合計		5

ビット105		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
合計		2

ビット106		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
合計		1

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
	かわらけ 手づくね成形	84
【白磁】		
	小壺	1
	器種不明	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
	壺	1
	器種不明	2
常滑	甕	9
	片口鉢Ⅱ類	1
堺・明石	播鉢	2
【瓦質土器】		
	器種不明	12
【木製品】		
	端材	3
	用途不明	4
【金属製品】		
	不明	2
合計		130

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
合計		2

第4面		
第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
	かわらけ 手づくね成形	4
合計		7



1. 調査地点近景 (西から)



2. 西壁土層断面 (北東から)

図版 2



1. 第1面西側(北から)



2. 第1面東側(北から)



3. 第2面西側(北から)



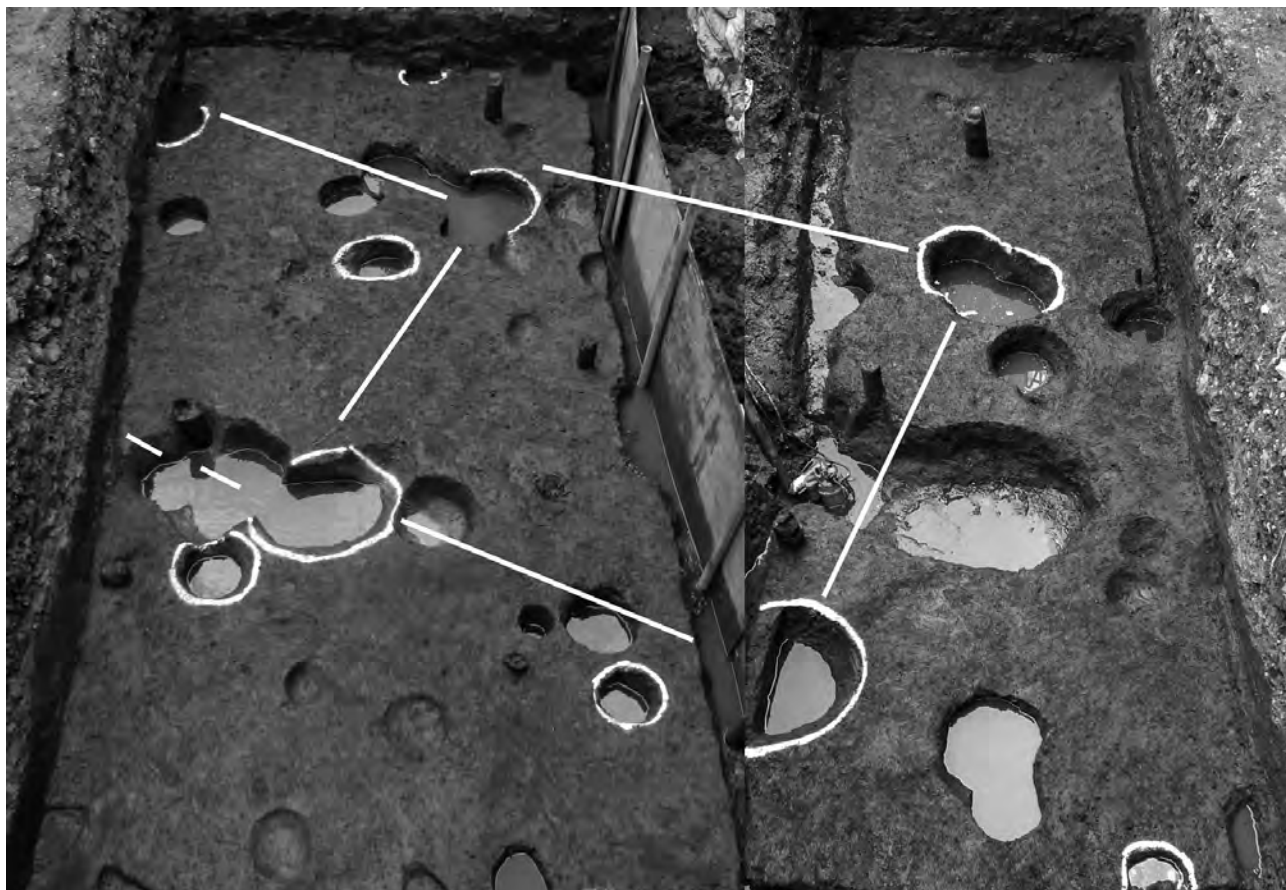
4. 第2面東側(北から)



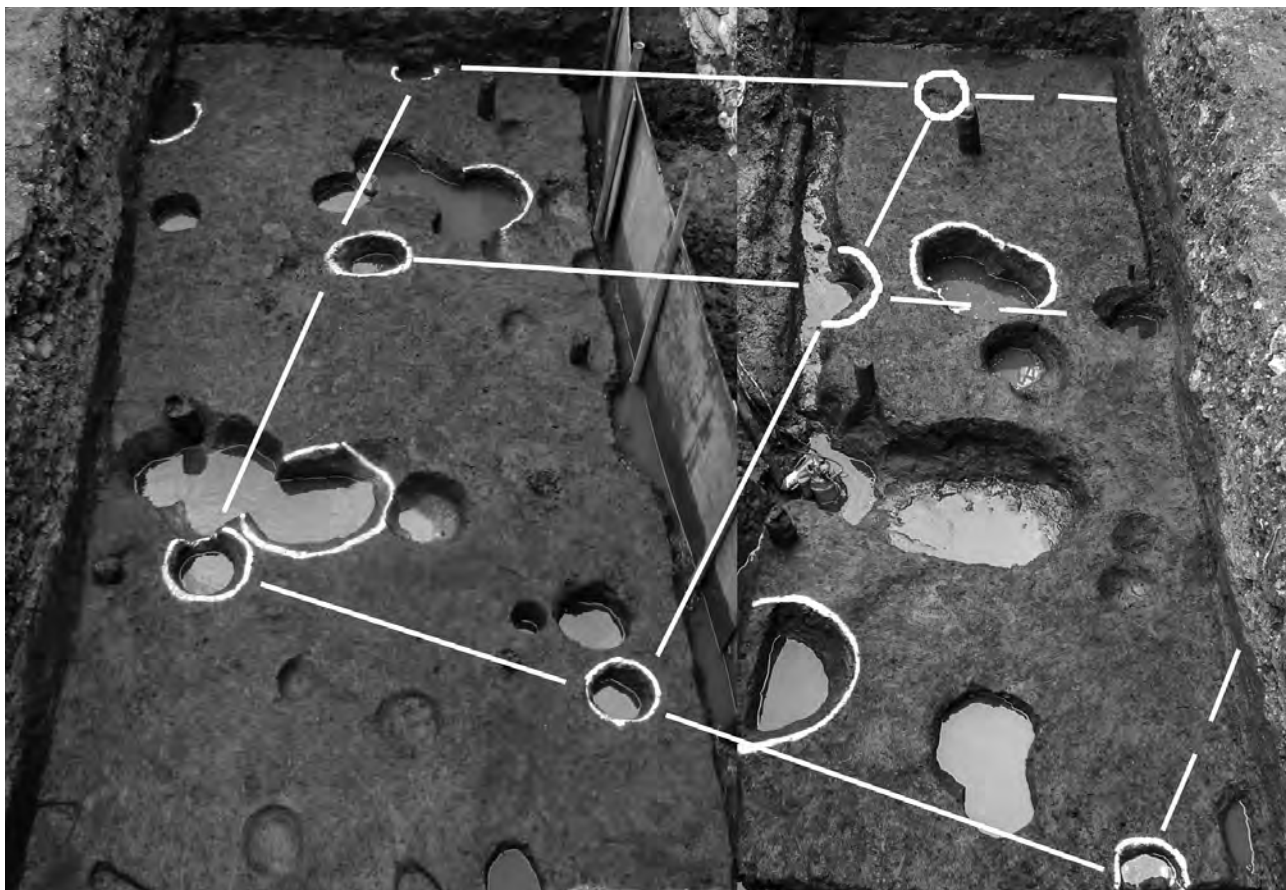
5. 第3面西側(北から)



6. 第3面東側(北から)



1. 第3面 礎板建物1 (南から)



2. 第3面 礎板建物2 (北から)

図版 4



1. 第3面 礎板建物1ピット4礎板出土状態(北から)



2. 第3面 礎板建物2ピット1柱検出状態(南から)



3. 第3面 土坑6(西から)



1. 第1面 土坑3出土遺物



2. 第1面 ピット出土遺物



4. 第2面 ピット出土遺物



6. 第3面 礎板建物1出土遺物



8. 第3面 ピット出土遺物



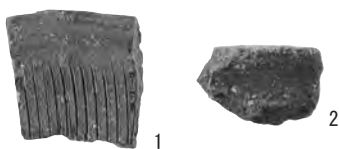
3. 第1面 遺構外出土遺物



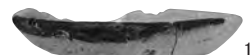
5. 第2面 遺構外出土遺物



7. 第3面 土坑6出土遺物



9. 第3面 遺構外出土遺物



10. 第4面 構成土出土遺物

西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)

山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点

例 言

1. 本報は「西瓜ヶ谷遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.213）内、鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年2月16日～同年3月16日にかけて、店舗併用個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約53㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子

調査員 松原康子・赤堀祐子

作業員 杉浦永章・判 一明・丹野正弘・田島道夫

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA9）を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「NU0821」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲

11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』

12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美（玉川文化財研究所）

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	36
第1節 調査に至る経緯と経過	36
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	36
第3節 周辺の考古学的調査	40
第二章 堆積土層と発見された遺物	40
第1節 堆積土層	40
第2節 出土遺物	41
第三章 まとめ	42

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	37	図5 調査区および北東壁土層断面図	41
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	38	図6 表土出土遺物	41
図3 調査区位置図	39	図7 8～11層出土遺物	42
図4 調査区配置図	39		

表 目 次

表1 西瓜ヶ谷遺跡 調査地点一覧	40	表3 出土遺物一覧表	43
表2 出土遺物観察表	43		

図 版 目 次

図版1 1. 調査区近景(南東から)	45	2. 表土出土遺物	46
2. 調査区北東壁土層断面(西から)	45	3. 8～11層出土遺物	46
図版2 1. 調査区全景(南から)	46		

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外で実施した店舗併用個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西瓜ヶ谷遺跡(神奈川県遺跡台帳No.213)の範囲内にあたる。建築主から店舗併用住宅の建設に伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年1月22日～同年1月24日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世後期の遺物包含層および段切り状の加工と考えられる岩盤が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約53㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年2月16日～同年3月16日までの約1ヵ月である。現地表面の標高は約30.5m、調査地点の南東側では29.6mを測り、北西から南東に向かって標高が下がっていく。調査はまず重機により1.0～1.1mの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、調査区北西側で地表下1.2mの深さから岩盤が露出し始め、調査区中央付近で北西から南東に向かって急激に落ち込むことがわかった。また、調査区中央から南東側では地表下1.8mにおいてかわらけや陶磁器などの中世に属する遺物が出土し、遺物が包含される地表下2.7mまで調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして3月16日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -74044.609、Y = -26203.498)、(X = -74049.739、Y = -26210.955)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

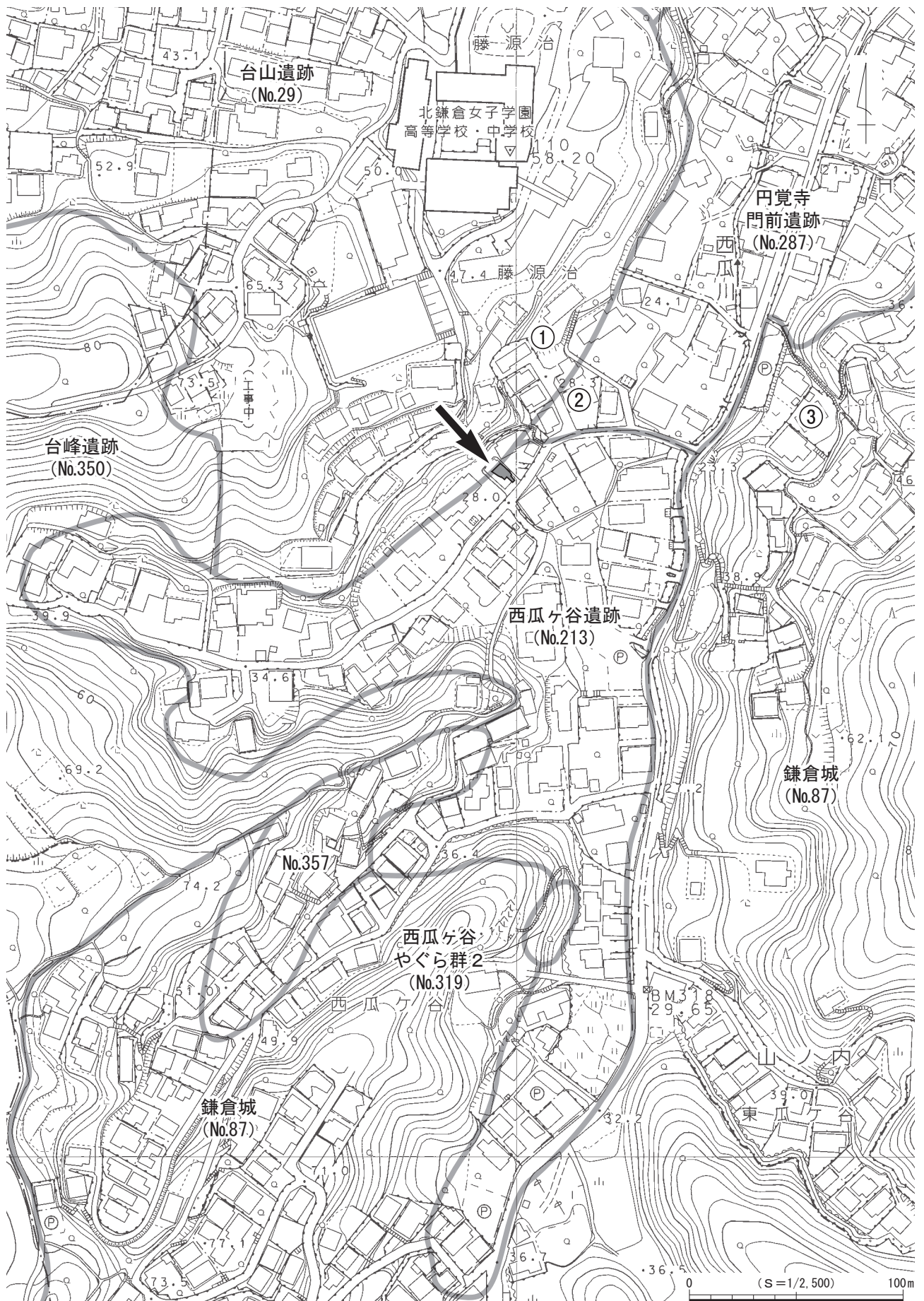
本調査地点は鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外に位置し、「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)」の範囲内に所在する。本遺跡は鎌倉市の北部域に所在し、西瓜川によって開析された南北約700mの谷戸の入り口を、約200m入った標高25m付近から谷の最奥部にかけての南北約500mにわたって広がっている。同じ谷戸内の北側には円覚寺門前遺跡(No.287)が展開する。遺跡の広がる「瓜ヶ谷」は途中で二つに分岐し、東側を東瓜ヶ谷、西側を西瓜ヶ谷と呼び、調査地点は分岐部よりも谷口側に位置している。西瓜川は谷の平坦部の東端を南から北へ向かって流れ、JR横須賀線と平行して北西-南東方向に走る鎌倉街道の手前で小袋谷川に合流する。本地点は西瓜川の西岸に位置し、川までの距離は約80mを測る。

鎌倉市は神奈川県の南東部に位置し、南側が相模湾に面しており、三方を丘陵に囲まれている。市域を北東から南西に流れる滑川が形成した沖積地が海に向かって三角形に開き、その北側の頂点に鶴岡八幡宮が位置する。鶴岡八幡宮西部から北西部にかけて丘陵が連なっており、これを「台峰」と呼び、遺跡はこの丘陵裾部の谷戸に立地する。現地表面の標高は約30.5mを測る。

隣接する包蔵地としては、北西側の丘陵上に縄文時代から中世にかけての複合遺跡である台山遺跡(No.



図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



※ a-a' は図5の土層断面位置を示す。

図4 調査区配置図

29) が広範囲に展開し、東側から南側にかけての丘陵上には鎌倉城 (No.87) が位置している。

本遺跡周辺の鎌倉街道沿いには、鎌倉中期から後期にかけて北条氏によって多数の寺院が建立されている。尾根を挟んだ東側の小さな谷戸には、弘安 8 年 (1285 年) に建立された臨濟宗の東慶寺がある。代々名門出身者が住職を務めた格式の高い寺であり、室町時代には鎌倉尼五山第二位に位置づけられていた。また、鎌倉街道の東側には同じく鎌倉五山第二位に列せられた臨濟宗の円覚寺が位置する。開基の北条時宗が文永・弘安の役の犠牲者慰霊のために弘安 5 年 (1282 年) に創建したとされ、鎌倉幕府滅亡後は足利将軍家の庇護を受けた。

第 3 節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。本地点は西瓜ヶ谷遺跡の北端部に位置し、北側に広がる円覚寺門前遺跡との境界付近に所在する。

現在までのところ、本地点より南側の包蔵地範囲では発掘調査は行われておらず、比較的近接した北側および東側で①山ノ内字藤源治928番1地点、②山ノ内字藤源治930番5他地点、③山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点の3カ所の調査が行われている。すでに正式な報告がなされている③の内容をみていくと、4面にわたって中世に属する遺構確認面が調査され、急斜面を造成して平場を造り出していることが明らかとなった(馬淵・松原 2006)。最下面である4面の平場からはピットおよび小ピット群が検出され、加えて3面で瀬戸鉄釉仏花瓶や五輪塔と考えられる加工石などが出土していることから、調査者は仏教的な色彩をもつ遺跡として位置づけている。年代的には出土遺物から14世紀前半頃と推定されている。

表 1 西瓜ヶ谷遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点	
①	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字藤源治928番1地点	
②	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字藤源治930番5他地点	
③	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点	馬淵・松原 2006

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

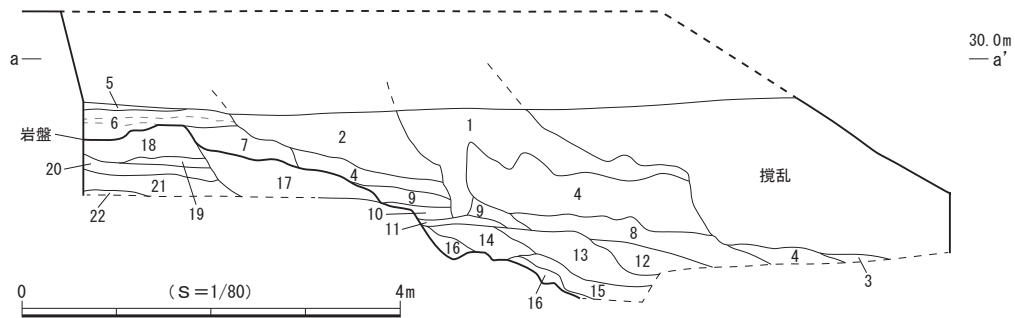
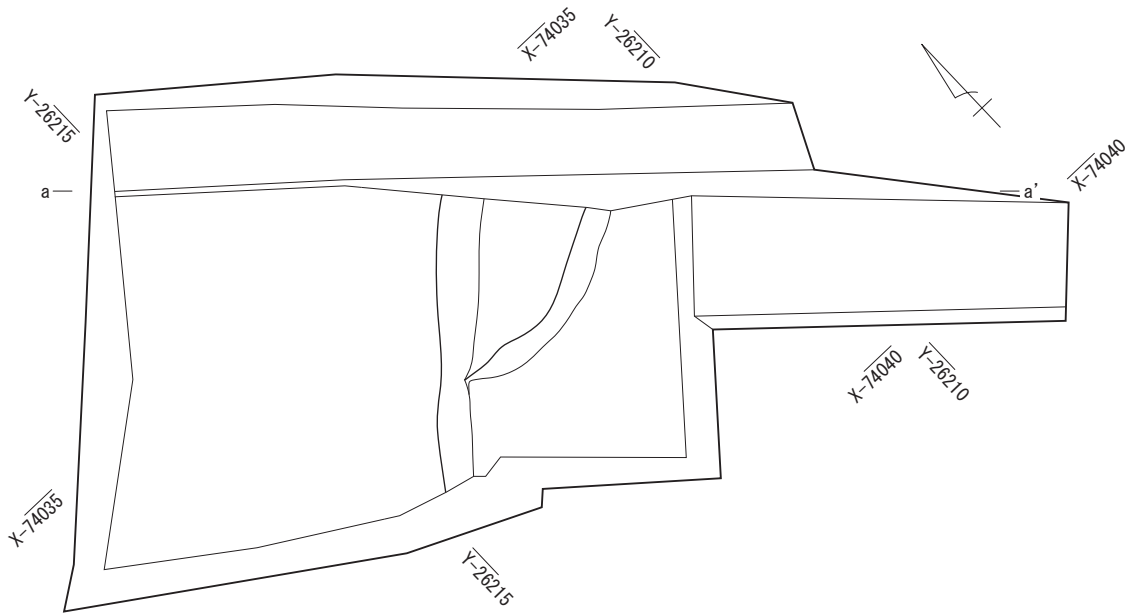
第二章 堆積土層と発見された遺物

第 1 節 堆積土層

今回の調査では遺構は検出されなかったが、中世の遺物包含層を確認することができた。また、調査区中央付近からは、確認調査時に段切り状の加工と推定された岩盤の急激な落ち込みが検出された。ここでは、遺物包含層に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約30.5mを測り、最上部には層厚1.0~1.1mの表土(1層)が堆積している。2層は近世耕作土と考えられる堆積で、泥岩粒と炭化物を含む茶褐色砂質土である。3層は宝永火山灰を含む茶色砂質土で、攪乱の直下からわずかに検出された。8~11層は中世の遺物を包含する層である。

8層は少量の砂と岩盤粒・かわらけ片を含む暗灰茶色土、9層は締まりのややある茶褐色砂質土、10層は暗茶褐色粘質土、11層は混入物がなく締まりがややある茶色粘土である。層厚は、8層が16~24cm、9層が約15cm、10層が約13cm、11層が約10cmを測る。なお、17・18層以下は黄褐色を呈する岩盤層で、風化が認められることから、露出していた時期があったと考えられる。遺構が検出されなかったため、段切りであるかどうかは不明である。



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1層 表土 | 12層 黒茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ粒含む。締まりなし。 |
| 2層 茶褐色砂質土 近世耕作土。泥岩粒・炭化物含む。締まり・粘性なし。 | 13層 暗茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片・砂礫含む。締まりややなし。 |
| 3層 茶色砂質土 宝永火山灰含む。締まりなし。 | 14層 暗灰茶色土 岩盤粒・かわらけ片含む。締まりややあり。 |
| 4層 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物含む。締まりあり、粘性ややあり。 | 15層 暗茶褐色粘質土 炭化物・砂礫含む。締まりなし。 |
| 5層 灰黄色砂・黄褐色土 | 16層 暗茶褐色粘質土 炭化物・砂礫含む。締まりあり。 |
| 6層 灰・黒色砂 石片を少量含む。 | 17層 黄褐色岩 風化した岩盤が集積。 |
| 7層 黄褐色土 下層部に砂利多量に含む。締まりややあり。 | 18層 風化岩盤 |
| 8層 暗灰茶色土 岩盤粒・かわらけ片含む、砂少量含む。締まりややあり。 | 19層 粉化した岩盤 |
| 9層 茶褐色砂質土 締まりややあり。 | 20層 粉化した岩盤 締まりややあり。 |
| 10層 暗茶褐色粘質土 11層より色調がやや暗い。 | 21層 灰黄色砂・黄褐色土 |
| 11層 茶色粘土 混入物はない。締まりややあり。 | 22層 灰色砂・黒砂 |

図5 調査区および北東壁土層断面図

第2節 出土遺物

本遺跡の表土および8～11層からは、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱分の遺物が出土している。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、石製品、金属製品などが出土し、時期は15世紀前半頃と推定される。

以下、出土遺物を掲載して説明する。

(1) 表土出土遺物(図6)

表土や攪乱からは少量ではあるが遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1は瀬戸産の洗である。

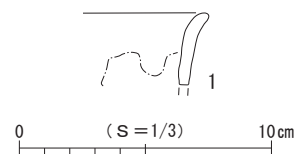


図6 表土出土遺物

(2) 8～11層出土遺物(図7)

中世の包含層である8～11層からも遺物が出土しており、このうち7点を図示した。

1～5はロクロ成形によるかわらけである。2の体部には穿孔が施され、3の口唇部には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。6は瀬戸産の平碗である。7は4面に使用痕跡が観察される砥石である。

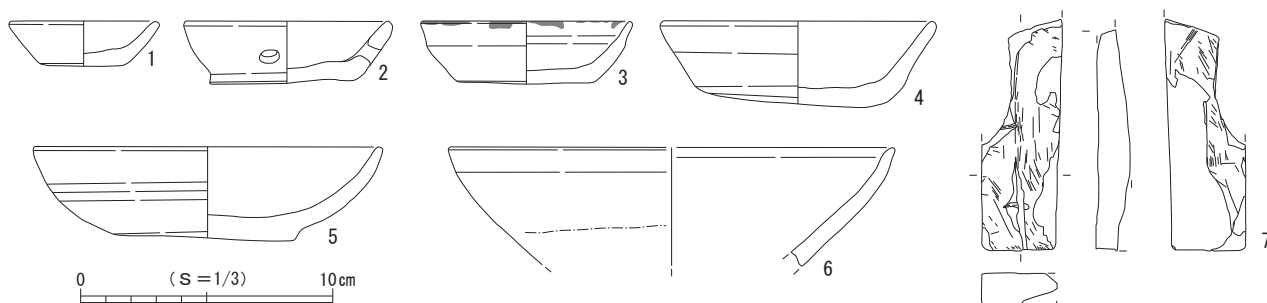


図7 8～11層出土遺物

第三章 まとめ

今回報告する山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点は、「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)」の範囲内に所在し、包蔵地範囲の北端部に位置し、北西側に広がる丘陵「台峰」の裾部に立地している。本地点の東側には西瓜川が南から北へと流れており、調査区からは直線距離で約80mである。

今回の調査では遺構は検出されなかったものの、包含層および岩盤の直上から15世紀前半のかわらけ、陶磁器、瓦質土器などが遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱分が出土している。

西瓜ヶ谷遺跡では現在までのところ、本地点の北側および東側の比較的近接した場所にあたる山ノ内字藤源治928番1地点(図2①)、山ノ内字藤源治930番5他地点(図2②)、山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点(図2③)の3カ所で調査が行われているが、本地点周辺の様相解明については、今後の調査成果に期するところが大きいといえよう。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

馬淵和雄・松原康子 2006「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)山内字東瓜ヶ谷1294番4・5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告22』平成17年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

表土層出土遺物(図6)

1	陶器	瀬戸 洗	-	-	現 2.8	二次焼成 胎土：緻密 色調：胎土-灰色、釉-灰色	口縁部片
---	----	---------	---	---	----------	--------------------------	------

8~11層出土遺物(図7)

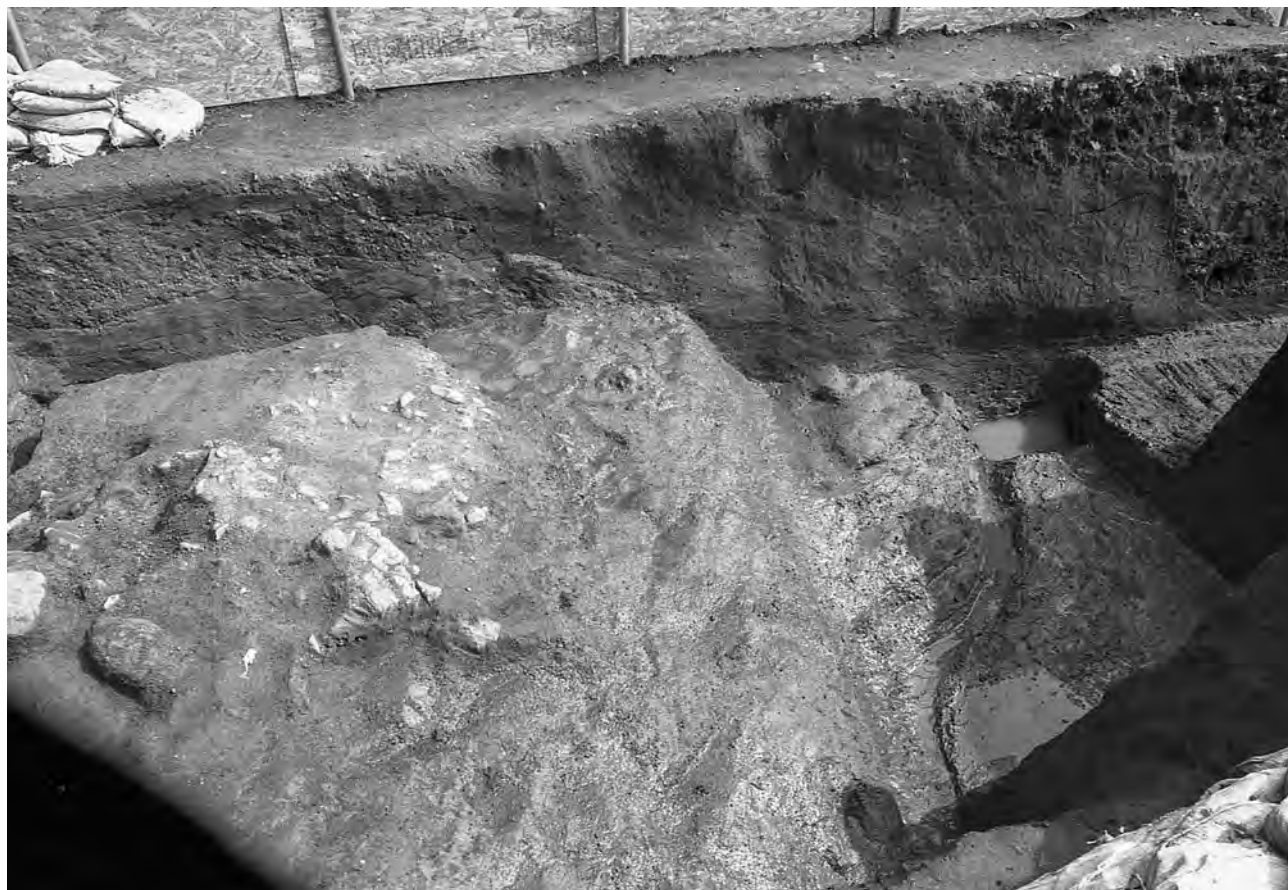
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.6)	3.0	1.8	底面-回転糸切+ヘラナデ 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.6	2.5	体部に焼成前穿孔1カ所あり 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	5.2	2.5	口唇部に煤附着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
4	土器	ロクロ かわらけ・中	10.6	6.3	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
5	土器	ロクロ かわらけ・大	13.7	7.0	3.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
6	陶器	瀬戸 平碗	(17.6)	-	現 4.7	胎土：白色粒、密 色調：胎土-灰黄色、釉-灰色 備考：瀬戸後期様式Ⅲ・Ⅳ期	1/4
7	石製品	砥石	現長 9.2	幅 3.2	厚 1.3	4面に使用痕跡 石材-頁岩 備考：鳴滝産	

表3 出土遺物一覧表

表土			8~11層			岩盤直上			
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	97		かわらけ ロクロ成形	11	
【青磁】			【青磁】			【陶器】			
龍泉窯系	鉢	1		手づくね成形	1	瀬戸	鉢	1	
【陶器】			龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	常滑	甍	1	
瀬戸	洗鉢	1		折縁皿	1	合計		13	
常滑	甍	2	【陶器】						
合計			瀬戸	壺	2				
				盤	1				
				鉢	4				
				碗	1				
				天目茶碗	2				
				平碗	2				
				卸皿	1				
				器種不明	1				
			常滑	甍	33				
				片口鉢Ⅰ類	1				
				片口鉢Ⅱ類	5				
			山茶碗窯	碗	1				
			【瓦質土器】						
				火鉢	3				
			【土師器】						
				甍	1				
			【石製品】						
				砥石	2				
				石臼	1				
			【金属製品】						
				釘	7				
			合計			168			



1. 調査区近景(南東から)

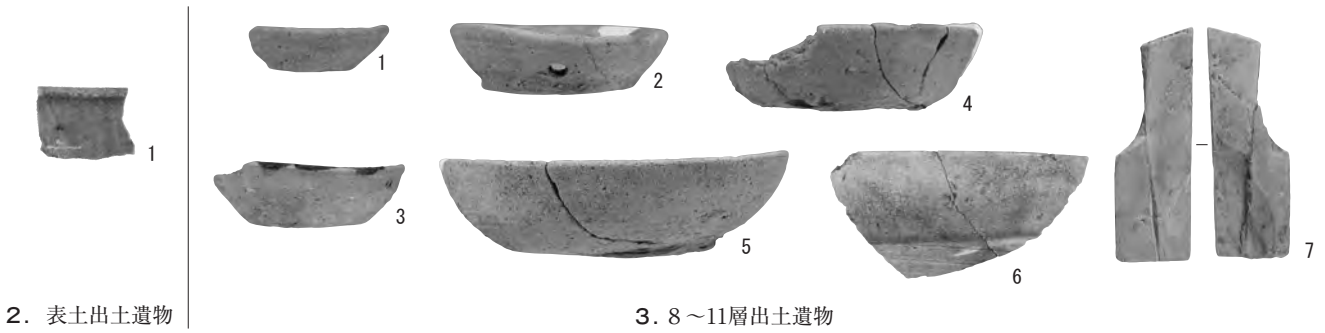


2. 調査区北東壁土層断面(西から)

図版 2



1. 調査区全景(南から)



2. 表土出土遺物

3. 8~11層出土遺物

山ノ内上杉邸跡 (No.170)

山ノ内字東管領屋敷179番39地点

例 言

1. 本報は「山ノ内上杉邸跡」（神奈川県遺跡台帳No.170）内、山ノ内字東管領屋敷179番39地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年10月15日～同年11月28日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約33㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 馬淵和雄
調査員 松原康子・本城 裕
作業員 藤枝正義・佐藤美隆・浅香文保・安達越郎
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を馬淵和雄、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「YU0815」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
■ 炭層・炭分布範囲
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	51
第1節 調査に至る経緯と経過	51
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	51
第3節 周辺の考古学的調査	52
第二章 堆積土層	56
第三章 発見された遺構と遺物	57
第1節 第1面の遺構と遺物	57
第2節 第2面の遺構と遺物	64
第3節 第3面の遺構と遺物	66
第4節 第4面の遺構と遺物	80
第5節 第5面の遺構と遺物	83
第四章 まとめ	84

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	53	図20 第2面 構成土出土遺物	66
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	54	図21 第3面 遺構分布図	66
図3 調査区位置図	55	図22 第3面 池状遺構1	67
図4 調査区配置図	55	図23 第3面 池状遺構1上層出土遺物(1)	68
図5 調査区北西壁 土層断面図	56	図24 第3面 池状遺構1上層出土遺物(2)	69
図6 第1面 遺構分布図	57	図25 第3面 池状遺構1上層出土遺物(3)	70
図7 第1面 土坑3出土遺物	58	図26 第3面 池状遺構1下層出土遺物(1)	70
図8 第1面 土坑1~11	59	図27 第3面 池状遺構1下層出土遺物(2)	71
図9 第1面 土坑7出土遺物	60	図28 第3面 池状遺構出土木製品(1)	72
図10 第1面 土坑11出土遺物	60	図29 第3面 池状遺構出土木製品(2)	73
図11 第1面 ピット29・35・51・62・74	61	図30 第3面 池状遺構出土木製品(3)	74
図12 第1面 ピット出土遺物	62	図31 第3面 池状遺構出土木製品(4)	75
図13 表土出土遺物	62	図32 第3面 池状遺構出土木製品(5)	76
図14 第1面 遺構外出土遺物	63	図33 第3面 池状遺構出土木製品(6)	77
図15 第1面 構成土出土遺物	63	図34 第3面 遺構外出土遺物	79
図16 第2面 遺構分布図	64	図35 第3面 構成土出土遺物	79
図17 第2面 礎石建物1	64	図36 第4面 遺構分布図	80
図18 第2面 溝状遺構1	65	図37 第4面 礎板建物2	80
図19 第2面 土坑12~14	65	図38 第4面 土坑15出土遺物	81

図39 第4面 土坑15~17	82	図42 第5面 遺構分布図	83
図40 第4面 ピット104	82	図43 第5面 溝状遺構2	83
図41 第4面 構成土出土遺物	82	図44 第5面 溝状遺構2出土遺物	83

表 目 次

表1 山ノ内上杉邸跡 調査地点一覧	52	表6 第5面 出土遺物観察表	94
表2 第1面 出土遺物観察表	86	表7 出土動物遺体一覧表	94
表3 第2面 出土遺物観察表	87	表8 遺構計測表	94
表4 第3面 出土遺物観察表	87	表9 出土遺物一覧表	95
表5 第4面 出土遺物観察表	94		

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点遠景(北東から)	99	4. 第3面 池状遺構1上層出土遺104	
	2. 調査区北西壁土層断面(南東から)	99	(1)	104
図版2	1. 第1面全景(南西から)	100	図版7	1. 第3面 池状遺構1上層出土遺物
	2. 第2面全景(南西から)	100	(2)	105
図版3	1. 第3面 池状遺構1全景(南西から)	101	2. 第3面 池状遺構1下層出土遺物	
	2. 第3面 池状遺構1遺物出土状況	101	(1)	105
	(南西から)	101	図版8	1. 第3面 池状遺構1下層出土遺物
	3. 第3面 池状遺構1北側護岸の検出	101	(2)	106
	状況(南西から)	101	2. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物	
図版4	1. 第4面 礎板建物2ピット2~4	102	(1)	106
	(北西から)	102	図版9	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	2. 第4面 礎板建物2ピット2(南西	102	(2)	107
	から)	102	図版10	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	3. 第4面 礎板建物2ピット4(南西	102	(3)	108
	から)	102	図版11	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	4. 第5面全景(南西から)	102	(4)	109
図版5	1. 第1面 土坑3出土遺物	103	図版12	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	2. 第1面 土坑7出土遺物	103	(5)	110
	3. 第1面 土坑11出土遺物	103	図版13	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	4. 第1面 ピット出土遺物	103	(6)	111
	5. 表土出土遺物	103	2. 第3面 遺構外出土遺物	111
	6. 第1面 遺構外出土遺物(1)	103	3. 第3面 構成土出土遺物	111
図版6	1. 第1面 遺構外出土遺物(2)	104	図版14	1. 第4面 土坑15出土遺物
	2. 第1面 構成土出土遺物	104	2. 第4面 構成土出土遺物	112
	3. 第2面 構成土出土遺物	104	3. 第5面 溝状遺構2出土遺物	112
			4. 出土動物遺体	112

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷179番39で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である山ノ内上杉邸跡(神奈川県遺跡台帳No.170)の範囲内にあたる。事業者から鋼管杭工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成20年7月8日～同年7月9日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、13～14世紀の遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約33㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、馬淵和雄が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年10月15日～同年11月28日までの約1ヵ月間で、調査面積は約33㎡である。現地地表の標高は約25.9mを測る。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を70～95cm掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～5面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、11月28日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -76294.589、Y = -24304.949)、(X = -76323.414、Y = -24308.808)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53229(標高11.168m)を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

山ノ内上杉邸跡(No.170)は、鎌倉市の北部域に位置し、調査地は鎌倉市山ノ内字東管領屋敷179番39に所在しており、JR北鎌倉駅の南東側約450mの距離にある。

地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷にある。この開析谷の両側丘陵には複雑に入り組んだ大小の谷戸(明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等)が形成されており、谷戸奥から湧出した小河川(明月川、瓜谷川、山ノ内川等)は、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、市域の北西側で柏尾川に合流している。

本地点は、字名にもみられるように、室町期以降にはこの付近に関東管領山ノ内上杉氏の屋敷があったとされ、『相模國鎌倉郡村誌』山ノ内村の項には、「本村中央ニアリ徳泉寺旧趾ノ西北隣ナリ今畠地トナル即山内上杉氏ノ旧趾ナリ」と記され、この周囲が山ノ内上杉邸跡(No.170)として周知の遺跡となっている。

建長寺から大船方面に開けた開析谷では現在、主要地方道横浜・鎌倉線がメインストリートとして貫いているが、同線は鎌倉街道ともいわれて、中世都市鎌倉に至る往時の経路とほぼ重なっており、このうち、調査地周辺から建長寺の門前を通り巨福呂坂を経て鶴岡八幡に至る部分は特に山ノ内道という。この山ノ内道に沿って、本調査地から建長寺門前に至る範囲には調査地側から正法寺、徳泉寺、安国寺、

保寧寺、龍興院が連なって立地していたことが明月院古絵図にみられ、往時は禅宗、特に臨済宗の拠点的な地域であったと考えられるが、これら寺院はすべて廃寺となっている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。山ノ内地域は市内のなかでも比較的調査事例の少ない地域であり、5地点をあげることにする。

本調査地点の属する遺跡内をみると、西側50mの①山ノ内上杉邸跡 (No.170) 山ノ内字東管領屋敷180番1外地点では、8面の遺構面を検出し、13世紀後葉～15世紀代に至る礎石建物、掘立柱建物、盛土、苑池とも捉えられる大形溝などが確認されて、これらが山ノ内上杉邸に関連する遺構群とするより、『明月院絵図』に記載が見られる「傳宗庵」に関連する可能性があることが指摘されている(福嶋ほか2012)。次に周辺の遺跡をみると、②山ノ内道周辺遺跡 (No.136) 山ノ内字東管領屋敷180番10地点では、鎌倉時代後期～室町期にかけて2面の遺構面が検出され、明月谷方面からの自然流路と山ノ内道に平行する自然流路、および両流路の合流点が発見されている(鎌倉市教育委員会 1997)。下層からは古墳時代前期～中期のミニチュア土器など、祭祀に関連する遺物が出土している。さらに北西側の③円覚寺旧境内遺跡 (No.434) 山ノ内字西管領屋敷377番1では、13世紀第4四半期から14世紀後半～15世紀代に至る4面の遺構面を検出し、このうち14世紀後半～15世紀代の第1面では、柱穴や溝状の細長い土坑を検出し、14世紀前半の第2面では、山ノ内道と平行に延びる南北方向の小規模な箱堀、通路と考えられる幅2mの硬化面を検出している(宮田・滝澤 2010)。また、13世紀末～14世紀初頭頃の第3面、13世紀第4四半期頃の第4面では、建物としてまとまる柱穴や柱穴列とともに、この建物に先行する溝などが検出された。これらは調査地が円覚寺の旧境内にあたることから寺院内部の建物や通路、区画施設と考えられている。

次に調査地点より南東側に目を転じると、前節でも述べたとおり、山ノ内道に沿って建長寺門前に至る範囲には調査地側から正法寺、徳泉寺、安国寺、保寧寺、龍興院が建立されていたことが、明月院古絵図にみられ、このうち、調査地点に近い④徳泉寺跡 (No.173) 山ノ内字東管領屋敷168番4地点では、遺構面1面のみで、中世(15世紀代)の地業1ヵ所と中世～近世に属すると考えられる河川が検出され、河川は山ノ内川の旧流路に当たる可能性が指摘されており、地業は河川との関係から河岸保護と川への土砂流入を防ぐ役割をもつと考えられている(永田・齋藤 2018)。⑤安国寺跡 (No.174) 山ノ内字東管領屋敷147番9外地点では、14世紀～15世紀中葉の生活面8面と近世面1面が検出され、泥岩による組護岸をもつ溝、土坑、木組遺構などの遺構が検出され、遺物は、僧の所持品と考えられる刻字された硯や、数珠あるいは瓔珞の一部とみられるガラス小玉など寺院色の強い遺物が出土したほか、五芒星の墨描きが施される笠塔婆形状の呪符木簡が出土している。この調査の詳細は本書に掲載しているので参照され

表1 山ノ内上杉邸跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	山ノ内上杉邸跡 (No.170)	山ノ内字東管領屋敷179番39地点	
①	山ノ内上杉邸跡 (No.170)	山ノ内字東管領屋敷180番1外地点	福嶋ほか 2012
②	山ノ内道周辺遺跡 (No.136)	山ノ内字東管領屋敷180番10地点	鎌倉市教育委員会 1997
③	円覚寺旧境内遺跡 (No.434)	山ノ内字西管領屋敷377番1地点	宮田・滝澤 2010
④	徳泉寺跡 (No.173)	山ノ内字東管領屋敷168番4地点	永田・齋藤 2018
⑤	安国寺跡 (No.174)	山ノ内字東管領屋敷147番9外地点	森 2010、本報告書
⑥	保寧寺跡 (No.175)	山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点	手塚 1997
⑦	西管領屋敷南やぐら群 (No.212)		

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

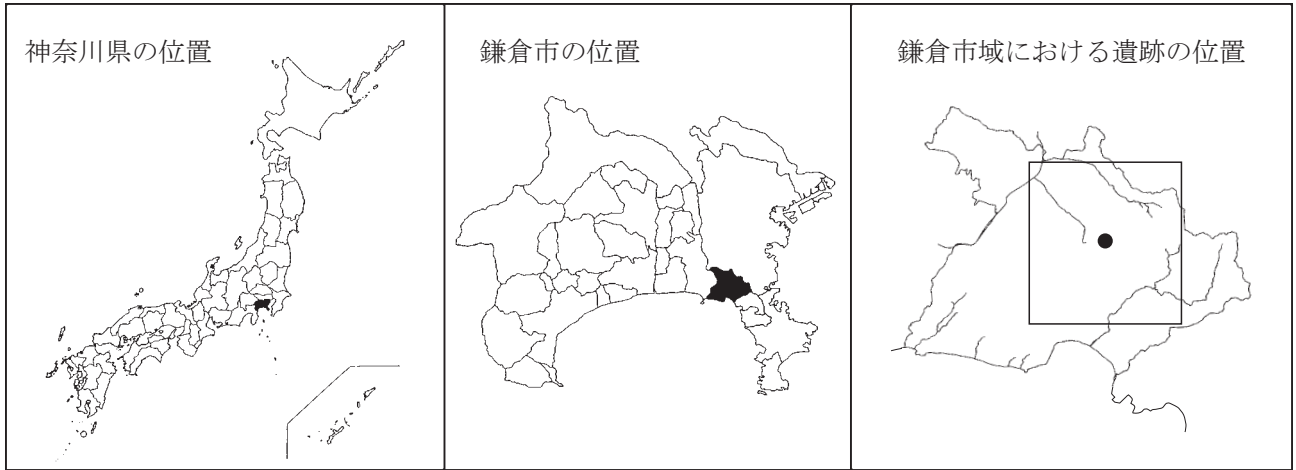
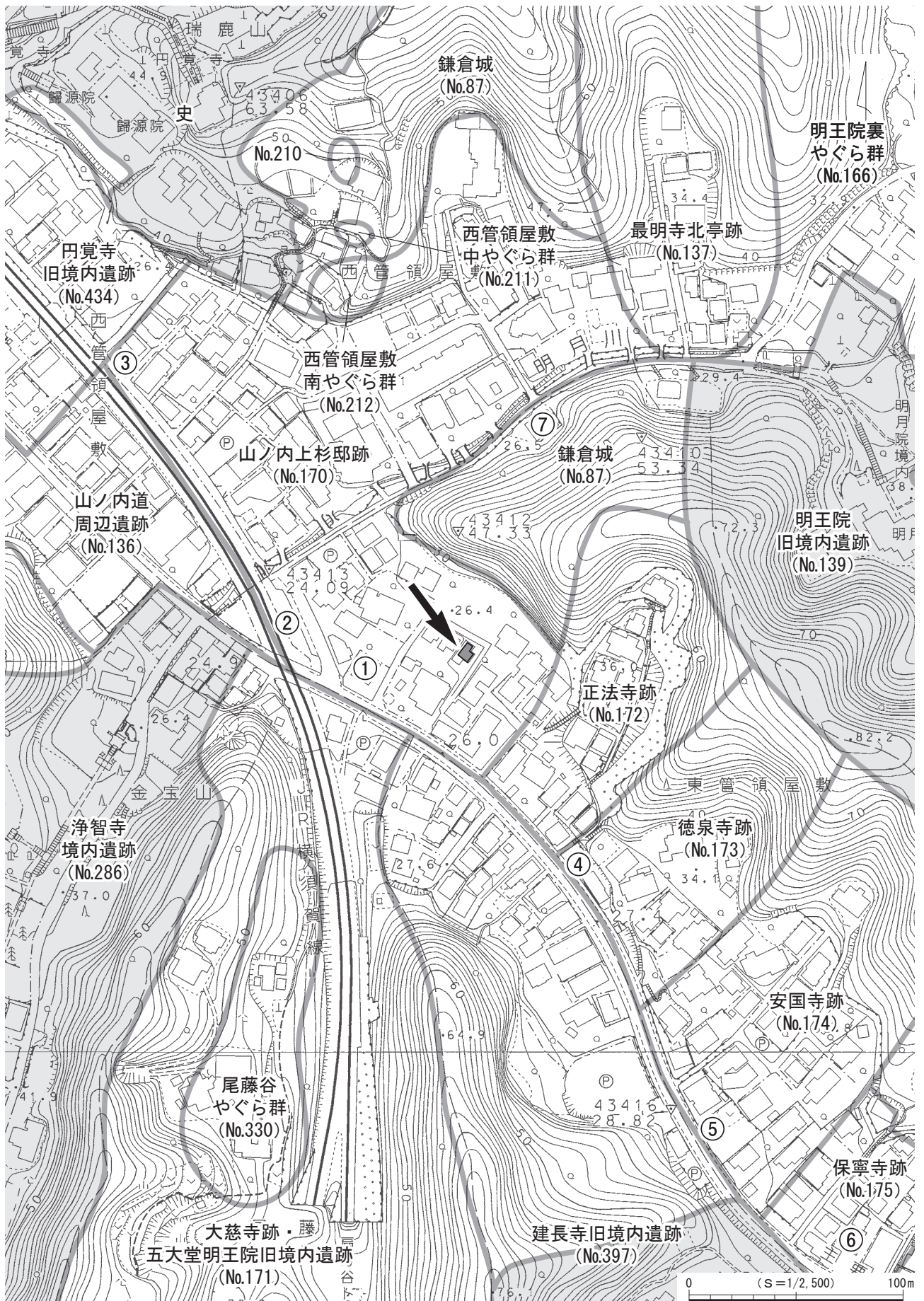


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

たい。⑥保寧寺跡 (No.175) 山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点では、当寺が15世紀中葉から近世まで存続した寺院であることが確認されており、3面の遺構面が検出され、遺物は禅宗寺院を特徴付ける天目碗が数多く出土している (手塚 1997)。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～5面までの合計5面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区北西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約25.9mを測り、最上部には層厚35～60cmの表土(1層)が堆積している。表土の下位には山砂を含む暗茶褐色弱砂質土を主体とする層(2～6層)が層厚合計40cm前後、少量の泥岩ブロックと砂岩ブロックを含む明茶褐色弱粘質土(7層)が層厚25cm前後、暗褐色弱粘質土(8層)が層厚10cm前後堆積している。遺構確認面の第1面は9～11層上面で確認し、確認面の標高は25.1～25.4mを測る。9層は泥岩ブロックと砂岩ブロックおよび微量の炭化物・かわらけ片を含む暗褐色弱砂質土で、層厚15cm前後である。10層は少量の泥岩粒、多量の山砂、微量の炭化物とかわらけ片を含む暗褐色弱粘質土で、層厚10cm前後である。11層は多量の炭化物を含む明褐色弱粘質土で、層厚約7cmである。第2面は14・16層上面で確認し、確認面の標高は24.9～25.3mを測る。14層は炭化物とかわらけ片を少量含み、泥岩ブロックと砂岩ブロックで構成された整地層で、層厚5～20cmである。16層は多量の泥岩ブロックと炭化物・かわらけ片を含む整地層で、層厚3～35cmである。14層と16層の間には、多量の泥岩粒・炭化物・かわらけ片を含み、粘性の強い暗褐色粘質土(15層)が層厚3～10cm堆積している。16層の下位は多量

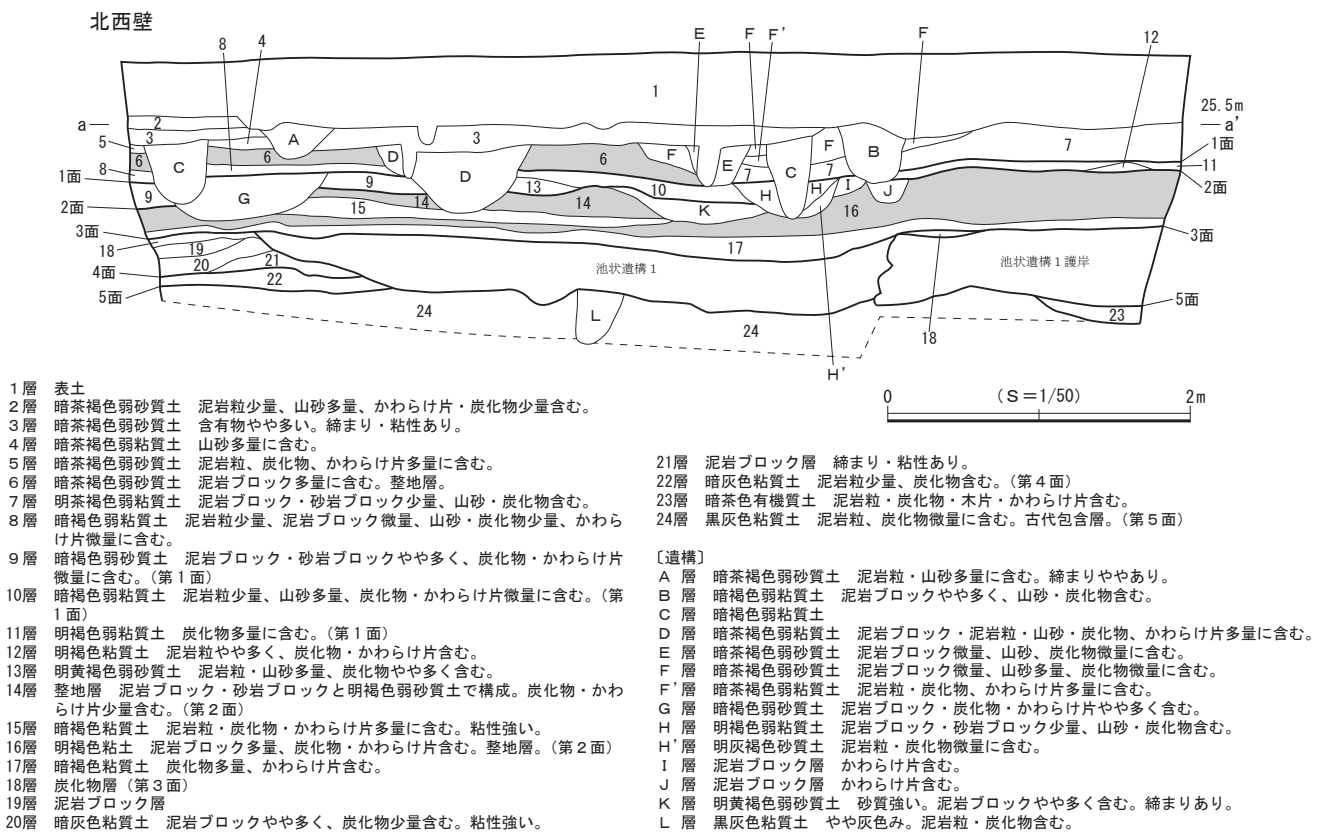


図5 調査区北西壁 土層断面図

の炭化物とかかわらけ片を含む暗褐色粘質土(17層)で、第3面で構築された池状遺構の上端を平坦にするための層と考えられる。第3面は18層上面および池状遺構の護岸施設上面で確認し、確認面の標高は24.6~24.8mを測る。18層は炭化物層で、層厚7cm前後である。第4面は22層上面で確認し、確認面の標高は24.5m前後を測る。22層は少量の泥岩粒と炭化物を含む暗灰色粘質土で、層厚10cm前後である。遺構確認面の最下位である第5面は、古代包含層の24層上面で確認した。確認面の標高は24.4m前後を測る。24層は泥岩粒と微量の炭化物を含む黒灰色粘質土である。

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1~5面までの合計5面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は礎石・礎板建物2棟、池状遺構1ヵ所、溝状遺構2条、土坑18基、ピット104基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して27箱を数える。なお、各面の遺構および遺構外、構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表7に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1~5面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の9~11層上面で検出され、確認面の標高は25.1~25.4mを測る。9層は泥岩ブロックと砂岩ブロックおよび微量の炭化物・かわらけ片を含む暗褐色弱砂質土、10層は少量の泥岩粒、多量の山砂、微量の炭化物とかかわらけ片を含む暗褐色弱粘質土、11層は多量の炭化物を含む明褐色弱粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑11基、ピット86基で、調査区全域に分布していた(図6)。また、調査区北東側には炭層が広がっており、その北東隅付近では完形のかかわらけが分布する状況がみられた。

遺物は主にかかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などであり、これらの年代観から本面は14世紀前葉~中葉に属すると考えられる。

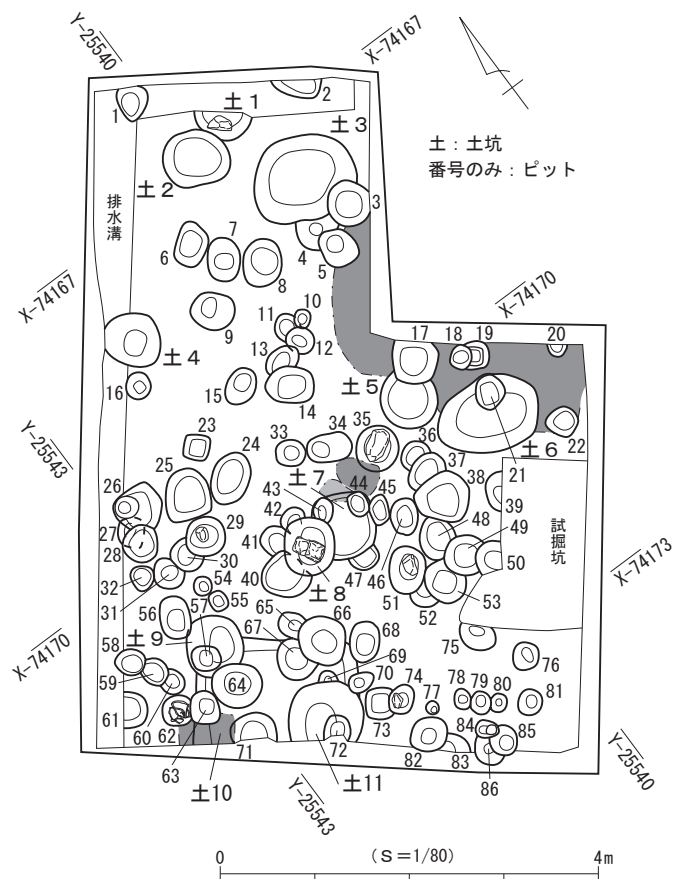


図6 第1面 遺構分布図

(1) 土坑

土坑1(図8)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。排水溝の掘削により北東側が失われ、土坑2と重複して西壁の一部が壊されているため、全容は不明である。検出された範囲からは、平面形は略円形ないし楕円

形を呈すると推定され、底面はほぼ平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長61cm、北東-南西方向の現存長30cm、深さ21cmで、坑底面の標高は25.07mを測る。坑底面の南西側から長さ26cm、幅15cm、高さ9cmの礫が出土し、礎石の可能性が考えられる。上面の標高は25.16mである。

遺物は出土しなかった。

土坑2 (図8)

調査区北西隅付近に位置する。土坑1と重複して西壁の一部を壊している。平面形は略円形を呈し、底面は中央がわずかに盛り上がる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸61cm、深さ21cmで、坑底面の標高は24.92mを測る。主軸方位はN-47°-Wを指す。

遺物はかわらけ72点、陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑3 (図8)

調査区北側の中央付近に位置する。ピット3・4と重複して、ピット4の北壁を壊し、ピット3に南壁の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は南東側で大きく開くが、北西側の開きは小さく、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸1.13m、短軸94cm、深さ20cmで、坑底面の標高は25.03mを測る。主軸方位はN-57°-Wを指す。

出土遺物 (図7)

遺物はかわらけ76点、磁器2点、陶器2点が出土し、このうち3点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径7.7~8.0cmの小形品である。3は瀬戸産の陶器であり、細片のため詳細不明であるが香炉と類推した。外面に梅花文を押印し、内外面に暗緑灰色に発色する鉄釉を施す。

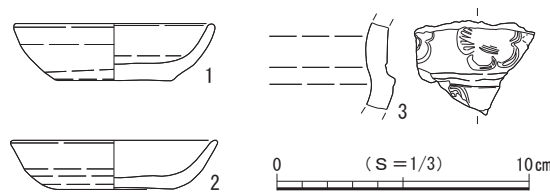


図7 第1面 土坑3出土遺物

土坑4 (図8)

調査区北西壁際のやや北寄りに位置する。北西壁の一部が調査区外に及んでいる。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はややカーブを描いて立ち上がり、断面形は丸底形に近い逆台形状を呈する。規模は長軸現存長63cm、短軸56cm、深さ23cmで、坑底面の標高は24.85mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

土坑5 (図8)

調査区中央のやや東寄りに位置する。ピット17と重複して北東壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸60cm、深さ21cmで坑底面の標高は24.95mを測る。主軸方位はN-13°-Eを指す。

遺物はかわらけ25点、金属製品1点が出土した。

土坑6 (図8)

調査区東隅付近に位置する。ピット21と重複して北壁側の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈

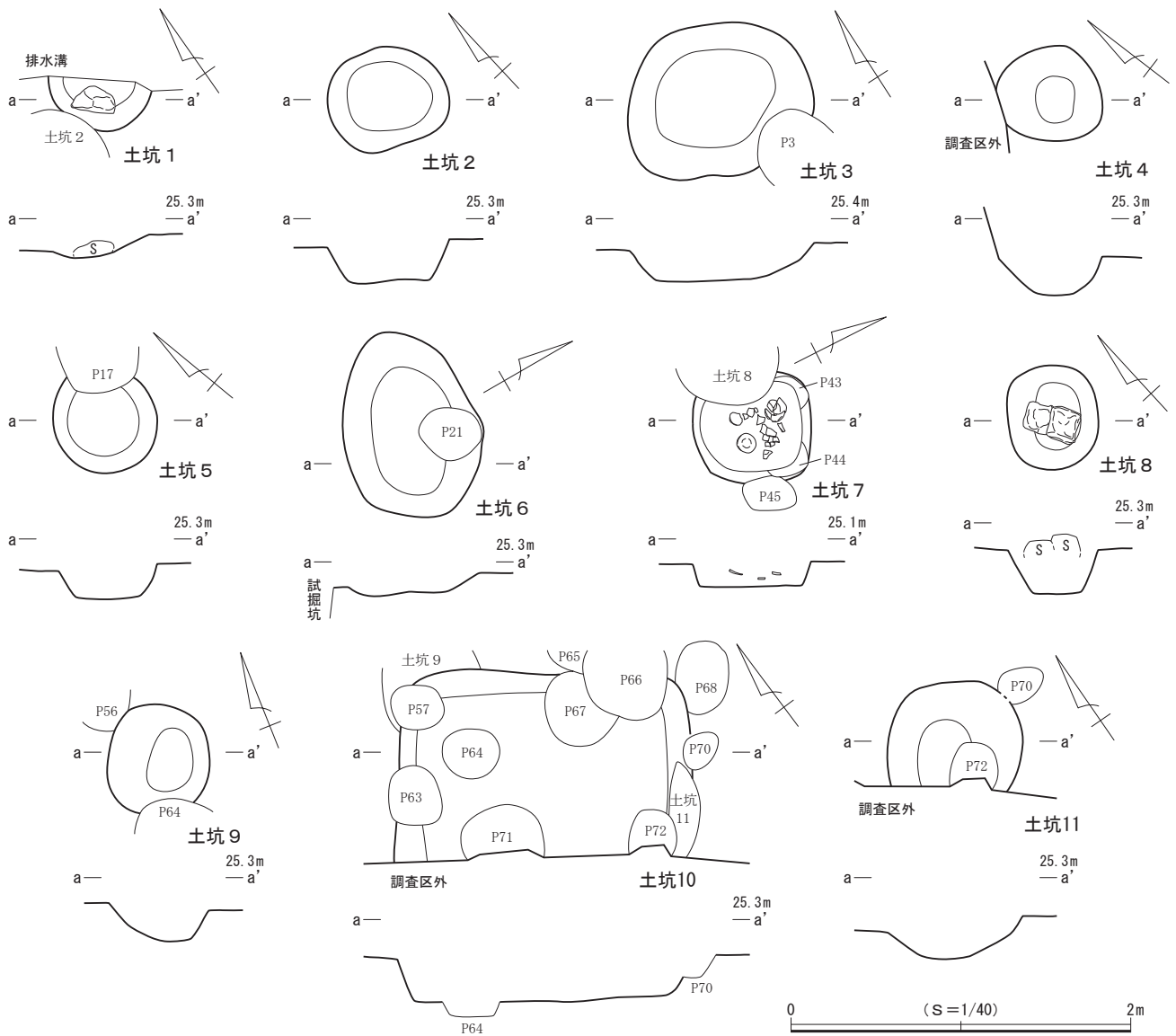


図8 第1面 土坑1～11

し、底面はわずかに凹凸をもつ。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.13m、短軸82cm、深さ14cmで、坑底面の標高は25.20mを測る。主軸方位はN-77°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑7 (図8)

調査区中央のやや南寄りに位置する。土坑8、ピット43～45・47と重複してピット47の北側を壊している。また、土坑8とピット43に西壁側、ピット44・45に東壁の一部が壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平らである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸70cm、短軸現存長65cm、深さ14cmで、坑底面の標高は24.79mを測る。主軸方位はN-27°-Eを指す。土坑内からは、かわらけがまとまって出土した。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ113点が出土し、このうち3点を図示した。

1～3はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.7cmを測る小形品、2・3は口径12.5～12.7cmの中形品である。1の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

土坑8 (図8)

調査区中央のやや南西寄りに位置する。土坑7、ピット40～43と重複してすべての遺構を壊して構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸62cm、短軸53cm、深さ26cmで、坑底面の標高は24.88mを測る。坑内には礎石状の角礫が2個並べて据えられていた。詳細は不明であるが、略方形に面取りされており、いずれも底面に密着していなかったようである。角礫の大きさは、一辺30cm前後を測り、高さは15cm内外と思われる。

遺物はかわらけ36点、瓦質土器1点が出土した。

土坑9 (図8)

調査区南西隅付近に位置する。土坑10、ピット56・57・64と重複して土坑10の北壁隅を壊し、ピット56・57・64に南壁と北西壁の一部が壊されている。平面形は隅丸方形に近い略円形を呈し、底面は緩やかに湾曲する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸60cm、深さ24cmで、坑底面の標高は24.93mを測る。主軸方位はN-32°-Eを指す。

遺物はかわらけ17点、陶器1点が出土した。

土坑10 (図8)

調査区南西壁際のやや西寄りに位置する。南西側が調査区外に及んでいる。また、土坑9・11、ピット57・63・64・66・67・70～72と重複して壊されているため、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は方形ないし長方形を呈すると推定され、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.71m、北東-南西方向の現存長1.14m、深さ16cmで、坑底面の標高は24.82mを測る。北東壁を基に主軸方位を求めると、N-53°-Wを指す。

遺物はかわらけ44点が出土した。

土坑11 (図8)

調査区南西壁際の中央に位置する。南西側が調査区外に及んでいる。土坑10、ピット69・70・72と重複して土坑10とピット69の南側を壊し、ピット70に東壁の一部、ピット72に坑内の一部が壊されている。検出された範囲からは、平面形は略円形ないし楕円形を呈すると推定され、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は、長軸80cm、短軸現存長66cm、深さ15cmで、坑底面の標高は24.82mを測る。

出土遺物 (図10)

遺物はかわらけ29点、陶器1点、瓦質土器1点が出土し、このうち2点を図示した。

1は略完形のロクロ成形かわらけであり、口径13.5cmを測る大形品である。2は備前産の播鉢である。

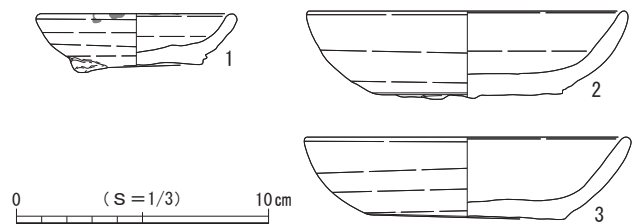


図9 第1面 土坑7出土遺物

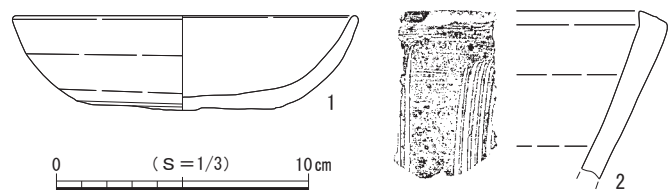


図10 第1面 土坑11出土遺物

(2) ピット

第1面では、86基を検出した。調査区全域に分布し、特に南西側の密集度は高いため建物が存在していた可能性も考えられるが、遺構間の重複が激しい状況に加えて調査面積の制約もあり、明確には捉えられなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、楕円形がやや多く認められる。規模は長軸14～59cm、深さ6～35cmと長軸・深さともにばらつきがある。

以下、礎石が据えられたピット4基と常滑の片口鉢が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット29 (図11)

調査区中央のやや西寄りに位置する。ピット30と重複して東壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は径41cm、深さ14cmを測り、礎石がピットの中央付近に据えられていた。礎石の大きさは長さ16cm、幅12cmを測り、上面の標高は24.91mである。

ピット35 (図11)

調査区中央のやや北東寄りに位置する。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸49cm、短軸45cm、深さ16cmを測り、礎石がピット中央に据えられていた。礎石の大きさは長さ37cm、幅20cmを測り、上面の標高は25.05mである。

ピット51 (図11)

調査区中央のやや南東寄りに位置する。ピット52・53と重複して両者の北西壁の一部を壊している。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸50cm、短軸38cm、深さ35cmで、礎石がピット底面付近の北東側に据えられていた。礎石の大きさは長さ21cm、幅14cmを測り、上面の標高は24.73mである。

ピット62 (図11)

調査区南西隅付近に位置する。ピット63と重複して南東壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸33cm、短軸32cm、深さ18cmを測る。壁面に沿うように据えられていたと考えられる状況で、常滑産の片口鉢が正位で出土した。

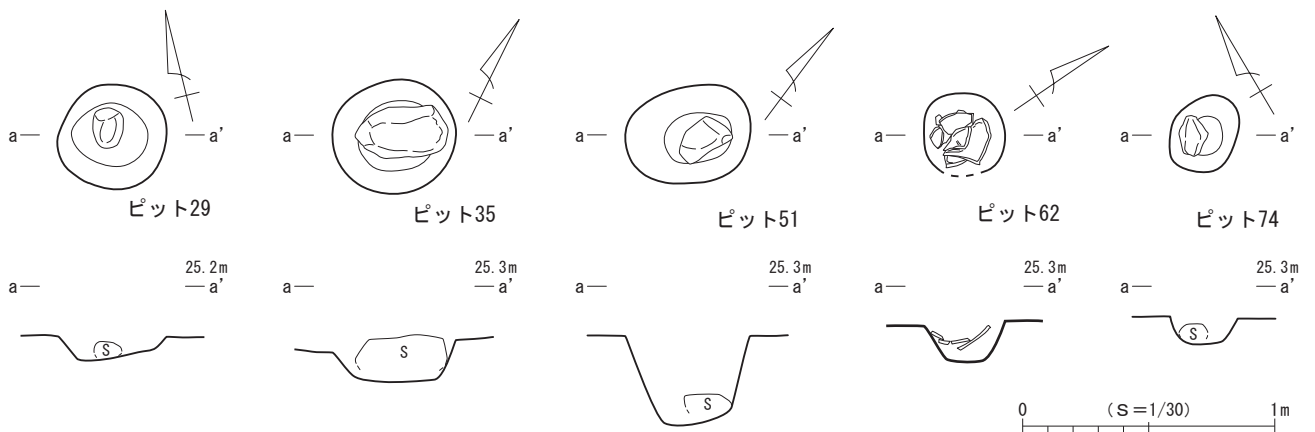


図11 第1面 ピット29・35・51・62・74

ピット74 (図11)

調査区南壁側の中央寄りに位置する。ピット73と重複して南東壁を壊している。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸32cm、短軸26cm、深さ12cmを測り、礎石がピット底面の西側に据えられていた。礎石の大きさは17cm、幅12cmを測り、上面の標高は25.10mである。

ピット出土遺物 (図12)

遺物は86基のピット中、45基からかわらけ、陶器、金属製品などが出土した。詳細は出土遺物一覧表(表9)に掲げたが、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径7.5cmを測る小形品である。2は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、片口が遺存する。内面体部下位は使用による摩耗が著しい。1はピット66、2はピット62からそれぞれ出土した。

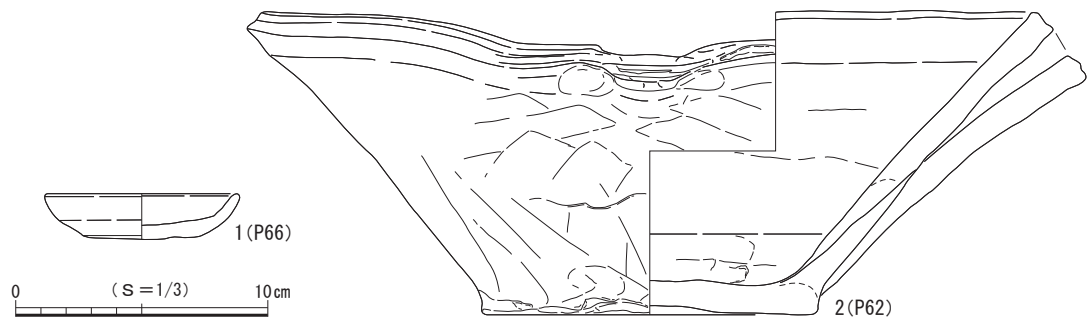


図12 第1面 ピット出土遺物

(3) 表土出土遺物 (図13)

表土からも遺物が出土しており、このうち11点を参考資料として図示した。

1～6はロクロ成形のかわらけであり、このうち1～4は口径7.0～8.4cmの小形品、5は口径11.6cmの中形品、6は口径13.2cmの大形品である。1～3の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。7は瀬戸産の折縁深皿、8は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、口縁部形状から10～11型式に比定されよう。9・10はロクロ成形のかわらけの底部を打割して円板状に再加工したもので、表裏面にはかわらけ成形時の糸切痕と板状圧痕、器面の横ナデ調整が観察できる。11は現存長10.3cmを測る鉄釘。12の銭貨は祥符通寶(1009年初鑄)である。

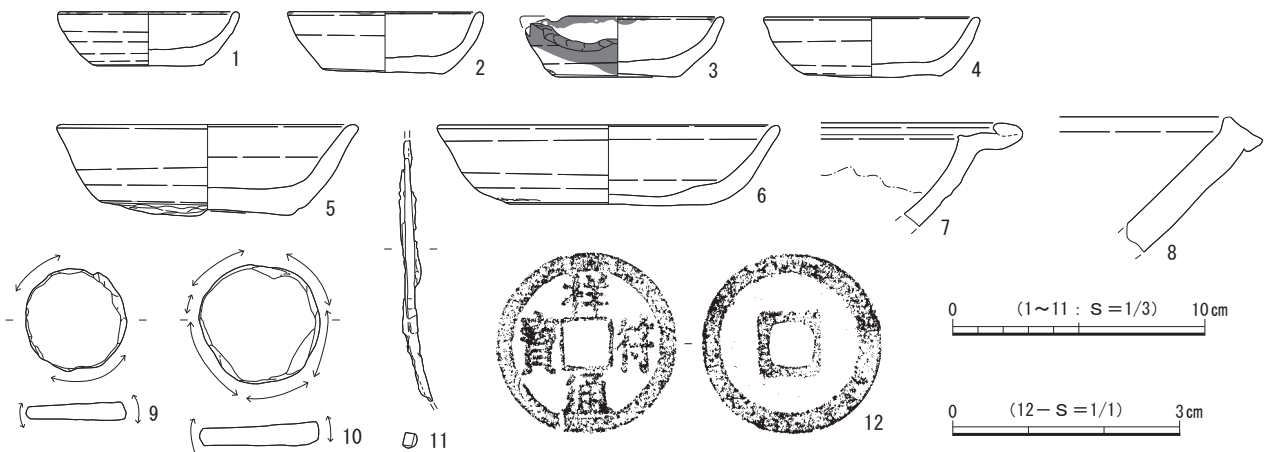


図13 表土出土遺物

(4) 第1面 遺構外出土遺物 (図14)

第1面では遺構外からもかわらけ、陶器、土製品、石製品、金属製品が出土し、このうち22点を図示した。

1～15はロクロ成形のかわらけであり、このうち1～11は口径6.8～7.7cmの小形品、12～15は口径10.7～12.3cmの中形品である。9の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。16は常滑産の広口壺であり、口縁部形状から5型式に比定される。17はロクロ成形のかわらけの底部を打割して円板状に再加工したもので、表裏面にはかわらけ成形時の糸切痕と板状圧痕、器面の横ナデ調整が観察できる。18は粘板岩を素材とした薄板状の砥石であり、表裏面を使用し、研磨によって不均一に磨り減る。19～22は金属製品である。このうち19は切先・茎が遺存する刀子であり、茎端部が欠損している。幅の厚い刀身は平造りと考えられる。20も刀子であり、切先側が欠損し、遺存部分の2ヵ所で意図的に折り曲げられており上面観が逆「N」字状を呈する。刀身は平造りで、茎の端部付近に目釘穴とみられる錆膨れが観察できる。21・22は鉄釘であり、21は現存長11.2cm、22は現存長5.2cmを測る。

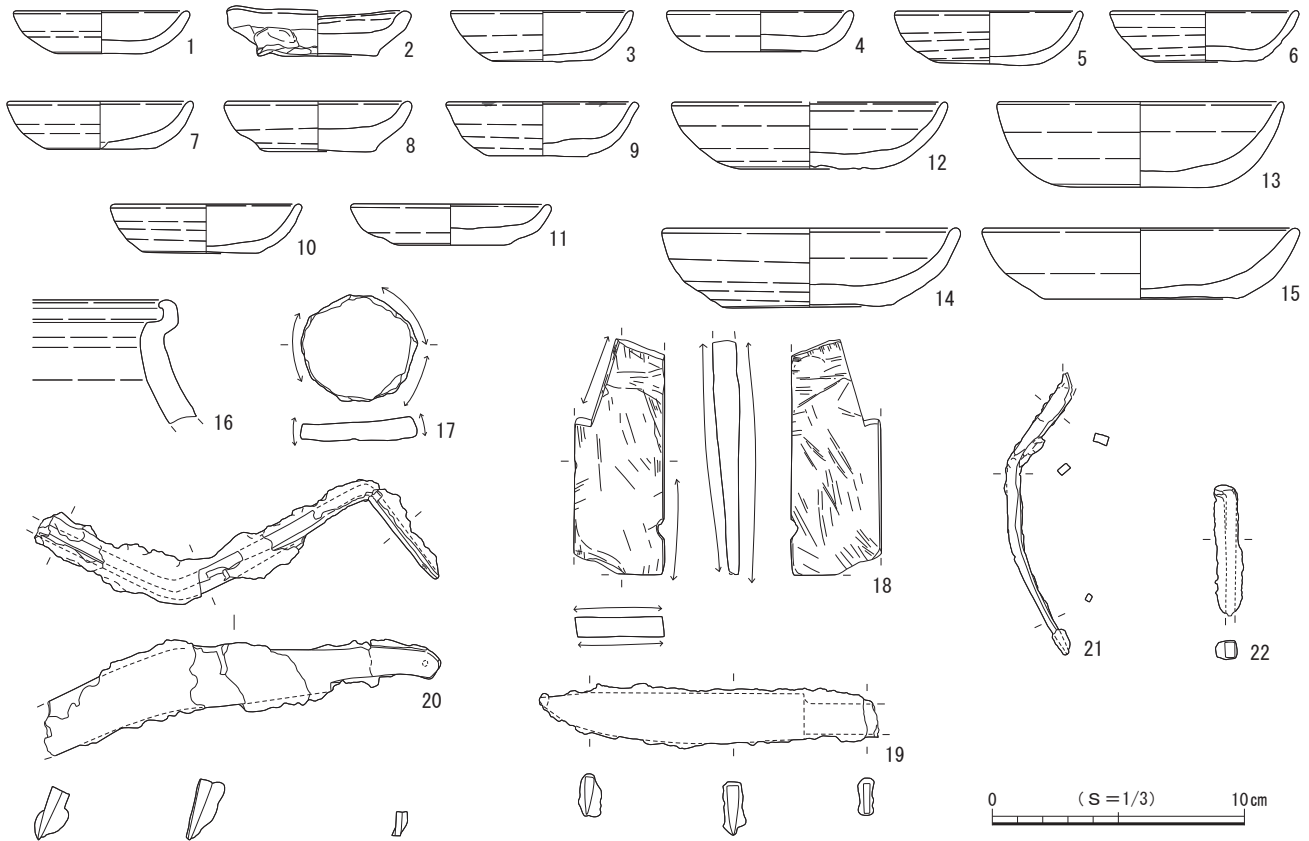


図14 第1面 遺構外出土遺物

(5) 第1面 構成土出土遺物 (図15)

第1面の遺構基盤層である構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、内面体部中位以下は使用による摩耗が著しい。

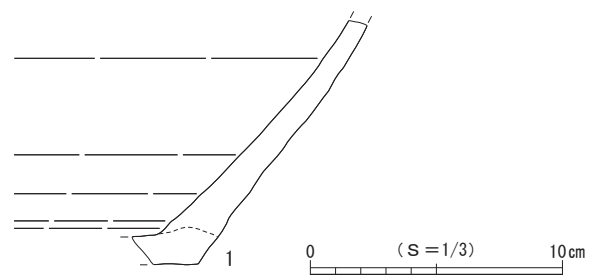


図15 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は14・16層上面で検出され、確認面の標高は24.9～25.3mを測る。14層は炭化物とかわらけ片を含み、泥岩ブロックと砂岩ブロックで構成された整地層、16層は多量の泥岩ブロックと炭化物・かわらけ片を少量含む整地層で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、溝状遺構1条、土坑3基、ピット16基である(図16)。礎石建物と溝状遺構は、検出された範囲でみると軸をほぼ同一にしており、何らかの関係があるものと考えられる。土坑は調査区の中央より南西側に分布している。また、ピットは調査区中央付近に分布がほぼまとまっている。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、金属製品などが出土し、これらの年代観から本面は13世紀末葉～14世紀前葉に属すると考えられる。

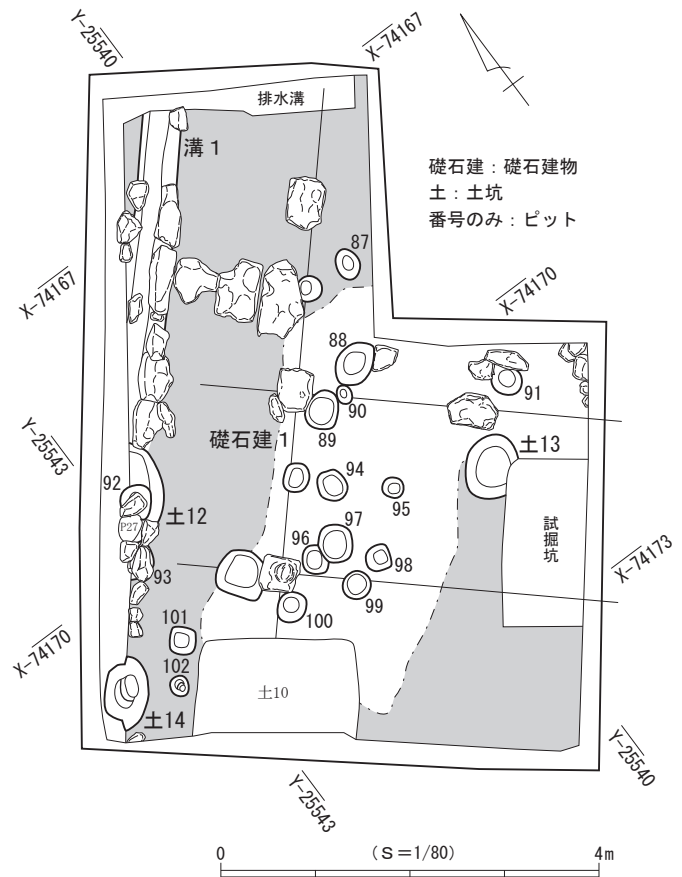


図16 第2面 遺構分布図

(1) 礎石・礎板建物

礎石建物1 (図17)

調査区中央から北・東側に位置する。検出された範囲で捉えられた遺構は、北東-南西方向へ直線的に並ぶ礎石1～3の2間、礎石2とその南東側に据えられた礎石4の1間で構成された礎石建物である。建物の広がりについては四方に広がる可能性が考えられるが、北西側については建物の軸線方向と並行する溝状遺構1の存在から、建物の側と推定される。また、礎石1-2と2-3の間に等間隔で配置されたP1・2および礎石3に近接するP3は、補助穴と推測されることもできるため本址と併せて図示した。主軸方位は調査範囲の制約から建物全体の空間構成は判然としませんが、北東-南西方向を基にすると、N-37°-Eを指す。

建物の規模は北東-南西方向の現存長4.05m、北西-南東方向の現存長1.95mを測る。柱間寸法は北東-南西方向では北東から1間目が2.10m、2間目が1.95

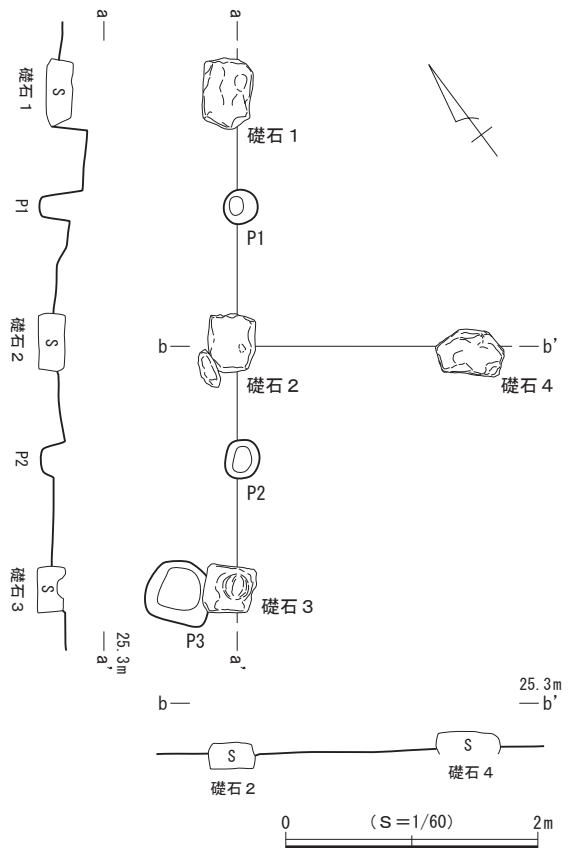


図17 第2面 礎石建物1

m、北東-南西方向は1.95mである。また、礎石1-P1-礎石2は1.05m等間、礎石2-P2-礎石3は97.5cm等間である。

各礎石は略方形に整形され、柱が据えられた位置は浅く窪んでいる。礎石の大きさは長さ40~56cm、幅36~40cm、厚さ約20cmを測り、上面の標高は24.93~25.05mである。ピットはP1・2が略円形、P3が隅丸方形で、規模は長軸27~52cm、短軸27~49cm、深さ15~34cmを測る。

遺物はピット2から、かわらけ1点が出土した。

(2) 溝状遺構

溝状遺構1 (図18)

調査区北西壁際に位置する。北東-南西方向に延び、両方向とも調査区外まで及んでいる。南西側で土坑12、ピット92・93と重複してピット93の西側を壊し、土坑12とピット92に壊されている。直線的に掘られた溝で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。溝の底面や上端には礫による護岸が部分的に認められる。使用されている石材は泥岩で、人頭大や柱状の割石である。検出した規模は現存長約5.6m、幅45cm、深さ25cmで、主軸方位はN-42°-Eを指す。底面の標高は24.89mを測る。

遺物はかわらけ5点、陶器1点、瓦1点が出土した。

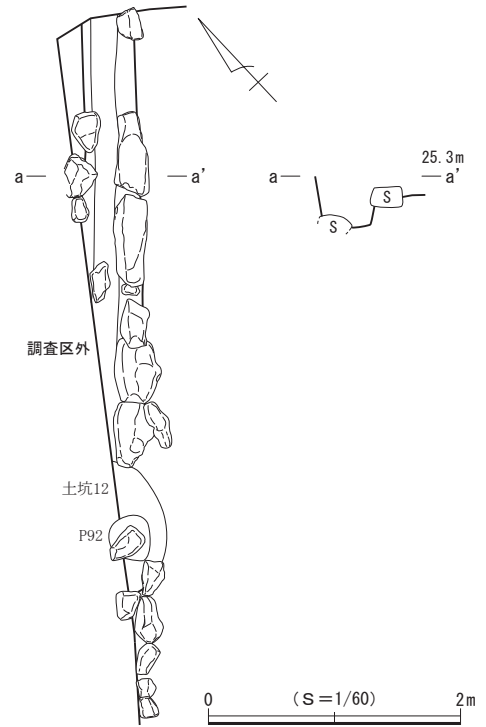


図18 第2面 溝状遺構1

(3) 土坑

土坑12 (図19)

調査区北西壁際の中央やや南寄りに位置する。北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。溝状遺構1、ピット27・92・93と重複して、溝状遺構1の南西側とピット93の北東側を壊し、ピット27に覆土の一部、ピット92に坑底面南側の一部が壊されている。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.15m、北西-南東方向の現存長35cm、深さ16cmで、坑底面の標高は24.74mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑13 (図19)

調査区中央の南東壁寄りに位置する。試掘調査により南壁の一部が失われている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸68cm、短軸現存長55cm、深さ12cmで、坑底面の標高は24.69mを測る。主軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物はかわらけ4点が出土した。

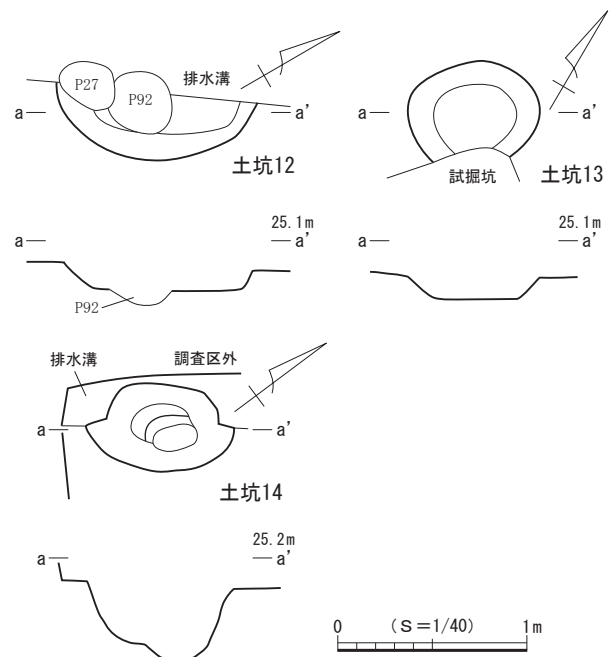


図19 第2面 土坑12~14

土坑14 (図19)

調査区南西隅に位置する。排水溝の掘削により、西側の一部が失われている。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は東側で段をもって開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は長軸78cm、短軸46cm、深さ39cmで、坑底面の標高は24.67mを測る。主軸方位はN-36°-Eを指す。

遺物はかわらけ54点、金属製品3点が出土した。

(4) ピット

第3面では、16基検出された。多くが調査区中央付近にまとまっており、礎石建物1との関連が考えられるが、建物等の配置を明確に捉えられなかった。平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、略円形が多く認められる。規模は長軸20~52cm、深さ7~24cmを測る。

遺物は16基のピット中、11基からかわらけ、陶器、石製品などが出土し、詳細は出土遺物一覧表(表9)に掲げた。

(5) 第2面 構成土出土遺物 (図20)

第2面の基盤層である遺構構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、金属製品などが出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.0cmに復元される小形品、2は口径12.7cmに復元される中形品である。

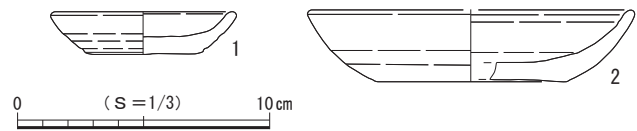


図20 第2面 構成土出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は18層上面および池状遺構の護岸施設上面で検出され、確認面の標高は24.6~24.8mを測る。18層は炭化物層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は池状遺構1カ所、ピット1基である(図21)。池状遺構1は調査区のほぼ全面で検出され、不定形かつ広範囲の掘り込みを有し、護岸施設を伴うことから池状遺構と認定した。ピットは調査区北側に位置し、池状遺構の護岸施設の一部を壊して構築されている。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、木製品、金属製品などが出土し、これらの年代観から本面13世紀中葉~後葉に属すると考えられる。

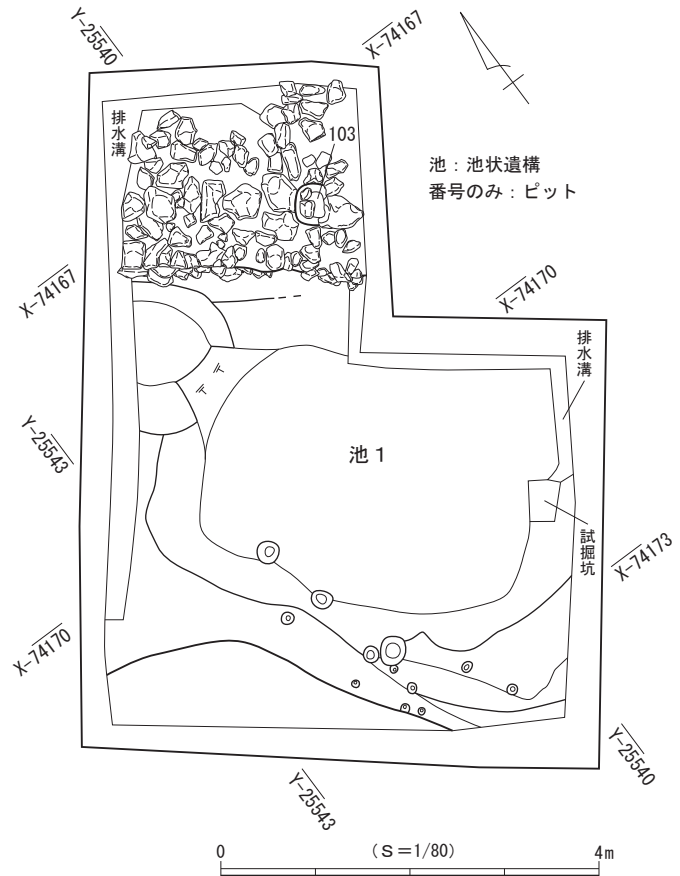


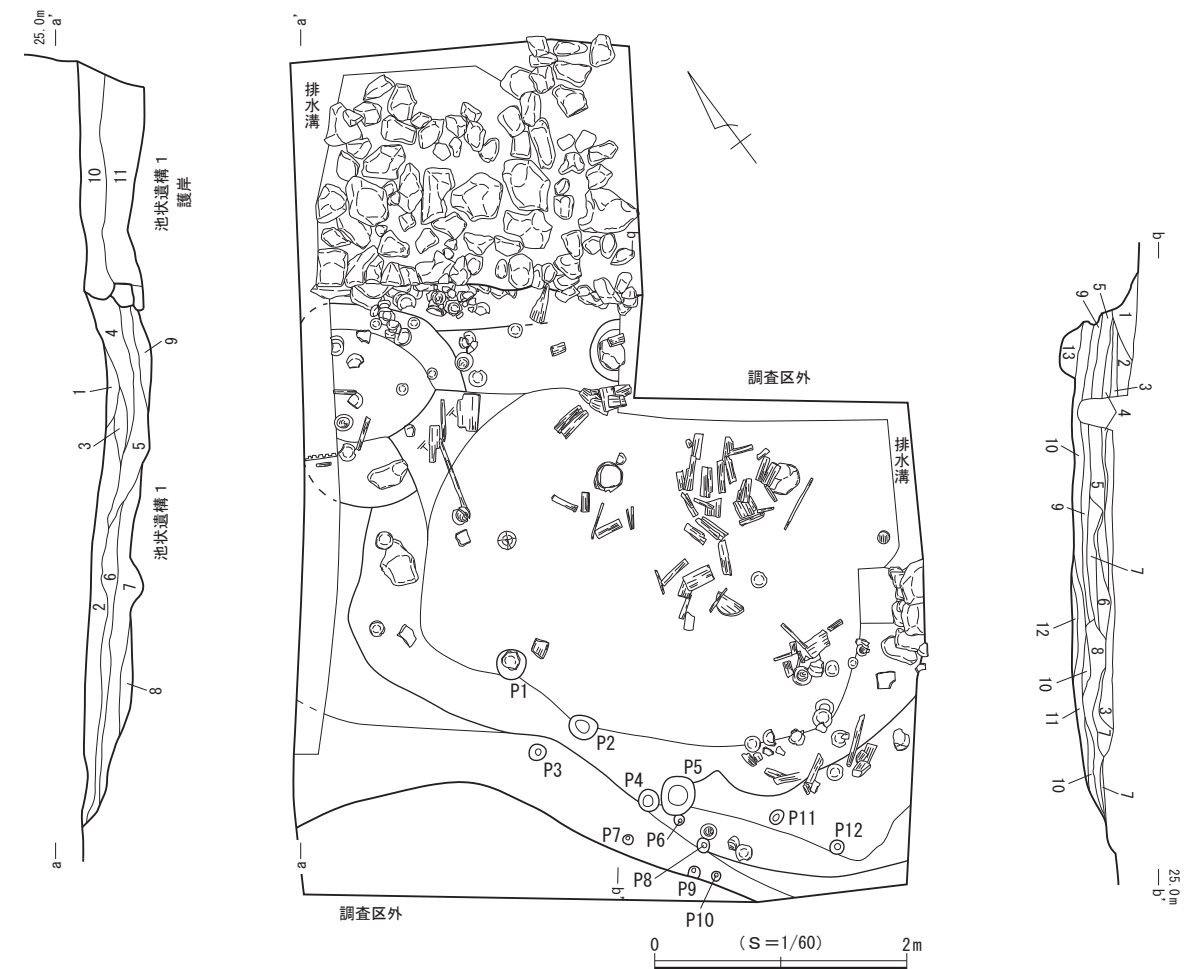
図21 第3面 遺構分布図

(1) 池状遺構

池状遺構 1 (図22)

調査区のほぼ全面から検出された。北・東・西側のいずれも調査区外に広がっている。ピット103と重複して護岸施設の一部が壊されている。検出された範囲での平面形は不整形を呈し、掘り込み部の規模は北西-南東5.0m、北東-南西の両岸が確認できる位置で約4.5mを測る。本址は、北側の護岸施設と中央一帯に広がる池、西壁際の中央やや北側に標高の高い導水施設と考えられる土坑状の掘り込み、南側に護岸施設を伴わない岸から構成されている。以下、各部の構造に触れながら説明していく。

調査区北側は北東-南西方向に直線的に構築された護岸施設である。人頭大の泥岩ブロックが壁面に貼りつけられており、また、岸端部から北側にかけても平面的に敷かれている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、高さ45cm前後で、護岸施設最上面の標高は24.78mを測る。調査区中央付近は池の底面で、もっとも深い位置での標高は24.15mあり、池状遺構の深さは中心部で65~75cmを測る。底面はほぼ平坦だが西側に向かって10cm前後高くなり、西壁際の中央やや北側は土坑状に掘り込まれていた。底面に高低



- a-a'
- 1層 暗灰粘質土 泥岩・暗褐色有機質土・炭化物・かわらけ片含む。粘性強い。
 - 2層 暗褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片多量に含む。
 - 3層 暗灰粘質土 泥岩粒・泥岩ブロックやや多く、炭化物多量に含む。粘性強い。
 - 4層 暗褐色粘質土 泥岩・炭化物・木片、かわらけ片多量に含む。粘性強い。
 - 5層 暗褐色有機質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片、木製品多量に含む。粘性強い。
 - 6層 暗褐色有機質土 泥岩・炭化物・かわらけ片少量含む。軟質で粘性強い。
 - 7層 暗灰粘質土 泥岩ブロックやや多く、炭化物少量含む。粘性強い。
 - 8層 暗灰粘質土 泥岩粒・砂粒・炭化物極微量含む。締まりあり。
 - 9層 暗灰粘質土 泥岩粒・炭化物・木製品、かわらけ片微量に含む。粘性強い。
 - 10層 大型泥岩層 炭化物・かわらけ片含む。
 - 11層 暗灰粘質土

- b-b'
- 1層 暗灰褐色粘質土
 - 2層 暗灰褐色粘質土
 - 3層 暗灰褐色粘質土 上面にかわらけ堆積。
 - 4層 暗灰褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
 - 5層 暗青灰色砂質土 泥岩ブロック・炭化物を敷いた層。
 - 6層 黒色炭層 泥岩ブロック・かわらけ片含む。
 - 7層 暗青灰色砂質土 泥岩ブロック・炭化物多量に含む。
 - 8層 灰黒色砂質土 泥岩ブロック多量、部分的に白色粉含む。
 - 9層 暗灰粘質土 木片多く含む。
 - 10層 茶褐色有機質土 木片多量に含む。
 - 11層 暗青灰色泥岩層 破碎泥岩を敷いた層。一時期の池底。
 - 12層 灰黒色粘質土 地山漸移層。

図22 第3面 池状遺構 1

差が認められることから、この土坑状の掘り込みは導水施設の可能性が考えられる。調査区南側は地山を掘り込んで造られた岸になっている。壁面は段をもって大きく開いており、傾斜は緩やかである。岸部の標高は24.80mを測る。壁面からは12基のピットが検出されており、張出施設あるいは横断施設に関わるものと推定される。ピットの平面形は略円形を呈し、規模は長軸7～31cm、短軸6～26cm、深さ21～31cmを測る。長径が15cm未満の小規模なものが多い。本址は埋没の途中で多量のかもらけや木製品が廃棄されており（a-a' 4・5層、b-b' 6層）、また、覆土最上層は多量のかもらけと泥岩ブロックを含む暗褐色粘質土（a-a' 2層、b-b' 2・3層）で埋め戻されていた。

出土遺物 (図23～33)

遺物は上層から、かもらけ3,296点、磁器1点、陶器23点、瓦質土器3点、瓦4点、石製品2点、金属製品1点が出土し、下層からはかもらけ2,009点、陶器16点、瓦質土器3点、瓦4点、石製品2点、金属製品1点が出土した。このうち上層出土として83点、下層出土として60点を層位ごとに図示した。また、木製品が上下層あわせて430点出土し、このうち87点を図示した。

上層出土遺物 (図23～25)

1～77はロクロ成形のかもらけであり、このうち1は口径4.2cmを測る極小品、2～18は口径7.0～8.0cmの小形品、19～47は口径12.0～12.8cmの中形品、48～53は口径12.5～13.1cmの中～大形品、54～76は口径13.0～13.8cmの大形品である。77は口径18.6cmに復元される特大品であり、内外面と破断面に煤が薄く付着する。また、52には口縁部直下に径0.5cm程の孔が焼成後に外面から穿たれ、66の口縁部には油煤が付着し灯明具としての使用が認められるほか、40・42・45・70の内面には焼成時の焼きムラがみられる。78～82は常滑産の陶器であり、このうち78・79は甕で、78の肩部外面には正格子の押印が施される。79は胴部下位から底部の破片である。80～82は片口鉢で、80はⅠ類、81・82はⅡ類であり、口縁部形状から81が6 a 型式、82が6 b 型式に比定される。83は凸面に斜格子の叩きが浅く施される平瓦である。

下層出土遺物 (図26・27)

1～57はロクロ成形のかもらけであり、このうち1～13が口径7.2～8.5cmの小形品、14～40が口径11.4～12.8cmの中形品、41～57が口径13.0～14.2cmの大形品である。58は常滑産の片口鉢Ⅰ類である。59は滑石製石鍋であり、外面に煤が付着する。60は現存長5.8cmを測る鉄釘である。

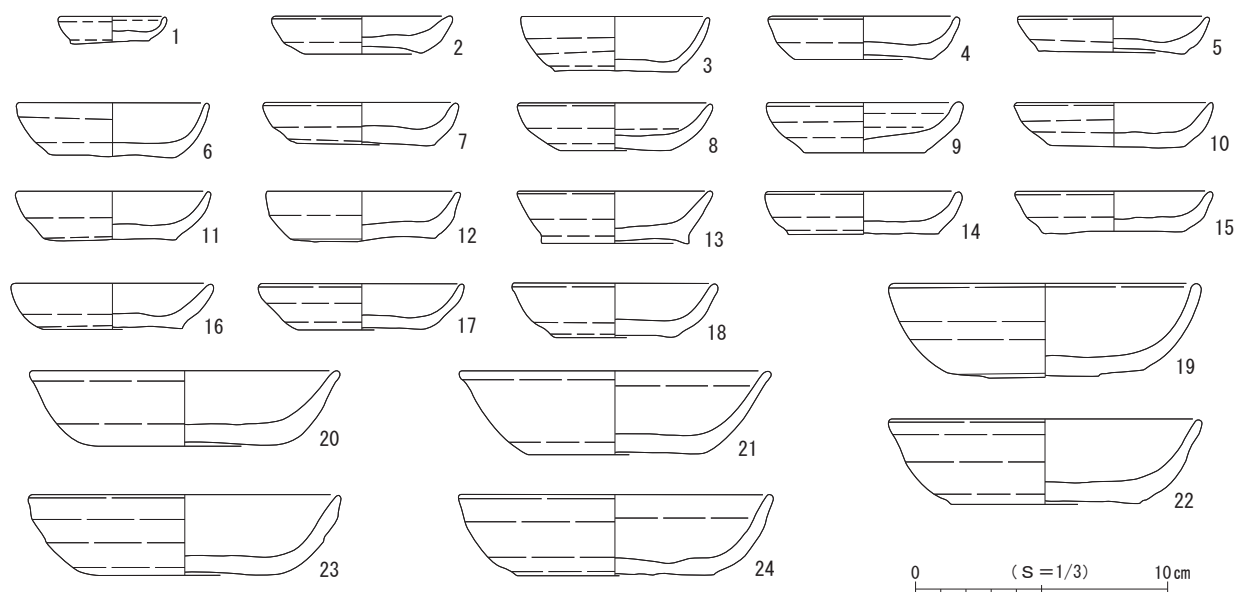


図23 第3面 池状遺構1上層出土遺物(1)

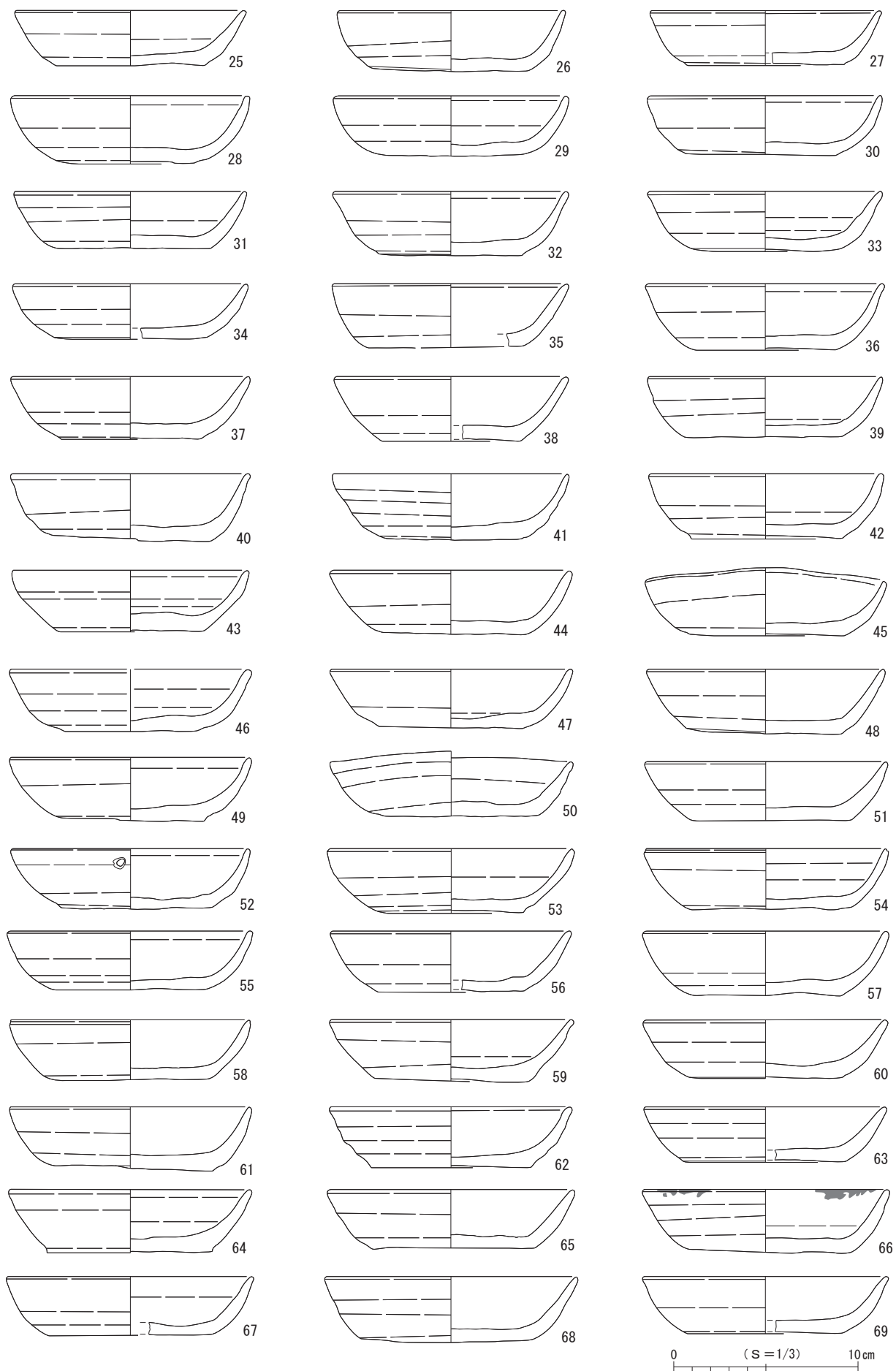


图24 第3面 池状遺構 1 上層出土遺物 (2)

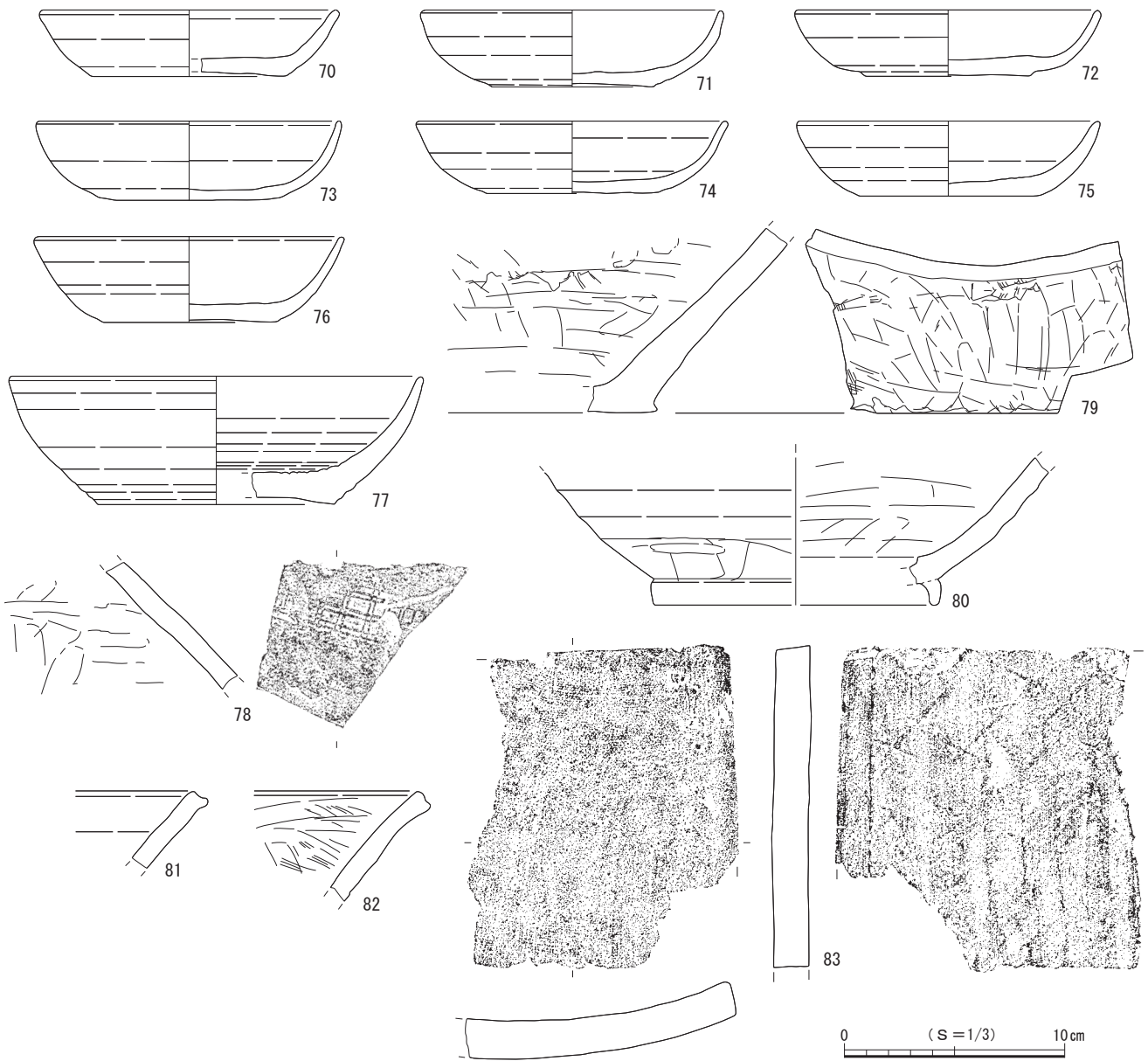


图25 第3面 池状遺構1上層出土遺物(3)

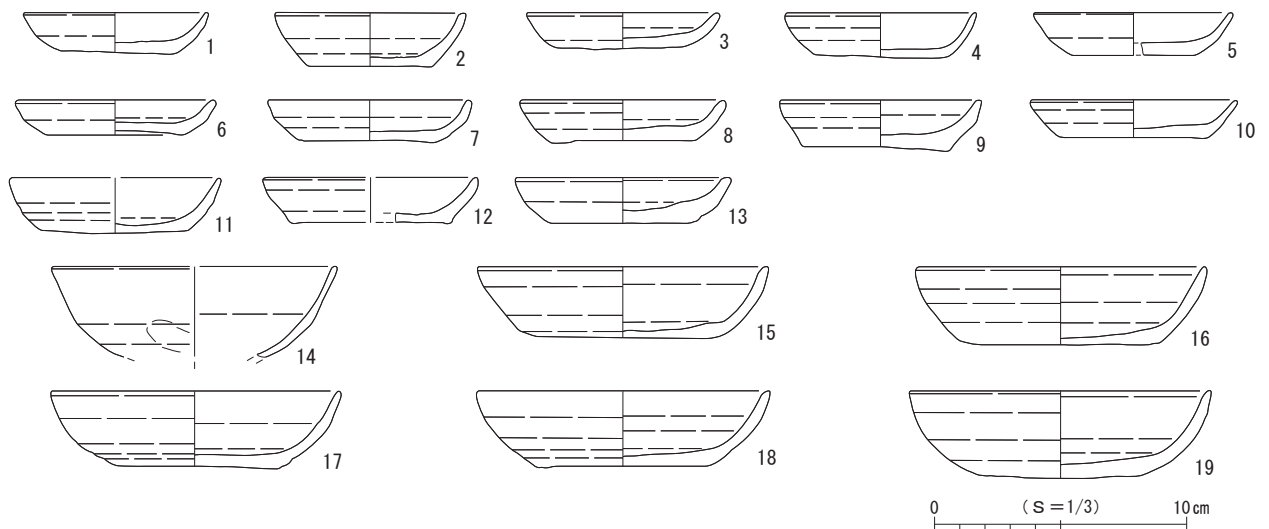


图26 第3面 池状遺構1下層出土遺物(1)

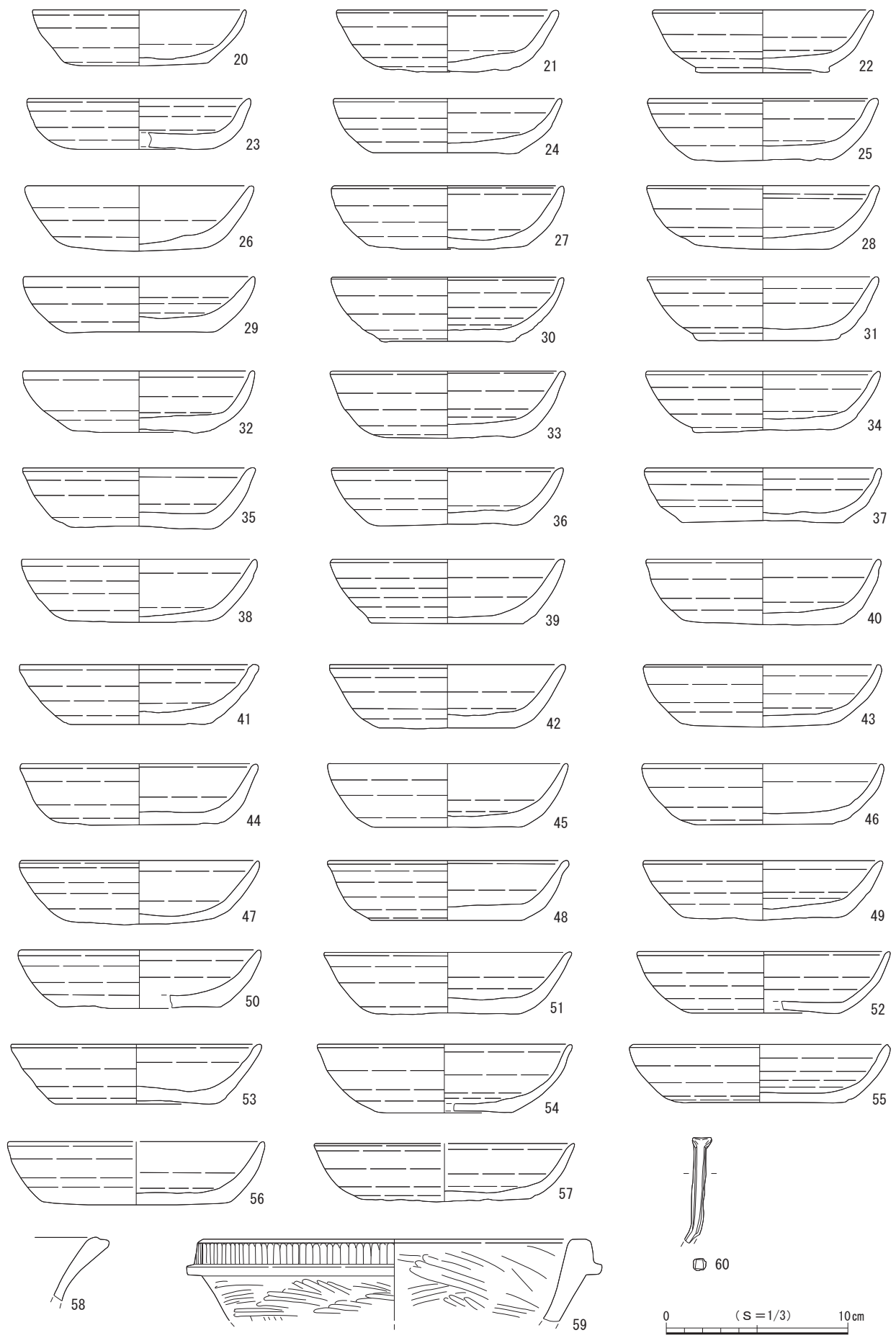


图27 第3面 池状遺構 1下層出土遺物(2)

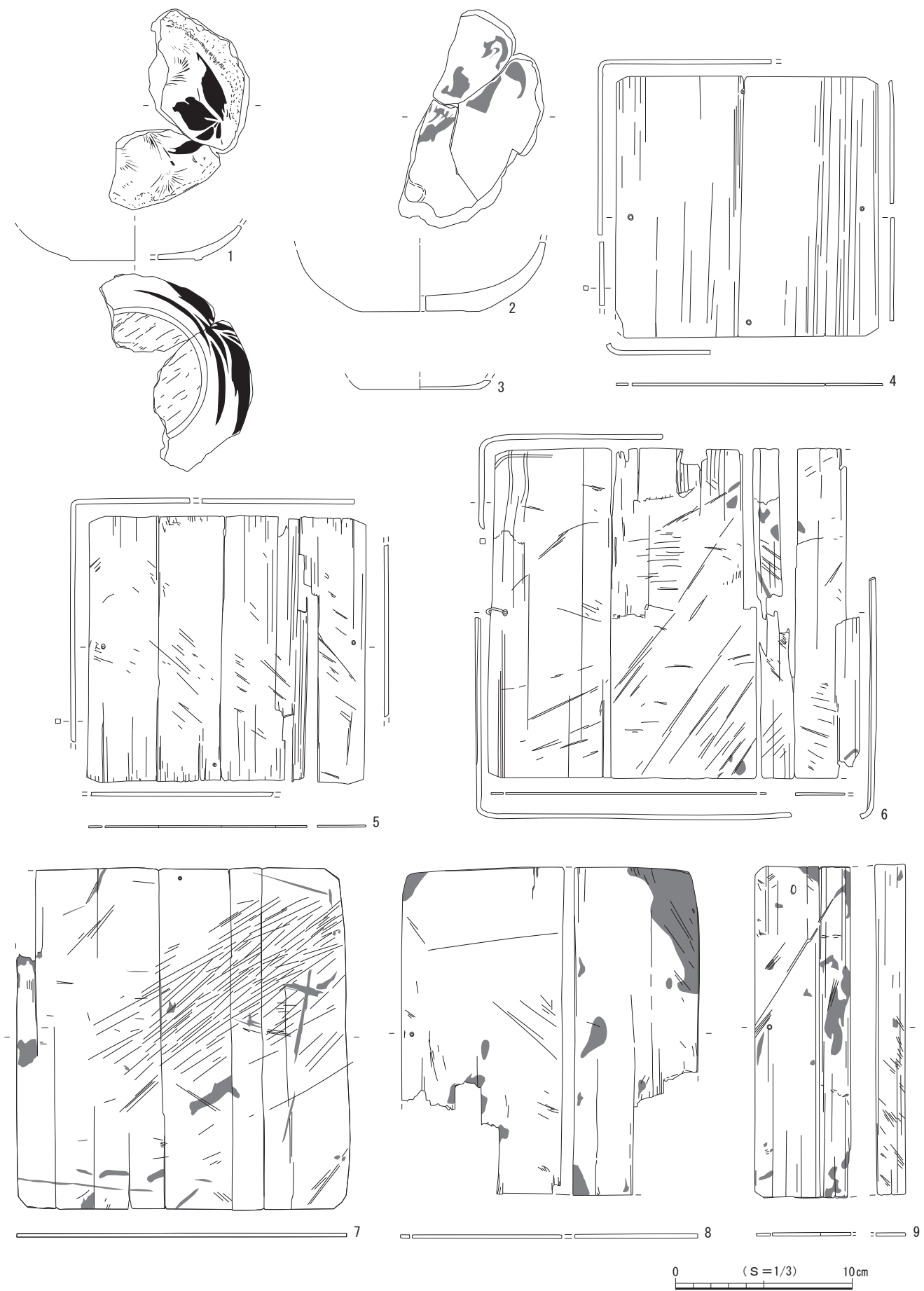


图28 第3面 池状遺構 1 出土木製品 (1)

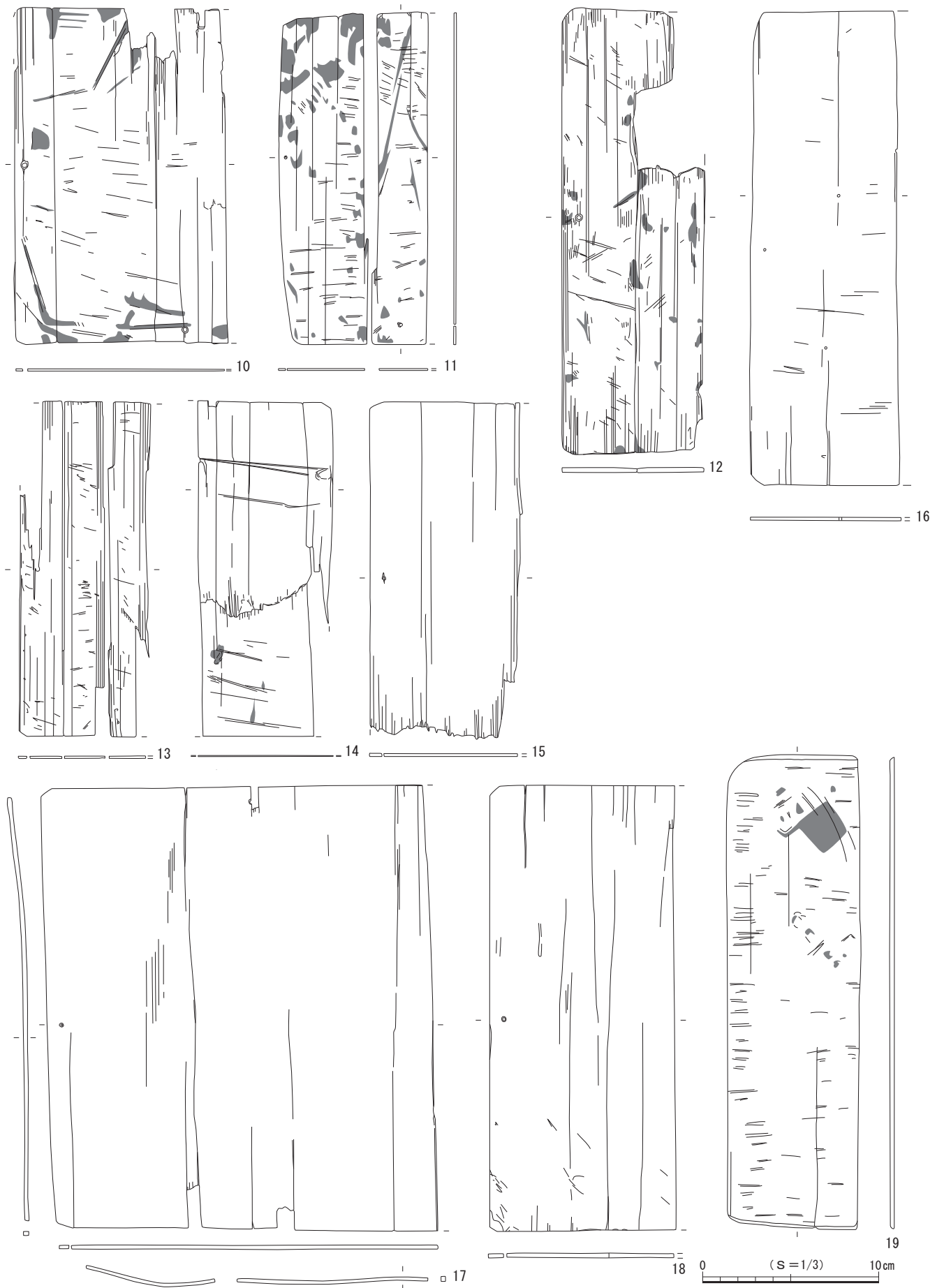


图29 第3面 池状遺構1 出土木製品(2)

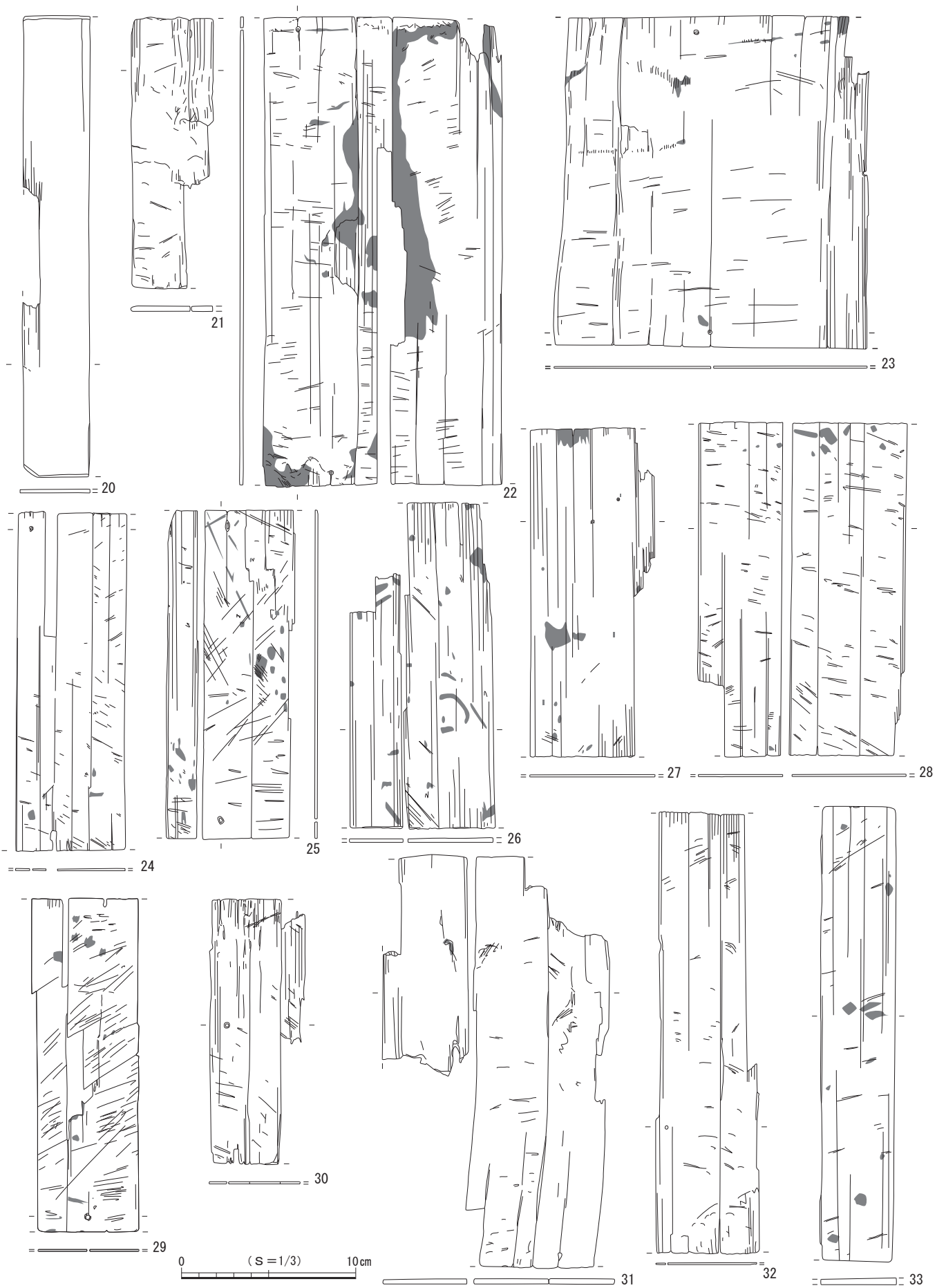
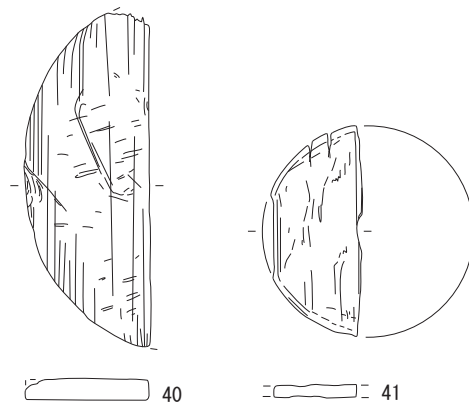
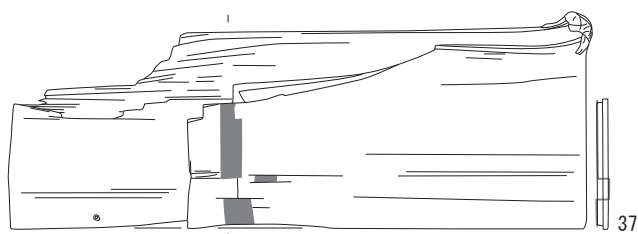
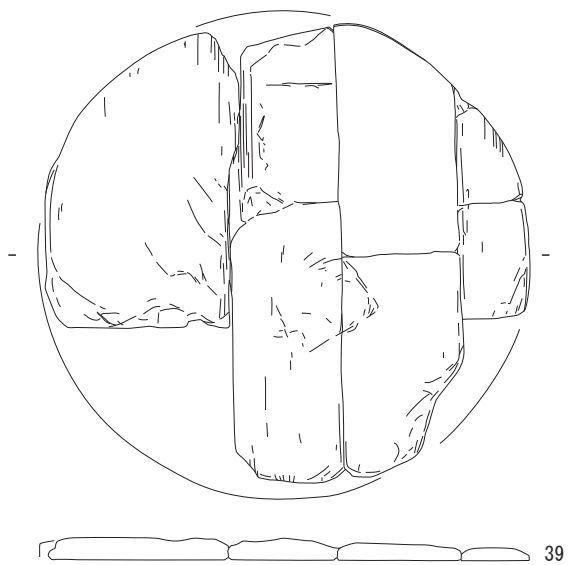
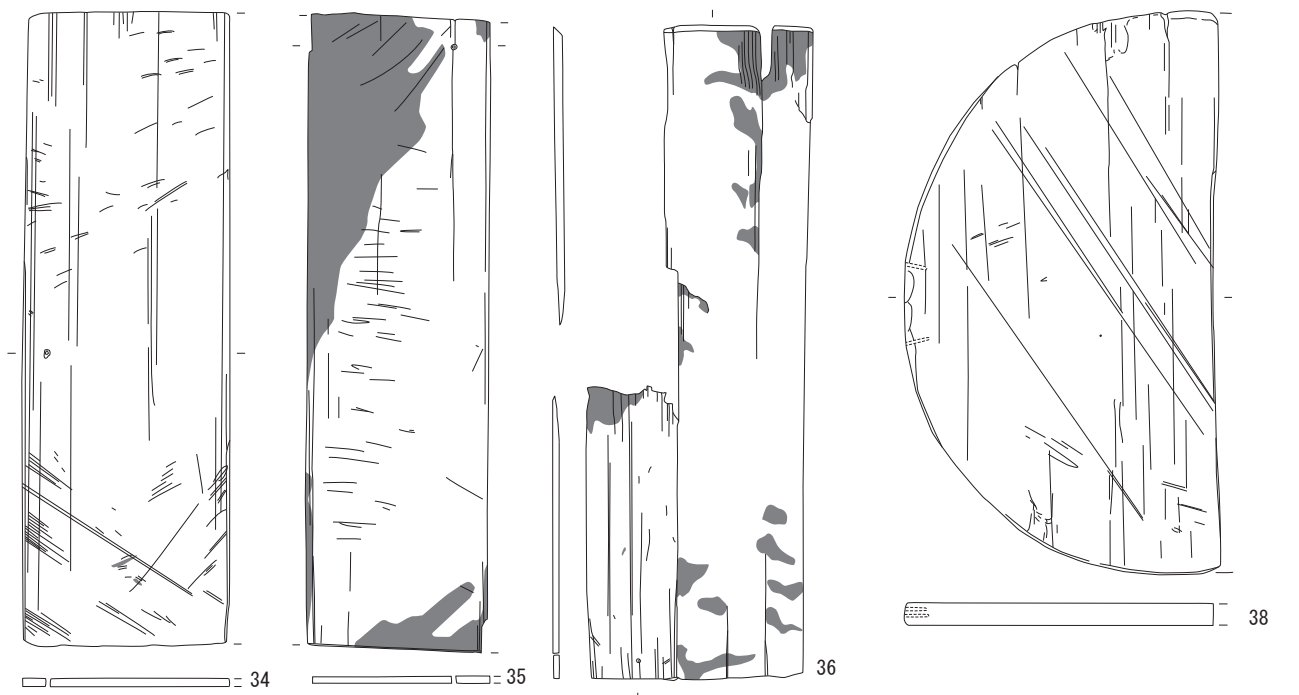


图30 第3面 池状遺構1出土木製品(3)



0 (S=1/3) 10cm

图31 第3面 池状遺構1 出土木製品(4)

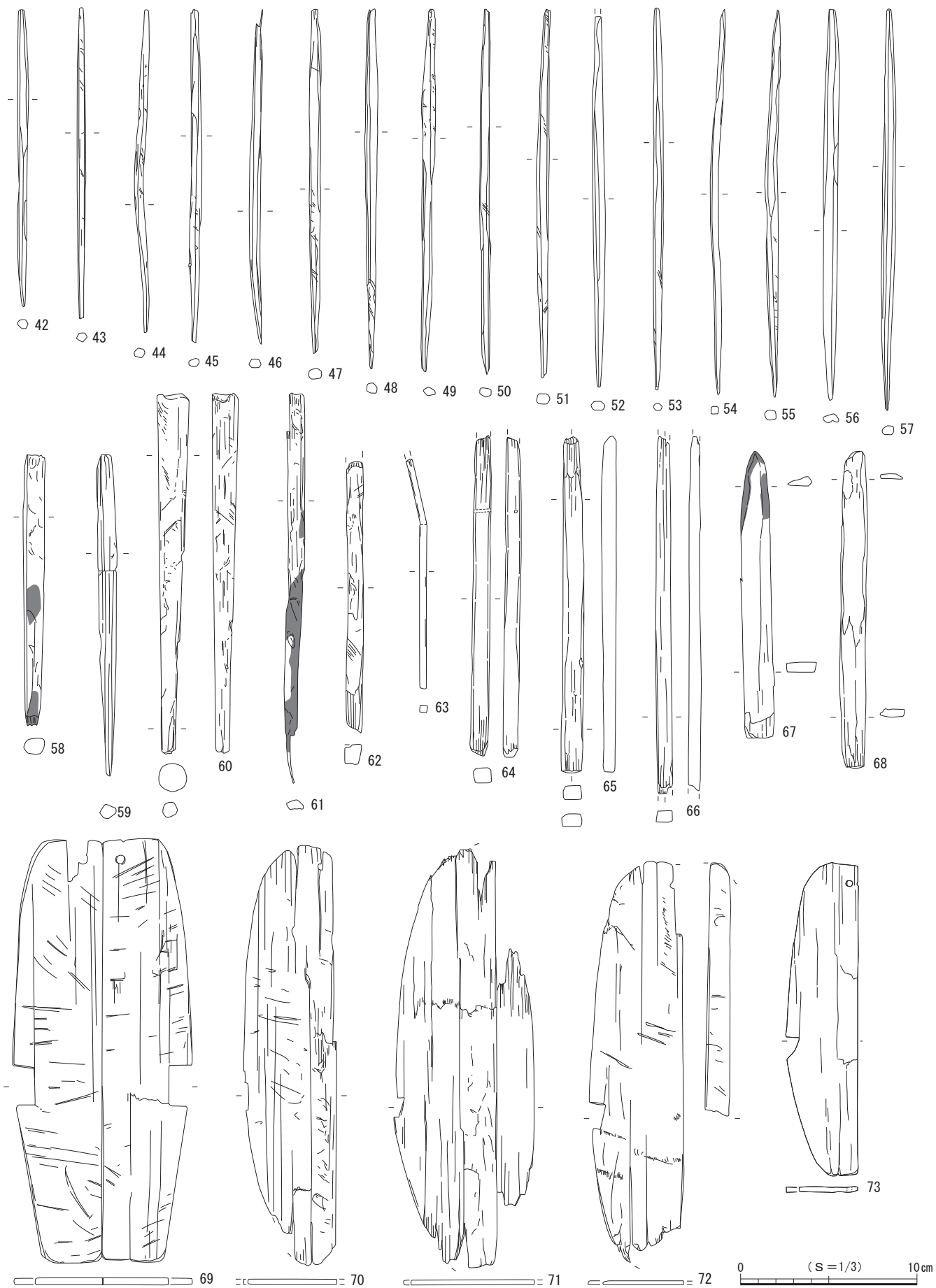


图32 第3面 池状遺構1出土木製品(5)

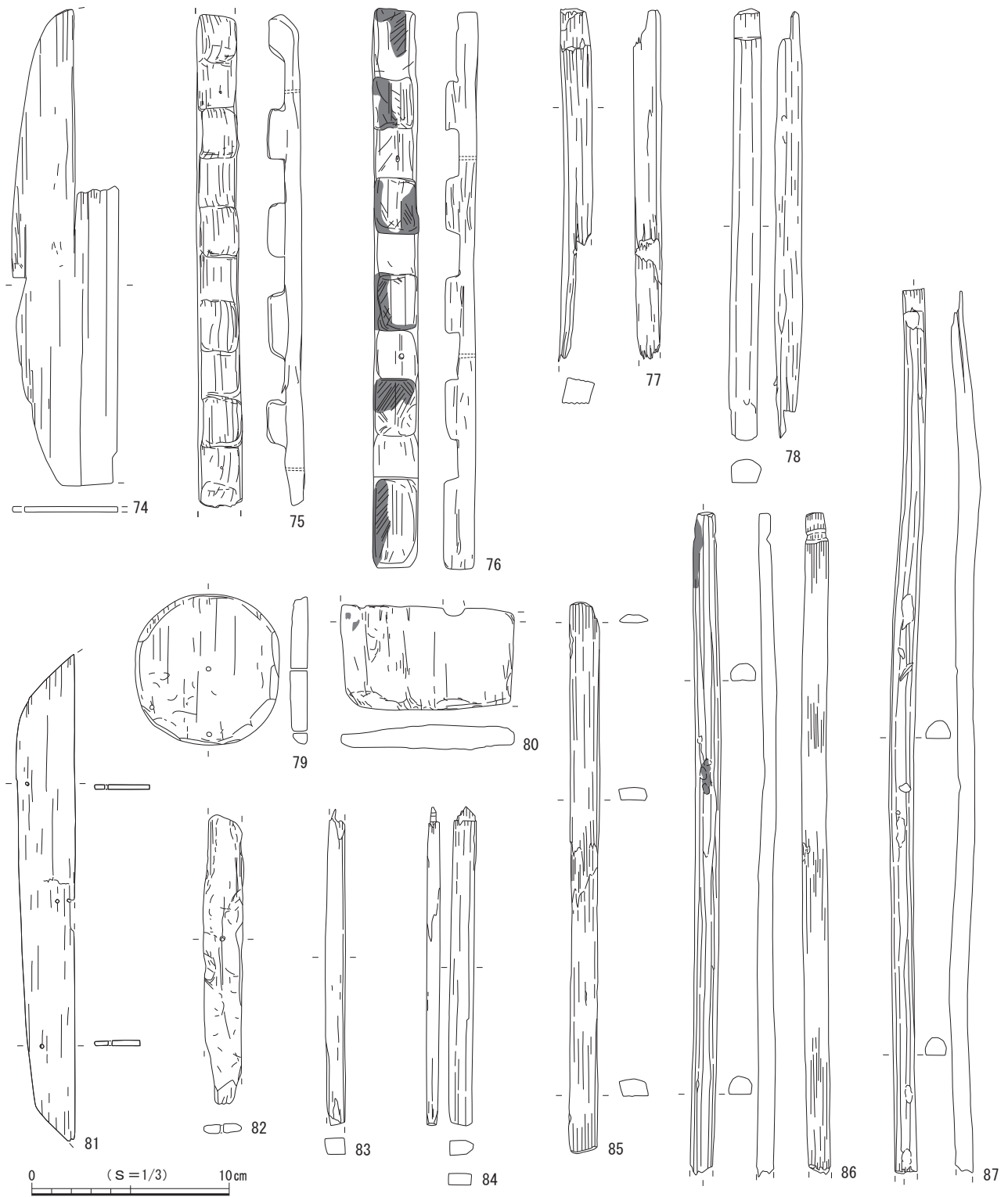


図33 第3面 池状遺構1 出土木製品(6)

木製品(図28~33)

池状遺構からは各種の木製品が多量に出土した。ここでは上下層あわせて430点出土した木製品のうち、87点を一括して図示した。

1~3は漆器である。1は輪高台の椀で、内外面黒漆地の上に赤色漆を用いて文様が手描きされており、内面には笹と葉が、外面には土坡と葉が施される。2は無高台に挽かれ、内外面は黒漆地が施された無文の椀である。3も2と同様に無高台に挽かれた黒漆地で無文の皿である。4~36は折敷であり、

このうち4～6は縁が遺存し、4・5は四辺に小孔が穿たれる。4～21は隅部が遺存し、いずれも隅丸加工が施される。37～41は曲物である。このうち37は側板部分が全周し、桜皮で綴じられた接合部が遺存する。38～41は底板で、38の側縁には小孔が2ヵ所観察される。41は径8.4cmの小形品である。42～57は箸状、58～61は串状、62～66は棒状、67・68は篋状を、それぞれ呈する木製品である。69～74は草履の芯であり、このうち69は先端部と側縁が直線的、70～73は先端部～側縁が曲線的、74は先端部が直線的、側縁が曲線的な形状を呈する。また、側縁の切り取り形状は69・70が方形、71・72が平行四辺形、73・74が三角形を呈する。75～78は建具と推定した木製品であり、このうち75・76は角材の1面に凹凸状の加工が等間隔に施された部材であり、葦戸の組子であろうか。凹部のうち2ヵ所には木釘穴とみられる小孔が貫通している。77・78は角棒状の端部に仕口加工が施された部材である。79～87は用途不明の木製品であり、このうち79は円板状を呈し、側縁には勾配を付けた面取り加工が施され、中心部と側縁付近に木釘を打ち込んだ小孔が残る。80は厚板材に円孔が穿たれる部材の破片。81は表面に4ヵ所の小孔が穿たれた薄板。82は遺存部分の中心付近に小孔が穿たれた短冊状の板材。83・84は断面方形の棒状製品で、84の端部が三角形に加工される。85は断面方形の先端部がかまぼこ状に加工された棒状製品。86・87は断面かまぼこ形の棒状製品であり、86の端部には刳り加工が施される。

(2) ピット

第3面では、1基を検出した。調査区北側に位置しており、池状遺構の護岸施設を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸44cm、短軸37cm、深さ17cmを測る。

遺物はピット103からロクロ成形のかわらけ9点が出土した。

(3) 第3面 遺構外出土遺物 (図34)

第3面では遺構外から、かわらけ、陶器、土器が出土し、このうち10点を図示した。

1～9はロクロ成形のかわらけで、このうち1は口径7.4cmを測る小形品であり、2～8は口径10.2～12.8cmの中形品、9は口径13.1cmを測る大形品である。10は土器(土師質)で、胴部(肩部)最大径17.6cmに復元される壺と推定したもので、肩部から胴部内外面は回転ナデで成形される。底部処理は回転糸切離しとみられるが残存部位が少ないため不明瞭である。

(4) 第3面 構成土出土遺物 (図35)

第3面の遺構基盤層となる構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、木製品、金属製品などが出土し、このうち23点を図示した。

1～20はロクロ成形のかわらけであり、このうち1は口径4.0cmの極小形品、2～10は口径7.2～7.9cmの小形品、11～19は口径10.6～12.8cmの中形品、20は口径14.0cmの大形品である。3・6の内外面には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。21は瀬戸産の卸皿である。22・23は折敷と類推される薄板材である。

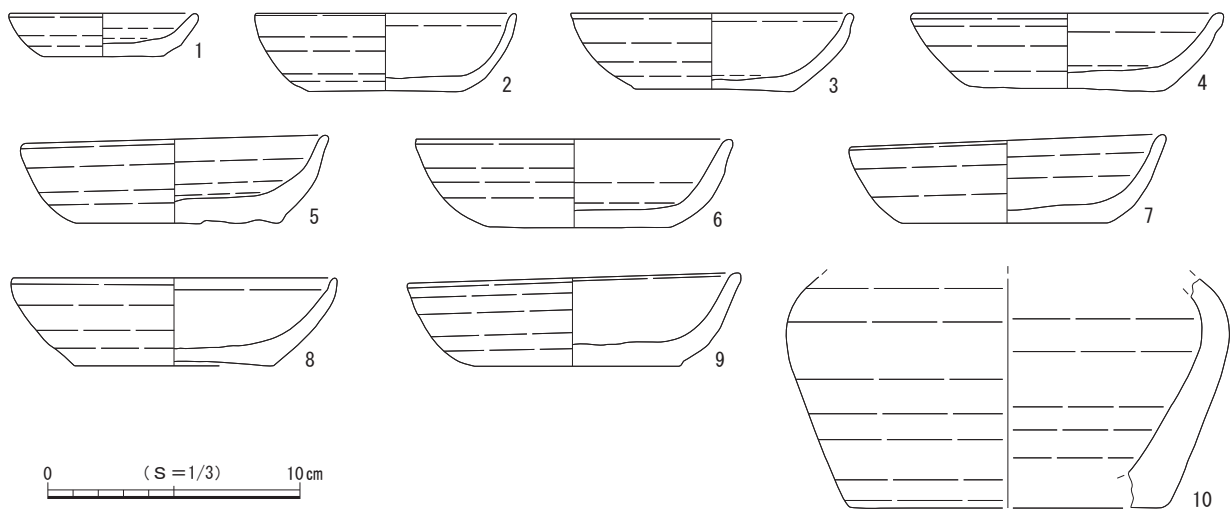


图34 第3面 遺構外出土遺物

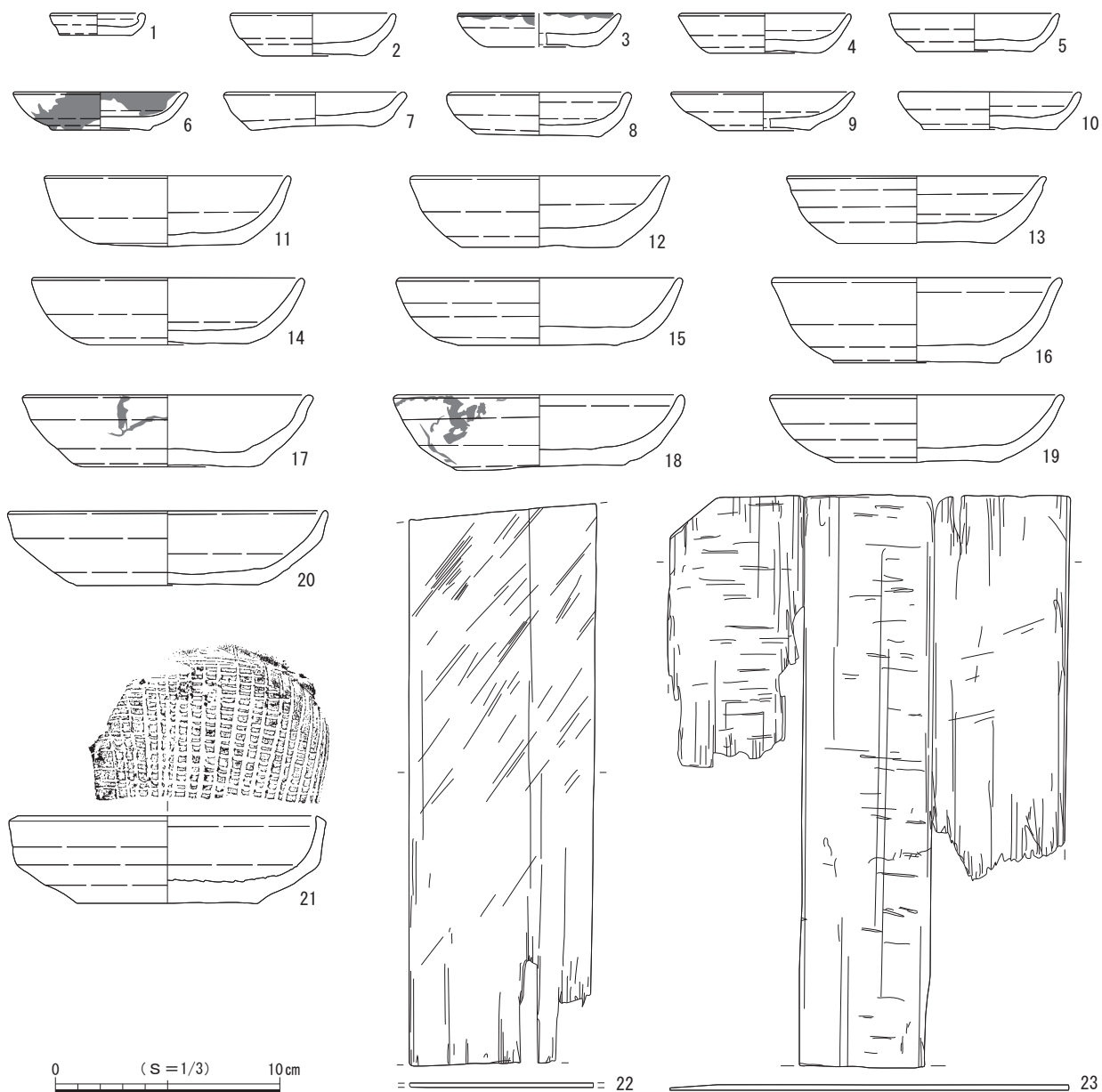


图35 第3面 構成土出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は22層上面で検出され、確認面の標高は24.5m前後を測る。22層は少量の泥岩粒と炭化物を含む暗灰色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎板建物1棟、土坑4基、ピット1基である(図36)。調査区中央部は、池状遺構1の掘り込みにより失われている。礎板建物は調査区西壁と南壁に沿って位置し、土坑は3基が調査区北側、1基が南壁際に分布し、いずれも調査区外に及んでいる。ピットは調査区南側に位置している。

遺物はかわらけ、陶器、土器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土し、これらの年代観から本面は13世紀後葉に属すると考えられる。

(1) 礎石・礎板建物

礎板建物2(図37)

調査区中央に位置していたと推定される。調査区内で捉えられた遺構は、北東-南西方向1間、北西-南東方向2間を基本とした建物配置である。現状では建物の規模は不明であるが、建物は東西および南方向に広がる可能性がある。調査区中央一帯に池状遺構1の掘り込みがあり、本址もその掘り込みによって建物の中央付近が壊されていると推定される。検出されたピットは4基で、そのすべてに礎板が据えられていた。調査区の制約から建物全体の空間構成は判然としないが、北西-南東方向を主軸方向としてみると、N-49°-Wを指す。

建物の規模は北東-南西方向の現存長4.20m、北西-南東方向の現存長4.20mを測る。北西-南東

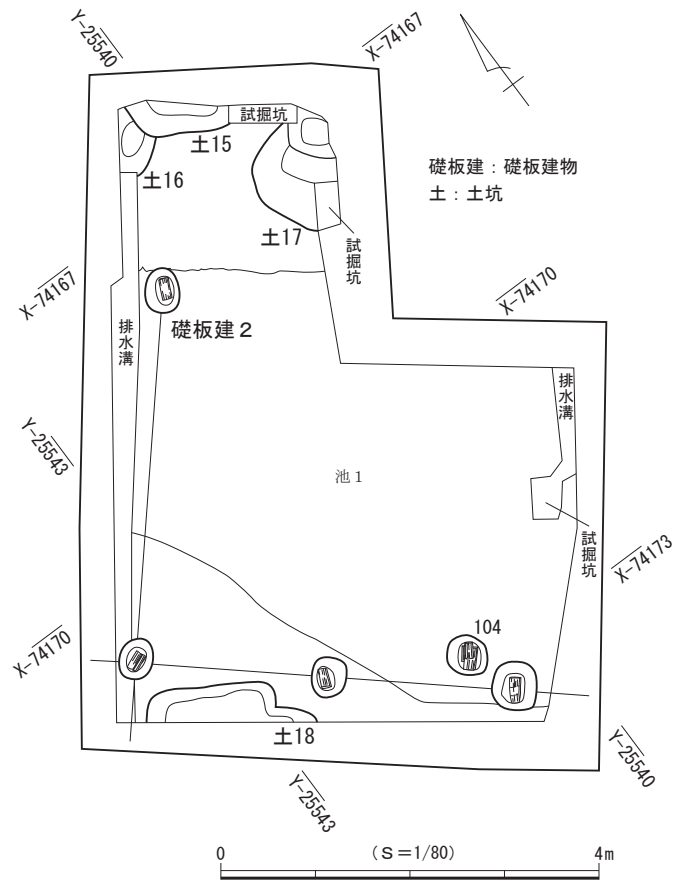


図36 第4面 遺構分布図

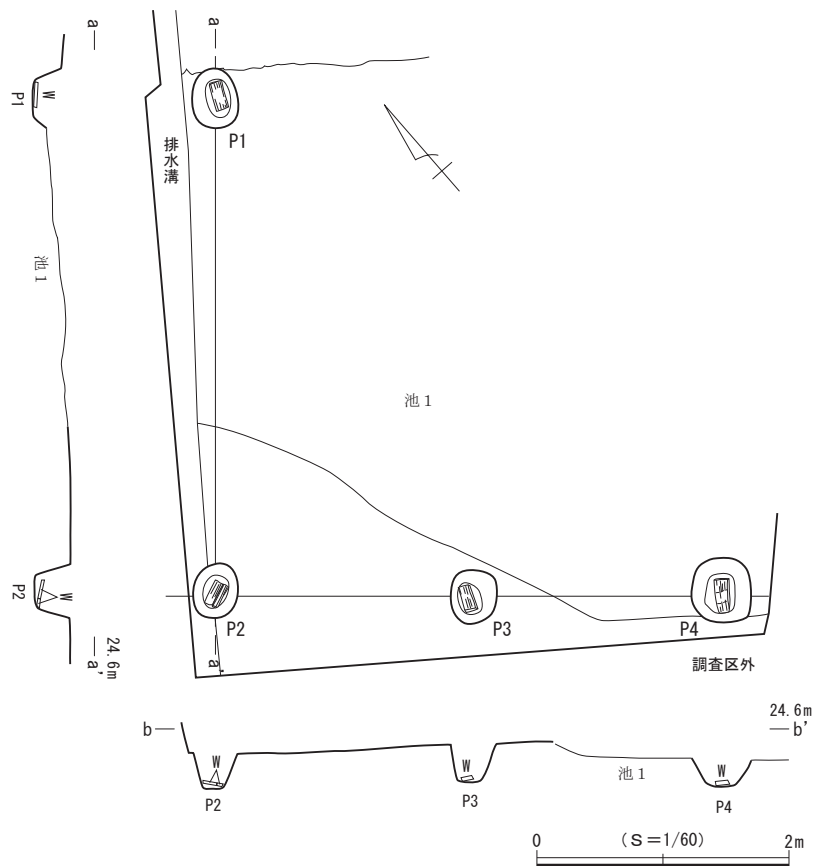


図37 第4面 礎板建物2

方向の柱間寸法は2.10m等間である。

各ピットの平面形は略円形ないし楕円形を呈し、規模は長軸42～51cm、短軸36～48cm、深さ22～40cmを測る。礎板の大きさは、長さ19～26cm、幅5～10cm、厚さ2～3cmを測り、礎板上面の標高は24.15～24.21mである。礎板はP 1・3・4から各一枚で、P 2のみ幅5cmと7cmの礎板が二枚並べられていた。遺物はP 3からロクロ成形のかわらけ1点が出土した。

(2) 土 坑

土坑15 (図39)

調査区北隅に位置する。北側が調査区外に及び、南東側の一部が試掘調査によって失われているため、全容は明らかでない。西側で土坑16と重複して北東壁を壊している。底面は凹凸をもち、東側に向かって高くなる。壁は開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。検出された範囲での規模は東西現存長1.13m、南北現存長39cm、深さ39cmで、坑底面の標高は23.94mを測る。

出土遺物 (図38)

遺物はかわらけ18点、陶器1点、瓦3点、木製品71点が出土し、このうち2点を図示した。

1は口径13.2cmに復元される大形のロクロ成形かわらけである。2は現存長9.4cmを測る平瓦であり、凸面は側縁に平行するナデで仕上げられる。

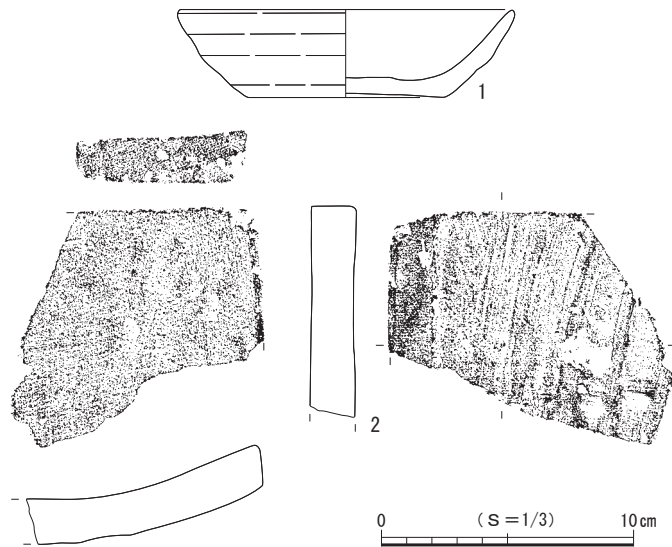


図38 第4面 土坑15出土遺物

土坑16 (図39)

調査区北隅に位置する。北・西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。北東側で土坑16と重複して北東壁が壊されている。検出された範囲では、平面形は楕円形を呈すると考えられ、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長69cm、短軸現存長43cm、深さ12cmで、坑底面の標高は24.23mを測る。

遺物は木製品1点が出土した。

土坑17 (図39)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。底面は狭く、ほぼ水平である。壁は北側の一段深いピット状の掘り込みから外側に向かって大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形と皿状を組み合わせた形態を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長1.34m、短軸現存長90cm、深さ37cmで、坑底面の標高は23.79mを測る。

遺物はかわらけ4点、木製品が3点出土した。

土坑18 (図39)

調査区南西壁際の西隅寄りに位置する。南側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検

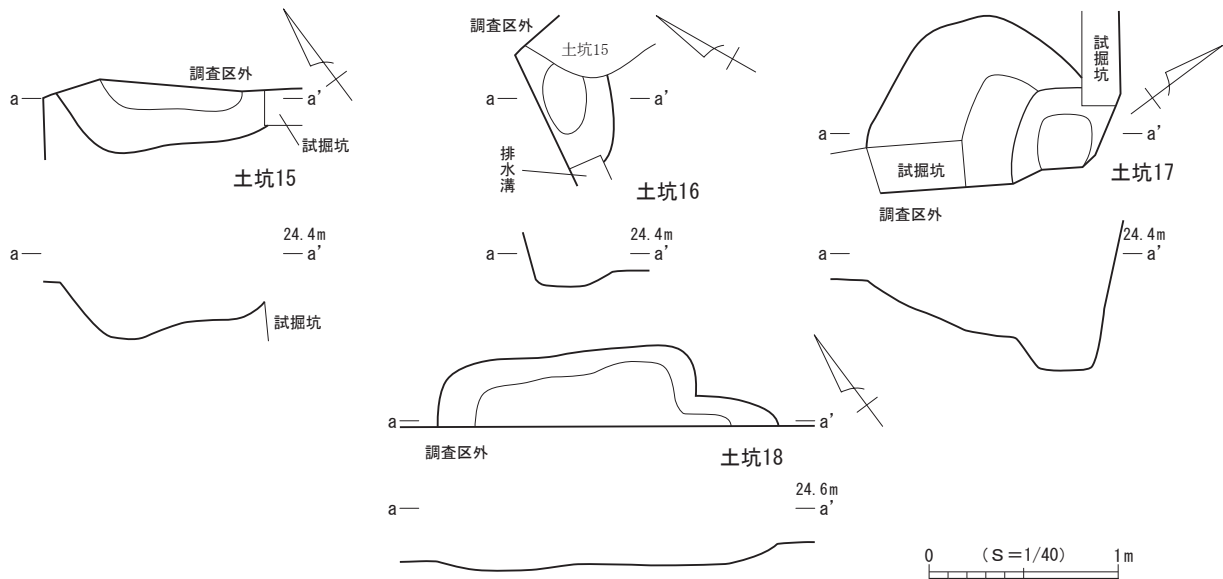


図39 第4面 土坑15～18

出された範囲では、平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、東壁側が一段外側に広がっている。底面はわずかに凹凸がみられる。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。検出された範囲での規模は北西－南東方向の現存長1.80m、北東－南西方向の現存長43cm、深さ10cmで、坑底面の標高は24.27mを測る。

遺物はかわらけ23点、陶器3点、瓦1点、木製品2点が出土した。

(3) ピット

第4面では、1基を検出した。調査区南東隅に位置し、礎板が据えられている。

以下に図示し、詳述する。

ピット104 (図40)

調査区南東隅付近に位置する。平面形は略円形を呈し、規模は長軸43cm、短軸42cm、深さ26cmで、底面に3枚の礎板が重ねて据えられていた。礎板の大きさは、長さ15～23cm、幅7～12cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は24.15mである。本址は礎石建物2のP4に近接し、礎板上面の標高がほぼ同じであることから、関連性も指摘できる。

遺物は出土しなかった。

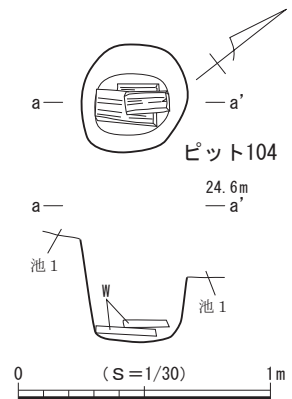


図40 第4面 ピット104

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図41)

第4面の遺構基盤層となる構成土からは、かわらけ124点、陶器6点、土器1点、瓦質土器1点、木製品26点などが出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径6.7～8.0cmを測る小形品である。

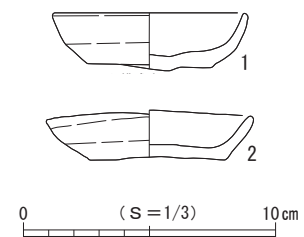


図41 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は24層上面で検出された。確認面の標高は24.4m前後を測る。24層は泥岩粒と微量の炭化物を含む黒灰色粘質土で、古代の堆積土層である。本調査地点で確認された最下面である第5面の遺構は、この層を掘り込んで構築されており、中世でも最古段階の時期と考えられる。検出した遺構は溝状遺構1条である(図42)。

遺物はかわらけ、陶器などが出土したが、これらの年代観から本面は13世紀中葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構2 (図43)

調査区中央に位置する。北東-南西方向に延びる溝で、南側は調査区外まで及び、北側は土坑17と重複して壊されている。調査区中央付近では池状遺構1の掘り込みによって上端が壊されている。直線的に掘られた溝で、壁は開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。検出した規模は、現存長約6.0m、幅77cm、深さ48cmで、主軸方位はN-41°-Eを指す。底面の標高は24.04mを測る。

出土遺物 (図44)

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、口縁部形状から5型式と類推される。

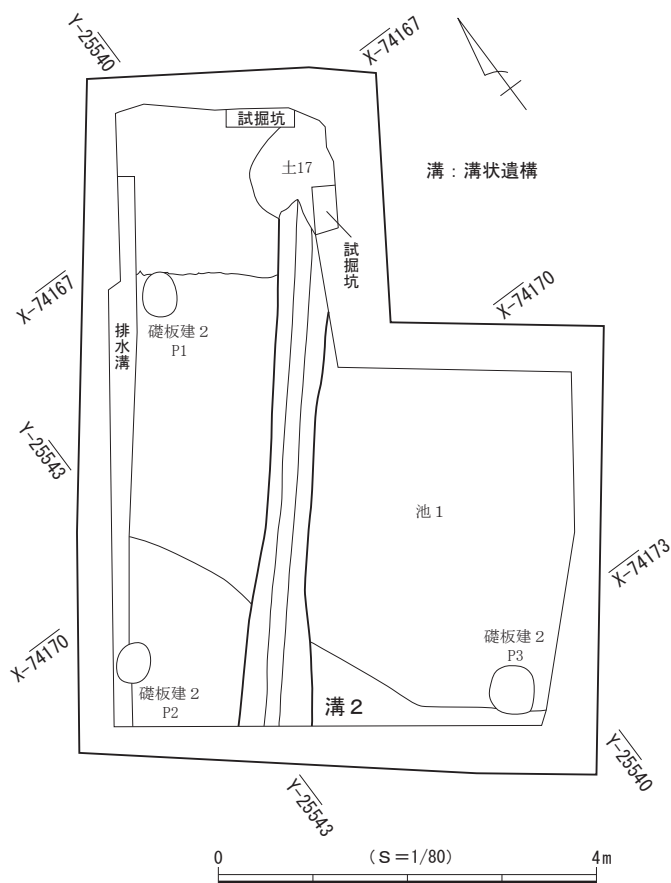


図42 第5面 遺構分布図

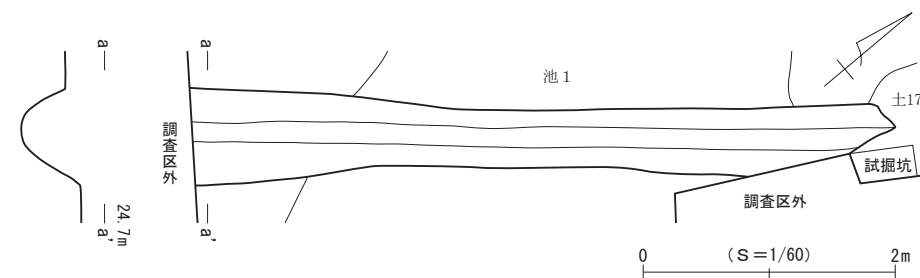


図43 第5面 溝状遺構2

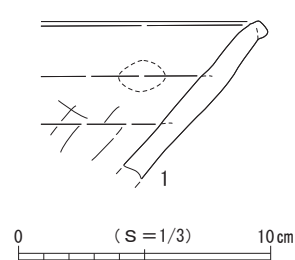


図44 第5面 溝状遺構2 出土遺物

第四章 まとめ

山ノ内上杉邸跡 (No.170) は、鎌倉市の北部に位置し、建長寺方面から大船方面に開けた開析谷から明月谷にかけての範囲が包蔵地として周知されている。今回の調査地点は遺跡範囲の南東側にあたり、正法寺跡 (No.172) にほど近い。市内でも山ノ内地区の発掘調査事例はきわめて少なく、本遺跡の発掘調査は本地点が初めてである。

今回の調査では遺構確認面を5面検出した。調査面積が約33㎡と狭小であるにもかかわらず、確認面によっては多くの遺構が密度高く分布していることが把握された。いずれも中世に属する遺構であり、その内訳は礎石・礎板建物2棟、池状遺構1ヵ所、溝状遺構2条、土坑18基、ピット104基である。出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して27箱に上った。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと (第1～5面) にまとめることとする。

〈第1面〉

第1面では、土坑11基、ピット86基を検出した。これらは調査区全体に密度高く分布しており、時期は出土遺物の様相から14世紀前葉と推定される。本面は関東管領山ノ内上杉氏の居住時期と重なるが、発見遺構は土坑とピットのみであり、具体的な関連性については明らかでない。本面で注目される出土遺物は、遺構外から出土した刀子 (図14-20) である。意図的に折り曲げられており、何らかの呪術的意味合いをもつのかも知れない。

〈第2面〉

第2面は礎石建物1棟、溝状遺構1条、土坑3基、ピット16基を検出した。このうち礎石建物1は、調査区中央から南北方向および東側に展開しており、北東-南西に2間以上、南東方向に1間以上の規模を有し、北西側については、調査区際に軸線方向を同一にする溝状遺構1が存在することから、検出した礎石列が建物の北西端部に当たるものと推定される。また、ピット16基のうち、11基が調査区中央部にまとまっており、礎石建物1の範囲と重なることから相互に関連性をもつものと考えられた。時期は出土遺物の様相から13世紀末葉～14世紀前葉に属すると考えられ、第1面と同様に本面も山ノ内上杉氏の居住時期と一部重なるが、発見した建物や溝が具体的に関連するかは明らかでない。

〈第3面〉

第3面では、苑池とみられる池状遺構が調査区のほぼ全面から検出された。遺構は北側の護岸施設、中央一帯に広がる池、西側に導水施設と考えられる土坑状の掘り込みなどで構成されており、岸から池底までの深さは65cm前後を測る。池は埋没の過程で多量のかかわりが廃棄されており、最上層は多量のかかわりと泥岩ブロックを含む暗褐色粘質土で埋め戻されていた。本面の時期は13世紀中葉～後葉と考えられる。

〈第4面〉

第4面では、柱穴4基からなる礎板建物1棟、土坑4基、礎板をもつピット1基が出土した。礎板建物は北東-南西方向1間、北西-南東方向2間を基本とした建物配置であり、柱間寸法は2.1m等間である。第3面の池状遺構によって壊されていると考えられるが、東西および南方向に広がる可能性がある。

また、土坑4基は礎板建物に隣接した北側で重複して分布しており、建物に付随した廃棄穴とも捉えられよう。

〈第5面〉

第5面では、北東-南西方向に延びる溝状遺構を1条検出した。出土遺物はかわらけと常滑産片口鉢Ⅱ類の2点のみであり資料に乏しいが、年代観は13世紀第2四半期頃に比定されることから、本面の時期を第2四半期を中心とする13世紀中葉と捉えておきたい。

以上各面についてみてきたように、今回の調査では13世紀中葉頃～14世紀中葉頃にかけての遺構・遺物を検出したが、14世紀後半以降の資料は希薄であり、山ノ内上杉氏との関連性をうかがえなかった。今後関東管領屋敷関連遺構の究明は、引き続き課題となろう。

最後に、今回の調査では、第3面を中心に多量のかかわりが出土したことが特徴としてあげられる。出土したかわらけの総破片点数は17,634点を数え、全出土遺物の99%に達し、鎌倉幕府中枢域の値に匹敵する高さであることも、遺跡の性格を考える上で注意される点と考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1991『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌』神奈川県郷土資料集成第十二輯

鎌倉市教育委員会 1997『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』山ノ内道周辺遺跡発掘調査団

手塚直樹 1997『神奈川県・鎌倉市 保寧寺跡-第2次調査-』保寧寺遺跡発掘調査団

永田史子・齋藤修佑 2018「徳泉寺跡(No.173)山ノ内字東管領屋敷168番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会

福島正史ほか 2012『山ノ内上杉邸跡発掘調査報告書-山ノ内字東管領屋敷180番1外-』株式会社新技術コンサル

馬淵和雄 2012「山ノ内上杉邸跡(No.170)の発掘調査-山ノ内字東管領屋敷179番39地点-」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

宮田 真・滝澤晶子 2010「円覚寺旧境内遺跡(No.434)山ノ内字西管領屋敷377番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26』平成21年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

森 孝子 2010「安国寺(No.174)の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑3出土遺物(図7)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	2.3	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.5)	2.0	底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
3	陶器	瀬戸 香炉?	-	-	現 3.5	外面に梅花文の押印 胎土: 白色粒 色調: 胎土-灰白色 釉-暗緑灰色	体部小片

土坑7出土遺物(図9)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.3	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	7.6	3.5	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.7	3.2	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形

土坑11出土遺物(図10)

1	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.3	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
2	陶器	備前 播鉢	-	-	6.6	内面-播目5条遺存、単位不明 胎土: 白色粒、小石粒 色調: 灰褐色	口縁部片

ピット出土遺物(図12)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.2	1.8	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ピット66	2/3
2	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(30.2)	(13.0)	12.0	胎土: 砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調: 茶褐色 備考: 内面摩耗顕著 出土遺構: ピット62	1/3

表土出土遺物(図13)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.1	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.6	2.4	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.8	2.4	口縁部油煤付着 口縁部打ち欠き+口縁部内外面煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	5.4	2.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	7.2	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.0	3.2	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
7	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 4.1	胎土: 緻密、砂粒、小石粒 色調: 胎土-黄灰色 釉-淡緑色	口縁部片
8	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.4	胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒、礫 色調: 暗赤褐色 備考: 10~11型式	口縁部片
9	土製品	円板状製品	長 4.1	短 4.0	厚 0.5~0.7	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
10	土製品	円板状製品	長 4.8	短 4.7	厚 0.7~0.9	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
11	金属 製品	釘	現長 10.3	幅 0.3	厚 0.5	鉄製釘	略完形
12	金属 製品	銭貨	直径 2.41	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-祥符通寶(北宋・1009) 書体-真書	完形

第1面 遺構外出土遺物(図14)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	3.5	1.7	底面一回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.6	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	3.7	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	1.6	底面一回転糸切+弱い板上圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	3.7	2.1	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.0	2.0	底面一回転糸切+一部ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.2)	1.9	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.0	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	3.8	3.2	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2強
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.4	1.9	底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	1.7	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(5.6)	2.7	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4

13	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	5.7	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
14	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.2	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 内外面に焼成ムラによる黒変あり	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.7	2.8	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
16	陶器	常滑 広口壺	-	-	現 4.9	胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 茶褐色 備考: 5型式	口縁部片
17	土製品	円板状製品	長 4.6	短 4.3	厚 0.6~0.8	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
18	石製品	砥石	長 9.3	短 3.6	厚 0.4~1.0	4面に使用痕跡 石材-粘板岩	3/4
19	金属製品	刀子	現長 13.5	幅 1.2~1.5	刃部厚 0.5	鉄製品 刃部から基部遺存、茎尻部欠損	3/4
20	金属製品	刀子	現長 16.0	幅 1.0~2.5	刃部厚 0.5	鉄製品 切先部欠損、刃部から基部遺存、意図的に折り曲げ	2/3
21	金属製品	釘	現長 11.2	幅 0.2~0.6	厚 0.2~0.4	鉄製釘	3/4
22	金属製品	釘	現長 5.2	幅 0.4	厚 0.6	鉄製釘	3/4

第1面 構成土出土遺物 (図15)

1	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 9.7	胎土: 砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調: 灰色 備考: 内面摩耗顕著	胴~底部片
---	----	-------------	---	---	----------	------------------------------------	-------

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内 () = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第2面 構成土出土遺物 (図20)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.0)	1.7	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(7.4)	2.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内 () = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

池状遺構1上層 出土遺物 (図23~25)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.2	3.2	1.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.4)	1.7	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2弱
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3~7.5	5.5~5.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	4/5
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.5	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5強
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(4.4)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.7	5.2~5.4	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.6	5.8	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	2.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	6.0	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3弱
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4強
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.5	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.1	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	3/4強
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.8)	2.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.8	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.1)	(7.8)	3.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
21	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.0)	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

22	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
23	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	7.5	3.2	底面一回転ヘラケズリ+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
24	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	7.8	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
25	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(8.1)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
26	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.4	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
27	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(8.6)	3.0	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3強
28	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	7.0	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
29	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	7.3	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3強
30	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.1	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
31	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.1~8.2	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
32	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.8	3.5	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形
33	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.1	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2弱
34	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.4)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
35	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.4)	3.5	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3強
36	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.5	3.6	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.6)	3.4	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3強
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
39	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4~12.6	8.2~8.5	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
40	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5~12.9	8.5	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 備考: 内面焼きムラあり	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7~12.8	7.3	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
42	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.3~8.5	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 備考: 内面焼きムラあり	完形
43	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.7	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
44	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4強
45	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.7	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 備考: 口縁部歪み・内面焼ムラあり	2/3
46	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.2)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、小礫、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 備考: 内面焼きムラあり	1/5
47	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.0	7.8	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	略完形
48	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2強
49	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.5~13.0	8.0	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
50	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.5~13.0	8.2~8.5	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
51	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.6~13.0	8.7~9.3	3.2	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
52	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.0	8.1	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 口縁部直下に円孔1ヵ所焼成後に外面から穿つ	略完形
53	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.1	7.5	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
54	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.9	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	4/5
55	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.2	底面一回転ヘラケズリ+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
56	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3弱
57	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	7.8~8.1	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3強
58	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.2	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2強
59	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.1	8.0~8.2	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
60	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.4)	3.7	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/3
61	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.5	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	4/5
62	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.7	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰褐色 焼成: 良好	1/2

63	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.9)	3.0	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4強
64	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	9.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3強
65	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.2	8.5~8.7	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
66	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.9	3.5	口縁部油煤付着 底面-回転ヘラケズリ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
67	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.8)	3.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3弱
68	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3~13.6	8.7~9.2	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
69	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.4)	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
70	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.8)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 備考: 内面焼きムラあり	1/3
71	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.3	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
72	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	7.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
73	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	8.2	3.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 雲母、赤色粒、細礫、良土 色調: 橙白色 焼成: 良好	3/4
74	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(7.8)	3.3	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
75	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.4	3.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
76	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	8.0	3.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
77	土器	ロクロ かわらけ・特大	(18.6)	(10.6)	5.8	内外面: 破断面に煤薄く付着 底面-回転糸切 内底-回転ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
78	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.8	肩部に正格子押印 胎土: 粗 白色粒、細礫、小礫、やや砂質 色調: 断面-黒色・黄灰色、内面-にぶい褐色、外面-にぶい赤褐色	胴部上半片
79	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.4	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫、小礫、やや砂質 色調: 内面-にぶい赤褐色、外面-黄褐~暗褐色	胴部下位~ 底部
80	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	高台径 (13.0)	現 6.7	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫、やや砂質 色調: 灰色 備考: 内面摩擦顕著 5型	体部~ 高台部片
81	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 3.5	胎土: 白色粒、小礫、やや砂質 色調: 外面-暗褐色、内面-褐色 備考: 6a型式	口縁部片
82	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.0	胎土: 白色粒、細礫 色調: 暗褐色 備考: 6b型式	口縁部片
83	瓦	平瓦	現長 14.6	現幅 12.3	厚 1.3~1.7	凸面-斜格子叩き+縦線平行のナデ 凹面-布目+糸切+狭端縁ヘラ調整 狭端面・側面ケズリ調整 胎土: 雲母、白色粒、小石粒、小礫 色調: 黒灰色	1/4

池状遺構 1下層出土遺物 (図26・27)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.9)	1.7	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
7	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.5	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.6	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	4/5
9	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	2.0	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.6)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.4)	1.8	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
13	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	5.8	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	完形
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	-	現 3.6	底面-回転ナデ+指頭調整 内面-回転ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 灰白色 焼成: 良好	1/4弱
15	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	7.1	2.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
16	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	8.0	3.1	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・中	11.5	6.5	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
18	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	7.0	3.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
19	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	6.6	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

20	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	7.7	3.1	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調：黄橙色 焼成：良好	略完形
21	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.0)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
22	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
23	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(8.4)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
24	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.0	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、白色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
25	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.8	3.4	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
26	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.8)	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
27	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.8	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕+指頭調整 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
28	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.5	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
29	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.2)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
30	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
31	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.6	3.5	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
32	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.8	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
33	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.5	3.7	底面一回転糸切+指頭調整 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
34	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
35	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.9	3.4	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	2/3
36	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.2	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.8)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.8)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
39	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.6	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
40	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.6	3.6	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
41	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.6	3.3	底面一回転糸切+ナデ 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
42	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.6)	3.5	底面一回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
43	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.3	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
44	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.4	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
45	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.6	3.5	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
46	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	7.9	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
47	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.3	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	2/3
48	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.4	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
49	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.9	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
50	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(9.0)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
51	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(8.0)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
52	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.4)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
53	土器	ロクロ かわらけ・大	13.8	8.8	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
54	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(7.6)	3.8	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
55	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(9.4)	3.2	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
56	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(10.4)	3.5	底面一回転ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
57	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.2)	(9.2)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/6
58	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 3.5	胎土：微砂、白色粒、黒色粒 色調：灰色	口縁部小片
59	石製品	滑石製石鍋	(21.1)	-	現 4.5	外面煤付着 石質-滑石 色調：黒褐色	口縁部1/4
60	金属 製品	釘	現長 5.8	幅 0.4	厚 0.5	鉄製釘	1/4

池状遺構 1 出土木製品 (図28~33)

1	漆器	椀	-	8.0	現 1.8	内外面黒色漆髹漆 内面：赤色系漆による漆絵 笹文・葉文 外面：赤色系漆による漆絵 土坡・葉文	内面：赤色系漆による漆絵 笹文・葉文 外面：赤色系漆による漆絵 土坡・葉文	高台形：輪高台	1/5	
2	漆器	椀	-	(7.0)	現 3.9	内外面黒色漆髹漆	内外面無文	高台形：無高台	1/5	
3	漆器	皿	-	(7.0)	現 0.5	内面：赤色漆髹漆	外面：黒色漆髹漆	内外面無文 高台形：無高台	1/5	
4	木製品	折敷	長 14.7	幅 14.9	厚 0.1	縁の四方に小孔あり	角部隅丸に加工	状態が悪いが縁がほぼ遺存	略完形	
5	木製品	折敷	長 14.9	幅 15.6	厚 0.1	縁の四方に小孔あり	角部隅丸に加工	状態が悪いが縁がほぼ遺存 面に刃物痕が残る	略完形	
6	木製品	折敷	長 18.7	現幅 20.7	厚 0.1	不規則に縁に小孔あり	縁部遺存	小孔に桜皮が依存しており、縁と折敷を結んだもの？	略完形	
7	木製品	折敷	長 19.2	幅 18.7	厚 0.2	縁に小孔あり	一部桜皮が遺存	面に細かい刃物痕 角は隅丸に加工	略完形	
8	木製品	折敷	長 18.5	現幅 16.1	厚 0.2	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
9	木製品	折敷	長 18.8	現幅 12.1	厚 0.2	角部隅丸に加工	縁に小孔あり		不明	
10	木製品	折敷	長 19.0	現幅 11.8	厚 0.1	角部隅丸に加工	縁の2カ所小孔あり			
11	木製品	折敷	長 18.7	現幅 8.3	厚 0.1	角部隅丸に加工	縁に小孔あり		不明	
12	木製品	折敷	長 25.4	現幅 8.2	厚 0.3	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
13	木製品	折敷	長 19.0	現幅 7.3	厚 0.1	角部隅丸に加工			不明	
14	木製品	折敷	長 19.0	現幅 7.6	厚 0.1	角部隅丸に加工			不明	
15	木製品	折敷	現長 19.0	現幅 8.5	厚 0.5	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
16	木製品	折敷	長 27.0	現幅 8.4	厚 0.2	角部隅丸に加工	不規則な位置に4カ所小孔あり		不明	
17	木製品	折敷	長 25.0	現幅 21.8	厚 0.2	小孔あり	角部隅丸に加工	2カ所縁が残る(縁幅0.2cm)	不明	
18	木製品	折敷	長 25.4	現幅 10.5	厚 0.2	小孔あり	角部隅丸に加工		不明	
19	木製品	折敷	長 27.0	現幅 7.7	厚 2.5	角部隅丸に加工			不明	
20	木製品	折敷	長 26.5	現幅 4.0	厚 0.2	縁を斜めに加工	角部隅丸に加工		不明	
21	木製品	折敷	長 15.5	現幅 4.7	厚 0.3	角部隅丸に加工			不明	
22	木製品	折敷	長 26.9	現幅 13.6	厚 0.2	縁に小孔あり	面に細かい刃物痕	部分的に焼痕	不明	
23	木製品	折敷	長 18.9	現幅 18.0	厚 0.1	3カ所に小孔あり			略完形	
24	木製品	折敷	長 19.4	現幅 6.2	厚 0.1	縁に小孔あり	面に細かい刃物痕	部分的に焼痕	不明	
25	木製品	折敷	長 18.8	現幅 6.8	厚 0.2	面に細かい刃物痕			不明	
26	木製品	折敷	長 18.7	現幅 8.2	厚 0.2				不明	
27	木製品	折敷	長 18.9	現幅 7.2	厚 0.1				不明	
28	木製品	折敷	長 19.0	現幅 11.3	厚 0.1				不明	
29	木製品	折敷	長 19.1	現幅 5.8	厚 0.1	縁に小孔あり	面に刃物痕	上下端部に孔あり	底板	
30	木製品	折敷	長 15.2	現幅 5.4	厚 0.1	小孔あり			不明	
31	木製品	折敷	長 23.5	現幅 14.7	厚 0.3	縁に小孔あり			不明	
32	木製品	折敷	長 25.3	現幅 5.8	厚 0.1				不明	
33	木製品	折敷	長 26.0	現幅 4.3	厚 0.4	面に細かい刃物痕			不明	
34	木製品	折敷	長 25.2	現幅 8.2	厚 0.3				不明	
35	木製品	折敷	長 25.0	幅 7.3	厚 0.3	小孔あり			不明	
36	木製品	折敷	長 26.0	現幅 8.7	厚 0.4	小孔あり	縁を斜めに加工？		不明	
37	木製品	曲物	径 22.8		現厚 8.6	曲物側板	側板厚0.2cm	側板の合わせは桜皮を用いる	曲物側板と接合部に小孔・木釘痕？	略完形
38	木製品	曲物	径 22.4		厚 0.9	側面2カ所小孔あり	曲げ物底板		2/3	
39	木製品	曲物	径 19.5		厚 0.5~0.9	曲物底板	遺存状態が悪い		不明	
40	木製品	曲物	径 13.0	現幅 5.0	厚 0.9	円板状	曲げ物底板？		1/2	
41	木製品	曲物	径 8.4	-	厚 0.5	曲物底板？			1/2	

42	木製品	箸状	長 16.8	幅 0.6	厚 0.5	断面円形	完形
43	木製品	箸状	長 17.6	幅 0.5	厚 0.5	断面円形	完形
44	木製品	箸状	長 18.2	幅 0.6	厚 0.5	断面円形	完形
45	木製品	箸状	長 18.9	幅 0.6	厚 0.5	断面不正円形	完形
46	木製品	箸状	長 19.0	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	完形
47	木製品	箸状	長 19.6	幅 1.6	厚 0.6	断面円形	完形
48	木製品	箸状	長 20.5	幅 0.7	厚 0.6	断面円形	完形
49	木製品	箸状	長 20.6	幅 0.7	厚 0.5	断面不整形	完形
50	木製品	箸状	長 20.8	幅 0.6	厚 0.5	断面楕円形	完形
51	木製品	箸状	長 20.9	幅 0.8	厚 0.6	断面楕円形	完形
52	木製品	箸状	現長 21.1	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	略完形
53	木製品	箸状	長 21.6	幅 0.5	厚 0.4	断面楕円形	完形
54	木製品	箸状	長 21.9	幅 0.4	厚 0.4	断面方形	完形
55	木製品	箸状	長 22.1	幅 0.7	厚 0.5	断面不正円形	完形
56	木製品	箸状	長 22.2	幅 0.9	厚 0.5	断面扁平	完形
57	木製品	箸状	長 22.8	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	完形
58	木製品	串状	現長 15.3	幅 1.2	厚 0.9	断面円形	不明
59	木製品	串状	長 18.4	幅 0.8	厚 0.8	断面不整形	略完形
60	木製品	串状	長 20.2	最大径 1.8	-	側面に等間隔で刃物痕あり 断面正円形	略完形
61	木製品	串状	現長 22.2	幅 1.0	厚 0.5	断面不整形 側面焼痕	不明
62	木製品	棒状	現長 15.5	幅 1.9	厚 1.1	断面方形	不明
63	木製品	棒状	現長 13.0	幅 0.4	厚 0.4	断面方形	不明
64	木製品	棒状	現長 18.1	幅 1.0	厚 0.9	断面方形 木釘痕あり	不明
65	木製品	棒状	現長 19.0	幅 1.2	厚 0.8	断面方形	不明
66	木製品	棒状	現長 20.2	幅 0.9	厚 0.6	断面方形	不明
67	木製品	筥状	長 16.3	幅 1.7	厚 0.5	端部焼痕 断面方形	完形
68	木製品	筥状	長 17.9	幅 1.5	厚 0.5	断面方形	完形
69	木製品	草履芯	長 24.0	幅 10.2	厚 0.5	先端部：直線的・合わせ部が最先端となる 側縁部：切り取り部が頂点となる山形を呈する 切り取り部：方形 先端部：小孔あり	略完形
70	木製品	草履芯	現長 23.8	現幅 5.3	厚 0.3	先端部：曲線的 側縁部：曲線的 切込み部：方形 端部に小孔あり 遺存状態が悪く詳細不明	1/2
71	木製品	草履芯	現長 24.9	現幅 8.0	厚 0.3	先端部：側縁部にかけて丸みを帯びる・合わせ部が最先端となる 側縁部：曲線的 切り取り部：平行四辺形	略完形
72	木製品	草履芯	現長 22.8	現幅 5.2	厚 0.2	先端部：側縁部にかけて丸みを帯びる・合わせの部が最先端となる 側縁部：曲線的 切込み部：平行四辺形	3/4
73	木製品	草履芯	現長 17.8	現幅 4.0	厚 0.3	側縁部：合わせの部から側縁部にかけて先端部全体が丸みを帯びる・合わせ部は最先端よりも切り込まれる・小孔あり 側縁部：曲線的 切込み部：三角形	1/2
74	木製品	草履芯	現長 24.2	現幅 5.4	厚 0.3	先端部：直線的・合わせ部が最先端となる 側縁部：曲線的 切り取り部：三角形	1/2
75	木製品	建具	現長 25.0	幅 2.0	厚 1.7~0.9	薮戸組子？ 2ヵ所に小孔あり・木釘痕？	不明
76	木製品	建具	長 28.5	幅 2.2	厚 1.6~0.7	薮戸組子？ 2ヵ所に小孔あり・木釘痕？	不明
77	木製品	建具	現長 17.8	幅 1.3	厚 1.4	端部に仕口が残る 断面方形	不明
78	木製品	建具	長 21.8	幅 1.4	厚 1.3	両端部に仕口が残る 断面方形	不明
79	木製品	用途不明	長 7.6	幅 7.3	厚 0.8	中心部と側縁近くに2ヵ所小孔あり・木釘が遺存していた 断面：扁平なかまぼこ形 側縁部面取り加工 燭台の台座？	完形
80	木製品	用途不明	現長 5.5	現幅 8.8	厚 1.2	孔痕あり	不明
81	木製品	用途不明	現長 24.6	現幅 3.0	厚 0.3	不規則な位置に4ヵ所の小孔	不明
82	木製品	用途不明	現長 13.7	幅 2.0	厚 0.5	小孔あり 建具？	不明

83	木製品	用途不明	現長 16.0	幅 1.0	厚 0.8	断面方形	不明
84	木製品	用途不明	現長 16.1	幅 1.2	厚 0.7	端部が三角形に残存 断面方形	不明
85	木製品	用途不明	現長 20.0	幅 1.5	厚 0.9	断面方形 端部断面かまぼこ形	不明
86	木製品	用途不明	現長 33.5	幅 1.3	厚 0.9	断面かまぼこ形 端部削りが入る	不明
87	木製品	用途不明	現長 44.9	幅 1.3	厚 1.0	断面かまぼこ形 調度具部材?	不明

第3面 遺構外出土遺物 (図34)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.8	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.2	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.3	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.6	3.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	9/10
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.2	3.5	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	7.0	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	9/10
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.2	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
8	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	8.2	3.7	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	9/10
10	土器	壺?	-	(12.6)	現 9.1	底面-回転糸切? 口縁部~胴部内外面回転ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調: 黄橙色	胴~底部片

第3面 構成土出土遺物 (図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.0	3.3	1.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.8)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3弱
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.2)	1.5	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	5.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.2)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	1/3強
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(4.3)	1.7	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	3/4強
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.5	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	5/6
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(4.1)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.0)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	6.4	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(7.0)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	(7.1)	3.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.2)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3強
15	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.5)	(7.2)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3強
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.4)	3.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3強
17	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.5)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
18	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.5	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.2	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(8.1)	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 雲母、白色粒、赤色粒、良土 色調: 白橙色 焼成: 良好 備考: 内外面白化粧?	2/3強
21	陶器	瀬戸 銅皿	(13.3)	(8.1)	3.9	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫 色調: 胎土-灰黄~黄褐色 釉-灰黄~黄褐色 釉薬漬け掛けの痕跡あり、二次被熱のため不鮮明 備考: 古瀬戸中期I段階	1/3
22	木製品	折敷	現長 24.8	現幅 8.3	厚 0.2	面に細かい刃物痕	不明
23	木製品	折敷	現長 19.1	現幅 5.8	厚 0.1	角部隅丸に加工	不明

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑15出土遺物 (図38)							
1	土器	ロクロかわらけ・大	(13.2)	(7.8)	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2弱
2	瓦	平瓦	現長 9.4	現幅 10.0	厚 1.5~2.0	凸面-側縁平行のナデ 凹面-布目+糸切+側縁平行ナデ 狭端面・側面-ケズリ調整 胎土:雲母、白色粒、小礫 色調:黒灰色	1/6

第4面 構成土出土遺物 (図41)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.7~8.0	5.3~5.7	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.6~7.8	5.0	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形

表6 第5面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構 2 出土遺物 (図44)							
1	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現 6.3	胎土:微砂、白色粒、赤色粒、砂質 色調:内面-黄緑灰色、外面-暗褐色 備考:5型式?	口縁部小片

表7 出土動物遺体一覧表 (図版14)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
表土		イルカ類	肋骨片				
表土		イルカ類	尾椎			1	
表土		ウマ	P ⁴	右		3	
構成土	第1面	イルカ類	椎骨片				
池状遺構1上層	第3面	魚類	鱗棘片				
池状遺構1上層	第3面	イワシ類	椎骨			2個	
池状遺構1上層	第3面	タイ類	歯				
池状遺構1下層	第3面	鳥類					破片
池状遺構1下層	第3面	ニホンジカ	肋骨片				
構成土	第3面	魚類					3個 破片
構成土	第3面	魚類					11個 細片
構成土	第3面	タイ類	犬歯状歯				2個
構成土	第3面	タイ類	白歯状犬歯				2個
構成土	第3面	鳥類	椎骨片				2個 焼骨
構成土	第3面	鳥類					5個 破片
構成土	第3面	鳥類					5個 細片
構成土	第3面	イルカ類	頭骨片				
土坑15	第4面	ニホンジカ	大腿骨遠位端	右		2	

表8 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<61>	<30>	21	ビット22	第1面	35	32	13	ビット54	第1面	20	20	12
土坑2	第1面	71	61	21	ビット23	第1面	27	27	24	ビット55	第1面	21	18	10
土坑3	第1面	113	94	20	ビット24	第1面	58	40	9	ビット56	第1面	45	32	19
土坑4	第1面	63	56	23	ビット25	第1面	53	49	9	ビット57	第1面	31	26	19
土坑5	第1面	65	60	21	ビット26	第1面	51	50	12	ビット58	第1面	32	28	22
土坑6	第1面	113	82	14	ビット27	第1面	31	28	18	ビット59	第1面	<29>	26	13
土坑7	第1面	70	<65>	14	ビット28	第1面	39	38	14	ビット60	第1面	28	25	18
土坑8	第1面	62	53	26	ビット29	第1面	41	-	14	ビット61	第1面	38	<25>	15
土坑9	第1面	65	60	24	ビット30	第1面	35	<30>	15	ビット62	第1面	33	32	18
土坑10	第1面	171	<114>	16	ビット31	第1面	40	<30>	12	ビット63	第1面	35	31	31
土坑11	第1面	80	<66>	15	ビット32	第1面	26	25	-	ビット64	第1面	53	46	28
ビット1	第1面	<36>	32	-	ビット33	第1面	31	28	18	ビット65	第1面	<36>	26	9
ビット2	第1面	<53>	<24>	31	ビット34	第1面	48	29	31	ビット66	第1面	55	51	28
ビット3	第1面	48	<44>	16	ビット35	第1面	49	45	16	ビット67	第1面	45	<38>	18
ビット4	第1面	45	<30>	22	ビット36	第1面	33	<26>	11	ビット68	第1面	43	21	20
ビット5	第1面	40	37	31	ビット37	第1面	44	<38>	15	ビット69	第1面	20	<11>	8
ビット6	第1面	44	33	15	ビット38	第1面	59	54	14	ビット70	第1面	28	20	9
ビット7	第1面	46	35	25	ビット39	第1面	46	<17>	21	ビット71	第1面	48	<28>	15
ビット8	第1面	51	41	14	ビット40	第1面	50	46	13	ビット72	第1面	28	<26>	19
ビット9	第1面	41	39	19	ビット41	第1面	<30>	<30>	14	ビット73	第1面	33	<30>	19
ビット10	第1面	20	17	6	ビット42	第1面	26	<22>	18	ビット74	第1面	32	26	12
ビット11	第1面	26	<25>	6	ビット43	第1面	<27>	21	17	ビット75	第1面	41	<30>	25
ビット12	第1面	30	27	15	ビット44	第1面	26	21	18	ビット76	第1面	30	29	18
ビット13	第1面	40	27	10	ビット45	第1面	29	21	18	ビット77	第1面	14	13	15
ビット14	第1面	51	38	17	ビット46	第1面	39	29	24	ビット78	第1面	23	17	6
ビット15	第1面	41	30	12	ビット47	第1面	32	<23>	14	ビット79	第1面	24	22	7
ビット16	第1面	27	26	13	ビット48	第1面	47	38	12	ビット80	第1面	19	<17>	10
ビット17	第1面	48	<45>	23	ビット49	第1面	43	<39>	17	ビット81	第1面	28	26	12
ビット18	第1面	26	22	7	ビット50	第1面	<40>	<32>	20	ビット82	第1面	38	36	25
ビット19	第1面	30	<27>	26	ビット51	第1面	50	38	35	ビット83	第1面	<36>	<18>	17
ビット20	第1面	20	<13>	22	ビット52	第1面	<33>	<32>	23	ビット84	第1面	28	25	21
ビット21	第1面	36	31	30	ビット53	第1面	46	41	33	ビット85	第1面	32	29	11

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ビット86	第1面	42	<25>	8	ビット96	第2面	30	28	13	池状遺構1P7	第3面	8	7	-
礎石建物1	第2面	<405>	<195>	15~34	ビット97	第2面	40	36	8	池状遺構1P8	第3面	11	9	-
溝状遺構1	第2面	<560>	45	25	ビット98	第2面	26	26	21	池状遺構1P9	第3面	9	<8>	-
土坑12	第2面	115	<35>	16	ビット99	第2面	30	30	7	池状遺構1P10	第3面	7	6	-
土坑13	第2面	68	<55>	12	ビット100	第2面	33	30	17	池状遺構1P11	第3面	13	10	-
土坑14	第2面	78	46	39	ビット101	第2面	29	27	19	池状遺構1P12	第3面	11	11	-
ビット87	第2面	33	25	21	ビット102	第2面	22	20	15	ビット103	第3面	44	37	17
ビット88	第2面	52	37	17	池状遺構1	第3面	<500>	450	65~75	礎板建物2	第4面	<420>	<420>	22~40
ビット89	第2面	41	35	16	池状遺構1P1	第3面	24	23	-	土坑15	第4面	<113>	<39>	39
ビット90	第2面	20	16	12	池状遺構1P2	第3面	23	18	25	土坑16	第4面	<69>	<43>	12
ビット91	第2面	38	30	13	池状遺構1P3	第3面	13	13	21	土坑17	第4面	<134>	<90>	37
ビット92	第2面	38	34	24	池状遺構1P4	第3面	18	16	31	土坑18	第4面	180	<43>	10
ビット93	第2面	42	<25>	12	池状遺構1P5	第3面	31	26	24	ビット104	第4面	43	42	26
ビット94	第2面	34	31	12	池状遺構1P6	第3面	9	8	-	溝状遺構2	第5面	<600>	77	48
ビット95	第2面	23	21	-										

※礎石・礎板建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。また、深さは柱穴掘り方の深さを記載している。

表9 出土遺物一覧表

表土				土坑4				ビット7			
産地	器種	破片数		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【かわらけ】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	白かわらけ 手づくね成形	2			かわらけ ロクロ成形	6			かわらけ ロクロ成形	10	
	かわらけ ロクロ成形	1,759				合計 6				合計 10	
【白磁】				土坑5				ビット8			
	皿	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【青磁】				【かわらけ】				【かわらけ】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1			かわらけ ロクロ成形	25			かわらけ ロクロ成形	6	
【陶器】				【金属製品】				合計 6			
中国	盤	1			釘	1				合計 6	
瀬戸	御皿	3		土坑7				ビット9			
	皿	2		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	入子	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
	折縁深皿	3			かわらけ ロクロ成形	113			かわらけ ロクロ成形	12	
常滑	壺	1		【陶器】				合計 12			
	甕	39		土坑8				ビット13			
	壺	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	片口鉢Ⅰ類	2		【かわらけ】				【かわらけ】			
	片口鉢Ⅱ類	7			かわらけ ロクロ成形	36			かわらけ ロクロ成形	9	
【土製品】				【瓦質土器】				合計 37			
	ふいごの羽口	1		土坑9				ビット14			
	円板状製品	3		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【瓦質土器】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	碗	1			かわらけ ロクロ成形	17			かわらけ ロクロ成形	12	
	火鉢	11			碗	1				合計 12	
【瓦】				【陶器】				合計 12			
	丸瓦	1		土坑10				ビット15			
【石製品】				産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	砥石	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
【金属製品】				【陶器】				【かわらけ】			
	銭貨	7			かわらけ ロクロ成形	44			かわらけ ロクロ成形	12	
	釘	38				合計 18				合計 12	
	刀子	1		土坑11				ビット17			
合計 1,887				【陶器】				【かわらけ】			
第1面				産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
土坑2				土坑10				ビット17			
産地	器種	破片数		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【かわらけ】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	72			かわらけ ロクロ成形	44			かわらけ ロクロ成形	9	
【陶器】				合計 44				合計 9			
常滑	片口鉢Ⅰ類	1		土坑11				ビット18			
【金属製品】				産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	釘	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
合計 74					かわらけ ロクロ成形	29			かわらけ ロクロ成形	11	
土坑3				【陶器】				合計 11			
産地	器種	破片数		備前	搦鉢	1		ビット20			
【かわらけ】				【瓦質土器】				【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	76			火鉢	1		産地	器種	破片数	
【青磁】				合計 31				【かわらけ】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1		ビット5				【かわらけ】			
【青白磁】				産地	器種	破片数		【かわらけ】			
	梅瓶	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
【陶器】				【かわらけ】				【かわらけ】			
常滑	甕	1			かわらけ ロクロ成形	10			かわらけ ロクロ成形	4	
瀬戸	香炉?	1		合計 10						合計 4	
合計 80											

ビット21			ビット42			ビット66		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8		かわらけ ロクロ成形	7		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計			合計
		8			7			2
ビット22			ビット43			ビット67		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	13		かわらけ ロクロ成形	2		かわらけ ロクロ成形	5
		合計			合計			合計
		13			2			5
ビット23			ビット44			ビット68		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5		かわらけ ロクロ成形	10		かわらけ ロクロ成形	3
		合計			合計			合計
		5			10			3
ビット26			ビット49			ビット71		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	22		かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	18
		合計			合計			合計
		22			11			18
ビット27			ビット51			ビット72		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5		かわらけ ロクロ成形	28		かわらけ ロクロ成形	8
		合計			合計			合計
		5			28			8
ビット33			ビット54			ビット76		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8		かわらけ ロクロ成形	24		かわらけ ロクロ成形	4
		合計			合計			合計
		8			24			4
ビット34			ビット55			ビット77		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20		かわらけ ロクロ成形	2		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計	【金属製品】		
		20			2		釘	1
								合計
								3
ビット35			ビット56			ビット83		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	14		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計			合計
		4			14			2
ビット37			ビット58			ビット84		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	34		かわらけ ロクロ成形	3		かわらけ ロクロ成形	10
		合計			合計			合計
		35			3			10
	釘	1						
		合計						
ビット38			ビット60			ビット85		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10		かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	8
		合計			合計			合計
		10			4			8
ビット40			ビット61			第1面 遺構外		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18		かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	38
		合計			合計	【陶器】		
		18			4	常滑	広口壺	1
							片口鉢Ⅱ類	1
								合計
								1
ビット41			ビット62			【土製品】		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	円板状製品		
【かわらけ】			【陶器】			【石製品】		
	かわらけ ロクロ成形	7	常滑	片口鉢Ⅱ類	1		砥石	1
		合計			合計	【金属製品】		
		7			1		刀子	2
							釘	2
								合計
								46
ビット42			ビット63					
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数			
【かわらけ】			【かわらけ】					
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	4			
		合計			合計			
		4			4			

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	431
【白磁】		
	皿	1
	皿Ⅳ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅱ類	2
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 444

第2面

礎石建物1 ビット2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【瓦】		
	平瓦	1
		合計 7

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

土坑14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	54
【金属製品】		
	釘	3
		合計 57

ビット87		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
		合計 18

ビット88		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	23
【石製品】		
	滑石製石鍋	1
		合計 24

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	35
		合計 35

ビット90		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	16
		合計 16

ビット94		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ビット96		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
		合計 2

ビット97		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11
		合計 11

ビット98		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
		合計 5

ビット100		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	30
		合計 30

ビット101		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	56
		合計 56

ビット102		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

第2面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	745
【白磁】		
	皿Ⅳ類	2
【陶器】		
渥美	甕	1
	甕	6
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	2
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	基石	1
【金属製品】		
	釘	1
		合計 760

第3面		
産地	器種	破片数
池状遺構1 上層		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3,295
	かわらけ 手づくね成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	14
	片口鉢Ⅰ類	5
	片口鉢Ⅱ類	4
【瓦質土器】		
	碗	3

【瓦】		
産地	器種	破片数
	平瓦	2
	丸瓦	2
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
【金属製品】		
	鉄滓	1
		合計 3,330

池状遺構1 下層		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2,009
【陶器】		
常滑	甕	15
	片口鉢Ⅰ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	2
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
【金属製品】		
	釘	1
		合計 2,035

池状遺構1		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	漆器椀	2
	漆器皿	1
	漆器器種不明	1
	折敷	249
	曲物	4
	曲物(底板)	4
	箸状	41
	串状	18
	棒状	43
	篋状	2
	草履芯	6
	連筒下駄	1
	部材	5
	建具	4
	端材	3
	用途不明	46
		合計 430

ビット103		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
		合計 9
第3面 遺構外		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
【陶器】		
常滑	甕	1
【土器】		
	壺?	1
		合計 11

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	7
	かわらけ ロクロ成形	8,045
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【青白磁】		
	合子	1

【陶器】		
瀬戸	卸皿	2
常滑	甍	14
	片口鉢Ⅰ類	3
	片口鉢Ⅱ類	2
【瓦質土器】		
	碗	2
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	3
	碁石	1
【木製品】		
	漆器皿	1
	箸状	2
	折敷	3
	用途不明	3
【金属製品】		
	釘	7
	銅滓	1
合計		8,101
第4面		
礎板建物2 ビット3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1
土坑15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
【陶器】		
常滑	甍	1
【瓦】		
	平瓦	3

【木製品】		
	漆器椀	1
	箸状	23
	経木折敷	19
	曲物(底板)	1
	串状	2
	棒状	11
	連歯下駄	1
	草履芯	2
	用途不明	11
合計		93
土坑16		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	草履芯	1
合計		1
土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【木製品】		
	箸状	1
	串状	2
合計		7
土坑18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	23
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
常滑	甍	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦】		
	平瓦	1

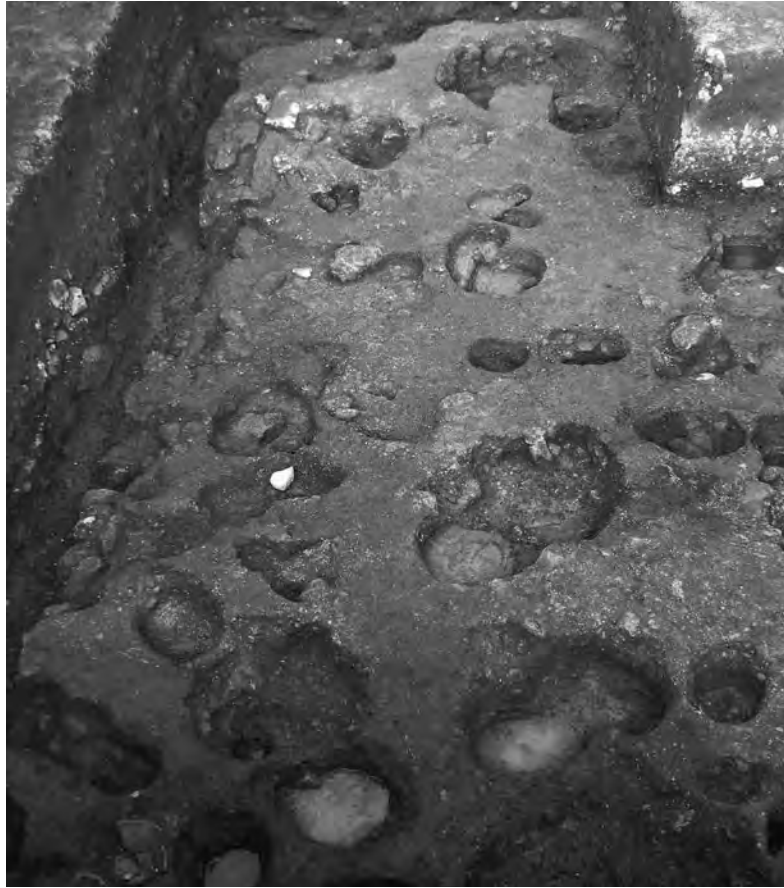
【木製品】		
	用途不明	2
合計		29
第4面構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	124
【陶器】		
常滑	甍	6
【土器】		
	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【木製品】		
	漆器椀	1
	箸状	6
	曲物	1
	串状	6
	棒状	6
	部材	5
	用途不明	1
合計		158
第5面		
溝状遺構2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計		2
第5面構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		2



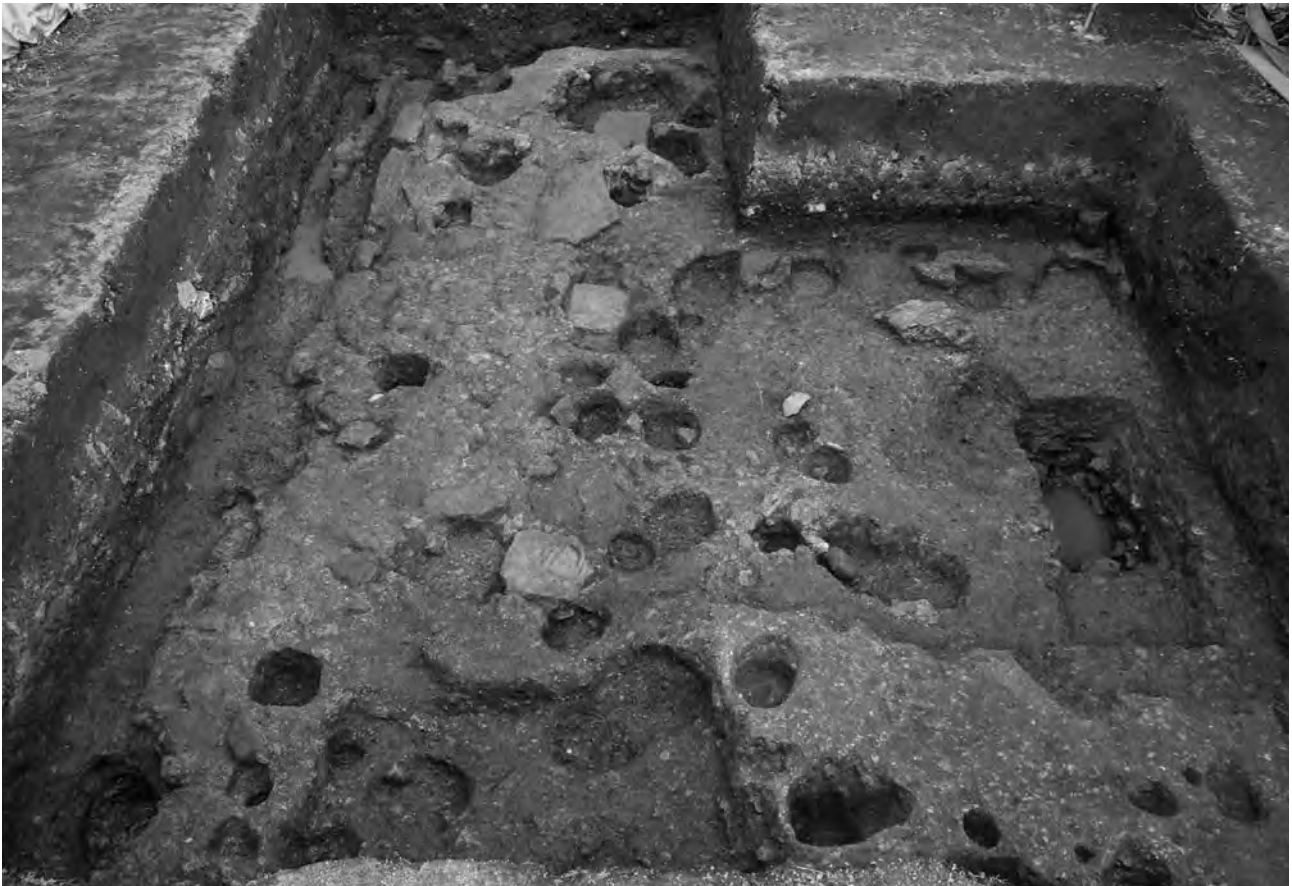
1. 調査地点遠景 (北東から)



2. 調査区北西壁土層断面 (南東から)



1. 第1面全景(南西から)



2. 第2面全景(南西から)



1. 第3面 池状遺構1 全景(南西から)



2. 第3面 池状遺構1 遺物出土状況(南西から)



3. 第3面 池状遺構1 北側護岸の検出状況(南西から)

図版 4



1. 第4面 礎板建物2ピット2～4 (北西から)



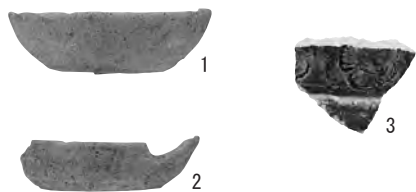
2. 第4面 礎板建物2ピット2 (南西から)



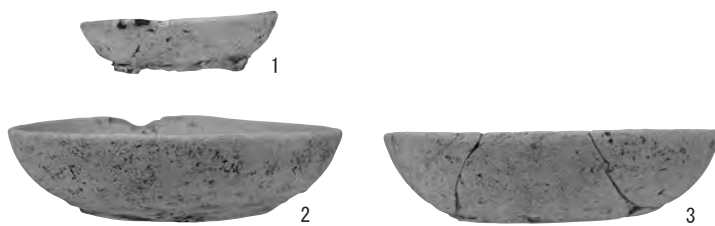
3. 第4面 礎板建物2ピット4 (南西から)



4. 第5面全景 (南西から)



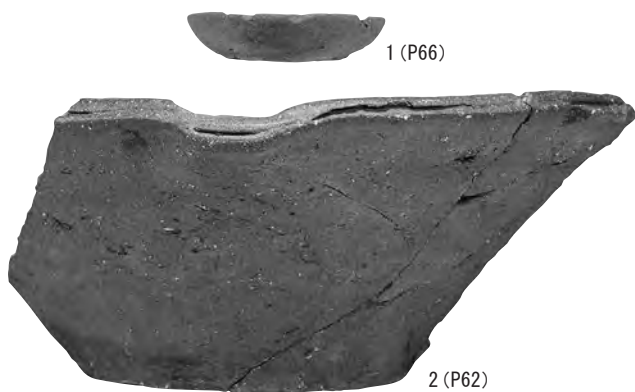
1. 第1面 土坑3出土遺物



2. 第1面 土坑7出土遺物



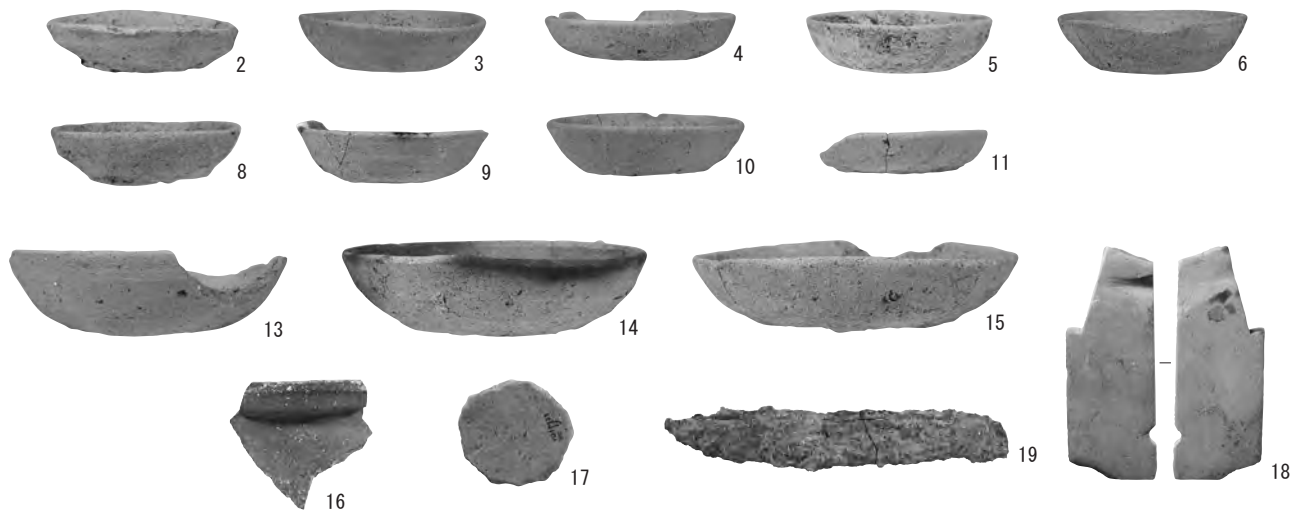
3. 第1面 土坑11出土遺物



4. 第1面 ピット出土遺物



5. 表土出土遺物



6. 第1面 遺構外出土遺物(1)

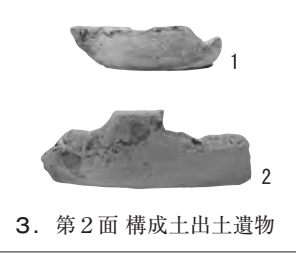
図版 6



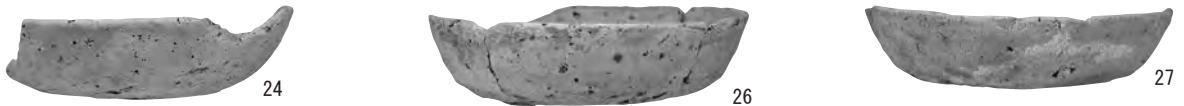
1. 第1面 遺構外出土遺物(2)



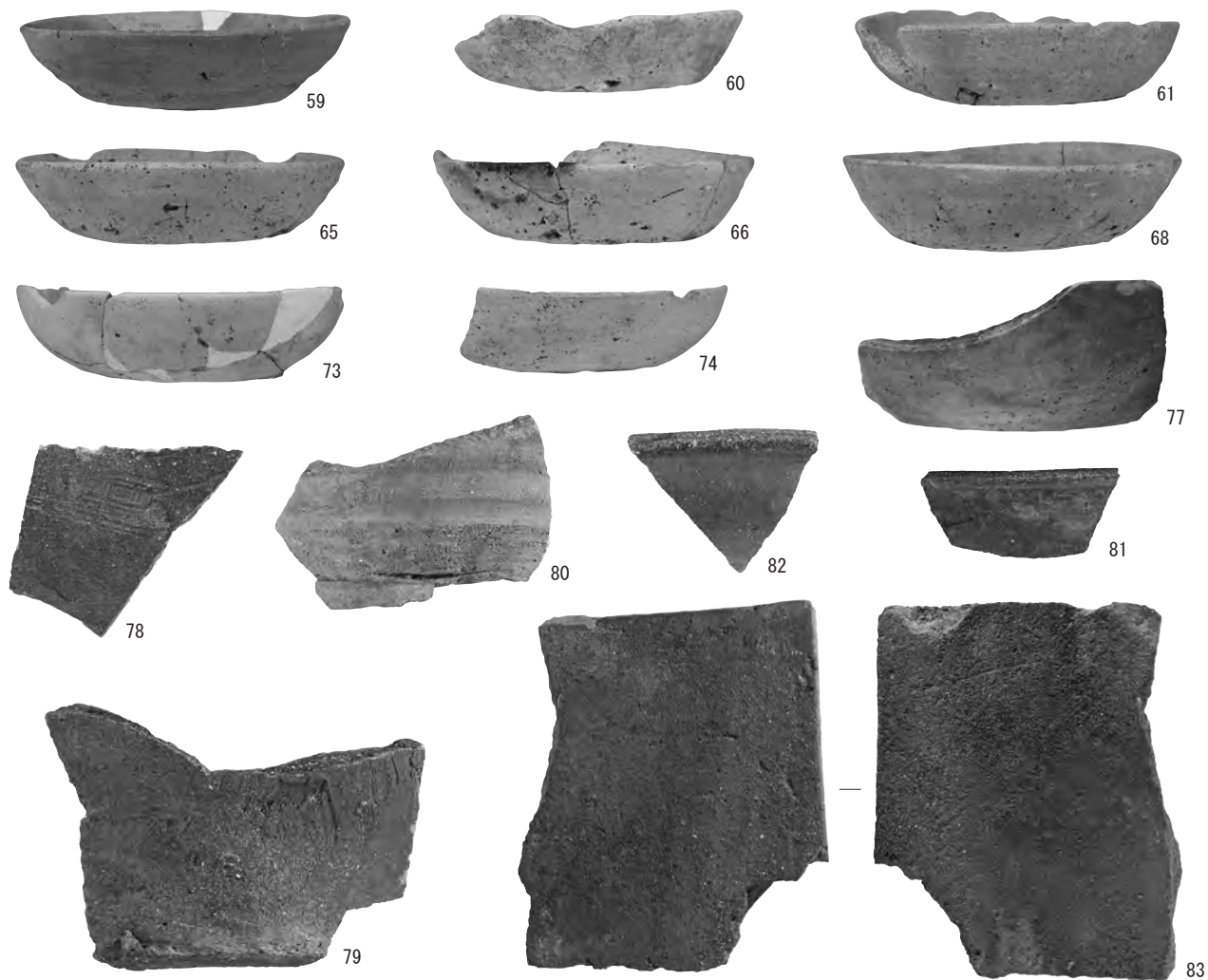
2. 第1面 構成土出土遺物



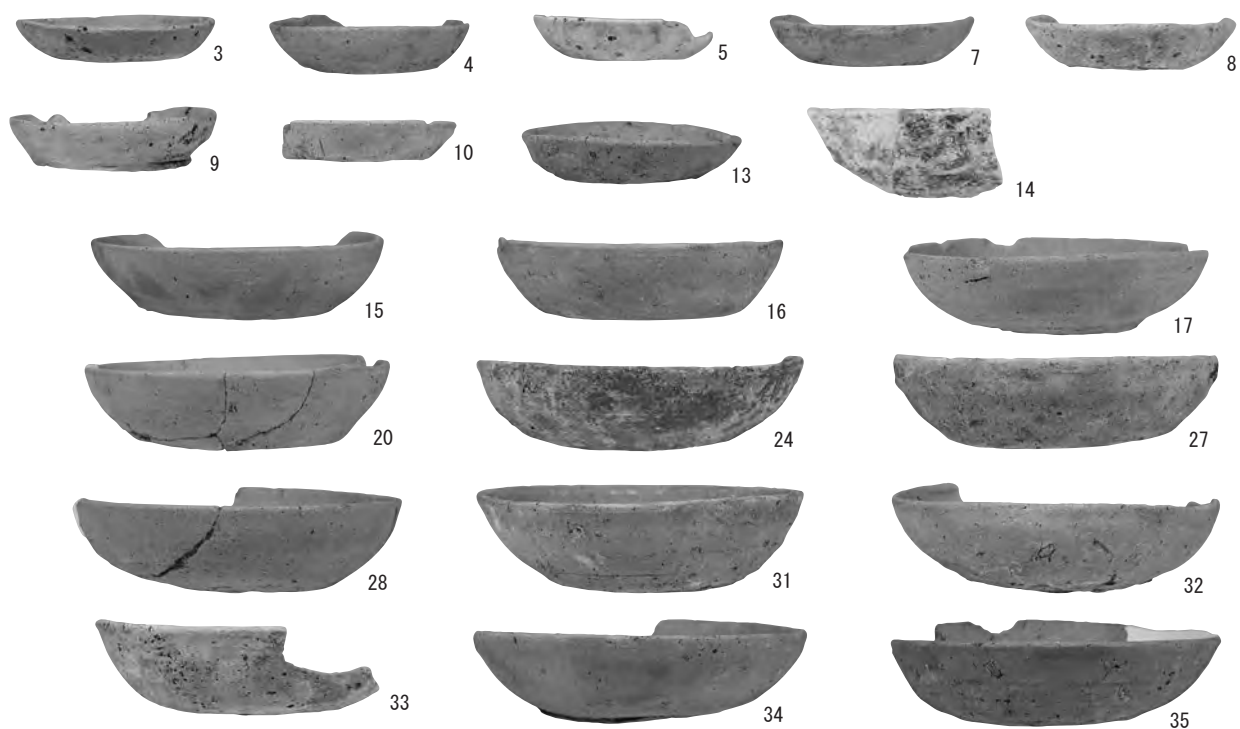
3. 第2面 構成土出土遺物



4. 第3面 池状遺構1上層出土遺物(1)

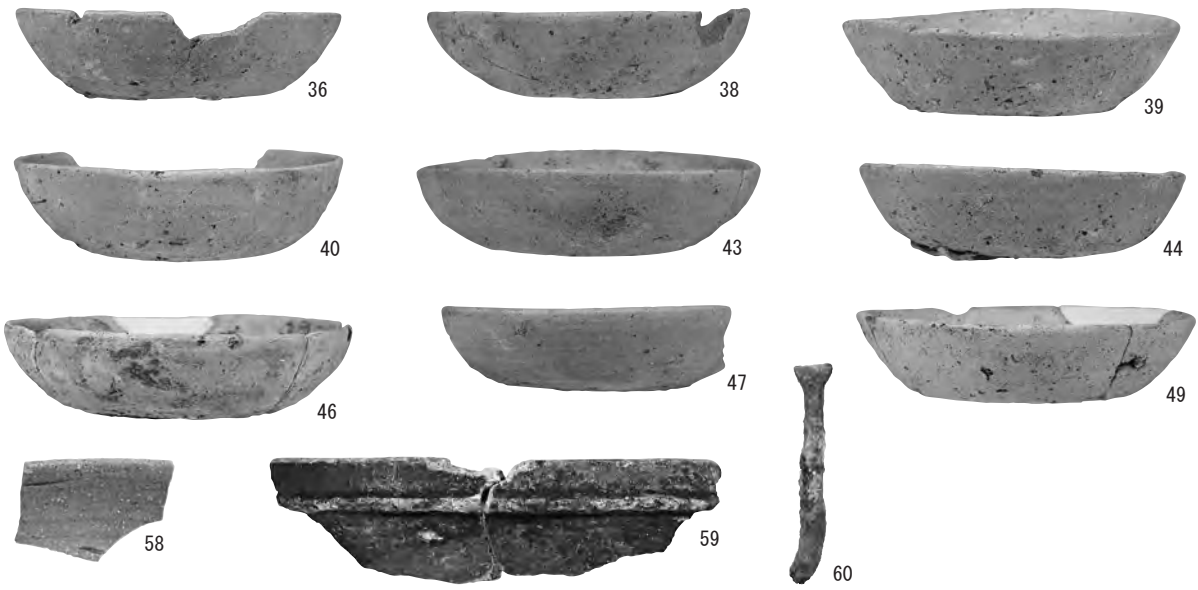


1. 第3面 池状遺構 1 上層出土遺物 (2)



2. 第3面 池状遺構 1 下層出土遺物 (1)

图版 8



1. 第3面 池状遺構 1 下層出土遺物 (2)



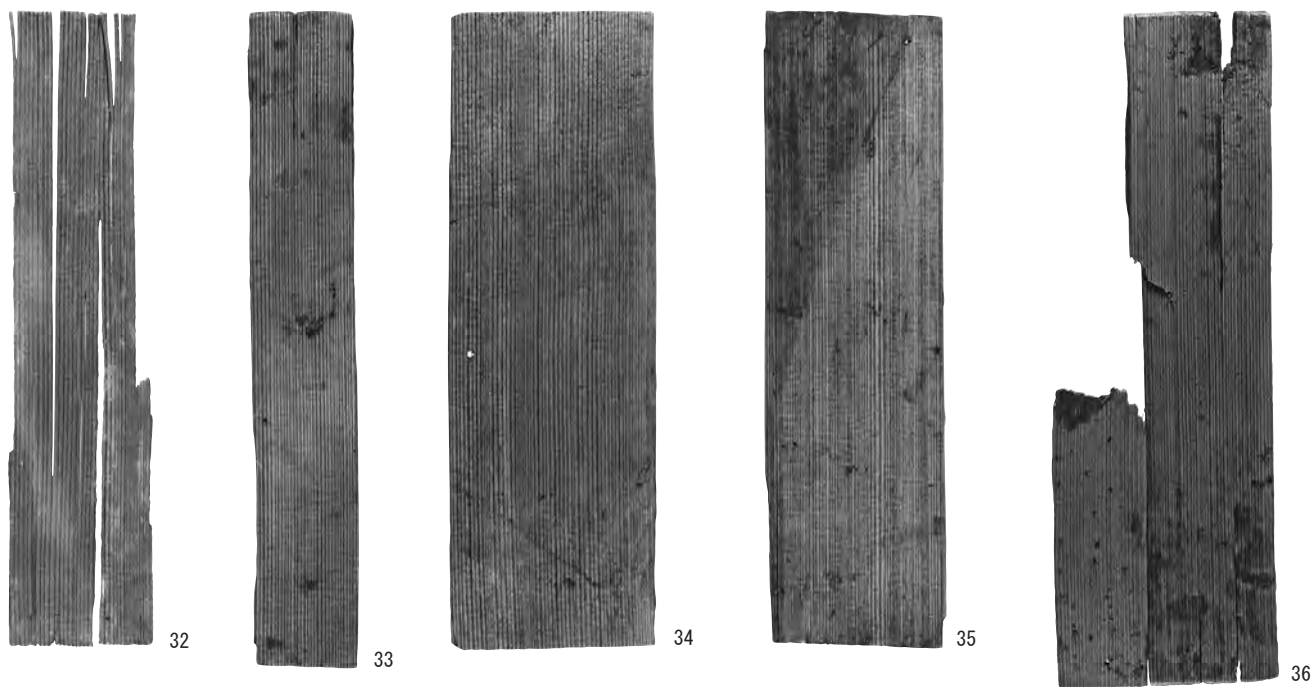
2. 第3面 池状遺構 1 木製品出土遺物 (1)



1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(2)

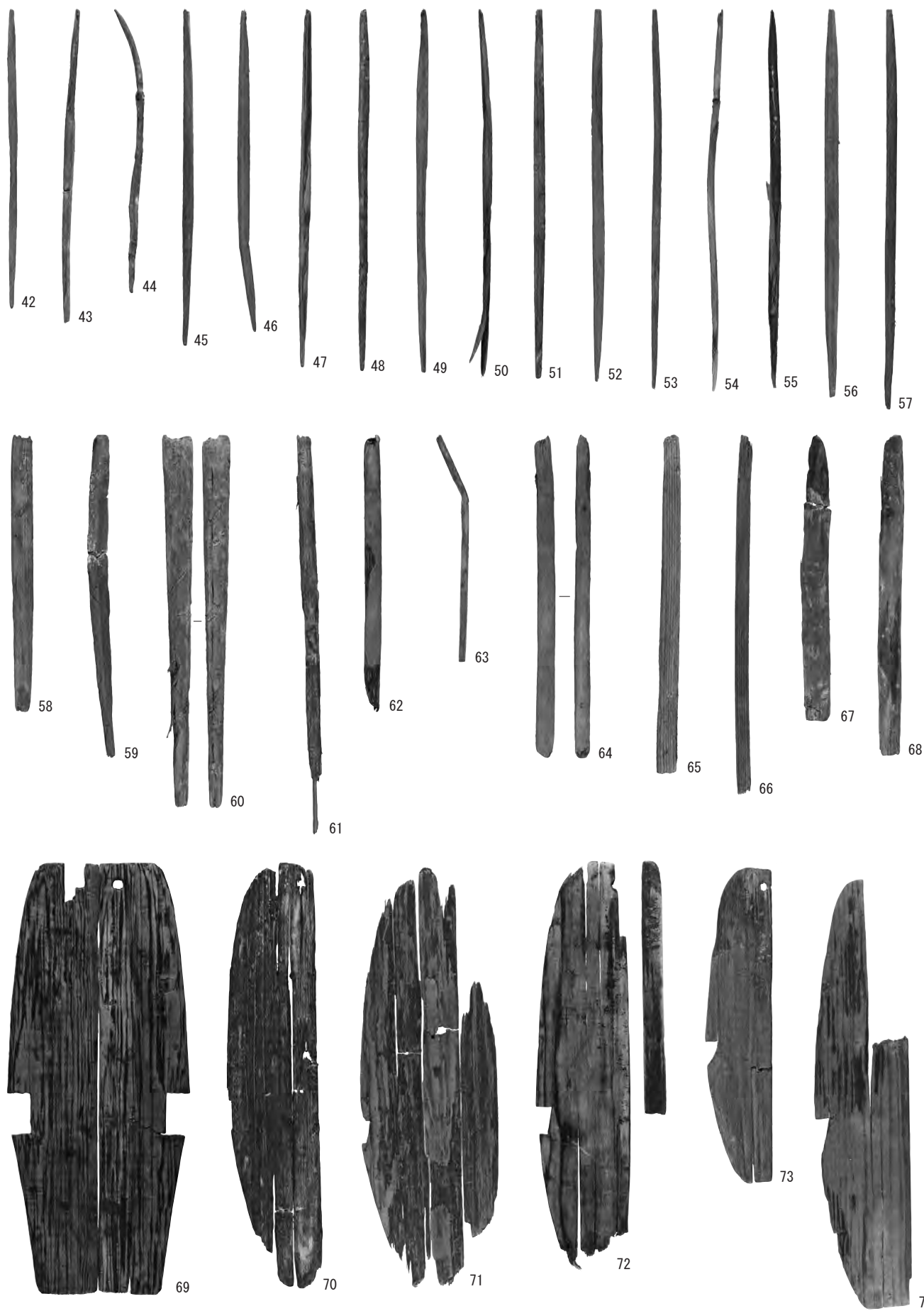


1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物(3)

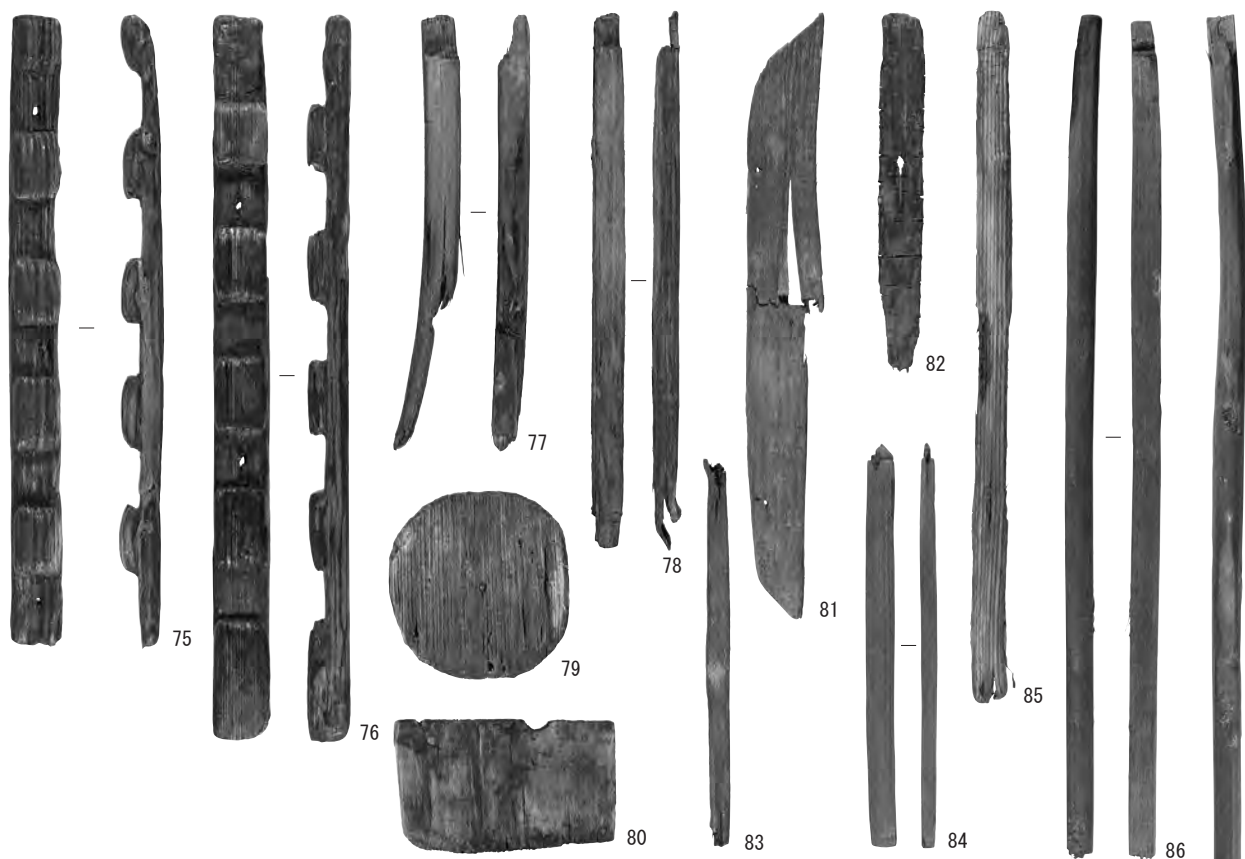


1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(4)

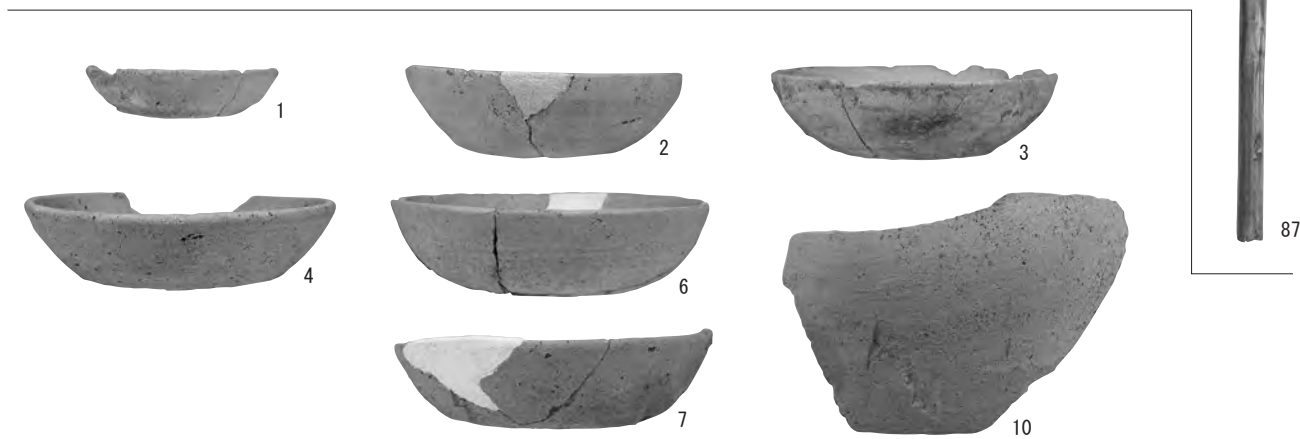
图版 12



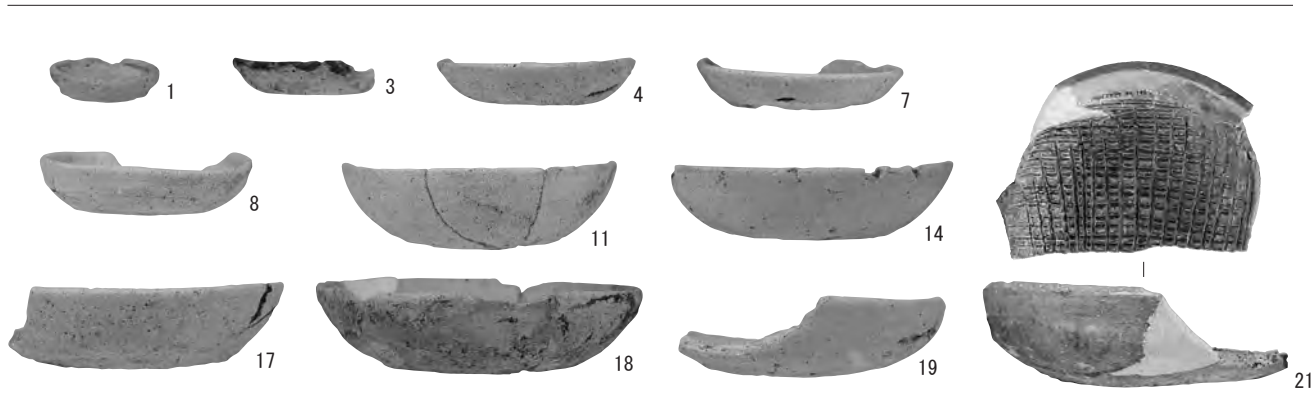
1. 第3面 池状遺構 1 木製品出土遺物 (5)



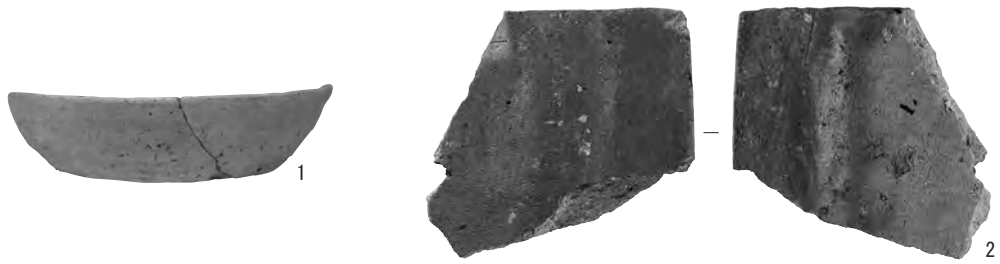
1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(6)



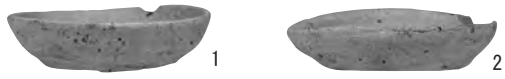
2. 第3面 遺構外出土遺物



3. 第3面 構成土出土遺物



1. 第4面 土坑15出土遺物



2. 第4面 構成土出土遺物



3. 第5面 溝状遺構2出土遺物



第4面土坑15
ニホンジカ大腿骨遠位端右

4. 出土動物遺体

安国寺跡 (No.174)

山ノ内字東管領屋敷147番9外地点

例 言

1. 本報は「安国寺跡」（神奈川県遺跡台帳No.174）内、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年2月12日～同年5月7日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約46㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子
調査員 赤堀祐子・平山千絵・梅岡ケイト・平井里永子
作業員 安達越郎・伴 一明・片山直文・清水政利・丹野正弘
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 第三章第9節の第9面溝状遺構9出土「呪符木簡」の积文は、特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所の松吉大樹氏にご教示を賜った。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「AKT0916」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
■ 炭層および炭化物分布範囲
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	118
第1節 調査に至る経緯と経過	118
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	118
第3節 周辺の考古学的調査	120
第二章 堆積土層	120
第三章 発見された遺構と遺物	124
第1節 第1面の遺構と遺物	124
第2節 第2面の遺構と遺物	126
第3節 第3面の遺構と遺物	130
第4節 第4面の遺構と遺物	136
第5節 第5面の遺構と遺物	139
第6節 第6面の遺構と遺物	145
第7節 第7面の遺構と遺物	151
第8節 第8面の遺構と遺物	155
第9節 第9面の遺構と遺物	156
第四章 まとめ	159

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	119	図16 第2面 土坑4出土遺物	128
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	121	図17 第2面 構成土出土遺物(1)	129
図3 調査区位置図	122	図18 第2面 構成土出土遺物(2)	130
図4 調査区配置図	122	図19 第3面 遺構分布図	130
図5 調査区北東壁 土層断面図	123	図20 第3面 溝状遺構1	131
図6 第1面 遺構分布図	124	図21 第3面 溝状遺構1出土遺物	132
図7 第1面 礎石建物1	124	図22 第3面 溝状遺構2	132
図8 第1面 遺構外出土遺物	125	図23 第3面 土坑5～13	133
図9 第1面 構成土出土遺物	125	図24 第3面 土坑13出土遺物	133
図10 第2面 遺構分布図	126	図25 第3面 ピット19・21	135
図11 第2面 切石基礎建物1	126	図26 第3面 遺構外出土遺物	135
図12 第2面 石列1	127	図27 第3面 構成土出土遺物(1)	135
図13 第2面 据鉢遺構1	127	図28 第3面 構成土出土遺物(2)	136
図14 第2面 据鉢遺構1出土遺物	127	図29 第4面 遺構分布図	136
図15 第2面 土坑1～4	128	図30 第4面 溝状遺構3	137

図31	第4面 土坑14出土遺物	137	図50	第6面 ピット58・59・62・73・75・ 78・86・88・89・91・95	148
図32	第4面 土坑15出土遺物	137	図51	第6面ピット出土遺物	150
図33	第4面 土坑14～20	138	図52	第6面 遺構外出土遺物	150
図34	第4面 土坑20出土遺物	138	図53	第7面 遺構分布図	151
図35	第4面 構成土出土遺物	139	図54	第7面 溝状遺構8	151
図36	第5面 遺構分布図	140	図55	第7面 ピット96・102・112・115	152
図37	第5面 溝状遺構4出土遺物	140	図56	第7面 ピット出土遺物	153
図38	第5面 溝状遺構4～6	141	図57	第7面 遺構外出土遺物	154
図39	第5面 溝状遺構5出土遺物	142	図58	第7面 構成土出土遺物	154
図40	第5面 溝状遺構6出土遺物	142	図59	第8面 遺構分布図	155
図41	第5面 土坑21～27	143	図60	第8面 土坑32	155
図42	第5面 ピット53	144	図61	第8面 ピット122・127・128・133	156
図43	第5面 遺構外出土遺物(1)	144	図62	第8面 ピット出土遺物	156
図44	第5面 遺構外出土遺物(2)	145	図63	第9面 遺構分布図	157
図45	第6面 遺構分布図	145	図64	第9面 板組遺構1	157
図46	第6面 溝状遺構7	146	図65	第9面 溝状遺構9	157
図47	第6面 土坑29出土遺物	146	図66	第9面 溝状遺構9出土遺物(1)	158
図48	第6面 土坑28～31	146	図67	第9面 溝状遺構9出土遺物(2)	159
図49	第6面 不明遺構1	147			

表 目 次

表1	安国寺跡 調査地点一覧表	120	表7	第6面 出土遺物観察表	165
表2	第1面 出土遺物観察表	162	表8	第7面 出土遺物観察表	165
表3	第2面 出土遺物観察表	162	表9	第8面 出土遺物観察表	166
表4	第3面 出土遺物観察表	163	表10	第9面 出土遺物観察表	166
表5	第4面 出土遺物観察表	163	表11	遺構計測表	167
表6	第5面 出土遺物観察表	164	表12	出土遺物一覧表	168

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点近景(南西から)	173	2. I区第2面全景(南西から)	175	
	2. I区調査開始時 近景 (西から)	173	図版4	1. I区第3面全景(北東から)	176
図版2	1. I区北東壁土層断面(南西から)	174	2. II区第3面全景(北西から)	176	
	2. II区北東壁土層断面(南西から)	174	図版5	1. 第3面 溝状遺構1(東から)	177
図版3	1. I区第1面全景(南東から)	175	2. 第3面 調査風景(南西から)	177	
			図版6	1. I区第4面全景(北東から)	178
			2. II区第4面全景(北東から)	178	

	3. I区第5面全景(南西から)……178		3. 第3面 土坑13出土遺物 ……182
	4. I区第6面全景(南西から)……178		4. 第3面 遺構外出土遺物 ……182
	5. II区第5面全景(北西から)……178		5. 第3面 構成土出土遺物 ……182
	6. II区第6面全景(北西から)……178	図版11	1. 第4面 土坑14出土遺物 ……183
	7. 第5面 溝状遺構5(西から)……178		2. 第4面 土坑15出土遺物 ……183
	8. 第6面 溝状遺構7木組護岸跡 (南東から) ……178		3. 第4面 土坑20出土遺物 ……183
図版7	1. I区第7面全景(南西から)……179		4. 第4面 構成土出土遺物 ……183
	2. II区第7面全景(北東から)……179		5. 第5面 溝状遺構4出土遺物 ……183
	3. I区第8面全景(南西から)……179	図版12	1. 第5面 溝状遺構6出土遺物 ……184
図版8	1. 第9面全景(南東から) ……180		2. 第5面 遺構外出土遺物 ……184
	2. 第9面 板組遺構1(北から) ……180		3. 第6面 土坑29出土遺物 ……184
図版9	1. 第1面 遺構外出土遺物 ……181		4. 第6面 ピット出土遺物 ……184
	2. 第1面 構成土出土遺物 ……181		5. 第6面 遺構外出土遺物 ……184
	3. 第2面 据鉢遺構1出土遺物 ……181	図版13	1. 第7面 ピット出土遺物 ……185
	4. 第2面 土坑4出土遺物 ……181		2. 第7面 遺構外出土遺物 ……185
	5. 第2面 構成土出土遺物(1) ……181		3. 第7面 構成土出土遺物 ……185
図版10	1. 第2面 構成土出土遺物(2) ……182	図版14	1. 第8面 ピット出土遺物 ……186
	2. 第3面 溝状遺構1出土遺物 ……182		2. 第9面 溝状遺構9出土遺物 ……186

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である安国寺跡(神奈川県遺跡台帳No.174)の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成21年9月29日～同年10月1日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が開発予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約46㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年2月12日～同年5月7日までの3ヵ月ほどである。現地表の標高は約30.6mを測る。廃土処理の都合から調査区を2区に分け、北西側をⅠ区として平成22年2月15日～同年3月19日、南東側をⅡ区として平成22年3月24日～同年4月28日まで調査を実施した。調査はまず重機により約60cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、Ⅰ区では中世に属する第1～9面の合計9面にわたる遺構確認面が検出され、Ⅱ区ではⅠ区に対応する第3～7面の合計5面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして5月7日をもって、現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市三級基準点(X=-74383.457、Y=-25445.426)、(X=-74464.083、Y=-25378.797)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.43416(標高28.922m)を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外に位置し、「安国寺跡(No.174)」の範囲内に所在する。安国寺跡は鎌倉市の北部域に位置し、調査地点はJR北鎌倉駅の南西側を走る鎌倉街道を鎌倉方面に750mほど進んだ街道の東側に位置している。地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷の中に位置し、その谷地を鎌倉街道とJR横須賀線がほぼ並行して走っている。この開析谷に面した両側は、複雑に入り組んだ大小の谷戸が形成されており、丘陵頂部から湧出した小河川は地形に沿って低地に流れ込み、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、その流れは市域の北西部で柏尾川に合流している。鎌倉街道に向けて開けた谷戸のひとつが明月院のある明月谷で、この谷戸の並びが本遺跡の所在する東管領屋敷の地区である。

隣接する包蔵地としては、鎌倉街道沿いの北側に徳泉寺跡(No.173)、正法寺跡(No.172)、南側に保寧寺跡(No.175)があり、街道を挟んだ西側には建長寺旧境内遺跡(No.397)が南北に細長い範囲に展開している。また、この鎌倉街道沿いには、円覚寺や東慶寺、浄智寺、明月院、長寿寺、建長寺などの鎌倉を代表する寺院が集まっており、これら以外にも明月院には第3代執権北条時頼が建立した「最明寺」や



図1 遺跡位置図

第8代執権北条時宗が建立した「禅興寺」などの存在が伝えられている。とりわけ本調査地点一帯は、建長寺をはじめとする臨済宗の拠点であったといえよう。

この他に建長寺境内を描いた徳川光圀施入と伝えられている『建長寺伝延宝寺図』には、廃寺も含めて49院の塔頭が描かれている。本遺跡名の由来である安国寺跡もそのひとつで、その並びには正法寺跡や徳泉寺跡、保寧寺跡などが軒を連ねていたことが知られる。さらに、この付近の住所表記にもなっている「管領屋敷」は室町期以降に関東管領上杉氏の屋敷があった場所とされており、現在は明月院の入り口を起点に円覚寺側を西管領屋敷、建長寺側を東管領屋敷と呼称されている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。本地点は北東-南西方向に長い包蔵地範囲の南西端に位置し、鎌倉街道の東側に面している。本遺跡の調査例は今回報告する地点のみであり、周辺遺跡を含めても本地域は調査例の極めて少ない場所といえる。

鎌倉街道の東沿いに調査事例が点在し、北側から遺跡の様相をみていくと、①は山ノ内道周辺遺跡の山ノ内東管領屋敷180番10地点で、鎌倉時代後期から室町期にかけての生活面が2面で検出された(鎌倉市教育委員会 1997)。ここでは明月谷の谷戸奥から流れ出た明月川とほぼ同じ方向を示す溝が発見されている。②は山ノ内上杉邸跡の山ノ内字東管領屋敷179番39地点で、本報告に詳細な報告がなされている。調査地点からは5面にわたる中世の生活面が検出され、礎石建物や掘立柱建物、溝などの他に菟池と推定される遺構が発見されている。本遺跡の北側に隣接する徳泉寺跡の③山ノ内字東管領屋敷168番4地点からは、中世の地業1カ所と中世～近世に属する河川1本が検出された(永田・齋藤 2018)。調査地点が街道の東側に面しており、建長寺から流れ出る小河川の東側に隣接していることから、検出された河川はこの旧流路にあたる可能性が指摘されている。本遺跡の南側に隣接する保寧寺跡の④山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点では3面にわたる遺構確認面が調査され、15世紀代の石列や石組遺構、土坑などが検出された(手塚 1997)。調査区からは寺を想起させるような遺構は発見されていないが、舶載陶磁器や茶の湯に関連した遺物が出土したため、調査者は寺の境内であった可能性を指摘している。

表1 安国寺跡 調査地点一覧

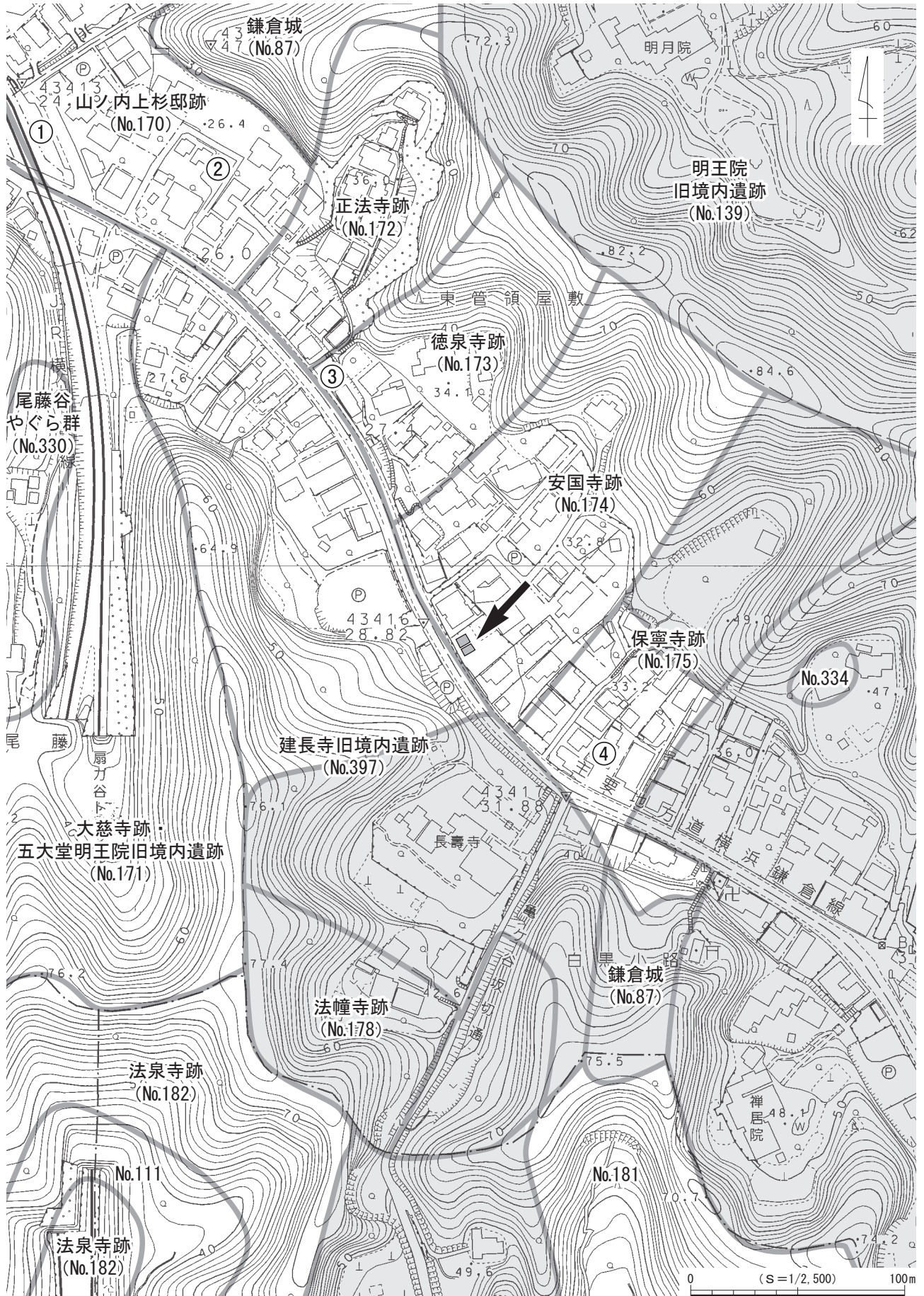
番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	安国寺跡 (No. 174)	山ノ内字東管領屋敷147番9外地点	
①	山ノ内道周辺遺跡 (No. 136)	山ノ内字東管領屋敷180番10地点	鎌倉市教育委員会 1997
②	山ノ内上杉邸跡 (No. 170)	山ノ内字東管領屋敷179番39地点	本報告
③	徳泉寺跡 (No. 173)	山ノ内字東管領屋敷168番4地点	永田・齋藤 2018
④	保寧寺跡 (No. 175)	山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点	手塚 1997

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～9面までの合計9面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区北東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭であった遺構が認められた。

現地表面は標高約30.6mを測り、最上部には層厚25～55cmの表土(1層)と層厚6～27cmの泥岩粒と炭化物を含む灰茶色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3層上面で検出した。確認面の



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

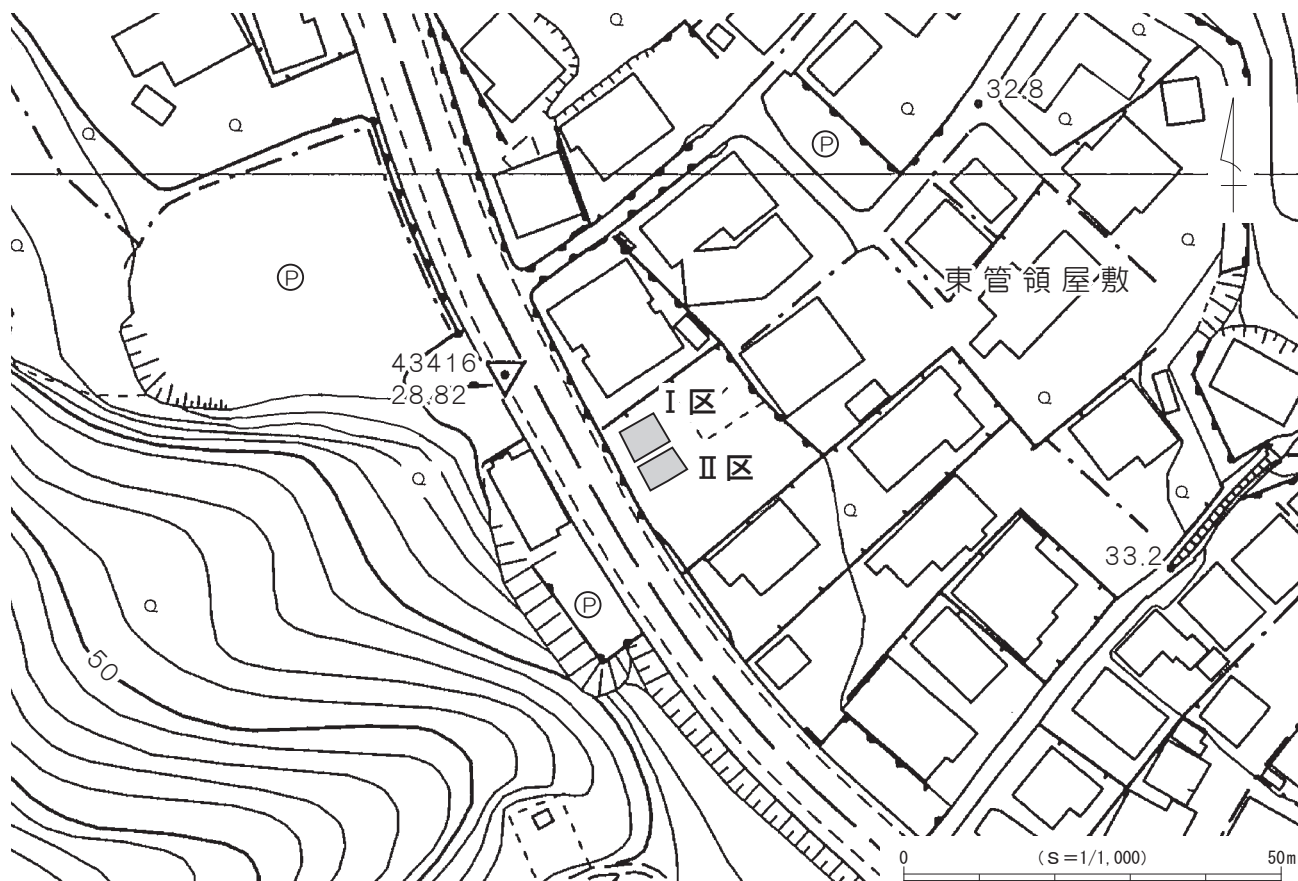
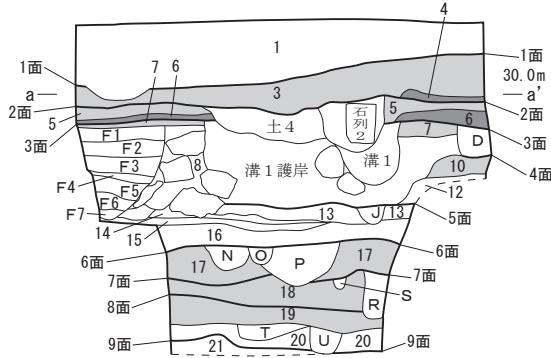


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

I 区北東壁

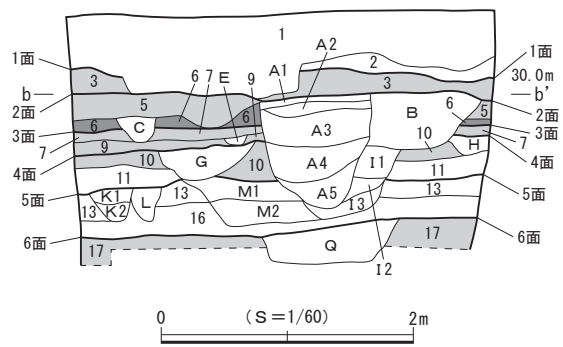


- 1層 表土層
- 2層 灰茶色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。締まりなし。
- 3層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。(第1面)
- 4層 炭層
- 5層 泥岩整地層 (第2面)
- 6層 炭化物層 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- 7層 泥岩整地層 (第3面)
- 8層 大形泥岩ブロック層
- 9層 泥岩整地層 炭化物含む。
- 10層 泥岩整地層 (第4面)
- 11層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック少量含む。締まりなし。
- 12層 暗灰色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- 13層 暗青灰色シルト (第5面)
- 14層 青灰色シルト 締まりあり。
- 15層 青灰色シルト 泥岩粒子含む。
- 16層 黒色粘質土 泥岩粒子多量に含む。
- 17層 泥岩整地層 (第6面)
- 18層 泥岩整地層 (第7面)
- 19層 泥岩整地層 (第8面)
- 20層 暗褐色有機質土
- 21層 暗青灰色粘質土 暗褐色有機質土含む。締まりなし。(第9面)

〔遺構〕

- A1層 暗茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- A2層 灰黄色シルト 炭化物少量含む。締まりなし。
- A3層 大形泥岩ブロック層
- A4層 暗灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- A5層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- B層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
- C層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・泥岩ブロック含む。
- D層 暗灰色シルト 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- E層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・かわらけ片含む。締まりなし。
- F1層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック微量含む。
- F2層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック含む。
- F3層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- F4層 灰黄色粘質土 やや砂質。
- F5層 灰黄色粘質土 炭化物微量含む。締まり・粘性あり。
- F6層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。締まりなし。
- F7層 灰黄色粘質土 泥岩粒子含む。締まりなし。

II 区北東壁



0 (S=1/60) 2m

- G層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- H層 暗灰色シルト 炭化物少量含む。締まりなし。
- I1層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。締まりなし。
- I2層 暗灰青色粘質土 泥岩粒子・泥岩ブロック含む。締まりなし。
- I3層 暗灰青色シルト 泥岩ブロック・かわらけ片少量含む。締まりなし。
- J層 灰茶色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・貝片含む。締まりなし。
- K1層 黒色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- K2層 黒色粘質土 泥岩ブロック少量・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- L層 灰黒色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- M1層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- M2層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- N層 焼土層 炭化物含む。
- O層 黒色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。
- P層 黒色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- Q層 黒色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし・粘性あり。
- R層 黒色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- S層 青灰色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- T層 黒色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- U層 青灰色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。

図5 調査区北東壁 土層断面図

標高は約30.1~30.3mを測る。3層は多量の泥岩ブロックを含む灰黄色粘質土による整地層で、層厚8~35cmである。3層の下位には部分的に炭層(4層)が認められた。第2面は5層上面で確認し、確認面の標高は29.9~30.0mを測る。5層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚5~25cmである。5層の下位には泥岩ブロックを含む炭化物層(6層)が層厚5~18cm堆積している。第3面は7層上面で確認し、確認面の標高は29.7~29.8mを測る。7層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚3~12cmである。7層の下位には大形の泥岩ブロック層(8層)、炭化物を含む整地層(9層)が堆積している。第4面は10層上面で確認し、確認面の標高は29.5~29.7mを測る。10層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚10~32cmである。10層の下位には、少量の泥岩ブロックを含む黒青灰色粘質土(11層)と暗灰色粘質土(12層)が堆積している。第5面は13層上面で確認し、確認面の標高は29.1~29.3mを測る。13層は暗青灰色シルト層で、層厚7~20cmである。13層の下位には、青灰色シルト(14・15層)が部分的にみられ、さらにその下に多量の泥岩粒子を含む黒色粘質土(16層)が、調査区全体に層厚13~25cm堆積している。第6面は17層上面で確認し、確認面の標高は28.8~29.0mを測る。17層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚30cm前後である。第7面は18層上面で確認し、確認面の標高は28.5~28.6mを測る。18層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚10~30cmである。第8面は19層上面で確認し、確認面の標高は28.3~28.4mを測る。19層は泥岩ブロック層による整地層で、層厚12~25cmである。19層の下位には木片や木製品を主体とする暗褐色有機質土(20層)が、層厚10~20cm堆積している。遺構確認面の最下位にあたる第9面は、21層上面で確認した。確認面の標高は約28.0mを測る。21層は暗褐色有機質土を含む暗青灰色粘質土である。

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面はⅠ区では第1～9面までの合計9面、Ⅱ区ではⅠ区に対応する第3～7面の合計5面である。第1・2面の遺構はⅡ区では確認されなかったため、遺構分布図はⅠ区のみを掲載した。遺構確認面はいずれも中世に属し、検出した遺構は、礎石建物1棟、切石基礎建物1棟、溝状遺構9条、板組遺構1基、石列1条、据鉢遺構1基、土坑32基、不明遺構1基、ピット137基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～9面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は30.1～30.3mを測る。3層は多量の泥岩ブロックを含む灰黄色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟である(図6)。Ⅰ区の東側には明瞭な整地面が残存しているが、南西側は攪乱によって広い範囲が失われ本来の様相は明らかではない。なお、Ⅱ区は遺構が検出されなかったため、遺構分布図はⅠ区のみを図示した。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物1(図7)

本址は礎石が現存するⅠ区内の配置関係から礎石建物を想定したものである。Ⅰ区の西側は攪乱が広く及んでいることから、本址の南西側は失われている可能性が高く、加えて北西・北東および南東側は調査区外に展開していることが予想され、全容を把握することはできなかった。本址は多量の泥岩ブロックを含む整地面の上に構築されており、調査区内では礎石8基を確認したが、いずれも掘り方は検出されていない。

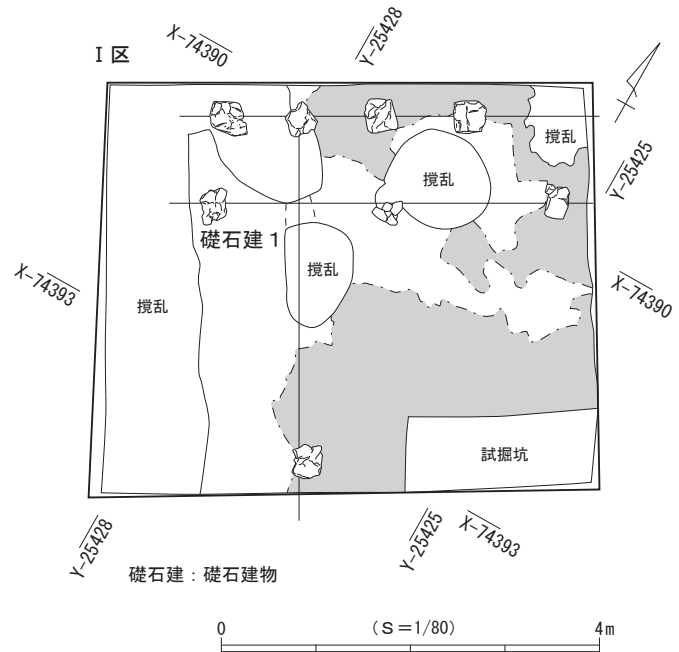


図6 第1面 遺構分布図

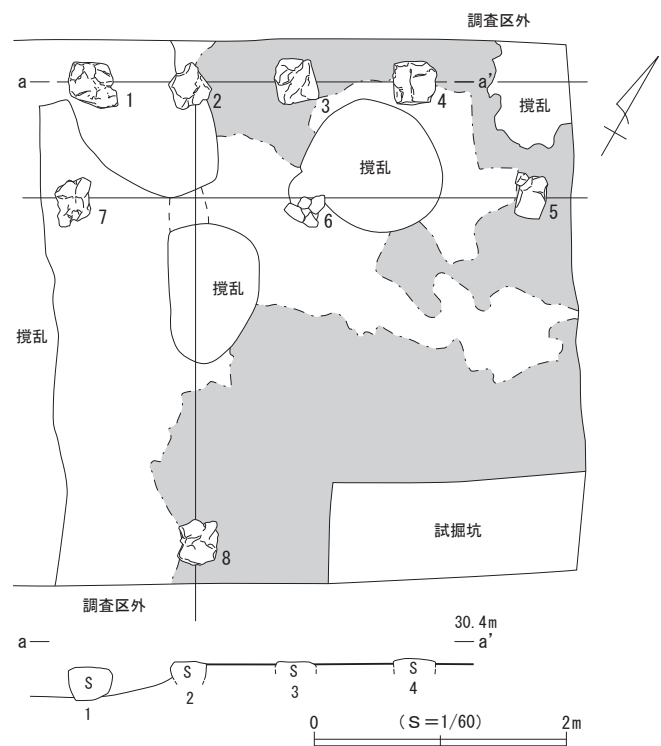


図7 第1面 礎石建物1

本址は礎石の配置から北東-南西方向の柱間(礎石1~礎石4)が4間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法はおおむね90cm等間である。北西-南東方向の規模については遺存状態が悪いために判然としないが、同じ柱列と考えられる礎石2と礎石8との距離は3.6mを測ることから、北東-南西方向の柱間寸法を参考に柱間を推定するならば4間以上の建物が想定される。I区の南東側に隣接するII区では本址の続きは確認されなかったことから、最大で5間の規模をもつと推定される。礎石1~礎石4の南側で礎石5~礎石7とした3基の礎石からなる礎石列を確認し、柱間は1.8m等間である。検出範囲から推定される主軸方位は、N-60°-Eを指す。

礎石の大きさは長さ30~37cmを測り、上面の標高は西端部に位置する礎石1のみ30.20mと他と比較してやや低いが、その他の礎石は30.25~30.28mの範囲に収まり、ほぼ一定している。

遺物は出土しなかった。

(2) 第1面 遺構外出土遺物(図8)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち5点を図示した。

1~5はロクロ成形によるかわらけである。

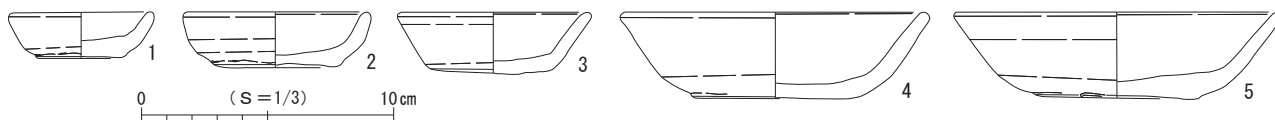


図8 第1面 遺構外出土遺物

(3) 第1面 構成土出土遺物(図9)

第1面構成土中からも遺物が出土しており、このうち11点を図示した。

1~8はロクロ成形によるかわらけであり、2・3・4・6の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。9は瀬戸産の直縁大皿、10は常滑産の甕を転用した摩耗陶片である。11は銭貨で、天聖元寶(1023年初鑄)である。

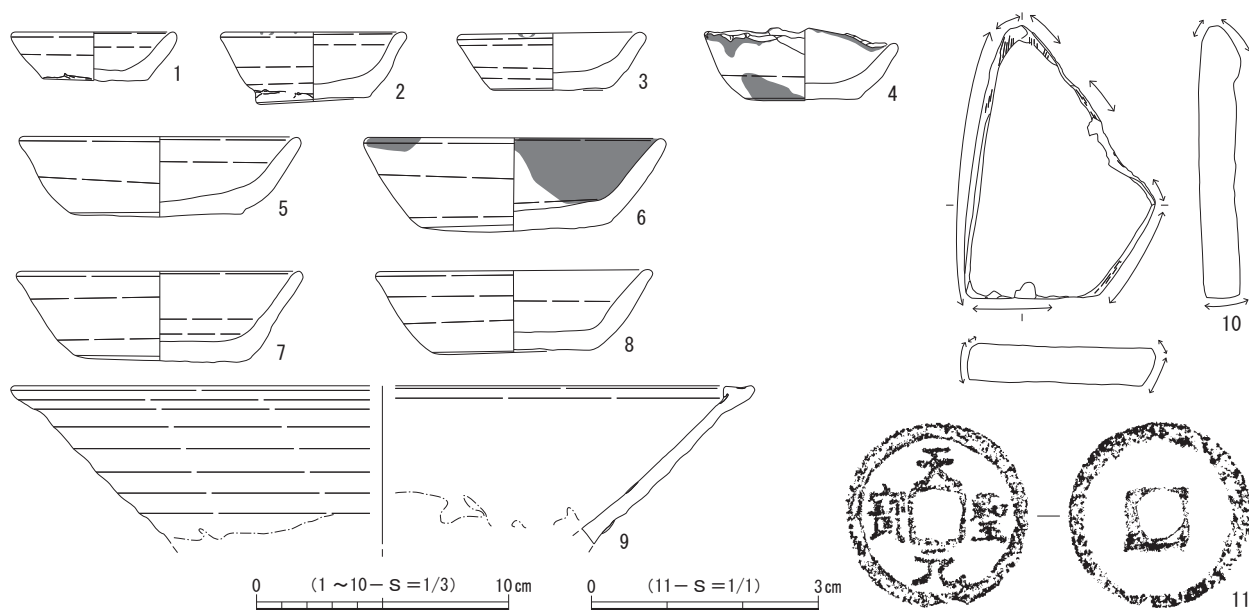


図9 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の5層上面で検出され、確認面の標高は29.9～30.0mを測る。5層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、切石基礎建物1棟、石列1条、据鉢遺構1基、土坑4基、ピット3基である(図10)。これらの遺構はI区の北半部を中心に検出されたが、分布は全体にまばらである。切石基礎建物1と石列1はともに切石を使用した遺構で、おそらく建物を構成していたと考えられるが調査範囲の制約からごく一部の調査にとどまり、遺構の詳細は判然としなかった。また、調査区内には明瞭な整地面が広がるが、切石基礎建物の周囲のみ確認されなかった。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

(1) 切石基礎建物

切石基礎建物1(図11)

I区の北西壁際中央に位置する。東隅を攪乱によって壊され、北西側は調査区外に続いているため、全容を把握できなかった。泥岩ブロックを密に含み焼土も含む茶褐色土の上に、砂質凝灰岩の切石を南東面が直線的になるよう列状に配置し、南側で北西へ向かって直角に折れて調査区外の北西側に続いていると考えられる。また、攪乱の北西側にあたる調査区壁際からも水平に据えられた切石が1個出土した。この切石上面の標高は30.10mを測り、配列された切石とほぼ同じであることから、本址の一部と考えられる。調査区内ではおそらく切石がコ字状にめぐっていたと推定され、その内部には焼土の堆積が認められた。規模は北東-南西方向の現存長2.47m、北西-南東方向の現存長1.85mを測る。主軸方位はN-40°-Eを指す。切石の大きさは長さ26～56cm、幅22～40cm、高さ18～20cmで、切石上面の標高は29.80～29.97mを測る。

遺物は出土しなかった。

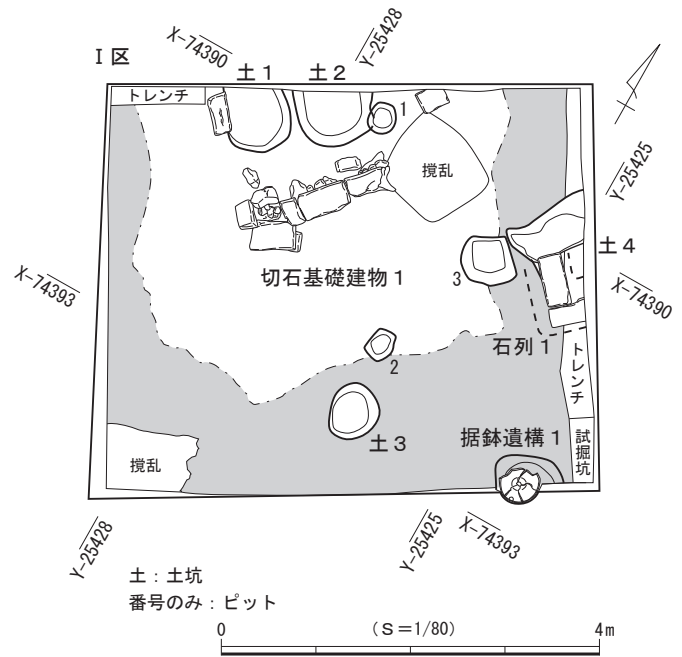


図10 第2面 遺構分布図

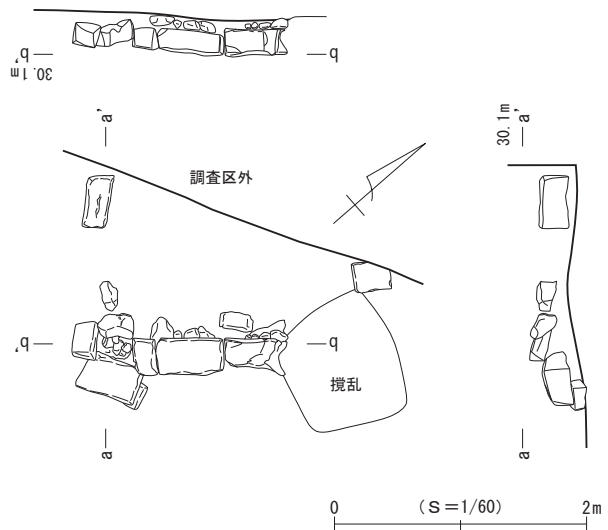


図11 第2面 切石基礎建物1

(2) 石 列

石列 1 (図12)

I 区の北東壁際中央に位置する。北東側は調査区外へと続いており、一部を調査したにとどまる。砂質凝灰岩の切石 2 個を直角に配置し、切石の上面が水平になるように埋置する。規模は北西 - 南東方向の現存長 77cm、北東 - 南西方向の現存長 40cm で、主軸方位は N - 44° - W を指す。切石の大きさは長さ 55cm、幅 26cm、高さ 39cm で、礫上面の標高は 29.95m を測る。調査区壁面の断面観察により幅 54cm、深さ 42cm の掘り方をもつことが明らかとなった。

遺物は出土しなかった。

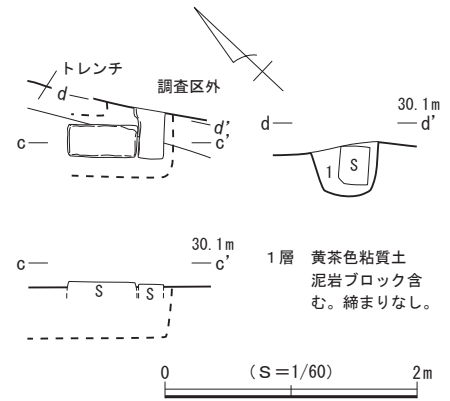


図12 第2面 石列 1

(3) 据鉢遺構

据鉢遺構 1 (図13)

I 区の東隅に位置する。調査区内では他の遺構と重複せずに単独で確認されたが、南東側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。平面形が円形と推定される掘り方の西壁寄りに、鉢の胴部下半を正位に埋置する。掘り方の底面は北東側に向かってやや傾斜し、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形状を呈し、規模は北東 - 南西方向の現存長 64cm、北西 - 南東方向の現存長 46cm、深さ 13cm で、底面の標高は 29.88m を測る。

出土遺物 (図14)

本址には鉢が据えられており、それを図示した。このほかに、かわらけ 5 点、陶器 1 点が出土した。

1 は常滑産片口鉢 II 類で、9 ~ 10 型式に比定される。

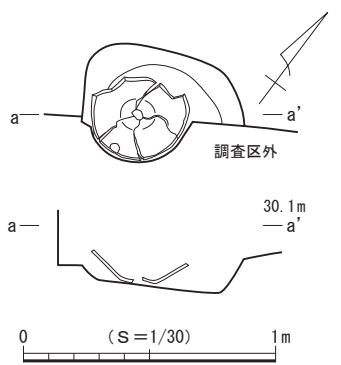


図13 第2面 据鉢遺構 1

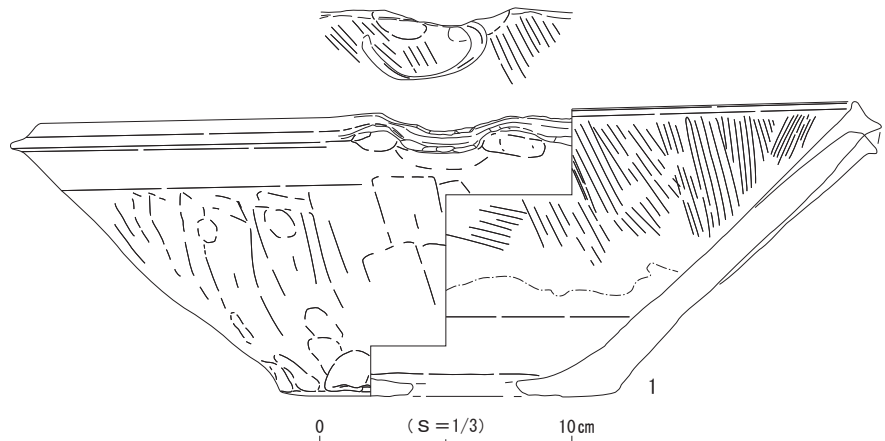


図14 第2面 据鉢遺構 1 出土遺物

(4) 土 坑

土坑 1 (図15)

I 区北東壁際の中央西寄りに位置する。切石基礎建物 1 の下位より検出され、同一の生活面における新旧関係と捉えられた。調査区内では他の遺構と重複せずに単独で確認されたが、北西側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長 78cm、短軸 69

cm、深さ24cmで、坑底面の標高は29.51mを測る。主軸方位はN-37°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑2 (図15)

I区北東壁際の中央に位置する。切石基礎建物の下位より検出され、同一の生活面における新旧関係と捉えられた。東側でピット1と重複して東壁の一部が壊され、北西側は調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面はほぼ平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長86cm、北東-南西方向の現存長69cm、深さ10cmで、坑底面の標高は29.71mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑3 (図15)

調査区南東付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸61cm、短軸53cm、深さ20cmである。坑底面の標高は29.90mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑4 (図15)

調査区北東壁際の中央北寄りに位置する。北東側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整長方形と考えられ、底面はほぼ平らである。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長92cm、短軸51cm、深さ26cmで、坑底面の標高は29.65mを測る。主軸方位はN-34°-Eを指す。

出土遺物 (図16)

遺物はかわらけ20点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけで、口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。

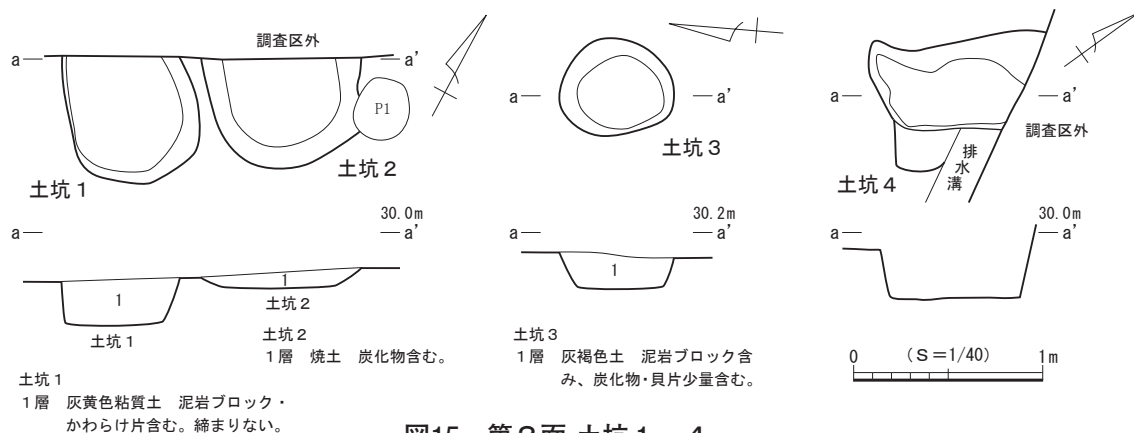


図15 第2面 土坑1～4



図16 第2面 土坑4出土遺物

(4) ピット

第2面では、3基を検出した。いずれも調査区東半に位置する。礎石や礎板を伴うピットはなく、調査区内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は楕円形ないし隅丸方形を呈し、規模は長軸32~55cm、深さ12~69cmを測る。

ピットから遺物は出土しなかった。

(5) 第2面 構成土出土遺物 (図17・18)

第2面構成土中からも遺物が出土しており、このうち21点を図示した。

1~7はロクロ成形によるかわらけで、1の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。8・9は龍泉窯系青磁で、8は水瓶、9は太鼓胴深鉢である。10~15は瀬戸産の製品で、10・11は縁釉小皿、12は卸皿、13・14は直縁大皿、15は折縁深皿である。16は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。17~20は瓦質土器類で、17は香炉、18・19は火鉢、20は土風炉である。21は高嶋産の硯で、裏面に「主俊賢」「不有他妨有也」の刻字がなされている。

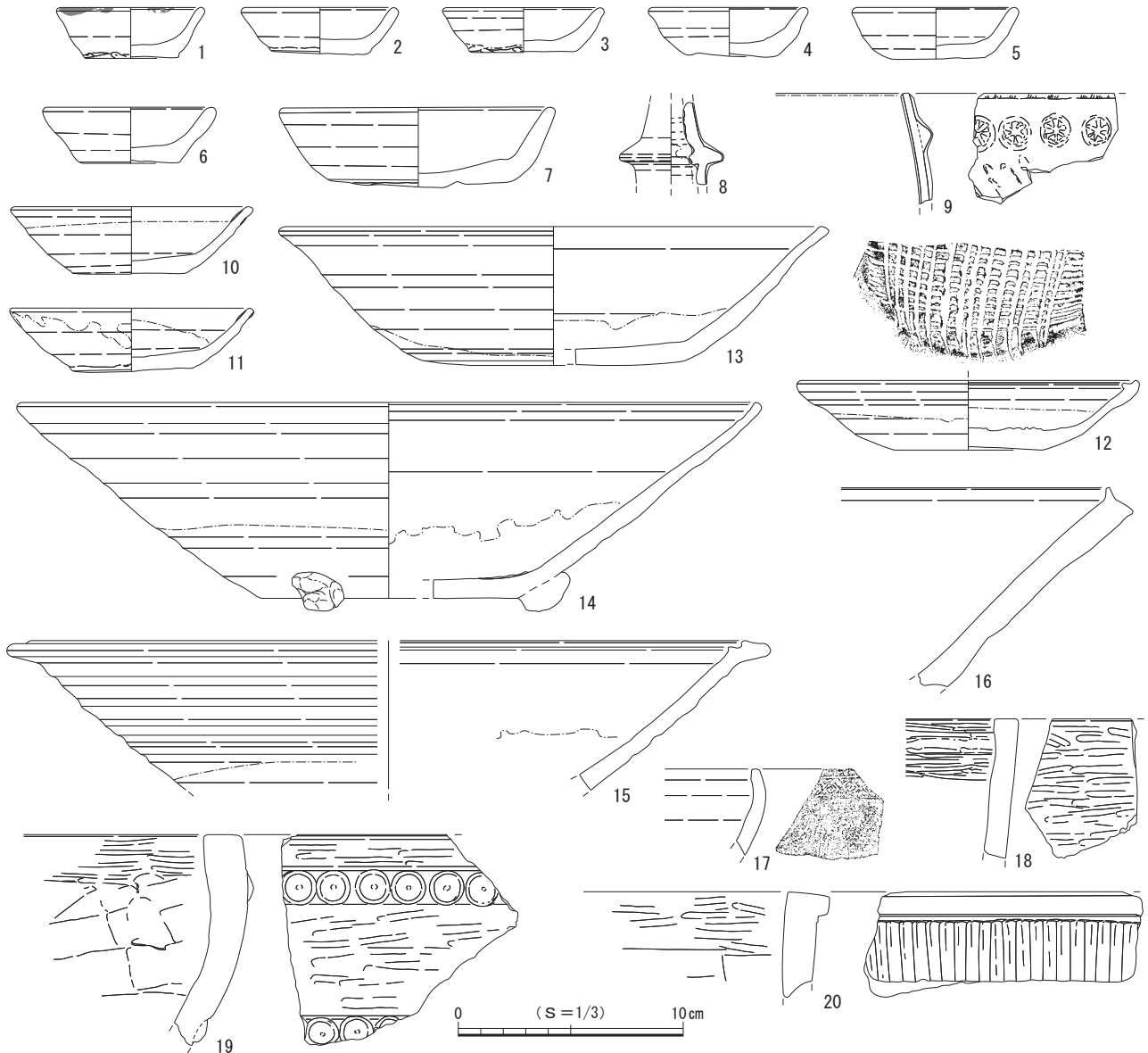


図17 第2面 構成土出土遺物 (1)

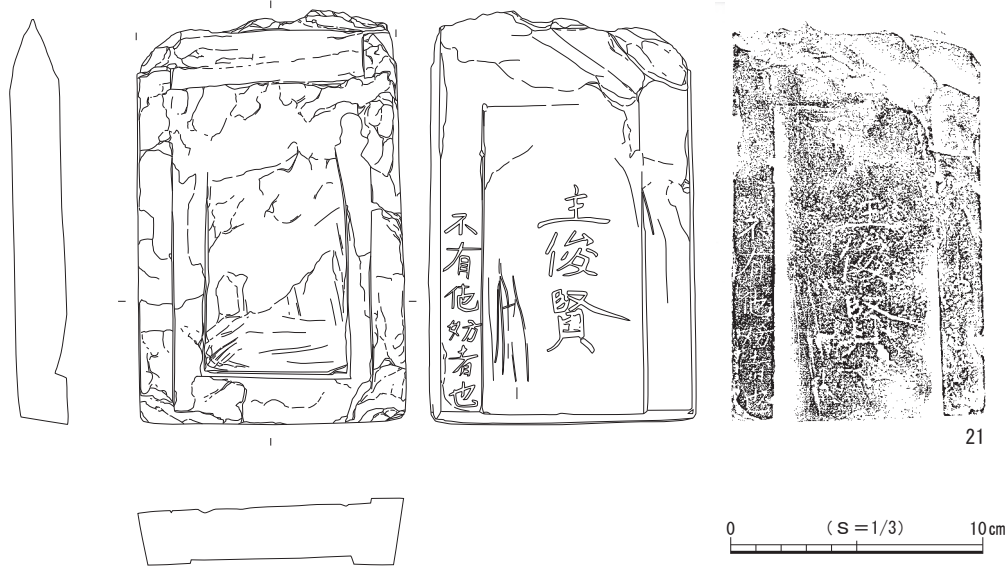


図18 第2面 構成土出土遺物(2)

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構はI・II区の堆積土層の7層上面で検出され、確認面の標高は29.7~29.8mを測る。7層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構2条、土坑9基、ピット22基である(図19)。II区の北側に遺構の空白域が認められるが、それ以外には満遍なく分布する様相が捉えられた。なお、I区の中央やや南を溝状遺構1が北東-南西方向に横断し、その南側に沿って明瞭な整地面の広がり確認された。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図20)

I区の中央やや南に位置し、北東-南西方向に横断して調査区外へと延びている。調査区内では他の遺構と重複せず、北東-南西方向におおむね直線的に延びており、検出した規模は現存長約5.0m、幅80cm、深さは最大で73cmを測る。底面の標高は北東側で29.20m、南西側で29.14

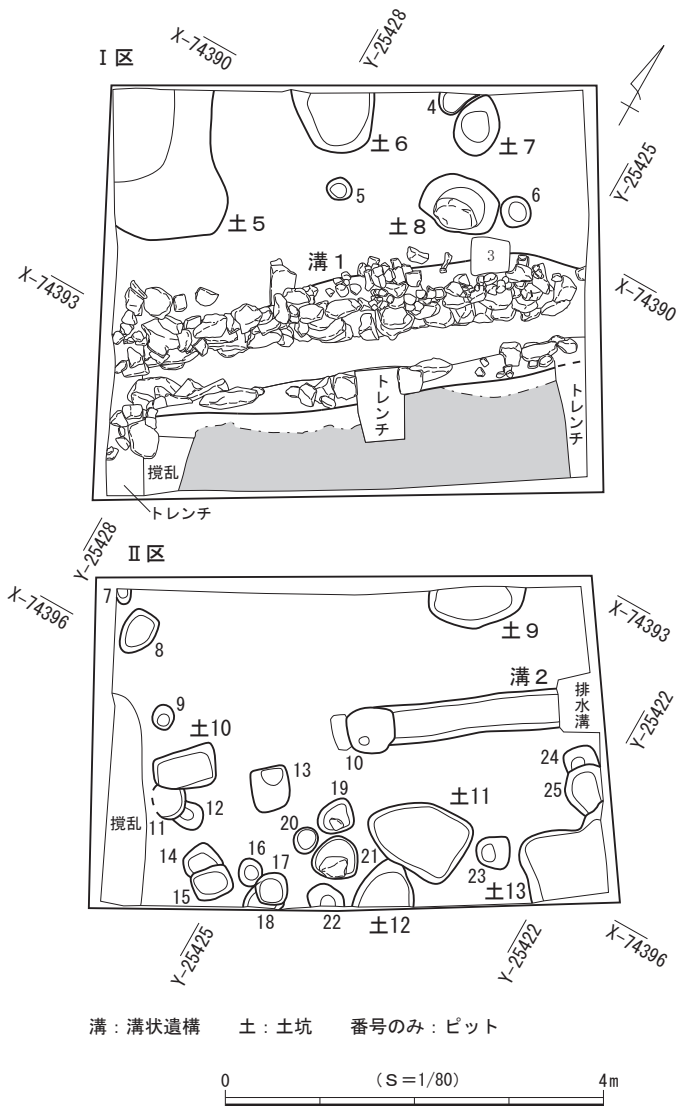


図19 第3面 遺構分布図

mで、北東から南西に向かってわずかに傾斜する。壁はやや開いて立ち上がり、逆台形を呈する。主軸方位はN-52°-Eを指す。

両側壁面には泥岩の切石を用いた護岸が築かれる。北西壁面は検出範囲では全面に切石による護岸が築かれ、部分的に崩れて配置が乱れているところもあるが、切石は北西面を斜めに揃えて3~6段に積み上げている。護岸の幅は裏込めも含めると45~100cmで、高さは60~78cmを測り、傾斜角は南西側で64度、北東側で47度である。南東壁面は切石の分布がまばらで、残存するところをみると北東側では切石の北西面を揃え3段にわたってほぼ垂直に積み上げられている。切石の大きさは長さ10cm前後のものから60cm大のものまで大小様々であり、全体にややランダムに積み上げている印象を受ける。なお、本址の南東側に沿って明瞭な整地面が検出されている。

本址の掘り方はわずかに湾曲して延びており、壁がやや開き断面形は逆台形を呈する。規模は幅1.60~1.85m、深さ65cm、底面の標高は29.14~29.20mを測る。

出土遺物(図21)

遺物は溝覆土から、かわらけ157点、磁器1点、陶器52点、瓦質土器11点、瓦4点、土製品1点、土師器1点、金属製品1点、掘り方から、かわらけ40点、磁器1点、陶器8点、瓦質土器6点、金属製品2点が出土し、このうち6点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3~5は瀬戸産の陶器類で、3は平碗、4は天目茶碗、5は直縁大皿である。6は瓦質土器の燭台である。

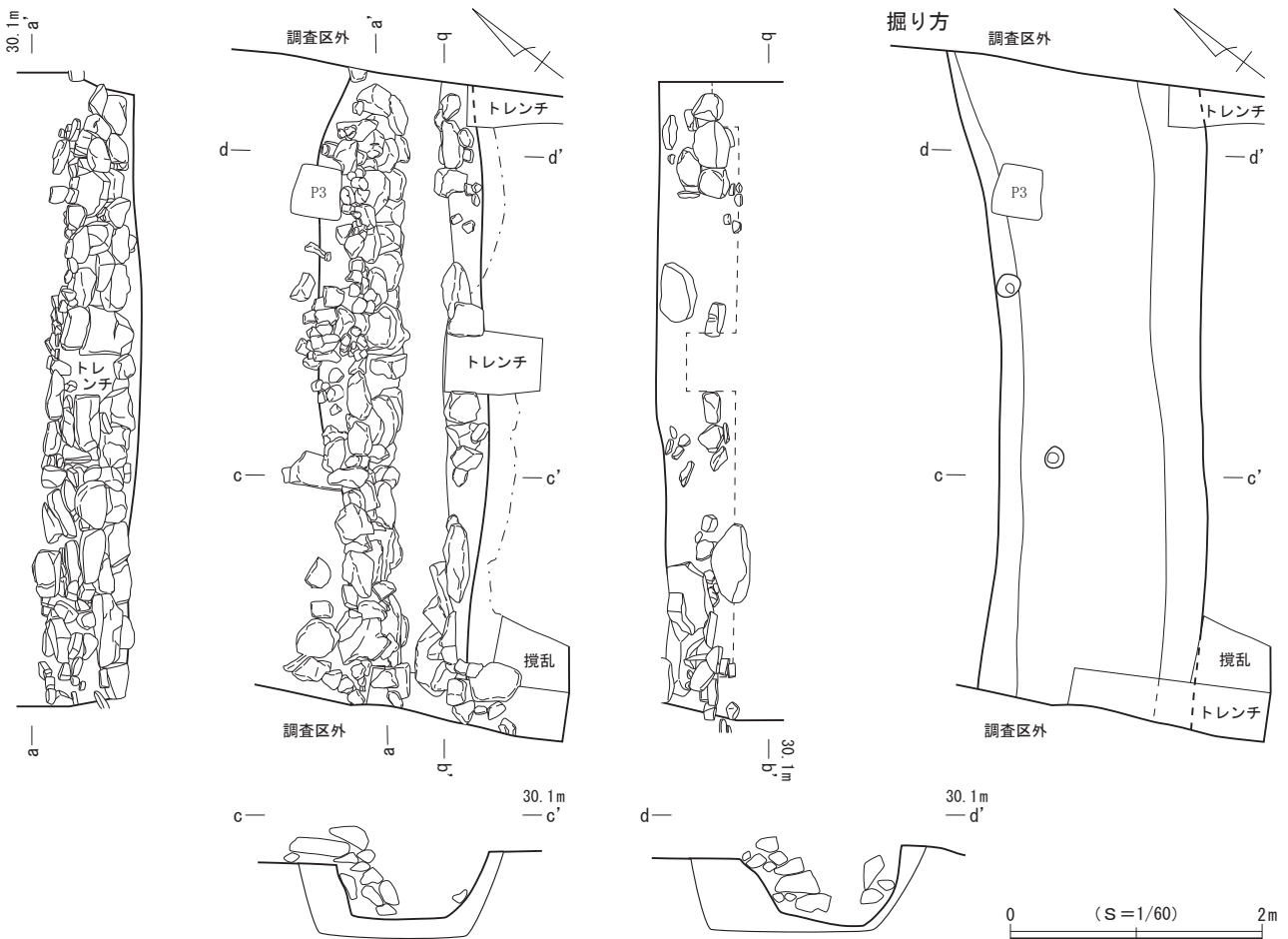


図20 第3面 溝状遺構1

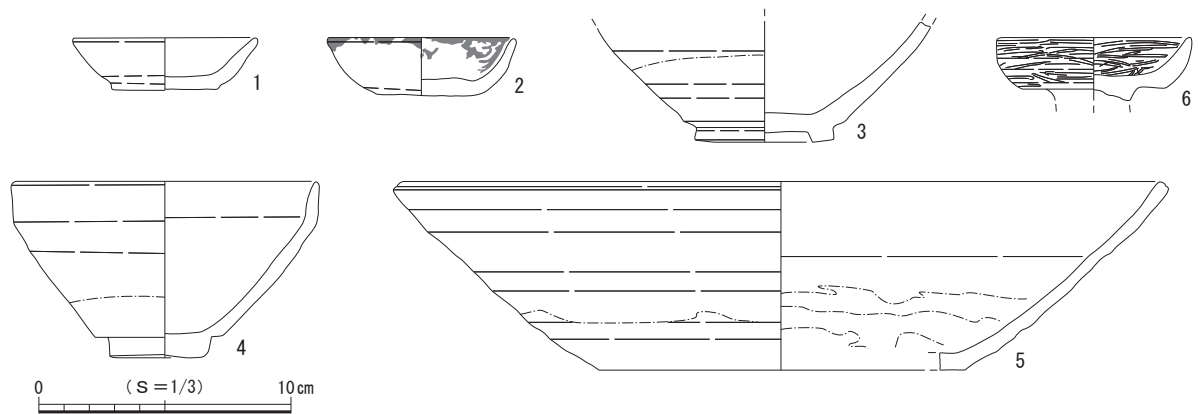


図21 第3面 溝状遺構1 出土遺物

溝状遺構2 (図22)

II区の中央から東側にかけて位置する。I区で検出された溝状遺構1と並行して北東-南西方向に直線的に延び、南西端部はピット10によって壊されるが調査区内に収まると考えられる。北東側は調査区外へと続いている。検出した規模は現存長約1.9m、幅41cm、深さ5~19cmを測り、主軸方位はN-54°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形が逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、底面の標高は中央部で29.66mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑5 (図23)

I区の西隅に位置する。調査区内では単独で検出されたが、西側が調査区外へ伸びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整形と考えられ、底面は南に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長1.60m、南北現存長1.20m、深さ48cmで、坑底面の標高は29.10mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑6 (図23)

I区の北西壁際中央に位置する。調査区内では単独で検出されたが、北西側が調査区外へ伸びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はほぼ平らである。西壁は大きく開き、それ以外の壁面はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長88cm、北西-南東方向の現存長61cm、深さ18cmで、坑底面の標高は29.63mを測る。

遺物はかわらけ7点、陶器5点が出土した。

土坑7 (図23)

I区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は北側が尖る略楕円形を呈し、

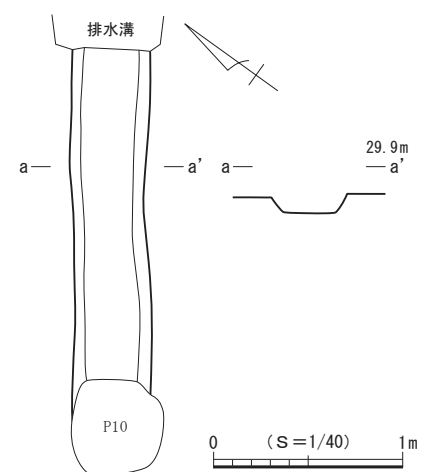


図22 第3面 溝状遺構2

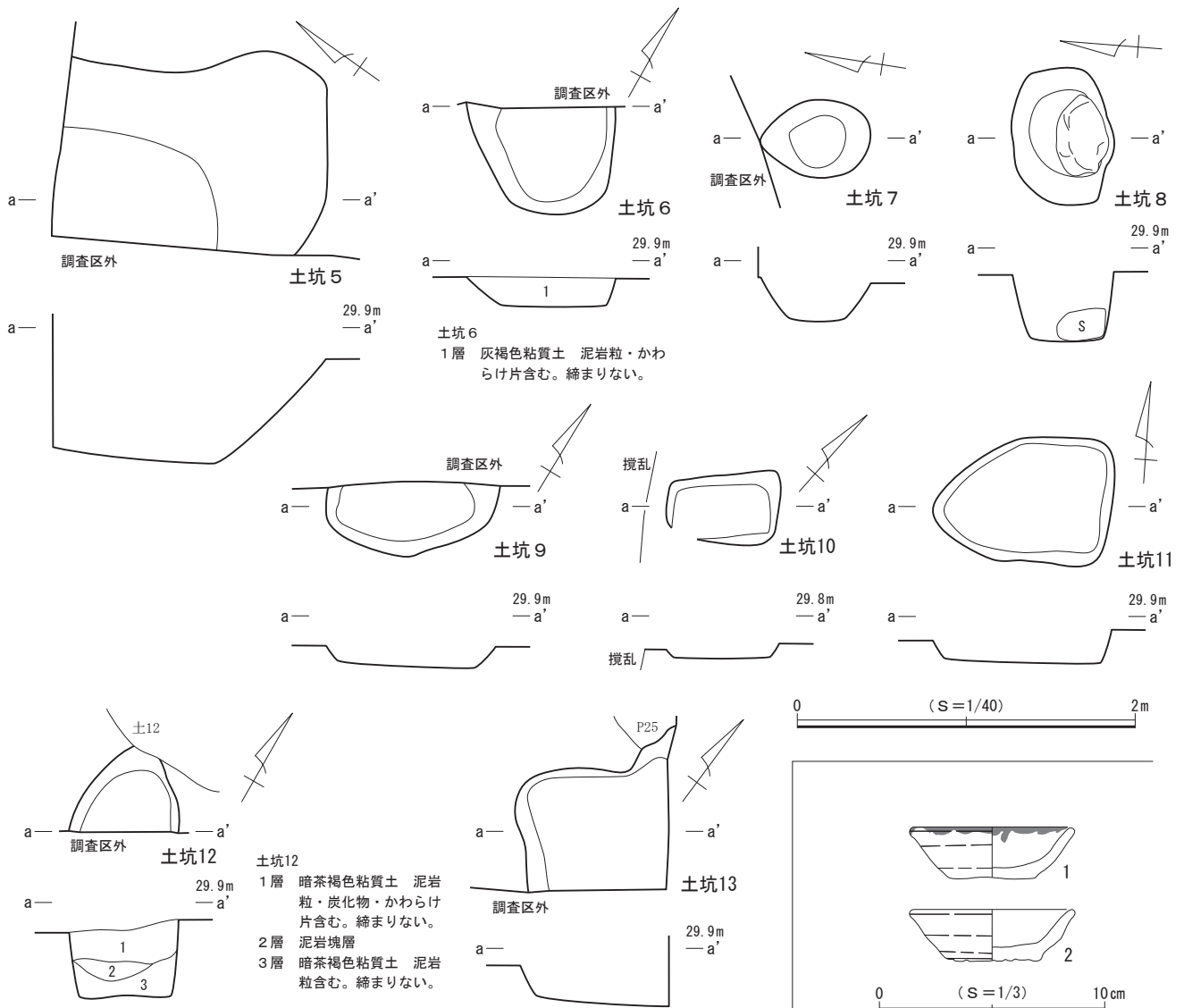


図23 第3面 土坑5～13

図24 第3面 土坑13出土遺物

底面はわずかに湾曲する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸46cm、深さ26cmである。坑底面の標高は29.55mを測る。主軸方位はN-9°-Wを指す。

遺物は磁器1点が出土した。

土坑8 (図23)

I区中央北寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はごくわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形に近い形状を呈する。規模は長軸82cm、短軸60cm、深さ42cmである。坑底面の標高は29.35mを測り、主軸方位はN-84°-Eを指す。南壁寄りの底面上に、長さ45cm、幅31cm、高さ17cmを測る礫が据えられていた。礫の上下両面は平坦であり、礎石の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

土坑9 (図23)

II区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、北西側が調査区外へ延びているた

めに全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は東に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸1.04m、短軸現存長45cm、深さ14cmで、坑底面の標高は29.60mを測る。

遺物はかわらけ2点、陶器2点、金属製品1点が出土した。

土坑10 (図23)

Ⅱ区南西壁付近の中央に位置する。南側でピット11と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸67cm、短軸44cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.56mを測る。主軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物はかわらけ8点、磁器1点、陶器3点、石製品1点が出土した。

土坑11 (図23)

Ⅱ区南東壁付近の中央東寄りに位置する。南側で土坑12と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は西側が尖り東側が直線的な不整楕円形を呈し、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.06m、短軸76cm、深さ18cmで、坑底面の標高は29.63mを測る。主軸方位はN-85°-Eを指す。

遺物は陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑12 (図23)

Ⅱ区南東壁際の中央に位置する。北側で土坑11と重複して北壁の一部が壊され、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、略楕円形と考えられ、底面は中央付近がやや高くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は南北現存長50cm、東西現存長64cm、深さ24cmで、坑底面の標高は29.34mを測る。主軸方位はN-16°-Wを指す。

遺物はかわらけ2点が出土した。

土坑13 (図23)

Ⅱ区の東隅に位置する。北西側でピット25と重複して東側を壊し、東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、不整形と考えられ、底面は東に向かった傾斜する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.00m、北東-南西方向の現存長90cm、深さ23cmで、坑底面の標高は14.88mを測る。

出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ7点、陶器3点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけであり、1の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。

(3) ピット

第3面では、22基を検出した。Ⅱ区の南半部に集中して分布するが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかつた。平面形は円形と楕円形、隅丸方形を基調とし、規模は長軸26~55cm、深さ3~49cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

以下、礎石が据えられたピット2基を図示し、説明する。

ピット19(図25)

Ⅱ区の中央南寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は南西側が外側に張り出す不整円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸39cm、短軸33cm、深さ12cmを測り、礎石がピット中央東寄りの底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ14cm、幅11cm、高さ7cmを測り、上面の標高は29.68mである。

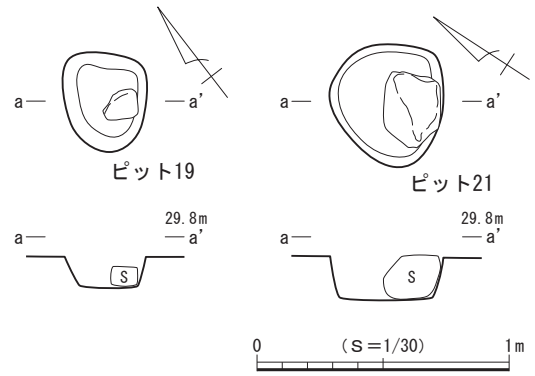


図25 第3面 ピット19・21

ピット21(図25)

Ⅱ区の南東壁付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は南西側が外側にやや張り出す略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸48cm、短軸45cm、深さ14cmを測り、礎石がピット南壁際の底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ29cm、幅22cm、高さ16cmを測り、上面の標高は29.74mである。

(4) 第3面 遺構外出土遺物(図26)

第3面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

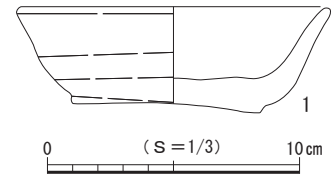


図26 第3面 遺構外出土遺物

(5) 第3面 構成土出土遺物(図27・28)

第3面構成土中からも遺物が出土しており、このうち14点を図示した。

1～7はロクロ成形によるかわらけで、3・5の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。8・9は瀬戸産の縁釉小皿、10・11は常滑産で、10はI型式の古いタイプの甕、11は片口鉢Ⅱ類である。12は瓦質土器の香炉、13は平瓦である。14は3面に使用痕が観察される砥石である。なお、鋳型の可能性がある鉄製品が出土しており、写真資料として掲載した(図版10-5)。

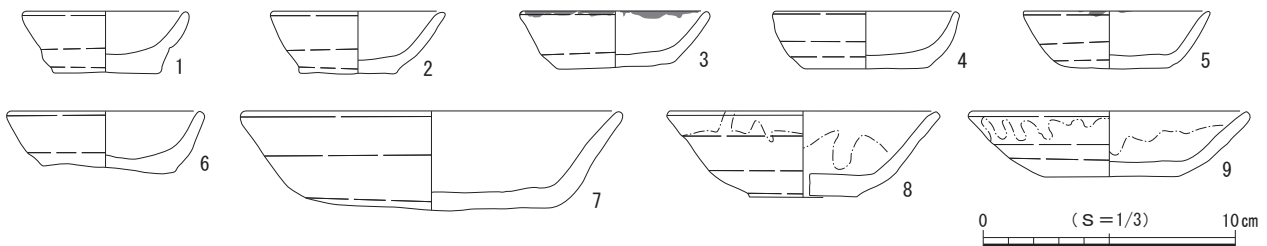


図27 第3面 構成土出土遺物(1)

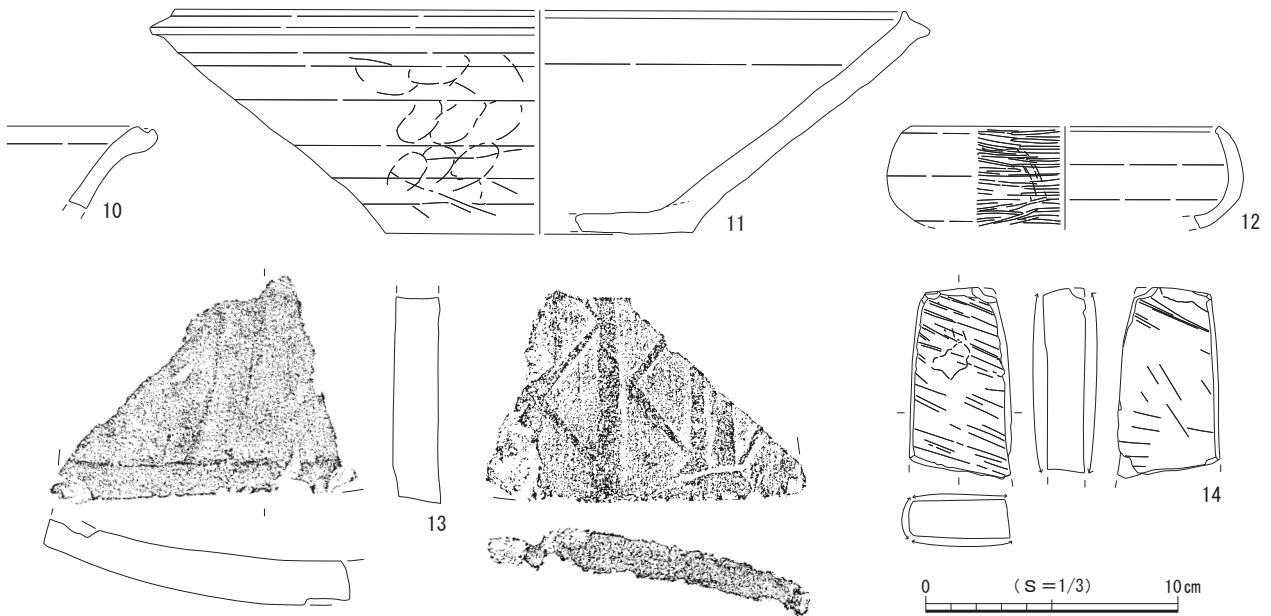


図28 第3面 構成土出土遺物(2)

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の10層上面で検出され、確認面の標高は29.5～29.7mを測る。10層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑7基、ピット19基である(図29)。I区は南半を第3面で検出された溝状遺構1によって壊されており、本来の生活面の様相は明らかでない。遺構はII区の北半に集中して検出されており、II区の南半は遺構の空白部となり明瞭な整地層が広がっている。I区では南側に遺構がまばらに分布する。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構3(図30)

I区の東隅付近に位置する。北西-南東方向にほぼ直線的に延び、北西端部は第3面の溝状遺構1によって壊され、南東端部もピット27によって壊されている。検出した規模は現存長90

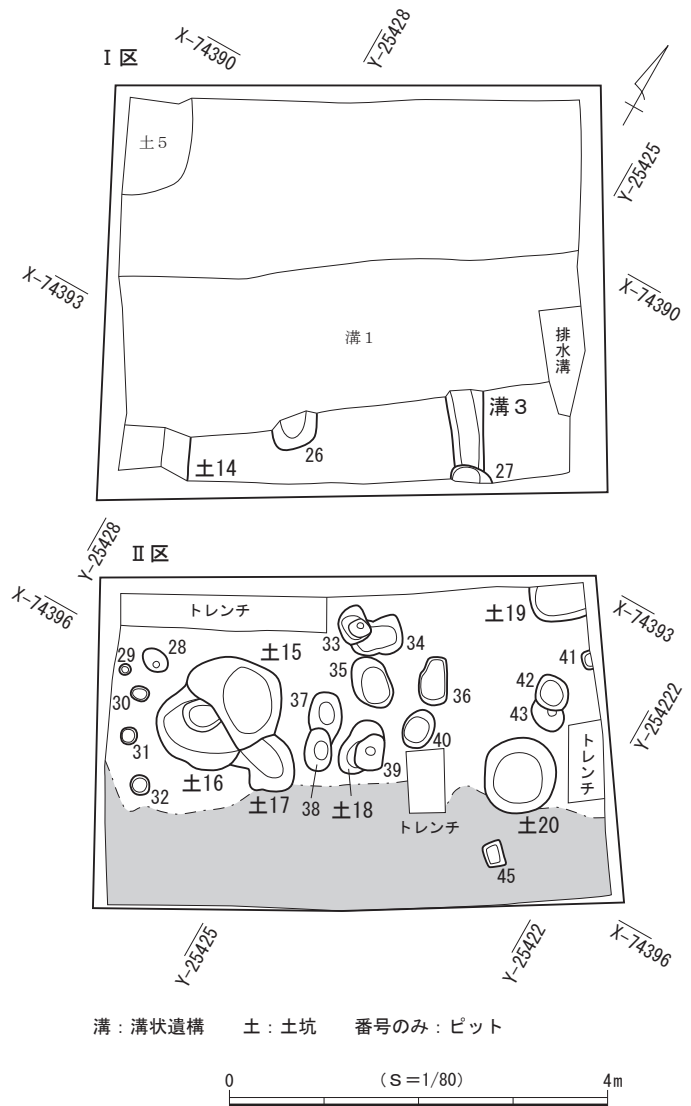


図29 第4面 遺構分布図

cm、幅30～40cm、深さ19cmを測り、主軸方位はN-36°-Wを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、底面の標高は北西端で29.31mを測る。

遺物は出土しなかった。

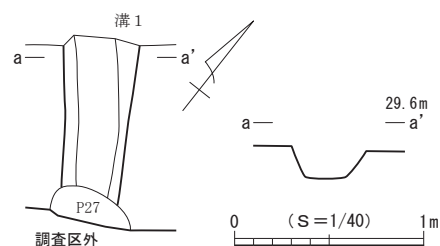


図30 第4面 溝状遺構3

(2) 土坑

土坑14 (図33)

I区の南隅に位置する。北西側を第3面の溝状遺構1によって壊され、加えて南側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は平らで、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈すると考えられる。規模は東西現存長64cm、南北現存長48cm、深さ35cmで、坑底面の標高は29.19mを測る。

出土遺物 (図31)

遺物はかわらけ1点が出土し、それを図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

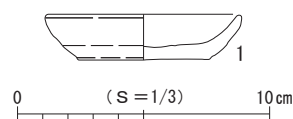


図31 第4面 土坑14出土遺物

土坑15 (図33)

II区中央の西寄りに位置する。南側で土坑16、東側は土坑17と重複し、北側と西側を壊している。平面形は西側が突出する不整楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.09m、短軸86cm、深さ61cmで、坑底面の標高は28.94mを測る。主軸方位はN-29°-Wを指す。

出土遺物 (図32)

遺物はかわらけ28点、陶器4点、土器1点、瓦質土器1点、瓦1点、金属製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形による特大のかわらけで、外面には油煤が観察され、灯明具としての使用が認められる。

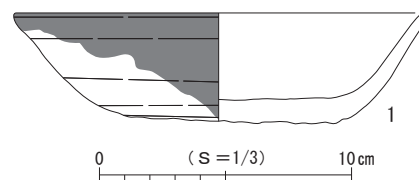


図32 第4面 土坑15出土遺物

土坑16 (図33)

II区中央の西寄りに位置する。北側で土坑15と重複して北側が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はほぼ平らで、西壁寄りに径34cm、深さ20cmを測るピットが検出された。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西97cm、南北現存長65cm、深さ48cmで、坑底面の標高は29.00mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図33)

II区の中央西寄りに位置する。西側で土坑15・16と重複して西側が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は西に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長63cm、短軸55cm、深さ41cmで、坑底面の標高は29.14mを測る。主軸方位はN-74°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

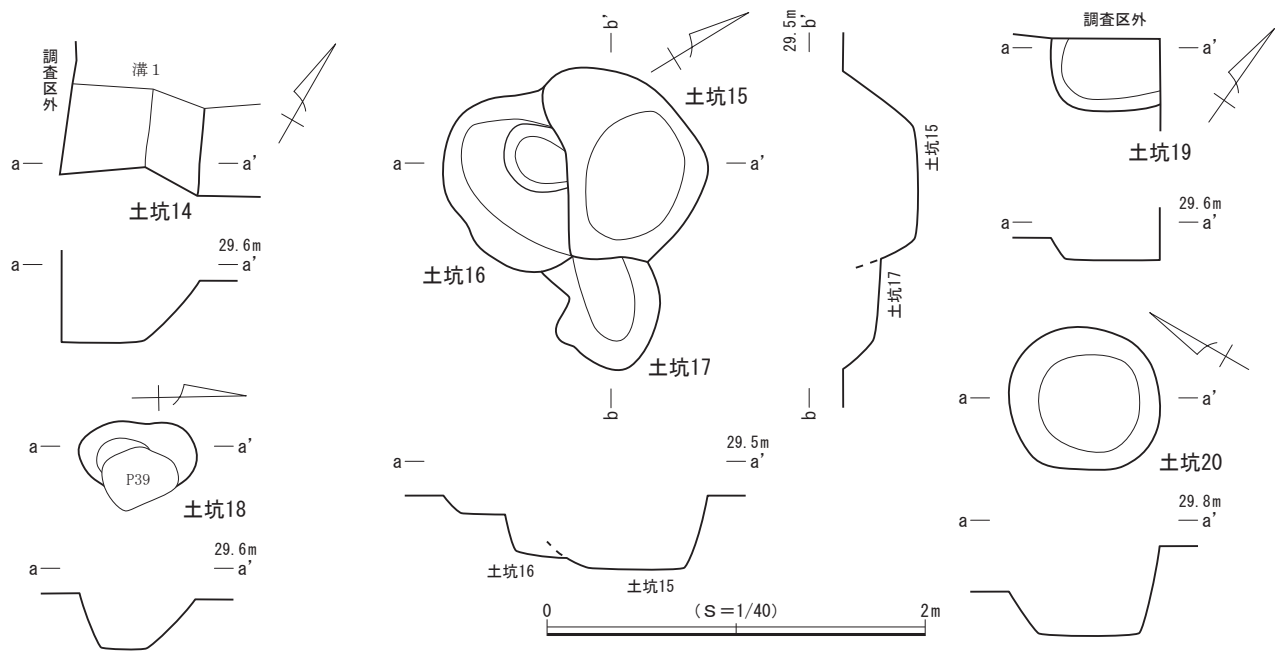


図33 第4面 土坑 14～20

土坑18 (図33)

Ⅱ区の中央に位置する。ピット39と重複して東側の大半が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸62cm、短軸現存長34cm、深さ39cmで、坑底面の標高は29.17mを測る。主軸方位はほぼ南北を指す。

遺物は出土しなかった。

土坑19 (図33)

Ⅱ区の北隅に位置する。北側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は平らで、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長61cm、北西-南東方向の現存長58cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.41mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑20 (図33)

Ⅱ区北東壁付近の中央南寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はわずかに開き、北壁のみやや開いて立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸79cm、短軸76cm、深さ47cmである。坑底面の標高は29.20mを測る。

出土遺物 (図34)

遺物はかわらけ6点、瓦質土器1点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は瓦質土器の火鉢である。

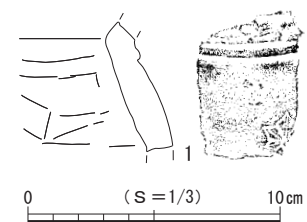


図34 第4面 土坑20出土遺物

(3) ピット

第3面では19基を検出した。主にⅡ区の北西側に分布し、Ⅰ区では南東壁付近から2基を検出したのみである。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は円形と楕円形、隅丸方形を基調とし、規模は長軸12~58cm、深さ6~45cmとばらつきがある。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

(4) 第4面 構成土出土遺物(図35)

第4面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち8点を図示した。

1~3はロクロ成形によるかわらけで、3の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。4・5は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。6は瓦質土器の香炉である。7・8は石製品で、7は硯、8は2面に使用痕跡が観察される砥石である。

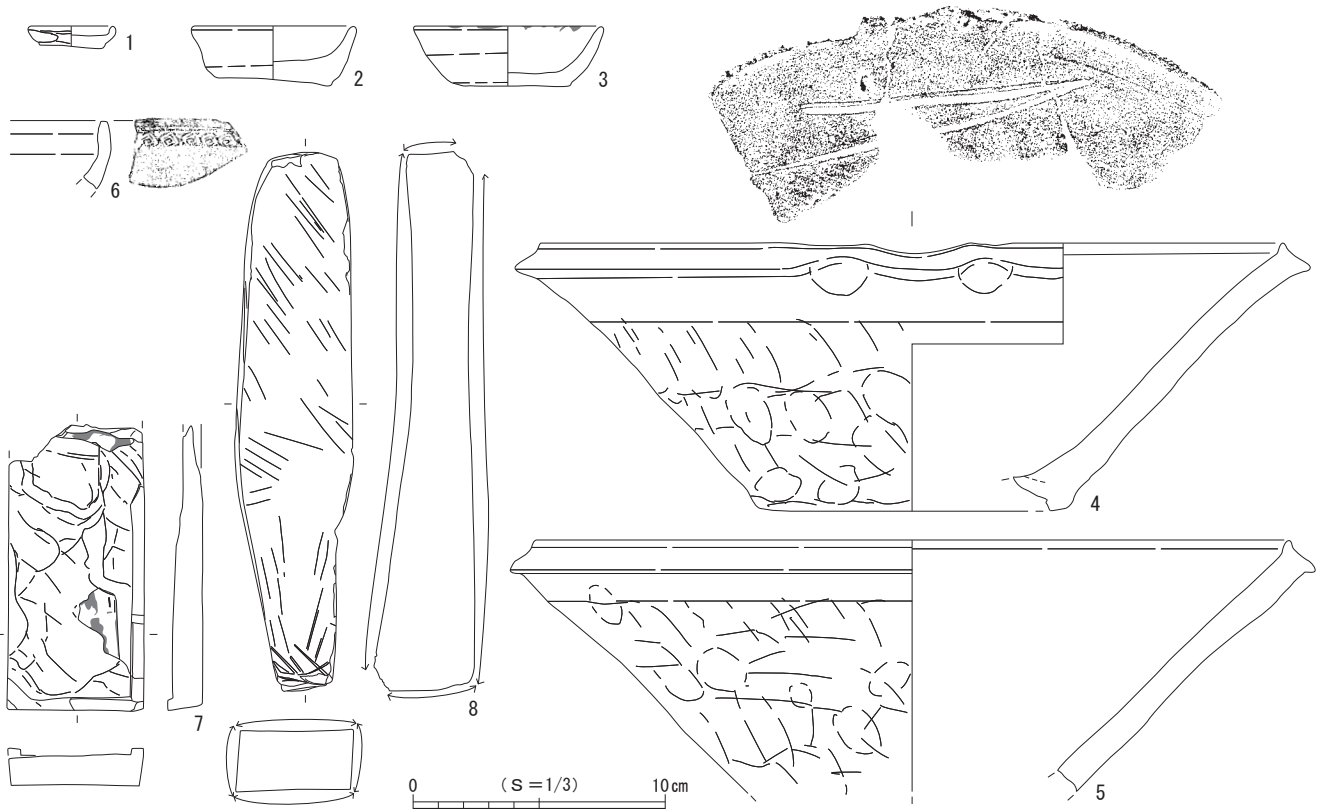


図35 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は堆積土層の13層上面で検出され、確認面の標高は29.1~29.3mを測る。13層は暗青灰色シルト層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑7基、ピット9基である(図36)。Ⅰ区には明瞭な整地面が全面にわたって広がり、調査区の中央から南にかけて溝状遺構が北東-南西方向に横断する。Ⅱ区は中央から南西側に遺構が偏り、重複して検出されているものもある。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、ガラス製品、木製品、金属製品などが出

土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構 4 (図38)

I区中央から南にかけて位置する。北東-南西方向に横断し、両端部とも調査区外へと続いている。調査区内では他の遺構と重複せず、総体としてはほぼ直線的に延びるが、北西側の上端は緩やかに蛇行している。検出した規模は現存長約5.0m、幅1.48~1.80m、深さ1.0mを測り、底面の標高は北東側で28.48m、南西側で28.45mで、北東から南西に向かってごく緩やかに傾斜する。壁は南東壁と北西壁で開く角度と形状が異なっており、北西壁の北半は壁の上位に段をもち、南半では中位から上位にかけて二つの段が形成される。南東壁は中位に段をもち、断面形は逆台形状を呈する。主軸方位はN-49°-Eを指す。

両側壁面には泥岩の切石を用いた護岸が築かれる。北西壁面は検出範囲では北東側のみ切石による護岸が認められ、長さ約2m、幅約50cmにわたって切石が配列される。南東壁面は検出範囲ではほぼ全面に切石による護岸が築かれ、切石は北西面を斜めに揃えて2~4段に積み上げている。護岸の規模は現存長4.75m、幅は最大で約60cm、高さは約50cmを測り、傾斜角は南西側で77度、北東側で47度である。切石の大きさは長さ10cm前後のものから50cm大のものまで大小様々であり、一部は崩れて配置が乱れているところもあるが、全体にややランダムに積み上げている印象を受ける。

なお、本址の北西と南東側に、明瞭な整地面の広がりを確認した。

出土遺物 (図37)

遺物は覆土から、かわらけ62点、磁器1点、陶器12点、瓦質土器2点、石製品2点、木製品1点、金属製品4点、掘り方から、陶器4点、金属製品1点が出土し、このうち7点を図示した。

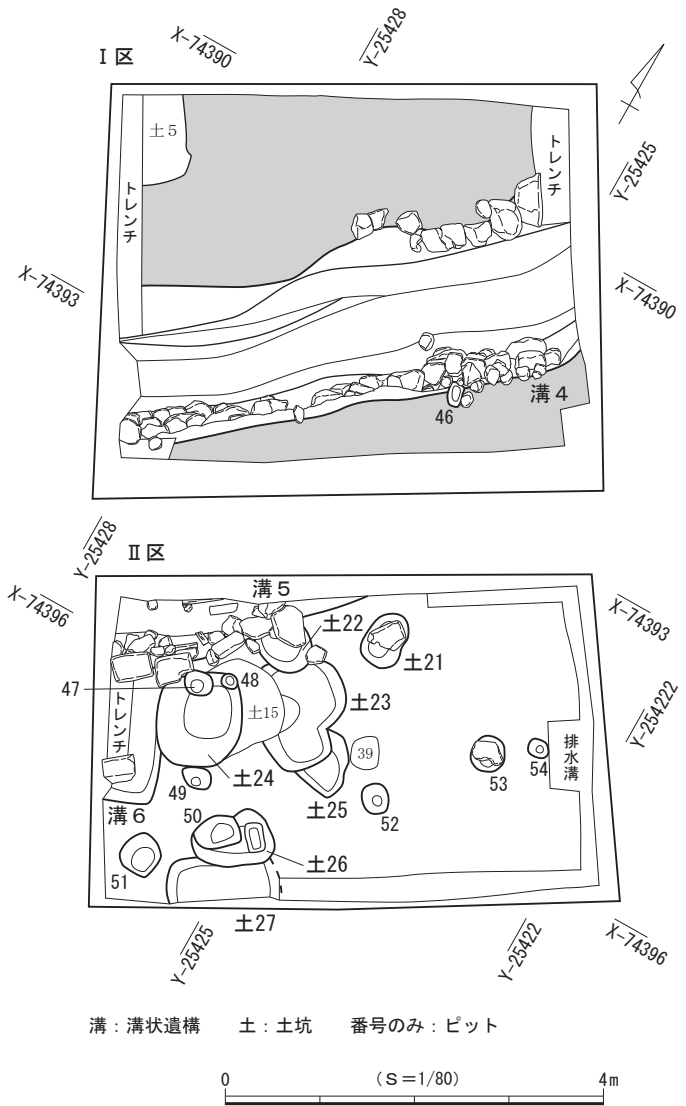


図36 第5面 遺構分布図

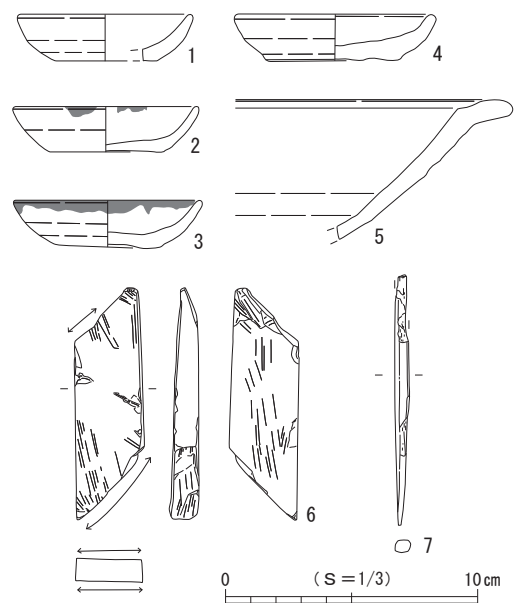


図37 第5面 溝状遺構4 出土遺物

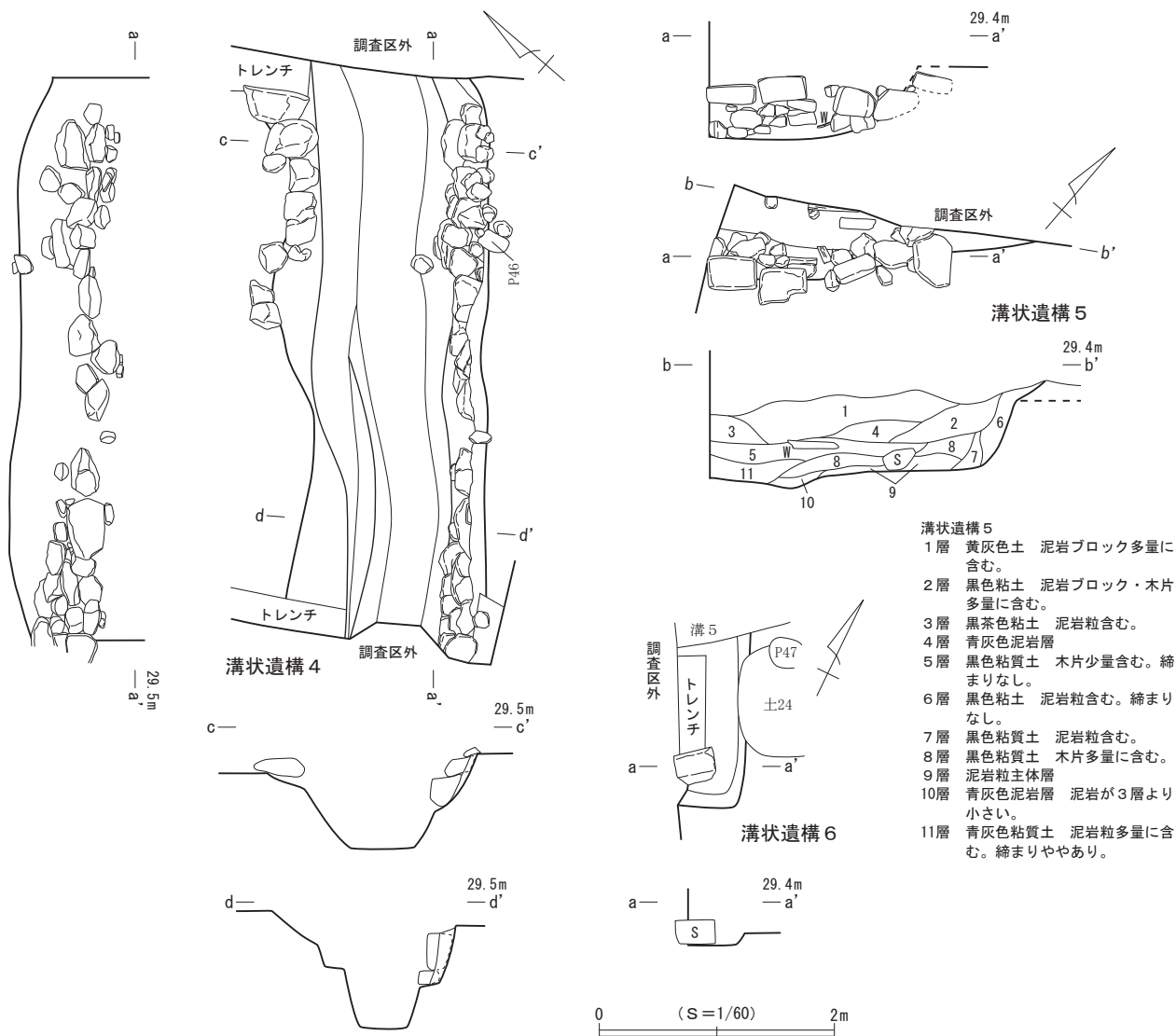


図38 第5面 溝状遺構4～6

1～4はロクロ成形によるかわらけで、2・3の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。5は瀬戸産の折縁深皿である。6は3面に使用痕跡が観察される砥石である。7は箸状の木製品である。なお、鉄滓が出土しており、写真資料として掲載した(図版11-5)。

溝状遺構5 (図38)

Ⅱ区西隅から北西壁中央にかけて位置する。南東壁の一部を検出したのみであり、主体は調査区外の北西側に展開していると考えられる。本址と直交して延びる溝状遺構6を南側で壊している。北東-南西方向に延びる溝で、検出した規模は現存長約2.8m、幅80cm、深さ91cmを測り、主軸方位はN-46°-Eを指す。調査区壁面の土層断面観察からは、壁はやや開いて立ち上がる様子が捉えられ、底面はわずかな凹凸をもつ。底面の標高は28.40mを測る。

壁面には切石を3～4段に積み上げた護岸が築かれている。護岸の規模は現存長2.05m、幅60cm前後、高さ50cmを測る。切石の大きさは長さ10cm未満のものから45cm大のものまで大小様々であり、一部は崩れて配置が乱れているところもあるが、全体に丁寧に積み上げている。

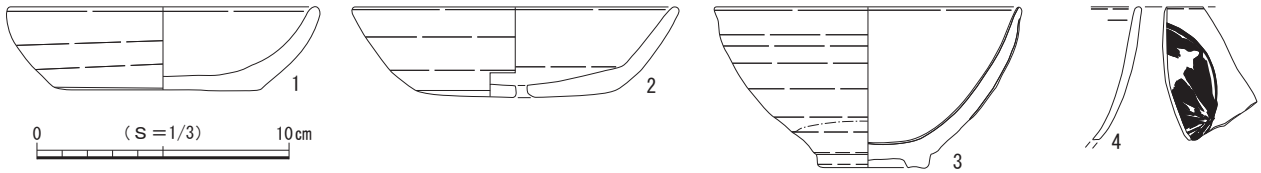


図39 第5面 溝状遺構5出土遺物

出土遺物 (図39)

遺物は覆土から、かわらけ8点、陶器4点、瓦1点、木製品3点、掘り方からかわらけ25点、陶器7点、瓦3点、木製品1点が出土し、このうち4点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけであり、2の底部中央

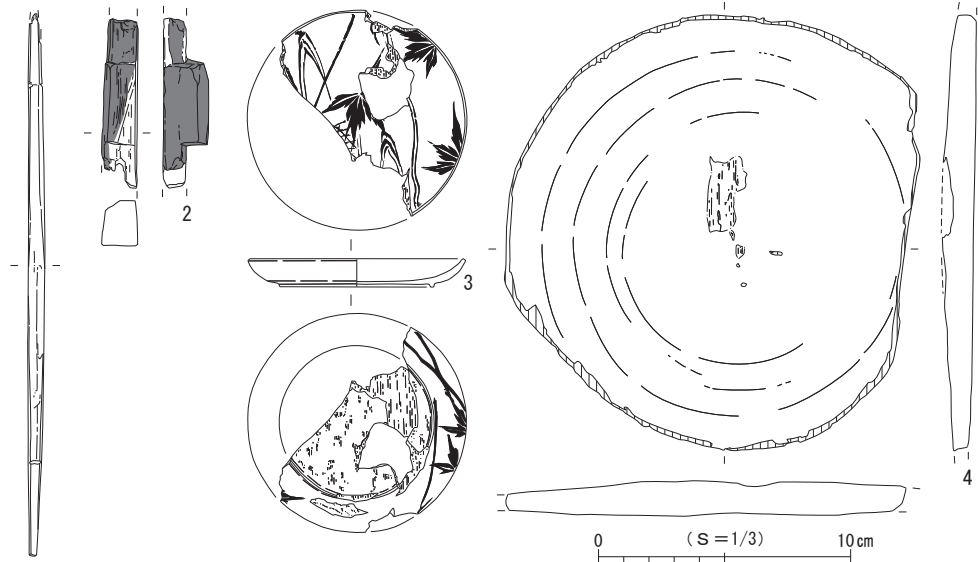


図40 第5面 溝状遺構6出土遺物

には穿孔が1ヵ所遺存する。3は瀬戸産の天目茶碗、4は漆器の椀である。

溝状遺構6 (図38)

Ⅱ区西壁際に位置する。北西-南東方向に延び、西端部は溝状遺構5によって壊されるが南側は調査区内に収まる。東側で土坑24と重複し、北東壁が壊されている。検出した規模は現存長約1.5m、幅56cm、深さ16cmを測り、主軸方位はN-23°-Wを指す。壁は南側ではやや開いて立ち上がり、底面はほぼ平らである。底面の標高は29.04mで、底面直上から長さ35cm、幅25cm、高さ20cmの切石が出土した。

出土遺物 (図40)

遺物は木製品4点が出土し、それを図示した。

1は箸状、2は用途不明の部材、3は漆器皿、4は漆器蓋である。

(2) 土 坑

土坑21 (図41)

Ⅱ区北西壁付近の中央やや東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は東側がわずかにくぼむ略楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸60cm、短軸43cm、深さ18cmである。坑底面の標高は29.02mを測る。主軸方位はN-67°-Wを指す。底面の直上に長さ40cm、幅29cm、高さ26cmの礫が据えられており、礎石をもつピットであった可能性がある。

遺物は出土しなかった。

土坑22 (図41)

Ⅱ区北西壁付近の中央南西寄りに位置する。東側で土坑23と重複して北西壁を壊し、西側で溝状遺構5と重複して西壁が壊されているが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長60cm、短軸54cm、深さ21cmで、坑底面の標高は28.97mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑23 (図41)

Ⅱ区中央の北西寄りに位置する。東側で土坑25と重複して西側を壊し、北西側で土坑22、南西側で土坑15と重複して西側を壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.18m、短軸現存長97cm、深さ15cmで、坑底面の標高は29.05mを測る。主軸方位はN-58°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑24 (図41)

Ⅱ区の南西壁付近中央に位置する。南西側で溝状遺構6と重複して北東壁の一部を壊し、北側でピット47・48と重複して壊されるが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、不整形円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸99cm、短軸90cm、深さ31cmで、坑底面の標高は28.80mを測る。

遺物はかわらけ8点が出土した。

土坑25 (図41)

Ⅱ区のほぼ中央に位置する。西側で土坑23と重複して西側を壊され、全体の半分強が失われているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整形円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長61cm、東西現存長50cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.09mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑26 (図41)

調査区の南隅付近に位置する。

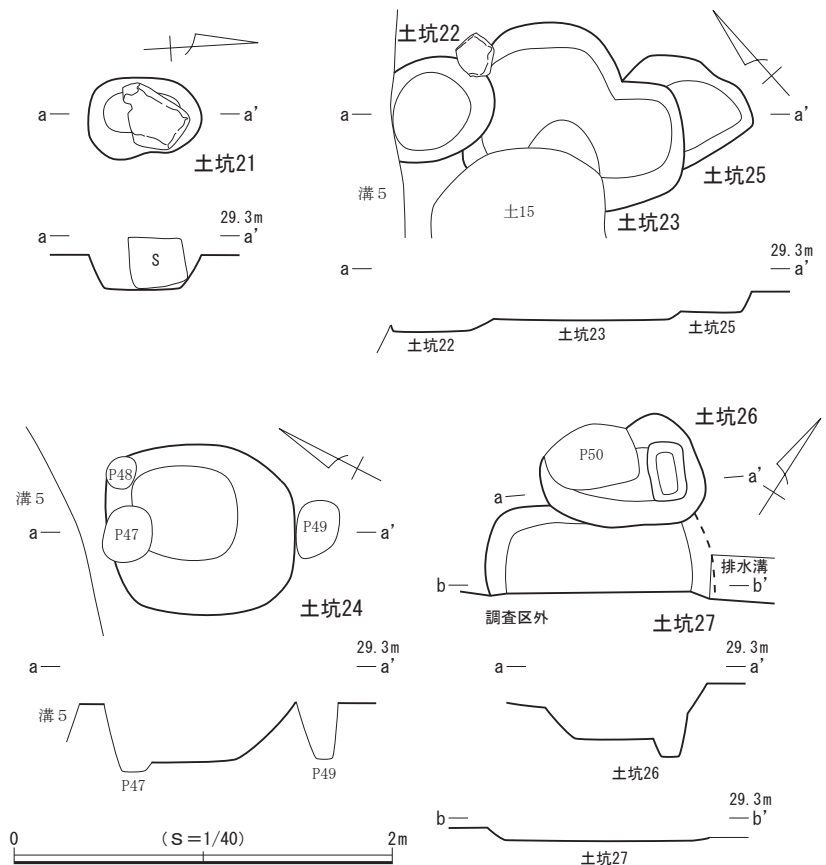


図41 第5面 土坑 21~27

南東側で土坑27と重複して北西壁の一部を壊し、西側ではピット50と重複して壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略楕円形と考えられ、底面は平らで、北東壁際から長軸30cm、深さ10cmを測る長方形のピットが検出された。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は86cm、短軸59cm、深さ38cmで、坑底面の標高は28.92mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑27 (図41)

Ⅱ区の南隅に位置する。北側で土坑26と重複して北壁が壊され、南東側は調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.10m、短軸現存長55cm、深さ8cmで、坑底面の標高は29.19mを測る。主軸方位はN-54°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

(3)ピット

第5面では、9基を検出した。Ⅰ区からは1基、Ⅱ区から8基確認された。分布は全体にまばらで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径18~48cm、深さ13~44cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

以下、礎石が据えられたピット53を図示し、説明する。

ピット53 (図42)

Ⅱ区の中央東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸38cm、短軸35cm、深さ14cmを測り、礎石がピット中央北寄りの底面上に据えられていた。礎石の大きさは長さ34cm、幅23cm、厚さ15cmを測り、上面の標高は29.18mである。

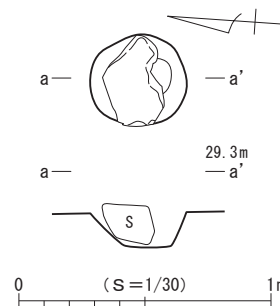


図42 第5面 ピット53

(4)第5面 遺構外出土遺物 (図43・44)

第5面では、遺構以外から遺物が出土しており、このうち10点を図示した。

1は青白磁の皿、2は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類、3~6は瀬戸産の陶器類で、3・4は天目茶碗、5は小杯、6は広口壺である。7は備前産の播鉢である。8は瓦質土器の香炉、9は銅合金製で留具と思われる製品である。10はガラス製のトンボ玉で、乳白色と赤紫色を呈する。孔内に紐が残存していた。

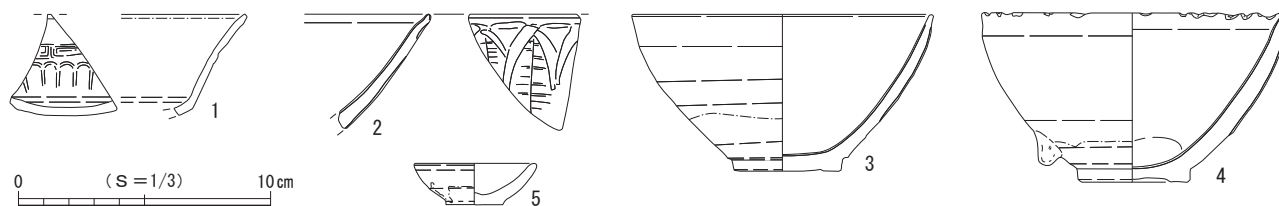


図43 第5面 遺構外出土遺物(1)

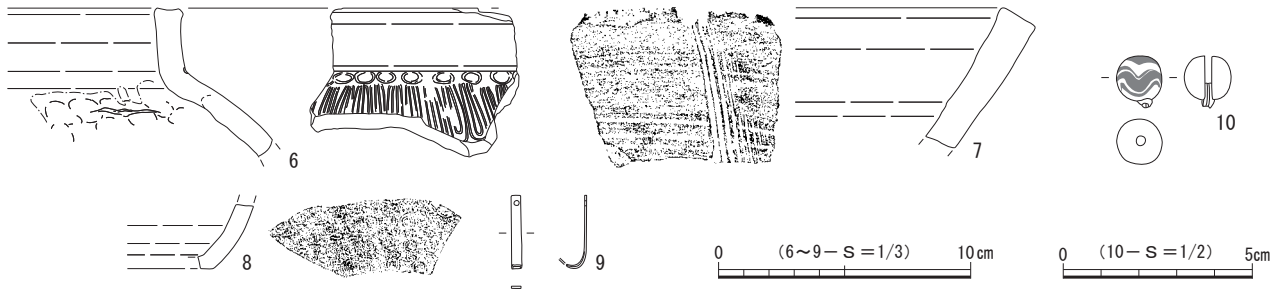


図44 第5面 遺構外出土遺物(2)

第6節 第6面の遺構と遺物

6面の遺構は堆積土層の17層上面で検出され、確認面の標高は28.8~29.0mを測る。17層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑4基、不明遺構1基、ピット41基である(図45)。I区は第5面で確認された溝状遺構4によって南東側が壊されており、遺構が失われている可能性がある。II区は全域にわたって遺構が分布し、なかには重複して検出されたものも認められる。また、II区からは土坑とピットが集中して検出され、I区の遺構群とは様相が異なっている。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品、骨製品、金属製品など出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構7(図46)

I区北西壁付近の中央に位置する。北東-南西方向に延び、南西端部は不明遺構1によって壊されるが北東側は調査区内に収まる。北東端は丸みを帯びず直線的な形状で、北西壁は外側へ膨らみ湾曲する。検出した規模は現存長約1.1m、幅39~61cm、深さ7cmを測り、主軸方位はN-43°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、標高は中央部で28.65mを測る。

南西部分は確認面の高さによる影響で掘り方が消失するが、北西壁の延長上から杭を伴う板材が検出され、おそらく本址に伴う木組の護岸跡と推定される。木組に用いる板材の大きさは、長さ89cm、幅10

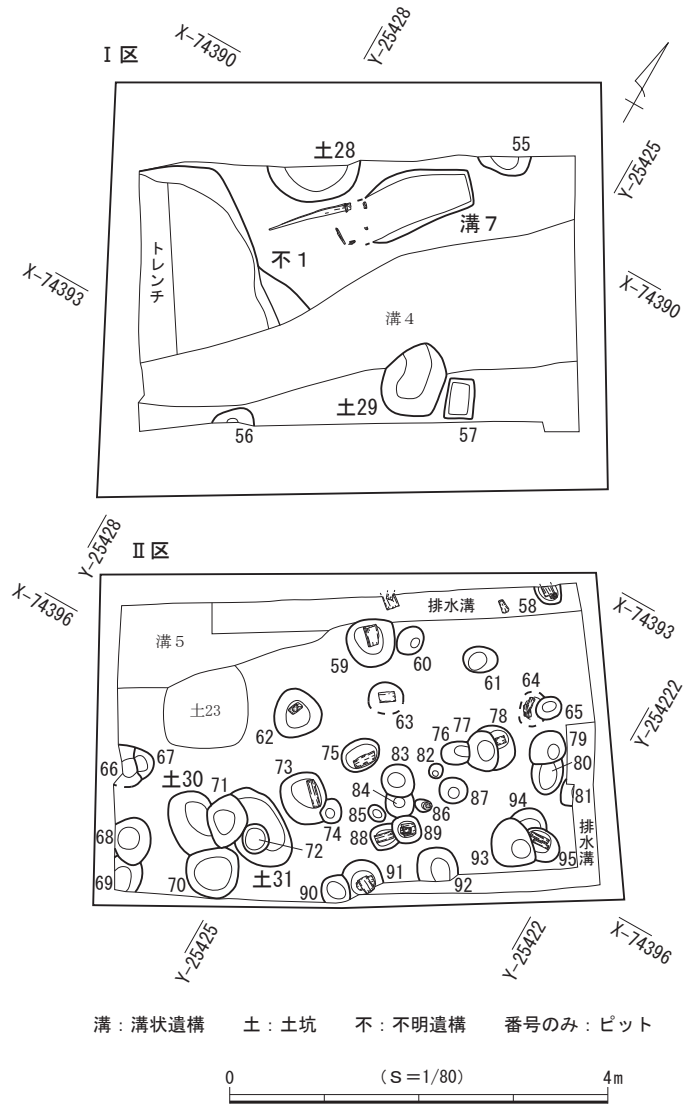


図45 第6面 遺構分布図

cm、厚さ2cmで、この木組を含めた場合の本址の現存長は約2.2mである。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑28 (図48)

I区北西壁際の中央西寄りに位置する。調査区内では他の遺構と重複せず単独で検出されたが、北西側が調査区

外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はわずかに湾曲する。壁は開き、西壁はなだらかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長98cm、北西-南東方向の現存長39cm、深さ23cmで、坑底面の標高は28.63mを測る。

遺物はかわらけ12点、磁器1点が出土した。

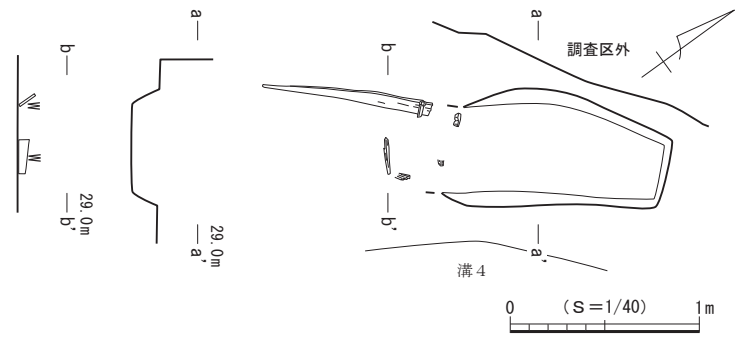


図46 第6面 溝状遺構7

土坑29 (図48)

I区南東壁際の中央東寄りに位置する。北側を第5面で確認された溝状遺構4に壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長77cm、東西65cm、深さ42cmで、坑底面の標高は28.46mを測る。

出土遺物 (図47)

遺物はかわらけ5点、陶器1点、瓦1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は熨斗瓦である。

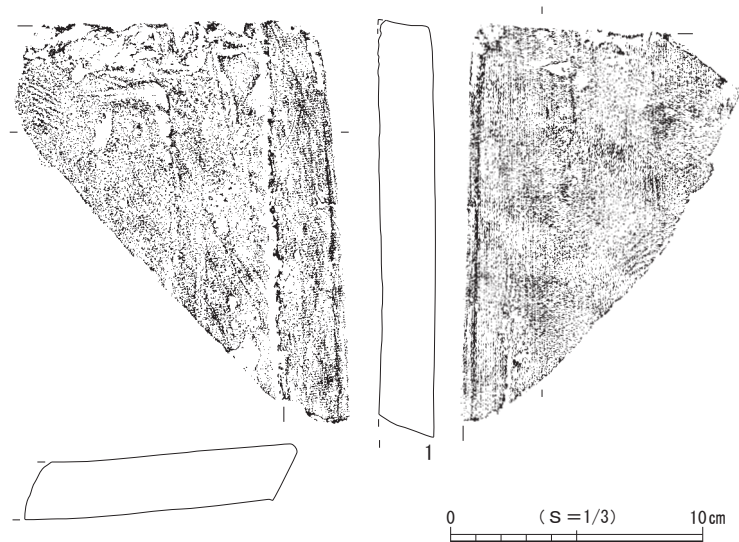


図47 第6面 土坑29出土遺物

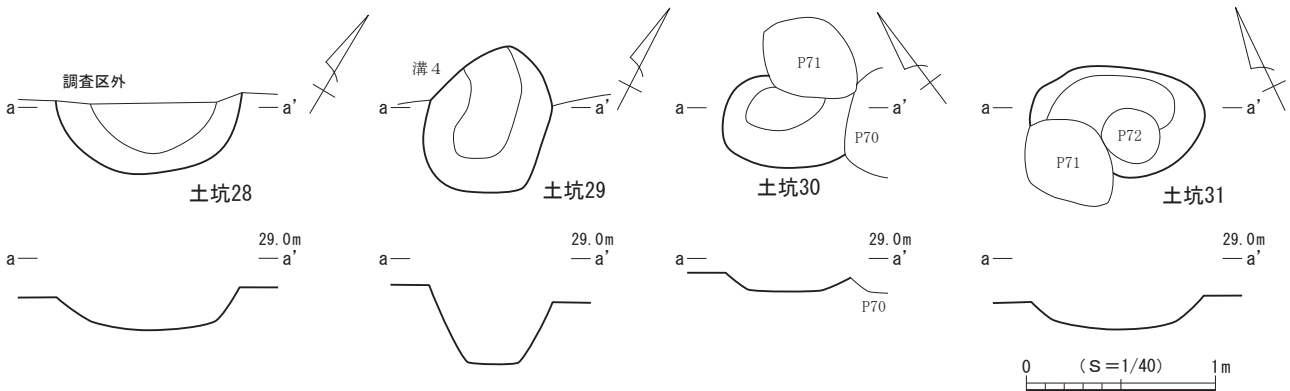


図48 第6面 土坑28~31

土坑30 (図48)

Ⅱ区の南隅に位置する。南東側でピット70、東側でピット71と重複して東側が壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長60cm、北東-南西方向の現存長48cm、深さ17cmで、坑底面の標高は28.84mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑31 (図48)

Ⅱ区の南隅付近に位置する。西側でピット71・72と重複して壊されているが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸93cm、短軸58cm、深さ18cmで、坑底面の標高は28.63mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 不明遺構

不明遺構 1 (図49)

I区の西隅に位置する。南東側を溝状遺構4によって壊されており、南西側が調査区外へ広がっており、平面形および主軸方位は判然としない。ごく浅い落ち込みで、底面はほぼ平らである。壁はなだらかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長2.03m、北東-南西方向の現存長1.82m、深さ14cmを測る。底面の標高は28.68mを測る。

遺物は出土しなかった。

(4) ピット

第6面では、41基を検出した。ほとんどのピットがⅡ区に集中して検出され、重複するものも認められるが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径15~56cm、深さ12~47cmを測る。

以下、礎板や柱が据えられたピット11基を図示し、説明する。

ピット58 (図50)

Ⅱ区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。本址の一部は北側の調査区外へ及んでおり、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形ないし略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形状と推定される。規模は南北現存長25cm、東西28cm、深さ16cmを測り、礎板が中央の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは現存長15cm、幅12cm、厚さ4cmを測り、上面の標高は28.82mである。礎板の端部は凸字状に加工されており、その凹み部分に方6cmの柱を組合わせて据えており、立ったままの状態出土した。柱の現存長は16cmを測り、上端の標高は28.60mである。

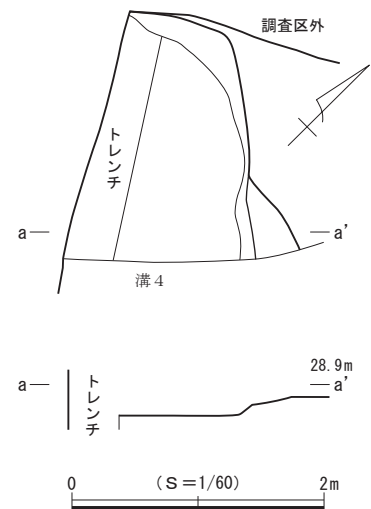


図49 第6面 不明遺構 1

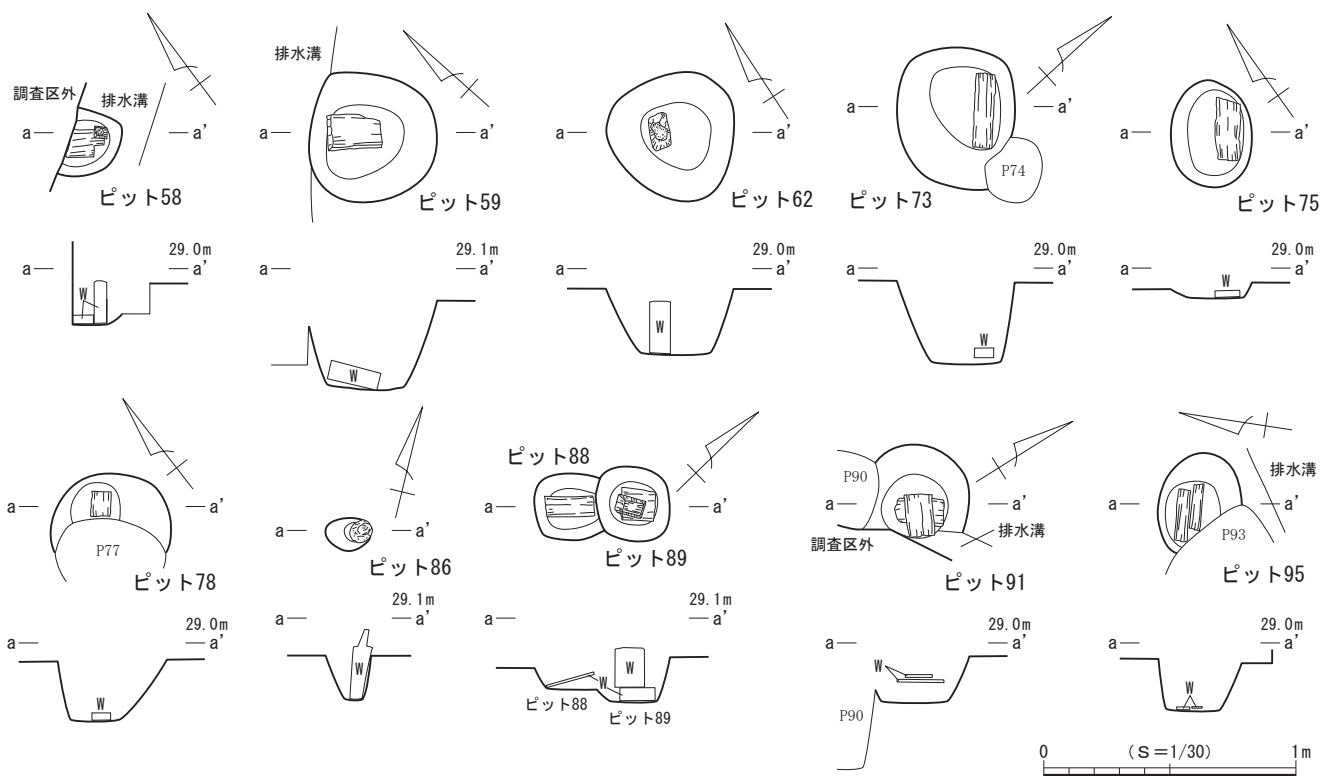


図50 第6面 ピット58・59・62・73・75・78・86・88・89・91・95

ピット59 (図50)

Ⅱ区の北西壁付近中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸56cm、短軸53cm、深さ35cmを測り、礎板がピット中央北西寄りの底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ20cm、幅14cm、厚さ6cmを測り、上面の標高は28.69mである。

ピット62 (図50)

Ⅱ区の中央西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸51cm、短軸50cm、深さ27cmを測り、中央西寄りに方13×9cm、現存長さ19cmの柱が立った状態で出土した。標高は柱上端が28.87cm、底面が28.66mを測る。

ピット73 (図50)

Ⅱ区の中央南寄りに位置する。本址は東側をピット74によって壊されるが、ほぼ全容を把握できた。平面形は略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸56cm、短軸47cm、深さ32cmを測り、礎板がピット中央北寄りの底面近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ29cm、幅8cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は28.69mである。

ピット75 (図50)

Ⅱ区の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は長軸42cm、短軸33cm、深さ24cmを測り、礎板がピット中央南西寄りの底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ23cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.90mである。

ピット78 (図50)

Ⅱ区の中央北東寄りに位置する。本址は南西側をピット77によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸47cm、短軸現存長32cm、深さ26cmを測り、礎板が北壁近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ10cm、幅8cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.73mである。

ピット86 (図50)

Ⅱ区の中央南東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸18cm、短軸13cm、深さ17cmを測り、径9cm、現存長27cmの柱が東壁際に立った状態で出土した。標高は柱上端が29.06m、底面が28.78mを測る。

ピット88 (図50)

Ⅱ区の南東壁付近中央に位置する。本址は北東側をピット89によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形ないし楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長27cm、短軸26cm、深さ13cmを測り、礎板がピット中央の底面近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ19cm、幅8cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は28.84mである。

ピット89 (図50)

Ⅱ区の南東壁付近中央に位置する。ピット88と重複して北東壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸30cm、短軸29cm、深さ18cmを測り、礎板がピット中央の北寄りに据えられ、礎板の上には方11×8cm、現存長15cmの柱が立った状態で出土した。標高は柱上端が29.00m、礎板上面が28.83mである。

ピット91 (図50)

Ⅱ区の南東壁際中央に位置する。本址は南側をピット90によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長42cm、東西現存長37cm、深さ19cmを測り、2枚の礎板がピット中央付近の底面から7cm上に重なって据えられていた。礎板の大きさは下方が長さ19cm、幅11cm、厚さ1cm、上方が長さ16cm、幅10cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は28.88mである。

ピット95 (図50)

Ⅱ区の東隅に位置する。本址は西側をピット93によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長40cm、短軸32cm、深さ22cmを測り、2枚の礎板がピット中央の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは南側が長さ19cm、幅4cm、厚さ1cm、北側が長さ20cm、幅6cm、厚さ1cmを測り、上面の標高はともに28.75mである。

ピット出土遺物 (図51)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表 (表12) に掲げたが、このうち2点を図示した。

1・2は金属製品で、1は釘、2は留具あるいは釘と思われる製品である。ともにピット77から出土した。

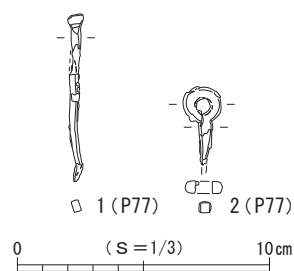


図51 第6面
ピット出土遺物

(5) 第6面 遺構外出土遺物 (図52)

第6面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち12点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は白磁の小形壺と思われる製品である。3～5は瀬戸産で、3は入子、4は折縁深皿、5は柄付片口である。6・7は常滑産で、6は7型式に比定される広口壺大、7は甕で窯印が記されている。8は軒平瓦である。9は滑石製のスタンプである。10～12はシカの中足骨による筭である。

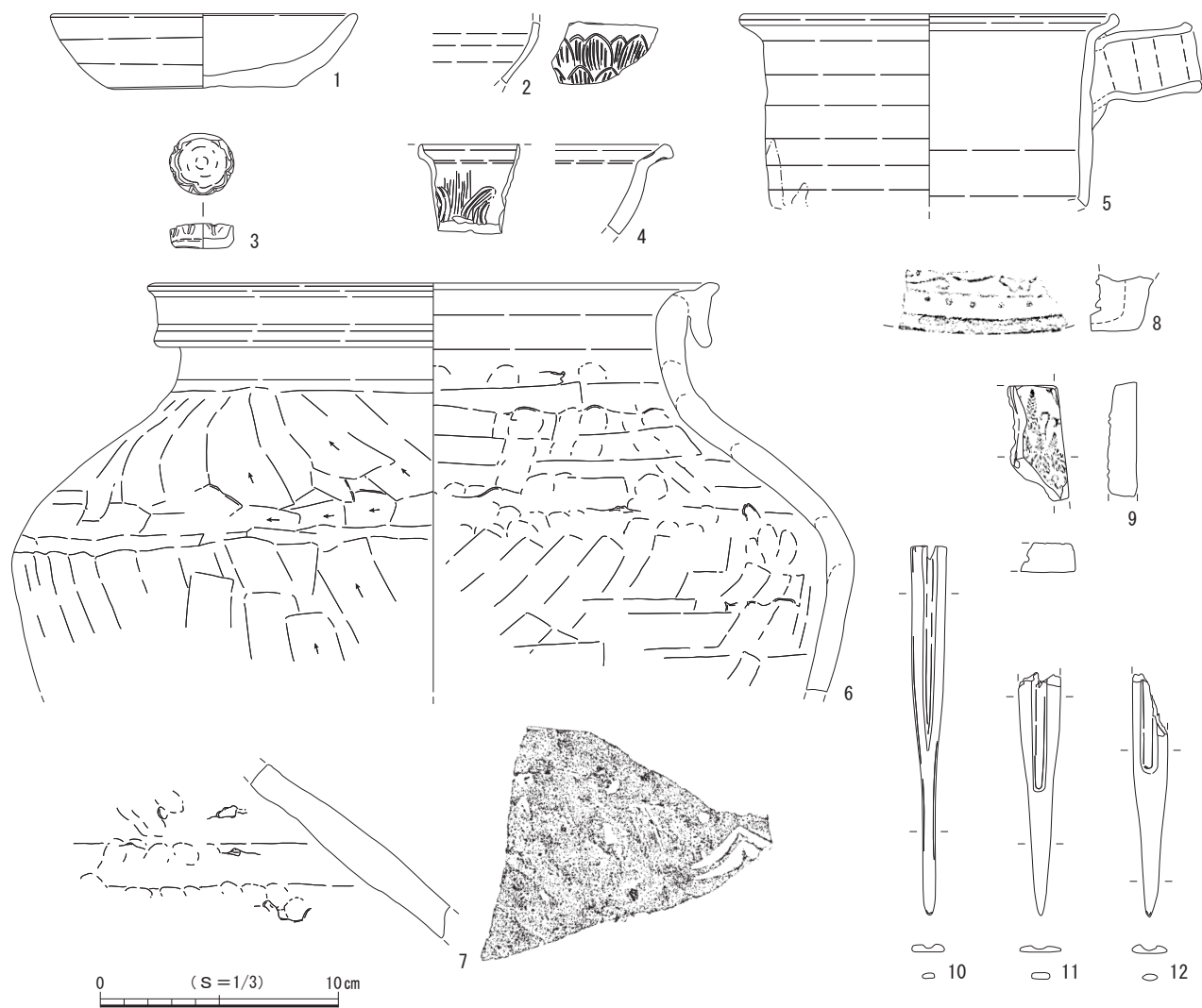


図52 第6面 遺構外出土遺物

第7節 第7面の遺構と遺物

第7面の遺構は堆積土層の18層上面で検出され、確認面の標高は28.5～28.6mを測る。18層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、ピット22基である(図53)。これらの遺構は調査区全体から検出されたが、遺構密度はまばらである。また、I区の南東側は第5面で検出された溝状遺構4によって壊されており、遺構が失われている可能性がある。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、骨製品、木製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構8(図54)

I区の北西側に位置する。南側で第6面の不明遺構1と重複して壊され、北側は調査区外へと延びており全容を把握できなかった。本址は北東-南西方向におおむね直線的に延びており、規模は現存長約

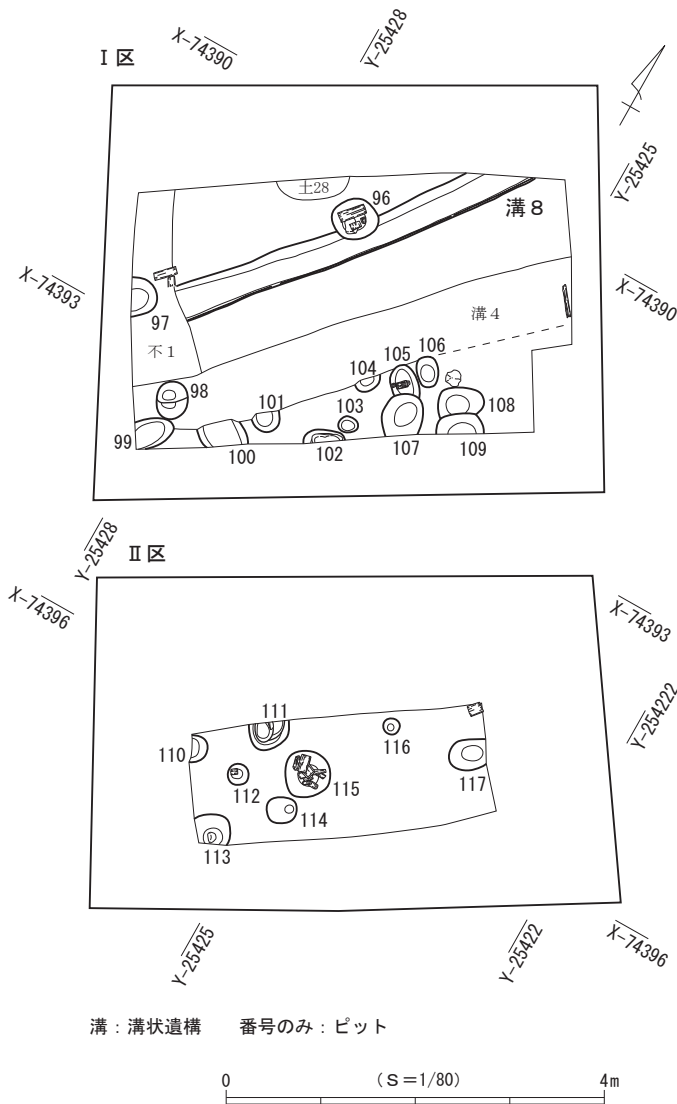


図53 第7面 遺構分布図

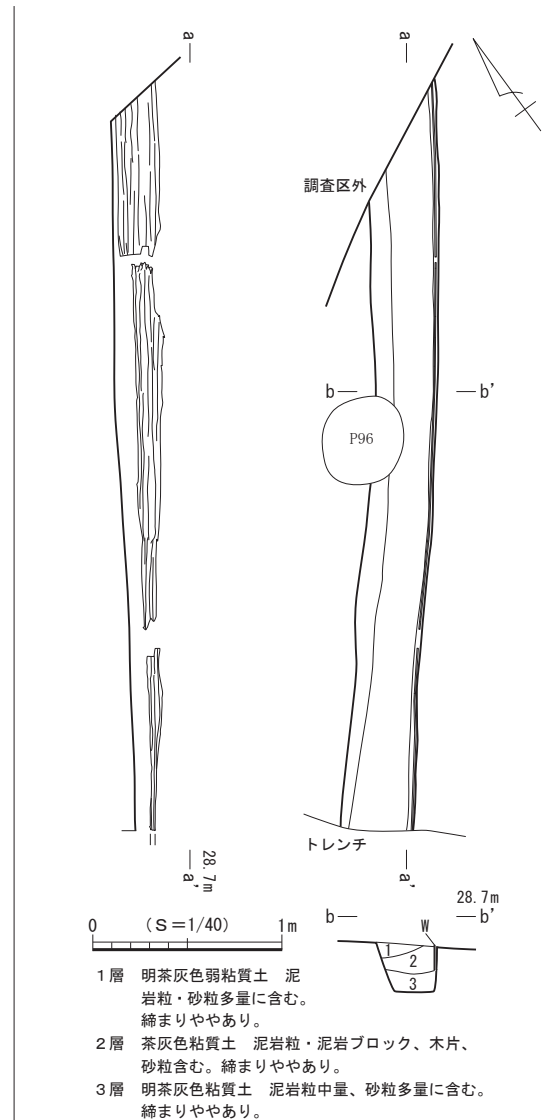


図54 第7面 溝状遺構8

4.0、幅32～37cm、深さ14～28cmを測る。底面の標高は北東側で28.28m、南西側で28.42mと南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。北西壁は開いて立ち上がり、南東壁は垂直で板材を壁面に密着させた護岸が築かれている。調査区内では3枚の板材が確認され、最も残りの良い中央の板材の大きさは、長さ1.94m、幅7～16cm、厚さ2cm程で、溝の断面形は逆台形状を呈し、底面は平らである。主軸方位はほぼN-28°-Eを指す。

遺物はかわらけ15点、陶器4点、木製品1点が出土した。

(2)ピット

第7面では、22基を検出した。I区の南東側とII区にややまばらに分布し、I区の溝状遺構8の西側からは検出されなかった。また、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径17～50cm、深さ8～62cmを測る。

以下、礎石や礎板が据えられたピット4基を図示し、説明する。

ピット96 (図55)

I区の北西壁際中央に位置する。溝状遺構8と重複して北西壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸46cm、短軸44cm、深さ28cmを測り、礎石がピット中央南寄りの底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ17cm、幅13cm、高さ15cmを測り、上面の標高は28.45mである。礎石の上面には2枚の礎板が据えられており、礎板の大きさは東側が長さ10cm、幅6cm、厚さ3cm、西側が長さ28cm、幅11cm、厚さ5cmを測る。礎板上面の標高は28.51mである。

ピット102 (図55)

I区の南東壁際中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びており、平面形は判然としない。断面形は逆台形を呈し、規模は北東-南西方向44cm、北西-南東方向の現存長14cm、深さ10cmを測り、礎石が底面直上に据えられていた。礎石の大きさは現存長34cm、現存幅8cm、高さ9cmを測り、上面の標高は28.53mである。

ピット112 (図55)

II区の南西側に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸22cm、短軸21cm、深さ35cmを測り、礎板が西壁際の底面から8cm上に据えられていた。礎板の大きさは長さ7cm、幅6cm、厚さ3cm、上面の標高は28.19mを測る。

ピット115 (図55)

II区の中央西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸49cm、短軸

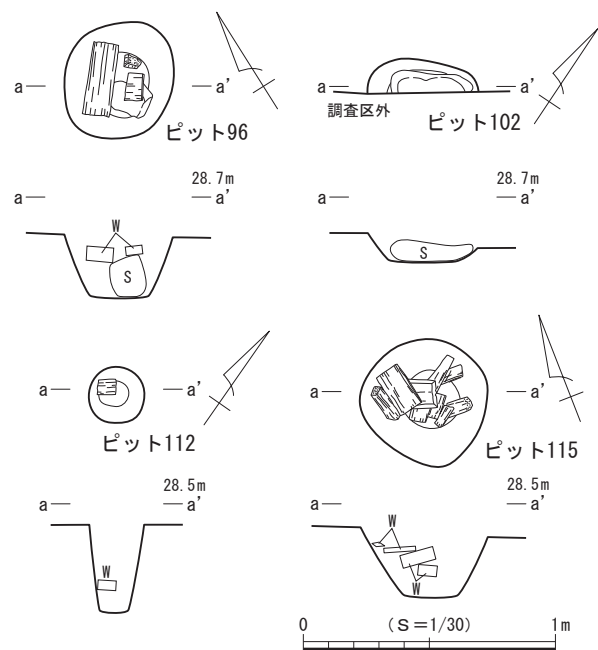


図55 第7面 ピット 96・102・112・115

47cm、深さ29cmを測り、9枚の板材が重なって出土し礎板ないし柱材と考えられる。材のうち最大のものは長さ17cm、幅10cm、厚さ1cmを測り、最上部から出土した木材上面の標高は28.36mを測る。

ピット出土遺物(図56)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)に掲げたが、このうち8点を図示した。

1・2・8はロクロ成形によるかわらけである。3～7は木製品で、3は建築部材、4は曲物、5・6は漆器皿、7は漆器椀である。出土遺構については、1・2はピット111、3～7はピット112、8はピット117から出土した。

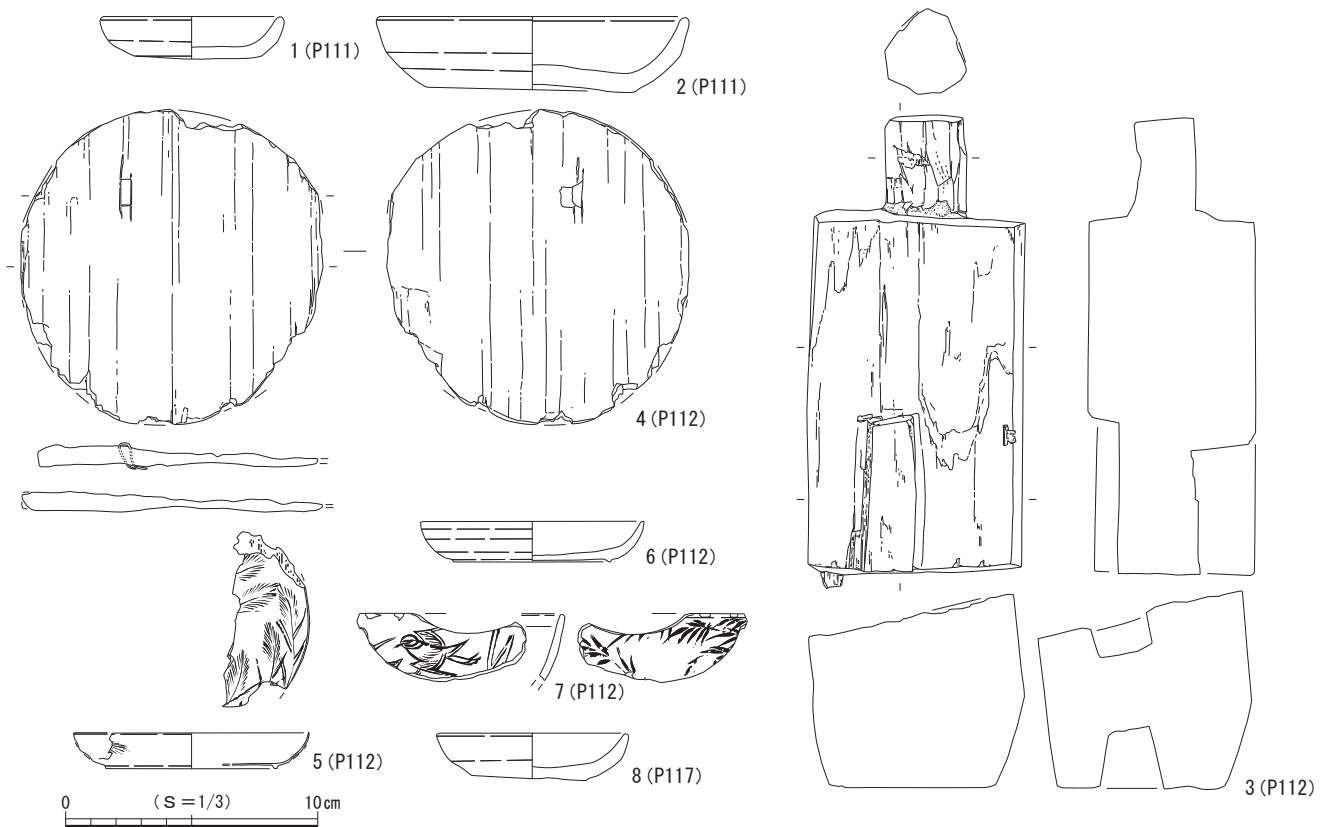


図56 第7面 ピット出土遺物

(3) 第7面 遺構外出土遺物(図57)

第7面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち22点を図示した。

1～10はロクロ成形によるかわらけである。11は瀬戸産の入子、12は山茶碗、13は瓦質土器の火鉢である。14は2面に使用痕が認められる砥石、15は滑石製の温石である。16は鉄製の釘、17～20は銭貨で、17は開元通寶(621年初鑄)、18は皇宋通寶(1038年初鑄)、19は元祐通寶(1086年初鑄)、20は天聖通寶(1023年初鑄)である。21は鹿角製の賽子、22はシカ中足骨製の筭である。

(4) 第7面 構成土出土遺物(図58)

第7面構成土中からも遺物が出土しており、このうち15点を図示した。

すべて木製品である。1は経木折敷、2～4は箸状、5～7は籠状、8・9は棒状、10は建築部材、11は杭、12～15は用途不明である。

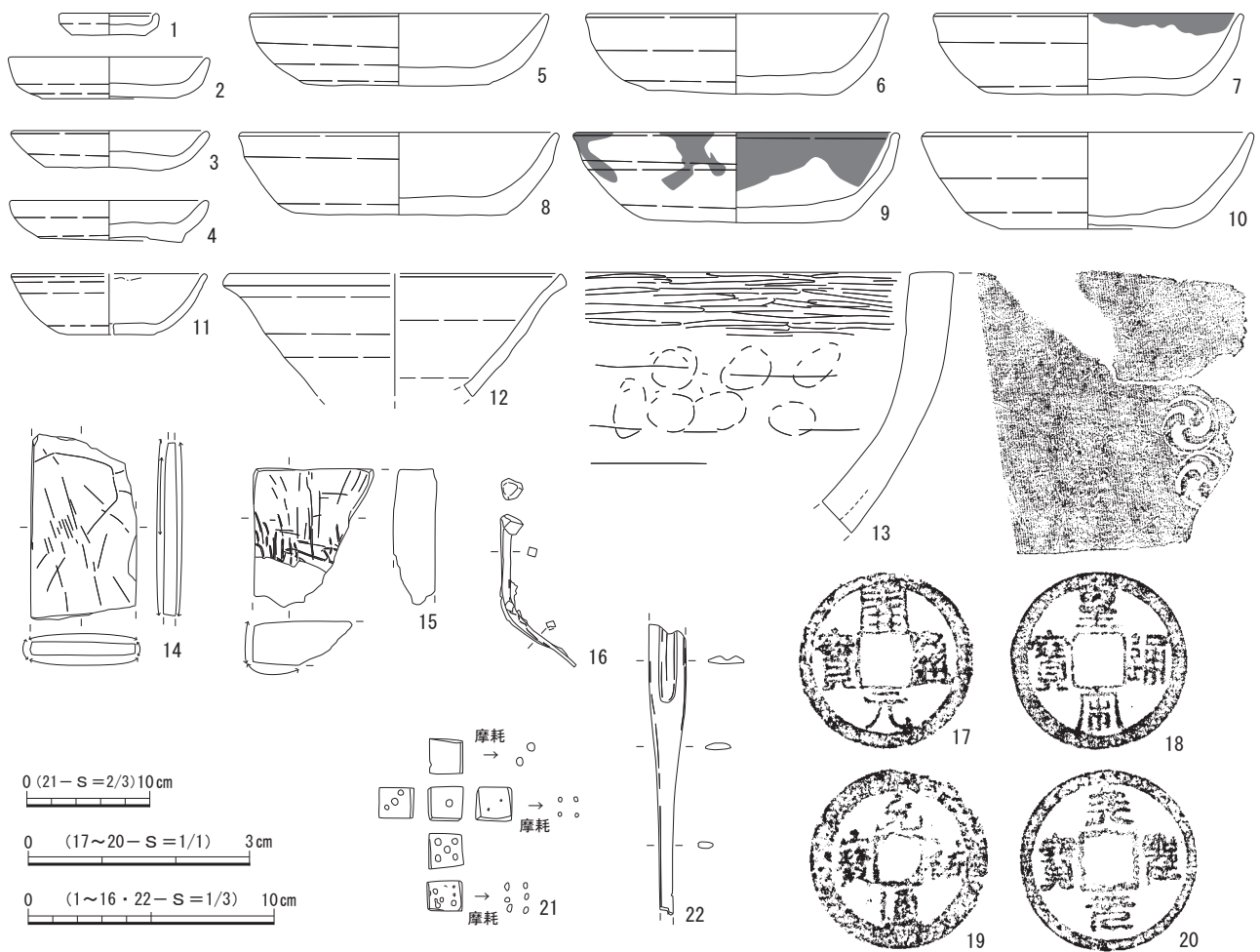


图57 第7面 遺構外出土遺物

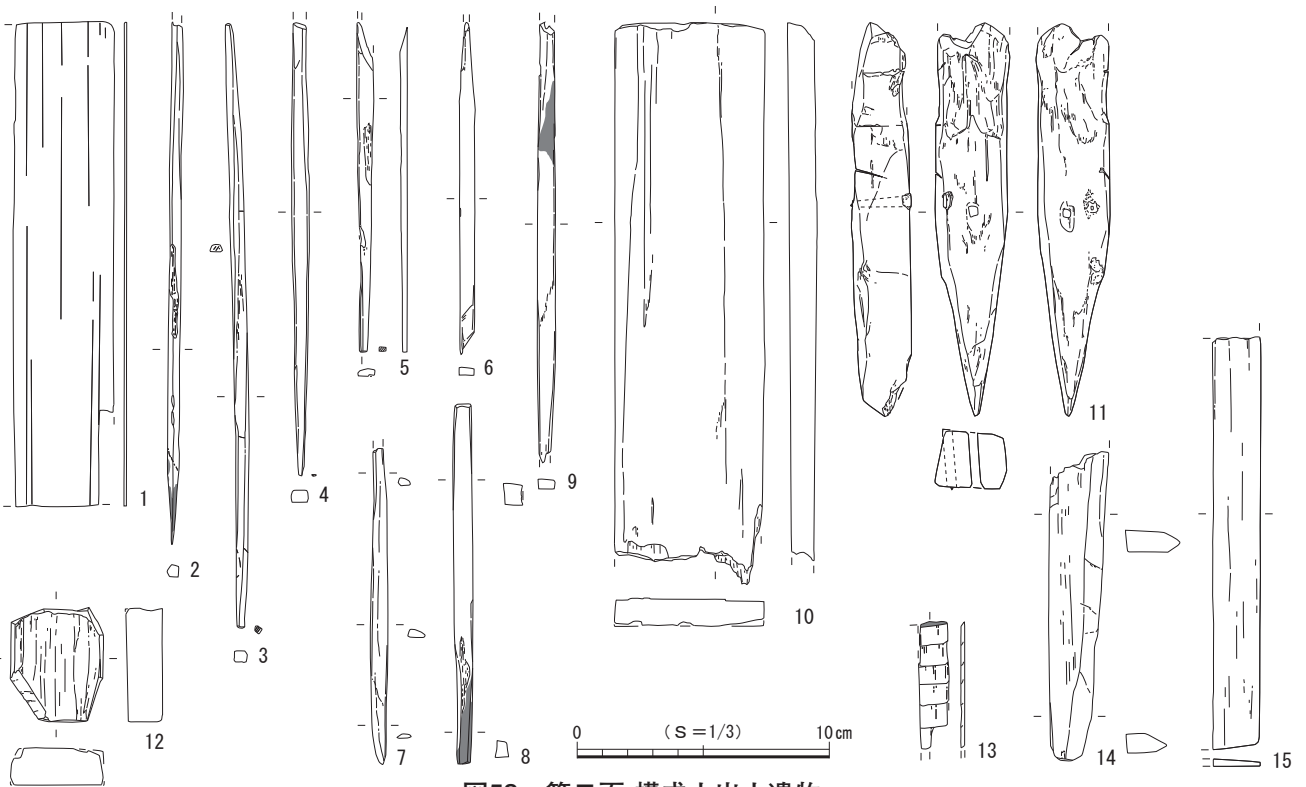


图58 第7面 構成土出土遺物

第8節 第8面の遺構と遺物

第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は28.3~28.4mを測る。19層は泥岩ブロック層による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、土坑1基、ピット17基である(図59)。これらの遺構はI区全体から検出されたが、分布密度はまばらである。

遺物は主にかわらけ、陶器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀代に属すると考えらる。

(1) 土坑

土坑32(図60)

I区の北西壁付近中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸61cm、短軸56cm、深さ56cmである。坑底面の標高は27.75mを測る。

遺物はかわらけ8点、陶器2点、木製品3点、金属製品1点が出土した。

(2) ピット

第8面では、17基を検出した。調査区全体に散漫に分布し、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径18~52cm、深さ10~56cmを測る。

以下、礎板が据えられたピット3基と漆器の椀が出土したピット1基を図示し、説明する。

ピット122(図61)

I区の南西壁付近中央に位置する。本址は北西側をピット121によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸32cm、短軸現存長28cm、深さ17cmを測り、底面の標高は28.23mを測る。漆塗りの椀がピット中央の底面直上から出土した。

ピット127(図61)

I区の南隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸27cm、短軸25cm、深さ15cmを測り、礎板がピットの北壁際の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ13cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.24mである。

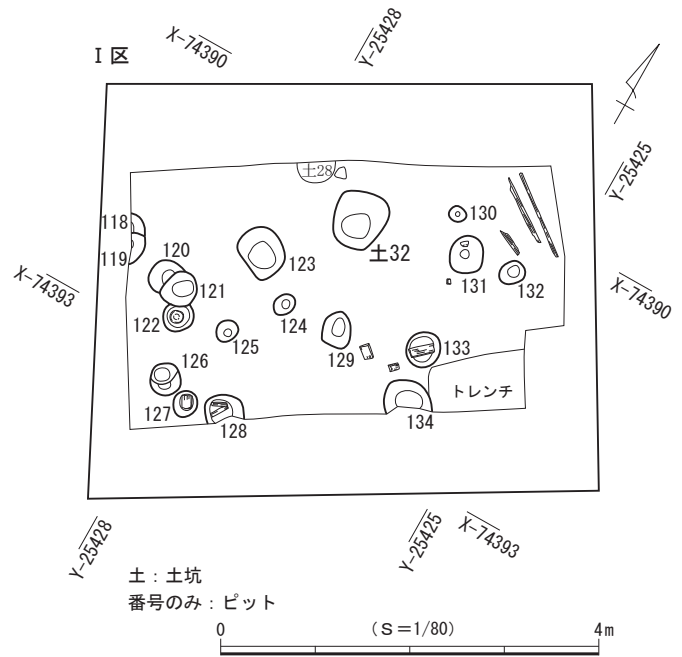


図59 第8面 遺構分布図

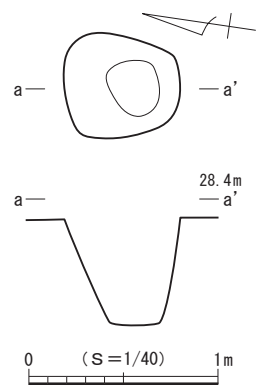


図60 第8面 土坑32

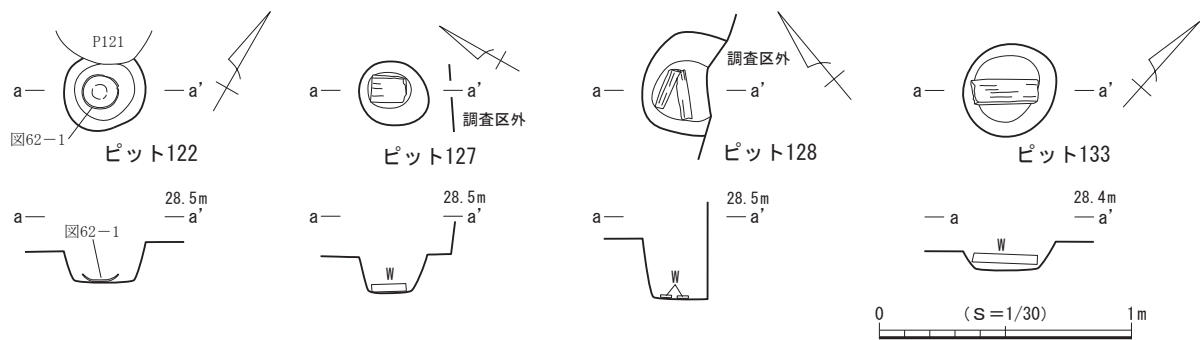


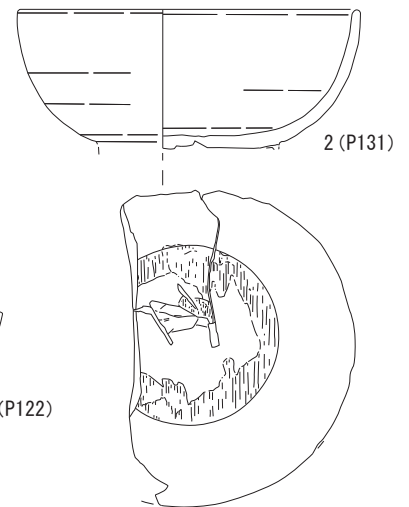
図61 第8面 ピット122・127・128・133

ピット128 (図61)

I区の南隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、本址の一部は南東側の調査区外へ延びており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形ないし楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形と推定される。規模は北東-南西方向41cm、北西-南東方向の現存長30cm、深さ27cmを測り、2枚の礎板が北壁近くの底面上に据えられていた。礎板の大きさは東側が長さ18cm、幅5cm、厚さ1cm、西側が長さ16cm、幅4cm、厚さ1cmを測り、上面の標高はともに28.20mである。

ピット133 (図61)

I区の中央東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は径36cm、深さ10cmを測り、礎板がピット中央の底面からわずかに浮いて据えられていた。礎板の大きさは長さ25cm、幅9cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は28.26mである。



ピット出土遺物 (図62)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)に掲げたが、このうち2点を図示した。

1・2は漆器の椀である。1はピット122から、2はピット131から出土した。

図62 第8面 ピット出土遺物

第9節 第9面の遺構と遺物

第9面の遺構は堆積土層の21層上面で検出され、確認面の標高は約28.0mを測る。21層は暗褐色有機質土を含む暗青灰色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。掘削深度の制約から、I区の東半部のみを調査し、検出した遺構は、板組遺構1基、溝状遺構1条、ピット4基である(図63)。これらの遺構は板組遺構を中心に分布しており、互いに関連をもつものであった可能性が考えられる。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、石製品、木製品、骨製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀代に属すると考えられる。

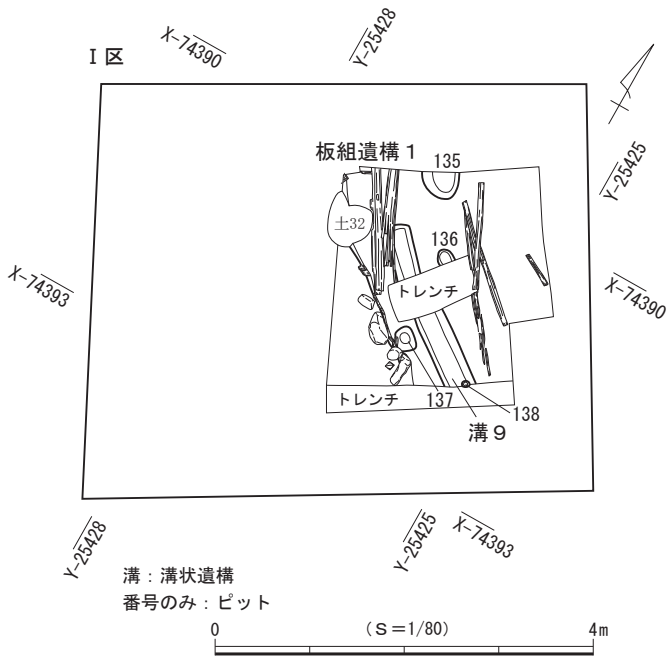


図63 第9面 遺構分布図

(1) 板組遺構

板組遺構 1 (図64)

I区中央を北西から南東方向にかけて位置する。西側で土坑32と重複して壊され、北西側と南東側、北側は調査区外に広がっているため、

平面形は判然としないが、南西側で掘り方の立ち上がりを確認した。壁面に7枚の板材が縦方向に打ち込まれ、壁の外側には長さ14~35cmの凝灰質砂岩が列状に配されている。この板材の大きさは長さ19~38cm、幅7~12cm、厚さ1cm前後を測る。掘り込みの底面には長さが最長で1.37mを測る板材が2カ所に集中して出土し、中には柄穴をもつ板材も認められる。本址の主軸方位は南西側の掘り込みを基準にすると、N-54°-Wを指すと推定される。板材の出土範囲をもとに現存規模を測ると、北西-南東方向が2.35m、北東-南西方向が2.16m、深さが40cmを測り、底面の標高は28.050mである。

遺物は出土しなかった。

(2) 溝状遺構

溝状遺構 9 (図65)

I区中央やや南寄りに位置する。北西-南東方向に延び、北西端部は調査区内に収まるが、南東側は調査区外へと続いている。南東から直線的に延びて北西端部で北側に向かってわずかに屈曲する。検出した規模は現存長約1.8m、幅24~32cm、深さ15cmを測り、主軸方位はN-52°-Wを指す。壁はやや開いて断面形が逆台形を呈し、底面は平らである。底面の標高は27.80mを測る。

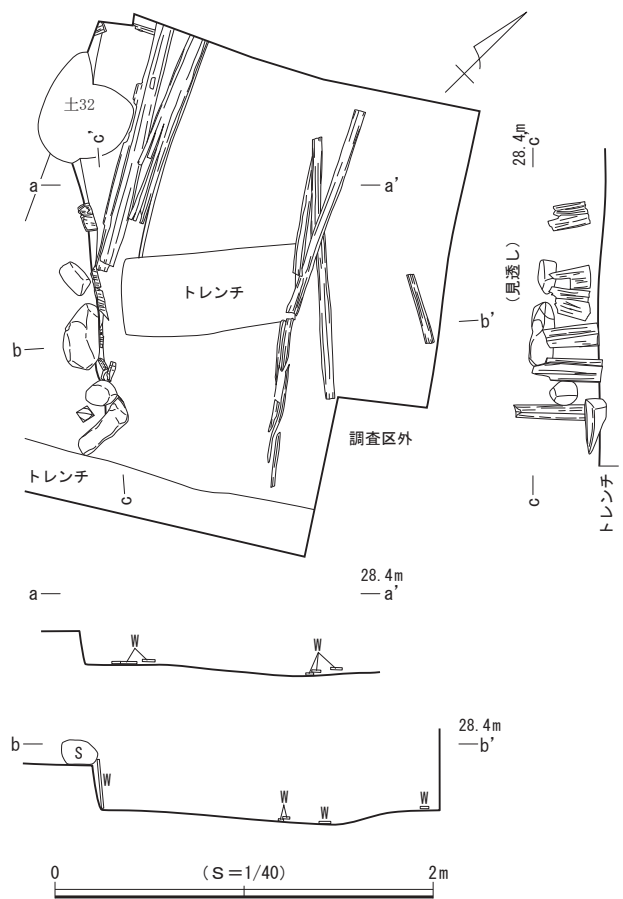


図64 第9面 板組遺構 1

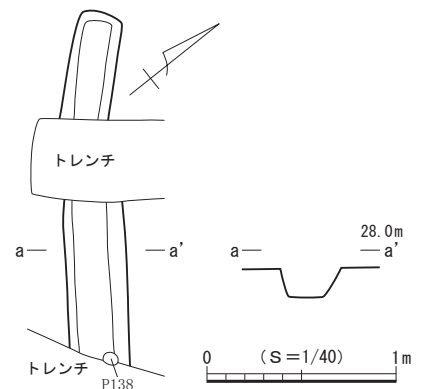


図65 第9面 溝状遺構 9

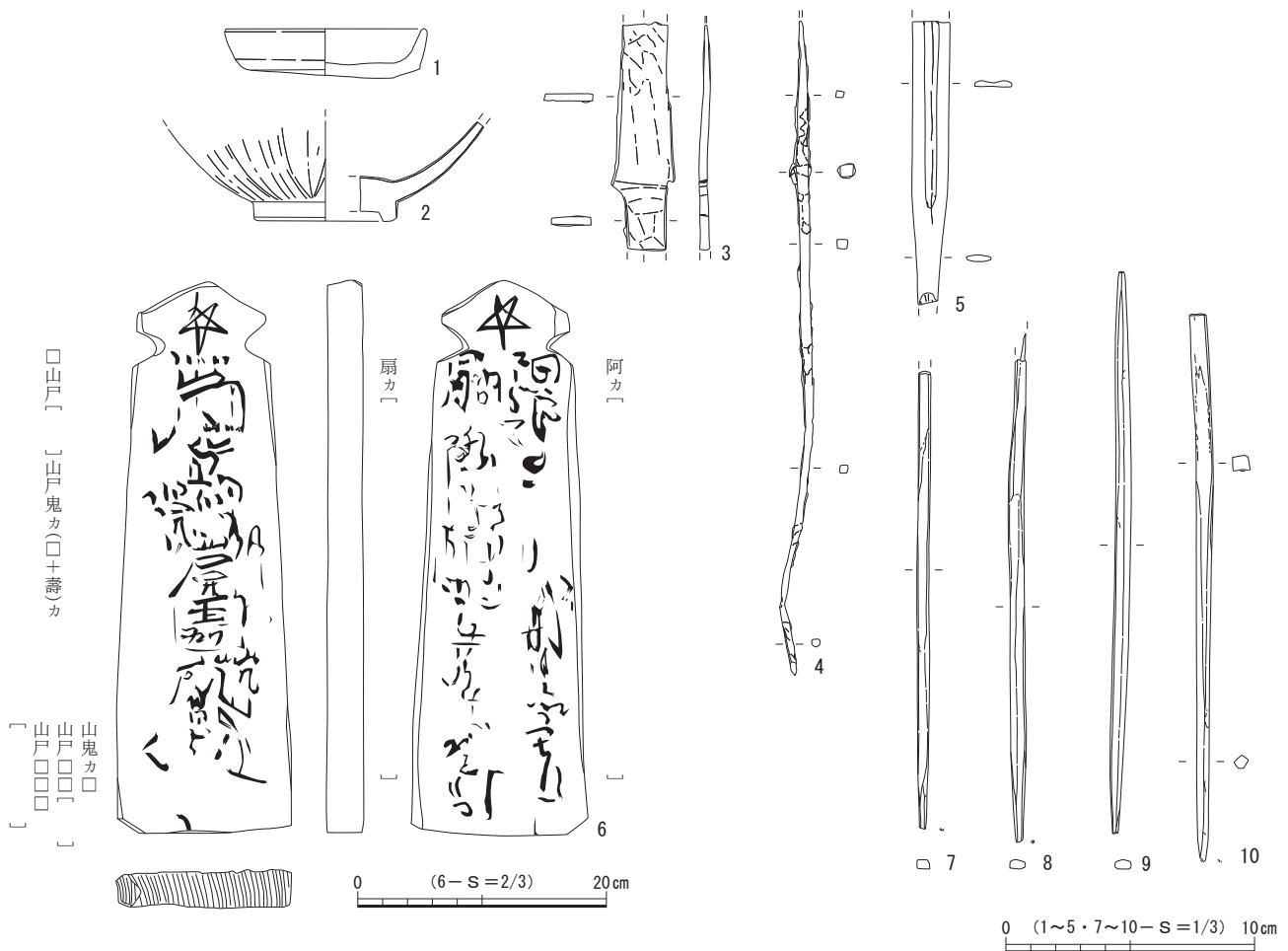


図66 第9面 溝状遺構9出土遺物(1)

出土遺物(図66・67)

遺物はかわらけ53点、磁器6点、陶器5点、石製品1点、骨製品1点、木製品13点、金属製品3点が出土し、このうち15点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である。3・4は金属製品で、3は鑿と思われる鉄製品、4は鉄製火箸である。5はシカ中足骨製の筭である。6～15は木製品である。6は小形の呪符木簡と推定される資料で、木簡の形状は上端を山形に尖らせ、上部の両側面に切り込みが入ったもので、下端がやや広がる類例の少ないものである。墨書は表裏面に記され、その釈文を実測図に掲載した。表裏面上端には五芒星が記されていることから何らかの信仰・呪術行為に用いられた木簡と考えられる。五芒星が墨書されている呪符木簡は鎌倉内では2例目となる資料である。7～9は箸状、10は串状、11・12は連歯下駄、13は用途不明である。14は漆器の皿、15は漆器の椀である。

(3)ピット

第9面では、4基を検出した。いずれも板組遺構1と重複する位置に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径8～39cm、深さ7～24cmを測る。

遺物は出土しなかった。



図67 第9面 溝状遺構9出土遺物(2)

第四章 まとめ

今回報告する山ノ内字東管領屋敷147番9外地点は、「安国寺跡(No.174)」の範囲内に所在する。本遺跡の包蔵地範囲は鎌倉市の北部域に位置し、調査地点はJ R北鎌倉駅の南西側を走る鎌倉街道を鎌倉方面に750mほど進んだ街道の東側に位置している。地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷の中に位置し、その谷地を鎌倉街道とJ R横須賀線がほぼ並行して走っている。この開析谷に面した両側には、複雑に入り組んだ大小の谷戸が形成されている。丘陵頂部から湧出した小河川は地形に沿って低地に流れ込み、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、その流れは市域の北西部で柏尾川に合流する。本地点は北東-南西方向に長い包蔵地範囲の南西端に位置し、鎌倉街道の東側に面している。本遺跡の調査例は今回報告する地点のみであり、周辺遺跡を含めても本地域は調査例のきわめて少ない場所といえる。

今回の調査では、遺構確認面は第1～9面までの合計9面であり、いずれの面も中世に属する。検出した遺構は礎石建物1棟、切石基礎建物1棟、溝状遺構9条、板組遺構1基、石列1条、据鉢遺構1基、土坑32基、不明遺構1基、ピット137基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高約30.1～30.3mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟のみである。この建物は北東－南西方向の柱間が4間以上の規模をもち、柱間寸法はおおむね90cm等間であった。また、調査区の東半部には明瞭な整地面が残存していることから、整地面に構築された規格性の高い大形建物が存在した可能性が考えられよう。Ⅱ区については第1・2面とも攪乱を受けているために遺構は確認されなかった。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高29.9～30.0mを測る堆積土層の5層上面で検出された。検出した遺構は切石基礎建物1棟、石列1条、据鉢遺構1基、土坑4基、ピット3基である。これらの遺構はⅠ区北半を中心に検出されたが、分布はまばらである。切石基礎建物1と石列1は切石を使用した遺構で、建物を構成していたと考えられるが、調査範囲の制約から詳細は判然としなかった。また、本面より出土した「俊賢」名が刻書される硯は、高嶋産として最古級であるとともに、鎌倉出土の硯としては高級品に分類される。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高29.7～29.8mを測る堆積土層の7層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、土坑9基、ピット22基である。中心となる遺構は溝状遺構1で、Ⅰ区の中央やや南側を北東－南西方向に横断して調査区外へと延びている。溝の規模は幅80cm、深さは最大で60cmを測り、北東から南西に向かってごく緩やかに傾斜する。また、両側壁面に泥岩の切石を積み上げた石組の護岸が築かれ、本址の南側には明瞭な整地面の広がり確認された。本面よりもさらに古い第5面からもほぼ同一の場所から同じ主軸方位の溝が検出されていることから、改修が行われて継続的に使用された状況がうかがわれる。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は堆積土層の10層上面で検出され、確認面の標高は29.5～29.7mを測る。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑7基、ピット19基である。遺構はⅡ区の北半に集中して検出されており、Ⅱ区の南半は遺構の空白部となり明瞭な整地層が広がっている。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀後葉～15世紀前葉に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は堆積土層の13層上面で検出され、確認面の標高は29.1～29.3mを測る。検出した遺構は溝状遺構3条、土坑7基、ピット9基である。Ⅰ区には明瞭な整地面が全面にわたって広がり、南側に溝状遺構が北東－南西方向に横断する。溝の規模は幅1.48～1.80m、深さ1.0mを測り、第3面で検出された溝状遺構とほぼ同じ場所に位置するが、規模は本面の溝状遺構の方が大きい。また、溝の両側壁面には切石による護岸が認められ、南東壁面は切石の北西面を斜めに揃えて2～4段に積み上げている。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

〈第6面〉

第6面の遺構は堆積土層の17層上面で検出され、確認面の標高は28.8～29.0mを測る。検出した遺構

は溝状遺構1条、土坑4基、不明遺構1基、ピット41基である。Ⅰ区は第5面で検出された溝状遺構4によって南東側が壊されており、遺構が失われている可能性がある。Ⅱ区からは礎板を伴うピットが多数検出されていることから、調査区外に展開する建物を構成するピットの可能性が想定されよう。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第7面〉

第7面の遺構は堆積土層の18層上面で検出され、確認面の標高は28.5～28.6mを測る。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である。溝状遺構は第3・5面で検出された溝よりも北西寄りに位置するが、主軸方位はほぼ同じである。溝の規模は小さく、壁に板材を密着させた護岸が築かれ、規模・構造ともに第3・5面のものと異なる。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第8面〉

第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は28.3～28.4mを測る。検出した遺構は土坑1基、ピット17基で、これらの遺構はⅠ区全体から検出されたが、遺構種が限定的で分布密度はまばらである。礎板をもつピットや単独の礎板が出土しており、調査区外に展開する建物を構成するピットの可能性が考えられよう。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀代に属すると考えられる。

〈第9面〉

第9面の遺構は堆積土層の21層上面で検出され、確認面の標高は約28.0mを測る。掘削深度の制約からⅠ区の東半部のみを調査し、検出した遺構は板組遺構1基、溝状遺構1条、ピット4基である。中心となる遺構は板組遺構で、調査区外に広がっているためその平面形は判然としないが、壁面に板材が縦方向に打ち込まれ、壁の外側には砂質凝灰岩が列状に配されていた。また、掘り込みの底面には長さが最長で1.37mを測る板材が2ヵ所に集中して出土し、中には柄穴をもつ板材も認められた。本面で検出された溝状遺構やピットは板組遺構と重複する場所に構築されており、互いに関連をもち建物を構成していた可能性が考えられる。また、本面からは特筆すべき遺物として、溝状遺構9より出土した呪符木簡が挙げられる。上端には五芒星が墨書されており、同様な呪符木簡としては鎌倉内で2例目となる貴重な資料である。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀代に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 鎌倉市教育委員会 1997『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』山ノ内道周辺遺跡発掘調査団
手塚直樹 1997『神奈川県・鎌倉市 保寧寺跡－第2次調査－』保寧寺跡発掘調査団
永田史子・齋藤修佑 2018「徳泉寺跡(No173)山ノ内字東管領屋敷168番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会
松吉大樹 2010「安国寺跡出土の硯について」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 2012「山ノ内上杉邸跡(No170)の発掘調査－山ノ内字東管領屋敷179番39地点－」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
森 孝子 2010「安国寺跡(No174)の調査 鎌倉市山ノ内字管領屋敷147番9, 10」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第1面 遺構外出土遺物 (図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	5.5	3.3	1.8	底面-回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.5	2.2	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4~7.9	4.2	2.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・中	11.9	6.2	3.5	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	6.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/5

第1面 構成土出土遺物 (図9)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	4.1	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.8	口唇部に煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.7~7.1	4.4	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	4.2	2.9	口唇部のほとんどを打ち欠き、その周辺および底部外面に煤付着 底面-回転糸切+ナデ消し 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・中	10.8	6.5	3.2	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロ かわらけ・中	10.7	5.8	3.4	口唇部内面煤付着 底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.0	3.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.7	4.0	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
9	陶器	瀬戸 直縁大皿	(29.3)	-	現 6.3	内外面上半-灰釉 胎土: 細砂粒、黒色粒、軟質 色調: 胎土-灰白色 灰釉-薄緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅳ期	1/8
10	摩耗 陶片	摩耗陶片	長 10.8	短 7.6	厚 1.4~1.6	常滑甕の陶片を転用 陶片周囲が摩耗 胎土: 粗 色調: 暗赤褐色	
11	金属 製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-天聖元寶(北宋・1023) 真書	略完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

据鉢遺構 1 出土遺物 (図14)

1	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	32.3	13.3	11.7	胎土: 砂粒、白色粒、泥岩粒、小石粒 色調: 橙色 備考: 内面に柵目(1単位9~10か)あり、内面摩滅、見込み部使用による穿孔、9~10型式	3/4
---	----	-------------	------	------	------	---	-----

土坑4 出土遺物 (図16)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.3)	2.6	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2弱
---	----	---------------	-------	-------	-----	---	------

第2面 構成土出土遺物 (図17・18)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	4.2	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.6	4.1	2.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.5	2.0	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙褐色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	3.8	2.3	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙褐色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	2.5	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	8.0	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	3/4強
8	磁器	青磁 水瓶	-	-	現 3.6	内外面-無文 色調: 胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考: 龍泉窯系青磁	注口部 2/5
9	磁器	青磁 太鼓胴深鉢	-	-	現 4.9	外面-菊花文粘土貼付 内面-無文 色調: 胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考: 龍泉窯系青磁	口縁部片
10	陶器	瀬戸 縁釉小皿	(10.5)	4.9	3.0	内外面口縁部-灰釉 胎土: 砂粒、黒色粒 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅱ期	1/3
11	陶器	瀬戸 縁釉小皿	10.6	4.8	2.9	内外面口縁部-灰釉 胎土: 砂粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅲ期	略完形
12	陶器	瀬戸 卸皿	(14.9)	(6.5)	3.1	内外面-灰釉 胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒、礫 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅲ期	1/3
13	陶器	瀬戸 直縁大皿	(23.8)	(11.5)	6.2	内外面下半-灰釉 胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-灰-淡黄色 釉-淡緑色(内外面-刷毛塗り) 内面見込み-拭き取り) 備考: 古瀬戸後期様式Ⅱ期	2/5

14	陶器	瀬戸直縁大皿	(32.7)	(11.4)	9.3	内外面下半-灰釉 脚部1遺存 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式Ⅳ期	1/3
15	陶器	瀬戸折縁深皿	(31.8)	-	現6.6	内外面-灰釉 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色(内外面-刷毛塗り 内面見込み-拭き取り) 備考:古瀬戸後期様式Ⅲ~Ⅳ期	1/6
16	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現8.8	胎土:砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調:にぶい橙色 備考:9~10型式	口縁部片
17	瓦質土器	香炉	-	-	現3.8	外面-印花による雷文 胎土:砂粒、白色粒 色調:暗灰色 焼成:良好	口縁部片
18	瓦質土器	火鉢	-	-	現6.2	内面口縁部および外面ミガキ 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒 色調:暗灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部片
19	瓦質土器	火鉢	-	-	現9.3	外面-連珠文貼付 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部片
20	瓦質土器	土風炉	-	-	現4.7	外面-半裁竹管状工具による縦方向の調整 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調:暗灰色 焼成:良好	口縁部片
21	石製品	硯	現長16.5	幅10.6	厚1.9~2.7	長方硯 海面を1回作り替えている、裏面-「主俊賢」「不有他妨有也」の刻字 石材-頁岩(高嶋石)	4/5

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構1出土遺物(図21)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	7.2	4.1	2.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.4	4.0~4.2	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形
3	陶器	瀬戸平碗	-	高台径5.5	現4.8	胎土:細礫 色調:胎土-淡黄白色 釉-淡黄灰色 備考:古瀬戸後期様式Ⅰ期	1/3弱
4	陶器	瀬戸天目茶碗	12.0	3.8	7.0	胎土:密 色調:胎土-灰白~灰黄色 釉-暗茶褐~黒色 無釉部-にぶい黄褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ~Ⅲ期	4/5
5	陶器	瀬戸直縁大皿	(30.0)	(14.5)	7.5	胎土:堅緻 色調:胎土-淡黄灰色 釉-淡褐色 備考:古瀬戸後期様式	1/3弱
6	瓦質土器	燭台	7.6	-	現2.5	内外面-横ヘラミガキ 胎土:密 白色粒 色調:灰白色 焼成:良好 備考:内外面-黒色処理	燭部遺存
土坑13出土遺物(図24)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	6.9	3.8	2.3	口唇部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.1	4.2	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、やや粗土 色調:淡橙~黄褐色 焼成:良好	完形
第3面 遺構外出土遺物(図26)							
1	土器	ロクロかわらけ・中	12.2	7.2~7.5	4.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
第3面 構成出土遺物(図27・28)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	6.4	4.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	6.8	3.9	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	3/4
3	土器	ロクロかわらけ・小	7.3	4.8	2.3	口唇部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
4	土器	ロクロかわらけ・小	(7.2)	5.0	2.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	2/3
5	土器	ロクロかわらけ・小	7.2~7.8	4.3	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:黄灰色 焼成:良好	完形
6	土器	ロクロかわらけ・小	7.6	5.0~5.2	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	3/4
7	土器	ロクロかわらけ・大	14.8	9.2	4.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ+ヘラナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	4/5
8	陶器	瀬戸緑釉小皿	(10.6)	(4.2)	3.4	胎土:堅緻 黒色粒 色調:胎土-灰黄色 釉-暗茶褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ期	1/3強
9	陶器	瀬戸緑釉小皿	10.9	5.3	2.6	胎土:堅緻 細礫 色調:胎土-褐灰色 釉-黒色 備考:底面に重ね焼きの目跡2ヵ所遺存、古瀬戸後期様式Ⅱ期	完形
10	陶器	常滑甕	-	-	現3.3	胎土:白色粒、砂粒、細礫、砂質 色調:暗灰色 備考:1型式	口縁部片
11	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	(29.0)	(12.2)	(8.9)	胎土:白色粒、赤色粒、細礫、砂質 色調:暗褐色 備考:9型式	完形
12	瓦質土器	香炉	(12.2)	-	現4.0	外面-ミガキ 胎土:黒色粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:黒色処理	口縁~体部小片
13	瓦	平瓦	現長8.2	現幅11.5	厚1.3~1.7	凸面-大斜格子文+側縁平行ヘラナデ 凹面-広端縁ケズリ調整+側縁平行ヘラナデ 広端面-ケズリ調整 胎土:白色粒、小礫、やや砂質 色調:黒灰色	片広端縁側小片
14	石製品	砥石	長7.6	短4.1	厚1.5~1.6	仕上砥 3面に使用痕跡 石材-粘板岩	

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑14出土遺物(図31)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.6)	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	2/3

土坑15出土遺物(図32)

1	土器	ロクロ かわらけ・特大	16.2	8.5	4.4	外面-油煤付着物 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
---	----	----------------	------	-----	-----	--	-----

土坑20出土遺物(図34)

1	瓦質土器	火鉢	-	-	現5.1	外面-印花による桔梗文 胎土:雲母、褐色粒、細礫 色調:灰白色 焼成:良好 備考:外面黒色処理	胴部上半片
---	------	----	---	---	------	--	-------

第4面 構成土出土遺物(図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.3	2.5	0.9	底面-全面ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.2~6.4	4.5	2.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.3	2.4	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
4	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(29.5)	(12.3)	(10.6)	胎土:赤色粒、細礫、やや砂質 色調:暗茶褐色 備考:内面松葉状の線刻、9~10型式	1/3弱
5	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(30.0)	-	現10.0	胎土:白色粒、細礫、砂質 色調:茶褐色 備考:10型式	2/3弱
6	瓦質土器	香炉	-	-	現2.7	外面-印花による菱形雷文 胎土:褐色粒、密 色調:黒色・薄灰色 焼成:良好 備考:外面黒色処理	口縁部片
7	石製品	硯	現長11.3	幅上面(5.4) 底面5.0	厚1.5	石材-粘板岩	4/5
8	石製品	砥石	長21.4	幅2.1~4.5	厚2.5~3.8	荒砥 2面に使用痕跡 石材-粘板岩	略完形

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構 4 出土遺物(図37)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7)	(4.0)	1.9	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.4)	1.8	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2弱
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	1.9	口縁部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	4/5
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
5	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現5.5	内外面-灰釉、胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ期	完形
6	石製品	砥石	長9.2	幅2.7	厚0.8~1.2	3面に使用痕跡 石材-粘板岩	
7	木製品	箸状	現長10.0	幅0.6	厚0.5	断面隅丸・丁寧な整形	小片

溝状遺構 5 出土遺物(図39)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.7	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.9	3.6	底面-回転糸切+ナデ、内底-ナデ、底部穿孔1ヶ所 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/2強
3	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.0)	4.4	6.4	内外面-鉄釉 胎土:密 色調:胎土-灰白色 釉-暗黒褐色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ期	1/3強
4	漆器	椀	-	-	(5.3)	内面:黒色漆髹漆・無文 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・丸に花文)	小片

溝状遺構 6 出土遺物(図40)

1	木製品	箸状	現長21.5	幅0.7	厚0.3	断面扁平	不明
2	木製品	用途不明	現長6.7	現幅1.4	厚0.9~1.8	建築部材?	不明
3	漆器	皿	(8.7)	(6.1)	1.1	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・楓文・水文・垣文) 内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・楓文・水文) 高台形:輪高台 歪み大	2/3
4	漆器	蓋	(17.2)	(16.0)	0.8~1.4	内面:黒色漆髹漆 無文 外面:黒色漆髹漆 無文 ロクロ目が強く残る	5/6

第5面 遺構外出土遺物(図43・44)

1	磁器	青白磁 皿	-	-	現4.0	口唇部-口元 内面-雷文・蓮弁文 色調:胎土-白色 釉-灰青色	口縁~ 体部片
2	磁器	青磁 碗	-	-	現4.6	外面-鎊蓮弁文 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類	口縁部片
3	陶器	瀬戸 天目茶碗	(11.8)	4.2	6.3	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-茶褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅰ期	1/2
4	陶器	瀬戸 天目茶碗	(11.9)	4.4	6.7	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:白色粒、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-黒褐色 備考:口唇部を意図的に打ち欠く、古瀬戸後期様式Ⅰ期	2/3
5	陶器	瀬戸 小坏	4.7	2.2	1.6	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:緻密、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-暗褐色	完形
6	陶器	瀬戸 広口壺	-	-	現5.9	内外面頭部-灰釉、外面肩部-連続円形の印花・櫛描き文 胎土:堅緻 白色粒 色調:胎土-灰褐色、灰釉-暗オリーブ色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ期	口縁~ 肩部片
7	陶器	備前 播鉢	-	-	現5.5	内面-播目9条?一単位の播目遺存 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒、小石粒 色調:橙色	口縁部片
8	瓦質土器	香炉	-	-	現2.6	外面-ミガキ+亀甲文・S字状文の印花 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰白色 焼成:良好	胴部下位~ 底部片
9	金属製品	留具	現長2.9	幅0.4	厚0.1	板状を曲げる、銅合金	略完形
10	ガラス製品	玉	径1.2	孔径0.2	重2.8g	トンボ玉 備考:孔内に紐状の一部が残る	完形

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑29出土遺物 (図47)

1	瓦	鬘斗瓦	現長 16.5	現幅 11.2	厚 2.2	凸面-大斜格子叩き+側縁方向ナデ、側縁・側面-ヘラケズリ 凹面-側縁方向ヘラ調整+ナデ 端面-ヘラケズリ 胎土:黒色粒、砂粒、小石粒 色調:暗灰色	1/4
---	---	-----	------------	------------	----------	---	-----

ピット出土遺物 (図51)

1	金属 製品	釘	現長 6.6	幅 0.3	厚 0.4	鉄製釘 出土遺構:ピット77	略完形
2	金属 製品	留具?	現長 3.1	幅 0.4	厚 0.4	鉄製 環状部径:1.5 出土遺構:ピット77	略完形

第6面 遺構外出土遺物 (図52)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.5	3.2	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰褐色 焼成:良好	3/4
2	磁器	白磁 小形壺?	-	-	現 2.6	外面-蓮弁文 内外面-施釉 色調:胎土-白色 釉-乳白色	胴部片
3	陶器	瀬戸 入子	2.1~2.6	2.1	1.1	ロクロ成形後に輪花状に整形 胎土:砂粒、黒色粒 色調:灰白色 備考:古瀬戸中期様式	3/4
4	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 3.8	内外面-灰釉、内面-5条の櫛描き文様 胎土:堅緻、白色粒 色調:胎土-灰白色、釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式	口縁部片
5	陶器	瀬戸 柄付片口	(15.6)	-	現 8.1	内外面-灰釉 胎土:白色粒、黒色粒 色調:胎土-灰白色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸中期様式	1/4弱
6	陶器	常滑 広口壺大	(23.3)	-	現 17.2	胎土:砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調:暗灰褐色 備考:7型式	1/4弱
7	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.3	外面-窯印 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、礫 色調:暗灰色	肩部片
8	瓦	軒平瓦	現高 2.4	現幅 8.1	厚 2.0~2.2	瓦当-珠文・界線・唐草文 端面-ケズリ調整 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:灰色	瓦当部 下位片
9	石製品	スタンプ	現長 4.8	現幅 2.4	厚 1.2	石質-滑石	小片
10	骨製品	筭	現長 15.5	幅 0.5~1.5	厚 0.1~0.3	獣骨-シカ中足骨製	完形
11	骨製品	筭	現長 10.2	幅 0.4~1.8	厚 0.2~0.3	獣骨-シカ中足骨製	2/3
12	骨製品	筭	現長 10.2	幅 0.6~1.5	厚 0.2~0.4	獣骨-シカ中足骨製	2/3

表8 第7面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

ピット出土遺物 (図56)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.0	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット111	1/3弱
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.4	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ+ヘラナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット111	2/3
3	木製品	建築部材	長 18.1	幅 8.5	厚 6.6	仕口・柄が残る 出土遺構:ピット112	完形
4	木製品	曲物	長径 (12.4)	短径 (12.0)	厚 0.7	曲物 底板部分 曲物側板と結んだ桜皮が残る 出土遺構:ピット112	略完形
5	漆器	皿	(9.3)	(6.8)	(1.5)	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・松文) 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・松文) 高台形:輪高台 遺存状態が悪い 歪み大 出土遺構:ピット112	1/3
6	漆器	皿	(8.8)	6.2	1.6	内面:黒色漆髹漆・無文 外面:黒色漆髹漆・無文 出土遺構:ピット112	1/2
7	漆器	椀	-	-	(2.7)	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・千鳥文) 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・笹文) 出土遺構:ピット112	小片
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.5~4.7	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄褐色 焼成:良好 出土遺構:ピット117	完形

第7面 遺構外出土遺物 (図57)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.5~3.9	3.0	0.9	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:黄褐色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.5	1.7	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6~7.9	4.9	1.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.0	5.5~5.8	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.3~ 12.0	7.0~7.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙~橙色 焼成:良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	7.8	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	3/4
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2~ 12.4	7.7~8.4	3.3	内外面-口縁部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6~ 12.8	8.4~8.6	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	完形
9	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.9~8.2	3.7	内外面-口縁部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	7.0	(3.9)	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:淡褐色 焼成:良好	2/3
11	陶器	瀬戸 入子	(7.8)	(3.5)	2.5	内面-見込部朱痕 胎土:微砂、褐色粒、密 色調:胎土-黄灰色 備考:古瀬戸前期様式II~III期	1/4弱

12	陶器	山茶碗	(13.6)	-	現 5.0	胎土：微砂、白色粒、黒色粒、やや砂質 色調：灰褐色	1/5弱
13	瓦質土器	火鉢	-	-	現 10.6	内面口縁部および外面ミガキ+外面左三巴文 胎土：黒色粒、細礫 色調：白灰色 内外面黒色処理 焼成：良好 備考：IV A類	口縁～胴部片
14	石製品	砥石	現長 7.6	短 4.3	厚 0.4～0.6	仕上砥 2面に使用痕跡 石材-粘板岩	
15	石製品	温石	現長 5.6	現短 4.9	厚 1.3～1.8	3面に使用痕跡 石材-滑石	
16	金属製品	釘	現長 6.2	幅 0.3	厚 0.3	鉄製釘	略完形
17	金属製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-開元通寶(唐・621) 書体-真書	完形
18	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-皇宗通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形
19	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.5	厚 0.1	銭銘-元祐通寶(北宋・1086) 書体-行書	完形
20	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-天聖通寶(北宋・1023) 書体-篆書	完形
21	骨製品	賽子	長 0.65	短 0.6	重 0.5 g	シカの角を素材とする	略完形
22	骨製品	筭	現長 11.8	幅 0.6～1.5	厚 0.2～0.4	獣骨-シカ中足骨製	2/3

第7面 構成土出土遺物(図58)

1	木製品	経木折敷	長 20.2	現幅 4.0	厚 0.1	隅を丸く加工	不明
2	木製品	箸状	現長 20.7	幅 0.5	厚 0.5	端部焼痕	略完形
3	木製品	箸状	長 24.0	幅 0.6	厚 0.5	断面方形	完形
4	木製品	箸状	現長 18.0	幅 0.7	厚 0.5	断面方形	不明
5	木製品	篋状	長 13.0	幅 0.7	厚 0.3	端部斜めに加工	略完形
6	木製品	篋状	現長 12.2	幅 0.6	厚 0.3	端部斜めに加工	略完形
7	木製品	篋状	現長 11.5	幅 0.7	厚 0.3	端部篋状に加工	略完形
8	木製品	棒状	長 13.3	幅 0.8	厚 0.9	端部焼痕・火鑽棒?	略完形
9	木製品	棒状	現長 17.5	幅 0.7	厚 0.4	断面方形・片面焼痕	不明
10	木製品	建築部材	現長 21.3	現幅 5.9	厚 1.1		不明
11	木製品	杭	現長 15.6	現幅 2.9	厚 2.3	端部斜めに加工・鉄釘痕・建築部材を再加工?	不明
12	木製品	用途不明	長 4.5	幅 3.7	厚 1.5	端材?	不明
13	木製品	用途不明	現長 5.0	幅 1.2	厚 0.2	片面に約0.9cm刻みで切込み痕	不明
14	木製品	用途不明	現長 11.3	幅 1.1～2.3	厚 0.9	杭?	不明
15	木製品	用途不明	現長 17.4	現幅 1.9	厚 0.2～0.3	板折敷?	不明

表9 第8面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

ピット出土遺物(図62)

1	漆器	椀	13.6	7.7	4.3	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(3カ所に鶴文)・手描き 高台形：輪高台 出土遺構：ピット122	2/3
2	漆器	椀	(13.6)	7.2	5.5	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台 高台内面に線刻残る 出土遺構：ピット131	2/3

表10 第9面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構9出土遺物(図66・67)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6～8.0	6.6～6.8	2.0	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
2	磁器	青磁 碗	-	(5.8)	現 4.0	外面-蓮弁文 色調：胎土-暗灰色、釉-緑灰色 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗II-b類	1/6
3	金属製品	鑿	現長 9.2	幅 1.8～2.2	厚 0.1～0.3	鉄製鑿?	略完形
4	金属製品	火箸	現長 26.3	幅 0.3～0.5	厚 0.3～0.5	鉄製火箸	略完形
5	骨製品	筭	現長 11.4	幅 0.8～1.5	厚 0.2	獣骨-シカ中足骨製	2/3
6	木製品	呪符木簡	長 11.2	幅 2.8～3.5	厚 0.7	図66の釈文参照	完形

7	木製品	箸状	現長 18.4	幅 0.5	厚 0.4	断面方形	不明
8	木製品	箸状	現長 20.4	幅 0.7	厚 0.4	断面扁平	不明
9	木製品	箸状	長 22.6	幅 0.7	厚 0.4	断面扁平	完形
10	木製品	串状	長 22.0	幅 0.7	厚 0.6	断面方形・片端のみ加工	完形
11	木製品	連歯下駄	現長 18.5	幅 10.0	厚 4.8	遺存状態悪い	不明
12	木製品	連歯下駄	現長 17.1	幅 9.2	厚 7.1	鼻緒止めの部材残る	1/2
13	木製品	用途不明	長 10.0~6.2	幅 3.2	厚 0.6	端部焼痕・刃物痕が残る	不明
14	漆器	皿	(9.6)	(7.0)	1.1	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台	1/3
15	漆器	椀	—	(6.8)	(1.2)	内面：黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(スタンプ文・竜胆文) 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台	1/3

表11 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
礎石建物 1	第1面	(360)	(270)	—	ビット 29	第4面	12	11	—	ビット 67	第6面	35	(19)	27
切石基礎建物 1	第2面	(247)	(185)	—	ビット 30	第4面	19	16	35	ビット 68	第6面	49	40	45
石列 1	第2面	77	(40)	—	ビット 31	第4面	18	17	31	ビット 69	第6面	(38)	(36)	30
据鉢遺構 1	第2面	(64)	(46)	13	ビット 32	第4面	22	20	20	ビット 70	第6面	55	54	15
土坑 1	第2面	(78)	69	24	ビット 33	第4面	37	31	30	ビット 71	第6面	53	44	22
土坑 2	第2面	(86)	(69)	10	ビット 34	第4面	(55)	40	20	ビット 72	第6面	31	29	47
土坑 3	第2面	61	53	20	ビット 35	第4面	58	39	25	ビット 73	第6面	56	47	32
土坑 4	第2面	(92)	51	26	ビット 36	第4面	51	30	13	ビット 74	第6面	25	(23)	38
ビット 1	第2面	32	29	12	ビット 37	第4面	(55)	25	29	ビット 75	第6面	42	33	24
ビット 2	第2面	33	26	12	ビット 38	第4面	45	28	38	ビット 76	第6面	(30)	24	18
ビット 3	第2面	55	51	69	ビット 39	第4面	38	30	45	ビット 77	第6面	44	35	37
溝状遺構 1	第3面	(500)	80	73	ビット 40	第4面	43	32	24	ビット 78	第6面	47	(32)	26
溝状遺構 2	第3面	(190)	41	5~19	ビット 41	第4面	20	(10)	7	ビット 79	第6面	42	36	26
土坑 5	第3面	(160)	(120)	48	ビット 42	第4面	41	36	7	ビット 80	第6面	(39)	33	15
土坑 6	第3面	(88)	(61)	18	ビット 43	第4面	(39)	(30)	31	ビット 81	第6面	(28)	(13)	15
土坑 7	第3面	65	46	26	ビット 44 (欠)	第4面	—	—	—	ビット 82	第6面	15	14	38
土坑 8	第3面	82	60	42	ビット 45	第4面	27	20	16	ビット 83	第6面	36	35	22
土坑 9	第3面	104	(45)	14	溝状遺構 4	第5面	(500)	148~180	100	ビット 84	第6面	30	(27)	21
土坑 10	第3面	67	44	11	溝状遺構 5	第5面	(280)	(80)	91	ビット 85	第6面	20	15	13
土坑 11	第3面	106	76	18	溝状遺構 6	第5面	(150)	(56)	16	ビット 86	第6面	18	13	17
土坑 12	第3面	(50)	(64)	24	土坑 21	第5面	60	43	18	ビット 87	第6面	30	27	21
土坑 13	第3面	(100)	(90)	23	土坑 22	第5面	(60)	54	21	ビット 88	第6面	(27)	26	13
ビット 4	第3面	(34)	(28)	13	土坑 23	第5面	118	(97)	15	ビット 89	第6面	30	29	18
ビット 5	第3面	26	24	11	土坑 24	第5面	99	90	31	ビット 90	第6面	(34)	34	47
ビット 6	第3面	32	31	4	土坑 25	第5面	61	50	11	ビット 91	第6面	(42)	(37)	19
ビット 7	第3面	(18)	(18)	15	土坑 26	第5面	86	59	38	ビット 92	第6面	43	(37)	19
ビット 8	第3面	55	49	13	土坑 27	第5面	110	(55)	8	ビット 93	第6面	50	44	35
ビット 9	第3面	27	23	13	ビット 46	第5面	25	15	16	ビット 94	第6面	(40)	(24)	21
ビット 10	第3面	50	49	49	ビット 47	第5面	30	25	34	ビット 95	第6面	(40)	32	22
ビット 11	第3面	(39)	(35)	3	ビット 48	第5面	18	15	32	溝状遺構 8	第7面	(400)	32~37	14~28
ビット 12	第3面	(29)	28	10	ビット 49	第5面	30	22	32	ビット 96	第7面	46	44	28
ビット 13	第3面	45	40	33	ビット 50	第5面	48	34	44	ビット 97	第7面	41	(33)	8
ビット 14	第3面	38	(33)	7	ビット 51	第5面	42	40	18	ビット 98	第7面	39	33	33
ビット 15	第3面	42	33	16	ビット 52	第5面	32	28	25	ビット 99	第7面	(46)	30	9
ビット 16	第3面	29	25	11	ビット 53	第5面	38	35	14	ビット 100	第7面	47	(29)	11
ビット 17	第3面	34	33	15	ビット 54	第5面	22	18	13	ビット 101	第7面	30	21	11
ビット 18	第3面	(32)	37	12	溝状遺構 7	第6面	(220)	39~61	7	ビット 102	第7面	44	(14)	10
ビット 19	第3面	39	33	12	不明遺構 1	第6面	(203)	(182)	14	ビット 103	第7面	21	17	15
ビット 20	第3面	28	25	18	土坑 28	第6面	(98)	(39)	23	ビット 104	第7面	28	(10)	9
ビット 21	第3面	48	45	14	土坑 29	第6面	(77)	65	42	ビット 105	第7面	(39)	28	—
ビット 22	第3面	37	(32)	16	土坑 30	第6面	(60)	(48)	17	ビット 106	第7面	32	23	16
ビット 23	第3面	35	34	30	土坑 31	第6面	93	58	18	ビット 107	第7面	(53)	43	34
ビット 24	第3面	35	(30)	15	ビット 55	第6面	55	(20)	12	ビット 108	第7面	49	(31)	18
ビット 25	第3面	(50)	(46)	18	ビット 56	第6面	(45)	(17)	31	ビット 109	第7面	50	(26)	24
溝状遺構 3	第4面	(90)	30~40	19	ビット 57	第6面	43	30	26	ビット 110	第7面	38	(19)	9
土坑 14	第4面	(64)	(48)	35	ビット 58	第6面	28	(25)	16	ビット 111	第7面	44	(33)	60
土坑 15	第4面	109	86	61	ビット 59	第6面	56	53	35	ビット 112	第7面	22	21	35
土坑 16	第4面	97	(65)	48	ビット 60	第6面	32	27	16	ビット 113	第7面	44	(38)	26
土坑 17	第4面	(63)	55	41	ビット 61	第6面	36	23	43	ビット 114	第7面	31	27	62
土坑 18	第4面	62	(34)	39	ビット 62	第6面	51	50	27	ビット 115	第7面	49	47	29
土坑 19	第4面	(61)	(58)	11	ビット 63	第6面	37	(34)	—	ビット 116	第7面	17	12	40
土坑 20	第4面	79	76	47	ビット 64	第6面	(33)	(26)	—	ビット 117	第7面	(41)	32	44
ビット 26	第4面	47	(37)	20	ビット 65	第6面	28	23	18	土坑 32	第8面	61	56	56
ビット 27	第4面	45	(20)	6	ビット 66	第6面	47	(30)	28	ビット 118	第8面	(25)	(15)	10
ビット 28	第4面	30	22	26						ビット 119	第8面	(33)	(23)	23

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ピット 120	第 8 面	40	<30>	33
ピット 121	第 8 面	40	37	56
ピット 122	第 8 面	32	<28>	17
ピット 123	第 8 面	52	43	40
ピット 124	第 8 面	25	20	25
ピット 125	第 8 面	25	21	11
ピット 126	第 8 面	34	32	47

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ピット 127	第 8 面	27	25	15
ピット 128	第 8 面	41	<30>	27
ピット 129	第 8 面	37	30	24
ピット 130	第 8 面	18	16	20
ピット 131	第 8 面	40	35	23
ピット 132	第 8 面	28	23	27
ピット 133	第 8 面	36	-	10

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ピット 134	第 8 面	50	<37>	20
板組遺構 1	第 9 面	<235>	<216>	40
溝状遺構 9	第 9 面	<180>	32	15
ピット 135	第 9 面	39	<33>	24
ピット 136	第 9 面	<17>	17	7
ピット 137	第 9 面	26	22	19
ピット 138	第 9 面	8	6	19

表12 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	53
【青磁】		
同安窯系	碗	1
【陶器】		
瀬戸	碗	2
	天目茶碗	1
	盤	2
	縁釉小皿	3
常滑	甕	8
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	2
備前	播鉢	1
【土器】		
	火鉢	1
【瓦質土器】		
	火鉢	3
【土製品】		
	土鍋	1
	土風炉	1
【石製品】		
	基石	1
【木製品】		
	棒状	1
【金属製品】		
	銭貨	3
	釘	6
	鋳型状	1
合計 92		

第1面

ピット 1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
合計 4		

ピット 2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計 3		

ピット 3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【金属製品】		
	銭貨	1
合計 5		

第1面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 6		

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	141

【白磁】		
産地	器種	破片数
	器種不明	1
【青磁】		
同安窯系	皿	1
龍泉窯系	碗Ⅰ類	5
	器種不明	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	瓶類	1
	碗	2
	天目茶碗	1
	折縁深皿	6
	縁釉小皿	1
	直縁大皿	1
常滑	甕	23
	片口鉢Ⅱ類	4
	摩耗陶片	1
【瓦質土器】		
	火鉢	4
【瓦】		
	丸瓦	2
	平瓦	5
【石製品】		
	砥石	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	3
	鉄滓	1
	器種不明	1
合計 209		

攪乱

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
【陶器】		
瀬戸	碗	1
	天目茶碗	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	羽釜	1
	火鉢	1
【金属製品】		
	銭貨	1
合計 27		

第2面

掘鉢遺構 1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計 6		

土坑 4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
【陶器】		
瀬戸	盤	1
常滑	甕	1
合計 22		

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦】		
	軒平瓦	1
	平瓦	3
合計 13		

第2面 構成土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	278
【白磁】		
	瓶類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	水瓶	1
	香炉	1
	太鼓胴深鉢	1
	器種不明	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	壺	3
	四耳壺	1
	碗	4
	盤	1
	天目茶碗	1
	卸皿	3
	折縁深皿	5
	縁釉小皿	8
	直縁大皿	4
	常滑	甕
備前	播鉢	1
【土器】		
	火鉢	1
	器種不明	1
【瓦質土器】		
	土風炉	1
	火鉢	5
	碗	1
	香炉	1
	器種不明	1
【瓦】		
	軒丸瓦	1
	丸瓦	1
	平瓦	2
【石製品】		
	砥石	3
	硯	1
【金属製品】		
	銭貨	3
	釘	2
合計 370		

第3面

溝状遺構 1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	157

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	盤	5
	碗	5
	平碗	1
	天目茶碗	7
	卸皿	1
	縁袖小皿	9
	直縁大皿	1
常滑	堯	12
	片口鉢Ⅱ類	11
【瓦質土器】		
	燭台	1
	香炉	1
	火鉢	9
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【土製品】		
	器種不明	1
【土師器】		
	器種不明	1
【金属製品】		
	銅製品 器種不明	1
合計		228

溝状遺構1 掘り方		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	40
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【陶器】		
瀬戸	碗	1
	皿	1
常滑	堯	3
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	火鉢	6
【金属製品】		
	器種不明	1
	鉄滓	1
合計		57

土坑6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
【陶器】		
常滑	堯	5
合計		12

土坑7		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
合計		1

土坑9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
瀬戸	碗	1
	縁袖小皿	1
【金属製品】		
	銭貨	1
合計		5

土坑10		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	縁袖小皿	1
常滑	堯	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		13

土坑11		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	1
【金属製品】		
	器種不明	1
合計		2

土坑12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
【陶器】		
瀬戸	碗	3
合計		10

ビット5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【金属製品】		
	釘	1
合計		3

ビット21		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	67
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	縁袖小皿	4
常滑	堯	2
	片口鉢Ⅱ類	4
産地不明	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【土師器】		
	堯	1
合計		81

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	3
	かわらけ ロクロ成形	146
【白磁】		
	碗	1

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	3
【陶器】		
瀬戸	盤	4
	碗	8
	天目茶碗	4
	皿	1
	卸皿	2
	縁袖小皿	4
	堯	13
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	7
【瓦質土器】		
	香炉	2
	火鉢	3
【瓦】		
	丸瓦	2
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	2
	滑石製石鍋	1
【土師器】		
	堯	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	4
	器種不明 鋳型?	1
	器種不明	1
合計		216

第4面		
土坑14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

土坑15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	28
【陶器】		
瀬戸	壺	1
常滑	堯	3
【土器】		
	羽釜	1

【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
【金属製品】		
	銭貨	1
合計		36

土坑20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		8

ビット30		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット36		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計		5

ビット37		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 2		

ビット38		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	2
	碗	1
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計 5		

ビット39		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
【土器】		
	羽釜	2
合計 4		

ビット42		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
【陶器】		
常滑	甕	2
合計 4		

ビット43		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 2		

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	手づくね成形	1
かわらけ	ロクロ成形	201
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
	折縁皿	2
	瓶類	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	皿	1
【陶器】		
瀬戸	盤	7
	碗	9
	天目茶碗	2
	折縁深皿	1
	卸皿	4
	縁袖小皿	4
	搦鉢	2
常滑	甕	17
	片口鉢Ⅱ類	9
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	7
【石製品】		
	砥石	7
	硯	1
	石器	1

第5面		
産地	器種	破片数
溝状遺構4		
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	62
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	4
	甕	5
常滑	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
	硯	1
【木製品】		
	箸状	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	1

【金属製品】		
産地	器種	破片数
	銭貨	6
	釘	1
合計 288		

第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	6
	かわらけ ロクロ成形	176
【青磁】		
同安窯系	碗	1
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	折縁皿	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	皿	1
【陶器】		

中国		
産地	器種	破片数
瀬戸	天目茶碗	1
	碗	6
	平碗	2
	天目茶碗	1
	皿	2
	折縁深皿	7
	縁袖小皿	3
	直縁大皿	2
鉄釉	極小碗	1
常滑	甕	50
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	3
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	5
	黒縁碗	1
【土器】		
	羽釜	1
	焙烙	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	4
【石製品】		
	砥石	5
	硯	1
【金属製品】		
	銭貨	7
	釘	4
	鉄滓	2
	器種不明	1
【ガラス製品】		
	玉	1
	器種不明	20
合計 322		

溝状遺構5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	2
常滑	甕	2
【瓦】		
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器碗	1
	箸状	1
	部材	1
合計 16		

溝状遺構5 掘り方		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	25
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
常滑	甕	4
	片口鉢Ⅰ類	2
【瓦】		
	軒平瓦	1
	丸瓦	1
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器蓋	1
合計 36		

鉄滓		
産地	器種	破片数
		1
合計 84		

溝状遺構4 掘り方		
産地	器種	破片数
【陶器】		
瀬戸	行平鍋	4
【金属製品】		
	銭貨	1
合計 5		

溝状遺構5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	2
常滑	甕	2
【瓦】		
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器碗	1
	箸状	1
	部材	1
合計 16		

溝状遺構5 掘り方		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	25
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
常滑	甕	4
	片口鉢Ⅰ類	2
【瓦】		
	軒平瓦	1
	丸瓦	1
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器蓋	1
合計 36		

溝状遺構6		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	篋状	1
	用途不明	1
	漆器皿	1
	漆器蓋	1
合計 4		

土坑24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
合計 8		

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計 1		

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅹ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計 1		

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅹ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

瀬戸	広口壺	1
	天目茶碗	2
	卸皿	1
	小坏	1
	縁袖小皿	1
常滑	甕	9
備前	播鉢	1
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	2
【瓦】		
	丸瓦	2
	平瓦	1
【土製品】		
	ふいごの羽口	1
【石製品】		
	砥石	3
【ガラス製品】		
	玉	1
【木製品】		
	漆器棒状製品	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	留具	2
	釘	1
	銅製品 器種不明	1
	鉄製品 器種不明	1
	鉄滓	1
	合計	122

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	2
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計		4

第6面		
土坑28		
産地	器種	破片数
	かわらけ ロクロ成形	12
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
合計		13

土坑29		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【瓦】		
	鬘斗瓦	1
合計		7

ビット40		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	箸状	1
合計		1

ビット59		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【木製品】		
	箸状	2
	経木折敷	1
合計		9

ビット61		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
合計		5

ビット66		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット69		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【瓦】		
	丸瓦	1
合計		2

ビット73		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【石製品】		
	砥石	1
合計		9

ビット77		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	31
【陶器】		
常滑	甕	4
【金属製品】		
	釘	4
	留具	1
合計		40

ビット79・80		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
常滑	甕	3
合計		5

ビット81		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
合計		2

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計		6

ビット91		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット93		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット95		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
合計		1

第6面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	214
【白磁】		
	碗	1
	小型壺?	1
	合子	1

【青磁】		
龍泉窯系	壺	1
【青白磁】		
	梅瓶	1

【陶器】		
瀬戸	盤	1
	柄付片口	1
	碗	1
	天目茶碗	1
	入子	1
	折縁深皿	1
	卸皿	3
常滑	甕	79
	広口壺大	1
	片口鉢Ⅱ類	4

【瓦質土器】		
	火鉢	5

【瓦】		
	軒丸瓦	1
	軒平瓦	1
	平瓦	1

【石製品】		
	滑石製スタンプ	1
【骨製品】		
	筭	3
【木製品】		
	烏帽子	2
【金属製品】		
	釘	3
合計		331

第6面 構成土		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		1

第7面		
溝状遺構8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	15
【陶器】		
常滑	甕	4
【木製品】		
	漆器椀	1
合計		20

ビット98		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット99		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
合計		8

ピット101			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	5	
【木製品】			
	箸状	1	
		合計	6

ピット108			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	2	
		合計	2

ピット111			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	4	
		合計	4

ピット112			
産地	器種	破片数	
【木製品】			
建築部材		1	
曲物		1	
漆器皿		2	
漆器椀		1	
		合計	5

ピット117			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	2	
		合計	2

第7面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	295
【白磁】		
	碗	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【青白磁】		
	碗	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	柄付片口	1
	入子	1
	卸皿	2
常滑	甕	12
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	碗	2
【瓦質土器】		
	火鉢	3
【瓦】		
	平瓦	6
【石製品】		
	滑石鍋加工品(温石)	1
	砥石	1

【骨製品】			
産地	器種	破片数	
	筭	1	
	賽子	1	
【木製品】			
	漆器椀	1	
	漆器皿	2	
	曲物(底板)	1	
【金属製品】			
	銭貨	5	
	釘	1	
		合計	343

第7面 構成土			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	133	
【白磁】			
	皿	1	
	皿Ⅸ類	3	
	香炉	1	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1	
【陶器】			
瀬戸	折縁深皿	1	
常滑	甕	8	
【瓦質土器】			
	火鉢	2	
【瓦】			
	平瓦	2	
【石製品】			
	砥石	1	
【木製品】			
	経木折敷	1	
	箸状	9	
	籠状	3	
	棒状	6	
	建材	1	
	建築部材	2	
	杭	1	
	用途不明	7	
【金属製品】			
	釘	2	
		合計	185

第8面			
産地	器種	破片数	
土坑32			
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	8	
【陶器】			
常滑	甕	2	
【木製品】			
	草履芯	1	
	端材	2	
【金属製品】			
	銭貨	1	
		合計	14

ピット121			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	1	
		合計	1

ピット122			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	6	
【木製品】			
	漆器椀	1	
		合計	7

ピット131			
産地	器種	破片数	
【木製品】			
	漆器椀	1	
		合計	1

第8面 構成土			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	1	
		合計	1

第9面			
産地	器種	破片数	
溝状遺構9			
【かわらけ】			
かわらけ	ロクロ成形	53	
【白磁】			
	合子	1	
	皿Ⅸ類	1	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2	
【青白磁】			
	梅瓶	2	
【陶器】			
常滑	甕	3	
	片口鉢Ⅰ類	2	
【石製品】			
	砥石	1	
【骨製品】			
	筭	1	
【木製品】			
	呪符木簡	1	
	漆器椀	1	
	漆器皿	1	
	箸状	3	
	串状	3	
	連筒下駄	2	
	用途不明	2	
【金属製品】			
	刀子	1	
	鑿	1	
	火箸	1	
		合計	82



1. 調査地点近景 (南西から)



2. I区調査開始時 近景 (西から)

図版 2



1. I区北東壁土層断面(南西から)



2. II区北東壁土層断面(南西から)



1. I区第1面全景(南東から)



2. I区第2面全景(南西から)



3. 第2面 据鉢遺構 1 (北東から)



1. I区第3面全景(北東から)



2. II区第3面全景(北西から)



1. 第3面 溝状遺構1 (東から)



2. 第3面 調査風景 (南西から)

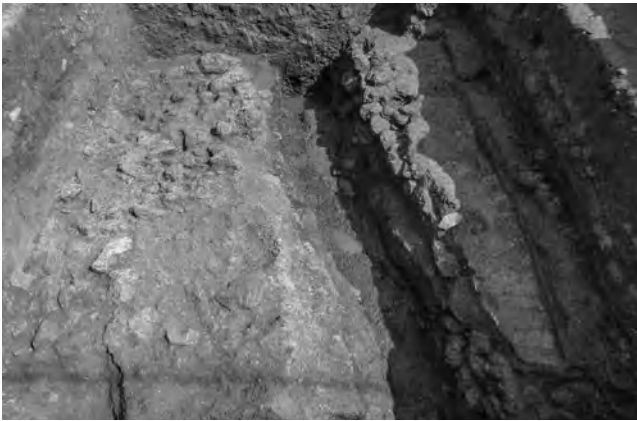
図版 6



1. I区第4面全景(北東から)



2. II区第4面全景(北東から)



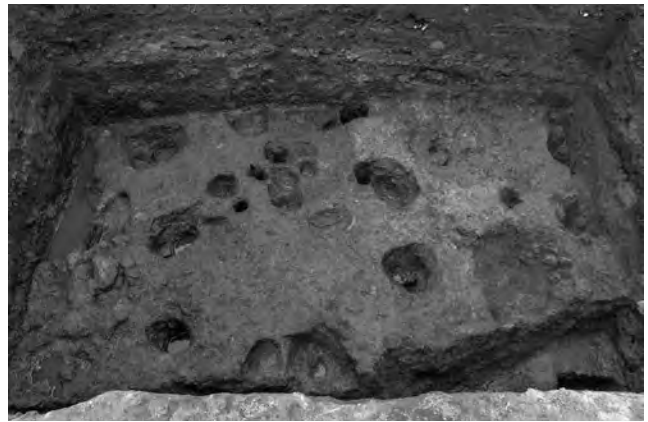
3. I区第5面全景(南西から)



4. I区第6面全景(西南から)



5. II区第5面全景(北西から)



6. II区第6面全景(北西から)



7. 第5面 溝状遺構5(北西から)



8. 第6面 溝状遺構7木組護岸跡(南東から)



1. I区第7面全景(南西から)



2. II区第7面全景(北東から)



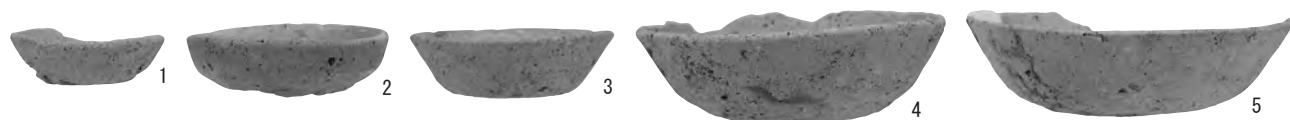
3. I区第8面全景(南西から)



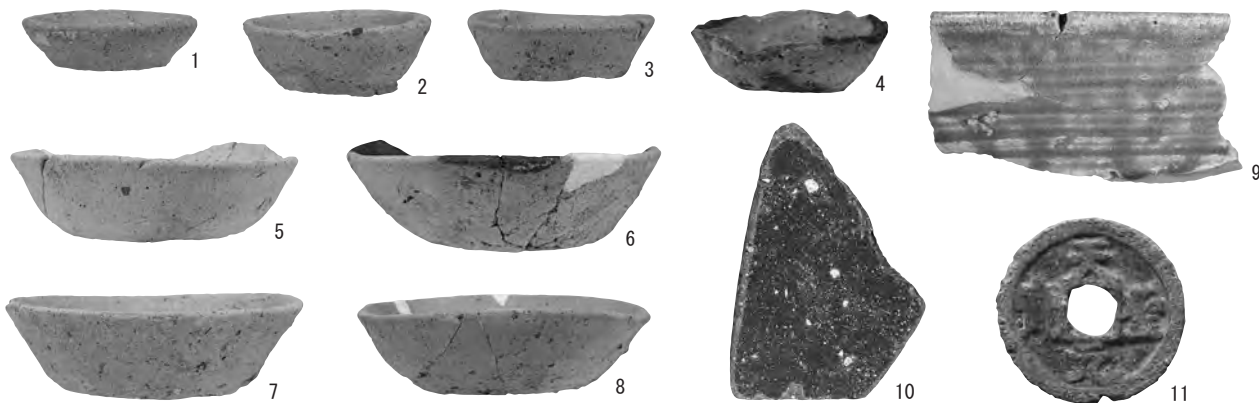
1. 第9面全景(南東から)



2. 第9面 板組遺構1(北から)



1. 第1面 遺構外出土遺物



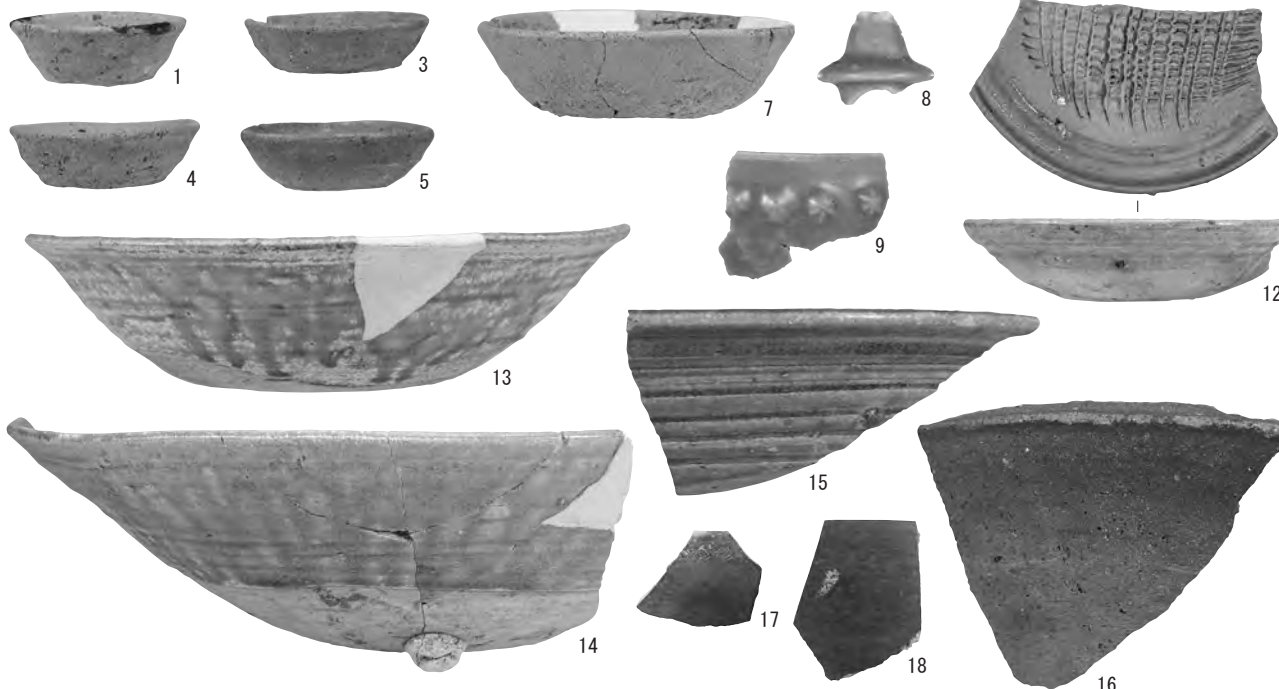
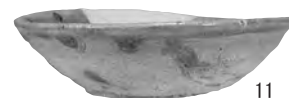
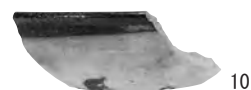
2. 第1面 構成土出土遺物



3. 第2面 据鉢遺構1出土遺物



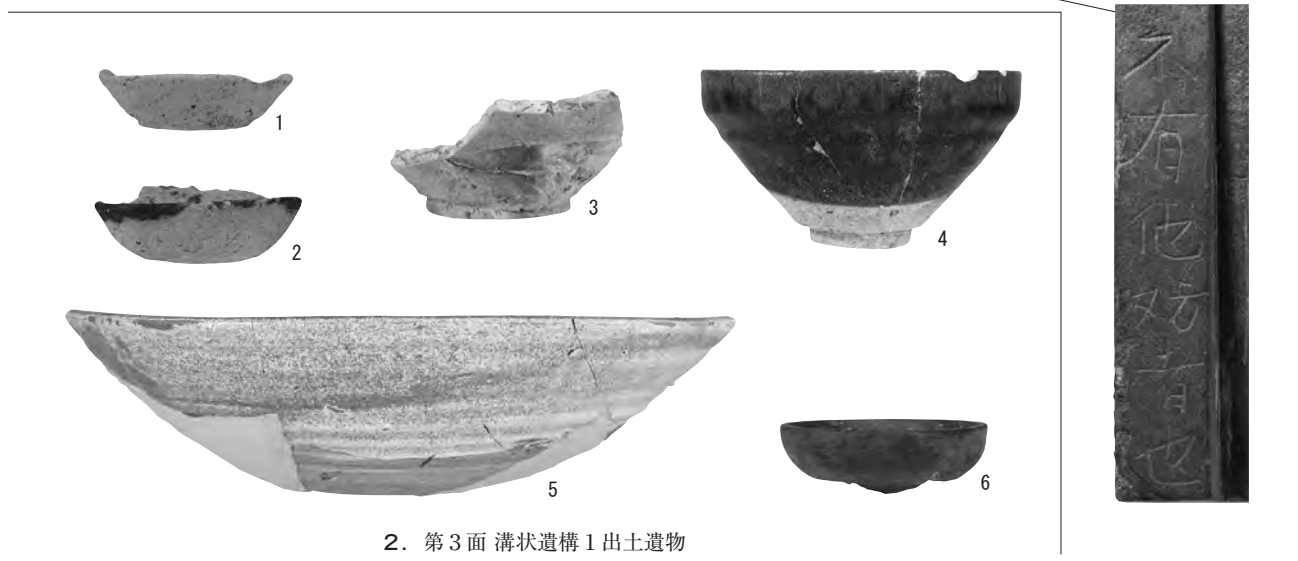
4. 第2面 土坑4出土遺物



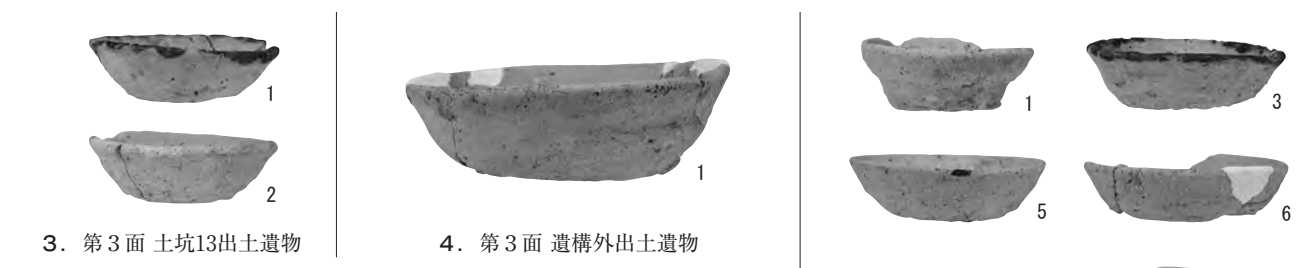
5. 第2面 構成土出土遺物(1)



1. 第2面 構成土出土遺物(2)

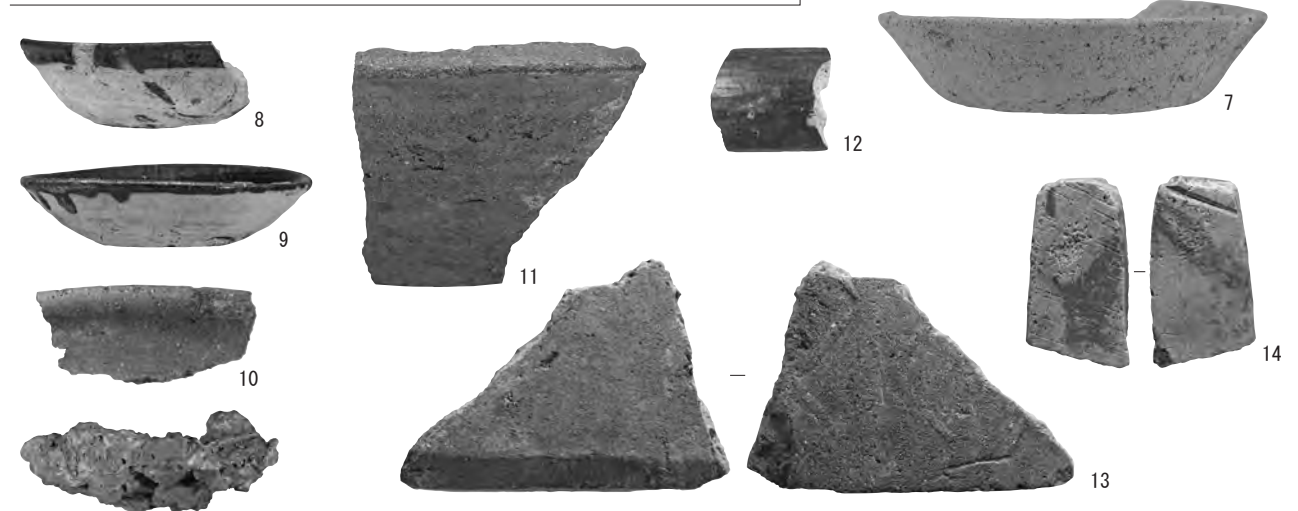


2. 第3面 溝状遺構1出土遺物



3. 第3面 土坑13出土遺物

4. 第3面 遺構外出土遺物



写真資料 (S = 1/3)

5. 第3面 構成土出土遺物



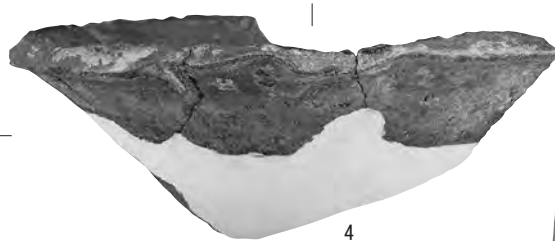
1. 第4面 土坑14出土遺物



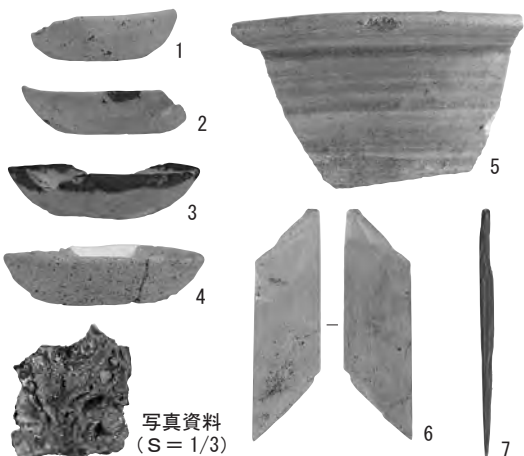
2. 第4面 土坑15出土遺物



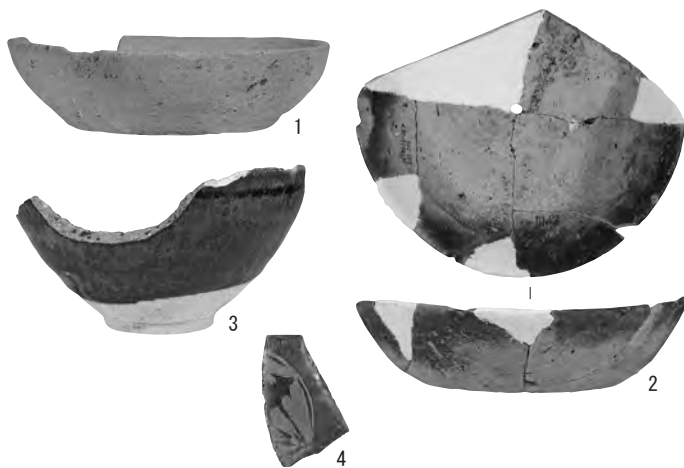
3. 第4面 土坑20出土遺物



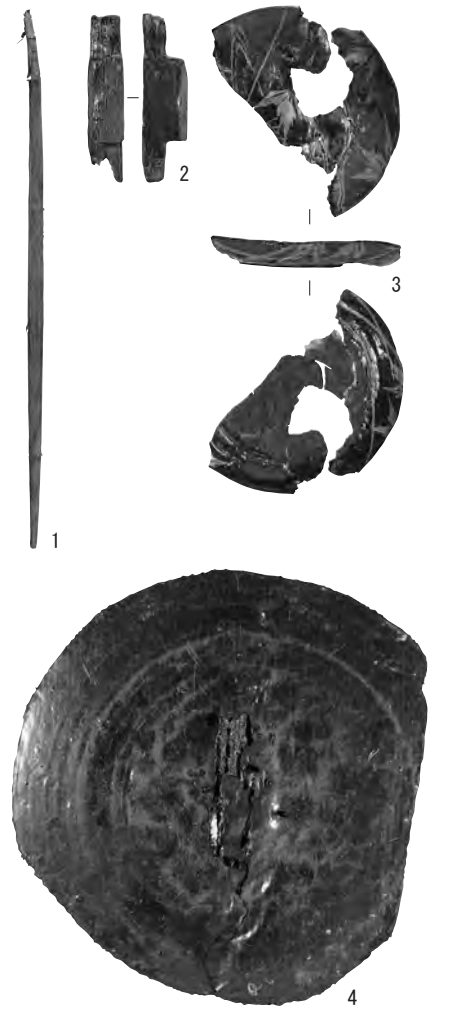
4. 第4面 構成土出土遺物



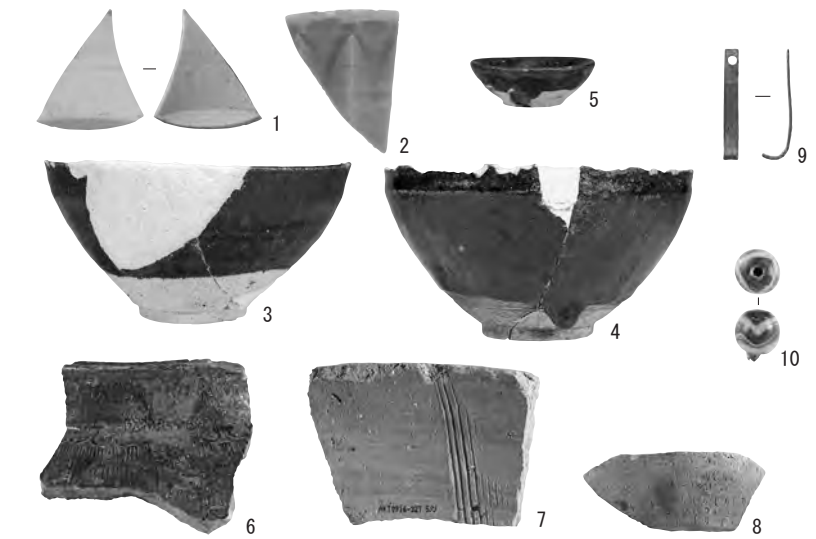
写真資料
(S=1/3)
5. 第5面 溝状遺構4 出土遺物



6. 第5面 溝状遺構5 出土遺物



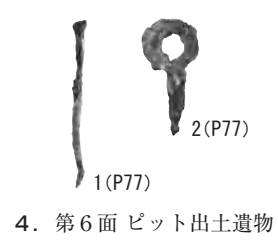
1. 第5面 溝状遺構6出土遺物



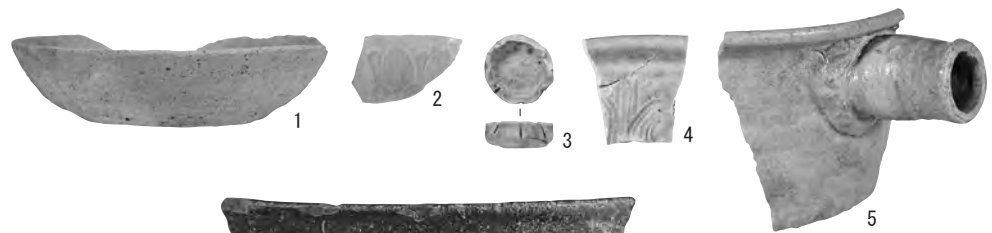
2. 第5面 遺構外出土遺物



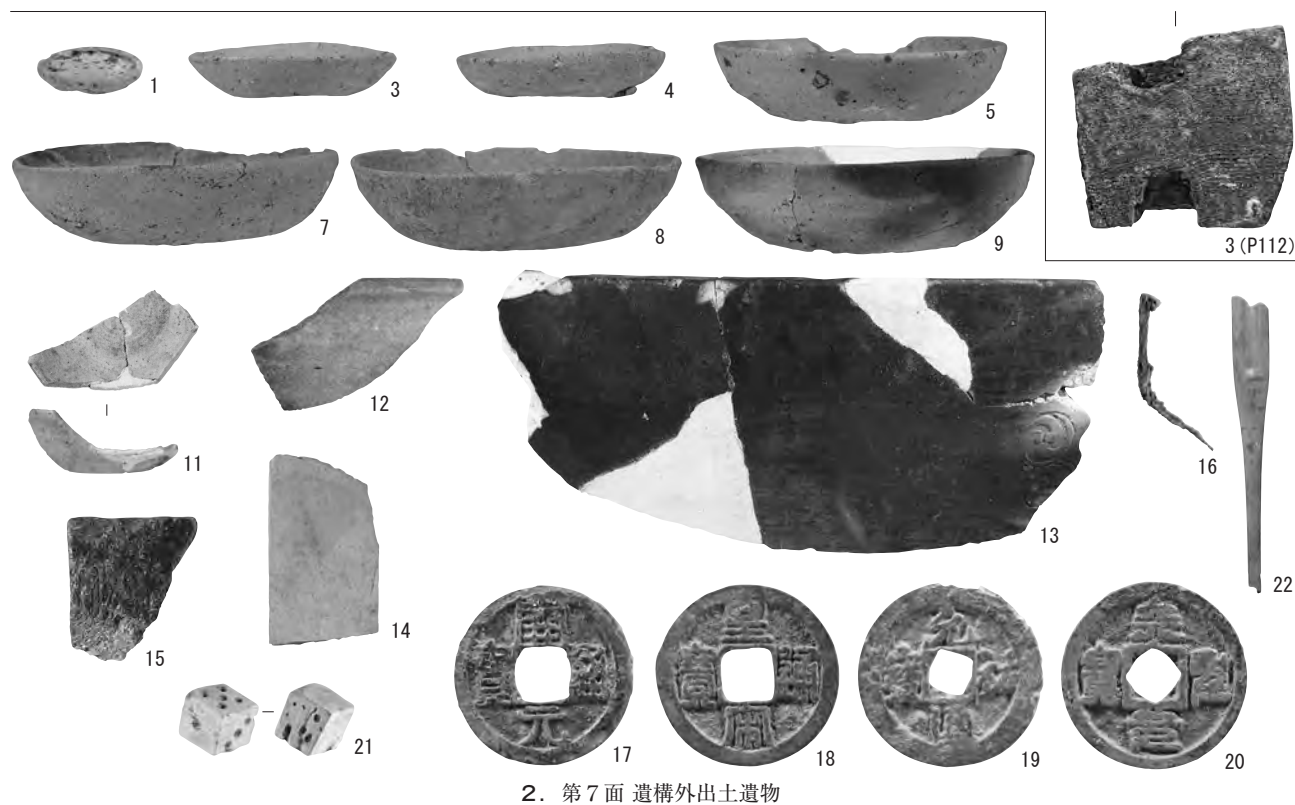
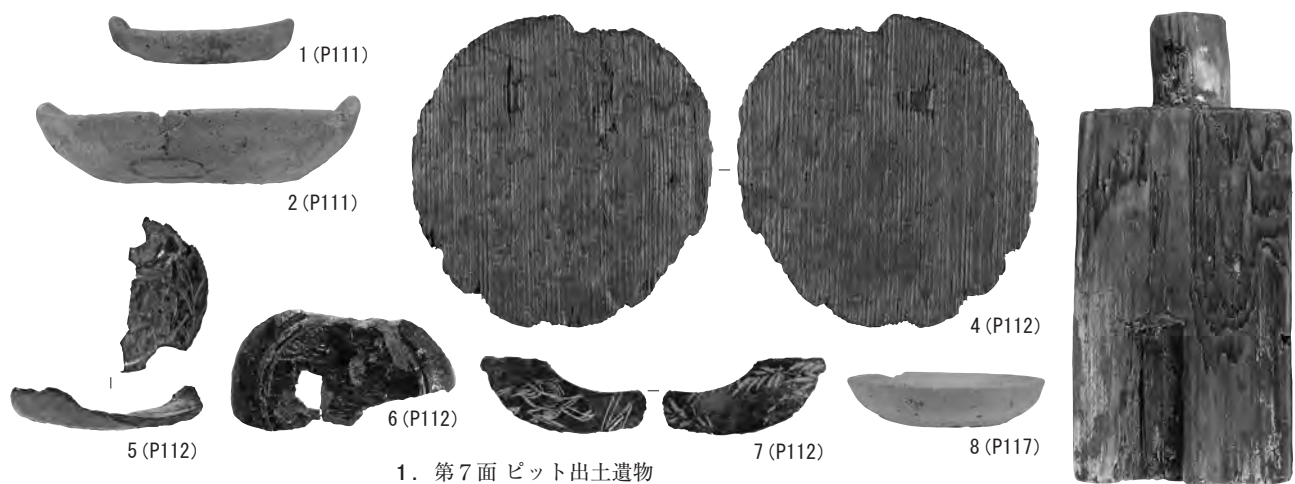
3. 第6面 土坑29出土遺物

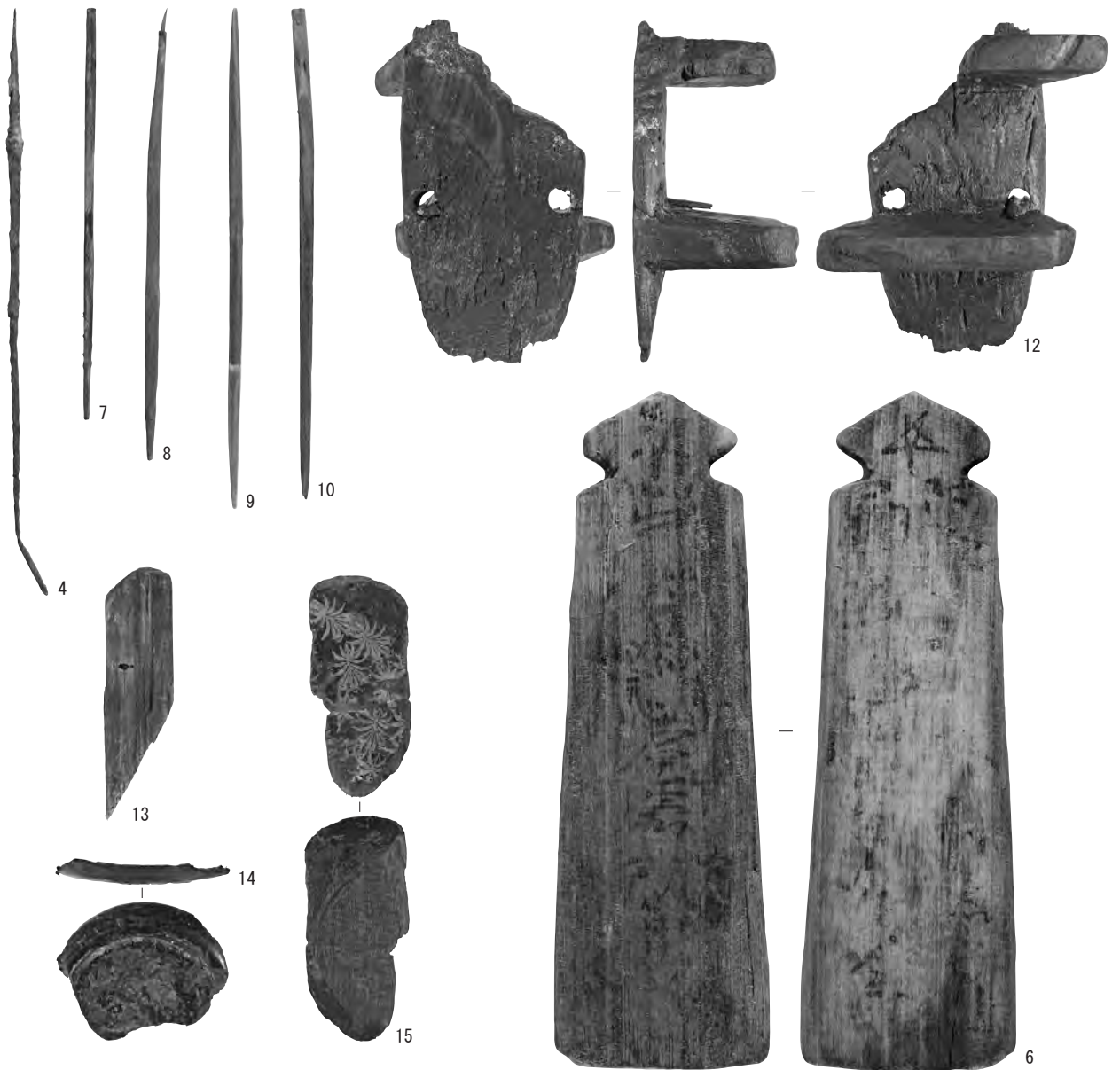
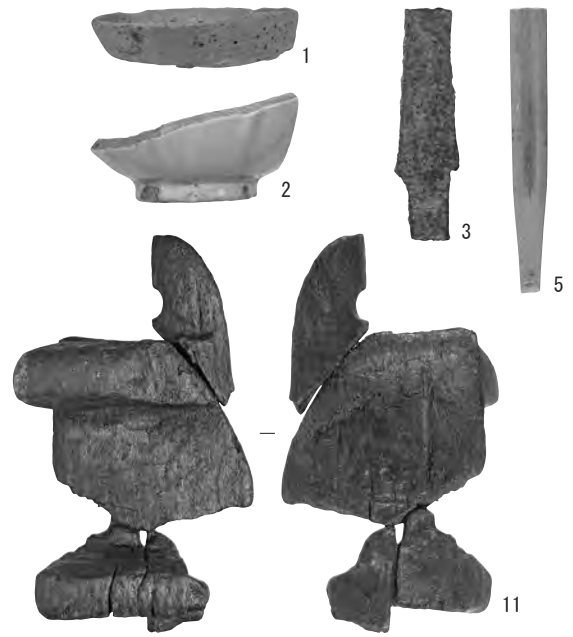


4. 第6面 ピット出土遺物



5. 第6面 遺構外出土遺物





2. 第9面 溝状遺構9出土遺物

田楽辻子周辺遺跡 (No.33)

浄明寺一丁目652番8 地点

例 言

1. 本報は「田楽辻子周辺遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.33）内、鎌倉市浄明寺一丁目652番8地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年10月10日～平成21年1月29日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約67㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子
調査員 渡辺美佐子・根本志保
作業員 牛嶋道夫・秋田公祐・鯉沼 稔・鈴木啓之・渡辺輝彦
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「DZ0814」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
□ 道路状遺構
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	192
第1節 調査に至る経緯と経過	192
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	192
第3節 周辺の考古学的調査	194
第二章 堆積土層	197
第三章 発見された遺構と遺物	198
第1節 第1面の遺構と遺物	198
第2節 第2面の遺構と遺物	200
第3節 第3面の遺構と遺物	207
第4節 第4面の遺構と遺物	209
第5節 第5面の遺構と遺物	213
第6節 第6面の遺構と遺物	215
第7節 第7面の遺構と遺物	216
第8節 第8面の遺構と遺物	217
第9節 第9面の遺構と遺物	220
第10節 第10面の遺構と遺物	222
第11節 第11面の遺構と遺物	223
第四章 まとめ	225

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	193	図14 第2面 溝状遺構1	202
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	195	図15 第2面 土坑3～14	203
図3 調査区位置図	196	図16 第2面 土坑3出土遺物	204
図4 調査区配置図	196	図17 第2面 土坑5出土遺物	204
図5 調査区南東壁 土層断面図	197	図18 第2面 土坑9出土遺物	204
図6 第1面 遺構分布図	198	図19 第2面 土坑13出土遺物	204
図7 第1面 井戸1	199	図20 第2面 ピット2	205
図8 第1面 井戸1 出土遺物	199	図21 第2面 ピット出土遺物	205
図9 第1面 土坑1・2	200	図22 第2面 遺構外出土遺物(1)	206
図10 表土出土遺物	200	図23 第2面 遺構外出土遺物(2)	207
図11 第1面 遺構外出土遺物	200	図24 第3面 遺構分布図	207
図12 第2面 遺構分布図	201	図25 第3面 溝状遺構2・3	208
図13 第2面 道路状遺構1	201	図26 第3面 溝状遺構2出土遺物	208

図27	第3面	土坑15~18出土遺物	209	図43	第7面	溝状遺構9	216
図28	第3面	土坑18出土遺物	209	図44	第8面	遺構分布図	217
図29	第4面	遺構分布図	210	図45	第8面	溝状遺構10・11	217
図30	第4面	溝状遺構5出土遺物	210	図46	第8面	方形土坑1	218
図31	第4面	溝状遺構4~8	211	図47	第8面	方形土坑1出土遺物	218
図32	第4面	溝状遺構6出土遺物	211	図48	第8面	土坑20~22出土遺物	219
図33	第4面	溝状遺構7出土遺物	211	図49	第8面	遺構外出土遺物	219
図34	第4面	土坑19	212	図50	第8面	構成土出土遺物	220
図35	第4面	遺構外出土遺物	212	図51	第9面	遺構分布図	220
図36	第5面	遺構分布図	213	図52	第9面	土坑23~27	221
図37	第5面	礎石建物1	214	図53	第10面	遺構分布図	222
図38	第5面	遺構外出土遺物	214	図54	第10面	土坑28	222
図39	第6面	遺構分布図	215	図55	第11面	遺構分布図	223
図40	第6面	遺構外出土遺物	215	図56	第11面	井戸2	223
図41	第6面	構成土出土遺物	216	図57	第11面	土坑29~31	224
図42	第7面	遺構分布図	216	図58	第11面	ピット258・275	224

表 目 次

表1	田楽辻子周辺遺跡 調査地点一覧	194	表6	第5面	出土遺物観察表	230	
表2	第1面	出土遺物観察表	228	表7	第6面	出土遺物観察表	230
表3	第2面	出土遺物観察表	228	表8	第8面	出土遺物観察表	231
表4	第3面	出土遺物観察表	229	表9	遺構計測表	231	
表5	第4面	出土遺物観察表	230	表10	出土遺物一覧表	233	

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点近景(南から)	237	2. 第5面全景(南東から)	239	
	2. 調査区南東壁土層断面(北西から)	237	図版4	1. 井戸1出土遺物	240
図版2	1. 第1面全景(北西から)	238		2. 表土出土遺物	240
	2. 第2面全景(北西から)	238		3. 第1面 遺構外出土遺物	240
	3. 第8面全景(南東から)	238		4. 第2面 土坑3出土遺物	240
	4. 第9面全景(南東から)	238		5. 第2面 土坑5出土遺物	240
	5. 第10面全景(南東から)	238		6. 第2面 土坑9出土遺物	240
	6. 第11面全景(南東から)	238		7. 第2面 土坑13出土遺物	240
	7. 第11面 ピット258(北東から)	238		8. 第2面 ピット出土遺物	240
	8. 第11面 ピット275(北から)	238	図版5	1. 第2面 遺構外出土遺物(2)	241
図版3	1. 第3面全景(南東から)	239		2. 第3面 溝状遺構2出土遺物	241

3. 第3面 土坑18出土遺物 ····· 241	2. 第6面 遺構外出土遺物 ····· 242
4. 第4面 溝狀遺構5出土遺物 ··· 241	3. 第6面 構成土出土遺物 ····· 242
5. 第4面 溝狀遺構6出土遺物 ··· 241	4. 第8面 方形土坑1出土遺物 ··· 242
6. 第4面 溝狀遺構7出土遺物 ··· 241	5. 第8面 遺構外出土遺物 ····· 242
7. 第4面 遺構外出土遺物 ····· 241	6. 第8面 構成土出土遺物 ····· 242
圖版6 1. 第5面 遺構外出土遺物(2) ··· 242	

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市浄明寺一丁目652番8で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である田楽辻子周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.33)の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年5月21日～平成20年5月22日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約67㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年10月10日～平成21年1月29日までの3ヵ月半ほどである。現地表面の標高は約16.0mを測る。調査はまず重機により約20～30cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、中世に属する第1～11面の合計11面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして1月29日をもって、現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA 9)に準じた、鎌倉市三級基準点(X = -75377.449、Y = -24439.834)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209(標高12.109m)を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市浄明寺一丁目652番8に位置し、「田楽辻子周辺遺跡(No.33)」の範囲内に所在する。本遺跡の包蔵地範囲は鎌倉市街地の東方にあり、JR鎌倉駅から直線距離にして1.3kmほどの場所である。本遺跡は、蛇行しながら西流する滑川に架かる「華の橋」の東側から「大御堂橋」にかけての滑川左岸の沖積地に広がり、東西方向に長い包蔵地範囲となっている。遺跡の南側には樹枝状に開析された谷戸が連続しており、この谷戸部と丘陵部に複数の包蔵地範囲が広がっている。上流から順にみると、谷戸部には報国寺遺跡(No.306)、上杉氏憲邸跡(No.258)、釈迦堂遺跡(No.257)、勝長寿院跡(No.133)があり、丘陵部には宅間ヶ谷東やぐら、釈迦堂東やぐら群(No.157)、鎌倉城(No.87)などが位置している。また、遺跡の北端を流れる滑川右岸の沖積地には、東側から浄明寺旧境内遺跡(No.408)、杉本寺周辺遺跡群(No.158)、横小路周辺遺跡群(No.259)、大倉幕府周辺遺跡群(No.49)の包蔵地範囲が所在する。本調査地点は「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷の開口部付近に位置し、滑川までの距離は約60mで、調査地の現地表面の標高は約16.0mを測る。

遺跡の名称となっている「田楽」の名は、「相良家文書」正応3年(1290年)5月8日付の相良頼俊の譲状のなかにみることができ、鎌倉の釈迦堂前の土地として「その四至を注してでんがくが地とみえ」と記されている。田楽とは平安時代から行われている民間芸能であり、鎌倉時代には祭礼の際に行われ

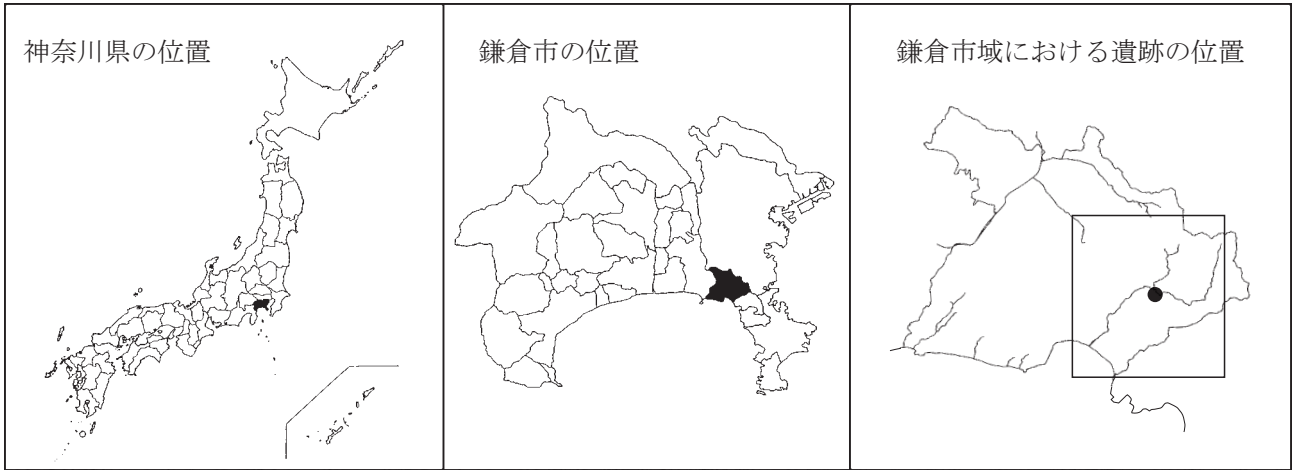


図1 遺跡位置図

るものとして定着しており、本遺跡の名称はこの地に田楽を生業とする人々が暮らしていたと推定されることに由来する。また、「辻子」とは小路よりもさらに小さい通路のことを指す言葉で、執権泰時の時代に京都から移入された表現だとされている(石井 1989)。当時の鎌倉には、田楽辻子のほかに、宇津宮辻子や大学辻子、呪師勾当辻子、唐笠辻子などの辻子があり、現在は滑川の左岸を大御堂橋から宅間ヶ谷までを結ぶ東西道路が「田楽辻子のみち」と呼ばれている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、今回報告する地点の周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。田楽辻子周辺遺跡は滑川左岸の沖積地に東西に細長く展開し、本地点は包蔵地範囲の西側に位置している。

滑川の下流側に位置する調査地点としては、①浄明寺一丁目556番6地点、②浄明寺一丁目661番1地点、③浄明寺釈迦堂658地点の3地点があげられる。①浄明寺一丁目556番6地点では弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路が検出され、小形埴や甕の破片が出土している(押木 2012)。中世の遺構は1面で捉えられており、13世紀～14世紀前半の南北方向に延びる溝状遺構1条と、井戸の可能性をもつ土坑状の遺構1基が検出された。「田楽辻子のみち」の南側に面する②浄明寺一丁目661番1地点では3時期の変遷をたどる中世の遺構群が発見され、13世紀前半に位置づけられる東西方向に延びる道が検出されている。この道は泥岩を用いた舗装が施され、公道的要素が強いことから、調査者は鎌倉時代前半期における「田楽辻子」に比定される可能性を指摘している(森 2000)。③浄明寺釈迦堂658地点においても東西の道が検出され、6回に及ぶ度重なる改修が行われたことが明らかとなっている(手塚 1990)。時期的には13世紀頃まで遡ることが指摘されている。滑川の上流側に位置する④浄明寺二丁目569番10地点では中世の遺構が2面で確認され、第2面から13世紀後葉から14世紀前葉の掘立柱建物が検出された(根本 2014)。また、第1面では14世紀後半から15世紀にかけての切石を用いた石組をもつ井戸が検出されており、武家屋敷と想定される居住空間の縁辺部にあたると推定されている。

田楽辻子周辺遺跡の南側、釈迦堂ヶ谷に展開する釈迦堂遺跡(No.257)の⑤浄明寺一丁目598番35地点では、中世の遺構確認面が6面で検出された(永田・齋藤 2018a)。検出された遺構種やその数は少ないものの、最下面にあたる第6面から器形復元可能な青白磁梅瓶が出土しており、特筆される。南西側に隣接する⑥浄明寺一丁目598番21地点では3面にわたる中世の遺構面が確認され、溝状遺構や石列、土坑などが検出されている(永田・齋藤 2018b)。

田楽辻子周辺遺跡の北側には杉本寺周辺遺跡(No.158)が隣接しており、⑦二階堂宇杉本912番ほか地点では広範囲の調査が行われている(馬淵・岡ほか 2002)。中世の遺構群は4期にわたる変遷が捉えられており、第1～3期における大小の掘立柱建物や柵列、井戸、土坑で構成される有力武士の武家屋敷から、第4期には据甕や竪穴状遺構からなる職能集団の活動空間へと変化したものと考えられている。

表1 田楽辻子周辺遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目652番8地点	
①	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目556番6地点	押木 2012
②	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目661番1地点	森 2000
③	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺釈迦堂658地点	手塚 1990
④	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺二丁目569番10地点	根本 2014
⑤	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番35地点	永田・齋藤 2018a
⑥	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番21地点	永田・齋藤 2018b
⑦	杉本寺周辺遺跡(No.158)	二階堂宇杉本912番ほか地点	馬淵・岡ほか 2002

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～11面までの合計11面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約16.0mを測り、最上部には層厚20～30cmの表土(1層)と層厚10cm前後の暗茶褐色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3層上面で検出した。確認面の標高は約15.7～15.8mを測る。3層は泥岩ブロックと炭化物、かわらけ片を含み、締まりをもち、粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚35～55cmである。第2面は6層上面で確認し、確認面の標高は約15.3mを測る。6層は泥岩粒子や泥岩ブロックを含み、粘性のある灰茶色粘質土で、層厚6～25cmである。6層の下位には締まりの強い泥岩整地層(7層)が層厚10～20cm堆積している。第3面は8層上面で確認し、確認面の標高は約15.0mを測る。8層はやや締まりのある泥岩整地層で、層厚5～20cmである。第4面は9層上面で確認し、確認面の標高は14.9～15.0mを測る。9層は非常に締まりの強い泥岩整地層で、層厚5～20cmである。9層の下位には、少量の泥岩ブロックとかわらけ片を含む暗茶褐色粘質土(10層)が層厚5cm前後堆積している。第5面は11層上面で確認し、確認面の標高は約14.8mを測る。11層は泥岩ブロックと暗灰茶色粘土で固められた整地層で、層厚5～10cmである。11層の下位には、貝砂層(12層)と混入物がなく粘性の非常に強い灰茶色粘土(13層)がそれぞれ層厚5cm前後堆積している。第6面は14層上面で確認し、確認面の標高は約14.7mを測る。14層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、層厚5～15

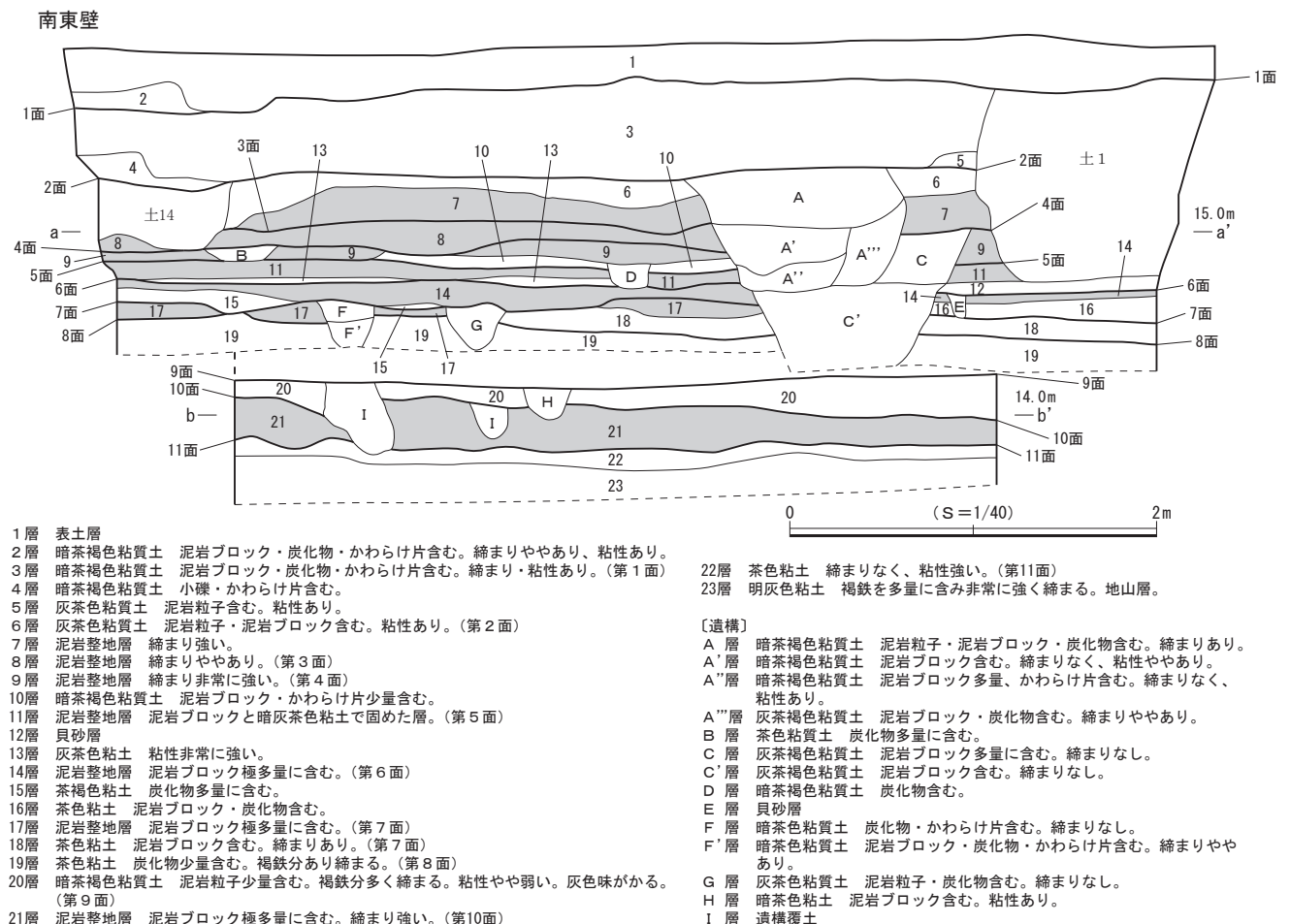


図5 調査区南東壁 土層断面図

cmである。14層の下位に堆積する15層は、多量の炭化物を含んだ層である。第7面は17・18層上面で確認し、確認面の標高は14.5～14.6mを測る。17層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、層厚10cm前後である。18層は泥岩ブロックを含み、締まりのある茶色粘土で、層厚10cm前後である。第8面は19層上面で確認し、確認面の標高は14.4～14.5mを測る。19層は少量の炭化物を含み、褐鉄分により締まりのある茶色粘土で、層厚23～35cmである。第9面は20層上面で確認し、確認面の標高は約14.2mを測る。20層は少量の泥岩粒子を含み、褐鉄分により締まりがあるが粘性のやや弱い、灰色みがかった暗茶褐色粘質土で、層厚6～23cmである。第10面は21層上面で確認し、確認面の標高は14.0～14.1mを測る。21層は極多量の泥岩ブロックを含み、締まりの非常に強い整地層で、層厚15～30cmである。遺構確認面の最下位にあたる第11面は22層上面で確認した。確認面の標高は13.8～13.9mを測る。22層は締まりがなく粘性の強い茶色粘土で、層厚10cm前後である。22層の下位は地山層である明灰色粘土(23層)が堆積している。

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～11面までの合計11面である。遺構確認面はいずれも中世に属し、検出した遺構は、礎石建物1棟、道路状遺構1本、溝状遺構11条、井戸2基、方形土坑1基、土坑31基、ピット273基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～11面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は15.7～15.8mを測る。3層は泥岩ブロックと炭化物、かわらけ片を含み、締まりをもち、粘性のある暗茶褐色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は井戸1基、土坑2基である(図6)。これらの遺構は調査区東半から検出され、遺構密度は非常にまばらである。調査区中央から東側にかけて、泥岩ブロックを多量に含む土層による整地面が南北4.2m、東西1.5～2.6mの範囲に広がっていた。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

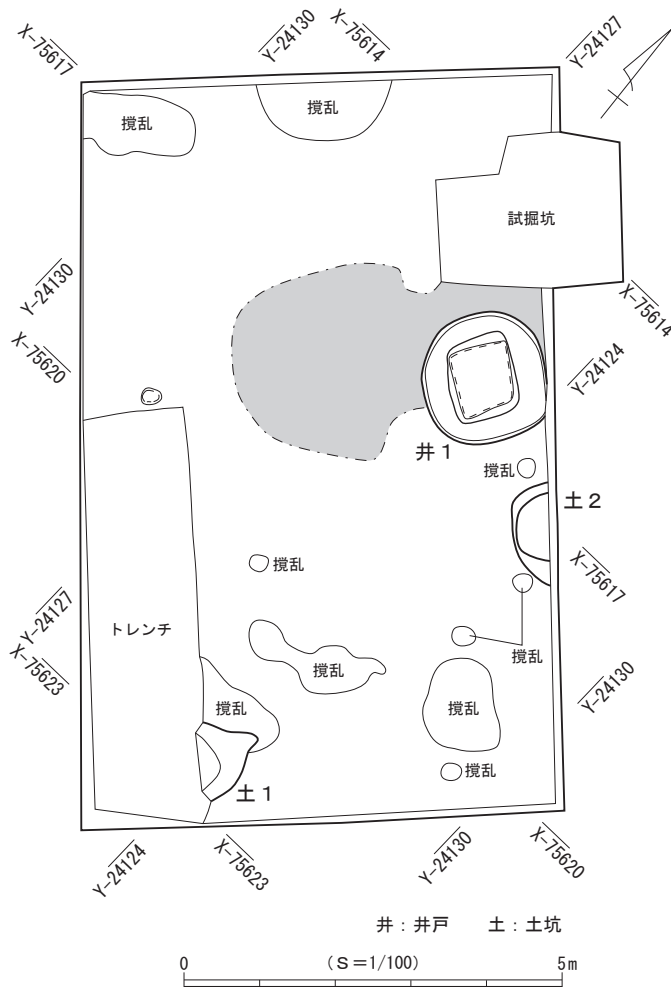


図6 第1面 遺構分布図

(1) 井戸

井戸1 (図7)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、北東壁のごく一部が調査区外に延びている。

開口部の平面形は南東側がおおむね略円形を呈する。確認面から28cm下位に幅30cm前後のテラスをもち、そこからは平面隅丸方形に掘り込まれる。壁面には厚さ3cmほどを測る板材が断片的に残存しており、縦板を組み合わせた井戸枠であった可能性が考えられる。規模は開口部で北西-南東方向1.70m、北東-南西方向1.64m、井戸枠の規模は北西-南東方向90cm、北東-南西方向78cmを測る。安全対策上、掘削深度の制限があるため井戸底は検出できず、確認面から1.2mの深さで調査を終了した。

出土遺物 (図8)

遺物は覆土から、かわらけ1点、陶器8点、瓦質土器2点、瓦2点、金属製品3点、掘り方からかわらけ28点、磁器1点、陶器15点が出土し、このうち7点を図示した。

1~3はロクロ成形によるかわらけ、4は瀬戸産の天目茶碗、5は瀬戸産の卸皿、6は常滑産の10型式に比定される甕である。1・2・5~7は掘り方からの出土遺物で、3・4は覆土からの出土遺物である。7は備前産の播鉢である。

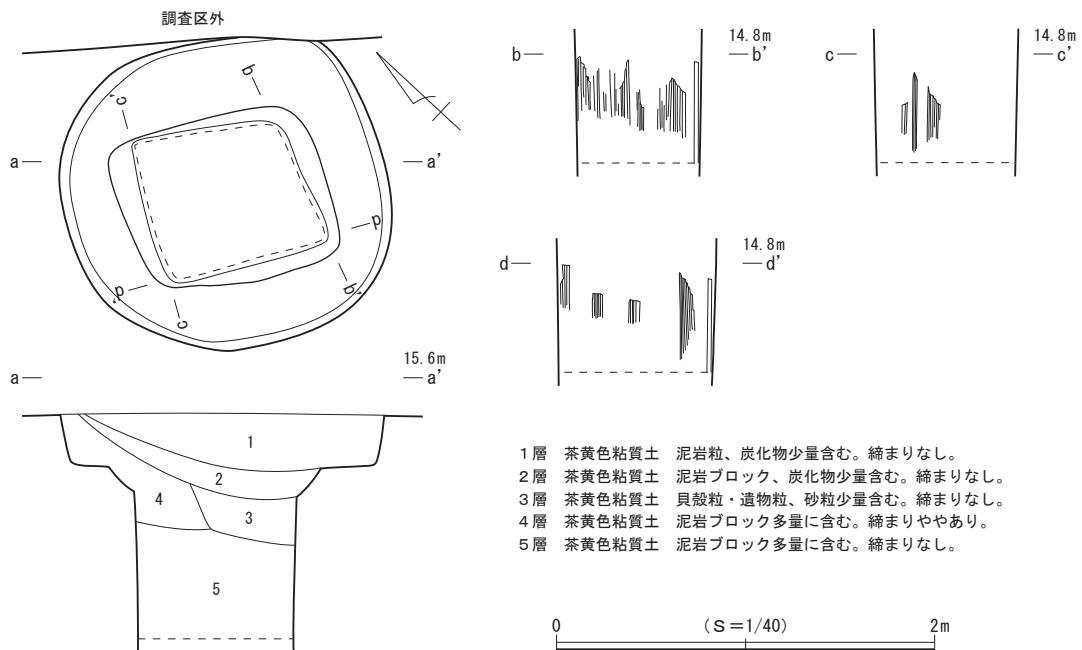


図7 第1面 井戸1

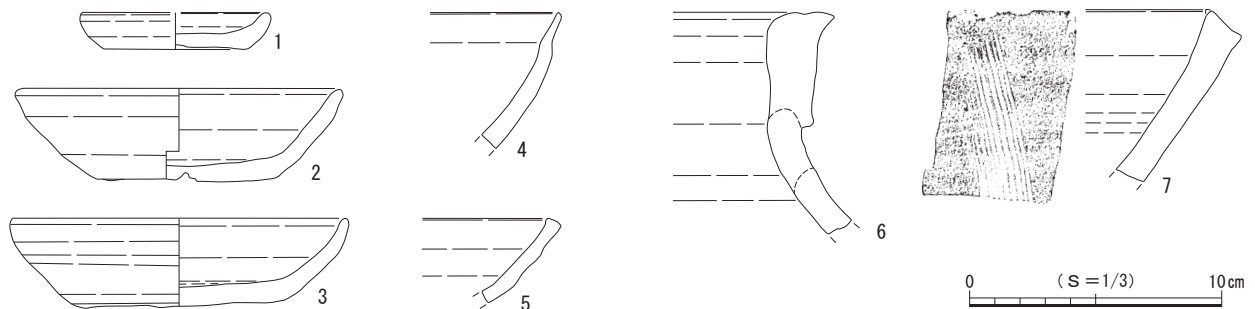


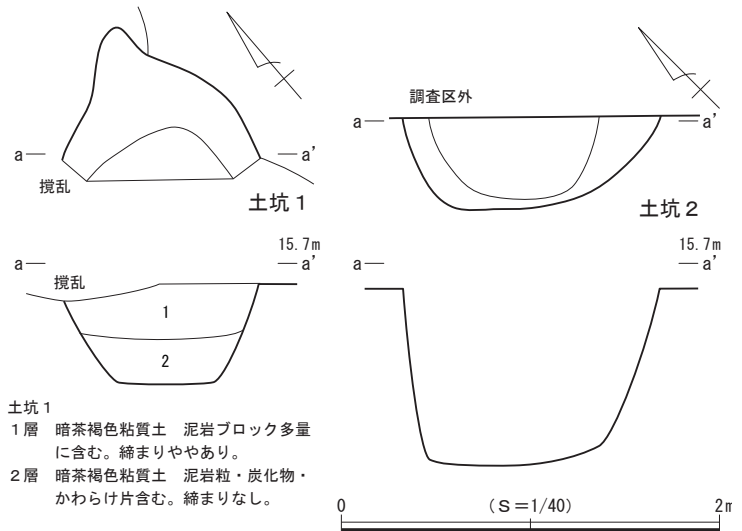
図8 第1面 井戸1 出土遺物

(2) 土 坑

土坑 1 (図9)

調査区の南隅付近に位置する。攪乱によって南西側を壊されており、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.05m、北東-南西方向の現存長81cm、深さ44cmで、坑底面の標高は15.07mを測る。

遺物は出土しなかった。



土坑 1
1層 暗茶褐色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。締まりややあり。
2層 暗茶褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。

土坑 2 (図9)

調査区北東壁際の中央南寄りに位置する。北東側が調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は緩やかに湾曲し、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.36m、北東-南西方向の現存長49cm、深さ1.36mと深く、坑底面の標高は14.65mを測る。

遺物はかわらけ4点、陶器3点が出土した。

図9 第1面 土坑 1・2

(3) 表土出土遺物 (図10)

調査時に、少数ではあるが中世の遺物を表面採集した。このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。

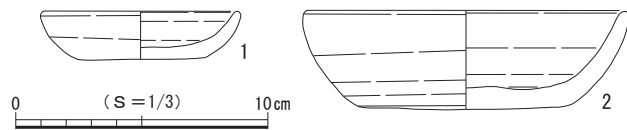


図10 表土出土遺物

(4) 第1面 遺構外出土遺物 (図11)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は瀬戸産の折縁深皿であり、見込み部に同心円状の櫛描文が施文されている。

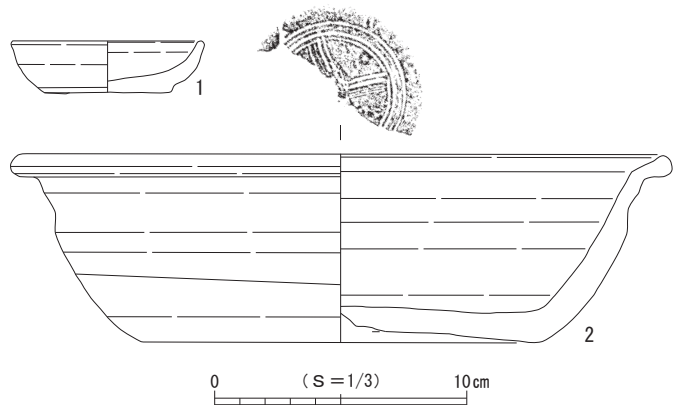


図11 第1面 遺構外出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の6層上面で検出され、確認面の標高は約15.3mを測る。6層は泥岩粒子や泥岩ブロックを含み、粘性のある灰茶色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は道路状遺構1本、溝状遺構1条、土坑12基、ピット22基である(図12)。調査区南東部を北東-南西方向に道路状遺構が延びており、この西側の幅2.5mは遺構の空白部となっている。

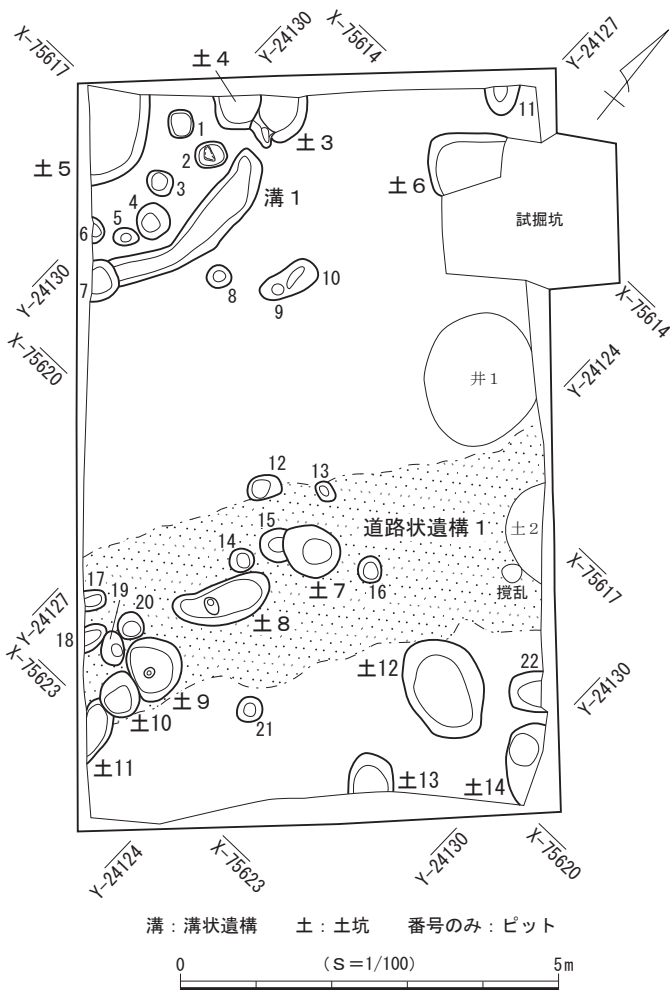


図12 第2面 遺構分布図

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

(1) 道路状遺構

道路状遺構 1 (図13)

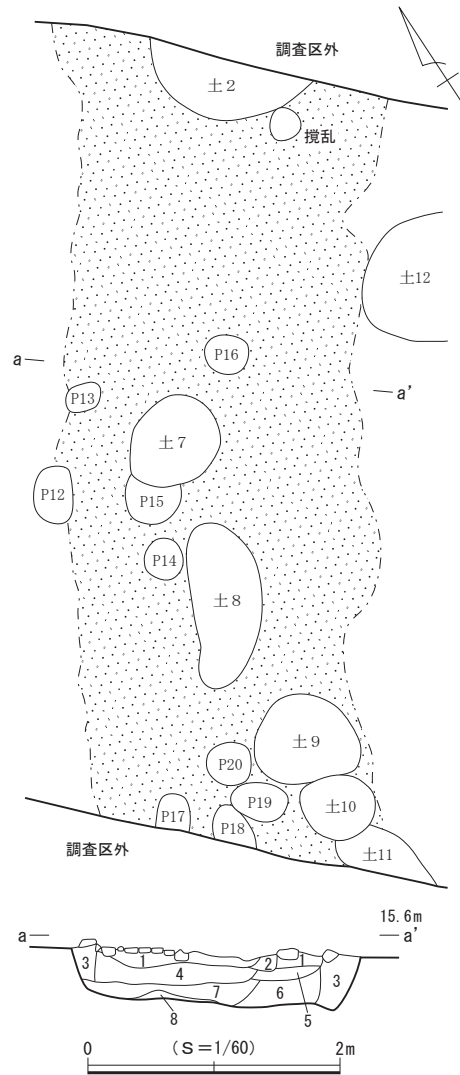
調査区の中央東寄りに位置する。北東-南西方向に延び、両端部とも調査区外へと続く。南側で土坑7~11、ピット12~20と重複し、路面が壊されている。おおむね直線と考えられるが、路面の南東側はごく緩やかに湾曲している。検出した規模は、現存長6.25m、幅2.10~2.70mを測る。掘り方は断面逆台形を呈し、深さ40cm前後を測る。泥岩粒を多量に含む土を用いて突き固めて基盤層を築き、最上部の路面にあたる部分には泥岩ブロックを敷き詰めて舗装している。主軸方位はN-34°-Eを指す。

遺物はかわらけ5点、陶器9点が出土した。

(2) 溝状遺構

溝状遺構 1 (図14)

調査区西隅に位置する。緩やかに湾曲して南北方向に延び、南端部はピット7と重複して壊され、北



- 1層 茶色粘質土 泥岩ブロックを固く敷き詰めた層。路面。
- 2層 茶褐色粘質土 泥岩粒少量含む。締まりなし。縁石の抜き取り痕か。
- 3層 泥岩層 路面縁石。
- 4層 泥岩層 泥岩粒を突き固めた層。
- 5層 泥岩層 泥岩粒少量含む。
- 6層 泥岩層 泥岩粒をやや多く含む。
- 7層 泥岩層 泥岩粒を突き固めた層。4層より泥岩粒が大きい。
- 8層 灰茶褐色粘質土 締まりなし。

図13 第2面 道路状遺構 1

端部は調査区内に収まる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は、現存長約2.5m、幅32～53cm、深さ15cmを測り、主軸方位は南側がN-30°-E、北側がN-7°-Wを指す。底面の標高は15.18mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 土坑

土坑3 (図15)

調査区北西壁際の中央に位置する。西側で土坑4と重複して壊し、北西側が調査区外へ延びており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長64cm、短軸68cm、深さ15cmで、坑底面の標高は5.17mを測る。主軸方位はN-30°-Wを指すと推定される。

出土遺物 (図16)

遺物はかわらけ23点が出土し、このうち3点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。

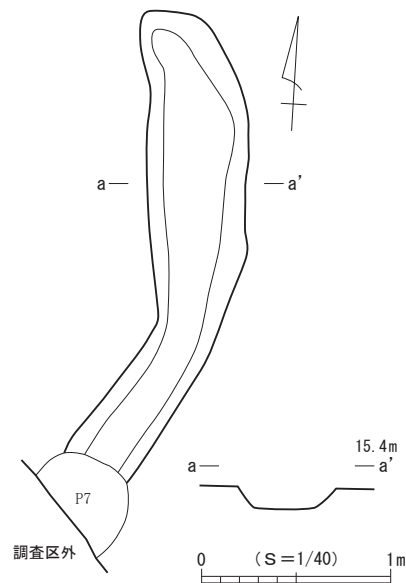


図14 第2面 溝状遺構1

土坑4 (図15)

調査区北西壁際の中央南西寄りに位置する。東側で土坑3と重複して東壁が壊され、北西側が調査区外へ延びており、平面形および主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長61cm、北西-南東方向の現存長44cm、深さ11cmで、坑底面の標高は15.20mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

土坑5 (図15)

調査区の西隅に位置する。西側が調査区外へ延びており、平面形および断面形、主軸方位は判然としない。底面は北から南に向かって傾斜し、壁は開いて立ち上がる。規模は北西-南東方向の現存長1.32m、北東-南西方向の現存長81cm、深さ22cmで、坑底面の標高は14.97mを測る。

出土遺物 (図17)

遺物はかわらけ57点、陶器6点、石製品1点、金属製品1点が出土し、このうち5点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけで、1の口唇部には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。4は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。5は鉄製の釘である。

土坑6 (図15)

調査区北隅に位置する。東側を試掘坑によって壊されており、平面形および主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.05m、北西-南東方向の現存長83cm、深さ29cmで、坑底面の標高は15.08mを測る。

遺物はかわらけ9点、陶器4点、金属製品13点が出土した。

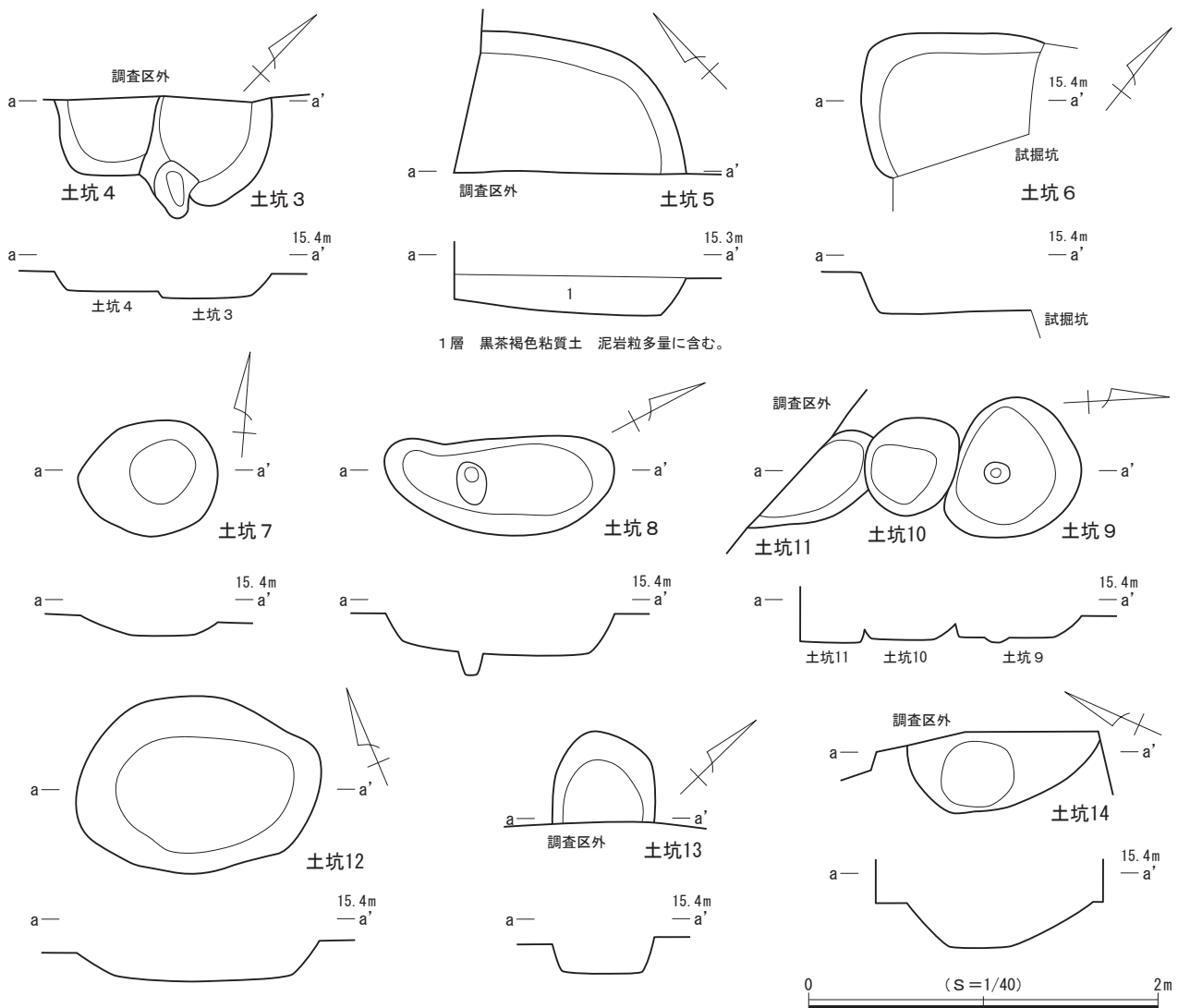


図15 第2面 土坑3～14

土坑7 (図15)

調査区中央南東寄りに位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られ、南西側ではピット15と重複し北東部分を壊している。平面形は略楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸80cm、短軸65cm、深さ13cmで、坑底面の標高は15.21mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑8 (図15)

調査区の南東部に位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られている。平面形は不整楕円形を呈し、底面はごく緩やかに湾曲しており、中央南寄りから長軸23cm、深さ12cmを測る小ピットが確認された。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.32m、短軸56cm、深さ21cmで、坑底面の標高は15.10mを測る。主軸方位はN-28°-Eを指す。

遺物はかわらけ10点、陶器4点が出土した。

土坑9 (図15)

調査区の南隅に位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られており、南側で土坑10と重複して南壁

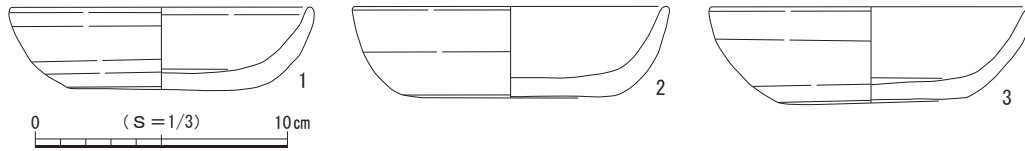


図16 第2面 土坑3出土遺物



図17 第2面 土坑5出土遺物

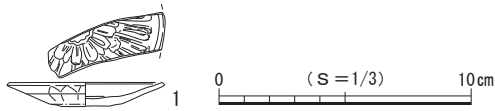


図18 第2面 土坑9出土遺物



図19 第2面 土坑13出土遺物

の一部が壊されている。平面形は南側がやや直線的な不整形円形を呈し、底面はほぼ水平で中央から長軸14cm、深さ4cmの小ピットが確認された。壁は大きく開き、断面形は皿状を呈する。規模は長軸84cm、短軸71cm、深さ16cmで、坑底面の標高は15.20mを測る。

出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ40点、磁器2点、陶器2点、金属製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は白磁の小皿で、内外面に花卉状の陽刻が施されている。

土坑10 (図15)

調査区の南隅に位置する。北側で土坑9、南側で土坑11と重複し、両土坑の壁を壊している。平面形は北西側がやや尖る不整形円形を呈し、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸61cm、短軸52cm、深さ15cmで、坑底面の標高は15.19mを測る。主軸方位はN - 40° - Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑11 (図15)

調査区の南隅に位置する。北側で土坑10と重複して北側が壊され、南側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、長楕円形考えられ、底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がる。断面形は逆台形と推定され、規模は南北現存長78cm、東西現存長38cm、深さ17cmで、坑底面の標高は15.17mを測る。主軸方位はN - 14° - Wを指す。

遺物はかわらけ3点が出土した。

土坑12 (図15)

調査区東隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略楕円形を呈し、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状に近い形状を呈する。規模は長軸1.42m、短軸1.02m、深さ25cmである。坑底面の標高は25mを測る。主軸方位はN - 67° - Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑13 (図15)

調査区南東壁際の中央北東寄りに位置する。南東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長52cm、北東-南西方向60cm、深さ21cmで、坑底面の標高は15.10mを測る。主軸方位はN-46°-Wを指す。

出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ8点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

土坑14 (図15)

調査区東隅に位置する。東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は南北現存長1.10m、東西現存長46cm、深さ27cmで、坑底面の標高は14.99mを測る。

遺物はかわらけ37点、陶器4点が出土した。

(3) ピット

第2面では、22基を検出した。調査区西隅と調査区南西部に位置する道路状遺構1の付近にまとまって分布するが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径29~54cm、深さ4~27cmを測る。

以下、礎石が据えられたピット2を図示し、説明する。

ピット2 (図20)

調査区の西隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形を呈すると考えられ、断面形は皿状を呈する。規模は長軸42cm、短軸34cm、深さ7cmを測り、礎石はピット中央西寄りの底面直上に据えられる。礎石の大きさは長さ22cm、幅12cm、高さ11cmを測り、上面の標高は15.42mである。

ピット出土遺物 (図21)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)に掲げたが、このうち4点を図示した。

1~4はロクロ成形によるかわらけである。1~3はピット2、4はピット22から出土した。

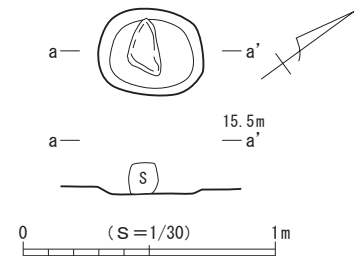


図20 第2面 ピット2

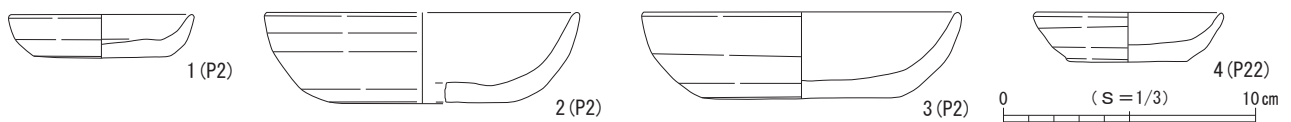


図21 第2面 ピット出土遺物

4) 第2面 遺構外出土遺物(図22・23)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち42点を図示した。

1～24はロクロ成形によるかわらけである。25～27は瀬戸産陶器類で、25は小壺Ⅰ類、26は入子、27は卸皿である。28～36は常滑産陶器類で、28・29は壺、30は広口壺大、31～34は甕、35・36は片口鉢Ⅱ類である。37は常滑甕破片を転用した摩耗陶片である。38・39は瓦質土器の火鉢、40は金属製品の天蓋と思われる。41は銅製の飾り釘、42は銭貨で、皇宋通寶(1038年初鑄)である。

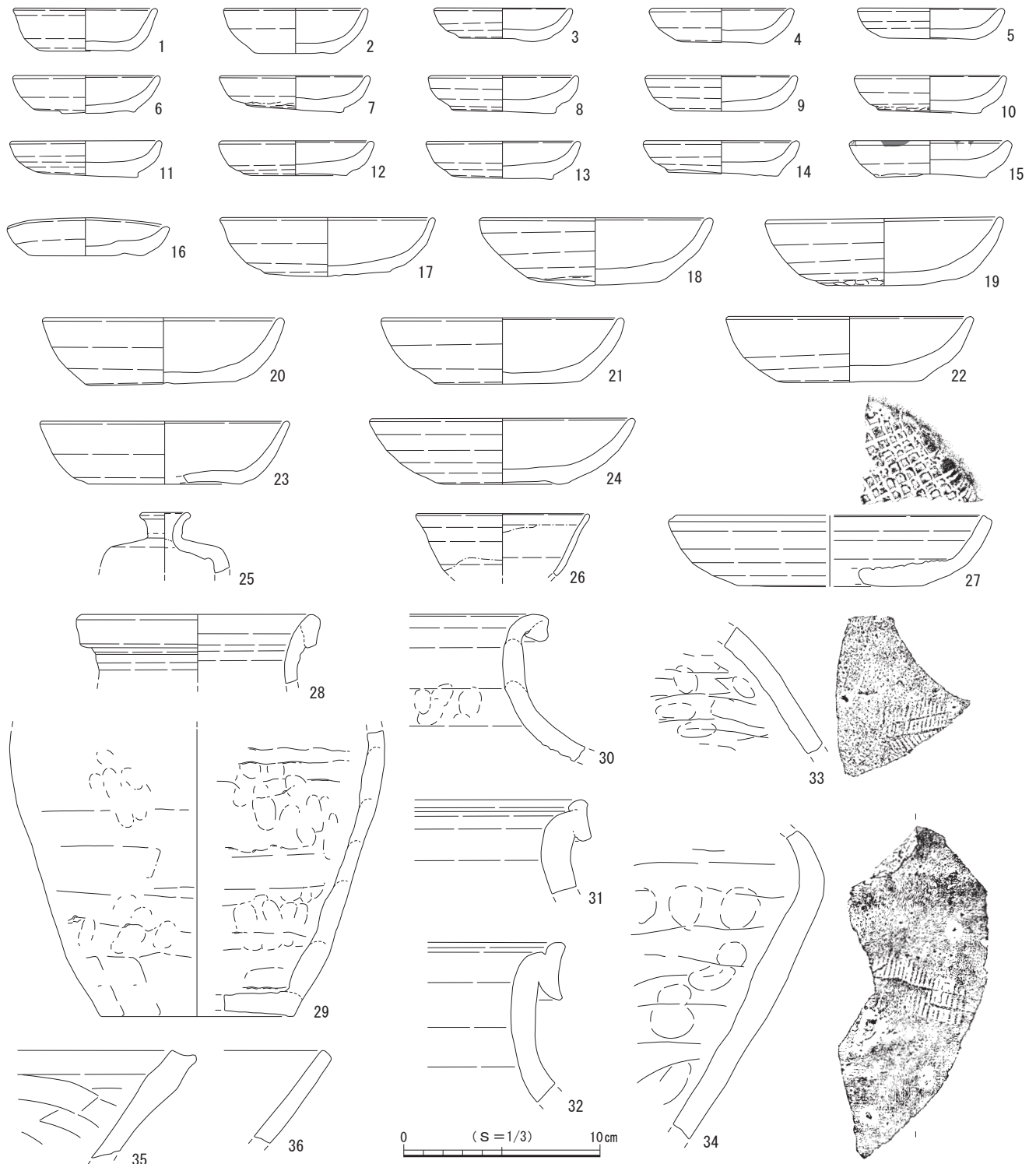


図22 第2面 遺構外出土遺物(1)

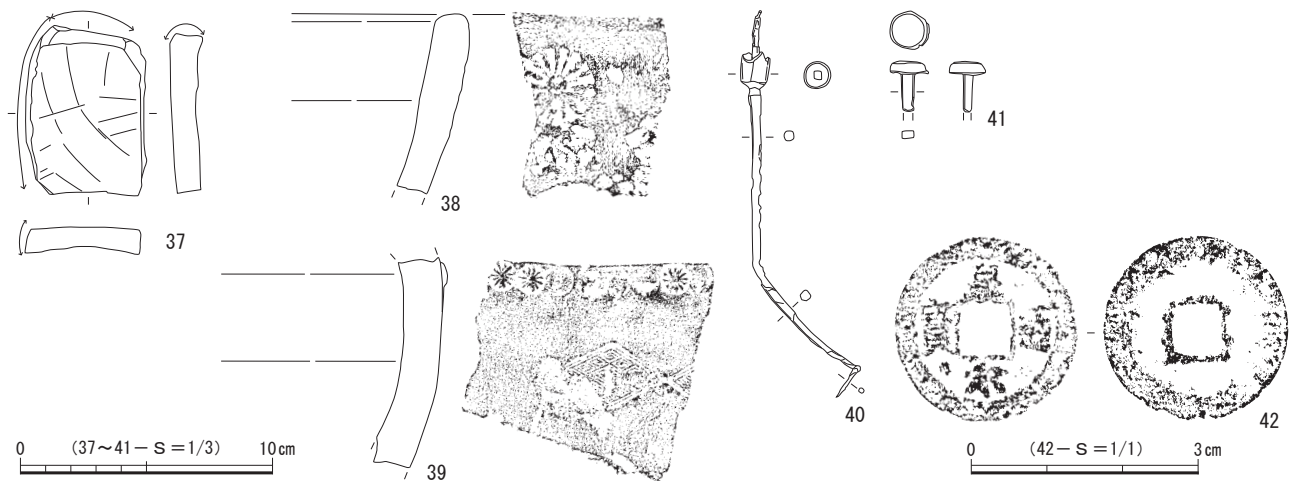


図23 第2面 遺構外出土遺物 (2)

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は堆積土層の8層上面で検出され、確認面の標高は約15.0mを測る。8層はやや締まりのある泥岩整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構2条、土坑4基、ピット3基である(図24)。調査区北半部の東西約8m、南北約5mの範囲には整地面が広がり、これに重なるように遺構群が構築されている。調査区南半は遺構空白域となっており、遺構密度は全体に希薄である。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構2 (図25)

調査区の北側に位置する。井戸1、ピット24・25と重複して中央やや東側が壊されている。北西-南東方向に延びて北西端部は調査区外へと続くが、東端部は調査区内に収まる。

本址の北東側に溝状遺構3が並行して延びており、関連をもつ可能性が考えられる。西半部は真っすぐに延びて東半部はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は現存長約5.8m、幅18~44cm、深さ6~18cmを測り、主軸方位はN-58°-Wを指す。この北西-南東溝に直交する2条の溝が南西方向に延びており、規模は北側から現存長95cm、幅37cm、深さ10cm、

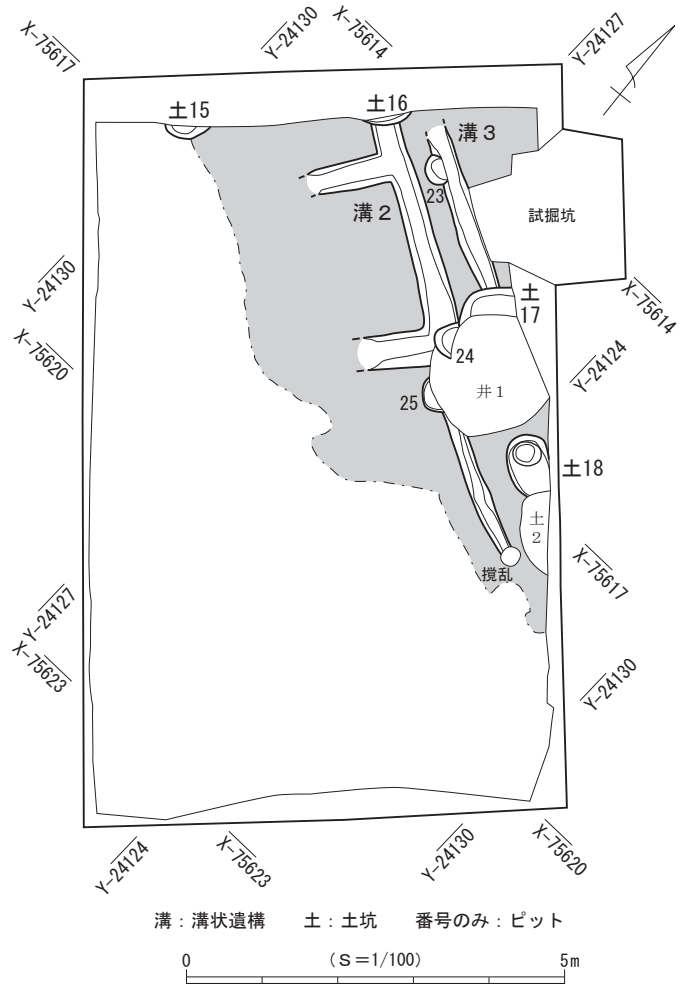


図24 第3面 遺構分布図

現存長84cm、幅48cm、深さ6cmである。底面の標高は北西側が15.07m、南東側が15.05mを測る。

出土遺物 (図26)

遺物はかわらけ12点、磁器1点、陶器4点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。口唇部には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。

溝状遺構3 (図25)

調査区の北側に位置する。北西-南東方向に延び、南東側を土坑17と井戸1によって壊され、北西端部は削平によって消滅している。本址の南西側に溝状遺構2が並行して延びており、関連をもつ可能性が考えられる。真っすぐに延びる溝で、壁は開いて断面形は皿状を呈する。検出した規模は現存長約2.2m、幅24~30cm、深さ5~10cmを測り、主軸方位はN-62°-Wを指す。底面の標高は15.07mを測る。

遺物はかわらけ1点が出土した。

(2) 土坑

土坑15 (図27)

調査区の西隅に位置する。西側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長60cm、北西-南東方向の現存長17cm、深さ15cmで、坑底面の標高は14.92mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑16 (図27)

調査区北西壁際の中央北東寄りに位置する。東側で溝状遺構2と重複して壊している。本址の大半は調査区外の西側へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長67cm、北西-南東方向の現存長13cm、深さ45cmで、坑底面の標高は14.57mを測る。

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土した。

土坑17 (図27)

調査区の北東部に位置する。南東側を井戸1によって大きく壊され、加えて北東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長77cm、北西-南東方向の現存長54cm、深さ27cmで、坑底面の標高は14.81mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

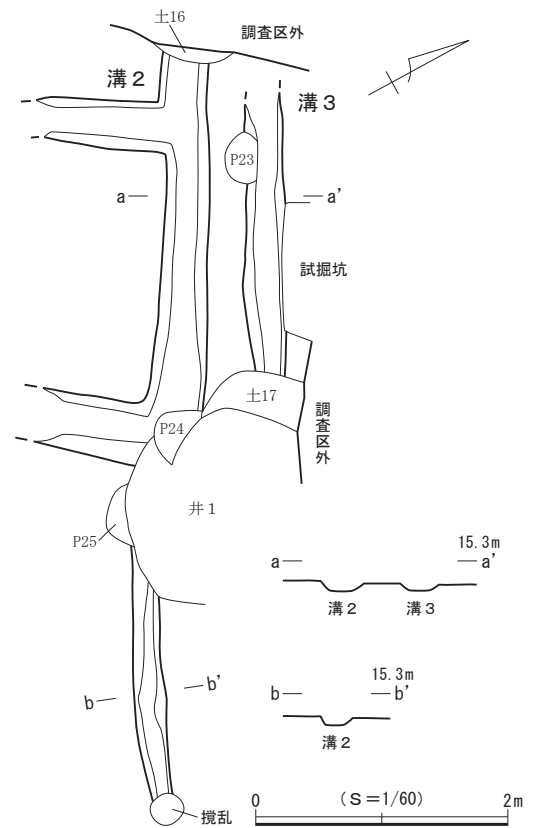


図25 第3面 溝状遺構2・3



図26 第3面 溝状遺構2 出土遺物

(1) 溝状遺構

溝状遺構 4 (図31)

調査区の北隅近くに位置する。北東-南西方向に伸びる短い溝で、南西端部はピット31と重複して壊されている。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約1.2m、幅27cm、深さ12cmを測り、主軸方位はN-33°-Eを指す。底面の標高は14.74mを測る。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構 5 (図31)

調査区北西部に位置する。調査区内ではL字状を呈し、それぞれの両端は西と北に伸びている。屈曲部で土坑19と重複して南東壁の一部を壊され、加えて東西両端部が調査区外へと続いており全容を把握できなかった。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長が約6m、幅36~95cm、深さ5~14cmを測り、主軸方位はN-79°-Wで、途中で屈曲してN-33°-Eを指す。底面の標高は西側で14.7m、東側で14.75mを測る。

出土遺物 (図30)

遺物は陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の甕で、6b型式に比定される。

溝状遺構 6 (図31)

調査区の南東部に位置する。南北方向に真っすぐに伸びて北側で直角に屈曲し、北西-南東方向に向きを変える。他の遺構と重複せずに単独で確認した。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長が約6.2m、幅15~44cm、深さ5~13cmを測る。主軸方位はN-23°-Eで、北東端部で屈曲してN-62°-Wを指す。底面の標高は北側で14.73m、南側で14.70mを測る。

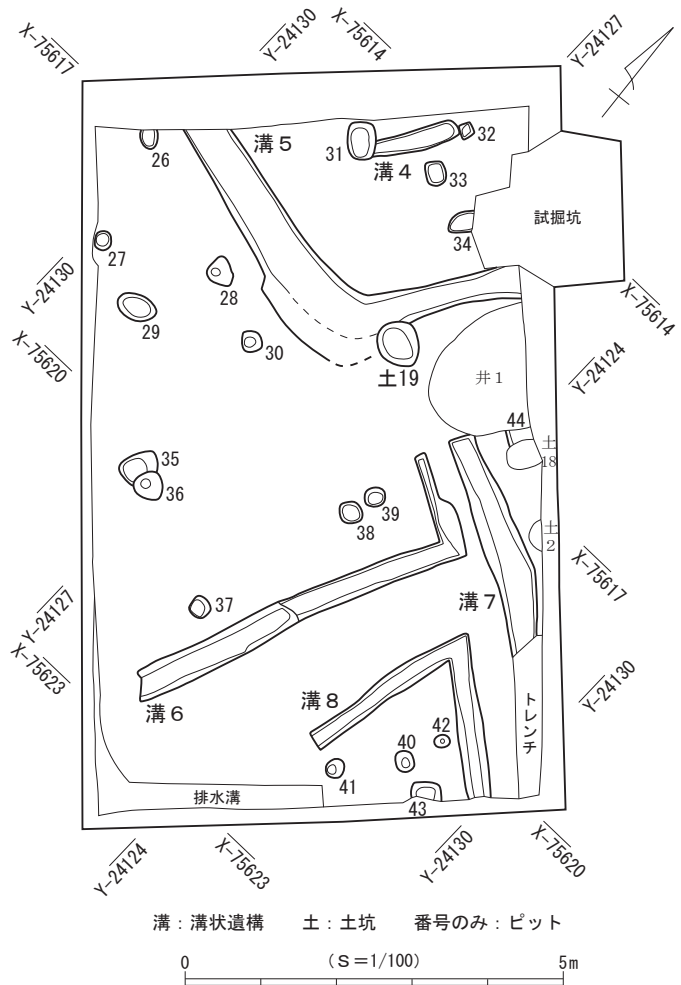


図29 第4面 遺構分布図

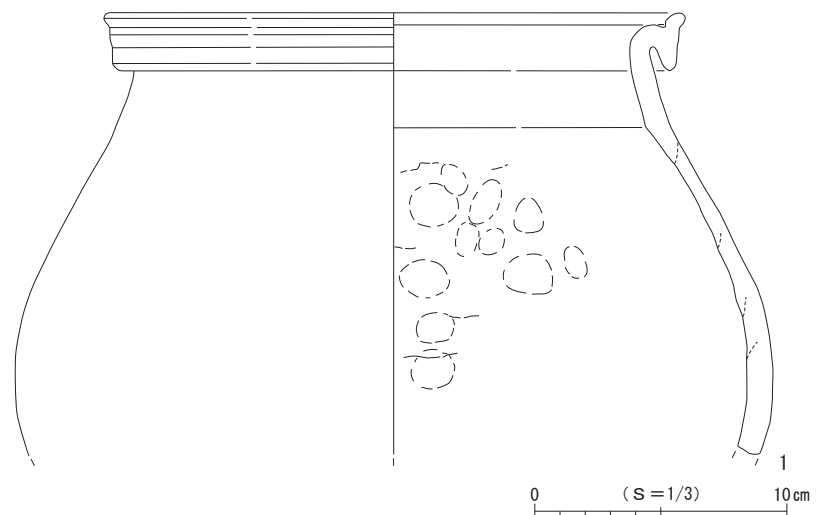


図30 第4面 溝状遺構5出土遺物

溝状遺構 8 (図31)

調査区南東壁際北東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東部は調査区外へと続いており、全容は把握できなかった。鋭角的に屈曲してV字形を呈する溝で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長約4.6m、幅23~35cm、深さ8cmを測り、主軸方位はN-12°-Eで、屈曲してN-53°-Wを指す。底面の標高は南側で14.77m、南東側で14.83mを測る。

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土した。

(2) 土 坑

土坑19 (図34)

調査区中央の北寄りに位置する。西側で溝状遺構5と重複し、東壁の一部を壊している。平面形は東側がやや尖る略円形を呈し、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸64cm、短軸55cm、深さ16cmで、坑底面の標高は14.69mを測る。

遺物は出土しなかった。

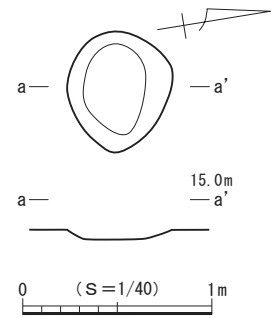


図34 第4面 土坑19

(3) ピット

第4面では、19基を検出した。調査区全域に散漫な状態で分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径19~53cm、深さ7~40cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(4) 第4面 遺構外出土遺物 (図35)

第4面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち15点を図示した。

1~7はロクロ成形によるかわらけである。5には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。8は中国製の褐釉壺で、双耳状の耳が貼り付けされている。9は山茶碗である。10~12は常滑産の陶器類で、10は玉縁壺、11は甕、12は片口鉢Ⅱ類である。13は土師質の火鉢である。14は金属製品の六器である。15は銭貨で、景祐元寶(1034年初鑄)である。

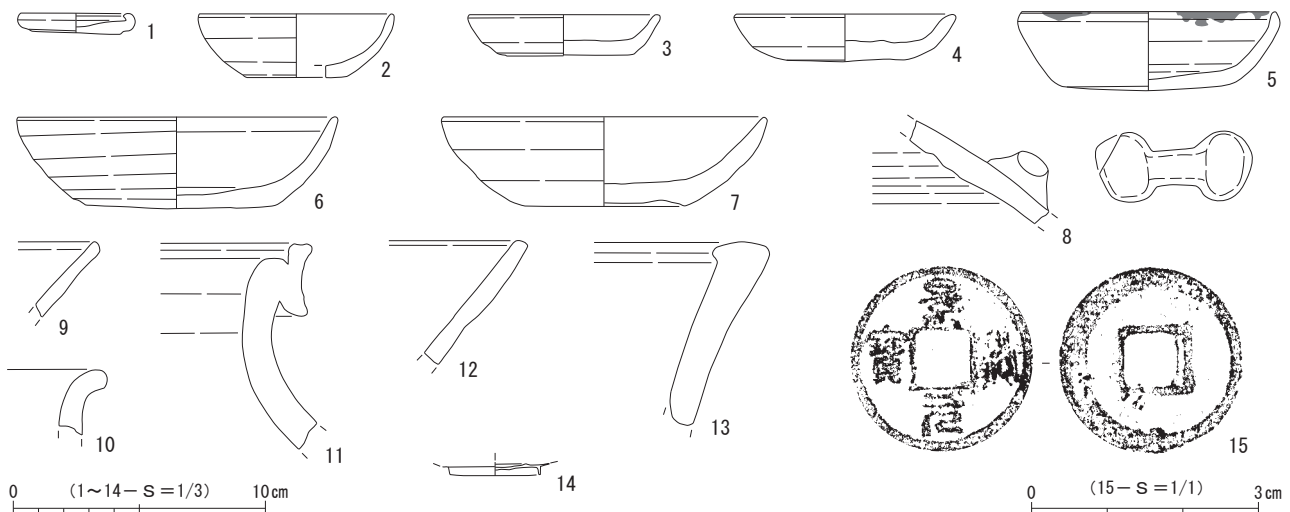


図35 第4面 遺構外出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は堆積土層の11層上面で検出され、確認面の標高は約14.8mを測る。11層は泥岩と暗灰茶色粘土で固められた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット4基で、遺構密度は全体に希薄である(図36)。調査区中央付近から東端部にかけて礎石建物が検出され、さらに調査区外の東側へ展開している。この礎石建物の外側を中心とした整地層の上面に、貝砂の分布が認められた。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～後葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物1(図37)

調査区の中央付近から東端部にかけて位置する。北側で井戸1と重複し、調査区外の北東側と南東側に展開すると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが15基検出され、このうち3基(P1～P3)には礎石が据えられている。建物の周囲には柱列に沿って溝が方形に巡っており、検出範囲での溝は南西辺で約6.8m、北西辺で約4.7m、幅49～83cm、深さ11～18cmを測る。溝の西隅付近の底面に、柱のあたりと思われる径30～35cmを測る円形の硬化範囲が4カ所で確認された。

本址は北西-南東方向が2間以上、北東-南西方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で北西-南東列が北西から1.3m、2.1m、2.1mで、北東-南西列が2.1mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-58°-Wである。

ピットの平面形は略円形ないし楕円形を呈する。規模は長径23～62cm、深さ2～22cmと一定しないが、北西-南東列のP2～P4は長軸54～62cmの規模をもつ。礎石の大きさは長さ28～40cm、幅20～29cm、高さ14～17cmを測り、礎石上面の標高は14.8～14.85mである。なお、P10の周囲1.15×0.5mの範囲とP8の北側1.0×0.4mの範囲に炭層の堆積が認められた。

遺物は本址に伴う溝やピットから、かわらけ17点が出土した。

(2) ピット

第5面では、4基を検出した。調査区西側に3基、礎石建物1の南側に隣接して1基を確認した。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの

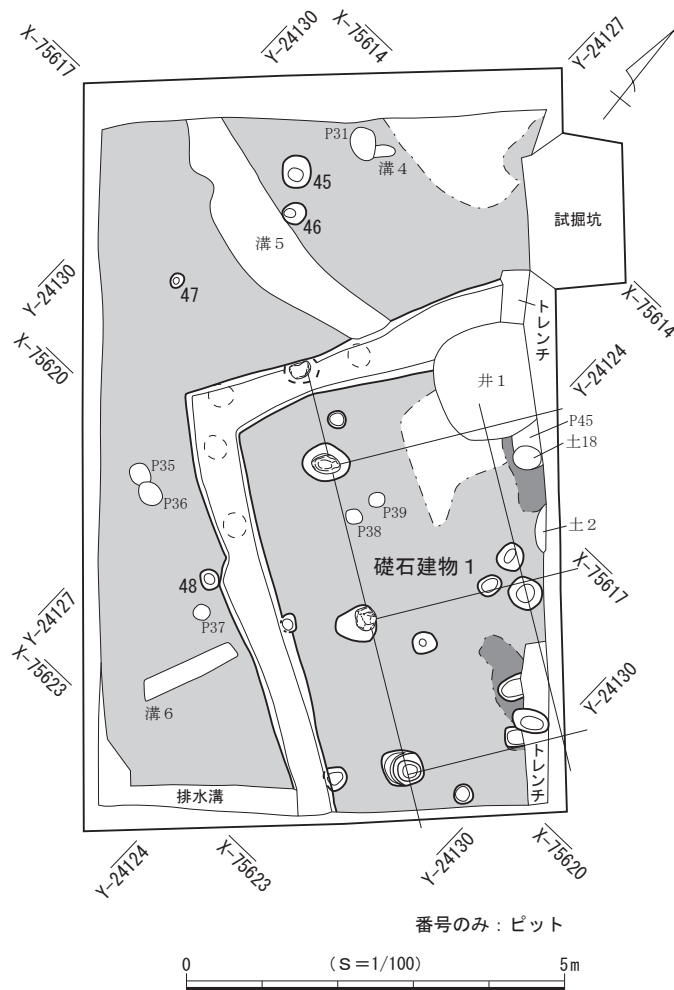


図36 第5面 遺構分布図

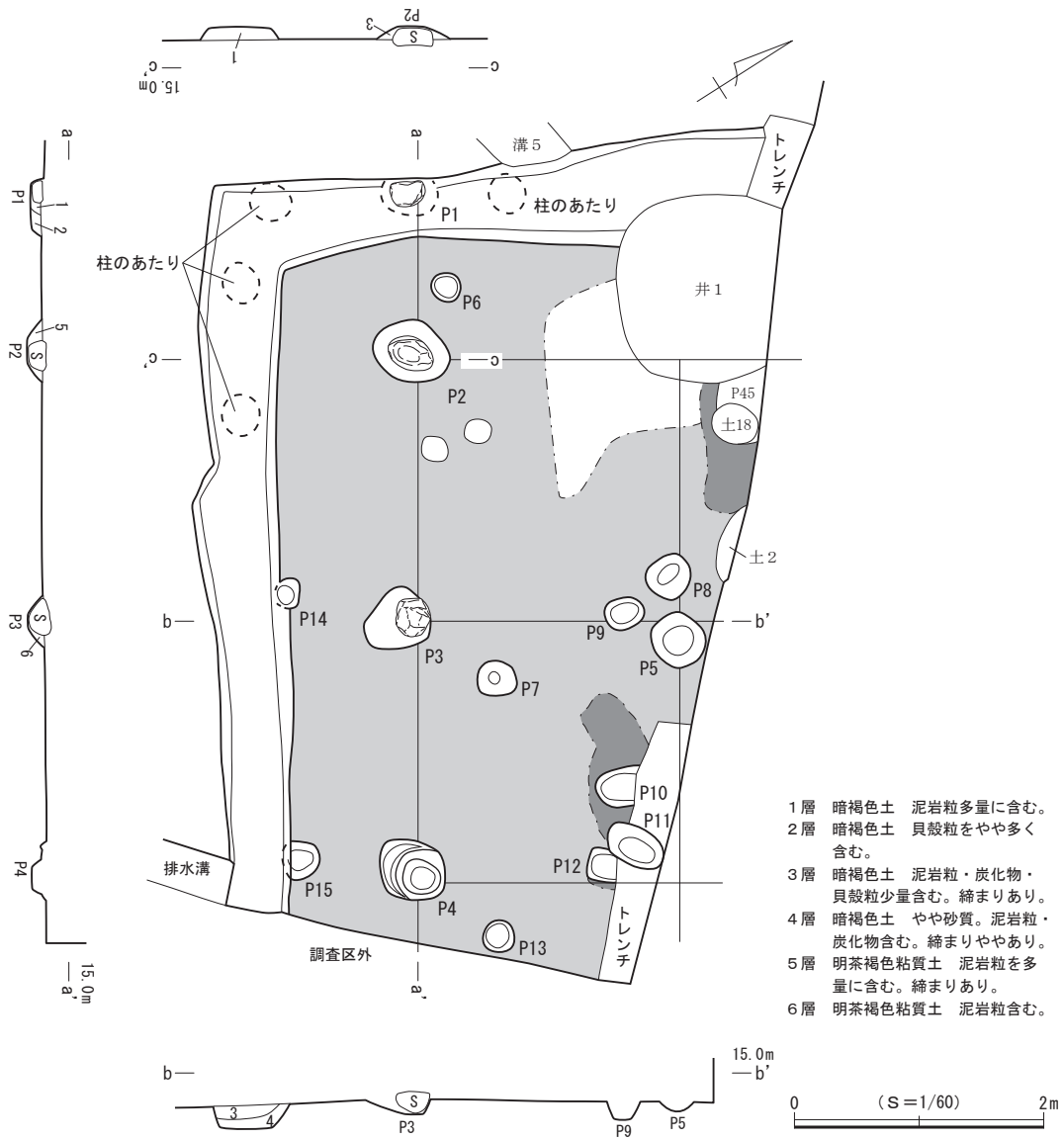


図37 第5面 礎石建物1

平面形は略円形を呈し、規模は長径20～42cm、深さ17～28cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(3) 第5面 遺構外出土遺物(図38)

第5面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち4点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。4は龍泉窯系青磁の坏Ⅲ-cで、見込み部に魚の貼付文がなされている。

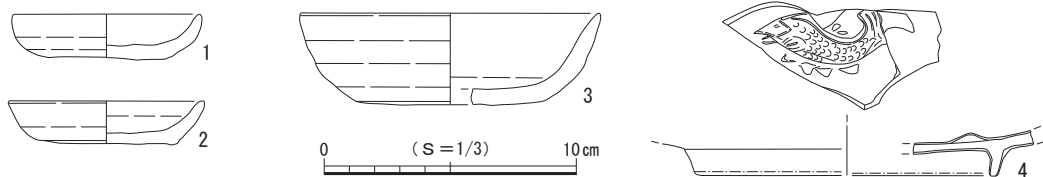


図38 第5面 遺構外出土遺物

第6節 第6面の遺構と遺物

第6面の遺構は堆積土層の14層上面で検出され、確認面の標高は約14.7mを測る。14層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構はピット23基である(図39)。調査区の北隅にピットの集中が認められるが、重複するものはほとんどなく全域に散漫な状態で分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉頃に属すると思われる。

(1) ピット

第6面では、23基を検出した。調査区の北隅にまとまるが、北西から南東にかけてごく散漫な状態な分布を確認した。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径8～42cm、深さ6～36cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(2) 第6面 遺構外出土遺物(図40)

第6面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

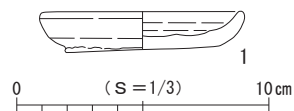


図40 第6面 遺構外出土遺物

(3) 第6面 構成土出土遺物(図41)

第6面構成土中からも遺物が出土しており、このうち9点を図示した。

1・2は手づくね成形によるかわらけ、3～5はロクロ成形によるかわらけで、3は台状の高台をもつ。6は2b型式に比定される渥美産の鉢、7は常滑産の甕で4型式に比定される。8は鹿角製の賽子、9は古墳時代中期と考えられる滑石製の勾玉であり、両端部に穿孔が施される。

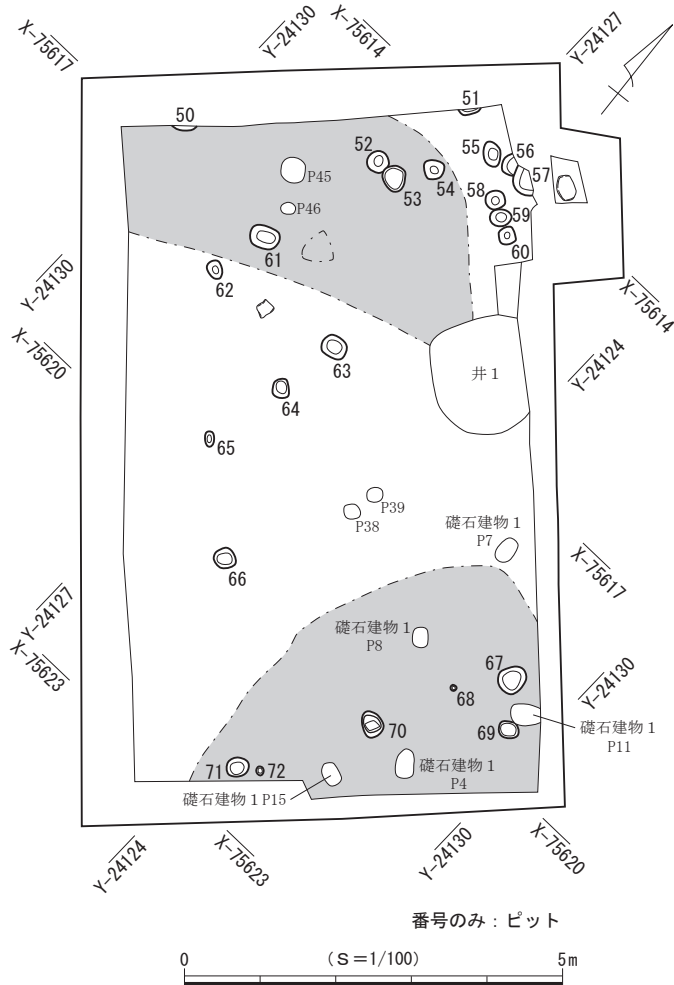


図39 第6面 遺構分布図

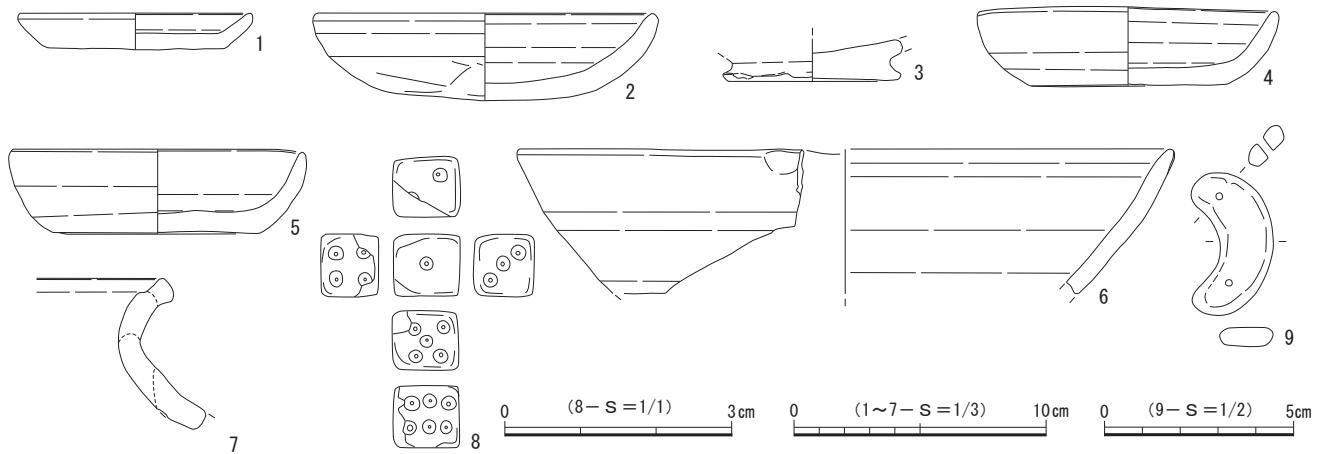


図41 第6面 構成土出土遺物

第7節 第7面の遺構と遺物

第7面の遺構は堆積土層の17・18層上面で検出され、確認面の標高は14.5～14.6mを測る。17層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である(図42)。遺構種も遺構数も少なく、調査区全域に散漫な状態で分布する。

遺物はかわらけがわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第6面以下ということをお案して、13世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構9 (図43)

調査区東隅に位置する。「く」字状に屈曲する溝で、北端は調査区内に収まるが南側は調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。溝が屈曲する部分でピット90と重複して、屈曲部が壊されている。壁はごくわずかに開いて立ち上がり、断面形が箱形を呈する。

検出範囲での規模は全長約2.0m、幅12～21cm、深さ3～8cmを測り、主軸方位は屈曲部の南側がN-64°-W、北側がN-21°-Eを指す。底面の標高は14.47mを測る。

遺物は出土しなかった。

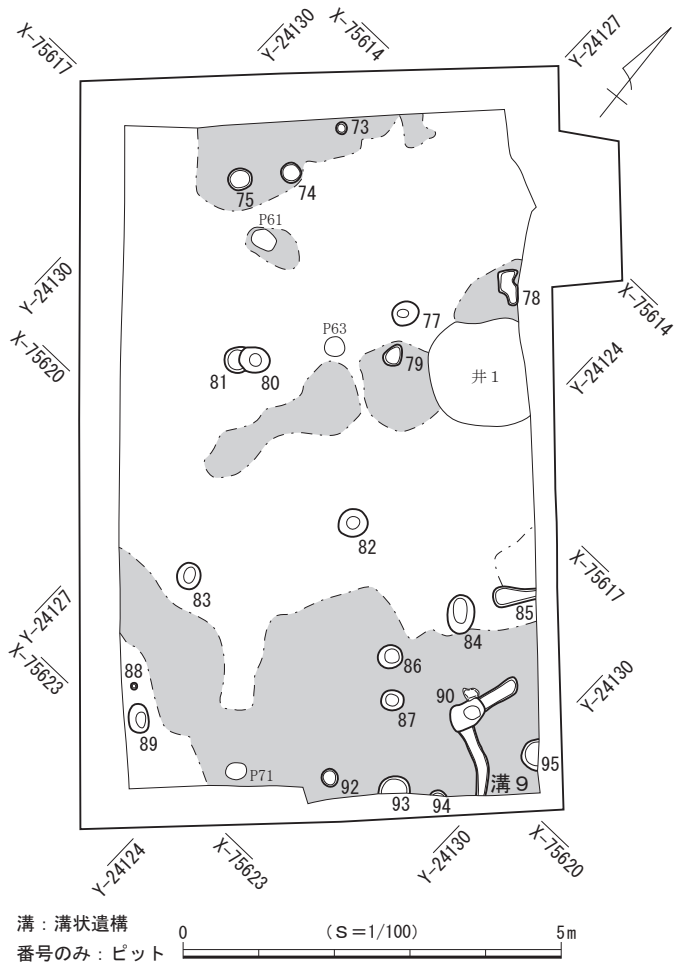


図42 第7面 遺構分布図

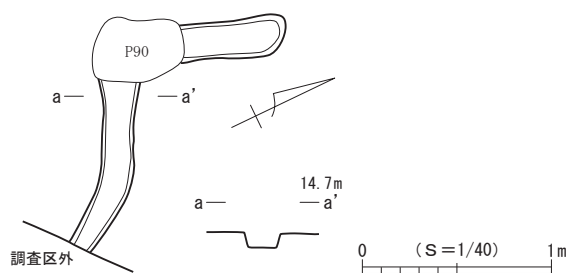


図43 第7面 溝状遺構9

(2) ピット

第7面では、22基を検出した。調査区全域にわたり散漫に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径9～58cm、深さ4～46cmとばらつきがある。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

第8節 第8面の遺構と遺物

第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は14.4～14.5mを測る。19層は少量の炭化物を含み、褐鉄分により締まりのある茶色粘土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構2条、方形土坑1基、土坑3基、ピット104基である(図44)。これらの遺構は調査区全域に満遍なく分布し、遺構密度は比較的高い。調査区のほぼ中央に位置する溝状遺構10を挟み、その東側と西側に帯状の整地面の広がり確認された。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀初頭～前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構10(図45)

調査区中央に位置する。南北方向に延び、両端部はピット155とピット162によって壊されているが、調査区内に収まる。本址の東側に沿って幅10～40cmの硬く締まった整地面が帯状に延びている。ごく緩やかに湾曲する

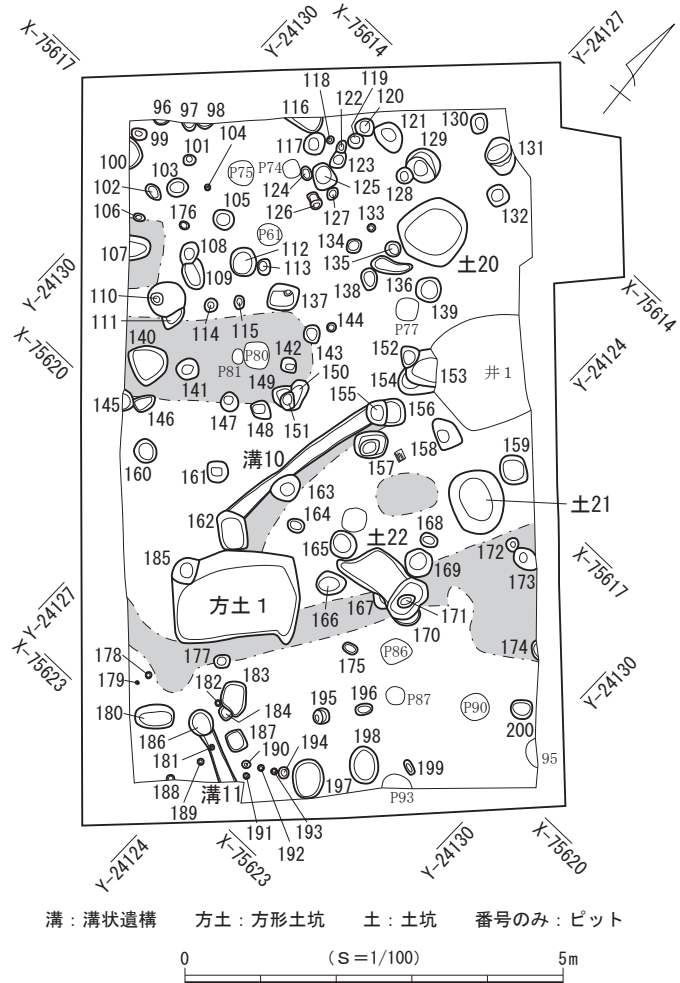


図44 第8面 遺構分布図

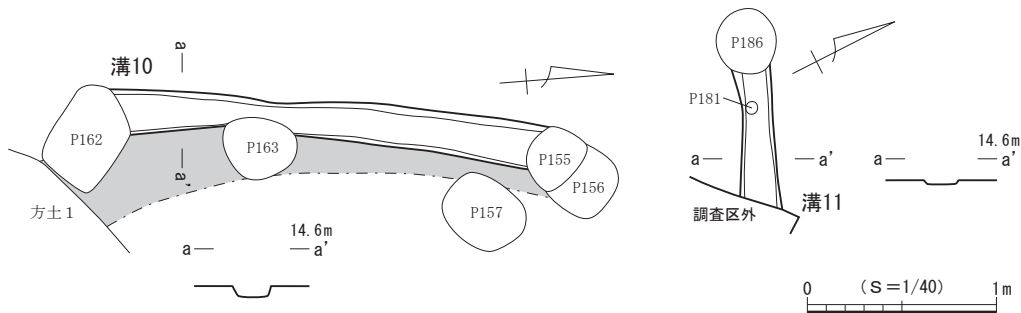


図45 第8面 溝状遺構10・11

溝で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形が逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.3m、幅12～21cm、深さ8cmを測り、主軸方位はN-11°-Eを指す。底面の標高は14.36mを測る。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構11 (図45)

調査区南隅に位置する。東西方向に延び、西端部はピット186と重複して壊され、東側は調査区外へと続くため全容を把握できなかった。ほぼ真つすぐに延びる溝で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。検出した規模は現存長約80cm、幅16～20cm、深さは3cmと浅く、主軸方位はN-67°-Wを指す。底面の標高は14.49mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

(2) 方形土坑

方形土坑1 (図46)

調査区南側に位置する。西側でピット185と重複して壁の一部が壊されている。平面形は東側の隅が突出した不整隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は長軸1.67m、短軸1.16m、深さ43cmである。坑底面の標高は14.05mを測る。主軸方位はN-41°-Eを指す。

出土遺物 (図47)

遺物はかわらけ5点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。

(3) 土坑

土坑20 (図48)

調査区北隅付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸90cm、短軸85cm、深さ31cmである。坑底面の標高は14.14mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑21 (図48)

調査区北東壁付近の中央やや南東に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は楕円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸85cm、短軸70cm、深さ23cmである。坑底面の標高は14.26mを測る。主軸方位N-67°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑22 (図48)

調査区の南西側に位置する。東側をピット171に壊され、南側でピット167と重複して壊している。平面

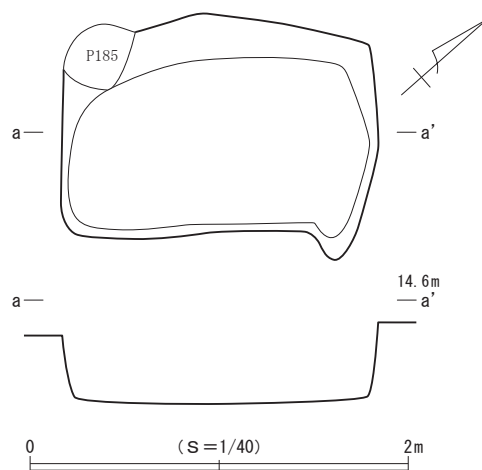


図46 第8面 方形土坑1

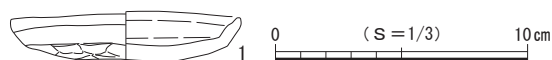


図47 第8面 方形土坑1 出土遺物

形は東西に長軸方向をもつ不整形を呈する。底面ほぼ水平で、東側はピット状に掘り込まれ深くなる。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.23m、短軸61cm、深さ29cmである。坑底面の標高は14.31mを測る。主軸方位はN-85°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

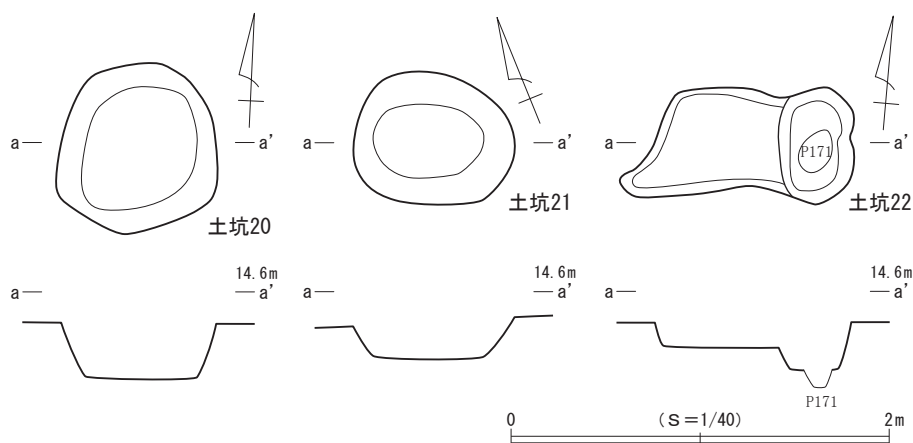


図48 第8面 土坑20~22出土遺物

(4) ピット

第8面では、104基を検出した。調査区全域にわたって満遍なく分布するが、礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形や楕円形、隅丸方形を呈し、規模は長軸4~55cm、深さ3~57cmとばらつきが大きい。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(5) 第8面 遺構外出土遺物(図49)

第8面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち10点を図示した。

1は手づくね成形による白かわらけである。2・3は手づくね成形によるかわらけである。4は同安窯系青磁碗、5は龍泉窯系青磁碗I-4類、6は龍泉窯系青磁碗I-3類である。7は渥美産の鉢で2b型式に比定される。8は山皿である。9は常滑産の片口鉢I類、10は平行縄叩きとナデにより成形がなされている平瓦である。

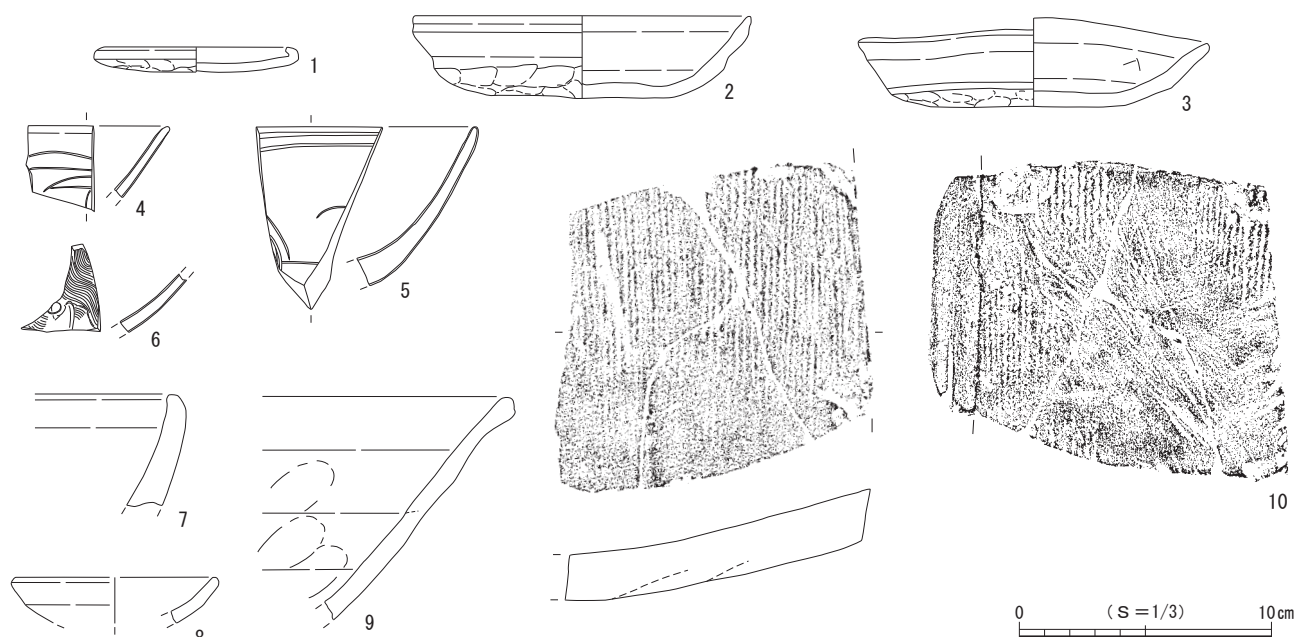


図49 第8面 遺構外出土遺物

(6) 第8面 構成土出土遺物 (図50)

第8面構成土中からも遺物が出土しており、このうち3点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は瀬戸産の平碗、3は琴柱形の鹿角製品である。

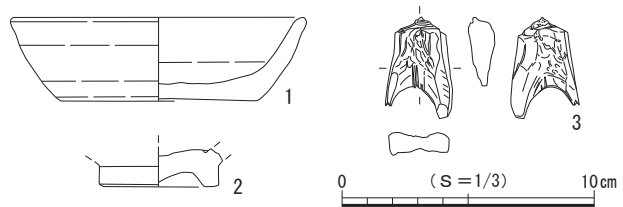


図50 第8面 構成土出土遺物

第9節 第9面の遺構と遺物

第9面の遺構は堆積土層の20層上面で検出され、確認面の標高は約14.2mを測る。20層は少量の泥岩粒子を含み、褐鉄分により締まりがあるが粘性のやや弱い、灰色みがあった暗茶褐色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑5基、ピット21基である(図51)。遺構の分布は土坑が調査区南東部にまとまり、ピットは全域から散漫な状態で検出されている。

遺物はかわらけと磁器がわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第8面以下ということをお勧めして、13世紀初頭以前に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑23 (図52)

調査区のほぼ中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は長軸が北東-南西を向く長楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸77cm、短軸44cm、深さ33cmである。坑底面の標高は13.78mを測る。主軸方位はN-51°-Eを指す。

遺物はかわらけ1点が出土した。

土坑24 (図52)

調査区の南隅に位置する。北西側で第8面の方形土坑1、南側で土坑25と重複して壊されており、平面形および主軸方位は判然としない。底面はわずかに湾曲し、壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西1.44m、南北現存長80cm、深さ21cmで、坑底面の標高は11.61mを測る。

遺物はかわらけ5点が出土した。

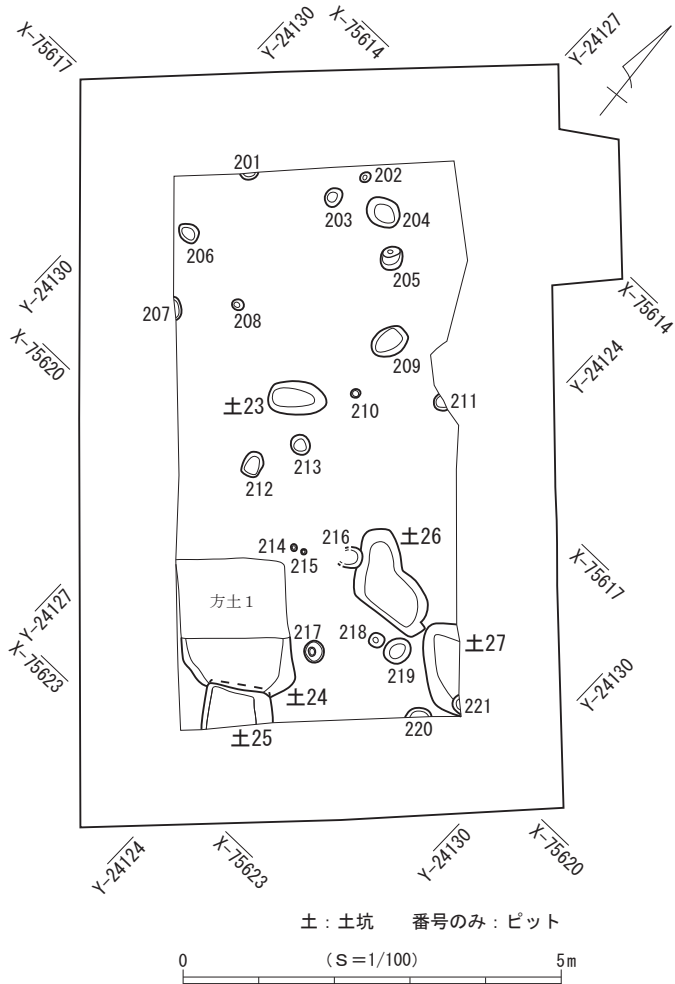


図51 第9面 遺構分布図

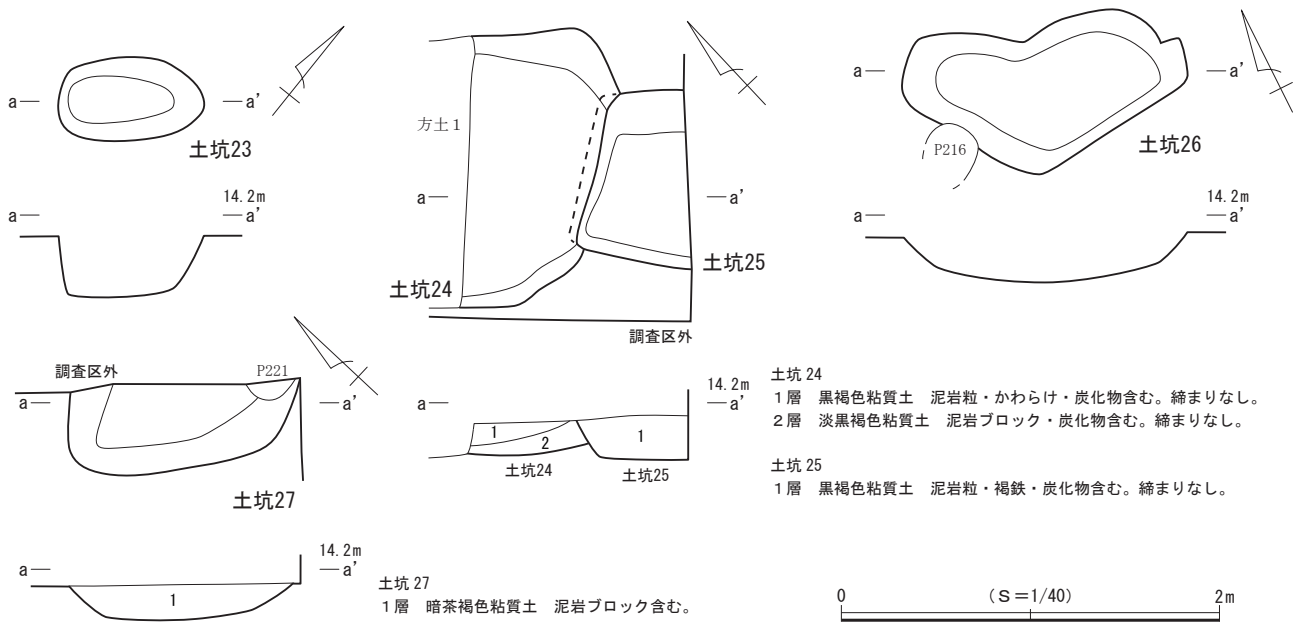


図52 第9面 土坑23～27

土坑25 (図52)

調査区の南隅に位置する。北西側で土坑24と重複して壊され、加えて南東側が調査区外へ延びているために、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、方形を基調とすると考えられ、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長92cm、北西-南東方向の現存長57cm、深さ25cmで、坑底面の標高は13.90mを測る。主軸方位はN-54°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑26 (図52)

調査区の南東部に位置する。西側でピット216と重複して西壁の一部が壊されている。平面形は南壁が直線的で北壁に括れをもつ不整楕円形を呈し、底面は湾曲して中央がくぼむ。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は丸底状を呈する。規模は長軸1.50m、短軸70cm、深さ27cmで、坑底面の標高は13.86mを測る。主軸方位はN-86°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑27 (図52)

調査区の東隅に位置する。東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面はわずかに湾曲し、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.21m、北東-南西方向の現存長48cm、深さ19cmで、坑底面の標高は13.94mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

第9面では、21基を検出した。調査区全域にわたり散漫に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形

を呈し、規模は径7～50cm、深さ3～52cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

第10節 第10面の遺構と遺物

第10面の遺構は堆積土層の21層上面で検出され、確認面の標高は14.0～14.1mを測る。21層は極多量の泥岩ブロックを含み、締まりの非常に強い整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット31基である(図53)。調査区の南東隅と北西隅を結んだラインよりも南側に遺構が集中し、北側は遺構の空白域が広がっている。重複する遺構はなく、遺構密度は全体に希薄である。

遺物はかわらけ、磁器、漆器などがわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第8・9面以下ということを勘案して、13世紀初頭以前に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑28(図54)

調査区の中央南寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は東側と南西側が突出した隅丸方形を基調とする形状で、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸61cm、短軸60cm、深さ23cmで、坑底面の標高は13.73mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

第10面では、31基を検出した。調査区の東隅と西隅をつなぐラインよりも南側に、ほとんどのピットが位置している。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形、隅丸方形を呈し、規模は長軸15～56cm、深さ5～39cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

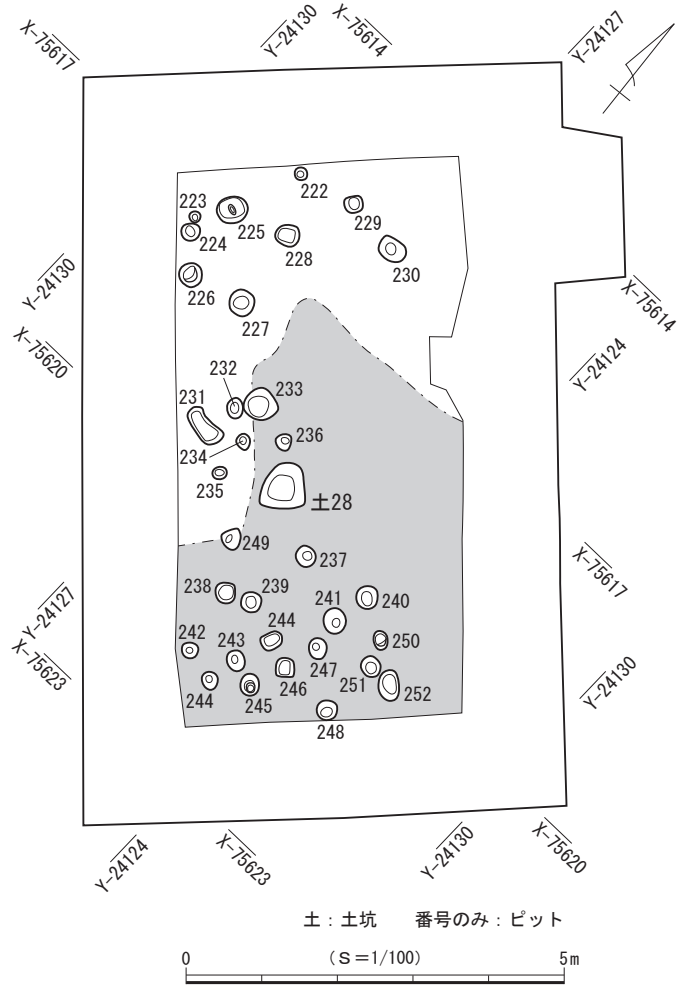


図53 第10面 遺構分布図

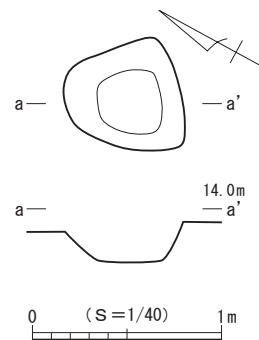


図54 第10面 土坑28

第11節 第11面の遺構と遺物

第11面の遺構は堆積土層の22層上面で検出され、確認面の標高は13.8～13.9mを測る。22層は締まりがなく粘性の強い茶色粘土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は井戸1基、土坑3基、ピット24基である(図55)。調査区全域にまばらに分布し、遺構密度は希薄である。

遺物は土師器がわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第8～10面以下ということをも勘案して、13世紀初頭以前に属すると考えられる。

(1) 井戸

井戸2(図56)

調査区南西壁際の中央に位置する。東側でピット265・268・269と重複する。南西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から開口部の平面形を推定すると、円形を呈すると考えられ、壁はわずかに開いて立ち上がる。規模は北西-南東方向2.37m、北東-南西方向の現存長1.31mを測る。掘削深度の制限があるため井戸底は検出できず、確認面から約50cmの深さで調査を終了した。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑29(図57)

調査区北東壁際の中央南東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がる。断面形は皿状に近い形状を呈し、規模は北西-南東方向の現存長84cm、北東-南西方向の現存長58cm、深さ7cmで、坑底面の標高は13.67mを測る。主軸方位はN-75°-Eを指すと推定される。

遺物は出土しなかった。

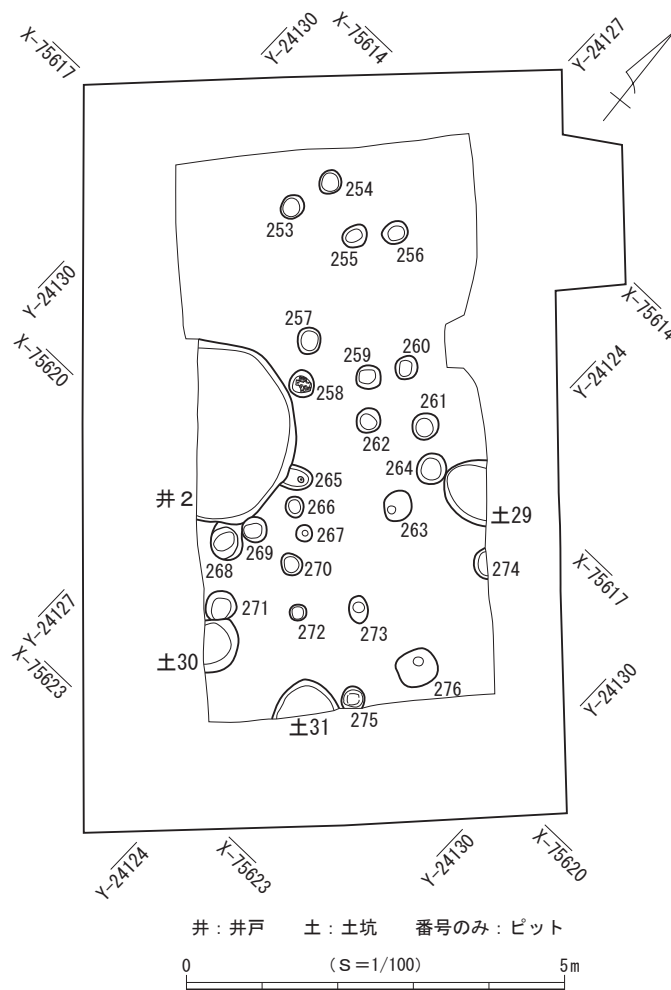


図55 第11面 遺構分布図

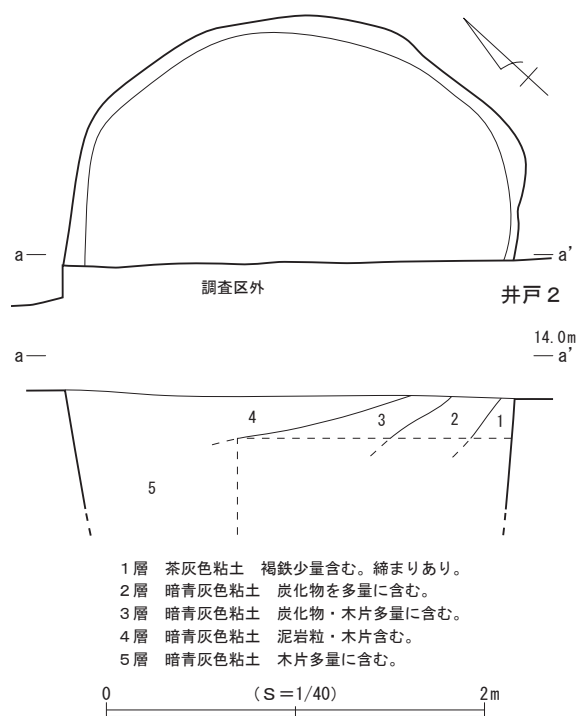


図56 第11面 井戸2

土坑30 (図57)

調査区の南隅付近に位置する。北西側でピット271と重複して南東側を壊している。南西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は水平で、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形を呈し、規模は北西-南東方向68cm、北東-南西方向の現存長46cm、深さ8cmで、坑底面の標高は13.67mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑31 (図57)

調査区の南東壁際中央付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は水平で、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形を呈し、規模は南北現存長90cm、東西現存長47cm、深さ20cmで、坑底面の標高は13.66mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) ピット

第11面では、24基を検出した。調査区全体に分布が認められるが密度は疎らで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径22~52cm、深さ4~39cmと径・深さともばらつきがある。

遺物は出土しなかった。

以下、礎板が据えられたピット1基と礎石が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット258 (図58)

調査区の中央北西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸35cm、短軸33cm、深さ14cmを測り、礎板がピット東壁寄りの底面に3枚を重ねて据えられていた。礎板の大きさは上から順に長さ19cm、幅6cm、厚さ1cm、長さ16cm、幅10cm、厚さ3cm、長さ12cm、幅5cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は13.69mである。

ピット275 (図58)

調査区の南東壁際中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は径31cm、深さ17cmを測り、礎石がピット中央に据えられていた。礎石の大きさは長さ28cm、幅22cmを測り、上面の標高は13.84mである。

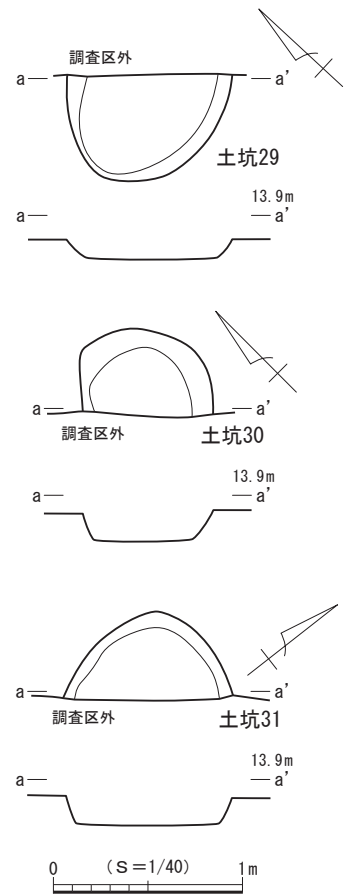


図57 第11面 土坑29~31

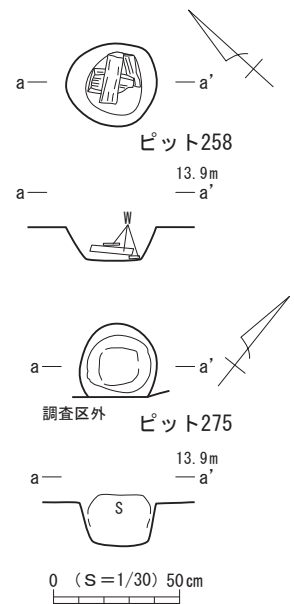


図58 第11面
ピット258・275

第四章 まとめ

今回報告する浄明寺一丁目652番8地点は「田楽辻子周辺遺跡(No.33)」の範囲内に所在する。遺跡の中では、滑川と釈迦堂川との合流地点から南西約50m付近に位置する。今回の調査では第1～11面までの合計11面で、調査面積は67㎡である。検出した遺構は、礎石建物1棟、道路状遺構1本、溝状遺構11条、井戸2基、方形土坑1基、土坑31基、ピット273基である。遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高15.7～15.8mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は井戸1基、土坑2基である。遺構群は調査区東半で検出され、遺構密度は全体にまばらである。また、調査区中央から東側にかけて、泥岩ブロックを多量に含む土層による整地面の広がり確認された。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高約15.3mを測る堆積土層の6層上面で検出された。検出した遺構群は道路状遺構1本、溝状遺構1条、土坑12基、ピット22基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布しており、遺構密度としては高くはない。北東－南西方向に延びている道路状遺構の西側では、幅2.5mの空地があり、道路状遺構との関連が注意されよう。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高約15.0mを測る堆積土層の8層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、土坑4基、ピット3基である。調査区北半部に広がる整地面上に遺構群が構築されていた。調査区南半は空地となっており、第2面と同様に空地の性格究明も課題となろう。本面も遺構密度は全体としては希薄である。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀初頭に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は、標高14.9～15.0mを測る堆積土層の9層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構5条、土坑1基、ピット19基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布しており、重複するものは少ない。溝状遺構は軸方位を揃えて配置しており、互いに関連性をもつものと考えられる。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は、標高約14.8mを測る堆積土層の11層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット4基であり、遺構密度は希薄である。調査区中央付近から東端部にかけて検出された礎石建物は周囲に溝を巡らせており、建物本体はさらに調査区外の東側へと延びている。また、礎石建物の外

側の整地層の上面には、貝砂の分布が認められた。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀前葉～後葉頃に属すると考えられる。

〈第6面〉

第6面の遺構は、標高約14.7mを測る堆積土層の14層上面で検出された。検出した遺構はピット23基である。調査区の北隅に集中している他では散漫な分布状況である。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第7面〉

第7面の遺構は、標高14.5～14.6mを測る堆積土層の17・18層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布している。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第6面以下ということと第8面の年代観とを勘案すると、本面の遺構群は13世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第8面〉

第8面の遺構は、標高14.4～14.5mを測る堆積土層の19層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、方形土坑1基、土坑3基、ピット104基である。遺構群は調査区全域に分布し、遺構密度は比較的高い。調査区中央に位置する溝10の東西には帯状の整地面の広がりも認められ、この整地面が道として機能していた可能性が高く、道・溝を基軸とした土地区画の一端が垣間みられる。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀初頭～前葉頃に属すると考えられる。

〈第9面〉

第9面の遺構は、標高約14.2mを測る堆積土層の20層上面で検出された。検出した遺構は土坑5基、ピット21基である。遺構群は土坑が調査区南東部にまとまり、ピットは調査区全域に散漫に分布しており、遺構密度は低い。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8面以下ということと勘案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

〈第10面〉

第10面の遺構は、標高14.0～14.1mを測る堆積土層の21層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット31基である。遺構群は調査区の南東隅と北西隅を結んだラインよりも南側に集中している。北側は空閑地となっており、遺構密度は全体としては希薄である。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8・9面以下ということと勘案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

〈第11面〉

第11面の遺構は、標高13.8～13.9mを測る堆積土層の22層上面で検出された。検出した遺構は素掘り井戸1基、土坑3基、ピット24基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。加えて上記した6～10面、および本面では検出された遺構種とその数、遺構密度の希薄さが類似してお

り、13世紀初頭～前葉までは人的活動が活発ではない様相がうかがわれる。

出土した遺物はきわめて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8～10面以下ということをお案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進 1989「大路・小路・辻子・辻」『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

押木弘巳 2012「田楽辻子周辺遺跡(No.33)浄明寺一丁目556番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28』平成23年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡調査団

永田史子・齋藤修佑 a 2018「釈迦堂遺跡(No.257)浄明寺一丁目598番21地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会

永田史子・齋藤修佑 b 2018「釈迦堂遺跡(No.257)浄明寺一丁目598番35地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会

根本志保 2014「田楽辻子周辺遺跡(No.33)浄明寺二丁目569番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30』平成25年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄・岡 陽一郎ほか 2002『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告』杉本寺周辺遺跡発掘調査団

森 孝子 2000「田楽辻子周辺遺跡遺跡(No.33)鎌倉市浄明寺一丁目661番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
井戸1出土遺物(図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(5.7)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/4 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.0	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	8.5	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
4	陶器	瀬戸 天目茶碗	-	-	現 5.4	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-灰色、釉-褐~黒褐色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁~ 体部小片
5	陶器	瀬戸 卸皿	-	-	現 3.4	内面に卸目がわずかに残る 胎土: 堅緻、微砂、赤色粒、黒色粒 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁~ 体部小片
6	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.8	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 暗褐色、胎土-灰色、外面に降灰 焼成: 良好 備考: 10型式	口縁~ 体部小片
7	陶器	備前 播鉢	-	-	現 6.8	内面-10本一単位の播目 胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 褐灰色 焼成: 良好	口縁部小片

表土出土遺物(図10)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.1	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.5	4.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形

第1面 遺構外出土遺物(図11)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	2.1	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
2	陶器	瀬戸 折縁深皿	(25.5)	(15.9)	7.5	底部内面中央に同心円状の櫛描文 底面一回転ヘラケズリ 胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: 胎土-黄灰白色、釉-オリーブ灰色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸中期様式IV期	1/4

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑3出土遺物(図16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	7.6	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.0	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2 強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.0	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4 強
土坑5出土遺物(図17)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.0)	2.2	口唇部内外面に灯芯痕 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙灰色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.7	1.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.1	3.6	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
4	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.6	胎土: 堅緻、小石粒、礫 色調: 褐色 焼成: 良好 備考: 3型式	口縁部小片
5	金属 製品	釘	9.0	頭部幅 0.8	頭部厚 0.5	鉄製釘 鑄造 断面方形 全体に腐食が進行 重量: 5.3g	完形
土坑9出土遺物(図18)							
1	磁器	白磁 小皿	(6.1)	(1.9)	(1.0)	底面-ヘラケズリ 内外面-花卉状の陽刻 胎土: 精良堅緻、黒色粒 色調: 内外面-灰白色 底面-無釉 焼成: 良好	口縁~ 底部小片
土坑13出土遺物(図19)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.9	1.4	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
ピット出土遺物(図21)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.0	1.7	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	7.0	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.3	3.5	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/2 強
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.6	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット22	略完形
第2面 遺構外出土遺物(図22・23)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.1)	2.2	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	4.3	2.3	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/5
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.7	1.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.6	2.2	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.9	1.5	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形

6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	1.9	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.9	口縁部内外面に灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	1.7	器形の歪み著しい 底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	6.4	3.0	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
18	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.6	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.2	3.4	口縁部内外面に焼成時のムラあり 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、赤色粒、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
20	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.8	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
21	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.4	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
22	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.4	3.3	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
23	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	(7.9)	3.2	底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
24	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(6.8)	3.4	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
25	陶器	瀬戸 小壺Ⅰ類	(2.3)	-	現 3.0	胎土: 堅緻、微砂、黒色粒 色調: 外面~口縁部内面に施釉(オリープ灰色)、内面-灰白色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸前期様式	口縁~ 肩部小片
26	陶器	瀬戸 入子	(8.7)	-	現 3.2	胎土: 堅緻、微砂、赤色粒、黒色粒 色調: 灰白色、内外面に降灰(オリープ灰色) 焼成: 良好 備考: 古瀬戸前期様式	口縁部小片
27	陶器	瀬戸 卸皿	(13.7)	(9.4)	3.6	内面-見込み部に格子状の卸目 胎土: 堅緻、微砂、黒色粒 色調: 灰白色、内外面に降灰(オリープ灰色) 焼成: 良好 備考: 古瀬戸中期様式Ⅰ期	1/4
28	陶器	常滑 壺	(11.8)	-	現 3.5	胎土: 堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調: 暗灰褐色 焼成: 良好	口縁部小片
29	陶器	常滑 壺	-	(10.0)	現 14.6	底面-ヘラナデ、内面-指頭調整 胎土: 堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調: 橙色 焼成: 良好	胴下半~ 底部1/3
30	陶器	常滑 広口壺大	-	-	現 7.5	胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、礫 色調: 外面に降灰(灰オリープ色)、内面-暗灰褐色 焼成: 良好 備考: 6 a 型式	口縁~ 肩部小片
31	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.8	胎土: 堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調: 暗赤褐色、口唇部内面に降灰 焼成: 良好 備考: 6 b ~ 7 形式	口縁部小片
32	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.1	胎土: 堅緻、白色粒、赤色粒、砂粒、細礫 色調: にぶい赤褐色、外面-降灰(灰緑色) 焼成: 良好 備考: 6 b 型式	口縁部小片
33	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.0	外面-綾杉状の押印 胎土: 堅緻、白色粒、砂粒、細礫 色調: 外面-暗赤褐色、内面-灰黄褐色 焼成: 良好	胴部小片
34	陶器	常滑 甕	-	-	現 15.8	外面-区画文状の押印 胎土: 堅緻、白色粒、黒色粒、砂粒、小礫 色調: 外面-緑灰色、内面-褐色 焼成: 良好	胴部下半片
35	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.5	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、赤色粒、細礫 色調: にぶい赤褐色 焼成: 良好 備考: 7 ~ 8 型式	口縁部小片
36	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.7	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: 外面-赤褐色、内外面に降灰(灰緑色) 焼成: 良好 備考: 7 ~ 8 型式	口縁部小片
37	陶製品	摩耗陶片	現長 6.7	現幅 4.7	厚 0.8~1.0	常滑甕の陶片を転用 陶片の周囲が摩耗 胎土: 白色粒、黒色粒、小礫 色調: 暗赤褐色	約完形
38	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 7.2	外面-16弁の菊花文押印 胎土: 微砂、褐色粒、黒色粒、細砂 色調: 黒灰色 焼成: 良好 備考: Ⅲ類	口縁部小片
39	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 8.3	外面-口唇部直下に菊花文の珠文を連続的に貼り付け、胴上半に菱文(雷文)の押印 胎土: 微砂 色調: 外面-黄褐色、内面-黒灰色 焼成: 良好 備考: Ⅲ類	口縁部小片
40	金属 製品	天蓋?	現長 19.4	-	-	銅製品 重量: 12.1 g 備考: 仏像などの上にかざす笠状の装飾品の一部?	
41	金属 製品	丸釘	現長 2.0	頂部径 1.5	-	銅製品 飾り釘 重量: 4.1 g	
42	金属 製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.7	厚 0.10	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-真書	完形

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構 2 出土遺物 (図26)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.9	1.4	口唇部内外面に灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形

土坑18出土遺物(図28)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	5.8	2.0	底面一回転糸切+ナデ や粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、や 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、や 焼成:良好	1/3
---	----	---------------	-------	-----	-----	--------------------------------	---	-----

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構 5 出土遺物(図30)

1	陶器	常滑 甕	(22.6)	-	現 17.5	胎土:堅緻、微砂、小礫 色調:灰褐色、内外面に一部降灰(灰オリーブ色) 焼成:良好 備考:6 b 型式	口縁~ 胴部片
---	----	---------	--------	---	-----------	--	------------

溝状遺構 6 出土遺物(図32)

1	陶器	常滑 甕	(24.0)	-	現 5.6	胎土:堅緻、微砂、白色粒 色調:灰褐色、内外面に一部降灰(緑色) 焼成:良好 備考:6 a 型式	口縁部片
---	----	---------	--------	---	----------	---	------

溝状遺構 7 出土遺物(図33)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	5.2	1.8	全体に器形歪む 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	---	----

第4面 遺構外出土遺物(図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.3	3.4	0.8	コースター形 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.0	2.5	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.6	底面一回転糸切 胎土:微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2 強
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	4.6	1.9	底面一回転糸切 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/4 強
5	土器	ロクロ かわらけ・中	10.0	6.5	3.1	口唇部内外面に灯芯痕 口縁部やや内湾する 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.6	4.7	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	6.4	3.5	底面一回転糸切+ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2 弱
8	陶器	中国 褐釉壺	-	-	現 4.1	外面一対耳状の耳1カ所遺存 胎土:緻密 色調:胎土-灰褐色、釉-黒褐色 焼成:良好	肩部 小破片
9	陶器	山茶碗	-	-	現 3.0	胎土:緻密、白色粒 色調:灰色 焼成:良好	口縁部小片
10	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 2.6	胎土:堅緻、白色粒 色調:灰色 焼成:良好	口縁部小片
11	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.1	胎土:堅緻、白色粒 色調:外面-灰褐色、内面-褐灰色(一部降灰) 焼成:良好 備考:6 b 型式	口縁部小片
12	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.9	胎土:堅緻、白色粒 色調:外面-褐灰色、内面-灰褐色(一部降灰) 焼成:良好 備考:6 b 型式	口縁部小片
13	土器	土器質 火鉢	-	-	現 7.2	胎土:砂粒、白色粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:1 b 類	口縁部小片
14	金属 製品	六器	-	高台径 3.6	現 0.5	銅製品 内面見込み部に円形の稜線を有する 重量:9.6 g	高台部遺存
15	金属 製品	銭貨	直径 2.50	孔径 0.71	厚 0.15	銭銘-景祐元寶(北宋・1034) 書体-篆書	完形

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第5面 遺構外出土遺物(図38)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.8	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底一強いナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.4)	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/3
4	磁器	青磁 皿	-	高台径 (11.8)	現 3.8	内面一魚の貼付文 胎土:精良緻緻 色調:釉-明緑灰色、断面-灰白色 焼成:良好 備考:龍泉窯系青磁坏皿-c 類	高台部小片

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第6面 遺構外出土遺物(図40)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.0	1.6	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	---	-----

第6面 構成土出土遺物(図41)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	(7.5)	1.4	底面一ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3
2	土器	手づくね かわらけ・大	(13.3)	-	3.5	底面一ヘラナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ	-	6.8	現 1.7	底部は台状形態 底面一回転糸切 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、石英粒、小石粒、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	底部遺存
4	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	7.8	3.2	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.5~ 12.0	7.8~8.1	3.4	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形

6	陶器	渥美鉢	(26.0)	-	現5.7	胎土：堅緻、白色粒、黒色粒、小石粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：2b型式	口縁部小片
7	陶器	常滑甕	-	-	現6.0	胎土：堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調：黄灰色、内外面に一部降灰(オリーブ灰色) 焼成：良好 備考：4型式	口縁部小片
8	角製品	養子	一辺0.8~0.9	-	-	色調：灰白色、目-暗灰色 重量：0.6g 備考：焼けた可能性大、シカの角を素材とする	略完形
9	石製品	勾玉	長3.8	幅1.4	厚0.5	石材-滑石製 色調：暗オリーブ色 重量：6.7g 備考：古墳時代中期、5世紀代	完形

表8 第8面 出土遺物観察表

質量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	質量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

方形土坑1 出土遺物 (図47)

1	土器	手づくねかわらけ・小	8.7~9.1	-	2.0	底面-ナデ 胎土：雲母、白色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	完形
---	----	------------	---------	---	-----	--	----

第8面 遺構外出土遺物 (図49)

1	土器	白かわらけ・小	(7.2)	-	1.0	コースター形 成形-手づくね 底面-ナデ 胎土：微砂、黒色微粒、良土 色調：淡黄白色 焼成：良好	1/3弱
2	土器	手づくねかわらけ・大	13.0~13.3	-	3.3	底部外面に煤付着 底面-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
3	土器	手づくねかわらけ・大	13.3~13.9	-	3.6	器形の歪み顕著 底面-ナデ 胎土：赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
4	磁器	青磁碗	-	-	現2.8	内面-藍刻 胎土：精良堅緻、白色粒、黒色微粒 色調：胎土-黄灰色、釉-明灰オリーブ色、内外面に小貫入 焼成：良好 備考：同安窯系青磁碗	口縁部小片
5	磁器	青磁碗	-	-	現6.3	内面-藍刻 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-白灰黄色、釉-にぶい黄褐色、内外面に小貫入 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-4類	口縁~体部小片
6	磁器	青磁碗	-	-	現2.3	内面-割花文 胎土：精良堅緻 色調：胎土-灰色、釉-オリーブ灰色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-3類	体部小片
7	陶器	渥美鉢	-	-	現4.5	胎土：微砂、白色粒 色調：暗黒灰色 焼成：良好 備考：2b型式	口縁部小片
8	陶器	山皿	(7.8)	-	現1.8	胎土：微砂、白色粒、硬質 色調：暗黒灰色 焼成：良好	口縁部小片
9	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現8.8	胎土：白色粒、細礫 色調：灰黄褐色 焼成：良好	口縁~体部片
10	瓦	平瓦	現長11.9	現幅12.7	厚1.8~2.0	凹面-側縁平行の縄叩き+ナデ 凸面-側縁平行の縄叩き+ヘラナデ 胎土：雲母、砂粒、細礫 色調：灰黄色 焼成：良好	破片

第8面 構成土出土遺物 (図50)

1	土器	ロクロかわらけ・中	(11.6)	(7.7)	3.3	内面見込み部に渦巻き状の痕跡 底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/4
2	陶器	瀬戸平碗	-	高台径4.8	現1.6	高台-削り出し 胎土：堅緻、黒色微粒 色調：外面-黄灰色、内面施釉-明緑灰色 焼成：良好 備考：古瀬戸中期様式	高台部遺存
3	角製品	琴柱形	現長3.0	最大幅2.7	厚1.0	シカの角を素材とする	一部欠損

表9 遺構計測表

() = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
井戸1	第1面	170	164	<120>	ピット16	第2面	35	31	9	ピット35	第4面	51	<35>	7
土坑1	第1面	105	<81>	44	ピット17	第2面	<30>	27	8	ピット36	第4面	39	38	27
土坑2	第1面	136	<49>	136	ピット18	第2面	<40>	29	14	ピット37	第4面	26	-	24
道路状遺構1	第2面	625	210~270	40	ピット19	第2面	45	30	-	ピット38	第4面	29	-	13
溝状遺構1	第2面	<250>	32~53	15	ピット20	第2面	35	34	4	ピット39	第4面	27	24	7
土坑3	第2面	<64>	68	15	ピット21	第2面	33	-	19	ピット40	第4面	28	24	16
土坑4	第2面	<61>	<44>	11	ピット22	第2面	54	<48>	27	ピット41	第4面	27	24	22
土坑5	第2面	<132>	<81>	22	溝状遺構2	第3面	<80/95/580>	18~44	6~18	ピット42	第4面	21	16	7
土坑6	第2面	<105>	<83>	29	溝状遺構3	第3面	<220>	24~30	5~10	ピット43	第4面	40	<25>	9
土坑7	第2面	80	65	13	土坑15	第3面	<60>	<17>	15	ピット44	第4面	<33>	<23>	40
土坑8	第2面	132	56	21	土坑16	第3面	<67>	<13>	45	礎石建物1	第5面	<550>	<210>	2~22
土坑9	第2面	84	71	16	土坑17	第3面	<77>	<54>	27	ピット45	第5面	42	37	28
土坑10	第2面	61	52	15	土坑18	第3面	<78>	<57>	16	ピット46	第5面	31	28	17
土坑11	第2面	<78>	38	17	ピット23	第3面	41	<26>	15	ピット47	第5面	20	17	17
土坑12	第2面	142	102	25	ピット24	第3面	<43>	<37>	-	ピット48	第5面	23	22	22
土坑13	第2面	<52>	60	21	ピット25	第3面	<40>	<31>	-	ピット50	第6面	<33>	<6>	9
土坑14	第2面	<110>	<46>	27	溝状遺構4	第4面	<120>	27	12	ピット51	第6面	<30>	<7>	7
ピット1	第2面	37	33	7	溝状遺構5	第4面	<600>	36~95	5~14	ピット52	第6面	29	28	6
ピット2	第2面	42	34	7	溝状遺構6	第4面	<620>	15~44	5~13	ピット53	第6面	34	30	10
ピット3	第2面	35	32	7	溝状遺構7	第4面	<280>	34~53	10~18	ピット54	第6面	27	25	20
ピット4	第2面	48	44	10	溝状遺構8	第4面	<460>	23~35	8	ピット55	第6面	34	23	36
ピット5	第2面	33	22	9	土坑19	第4面	64	55	16	ピット56	第6面	<29>	<21>	14
ピット6	第2面	<31>	<25>	5	ピット26	第4面	<25>	23	15	ピット57	第6面	<44>	<27>	14
ピット7	第2面	53	<45>	21	ピット27	第4面	25	22	15	ピット58	第6面	25	24	13
ピット8	第2面	33	30	10	ピット28	第4面	40	31	23	ピット59	第6面	28	22	14
ピット9	第2面	<47>	38	9	ピット29	第4面	53	34	19	ピット60	第6面	23	21	12
ピット10	第2面	<34>	31	8	ピット30	第4面	28	26	16	ピット61	第6面	40	29	27
ピット11	第2面	44	<42>	25	ピット31	第4面	49	37	16	ピット62	第6面	25	18	19
ピット12	第2面	46	31	19	ピット32	第4面	19	18	7	ピット63	第6面	34	27	19
ピット13	第2面	29	21	15	ピット33	第4面	32	26	11	ピット64	第6面	25	21	9
ピット14	第2面	34	31	12	ピット34	第4面	<37>	27	12	ピット65	第6面	20	13	11
ピット15	第2面	44	<36>	13						ピット66	第6面	29	27	11

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ピット 67	第6面	39	34	13	ピット 136	第8面	55	21	12	ピット 207	第9面	31	(9)	8
ピット 68	第6面	8	7	14	ピット 137	第8面	39	35	15	ピット 208	第9面	16	14	10
ピット 69	第6面	26	22	9	ピット 138	第8面	28	21	15	ピット 209	第9面	50	36	19
ピット 70	第6面	35	27	17	ピット 139	第8面	33	-	13	ピット 210	第9面	13	11	26
ピット 71	第6面	30	25	14	ピット 140	第8面	51	51	13	ピット 211	第9面	24	(14)	7
ピット 72	第6面	12	10	9	ピット 141	第8面	29	27	35	ピット 212	第9面	34	26	9
溝状遺構 9	第7面	(200)	12~21	3~8	ピット 142	第8面	20	19	13	ピット 213	第9面	27	25	35
ピット 73	第7面	15	14	4	ピット 143	第8面	24	21	24	ピット 214	第9面	9	8	3
ピット 74	第7面	26	25	13	ピット 145	第8面	29	(15)	9	ピット 215	第9面	7	-	6
ピット 75	第7面	28	26	8	ピット 146	第8面	30	20	6	ピット 216	第9面	28	(21)	-
ピット 77	第7面	35	31	41	ピット 147	第8面	25	23	40	ピット 217	第9面	28	26	42
ピット 78	第7面	58	26	9	ピット 148	第8面	26	22	16	ピット 218	第9面	20	18	52
ピット 79	第7面	30	24	8	ピット 149	第8面	(27)	(27)	20	ピット 219	第9面	36	31	17
ピット 80	第7面	41	33	40	ピット 150	第8面	44	23	29	ピット 220	第9面	35	(13)	13
ピット 81	第7面	34	(31)	8	ピット 151	第8面	21	18	50	ピット 221	第9面	26	(10)	49
ピット 82	第7面	39	36	46	ピット 152	第8面	29	24	44	土坑 28	第10面	61	60	23
ピット 83	第7面	34	31	18	ピット 153	第8面	50	(45)	31	ピット 222	第10面	16	-	17
ピット 84	第7面	51	35	10	ピット 154	第8面	(46)	(36)	12	ピット 223	第10面	15	-	13
ピット 85	第7面	(56)	27	5	ピット 155	第8面	33	27	38	ピット 224	第10面	25	23	12
ピット 86	第7面	32	30	14	ピット 156	第8面	35	(29)	28	ピット 225	第10面	41	35	21
ピット 87	第7面	29	26	15	ピット 157	第8面	44	35	40	ピット 226	第10面	31	-	25
ピット 88	第7面	9	8	7	ピット 158	第8面	43	30	52	ピット 227	第10面	35	33	14
ピット 89	第7面	39	26	9	ピット 159	第8面	38	35	21	ピット 228	第10面	32	28	5
ピット 90	第7面	49	32	35	ピット 160	第8面	32	29	16	ピット 229	第10面	24	22	16
ピット 91	第7面	欠番			ピット 161	第8面	27	-	40	ピット 230	第10面	38	27	39
ピット 92	第7面	23	21	10	ピット 162	第8面	52	36	27	ピット 231	第10面	56	27	12
ピット 93	第7面	42	(25)	28	ピット 163	第8面	38	34	37	ピット 232	第10面	27	21	12
ピット 94	第7面	(22)	(7)	8	ピット 164	第8面	23	17	-	ピット 233	第10面	46	42	18
ピット 95	第7面	41	(21)	23	ピット 165	第8面	38	35	42	ピット 234	第10面	21	18	7
溝状遺構 10	第8面	(230)	12~21	8	ピット 166	第8面	39	31	33	ピット 235	第10面	18	16	7
溝状遺構 11	第8面	(80)	16~20	3	ピット 167	第8面	(28)	(13)	23	ピット 236	第10面	22	20	14
方形土坑 1	第8面	167	116	43	ピット 168	第8面	23	18	29	ピット 237	第10面	27	25	21
土坑 20	第8面	90	85	31	ピット 169	第8面	37	36	48	ピット 238	第10面	27	26	12
土坑 21	第8面	85	70	23	ピット 170	第8面	36	(15)	7	ピット 239	第10面	27	-	9
土坑 22	第8面	123	61	29	ピット 171	第8面	25	21	38	ピット 240	第10面	30	28	19
ピット 96	第8面	(20)	(6)	3	ピット 172	第8面	18	16	6	ピット 241	第10面	33	30	23
ピット 97	第8面	(17)	(13)	12	ピット 173	第8面	37	26	13	ピット 242	第10面	22	20	11
ピット 98	第8面	(22)	(9)	8	ピット 174	第8面	(26)	(7)	7	ピット 243	第10面	27	23	32
ピット 99	第8面	20	15	3	ピット 175	第8面	20	13	5	ピット 244	第10面	28	21	20
ピット 100	第8面	(41)	(21)	6	ピット 176	第8面	13	10	21	ピット 245	第10面	38	24	38
ピット 101	第8面	16	14	24	ピット 177	第8面	21	17	15	ピット 246	第10面	25	24	15
ピット 102	第8面	25	16	17	ピット 178	第8面	8	7	5	ピット 247	第10面	27	24	33
ピット 103	第8面	28	24	11	ピット 179	第8面	4	3	4	ピット 248	第10面	27	26	20
ピット 104	第8面	7	-	9	ピット 180	第8面	51	31	14	ピット 249	第10面	27	26	15
ピット 105	第8面	27	26	15	ピット 181	第8面	7	6	6	ピット 250	第10面	25	18	21
ピット 106	第8面	15	10	10	ピット 182	第8面	7	-	9	ピット 251	第10面	28	24	22
ピット 107	第8面	32	(27)	14	ピット 183	第8面	46	34	10	ピット 252	第10面	40	27	33
ピット 108	第8面	33	22	50	ピット 184	第8面	19	(14)	11	井戸 2	第11面	237	(131)	(54)
ピット 109	第8面	(40)	28	37	ピット 185	第8面	34	31	36	土坑 29	第11面	(84)	(58)	7
ピット 110	第8面	49	45	38	ピット 186	第8面	35	31	11	土坑 30	第11面	68	(46)	8
ピット 111	第8面	(35)	(24)	6	ピット 187	第8面	29	23	14	土坑 31	第11面	(90)	(47)	20
ピット 112	第8面	37	34	45	ピット 188	第8面	10	(7)	5	ピット 253	第11面	33	29	7
ピット 113	第8面	21	17	-	ピット 189	第8面	9	-	4	ピット 254	第11面	30	29	8
ピット 114	第8面	19	16	8	ピット 190	第8面	11	10	5	ピット 255	第11面	34	29	20
ピット 115	第8面	18	13	30	ピット 191	第8面	8	-	3	ピット 256	第11面	34	29	21
ピット 116	第8面	(47)	(27)	14	ピット 192	第8面	8	-	4	ピット 257	第11面	35	30	7
ピット 117	第8面	27	29	51	ピット 193	第8面	8	-	9	ピット 258	第11面	35	33	14
ピット 118	第8面	10	-	11	ピット 194	第8面	15	13	19	ピット 259	第11面	32	31	10
ピット 119	第8面	20	-	16	ピット 195	第8面	21	20	13	ピット 260	第11面	31	29	10
ピット 120	第8面	25	22	17	ピット 196	第8面	22	14	4	ピット 261	第11面	37	34	7
ピット 121	第8面	43	32	20	ピット 197	第8面	51	41	15	ピット 262	第11面	34	31	13
ピット 122	第8面	17	12	5	ピット 198	第8面	49	38	15	ピット 263	第11面	43	37	24
ピット 123	第8面	(23)	19	11	ピット 199	第8面	20	10	10	ピット 264	第11面	40	38	12
ピット 124	第8面	18	13	6	ピット 200	第8面	28	25	8	ピット 265	第11面	(39)	32	11
ピット 125	第8面	35	30	32	土坑 23	第9面	77	44	33	ピット 266	第11面	28	24	11
ピット 126	第8面	23	15	14	土坑 24	第9面	144	(80)	21	ピット 267	第11面	22	-	39
ピット 127	第8面	15	14	30	土坑 25	第9面	92	(57)	25	ピット 268	第11面	(47)	42	26
ピット 128	第8面	22	21	14	土坑 26	第9面	150	70	27	ピット 269	第11面	33	32	28
ピット 129	第8面	42	35	57	土坑 27	第9面	121	(48)	19	ピット 270	第11面	31	27	4
ピット 130	第8面	25	21	16	ピット 201	第9面	25	(9)	9	ピット 271	第11面	41	(38)	10
ピット 131	第8面	50	(37)	53	ピット 202	第9面	15	13	11	ピット 272	第11面	22	21	9
ピット 132	第8面	27	26	16	ピット 203	第9面	47	38	12	ピット 273	第11面	36	25	17
ピット 133	第8面	11	10	8	ピット 204	第9面	47	38	31	ピット 274	第11面	41	(17)	15
ピット 134	第8面	19	18	18	ピット 205	第9面	30	28	22	ピット 275	第11面	31	(30)	17
ピット 135	第8面	21	20	11	ピット 206	第9面	40	24	24	ピット 276	第11面	52	48	31

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。また、深さは柱穴掘り方の深さを記載している。

表10 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数	【石製品】			【金属製品】		
【かわらけ】			滑石鍋	1	銭貨			
	かわらけ ロクロ成形	17	【土師器】			合計 45		
【白磁】			甍			土坑11		
	碗	1	【金属製品】			産地 器種 破片数		
【陶器】			銭貨			【かわらけ】		
瀬戸	折縁深皿	2	釘			かわらけ ロクロ成形		
常滑	甍	2	合計 244			合計 3		
常滑	片口鉢Ⅱ類	2	第2面					
備前	播鉢	1	道路状遺構1					
【瓦質土器】			産地 器種 破片数			土坑13		
	火鉢	1	【かわらけ】			産地 器種 破片数		
【金属製品】			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
	銭貨	1	【陶器】			かわらけ ロクロ成形		
合計 27			常滑 甍			合計 8		
第1面			合計 14			【陶器】		
井戸1			合計 9			常滑 甍		
産地 器種 破片数			土坑3			合計 10		
【かわらけ】			産地 器種 破片数			土坑14		
	かわらけ ロクロ成形	1	【かわらけ】			産地 器種 破片数		
【陶器】			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
瀬戸	天目茶碗	2	合計 23			かわらけ ロクロ成形		
瀬戸	折縁深皿	1	土坑4					
常滑	甍	5	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
【瓦質土器】			かわらけ ロクロ成形			合計 3		
	火鉢	2	合計 3			土坑5		
【瓦】			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
	丸瓦	1	かわらけ ロクロ成形			合計 57		
	平瓦	1	【陶器】			中国 褐釉陶器		
【金属製品】			合計 65			常滑 甍		
	釘	3	合計 65			常滑 片口鉢Ⅰ類		
合計 16			土坑6			常滑 片口鉢Ⅱ類		
井戸1掘り方			産地 器種 破片数			【石製品】		
【かわらけ】			かわらけ ロクロ成形			砥石		
	かわらけ ロクロ成形	28	合計 9			【金属製品】		
【青白磁】			産地 器種 破片数			釘		
	梅瓶	1	合計 26			土坑8		
【陶器】			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
瀬戸	鉢	1	かわらけ ロクロ成形			【陶器】		
瀬戸	卸皿	1	合計 10			常滑 甍		
常滑	甍	10	合計 14			産地 器種 破片数		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	土坑9			【かわらけ】		
山茶碗窯	碗	1	産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
備前	播鉢	1	【かわらけ】			【陶器】		
合計 44			かわらけ ロクロ成形			合計 40		
土坑2			常滑 甍			【白磁】		
産地 器種 破片数			合計 4			小皿		
【かわらけ】			産地 器種 破片数			【青磁】		
	かわらけ ロクロ成形	4	龍泉窯系 碗Ⅱ類			合計 1		
【陶器】			産地 器種 破片数			【陶器】		
常滑	甍	3	常滑 甍			合計 1		
合計 7			合計 4			【土製品】		
第1面遺構外			産地 器種 破片数			ふいごの羽口		
【かわらけ】			かわらけ ロクロ成形			合計 4		
	かわらけ ロクロ成形	177	土坑10			産地 器種 破片数		
	かわらけ 手づくね成形	47	【かわらけ】			【陶器】		
【青磁】			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
龍泉窯系	折縁皿	1	合計 10			合計 3		
【陶器】			常滑 甍			【土製品】		
瀬戸	折縁深皿	3	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
瀬戸	甍	4	【かわらけ】			【陶器】		
常滑	壺	1	かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	合計 40			合計 1		
常滑	片口鉢Ⅱ類	3	【白磁】			【土製品】		
【瓦】			小皿			ふいごの羽口		
	平瓦	1	合計 1			合計 4		
合計 2			龍泉窯系 碗Ⅱ類			産地 器種 破片数		
第2面			常滑 甍			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			合計 2			かわらけ ロクロ成形		
土坑3			産地 器種 破片数			合計 5		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			土坑13		
【かわらけ】			合計 23			産地 器種 破片数		
【陶器】			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
常滑	甍	9	合計 3			かわらけ ロクロ成形		
合計 14			合計 3			合計 8		
土坑4			産地 器種 破片数			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			合計 3			合計 2		
【金属製品】			合計 65			【陶器】		
土坑5			産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
【かわらけ】			合計 57			かわらけ ロクロ成形		
【陶器】			中国 褐釉陶器			合計 3		
中国	褐釉陶器	1	合計 65			【陶器】		
常滑	甍	3	土坑6			産地 器種 破片数		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1	かわらけ ロクロ成形			【陶器】		
【石製品】			合計 9			常滑 甍		
	砥石	1	合計 26			合計 1		
【金属製品】			土坑8			産地 器種 破片数		
	釘	1	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 65			土坑9			【陶器】		
土坑6			産地 器種 破片数			常滑 甍		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 3		
【かわらけ】			合計 9			【土製品】		
【陶器】			常滑 甍			ふいごの羽口		
常滑	甍	4	合計 14			合計 4		
【金属製品】			産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
	器種不明	13	土坑10			【かわらけ】		
合計 26			産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
土坑8			産地 器種 破片数			合計 2		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			土坑11		
【かわらけ】			合計 10			産地 器種 破片数		
【陶器】			常滑 甍			【かわらけ】		
常滑	甍	4	合計 14			かわらけ ロクロ成形		
【金属製品】			土坑11			産地 器種 破片数		
	器種不明	13	産地 器種 破片数			【陶器】		
合計 26			土坑12			常滑 甍		
土坑9			産地 器種 破片数			【土製品】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			ふいごの羽口		
【かわらけ】			合計 40			合計 4		
【白磁】			小皿			産地 器種 破片数		
	小皿	1	龍泉窯系 碗Ⅱ類			【かわらけ】		
【青磁】			常滑 甍			かわらけ ロクロ成形		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	合計 2			合計 5		
【陶器】			常滑 甍			土坑13		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
土坑10			産地 器種 破片数			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			合計 23			合計 1		
【陶器】			かわらけ ロクロ成形			【土製品】		
常滑	甍	9	合計 3			ふいごの羽口		
合計 14			合計 3			合計 4		
土坑11			産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
【かわらけ】			合計 23			かわらけ ロクロ成形		
【陶器】			合計 23			合計 2		
常滑	甍	4	土坑12			産地 器種 破片数		
常滑	甍	4	産地 器種 破片数			【陶器】		
合計 2			土坑13			常滑 甍		
土坑13			産地 器種 破片数			【土製品】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			ふいごの羽口		
【かわらけ】			合計 8			合計 4		
【陶器】			常滑 甍			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	土坑14			【かわらけ】		
合計 10			産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
土坑14			産地 器種 破片数			合計 5		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			土坑15		
【かわらけ】			合計 37			産地 器種 破片数		
【陶器】			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
常滑	甍	4	合計 41			かわらけ ロクロ成形		
合計 41			土坑15			産地 器種 破片数		
ビット2			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			【陶器】		
【かわらけ】			合計 3			常滑 甍		
【陶器】			合計 3			合計 1		
ビット3			産地 器種 破片数			土坑16		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			産地 器種 破片数		
【かわらけ】			合計 3			【かわらけ】		
【陶器】			合計 3			かわらけ ロクロ成形		
ビット4			産地 器種 破片数			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			合計 1			合計 1		
【陶器】			合計 1			土坑17		
常滑	甍	1	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
合計 1			土坑17			【かわらけ】		
ビット11			産地 器種 破片数			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			瀬戸 折縁深皿		
【かわらけ】			合計 2			常滑 甍		
【陶器】			合計 2			常滑 片口鉢Ⅰ類		
瀬戸	折縁深皿	1	土坑18			常滑 片口鉢Ⅱ類		
常滑	甍	13	産地 器種 破片数			合計 17		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
合計 17			土坑18			【かわらけ】		
ビット12			産地 器種 破片数			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			合計 2			合計 3		
【陶器】			合計 2			【土製品】		
常滑	甍	1	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
合計 2			土坑19			【かわらけ】		
ビット13			産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 1		
【かわらけ】			合計 1			土坑20		
【陶器】			合計 1			産地 器種 破片数		
常滑	甍	1	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 1			土坑20			産地 器種 破片数		
ビット15			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			合計 5			合計 5		
【陶器】			合計 5			土坑21		
常滑	甍	5	産地 器種 破片数			産地 器種 破片数		
合計 5			土坑21			【かわらけ】		
土坑21			産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑22		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑22			産地 器種 破片数		
土坑22			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑23		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑23			産地 器種 破片数		
土坑23			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑24		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑24			産地 器種 破片数		
土坑24			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑25		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑25			産地 器種 破片数		
土坑25			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑26		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑26			産地 器種 破片数		
土坑26			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑27		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑27			産地 器種 破片数		
土坑27			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑28		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑28			産地 器種 破片数		
土坑28			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑29		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑	甍	2	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
合計 2			土坑29			産地 器種 破片数		
土坑29			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			合計 5		
【かわらけ】			合計 5			土坑30		
【陶器】			合計 5			産地 器種 破片数		
常滑								

【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 7

ピット16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
【青磁】		
	折縁皿	1
【陶器】		
常滑	甕	3
【金属製品】		
	釘	1
		合計 25

ピット19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
		合計 2

ピット20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 3

ピット22		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	34
		合計 34

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1,375
【白磁】		
	小壺Ⅰ類	1
	香炉	1
	皿Ⅸ類	4
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2
	碗Ⅱ類	4
	盤	3
	折縁皿	4
	碗	1
	器種不明	16
【青白磁】		
	梅瓶	5
【陶器】		
中国	褐釉陶器	5
瀬戸	小壺Ⅰ類	5
	入子	3
	折縁深皿	3
	卸皿	5
渥美	甕	5
	壺	1
常滑	甕	220
	壺	3
	片口鉢Ⅰ類	10
	片口鉢Ⅱ類	7
	摩耗陶片	1
亀山	甕	1
備前	播鉢	1
【土器】		
	火鉢	5
	南伊勢系鍋	2
	焙烙	4

【瓦質土器】		
	瓦器碗	2
	火鉢	25
	器種不明	1
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	滑石鍋	2
【土製品】		
	ふいごの羽口	1
【金属製品】		
	銭貨	13
	銭貨塊(枚数不明)	3
	釘	15
	天蓋	1
		合計 1,761

第3面		
溝状遺構2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	12
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
常滑	甕	3
		合計 17

溝状遺構3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

土坑16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
		合計 6

土坑18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 5

ピット25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
渥美	皿	1
常滑	甕	2
		合計 10

第4面		
溝状遺構5		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 2

溝状遺構6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	1
		合計 3

溝状遺構7		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【陶器】		
瀬戸	皿	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	2
山茶碗窯	碗	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
		合計 13

溝状遺構8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ピット26		
産地	器種	破片数
【青白磁】		
	梅瓶	1
		合計 1

ピット38		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
		合計 3

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	220
	かわらけ 手づくね成形	2
【白磁】		
	合子(蓋)	1
	水注	1
	碗	1
	皿	2
	皿Ⅸ類	4
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	23
	碗Ⅱ類	7
	輪花碗	1
	折縁皿	5
	器種不明	5
【青白磁】		
	梅瓶	9

【陶器】		
中国	褐釉壺	2
	壺	7
	入子	1
	卸皿	1
渥美	甕	1
常滑	甕	87
	片口鉢Ⅰ類	4
	片口鉢Ⅱ類	3
	玉縁壺	1
山茶碗窯	碗	1
産地不明	壺	1
【土器】		
	火鉢	5

【瓦質土器】		
火鉢		4
【瓦】		
平瓦		1
【石製品】		
硯		1
滑石製スタンプ		1
【金属製品】		
銭貨		3
釘		9
六器		1
合計		415

第4面 排水溝		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	14
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
	器種不明	1
【青白磁】		
	皿	3
合計		19

第5面		
礎石建物1溝		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	14
合計		14

礎石建物1ピット9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
合計		2

礎石建物1ピット12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

ピット45		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
合計		1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	24
かわらけ	手づくね成形	1
【白磁】		
	壺	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	6
	坏Ⅲ類	1
	鉢	3
	器種不明	1
【青白磁】		
	梅瓶	3
	香炉	1
	水注	1
【陶器】		
常滑	甕	9
	片口鉢Ⅰ類	9
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		64

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
常滑	甕	1
山茶碗窯	碗	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		12

第6面		
ピット55		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
合計		3

第6面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	54
かわらけ	手づくね成形	12
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
	器種不明	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	2
	片口鉢Ⅰ類	1
	摩耗陶片	1

【瓦質土器】		
	碗	1
【土師器】		
	坏	1
	器種不明	2
合計		78

第6面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	13
かわらけ	手づくね成形	5
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1

【青白磁】		
	合子	1
【陶器】		
渥美	鉢	1
常滑	甕	1
【土師器】		
	坏	1

【瓦】		
	軒平瓦	1
【骨製品】		
	賽子	1
【石製品】		
	勾玉	1
【金属製品】		
	器種不明(銅製品)	1
合計		27

第7面		
ピット81		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

ピット86		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	1
合計		2

ピット88		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	1
合計		2

ピット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

第8面		
方型土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
	器種不明	1
合計		7

溝状遺構11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
合計		3

ピット118		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット125		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット127		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット150		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット160		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	坏	1
合計		1

第8面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	手づくね成形	1
かわらけ	ロクロ成形	8
かわらけ	手づくね成形	62
【青磁】		
同安窯系	碗	1
龍泉窯系	碗Ⅰ類	4
【陶器】		
渥美	鉢	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	1
山皿		1
産地不明	器種不明	1

【瓦】		
	平瓦	3
【石製品】		
	砥石	1
	滑石鍋	1
【金属製品】		
	釘	4
合計		90

第8面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	76
	かわらけ 手づくね成形	195
【白磁】		
	壺	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	5
	碗Ⅱ類	1
	器種不明	1
【青白磁】		
	皿	3
【陶器】		
常滑	甕	6
	片口鉢Ⅰ類	4
	器種不明	1
瀬戸	平碗	1
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	1
	滑石鍋	1
	器種不明	1
【土師器】		
	甕	1
【須恵器】		
	甕	3
【骨製品】		
	琴柱形製品	1
【金属製品】		
	釘	3
	埴塼	1
	鉄滓	1
	合計	309

第9面		
土坑23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
	合計	1
土坑24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	5
	合計	5
ピット204		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	4
	合計	4
ピット209		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
	合計	2
ピット211		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
	合計	1
第9面 遺構外		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	碗	1
	合計	1

第10面		
第10面 遺構外		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	器種不明	2
【木製品】		
	漆器(器種不明)	3
	合計	5
第10面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
	かわらけ 手づくね成形	6
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	3
	水注	1
【骨製品】		
	器種不明	1
	合計	15
第11面		
第11面 遺構外		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	坏	1
	甕	1
	器種不明	2
	合計	4



1. 調査地点近景(南から)



2. 調査区南東壁土層断面(北西から)

図版 2



1. 第1面全景(北西から)



2. 第2面全景(北西から)



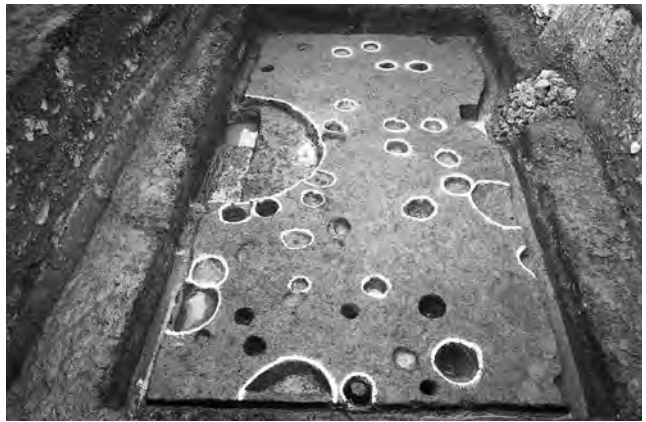
3. 第8面全景(南東から)



4. 第9面全景(南東から)



5. 第10面全景(南東から)



6. 第11面全景(南東から)



7. 第11面 ピット258(北東から)



8. 第11面 ピット275(北から)

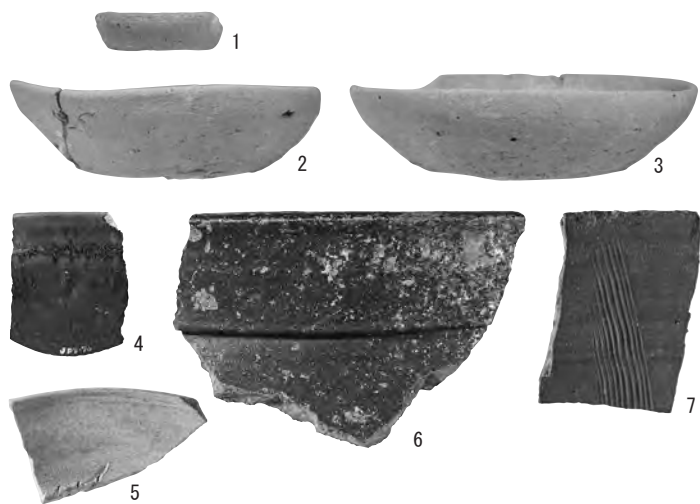


1. 第3面全景(南東から)



2. 第5面全景(南東から)

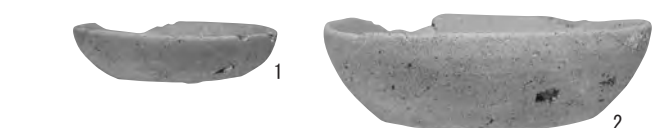
図版 4



1. 第1面 井戸1出土遺物



3. 第1面 遺構外出土遺物



2. 表土出土遺物



4. 第2面 土坑3出土遺物



2

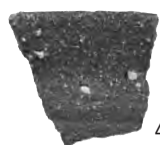


3



1

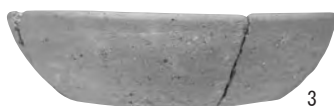
2



4



5



3

5. 第2面 土坑5出土遺物



1

6. 第2面 土坑9出土遺物



1

7. 第2面 土坑13出土遺物

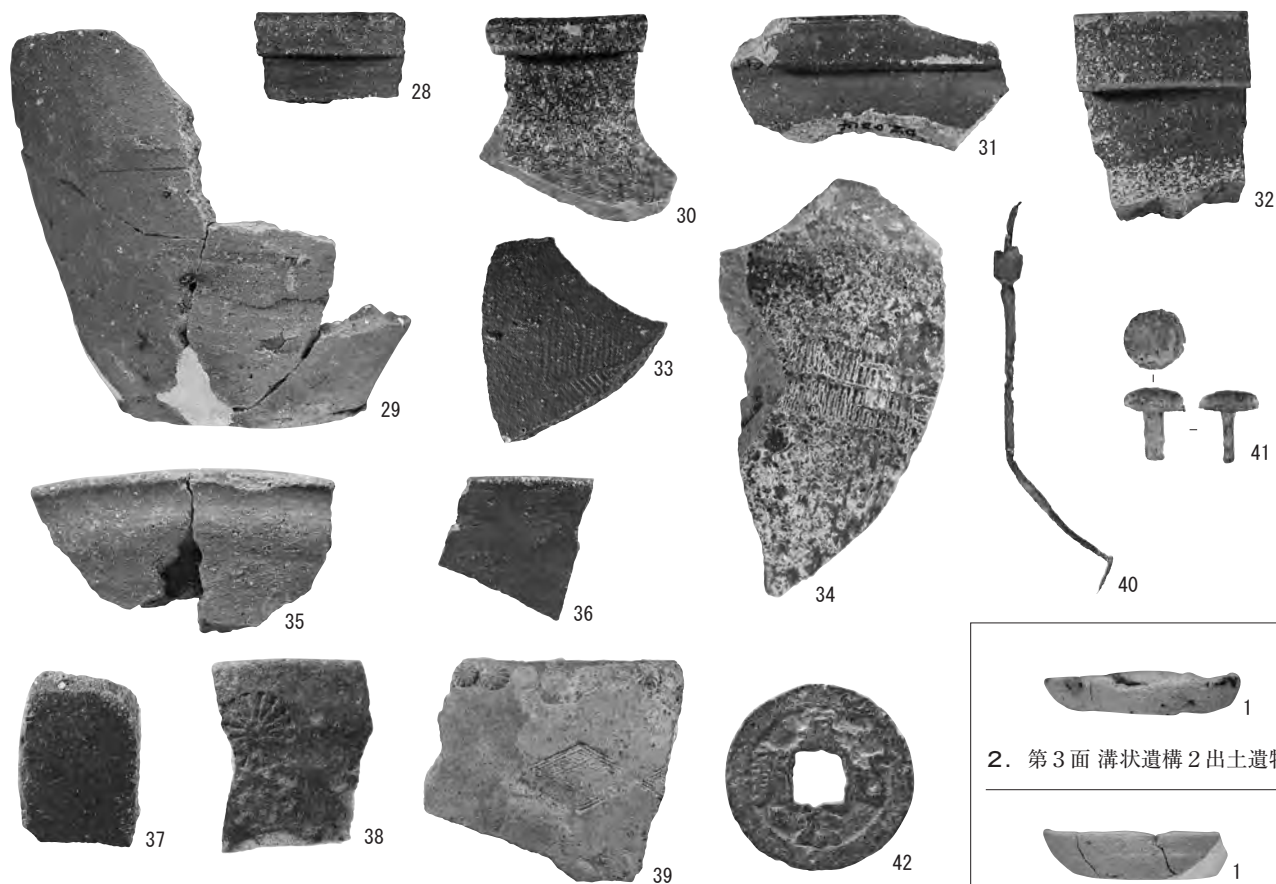


4(P22)

8. 第2面 ビット出土遺物



9. 第2面 遺構外出土遺物(1)



1. 第2面 遺構外出土遺物(2)

2. 第3面 溝状遺構2出土遺物

3. 第3面 土坑18出土遺物



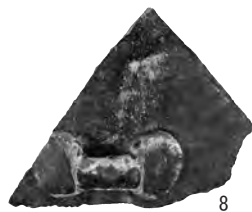
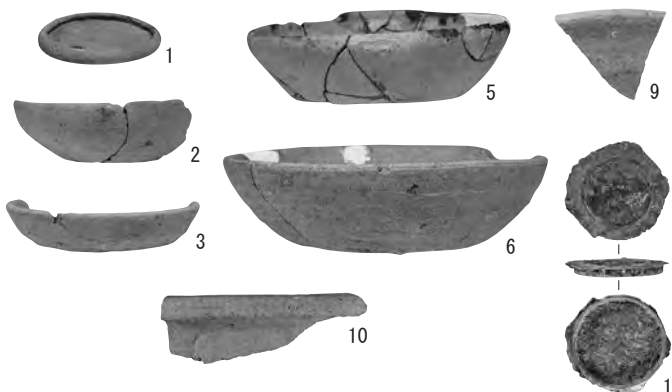
4. 第4面 溝状遺構5出土遺物



5. 第4面 溝状遺構6出土遺物



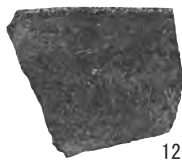
6. 第4面 溝状遺構7出土遺物



8



11



12



13



15

7. 第4面 遺構外出土遺物

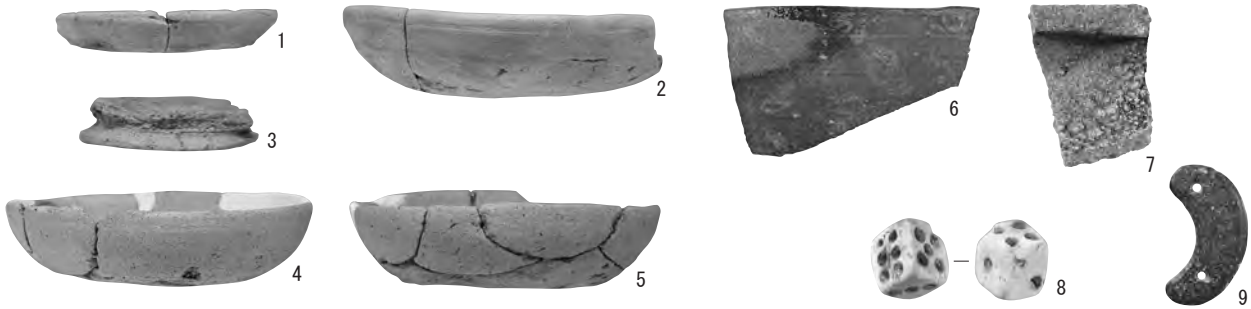
图版 6



1. 第5面 遺構外出土遺物



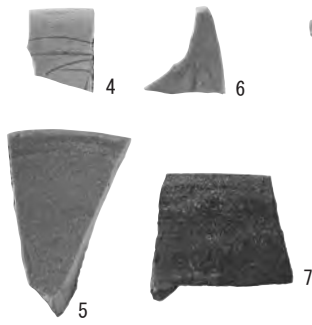
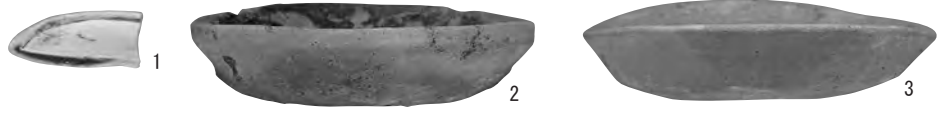
2. 第6面 遺構外出土遺物



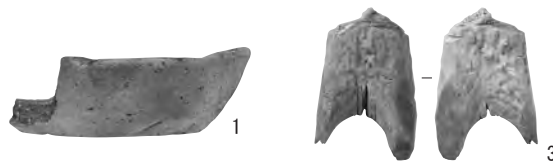
3. 第6面 構成土出土遺物



4. 第8面 方形土坑1 出土遺物



5. 第8面 遺構外出土遺物



6. 第8面 構成土出土遺物

名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町六丁目1708番23外地点

例 言

1. 本報は「名越ヶ谷遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.231）内、大町六丁目1708番23外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年5月14日～同年6月30日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約21㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子

調査員 赤堀祐子・平山千絵

作業員 金丸義一・赤坂 進・永井隆三郎・根市真古人・倉澤六郎

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系AREA9）を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「NG1002」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲

遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲

11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』

12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美（玉川文化財研究所）

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	247
第1節 調査に至る経緯と経過	247
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	247
第3節 周辺の考古学的調査	248
第二章 堆積土層	252
第三章 発見された遺構と遺物	253
第1節 第1面の遺構と遺物	253
第2節 第2面の遺構と遺物	253
第3節 第3面の遺構と遺物	255
第4節 第4面の遺構と遺物	258
第5節 第5面の遺構と遺物	260
第四章 まとめ	262

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	249	図13 第3面 かわらけ溜まり1出土遺物	257
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	250	図14 第3面 ピット出土遺物	258
図3 調査区位置図	251	図15 第3面 構成土出土遺物	258
図4 調査区配置図	251	図16 第4面 遺構分布図	258
図5 I・II区東壁 土層断面図	252	図17 第4面 土坑1	259
図6 第1面 遺構分布図	253	図18 第4面 土坑1出土遺物	259
図7 第2面 遺構分布図	254	図19 第4面 ピット19・20・22・27	259
図8 第2面 礎石建物1	254	図20 第4面 構成土出土遺物	260
図9 第2面 構成土出土遺物	254	図21 第5面 遺構分布図	261
図10 第3面 遺構分布図	255	図22 第5面 土坑2・3	261
図11 第3面 溝状遺構1	255	図23 第5面 土坑3出土遺物	261
図12 第3面 かわらけ溜まり1	256	図24 第5面 ピット31・33	262

表 目 次

表 1	名越ヶ谷遺跡 調査地点一覧……………	248	表 5	第 5 面 出土遺物観察表 ……………	266
表 2	第 2 面 出土遺物観察表 ……………	264	表 6	遺構計測表 ……………	266
表 3	第 3 面 出土遺物観察表 ……………	264	表 7	出土遺物一覧表 ……………	266
表 4	第 4 面 出土遺物観察表 ……………	265			

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地点近景(北東から)……………	269	6. II区第4面全景(北から)……………	271	
	2. I区東壁土層断面(西から)……………	269	7. I区第5面全景(南から)……………	271	
図版 2	1. II区東壁土層断面(西から)……………	270	8. II区第5面全景(南から)……………	271	
	2. II区第3面全景、かわらけ溜まり1 (北から)……………	270	図版 4	1. 第2面 構成土出土遺物……………	272
図版 3	1. II区第1面全景(南から)……………	271		2. 第3面 かわらけ溜まり1 出土遺物 ……………	272
	2. I区第2面 礎石建物1 礎石1・4 (南から)……………	271		3. 第3面 ピット出土遺物……………	272
	3. II区第2面 礎石建物1 礎石2 (南から)……………	271		4. 第3面 構成土出土遺物……………	272
	4. I区第3面全景(南から)……………	271		5. 第4面 土坑1 出土遺物……………	272
	5. I区第4面全景(南から)……………	271		6. 第4面 構成土出土遺物……………	272
				7. 第5面 土坑3 出土遺物……………	272

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市大町六丁目1708番23外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である名越ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No231）の範囲内にあたる。事業者から杭基礎工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成21年11月24日～同11月26日に4㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約40㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森 孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年5月14日～同年6月30日までの約1.5ヵ月間で、調査面積は約21㎡である。現地表面の標高は約14.2mを測る。掘削に伴う排土を場内処理する都合から調査区南北に分け、北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称した。調査は重機により表土及び遺構確認面までの堆積土を50cm前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～5面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月1日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（ $X = -76294.589$ 、 $Y = -24304.949$ ）、（ $X = -76323.414$ 、 $Y = -24308.808$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No53229（標高11.168m）を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

名越ヶ谷遺跡（No231）は、鎌倉市街地の南東域に位置し、市街地から名越切通しに向かう県道鎌倉・葉山線の東側一帯、山陵部を除いた「名越ヶ谷」のほぼ全域が包蔵地範囲となっている。

名越ヶ谷は、市内でも広大な谷戸のひとつで、東方に延びるその奥行きは1km以上、開口部付近では幅300m以上を有し、県道鎌倉・葉山線の東側一帯は広い平地をなす。谷戸の両岸は複雑な地形から、松葉ヶ谷や花ヶ谷、山王ヶ谷、六坊ヶ谷、黄金ヶ谷などの支谷や小支谷が形成され、また谷戸中央には谷戸奥を水源とする逆川が流下している。本調査地点は、名越ヶ谷の最奥部にあたる黄金ヶ谷の開口部付近に立地し、逆川の左岸にほど近い、鎌倉市大町六丁目1708番23外に所在する。調査地点はおおむね平坦で、現地表面の標高は約12.4mである。

調査地点の遺跡である「名越ヶ谷」の地名については、『新編相模国風土記稿』鎌倉郡の項に「東方名越町より東南北三方に亘りて総名とす」とあり、「松葉ヶ谷」、「花ヶ谷」、「山王ヶ谷」、「六坊ヶ谷」、「黄金ヶ谷」などの支谷を含む谷戸群を総じて「名越ヶ谷」と称したようである。また、名越ヶ谷には、衣張山麓に水源をもつ逆川が谷戸筋のほぼ中央に沿って北東から南西に向かって流下し、鎌倉・葉山線に架かる三枚橋の先で西へ流れを変え、材木座一丁目付近で滑川に合流している。谷戸の開口部付近の標高は7m前後で、本調査地点が位置する谷戸の中ほどで12～13m、最奥部の黄金ヶ谷付近では30mを超

え、谷戸幅も狭くなっている。名越ヶ谷の両岸に発達した谷戸や小支谷は雛段状に連なり、現在ではその多くが住宅地に変貌している。遺跡地一帯の現住所表記は、鎌倉市大町三丁目・四丁目・六丁目・七丁目に属する。

図2の名越ヶ谷遺跡周辺の遺跡を俯瞰すると、本調査地点北側の支谷には大町釈迦堂口遺跡 (No.235) があり、かつては北条時政邸跡といわれた場所である。南西側の花ヶ谷の谷戸には慈恩寺跡 (No.230) が所在している。図中外となるが、谷戸開口部の南東端には安国論寺遺跡 (No.323)、また包蔵地南西の境界となる県道鎌倉・葉山線の南西側には米町遺跡 (No.245) が広がっている。

現在、谷戸の開口部南東側付近には、鎌倉時代からの法灯を今に伝える安国論寺や妙法寺が、谷戸の開口部北側奥の支谷には大寶寺が、また横須賀線の線路を越えた、すぐ南側には長勝寺が所在しており、これらは日蓮宗寺院である。その他にも名越ヶ谷内には、慈恩寺、木東寺、田代観音堂、山王堂などの寺院があったと伝えられている (貫・川副 1980、白井編 1976)。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。名越ヶ谷遺跡内での調査事例は本地点を含めて28ヵ所ほどが知られているが、多くが谷戸の開口部付近に集中しており、谷奥側では調査密度が薄くなる傾向にあり、本地点の近隣を中心にみていくこととする。まず本地点の西側隣接地①大町六丁目1708番4地点では、4面の中世遺構面から土坑、ピットが検出され、遺物の様相から13世紀中葉～14世紀初頭の年代幅で変遷したものと考えられている (汐見・小泉 2004)。②大町四丁目1736番2外地点は、三善善信邸跡に比定されており、5面の中世遺構面が確認された (遠藤・宗臺 1998)。このうち第3・4面では丘陵側に土塁が2条検出されて、その内側から堀や掘立柱建物が発見された。それとともに出土陶磁器類に優品があることや、銅製水滴なども出土していることから、武家屋敷あるいは寺院であった可能性が想定されている。③大町六丁目1506番11の一部地点では、逆川対岸の標高16.5mと本地点より高位置に立地しており、1面の中世遺構面が確認され、13世紀後半頃の小規模な溝とピット数基が検出された (押木 2017)。また中世の整地層の下からは古墳時代後期～奈良時代の遺物、さらに下層からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が若干のまとまりをもって出土している。名越ヶ谷の最奥部に位置する④大町釈迦堂口遺跡では、13世紀後半頃に大規模な造成によって平場が造られ、平場から寺院などの宗教施設と考えられる掘立柱建物や火葬跡が発見された (永田 2009)。また、平場を取り巻く周囲の崖には「日月やぐら」、「地藏やぐら」などの、やぐら群が重層的に穿たれ、荘厳な葬送空間であったことが把握されている。

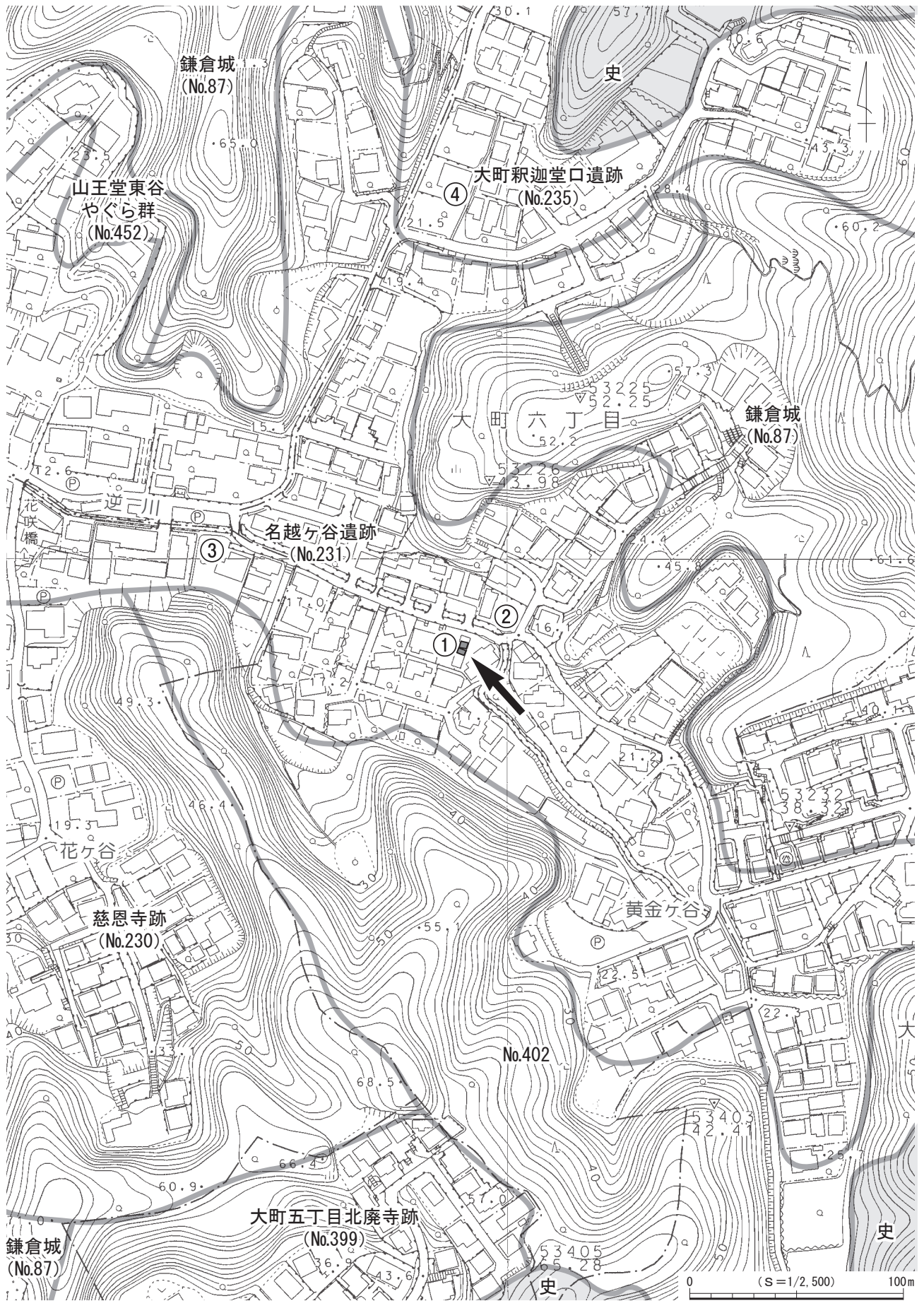
表1 名越ヶ谷遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1708番23外地点	
①	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1708番4地点	汐見・小泉 2004
②	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1736番2外地点	遠藤・宗臺 1998
③	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1506番11の一部地点	押木 2017
④	大町釈迦堂口遺跡 (No.235)		永田ほか 2009

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

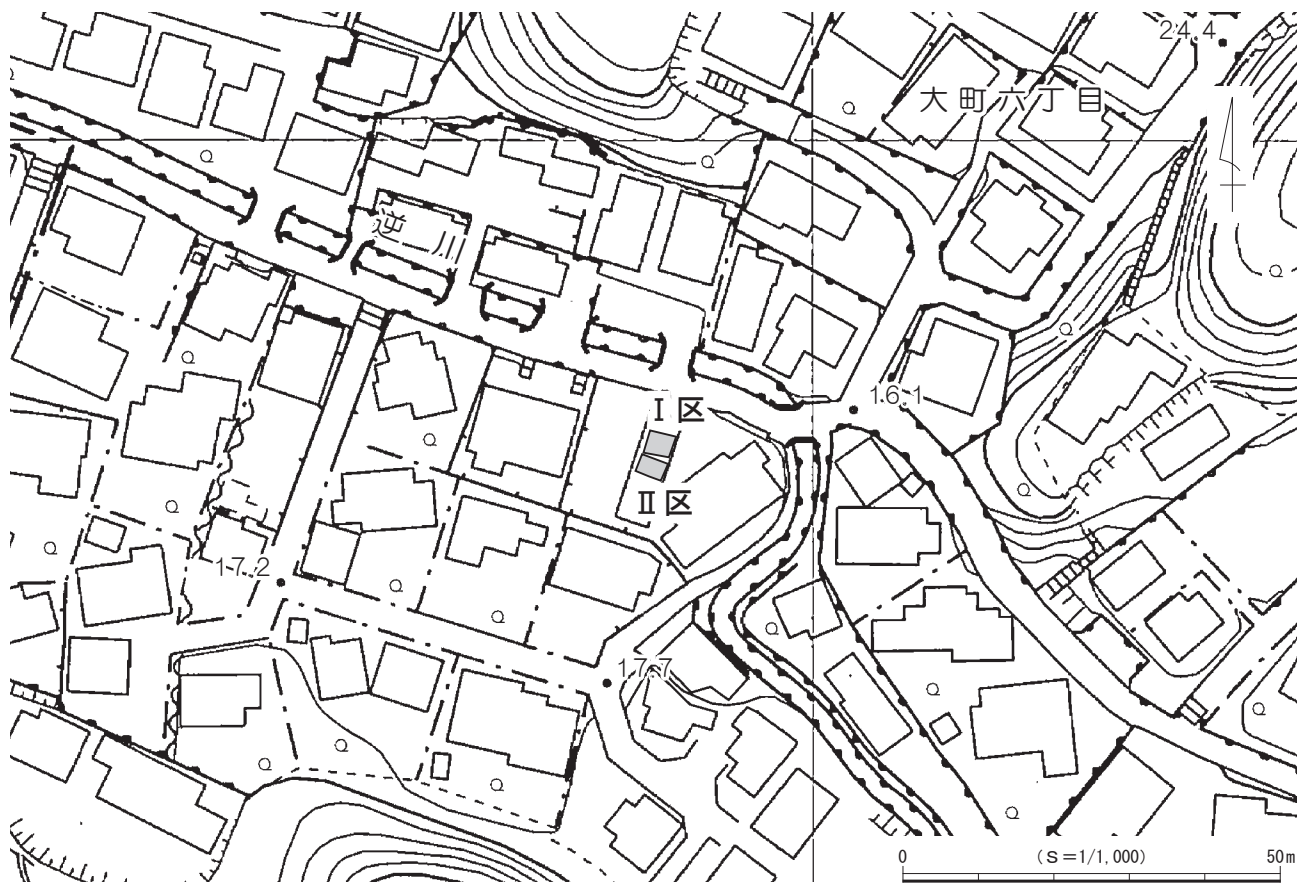


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～5面までの合計5面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約12.4mを測り、最上部には層厚25～60cmの表土(1層)と層厚10～20cmの茶色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は表土を取り除いた3層上面で検出した。確認面の標高は11.8～12.0mを測る。3層は大型の泥岩ブロックと粉碎された泥岩が突き固められた整地層で、層厚5～35cmである。3層の下位には層上面に茶色砂が散布された整地層(4層)が堆積するが、遺構は確認されなかった。第2面は5・6層上面で確認し、確認面の標高は11.5～11.7mを測る。5層は泥岩による整地層で、層厚12～25cmである。6層は泥岩ブロック、炭化物、かわらけ片を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚10～20cmである。第3面は7・8層上面で確認し、確認面の標高は約11.5mを測る。7層は多量の泥岩粒と褐鉄分を含み、締まり・粘性のある黒茶色粘質土で、層厚15cm前後である。8層は少量の泥岩粒と炭化物を含み、締まり・粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚10～30cmである。第4面は9層上面で確認し、確認面の標高は約11.3mを測る。9層は微量の泥岩粒と泥岩ブロック、少量の炭化物、多量の褐鉄分を含み、締まり・粘性の強い茶褐色粘質土で、層厚20～40cmである。遺構確認面の最下位にあたる第5面は10層上面で確認し、確認面の標高は11.0～11.3mを測る。10層は少量の泥岩粒を含み、締まり・粘性の強い黒色粘質土で、層厚16～33cmである。10層の下位は、黒灰色粘質土(11層)および青灰色粘質土(12層)の地山層となる。

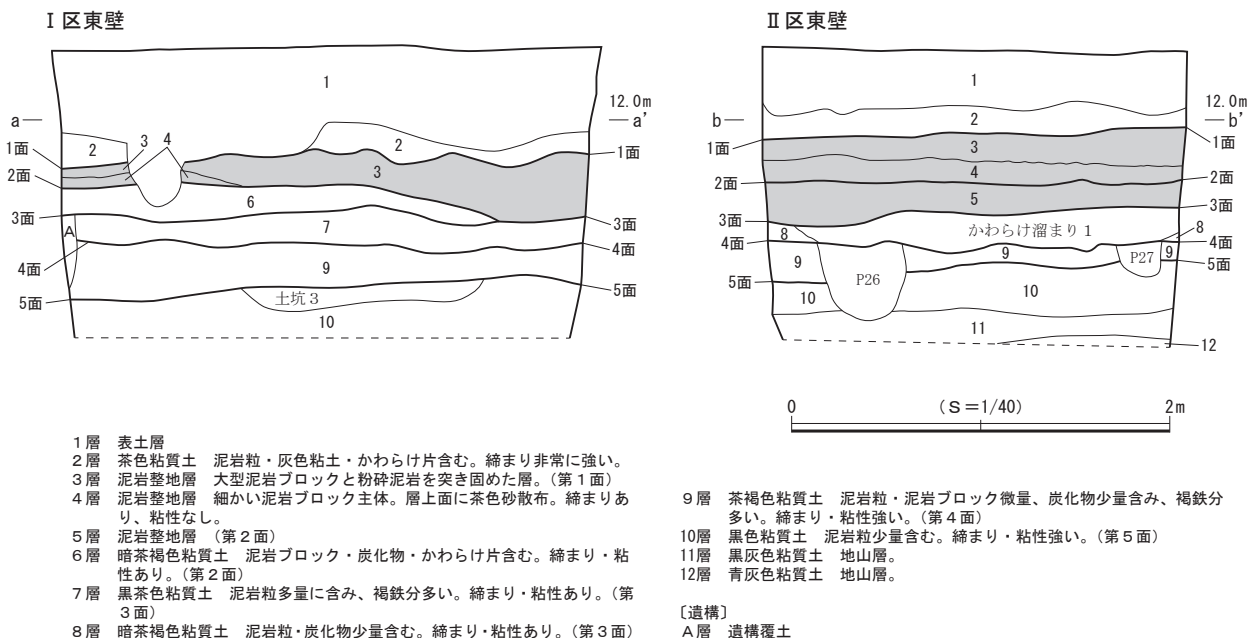


図5 I・II区東壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～5面までの合計5面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、礎石建物1棟、溝状遺構1条、かわらけ溜まり1カ所、土坑3基、ピット33基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して10箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～5面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は11.8～12.0mを測る。3層は大型の泥岩ブロックと粉碎された泥岩が突き固められた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構はピット13基で、Ⅱ区にのみ分布していた(図6)。

遺物は主にかわらけ、磁器などが少量出土しており、詳細は不明瞭であるが本面は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

(1) ピット

第1面では、13基を検出した。いずれもⅡ区に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、方形がやや多い。長軸は17～47cm、深さが5～23cmである。

各ピットから遺物は出土しなかった。

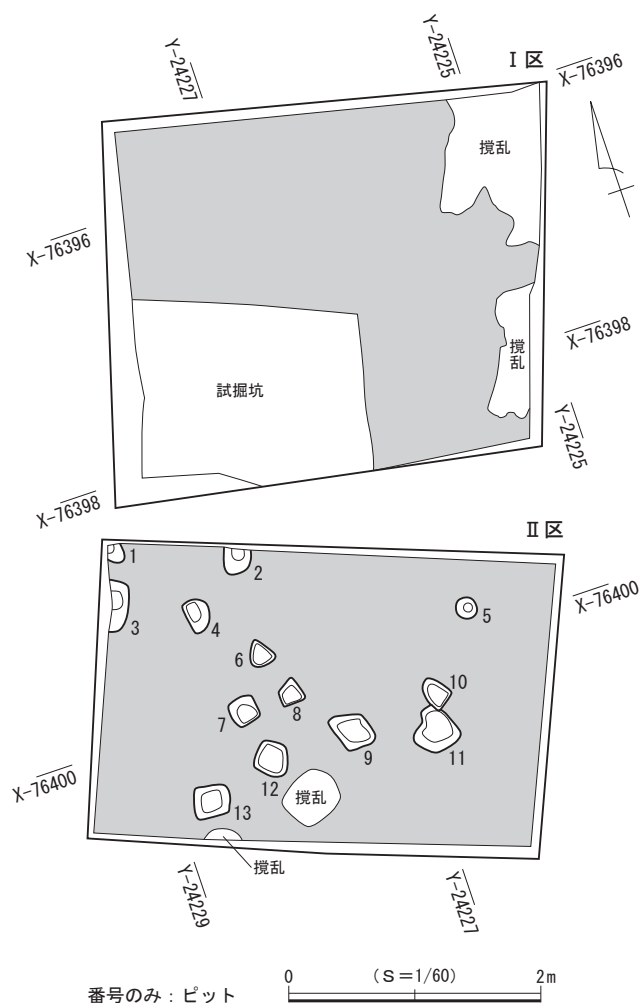


図6 第1面 遺構分布図

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は5・6層上面で検出され、確認面の標高は11.5～11.7mを測る。5層は泥岩による整地層、6層は泥岩ブロック、炭化物、かわらけ片を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット1基である(図7)。礎石建物はⅠ区南側からⅡ区にかけて位置し、ピットはⅠ区南側に位置している。

遺物は主にかわらけ、磁器などが出土しており、これらの年代観や下位遺構面の年代観から、本面は14世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物 1 (図8)

I区南西側からII区西側にかけて位置する。1～4の礎石のうち1～3について、建物とみられる配置を確認した。また、4は1に伴う礎石と考えられる。北・東側に礎石はみられないため、建物の中心は未調査区にあると考えられる。そのため、全容は明らかでない。検出した規模は、心々間で北東-南西(1-2)2.10m、北西-南東(2-3)90cmを測る。1・2を結ぶ柱筋を基準にすると、建物の方位はN-36°-Wを指す。各礎石は略方形に加工され、上下面はほぼ平らである。1には柱のあたりがみられる。礎石1～3の大きさは長さ42～48cm、幅36～43cm、高さ15cm前後を測る。4はやや小さく、長さ33cm、幅31cm、高さ17cmである。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

I区南西側から1基検出された。試掘調査時に検出されたピットで、方形あるいは長方形を呈すると推定される。検出された範囲での規模は、北西-南東40cm、北東-南西現存長31cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 第2面 構成土出土遺物 (図9)

第2面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけで、口径8.9cmの小形品である。

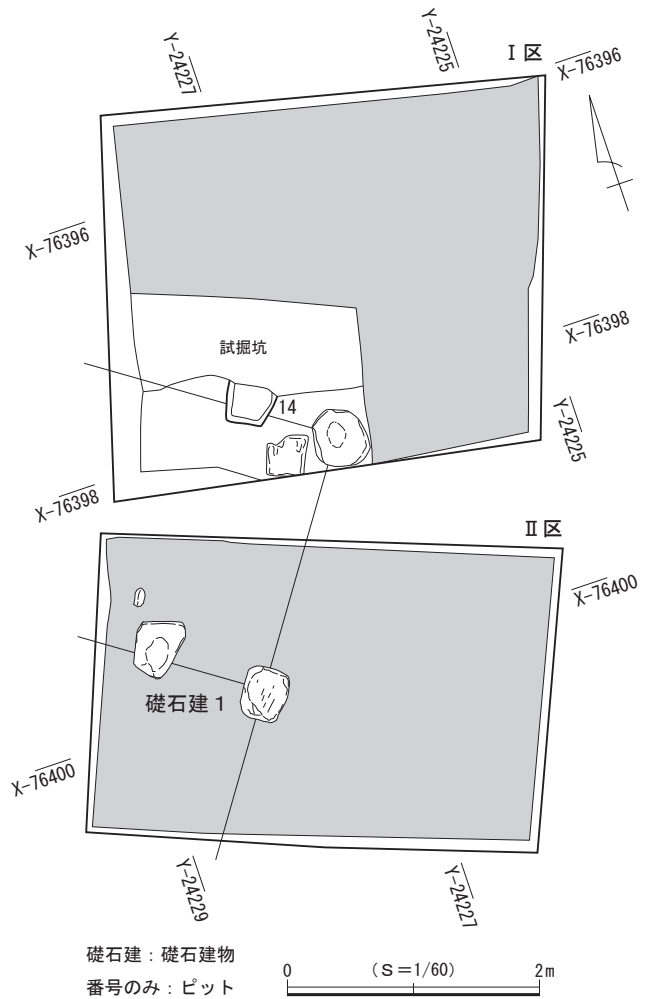


図7 第2面 遺構分布図

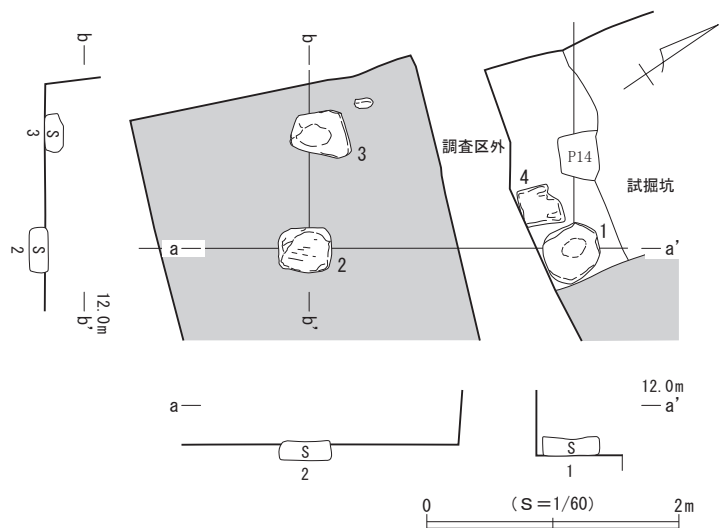


図8 第2面 礎石建物 1

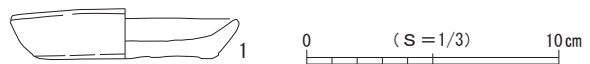


図9 第2面 構成土出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は7・8層上面で検出され、確認面の標高は約11.5mを測る。7層は多量の泥岩粒と褐鉄分を含み、締まり・粘性のある黒茶色粘質土、8層は少量の泥岩粒と炭化物を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、かわらけ溜まり1カ所、ピット3基である(図10)。溝状遺構とピットはI区東側に分布し、かわらけ溜まりはII区に位置している。完形のかわらけが多く出土しており、特にII区中央から南側にかけて分布が集中する。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、土製品、金属製品、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図11)

I区北壁際東側から東壁際南側かけてL字状に検出され、北・東側のいずれも調査区外に延びている。ピット15～17と重複して壊されている。北壁から南北方向に延び、I区中央やや南東側で屈曲し、東に向きを変えて東壁南側に延びていく。試掘坑に切られ東に向きを変え始める位置からは、溝が浅くなり南壁側が判然としない。壁は開いて立ち上がり、断面形は東側で逆台形、西側で皿状を呈する。底面中央付近は一段低くなっている。検出した規模は、現存長約1.8m、幅65～100cm、深さ17cmで、底面の標高は11.38mを測る。主軸方位はN-25°-Eで、東側に向きを変えるとN-67°-Wを指す。

遺物はかわらけ16点、陶器1点が出土した。

(2) かわらけ溜まり

かわらけ溜まり1(図12)

II区全面に位置している。調査区外に及んでいるため、II区北東隅で遺構の端が確認されているが、東壁土層断面の南隅で

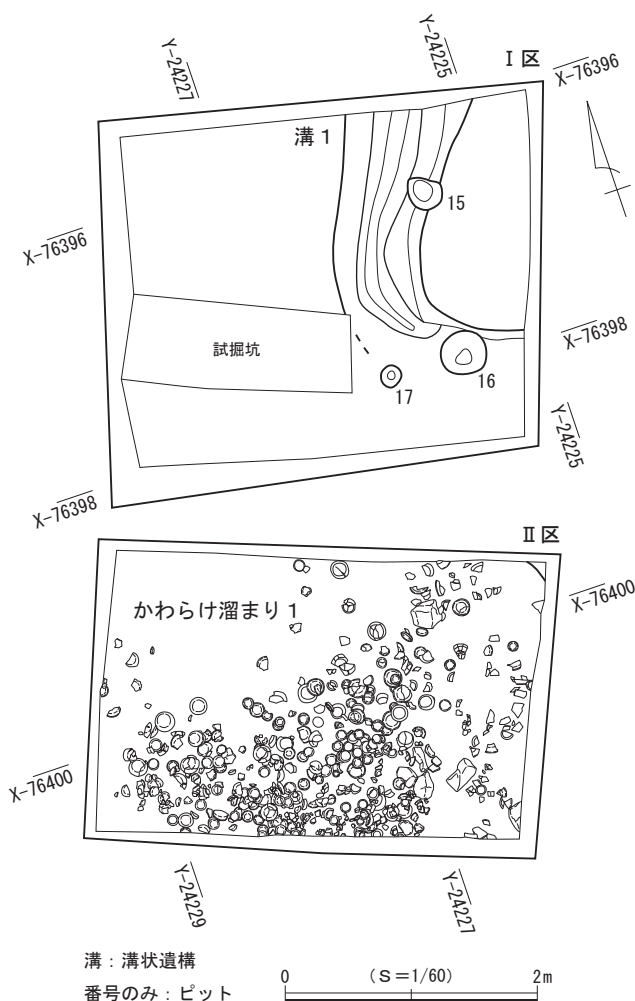


図10 第3面 遺構分布図

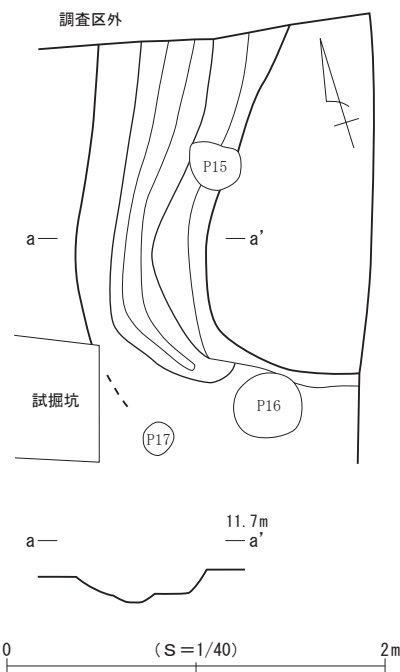


図11 第3面 溝状遺構1

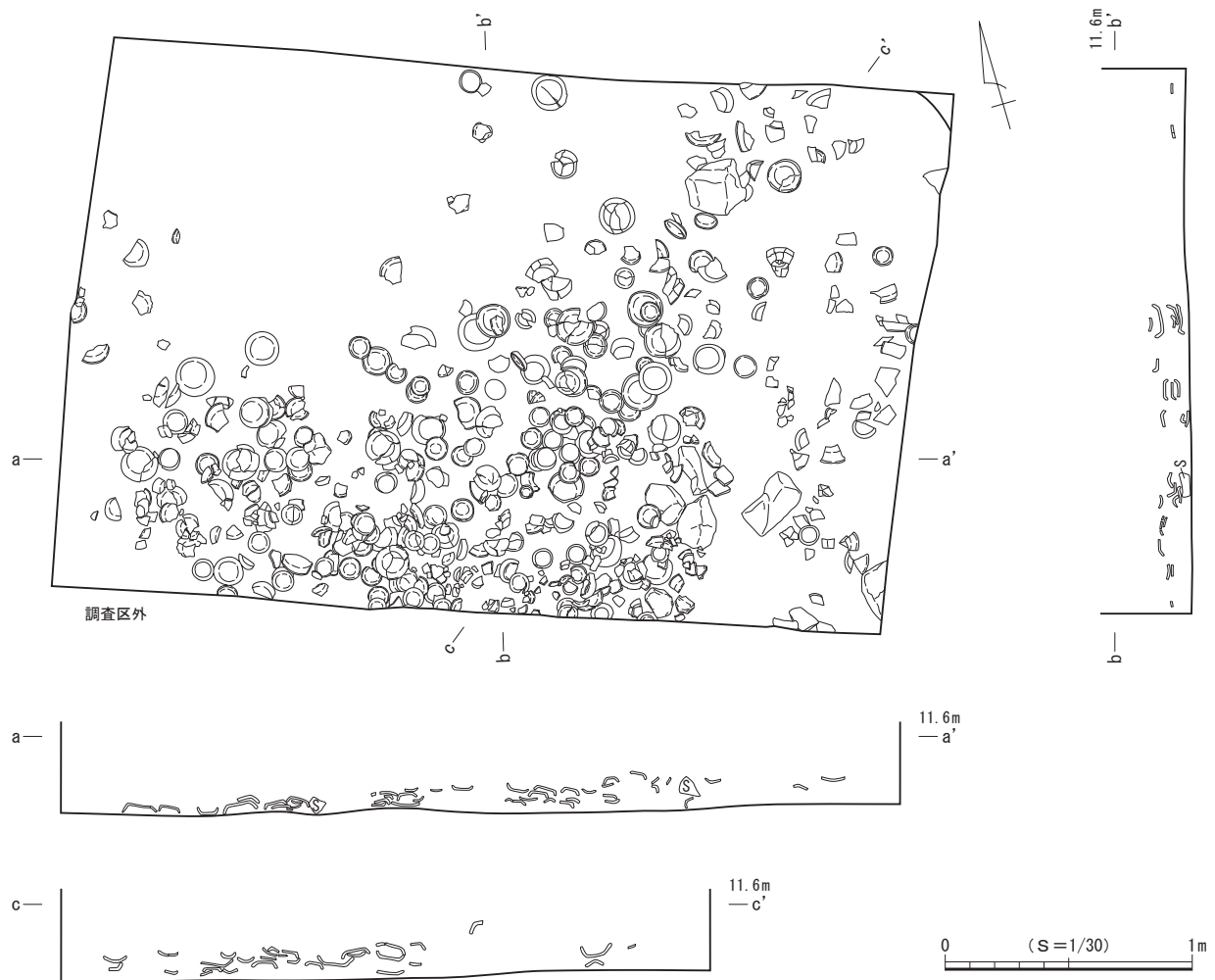


図12 第3面 かわらけ溜まり1

立ち上がりが認められること、I区に広がらないことが分かるのみで、全容は明らかでない。検出された範囲での規模は、東西約4.0m、南北現存長約2.0m、深さ21cmで、底面の標高は約11.3mを測る。完形に近いかわらけの分布範囲は中央から南側に集中している。出土状態は数個が入れ子状あるいは合わせ口状となるものが多く確認された。東側からは人頭大の泥岩ブロックも出土している。

出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ2,003点、磁器4点、陶器15点、土器1点、瓦質土器2点、石製品7点、土製品1点、金属製品4点が出土しており、このうち61点を図示した。

1～59はかわらけであり、このうち1のみ手づくね成形で他はロクロ成形で仕上げられる。1は口径4.7cmを測る極小品で内折れ形状を呈する。焼成は還元焰焼成ぎみで、胎土は黒灰色を呈する。2は耳皿、3～41は6.3～9.0cmを測る小形品、このうち3は内折れ形状を呈する。42～55は11.8～12.7cmを測る中形品、56～59は口径13.0cmを測る大形品である。16・34・44・45・47には油煤が付着し灯明具としての使用が認められ、16には煤が付着する。また、34は使用による劣化が特に著しく器面が剝離している。60は全長4.0cm、最大径0.9cmを測る細形の管状土錘である。61は基石とみられる玉随製で象牙色を呈する半透明質の小円礫であり、表裏面は微細な擦痕が入り楕円状に光沢が失われている。なお本址からは、図示資料のほかに基石とみられる黒色の小円礫が5点出土している。

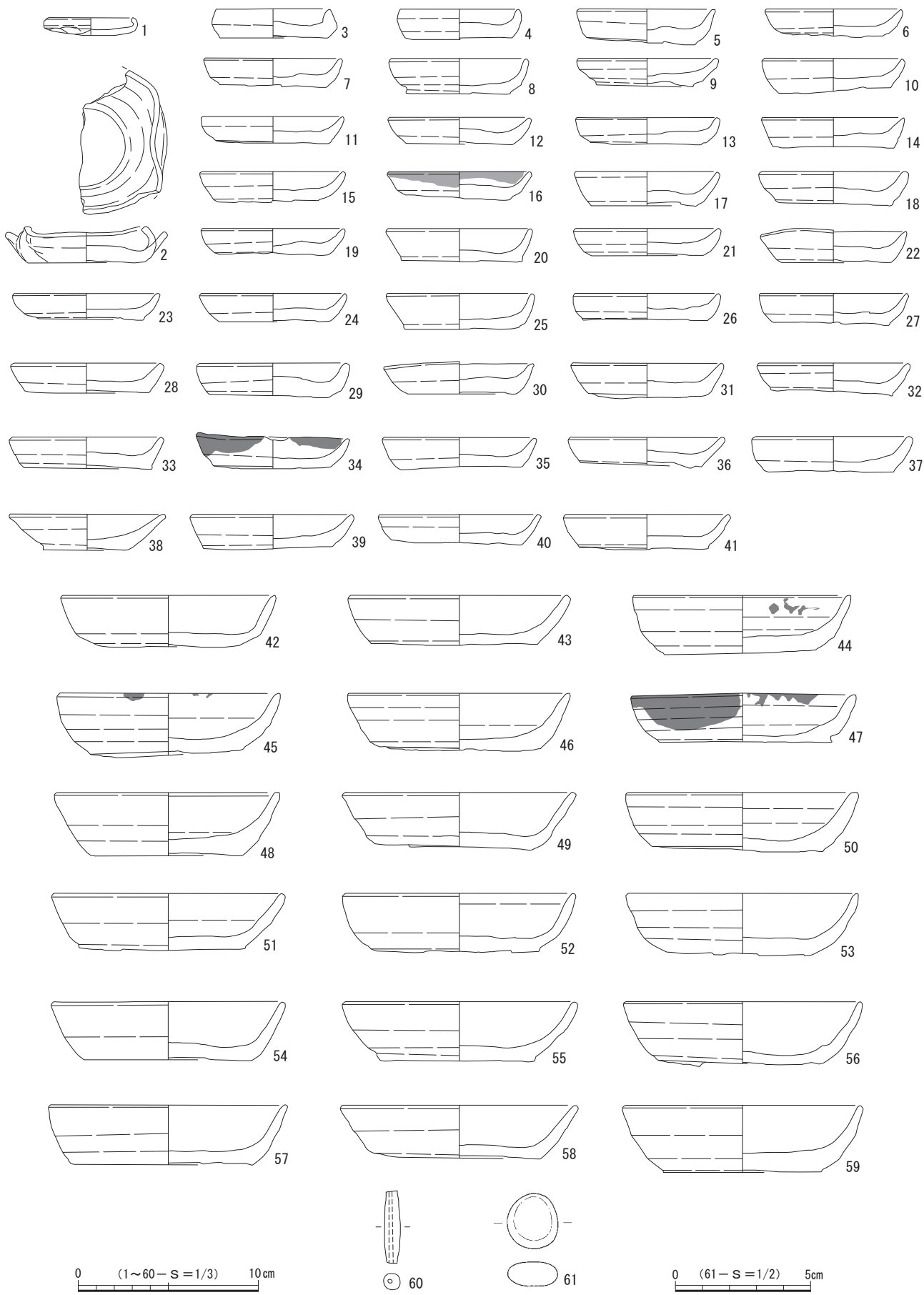


図13 第3面 かわらけ溜まり1 出土遺物

(3)ピット

第3面では、3基を検出した。I区東側に分布しており、溝状遺構1に伴う可能性も考えられる。平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径17~36cm、深さ8~31cmである。

出土遺物(図14)

遺物は3基のピット中、2基からかわらけが出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.4cmを測る小形品である。ピット15から出土した。

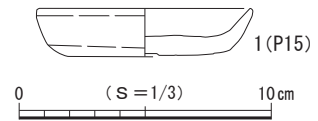


図14 第3面 ピット出土遺物

(4)第3面 構成土出土遺物(図15)

第3面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち7点を図示した。

1~7はロクロ成形のかわらけである。1~5は口径8.0~9.0cmの小形品、6は口径12.4cmの中形品、7は口径13.6cmの大形品である。6の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

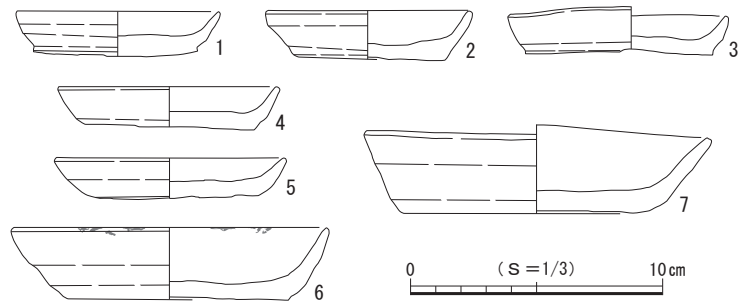


図15 第3面 構成土出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は9層上面で検出され、確認面の標高は約11.3mを測る。9層は微量の泥岩粒と泥岩ブロック、少量の炭化物、多量の褐鉄分を含み、締まり・粘性の強い茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット12基である(図16)。遺構密度は疎らで、土坑およびピットの多くはII区に分布している。I区北西隅付近には礎石と考えられる一辺約20cmの方形礫が出土している。

遺物は主にかわらけ、石製品、土師器、土製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

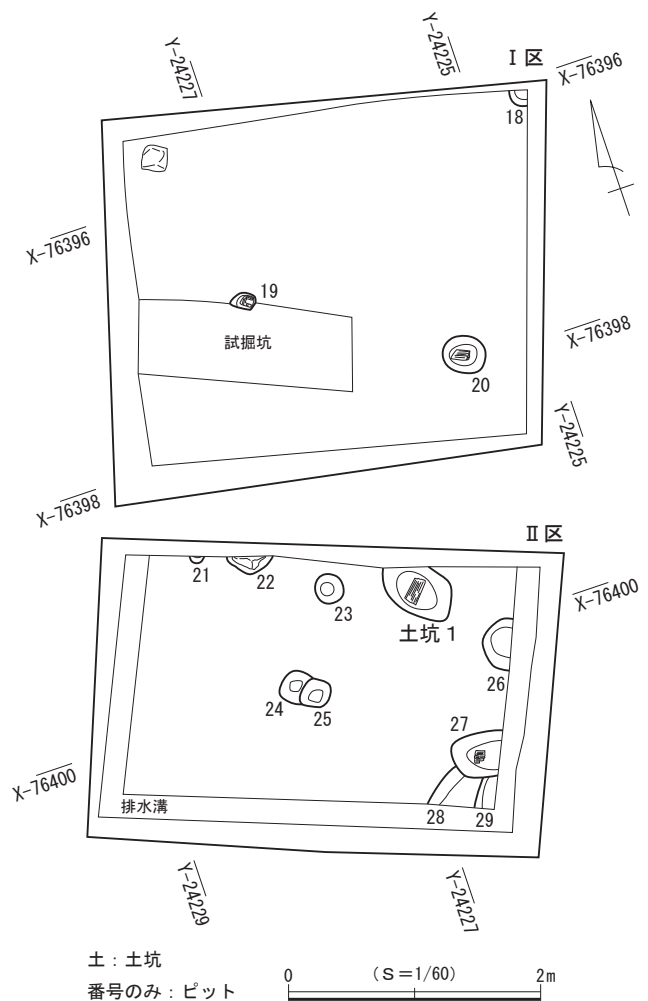


図16 第4面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑 1 (図17)

Ⅱ区北壁際中央付近に位置する。北側の一部が調査区外に及んでいる。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長64cm、短軸39cm、深さ31cmで、坑底面の標高は11.00mを測り、底面から2cm上に礎板が据えられていた。礎板の大きさは、長さ21cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は11.04mである。

出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ30点、金属製品1点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、このうち1は口径8.0cmの小形品、2は口径13.8cmに復元される大形品である。

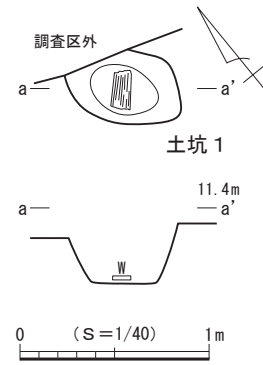


図17 第4面 土坑 1

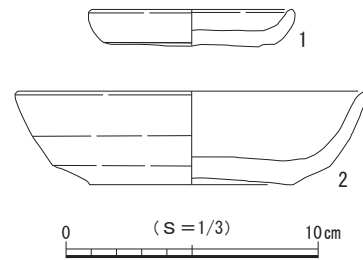


図18 第4面 土坑 1 出土遺物

(2) ピット

第4面では、12基を検出した。Ⅰ区に3基、Ⅱ区に9基あり、南側に多く分布している。礎石や礎板、柱を伴うピットが確認されたが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形、隅丸長方形があり、規模は長軸11~41cm、深さ3~43cmと径・深さともばらつきがある。

遺物は12基のピット中、2基から出土した。いずれもかわらけであり、ピット23から手づくね成形が2点、ピット25からロクロ成形が25点出土した。

以下、礎石や礎板が据えられたピット4基を図示し、説明する。

ピット19 (図19)

Ⅰ区中央東側に位置する。試掘坑によって南側1/4弱が失われている。平面形は略円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸19cm、短軸現存長13cm、深さ43cmを測り、底面の標高は10.99mを測る。ピット中央の底面には柱が密着して据えられていた。柱は東辺と中央がなく、コ字状を呈する角材で、1辺10cm四方あり、高さ12cmまで遺存していた。なお、柱の底面が第5面ピット31の底面に据えられている礎板と同一レベルにあり、両者は同一遺構あるいは建て替えによるものであった可能性が考えられる。

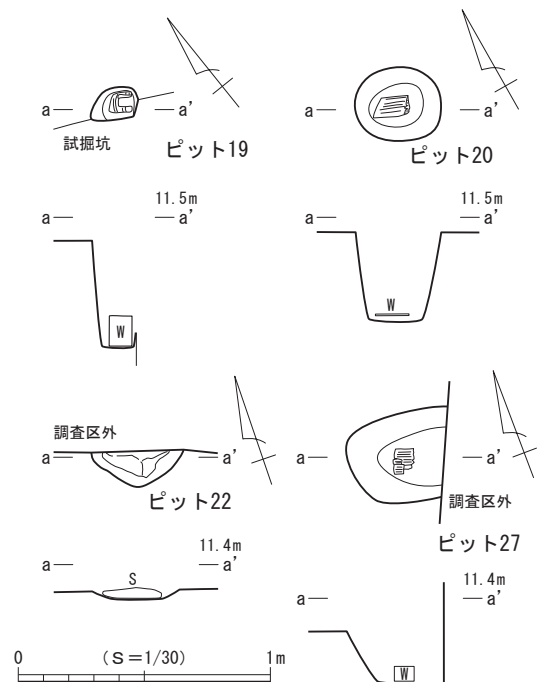


図19 第4面 ピット19・20・22・27

ピット20 (図19)

I区南東側に位置する。平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸34cm、短軸29cm、深さ29cmを測り、礎板がピット中央の底面から2cm上に据えられていた。礎板の大きさは長さ13cm、幅8cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は11.12mである。

ピット22 (図19)

II区北壁際の西側に位置する。北側の大半が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲での規模は、長軸現存長37cm、短軸現存長14cm、深さ5cmで、底面に礎石が据えられていた。礎石の大きさは長さ27cm、高さ4cmを測り、上面の標高は11.31mを測る。

ピット27 (図19)

II区東壁際の南側に位置する。東側を排水溝掘削により破壊されているため、全容は明らかでない。ピット28・29と重複して両者の北壁を壊している。平面形は隅丸長方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長40cm、短軸36cm、深さ21cmで、底面西側に礎板が据えられていた。礎板は小片が組み合わされて配置されており、最も大きいもので長さ8cm、幅6cm、厚さ6cmを測り、上面の標高は11.13mを測る。

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図20)

第4面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はかわらけの底部を利用したのであろうか、径3.0cmの円板状に研磨加工した土製品であり、表面の中心には径3.0mmを測る、非貫通の孔を穿つ。

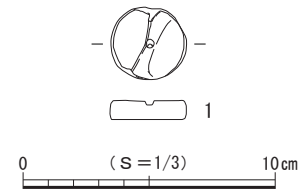


図20 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は10層上面で検出され、確認面の標高は11.0～11.3mを測る。10層は少量の泥岩粒を含み、締まり・粘性の強い黒色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑2基、ピット4基である(図21)。遺構はピット33がII区にあるほかはすべてI区の北側に分布している。

遺物はかわらけ、陶器などが少量出土している。詳細は不明瞭であるが、遺物や上位面の年代観から本面は13世紀中葉頃に属すると推定される。

(1) 土坑

土坑2 (図22)

I区北壁際の中央に位置する。北側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。平面形は楕円形を呈すると推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長61cm、短軸49cm、深さ5cmで、坑底面の標高は10.99mを測る。

遺物はかわらけが5点出土した。

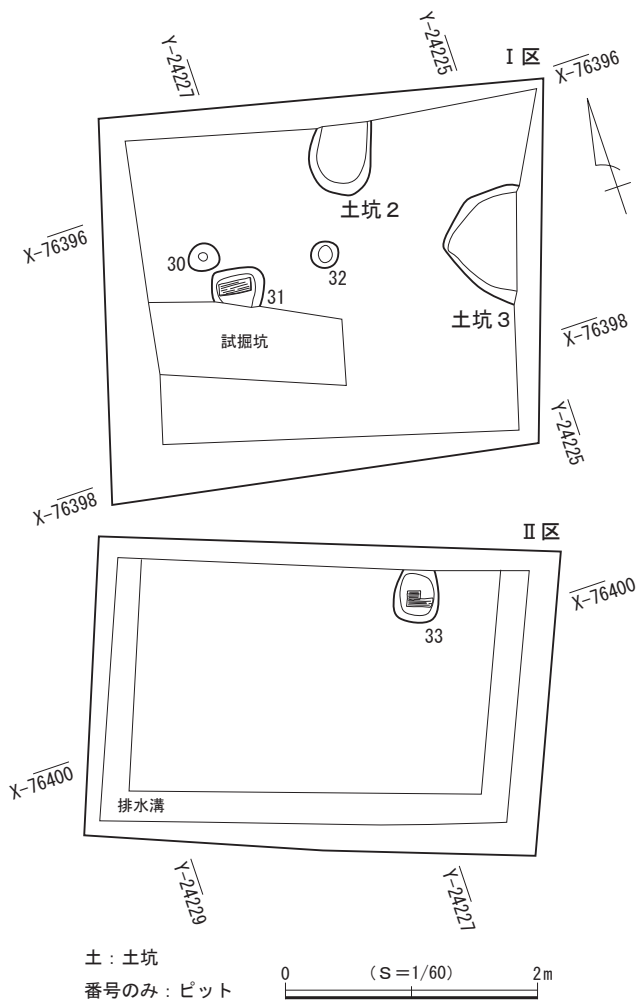


図21 第5面 遺構分布図

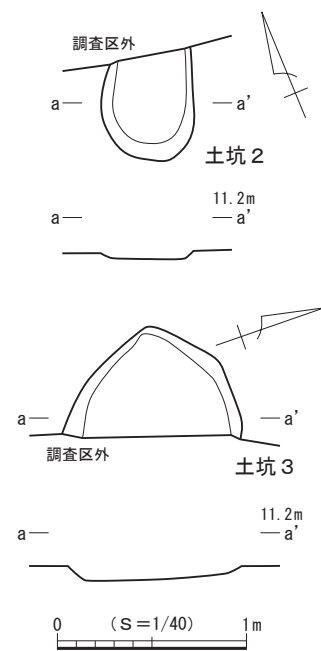


図22 第5面 土坑2・3

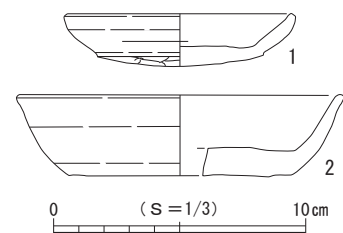


図23 第5面 土坑3出土遺物

土坑3 (図22)

I区東壁際の中央に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。平面形は方形を呈すると推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北95cm、東西現存長58cm、深さ9cmで、坑底面の標高は10.95mを測る。土坑内からはかわらけおよび泥岩ブロックが出土している。

出土遺物 (図23)

遺物はかわらけが52点出土し、このうち2点を図示した。

1・2はかわらけであり、このうち1は口径8.8cmに復元される手づくね成形の小形品、2は口径12.7cmに復元されるロクロ成形の中形品である。

(2) ピット

第5面では、4基を検出した。I区中央から西側にかけて3基、II区北壁際の東寄りに1基分布している。礎板を伴うピットが確認されたが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、隅丸方形、隅丸長方形のものがあ、規模は長軸21~42cm、深さ11~35cmである。ピット31からは第4面のピット19の底面に据えられた礎板と同一レベルで礎板が検出されていることから、両者は関連をもつ可能性も考えられる。

遺物は4基のピット中、ピット31からかわらけが1点出土した。

以下、礎板が据えられたピット2基を図示し、説明する。

ピット31 (図24)

I区中央西壁寄りに位置する。試掘坑により南側の一部が失われている。平面形は隅丸方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸42cm、短軸現存長32cm、深さ11cmを測り、礎板が底面から5cm上に据えられていた。礎板の大きさは、長さ25cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は10.99mである。

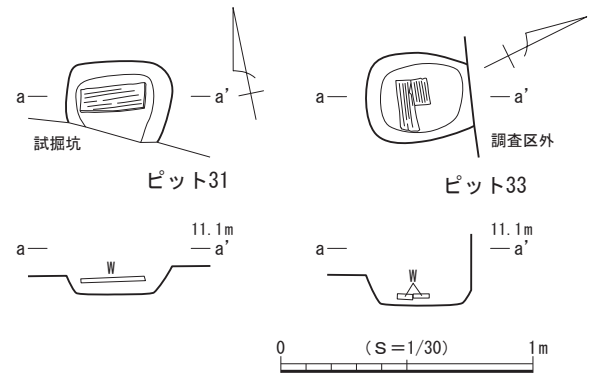


図24 第5面 ピット31・33

ピット33 (図24)

II区北壁際の東側に位置する。北側の一部が調査区外に及んでいる。平面形は隅丸長方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長42cm、短軸35cm、深さ16cmで、礎板が底面から3cm上に2枚並べて据えられていた。ピット中央の礎板は、長さ12cm、幅7cm、厚さ2cmを測る。やや南側に据えられている礎板は、長さ20cm、幅7cm、厚さ3cmを測る。いずれも上面の標高は10.91mである。

第四章 まとめ

今回報告する大町六丁目1708番23外地点は「名越ヶ谷遺跡(No.231)」の範囲内に所在する調査地点としては谷戸の最奥部にあたり、遺跡内においては調査事例の少ない地区である。また、谷戸の中央を流れる逆川は谷戸最奥部を水源とし、本調査地点のすぐ南側を西流している。今回の調査では第1～5面までの合計5面で遺構が検出され、調査面積は40㎡である。検出した遺構は礎石建物1棟、溝状遺構1条、かわらけ溜まり1ヵ所、土坑3基、ピット33基である。遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して10箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は標高11.8～12.0mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構はピット13基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は標高11.5～11.7mを測る堆積土層の5・6層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット1基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄であるが、礎石建物の存在は本調査地点を考える上で注目されよう。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は標高11.5mを測る堆積土層の7・8層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構1条、かわらけ溜まり1ヵ所、ピット3基である。溝状遺構とピットはI区東側に分布し、かわらけ溜まりはII区中央から南側にかけて分布が集中する。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は標高11.3mを測る堆積土層の9層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット12基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は標高11.0～11.3mを測る堆積土層の10層上面で検出された。検出した遺構は土坑2基、ピット4基である。遺構はピット33がII区にあるほかはすべてI区北側に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物が少量であり詳細が不明瞭であるが、上位遺構面の年代も考慮すると、本面の遺構群は13世紀中葉頃に属すると推定される。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 2018『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 遠藤雅一・宗臺富貴子 1998「名越ヶ谷遺跡(No.231)大町四丁目1736番2外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書14』平成9年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 押木弘己 2017「名越ヶ谷遺跡(No.231)大町六丁目1506番11の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・小泉衣里 2004「名越ヶ谷遺跡(No.231)大町六丁目1708番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』平成15年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 永田史子ほか 2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第2面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第2面 構成土出土遺物 (図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.9	6.7	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形

表3 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
かわらけ溜まり1 出土遺物 (図13)							
1	土器	手づくね かわらけ・極小	4.7	-	1.0	内折れ形 底面-指頭+ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黒灰色 焼成: 良好	3/4 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7~8.6)	(6.4)	2.0	耳皿 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	5.9	1.6	内折れ形 底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3~6.6	5.4~5.9	1.7	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.8~6.0	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2~7.5	5.0	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.9	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.5~5.8	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3~7.6	5.4	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.2	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.8	5.9~6.3	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.9	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.7	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.9	1.6	口縁部内外面に煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
18	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
19	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
20	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.4~6.7	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
21	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	6.1	1.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2 強
22	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7~8.0	6.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	完形
23	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	完形
24	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	完形
25	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7~8.0	6.3	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
26	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.9	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
27	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.1	6.1~6.4	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
28	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.5~6.9	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
29	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.6	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
30	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9~8.2	6.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
31	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.2	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
32	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.8	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
33	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	7.0	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
34	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	6.5	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 被熱し脆い	略完形

35	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0~8.4	6.5~6.7	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
36	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2~8.5	6.7	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
37	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	7.1	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
38	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
39	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	7.1	2.0	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
40	土器	ロクロ かわらけ・小	8.9	7.2	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.1	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
42	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.9	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
43	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	9.2	2.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	3/4
44	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.4	3.3	内面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
45	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.6	3.6	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
46	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	8.9	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
47	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	9.6	3.2	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
48	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	8.3	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
49	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.7	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
50	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.4	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
51	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.2	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3 強
52	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.0	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
53	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.1	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	9.3	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
55	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.5	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
56	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	9.2	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
57	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	9.8~10.1	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
58	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6~13.0	8.9~9.2	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
59	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.8	3.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
60	土製品	土錘	長 4.0	最大径 0.9	孔径 0.2~0.3	細形管状土錘 外面-手づくね 胎土: 微砂、やや密 色調: にぶい赤褐色 焼成: 良好	完形
61	石製品	基石	径 1.9~2.1	厚 0.9	重量 5.1 g	象牙色を呈する玉隨の円礫素材→使用により表裏面に微細な擦痕あり	完形

ピット15出土遺物(図14)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	6.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-----

第3面 構成土出土遺物(図15)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.5	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 外面-黄灰色、内面-黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0~8.3	6.0	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3~8.6	7.1~7.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6~8.8	6.7	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/4 強
5	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5~9.0	6.3	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	8.7	2.9	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3 強
7	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.5~9.5	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形

表4 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑1出土遺物(図18)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3 強
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-------

2	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	8.1	3.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3
---	----	---------------	--------	-----	-----	--	-----

第4面 構成土出土遺物(図20)

1	土製品	円板状製品	径 3.0	孔径 0.3	厚 0.8	側面-ナデ 胎土:微砂、雲母、角閃石、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針 色調:黄橙色 焼成:良好 備考:孔(未貫通)と側縁は焼成後の調整	略完形
---	-----	-------	----------	-----------	----------	--	-----

表5 第5面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑3出土遺物(図23)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	-	2.1	底面-指頭+ヘラナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.7)	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/3強

表6 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ビット1	第1面	<17>	<15>	6	礎石建物1	第2面	<210>	<90>	-	ビット23	第4面	23	22	25
ビット2	第1面	21	<20>	11	ビット14	第2面	40	31	-	ビット24	第4面	25	<17>	8
ビット3	第1面	41	<15>	13	溝状遺構1	第3面	<180>	65~100	17	ビット25	第4面	22	21	16
ビット4	第1面	26	19	23	かわらけ溜まり1	第3面	400	<200>	21	ビット26	第4面	41	<23>	20
ビット5	第1面	17	16	10	ビット15	第3面	31	25	20	ビット27	第4面	<40>	36	21
ビット6	第1面	21	17	5	ビット16	第3面	36	-	31	ビット28	第4面	<34>	<33>	7
ビット7	第1面	21	-	8	ビット17	第3面	17	16	8	ビット29	第4面	<27>	<15>	21
ビット8	第1面	20	18	10	土坑1	第4面	<64>	39	31	土坑2	第5面	<61>	49	5
ビット9	第1面	31	26	8	ビット18	第4面	<15>	<13>	7	土坑3	第5面	95	<58>	9
ビット10	第1面	24	18	9	ビット19	第4面	19	<13>	43	ビット30	第5面	31	25	28
ビット11	第1面	47	37	8	ビット20	第4面	34	29	29	ビット31	第5面	42	<32>	11
ビット12	第1面	27	26	14	ビット21	第4面	11	<6>	3	ビット32	第5面	21	-	35
ビット13	第1面	29	26	10	ビット22	第4面	<37>	<14>	5	ビット33	第5面	<42>	35	16

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。

表7 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	26
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	2
【金属製品】		
	器種不明	1
		合計 30

第1面

第1面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	2
		合計 2

第1面 構成土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	11
かわらけ	手づくね成形	9
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2
		合計 22

第2面

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	6
		合計 6

第2面 構成土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	75
かわらけ	手づくね成形	5
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
【土師器】		
	甕	1
		合計 83

第3面

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	ロクロ成形	15
【陶器】		
	産地器種不明	1
		合計 17

かわらけ溜まり1

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	手づくね成形	2
かわらけ	ロクロ成形	1,936
かわらけ	手づくね成形	65
【白磁】		
	碗Ⅸ類	1

【青磁】

龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【青白磁】		
	皿	1

【陶器】

常滑	甕	13
	壺	1
	器種不明	1

【土器】

	火鉢	1
--	----	---

【瓦質土器】

	碗	1
	皿	1

【石製品】

	砥石	1
	基石	6

【土製品】

	土錘	1
--	----	---

【金属製品】

	釘	3
	器種不明	1
		合計 2,037

ビット15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	6
		合計 6

ビット16

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	4
		合計 4

第3面 遺構外

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	77
かわらけ	手づくね成形	5

【青磁】

龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
------	-----	---

【陶器】

常滑	甕	1
		合計 84

第3面 構成土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	手づくね成形	1
かわらけ	ロクロ成形	181
かわらけ	手づくね成形	7
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1

【青磁】

龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
------	-----	---

【陶器】

常滑	甕	1
	壺	1

【木製品】

	端材	1
		合計 194

第4面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	30
【金属製品】		
	釘	1
		合計 31

ピット23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
		合計 2

ピット25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	25
		合計 25

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	28
【土師器】		
	坏	3
	甕	1
【石製品】		
	砥石	1
【金属製品】		
	釘	5
		合計 40

第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	31
	かわらけ 手づくね成形	185
【土師器】		
	甕	1
【土製品】		
	円板状製品	1
		合計 218

第5面		
土坑2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	5
		合計 5

土坑3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	14
	かわらけ 手づくね成形	38
		合計 52

ピット31		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
		合計 1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
	かわらけ 手づくね成形	7
【陶器】		
常滑	甕	1
【土製品】		
	円板状製品	1
		合計 27

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	7
		合計 7



1. 調査地点近景(北東から)



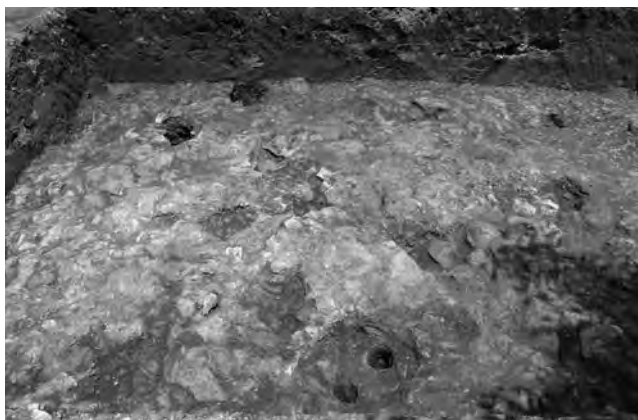
2. I区東壁土層断面(西から)



1. II区東壁土層断面(西から)



2. II区第3面全景、かわらけ溜まり1(北から)



1. II区第1面全景(南から)



2. I区第2面 礎石建物1 礎石1・4(南から)



3. II区第2面 礎石建物1 礎石2(南から)



4. I区第3面全景(南から)



5. I区第4面全景(南から)



6. II区第4面全景(北から)



7. I区第5面全景(南から)

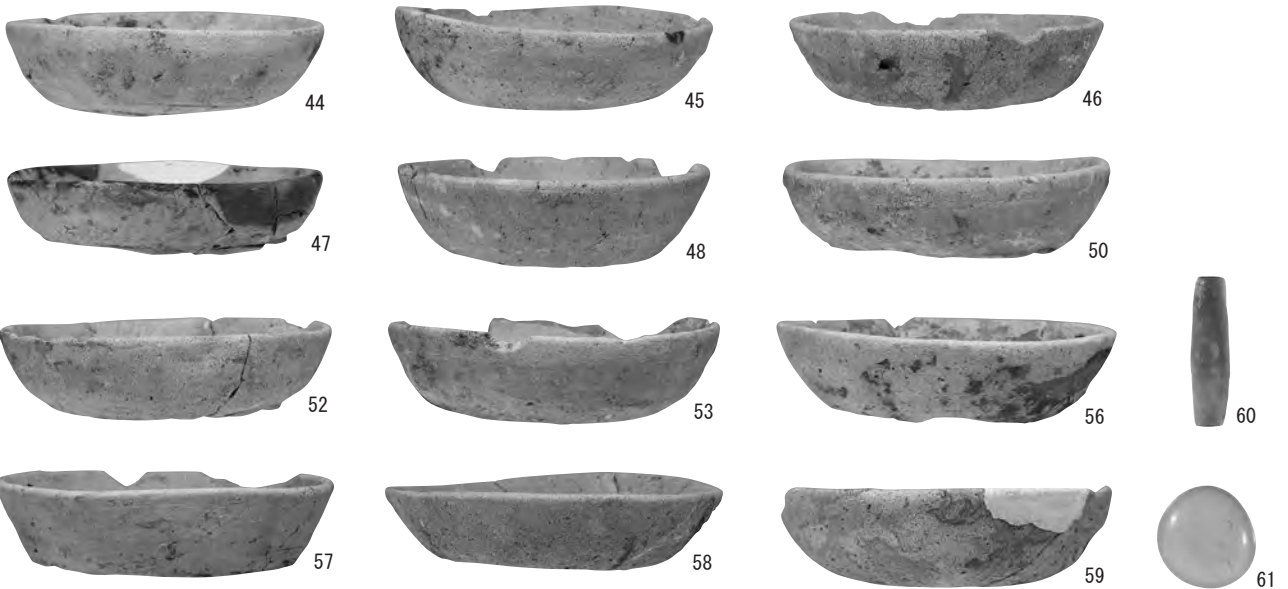
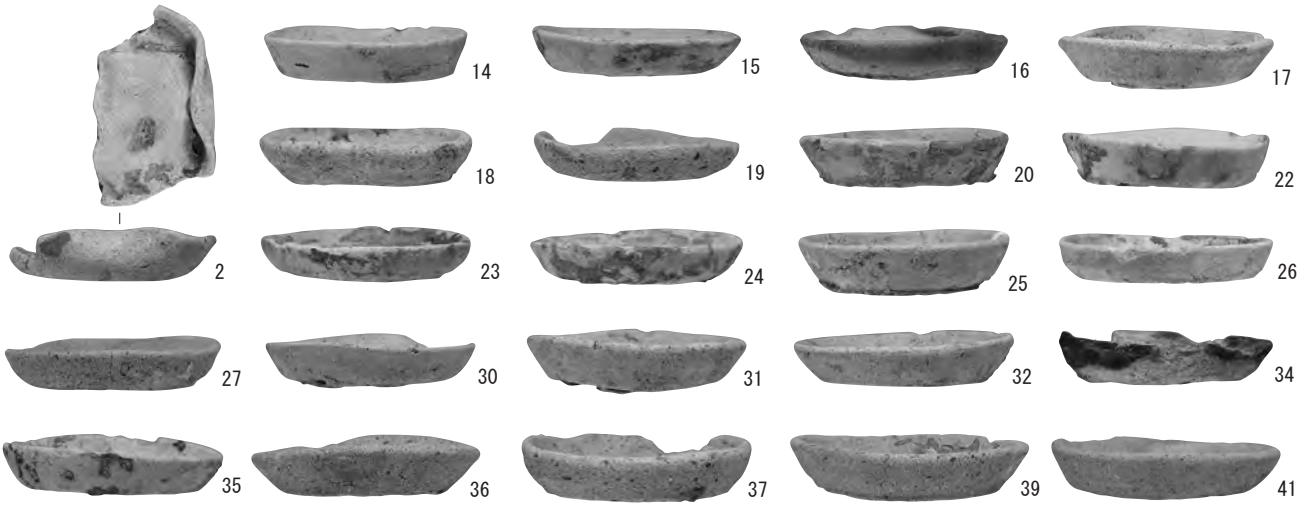
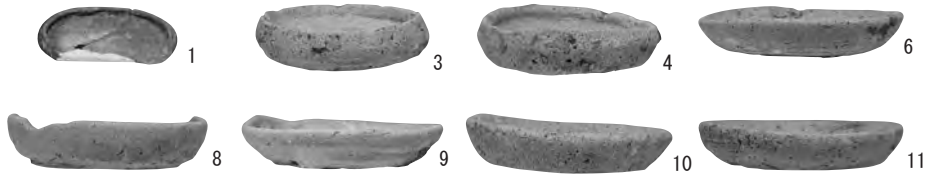


8. II区第5面全景(南から)

図版 4



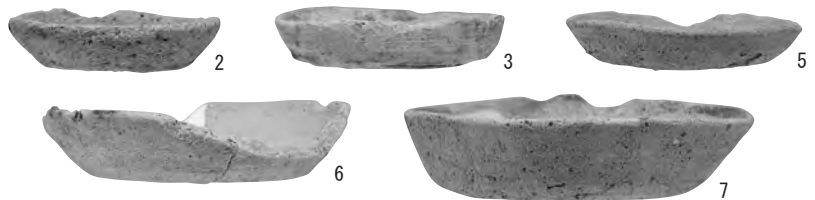
1. 第2面 構成土出土遺物



2. 第3面 かわらけ溜まり1出土遺物



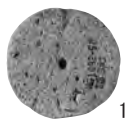
3. 第3面 ピット出土遺物



4. 第3面 構成土出土遺物



5. 第4面 土坑1出土遺物



6. 第4面 構成土出土遺物



7. 第5面 土坑3出土遺物

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座一丁目919番19地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座一丁目919番19地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年6月27日～同年7月16日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約28㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 原 廣志

調査員 梅岡ケイト・小野夏菜

作業員 倉澤六郎・金丸義一・丹野正弘・沼上三代治

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を原 廣志、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系 A R E A 9）を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZY」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲

遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲

12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』

13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美（玉川文化財研究所）

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	277
第1節 調査に至る経緯と経過	277
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	277
第3節 周辺の考古学的調査	278
第二章 堆積土層	283
第三章 発見された遺構と遺物	283
第1節 第1面の遺構と遺物	283
第2節 第2面の遺構と遺物	289
第3節 第3面の遺構と遺物	291
第四章 まとめ	293

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	279	図14 第1面 構成土出土遺物	288
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	281	図15 第2面 遺構分布図	289
図3 調査区位置図	282	図16 第2面 土坑11出土遺物	289
図4 調査区配置図	282	図17 第2面 土坑11～14	290
図5 調査区南壁 土層断面図	283	図18 第2面 土坑13出土遺物	290
図6 第1面 遺構分布図	284	図19 第2面 土坑14出土遺物	290
図7 第1面 土坑4出土遺物	284	図20 第2面 遺構外出土遺物	290
図8 第1面 土坑1～10	285	図21 第3面 遺構分布図	291
図9 第1面 土坑5出土遺物	285	図22 第3面 土坑15出土遺物	291
図10 第1面 土坑8出土遺物	286	図23 第2面 土坑15～17	291
図11 第1面 土坑9出土遺物	286	図24 第3面 土坑17出土遺物	292
図12 第1面 土坑10出土遺物	286	図25 第3面 構成土出土遺物	292
図13 第1面 遺構外出土遺物	287		

表 目 次

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧	280	表5 出土動物遺体一覧	296
表2 第1面 出土遺物観察表	294	表6 遺構計測表	296
表3 第2面 出土遺物観察表	295	表7 出土遺物一覧表	297
表4 第3面 出土遺物観察表	296		

図 版 目 次

図版 1	1. 調査区南壁土層断面(北から) …… 299	7. 第 1 面 構成土出土遺物(1) …… 301
	2. 第 1 面全景(北東から) …… 299	図版 4
図版 2	1. 第 2 面全景(北西から) …… 300	1. 第 1 面 構成土出土遺物(2) …… 302
	2. 第 3 面全景(北西から) …… 300	2. 第 2 面 土坑11出土遺物 …… 302
図版 3	1. 第 1 面 土坑 4 出土遺物 …… 301	3. 第 2 面 土坑13出土遺物 …… 302
	2. 第 1 面 土坑 5 出土遺物 …… 301	4. 第 2 面 土坑14出土遺物 …… 302
	3. 第 1 面 土坑 8 出土遺物 …… 301	5. 第 2 面 遺構外出土遺物 …… 302
	4. 第 1 面 土坑 9 出土遺物 …… 301	6. 第 3 面 土坑15出土遺物 …… 302
	5. 第 1 面 土坑10出土遺物 …… 301	7. 第 3 面 土坑17出土遺物 …… 302
	6. 第 1 面 遺構外出土遺物 …… 301	8. 第 3 面 構成土出土遺物 …… 302
		図版 5
		1. 出土動物遺体 …… 303

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座一丁目919番19で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）の範囲内にあたる。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成20年3月3日～同年3月4日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、12～14世紀の遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される28㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、原 廣志が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年6月27日～同年7月16日までの約3週間で、調査面積は約28㎡である。現地表の標高は約6.8mを測る。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を1.1m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～2面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。さらに調査区を狭めてトレンチを掘り込んだところ、中世の地山面において遺構が検出された。そして、7月16日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（ $X = -76592.873$ 、 $Y = -25173.620$ ）、（ $X = -76629.429$ 、 $Y = -25174.237$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡（No.261）は、鎌倉市内中心部の南東域に位置し、国指定史跡鶴岡八幡宮境内（元八幡）にほど近い、鎌倉市材木座一丁目919番19に所在する。また、調査地点のすぐ北東側には、大船駅から久里浜駅を結ぶJR横須賀線が走行している。なお、本地点から材木座海岸までの距離は約700m強である。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡（No.245）、西は滑川の東岸を境に由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）と接し、東は能蔵寺跡（No.314）、実相寺旧境内遺跡（No.255）、弁ヶ谷遺跡（No.249）、光明寺旧境内遺跡（No.316）との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、地内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された、砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地のやや東側を南北方向に延びる道筋（小町大路）と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、やや南に下った向福寺付近で5m前後、遺構が発見された調査地点としては最も南に位置する材木座六丁

目742番4外地点(本分冊掲載)付近では4.0~4.5mほどで、近年の調査事例では海岸線に近い調査地点である。

歴史的には、相模湾に面して南西に開けた弓形の海岸は由比ヶ浜(前浜・西浜)と呼び、鎌倉時代に材木を扱う商工業者組合である「座」ができたことがこの地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7カ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千束積座・相物座・松物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港遺跡として国の史跡に指定されている。

また、本調査地点の西側には、かつての小町大路とされる道筋があり、六浦道と交差する場所にあった筋替橋から宝戒寺、本覚寺の門前を通り、大町大路を横断、乱橋を渡って材木座まで通ずる基幹道路であった。若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、本興寺、妙長寺、長勝寺、来迎寺、実相寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、捕陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、中小様々な試掘調査までを含めると、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な個人専用住宅建設に伴う調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、本調査地点を中心に示すことができた材木座町屋遺跡の北側域にあたる12地点の内容について概観したい。

地図上で最も北側に位置する①材木座一丁目910番地点(森・堀川 2001)は、遺跡包蔵地内では北端寄りにあたり、滑川の支流である逆川の左岸域に所在する。調査面積は450㎡で、調査事例のなかでは面積の広い地点である。本調査地点は国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)から北西約50mに位置する。調査で発見された遺跡の時代は中世と古代に大別され、中世ではこの地域の基幹と推測される道路やそれと直交関係にある溝、井戸、方形土坑、柱穴などが検出された。特に方形土坑からは動物骨の切断片や未加工品が多く検出され、この地域一帯が職人集団や商工業者との関わりが深い地域であることを示唆している。古代では6棟を数える掘立柱建物が検出され、これらは側柱建物であるが、中世以前の様相を知るうえで注目される。

元八幡のすぐ南に位置する②材木座一丁目893番9地点は本報告書に掲載されている。限られた面積での調査であるためその詳細は不明であるが、出土遺物から13世紀後半から14世紀前半頃のものとして推測される溝や土坑、ピットなどがわずかに確認されている。

本地点の北西約80mの道路沿いに位置する③材木座一丁目144番3地点(木村・田代 1991)は、遺跡内では最も早く調査が行われた地点である。調査面積は2本のトレンチを合わせても40㎡に過ぎず、遺構検出面は地山面の一面のみであった。遺構は柱穴や井戸、土坑、溝などで、調査区内では明確な建物は確認されていないが、柱穴列の存在からある程度の規模をもつ掘立柱建物や柵列状の遺構が想定されている。小規模な溝は、町屋の小区画や路地などの小路に伴う側溝との考えが示されている。これらは出土遺物から井戸や土坑の一部は13世紀前半に遡るとし、また確認された遺構面は14世紀前半から中頃にかけて削平されたと考えられている。



図1 遺跡位置図

道路を挟んだ斜向かいに位置する④材木座一丁目890番7地点(汐見・渡邊 2000)では、14世紀代を中心とする小規模な柱穴や方形竪穴建物、土坑、溝などが確認されているが、調査地点が狭小なこともあり、各遺構の詳細は不明である。遺構の内容から想定すると本地点も③地点と同様に町屋ないし庶民層の生活の場であったと考えられる。

小町大路の西側道路に面した⑤材木座一丁目921番5外地点(齋木・降矢 2007)でも10㎡ほどの狭小な調査地点であったが、13世紀後半から14世紀代の南北方向の溝や柱穴、土坑などが発見されている。主要な遺構は土坑と柱穴であるが、建物の復元までには至っていない。

④地点の道路を挟んだ斜向かいの南側では連続して3ヵ所、⑥材木座一丁目889番4地点(A地点)、⑦材木座一丁目889番5地点(B地点)、⑧材木座一丁目149番4地点(C地点)(降矢・齋木 2008 a～c)の調査が行われている。いずれも生活痕跡は13世紀前半から確認され、3面ないし4面の生活面、遺構確認面が検出されている。⑥地点では15世紀の大小のかわらけがまとまって廃棄されたかわらけ溜まりが発見されている。

小町大路沿いの東側に位置する⑨材木座二丁目208番1地点(伊丹・渡邊 2017)では、4面にわたる生活面が検出され、13世紀前半から15世紀にかけての遺構変遷が示されている。第1面は土坑、第2面は方形竪穴建物が主体で、第3・4面は礎石をもつ柱穴が調査区全体に広がり、掘立柱建物群の存在を示唆している。特に調査地点の性格を考えるうえで、第2面の方形竪穴建物群は倉庫としての利用をうかがわせるものであり、加えて小町大路に面している調査地点であることは重要な点であろう。

小町大路からやや西に入った⑩材木座三丁目164番外地点(熊谷 2009)は、調査面積1000㎡を超える遺跡地内では最も広い調査地点である。遺構は、南北道路、溝、方形竪穴建物、井戸、土坑墓のほか、多数の柱穴や土坑など、遺構総数は合わせて1,000基を超える。これらの遺構は13世紀前半から中頃と、13世紀後半から14世紀代に大別され、調査区西端で発見された南北道路には側溝が伴っている。また、方形竪穴建物は道路に面するように配され、鑿や槍鉋といった工具類の出土や、切断痕のある石材片や鉄滓、轆の羽口、加工痕の残る動物骨なども出土しており、調査者は石製品や鉄製品、骨角製品などの生産・加工に携わる職人集団の存在を示唆している。

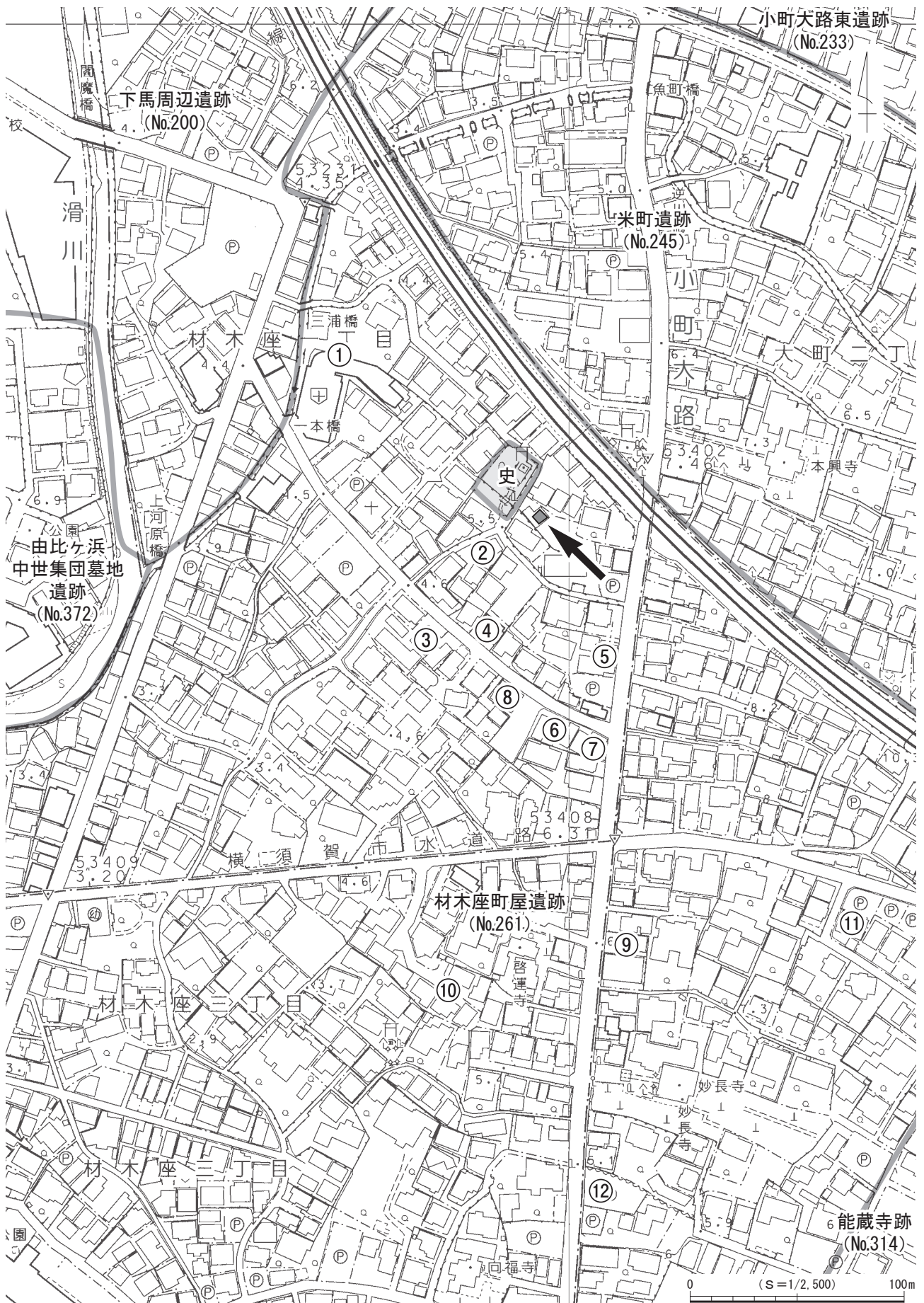
東端寄りに位置する⑪材木座二丁目217番6外地点(瀬田 1995)では、調査面積がL字状の不規則な条件にも関わらず3面にわたる生活面が確認された。遺構の中心は第2面の14世紀代の時期であるが、その主体である方形竪穴建物や方形土坑はほぼ同一主軸上にあり、特徴的な遺物として、鉾滓、取鍋、轆の羽口などの鑄造に関わるものや、砥石や切断痕、加工痕を有する動物骨などの出土もあり、⑩同様に金属製品や骨角製品の生産・加工に携わる職人集団の可能性を示唆している。

最後に地図上では最も南側に位置する⑫材木座二丁目236番1地点(安藤 2017)は、小町大路に面し、13世紀から15世紀代にわたる遺構・遺物が検出されている。遺構は方形竪穴建物や掘立柱建物、柱穴、

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目919番19地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目910番地点	森・堀川 2001
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目893番9地点	本報告
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3地点	木村・田代 1991
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7地点	汐見・渡邊 2000
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目921番5外地点	齋木・降矢 2007
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番4地点(A地点)	降矢・齋木 2008 a
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番5地点(B地点)	降矢・齋木 2008 b
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目149番4地点(C地点)	降矢・齋木 2008 c
⑨	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目208番1地点	伊丹・渡邊 2017
⑩	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目164番外地点	熊谷 2009
⑪	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目217番6外地点	瀬田 1995
⑫	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目236番1地点	安藤 2017

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図

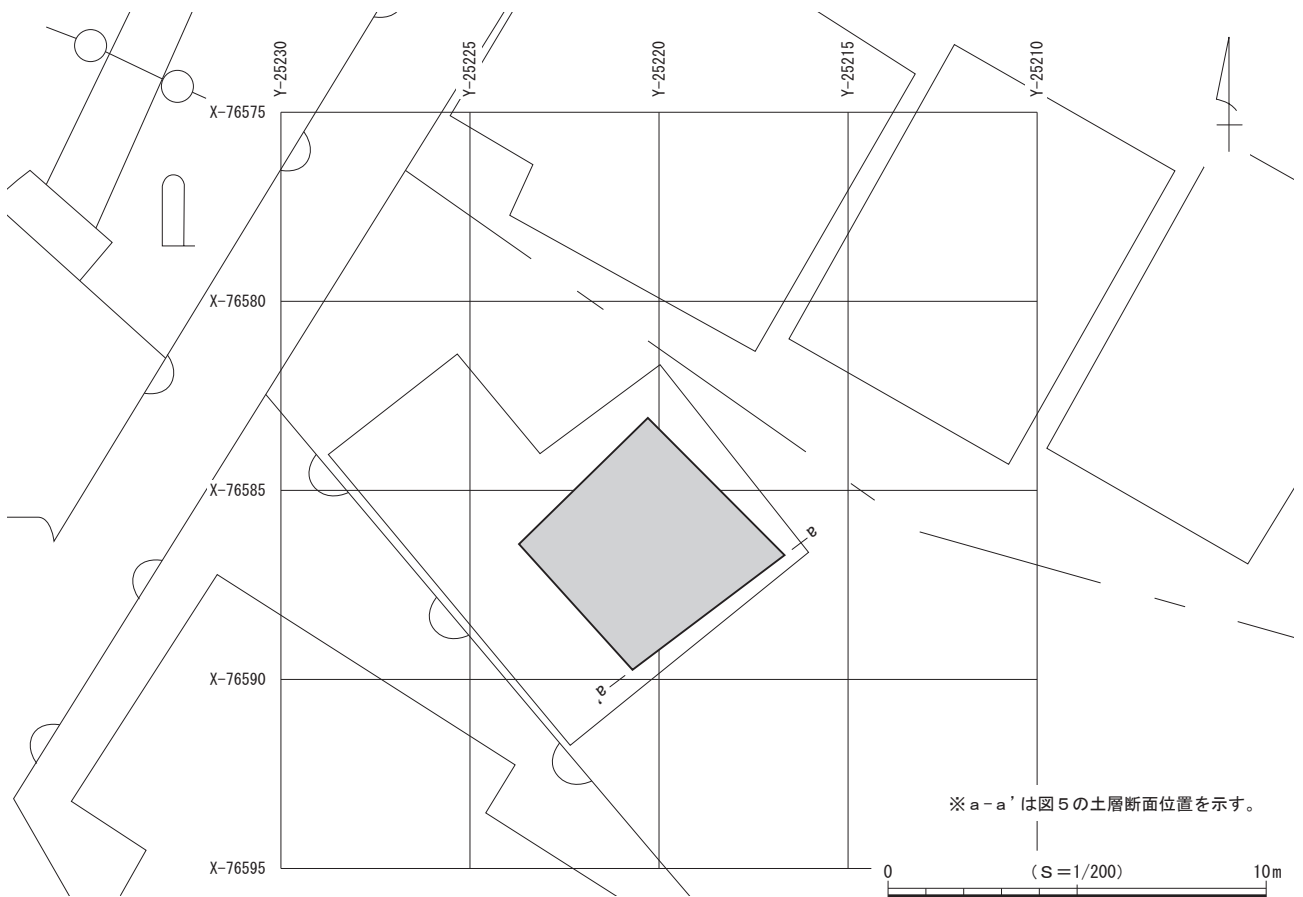


図4 調査区配置図

井戸、土坑などで、これらは東西溝の南側から発見されており、なかでも方形竪穴建物群の配置状況は⑩地点や⑪地点の遺構配置ときわめて似ており、出土遺物に韃の羽口や鉄滓などの鑄造関連が含まれていることも本地点の性格を考えるうえでの参考となろう。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～3面までの合計3面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約6.8mを測り、最上部には層厚30cm前後の表土(1層)、以下には層厚40～50cmの締まりのない茶褐色砂質土(2層)と層厚40cm前後の締まりのある茶褐色砂質土(3層)が堆積している。遺構確認面の第1面は4層上面で確認し、確認面の標高は5.7m前後を測る。4層は締まりのある茶褐色砂による整地層で、層厚20cm前後である。4層の下位には多量の茶灰色砂ブロックを含む暗茶褐色砂(5層)が層厚15cm前後堆積する。第2面は6層上面で確認し、確認面の標高は約5.3mを測る。6層は多量の茶白色砂と茶灰色砂を含む茶褐色砂による整地層で、層厚20～40cmである。第3面は中世の地山面である7層上面で確認し、確認面の標高は5.0m前後を測る。7層は締まりのある黄灰色砂で、層厚10cm前後である。7層の下位には、8層の黄灰色貝粒砂が堆積している。

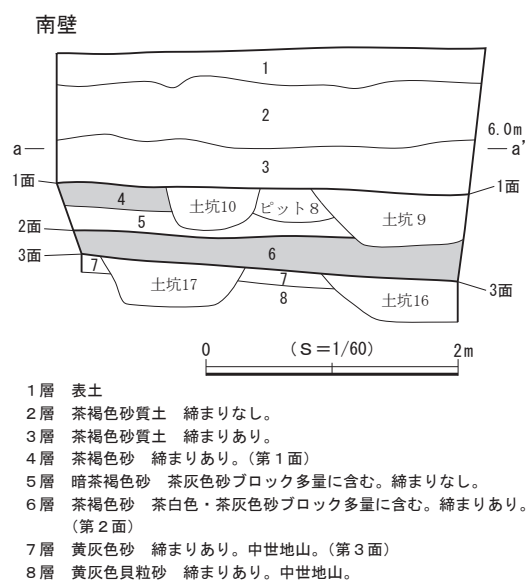


図5 調査区南壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は土坑17基、ピット8基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。なお、各面の遺構および遺構外、構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表5に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は約5.7m前後を測る。4層は締まりのある茶褐色砂による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑10基、ピット8基であり、調査区全面に分布していた(図6)。土坑1・9・10の3基は調査区外に及んでおり、攪乱および他遺構との重複のため、全容を把握できた土坑は土坑2・3・7・8の4基と少ない。

遺物は主にかわらけ、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末～14世紀前半に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑 1 (図 8)

調査区北隅に位置する。北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは隅丸方形ないし楕円形を呈すると推定されるが、詳細は不明である。底面は東壁側に向かってわずかに低くなっていく。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、北東-南西方向の現存長1.65m、北西-南東方向の現存長63cm、深さ26cmで、坑底面の標高は5.70mを測る。主軸方位は南東壁を基準にするとN-46°-Eを指す。

遺物はかわらけ47点、磁器2点、陶器12点が出土した。

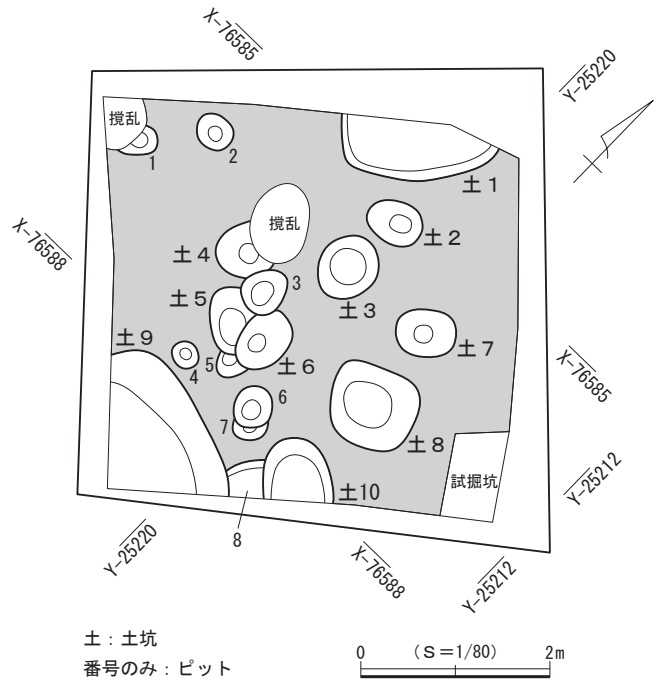


図 6 第 1 面 遺構分布図

土坑 2 (図 8)

調査区北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸60cm、短軸45cm、深さ17cmで、坑底面の標高は5.72mを測る。主軸方位はN-74°-Eを指す。

遺物はかわらけが2点出土した。

土坑 3 (図 8)

調査区中央付近に位置する。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸62cm、深さ18cmで、坑底面の標高は5.71mを測る。主軸方位はN-5°-Wを指す。

遺物はかわらけ3点、陶器1点が出土した。

土坑 4 (図 8)

調査区中央付近のやや西側に位置する。東側をピット3、北側を攪乱によって壊されている。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面は狭く、ほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は播り鉢状を呈する。規模は南北現存長59cm、東西63cm、深さ41cmで、坑底面の標高は5.65mを測る。

出土遺物 (図 7)

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径11.9cmに復元される中形品である。

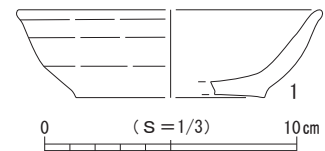
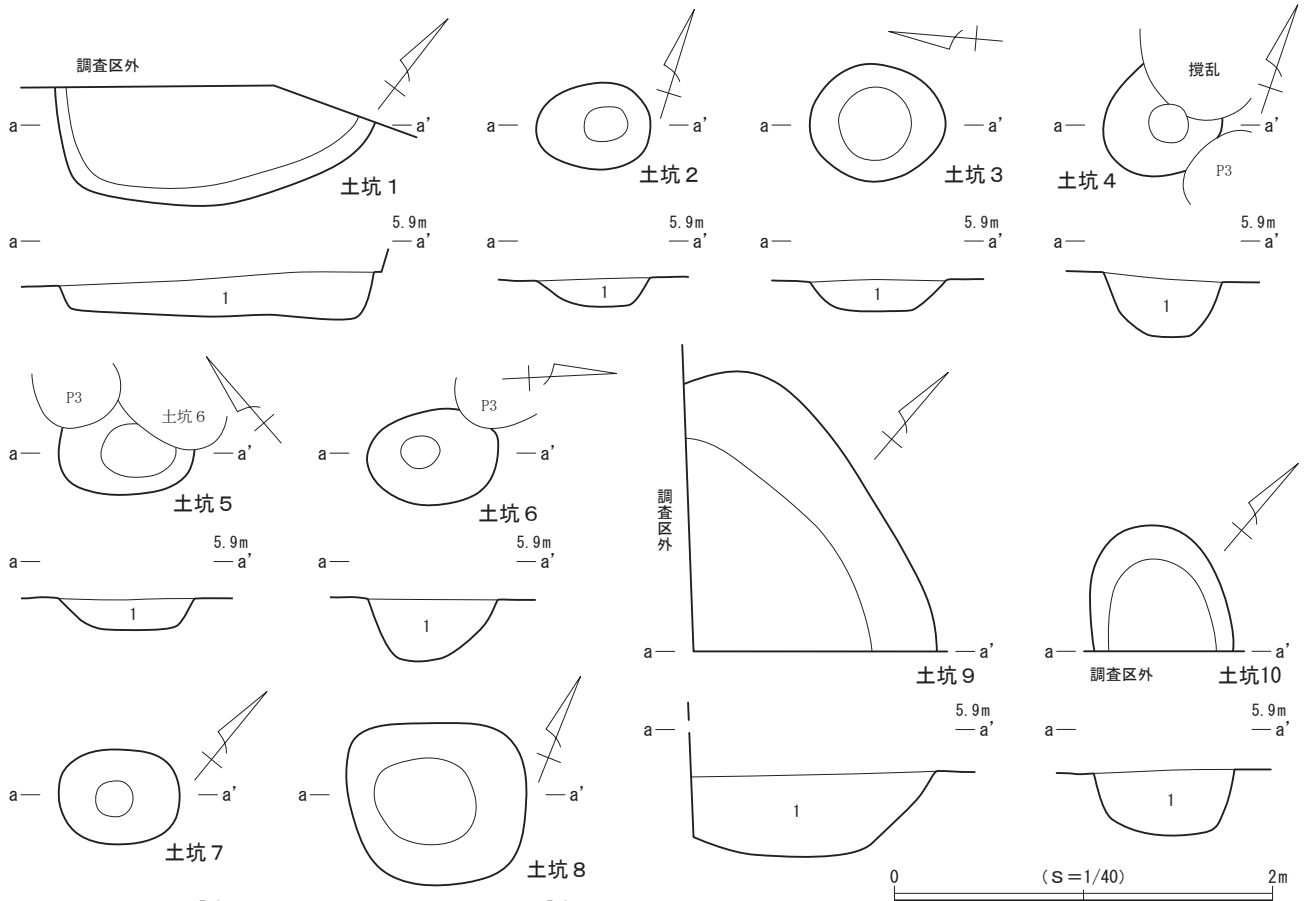


図 7 第 1 面 土坑 4 出土遺物

土坑 5 (図 8)

調査区中央のやや南西側に位置する。南側でピット5と重複して北側を壊し、北東壁を土坑6とピット3によって壊されている。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて



- 土坑 5
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物微量、貝粒少量含む。締まりなし。
- 土坑 6
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物少量、貝粒中量、かわらけ片極少量含む。締まりなし。
- 土坑 7
1層 茶褐色弱砂質土 黄灰砂、炭化物、貝粒中量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 8
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 9
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒微量、炭化物・かわらけ片含む。
- 土坑 10
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物・貝粒少量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 1
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒・炭化物・貝粒・かわらけ片少量含む。締まりなし。
- 土坑 2
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物微量、貝殻多量、貝粒少量含む。締まりなし。
- 土坑 3
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒微量、黄灰砂・炭化物、貝粒少量、かわらけ片含む。締まりなし。
- 土坑 4
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物少量含む。締まりなし。

図8 第1面 土坑1~10

立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸現存長50cm、深さ20cmで、坑底面の標高は5.71mを測る。主軸方位はN-49°-Wを指す。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ6点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は渥美産甕の口縁部破片であり、口縁端部内側に一条の凹線を巡らせる。

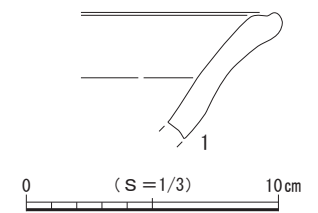


図9 第1面 土坑5出土遺物

土坑6 (図8)

調査区中央のやや南西側に位置する。南側から西側で土坑5およびピット5と重複して土坑5の東側とピット5の北側を壊し、ピット3によって北西壁の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は掘り鉢状を呈する。規模は長軸70cm、短軸50cm、深さ33cmで、坑底面の標高は5.63mを測る。主軸方位はN-3°-Eを指す。

遺物はかわらけ11点、陶器2点が出土した。

土坑7 (図8)

調査区東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸64cm、短軸50cm、深さ14cmで、坑底面の標高は5.74mを測る。主軸方位はN-51°Eを指す。

遺物はかわらけ6点、磁器1点、土師器1点が出土した。

土坑8 (図8)

調査区南東側に位置する。平面形はおおむね隅丸方形を呈するが、南壁側がやや短い隅丸台形状に近い。底面は東壁側に向かってわずかに高くなっていく。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸93cm、短軸86cm、深さ15cmで、坑底面の標高は5.75mを測る。

出土遺物 (図10)

遺物はかわらけ33点、磁器1点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径12.0cmを測る中形品である。

土坑9 (図8)

調査区南隅に位置する。東側でピット8と重複し、西壁側を壊している。大部分が調査区外にあるため遺構の全容は不明であるが、現存する北壁側の西端部が丸みを呈することと、断面形から平面形を推定すると、おおむね隅丸長方形を呈すると考えられる。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形と推定される。規模は長軸現存長1.91m、短軸現存長1.22m、深さ53cmで、坑底面の標高は5.57mを測る。

出土遺物 (図11)

遺物はかわらけ72点、磁器1点、陶器10点、土器1点、瓦質土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は龍泉窯系青磁碗であり、内面見込みに片彫りで略化した花文が施されるI-2類である。

土坑10 (図8)

調査区南壁側に位置する。南東側が調査区外にあり、遺構の全容は不明である。南西側でピット8と重複して北東壁側を大きく壊している。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長66cm、短軸74cm、深さ38cmで、坑底面の標高は5.62mを測る。

出土遺物 (図12)

遺物はかわらけ18点、陶器3点、土製品1点、石製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は外径が最大1.5cmを測る管状土錘である。

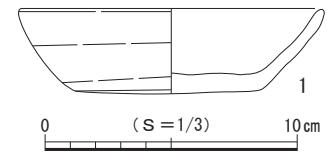


図10 第1面 土坑8出土遺物

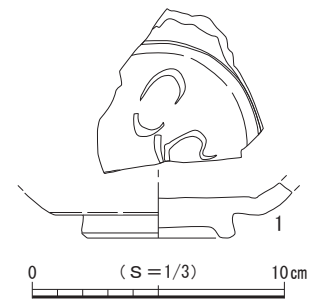


図11 第1面 土坑9出土遺物

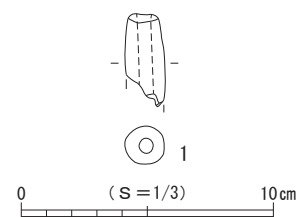


図12 第1面 土坑10出土遺物

(2) ピット (図6)

第1面では、8基を検出した。いずれも調査区の中央から西・南側に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径29~51cm、深さ17~40cmである。

遺物は8基中、ピット1~7の7基から出土し、詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げた。

(3) 第1面 遺構外出土遺物 (図13)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち17点を図示した。

1~3はかわらけであり、このうち1は口径7.9cmに復元される手づくね成形の小形品である。2・3はロクロ成形で、2は口径7.3cmの小形品、3は口径12.1cmに復元される中形品である。4は青白磁の碗であり、高台は浅く削り出され、体部内面には粗い櫛歯状工具による施文が施され、見込みには高台より小径の段が付く。高台内を除いて明緑灰色を呈する釉が施され細貫入を生じる。5~14は常滑産陶器であり、このうち5は壺の口縁部小破片、6~9は甕であり、口縁部形状から6は5型式、7は8型式にそれぞれ比定される。8・9は肩部に正格子目の押印が施される。10~13は片口鉢I類であり、13の内面には使用による摩耗が見られる。14は片口鉢II類と類推される口縁部破片を磨具に利用し、口縁端部から破断面にかけて研磨をしている。15は骨製品であり、メジロザメ科の椎骨に加工が施されたも

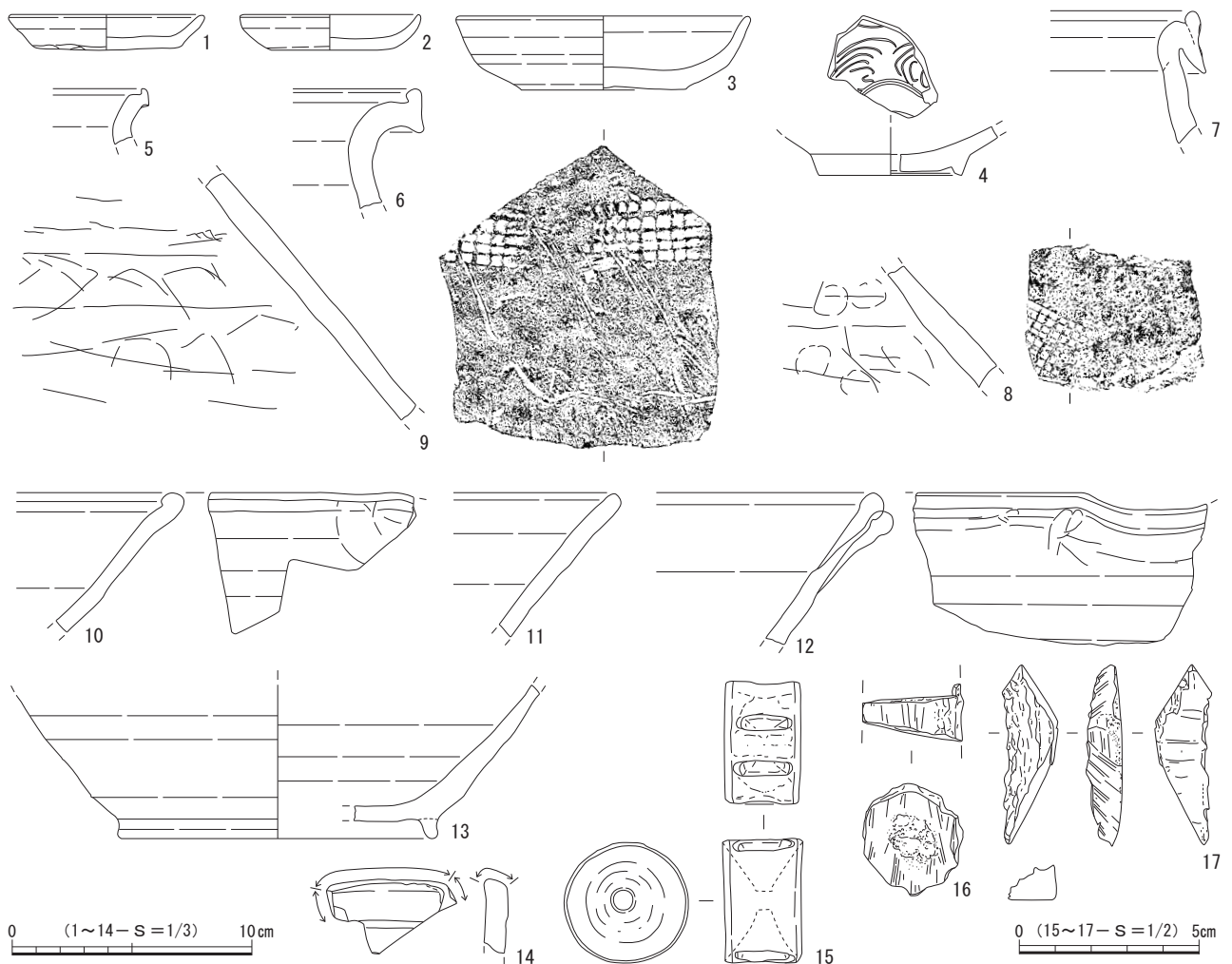


図13 第1面 遺構外出土遺物

ので、中央部に径0.5cmの円孔が貫通し、側面が使用により摩耗している。16・17は鹿角に加工を施した未成品とみられる。

(4) 第1面 構成土出土遺物(図14)

第1面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち30点を図示した。

1～17はロクロ成形のかわらけであり、1は口径4.5cmに復元される極小品、2～12は口径5.4～8.0cmの小形品、13は法量不明の底部破片であり、底部処理は静止糸切である。14～16は口径12.0～12.6cmに復元される中形品、17は口径13.0～13.6cmを測る大形品である。11は口縁部に油煤が付着し灯明具としての使用が認められる。18は白磁小壺であり、高台は削り出し。不透明の釉が体部下位～高台を除いて施される薄胎の優品である。19は龍泉窯系青磁の坏であり、口縁部が外方に屈折し端部が上方に短くつまみ上げられる。Ⅲ-3a類に比定される。20は瀬戸産の筒形容器。21は渥美産の片口鉢。

22～27は常滑産陶器であり、このうち22・23は短頸壺、24～26は甕であり、24・25は口縁部形状から6b型式に比定される。26は肩部に正格子目の押印が施される。27は片口鉢I類である。28は瓦質土器の火鉢。29は須恵器の甕であり、外面には平行叩き、内面には同心円状の叩きが施される。古墳時代後期ないし奈良時代の所産であろう。30の銭貨は、皇宋通寶(1038年初鑄)である。

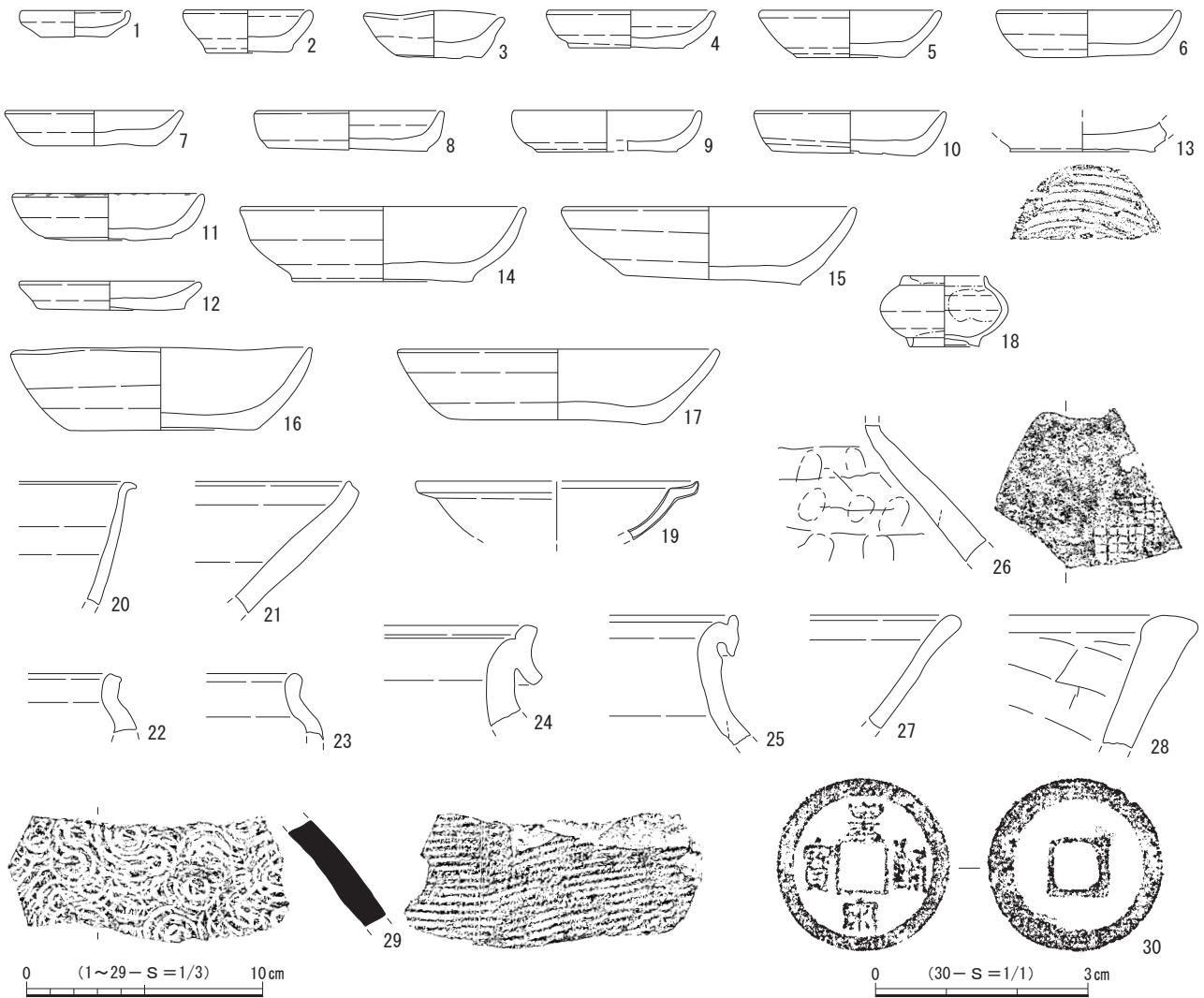


図14 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は6層上面で検出され、確認面の標高は5.3mを測る。6層は多量の茶白色砂と茶灰色砂を含む茶褐色砂による整地層で、遺構はこの整地層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は土坑4基である(図15)。調査区が狭小なため分布状況を述べることは難しいが、調査区東側にやや偏在しているように捉えられる。

遺物は主にかわらけ、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉に属すると考えられる。

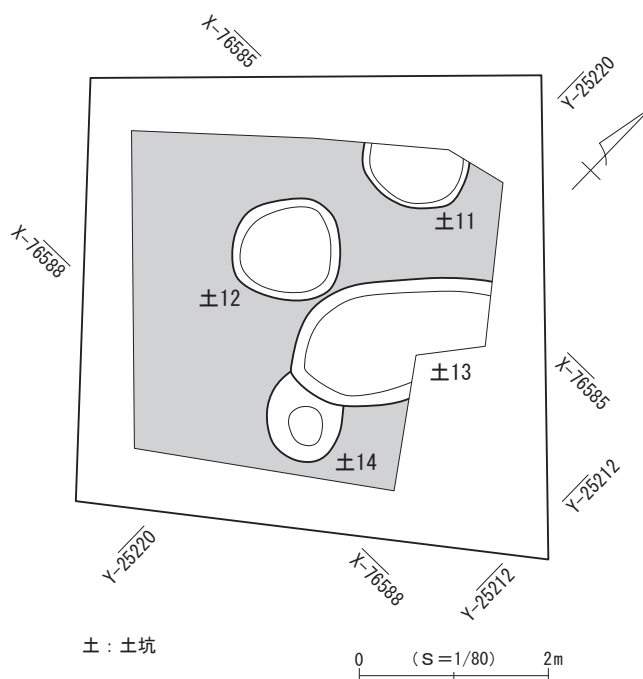


図15 第2面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑11(図17)

調査区北隅付近に位置する。北側約半分が調査区外に及んでいる。平面形は略円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸現存長67cm、深さ17cmで、坑底面の標高は5.10mを測る。

出土遺物(図16)

遺物はかわらけ17点、陶器3点、土師器5点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.0cmを測る小形品である。

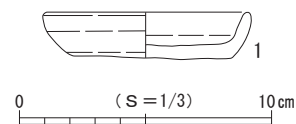


図16 第2面 土坑11出土遺物

土坑12(図17)

調査区中央付近に位置する。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸1.06m、深さ20cmで、坑底面の標高は5.07mを測る。主軸方位はN-45°-Eを指す。

遺物はかわらけ37点、陶器2点、土師器4点、須恵器1点が出土した。

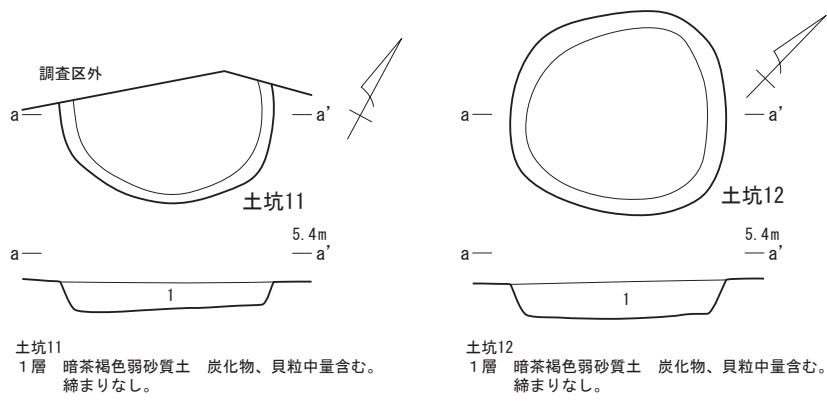
土坑13(図17)

調査区東側に位置する。北東側が調査区外に及び、南側で土坑14と重複して北壁の一部を壊している。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長2.10m、短軸1.30m、深さ30cmで、坑底面の標高は5.00mを測る。主軸方位はN-37°-Eを指す。

出土遺物(図18)

遺物はかわらけ38点、磁器1点、陶器4点、土師器3点、土製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は全長4.3cm、最大幅2.9cmを測る管状土錘である。



土坑11
1層 暗茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量含む。
締まりなし。

土坑12
1層 暗茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量含む。
締まりなし。

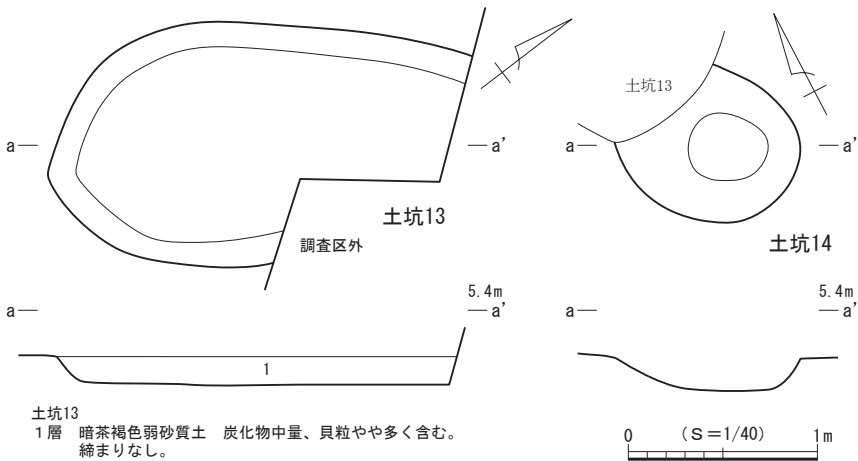


図17 第2面 土坑11~14

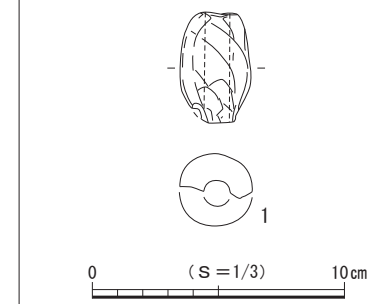


図18 第2面 土坑13出土遺物

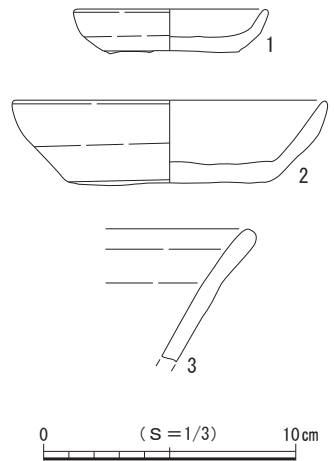


図19 第2面 土坑14出土遺物

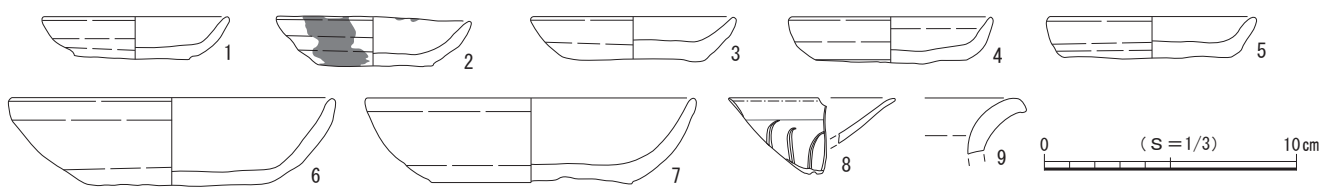


図20 第2面 遺構外出土遺物

土坑14 (図17)

調査区南側に位置する。土坑13と重複し、北壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は北西側で大きく開くほかは開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長88cm、短軸80cm、深さ17cmで、坑底面の標高は4.97mを測る。

出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ22点、陶器3点、土師器1点、金属製品1点が出土し、このうち3点を図示した。
1・2はロクロ成形のかわらけであり、1が口径7.5cmを測る小形品、2が口径12.3cmを測る中形品、3が常滑産片口鉢I類である。

(3) 第2面 遺構外出土遺物 (図20)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち9点を図示した。
1~7はロクロ成形のかわらけであり、このうち1~5は口径7.3~8.1cmの小形品、6は口径12.8cmの中形品、7は口径13.0cmに復元される大形品である。2は口縁部の内外面に油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。8は白磁碗であり、内面に縦位のヘラ描き文を施す。9は常滑産の壺である。

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面は調査区の南壁側をトレンチ状に掘り込んで調査した。遺構は7層上面で検出され、確認面の標高は5.0m前後を測る。7層は層厚10cm前後の締まりのある黄灰色砂で湧水が激しい。遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は土坑3基で、調査時には性格不明の落ち込みとしていたが、形態と規模から本報告では土坑としている(図21)。

遺物は主にかわらけ、陶器、磁器、土師器、須恵器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

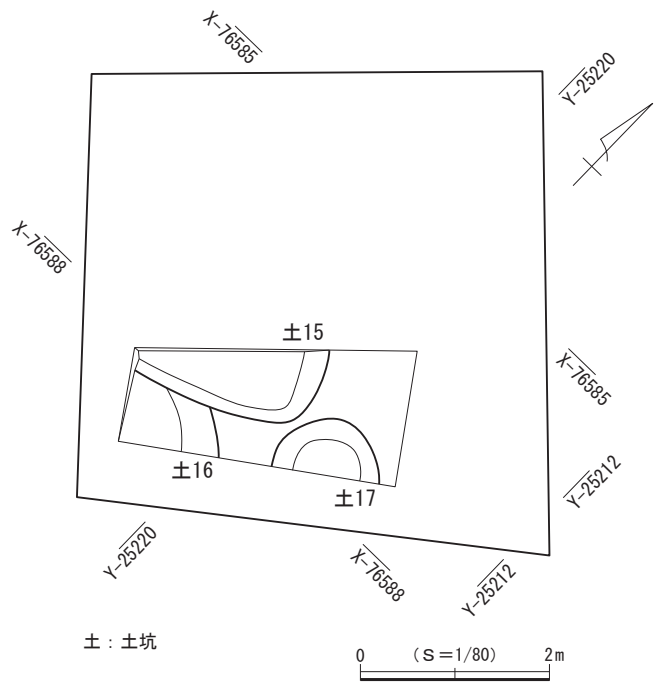


図21 第3面 遺構分布図

(1) 土坑

土坑15 (図23)

調査区南側に位置する。遺構の北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑16と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.90m、短軸現存長80cm、深さ37cmで、坑底面の標高は4.6mを測る。主軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ8点、陶器7点、土師器3点、木製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢I類である。

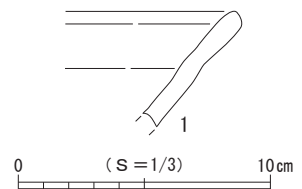


図22 第3面 土坑15出土遺物

土坑16 (図23)

調査区南隅に位置する。遺構の大部分が調査区外に及んでいる。また、土坑15と重複して北壁の一部が壊されているため、平面形および全容は不明である。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上が

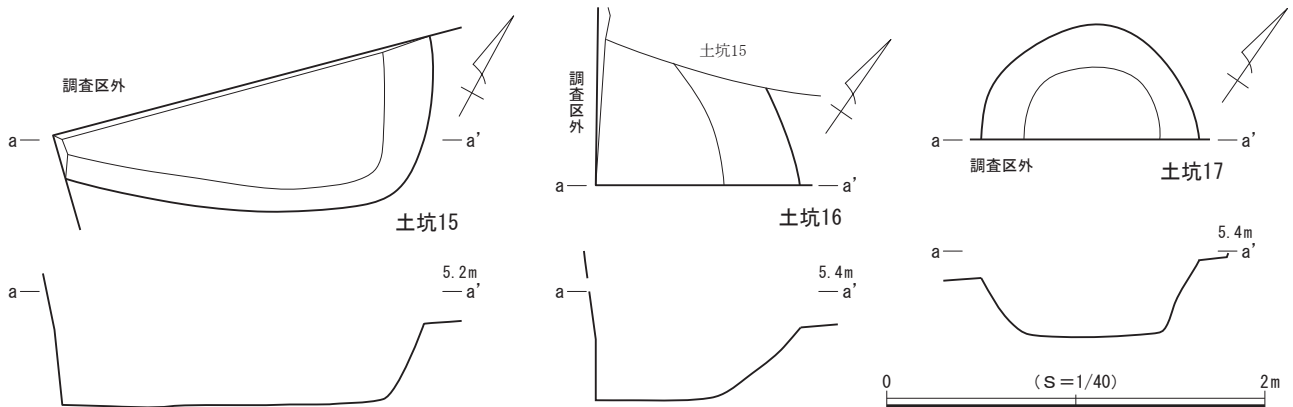


図23 第2面 土坑15～17

り、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長1.0m、南北現存長75cm、深さ26cmで、坑底面の標高は4.83mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図23)

調査区中央付近の南壁側に位置する。南側が調査区外に及んでいる。平面形は略円形あるいは楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.15m、北西-南東方向の現存長60cm、深さ35cmで、坑底面の標高は4.93mを測る。

出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ1点、土師器4点が出土し、このうち1点を図示した。

1は土師器の甕であり、古代の所産と考えられる。

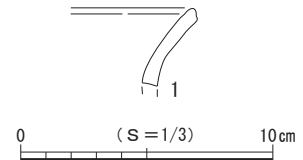


図24 第3面 土坑17出土遺物

(2) 第3面 構成土出土遺物 (図25)

第3面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち5点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径11.8cmに復元される中形品である。2・3は龍泉窯系青磁であり、2の碗は内面に片彫による横位の区画線と略化した花文が施されるI-4類。3の皿は内面見込みに片彫によって躍動的な魚文が施されるI-2d類である。4は渥美産の壺であり、口縁部形状から2b型式に比定される。5の須恵器は古墳時代後期に比定される坏Hの蓋である。

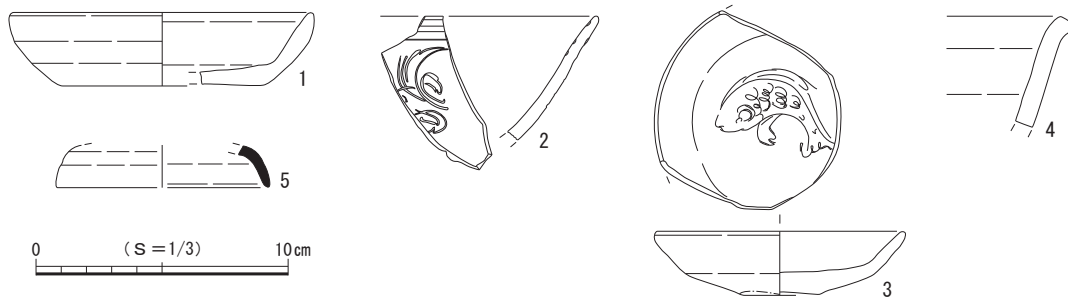


図25 第3面 構成土出土遺物

第四章 まとめ

今回の調査地点は、材木座町屋遺跡 (No.261) の北西端部付近にあたる標高5.0m前後の海浜砂層上に形成された遺跡であり、地点の北西側には康平6年(1063)に源頼義が石清水八幡宮を勧進した元鶴岡八幡宮(由比若宮)が鎮座しており、鎌倉幕府が開かれる以前から源氏とゆかりの深い地域であった。

調査の結果、いずれも中世に属する3面の遺構確認面が検出され、土坑17基、ピット8基を検出した。また、出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。

調査面積が約28㎡と狭小なため具体的な遺構の分布状況や配置などの検討は難しいが、以下、面ごとに検出した遺構と遺物について整理し、簡単なまとめをしたい。

第1面では、土坑10基、ピット8基が検出された。これらは標高5.7m前後の硬く締まった整地層に掘り込まれていた。土坑のうち、全容を把握できたものは10基中4基にとどまるが、これらは調査区全体に分布し、さらに調査区外に延びていることが把握された。本面は出土遺物から13世紀末～14世紀前半に属すると考えられる。

第2面では、土坑4基が検出された。これらは標高5.3mの硬く締まった整地層に掘り込まれており、分布はやや東側に偏っているようにみえる。本面は出土遺物から13世紀後葉に属すると考えられる。

第3面は、調査区南壁側をトレンチ状に掘り込んで調査した。その結果、土坑3基を検出した。これらは調査時には性格不明の落ち込みとしていたが、形態と規模から判断して土坑としたものであり、標高5.0m前後の黄灰色を呈する海浜砂層に掘り込まれている。本面は出土遺物から13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられた。なお、本面には、古墳時代後期～古代の須恵器・土師器が少量出土していることから、周辺に当該期の遺構が埋存する可能性がある。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 安藤龍馬 2017「材木座町屋遺跡 (No.261) 発掘調査成果概要」『第27回 鎌倉市遺跡調査・研究会発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 伊丹まどか・渡邊美佐子 2017「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座二丁目208番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡 (No.261) 鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 熊谷 満 2009「材木座町屋遺跡 (No.261) の調査 材木座3-164他地点」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23』平成18年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・渡邊美佐子 2000「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目890番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 瀬田哲夫 1995「7. 材木座町屋遺跡 (No.261) 鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』平成6年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008a「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008b「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告

告書24]平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

降矢順子・齋木秀雄 2008 c 「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目149番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24]平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

森 孝子・堀川浩通 2001「材木座町屋遺跡の調査」『第11回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980
『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑4出土遺物(図7)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.5)	3.5	底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/5
土坑5出土遺物(図9)							
1	陶器	渥美 甕	-	-	現 5.0	胎土:堅緻、白色粒、黒色粒 色調:外面-灰黄色、内面-灰オリーブ色(降灰) 焼成:良好	口縁部 小破片
土坑8出土遺物(図10)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.3	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
土坑9出土遺物(図11)							
1	磁器	青磁 碗	-	(6.1)	現 2.2	内面-見込み部に片彫り(花文) 胎土:精良堅緻 色調:釉-灰オリーブ色、断面-灰白色 焼成:良好、硬質 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類	高台部 2/3強
土坑10出土遺物(図12)							
1	土製品	土錘	現長 3.7	最大幅 1.5	孔径 0.6	成形-手づくね 胎土:砂粒、雲母、白色粒、赤色粒 色調:灰黄色 焼成:良好	2/3
第1面 遺構外出土遺物(図13)							
1	土器	手づくね かわらけ・小	(7.9)	-	1.6	底面-指頭+ヘラナデ 胎土:微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄 橙色 焼成:良好	1/3強
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	3/4弱
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.1)	6.9	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:外面-灰黄色、内面-黄灰色 焼成:良好	1/3強
4	磁器	青白磁 碗	-	(6.0)	2.0	高台部の削り出しが浅い 外面-回転ヘラケズリ痕跡、内面-櫛歯状工具による施文 胎土:精良堅緻 色調:胎土-灰白色、釉-明緑灰色 焼成:良好	高台部 小破片
5	陶器	常滑 壺	-	-	現 2.3	胎土:微砂、白色粒、黒色粒 色調:外面-暗緑色(降灰)、内面-暗赤褐色、胎土- 灰黒色 焼成:良好 備考:3~5型式	口縁部 小破片
6	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.0	胎土:堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調:暗褐色、外面に一部降灰 焼成:良好 備考:5型式	口縁部 小破片
7	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.5	胎土:堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、細礫 色調:黒褐~暗褐色、内外面に一部降灰 (暗緑灰色) 焼成:良好 備考:8型式	口縁部 小破片
8	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.0	外面-正格子目の押印 胎土:堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調:外面-暗 緑色(降灰)、内面-にぶい赤褐色 焼成:良好	肩部小破片
9	陶器	常滑 甕	-	-	現 10.3	外面-正格子目の押印 胎土:堅緻、砂粒、白色粒、小礫 色調:外面-黒褐色、内 面-褐灰色 焼成:良好	肩部片
10	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 5.8	胎土:堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小礫 色調:灰色 焼成:良好	口縁部 小破片
11	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 6.0	胎土:堅緻、白色粒、砂粒 色調:灰褐色 焼成:良好	体部下半~ 底部
12	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 6.4	胎土:堅緻、白色粒、砂粒 色調:灰色 焼成:良好	口縁部 小破片
13	陶器	常滑 片口鉢I類	-	(13.2)	現 6.4	底部-ヘラナデ 胎土:堅緻、白色粒、砂粒、細礫 色調:黄灰色 焼成:良好	体部下半~ 高台部1/8
14	陶器	摩耗陶片	現長 3.1	現幅 5.4	厚 1.0	陶器片の転用 周囲に研磨痕を残す 胎土:堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調:暗 赤褐色 焼成:良好	1/2弱
15	骨製品	用途不明品	径 2.5	孔径 0.5	厚 2.2	メジロザメ科の椎骨を加工-中心に穿孔、側面使用により摩耗	完形
16	骨製品	未成品	径 2.8~3.1	-	厚 0.5~1.1	シカの角を素材として切削加工	
17	骨製品	未成品	現長 5.0	現幅 1.5	厚 0.9	シカの角を素材として切削加工	
第1面 構成土出土遺物(図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・極小	(4.5)	2.8	1.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿 骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3強
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.4)	(3.5)	1.8	底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成:良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.8)	3.4~3.7	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: にぶい赤褐色 焼成:良好	略完形

4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.8	1.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、細礫粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.5	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.3)	1.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.8	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.9)	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.3)	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、海綿骨針、泥岩粒、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(6.3)	1.2	底面-回転ヘラケズリ 胎土: 微砂、赤色粒、細礫、海綿骨針、良土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
13	土器	ロクロ かわらけ	-	(6.2)	現 1.2	底面-静止糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/2弱
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.6	3.2	ナデ消し 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
15	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.5	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.0	3.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.6	8.4	3.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4強
18	磁器	白磁 小壺	(3.6)	3.0	3.0	胎土: 精良堅緻、黒色微粒 色調: 胎土-薄灰白色、釉-淡青灰白色 焼成: 良好	1/2
19	磁器	青磁 坏	(11.9)	-	現 2.5	胎土: 精良堅緻、黒色微粒 色調: 胎土-灰白色、釉-灰オリブ色 焼成: 良好 備考: 太宰府-龍泉窯系青磁坏Ⅲ-3a類	1/7
20	陶器	瀬戸 筒形容器	-	-	現 5.2	胎土: 堅緻、黒色粒、細礫 色調: 外面-灰褐色、内面-灰オリブ色(降灰) 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁-体部 小破片
21	陶器	渥美 片口鉢	-	-	現 5.6	胎土: 堅緻、白色粒、細礫 色調: 褐灰色 焼成: 良好 備考: 2b型式	口縁部 小破片
22	陶器	常滑 短頸壺	-	-	現 2.5	胎土: 微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗赤褐色、胎土-灰黒色 焼成: 良好 備考: 2~3型式	口縁部 小破片
23	陶器	常滑 短頸壺	-	-	現 2.8	胎土: 微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗赤褐色、胎土-灰黒色 焼成: 良好 備考: 2~3型式	口縁部 小破片
24	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	胎土: 堅緻、砂粒、白色粒 色調: 暗赤褐色、内面に一部降灰(暗灰色) 焼成: 良好 備考: 6b型式	口縁部 小破片
25	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.5	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: にぶい赤褐色、外面に降灰(にぶい褐色) 焼成: 良好 備考: 6b型式	口縁部 小破片
26	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	外面-正格子目の押印 胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 外面-暗緑色(降灰)、内面-暗赤褐色 焼成: 良好	肩部小破片
27	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 4.7	胎土: 堅緻、白色粒、細礫 色調: 褐灰色 焼成: 良好 備考: 6a型式	口縁部 小破片
28	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 5.6	胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、海綿骨針 色調: 灰黄褐色 焼成: 良好	口縁部 小破片
29	須恵器	甕	-	-	現 4.5	外面-平行叩き、内面-同心円叩き 胎土: 堅緻、白色粒、小礫 色調: 外面-黒褐色、内面-暗褐灰色 焼成: 良好	胴部小破片
30	金属 製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑11出土遺物(図16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
土坑13出土遺物(図18)							
1	土製品	土錘	長 4.3	最大幅 2.9	孔径 1.0	俵型 成形-手づくね 胎土: 砂粒、雲母、白色微粒、泥岩粒 色調: 黒褐~黒色 焼成: 良好	1/2
土坑14出土遺物(図19)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.5	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3強
3	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 5.3	胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 黄灰~灰色 焼成: 良好	口縁部 小破片
第2面 遺構外出土遺物(図20)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.6	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.6	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3~5.5	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3

5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.1	6.7	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.3	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	4/5
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.0	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
8	磁器	白磁碗	-	-	現 5.1	内面へラ描き文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰白色、釉-乳白色 焼成：良好	口縁部 小破片
9	陶器	常滑壺	-	-	現 2.2	胎土：堅緻、白色粒 色調：外面-にぶい褐色、内面に降灰(暗黄褐色) 焼成：良 好	口縁部 小破片

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑15出土遺物(図22)

1	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 4.6	胎土：堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、小礫 色調：灰色 焼成：良好	口縁部 小破片
---	----	-------------	---	---	----------	---------------------------------	------------

土坑17出土遺物(図24)

1	土器	土師器 甕	-	-	現 3.1	胎土：微砂、雲母、角閃石、赤色粒 色調：黄橙色 焼成：良好 備考：古代	口縁部 小破片
---	----	----------	---	---	----------	-------------------------------------	------------

第3面 構成土出土遺物(図25)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.1)	2.9	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4弱
2	磁器	青磁碗	-	-	現 4.9	内面-体部に片彫略花文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰色、釉-緑灰色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-4類	口縁部 小破片
3	磁器	青磁皿	(9.8)	3.0	2.5	底面-ヘラケズリ 内面-見込み部に片彫による魚文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰色、釉-明緑灰色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁皿I-2d類	2/3
4	陶器	渥美壺	-	-	現 2.2	胎土：堅緻、白色微粒 色調：外面-黒色、内面に降灰(暗緑色) 焼成：良好 備考：2b型式	口縁部 小破片
5	土器	須恵器 蓋	(8.4)	-	現 1.7	胎土：堅緻、白色微粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：坏皿蓋、古墳時代後期(7世紀中~後葉)	口縁部 小破片

表5 出土動物遺体一覧(図版5)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
遺構外	第1面	魚類					4個 破片
遺構外	第1面	スズキ	主鰓蓋骨			6	
遺構外	第1面	マガイ	主上顎骨	左		1	
遺構外	第1面	メジロザメ類	椎骨				
遺構外	第1面	イルカ類	上顎骨片				
遺構外	第1面	イルカ類	肋骨				
遺構外	第1面	イルカ類	腰椎			11	3個
遺構外	第1面	ネズミ類	下顎骨				
遺構外	第1面	イヌ	肩甲骨	右		16	
遺構外	第1面	ウマ	I	左			
遺構外	第1面	イノシシ・シカ	肢骨				2個
遺構外	第1面	イノシシ・シカ	肢骨				2個
土坑3	第1面	イノシシ・シカ					破片
土坑5	第1面	イルカ類	頸椎			10	
土坑5	第1面	イルカ類	肋骨片				
土坑6	第1面	メカジキ	椎骨			3	
土坑9	第1面	バンドウイルカ	歯			8	2個
土坑9	第1面	ニホンジカ	上腕骨	左		18	
土坑9	第1面	ニホンジカ	踵骨	右		19	
土坑10	第1面	イルカ類	肋骨片				
土坑10	第1面	イルカ類	胸椎				
土坑10	第1面	イノシシ	I ₂	左			
ピット2	第1面	イルカ類	上顎骨片				4個
ピット5	第1面	タイ類	椎骨			2	
遺構外	第1面	イルカ類	肋骨				
構成土	第1面	カンダイ	下咽頭歯			4	
構成土	第1面	バンドウイルカ	歯			9	
構成土	第1面	イルカ類	頭骨片				
構成土	第1面	イルカ類	肋骨				5個
構成土	第1面	イルカ類	腰椎			12	2個
構成土	第1面	ウサギ	肩甲骨	左		14	
構成土	第1面	ウマ	上顎切歯	右		20	2個
構成土	第1面	イノシシ・シカ					破片
遺構外	第2面	ブリ?	歯骨	右		5	
遺構外	第2面	フグ類	前鰓蓋骨			7	
遺構外	第2面	鳥類	胸骨				
遺構外	第2面	イルカ類	肋骨				4個
遺構外	第2面	イルカ類	腰椎			13	
遺構外	第2面	イヌ	下顎骨	右		15	
遺構外	第2面	ウマ	距骨	右		21	
遺構外	第2面	ニホンジカ	中足骨				
構成土	第3面	ウシ	下顎臼歯	右		22	
構成土	第3面	イヌ	腸骨	左		17	若体
構成土	第3面	ウマ	臼歯片				
構成土	第3面	ヒト	上腕骨	右			

【青白磁】		
	碗	1
	四耳壺	1
	小壺	1
【陶器】		
瀬戸	壺	2
	小壺	1
渥美	甕	1
常滑	甕	133
	壺	2
	小壺	1
	広口壺	1
	短頸壺	2
	片口鉢Ⅰ類	22
	片口鉢Ⅱ類	7
摩托陶片	1	
山茶碗窯	碗	4
【土師器】		
	甕	7
	器種不明	2
【須恵器】		
	甕	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
	碗	1
【瓦】		
	破片	1
【石製品】		
	硯	1
	砥石	1
【骨角製品】		
	用途不明品	1
	未成品	2
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	12
	合計	414

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ ロクロ成形	371
	かわらけ 手づくね成形	33
【白磁】		
	小壺	1
	碗	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
	坏Ⅲ類	1
	坏	2
	碗	1
【青白磁】		
	蓋	1
	蓮弁文破片	1
【陶器】		
中国	壺	1
瀬戸	壺	2
	碗	1
	筒形容器	1
渥美	甕	2
	片口鉢	1
常滑	甕	79
	壺	2
	三筋壺	4
	短頸壺	2
	片口鉢Ⅰ類	10
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	碗	4
【土器】		
	火鉢	3
【土師器】		
	甕	7
【須恵器】		
	甕	2

【瓦】		
	平瓦	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
	砥石	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	5
	刀子	1
	合計	550

第2面		
産地	器種	破片数
土坑 11		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11
	かわらけ 手づくね成形	6
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
山茶碗窯	碗	1
【土師器】		
	甕	4
	坏	1
	合計	25

土坑 12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10
	かわらけ 手づくね成形	27
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	甕	1
【土師器】		
	甕	4
【須恵器】		
	甕	1
	合計	44

土坑 13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10
	かわらけ 手づくね成形	28
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅰ類	1
【土製品】		
	土錘	1
【土師器】		
	甕	3
	合計	47

土坑 14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
	かわらけ 手づくね成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	2
【土師器】		
	甕	1
【金属製品】		
	釘	1
	合計	27

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	212
	かわらけ 手づくね成形	205

【白磁】		
	碗	2
	皿Ⅸ類	2
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2
	碗Ⅱ類	7
	碗	3
	折縁深皿	1
	坏	1
【青白磁】		
	合子蓋	1
【陶器】		
渥美	壺	1
常滑	甕	4
	壺	1
山茶碗窯	碗	4
【土器】		
	火鉢	1
	埴埴	1
【土師器】		
	甕	15
	坏	2
	器種不明	3
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	丸瓦	1
【石製品】		
	砥石	2
【金属製品】		
	釘	6
	合計	478

第3面		
産地	器種	破片数
土坑 15		
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	8
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	5
【土師器】		
	甕	3
【木製品】		
	杭	1
	合計	19

土坑 17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
【土師器】		
	甕	4
	合計	5

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	29
	かわらけ 手づくね成形	11
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	皿Ⅰ類	1
【陶器】		
渥美	甕	1
	壺	1
【土師器】		
	甕	8
【須恵器】		
	蓋	1
	合計	53



1. 調査区南壁土層断面(北から)



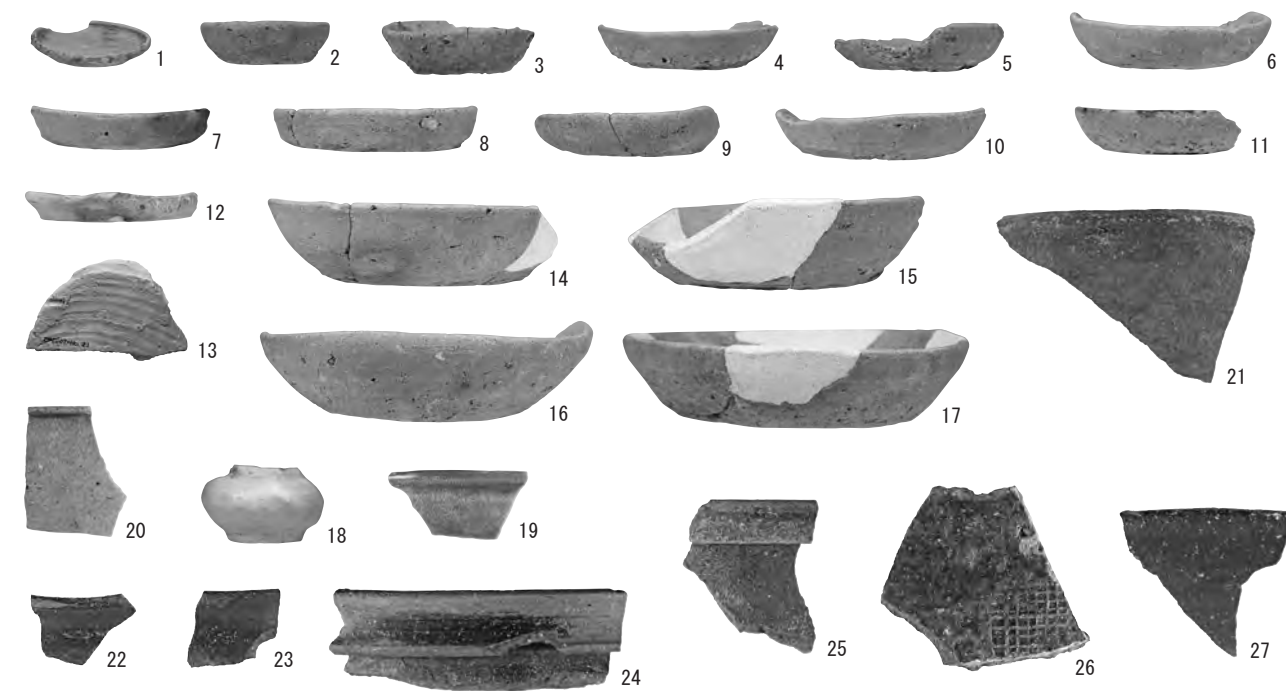
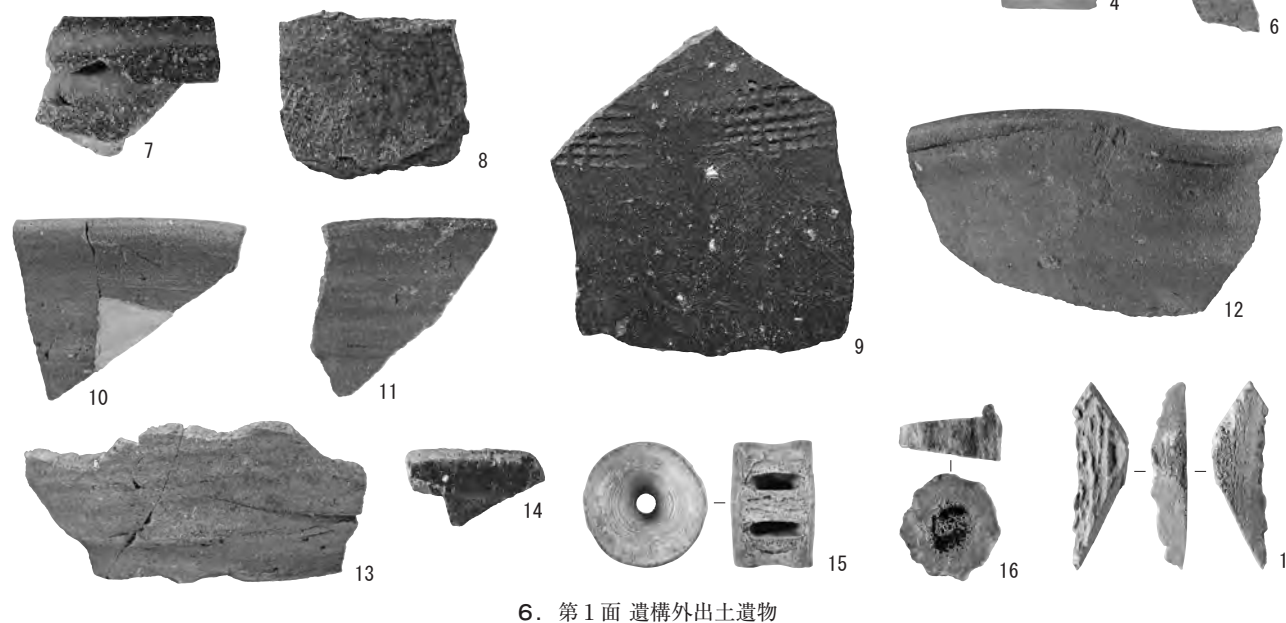
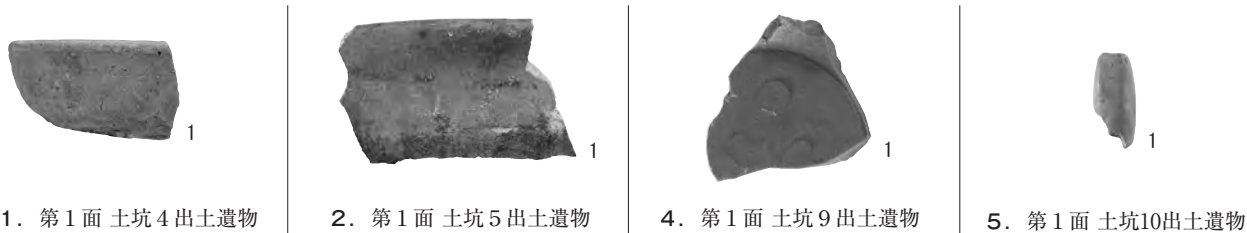
2. 第1面全景(北東から)



1. 第2面全景(北西から)



2. 第3面全景(北西から)



7. 第1面 構成土出土遺物(1)

图版 4



28



29



30

1. 第1面 構成土出土遺物(2)



1

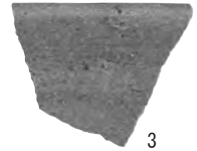


1



1

2



3

2. 第2面 土坑11出土遺物

3. 第2面 土坑13出土遺物

4. 第2面 土坑14出土遺物



1



2



3



4



5



8



6



7



9

5. 第2面 遺構外出土遺物



1

6. 第3面 土坑15出土遺物



1

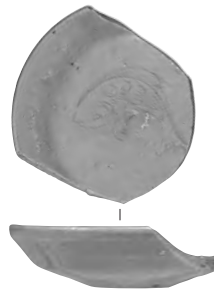
7. 第3面 土坑17出土遺物



1

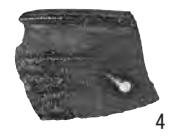


2



1

3

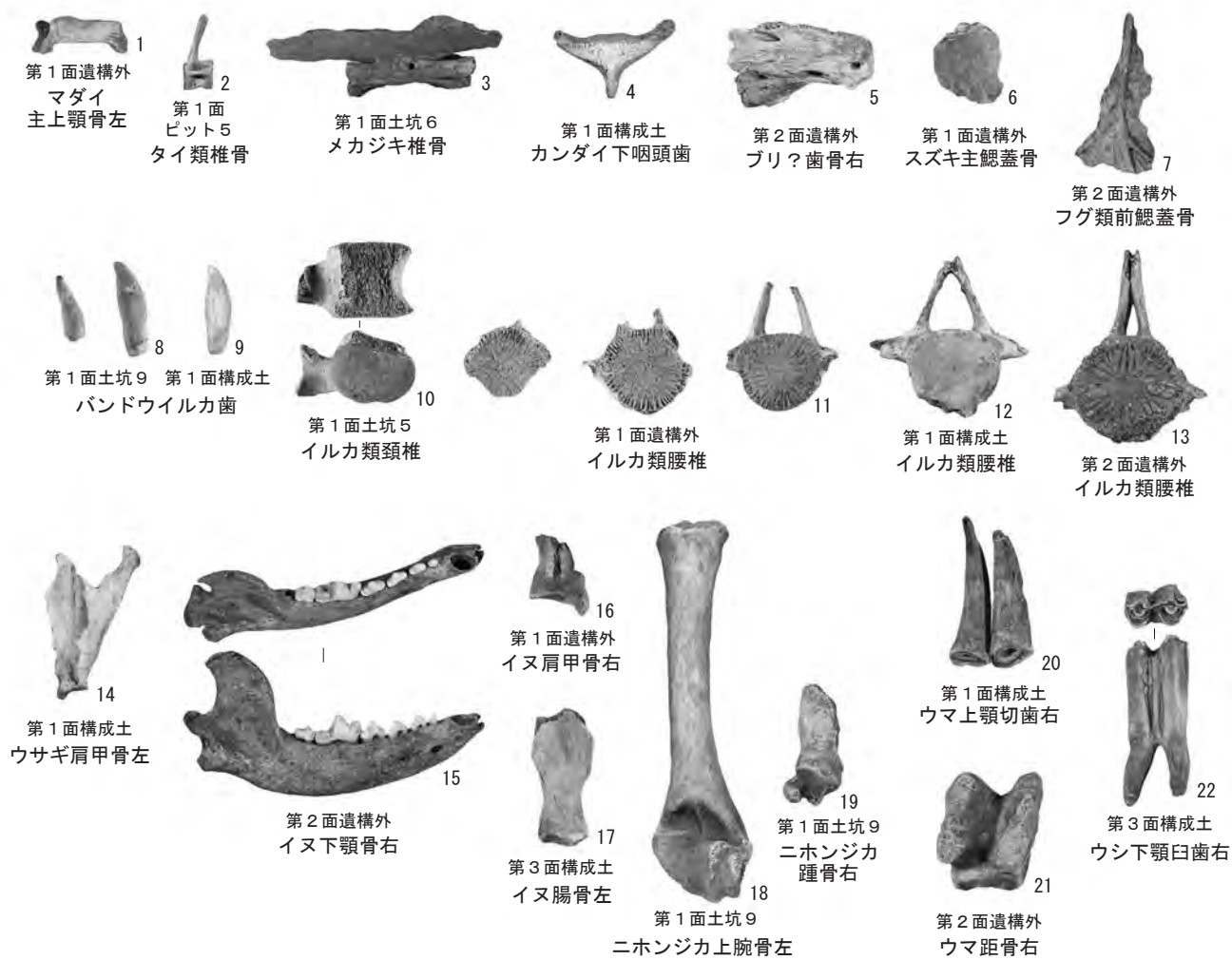


4



5

8. 第3面 構成土出土遺物



1. 出土動物遺体

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座一丁目893番9地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座一丁目893番9地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年7月24日～同年8月1日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約13㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 原 廣志
調 査 員 梅岡ケイト・小野夏菜・須佐仁和
作 業 員 沼上三代治・倉澤六郎・金丸義一・丹野正弘
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を原 廣志、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZS」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	308
第1節 調査に至る経緯と経過	308
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	308
第3節 周辺の考古学的調査	310
第二章 堆積土層	314
第三章 発見された遺構と遺物	314
第1節 第1面の遺構と遺物	314
第2節 第2面の遺構と遺物	316
第四章 まとめ	317

挿図目次

図1 遺跡位置図	309	図8 第1面ピット5出土遺物	315
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	311	図9 表土出土遺物	315
図3 調査区位置図	313	図10 第1面構成土出土遺物	316
図4 調査区配置図	313	図11 第2面遺構分布図	316
図5 調査区西壁土層断面図	314	図12 第2面溝状遺構1	317
図6 第1面遺構分布図	314	図13 第2面溝状遺構1出土遺物	317
図7 第1面土坑1	315	図14 第2面土坑2	317

表目次

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧	312	表4 出土動物遺体一覧	319
表2 第1面出土遺物観察表	319	表5 遺構計測表	319
表3 第2面出土遺物観察表	319	表6 出土遺物一覧表	320

図版目次

図版1	1. 調査区西壁土層断面(東から)	321	2. 第1面構成土出土遺物	322
	2. 第1面全景(北から)	321	3. 表土出土遺物	322
	3. 第2面全景(北から)	321	4. 第2面溝状遺構1出土遺物	322
図版2	1. 第1面ピット5出土遺物	322	5. 出土動物遺体	322

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座一丁目893番9で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡(神奈川県遺跡台帳No.261)の範囲内にあたり、近隣の確認調査結果から、地下に中世の遺構が存在することが確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される範囲について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、原 廣志が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年7月24日～同年8月1日までの約1週間で、調査面積は約13㎡である。現地表の標高は約5.4mを測る。調査は重機により表土及び遺構確認面までの堆積土を1.5m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～2面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月1日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -76592.873、Y = -25173.620)、(X = -76629.429、Y = -25174.237)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡(No.261)は、鎌倉市内中心部の南東域に位置し、国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)にほど近い、鎌倉市材木座一丁目919番19に所在する。また、調査地点のすぐ北東側には、大船駅から久里浜駅を結ぶJR横須賀線が走行している。なお、本地点から材木座海岸までの距離は約700m強である。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡(No.245)、西は滑川の東岸を境に由比ヶ浜中世集団墓地遺跡(No.372)と接し、東は能蔵寺跡(No.314)、実相寺旧境内遺跡(No.255)、弁ヶ谷遺跡(No.249)、光明寺旧境内遺跡(No.316)との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、地内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五丁目、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地のやや東側を南北方向に延びる道筋(小町大路)と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、やや南に下った向福寺付近で5m前後、遺構が発見された調査地点としては最も南に位置する材木座六丁目742番4外地点(本分冊掲載)付近では4.0～4.5mほどで、近年の調査事例では海岸線に近い調査地点である。

歴史的には、相模湾に面して南西に開けた弓形の海岸は由比ヶ浜(前浜・西浜)と呼び、鎌倉時代に



図1 遺跡位置図

材木を扱う商工業者組合である「座」ができたことがこの地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7ヵ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千朶積座・相物座・松物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港遺跡として国の史跡に指定されている。

また、本調査地点の西側には、かつての小町大路とされる道筋があり、六浦道と交差する場所にあった筋替橋から宝戒寺、本覚寺の門前を通り、大町大路を横断、乱橋を渡って材木座まで通ずる基幹道路であった。若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、本興寺、妙長寺、長勝寺、来迎寺、実相寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、捕陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

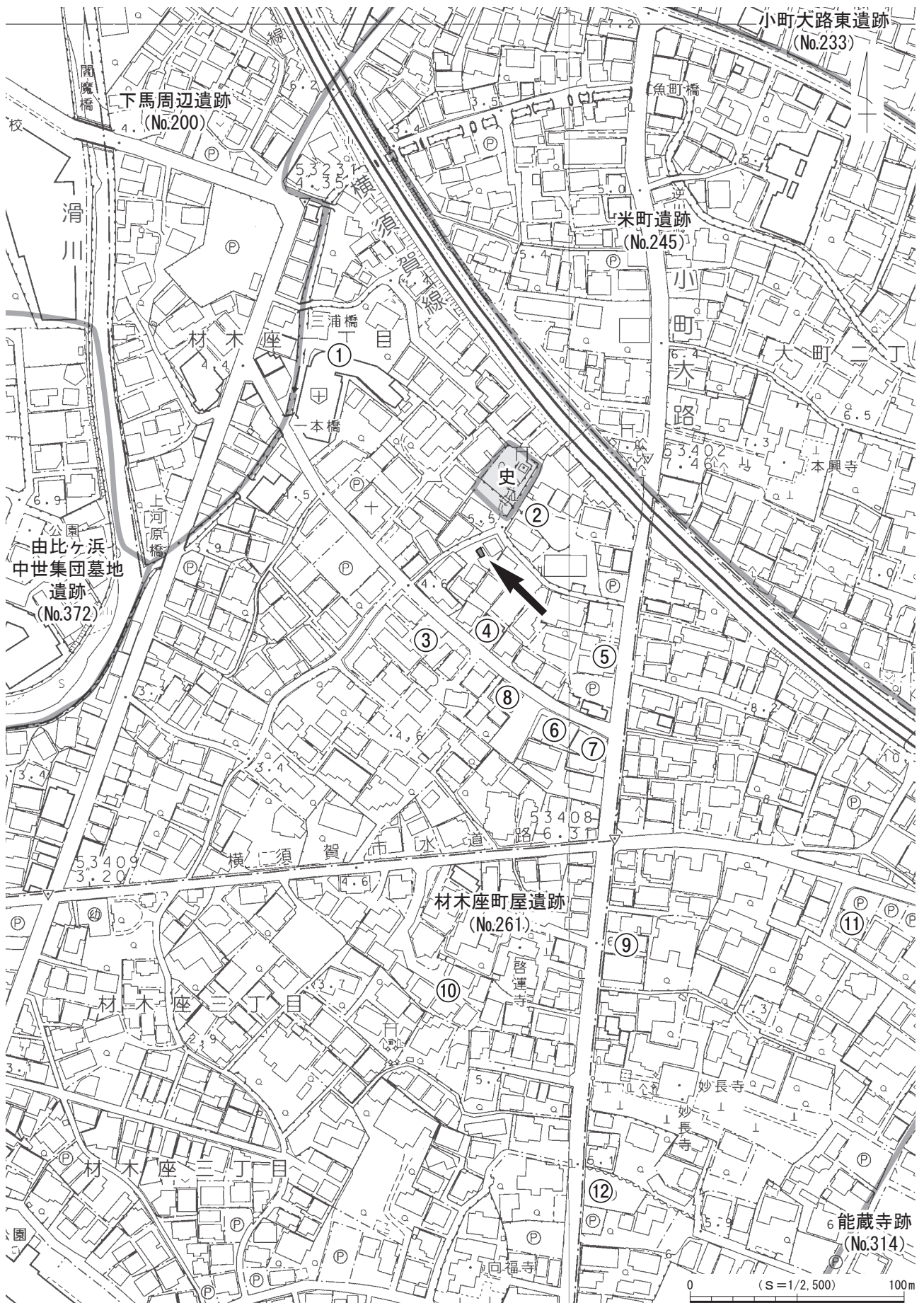
本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、材木座町屋遺跡の北側域にあたる12地点の内容について概観したい。

地図上で最も北側に位置する①材木座一丁目910番地点(森・堀川 2001)は、遺跡包蔵地内では北端寄りにあたり、滑川の支流である逆川の左岸域に所在する。調査面積は450㎡で、調査事例のなかでは面積が広い。本調査地点は国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)から北西約50mに位置する。調査で発見された遺跡の時代は中世と古代に大別され、中世ではこの地域の基幹と推測される道路やそれと直交関係にある溝、井戸、方形土坑、柱穴などが検出された。とくに方形土坑からは動物骨の切断片や未加工品が多く検出され、この地域一帯が職人集団や商工業者との関わりが深い地域であることを示唆している。古代では6棟を数える掘立柱建物が検出され、これらは側柱建物であるが、中世以前の様相を知るうえで注目される。

元八幡の南東隅に位置する②材木座一丁目893番9地点は本報告書に掲載されている。限られた面積での調査であるためその詳細は不明であるが、出土遺物から13世紀後半から14世紀前半頃のものとして推測される溝や土坑、ピットなどがわずかに確認されている。

本地点の北西約80mの道路沿いに位置する③材木座一丁目144番3地点(木村・田代 1991)は、遺跡内では最も早く調査が行われた地点である。調査面積は2本のトレンチを合わせても40㎡に過ぎず、遺構検出面は地山面の一面のみであった。遺構は柱穴や井戸、土坑、溝などで、調査区内では明確な建物は確認されていないが、柱穴列の存在からある程度の規模をもつ掘立柱建物や柵列状の遺構が想定されている。小規模な溝は、町屋の小区画や路地などの小路に伴う側溝との考えが示されている。これらは出土遺物から井戸や土坑の一部は13世紀前半に遡るとし、また確認された遺構面は14世紀前半から中頃にかけて削平されたと考えられている。

道路を挟んだ斜向かいに位置する④材木座一丁目890番7地点(汐見・渡邊 2000)では、14世紀代を中心とする小規模な柱穴や方形竪穴建物、土坑、溝などが確認されているが、調査地点が狭小なこともあり、各遺構の詳細は不明である。遺構の内容から想定すると本地点も③と同様に町屋ないし庶民層の生活の場であったと考えられる。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

小町大路の西側道路に面した⑤材木座一丁目921番5外地点(齋木・降矢 2007)でも10㎡ほどの狭小な調査地点であったが、13世紀後半から14世紀代の南北方向の溝や柱穴、土坑などが発見されている。主要な遺構は土坑と柱穴であるが、建物の復元までには至っていない。

地点④の道路を挟んだ斜向かいの南側では連続して3ヵ所、⑥材木座一丁目889番4地点(A地点)、⑦材木座一丁目889番5地点(B地点)、⑧材木座一丁目149番4地点(C地点)(降矢・齋木 2008 a～c)の調査が行われている。いずれも生活痕跡は13世紀前半から確認され、3～4面の生活面ないし遺構確認面が検出されている。地点⑥では15世紀の大小のかわらけがまとまって廃棄されたかわらけ溜まりが発見されている。

小町大路沿いの東側に位置する⑨材木座二丁目208番1地点(伊丹・渡邊 2017)では、4面にわたる生活面が検出され、13世紀前半から15世紀にかけての遺構変遷が示されている。第1面は土坑、第2面は方形竪穴建物が主体で、第3・4面は礎石をもつ柱穴が調査区全体に広がり、掘立柱建物群の存在を示唆している。とくに調査地点の性格を考えるうえで、第2面の方形竪穴建物群は倉庫としての利用をうかがわせるものであり、加えて小町大路に面している調査地点であることは重要な点であろう。

小町大路からやや西に入った⑩材木座三丁目164番外地点(熊谷 2009)は、調査面積1000㎡を超える遺跡地内では最も広い調査地点である。遺構は、南北道路、溝、方形竪穴建物、井戸、土坑墓のほか、多数の柱穴や土坑など、遺構総数は合わせて1000基を超える。これらの遺構は13世紀前半から中頃と、13世紀後半から14世紀代に大別され、調査区西端で発見された南北道路には側溝が伴っている。また、方形竪穴建物は道路に面するように配され、鑿や槍鉋といった工具類の出土や、切断痕のある石材片や鉄滓、轆の羽口、加工痕の残る動物骨なども出土しており、調査者は石製品や鉄製品、骨角製品などの生産・加工に携わる職人集団の存在を示唆している。

東端寄りに位置する⑪材木座二丁目217番6外地点(瀬田 1995)では、調査形状がL字状の不規則な条件にも関わらず3面にわたる生活面が確認された。遺構の中心は第2面の14世紀代の時期であるが、その主体である方形竪穴建物や方形土坑はほぼ同一主軸上にあり、特徴的な遺物として、鉾滓、取鍋、轆の羽口などの鑄造に関わるものや、砥石や切断痕、加工痕を有する動物骨などの出土もあり、⑩同様に金属製品や骨角製品の生産・加工に携わる職人集団の可能性を示唆している。

最後に地図上では最も南側に位置する⑫材木座二丁目236番1地点(安藤 2017)は、小町大路に面し、13世紀から15世紀代にわたる遺構・遺物が検出されている。遺構は方形竪穴建物や掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑などで、これらは東西溝の南側から発見されており、なかでも方形竪穴建物や掘立柱建物の配置状況は⑩や⑪の遺構配置と類似している。

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目919番19地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目910番地点	森・堀川 2001
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目893番9地点	本報告
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3地点	木村・田代 1991
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7地点	汐見・渡邊 2000
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目921番5外地点	齋木・降矢 2007
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番4地点(A地点)	降矢・齋木 2008 a
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番5地点(B地点)	降矢・齋木 2008 b
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目149番4地点(C地点)	降矢・齋木 2008 c
⑨	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目208番1地点	伊丹・渡邊 2017
⑩	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目164番外地点	熊谷 2009
⑪	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目217番6外地点	瀬田 1995
⑫	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目236番1地点	安藤 2017

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図3 調査区位置図

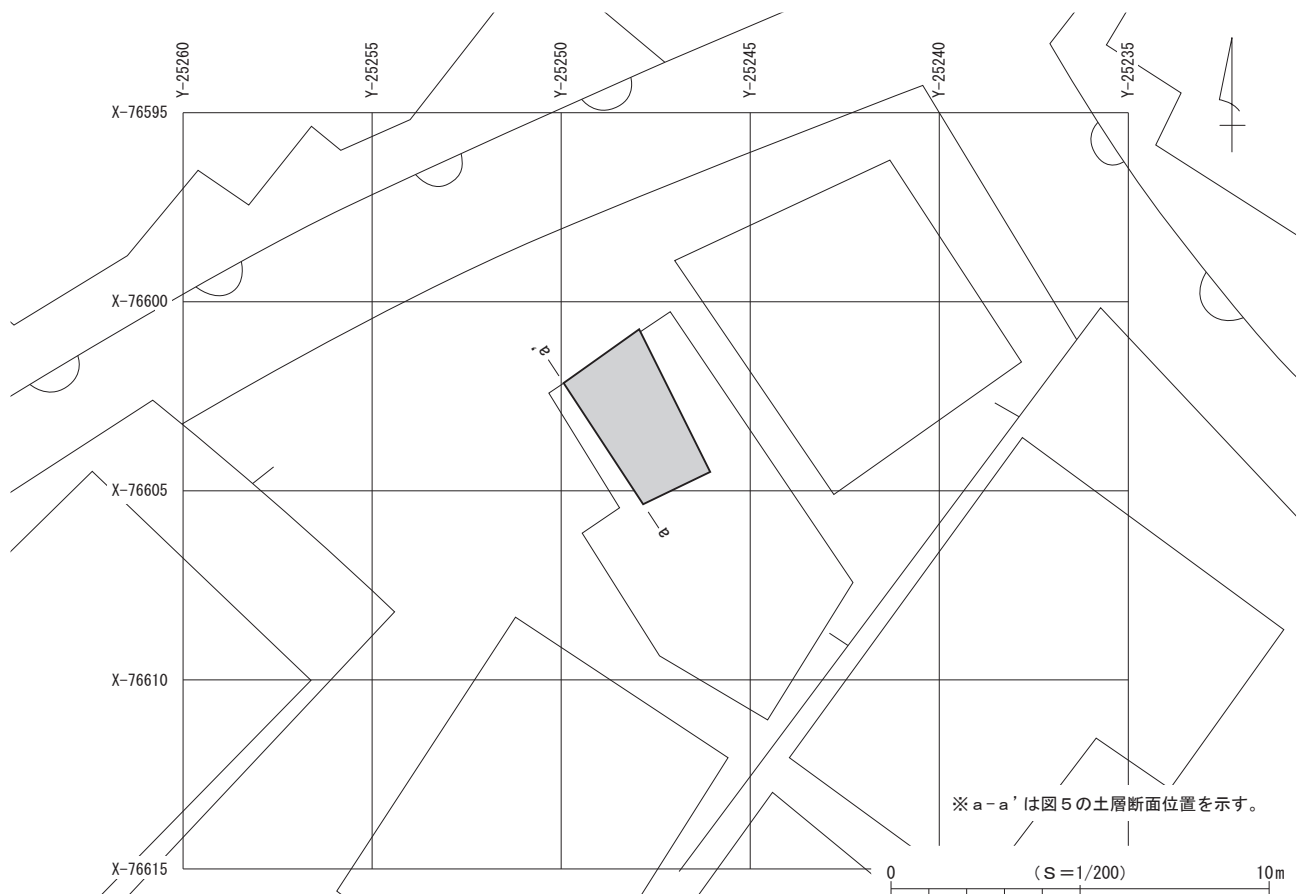
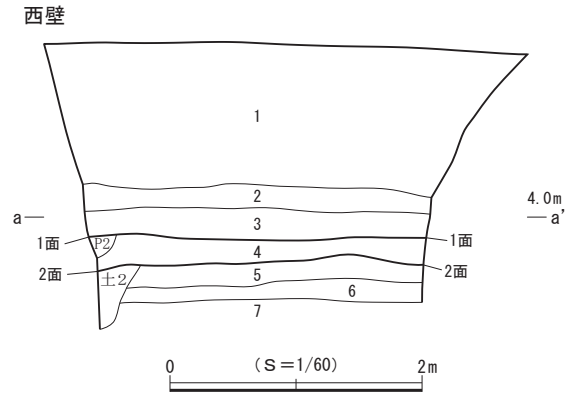


図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1面および第2面の合計2面である。ここでは、遺存状況の良い調査区西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約5.4mを測り、最上部には層厚120cm前後の表土(1層)、層厚15~22cmの締まりのない暗茶褐色砂質土(2層)と層厚20~25cmの貝殻粒・遺物粒を含む締まりのない暗茶褐色砂質土(3層)が堆積している。遺構確認面の第1面は4層上面で確認し、確認面の標高は3.8~3.9mを測る。4層は少量の泥岩粒と遺物粒を含み、締まりのややある暗茶褐色砂質土で、層厚13~25cmである。第2面は5層上面で確認し、確認面の標高は3.6~3.7mを測る。5層は多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土で、層厚20cm前後である。5層の下位には地山である青灰色砂が堆積している。



- 1層 表土 大小泥岩ブロックによる埋土。
- 2層 暗茶褐色砂質土 締まりなし。近代遺物混入。
- 3層 暗茶褐色砂質土 貝殻粒・遺物粒含み、砂粒少量含む。締まりなし。
- 4層 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・遺物粒少量含む。締まりややあり。(第1面)
- 5層 茶褐色砂質土 青灰砂ブロック多量に含む。締まりなし。(第2面)
- 6層 茶褐色砂質土 5層に類似するが、締まりあり。
- 7層 青灰色砂 地山

図5 調査区西壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1面および第2面の合計2面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑2基、ピット5基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して2箱を数える。なお、各面の遺構および表土、構成土からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表4に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1~2面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は3.8~3.9mを測る。4層は少量の泥岩粒と遺物粒を含み、締まりのややある暗茶褐色砂質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット5基であり、土坑は調査区北側、ピットは調査区中央付近から南側に分布していた(図6)。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末葉~14世紀前葉頃に属すると考えられる。

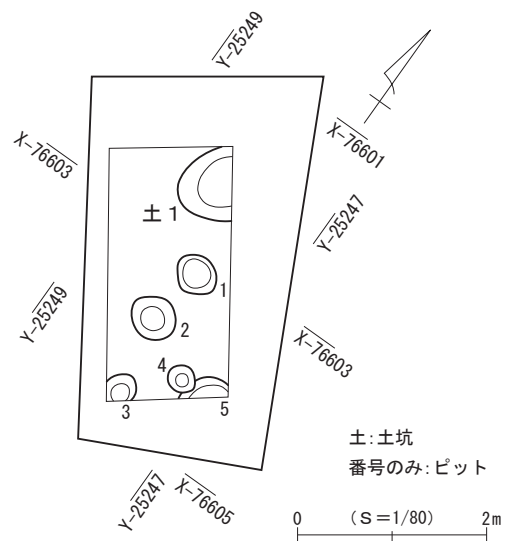


図6 第1面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑 1 (図7)

調査区北隅に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸方向と推定される南北現存長65cm、東西現存長75cm、深さ26cmで、坑底面の標高は3.60mを測る。

遺物は、かわらけ 1 点、陶器 3 点が出土した。

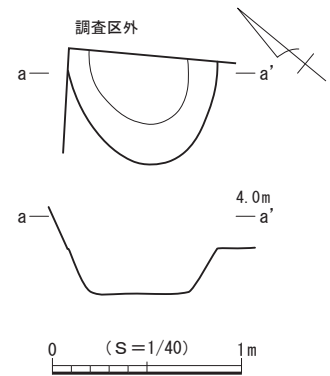


図7 第1面 土坑 1

(2) ピット

第1面では、5基を検出した。いずれも調査区の中央から南側に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、隅丸方形で、長軸は31~52cm、深さが15~43cmである。

出土遺物 (図8)

遺物は5基から出土しており、詳細を表6に掲げた。このうち1点を図示する。

1はピット5から出土したロクロ成形のかわらけであり、口径9.4cmを測る小形品である。

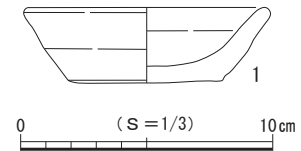


図8 第1面 ピット5出土遺物

(3) 表土出土遺物 (図9)

表土からも遺物が出土しており、このうち6点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.0cmに復元される小形品、2は口径10.0cmを測る中形品である。3は内外面に緑釉が施される口縁部の小破片であり、中国産陶器の盤と考えられるが詳細は不明である。4~6は常滑産の片口鉢I類である。

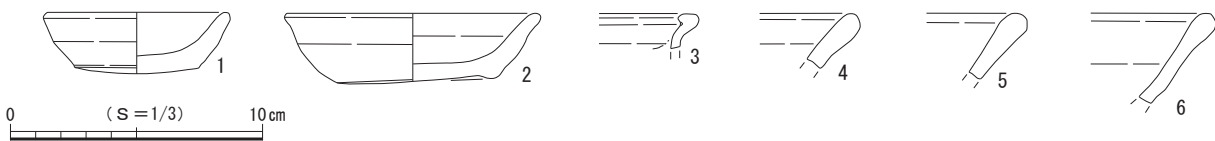


図9 表土出土遺物

(4) 第1面 構成土出土遺物 (図10)

第1面の基盤層である構成土からも遺物は出土しており、このうち7点を図示した。

1~3はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.7cmを測る小形品、2・3は口径10.8~11.7cmを測る中形品である。4はいわゆる百合口の青磁小碗であり、口縁部~体部を襞状に成形する。胎土・釉調から龍泉窯系と考えられる。5は産地不明の須恵質土器であり、口径12.6cmに復元される坏と考えられる。6は凸面に縄目の叩きが施される平瓦。7は現存長47.8cmを測り、端部に柄が作出される建築部材と類推される角材である。

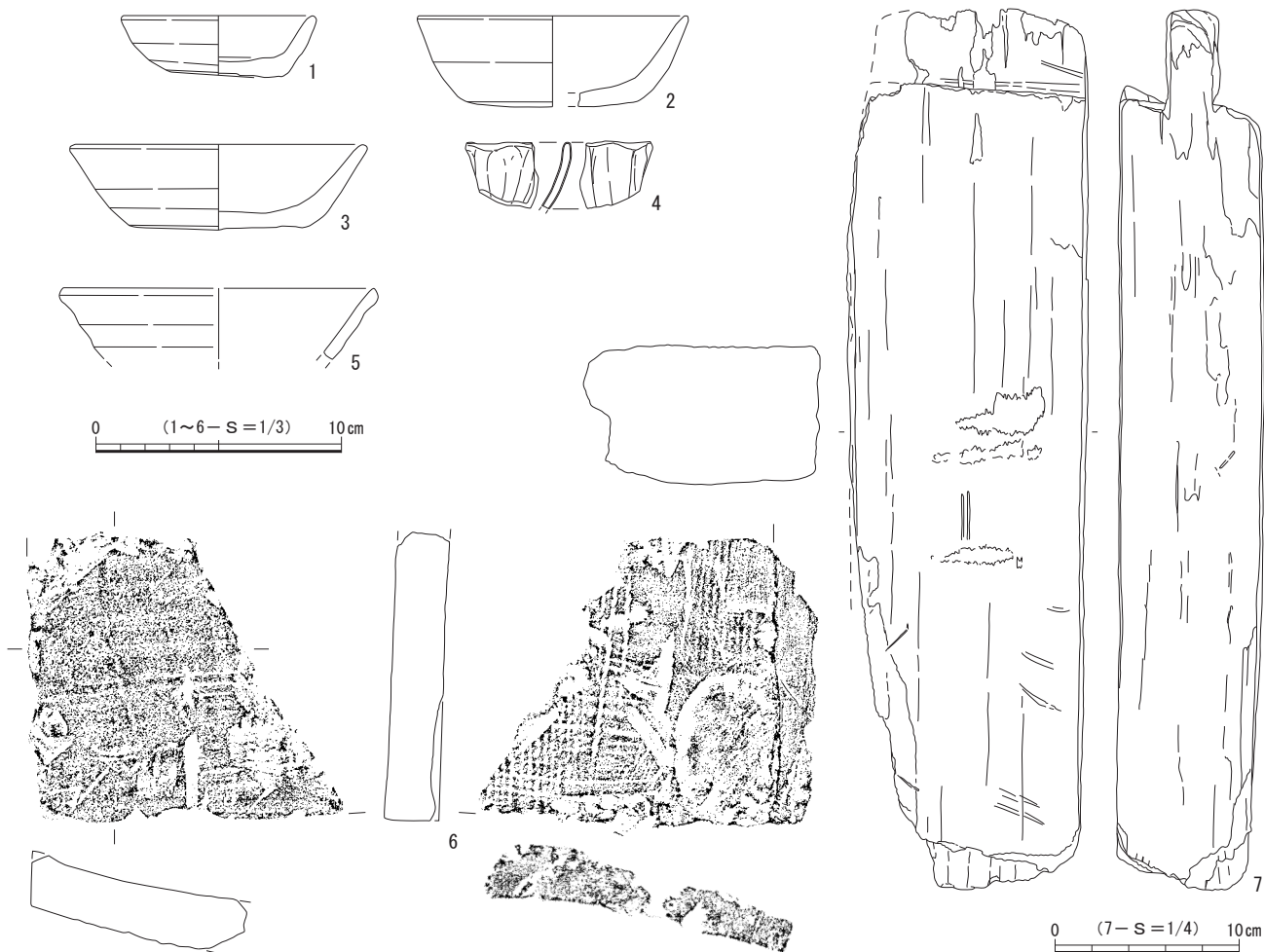


図10 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は5層上面で検出され、確認面の標高は3.6~3.7mを測る。5層は多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑1基である。溝状遺構は調査区西壁に沿って北西-南東方向に延び、土坑は南壁際から検出された(図11)。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1 (図12)

調査区西側に位置する。北西-南東方向に延びているが調査区外に続くため、全容は明らかでない。重複関係では、調査区南西端で土坑2と重複して壊されている。直線的に掘られており、壁は大きく開いて断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.5m、現存幅75cm、深さ14cmで、底面の標高

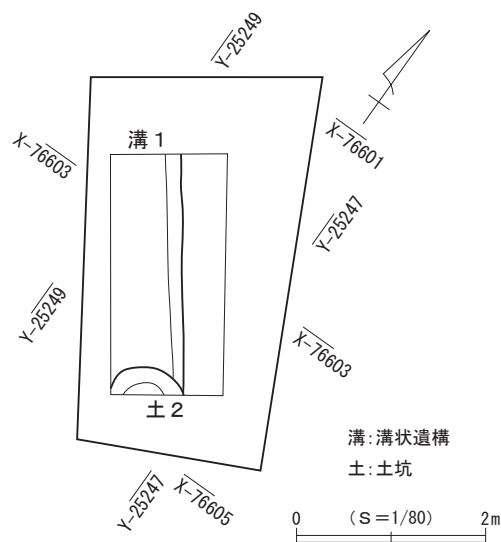


図11 第2面 遺構分布図

は3.32mを測る。主軸方位はN-36°-Wを指す。

出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ3点、陶器7点、木製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は、内折れの口縁部形態をもつ手づくね成形のかわらけであり、口径8.4cmに復元される小形品である。

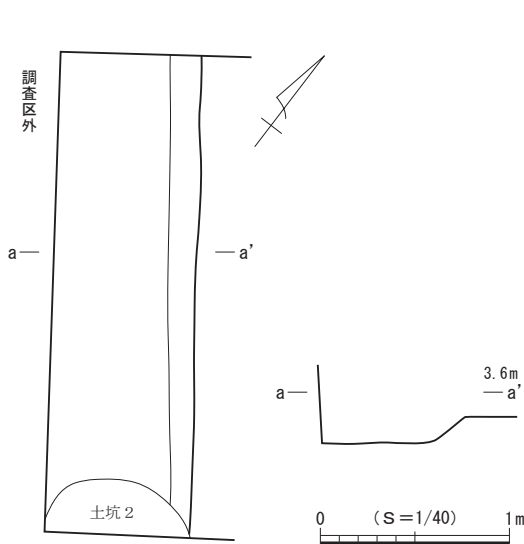


図12 第2面 溝状遺構1

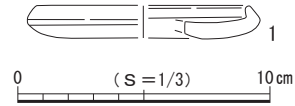


図13 第2面 溝状遺構1 出土遺物

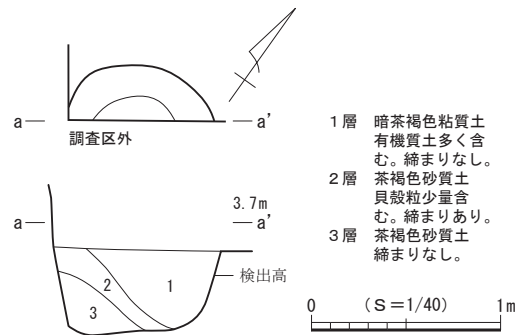


図14 第2面 土坑2

(2) 土 坑

土坑2 (図14)

調査区南壁際に位置する。南東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。溝状遺構1と重複し、南西側を壊している。検出された範囲からは略円形あるいは楕円形を呈するものと思われる。底面は東側がやや高くなり、壁は開いて立ち上がる。規模は北東-南西方向の現存長77cm、北西-南東方向の現存長29cm、確認面からの深さは45cmで、坑底面の標高は3.10mを測る。

遺物は磁器1点、陶器3点が出土した。

第四章 まとめ

今回の調査地点は、材木座町屋遺跡 (No261) の北西側にあたる。標高3.5m前後の青灰色を呈する海浜砂層上に形成された遺跡であり、地点の北東側には元八幡宮 (由比若宮) が鎮座する。調査の結果、いずれも中世に属する2面の確認面で、溝状遺構1条、土坑2基、ピット5基を検出した。また、出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して2箱を数える。

調査面積が約13㎡と狭小であることから具体的な遺構の分布状況や配置などの検討は難しいが、以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめをしたい。

〈第1面〉

第1面では、土坑1基、ピット5基を検出した。これらは、少量の泥岩粒と遺物粒を含む暗茶褐色砂質土を掘り込んで構築されていた。確認面の標高は3.8~3.9mを測る。土坑は調査区北側、ピットは調査区中央付近から南側に分布し、調査区外にも展開する様相がみられた。遺物は主にかわらけ、磁器、

陶器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面では、溝状遺構1条、土坑1基を検出した。これらは、多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土を掘り込んで構築されていた。確認面の標高は3.6～3.7mを測る。溝状遺構は北西－南東方向を指して調査区外に延び、土坑は南東側調査区外へと展開していた。遺物は僅少であり、詳細な時期は不明瞭であるが、第1面との比較検討も踏まえて本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 安藤龍馬 2017「材木座町屋遺跡(No.261)発掘調査成果概要」『第27回 鎌倉市遺跡調査・研究会発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 伊丹まどか・渡邊美佐子 2017「材木座町屋遺跡(No.261)材木座二丁目208番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡(No.261)鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 熊谷 満 2009「材木座町屋遺跡(No.261)の調査 材木座3-164他地点」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23』平成18年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・渡邊美佐子 2000「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目890番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 瀬田哲夫 1995「7. 材木座町屋遺跡(No.261)鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』平成6年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008a「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008b「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008c「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目149番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子・堀川浩通 2001「材木座町屋遺跡の調査」『第11回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980
- 『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
ピット5 出土遺物(図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.4	6.0	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	3/4

表土出土遺物(図9)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	5.0	2.4	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/4 強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	10.0	6.2	6.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
3	陶器	中国 盤	-	-	現 1.4	胎土: 緻密 色調: 胎土-黄灰色、釉-緑色	口縁部片
4	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 2.2	胎土: 白色粒、小石粒、やや密 色調: 褐灰色	口縁部片
5	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 2.6	胎土: 白色粒、小石粒、やや粗 色調: 灰色	口縁部片
6	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 3.6	胎土: 白色粒、小石粒、やや密 色調: 灰色	口縁部片

第1面 構成土出土遺物(図10)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	7.0	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2 弱
3	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	6.7	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
4	磁器	青磁 小碗	-	-	現高 2.7	内外面-襷状に成形 色調: 胎土-灰白色、釉-青緑色 産地-龍泉窯系青磁	口縁部片
5	須恵質 土器	坏	(12.6)	-	現高 2.9	胎土: 緻密、白色粒 色調: 灰色 備考: 口縁部降灰 備考: 産地不明	口縁部片
6	瓦	平瓦	現長 12.1	現幅 13.3	厚 2.2	凸面-側縁方向に縄目叩き 凹面-布目痕+端縁方向にヘラ調整、端縁-ヘラ調整 胎土: 密、雲母、小石粒 色調: 灰色 備考: 粘土級じ合わせ目?	小片
7	木製品	部材	現長 47.8	現幅 13.2	厚 2.6~2.4	端部に柄作出	

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構1 出土遺物(図13)							
1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.4)	-	1.3	口縁部内折れ 底面-指頭押さえ+ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/5

表4 出土動物遺体一覧(図版2)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
表土		アカニシ	殻柱			7	2個
表土		アカニシ			殻高: 85.5		穿孔
表土		サザエ	蓋		径: 31.0		
表土		ツメタガイ					
表土		ハマグリ		左			
表土		ハマグリ					破片
ピット1	第1面	サザエ	蓋		径: 31.4		
ピット2	第1面	チョウセンハマグリ		左			
ピット2	第1面	ハマグリ		左			
ピット2	第1面	バイガイ			殻高: 52.2	3	
ピット2	第1面	バイガイ					
構成土	第1面	アカニシ	殻柱			6	2個
構成土	第1面	オオタニシ				1	
構成土	第1面	マルタニシ			殻高: 42.6	2	
構成土	第1面	サザエ	蓋		殻長: 50.0 46.0 37.3	8	3個
構成土	第1面	ツメタガイ				4	
構成土	第1面	ヤツシロガイ			殻高: 77.9	5	
構成土	第1面	イルカ類	下顎骨片				2個
構成土	第1面	イルカ類	肩甲骨	左			

表5 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<65>	<75>	26	溝状遺構1	第2面	<250>	<75>	14
ピット1	第1面	46	41	36	土坑2	第2面	<77>	<29>	45
ピット2	第1面	51	46	21					
ピット3	第1面	<38>	<31>	15					
ピット4	第1面	31	28	43					
ピット5	第1面	<52>	<21>	29					

表6 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ ロクロ成形	146
	かわらけ 手づくね成形	1
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
	碗	2
	皿	2
	鉢	1
	器種不明	3
【青白磁】		
	合子蓋	1
【陶器】		
中国	盤	1
	壺	1
瀬戸	四耳壺	2
	壺	2
	入子	2
	蓋	1
	盤	5
渥美	器種不明	1
常滑	甕	49
	壺	2
	片口鉢Ⅰ類	11
	片口鉢Ⅱ類	2
【土師器】		
	甕	2
	器種不明	3
【瓦質土器】		
	火鉢	3
		合計 247

第1面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	3
		合計 4

ピット1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	17
【陶器】		
常滑	甕	3
【石製品】		
	石臼	1
		合計 21

ピット2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
	壺	1

【木製品】		
産地	器種	破片数
	箸状	1
		合計 4

ピット3		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 2

ピット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ピット5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 3

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
	かわらけ 手づくね成形	6

【白磁】		
産地	器種	破片数
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	3
	小碗	1
	坏	1

【陶器】		
産地	器種	破片数
瀬戸	壺	1
	入子	2
	皿	1
渥美	甕	1
常滑	甕	37
	片口鉢Ⅱ類	3
	山茶碗	1

【須恵質土器】		
産地	器種	破片数
	坏	1

【瓦質土器】		
産地	器種	破片数
	火鉢	1

【瓦】		
産地	器種	破片数
	平瓦	1

【木製品】		
産地	器種	破片数
	箸状	3
	板折敷	1
	柱	1
	部材	1
	用途不明	4
		合計 154

第2面

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	1

【陶器】		
産地	器種	破片数
常滑	甕	6
	壺	1

【木製品】		
産地	器種	破片数
	箸状	1
	用途不明	1
		合計 12

土坑2		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
【陶器】		
常滑	甕	3
		合計 4



1. 調査区西壁土層断面(東から)



2. 第1面全景(北から)

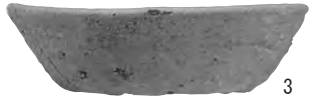


3. 第2面全景(北から)

図版 2



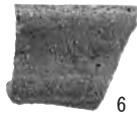
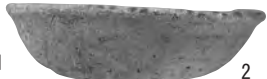
1. 第1面 ピット5 出土遺物



2. 第1面 構成土出土遺物



7



3. 表土出土遺物



4. 第2面 溝状遺構1 出土遺物



第1面構成土
オオタニシ



第1面構成土
マルタニシ



第1面ピット2
パイガイ



第1面構成土
ツメタガイ



第1面構成土
ヤツシロガイ



第1面構成土
アカニシ



表土
アカニシ



第1面構成土
サザエ 蓋

5. 出土動物遺体

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座六丁目742番4外地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座六丁目742番4外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年7月21日～同年8月26日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約45㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 滝澤晶子
調査員 安藤龍馬 渡辺美佐子
作業員 渡辺輝彦・伴 一明・丹野正弘・鈴木啓之
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を滝澤晶子、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZYN」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本品子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	327
第1節 調査に至る経緯と経過	327
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	327
第3節 周辺の考古学的調査	328
第二章 堆積土層	333
第三章 発見された遺構と遺物	333
第1節 第1面の遺構と遺物	333
第2節 第2面の遺構と遺物	341
第3節 第3面の遺構と遺物	345
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について	348
第五章 まとめ	349

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	329	図16 表土出土遺物(2)	340
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	330	図17 第1面 構成土出土遺物	340
図3 調査区位置図	332	図18 第2面 遺構分布図	341
図4 調査区配置図	332	図19 第2面 方形土坑1	342
図5 調査区南壁 土層断面図	333	図20 第2面 方形土坑1出土遺物	342
図6 第1面 遺構分布図	334	図21 第2面 土坑13	342
図7 第1面 土坑1~12	336	図22 第2面 土坑13出土遺物	342
図8 第1面 土坑1出土遺物	337	図23 第2面 構成土出土遺物	343
図9 第1面 土坑6出土遺物	337	図24 第3面 遺構分布図	344
図10 第1面 土坑7出土遺物	337	図25 第3面 溝状遺構1	344
図11 第1面 土坑11出土遺物	337	図26 第3面 溝状遺構1出土遺物	345
図12 第1面 土坑12出土遺物	337	図27 第3面 土坑14~21	346
図13 第1面 ピット45	338	図28 第3面 土坑21出土遺物	347
図14 第1面 ピット出土遺物	338	図29 第3面 溝状遺構1のイヌ骨出土状態(左) と全身骨格(右)	348
図15 表土出土遺物(1)	339		

表 目 次

表1	材木座町屋遺跡 調査地点一覧……………	331	一覧表……………	354
表2	第1面 出土遺物観察表……………	351	表6	出土人骨・動物遺体一覧表…………… 354
表3	第2面 出土遺物観察表……………	352	表7	遺構計測表…………… 355
表4	第3面 出土遺物観察表……………	353	表8	出土遺物一覧表…………… 356
表5	第3面 溝状遺構1 出土人骨・動物遺体			

図 版 目 次

図版1	1. 南壁土層断面(北から)……………	359	6. 第1面 ピット出土遺物……………	362
	2. 第1面南半全景(東から)……………	359	7. 表土出土遺物(1)……………	362
	3. 第1面北半全景(南から)……………	359	図版5	1. 表土出土遺物(2)…………… 363
図版2	1. 第2面南半全景(南から)……………	360	2. 第1面 構成土出土遺物……………	363
	2. 第2面北半全景(南から)……………	360	3. 第2面 方形土坑1 出土遺物 ……	363
	3. 第3面南半全景(南から)……………	360	4. 第2面 土坑13出土遺物……………	363
図版3	1. 第3面北半全景(南から)……………	361	図版6	1. 第2面 構成土出土遺物…………… 364
	2. 第3面 溝状遺構1 全景(西から)	…………… 361	2. 第3面 溝状遺構1 出土遺物 ……	364
	3. 第3面 溝状遺構1 イヌ骨出土状態		3. 第3面 土坑21出土遺物……………	364
	(東から)……………	361	図版7	1. 第3面 溝状遺構1 出土人骨・
図版4	1. 第1面 土坑1 出土遺物……………	362		動物遺体(1)…………… 365
	2. 第1面 土坑6 出土遺物……………	362	図版8	1. 第3面 溝状遺構1 出土動物遺体
	3. 第1面 土坑7 出土遺物……………	362		(2)…………… 366
	4. 第1面 土坑11出土遺物……………	362	図版9	1. 出土動物遺体(1)…………… 367
	5. 第1面 土坑12出土遺物……………	362	図版10	1. 出土人骨・動物遺体(2)…………… 368

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座六丁目742番4外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）の範囲内にあたる。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成21年3月11日～同3月12日に4㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、15世紀以降と考えられる遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される45㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、滝澤晶子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年7月21日～同年8月26日までの約1ヶ月間で、調査面積は約45㎡である。現地表の標高は5.1m前後を測る。掘削に伴う排土を場内処理する都合から調査区を南北に分け、北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称した。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を1.4m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～3面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月26日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡（No.261）は鎌倉市内中心部の南東域に位置し、本調査地点は材木座海岸にほど近い、鎌倉市材木座六丁目742番4外に所在する。海岸までの距離は190mほどである。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡（No.245）、西は滑川の東岸を境に由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）と接し、東は能蔵寺跡（No.314）、実相寺旧境内遺跡（No.255）、弁ヶ谷遺跡（No.249）、光明寺旧境内遺跡（No.316）との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、市内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された、砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地中央を南北方向に延びる道筋（小町大路）と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、海岸部に近い九品寺前の丁字路付近で5m前後、本調査地点では4.5m前後となり、遺構・遺物を伴う地点としては海岸線に最も近い調査事例の一つとなろう。

本調査地点から海岸まではわずかに190mほどで、相模湾に面して南西に開けた湾内は波も穏やかな砂浜が広がっている。この弓形の海岸を由比ヶ浜（前浜・西浜）と呼び、鎌倉時代に材木を扱う商工業

組合である「座」ができたことが地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7ヵ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千朶積座・相物座・桧物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港いせきとして史跡に指定されている。

また、本調査地点の東側には、かつての小町大路とされる道筋があり、材木座海岸から乱橋を経て、大町四つ角で大町大路と交差し、小町を経て鶴岡八幡宮の東側の鳥居前に通ずる、若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、長勝寺、来迎寺、実相寺、妙長寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、補陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、中小様々な試掘調査までを含めると、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な個人専用住宅建設に伴う調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、本調査地点を中心に示すことができた材木座町屋遺跡の南側域にあたる8地点の内容について概観したい。

地図上の最も北側に位置する。①材木座四丁目256番1の一部外地点の調査(汐見 2002)は、包蔵地範囲内では東側にあたる。調査面積は約103㎡で、調査事例のなかでは面積の広い地点である。方形竪穴建物と土坑を中心に遺構が重層的に発見された地点であるが、調査深度の規制からなかには完掘できなかった遺構もあった出土遺物は13世紀代に帰属するものも出土しているが、その中心は14世紀代で、15世紀前半には方形竪穴建物群は埋没していたと考えられている。

小町大路沿いの東側に位置する②材木座四丁目260番1外地点(田代 1990)の調査では、建物部分の基礎のみの調査であったため、遺構を確認したのは1面のみであるが、方形竪穴遺構や土坑、井戸、溝などが確認されている。これらの遺構は、14世紀後半以降と考えられており、なかでも方形竪穴建物の埋没時期は15世紀代と推測されている。また、遺構の性格を考えるうえで、方形竪穴建物内から出土した多量の鞆の羽口とスラグは注目される。

小町大路を隔てた②の向かいには③材木座三丁目364番1外地点(馬淵 1997)がある。報告者は遺構を上下層に大別し、それぞれの層から方形竪穴建物や方形土坑、土坑、柱穴などの遺構を抽出している。遺構出土の遺物から13世紀前半から特に後半にかけて最も賑わいをみせたことが推測でき、鎌倉幕府の開府や和賀江港の築造、港湾整備に伴ってこの一帯にも開発の手が入ったことを示していると思われる。

九品寺の丁字路の近くにある④材木座五丁目462番2地点(滝澤 2010)の調査では、3面の生活面が確認され、13世紀初頭から前半にかけての方形竪穴建物や柱穴、土坑などが発見されている。

本調査地点に近い、⑤材木座六丁目725番11地点(齊木 2013)の調査では、面積が狭いこともあって詳細は不明であるが、方形竪穴建物や土坑が確認されたことは、材木座地域における遺構群の共通したあり方といえよう。

材木座の東方、弁ヶ谷に近い、⑥材木座六丁目653番1外地点(香川 2009)では、遺構検出面を上位、下位に大別し、15世紀後半には埋没したとされる上位遺構面からは井戸、溝、ピット、胞衣皿埋納遺構、木杭、泥岩地業面などが検出され、調査者はこれらの遺構群について町屋的なあり方として捉えている。

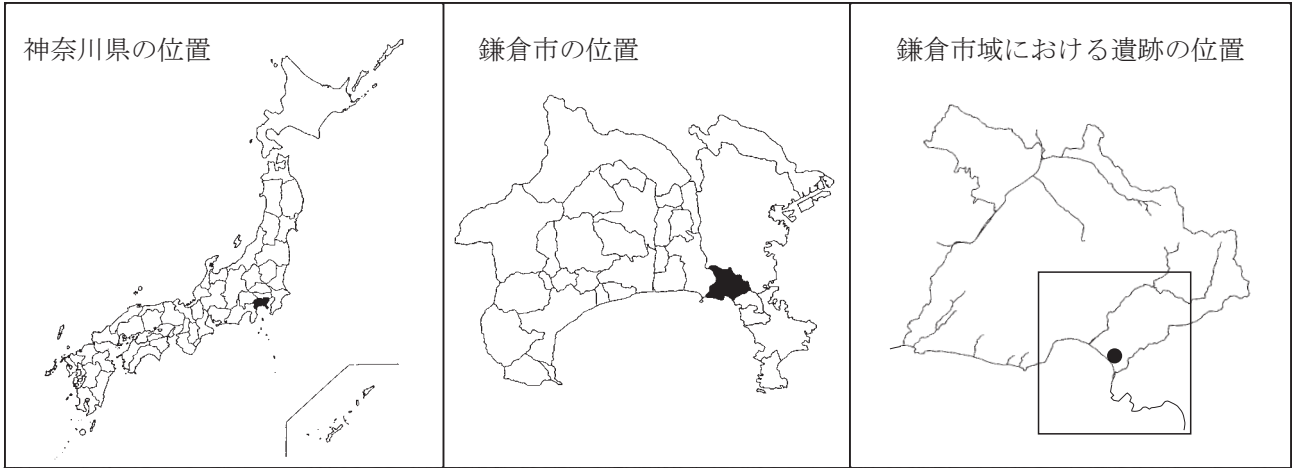


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

また、下位遺構面では建物基礎部分の調査であったことから遺構は溝のみが確認されている。

同じく弁ヶ谷に近い、⑦材木座六丁目674番10地点(A地点)(齊木・根本・降矢 2005)の調査では、このほかに同674番15地点(B地点)、同674番8外地点(C地点)、同674番9地点(D地点)の調査が行われている。各地点はきわめて近い位置関係にありながら、それぞれ様相が異なるためまとめの項では各地点検出遺構の関係を整理し、4時期に区分して各遺構の年代を考察している。1期は12世紀末ないし13世紀前半とされる時期で、遺構は小規模な柱穴群と総柱建物になる可能性がある大形の柱穴が確認されている。2期は13世紀中頃とされる時期で、柱穴や土坑、井戸などが同一年代の遺構と推測している。3期は鎌倉が都市として賑わった頃と考えられる時期で、年代は13世紀後半から14世紀前半頃と推測している。遺構は細分される可能性もあるが、木組井戸や泥岩・凝灰質砂岩を使った道路や区画の痕跡、礎石や礎板を使ったと考えられる建物なども発見され、かつ遺物の種類も豊富であるという。4期は各地点とも後世の影響でおおかたの遺構は失われたと考えられ、14世紀後半から15世紀前半頃とされる井戸が1基だけの様相となっている。

最後に地図上では最も南側に位置する⑧材木座六丁目760番1地点(大河内・伊丹・押木 2001)は、本調査地点と同様に海浜部に近い調査地点である。和賀江島にも近く、南東約100mには光明寺、また北東約100mには補陀洛寺が所在している。調査では海拔2～3mまでの間に4面の遺構面が検出され、生活空間としては鎌倉では最も低地に立地する調査地点である。溝や木組遺構、土坑、ピットなどが発見され、遺構の多くは第2面と第3面で検出されている。これらが営まれた年代は、おおむね14世紀から15世紀前半頃とされ、また出土遺物のなかで灯明皿が多かったことや、瓦、火鉢などに混じって、華瓶・碗・皿など瀬戸窯の製品も目立つことから、調査者は本地点の性格として寺院的な景観も視野に入れて考えている。また、立地という観点からも、海浜部における生活空間としての遺跡の形成過程を考えるうえで、今次調査地点ともに参考となる調査地点と思われる。

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目742番4外地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目256番1の一部地点	汐見 2002
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目260番1外地点	田代 1990
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目364番1外地点	馬淵 1997
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座五丁目462番2地点	滝澤 2010
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目725番11地点	齊木 2013
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目653番1外地点	香川 2009
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目674番10地点、同674番15地点、同674番8外地点、同674番9地点	齊木・根本・降矢 2005
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目760番1地点	大河内・伊丹・押木 2001

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図3 調査区位置図

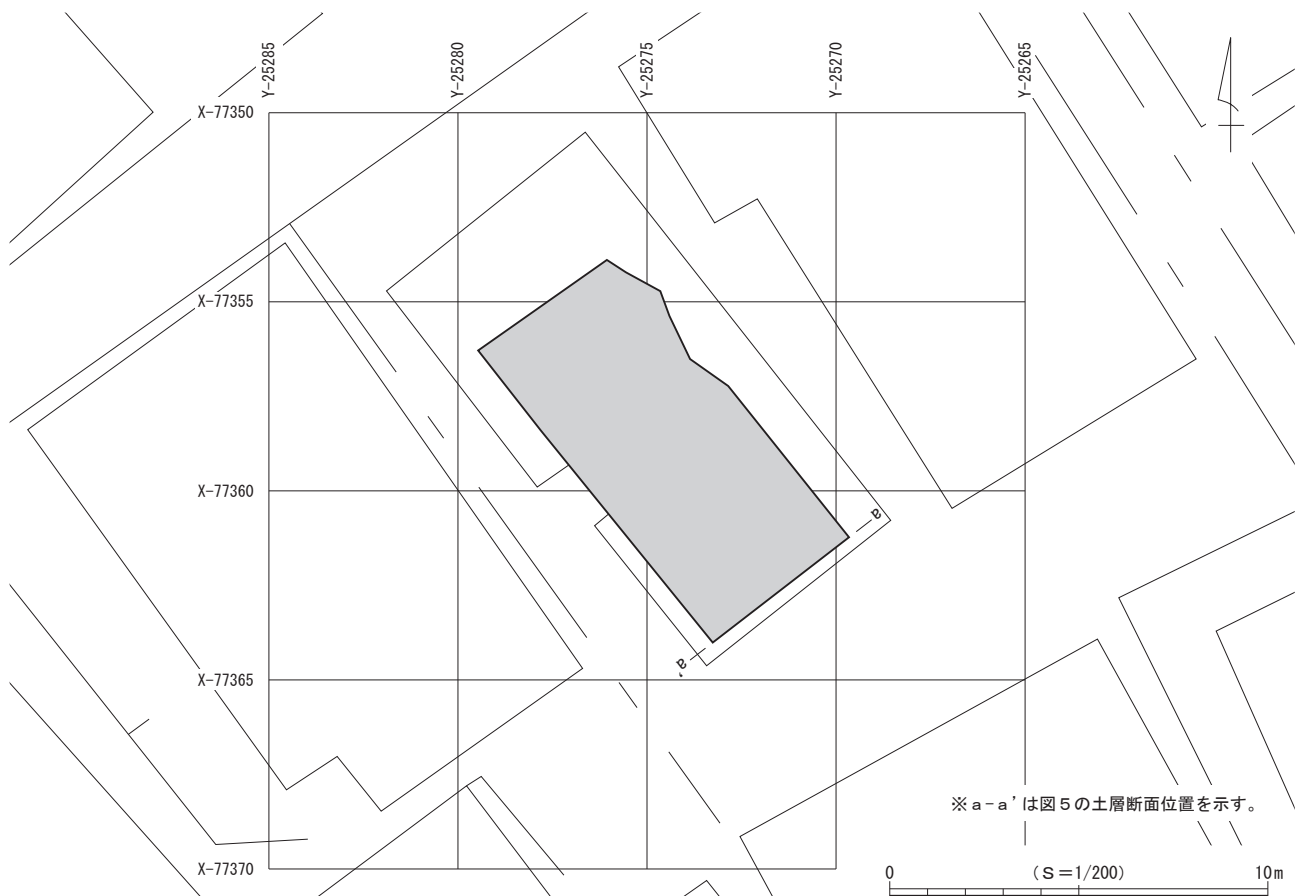


図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～3面までの合計3面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約5.1m前後を測り、最上部には層厚100～120cmの表土(1層)、層厚40cm前後の泥岩粒・炭化物・かわらけ片を含み、締まりがやや弱く粘性のない暗茶褐色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3・4層上面で確認し、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含み、締まり・粘性のある茶褐色粘質土で、層厚25cmである。4層は泥岩ブロックとかかわらけ片を含み、締まりが弱く粘性のある暗褐色粘質土で、層厚10cm前後である。4層の下位には締まりの強い茶褐色砂質土(5・6層)が、層厚合計13～28cm堆積する。第2面は7層上面で確認し、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含み、締まり・粘性の強い灰茶褐色粘土で、層厚5～20cmである。第3面は9層上面で確認し、確認面の標高は3.0～3.1mを測る。9層はやや多くの炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、層厚30～42cmである。9層の下位には、地山である黄色砂(10層)が堆積している。

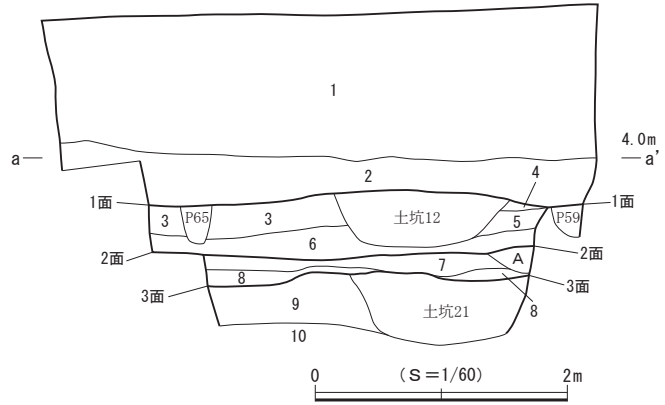
第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、溝状遺構1条、方形土坑1基、土坑21基、ピット92基である。残土置き場の都合から、調査区の北側をⅠ区、南側をⅡ区として分割して調査を行ったが、報告に際しては両区を合わせて記述した。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。なお、各面の遺構および構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表5・6に明記したので参照されたい。以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3・4層上面で検出され、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含み、締まり・粘性のある茶褐色粘質土、4層は泥岩ブロックとかかわらけ片を含み、締まりが弱く粘性のある暗褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑12基、ピット65基であり、調査区全面に分布していた(図6)。土坑のうち10

南壁



- 1層 表土
- 2層 暗茶褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片含む。締まりやや弱く、粘性なし。
- 3層 茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物多量、かわらけ片含む。締まり・粘性あり。(第1面)
- 4層 暗褐色粘質土 泥岩ブロック・かわらけ片含む。締まり弱く、粘性あり。(第1面)
- 5層 茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物含む。締まり強い。
- 6層 茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片・褐鉄含む。締まりあり。
- 7層 灰茶褐色粘土 炭化物含む。締まり・粘性強い。(第2面)
- 8層 灰茶褐色砂質土 炭化物少量含む。締まりあり。
- 9層 茶褐色砂質土 炭化物やや多く、貝砂含む。締まりやや弱い。(第3面)
- 10層 黄色砂 地山

[遺構]

- A層 灰茶褐色粘質土 泥岩粒、炭化物多量、かわらけ片含む。締まりあり、粘性強い。

図5 調査区南壁 土層断面図

基は調査区外に及んでおり、攪乱および他遺構との重複のため、全容を把握できたものは1基のみである。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、骨製品、金属製品、石製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀末葉～16世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 土坑

土坑1 (図7)

調査区北西隅に位置する。北・西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは隅丸長方形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、北西-南東方向の現存長78cm、北東-南西方向の現存長59cm、深さ8cmで、坑底面の標高は3.59mを測る。

出土遺物 (図8)

遺物はかわらけ5点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は備前産の播鉢であり、内面に粗い播目が遺存する。

土坑2 (図7)

調査区中央やや北側の西壁際に位置する。南西側の一部が調査区外に及んでいる。ピット33と重複し、北壁の一部を壊している。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸現存長87cm、短軸66cm、深さ16cmで、坑底面の標高は3.49mを測る。主軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物はかわらけ9点、陶器3点、土器1点が出土した。

土坑3 (図7)

調査区北側の東壁寄りに位置する。ピット27と重複し、北壁の一部が壊されている。平面形は卵形に近い楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸80cm、短軸62cm、深さ11cmで、坑底面の標高は3.60mを測る。主軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は磁器1点、陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑4 (図7)

調査区やや北側の東壁寄りに位置する。土坑5およびピット30と重複し、南東壁と北西壁の各一部が

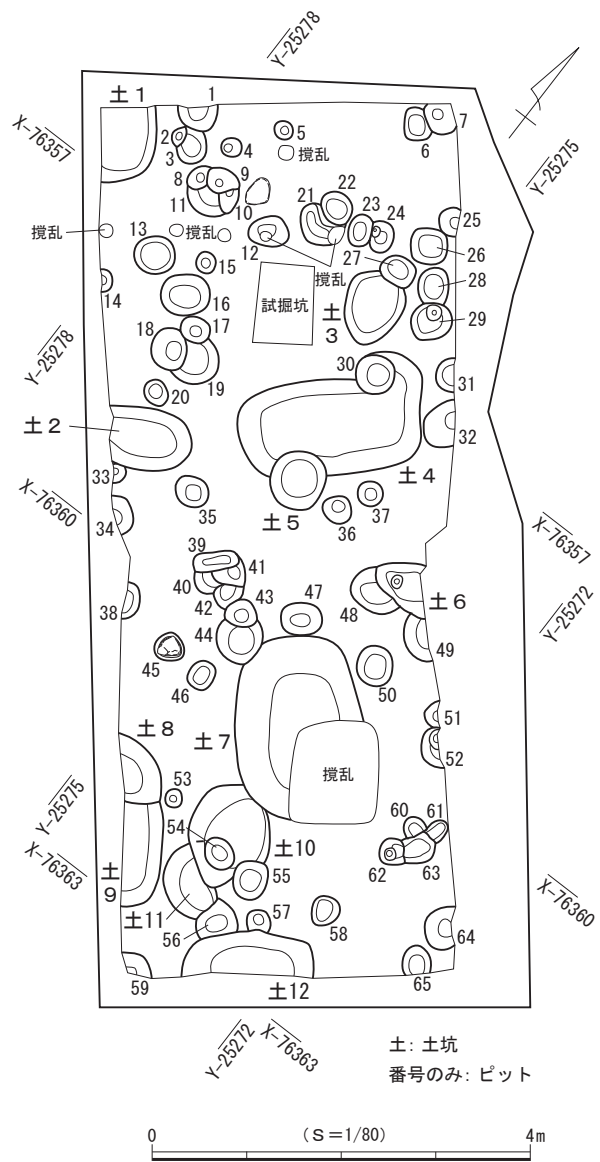


図6 第1面 遺構分布図

壊されている。平面形は隅丸長方形を呈するが、北隅がやや突出している。底面は中央に向かってなだらかに傾斜し、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.19m、深さ9cmで、坑底面の標高は3.50mを測る。主軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物はかわらけ4点、磁器2点、陶器4点、土器1点が出土した。

土坑5 (図7)

調査区中央のやや北側に位置する。土坑4と重複し、南東壁の一部を壊している。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径62cm、深さ19cmで、坑底面の標高は3.57mを測る。

遺物はかわらけ3点、陶器3点が出土した。

土坑6 (図7)

調査区中央付近の東壁際に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。ピット48・49と重複し、両者の一部を壊している。平面形は不整楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長72cm、短軸52cm、深さ31cmで、坑底面の標高は3.49mを測る。底面の西側にはピットが1基あり、深さ8cmである。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ1点、陶器2点、土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.3cmを測る小形品である。

土坑7 (図7)

調査区中央のやや南側に位置する。南東側に攪乱があり、約1/4が失われている。ピット44と重複し、北西壁の一部が壊されている。平面形は胴張隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.93m、短軸1.37m、深さ32cmで、坑底面の標高は3.32mを測る。主軸方位はN-39°-Wを指す。

出土遺物 (図10)

遺物は、かわらけ14点、磁器1点、陶器4点、土器2点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は流紋岩素材の砥石であり、表裏面を使用面とし、研磨による変形が著しい。

土坑8 (図7)

調査区やや南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑9と重複し、北西壁を壊している。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長70cm、短軸現存長64cm、深さ24cmで、坑底面の標高は3.44mを測る。

遺物はかわらけ3点、陶器1点が出土した。

土坑9 (図7)

調査区南隅付近の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、遺構の全容は明らかでない。

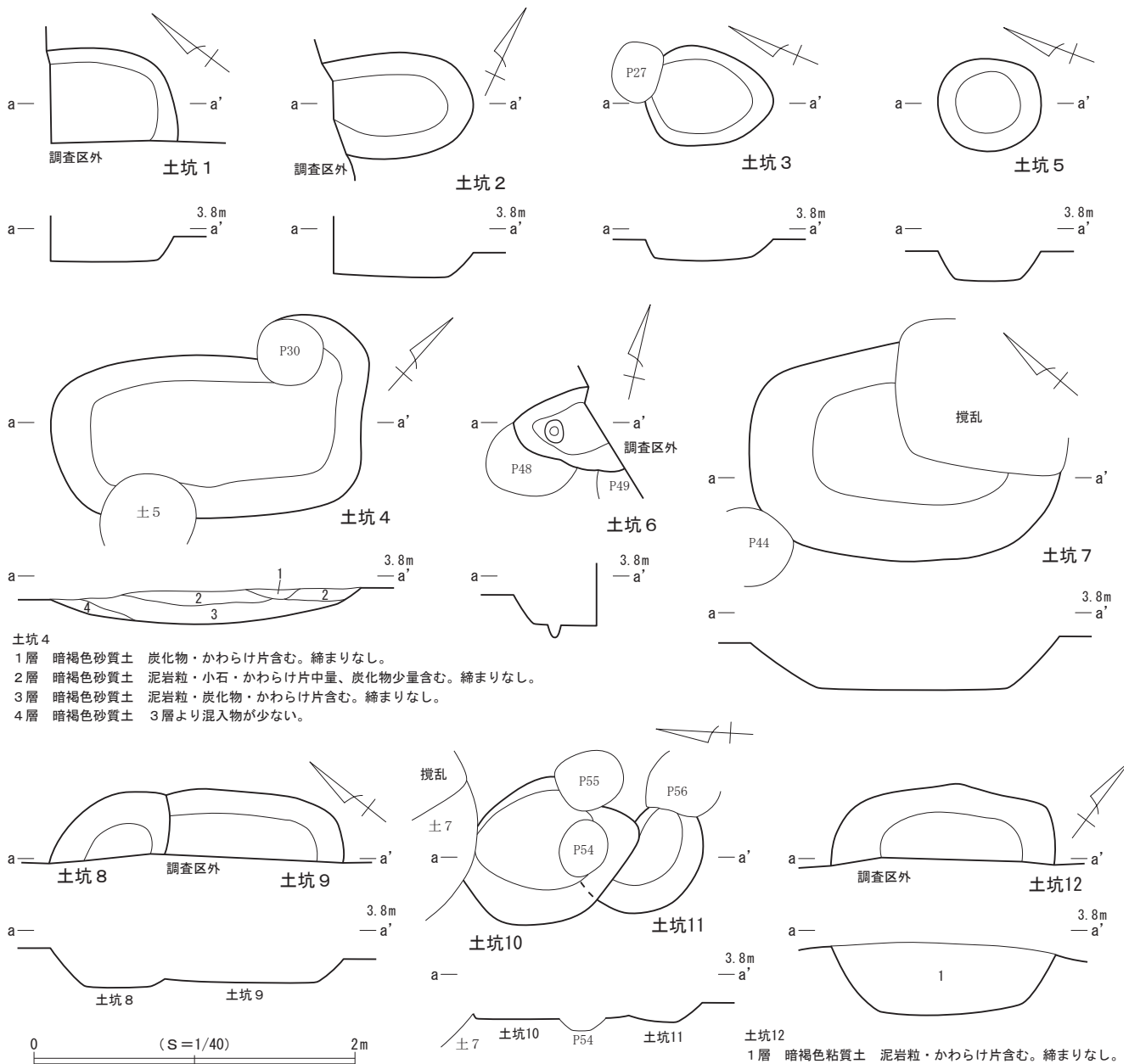


図7 第1面 土坑1～12

検出された範囲からは楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形と推定される。規模は長軸現存長1.11m、短軸現存長42cm、深さ15cmで、坑底面の標高は3.47mを測る。主軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物はかわらけ4点、陶器4点、金属製品2点が出土した。

土坑10(図7)

調査区南側のやや西壁寄りに位置する。土坑7・11、ピット54・55と重複して北壁と南東壁の一部が壊され、土坑11の北壁の一部を壊している。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸88cm、深さ13cmで、坑底面の標高は3.52mを測る。主軸方位はN-11°-Wを指す。

遺物はかわらけ3点、陶器3点が出土した。

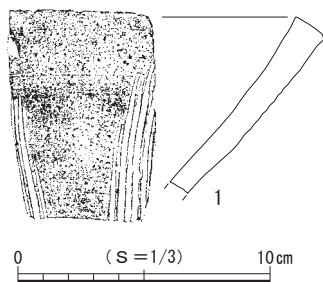


図8 第1面 土坑1出土遺物

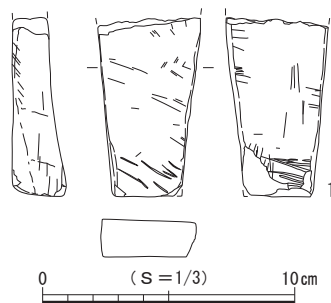


図10 第1面 土坑7出土遺物

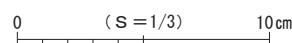
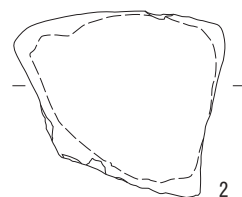
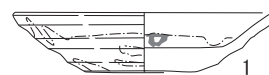


図12 第1面 土坑12出土遺物

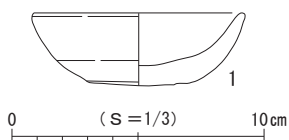


図9 第1面 土坑6出土遺物

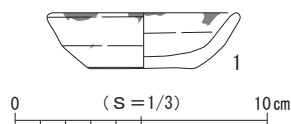


図11 第1面 土坑11出土遺物

土坑11(図7)

調査区南側のやや西壁寄りに位置する。土坑10、ピット56と重複して北壁と東壁の一部が壊されている。平面形は不整楕円形を呈すると推定され、底面は北側に向かって高くなる。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長70cm、短軸現存長49cm、深さ9cmで、坑底面の標高は3.50mを測る。主軸方位はN-63°-Wを指す。

出土遺物(図11)

遺物はかわらけ6点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけである。口径7.4cmを測る小形品であり、口縁部内外面に油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

土坑12(図7)

調査区南側の南壁際に位置する。南側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。ピット56・57と重複して南壁を壊している。検出された範囲からは隅丸方形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.38m、短軸現存長47cm、深さ45cmで、坑底面の標高は3.28mを測る。主軸方位はN-53°-Eを指す。

出土遺物(図12)

遺物はかわらけ27点、磁器1点、陶器9点が出土し、このうち2点を図示した。

1は瀬戸産の緑釉小皿であり、露胎部の内外面には煤が付着する。2は常滑産甕の破片を磨具に利用して縁辺から破断面にかけて研磨が及んでいる。

(2)ピット

第1面では、65基を検出した。調査区全域に分布しており、北側、中央、南側でややまとまりがある。しかし、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピット45からは礎石が出土している。ピットの平面形は円形、楕円形、方形のものがあり、規模は長軸19~55cm、深さ4~39cmと長軸・深さともにばらつきがある。

以下、礎石が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット45 (図13)

調査区中央やや南側の西壁寄りに位置する。平面形は略円形で、断面形は皿状を呈する。規模は径30~32cm、深さ4cmを測り、礎石が底面に据えられていた。礎石の大きさは長さ24cm、幅23cm、厚さ4cmを測り、上面の標高は3.68mである。

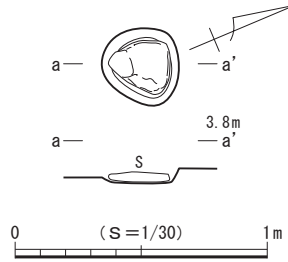


図13 第1面 ピット45

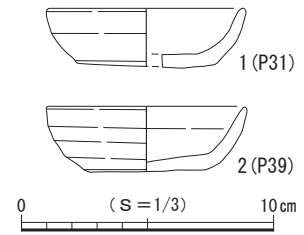


図14 第1面 ピット出土遺物

ピット出土遺物 (図14)

遺物は65基のピット中、19基から出土し、詳細は表8に掲げた。このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径7.7~7.8cmを測る小形品である。1はピット31、2はピット39からそれぞれ出土した。

(3) 表土出土遺物 (図15・16)

表土からも遺物が出土しており、詳細は表8に掲げた。このうち43点を参考資料として図示した。

1~7はロクロ成形のかわらけであり、このうち1~5は口径6.0~7.7cmを測る小形品、6は口径11.0cmを測る中形品、7は口径13.0cmを測る大形品である。3・4には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。8~11は龍泉窯系青磁で、このうち8・9は碗であり、8は内面見込みに草花の印文が施されるI-1c類。高台内に煤が付着する。9は外面に鎬蓮弁文、内面見込みに草花の印文が施されるII-c類である。10は外面に草花の浮文が施される壺、11は酒会壺の胴部下位から底部であり、外面に蓮弁が施される。

12~29は陶器であり、このうち12~17は瀬戸産である。12・13は平碗であり、14は直縁大皿、15は折縁深皿である。16は鉄釉が施された仏華瓶。17は外面と口縁部内面に鉄釉が施された袴腰形香炉である。18は長石釉が内外面に施された瀬戸・美濃産の志野皿である。19~27は常滑産で、このうち19・20は玉縁壺であり口縁部形状から19は11型式、20は11~12型式に比定される。21~23は甕であり、このうち21は口縁部形状から9~10型式に比定される。22は底部。23は胴部で外面に車輪文と格子文を組み合わせた押印が施される。24~26は片口鉢II類であり、口縁部形状から8型式に比定される。27は壺ないし甕の湾曲した胴部破片を磨具に利用しており、表面と破断面が研磨されている。28は東播系の鉢である。29は備前産の播鉢であり、粗い播目が遺存する。30~33は瓦質土器で、このうち30~32は火鉢であり、30は口径22.8cmに復元され、外面には花文の押印が施される。31は外面に横位の沈線と四菱、円形浮文が施される。32は横位沈線区画内に菊花文、下位には円形浮文が施されるが、器面の剥離が著しい。33は口径9.0cmに復元される小形品で香炉と考えられる。外面には、横位の沈線によって区画された文様帯に四菱と「S」字状文の押印が交互に施される。34は1/2が残存する東海系の羽釜であり、口径25.6cmに復元される。内面には口縁部と体部下位に煤が付着する。35は全長3.7cmの俵形土錘である。36・37は石製品であり、このうち36は角柱状を呈する滑石の破片であり、石鍋の破片に再加工を施しているものとみられ、表面に縦位の切れ込みを入れて分割を図っている。37は粘板岩素材の砥石であり、表裏面と片側面の3面を使用する。表裏面には研磨に加えて条線が顕著に残る。38~43の銭貨は、銭銘がそれぞれ38・39が開元通寶(960年初鑄)、40が皇宋通寶(1038年初鑄)、41が至和通寶(1054年初鑄)、42が元豊通寶(1078年初鑄)、43が紹聖元寶(1094年初鑄)となる。

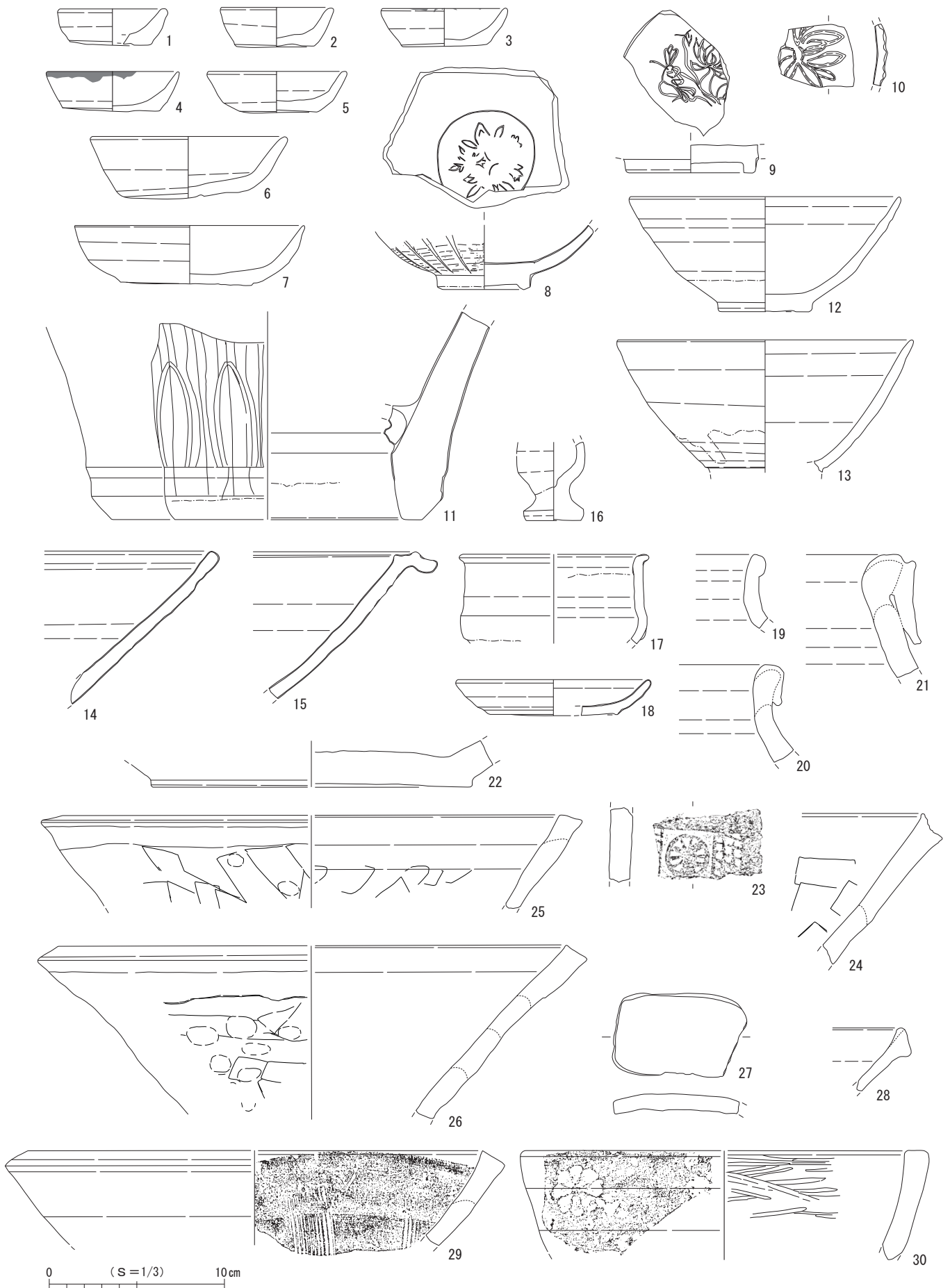


图15 表土出土遺物 (1)

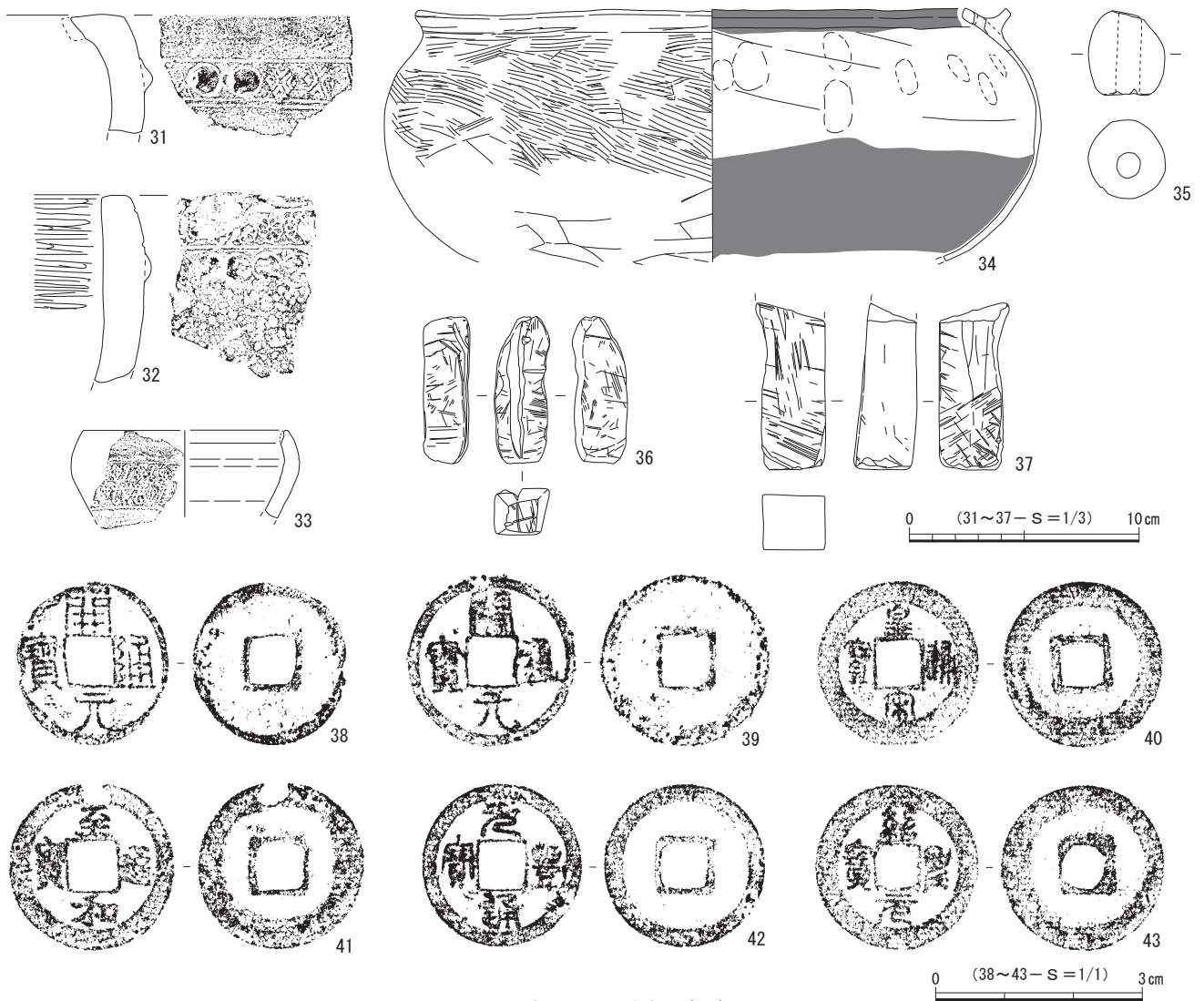


図16 表土出土遺物 (2)

(4) 第1面 構成土出土遺物 (図17)

第1面の遺構基盤層からも遺物が出土し、詳細は表8に掲げた。このうち5点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.9cmに復元される小形品、2は口径11.3cmを測る中形品である。3は瓦質土器の火鉢であり、外面には菊花と唐草の押印と円形の浮文が施される。内面には赤色顔料が付着する。4はシカの中足骨を加工した筭であり、両端部を欠損する。5は粘板岩を素材とした砥石であり、4面を使用し、研磨による変形が著しい。

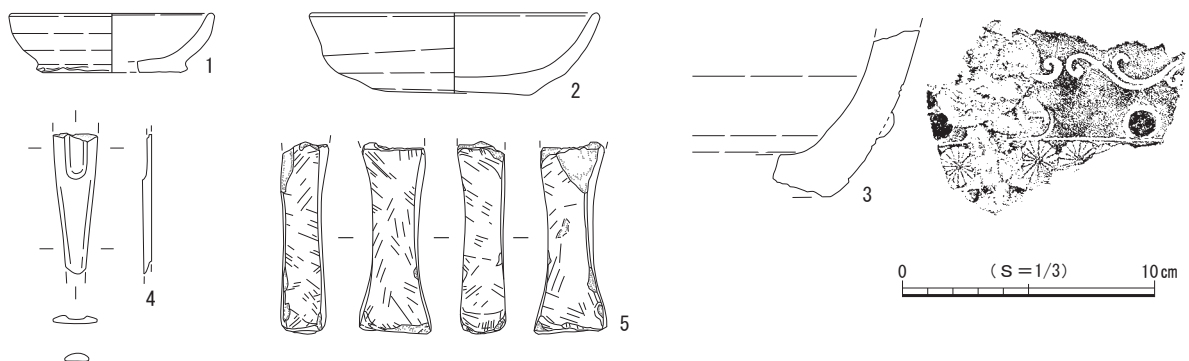


図17 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は7層上面で検出され、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含み、締まり・粘性の強い灰茶褐色粘土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は方形土坑1基、土坑1基、ピット12基である(図18)。遺構の分布をみると、方形土坑と土坑は調査区南側、ピットは調査区北・東壁寄りに分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、石製品、骨製品、金属製品、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

(1) 方形土坑

方形土坑1(図19)

調査区南側に位置する。平面形は北西側隅が矩形、南東側隅が隅丸を呈する長方形である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸2.51m、短軸1.63m、深さ41cmで、坑底面の標高は3.07mを測る。主軸方位はN-37°-Wを指す。

出土遺物(図20)

遺物はかわらけ25点、磁器4点、陶器18点、土器5点、瓦質土器1点、石製品2点、金属製品6点が出土し、このうち4点を図示した。

1は東海系の羽釜である。2・3は粘板岩素材の砥石であり、2は表裏面と端面の3面を使用し縁辺を中心にやや太く深い条線を残す。3は表面・両側縁の3面を使用し、石質は2よりきめ細かい粒子である。4の銭貨は聖宋元寶(1101年初鑄)である。

(2) 土坑

土坑13(図21)

調査区南側の東壁際に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは略円形あるいは楕円形を呈すると推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.29m、南西-北東方向の現存長62cm、深さ16cmで、坑底面の標高は3.27mを測る。

出土遺物(図22)

遺物はかわらけ4点、陶器2点、瓦1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は凸面に斜格子状の叩きが施された平瓦である。

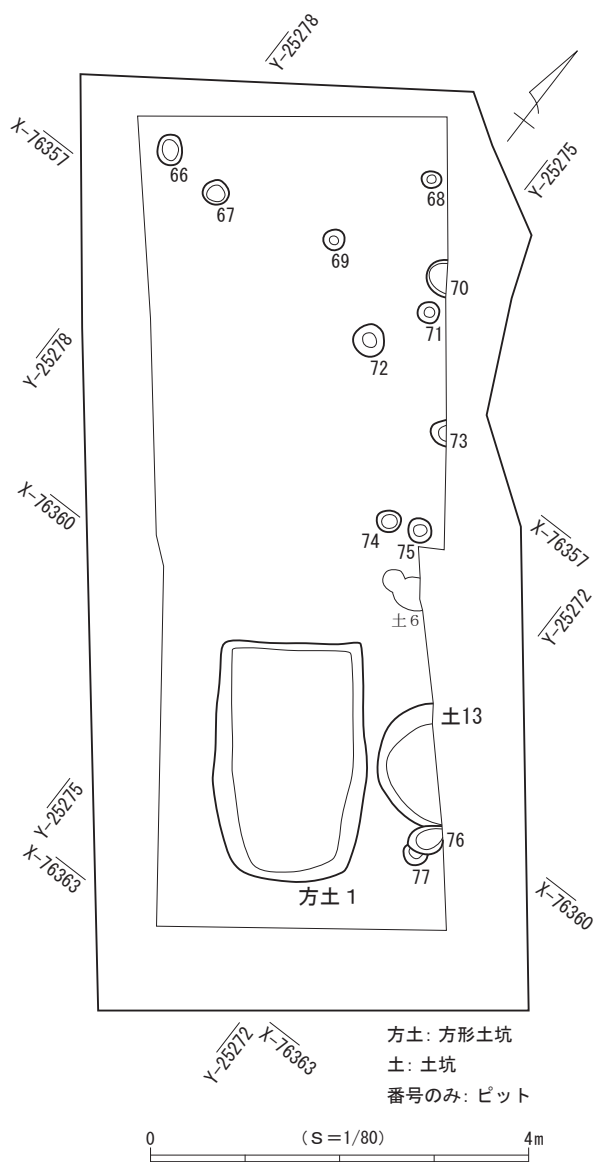
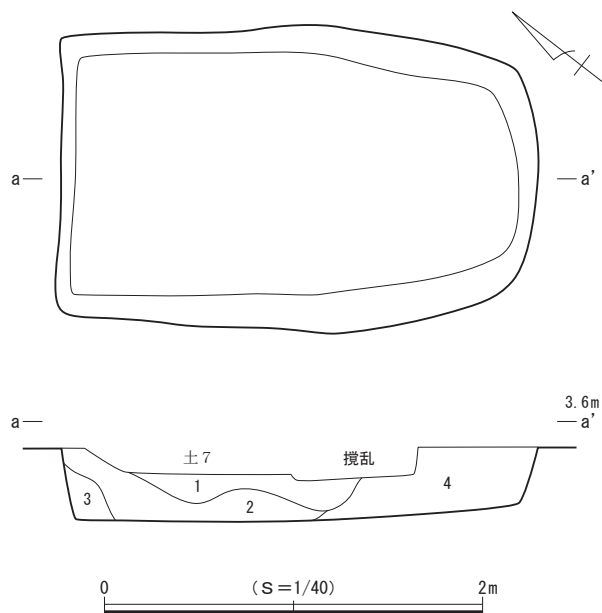


図18 第2面 遺構分布図



- 1層 暗褐色砂質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- 2層 黒褐色砂質土 炭化物・かわらけ片・貝砂含む。締まりややある。
- 3層 暗黄茶褐色砂質土 炭化物・貝砂含む。締まりある。
- 4層 灰色粘土 炭化物極少量含む。締まりある。

図19 第2面 方形土坑1

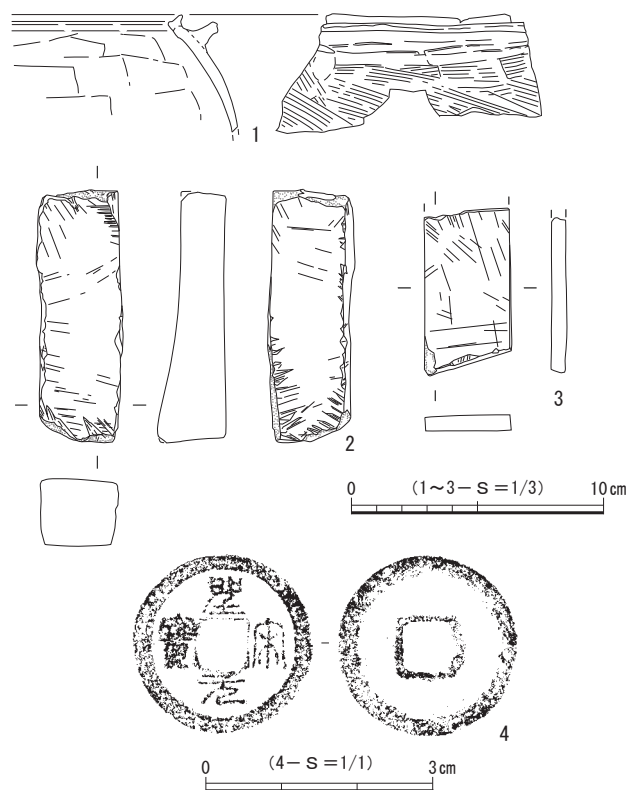


図20 第2面 方形土坑1 出土遺物

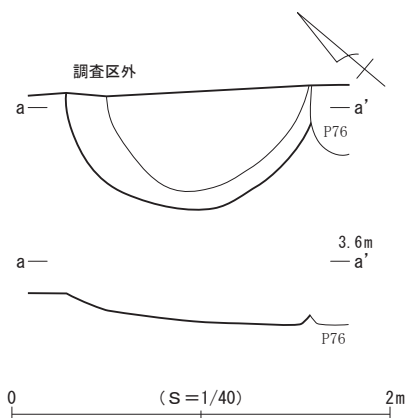


図21 第2面 土坑13

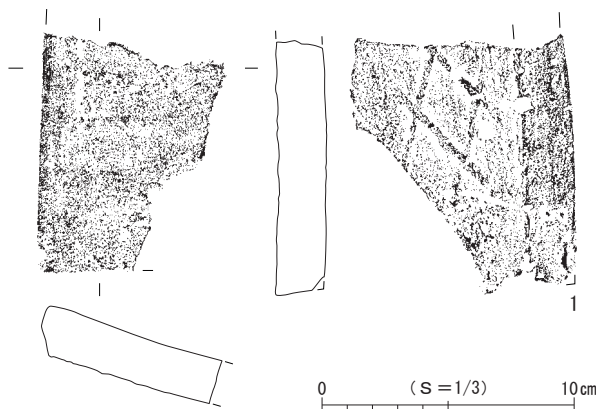


図22 第2面 土坑13出土遺物

(3) ピット

第2面では、12基を検出した。いずれも調査区の北壁および東壁付近に分布しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径21~40cm、深さ4~16cmと長径・深さともにはばらつきがある。

遺物は出土しなかった。

(4) 第2面 構成土出土遺物 (図23)

第2面の遺構基盤層となる土層からも遺物が出土しており、表8に掲げた。このうち22点を図示した。1~4はかわらけであり、1~3は口径7.0~7.6cmの小形品であり、4は口径13.4cmの大形品である。

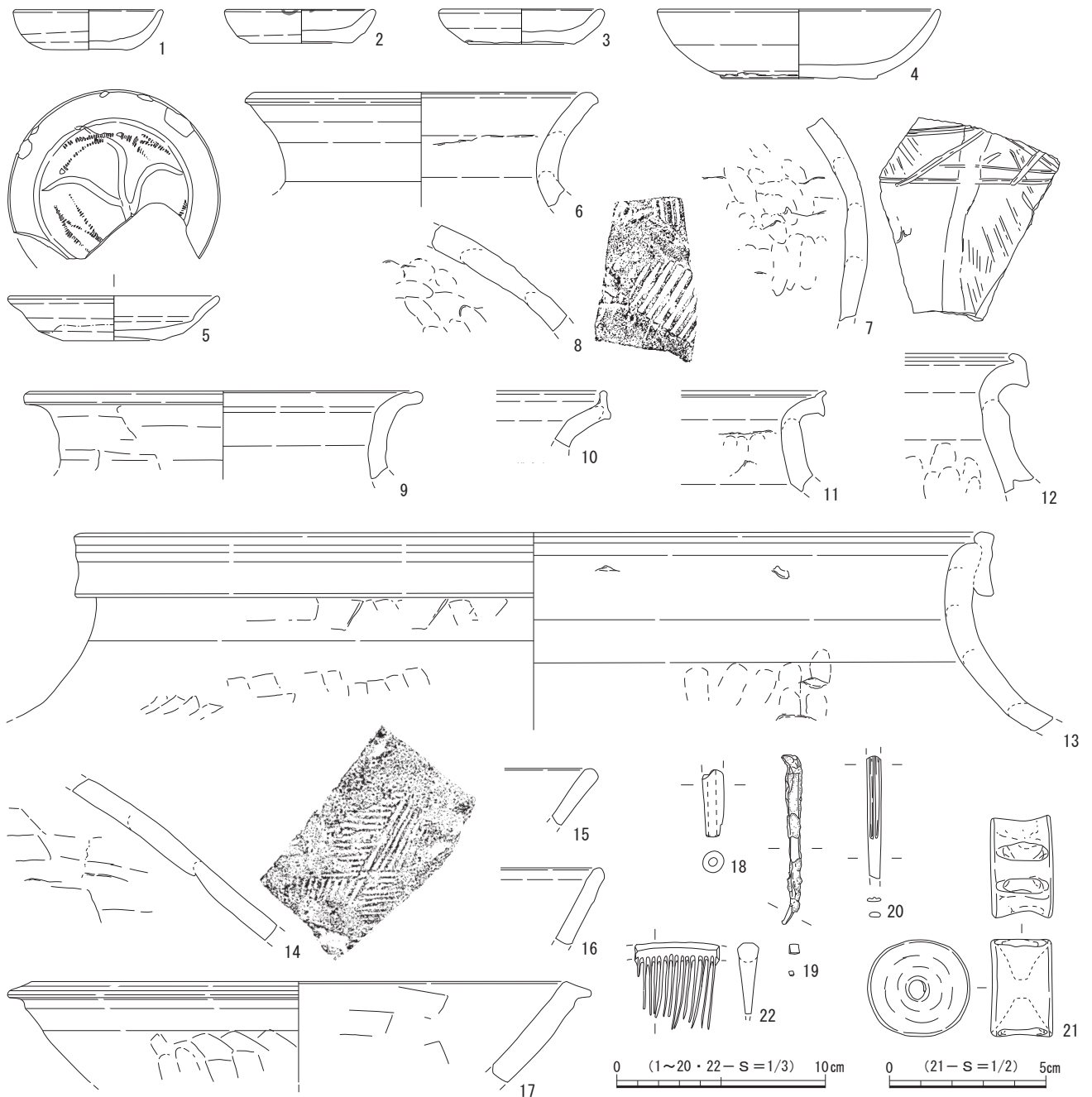


図23 第2面 構成土出土遺物

2の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。5は龍泉窯系青磁の皿である。内面見込みにヘラと櫛状工具を用いて文様が施される口径10.0cmの小形品であり、I - 2 b類に比定される。6~17は陶器であり、このうち6~8は渥美産の壺。6は口縁部~頸部、7は胴部上半~肩部であり、檜垣文であろうか、外面には横位・斜位の刻線が施される。8は肩部で縦線の押印が施される。9~17は常滑産であり、9~14は甕、このうち9~13は口縁部で、形状から9が4型式、10・11が5型式、12は6 a型式、13は9型式にそれぞれ比定される。14は肩部であり、外面には複合斜線の押印が施される。15~17は片口鉢で、このうち15・16がI類。17はII類であり口縁部形状から9型式に比定される。18は現存長3.2cmを測る管状土錘。19は現存長8.1cmを測る鉄釘。20はシカの中足骨を素材とした細身の筭であり両端部を欠損する。21はメジロザメ科の椎骨に加工が施されたもので、中心部に径0.5~0.6cmの円孔が貫通し、側面が使用により摩耗している。22の木製品は櫛歯が14本遺存する横櫛である。

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面は9層上面で検出され、確認面の標高は3.0~3.1m測る。9層はやや多くの炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑8基、ピット15基である(図24)。遺構の分布をみると、溝状遺構は調査区北側を北東-南西方向に延び、土坑は調査区全域、ピットは調査区南側に集中して分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品などが出土しており、これらの年代観や上位第2面の年代から、本面は14世紀代に属すると推定される。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図24・25)

調査区北側に位置する。北東-南西方向に延び、調査区外まで及んでいる。土坑15・16、ピット78・79と重複し、すべての遺構の上端全体あるいは一部を壊している。直線的に掘られており、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.0m、幅が最大で2.27m、深さ27~35cmで、底面の標高は2.75m前後を測る。主軸方位はN-41°-Eを指す。溝の底面から10cm上より犬の全身骨がまとまって出土しており、第四章に詳細を記したので参照されたい。

出土遺物(図26)

遺物はかわらけ6点、陶器34点、瓦質土器1点、瓦4点、石製品1点が出土し、このうち7点を図示した。

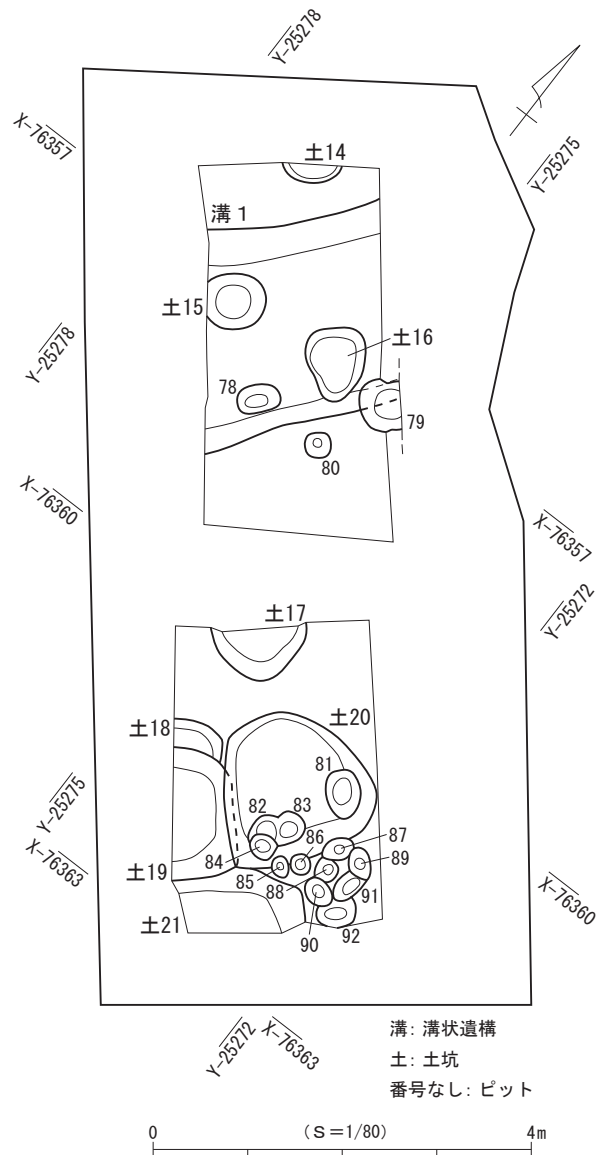
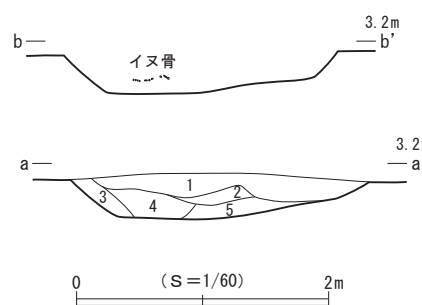
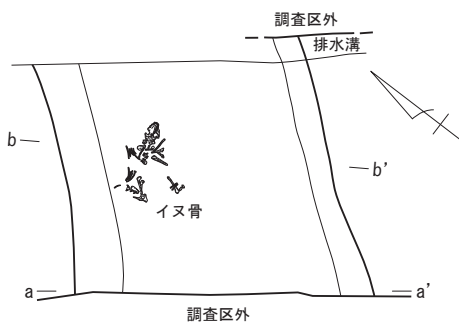


図24 第3面 遺構分布図



- 1層 暗灰褐色粘質土 炭化物・粘土含む。締まりあり。
- 2層 暗灰褐色粘質土 炭化物・灰褐色砂含む。締まりあり。
- 3層 暗黄褐色砂 炭化物・貝砂含む。締まりあり。
- 4層 暗灰褐色粘質土 1層に類似。1層より混入物が少ない。
- 5層 暗灰褐色砂質土 砂と粘質土がブロック状に混入。炭化物含む。締まりあり。

図25 第3面 溝状遺構1

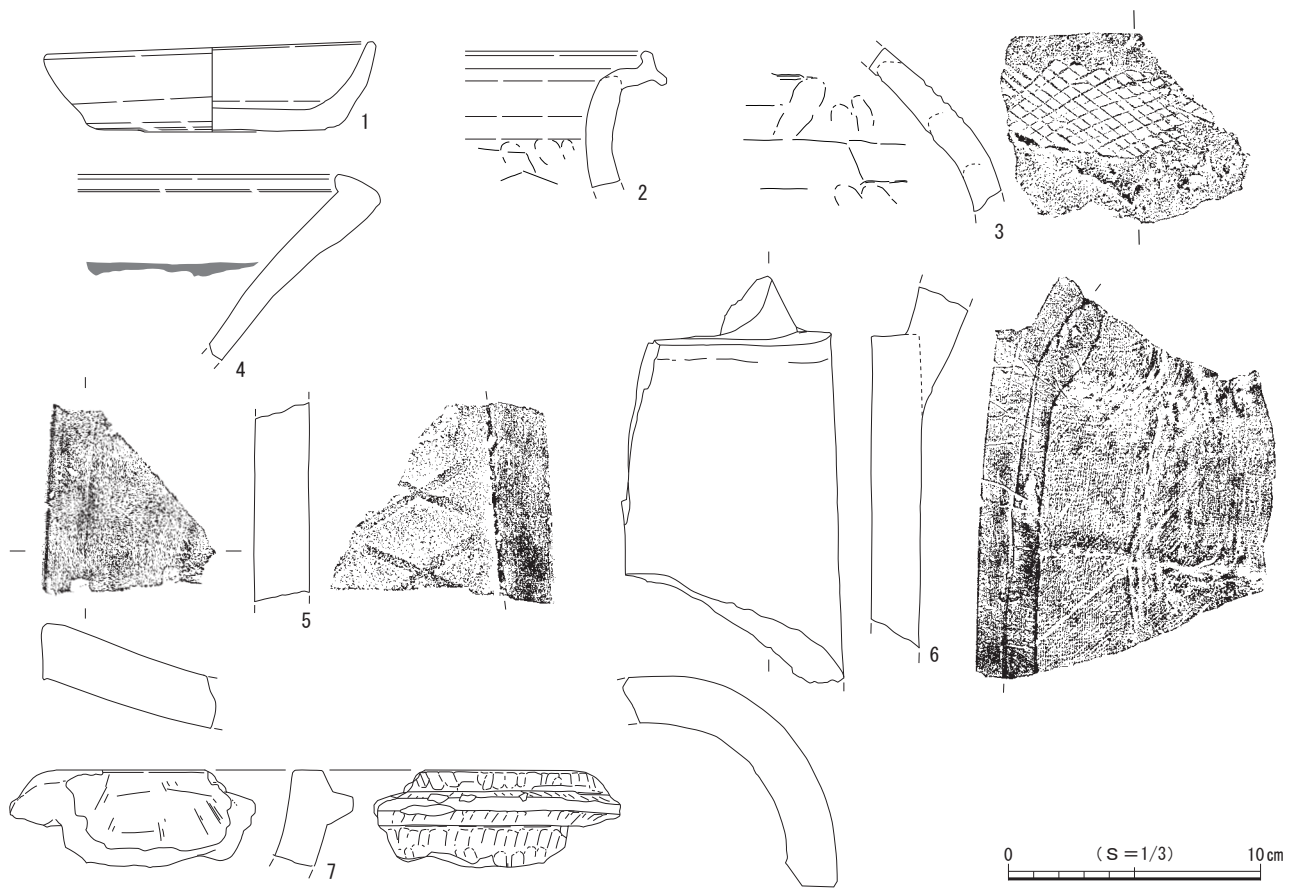


図26 第3面 溝状遺構1出土遺物

1はロクロ成形のかわらけであり、口径12.9cmを測る中形品である。2・3は常滑産の甕であり、2は口縁部形状から6 a類に比定される。3は肩部であり外面には斜格子の押印が施される。4は瓦質土器の火鉢。5は凸面に格子目の叩きが施された平瓦。6は丸瓦である。7は台形に成形された鏝が遺存する滑石製石鍋である。

(2) 土 坑

土坑14 (図27)

調査区北壁際に位置する。北側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長63cm、北西-南東方向の現存長20cm、深さ6cmで、坑底面の標高は3.00mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑15 (図27)

調査区北西側の西壁際に位置する。西側の一部が調査区外に及んでいる。溝状遺構1と重複し、遺構の上部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長62cm、短軸49cm、確認面からの深さ43cmで、坑底面の標高は2.43mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

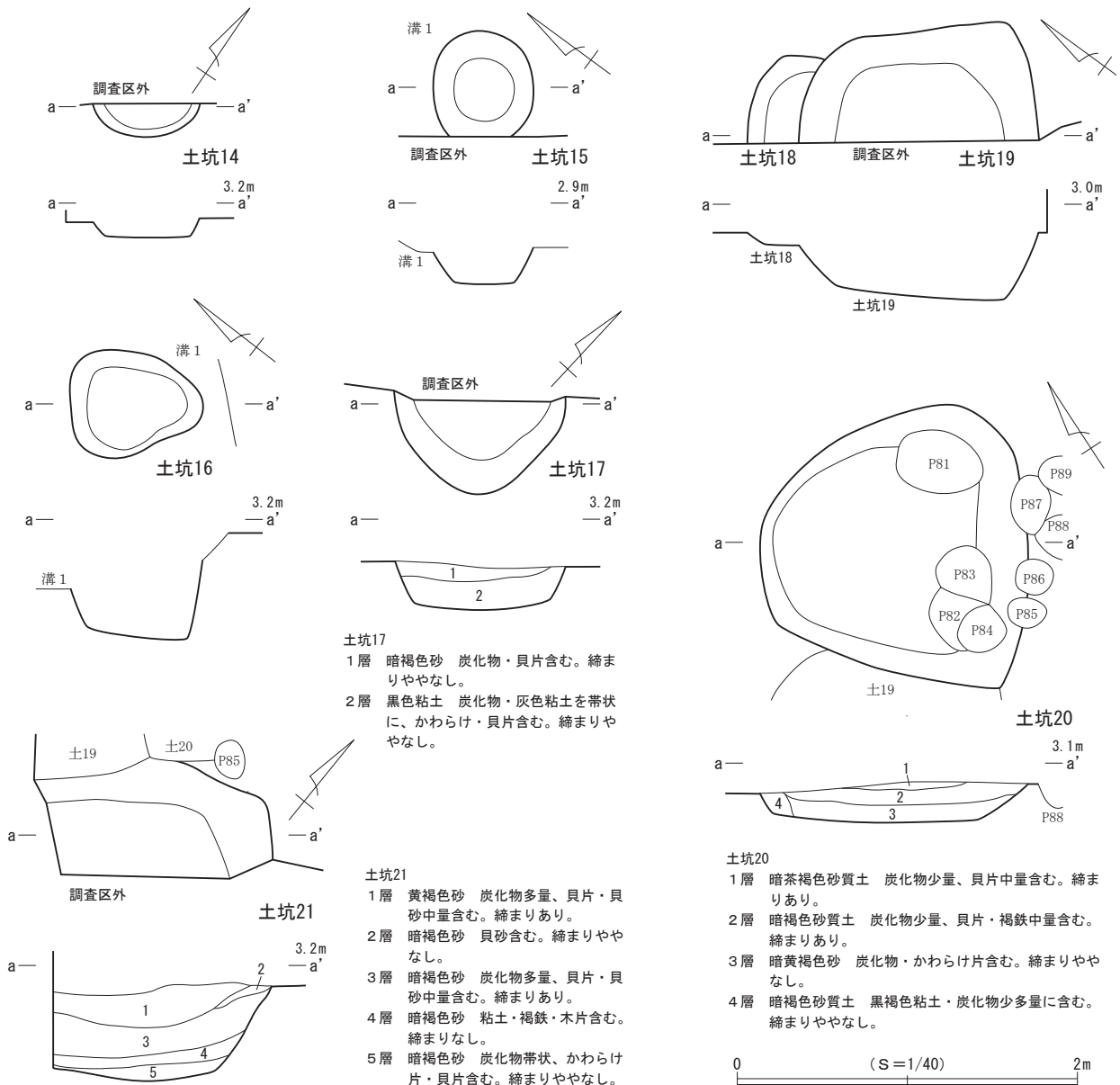


図27 第3面 土坑14~21

土坑16 (図27)

調査区北側の東壁寄りに位置する。溝状遺構1と重複し、遺構の上部が壊されている。平面形は不整楕円形を呈し、底面は北側に向かって緩やかに高くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸78cm、短軸63cm、深さ63cmで、坑底面の標高は2.50mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図27)

調査区中央付近に位置する。北側が安全対策上残された未調査部分に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは楕円形を呈すると推定され、底面は中央に向かってわずかに低くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西1.00m、北西-南東方向の現存長55cm、深さ27cmで、坑底面の標高は2.68mを測る。

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土した。

土坑18 (図27)

調査区南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及び、南側が土坑19と重複して壊されているため、全容は明らかでない。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長67cm、南北現存長30cm、深さ8cmで、坑底面の標高は2.76mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑19 (図27)

調査区南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑18・20・21と重複し、土坑18の南側と土坑21の北西壁の一部を壊し、土坑20に東壁の一部が壊されている。検出された範囲からは平面が楕円形あるいは隅丸方形を呈すると推定され、底面は北側に向かって緩やかに高くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.41m、北東-南西方向の現存長69cm、深さ35cmで、坑底面の標高は2.45mを測る。

遺物は陶器2点が出土した。

土坑20 (図27)

調査区南側に位置する。土坑19・21、ピット81~87と重複し、土坑19の北東壁と土坑21の北西壁の一部を壊し、ピット81~87に遺構の南側が壊されている。平面形は北西側の辺が短い隅丸台形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.68m、短軸1.57m、深さ12cmで、坑底面の標高は2.76mを測る。

遺物はかわらけ1点、陶器2点が出土した。

土坑21 (図27)

調査区南隅に位置する。南および西側が調査区外に及び、土坑19・20と重複して北西壁の一部を壊されているため、全容は明らかでない。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.42m、北西-南東方向の現存長71cm、深さ55cmで、坑底面の標高は2.52mを測る。

出土遺物 (図28)

遺物はかわらけ1点、磁器2点、陶器8点、瓦2点が出土し、このうち4点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径13.6cmを測る大形品である。2は龍泉窯系青磁碗であり、内面に片彫の蓮花文が施されるI-2類に比定される。3は山茶碗の体部下位~底部。4は常滑産甕の肩部であり、外面に矢羽根と格子が組み合わされた押印が施される。

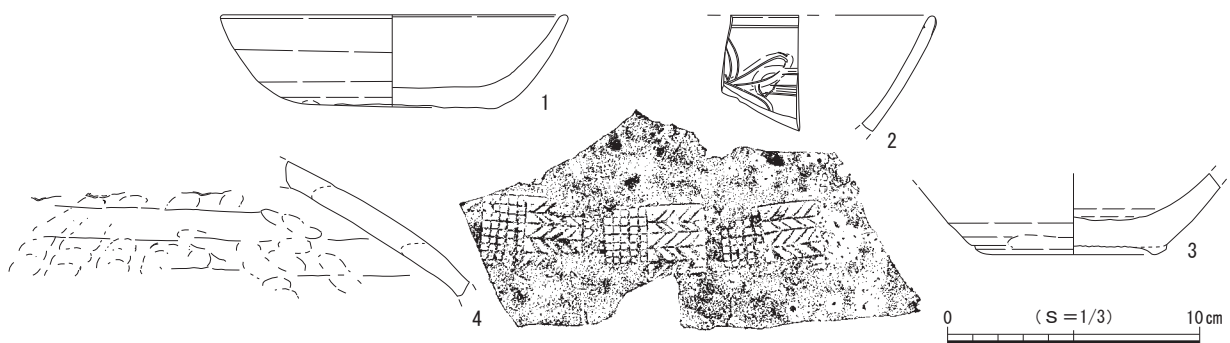


図28 第3面 土坑21出土遺物

(3) ピット

第3面では15基を検出した。調査区の北側に3基、土坑20の南側に集中して12基が分布しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径21~56cm、深さ10~41cmと長径・深さともばらつきがある。

遺物は15基のピット中、3基から磁器と陶器が出土し、詳細は出土遺物一覧表(表8)に掲げた。

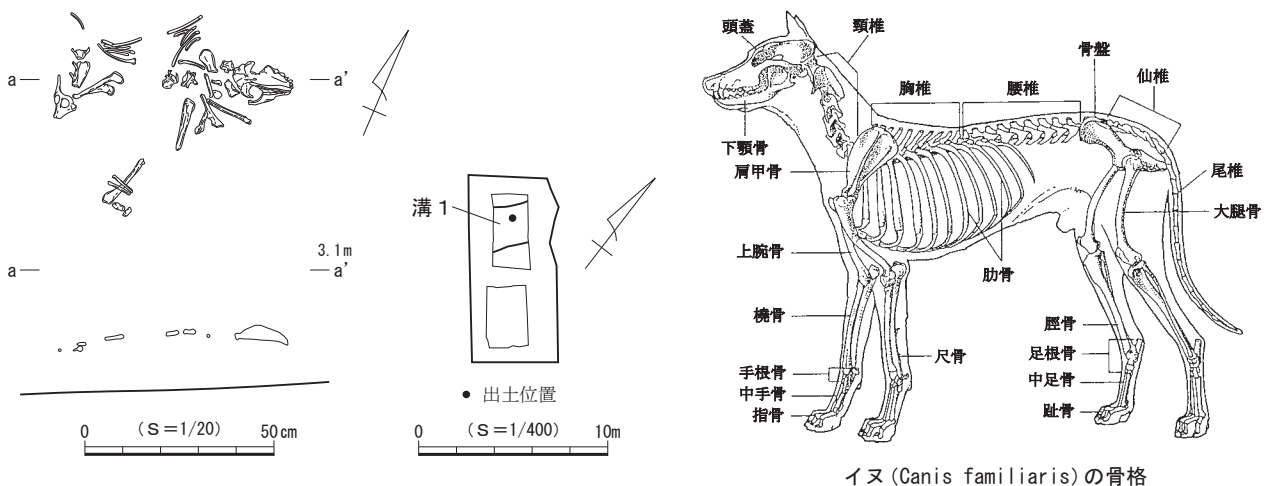
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について

〈イヌ〉

第3面溝状遺構1から出土したイヌは、中級サイズのイヌである。在来のイヌ(縄文犬)よりも大きく、大陸の犬との混血種である。中世になって大陸犬が飼育された結果、このようなイヌが日本の各地で飼われるようになった。

この標本は当時のイヌの面影をよく伝えている。ただ、腰椎に癒着が生じ、寛骨の右側にも著しい変形を生じている。四肢骨には変形した状態を認めないので、歩行に差し支えることはなかったようである。なお上腕骨の滑車上孔の径が3mm程度と通常の半分くらいの大きさである。歩行や飛び跳ねるようなことをしなかった、あるいはできなかったかも知れない。歯牙は強く摩耗し、切歯は平らの状態である。推定年齢10才。

このイヌは、第3面で検出された溝状遺構1の底面よりやや浮いたところから、頭を北東に向けて仰向きの状態で出土した(図29)。身体は伸展の状態であったが、四肢の組み方は不明である。しかし右側の肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨の骨端関節部分に変色がみられないので、骨が接触していたと思われる。つまり、骨が関節していたのである。四肢を曲げていた様子が推測される。出土状態の実測図があるが、姿勢を復元するまでは至らなかった。



何故か胸椎がほとんど失われていた。その一方で腰椎が癒着して動かない状態であった。骨盤をつくる寛骨のうち、左側の座骨板部分の病変も著しかった。

図29 第3面 溝状遺構1のイヌ骨出土状態(左)と全身骨格(右)

第五章 まとめ

今回報告する調査地点は、材木座町屋遺跡 (No.261) の南東部にあたり、現海岸線から約190mほど離れた、標高3.0m前後の黄色砂層上に形成された遺跡であり、今回の調査では、遺構確認面を3面検出した。調査面積は約45㎡と狭小であったが、面によっては遺構が密度高く分布していることが把握された。いずれも中世に属し、溝状遺構1条、方形土坑1基、土坑21基、ピット92基を検出し、出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して7箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は堆積土層の3・4層上面で検出され、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含む茶褐色粘質土、4層は泥岩ブロックとかわらけ片を含む暗褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑12基、ピット65基であり、これらが調査区全面に密度高く分布し、さらに調査区外に展開する様相を示している。ピットのなかにはピット45のように礎石を伴うものもあったが、建物などの施設を構成するような規則的配置は認められなかった。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、骨製品、金属製品などが出土し、特に常滑産や瀬戸産陶器の年代観から、本面は15世紀末葉～16世紀前葉頃に属すると推定された。

〈第2面〉

第2面の遺構は堆積土層の7層上面で検出され、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含む灰茶褐色粘土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は方形土坑1基、土坑1基、ピット12基である。遺構の分布をみると、方形土坑と土坑は調査区南側、ピットは調査区北・東壁寄りに分布しており、土坑とピットは調査区外の北側から東側に展開する様相を示している。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、石製品、骨製品、金属製品、木製品などが出土しているが、特に方形土坑1の東海系羽釜や遺構外出土遺物の常滑産陶器の年代観から、本面は15世紀中葉～後葉頃に属すると推定された。

〈第3面〉

第3面は堆積土層の9層上面で検出され、確認面の標高は3.0～3.1mを測る。9層は炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑8基、ピット15基である。遺構の分布をみると、溝状遺構1は、調査区北側を北東-南西方向に延びて両端は調査区外に延びている。土坑は調査区全域に分布し、さらに調査区外に展開する様相を示している。ピットは調査区南側に集中して分布している。溝状遺構1は、幅が2.27mと比較的大きな溝であり、覆土からは比較的多くの動物遺体が出土した。なかでも、底面から10cmほど上から出土した成体のイヌ (図25・29) は、埋存時の状態がある程度復元でき、骨部位の状態から、推定年齢 (10才) や生前の健康状態が把握された点で特記される事象であった。そのほかに幼体のイヌ、イノシシ・シカ、イルカ、カツオ、ヒトなど動物遺体も出土している (表5)。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品などが出土しているが、これらの年代観と上位第2面の年代を考慮に入れて、本面は大枠として14世紀代に属すると推定した。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

大河内 勉・伊丹まどか・押木弘己 2001「材木座町屋遺跡(No.261)材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』平成12年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

香川達郎 2009『神奈川県鎌倉市 材木座町屋遺跡(No.261) - 材木座6丁目653-1外 - 発掘調査報告者』玉川文化財研究所

齊木秀雄 2013『神奈川県・鎌倉市 材木座町屋遺跡発掘調査報告書 - 材木座六丁目725番11地点 -』有限会社 鎌倉遺跡調査会

齊木秀雄・根本陸子・降矢順子 2005「材木座町屋遺跡(No.261)材木座六丁目674番10 材木座六丁目674番15 材木座六丁目674番8外 材木座六丁目674番9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』平成16年度発掘調査(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡(No.261)材木座四丁目256番1の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』平成13年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

滝澤晶子 2010『神奈川県・鎌倉市 材木座町屋遺跡(No.261)発掘調査報告書 鎌倉市材木座五丁目462番2地点 三丁目602-5の一部地点』株式会社博通発掘調査報告書第52集 株式会社博通

田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡(No.261)材木座四丁目260番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』平成元年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡(No.261)材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13』平成8年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑1出土遺物(図8)							
1	陶器	備前 播鉢	-	-	現 7.0	播目条単位不明 胎土:白色粒、小石粒、密 色調:褐色	口縁部片
土坑6出土遺物(図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	4.0	2.9	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨 針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
土坑7出土遺物(図10)							
1	石製品	砥石	現長 7.1	短 4.1	厚 2.1	2面に使用痕跡、両側面は製作時の整形痕(削り痕状)、一部に擦れあり 石材-流紋 岩	1/2
土坑11出土遺物(図11)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.2	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微 砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:褐灰色 焼成:良好	1/2弱
土坑12出土遺物(図12)							
1	陶器	瀬戸 縁釉小皿	10.2	4.1	2.4	内外面煤付着 胎土:緻密 色調:胎土-灰黄色、釉-緑灰色 備考:古瀬戸後期様 式Ⅲ期	3/4
2	陶器	摩耗陶片	長 8.4	短 7.0	厚 1.3	常滑甕の陶片を転用、陶片周囲が摩耗 胎土:白色粒、小石粒、やや密 色調:内- にぶい赤褐色、外-暗赤褐色	胴部片
ピット出土遺物(図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.4	2.4	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット31	1/2弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	4.5	2.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好 出土遺構:ピット39	3/4
表土出土遺物(図15・16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.0	4.6	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥 岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3~7.0	4.5	2.3	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	7/8
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.6	2.2	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微 砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	2.3	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲 母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	3.8	2.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	7/8
6	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.8	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.5	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥 岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	7/8
8	磁器	青磁 碗	-	(7.0)	現 1.6	高台内煤付着 内面-草花印文 色調:胎土-黄灰色、釉-緑青色 備考:太宰府- 龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1c類	底部 小破片
9	磁器	青磁 碗	-	4.5	現 3.6	外面-鎚蓮弁文 内面-草花印文 色調:胎土-灰白色、釉-青緑色 備考:太宰府 -龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類	1/3
10	磁器	青磁 壺	-	-	現 3.5	外面-草花文 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁	胴部 小破片
11	磁器	青磁 酒会壺	-	(17.8)	現 11.9	外面-蓮弁文 色調:胎土-灰白色、釉-青緑色 備考:龍泉窯系青磁	胴~底部 小破片
12	陶器	瀬戸 平碗	(15.4)	(5.0)	6.6	胎土:やや密、黒色粒 色調:胎土-灰白色、釉-灰オリーブ色 備考:古瀬戸後期 様式Ⅰ~Ⅱ期	1/4
13	陶器	瀬戸 平碗	(16.8)	-	現 7.6	胎土:やや密、黒色粒 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ 期	1/2弱
14	陶器	瀬戸 直縁大皿	-	-	現 8.7	胎土:密、白色粒、黒色粒 色調:胎土-灰色、釉-オリーブ色 備考:古瀬戸後期 様式Ⅱ~Ⅲ期	口縁部 小破片
15	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 8.4	胎土:密、黒色粒 色調:胎土-灰色、釉-オリーブ色 備考:古瀬戸後期様式Ⅲ期	口縁部 小破片
16	陶器	瀬戸 仏華瓶Ⅰ類	-	3.1	現 4.5	胎土:緻密 色調:胎土-灰白色、釉-黒褐色 備考:古瀬戸後期様式	1/3
17	陶器	瀬戸 袴腰形香炉	(10.4)	-	現 5.0	胎土:緻密、白色粒 色調:胎土-黄灰色、釉-黒褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ~ Ⅲ期	1/8
18	陶器	瀬戸・美濃 皿	(10.8)	(7.2)	現 2.1	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-暗灰色 備考:志野皿	1/3弱
19	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 4.2	胎土:密 色調:外-赤灰色、内-黒褐色 備考:11型式	口縁部 小破片
20	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 5.6	胎土:やや密、白色粒 色調:暗赤褐色 備考:11~12型式	口縁部 小破片
21	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.0	胎土:やや密、白色粒、小石粒 色調:暗赤褐色 備考:9~10型式	口縁部 小破片
22	陶器	常滑 甕	-	(18.2)	現 2.6	胎土:やや密、白色粒、小石粒 色調:褐色	底部片
23	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	外面-格子文+車輪文押印 胎土:密、白色粒、小石粒 色調:外-灰褐色、内-褐 灰色	胴部 小破片
24	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 8.6	胎土:密、白色粒 色調:にぶい橙色 備考:8型式	口縁部 小破片
25	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(26.8)	-	現 5.3	胎土:粗、小石粒 色調:暗赤褐色 備考:8型式	口縁部片

26	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	(29.1)	-	現9.9	胎土：密、白色粒、小石粒 色調：外-暗赤褐色、内-にぶい赤褐色 備考：8型式	口縁部片
27	陶器	常滑摩耗陶片	長7.5	短4.7	厚0.9	胎土：やや密、白色粒 色調：外-灰色、内-暗褐色	胴部小破片
28	陶器	東播系鉢	-	-	現3.6	胎土：やや密、白色粒 色調：灰色 備考：Ⅶ期	口縁部小破片
29	陶器	備前播鉢	(26.0)	-	現5.4	内面-11本一単位の播目 胎土：やや密、白色粒 色調：褐色	口縁部小破片
30	瓦質土器	火鉢	(22.8)	-	現6.2	外面-花文押印、内面-黒色処理 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：Ⅲ類	口縁部小破片
31	瓦質土器	火鉢	-	-	現5.1	外面-横位沈線+四菱+円形浮文 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：Ⅲ類	口縁部小破片
32	瓦質土器	火鉢	-	-	現8.2	外面-横位沈線+菊花文押印+円形浮文 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：ⅣB類	口縁部小破片
33	瓦質土器	香炉	(9.0)	-	現3.8	外面-横位沈線+四菱文・「S」字文押印 胎土：密 色調：黒色 焼成：やや軟質	体部小破片
34	土器	羽釜	(25.6)	-	現11.0	口縁部内面・体部内面下位煤付着 外面-ケズリ+ハケメ 胎土：雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、やや粗土 備考：東海系	1/2
35	土製品	土錘	長3.7	幅3.3	孔径1.0~1.1	俵形土錘 胎土：砂質、白色粒、赤色粒 色調：黄橙色	略完形
36	石製品	滑石製石鍋転用品	長6.4	短2.3	厚2.0	滑石製石鍋破片に再加工、用途不明 石材-滑石	完形
37	石製品	砥石	長7.3	短2.8	厚2.6	3面に使用痕跡 石材-粘板岩	3/4
38	金属製品	銭貨	径2.2~2.4	孔径0.7	厚0.1	銭銘-開元通寶(南唐・960) 書体-真書	完形
39	金属製品	銭貨	径2.5	孔径0.7	厚0.2	銭銘-開元通寶(南唐・960) 書体-真書	完形
40	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形
41	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.7	厚0.1	銭銘-至和通寶(北宋・1054) 書体-真書	略完形
42	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.7	厚0.2	銭銘-元豊通寶(北宋・1078) 書体-篆書	完形
43	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-紹聖元寶(北宋・1094) 書体-篆書	完形

第1面 構成土出土遺物(図17)

1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	(5.5)	2.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2弱
2	土器	ロクロかわらけ・中	11.3	5.9	3.2	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
3	瓦質土器	火鉢	-	-	現6.6	外面-菊花文・唐草文押印+円形浮文 胎土：白色粒、赤色粒、黒色粒、砂粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：内面赤色顔料付着、ⅢB類	胴部片
4	骨製品	筭	現長5.6	幅0.8~1.8	厚0.3	上部欠損 片面に凹み状加工 材質：シカ中足骨	小片
5	石製品	砥石	長7.6	幅2.9	厚1.9	中砥 4面に使用痕 石質-粘板岩	略完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

方形土坑1出土遺物(図20)

1	土器	羽釜	-	-	現4.6	外面-ハケメ、内面-ヘラナデ 胎土：白色粒、赤色粒、砂粒 軟質 色調：灰白色 焼成：良好 備考：東海系	口縁~胴部片
2	石製品	砥石	長10.0	幅3.5	厚1.8~2.9	中砥 3面に使用痕 石質-粘板岩	略完形
3	石製品	砥石	長6.7	幅3.4	厚0.6	仕上砥 3面に使用痕 石質-粘板岩	
4	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-聖宋元寶(北宋・1101) 書体：篆書	完形

土坑13出土遺物(図22)

1	瓦	平瓦	現長10.1	現幅7.2	厚2.0	凸面-斜格子叩き+側縁方向弱いナデ調整 凹面-側縁方向ヘラ調整 胎土：白色粒、黒色粒、砂粒、礫 色調：灰色	小片
---	---	----	--------	-------	------	---	----

第2面 構成土出土遺物(図23)

1	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	4.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	5.0	1.6	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
3	土器	ロクロかわらけ・小	(7.6)	(5.1)	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
4	土器	ロクロかわらけ・大	(13.4)	(7.4)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-丁寧なナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
5	磁器	青磁皿	10.0	4.7	2.1	外面-無文 内面-圏線内草文および欄描文 色調：胎土-灰白色、釉-青灰色 備考：龍泉窯系青磁ⅢI-2b類	2/3
6	陶器	渥美壺	(16.0)	-	現5.5	胎土：微砂、白色粒 色調：灰色 備考：1b~2b型式	口縁部1/6
7	陶器	渥美壺	-	-	現9.7	外面-横位・斜位の刻線 胎土：白色粒、細砂粒、礫、軟質 色調：灰白色	胴部片

8	陶器	渥美壺	-	-	現5.1	外面-縦線の押印 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、堅緻、良土 色調:灰色	肩部片
9	陶器	常滑甕	(18.6)	-	現4.2	胎土:白色粒、細砂粒、礫 色調:灰色 備考:4型式	口縁部小破片
10	陶器	常滑甕	-	-	現2.7	胎土:精良堅緻、白色粒、良土 色調:暗茶褐色 備考:5型式	口縁部小破片
11	陶器	常滑甕	-	-	現4.8	胎土:堅緻、白色粒、砂粒 色調:暗灰色 備考:5型式	口縁~頸部片
12	陶器	常滑甕	-	-	現6.7	胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰色 備考:6a型式	口縁~頸部片
13	陶器	常滑甕	(42.8)	-	現9.5	胎土:堅緻、白色粒、砂粒、小石粒 色調:暗茶褐色 備考:9型式	口縁部片
14	陶器	常滑甕	-	-	現7.7	外面-複合斜線文の押印 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒、礫 色調:暗赤褐色	肩部小破片
15	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現2.7	胎土:白色粒、砂粒 色調:灰色	口縁部小破片
16	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現3.6	胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰白色	口縁部小破片
17	陶器	常滑片口鉢II類	(25.6)	-	現4.8	胎土:堅緻、砂粒、白色小石粒、礫 色調:暗灰~暗灰褐色 備考:9型式	口縁部小破片
18	土製品	土錘	現長3.2	幅1.0	孔径0.4	管状土錘 胎土:雲母、赤色粒、細砂粒、良土 色調:淡橙~橙色	2/3
19	金属製品	釘	長8.1	幅0.4	厚0.4	鉄製釘 頭頂部方形	完形
20	骨製品	筭	現長5.9	幅0.5~0.7	厚0.2	上下端部欠損 片面に2条の凹み状加工 材質:シカ中足骨	小片
21	骨製品	用途不明品	径3.3	孔径0.5~0.6	厚2.0	メジロザメ科の椎骨を加工-中心に穿孔、側面使用により摩耗	完形
22	木製品	櫛	現長4.2	現幅3.1	厚1.0	櫛歯14本遺存 黒漆塗布	小片

表4 第3面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構1出土遺物(図26)

1	土器	ロクロかわらけ・中	12.9	9.2	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
2	陶器	常滑甕	-	-	現5.4	胎土:白色粒、砂粒、小石粒、色調:灰色 備考:6a型式	口縁部小破片
3	陶器	常滑甕	-	-	現6.5	外面斜格子押印 胎土:白色粒、砂粒、礫 色調:にぶい黄褐色	肩部小破片
4	瓦質土器	火鉢	-	-	現7.4	胎土:雲母、白色粒、赤色粒、小石粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:Ic類	口縁部小破片
5	瓦	平瓦	現長8.4	現幅7.3	厚2.2	凸面-格子叩き 凹面-側縁方向ナデ調整 側面-ヘラ削り 胎土:砂粒、小石粒、良土 色調:灰色	小片
6	瓦	丸瓦	現長16.2	現幅9.8	厚2.0	凸面-糸切痕+端縁方向ヘラナデ+側縁方向ヘラナデ、側縁-ヘラ調整 凹面-糸切痕+布目痕+桝板圧痕 側面-ヘラ削り 胎土:砂粒、小石粒、礫 色調:暗灰色 備考:有段式丸瓦	1/3
7	石製品	滑石製石鍋	-	-	現3.8	石質-滑石 色調:灰白色	口縁部小破片

土坑21出土遺物(図28)

1	土器	ロクロかわらけ・大	13.6	7.7	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	3/4
2	磁器	青磁碗	-	-	現4.6	劃花文碗 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類	口縁部片
3	陶器	山茶碗	-	7.6	現3.2	糸切痕残存、貼付高台 胎土:白色粒、砂粒 色調:灰色	1/4
4	陶器	常滑甕	-	-	現5.4	外面-格子+矢羽根押印 胎土:白色粒、砂粒、小石粒、礫 色調:にぶい黄褐色	肩部片

表5 第3面 溝状遺構1 出土人骨・動物遺体一覧表(図版7・8)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
溝状遺構1	3面	イヌ	上顎骨	左		5	幼体I、1歳未満
溝状遺構1	3面	イヌ	上顎骨	左		6	幼体II、1歳未満
溝状遺構1	3面	イヌ	頭蓋骨		全長:173.19	8	
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	右	127.8	9	関節突起間長、関節窩深:4.8
溝状遺構1	3面	イヌ	頭蓋骨	左		4	幼体
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	左		10	
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	右		7	幼体、推定4ヶ月
溝状遺構1	3面	イヌ	環椎・軸椎・頸椎			11~13	
溝状遺構1	3面	イヌ	胸椎			14	
溝状遺構1	3面	イヌ	腰椎			15	
溝状遺構1	3面	イヌ	肩甲骨	右	25		関節幅
溝状遺構1	3面	イヌ	肩甲骨	左		17	
溝状遺構1	3面	イヌ	上腕骨	左		18	
溝状遺構1	3面	イヌ	上腕骨	左	139.6		
溝状遺構1	3面	イヌ	橈骨	右			
溝状遺構1	3面	イヌ	橈骨	左	140.7	19	
溝状遺構1	3面	イヌ	尺骨	右	肘突起間:23.7		
溝状遺構1	3面	イヌ	尺骨	左		20	
溝状遺構1	3面	イヌ	中手/中足	右/左			9個
溝状遺構1	3面	イヌ	肋骨				42個
溝状遺構1	3面	イヌ	腰椎			16	癒着
溝状遺構1	3面	イヌ	陰茎骨				先端欠
溝状遺構1	3面	イヌ	寛骨+仙骨	右	全長:135.1	21	腸骨最小径:17.7
溝状遺構1	3面	イヌ	寛骨+仙骨	左		21	
溝状遺構1	3面	イヌ	大腿骨	右	156.6		
溝状遺構1	3面	イヌ	大腿骨	左		22	
溝状遺構1	3面	イヌ	胫骨+腓骨	右		24	
溝状遺構1	3面	イヌ	脛骨	左	157.6	23	
溝状遺構1	3面	イヌ	腓骨片	右/左			3個
溝状遺構1	3面	イヌ	踵骨と距骨	左		25	
溝状遺構1	3面	カツオ	歯骨			1	2個
溝状遺構1	3面	カツオ	舌顎骨			2	
溝状遺構1	3面	イルカ類	尾椎骨			3	
溝状遺構1	3面	イノシシ・シカ	肢骨片				2個
溝状遺構1	3面	ヒト	頭蓋骨	右		26	

表6 出土人骨・動物遺体一覧表(図版9・10)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
表土		スズキ	主鰓蓋骨	右			
表土		マグロ類	椎骨			5	2個
表土		マグロ類	尾部棒状骨			7	
表土		マダイ	歯骨	右		2	
表土		魚類	椎骨片				2個
表土		魚類					2個 破片
表土		メジロザメ類	椎骨			10	11個
表土		小形のクジラ類	腰椎			15	縦に半裁している
表土		バンドウイルカ	下顎関節部分	左		11	
表土		イルカ類	頭蓋骨片				
表土		イルカ類	胸椎			13	6個
表土		イルカ類	腰椎			14	2個
表土		イルカ類	椎体関節板と破片				
表土		イルカ類					5個 破片
表土		カラス類	上腕骨	左			
表土		イヌ	寛骨	左		21	
表土		ウマ	中節骨			31	
表土		ニホンジカ	環椎			24	切痕多数
表土		ニホンジカ	大腿骨	右		28	
表土		ニホンジカ	頸椎骨				
表土		ウシ	基節骨	右		29	30と同一個体
表土		ウシ	中節骨	右		30	29と同一個体
表土		ヒト	白歯				
土坑4	第1面	カツオ類	椎骨			3	
土坑4	第1面	イルカ類					
土坑5	第1面	ノウサギ	中足骨	右		16	
土坑5	第1面	ノウサギ	中足骨			17	破損
土坑5	第1面	ニホンジカ	橈骨	右		27	2個 近位
土坑7	第1面	トリ	尺骨	右			
土坑9	第1面	マグロ類	椎骨			4	
土坑9	第1面	イヌ	肋骨片				2個
土坑9	第1面	イノシシ・シカ	肋骨				
土坑11	第1面	キツネ	中足類				
土坑12	第1面	魚類	鰭棘				
土坑12	第1面	イルカ類	下顎枝片				
土坑12	第1面	イルカ類	胸椎				

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
土坑12	第1面	イルカ類	肋骨				切断痕
ビット6	第1面	メジロザメ類	椎骨			8	
ビット6	第1面	獣類					破片
ビット18	第1面	鳥類					破片
ビット18	第1面	イルカ類	肋骨				
ビット19	第1面	鳥類					破片
ビット19	第1面	メジロザメ類	椎骨			9	
ビット25	第1面	マグロ類					
ビット35	第1面	イルカ類					
構成土	第1面	魚類					2個 破片
構成土	第1面	魚類	鱗棘				大型
構成土	第1面	メジロザメ類	椎骨				
構成土	第1面	マグロ類	尾部棒状骨片			6	
構成土	第1面	イルカ類	椎骨				2個
構成土	第1面	イルカ類	肋骨片				4個
構成土	第1面	イルカ類	肋骨その他				4個
構成土	第1面	イルカ類	腰椎				
構成土	第1面	イルカ類					破片
構成土	第1面	イヌ	上腕骨	右		19	幼体
構成土	第1面	イヌ	大腿骨	左		22	小型
構成土	第1面	ニホンジカ	軸椎片			25	切断痕
構成土	第1面	ヒト	大腿骨片				
方形土坑1	第2面	ウミガメ類	肢骨片				
方形土坑1	第2面	ニホンジカ	大腿骨	右			近位骨端骨
構成土	第2面	魚類	鱗棘片				35個
構成土	第2面	マダイ	主上顎骨	左		1	
構成土	第2面	カツオ類	主鰓蓋骨	左			2個
構成土	第2面	バンドウイルカ	胸椎			12	大型 切痕 椎骨片
構成土	第2面	イルカ類	腰椎				2個
構成土	第2面	イルカ類					4個 破片
構成土	第2面	イヌ	上顎片	左		18	幼体
構成土	第2面	イヌ	下顎犬歯	右			(若)
構成土	第2面	イヌ	寛骨	右		20	やや大きい
構成土	第2面	イヌ	脛骨	右		23	近位端欠
構成土	第2面	ウマ	末節骨			32	
構成土	第2面	ニホンジカ	肩甲骨	右		26	
構成土	第2面	ヒト	頭蓋片				
構成土	第2面	ヒト	下顎骨片	右		33	♂ M1のみのこる

表7 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	〈78〉	〈59〉	8	ビット22	第1面	36	31	18	ビット55	第1面	41	35	13
土坑2	第1面	〈87〉	66	16	ビット23	第1面	34	24	12	ビット56	第1面	44	〈38〉	13
土坑3	第1面	80	62	11	ビット24	第1面	33	〈24〉	22	ビット57	第1面	〈25〉	25	12
土坑4	第1面	195	119	9	ビット25	第1面	30	〈21〉	18	ビット58	第1面	31	29	16
土坑5	第1面	62	-	19	ビット26	第1面	39	38	25	ビット59	第1面	〈42〉	〈23〉	26
土坑6	第1面	〈72〉	52	31	ビット27	第1面	37	30	13	ビット60	第1面	24	〈20〉	7
土坑7	第1面	193	137	32	ビット28	第1面	〈39〉	32	15	ビット61	第1面	〈23〉	19	16
土坑8	第1面	〈70〉	〈64〉	24	ビット29	第1面	43	38	39	ビット62	第1面	27	26	26
土坑9	第1面	〈111〉	〈42〉	15	ビット30	第1面	43	42	25	ビット63	第1面	〈37〉	29	20
土坑10	第1面	114	88	13	ビット31	第1面	36	〈20〉	10	ビット64	第1面	48	〈30〉	14
土坑11	第1面	〈70〉	〈49〉	9	ビット32	第1面	〈45〉	〈44〉	21	ビット65	第1面	〈30〉	30	28
土坑12	第1面	138	〈47〉	45	ビット33	第1面	20	〈18〉	12	方形土坑1	第2面	251	163	41
ビット1	第1面	42	〈25〉	20	ビット34	第1面	〈41〉	〈19〉	12	土坑13	第2面	〈129〉	〈62〉	16
ビット2	第1面	23	14	27	ビット35	第1面	36	31	14	ビット66	第2面	32	26	9
ビット3	第1面	39	32	19	ビット36	第1面	32	29	16	ビット67	第2面	27	26	7
ビット4	第1面	21	19	26	ビット37	第1面	26	-	14	ビット68	第2面	21	17	6
ビット5	第1面	21	19	11	ビット38	第1面	38	〈16〉	12	ビット69	第2面	22	-	15
ビット6	第1面	35	〈29〉	21	ビット39	第1面	47	21	21	ビット70	第2面	40	〈21〉	7
ビット7	第1面	〈35〉	〈30〉	32	ビット40	第1面	〈30〉	〈21〉	13	ビット71	第2面	23	-	16
ビット8	第1面	30	21	24	ビット41	第1面	34	〈33〉	16	ビット72	第2面	33	32	15
ビット9	第1面	36	27	39	ビット42	第1面	30	〈27〉	14	ビット73	第2面	28	〈16〉	13
ビット10	第1面	〈25〉	21	20	ビット43	第1面	35	29	14	ビット74	第2面	32	25	10
ビット11	第1面	〈49〉	〈27〉	17	ビット44	第1面	49	〈47〉	17	ビット75	第2面	26	25	13
ビット12	第1面	43	32	18	ビット45	第1面	32	30	4	ビット76	第2面	〈40〉	30	15
ビット13	第1面	44	41	10	ビット46	第1面	31	27	9	ビット77	第2面	25	〈15〉	4
ビット14	第1面	24	〈12〉	17	ビット47	第1面	43	34	20	溝状遺構1	第3面	〈200〉	227	27~35
ビット15	第1面	23	21	18	ビット48	第1面	〈51〉	49	12	土坑14	第3面	〈63〉	〈20〉	6
ビット16	第1面	52	43	19	ビット49	第1面	〈55〉	〈25〉	18	土坑15	第3面	〈62〉	49	43
ビット17	第1面	32	26	20	ビット50	第1面	42	38	20	土坑16	第3面	78	63	63
ビット18	第1面	44	38	27	ビット51	第1面	〈29〉	〈16〉	23	土坑17	第3面	100	〈55〉	27
ビット19	第1面	53	〈50〉	15	ビット52	第1面	42	〈18〉	27	土坑18	第3面	〈67〉	〈30〉	8
ビット20	第1面	29	24	16	ビット53	第1面	19	17	7	土坑19	第3面	141	〈69〉	35
ビット21	第1面	48	〈39〉	15	ビット54	第1面	27	26	19	土坑20	第3面	168	157	12

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
土坑 21	第 3 面	<142>	<71>	55
ピット 78	第 3 面	46	29	28
ピット 79	第 3 面	56	<47>	35
ピット 80	第 3 面	27	-	41
ピット 81	第 3 面	52	36	29
ピット 82	第 3 面	<32>	<31>	17

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ピット 83	第 3 面	33	<30>	17
ピット 84	第 3 面	27	25	33
ピット 85	第 3 面	22	18	11
ピット 86	第 3 面	21	-	11
ピット 87	第 3 面	35	24	14

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ピット 88	第 3 面	<25>	24	10
ピット 89	第 3 面	35	24	14
ピット 90	第 3 面	34	25	12
ピット 91	第 3 面	<39>	23	14
ピット 92	第 3 面	42	<31>	14

表 8 出土遺物一覧表

表土

第 1 面

産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	134	
【白磁】			
	皿Ⅸ類	2	
	器種不明	1	
【青磁】			
同安窯系	皿	1	
龍泉窯系	碗Ⅰ類	7	
	碗Ⅱ類	2	
	坏	1	
	壺	1	
	酒会壺	1	
	器種不明	1	
【青白磁】			
	水注	1	
【陶器】			
中国	褐釉陶器	1	
瀬戸	瓶類	2	
	仏華瓶	1	
	四耳壺	1	
	壺	10	
	盤	35	
	香炉	1	
	天目茶碗	6	
	緑釉小皿	6	
	折縁深皿	2	
	直縁大皿	1	
	卸皿	9	
	行平鍋	1	
	播鉢	3	
	平碗	2	
	碗	15	
	皿	1	
	瀬戸・美濃	志野皿	1
渥美	甕	2	
常滑	甕	140	
	壺	2	
	玉縁壺	2	
	片口鉢Ⅱ類	33	
	摩托陶片	2	
東播系	鉢	1	
備前	播鉢	3	
【土器】			
	羽釜	25	
【瓦質土器】			
	碗	3	
	香炉	1	
	火鉢	6	
【瓦】			
	平瓦	2	
【石製品】			
	砥石	5	
	滑石製石鍋転用品	1	
【土製品】			
	土錘	1	
	ふいごの羽口	1	
【土師器】			
	甕	1	
【金属製品】			
	銭貨	11	
	釘	18	
	鋸	1	
		合計	511

土坑 1			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	5	
【陶器】			
常滑	甕	1	
備前	播鉢	1	
		合計	7
土坑 2			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	9	
【陶器】			
常滑	甕	3	
【土器】			
	羽釜	1	
		合計	13
土坑 3			
産地	器種	破片数	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1	
【陶器】			
常滑	甕	1	
【金属製品】			
	釘	1	
		合計	3
土坑 4			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	4	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1	
【青白磁】			
	合子	1	
【陶器】			
常滑	甕	4	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
		合計	11
土坑 5			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
瀬戸	碗	2	
常滑	壺	1	
		合計	6
土坑 6			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	1	
【陶器】			
瀬戸	碗	1	
常滑	甕	1	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
		合計	4

土坑 7			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	14	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	
【陶器】			
瀬戸	卸皿	1	
常滑	甕	3	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
	羽釜	1	
【石製品】			
	砥石	1	
		合計	22
土坑 8			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
常滑	甕	1	
		合計	4
土坑 9			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	4	
【陶器】			
瀬戸	緑釉小皿	1	
	行平鍋	1	
常滑	甕	2	
【金属製品】			
	釘	2	
		合計	10
土坑 10			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
瀬戸	碗	1	
常滑	甕	2	
		合計	6
土坑 11			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	6	
【陶器】			
瀬戸	折縁深皿	1	
		合計	7
土坑 12			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	27	
【青磁】			
	碗Ⅱ類	1	
【陶器】			
瀬戸	卸皿	1	
	碗	1	

瀬戸	皿	1
	縁釉小皿	2
常滑	堯	3
	摩耗陶片	1
合計		37

ビット11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

ビット16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	堯	3
合計		7

ビット17		
産地	器種	破片数
【陶器】		
中国	器種不明	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
合計		2

ビット18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
【土師器】		
	堯	1
合計		10

ビット24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		2

ビット25		
産地	器種	破片数
【青白磁】		
	梅瓶	1
合計		1

ビット26		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【金属製品】		
	釘	1
合計		2

ビット28		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		2

ビット29		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	堯	1
合計		1

ビット30		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	2
合計		2

ビット31		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット32		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
	器種不明	1
常滑	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計		5

ビット34		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	堯	1
常滑	堯	1
合計		2

ビット39		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
合計		5

ビット44		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		1

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
中国	器種不明	1
常滑	堯	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		8

ビット48		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
常滑	堯	3
【瓦】		
	平瓦	1
合計		6

ビット49		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
常滑	堯	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		7

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	39
【青磁】		
同安窯系	碗	1
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	壺	2
	瓶子	1
	盤	1
	鉢	1
	折縁深皿	1
	卸皿	2
渥美	碗	1
	堯	2
常滑	堯	72
	片口鉢Ⅰ類	9
	片口鉢Ⅱ類	1
東播系	鉢	1
【土器】		
南伊勢系	鍋	1
【土師器】		
	堯	1
【瓦質土器】		
	火鉢	2
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	1
【骨製品】		
	筭	1
【金属製品】		
	釘	6
合計		148

第2面		
方形土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	25
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
同安窯系	皿	1
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
【陶器】		
瀬戸	瓶類	1
	壺	1
渥美	壺	1
常滑	堯	13
	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
【土器】		
南伊勢系	鍋	3
	羽釜	2
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	2
【金属製品】		
	銭貨	4
	釘	2
合計		61

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	堯	2
【瓦】		
	平瓦	1
合計		7

第2面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	76
	かわらけ 手づくね成形	6
【白磁】		
	壺	1
	碗	1
	皿	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	6
	碗Ⅱ類	7
	皿Ⅰ類	1
	鉢	1
	鉢壺	1
【陶器】		
中国	器種不明	4
瀬戸	盤	1
	壺	3
	皿	1
渥美	甍壺	11
常滑	甍壺	109
	片口鉢Ⅰ類	3
	片口鉢Ⅱ類	13
	片口鉢Ⅱ類	5
	広口壺	2
	器種不明	2
【土器】		
南伊勢系	鍋	1
	ふいごの羽口	1
【瓦質土器】		
	火鉢	3
【瓦】		
	丸瓦	3
	平瓦	5
【骨製品】		
	筭	1
	用途不明品	1
【土製品】		
	土錘	2
【須恵器】		
	蓋	1
【土師器】		
	坏	1
	甍	2
	器種不明	1
【木製品】		
	櫛	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	8
	鉄滓	1
	合計	292

第3面		
溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
	かわらけ 手づくね成形	2
【陶器】		
中国	褐釉陶器	3
常滑	甍	26
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	2
	山茶碗	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【石製品】		
	滑石製石鍋	1
	合計	46
土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
	合計	2
土坑19		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甍	2
	合計	2
土坑20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甍	1
	片口鉢Ⅱ類	1
	合計	3
土坑21		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1

【青磁】		
産地	器種	破片数
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	壺	1
【陶器】		
渥美	甍	4
常滑	甍	2
	片口鉢Ⅰ類	1
	山茶碗	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	1
	合計	13

ピット83		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	甍	1
	壺	1
	合計	2

ピット91		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	合計	1

ピット92		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	合計	1

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	壺	1
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦】		
	平瓦	1
	合計	3

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	櫛	1
	合計	1



1. 南壁土層断面(北から)



2. 第1面南半全景(東から)



3. 第1面北半全景(南から)

図版 2



1. 第2面南半全景(南から)



2. 第2面北半全景(南から)



3. 第3面南半全景(南から)



1. 第3面北半全景(南から)



2. 第3面 溝状遺構1全景(西から)



3. 第3面 溝状遺構1イヌ骨出土状態(東から)

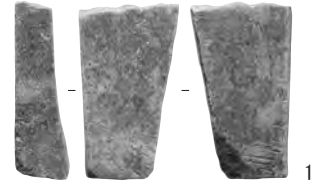
図版 4



1. 第1面 土坑1出土遺物



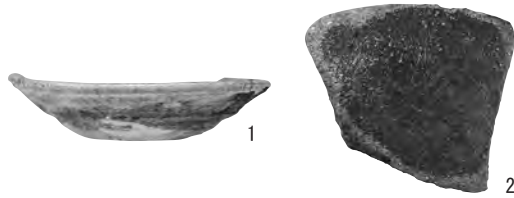
2. 第1面 土坑6出土遺物



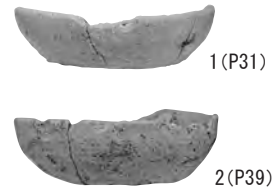
3. 第1面 土坑7出土遺物



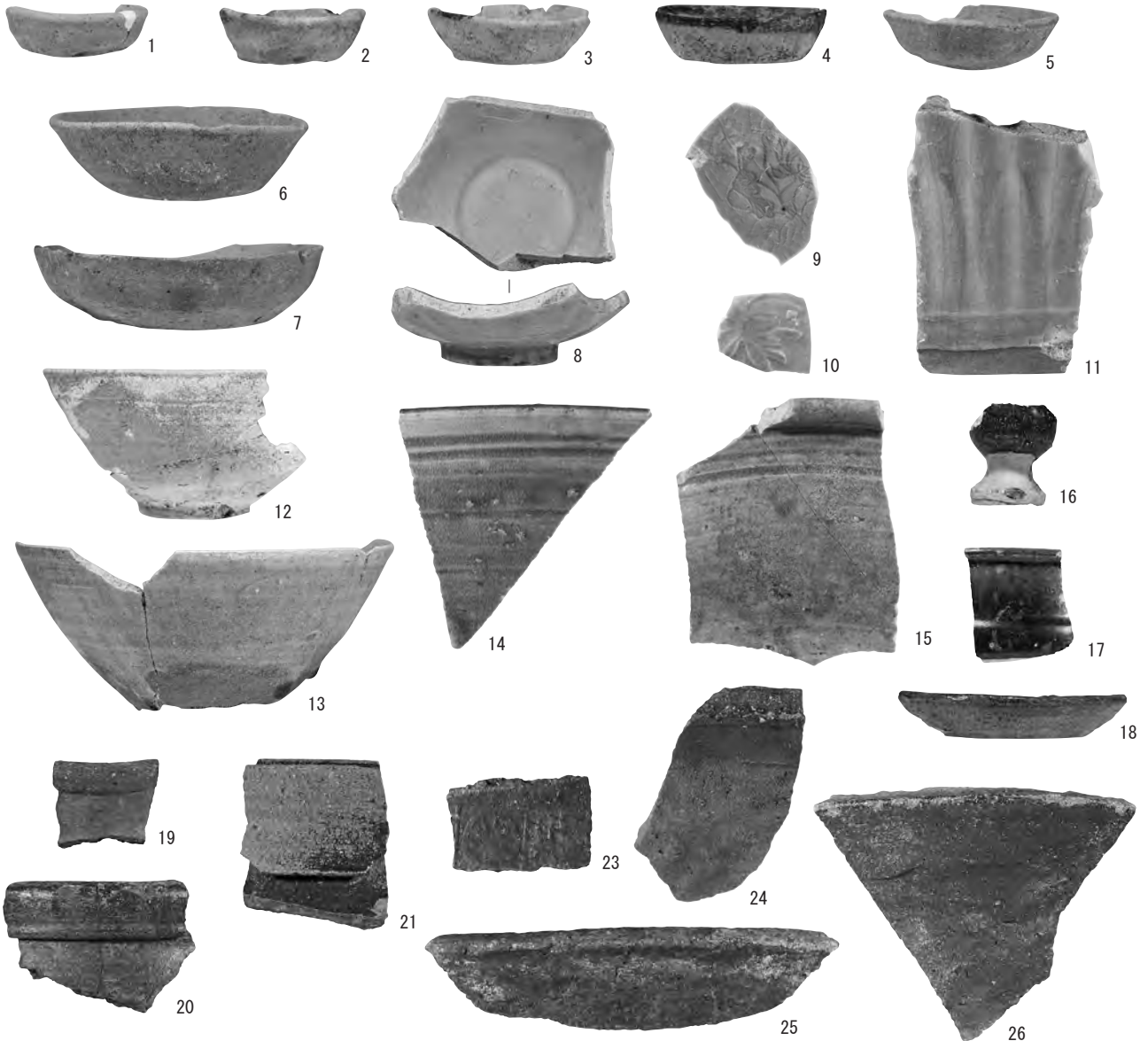
4. 第1面 土坑11出土遺物



5. 第1面 土坑12出土遺物



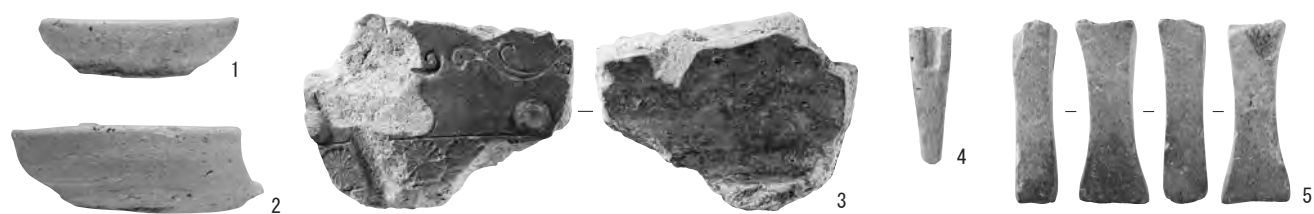
6. 第1面 ピット出土遺物



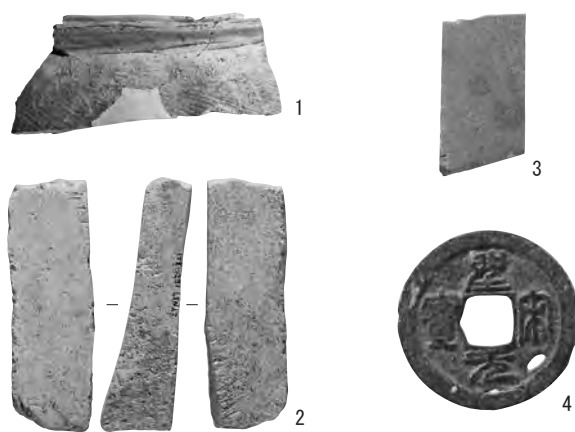
7. 表土出土遺物(1)



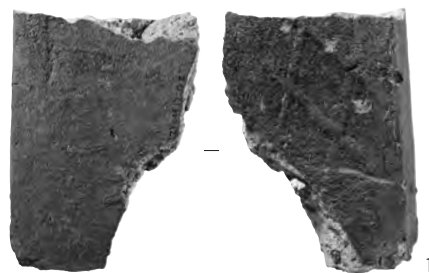
1. 表土出土遺物(2)



2. 第1面 構成土出土遺物

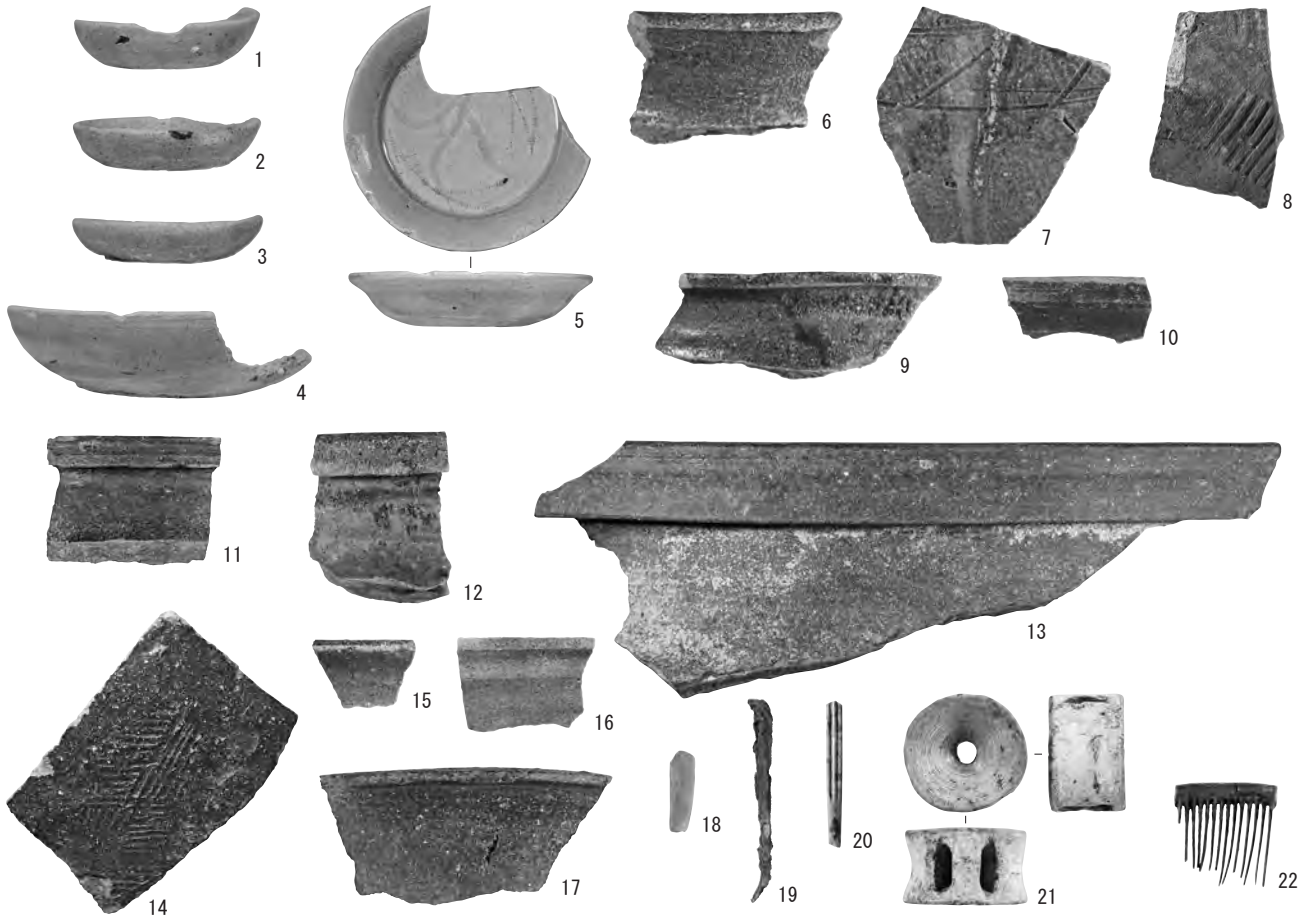


3. 第2面 方形土坑1出土遺物

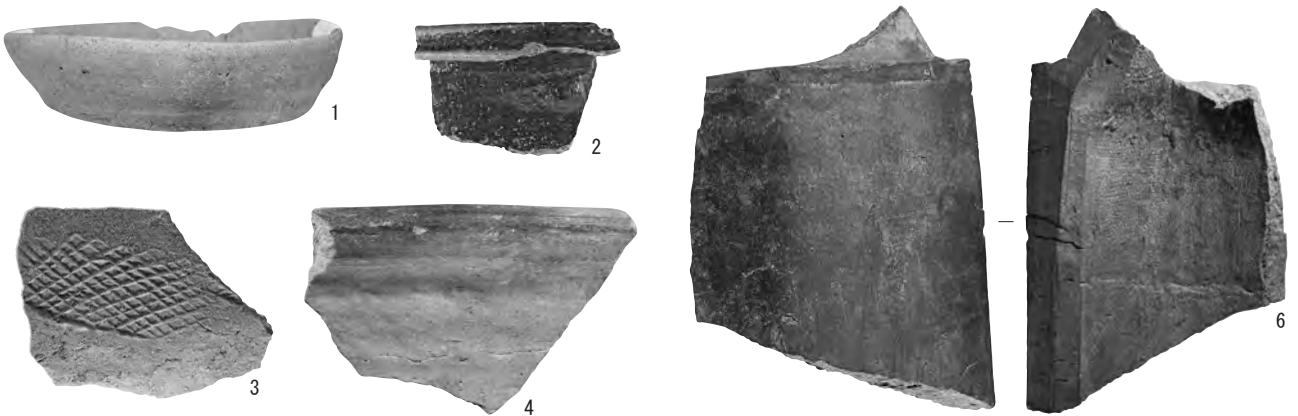


4. 第2面 土坑13出土遺物

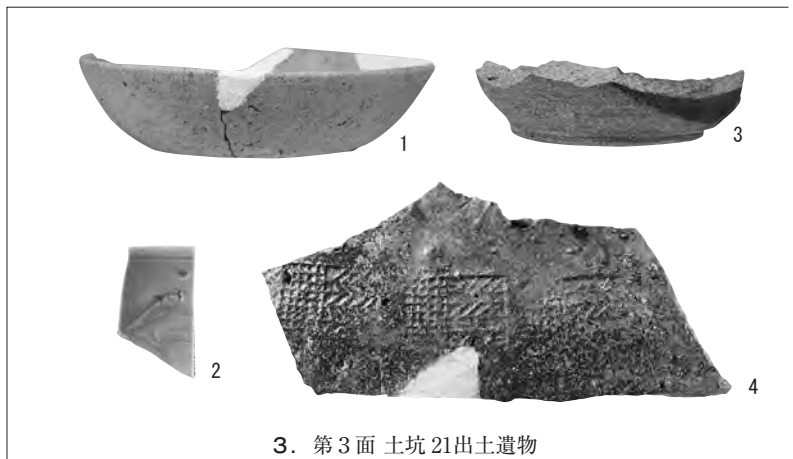
图版 6



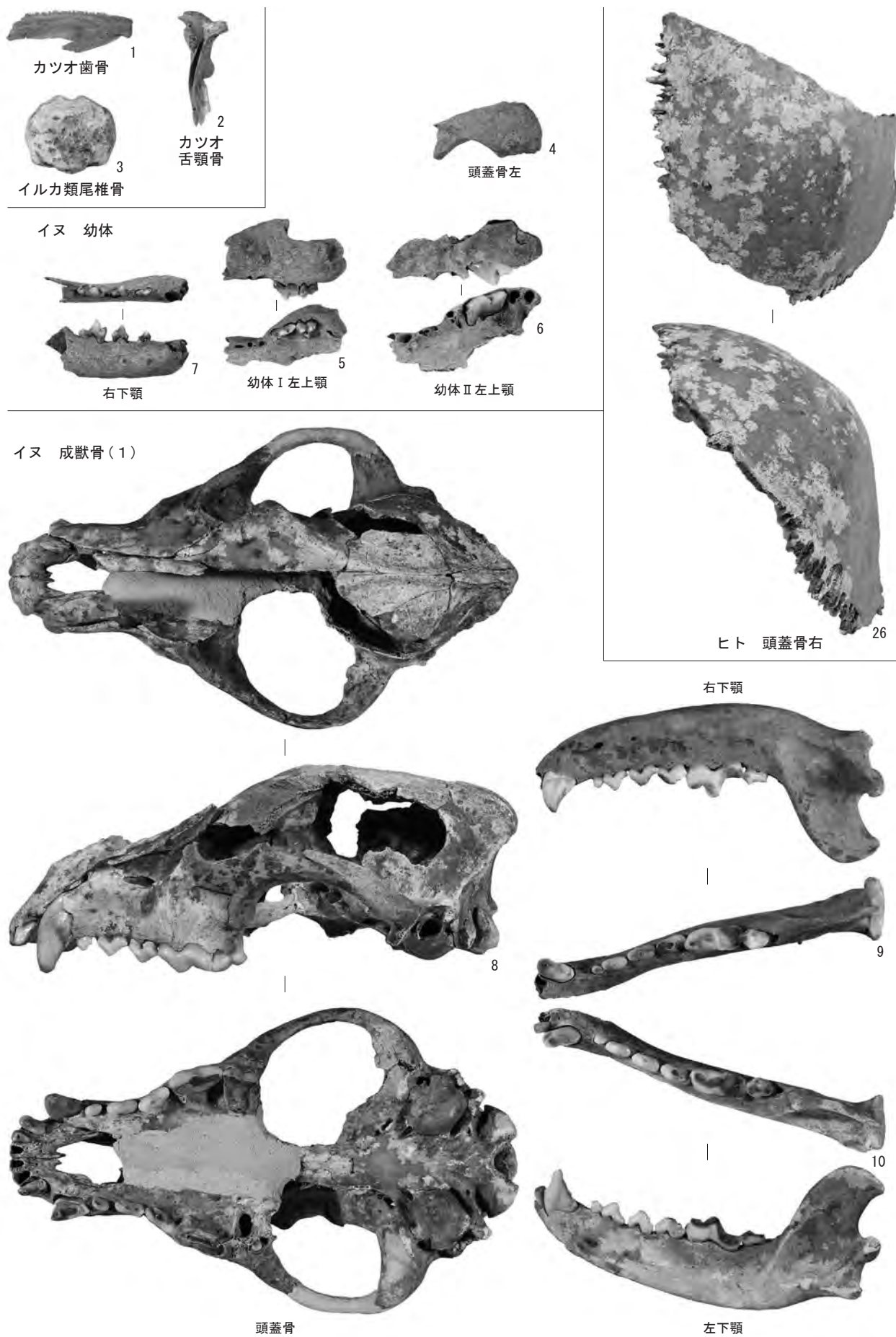
1. 第2面 構成土出土遺物



2. 第3面 溝状遺構1出土遺物



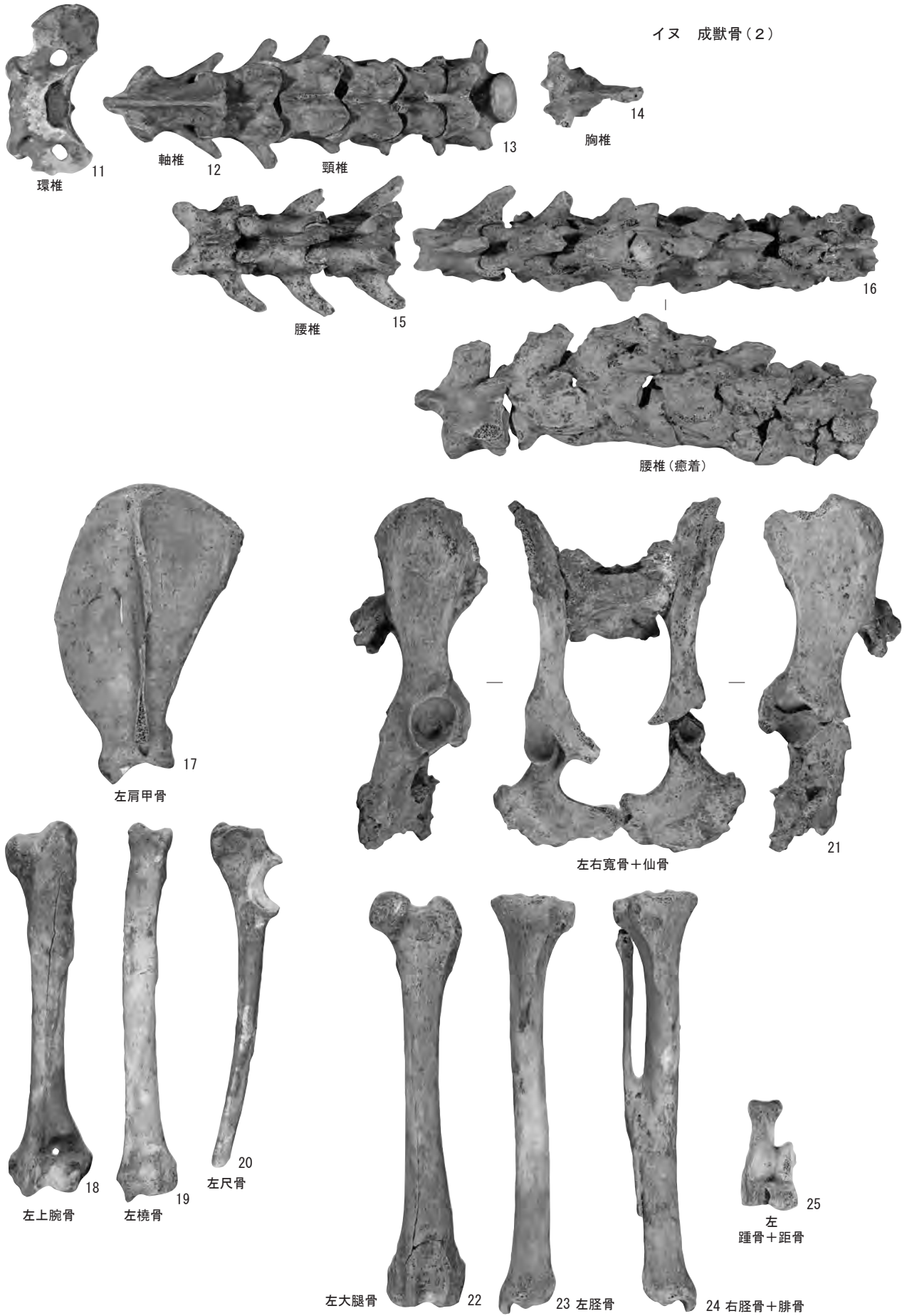
3. 第3面 土坑21出土遺物



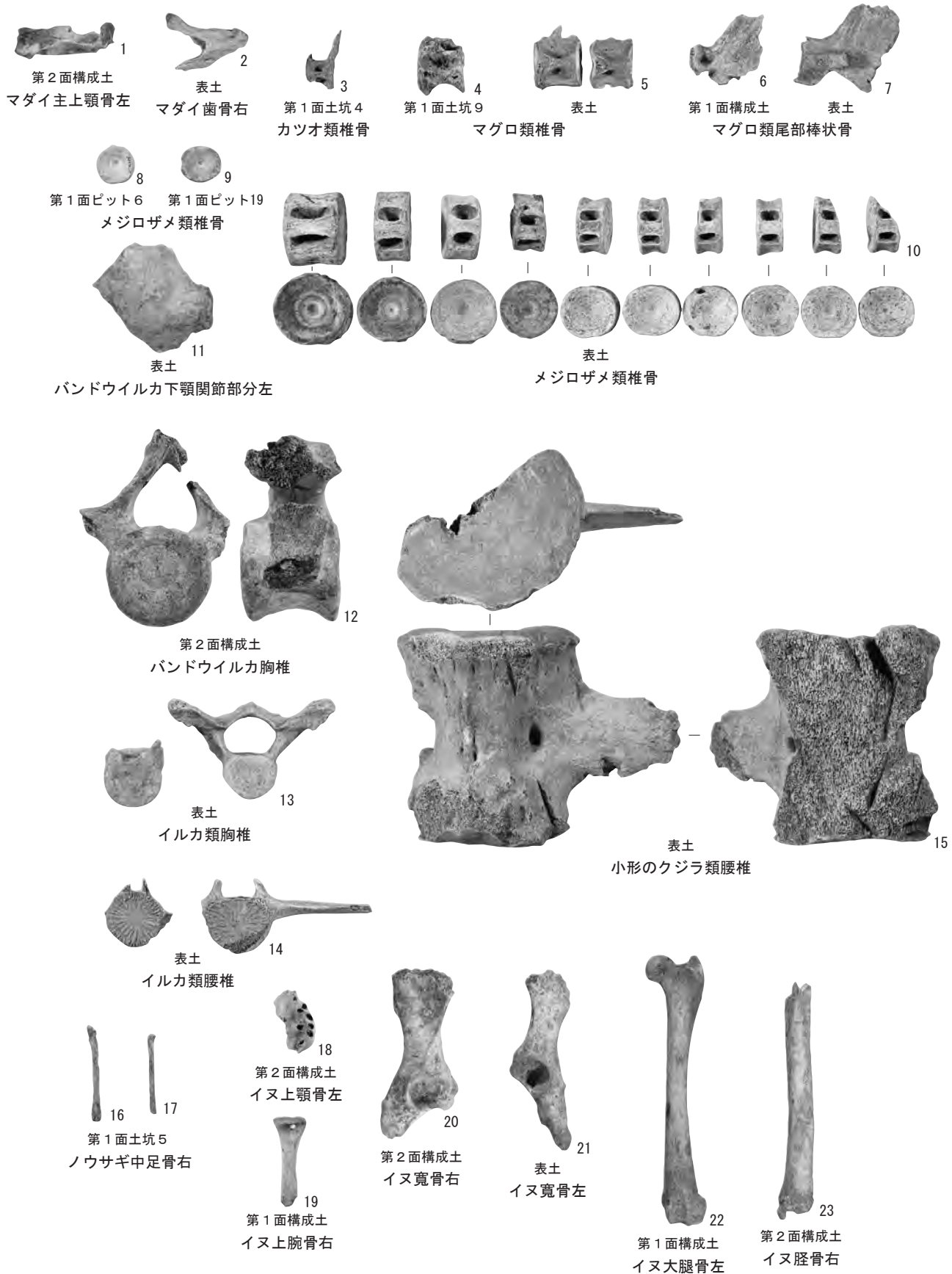
1. 第3面 溝状遺構1出土人骨・動物遺体(1)

図版 8

イヌ 成獣骨(2)

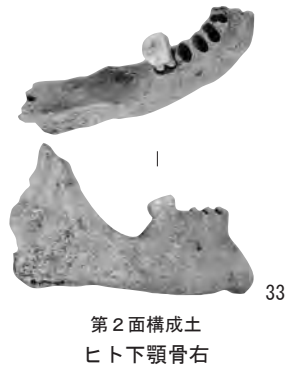
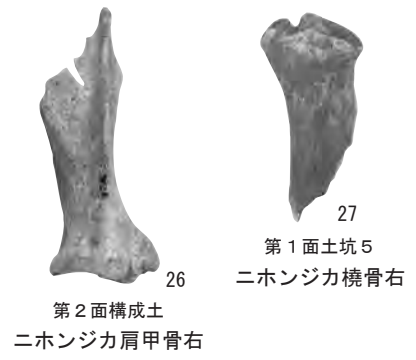
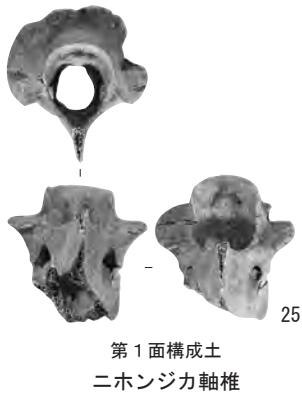


1. 第3面 溝状遺構1 出土動物遺体(2)



1. 出土動物遺体(1)

図版 10



1. 出土人骨・動物遺体(2)

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成30年度発掘調査報告							
巻次	35 (第4分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	永田史子・米澤雅美							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行月日	西暦2019年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ゆきのした1ちょうめ 雪ノ下一丁目 ばん 421番1	14204	282	35° 19' 18"	139° 33' 15"	20100329 ～ 20100521	27	個人専用住宅 (柱状改良工事)
にしうりがやついせき 西瓜ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字瓜ヶ谷 980番3外	14204	213	35° 20' 7"	139° 32' 30"	20090216 ～ 20090316	54	店舗併用 個人専用住宅 (柱状改良工事)
やまのうちうえすぎていあと 山ノ内上杉邸跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字東管領 やしき 屋敷179番9外	14204	170	35° 20' 3"	139° 32' 56"	20081015 ～ 20081128	33	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
あんこくじあと 安国寺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字東管領 やしき 屋敷147番9外	14204	174	35° 19' 56"	139° 33' 1"	20100212 ～ 20100507	46	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 じょうみょうじ1ちょうめ 浄妙寺一丁目 ばん 652番1	14204	33	35° 19' 16"	139° 33' 53"	20081010 ～ 20090129	67	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 おおまち6ちょうめ 大町六丁目 ばん 1708番23外	14204	231	35° 18' 51"	139° 33' 49"	20100514 ～ 20100630	21	個人専用住宅 (杭基礎工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご1ちょうめ 材木座一丁目 ばん 919番19	14204	261	35° 18' 45"	139° 33' 9"	20080627 ～ 20080716	28	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご1ちょうめ 材木座一丁目 ばん 893番9	14204	261	35° 18' 44"	139° 33' 8"	20080724 ～ 20080801	13	個人専用住宅 (柱状改良工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご6ちょうめ 材木座六丁目 ばん 742番4外	14204	261	35° 18' 20"	139° 33' 7"	20090721 ～ 20090826	45	個人専用住宅 (柱状改良工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	城館	中世 近世	礎板建物、掘立柱建物、 土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、土製品、金属製品、 木製品	13世紀後葉～14世紀代、18 ～19世紀前葉の遺構群を検 出。柱の残る近世の掘立柱 建物を確認。
にしうりがやついせき 西瓜ヶ谷遺跡	都市	中世		かわらけ、舶載磁器、国 産陶器、土器、瓦質土器、 石製品、金属製品	15世紀前半の遺物が出土。
やまのうちうえずぎていあと 山ノ内上杉邸跡	都市	中世	礎石・礎板建物、池状 遺構、溝状遺構、土坑、 ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 金属製品、木製品、漆器	13世紀中葉～14世紀中葉の 遺構群を検出。池状遺構を 検出。
あんこくじあと 安国寺跡	社寺	中世	礎石建物、切石基礎 建物、溝状遺構、板 組遺構、石列、掘鉢 遺構、土坑、不明遺構、 ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 骨製品、金属製品、木製 品、呪符木簡、漆器	13世紀代～15世紀中葉の遺 構群を検出。石組を伴う溝 状遺構を確認。高嶋産の刻 書硯、呪符木簡が出土。
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	都市	中世	礎石建物、道路状遺構、 溝状遺構、井戸、方形 土坑、土坑、ピット	土師器、かわらけ、舶載 陶磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、瓦、土製品、 石製品、骨角製品、金属 製品	13世紀初頭～15世紀中葉の 遺構群を検出。南西から北 東方向に延びる道路状遺構 と、溝が方形に巡る礎石建 物を確認。
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	都市	中世	礎石建物、溝状遺構、 かわらけ溜まり、土 坑、ピット	土師器、かわらけ、舶載 磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、土製品、石製 品、金属製品、木製品	13世紀中葉～14世紀中葉の 遺構群を検出。かわらけ溜 まりを確認。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	土坑、ピット	土師器、須恵器、かわら け、舶載陶磁器、国産陶 器、土器、瓦質土器、瓦、 土製品、石製品、骨角製 品、金属製品、木製品	13世紀前葉～14世紀前半の遺 構群を検出。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	溝状遺構、土坑、ピッ ト	土師器、かわらけ、舶載 陶磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、瓦、石製品、 木製品	13世紀後葉～14世紀前葉の 遺構群を検出。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	溝状遺構、方形土坑、 土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 骨製品、金属製品、木製 品	14世紀後葉～16世紀前葉の 遺構群を検出。溝状遺構か ら成犬の全身骨が出土。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35

平成 30 年度発掘調査報告

(第 4 分冊)

発行日 平成 31 年 3 月 29 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会
印刷 光写真印刷株式会社

ご あ い さ つ

本市は、市域の6割以上が埋蔵文化財包蔵地であり、多くの市民が埋蔵文化財の眠る土地で生活を送っています。そのため、家屋や店舗の新築や建替え等に伴い、埋蔵文化財に影響を及ぼす工事が行われることも多くあります。このように、私たちが日々の生活を送っていく上でやむを得ず失われる埋蔵文化財について、記録を保存し後世に残すことは、現在を生きる私たちの責務であると言えます。

鎌倉市教育委員会では、昭和59年度から個人専用住宅の建築等に係る発掘調査を実施しています。本書は平成17～23・25・26・29年度に実施した、個人専用住宅の建築等に伴う発掘調査28か所の調査記録を掲載しています。

本書に収めたひとつひとつの調査成果は、武家政権発祥の地であり、今もその歴史を継承し、文化を発信する鎌倉の貴重な文化遺産です。これらの成果を広く知っていただくとともに、研究資料として活用されることを願って止みません。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、関係者の皆様に深い御理解を賜るとともに、さまざまな御協力をいただきましたことを心からお礼を申し上げます。

平成31年3月29日

鎌倉市教育委員会

例 言

- 1 本書は平成30年度の国庫補助事業埋蔵文化財緊急調査に係る発掘調査報告書(第4分冊)である。
- 2 本書所収の調査地点は別表・別図のとおりである。
- 3 現地調査及び出土資料の整理は、鎌倉市教育委員会文化財課が実施し、報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
- 4 出土遺物及び調査に関する図面及び写真等は、鎌倉市教育委員会文化財課が保管している。
- 5 各調査の成果は、それぞれの報告を参照されたい。

第4分冊 目次

ごあいさつ	I
例言	II
目次	III
本誌掲載の平成20・21・22年度発掘調査地点一覧	V
調査地点位置図	VI

19 北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目421番1地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第二章 堆積土層	10
第三章 発見された遺構と遺物	10
第四章 まとめ	19

20 西瓜ヶ谷遺跡 (No.213) 山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	36
第二章 堆積土層と発見された遺物	40
第三章 まとめ	42

21 山ノ内上杉邸跡 (No.170) 山ノ内字東管領屋敷179番39地

第一章 遺跡と調査地点の概観	51
第二章 堆積土層	56
第三章 発見された遺構と遺物	57
第四章 まとめ	84

22 安国寺跡 (No.174) 山ノ内字東管領屋敷147番9外地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	118
第二章 堆積土層	120
第三章 発見された遺構と遺物	124
第四章 まとめ	159

23 田楽辻子周辺遺跡 (No.33) 浄明寺一丁目652番8地点

第一章 遺跡と調査地点の概観	192
第二章 堆積土層	197
第三章 発見された遺構と遺物	198
第四章 まとめ	225

24 名越ヶ谷遺跡 (No.231) 大町六丁目1708番23外地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	247
第二章 堆積土層	252
第三章 発見された遺構と遺物	253
第四章 まとめ	262
25 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目919番19地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	277
第二章 堆積土層	283
第三章 発見された遺構と遺物	283
第四章 まとめ	293
26 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目893番9地点	
第一章 遺跡と調査地点の概観	308
第二章 堆積土層	314
第三章 発見された遺構と遺物	314
第四章 まとめ	317
27 材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座六丁目742番4外	
第一章 遺跡と調査地点の概観	327
第二章 堆積土層	333
第三章 発見された遺構と遺物	333
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について	348
第五章 まとめ	349

本誌掲載の平成 20・21・22 年度発掘調査地点一覧

第 4 分冊

	遺 跡 名	所 在 地	調 査 原 因	遺跡種別	調査面積 (㎡)	調 査 期 間
19	北条小町邸跡 (No. 282)	雪ノ下一丁目421番 1	個人専用住宅 (柱状改良工事)	城 館	27	平成 22 年 3 月 29 日 ～平成 22 年 5 月 21 日
20	西瓜ヶ谷遺跡 (No. 213)	山ノ内字瓜ヶ谷980番 3 外	店舗併用 個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	54	平成 21 年 2 月 16 日 ～平成 21 年 3 月 16 日
21	山ノ内上杉邸跡 (No. 170)	山ノ内字東管領屋敷 179番39	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	33	平成 20 年 10 月 15 日 ～平成 20 年 11 月 28 日
22	安国寺跡 (No. 174)	山ノ内字東管領屋敷 147番 9 外	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	社 寺	46	平成 22 年 2 月 12 日 ～平成 22 年 5 月 7 日
23	田楽辻子周辺遺跡 (No. 33)	浄明寺一丁目652番 8	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	67	平成 20 年 10 月 10 日 ～平成 21 年 1 月 29 日
24	名越ヶ谷遺跡 (No. 231)	大町六丁目1708番23外	個人専用住宅 (杭基礎工事)	都 市	21	平成 22 年 5 月 14 日 ～平成 22 年 6 月 30 日
25	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座一丁目919番19	個人専用住宅 (鋼管杭工事)	都 市	28	平成 20 年 6 月 27 日 ～平成 20 年 7 月 16 日
26	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座一丁目893番 9	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	13	平成 20 年 7 月 24 日 ～平成 20 年 8 月 1 日
27	材木座町屋遺跡 (No. 261)	材木座六丁目742番 4 外	個人専用住宅 (柱状改良工事)	都 市	45	平成 21 年 7 月 21 日 ～平成 21 年 8 月 26 日

鎌倉市全図

本書掲載の平成20・21・22年度発掘調査地点(19~27)
※遺跡名は一覧表を参照





北条小町邸跡 (No.282)

雪ノ下一丁目421番1地点

例 言

1. 本報は「北条小町邸跡」（神奈川県遺跡台帳No.282）内、鎌倉市雪ノ下一丁目421番1地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年3月29日～同年5月21日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約27㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 山口正紀
調査員 本城 裕・小野夏菜
作業員 倉澤六郎・佐野吉男・鈴木啓之・大塚尚城
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を山口正紀、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「HK22」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：  整地・地業範囲
遺物：  煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	5
第1節 調査に至る経緯と経過	5
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	5
第3節 周辺の考古学的調査	6
第二章 堆積土層	10
第三章 発見された遺構と遺物	10
第1節 第1面の遺構と遺物	11
第2節 第2面の遺構と遺物	13
第3節 第3面の遺構と遺物	15
第4節 第4面の遺構と遺物	18
第四章 まとめ	19

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	7	図15 第2面 ピット出土遺物	14
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	8	図16 第2面 遺構外出土遺物	15
図3 調査区位置図	9	図17 第3面 遺構分布図	15
図4 調査区配置図	9	図18 第3面 礎板建物1	16
図5 調査区西壁 土層断面図	10	図19 第3面 礎板建物1 出土遺物	16
図6 第1面 遺構分布図	11	図20 第3面 礎板建物2	17
図7 第1面 掘立柱建物1	11	図21 第3面 土坑6～8	17
図8 第1面 土坑1～4	12	図22 第3面 土坑6 出土遺物	17
図9 第1面 土坑3 出土遺物	12	図23 第3面 ピット出土遺物	18
図10 第1面 ピット出土遺物	13	図24 第3面 遺構外出土遺物	18
図11 第1面 遺構外出土遺物	13	図25 第4面 遺構分布図	19
図12 第2面 遺構分布図	13	図26 第4面 土坑9	19
図13 第2面 土坑5	14	図27 第4面 構成土出土遺物	19
図14 第2面 ピット60・62	14		

表 目 次

表 1	北条小町邸跡 調査地点一覧……………	6	表 5	第 4 面 出土遺物観察表 ……………	22
表 2	第 1 面 出土遺物観察表 ……………	22	表 6	遺構計測表 ……………	22
表 3	第 2 面 出土遺物観察表 ……………	22	表 7	出土遺物一覧表 ……………	23
表 4	第 3 面 出土遺物観察表 ……………	22			

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地点近景(西から)……………	27			
	2. 西壁土層断面(北東から)……………	27	図版 5	1. 第 1 面 土坑 3 出土遺物……………	31
図版 2	1. 第 1 面西側(北から)……………	28		2. 第 1 面 ピット出土遺物……………	31
	2. 第 1 面東側(北から)……………	28		3. 第 1 面 遺構外出土遺物……………	31
	3. 第 2 面西側(北から)……………	28		4. 第 2 面 ピット出土遺物……………	31
	4. 第 2 面東側(北から)……………	28		5. 第 2 面 遺構外出土遺物……………	31
	5. 第 3 面西側(北から)……………	28		6. 第 3 面 礎板建物 1 出土遺物……………	31
	6. 第 3 面東側(北から)……………	28		7. 第 3 面 土坑 6 出土遺物……………	31
図版 3	1. 第 3 面 礎板建物 1 (南から)……………	29		8. 第 3 面 ピット出土遺物……………	31
	2. 第 3 面 礎板建物 2 (北から)……………	29		9. 第 3 面 遺構外出土遺物……………	31
図版 4	1. 第 3 面 礎板建物 1 ピット 4 礎板 出土状態(北から)……………	30		10. 第 4 面 構成土出土遺物……………	31
	2. 第 3 面 礎板建物 2 ピット 1 柱検出 状態(南から)……………	30			

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市雪ノ下一丁目421番1で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である北条小町邸跡（神奈川県遺跡台帳No.282）の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成21年10月13日～平成21年10月14日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約27㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、山口正紀が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年3月29日～同年5月21日までの2ヵ月ほどである。現地表面の標高は約8.5mを測る。廃土処理の都合から調査区を2区に分け、西側をⅠ区として平成21年3月29日～平成21年4月21日、東側をⅡ区として平成21年4月21日～5月21日まで調査を実施した。調査はまず重機により約80cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、中世に属する第1～4面の合計4面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして5月21日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（X = -75525.081、Y = -24994.010）、（X = -75530.227、Y = -25007.170）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

北条小町邸跡（No.282）は、鎌倉の中心軸である若宮大路の東側、鶴岡八幡宮前面（南側）の一辺約200mの略方形区画にあたる部分が埋蔵文化財包蔵地として周知されているもので、遺跡範囲は、西辺を若宮大路、北辺を横大路と鶴岡八幡宮境内、東辺を小町大路に画されている。今回の調査地点は図2に示したように遺跡範囲の南西隅部付近にあり、南側は宇都宮辻子幕府跡（No.239）と接している。JR横須賀線鎌倉駅から北東に約500m離れている。地形的には鎌倉の沖積平野の北東部に立地しており、遺跡の東側には市内最大河川である滑川が南流している。現地表面での標高は約8.5mを測る。

神奈川県遺跡台帳によれば、本遺跡の北東側には政所跡（No.247）、西側は国指定史跡若宮大路を挟んで北条時房・顕時邸跡（No.278）、南側は宇津宮辻子幕府跡（No.239）、南東側は若宮大路周辺遺跡群（No.242）、北東側は北条高時邸跡（No.281）といった周知の埋蔵文化財包蔵地に隣接している。

鎌倉に幕府を開いた源頼朝は、御所を鶴岡八幡宮東側の大倉に定め、以来、將軍の御所は大倉にあって、この地域が政治の中心であった。『吾妻鏡』によれば第3代執権北条泰時執政時の嘉祿元年（1225年）に若宮大路の東側、宇津宮辻子の北側に「新御所」の移転が行われたとされ、これにより政治的中枢が

八幡宮の東側から若宮大路一帯に移動したと考えられている。その後、嘉禎2年(1236年)には幕府と持仏堂などを「若宮大路東頼」に新造したと記されており、政治中枢が若宮大路一帯のなかで移動をしていることが知られている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。

遺跡内では今までに20ヵ所近くの調査が行われてきているが、図2でその分布をみると、商業地である若宮大路沿いの調査密度が特に高く、次いで遺跡西辺の小町大路沿いが多い。このうち、遺跡の東辺、若宮大路に面した①～⑧地点では、いずれも若宮大路の東側側溝とみられる溝および、側溝の木組枿材が検出されており、遺構の重複関係や遺構面の先後関係から、各地点で数時期の変遷が把握されている。そして側溝は、幅約3.0m(1丈)、深さ約1.5mの規模を有することが推定され、若宮大路の西側にあたる北条時房・顕時邸跡(No.282)の数地点で検出された側溝との比較検討から、大路の幅は両側溝の心々間で計測すると33m(11丈)であったことが推定されている(馬淵 1987、馬淵ほか 1996)。また、若宮大路に関連した遺物としては、③地点で木組側溝の底面から出土した「一丈伊北太郎跡」、「一丈南くのに井の四郎入道跡」と書字が残る墨書木簡2点があげられる(馬淵 1985a)。この2点は御家人とみられる「伊北太郎」、「くのに井の四郎入道」の所領相続者が側溝一丈分の作事を負担したことを示すものと解釈されており、若宮大路が当時どのように維持・管理されていたのかを知るうえで重要な資料となっている。③地点の側溝底部からは、屋敷の出入り口に当たる橋脚基礎の礎板が検出された。側溝の東側には屋敷の塀と思われる柱穴列が側溝に平行して穿たれる。また、屋敷内の大路沿いには小規模な掘立柱建物や竪穴状遺構が検出される傾向にある。なお、①地点では、事業者の厚志により中世地山面で検出した遺構の型取保存が実施された(小野田・熊谷 2018)。これが新築された店舗内の一角に展示されており、現在も発掘調査時の姿を間近にみることができる。

遺跡の西辺、小町大路に面した⑨～⑬地点では、小町大路の西側側溝が検出されている。現小町大路の東側にあたる若宮大路周辺遺跡群で検出された東側側溝との比較検討により、小町大路の道幅は21～24mを測り、おそらく22～23mが平均的な数値と考察されている(馬淵ほか 2010)。

表1 北条小町邸跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目421番1地点	
①	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目378番1・5地点	小野田・熊谷 2018
②	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目377番7地点	馬淵ほか 1996
③	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目372番7地点	馬淵 1985a
④	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目371番1地点	馬淵 1985b
⑤	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目370番1地点	宗臺・土屋 1998
⑥	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目369番外地点	瀬田 1991
⑦	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目369番1地点	原ほか 1998
⑧	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目367番1・368番1地点	宮田・森ほか 2000
⑨	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目395番地点	菊川 1989
⑩	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目400番1地点	馬淵ほか 2002
⑪	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目432番2地点	松尾 1983
⑫	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目432番2地点	菊川ほか 1989
⑬	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目440番の一部地点	馬淵ほか 2010
⑭	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目401番5地点	馬淵ほか 2003
⑮	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目403番14地点	押木 2017
⑯	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目407番3の一部地点	原ほか 2005
⑰	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目374番2地点	玉林 1986
⑱	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目427番2外地点	沖元 2015
⑲	北条小町邸跡(No.282)	雪ノ下一丁目419番3地点	玉林 1987

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

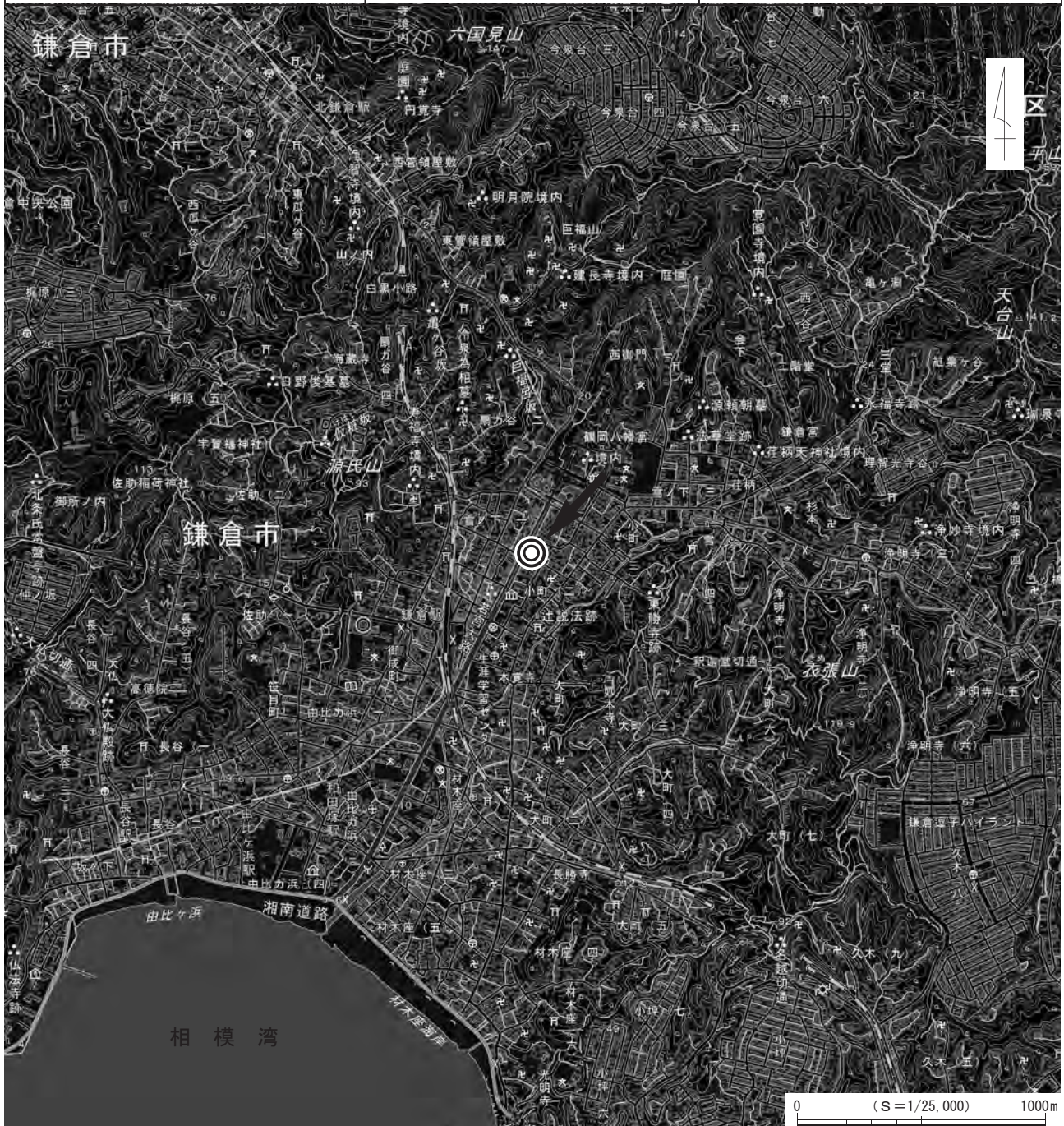


図1 遺跡位置図



図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

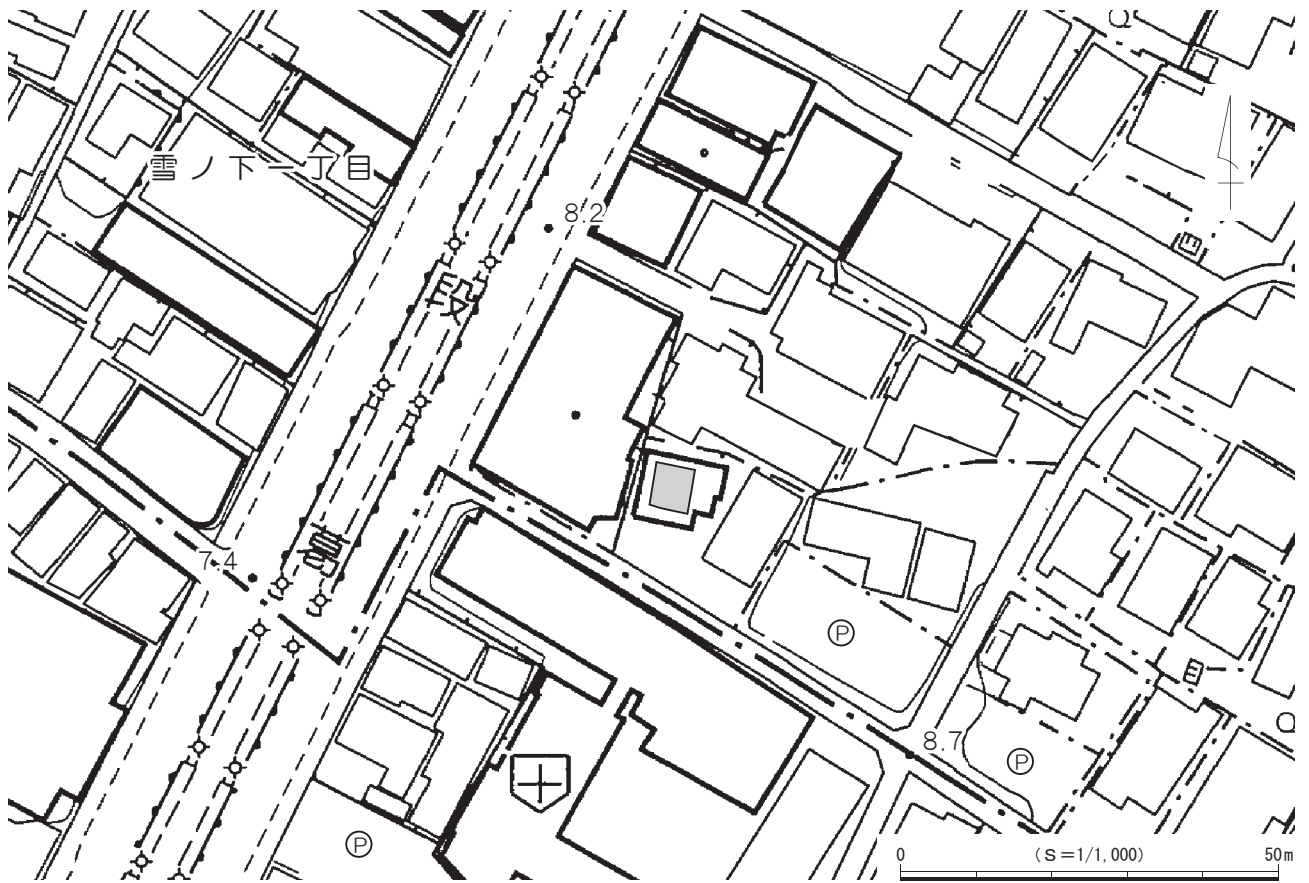


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

次に遺跡内部の様相についてみると、⑭地点では東西方向に延びる両側溝、⑮地点では東西溝と東西柱穴列、それらと直交する南北柱穴列、⑯地点では東西溝と直交する南北溝などがそれぞれ検出されており、これらの延伸方向や角度の整合性から遺跡内に方格区画が施行されていることが想定されている(押木 2017)。そのほかに⑰地点では庭と考えられる玉砂利を敷きつめた地業面が発見されており(玉林 1986)、今回調査区の北東側に隣接する⑱地点では、若宮大路に平行ないし直交する小規模な掘立柱建物が検出されている(玉林 1987)。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～4面までの合計4面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約8.5mを測り、最上部には層厚80～95cmの表土(1層)が堆積している。遺構確認面の第1面は表土を取り除いた2層上面で検出した。確認面の標高は約7.7mを測る。2層は微量の泥岩と炭化物を含み、締まりのややある暗灰色粘質土による整地層で、層厚10～20cmである。第2面は3層上面で確認し、確認面の標高は7.5～7.6mを測る。3層は微量の炭化物を含み、締まりのある暗灰色粘質土による整地層で、層厚5～15cmである。第3面は4層上面で確認し、確認面の標高は7.4m前後を測る。4層は少量の細砂と多量の鉄分を含み、締まりのある黒褐色粘質土による整地層で、層厚10cm前後である。第4面は中世の地山層である5層上面で確認し、確認面の標高は7.2～7.4mを測る。5層は少量の細砂を含み、非常に締まる黒褐色粘質土で、層厚20～40cmである。5層の下位には、灰褐色砂質土を主体とする地山層がつづくが、遺構は確認されなかった。

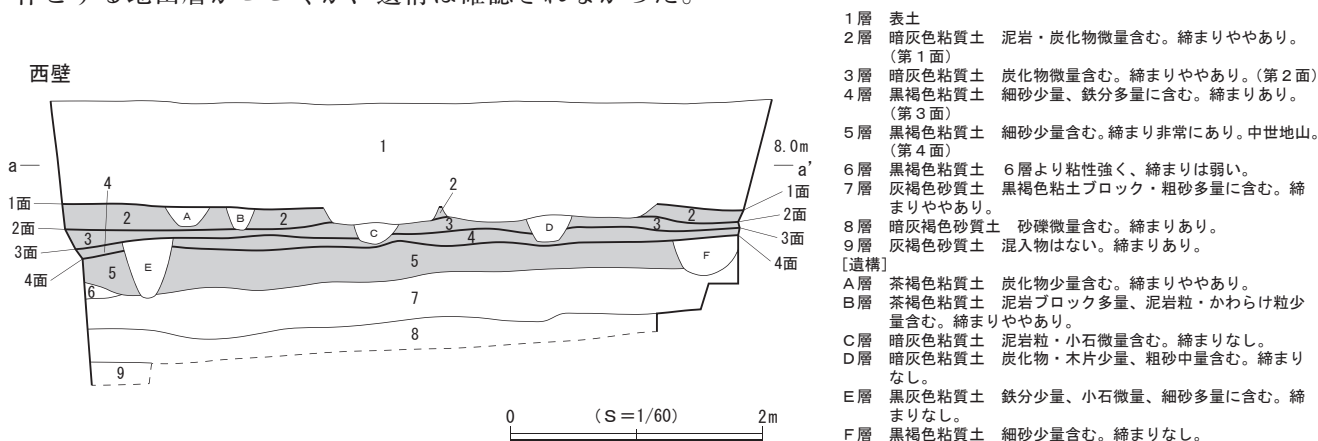


図5 調査区西壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～4面までの合計4面である。遺構確認面はいずれも中世に属し、検出した遺構は、礎板建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑9基、ピット105基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して3箱を数える。なお、残土置場の都合から調査区を東西に二分して調査を行ったが、報告に際しては一つの調査区として記述した。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～4面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の2層上面で検出され、確認面の標高は約7.7mを測る。2層は微量の泥岩と炭化物を含み、締まりのややある暗灰色粘質土による整地層である。この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑4基、ピット47基である（図6）。部分的な攪乱が多く及んでおり壊されている遺構もあると思われるが、全体に遺構密度が高いなかで調査区北壁付近は希薄になる様相がみられる。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品、木製品などが出土している。時期幅のある近世～中世遺物が混在しており、詳細な時期を決定することは難しいが、本面は大枠として近世の18～19世紀前葉頃に属すると考えられる。

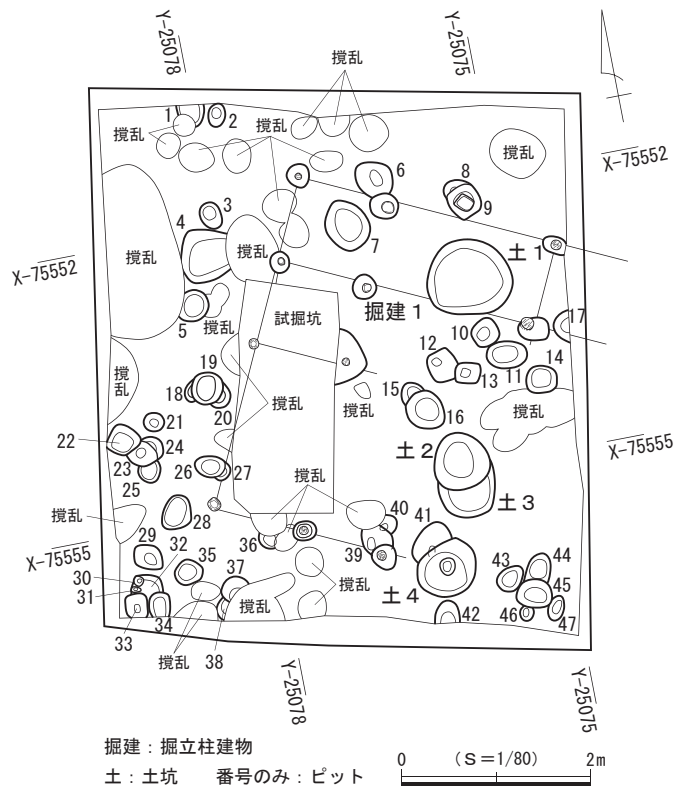


図6 第1面 遺構分布図

(1) 掘立柱建物

掘立柱建物1 (図7)

調査区の中央から東側にかけて位置する。調査区外の東側へ展開していると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内では柱が11本遺存しており、このうちの9本から掘り方が検出された。

本址は北東-南西方向が3間で、北西-南東方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で北東-南西列が北東から90cm、90cm、1.75m、北東面の北西-南東列が北西から1.0m、1.8m、南西面の北西-南東列が北西から1.0m、0.85mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-25°-Eである。

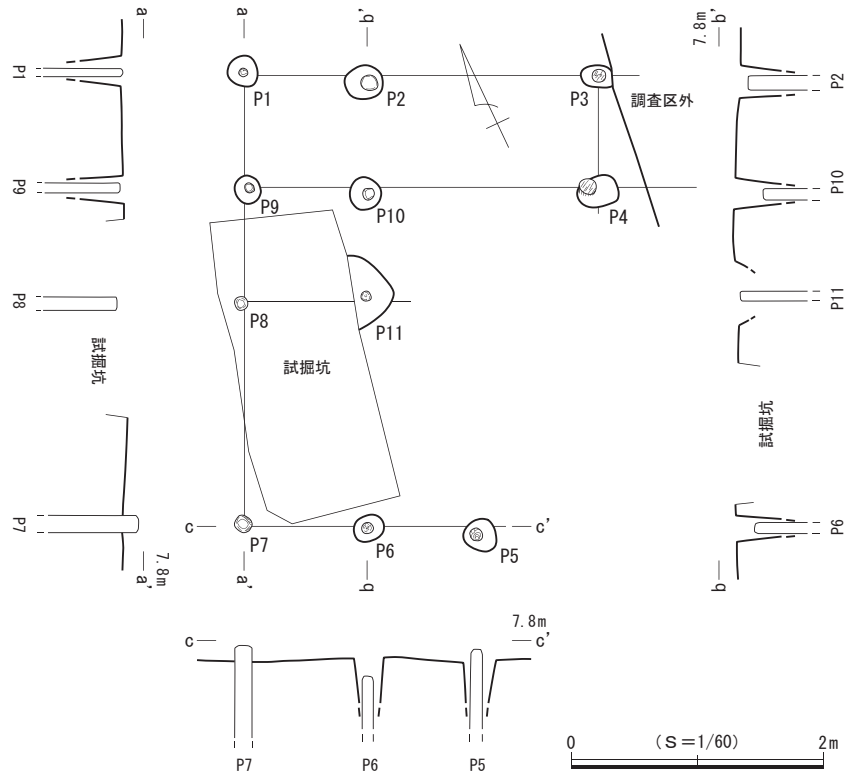


図7 第1面 掘立柱建物1

柱の大きさは、径6～13cmを測り、上面の標高は7.46～7.77mである。掘り方の平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模はP11のみ径50cmと大きく、その他は20～34cmの幅に収まる。

遺物は出土しなかった。

(2) 土 坑

土坑1 (図8)

調査区の中央北東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状に近い形状を呈する。規模は長軸89cm、短軸79cm、深さ11cmである。坑底面の標高は7.58mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

土坑2 (図8)

調査区の中央南東寄りに位置する。南側で土坑3と重複し、全体の半分以上を壊している。平面形は略円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形に近い形状を呈する。規模は直径60cm、深さ18cmで、坑底面の標高は7.50mを測る。

遺物はかわらけ2点が出土した。

土坑3 (図8)

調査区の中央南東寄りに位置する。北側で土坑2と重複して全体の半分以上が壊されているため、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長54cm、短軸61cm、深さ9cmで、坑底面の標高は7.53mを測る。主軸方位はN-7°-Eを指すと推定される。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ1点、陶器1点、木製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は木製品の栓である。

土坑4 (図8)

調査区南壁付近の中央東寄りに位置する。北側でピット41と重複し、南壁の一部を壊している。平面形は略楕円形を呈し、底面は湾曲して中央が窪み、長軸17cm、深さ11cmの小ピットが確認された。壁は

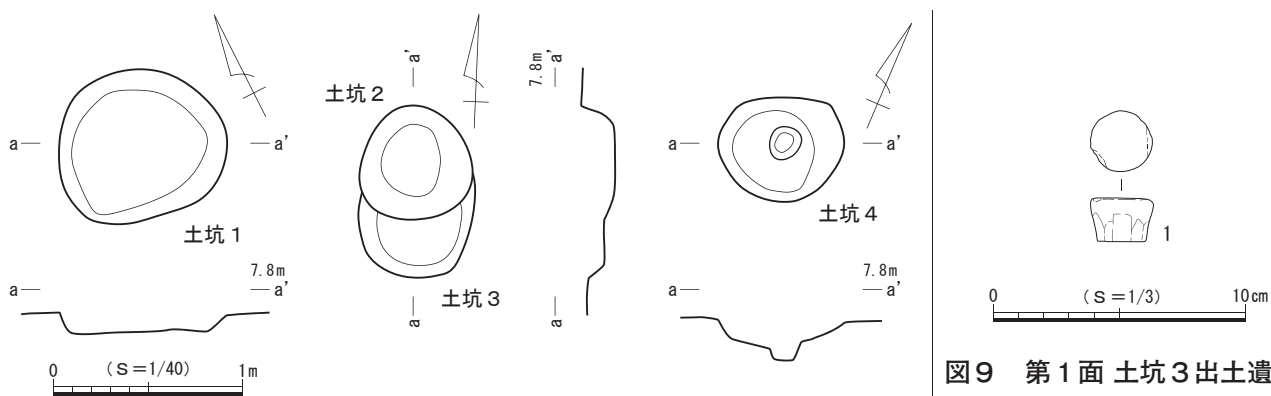


図8 第1面 土坑1～4

図9 第1面 土坑3出土遺物

大きく開いて立ち上がり、断面形は丸底形に近い形状を呈する。規模は長軸67cm、短軸54cm、深さ12cmで、坑底面の標高は7.50mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

(3) ピット

第1面では、47基を検出した。調査区全体に比較的高い密度で分布し、南西部では重複するものも多く認められる。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形・楕円形・隅丸方形を呈し、規模は長軸10～56cm、深さ6～30cmを測り、深さは20cmに満たない浅いものが多い。

出土遺物(図10)

第1面検出の47基中、13基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は京・信楽産の灯明皿である。ピット43から出土した。

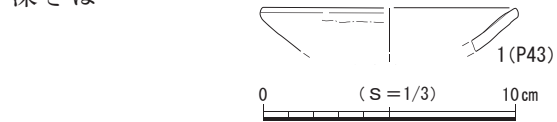


図10 第1面 ピット出土遺物

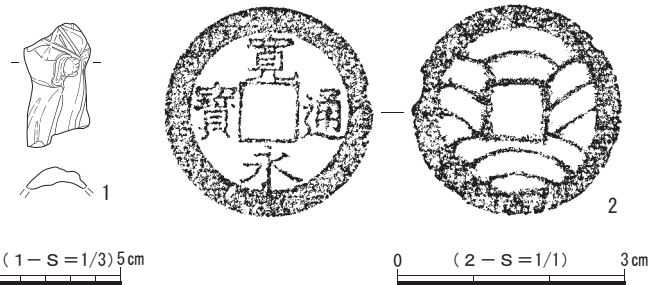


図11 第1面 遺構外出土遺物

(4) 第1面 遺構外出土遺物(図11)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち2点を図示した。

1は京都系と思われる土製人形、2は錢貨で寛永通寶(1768年初鑄)の四文錢である。

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は約7.6mを測る。3層は微量の炭化物を含み、締まりのある暗灰色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、土坑1基、ピット26基である(図12)。北西部に小ピットがまとまって検出されているが、全体に遺構分布はまばらである。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

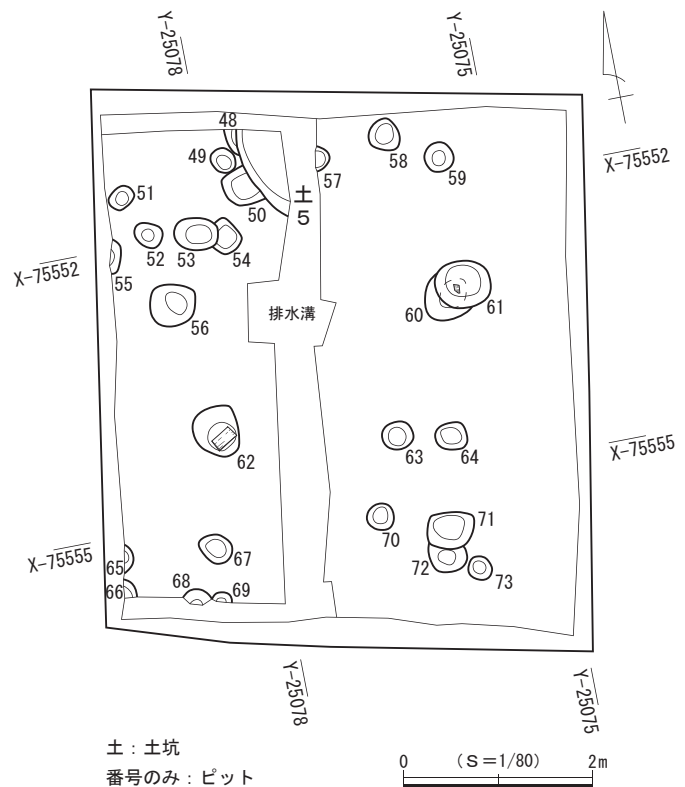


図12 第2面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑5 (図13)

調査区北壁際の中央西寄りに位置する。北側と西側で調査のための排水溝によって全体の2/3以上が壊されていると考えられ、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長1.07m、東西現存長47cm、深さ6cmで、坑底面の標高は7.40mを測る。

遺物は出土しなかった。

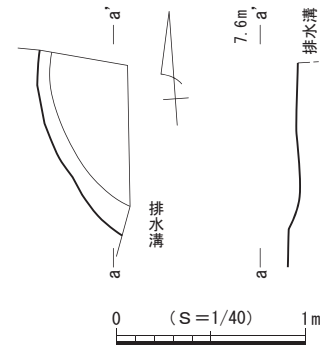


図13 第2面 土坑5

(2) ピット

第2面では、26基を検出した。調査区北西部に分布がややまとまるが全体にまばらで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形、隅丸方形のものがあり、規模は長軸26~58cm、深さ3~36cmを測る。

以下、礎板が据えられたピット2基を図示し、説明する。

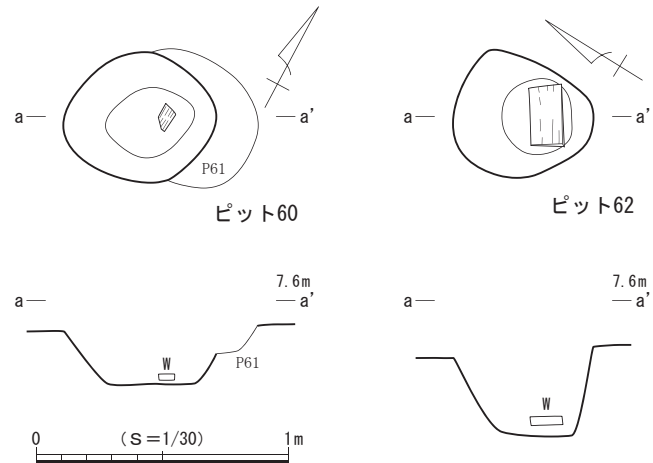


図14 第2面 ピット60・62

ピット60 (図14)

調査区の中央北東寄りに位置する。ピット61と重複して上部東半が壊されている。平面形は

不整形円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸59cm、短軸51cm、深さ24cmを測り、礎板がピット中央北東寄りの底面に据えられていた。礎板の大きさは長さ8cm、幅5cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は7.31mである。

ピット62 (図14)

調査区の中央南西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は北東が突出した不整形円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸55cm、短軸51cm、深さ36cmを測り、礎板がピット南壁寄りの底面から4cmほど浮いて据えられていた。礎板の大きさは長さ22cm、幅13cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は7.16mである。

ピット出土遺物 (図15)

第2面検出の26基中、10基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。ピット53から出土した。

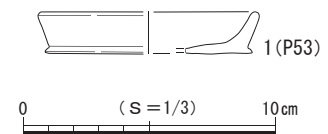


図15 第2面 ピット出土遺物

(3) 第2面 遺構外出土遺物 (図16)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち5点を図示した。

1は銅製品で鑿と思われる製品である。2～5は木製品で、2は櫛、3～5は箸状である。

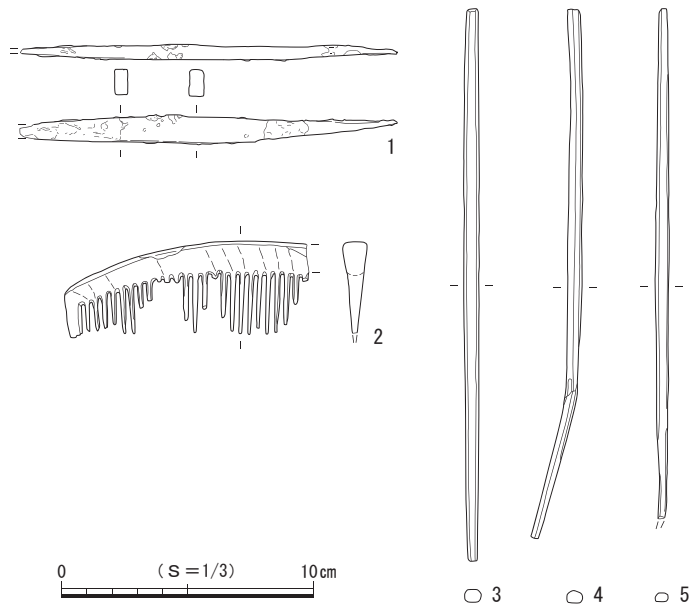


図16 第2面 遺構外出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は約7.4mを測る。4層は少量の細砂と多量の鉄分を含み、締まりのある黒褐色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、礎板建物2棟、土坑3基、ピット30基である(図17)。遺構はピットが主体で調査区全域に分布するが、規則的な配置により建物として認定できたのは2棟のみであった。礎板建物と掘立柱建物は軸方向がほぼ揃っており、調査区の北西から南東方向に展開して調査区外へと延びている。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎板建物

礎板建物 1 (図18)

調査区の北西から東端にかけて位置する。調査区外の北側と東側に展開すると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが17基検出され、このうち5基(P1～5)が礎板をもつ。ピットは重複が認められることから、建て替えが行われたと推定される。

本址は北西-南東方向が2間以上、北東-南西方向が1間以上の規模をもつ建物と考えられ、現状での規模は北西-南東方向で4.2m、北東-南西方向で2.3～2.4mを測る。柱間寸法は心々間で北西-南東列が2.1m等間、北東-南西列が2.3～2.4mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-58°-Wである。

礎板の大きさは長さ15～20cm、幅10cm内外、厚さ1～4cmを測る。ピット1とピット4は礎板を3枚

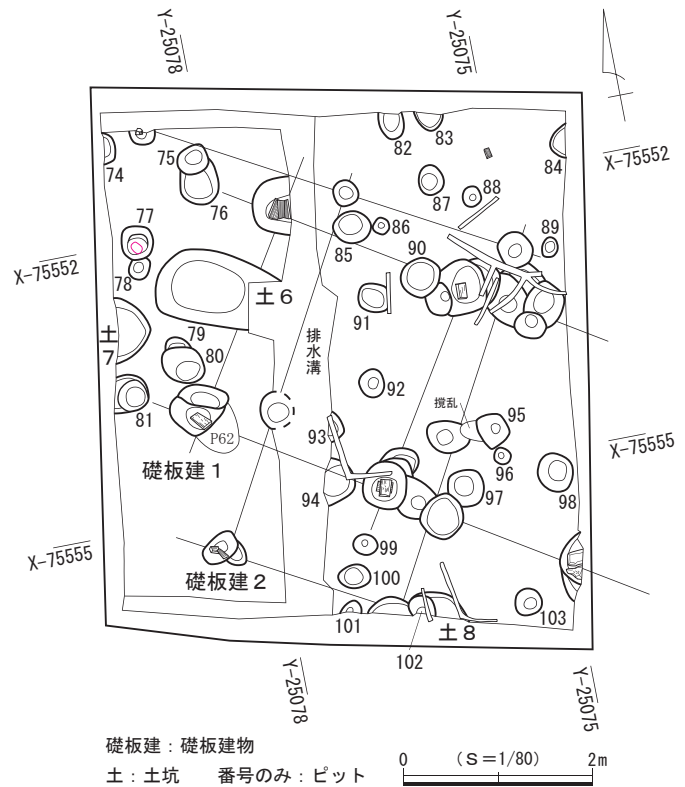


図17 第3面 遺構分布図

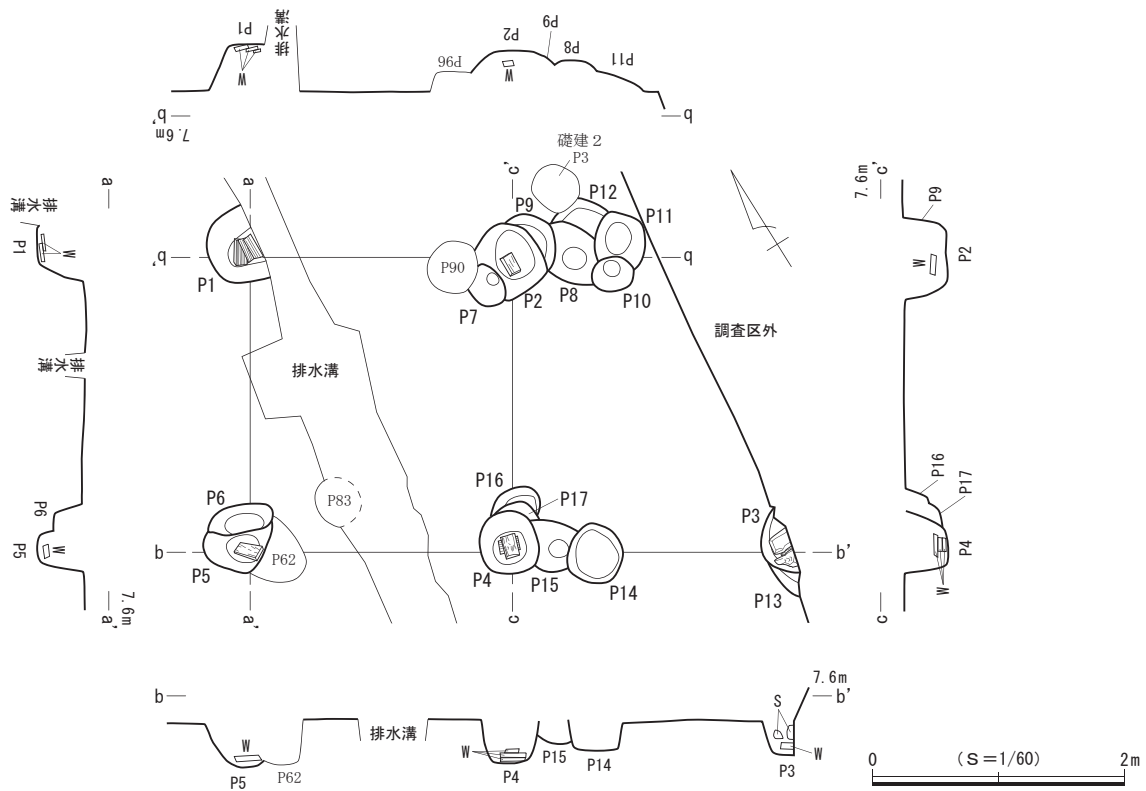


図18 第3面 礎板建物1

ずつ重ねて使用しており、礎板上面の標高は7.04～7.25mである。

出土遺物 (図19)

本址の8基のピットからは少数ながら遺物が出土した。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は龍泉窯系青磁碗I - 2類である。

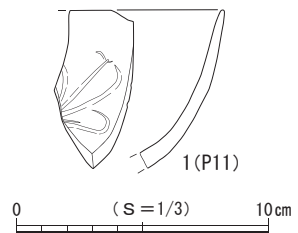


図19 第3面 礎板建物1 出土遺物

礎板建物2 (図20)

調査区の南東から北西の広い範囲にわたって位置する。調査区外の南側と西側に展開していると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが8基検出され、このうち北西隅に位置するピット1に柱が立った状態で遺存していた。また、南西隅にあるピット6からは礎板が2枚出土した。

本址は北西-南東方向が2間以上で、北東-南西方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で東面の北東-南西列が2.0m等間で、その西側の列が北から2.4m、1.6m、北面の北西-南東列が西から2.3m、1.9mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、礎板建物1とほぼ同じN-61°-Wである。

ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長軸25～45cm、深さ10～40cmとやや幅がある。ピット底面の標高は、7.00～7.35mを測る。ピット1に遺存していた柱は、大きさが径8cm、残存長は30cmを測り、下端が掘り方底面から5cm上方に位置している。ピット6から出土した礎板は、大きさが長さ10cmと12cm、幅と厚さは同じで6cmと4cmを測る。底面に対して水平ではなく傾いて出土していることから、原位置は保っていないと考えられる。

遺物は出土しなかった。

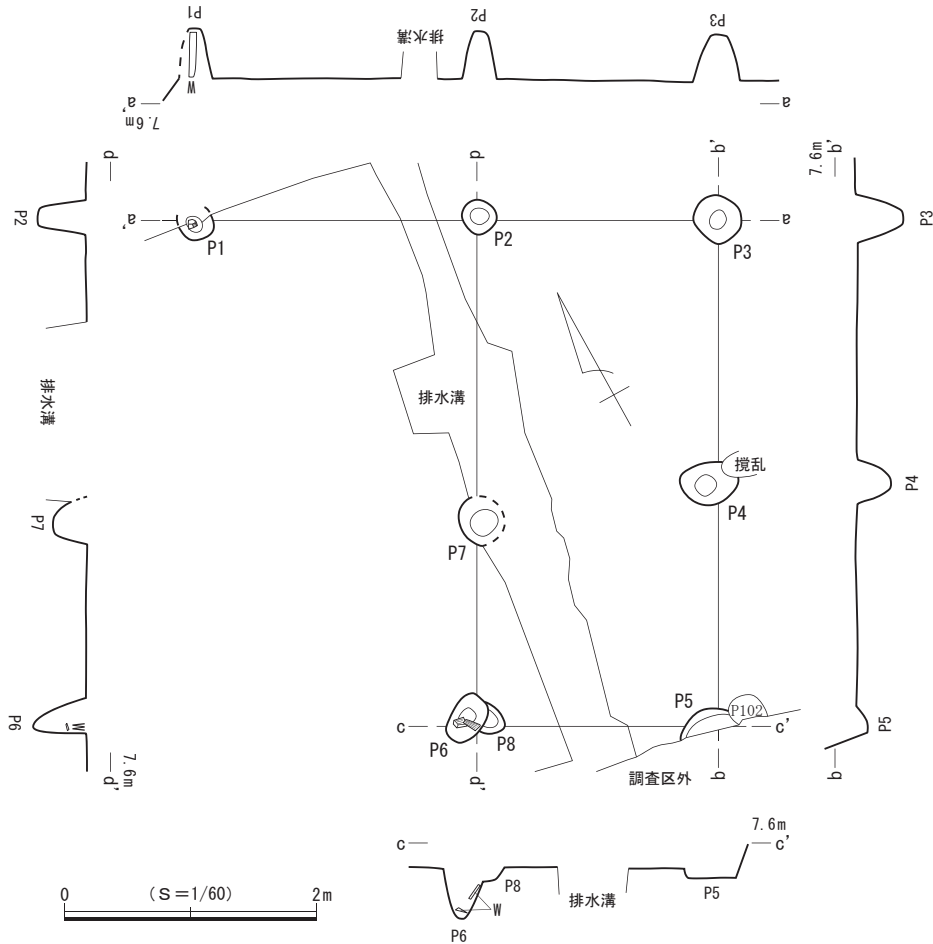


図20 第3面 礎板建物2

(2) 土 坑

土坑6 (図21)

調査区の北西部に位置する。調査時に設定された排水溝によって東壁が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は西側よりも東側がわずかに高く中央部に段をもつ。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形に近い形状を呈する。規模は長軸現存長1.21m、短軸75cm、深さ36cmで、坑底面の標高は7.01mを測る。主軸方位はN-62°-Wを指す。

出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ12点、磁器2点、木製品11点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2は手づくね成形によるかわらけである。

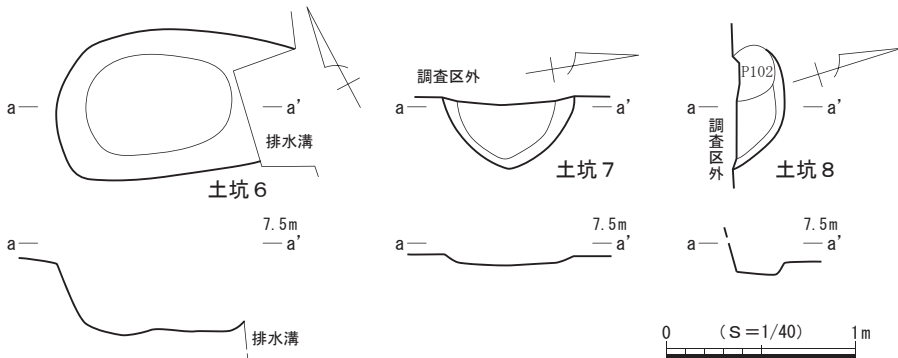


図21 第3面 土坑6～8

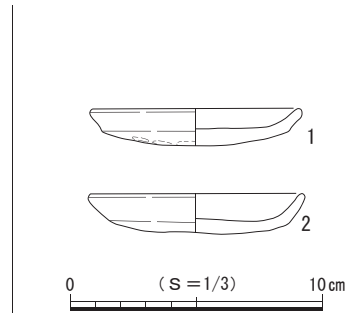


図22 第3面 土坑6出土遺物

土坑7 (図21)

調査区西壁際の中央に位置する。西側が調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長66cm、東西現存長37cm、深さ5cmで、坑底面の標高は7.40mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑8 (図21)

調査区南壁際の中央東寄りに位置する。西側でピット102と重複して壊され、南側は調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北現存長24cm、東西現存長63cm、深さ8cmで、坑底面の標高は7.35mを測る。

遺物は出土しなかった。

(4) ピット

第3面では、30基を検出した。調査区全域に満遍なく分布するが、密度はややまばらである。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径18~45cm、深さ2~46cmを測る。

出土遺物 (図23)

第3面検出の30基中、10基のピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げたが、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。ピット81から出土した。

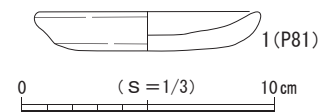


図23 第3面 ピット出土遺物

(5) 第3面 遺構外出土遺物 (図24)

第3面では、遺構以外からも遺物が出土し、このうち2点を図示した。

1は混入遺物と思われる堺・明石産の播鉢、2は常滑甕の口縁部小破片である。

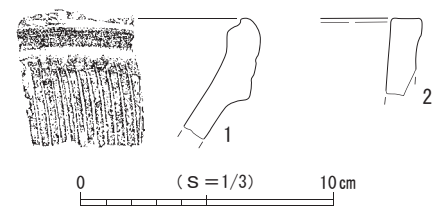


図24 第3面 遺構外出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の5層上面で検出され、確認面の標高は約7.3mを測る。5層は少量の細砂を含んだ非常に締まった黒褐色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット2基のみで、遺構密度は非常に希薄である(図25)。

遺物はかわらけ7点のみの出土であり、詳細な時期を判断する材料に乏しい。3面以下ということをお勘案するならば、本面は13世紀後葉以前に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑9 (図26)

調査区東壁付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は西側がやや尖った不整円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸63cm、短軸53cm、深さ21cmで、坑底面の標高は7.11mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

第4面では、2基を検出した。調査区北東部と北西隅に1基ずつ位置しており、礎石や礎板は伴わなかった。ピットの平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸33cmと34cm、深さが16cmと8cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図27)

第4面構成土中からの出土遺物はきわめて少なく、そのうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。口縁部内外面に油煤が付着していることから、灯明具としての使用が認められる。

第四章 まとめ

今回報告する雪ノ下一丁目421番1地点は「北条小町邸跡 (No.282)」の範囲内に所在する。遺跡の中では南西端付近に位置し、南側では宇都宮辻子幕府跡 (No.239) に隣接しており、西側約30mには若宮大路が存在する。今回の調査では第1～4面までの合計4面で、調査面積は27㎡と狭小であった。検出した遺構は礎板建物2棟、掘立柱建物1棟、土坑9基、ピット105基である。遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して3箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高は約7.7mを測る堆積土層の2層上面で検出された。検出した遺構は、掘立柱建物1棟、土坑4基、ピット47基である。狭小な調査区の中なかでも全体的に遺構密度は高く、調査区北壁付近に向かい密度が希薄になる様相がみられる。

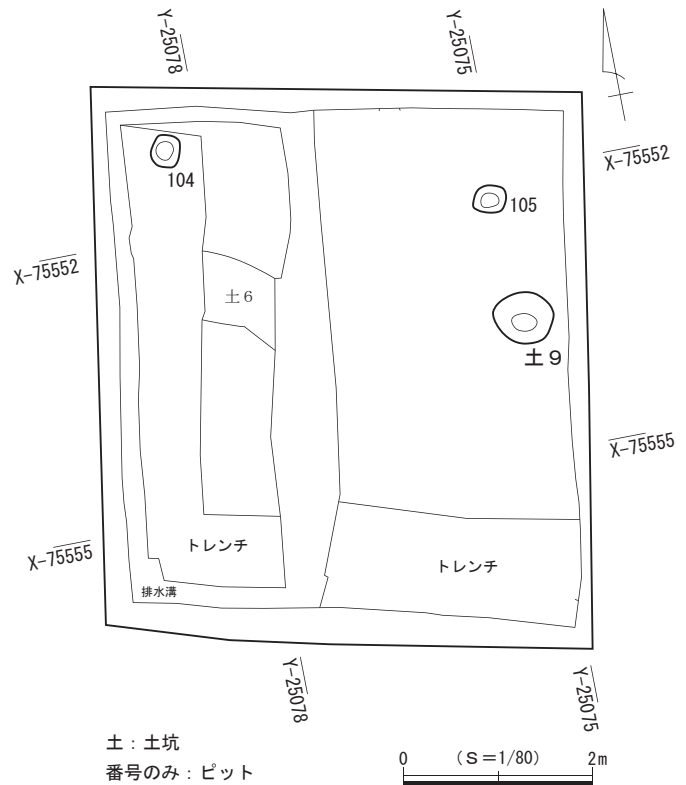


図25 第4面 遺構分布図

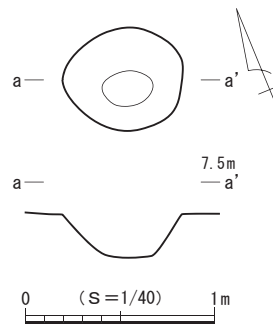


図26 第4面 土坑9

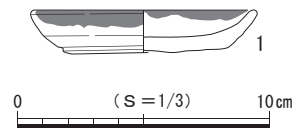


図27 第4面
構成土出土遺物

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は大枠として近世の18～19世紀前葉頃に属すると考えられ、鎌倉では数少ない近世の遺構群である。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高は約7.6mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は、土坑1基、ピット26基である。北西部に小ピットがまとまって検出されているが、遺構密度は希薄である。

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高約7.4mを測る堆積土層の4層上面で検出された。検出した遺構は、礎板建物2棟、土坑3基、ピット30基である。ピットを主体とする遺構群で、調査区全域に分布する。その中から規則的な配置により建物として抽出できたのは2棟のみであった。建物の軸方向はほぼ一致しており、調査区の北西から南東方向に展開しつつ調査区外へと延びている。

出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は標高は約7.3mを測る堆積土層の5層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット2基のみである。

遺物はかわらけ7点のみの出土であり、詳細な時期を判断する材料に乏しい。3面以下ということをお案するならば、本面の数少ない遺構は13世紀後葉以前に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

沖本 道 2015「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目427番2外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書31』平成26年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

押木弘己 2017「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目403番14地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

小野田 宏・熊谷 満 2018『北条小町邸跡(No.282)発掘調査報告書 鎌倉市雪ノ下一丁目378番1・5地点』株式会社博通

菊川英政 1989「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目395番地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘緊急調査報告書5』昭和63年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

菊川英政ほか 1989「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書5』昭和63年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

宗臺富貴子・土屋浩美 1998「北条小町邸跡(No.282)雪ノ下一丁目370番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』平成9年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

瀬田哲夫 1991「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目369番外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

玉林美男 1986「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目374番2地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書2』昭和60年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

玉林美男 1987「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目419番3地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』昭和61

年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

原 廣志ほか 1998「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目369番1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書14』平成9年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会

原 廣志ほか 2005「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目407番3 の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』平成16年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会

松尾宣方 1983「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目432番2 地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘調査年報 I』昭和46年度～昭和52年度 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1985 a「北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目372番7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書1』昭和59年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄 1985 b『北条泰時・時頼邸跡 雪ノ下一丁目371番1 地点』北条泰時・時頼邸跡発掘調査団

馬淵和雄 1987「北条時房・顕時邸跡 雪ノ下一丁目233番9 他地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書3』昭和61年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 1996「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目377番7 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書12』平成7年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2002「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目400番1 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』平成13年度発掘調査報告 (第2分冊) 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2003「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目401番5 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書19』平成14年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄ほか 2010「北条小町邸跡 (No.282) 雪ノ下一丁目440番の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財発掘緊急調査報告書26』平成21年度発掘調査報告 (第1分冊) 鎌倉市教育委員会

宮田 眞・森 孝子ほか 2000『北条小町邸跡 (泰時・時頼邸) 発掘調査報告書 雪ノ下一丁目367番1、368番1』北条小町邸跡発掘調査団

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廢寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑3 出土遺物 (図9)							
1	木製品	栓	上部径 2.5	下部径 1.9	高 1.8		完形

ピット出土遺物 (図10)

1	陶器	京・信楽 灯明皿	(10.0)	-	現 1.7	内面-灰釉 胎土:微砂 色調:胎土-灰白色、釉-灰色 出土遺構:ピット43	口縁部片
---	----	-------------	--------	---	----------	---------------------------------------	------

第1面 遺構外出土遺物 (図11)

1	土製品	京都系 人形	長 4.9	幅 2.6	厚 0.7	底面-指頭ナデ消し 内底-ナデ不明瞭 胎土:微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	小片
2	金属 製品	銭貨	直径 2.8	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-寛永通寶(四文銭・1768~) 書体-楷書	完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
ピット出土遺物 (図15)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.5)	7.8	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:灰黄色 焼成:良好 出土遺構:ピット53	1/4

第2面 遺構外出土遺物 (図16)

1	金属 製品	鑿	現長 15.0	幅 1.1	厚 0.6	先端部欠損 重量:30.0 g 鉄製鑿	略完形
2	木製品	櫛	現長 9.7	幅 3.7	厚 1.0	櫛歯 20 本残存	2/3
3	木製品	箸状	長 21.9	幅 0.6	厚 0.5		完形
4	木製品	箸状	長 21.2	幅 0.6	厚 0.5	一部折れている	略完形
5	木製品	箸状	現長 20.2	幅 0.5	厚 0.4	下端部欠損	略完形

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
礎板建物1 出土遺物 (図19)							
1	磁器	青磁 碗	-	-	現 6.3	外面-ヘラケズリ 内面-花文 色調:胎土-灰色、釉-暗オリブ色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類 出土位置:P11	口縁部片

土坑6 出土遺物 (図22)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.2)	-	1.5	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、良土 色調:灰黄色 焼成:良好	1/2弱
2	土器	手づくね かわらけ・小	8.4	-	1.6	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調:灰白色 焼成:良好	略完形

ピット出土遺物 (図23)

1	土器	手づくね かわらけ・小	8.6	-	1.6	底面-指頭押さえ+ナデ 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好 出土遺構:ピット81	1/2強
---	----	----------------	-----	---	-----	--	------

第3面 遺構外出土遺物 (図24)

1	陶器	堺・明石 播鉢	-	-	現 4.8	胎土:微砂、白色粒 色調:褐色	口縁部片
2	陶器	常滑 甕	-	-	現 3.1	胎土:微砂、白色粒、小石粒 色調:外面-褐灰色	口縁部片

表5 第4面 出土遺物観察表

遺物 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第4面 構成土出土遺物 (図27)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	6.0	1.8	内外面口縁部に煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5

表6 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
掘立柱建物1	第1面	355	280	-	ピット8	第1面	〈24〉	-	11	ピット20	第1面	24	21	14
土坑1	第1面	89	79	11	ピット9	第1面	33	-	14	ピット21	第1面	21	19	9
土坑2	第1面	60	60	18	ピット10	第1面	28	-	7	ピット22	第1面	32	31	16
土坑3	第1面	〈54〉	61	9	ピット11	第1面	43	28	12	ピット23	第1面	28	26	30
土坑4	第1面	67	54	12	ピット12	第1面	33	30	11	ピット24	第1面	27	-	12
ピット1	第1面	〈24〉	23	17	ピット13	第1面	27	22	10	ピット25	第1面	〈24〉	23	16
ピット2	第1面	25	18	29	ピット14	第1面	32	28	22	ピット26	第1面	32	22	13
ピット3	第1面	28	22	7	ピット15	第1面	25	〈20〉	15	ピット27	第1面	19	-	14
ピット4	第1面	56	〈52〉	10	ピット16	第1面	43	38	13	ピット28	第1面	39	31	17
ピット5	第1面	34	〈30〉	20	ピット17	第1面	34	〈17〉	18	ピット29	第1面	30	25	22
ピット6	第1面	〈43〉	37	12	ピット18	第1面	〈21〉	〈17〉	6	ピット30	第1面	11	10	20
ピット7	第1面	54	44	12	ピット19	第1面	33	-	13	ピット31	第1面	10	6	20

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ビット 32	第1面	<44>	33	8	ビット 58	第2面	34	33	6	ビット 80	第3面	45	37	22
ビット 33	第1面	<25>	23	18	ビット 59	第2面	32	-	5	ビット 81	第3面	<38>	36	36
ビット 34	第1面	<26>	22	8	ビット 60	第2面	59	51	24	ビット 82	第3面	<28>	25	21
ビット 35	第1面	30	26	11	ビット 61	第2面	58	49	11	ビット 83	第3面	<28>	<23>	3
ビット 36	第1面	<22>	-	17	ビット 62	第2面	55	51	36	ビット 84	第3面	<31>	<23>	2
ビット 37	第1面	29	<16>	23	ビット 63	第2面	32	19	4	ビット 85	第3面	39	32	29
ビット 38	第1面	<20>	<11>	14	ビット 64	第2面	33	29	7	ビット 86	第3面	18	17	24
ビット 39	第1面	<30>	31	14	ビット 65	第2面	<31>	<9>	9	ビット 87	第3面	30	25	5
ビット 40	第1面	<20>	<18>	20	ビット 66	第2面	<20>	<14>	3	ビット 88	第3面	20	18	5
ビット 41	第1面	<47>	<37>	20	ビット 67	第2面	36	28	5	ビット 89	第3面	20	16	5
ビット 42	第1面	26	<23>	8	ビット 68	第2面	<33>	<16>	24	ビット 90	第3面	40	38	16
ビット 43	第1面	31	24	6	ビット 69	第2面	<20>	<10>	7	ビット 91	第3面	33	28	29
ビット 44	第1面	34	25	7	ビット 70	第2面	28	-	4	ビット 92	第3面	28	25	7
ビット 45	第1面	37	31	10	ビット 71	第2面	48	39	11	ビット 93	第3面	<31>	<16>	9
ビット 46	第1面	<15>	14	8	ビット 72	第2面	38	<35>	6	ビット 94	第3面	<48>	<31>	13
ビット 47	第1面	27	16	6	ビット 73	第2面	26	25	4	ビット 95	第3面	33	29	29
土坑 5	第2面	<107>	<47>	6	礎板建物 1	第3面	<420>	<240>	12~38	ビット 96	第3面	17	16	35
ビット 48	第2面	<28>	<13>	9	礎板建物 2	第3面	<420>	<400>	10~40	ビット 97	第3面	36	-	30
ビット 49	第2面	28	23	8	土坑 6	第3面	<121>	75	36	ビット 98	第3面	40	36	35
ビット 50	第2面	42	<33>	8	土坑 7	第3面	<66>	<37>	5	ビット 99	第3面	25	20	9
ビット 51	第2面	27	21	7	土坑 8	第3面	<63>	<24>	8	ビット 100	第3面	32	24	3
ビット 52	第2面	30	24	8	ビット 74	第3面	32	<12>	11	ビット 101	第3面	<20>	<17>	9
ビット 53	第2面	46	33	6	ビット 75	第3面	32	28	37	ビット 102	第3面	<26>	25	46
ビット 54	第2面	35	32	10	ビット 76	第3面	44	38	26	ビット 103	第3面	26	22	6
ビット 55	第2面	<36>	<10>	8	ビット 77	第3面	34	32	23	土坑 9	第4面	63	53	21
ビット 56	第2面	47	45	36	ビット 78	第3面	23	20	7	ビット 104	第4面	33	30	16
ビット 57	第2面	<27>	<15>	6	ビット 79	第3面	27	<10>	10	ビット 105	第4面	34	29	8

※掘立柱建物・礎板建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。また、深さは柱穴掘り方の深さを記載している。

表7 出土遺物一覧表

表土

【木製品】			ビット29		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
	用途不明	1			
	合計	5			
【陶器】			【陶器】		
瀬美	甕	1	瀬戸	天目茶碗	1
	合計	1		合計	1
第1面			ビット9		
土坑1			産地	器種	破片数
産地	器種	破片数	【かわらけ】		
			かわらけ ロクロ成形		
			合計		
			2		
			合計		
			2		
土坑2			ビット11		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
			【かわらけ】		
			かわらけ ロクロ成形		
			合計		
			2		
土坑3			ビット14		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
			【かわらけ】		
			かわらけ 手づくね成形		
			合計		
			1		
【陶器】			【木製品】		
瀬戸	入子	1	箸状		
			合計		
			2		
【木製品】			ビット23		
			産地	器種	破片数
			【かわらけ】		
			かわらけ ロクロ成形		
			合計		
			4		
土坑4			【木製品】		
産地	器種	破片数	栓		
			合計		
			5		
【かわらけ】			ビット27		
			産地	器種	破片数
			【木製品】		
			用途不明		
			合計		
			5		
ビット2			ビット28		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
			【かわらけ】		
			かわらけ 手づくね成形		
			合計		
			1		
【木製品】			【陶器】		
			常滑	甕	1
			合計		
			2		
ビット5			第1面 遺構外		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
			【かわらけ】		
			かわらけ ロクロ成形		
			かわらけ 手づくね成形		
			合計		
			31		
【かわらけ】			【白磁】		
			碗		
			合計		
			1		
【陶器】			中国		
			緑釉器種不明		
			常滑		
			甕		
			片口鉢I類		
			堺・明石		
			播鉢		
			合計		
			9		
			1		
			1		

【瓦質土器】		
火鉢		1
【土製品】		
京都系 人形		1
【金属製品】		
銭貨		1
		合計 57

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 2

攪乱		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	28
かわらけ	手づくね成形	16
【陶器】		
瀬戸	壺	1
	入子	1
	挿鉢	1
常滑	甕	4
	器種不明	1
【木製品】		
	箸状	5
	櫛	1
	棒状	1
	端材	1
	用途不明	3
【金属製品】		
	銭貨	1
	鉄製工具(タガネ?)	1
		合計 65

第2面

ピット49		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	4
		合計 5

ピット50		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計 1

ピット52		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
		合計 1

ピット53		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	2
		合計 3

ピット56		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
【土器】		
土師器	坏	1
【木製品】		
	用途不明	1
		合計 4

ピット58		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

ピット62		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
【陶器】		
常滑	甕	1
【木製品】		
	礎板	1
		合計 4

ピット67		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

ピット71		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
		合計 1

ピット73		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 1

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	7
かわらけ	手づくね成形	40
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
【青白磁】		
	合子蓋	1

【陶器】		
瀬戸	壺	1
	碗	1
	皿	1
常滑	甕	14

【瓦】		
	平瓦	4

【木製品】		
	箸状	3
	櫛	1
	棒状	1
	端材	1
【金属製品】		
	鑿	1
		合計 77

第2面 構成土		
産地	器種	破片数

【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	24
【青磁】		
龍泉窯系	碗	1
	皿	1
	器種不明	1
【陶器】		
瀬戸	壺	1
常滑	甕	6
【土器】		
	土師器 甕	2
【瓦質土器】		
	火鉢	2

【金属製品】		
	釘	1
		合計 39

第3面

礎板建物1 ピット1		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	碗	1
【木製品】		
	礎板	3
	棒状	1
		合計 5

礎板建物1 ピット3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
		合計 1

礎板建物1 ピット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	2

【瓦質土器】		
	火鉢	1
		合計 5

礎板建物1 ピット5		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	1
		合計 1

礎板建物1 ピット9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	器種不明	1
【木製品】		
	礎板	1
		合計 4

礎板建物1 ピット11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
かわらけ	手づくね成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗I類	1
		合計 4

礎板建物1 ピット12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
かわらけ	手づくね成形	6
【陶器】		
瀬戸	盤	1
常滑	甕	2
		合計 17

礎板建物1 ピット15		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	3
		合計 3

土坑6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	2
かわらけ	ロクロ成形	10

【白磁】		
皿		1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【木製品】		
	箸状	1
	棒状	1
	折敷	2
	草履芯	1
	端材	1
	用途不明	5
合計		25

ビット75		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	礎板	1
	柱	1
合計		2

ビット76		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		1

ビット81		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	2
合計		4

ビット83		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ 手づくね成形	2
【木製品】		
	礎板	1
	用途不明	1
合計		5

ビット92		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
【瓦質土器】		
	器種不明	1
合計		3

ビット94		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
合計		2

ビット96		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	4
【陶器】		
常滑	器種不明	1
合計		5

ビット105		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
合計		2

ビット106		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
合計		1

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
	かわらけ 手づくね成形	84
【白磁】		
	小壺	1
	器種不明	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
	壺	1
	器種不明	2
常滑	甕	9
	片口鉢Ⅱ類	1
堺・明石	播鉢	2
【瓦質土器】		
	器種不明	12
【木製品】		
	端材	3
	用途不明	4
【金属製品】		
	不明	2
合計		130

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
合計		2

第4面		
第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
	かわらけ 手づくね成形	4
合計		7



1. 調査地点近景 (西から)



2. 西壁土層断面 (北東から)

図版 2



1. 第1面西側(北から)



2. 第1面東側(北から)



3. 第2面西側(北から)



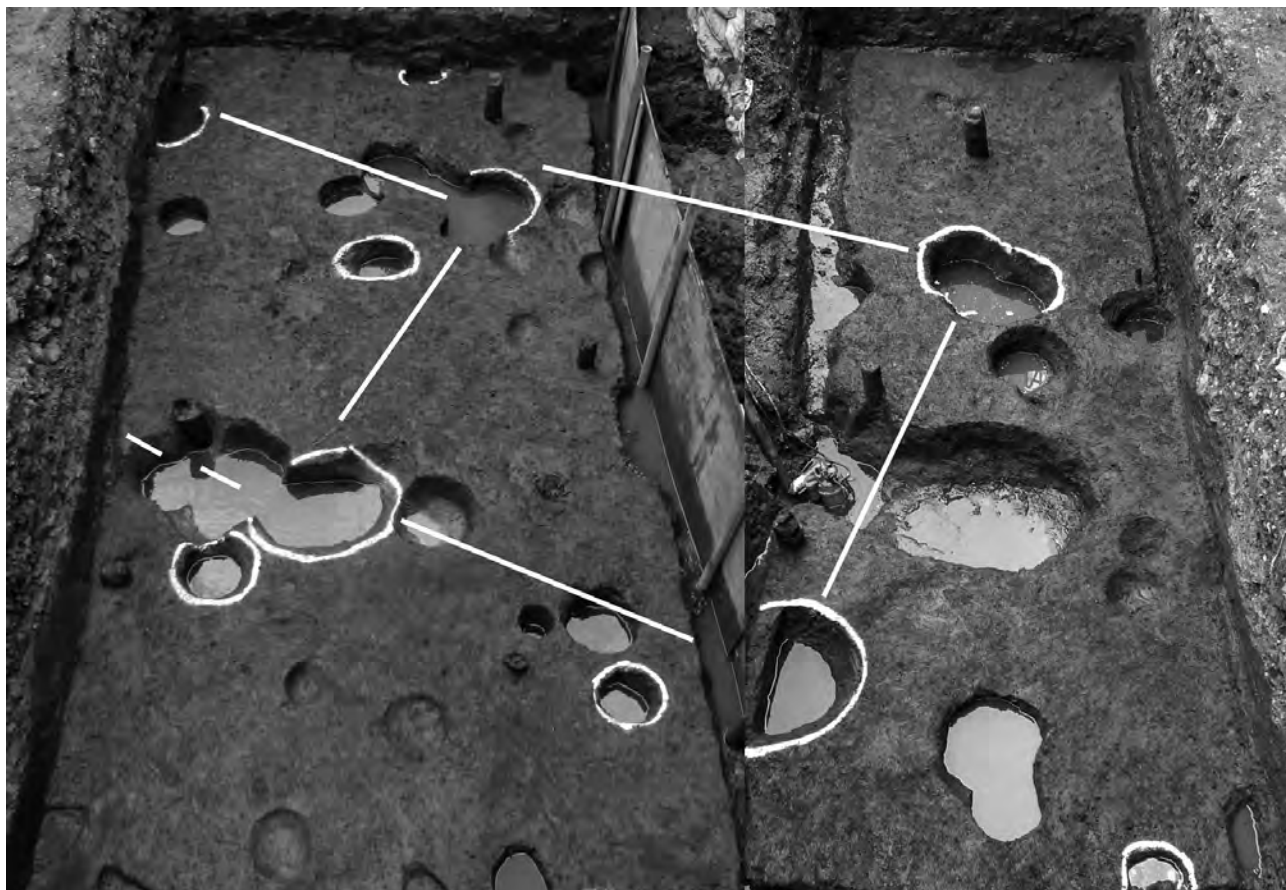
4. 第2面東側(北から)



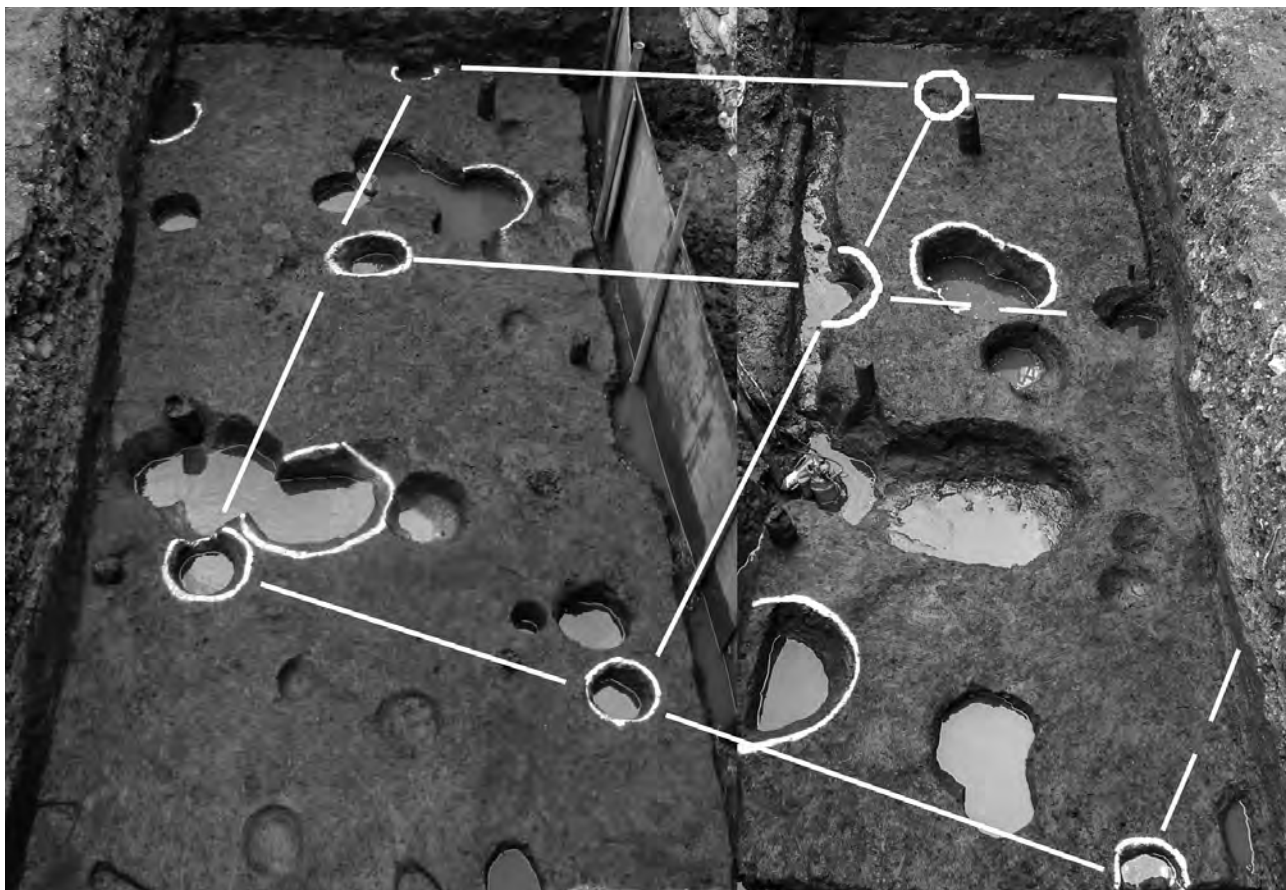
5. 第3面西側(北から)



6. 第3面東側(北から)



1. 第3面 礎板建物1 (南から)



2. 第3面 礎板建物2 (北から)

図版 4



1. 第3面 礎板建物1ピット4 礎板出土状態(北から)



2. 第3面 礎板建物2ピット1 柱検出状態(南から)



3. 第3面 土坑6 (西から)



1. 第1面 土坑3出土遺物



2. 第1面 ピット出土遺物



4. 第2面 ピット出土遺物



6. 第3面 礎板建物1出土遺物



8. 第3面 ピット出土遺物



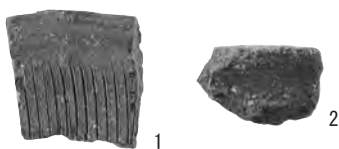
3. 第1面 遺構外出土遺物



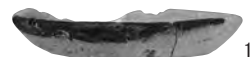
5. 第2面 遺構外出土遺物



7. 第3面 土坑6出土遺物



9. 第3面 遺構外出土遺物



10. 第4面 構成土出土遺物

西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)

山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点

例 言

1. 本報は「西瓜ヶ谷遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.213）内、鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年2月16日～同年3月16日にかけて、店舗併用個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約53㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。
調査担当者 森 孝子
調査員 松原康子・赤堀祐子
作業員 杉浦永章・判 一明・丹野正弘・田島道夫
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「NU0821」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。
■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。
かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。
河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	36
第1節 調査に至る経緯と経過	36
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	36
第3節 周辺の考古学的調査	40
第二章 堆積土層と発見された遺物	40
第1節 堆積土層	40
第2節 出土遺物	41
第三章 まとめ	42

挿図目次

図1 遺跡位置図	37	図5 調査区および北東壁土層断面図	41
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	38	図6 表土出土遺物	41
図3 調査区位置図	39	図7 8～11層出土遺物	42
図4 調査区配置図	39		

表目次

表1 西瓜ヶ谷遺跡 調査地点一覧	40	表3 出土遺物一覧表	43
表2 出土遺物観察表	43		

図版目次

図版1 1. 調査区近景(南東から)	45	2. 表土出土遺物	46
2. 調査区北東壁土層断面(西から)	45	3. 8～11層出土遺物	46
図版2 1. 調査区全景(南から)	46		

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外で実施した店舗併用個人専用住宅の建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である西瓜ヶ谷遺跡(神奈川県遺跡台帳No.213)の範囲内にあたる。建築主から店舗併用住宅の建設に伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年1月22日～同年1月24日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世後期の遺物包含層および段切り状の加工と考えられる岩盤が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約53㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年2月16日～同年3月16日までの約1ヵ月である。現地表面の標高は約30.5m、調査地点の南東側では29.6mを測り、北西から南東に向かって標高が下がっていく。調査はまず重機により1.0～1.1mの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、調査区北西側で地表下1.2mの深さから岩盤が露出し始め、調査区中央付近で北西から南東に向かって急激に落ち込むことがわかった。また、調査区中央から南東側では地表下1.8mにおいてかわらけや陶磁器などの中世に属する遺物が出土し、遺物が包含される地表下2.7mまで調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして3月16日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -74044.609、Y = -26203.498)、(X = -74049.739、Y = -26210.955)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市山ノ内字瓜ヶ谷980番3外に位置し、「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)」の範囲内に所在する。本遺跡は鎌倉市の北部域に所在し、西瓜川によって開析された南北約700mの谷戸の入り口を、約200m入った標高25m付近から谷の最奥部にかけての南北約500mにわたって広がっている。同じ谷戸内の北側には円覚寺門前遺跡(No.287)が展開する。遺跡の広がる「瓜ヶ谷」は途中で二つに分岐し、東側を東瓜ヶ谷、西側を西瓜ヶ谷と呼び、調査地点は分岐部よりも谷口側に位置している。西瓜川は谷の平坦部の東端を南から北へ向かって流れ、JR横須賀線と平行して北西-南東方向に走る鎌倉街道の手前で小袋谷川に合流する。本地点は西瓜川の西岸に位置し、川までの距離は約80mを測る。

鎌倉市は神奈川県の南東部に位置し、南側が相模湾に面しており、三方を丘陵に囲まれている。市域を北東から南西に流れる滑川が形成した沖積地が海に向かって三角形に開き、その北側の頂点に鶴岡八幡宮が位置する。鶴岡八幡宮西部から北西部にかけて丘陵が連なっており、これを「台峰」と呼び、遺跡はこの丘陵裾部の谷戸に立地する。現地表面の標高は約30.5mを測る。

隣接する包蔵地としては、北西側の丘陵上に縄文時代から中世にかけての複合遺跡である台山遺跡(No.

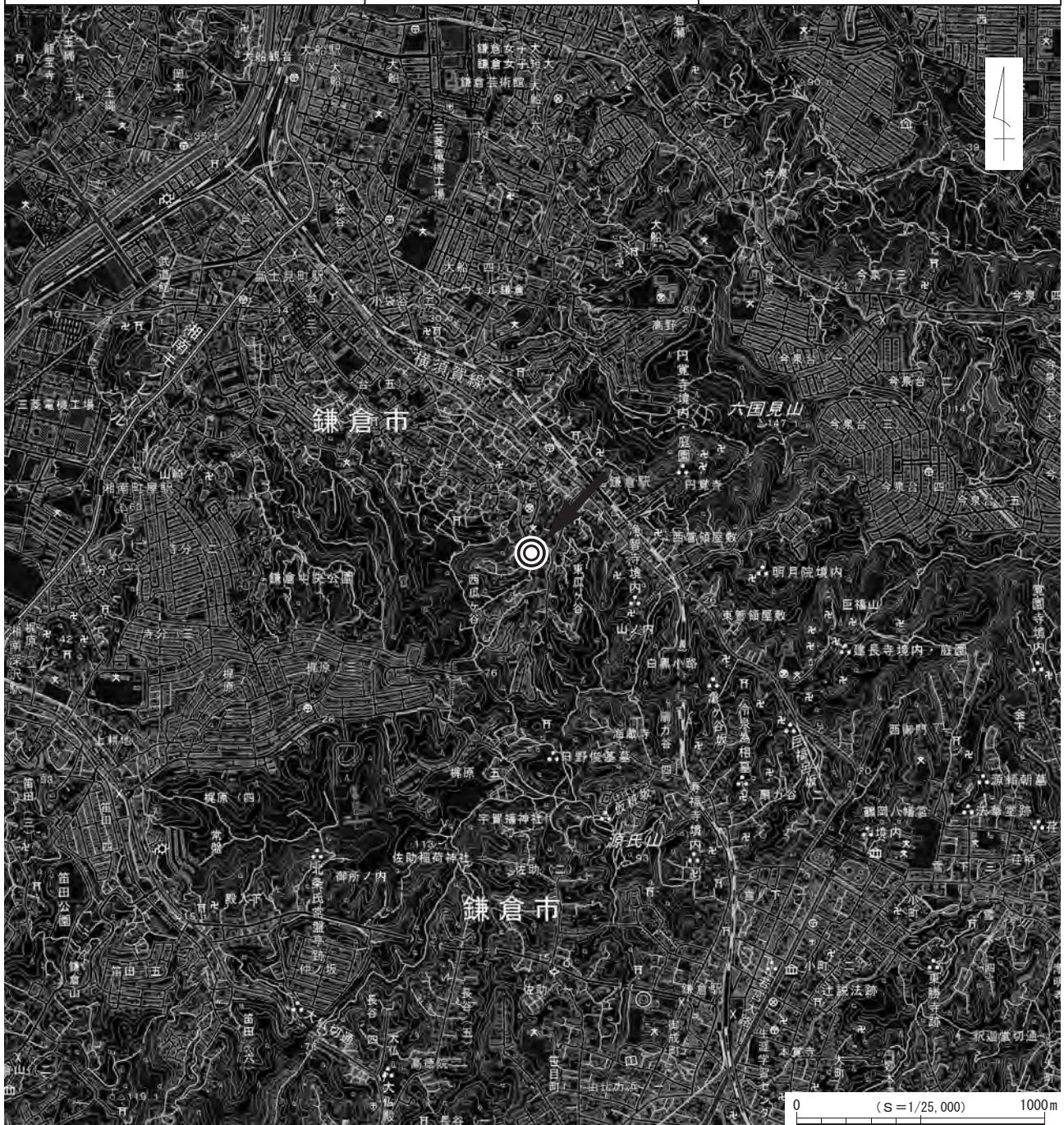
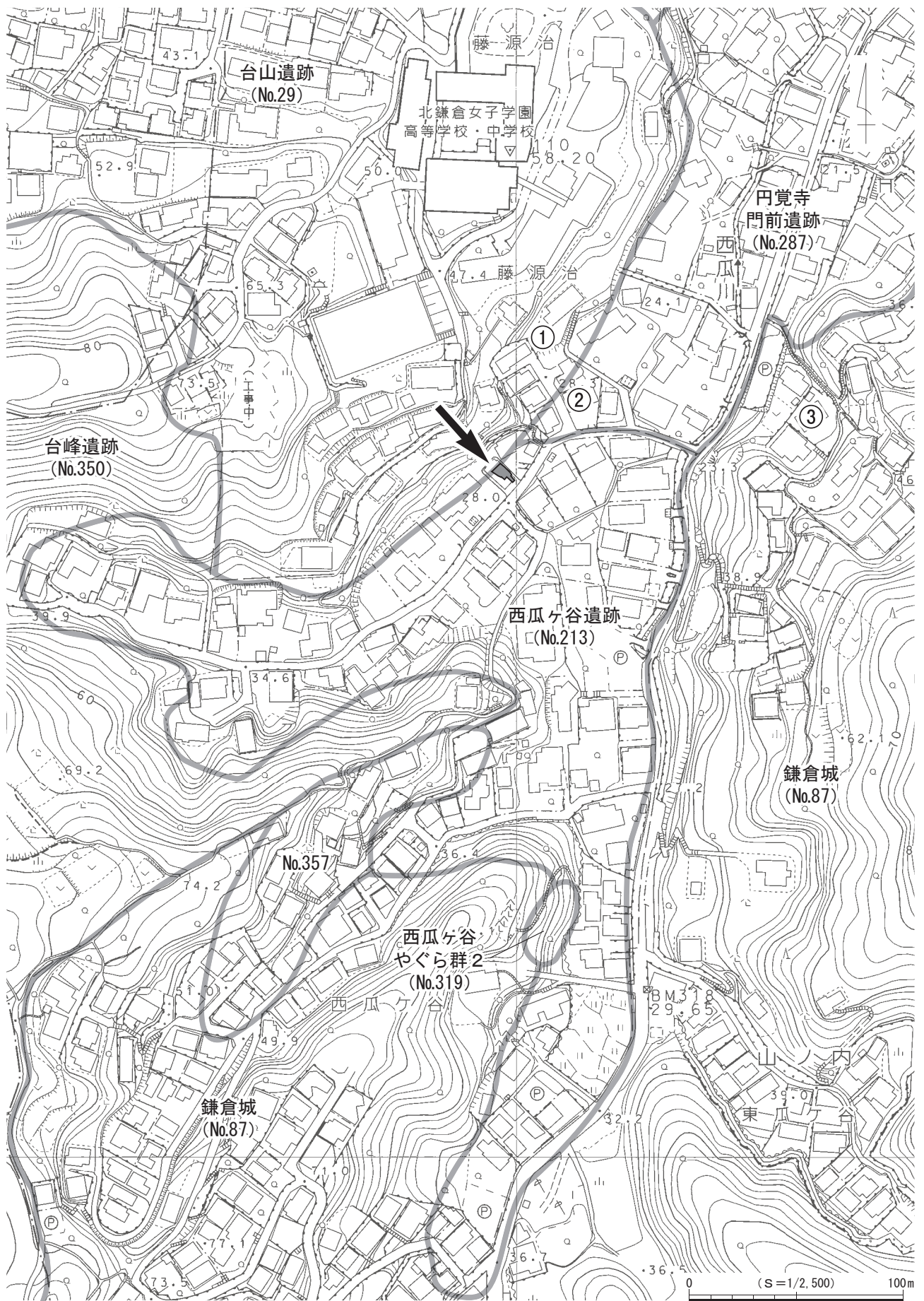


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

29) が広範囲に展開し、東側から南側にかけての丘陵上には鎌倉城 (No.87) が位置している。

本遺跡周辺の鎌倉街道沿いには、鎌倉中期から後期にかけて北条氏によって多数の寺院が建立されている。尾根を挟んだ東側の小さな谷戸には、弘安 8 年 (1285 年) に建立された臨濟宗の東慶寺がある。代々名門出身者が住職を務めた格式の高い寺であり、室町時代には鎌倉尼五山第二位に位置づけられていた。また、鎌倉街道の東側には同じく鎌倉五山第二位に列せられた臨濟宗の円覚寺が位置する。開基の北条時宗が文永・弘安の役の犠牲者慰霊のために弘安 5 年 (1282 年) に創建したとされ、鎌倉幕府滅亡後は足利将軍家の庇護を受けた。

第 3 節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。本地点は西瓜ヶ谷遺跡の北端部に位置し、北側に広がる円覚寺門前遺跡との境界付近に所在する。

現在までのところ、本地点より南側の包蔵地範囲では発掘調査は行われておらず、比較的近接した北側および東側で①山ノ内字藤源治928番1地点、②山ノ内字藤源治930番5他地点、③山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点の3カ所の調査が行われている。すでに正式な報告がなされている③の内容をみていくと、4面にわたって中世に属する遺構確認面が調査され、急斜面を造成して平場を造り出していることが明らかとなった(馬淵・松原 2006)。最下面である4面の平場からはピットおよび小ピット群が検出され、加えて3面で瀬戸鉄釉仏花瓶や五輪塔と考えられる加工石などが出土していることから、調査者は仏教的な色彩をもつ遺跡として位置づけている。年代的には出土遺物から14世紀前半頃と推定されている。

表 1 西瓜ヶ谷遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点	
①	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字藤源治928番1地点	
②	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字藤源治930番5他地点	
③	西瓜ヶ谷遺跡 (No.213)	山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点	馬淵・松原 2006

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

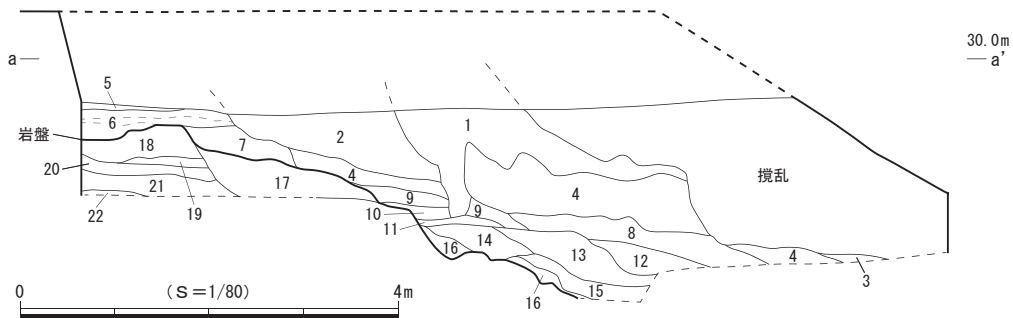
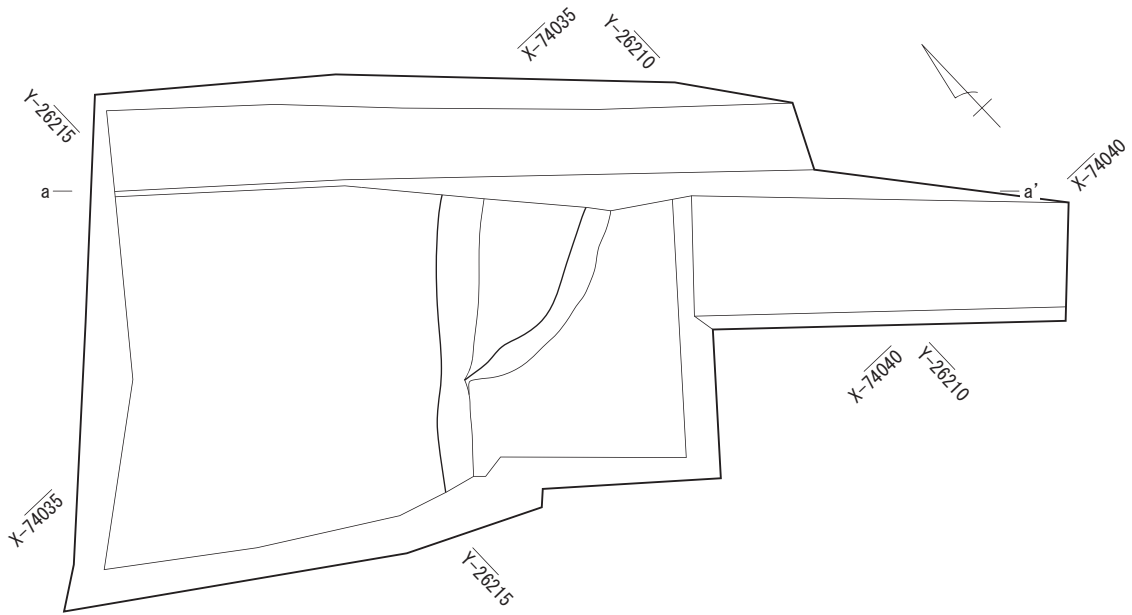
第二章 堆積土層と発見された遺物

第 1 節 堆積土層

今回の調査では遺構は検出されなかったが、中世の遺物包含層を確認することができた。また、調査区中央付近からは、確認調査時に段切り状の加工と推定された岩盤の急激な落ち込みが検出された。ここでは、遺物包含層に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約30.5mを測り、最上部には層厚1.0~1.1mの表土(1層)が堆積している。2層は近世耕作土と考えられる堆積で、泥岩粒と炭化物を含む茶褐色砂質土である。3層は宝永火山灰を含む茶色砂質土で、攪乱の直下からわずかに検出された。8~11層は中世の遺物を包含する層である。

8層は少量の砂と岩盤粒・かわらけ片を含む暗灰茶色土、9層は締まりのややある茶褐色砂質土、10層は暗茶褐色粘質土、11層は混入物がなく締まりがややある茶色粘土である。層厚は、8層が16~24cm、9層が約15cm、10層が約13cm、11層が約10cmを測る。なお、17・18層以下は黄褐色を呈する岩盤層で、風化が認められることから、露出していた時期があったと考えられる。遺構が検出されなかったため、段切りであるかどうかは不明である。



- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 1層 表土 | 12層 黒茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ粒含む。締まりなし。 |
| 2層 茶褐色砂質土 近世耕作土。泥岩粒・炭化物含む。締まり・粘性なし。 | 13層 暗茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片・砂礫含む。締まりややなし。 |
| 3層 茶色砂質土 宝永火山灰含む。締まりなし。 | 14層 暗灰茶色土 岩盤粒・かわらけ片含む。締まりややあり。 |
| 4層 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物含む。締まりあり、粘性ややあり。 | 15層 暗茶褐色粘質土 炭化物・砂礫含む。締まりなし。 |
| 5層 灰黄色砂・黄褐色土 | 16層 暗茶褐色粘質土 炭化物・砂礫含む。締まりあり。 |
| 6層 灰・黒色砂 石片を少量含む。 | 17層 黄褐色岩 風化した岩盤が集積。 |
| 7層 黄褐色土 下層部に砂利多量に含む。締まりややあり。 | 18層 風化岩盤 |
| 8層 暗灰茶色土 岩盤粒・かわらけ片含む、砂少量含む。締まりややあり。 | 19層 粉化した岩盤 |
| 9層 茶褐色砂質土 締まりややあり。 | 20層 粉化した岩盤 締まりややあり。 |
| 10層 暗茶褐色粘質土 11層より色調がやや暗い。 | 21層 灰黄色砂・黄褐色土 |
| 11層 茶色粘土 混入物はない。締まりややあり。 | 22層 灰色砂・黒砂 |

図5 調査区および北東壁土層断面図

第2節 出土遺物

本遺跡の表土および8～11層からは、遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱分の遺物が出土している。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、石製品、金属製品などが出土し、時期は15世紀前半頃と推定される。

以下、出土遺物を掲載して説明する。

(1) 表土出土遺物(図6)

表土や攪乱からは少量ではあるが遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1は瀬戸産の洗である。

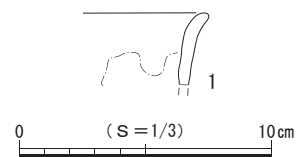


図6 表土出土遺物

(2) 8～11層出土遺物(図7)

中世の包含層である8～11層からも遺物が出土しており、このうち7点を図示した。

1～5はロクロ成形によるかわらけである。2の体部には穿孔が施され、3の口唇部には煤が付着しており、灯明具としての使用が認められる。6は瀬戸産の平碗である。7は4面に使用痕跡が観察される砥石である。

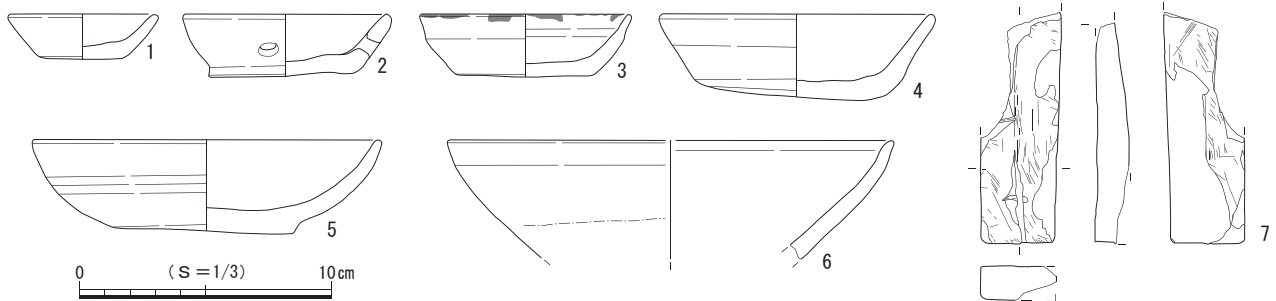


図7 8～11層出土遺物

第三章 まとめ

今回報告する山ノ内字瓜ヶ谷980番3外地点は、「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)」の範囲内に所在し、包蔵地範囲の北端部に位置し、北西側に広がる丘陵「台峰」の裾部に立地している。本地点の東側には西瓜川が南から北へと流れており、調査区からは直線距離で約80mである。

今回の調査では遺構は検出されなかったものの、包含層および岩盤の直上から15世紀前半のかわらけ、陶磁器、瓦質土器などが遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して1箱分が出土している。

西瓜ヶ谷遺跡では現在までのところ、本地点の北側および東側の比較的近接した場所にあたる山ノ内字藤源治928番1地点(図2①)、山ノ内字藤源治930番5他地点(図2②)、山ノ内字瓜ヶ谷1294番4・5地点(図2③)の3カ所で調査が行われているが、本地点周辺の様相解明については、今後の調査成果に期するところが大きいといえよう。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

馬淵和雄・松原康子 2006「西瓜ヶ谷遺跡(No.213)山内字東瓜ヶ谷1294番4・5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告22』平成17年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

表土層出土遺物(図6)

1	陶器	瀬戸洗	-	-	現2.8	二次焼成 胎土：緻密 色調：胎土-灰色、釉-灰色	口縁部片
---	----	-----	---	---	------	--------------------------	------

8~11層出土遺物(図7)

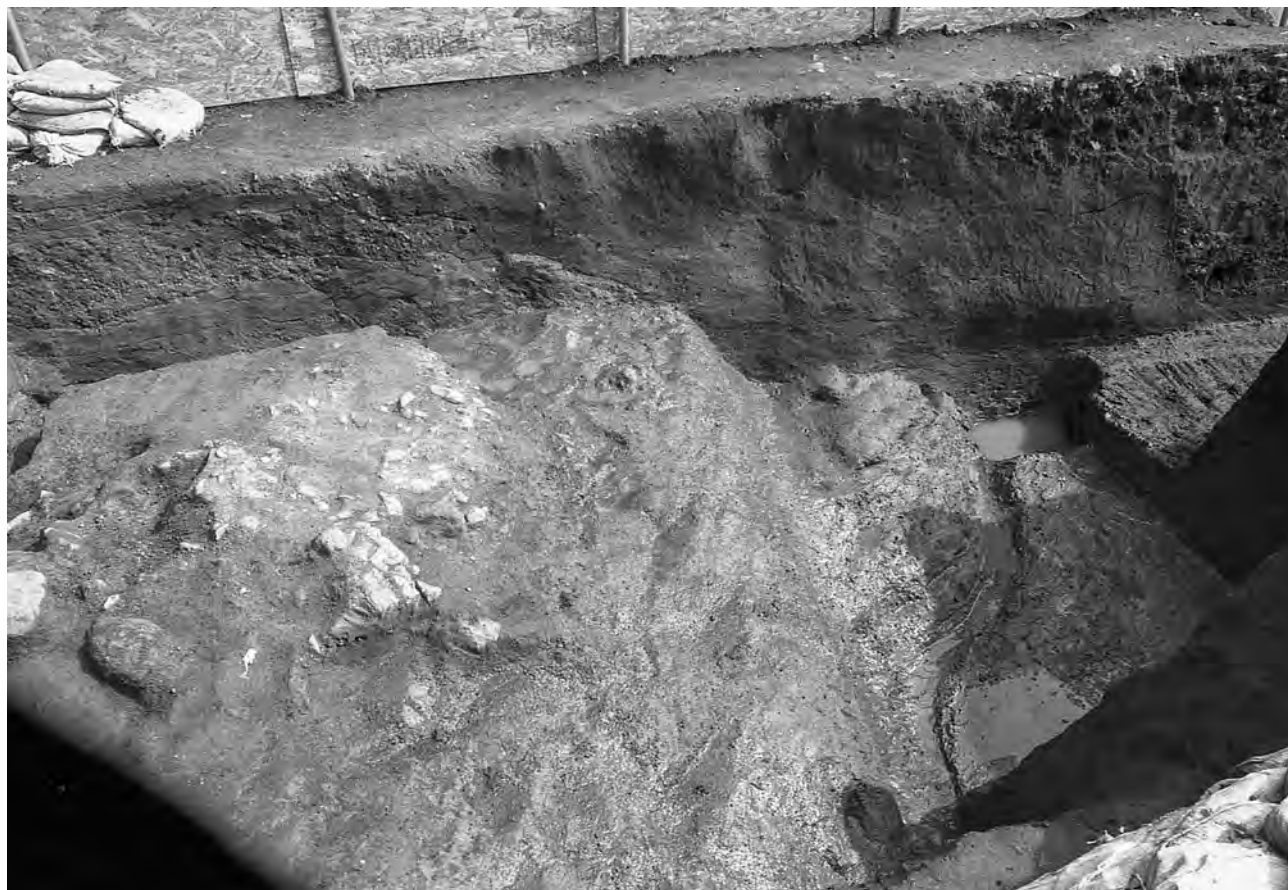
1	土器	ロクロかわらけ・小	(5.6)	3.0	1.8	底面-回転糸切+ヘラナデ 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
2	土器	ロクロかわらけ・小	8.0	5.6	2.5	体部に焼成前穿孔1カ所あり 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	略完形
3	土器	ロクロかわらけ・小	(8.2)	5.2	2.5	口唇部に煤附着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
4	土器	ロクロかわらけ・中	10.6	6.3	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-強いナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
5	土器	ロクロかわらけ・大	13.7	7.0	3.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
6	陶器	瀬戸平碗	(17.6)	-	現4.7	胎土：白色粒、密 色調：胎土-灰黄色、釉-灰色 備考：瀬戸後期様式Ⅲ・Ⅳ期	1/4
7	石製品	砥石	現長9.2	幅3.2	厚1.3	4面に使用痕跡 石材-頁岩 備考：鳴滝産	

表3 出土遺物一覧表

表土			8~11層			岩盤直上		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	97		かわらけ ロクロ成形	11
【青磁】			【青磁】			【陶器】		
龍泉窯系	鉢	1		手づくね成形	1	瀬戸	鉢	1
【陶器】			龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	常滑	甍	1
瀬戸	洗鉢	1		折縁皿	1	合計		13
常滑	甍	2	【陶器】					
合計			瀬戸	壺	2			
				盤	1			
				鉢	4			
				碗	1			
				天目茶碗	2			
				平碗	2			
				卸皿	1			
				器種不明	1			
			常滑	甍	33			
				片口鉢Ⅰ類	1			
				片口鉢Ⅱ類	5			
			山茶碗窯	碗	1			
			【瓦質土器】					
				火鉢	3			
			【土師器】					
				甍	1			
			【石製品】					
				砥石	2			
				石臼	1			
			【金属製品】					
				釘	7			
			合計			168		

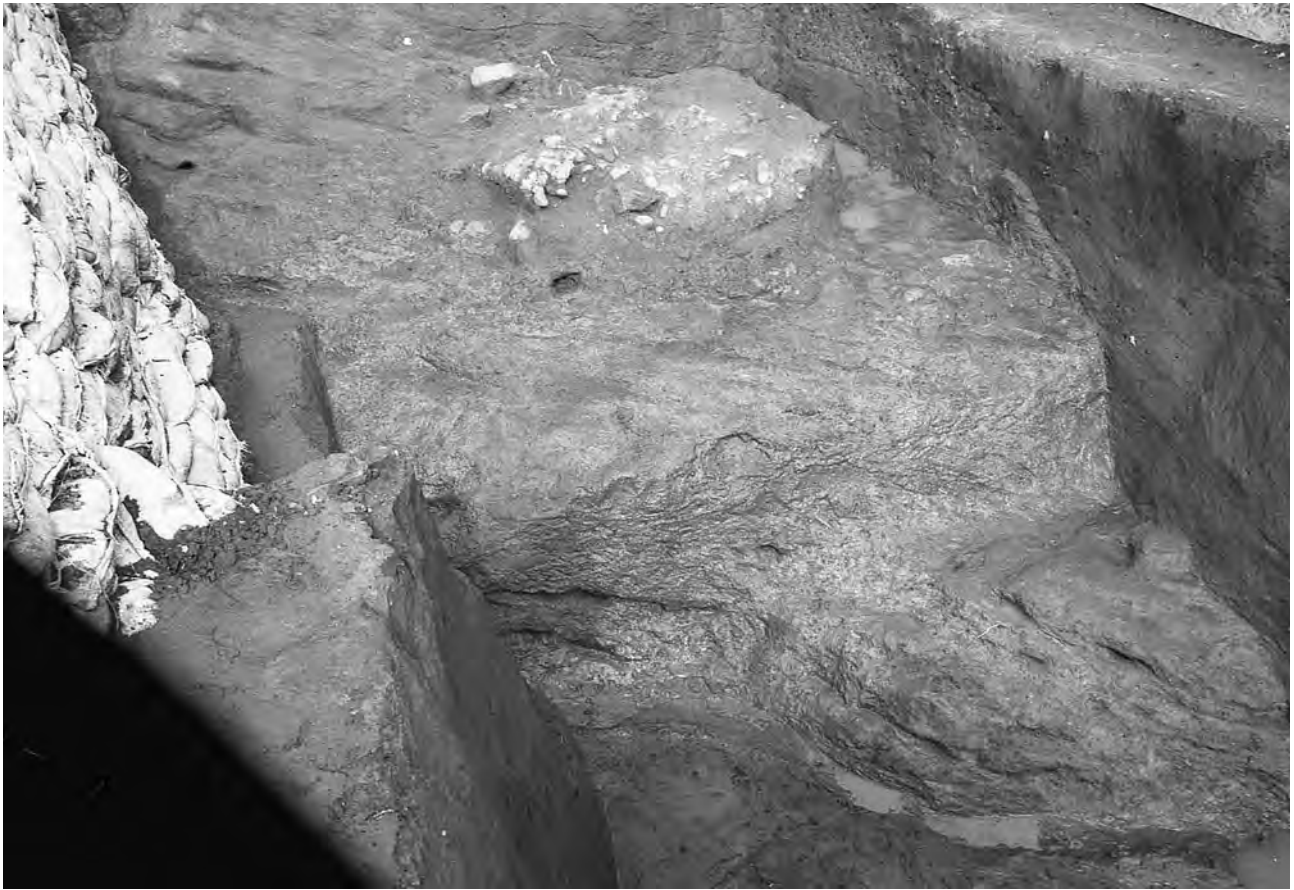


1. 調査区近景(南東から)

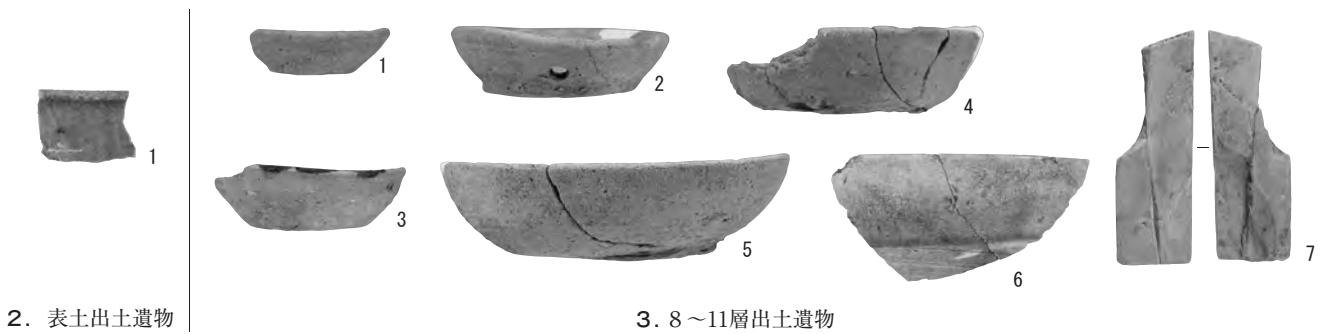


2. 調査区北東壁土層断面(西から)

図版 2



1. 調査区全景(南から)



2. 表土出土遺物

3. 8~11層出土遺物

山ノ内上杉邸跡 (No.170)

山ノ内字東管領屋敷179番39地点

例 言

1. 本報は「山ノ内上杉邸跡」（神奈川県遺跡台帳No.170）内、山ノ内字東管領屋敷179番39地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年10月15日～同年11月28日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約33㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 馬淵和雄
調査員 松原康子・本城 裕
作業員 藤枝正義・佐藤美隆・浅香文保・安達越郎
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を馬淵和雄、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「YU0815」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
■ 炭層・炭分布範囲
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	51
第1節 調査に至る経緯と経過	51
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	51
第3節 周辺の考古学的調査	52
第二章 堆積土層	56
第三章 発見された遺構と遺物	57
第1節 第1面の遺構と遺物	57
第2節 第2面の遺構と遺物	64
第3節 第3面の遺構と遺物	66
第4節 第4面の遺構と遺物	80
第5節 第5面の遺構と遺物	83
第四章 まとめ	84

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	53	図20 第2面 構成土出土遺物	66
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	54	図21 第3面 遺構分布図	66
図3 調査区位置図	55	図22 第3面 池状遺構1	67
図4 調査区配置図	55	図23 第3面 池状遺構1 上層出土遺物(1)	68
図5 調査区北西壁 土層断面図	56	図24 第3面 池状遺構1 上層出土遺物(2)	69
図6 第1面 遺構分布図	57	図25 第3面 池状遺構1 上層出土遺物(3)	70
図7 第1面 土坑3出土遺物	58	図26 第3面 池状遺構1 下層出土遺物(1)	70
図8 第1面 土坑1~11	59	図27 第3面 池状遺構1 下層出土遺物(2)	71
図9 第1面 土坑7出土遺物	60	図28 第3面 池状遺構出土木製品(1)	72
図10 第1面 土坑11出土遺物	60	図29 第3面 池状遺構出土木製品(2)	73
図11 第1面 ピット29・35・51・62・74	61	図30 第3面 池状遺構出土木製品(3)	74
図12 第1面 ピット出土遺物	62	図31 第3面 池状遺構出土木製品(4)	75
図13 表土出土遺物	62	図32 第3面 池状遺構出土木製品(5)	76
図14 第1面 遺構外出土遺物	63	図33 第3面 池状遺構出土木製品(6)	77
図15 第1面 構成土出土遺物	63	図34 第3面 遺構外出土遺物	79
図16 第2面 遺構分布図	64	図35 第3面 構成土出土遺物	79
図17 第2面 礎石建物1	64	図36 第4面 遺構分布図	80
図18 第2面 溝状遺構1	65	図37 第4面 礎板建物2	80
図19 第2面 土坑12~14	65	図38 第4面 土坑15出土遺物	81

図39 第4面 土坑15~17	82	図42 第5面 遺構分布図	83
図40 第4面 ピット104	82	図43 第5面 溝状遺構2	83
図41 第4面 構成土出土遺物	82	図44 第5面 溝状遺構2出土遺物	83

表 目 次

表1 山ノ内上杉邸跡 調査地点一覧	52	表6 第5面 出土遺物観察表	94
表2 第1面 出土遺物観察表	86	表7 出土動物遺体一覧表	94
表3 第2面 出土遺物観察表	87	表8 遺構計測表	94
表4 第3面 出土遺物観察表	87	表9 出土遺物一覧表	95
表5 第4面 出土遺物観察表	94		

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点遠景(北東から)	99	4. 第3面 池状遺構1上層出土遺104	
	2. 調査区北西壁土層断面(南東から)	99	(1)	104
図版2	1. 第1面全景(南西から)	100	図版7	1. 第3面 池状遺構1上層出土遺物
	2. 第2面全景(南西から)	100	(2)	105
図版3	1. 第3面 池状遺構1全景(南西から)	101	2. 第3面 池状遺構1下層出土遺物	
	2. 第3面 池状遺構1遺物出土状況	101	(1)	105
	(南西から)	101	図版8	1. 第3面 池状遺構1下層出土遺物
	3. 第3面 池状遺構1北側護岸の検出	101	(2)	106
	状況(南西から)	101	2. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物	
図版4	1. 第4面 礎板建物2ピット2~4	102	(1)	106
	(北西から)	102	図版9	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	2. 第4面 礎板建物2ピット2(南西	102	(2)	107
	から)	102	図版10	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	3. 第4面 礎板建物2ピット4(南西	102	(3)	108
	から)	102	図版11	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	4. 第5面全景(南西から)	102	(4)	109
図版5	1. 第1面 土坑3出土遺物	103	図版12	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	2. 第1面 土坑7出土遺物	103	(5)	110
	3. 第1面 土坑11出土遺物	103	図版13	1. 第3面 池状遺構1木製品出土遺物
	4. 第1面 ピット出土遺物	103	(6)	111
	5. 表土出土遺物	103	2. 第3面 遺構外出土遺物	111
	6. 第1面 遺構外出土遺物(1)	103	3. 第3面 構成土出土遺物	111
図版6	1. 第1面 遺構外出土遺物(2)	104	図版14	1. 第4面 土坑15出土遺物
	2. 第1面 構成土出土遺物	104	2. 第4面 構成土出土遺物	112
	3. 第2面 構成土出土遺物	104	3. 第5面 溝状遺構2出土遺物	112
			4. 出土動物遺体	112

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷179番39で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である山ノ内上杉邸跡(神奈川県遺跡台帳No.170)の範囲内にあたる。事業者から鋼管杭工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成20年7月8日～同年7月9日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、13～14世紀の遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約33㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、馬淵和雄が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年10月15日～同年11月28日までの約1ヵ月間で、調査面積は約33㎡である。現地表の標高は約25.9mを測る。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を70～95cm掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～5面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、11月28日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点(X = -76294.589、Y = -24304.949)、(X = -76323.414、Y = -24308.808)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53229(標高11.168m)を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

山ノ内上杉邸跡(No.170)は、鎌倉市の北部域に位置し、調査地は鎌倉市山ノ内字東管領屋敷179番39に所在しており、JR北鎌倉駅の南東側約450mの距離にある。

地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷にある。この開析谷の両側丘陵には複雑に入り組んだ大小の谷戸(明月谷、西瓜ヶ谷、東瓜ヶ谷等)が形成されており、谷戸奥から湧出した小河川(明月川、瓜谷川、山ノ内川等)は、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、市域の北西側で柏尾川に合流している。

本地点は、字名にもみられるように、室町期以降にはこの付近に関東管領山ノ内上杉氏の屋敷があったとされ、『相模國鎌倉郡村誌』山ノ内村の項には、「本村中央ニアリ徳泉寺旧趾ノ西北隣ナリ今畠地トナル即山内上杉氏ノ旧趾ナリ」と記され、この周囲が山ノ内上杉邸跡(No.170)として周知の遺跡となっている。

建長寺から大船方面に開けた開析谷では現在、主要地方道横浜・鎌倉線がメインストリートとして貫いているが、同線は鎌倉街道ともいわれて、中世都市鎌倉に至る往時の経路とほぼ重なっており、このうち、調査地周辺から建長寺の門前を通り巨福呂坂を経て鶴岡八幡に至る部分は特に山ノ内道という。この山ノ内道に沿って、本調査地から建長寺門前に至る範囲には調査地側から正法寺、徳泉寺、安国寺、

保寧寺、龍興院が連なって立地していたことが明月院古絵図にみられ、往時は禅宗、特に臨済宗の拠点的な地域であったと考えられるが、これら寺院はすべて廃寺となっている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。山ノ内地域は市内のなかでも比較的調査事例の少ない地域であり、5地点をあげることにする。

本調査地点の属する遺跡内をみると、西側50mの①山ノ内上杉邸跡(No.170)山ノ内字東管領屋敷180番1外地点では、8面の遺構面を検出し、13世紀後葉～15世紀代に至る礎石建物、掘立柱建物、盛土、苑池とも捉えられる大形溝などが確認されて、これらが山ノ内上杉邸に関連する遺構群とするより、『明月院絵図』に記載が見られる「傳宗庵」に関連する可能性があることが指摘されている(福嶋ほか2012)。次に周辺の遺跡をみると、②山ノ内道周辺遺跡(No.136)山ノ内字東管領屋敷180番10地点では、鎌倉時代後期～室町期にかけて2面の遺構面が検出され、明月谷方面からの自然流路と山ノ内道に平行する自然流路、および両流路の合流点が発見されている(鎌倉市教育委員会1997)。下層からは古墳時代前期～中期のミニチュア土器など、祭祀に関連する遺物が出土している。さらに北西側の③円覚寺旧境内遺跡(No.434)山ノ内字西管領屋敷377番1では、13世紀第4四半期から14世紀後半～15世紀代に至る4面の遺構面を検出し、このうち14世紀後半～15世紀代の第1面では、柱穴や溝状の細長い土坑を検出し、14世紀前半の第2面では、山ノ内道と平行に延びる南北方向の小規模な箱堀、通路と考えられる幅2mの硬化面を検出している(宮田・滝澤2010)。また、13世紀末～14世紀初頭頃の第3面、13世紀第4四半期頃の第4面では、建物としてまとまる柱穴や柱穴列とともに、この建物に先行する溝などが検出された。これらは調査地が円覚寺の旧境内にあたることから寺院内部の建物や通路、区画施設と考えられている。

次に調査地点より南東側に目を転じると、前節でも述べたとおり、山ノ内道に沿って建長寺門前に至る範囲には調査地側から正法寺、徳泉寺、安国寺、保寧寺、龍興院が建立されていたことが、明月院古絵図にみられ、このうち、調査地点に近い④徳泉寺跡(No.173)山ノ内字東管領屋敷168番4地点では、遺構面1面のみで、中世(15世紀代)の地業1ヵ所と中世～近世に属すると考えられる河川が検出され、河川は山ノ内川の旧流路に当たる可能性が指摘されており、地業は河川との関係から河岸保護と川への土砂流入を防ぐ役割をもつと考えられている(永田・齋藤2018)。⑤安国寺跡(No.174)山ノ内字東管領屋敷147番9外地点では、14世紀～15世紀中葉の生活面8面と近世面1面が検出され、泥岩による組護岸をもつ溝、土坑、木組遺構などの遺構が検出され、遺物は、僧の所持品と考えられる刻字された硯や、数珠あるいは瓔珞の一部とみられるガラス小玉など寺院色の強い遺物が出土したほか、五芒星の墨描きが施される笠塔婆形状の呪符木簡が出土している。この調査の詳細は本書に掲載しているので参照され

表1 山ノ内上杉邸跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	山ノ内上杉邸跡(No.170)	山ノ内字東管領屋敷179番39地点	
①	山ノ内上杉邸跡(No.170)	山ノ内字東管領屋敷180番1外地点	福嶋ほか2012
②	山ノ内道周辺遺跡(No.136)	山ノ内字東管領屋敷180番10地点	鎌倉市教育委員会1997
③	円覚寺旧境内遺跡(No.434)	山ノ内字西管領屋敷377番1地点	宮田・滝澤2010
④	徳泉寺跡(No.173)	山ノ内字東管領屋敷168番4地点	永田・齋藤2018
⑤	安国寺跡(No.174)	山ノ内字東管領屋敷147番9外地点	森2010、本報告書
⑥	保寧寺跡(No.175)	山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点	手塚1997
⑦	西管領屋敷南やぐら群(No.212)		

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

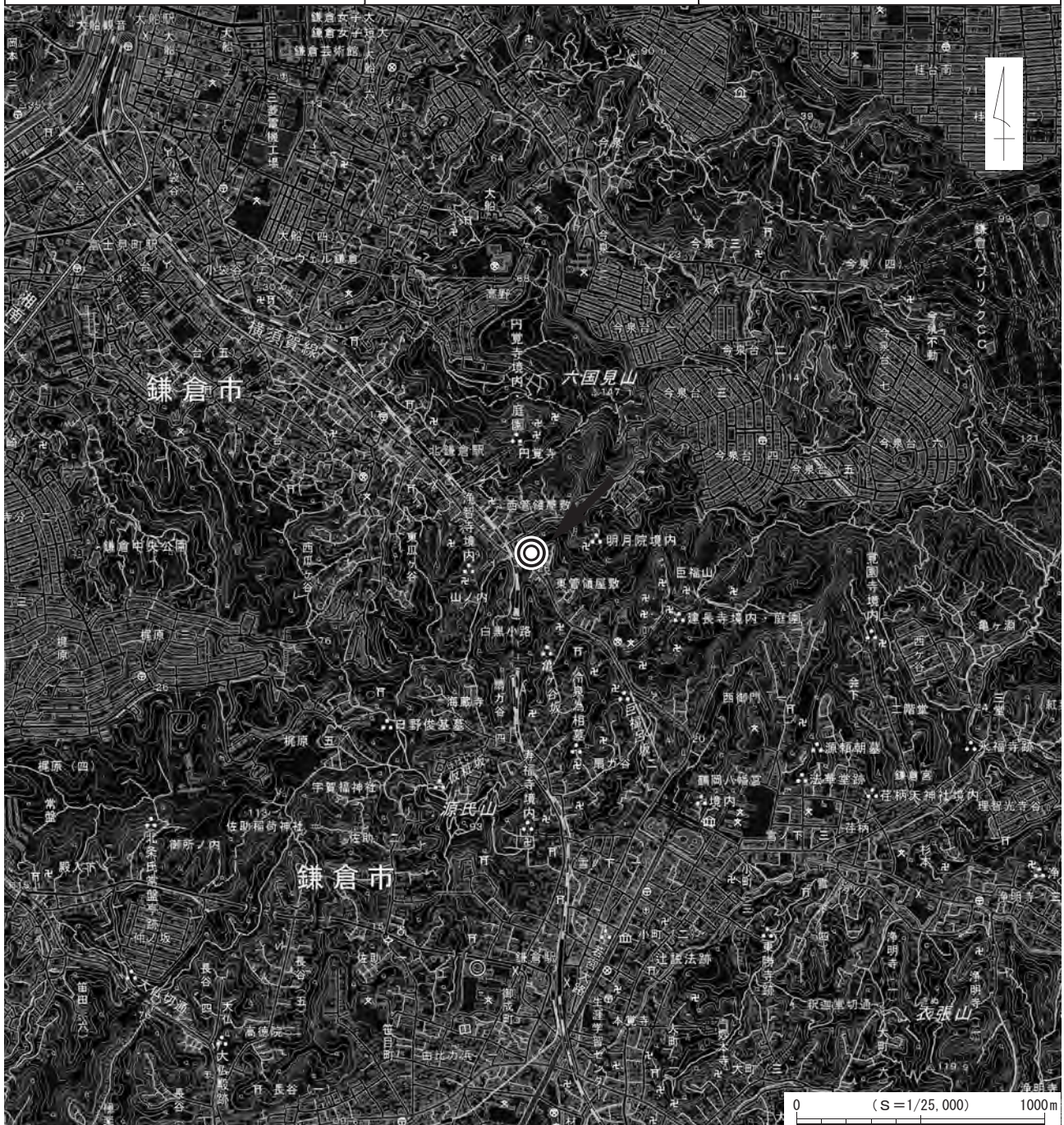
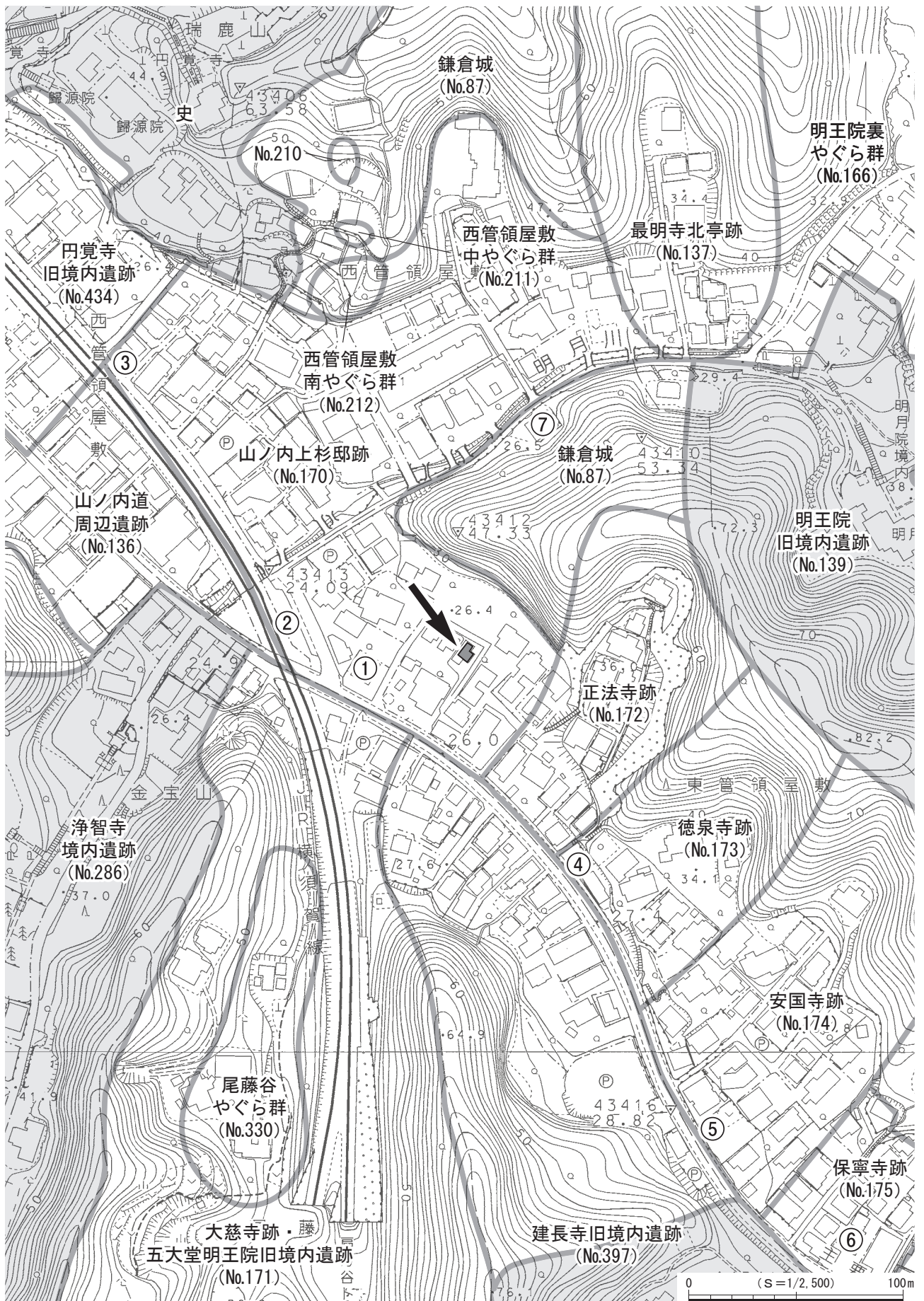


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

たい。⑥保寧寺跡 (No.175) 山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点では、当寺が15世紀中葉から近世まで存続した寺院であることが確認されており、3面の遺構面が検出され、遺物は禅宗寺院を特徴付ける天目碗が数多く出土している (手塚 1997)。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～5面までの合計5面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区北西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約25.9mを測り、最上部には層厚35～60cmの表土(1層)が堆積している。表土の下位には山砂を含む暗茶褐色弱砂質土を主体とする層(2～6層)が層厚合計40cm前後、少量の泥岩ブロックと砂岩ブロックを含む明茶褐色弱粘質土(7層)が層厚25cm前後、暗褐色弱粘質土(8層)が層厚10cm前後堆積している。遺構確認面の第1面は9～11層上面で確認し、確認面の標高は25.1～25.4mを測る。9層は泥岩ブロックと砂岩ブロックおよび微量の炭化物・かわらけ片を含む暗褐色弱砂質土で、層厚15cm前後である。10層は少量の泥岩粒、多量の山砂、微量の炭化物とかわらけ片を含む暗褐色弱粘質土で、層厚10cm前後である。11層は多量の炭化物を含む明褐色弱粘質土で、層厚約7cmである。第2面は14・16層上面で確認し、確認面の標高は24.9～25.3mを測る。14層は炭化物とかわらけ片を少量含み、泥岩ブロックと砂岩ブロックで構成された整地層で、層厚5～20cmである。16層は多量の泥岩ブロックと炭化物・かわらけ片を含む整地層で、層厚3～35cmである。14層と16層の間には、多量の泥岩粒・炭化物・かわらけ片を含み、粘性の強い暗褐色粘質土(15層)が層厚3～10cm堆積している。16層の下位は多量

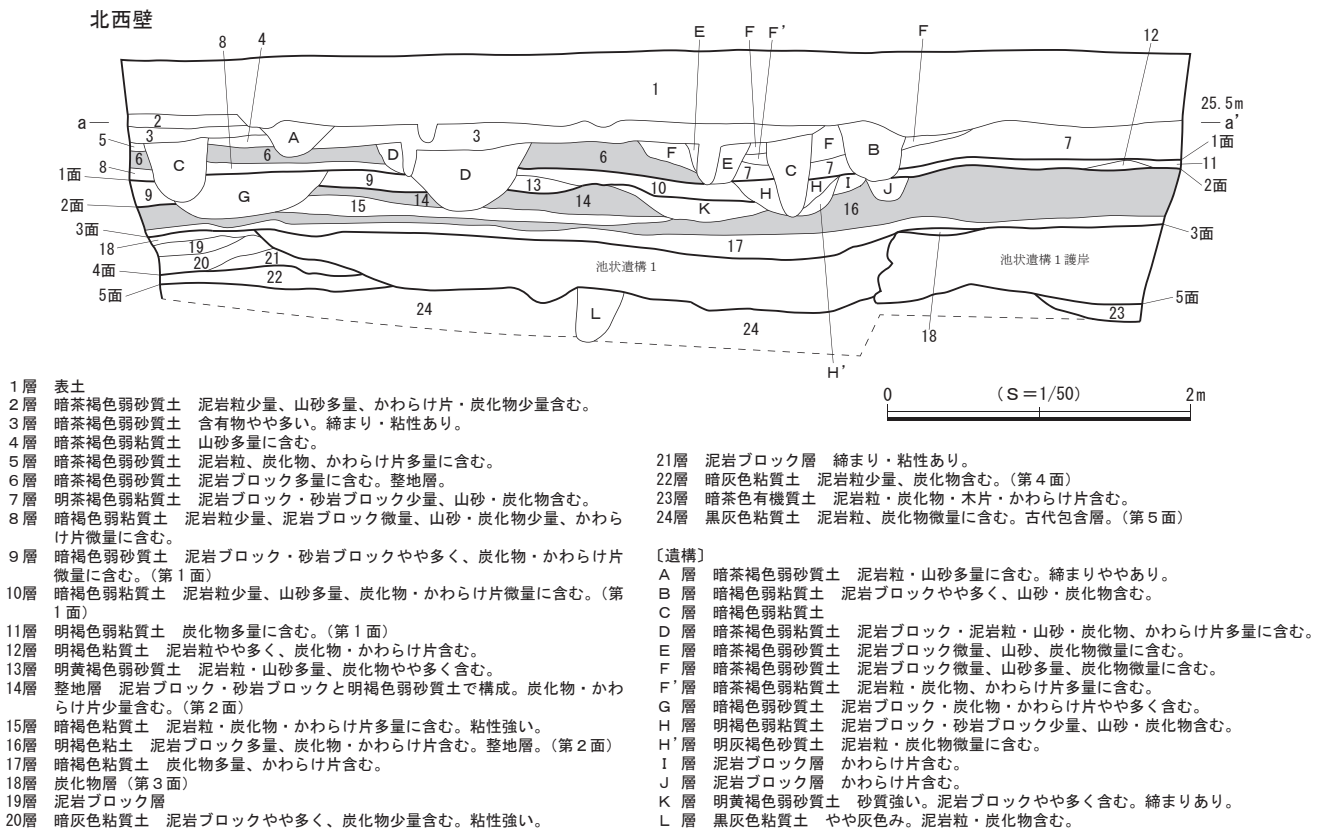


図5 調査区北西壁 土層断面図

の炭化物とかわらけ片を含む暗褐色粘質土(17層)で、第3面で構築された池状遺構の上端を平坦にするための層と考えられる。第3面は18層上面および池状遺構の護岸施設上面で確認し、確認面の標高は24.6~24.8mを測る。18層は炭化物層で、層厚7cm前後である。第4面は22層上面で確認し、確認面の標高は24.5m前後を測る。22層は少量の泥岩粒と炭化物を含む暗灰色粘質土で、層厚10cm前後である。遺構確認面の最下位である第5面は、古代包含層の24層上面で確認した。確認面の標高は24.4m前後を測る。24層は泥岩粒と微量の炭化物を含む黒灰色粘質土である。

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1~5面までの合計5面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は礎石・礎板建物2棟、池状遺構1ヵ所、溝状遺構2条、土坑18基、ピット104基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して27箱を数える。なお、各面の遺構および遺構外、構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表7に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1~5面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の9~11層上面で検出され、確認面の標高は25.1~25.4mを測る。9層は泥岩ブロックと砂岩ブロックおよび微量の炭化物・かわらけ片を含む暗褐色弱砂質土、10層は少量の泥岩粒、多量の山砂、微量の炭化物とかわらけ片を含む暗褐色弱粘質土、11層は多量の炭化物を含む明褐色弱粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑11基、ピット86基で、調査区全域に分布していた(図6)。また、調査区北東側には炭層が広がっており、その北東隅付近では完形のかかわりが分布する状況がみられた。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品などであり、これらの年代観から本面は14世紀前葉~中葉に属すると考えられる。

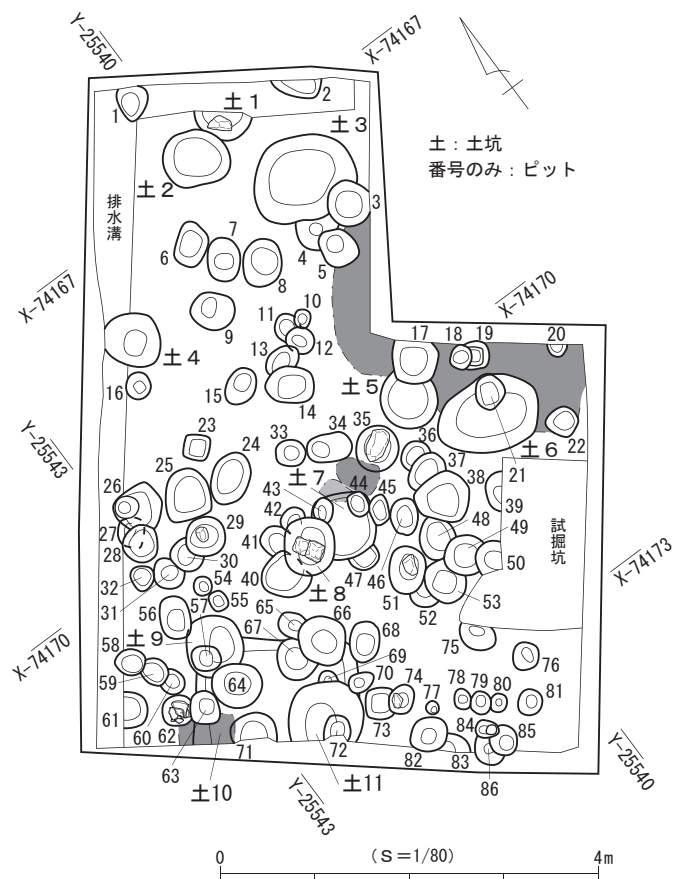


図6 第1面 遺構分布図

(1) 土坑

土坑1(図8)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。排水溝の掘削により北東側が失われ、土坑2と重複して西壁の一部が壊されているため、全容は不明である。検出された範囲からは、平面形は略円形ないし楕円

形を呈すると推定され、底面はほぼ平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西－南東方向の現存長61cm、北東－南西方向の現存長30cm、深さ21cmで、坑底面の標高は25.07mを測る。坑底面の南西側から長さ26cm、幅15cm、高さ9cmの礫が出土し、礎石の可能性が考えられる。上面の標高は25.16mである。

遺物は出土しなかった。

土坑2 (図8)

調査区北西隅付近に位置する。土坑1と重複して西壁の一部を壊している。平面形は略円形を呈し、底面は中央がわずかに盛り上がる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸61cm、深さ21cmで、坑底面の標高は24.92mを測る。主軸方位はN-47°-Wを指す。

遺物はかわらけ72点、陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑3 (図8)

調査区北側の中央付近に位置する。ピット3・4と重複して、ピット4の北壁を壊し、ピット3に南壁の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は南東側で大きく開くが、北西側の開きは小さく、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸1.13m、短軸94cm、深さ20cmで、坑底面の標高は25.03mを測る。主軸方位はN-57°-Wを指す。

出土遺物 (図7)

遺物はかわらけ76点、磁器2点、陶器2点が出土し、このうち3点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径7.7~8.0cmの小形品である。3は瀬戸産の陶器であり、細片のため詳細不明であるが香炉と類推した。外面に梅花文を押印し、内外面に暗緑灰色に発色する鉄釉を施す。

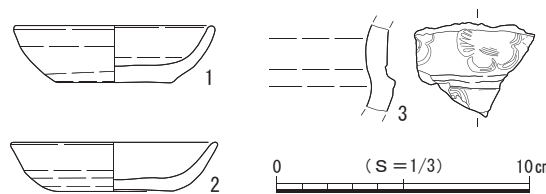


図7 第1面 土坑3出土遺物

土坑4 (図8)

調査区北西壁際のやや北寄りに位置する。北西壁の一部が調査区外に及んでいる。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はややカーブを描いて立ち上がり、断面形は丸底形に近い逆台形状を呈する。規模は長軸現存長63cm、短軸56cm、深さ23cmで、坑底面の標高は24.85mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

土坑5 (図8)

調査区中央のやや東寄りに位置する。ピット17と重複して北東壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸60cm、深さ21cmで坑底面の標高は24.95mを測る。主軸方位はN-13°-Eを指す。

遺物はかわらけ25点、金属製品1点が出土した。

土坑6 (図8)

調査区東隅付近に位置する。ピット21と重複して北壁側の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈

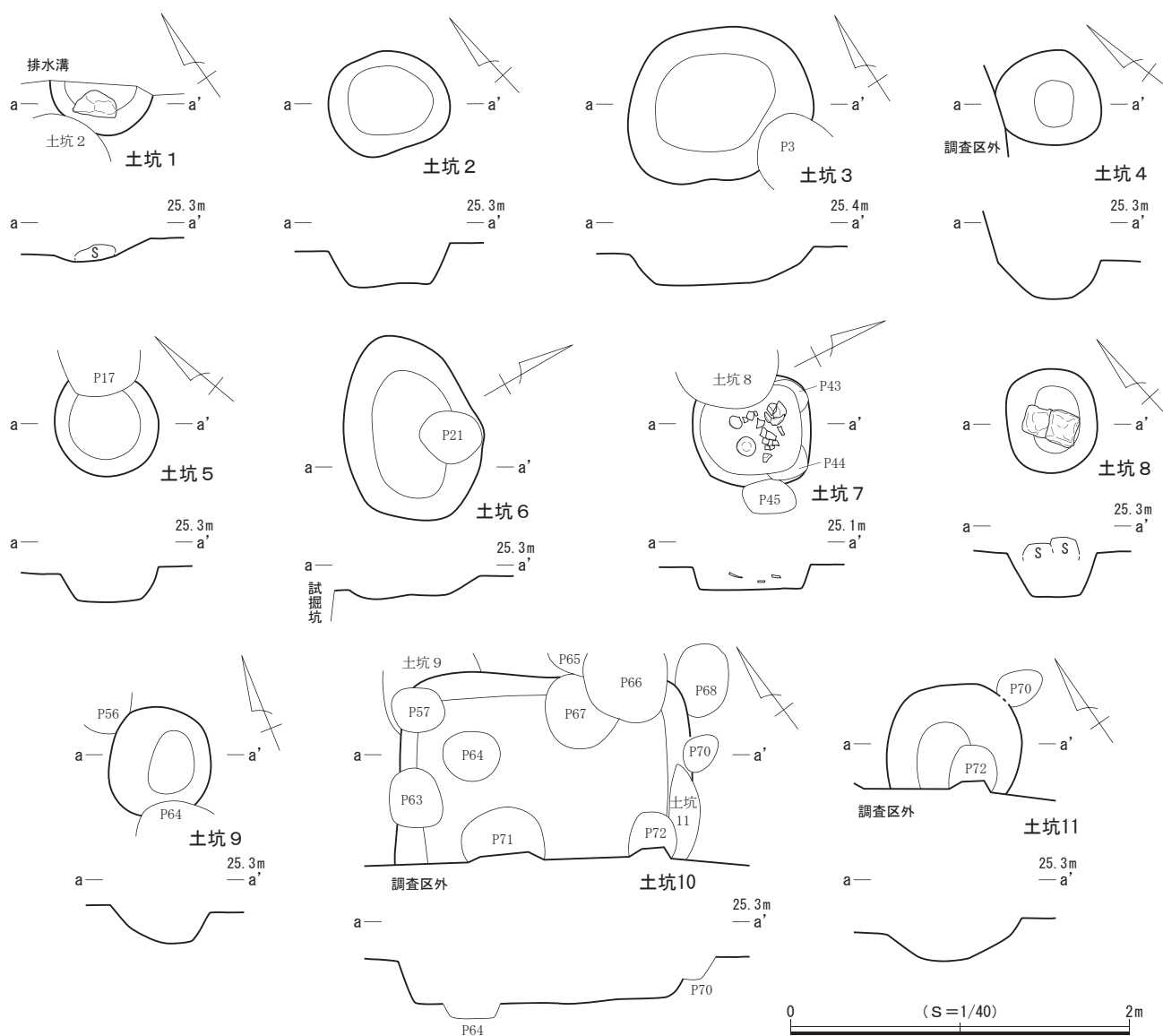


図8 第1面 土坑1～11

し、底面はわずかに凹凸をもつ。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.13m、短軸82cm、深さ14cmで、坑底面の標高は25.20mを測る。主軸方位はN-77°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑7 (図8)

調査区中央のやや南寄りに位置する。土坑8、ピット43～45・47と重複してピット47の北側を壊している。また、土坑8とピット43に西壁側、ピット44・45に東壁の一部が壊されている。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平らである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸70cm、短軸現存長65cm、深さ14cmで、坑底面の標高は24.79mを測る。主軸方位はN-27°-Eを指す。土坑内からは、かわらけがまとまって出土した。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ113点が出土し、このうち3点を図示した。

1～3はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.7cmを測る小形品、2・3は口径12.5～12.7cmの中形品である。1の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

土坑8 (図8)

調査区中央のやや南西寄りに位置する。土坑7、ピット40～43と重複してすべての遺構を壊して構築されている。平面形は隅丸方形を呈し、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸62cm、短軸53cm、深さ26cmで、坑底面の標高は24.88mを測る。坑内には礎石状の角礫が2個並べて据えられていた。詳細は不明であるが、略方形に面取りされており、いずれも底面に密着していなかったようである。角礫の大きさは、一辺30cm前後を測り、高さは15cm内外と思われる。

遺物はかわらけ36点、瓦質土器1点が出土した。

土坑9 (図8)

調査区南西隅付近に位置する。土坑10、ピット56・57・64と重複して土坑10の北壁隅を壊し、ピット56・57・64に南壁と北西壁の一部が壊されている。平面形は隅丸方形に近い略円形を呈し、底面は緩やかに湾曲する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸60cm、深さ24cmで、坑底面の標高は24.93mを測る。主軸方位はN-32°-Eを指す。

遺物はかわらけ17点、陶器1点が出土した。

土坑10 (図8)

調査区南西壁際のやや西寄りに位置する。南西側が調査区外に及んでいる。また、土坑9・11、ピット57・63・64・66・67・70～72と重複して壊されているため、全容は明らかでない。検出された範囲からは、平面形は方形ないし長方形を呈すると推定され、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.71m、北東-南西方向の現存長1.14m、深さ16cmで、坑底面の標高は24.82mを測る。北東壁を基に主軸方位を求めると、N-53°-Wを指す。

遺物はかわらけ44点が出土した。

土坑11 (図8)

調査区南西壁際の中央に位置する。南西側が調査区外に及んでいる。土坑10、ピット69・70・72と重複して土坑10とピット69の南側を壊し、ピット70に東壁の一部、ピット72に坑内の一部が壊されている。検出された範囲からは、平面形は略円形ないし楕円形を呈すると推定され、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は、長軸80cm、短軸現存長66cm、深さ15cmで、坑底面の標高は24.82mを測る。

出土遺物 (図10)

遺物はかわらけ29点、陶器1点、瓦質土器1点が出土し、このうち2点を図示した。

1は略完形のロクロ成形かわらけであり、口径13.5cmを測る大形品である。2は備前産の播鉢である。

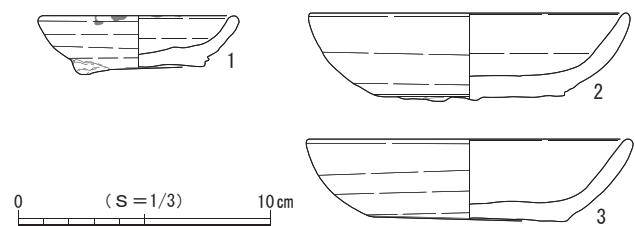


図9 第1面 土坑7出土遺物

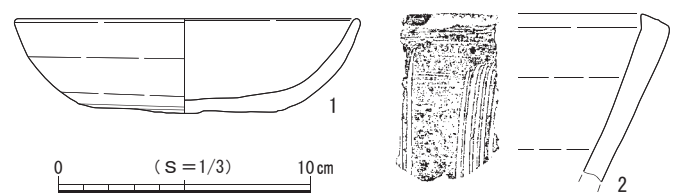


図10 第1面 土坑11出土遺物

(2) ピット

第1面では、86基を検出した。調査区全域に分布し、特に南西側の密集度は高いため建物が存在していた可能性も考えられるが、遺構間の重複が激しい状況に加えて調査面積の制約もあり、明確には捉えられなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、楕円形がやや多く認められる。規模は長軸14～59cm、深さ6～35cmと長軸・深さともばらつきがある。

以下、礎石が据えられたピット4基と常滑の片口鉢が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット29 (図11)

調査区中央のやや西寄りに位置する。ピット30と重複して東壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は径41cm、深さ14cmを測り、礎石がピットの中央付近に据えられていた。礎石の大きさは長さ16cm、幅12cmを測り、上面の標高は24.91mである。

ピット35 (図11)

調査区中央のやや北東寄りに位置する。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸49cm、短軸45cm、深さ16cmを測り、礎石がピット中央に据えられていた。礎石の大きさは長さ37cm、幅20cmを測り、上面の標高は25.05mである。

ピット51 (図11)

調査区中央のやや南東寄りに位置する。ピット52・53と重複して両者の北西壁の一部を壊している。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸50cm、短軸38cm、深さ35cmで、礎石がピット底面付近の北東側に据えられていた。礎石の大きさは長さ21cm、幅14cmを測り、上面の標高は24.73mである。

ピット62 (図11)

調査区南西隅付近に位置する。ピット63と重複して南東壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸33cm、短軸32cm、深さ18cmを測る。壁面に沿うように据えられていたと考えられる状況で、常滑産の片口鉢が正位で出土した。

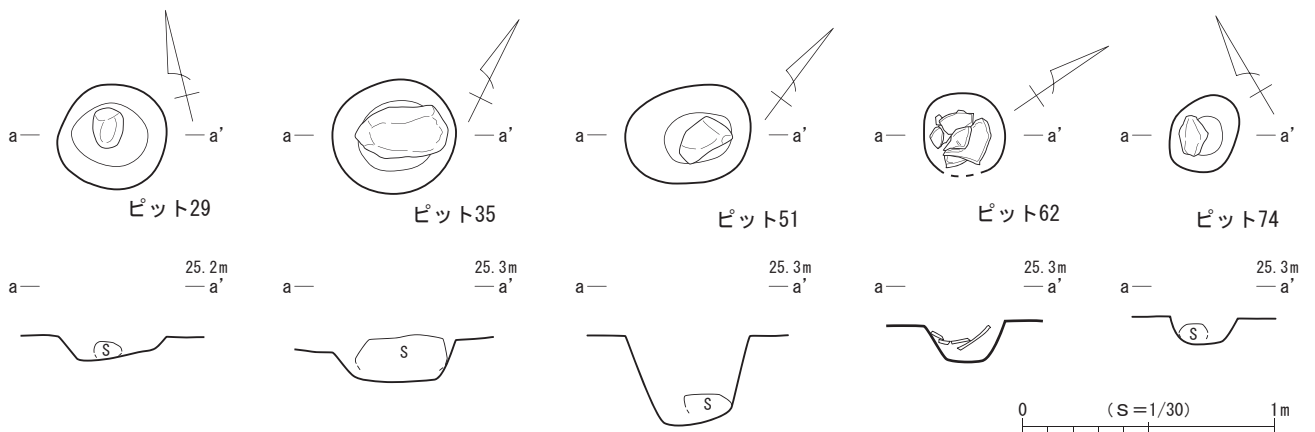


図11 第1面 ピット29・35・51・62・74

ピット74 (図11)

調査区南壁側の中央寄りに位置する。ピット73と重複して南東壁を壊している。平面形は楕円形を呈し、断面形は逆台形を呈している。規模は長軸32cm、短軸26cm、深さ12cmを測り、礎石がピット底面の西側に据えられていた。礎石の大きさは17cm、幅12cmを測り、上面の標高は25.10mである。

ピット出土遺物 (図12)

遺物は86基のピット中、45基からかわらけ、陶器、金属製品などが出土した。詳細は出土遺物一覧表(表9)に掲げたが、このうち2点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径7.5cmを測る小形品である。2は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、片口が遺存する。内面体部下位は使用による摩耗が著しい。1はピット66、2はピット62からそれぞれ出土した。

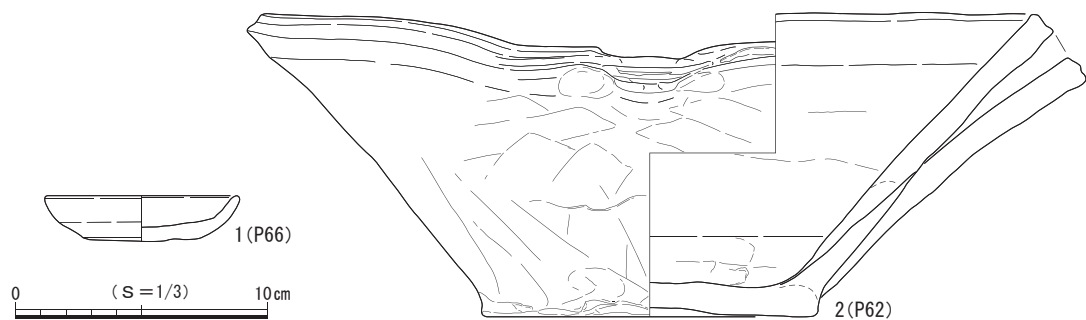


図12 第1面 ピット出土遺物

(3) 表土出土遺物 (図13)

表土からも遺物が出土しており、このうち11点を参考資料として図示した。

1～6はロクロ成形のかわらけであり、このうち1～4は口径7.0～8.4cmの小形品、5は口径11.6cmの中形品、6は口径13.2cmの大形品である。1～3の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。7は瀬戸産の折縁深皿、8は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、口縁部形状から10～11型式に比定されよう。9・10はロクロ成形のかわらけの底部を打割して円板状に再加工したもので、表裏面にはかわらけ成形時の糸切痕と板状圧痕、器面の横ナデ調整が観察できる。11は現存長10.3cmを測る鉄釘。12の銭貨は祥符通寶(1009年初鑄)である。

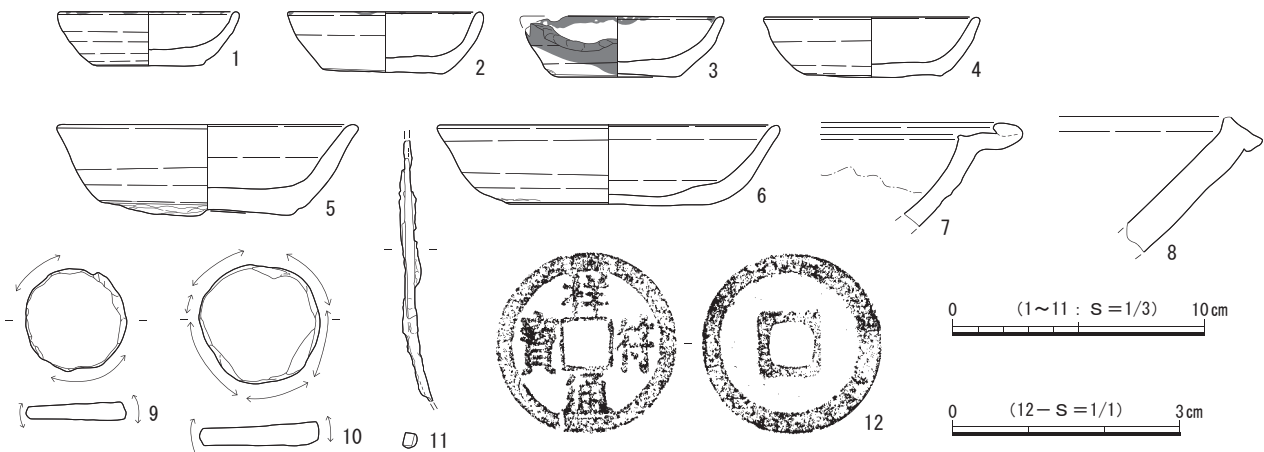


図13 表土出土遺物

(4) 第1面 遺構外出土遺物 (図14)

第1面では遺構外からもかわらけ、陶器、土製品、石製品、金属製品が出土し、このうち22点を図示した。

1～15はロクロ成形のかわらけであり、このうち1～11は口径6.8～7.7cmの小形品、12～15は口径10.7～12.3cmの中形品である。9の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。16は常滑産の広口壺であり、口縁部形状から5型式に比定される。17はロクロ成形のかわらけの底部を打割して円板状に再加工したもので、表裏面にはかわらけ成形時の糸切痕と板状圧痕、器面の横ナデ調整が観察できる。18は粘板岩を素材とした薄板状の砥石であり、表裏面を使用し、研磨によって不均一に磨り減る。19～22は金属製品である。このうち19は切先・茎が遺存する刀子であり、茎端部が欠損している。幅の厚い刀身は平造りと考えられる。20も刀子であり、切先側が欠損し、遺存部分の2ヵ所で意図的に折り曲げられており上面観が逆「N」字状を呈する。刀身は平造りで、茎の端部付近に目釘穴とみられる錆膨れが観察できる。21・22は鉄釘であり、21は現存長11.2cm、22は現存長5.2cmを測る。

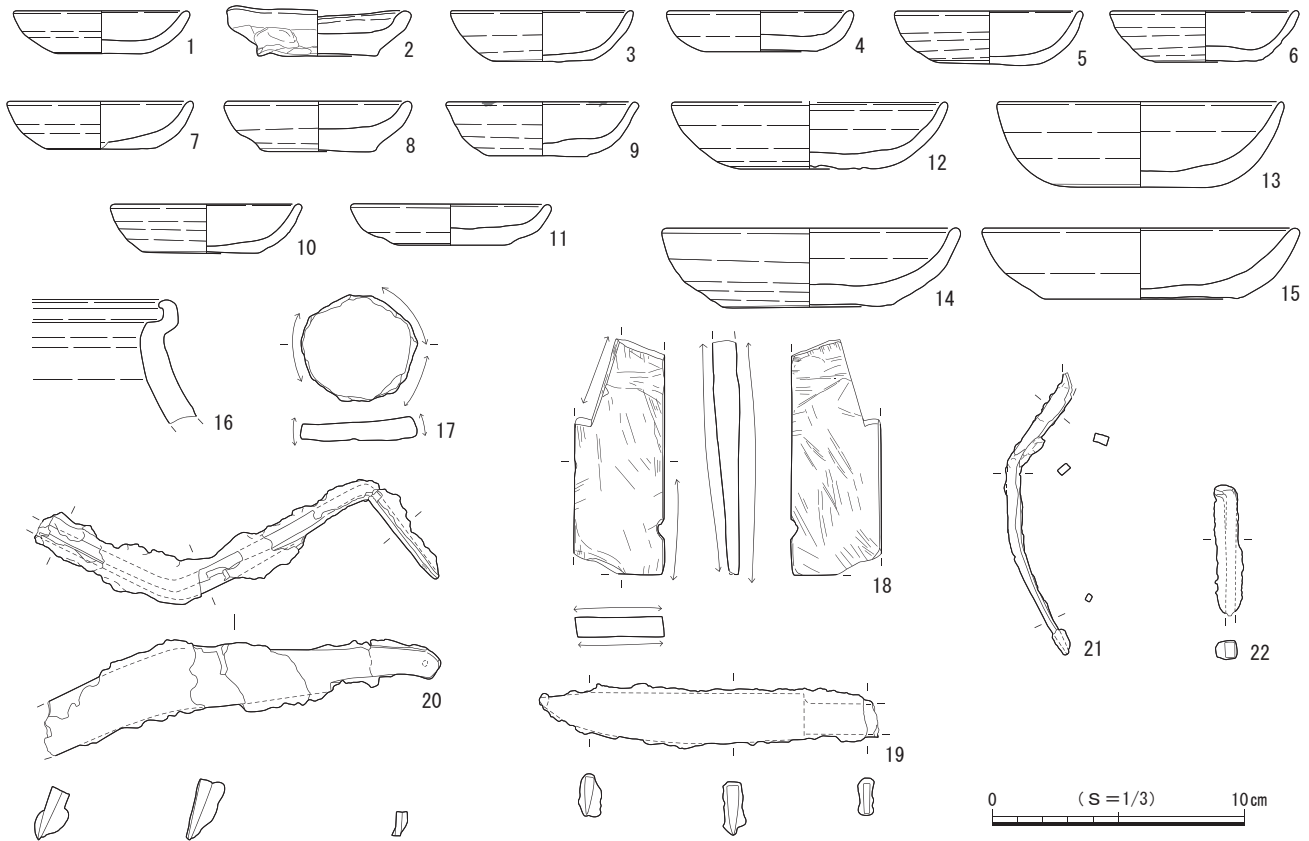


図14 第1面 遺構外出土遺物

(5) 第1面 構成土出土遺物 (図15)

第1面の遺構基盤層である構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、金属製品が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、内面体部中位以下は使用による摩耗が著しい。

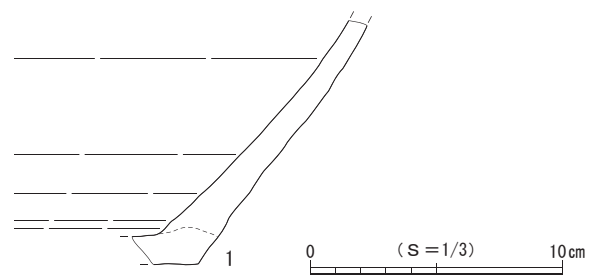


図15 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は14・16層上面で検出され、確認面の標高は24.9～25.3mを測る。14層は炭化物とかわらけ片を含み、泥岩ブロックと砂岩ブロックで構成された整地層、16層は多量の泥岩ブロックと炭化物・かわらけ片を少量含む整地層で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、溝状遺構1条、土坑3基、ピット16基である(図16)。礎石建物と溝状遺構は、検出された範囲でみると軸をほぼ同一にしており、何らかの関係があるものと考えられる。土坑は調査区の中央より南西側に分布している。また、ピットは調査区中央付近に分布がほぼまとまっている。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、金属製品などが出土し、これらの年代観から本面は13世紀末葉～14世紀前葉に属すると考えられる。

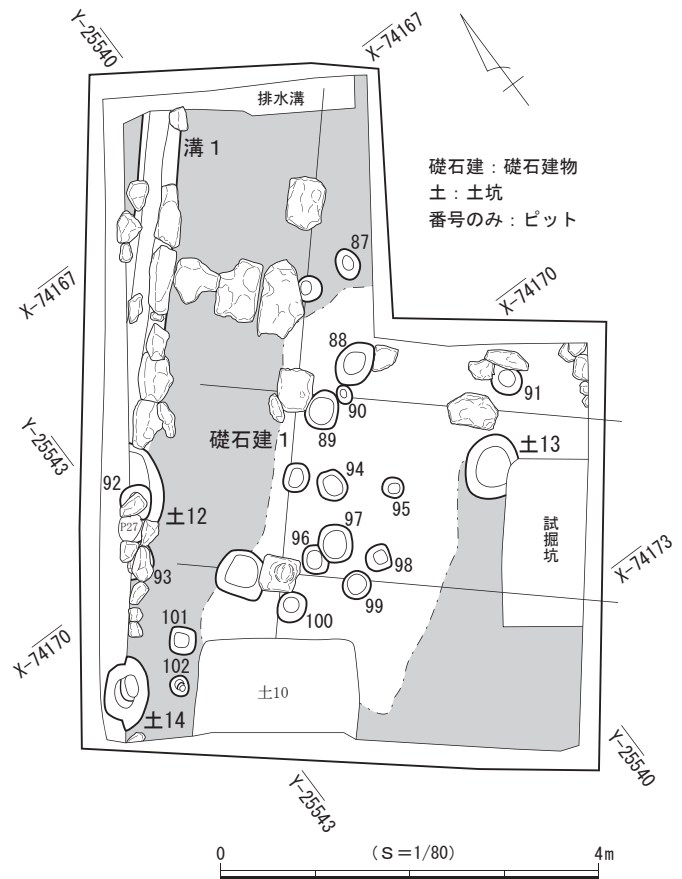


図16 第2面 遺構分布図

(1) 礎石・礎板建物

礎石建物1 (図17)

調査区中央から北・東側に位置する。検出された範囲で捉えられた遺構は、北東-南西方向へ直線的に並ぶ礎石1～3の2間、礎石2とその南東側に据えられた礎石4の1間で構成された礎石建物である。建物の広がりについては四方に広がる可能性が考えられるが、北西側については建物の軸線方向と並行する溝状遺構1の存在から、建物の側と推定される。また、礎石1-2と2-3の間に等間隔で配置されたP1・2および礎石3に近接するP3は、補助穴と推測されることもできるため本址と併せて図示した。主軸方位は調査範囲の制約から建物全体の空間構成は判然としませんが、北東-南西方向を基にすると、N-37°-Eを指す。

建物の規模は北東-南西方向の現存長4.05m、北西-南東方向の現存長1.95mを測る。柱間寸法は北東-南西方向では北東から1間目が2.10m、2間目が1.95

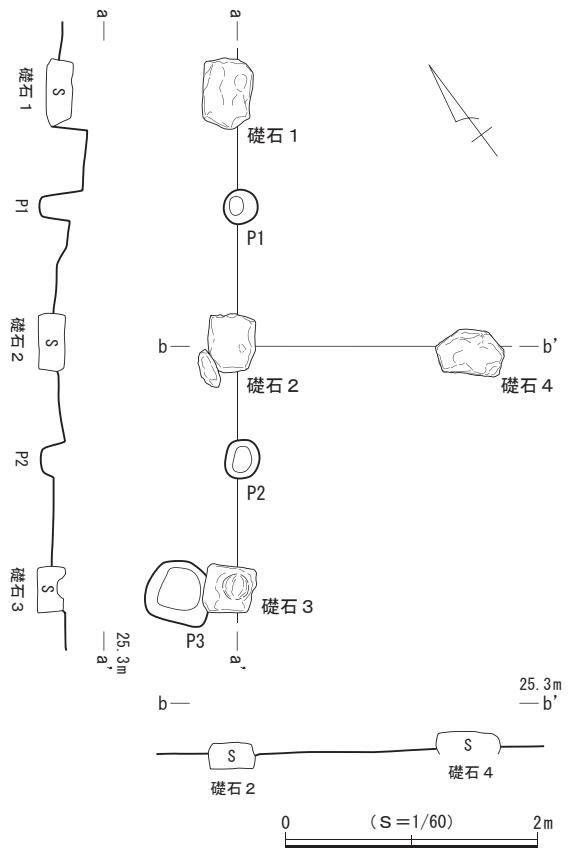


図17 第2面 礎石建物1

m、北東-南西方向は1.95mである。また、礎石1-P1-礎石2は1.05m等間、礎石2-P2-礎石3は97.5cm等間である。

各礎石は略方形に整形され、柱が据えられた位置は浅く窪んでいる。礎石の大きさは長さ40~56cm、幅36~40cm、厚さ約20cmを測り、上面の標高は24.93~25.05mである。ピットはP1・2が略円形、P3が隅丸方形で、規模は長軸27~52cm、短軸27~49cm、深さ15~34cmを測る。

遺物はピット2から、かわらけ1点が出土した。

(2) 溝状遺構

溝状遺構1 (図18)

調査区北西壁際に位置する。北東-南西方向に延び、両方向とも調査区外まで及んでいる。南西側で土坑12、ピット92・93と重複してピット93の西側を壊し、土坑12とピット92に壊されている。直線的に掘られた溝で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。溝の底面や上端には礫による護岸が部分的に認められる。使用されている石材は泥岩で、人頭大や柱状の割石である。検出した規模は現存長約5.6m、幅45cm、深さ25cmで、主軸方位はN-42°-Eを指す。底面の標高は24.89mを測る。

遺物はかわらけ5点、陶器1点、瓦1点が出土した。

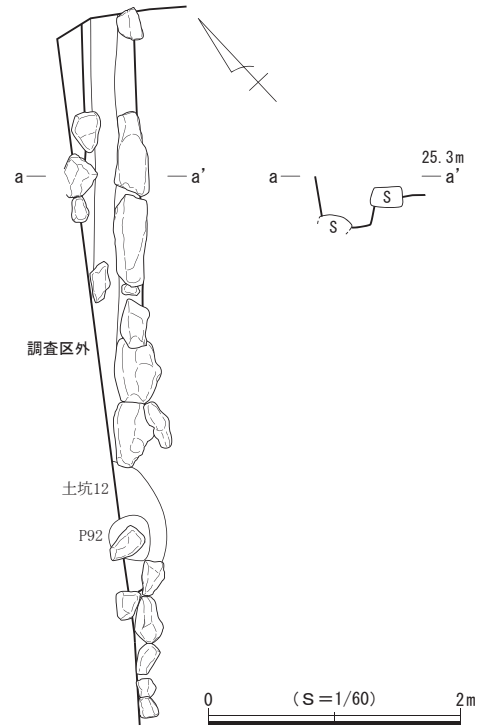


図18 第2面 溝状遺構1

(3) 土坑

土坑12 (図19)

調査区北西壁際の中央やや南寄りに位置する。北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。溝状遺構1、ピット27・92・93と重複して、溝状遺構1の南西側とピット93の北東側を壊し、ピット27に覆土の一部、ピット92に坑底面南側の一部が壊されている。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.15m、北西-南東方向の現存長35cm、深さ16cmで、坑底面の標高は24.74mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑13 (図19)

調査区中央の南東壁寄りに位置する。試掘調査により南壁の一部が失われている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸68cm、短軸現存長55cm、深さ12cmで、坑底面の標高は24.69mを測る。主軸方位はN-60°-Eを指す。

遺物はかわらけ4点が出土した。

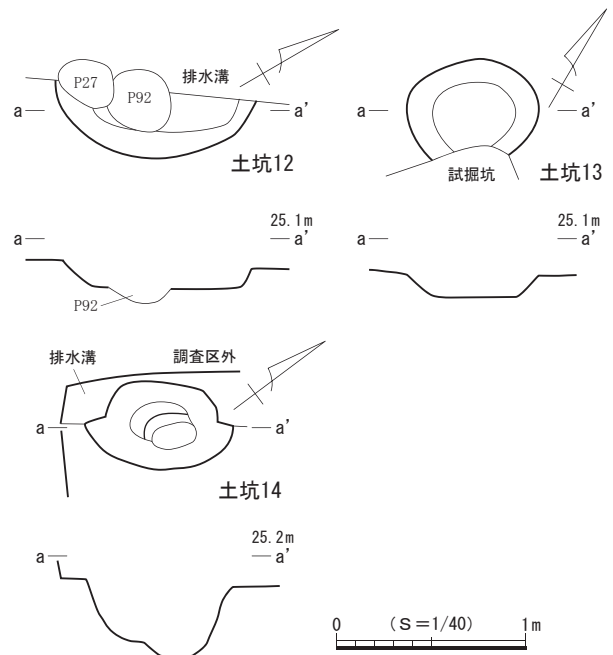


図19 第2面 土坑12~14

土坑14 (図19)

調査区南西隅に位置する。排水溝の掘削により、西側の一部が失われている。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は東側で段をもって開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。規模は長軸78cm、短軸46cm、深さ39cmで、坑底面の標高は24.67mを測る。主軸方位はN-36°-Eを指す。

遺物はかわらけ54点、金属製品3点が出土した。

(4) ピット

第3面では、16基検出された。多くが調査区中央付近にまとまっており、礎石建物1との関連が考えられるが、建物等の配置を明確に捉えられなかった。平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、略円形が多く認められる。規模は長軸20~52cm、深さ7~24cmを測る。

遺物は16基のピット中、11基からかわらけ、陶器、石製品などが出土し、詳細は出土遺物一覧表(表9)に掲げた。

(5) 第2面 構成土出土遺物 (図20)

第2面の基盤層である遺構構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、金属製品などが出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.0cmに復元される小形品、2は口径12.7cmに復元される中形品である。

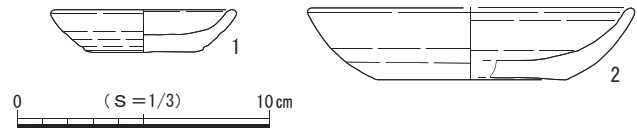


図20 第2面 構成土出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は18層上面および池状遺構の護岸施設上面で検出され、確認面の標高は24.6~24.8mを測る。18層は炭化物層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は池状遺構1カ所、ピット1基である(図21)。池状遺構1は調査区のほぼ全面で検出され、不定形かつ広範囲の掘り込みを有し、護岸施設を伴うことから池状遺構と認定した。ピットは調査区北側に位置し、池状遺構の護岸施設の一部を壊して構築されている。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、木製品、金属製品などが出土し、これらの年代観から本面13世紀中葉~後葉に属すると考えられる。

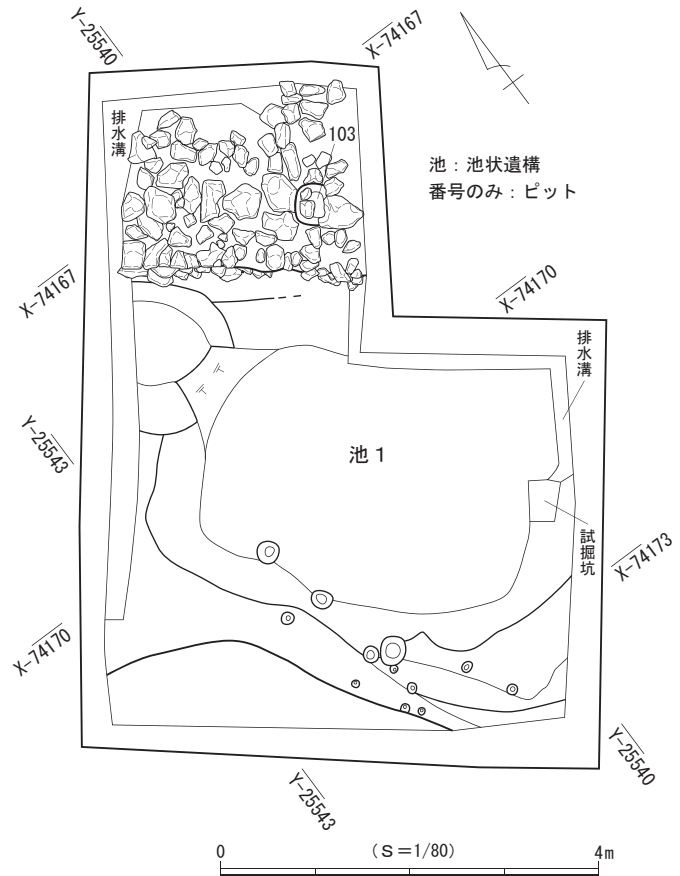


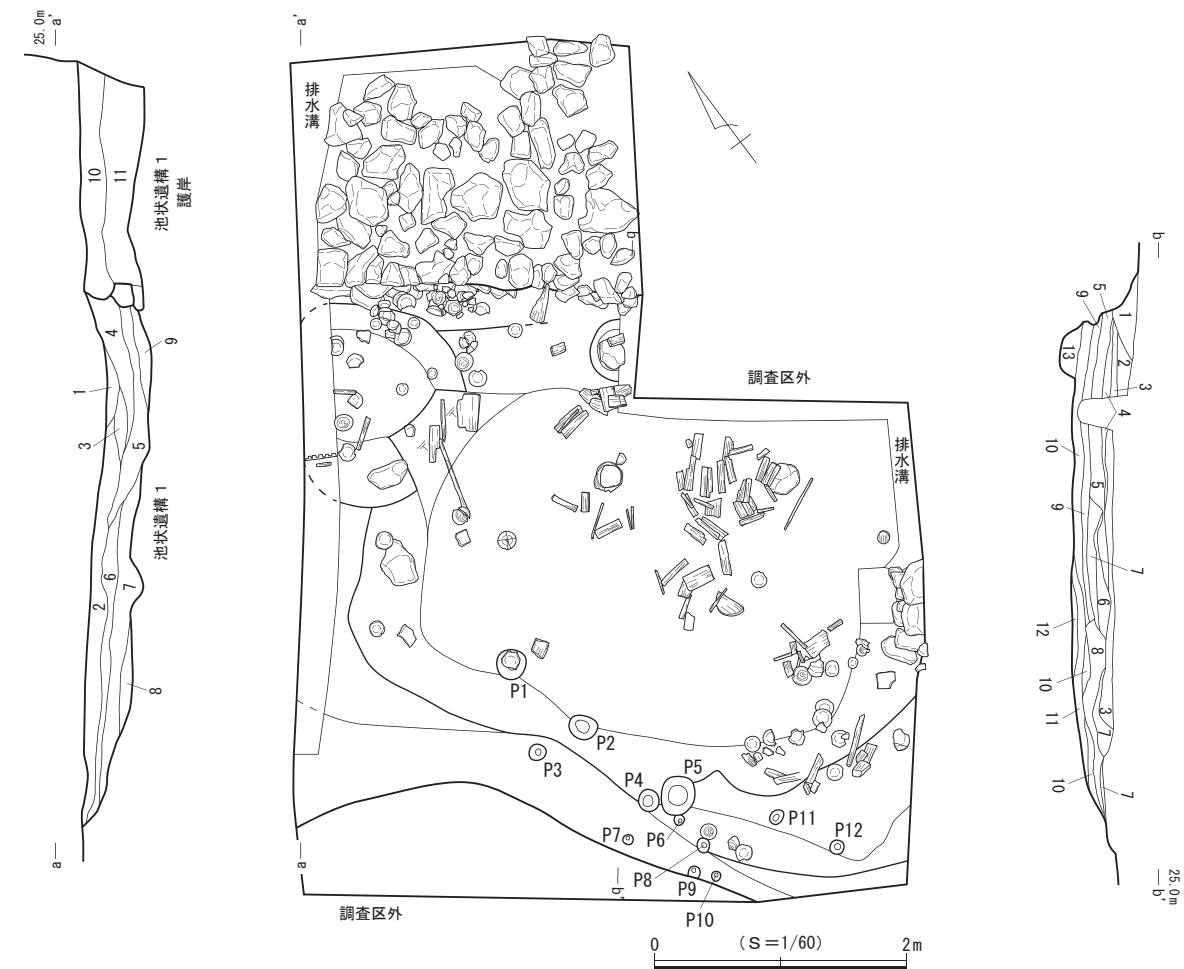
図21 第3面 遺構分布図

(1) 池状遺構

池状遺構 1 (図22)

調査区のほぼ全面から検出された。北・東・西側のいずれも調査区外に広がっている。ピット103と重複して護岸施設の一部が壊されている。検出された範囲での平面形は不整形を呈し、掘り込み部の規模は北西-南東5.0m、北東-南西の両岸が確認できる位置で約4.5mを測る。本址は、北側の護岸施設と中央一帯に広がる池、西壁際の中央やや北側に標高の高い導水施設と考えられる土坑状の掘り込み、南側に護岸施設を伴わない岸から構成されている。以下、各部の構造に触れながら説明していく。

調査区北側は北東-南西方向に直線的に構築された護岸施設である。人頭大の泥岩ブロックが壁面に貼りつけられており、また、岸端部から北側にかけても平面的に敷かれている。壁面はほぼ垂直に立ち上がり、高さ45cm前後で、護岸施設最上面の標高は24.78mを測る。調査区中央付近は池の底面で、もっとも深い位置での標高は24.15mあり、池状遺構の深さは中心部で65~75cmを測る。底面はほぼ平坦だが西側に向かって10cm前後高くなり、西壁際の中央やや北側は土坑状に掘り込まれていた。底面に高低



- a-a'
- 1層 暗灰粘質土 泥岩・暗褐色有機質土・炭化物・かわらけ片含む。粘性強い。
 - 2層 暗褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片多量に含む。
 - 3層 暗灰粘質土 泥岩粒・泥岩ブロックやや多く、炭化物多量に含む。粘性強い。
 - 4層 暗褐色粘質土 泥岩・炭化物・木片、かわらけ片多量に含む。粘性強い。
 - 5層 暗茶色有機質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片、木製品多量に含む。粘性強い。
 - 6層 暗茶色有機質土 泥岩・炭化物・かわらけ片少量含む。軟質で粘性強い。
 - 7層 暗灰粘質土 泥岩ブロックやや多く、炭化物少量含む。粘性強い。
 - 8層 暗灰粘質土 泥岩粒・砂粒・炭化物極微量含む。締まりあり。
 - 9層 暗灰粘質土 泥岩粒・炭化物・木製品、かわらけ片微量に含む。粘性強い。
 - 10層 大型泥岩層 炭化物・かわらけ片含む。
 - 11層 暗灰粘質土

- b-b'
- 1層 暗灰褐色粘質土
 - 2層 暗灰褐色粘質土
 - 3層 暗灰褐色粘質土 上面にかわらけ堆積。
 - 4層 暗灰褐色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
 - 5層 暗青灰色砂質土 泥岩ブロック・炭化物を敷いた層。
 - 6層 黒色炭層 泥岩ブロック・かわらけ片含む。
 - 7層 暗青灰色砂質土 泥岩ブロック・炭化物多量に含む。
 - 8層 灰黒色砂質土 泥岩ブロック多量、部分的に白色粉含む。
 - 9層 暗灰粘質土 木片多く含む。
 - 10層 茶褐色有機質土 木片多量に含む。
 - 11層 暗青灰色泥岩層 破碎泥岩を敷いた層。一時期の池底。
 - 12層 灰黒色粘質土 地山漸移層。

図22 第3面 池状遺構 1

差が認められることから、この土坑状の掘り込みは導水施設の可能性が考えられる。調査区南側は地山を掘り込んで造られた岸になっている。壁面は段をもって大きく開いており、傾斜は緩やかである。岸部の標高は24.80mを測る。壁面からは12基のピットが検出されており、張出施設あるいは横断施設に関わるものと推定される。ピットの平面形は略円形を呈し、規模は長軸7～31cm、短軸6～26cm、深さ21～31cmを測る。長径が15cm未満の小規模なものが多い。本址は埋没の途中で多量のかもらけや木製品が廃棄されており（a-a' 4・5層、b-b' 6層）、また、覆土最上層は多量のかもらけと泥岩ブロックを含む暗褐色粘質土（a-a' 2層、b-b' 2・3層）で埋め戻されていた。

出土遺物 (図23～33)

遺物は上層から、かもらけ3,296点、磁器1点、陶器23点、瓦質土器3点、瓦4点、石製品2点、金属製品1点が出土し、下層からはかもらけ2,009点、陶器16点、瓦質土器3点、瓦4点、石製品2点、金属製品1点が出土した。このうち上層出土として83点、下層出土として60点を層位ごとに図示した。また、木製品が上下層あわせて430点出土し、このうち87点を図示した。

上層出土遺物 (図23～25)

1～77はロクロ成形のかもらけであり、このうち1は口径4.2cmを測る極小品、2～18は口径7.0～8.0cmの小形品、19～47は口径12.0～12.8cmの中形品、48～53は口径12.5～13.1cmの中～大形品、54～76は口径13.0～13.8cmの大形品である。77は口径18.6cmに復元される特大品であり、内外面と破断面に煤が薄く付着する。また、52には口縁部直下に径0.5cm程の孔が焼成後に外面から穿たれ、66の口縁部には油煤が付着し灯明具としての使用が認められるほか、40・42・45・70の内面には焼成時の焼きムラがみられる。78～82は常滑産の陶器であり、このうち78・79は甕で、78の肩部外面には正格子の押印が施される。79は胴部下位から底部の破片である。80～82は片口鉢で、80はⅠ類、81・82はⅡ類であり、口縁部形状から81が6 a 型式、82が6 b 型式に比定される。83は凸面に斜格子の叩きが浅く施される平瓦である。

下層出土遺物 (図26・27)

1～57はロクロ成形のかもらけであり、このうち1～13が口径7.2～8.5cmの小形品、14～40が口径11.4～12.8cmの中形品、41～57が口径13.0～14.2cmの大形品である。58は常滑産の片口鉢Ⅰ類である。59は滑石製石鍋であり、外面に煤が付着する。60は現存長5.8cmを測る鉄釘である。

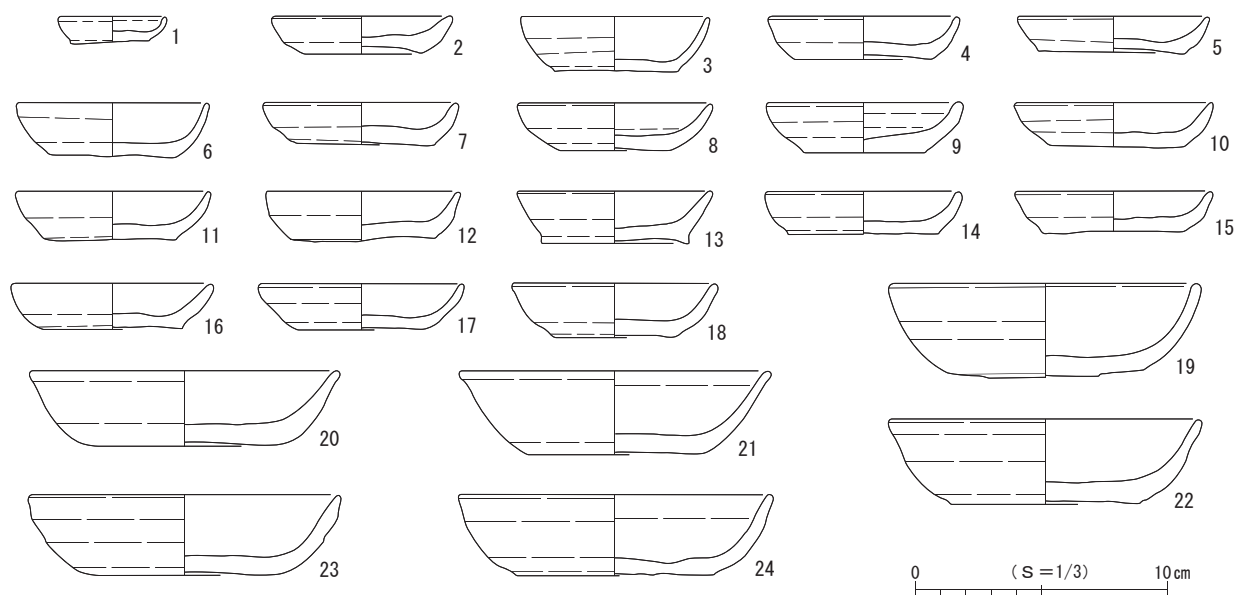


図23 第3面 池状遺構 1 上層出土遺物 (1)

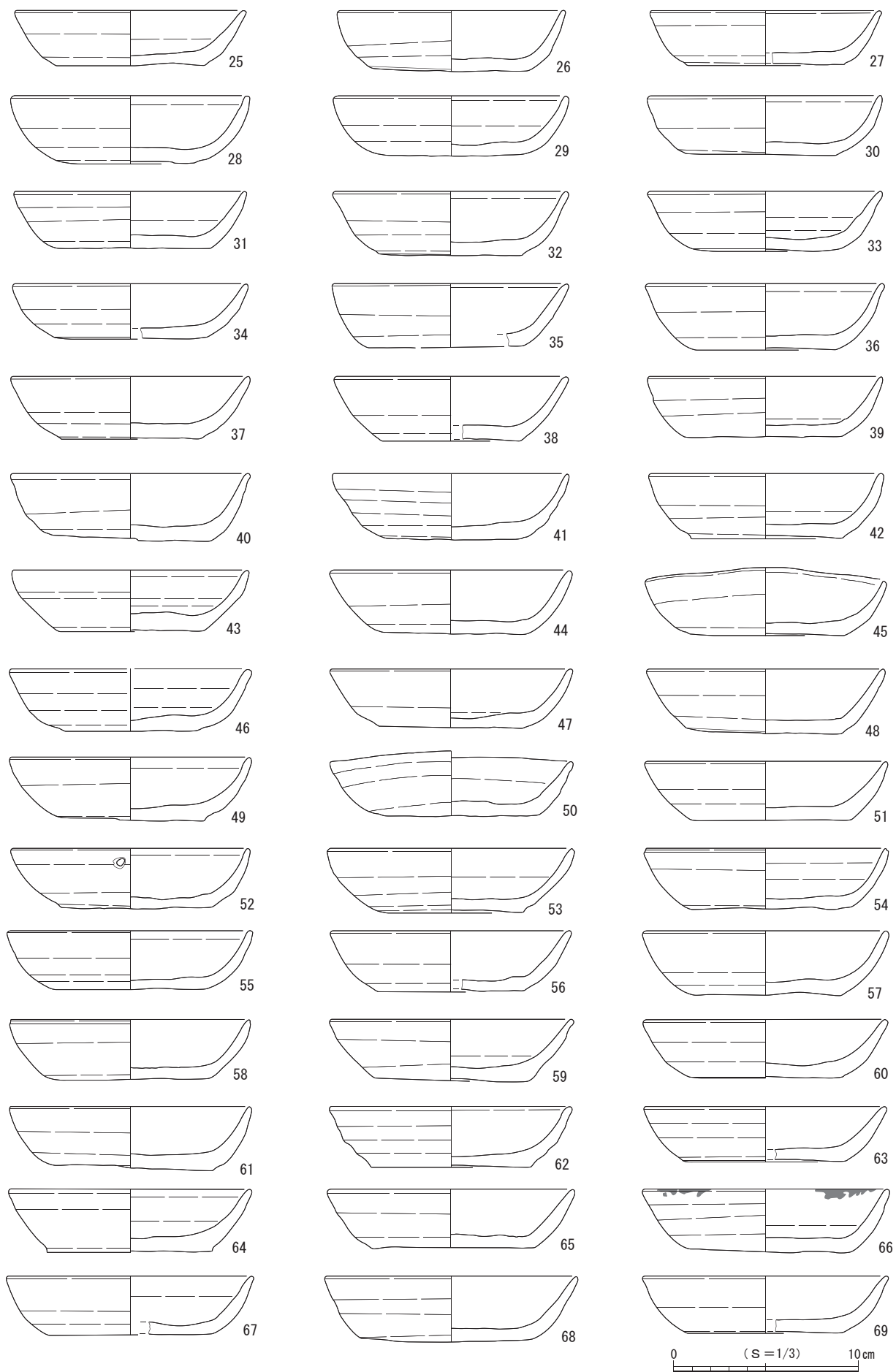


图24 第3面 池状遺構 1上層出土遺物(2)

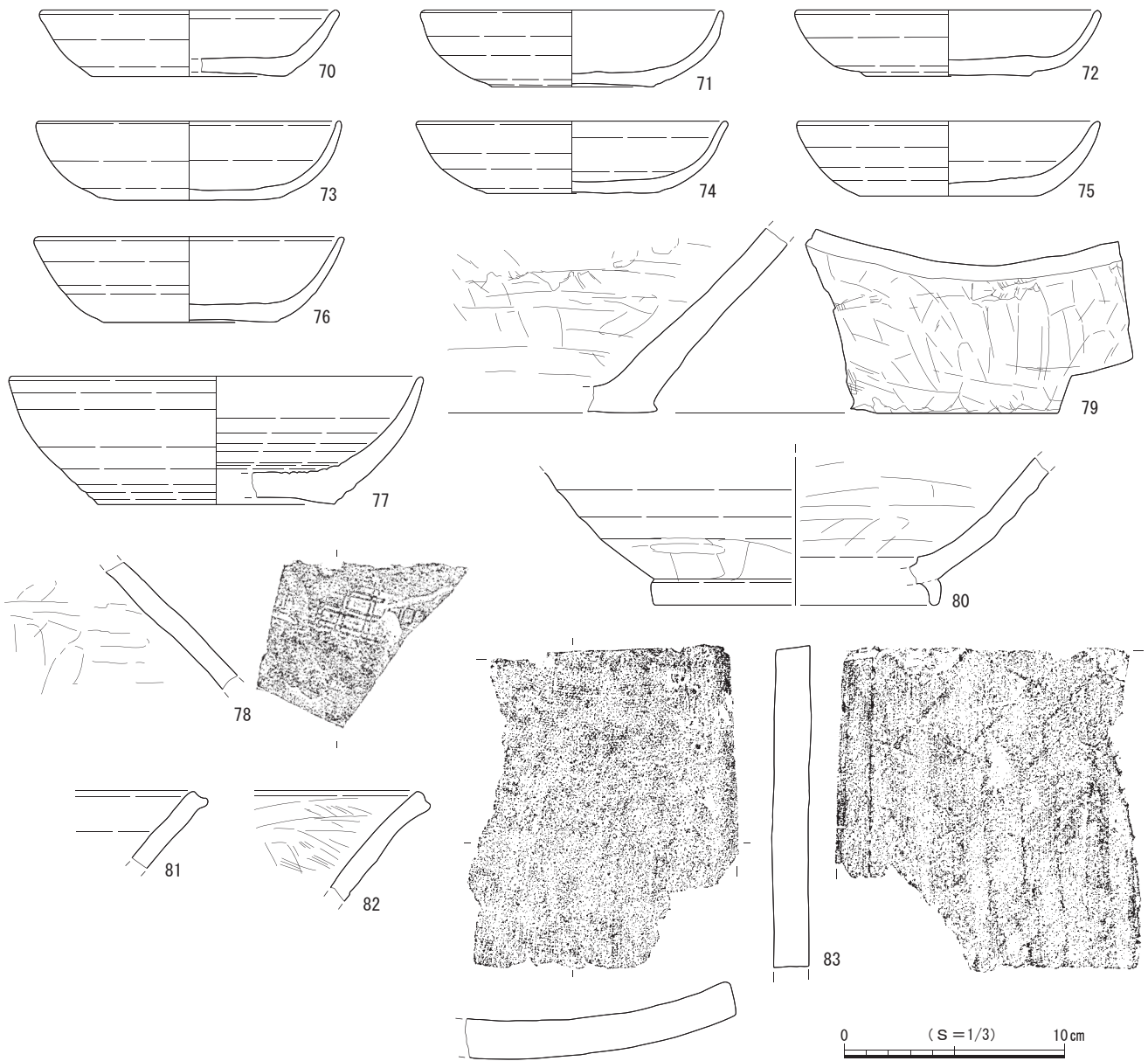


图25 第3面 池状遺構1上層出土遺物(3)

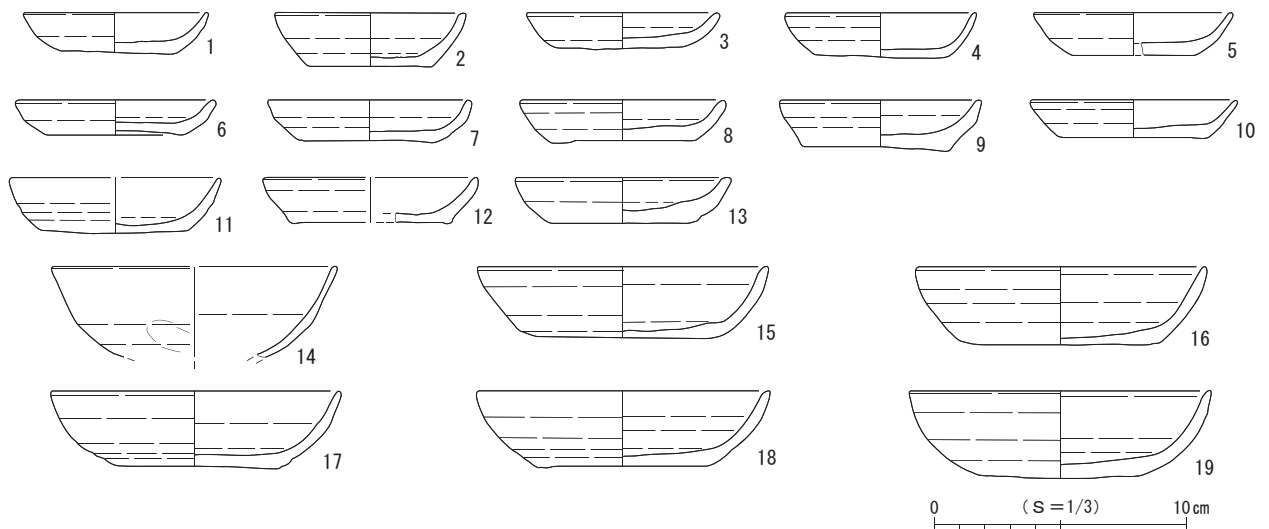


图26 第3面 池状遺構1下層出土遺物(1)

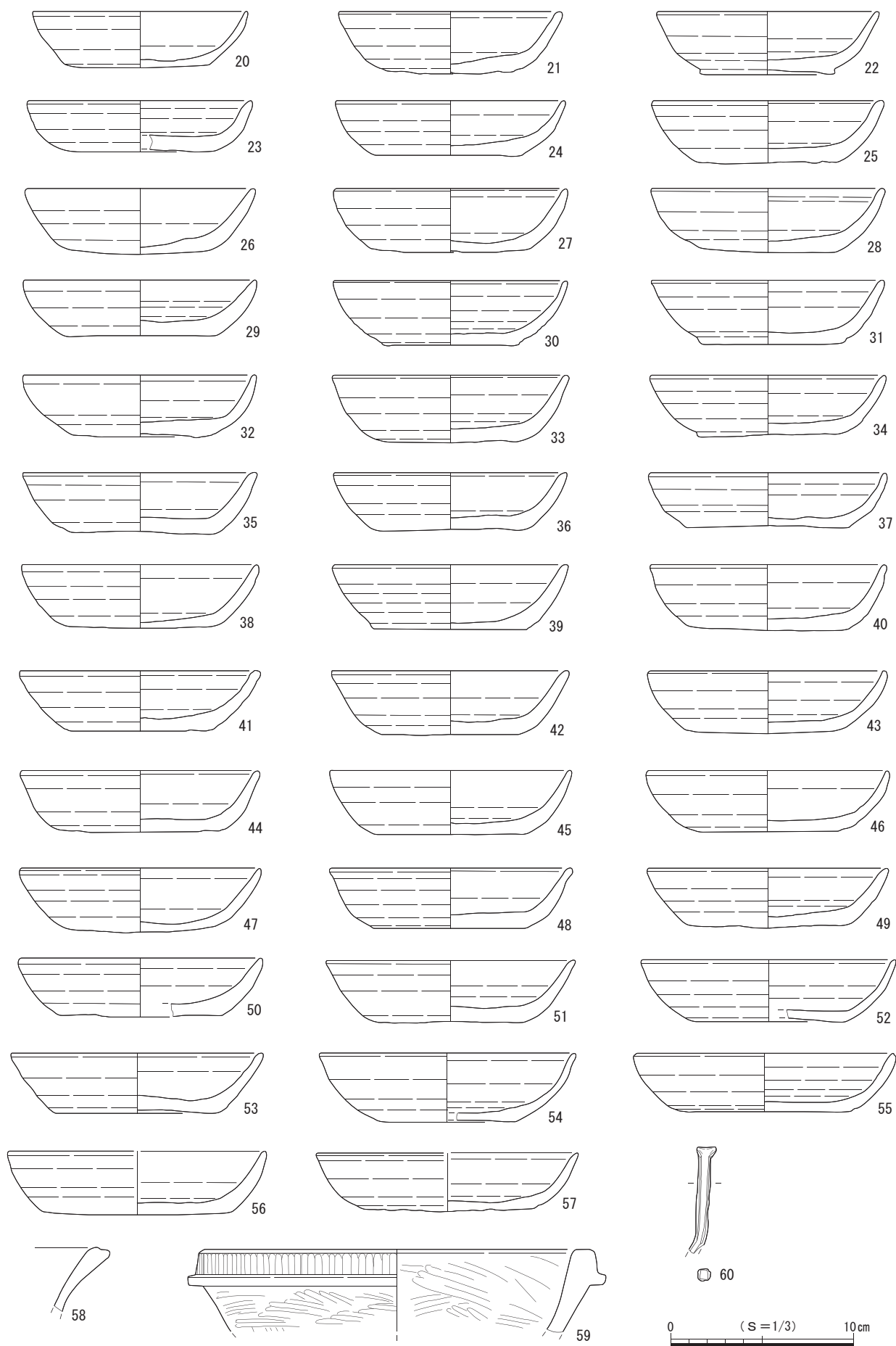


图27 第3面 池状遺構 1下層出土遺物(2)

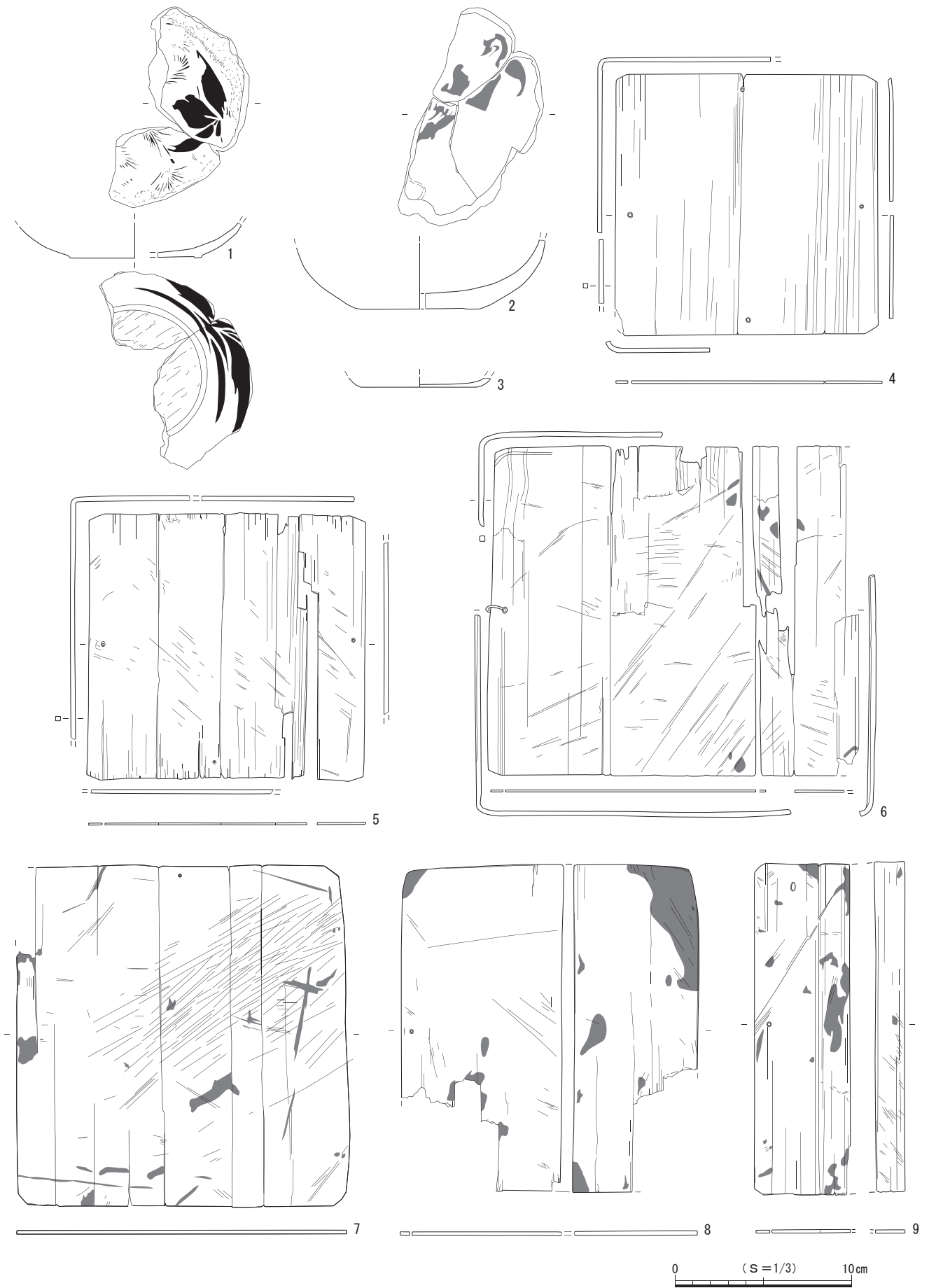


图28 第3面 池状遺構1 出土木製品(1)



图29 第3面 池状遺構1 出土木製品(2)

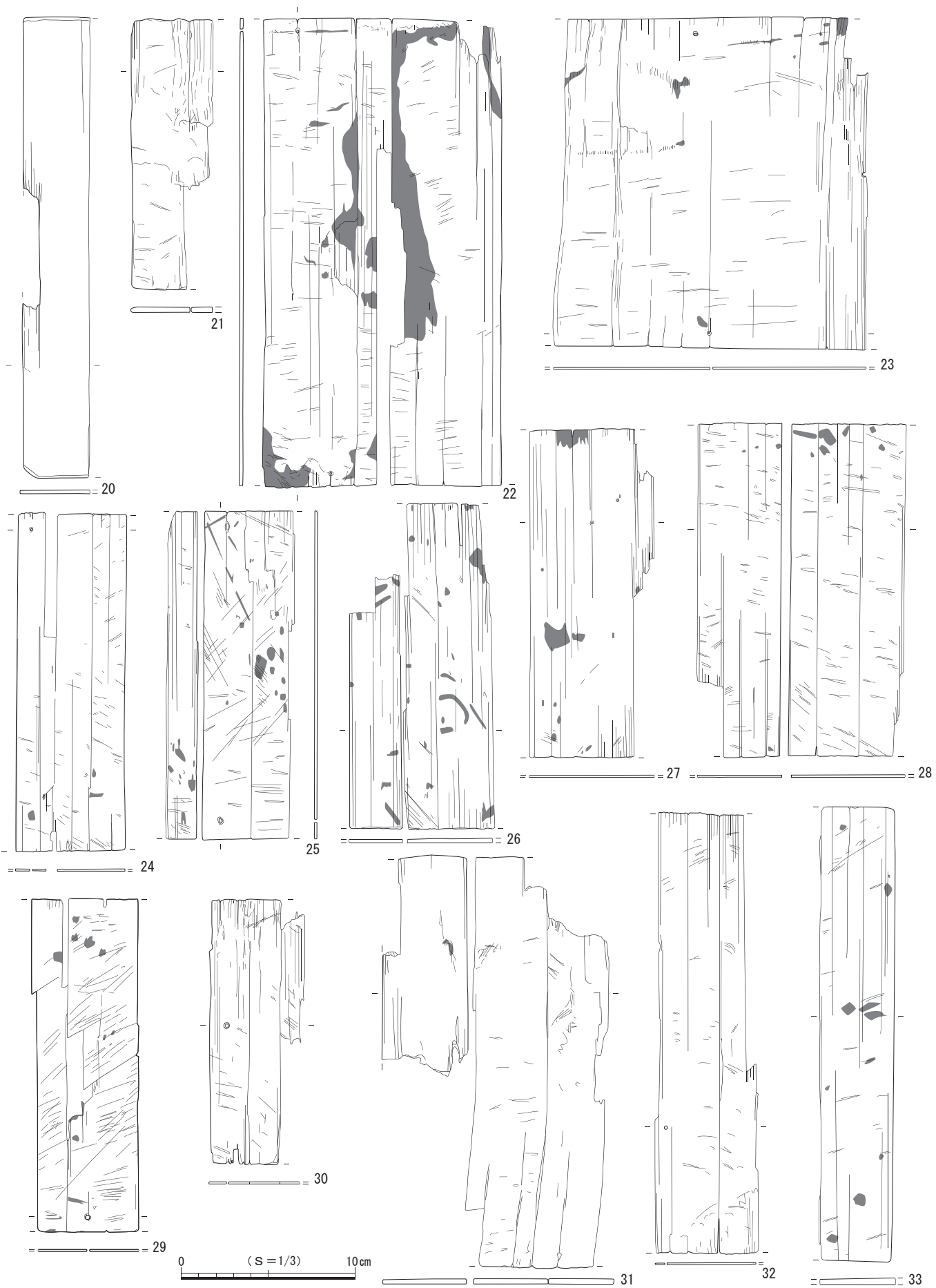
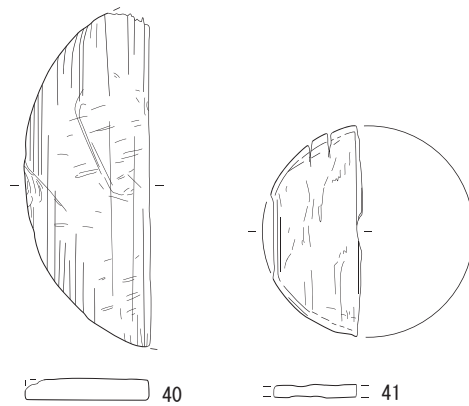
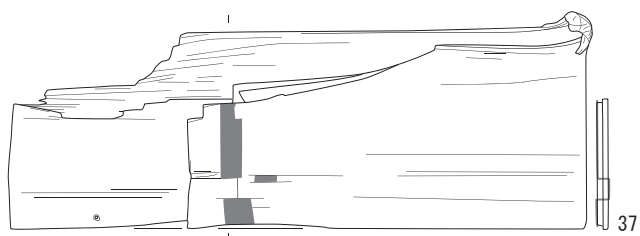
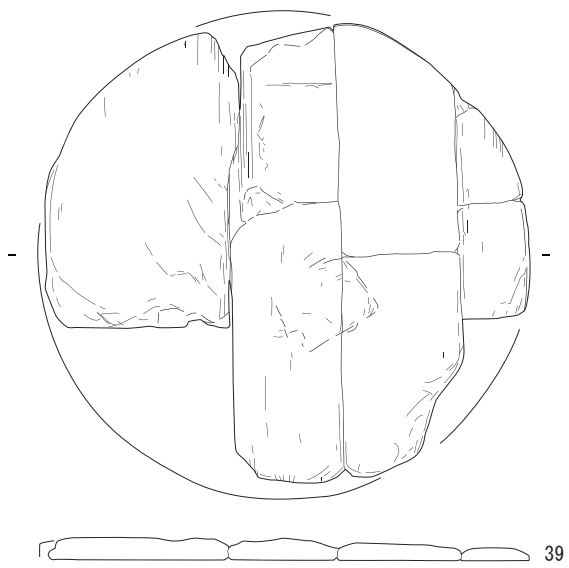
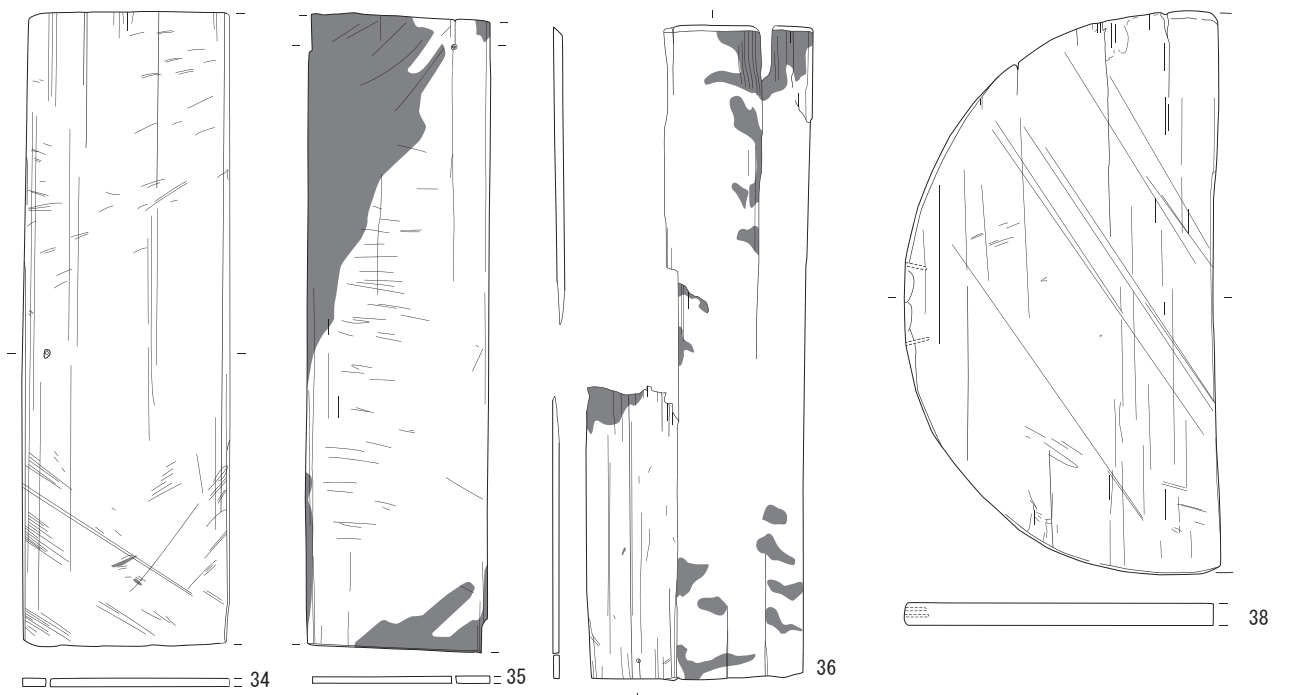


图30 第3面 池状遺構 1 出土木製品 (3)



0 (S=1/3) 10cm

图31 第3面 池状遺構1 出土木製品(4)

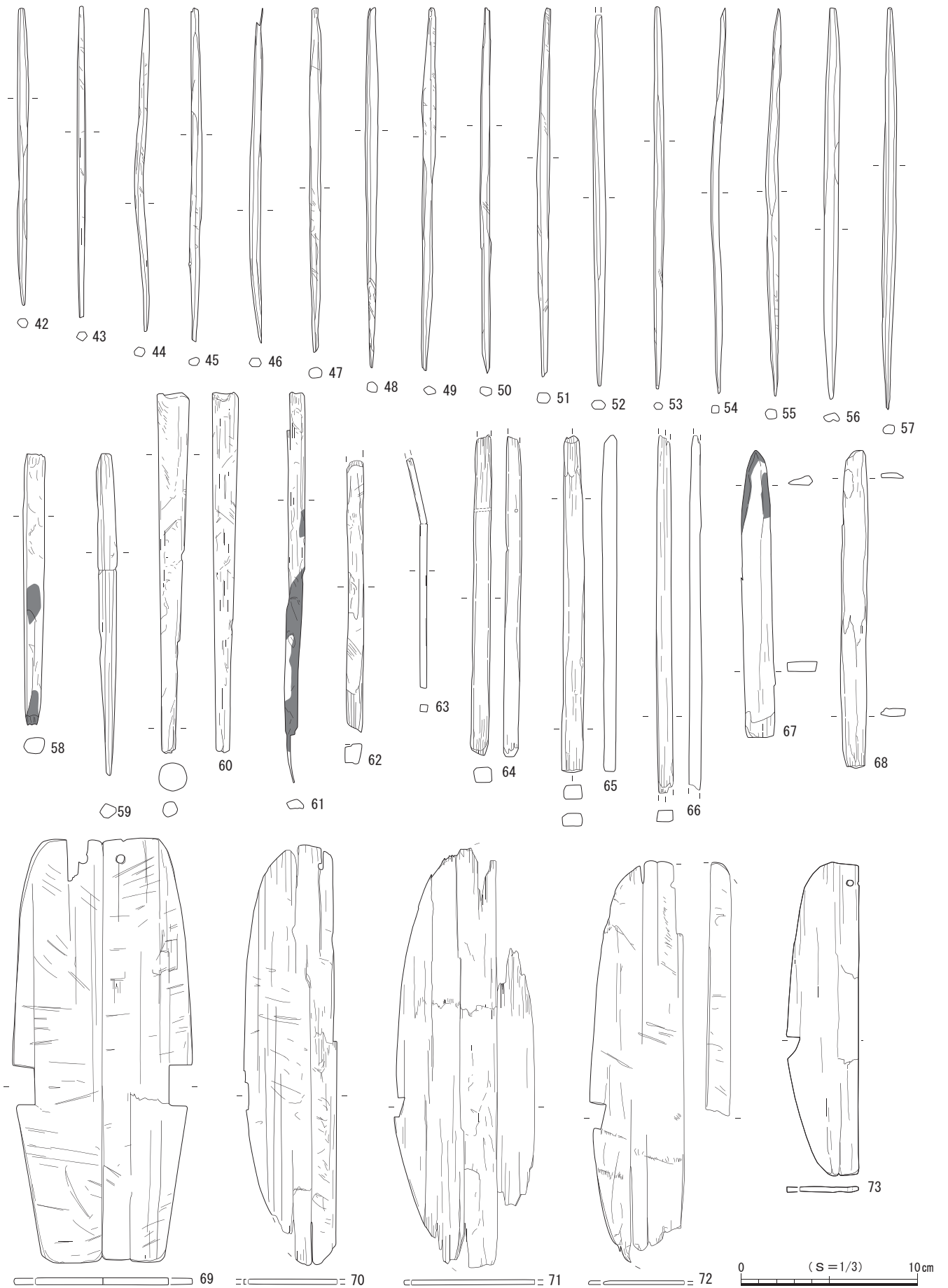


图32 第3面 池状遺構 1 出土木製品 (5)

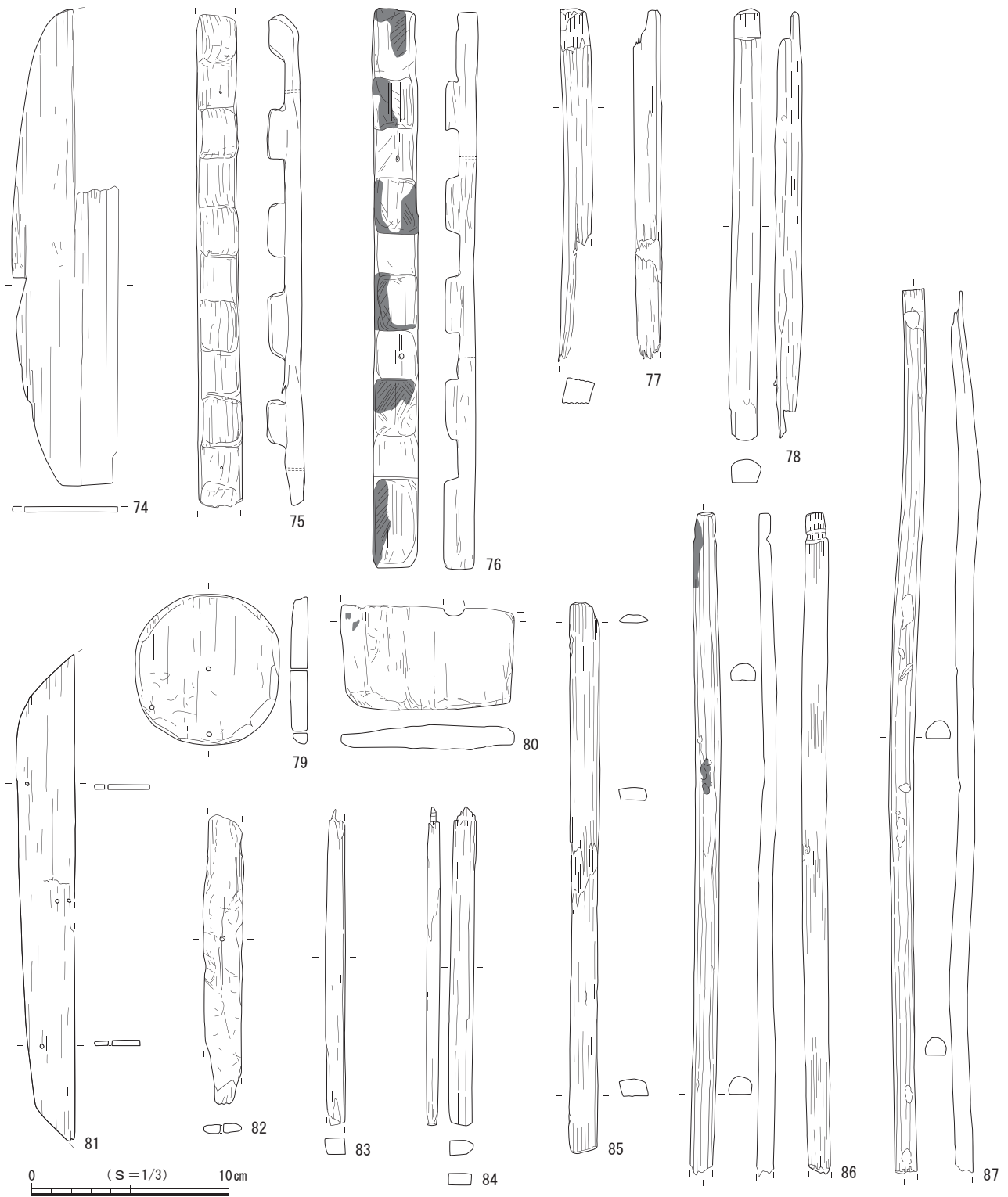


図33 第3面 池状遺構1出土木製品(6)

木製品(図28~33)

池状遺構からは各種の木製品が多量に出土した。ここでは上下層あわせて430点出土した木製品のうち、87点を一括して図示した。

1~3は漆器である。1は輪高台の椀で、内外面黒漆地の上に赤色漆を用いて文様が手描きされており、内面には笹と葉が、外面には土坡と葉が施される。2は無高台に挽かれ、内外面は黒漆地が施された無文の椀である。3も2と同様に無高台に挽かれた黒漆地で無文の皿である。4~36は折敷であり、

このうち4～6は縁が遺存し、4・5は四辺に小孔が穿たれる。4～21は隅部が遺存し、いずれも隅丸加工が施される。37～41は曲物である。このうち37は側板部分が全周し、桜皮で綴じられた接合部が遺存する。38～41は底板で、38の側縁には小孔が2ヵ所観察される。41は径8.4cmの小形品である。42～57は箸状、58～61は串状、62～66は棒状、67・68は篋状を、それぞれ呈する木製品である。69～74は草履の芯であり、このうち69は先端部と側縁が直線的、70～73は先端部～側縁が曲線的、74は先端部が直線的、側縁が曲線的な形状を呈する。また、側縁の切り取り形状は69・70が方形、71・72が平行四辺形、73・74が三角形を呈する。75～78は建具と推定した木製品であり、このうち75・76は角材の1面に凹凸状の加工が等間隔に施された部材であり、藪戸の組子であろうか。凹部のうち2ヵ所には木釘穴とみられる小孔が貫通している。77・78は角棒状の端部に仕口加工が施された部材である。79～87は用途不明の木製品であり、このうち79は円板状を呈し、側縁には勾配を付けた面取り加工が施され、中心部と側縁付近に木釘を打ち込んだ小孔が残る。80は厚板材に円孔が穿たれる部材の破片。81は表面に4ヵ所の小孔が穿たれた薄板。82は遺存部分の中心付近に小孔が穿たれた短冊状の板材。83・84は断面方形の棒状製品で、84の端部が三角形に加工される。85は断面方形の先端部がかまぼこ状に加工された棒状製品。86・87は断面かまぼこ形の棒状製品であり、86の端部には刳り加工が施される。

(2) ピット

第3面では、1基を検出した。調査区北側に位置しており、池状遺構の護岸施設を壊して構築されている。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸44cm、短軸37cm、深さ17cmを測る。

遺物はピット103からロクロ成形のかわらけ9点が出土した。

(3) 第3面 遺構外出土遺物 (図34)

第3面では遺構外から、かわらけ、陶器、土器が出土し、このうち10点を図示した。

1～9はロクロ成形のかわらけで、このうち1は口径7.4cmを測る小形品であり、2～8は口径10.2～12.8cmの中形品、9は口径13.1cmを測る大形品である。10は土器(土師質)で、胴部(肩部)最大径17.6cmに復元される壺と推定したもので、肩部から胴部内外面は回転ナデで成形される。底部処理は回転糸切離しとみられるが残存部位が少ないため不明瞭である。

(4) 第3面 構成土出土遺物 (図35)

第3面の遺構基盤層となる構成土からは、かわらけ、磁器、陶器、瓦、石製品、木製品、金属製品などが出土し、このうち23点を図示した。

1～20はロクロ成形のかわらけであり、このうち1は口径4.0cmの極小形品、2～10は口径7.2～7.9cmの小形品、11～19は口径10.6～12.8cmの中形品、20は口径14.0cmの大形品である。3・6の内外面には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。21は瀬戸産の卸皿である。22・23は折敷と類推される薄板材である。

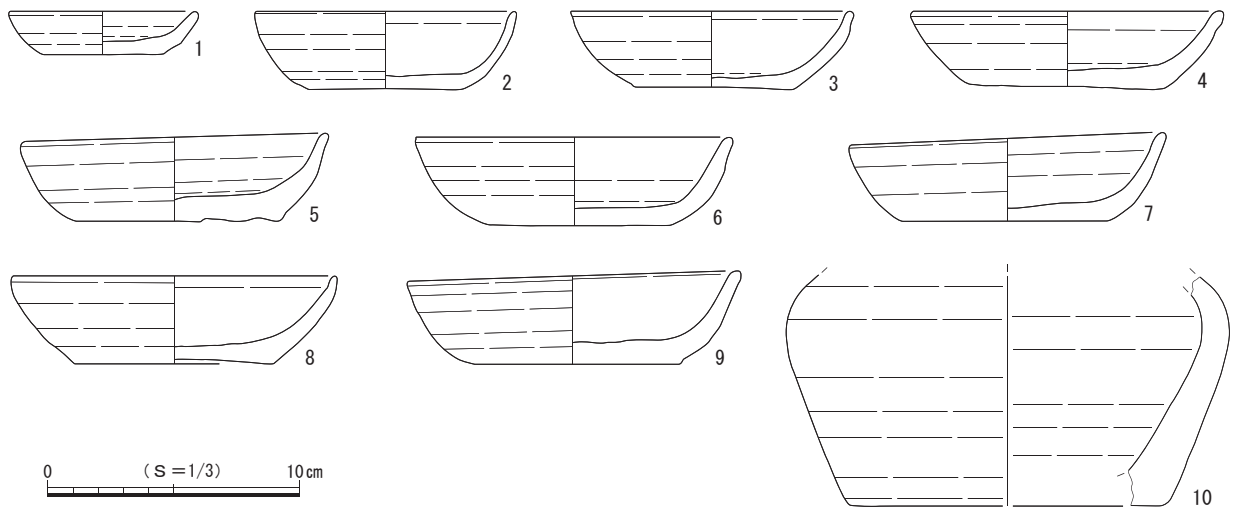


图34 第3面 遺構外出土遺物

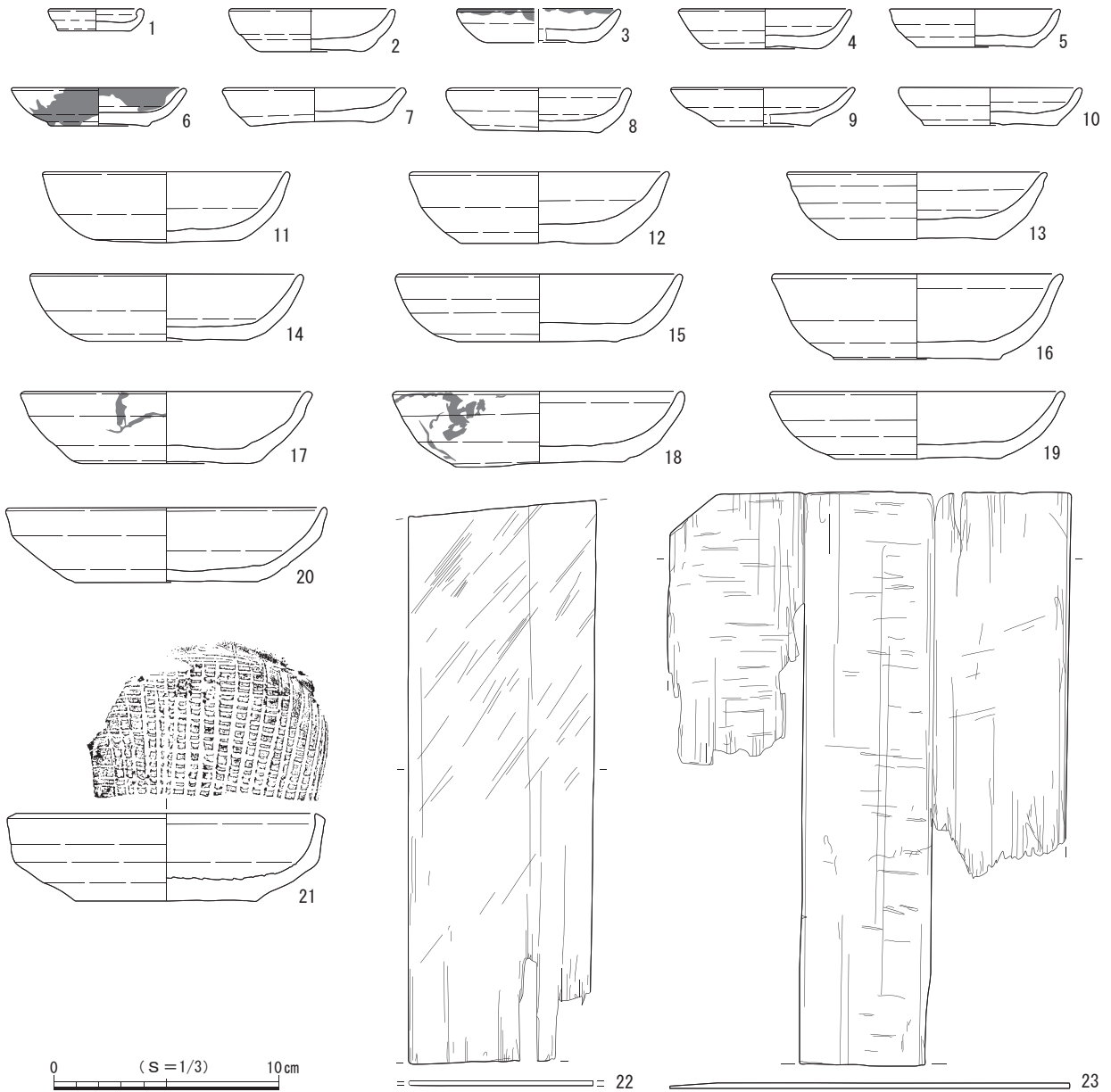


图35 第3面 構成土出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は22層上面で検出され、確認面の標高は24.5m前後を測る。22層は少量の泥岩粒と炭化物を含む暗灰色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎板建物1棟、土坑4基、ピット1基である(図36)。調査区中央部は、池状遺構1の掘り込みにより失われている。礎板建物は調査区西壁と南壁に沿って位置し、土坑は3基が調査区北側、1基が南壁際に分布し、いずれも調査区外に及んでいる。ピットは調査区南側に位置している。

遺物はかわらけ、陶器、土器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土し、これらの年代観から本面は13世紀後葉に属すると考えられる。

(1) 礎石・礎板建物

礎板建物2(図37)

調査区中央に位置していたと推定される。調査区内で捉えられた遺構は、北東-南西方向1間、北西-南東方向2間を基本とした建物配置である。現状では建物の規模は不明であるが、建物は東西および南方向に広がる可能性がある。調査区中央一帯に池状遺構1の掘り込みがあり、本址もその掘り込みによって建物の中央付近が壊されていると推定される。検出されたピットは4基で、そのすべてに礎板が据えられていた。調査区の制約から建物全体の空間構成は判然としないが、北西-南東方向を主軸方向としてみると、N-49°-Wを指す。

建物の規模は北東-南西方向の現存長4.20m、北西-南東方向の現存長4.20mを測る。北西-南東

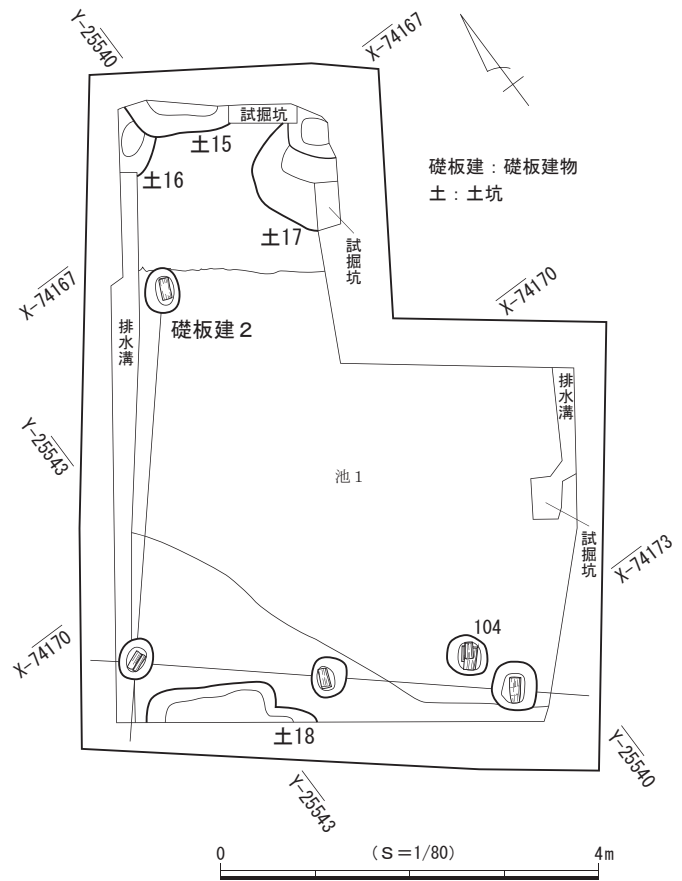


図36 第4面 遺構分布図

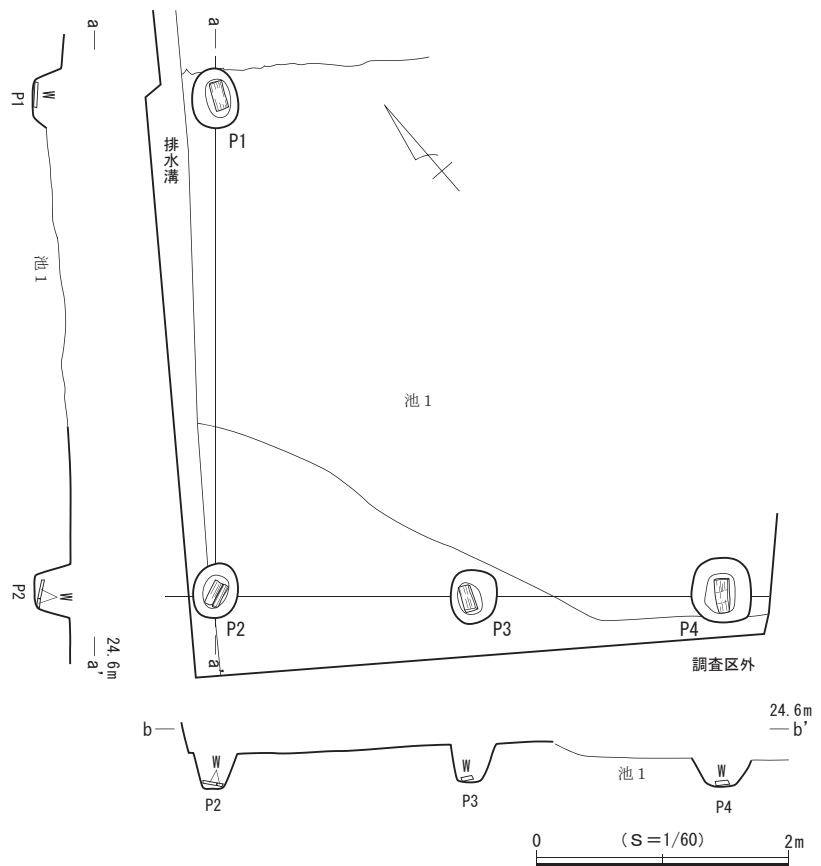


図37 第4面 礎板建物2

方向の柱間寸法は2.10m等間である。

各ピットの平面形は略円形ないし楕円形を呈し、規模は長軸42～51cm、短軸36～48cm、深さ22～40cmを測る。礎板の大きさは、長さ19～26cm、幅5～10cm、厚さ2～3cmを測り、礎板上面の標高は24.15～24.21mである。礎板はP 1・3・4から各一枚で、P 2のみ幅5cmと7cmの礎板が二枚並べられていた。遺物はP 3からロクロ成形のかわらけ1点が出土した。

(2) 土 坑

土坑15 (図39)

調査区北隅に位置する。北側が調査区外に及び、南東側の一部が試掘調査によって失われているため、全容は明らかでない。西側で土坑16と重複して北東壁を壊している。底面は凹凸をもち、東側に向かって高くなる。壁は開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。検出された範囲での規模は東西現存長1.13m、南北現存長39cm、深さ39cmで、坑底面の標高は23.94mを測る。

出土遺物 (図38)

遺物はかわらけ18点、陶器1点、瓦3点、木製品71点が出土し、このうち2点を図示した。

1は口径13.2cmに復元される大形のロクロ成形かわらけである。2は現存長9.4cmを測る平瓦であり、凸面は側縁に平行するナデで仕上げられる。

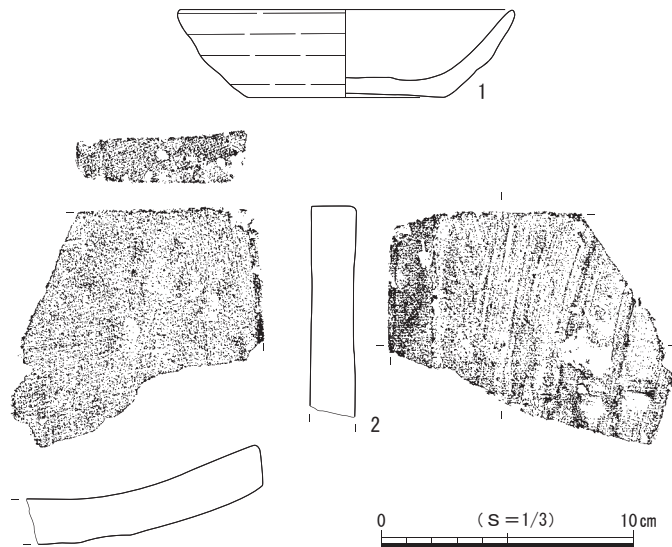


図38 第4面 土坑15出土遺物

土坑16 (図39)

調査区北隅に位置する。北・西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。北東側で土坑16と重複して北東壁が壊されている。検出された範囲では、平面形は楕円形を呈すると考えられ、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長69cm、短軸現存長43cm、深さ12cmで、坑底面の標高は24.23mを測る。

遺物は木製品1点が出土した。

土坑17 (図39)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。底面は狭く、ほぼ水平である。壁は北側の一段深いピット状の掘り込みから外側に向かって大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形と皿状を組み合わせた形態を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長1.34m、短軸現存長90cm、深さ37cmで、坑底面の標高は23.79mを測る。

遺物はかわらけ4点、木製品が3点出土した。

土坑18 (図39)

調査区南西壁際の西隅寄りに位置する。南側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検

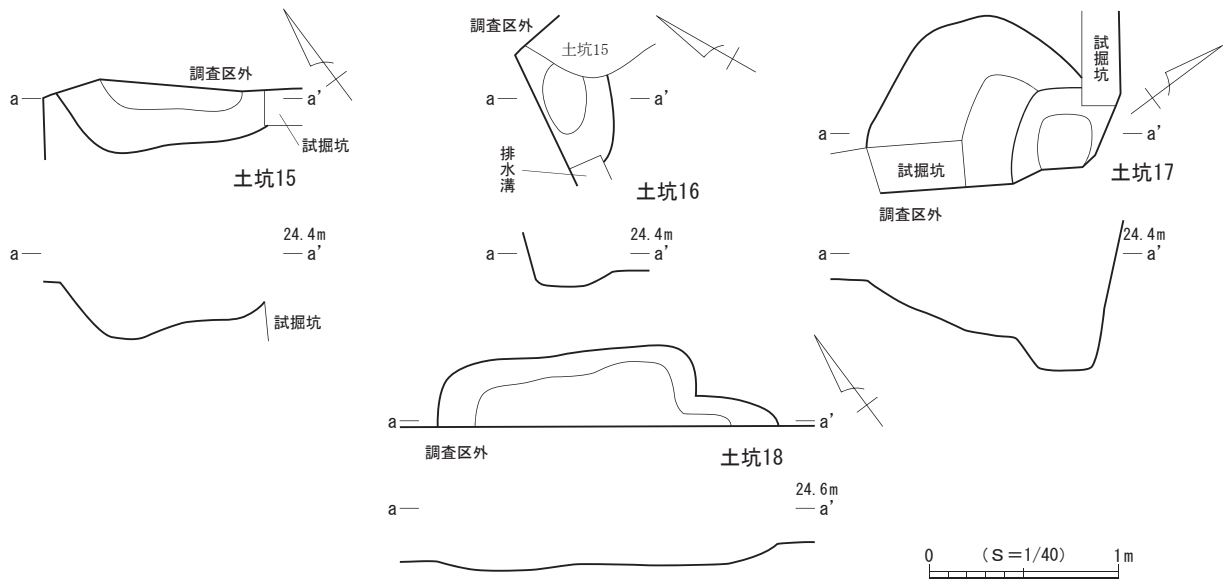


図39 第4面 土坑15～18

出された範囲では、平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、東壁側が一段外側に広がっている。底面はわずかに凹凸がみられる。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。検出された範囲での規模は北西－南東方向の現存長1.80m、北東－南西方向の現存長43cm、深さ10cmで、坑底面の標高は24.27mを測る。

遺物はかわらけ23点、陶器3点、瓦1点、木製品2点が出土した。

(3) ピット

第4面では、1基を検出した。調査区南東隅に位置し、礎板が据えられている。

以下に図示し、詳述する。

ピット104 (図40)

調査区南東隅付近に位置する。平面形は略円形を呈し、規模は長軸43cm、短軸42cm、深さ26cmで、底面に3枚の礎板が重ねて据えられていた。礎板の大きさは、長さ15～23cm、幅7～12cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は24.15mである。本址は礎石建物2のP4に近接し、礎板上面の標高がほぼ同じであることから、関連性も指摘できる。

遺物は出土しなかった。

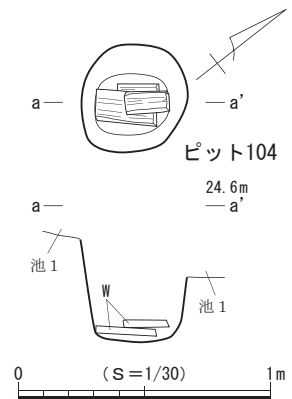


図40 第4面 ピット104

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図41)

第4面の遺構基盤層となる構成土からは、かわらけ124点、陶器6点、土器1点、瓦質土器1点、木製品26点などが出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径6.7～8.0cmを測る小形品である。

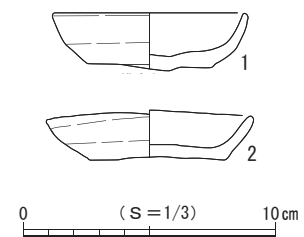


図41 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は24層上面で検出された。確認面の標高は24.4m前後を測る。24層は泥岩粒と微量の炭化物を含む黒灰色粘質土で、古代の堆積土層である。本調査地点で確認された最下面である第5面の遺構は、この層を掘り込んで構築されており、中世でも最古段階の時期と考えられる。検出した遺構は溝状遺構1条である(図42)。

遺物はかわらけ、陶器などが出土したが、これらの年代観から本面は13世紀中葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構2 (図43)

調査区中央に位置する。北東-南西方向に延びる溝で、南側は調査区外まで及び、北側は土坑17と重複して壊されている。調査区中央付近では池状遺構1の掘り込みによって上端が壊されている。直線的に掘られた溝で、壁は開いて立ち上がり、断面形はU字状を呈する。検出した規模は、現存長約6.0m、幅77cm、深さ48cmで、主軸方位はN-41°-Eを指す。底面の標高は24.04mを測る。

出土遺物 (図44)

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢Ⅱ類であり、口縁部形状から5型式と類推される。

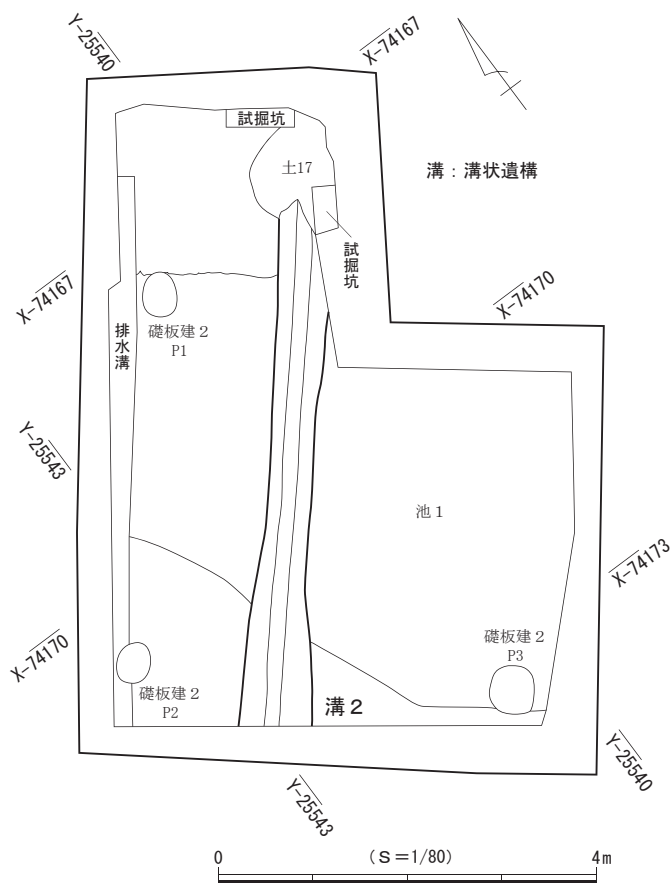


図42 第5面 遺構分布図

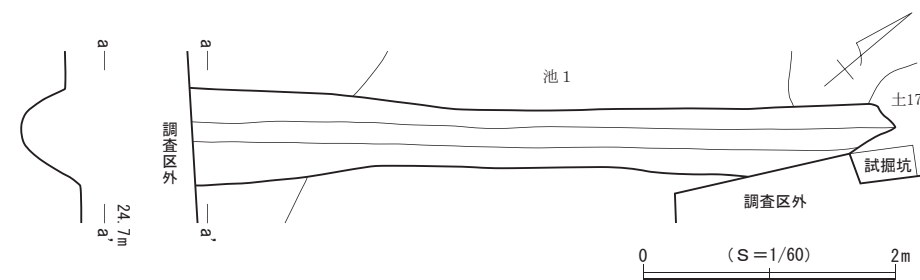


図43 第5面 溝状遺構2

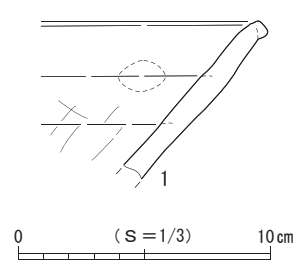


図44 第5面 溝状遺構2 出土遺物

第四章 まとめ

山ノ内上杉邸跡 (No.170) は、鎌倉市の北部に位置し、建長寺方面から大船方面に開けた開析谷から明月谷にかけての範囲が包蔵地として周知されている。今回の調査地点は遺跡範囲の南東側にあたり、正法寺跡 (No.172) にほど近い。市内でも山ノ内地区の発掘調査事例はきわめて少なく、本遺跡の発掘調査は本地点が初めてである。

今回の調査では遺構確認面を5面検出した。調査面積が約33㎡と狭小であるにもかかわらず、確認面によっては多くの遺構が密度高く分布していることが把握された。いずれも中世に属する遺構であり、その内訳は礎石・礎板建物2棟、池状遺構1ヵ所、溝状遺構2条、土坑18基、ピット104基である。出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して27箱に上った。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと (第1～5面) にまとめることとする。

〈第1面〉

第1面では、土坑11基、ピット86基を検出した。これらは調査区全体に密度高く分布しており、時期は出土遺物の様相から14世紀前葉と推定される。本面は関東管領山ノ内上杉氏の居住時期と重なるが、発見遺構は土坑とピットのみであり、具体的な関連性については明らかでない。本面で注目される出土遺物は、遺構外から出土した刀子 (図14-20) である。意図的に折り曲げられており、何らかの呪術的意味合いをもつのかも知れない。

〈第2面〉

第2面は礎石建物1棟、溝状遺構1条、土坑3基、ピット16基を検出した。このうち礎石建物1は、調査区中央から南北方向および東側に展開しており、北東-南西に2間以上、南東方向に1間以上の規模を有し、北西側については、調査区際に軸線方向を同一にする溝状遺構1が存在することから、検出した礎石列が建物の北西端部に当たるものと推定される。また、ピット16基のうち、11基が調査区中央部にまとまっており、礎石建物1の範囲と重なることから相互に関連性をもつものと考えられた。時期は出土遺物の様相から13世紀末葉～14世紀前葉に属すると考えられ、第1面と同様に本面も山ノ内上杉氏の居住時期と一部重なるが、発見した建物や溝が具体的に関連するかは明らかでない。

〈第3面〉

第3面では、苑池とみられる池状遺構が調査区のほぼ全面から検出された。遺構は北側の護岸施設、中央一帯に広がる池、西側に導水施設と考えられる土坑状の掘り込みなどで構成されており、岸から池底までの深さは65cm前後を測る。池は埋没の過程で多量のかかわりが廃棄されており、最上層は多量のかかわりと泥岩ブロックを含む暗褐色粘質土で埋め戻されていた。本面の時期は13世紀中葉～後葉と考えられる。

〈第4面〉

第4面では、柱穴4基からなる礎板建物1棟、土坑4基、礎板をもつピット1基が出土した。礎板建物は北東-南西方向1間、北西-南東方向2間を基本とした建物配置であり、柱間寸法は2.1m等間である。第3面の池状遺構によって壊されていると考えられるが、東西および南方向に広がる可能性がある。

また、土坑4基は礎板建物に隣接した北側で重複して分布しており、建物に付随した廃棄穴とも捉えられよう。

〈第5面〉

第5面では、北東-南西方向に延びる溝状遺構を1条検出した。出土遺物はかわらけと常滑産片口鉢Ⅱ類の2点のみであり資料に乏しいが、年代観は13世紀第2四半期頃に比定されることから、本面の時期を第2四半期を中心とする13世紀中葉と捉えておきたい。

以上各面についてみてきたように、今回の調査では13世紀中葉頃～14世紀中葉頃にかけての遺構・遺物を検出したが、14世紀後半以降の資料は希薄であり、山ノ内上杉氏との関連性をうかがえなかった。今後関東管領屋敷関連遺構の究明は、引き続き課題となろう。

最後に、今回の調査では、第3面を中心に多量のかかわりが出土したことが特徴としてあげられる。出土したかわらけの総破片点数は17,634点を数え、全出土遺物の99%に達し、鎌倉幕府中枢域の値に匹敵する高さであることも、遺跡の性格を考える上で注意される点と考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 神奈川県図書館協会郷土資料編集委員会 1991『神奈川県皇国地誌相模国鎌倉郡村誌』神奈川県郷土資料集成第十二輯
- 鎌倉市教育委員会 1997『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』山ノ内道周辺遺跡発掘調査団
- 手塚直樹 1997『神奈川県・鎌倉市 保寧寺跡-第2次調査-』保寧寺遺跡発掘調査団
- 永田史子・齋藤修佑 2018「徳泉寺跡(No.173)山ノ内字東管領屋敷168番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会
- 福島正史ほか 2012『山ノ内上杉邸跡発掘調査報告書-山ノ内字東管領屋敷180番1外-』株式会社新技術コンサル
- 馬淵和雄 2012「山ノ内上杉邸跡(No.170)の発掘調査-山ノ内字東管領屋敷179番39地点-」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 宮田 真・滝澤晶子 2010「円覚寺旧境内遺跡(No.434)山ノ内字西管領屋敷377番1」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書26』平成21年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子 2010「安国寺(No.174)の調査」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑3出土遺物(図7)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	2.3	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.5)	2.0	底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
3	陶器	瀬戸 香炉?	-	-	現 3.5	外面に梅花文の押印 胎土: 白色粒 色調: 胎土-灰白色 釉-暗緑灰色	体部小片
土坑7出土遺物(図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	2.3	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	7.6	3.5	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.7	3.2	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
土坑11出土遺物(図10)							
1	土器	ロクロ かわらけ・大	13.5	7.3	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
2	陶器	備前 播鉢	-	-	6.6	内面-播目5条遺存、単位不明 胎土: 白色粒、小石粒 色調: 灰褐色	口縁部片
ピット出土遺物(図12)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.2	1.8	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ピット66	2/3
2	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(30.2)	(13.0)	12.0	胎土: 砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調: 茶褐色 備考: 内面摩耗顕著 出土遺構: ピット62	1/3
表土出土遺物(図13)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.2	2.1	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.6	2.4	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.8	2.4	口縁部油煤付着 口縁部打ち欠き+口縁部内外面煤付着 底面一回転糸切+一部ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
4	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	5.4	2.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	7.2	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.0	3.2	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
7	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 4.1	胎土: 緻密、砂粒、小石粒 色調: 胎土-黄灰色 釉-淡緑色	口縁部片
8	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.4	胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒、礫 色調: 暗赤褐色 備考: 10~11型式	口縁部片
9	土製品	円板状製品	長 4.1	短 4.0	厚 0.5~0.7	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
10	土製品	円板状製品	長 4.8	短 4.7	厚 0.7~0.9	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
11	金属 製品	釘	現長 10.3	幅 0.3	厚 0.5	鉄製釘	略完形
12	金属 製品	銭貨	直径 2.41	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-祥符通寶(北宋・1009) 書体-真書	完形
第1面 遺構外出土遺物(図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	3.5	1.7	底面一回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.9	4.6	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	3.7	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.1	4.4	1.6	底面一回転糸切+弱い板上圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	3.7	2.1	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.0	2.0	底面一回転糸切+一部ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.2)	1.9	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.3	2.0	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	3.8	3.2	口縁部油煤付着 底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2強
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.4	1.9	底面一回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	1.7	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.7)	(5.6)	2.7	底面一回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4

13	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	5.7	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
14	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.2	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 内外面に焼成ムラによる黒変あり	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.7	2.8	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
16	陶器	常滑 広口壺	-	-	現 4.9	胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 茶褐色 備考: 5型式	口縁部片
17	土製品	円板状製品	長 4.6	短 4.3	厚 0.6~0.8	胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
18	石製品	砥石	長 9.3	短 3.6	厚 0.4~1.0	4面に使用痕跡 石材-粘板岩	3/4
19	金属製品	刀子	現長 13.5	幅 1.2~1.5	刃部厚 0.5	鉄製品 刃部から基部遺存、茎尻部欠損	3/4
20	金属製品	刀子	現長 16.0	幅 1.0~2.5	刃部厚 0.5	鉄製品 切先部欠損、刃部から基部遺存、意図的に折り曲げ	2/3
21	金属製品	釘	現長 11.2	幅 0.2~0.6	厚 0.2~0.4	鉄製釘	3/4
22	金属製品	釘	現長 5.2	幅 0.4	厚 0.6	鉄製釘	3/4

第1面 構成土出土遺物(図15)

1	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 9.7	胎土: 砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調: 灰色 備考: 内面摩耗顕著	胴~底部片
---	----	-------------	---	---	----------	------------------------------------	-------

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第2面 構成土出土遺物(図20)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	(4.0)	1.7	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(7.4)	2.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

池状遺構1上層 出土遺物(図23~25)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.2	3.2	1.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.7	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.4)	1.7	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2弱
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3~7.5	5.5~5.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.1	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	4/5
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.5	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5強
8	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(4.4)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	4.9	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.7	5.2~5.4	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.6	5.8	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.8	2.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
14	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	6.0	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3弱
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4強
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	5.5	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.1	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	3/4強
18	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(4.8)	2.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.8	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.1)	(7.8)	3.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
21	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.0)	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

22	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
23	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	7.5	3.2	底面一回転ヘラケズリ+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
24	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	7.8	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
25	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(8.1)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
26	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.4	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	略完形
27	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.4)	(8.6)	3.0	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3強
28	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	7.0	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3
29	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.3)	7.3	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	2/3強
30	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.1	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
31	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.1~8.2	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
32	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.8	3.5	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	略完形
33	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.1	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	1/2弱
34	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.4)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
35	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.4)	3.5	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3強
36	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.5	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.6)	3.4	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3強
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4
39	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4~12.6	8.2~8.5	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	完形
40	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5~12.9	8.5	3.7	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好 備考：内面焼きムラあり	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7~12.8	7.3	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	完形
42	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.3~8.5	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好 備考：内面焼きムラあり	完形
43	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.7	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
44	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4強
45	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.7	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好 備考：口縁部歪み・内面焼きムラあり	2/3
46	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.2)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、黒色粒、小礫、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好 備考：内面焼きムラあり	1/5
47	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.0	7.8	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡黄橙色 焼成：良好	略完形
48	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2強
49	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.5~13.0	8.0	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	略完形
50	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.5~13.0	8.2~8.5	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	完形
51	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.6~13.0	8.7~9.3	3.2	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
52	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.0	8.1	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好 口縁部直下に円孔1ヵ所焼成後に外面から穿つ	略完形
53	土器	ロクロ かわらけ・中~大	12.8~13.1	7.5	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
54	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.9	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	4/5
55	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.2	底面一回転ヘラケズリ+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
56	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.0)	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3弱
57	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	7.8~8.1	3.5	底面一回転糸切 内底一指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3強
58	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.2	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2強
59	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.1	8.0~8.2	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	略完形
60	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.4)	3.7	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/3
61	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.5	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：橙色 焼成：良好	4/5
62	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.7	3.3	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：灰褐色 焼成：良好	1/2

63	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(8.9)	3.0	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4強
64	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	9.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3強
65	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.2	8.5~8.7	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
66	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.9	3.5	口縁部油煤付着 底面-回転ヘラケズリ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
67	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.8)	3.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3弱
68	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3~13.6	8.7~9.2	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
69	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(8.4)	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
70	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(8.8)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好 備考: 内面焼きムラあり	1/3
71	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.4)	7.3	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
72	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	7.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
73	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.7)	8.2	3.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 雲母、赤色粒、細礫、良土 色調: 橙白色 焼成: 良好	3/4
74	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(7.8)	3.3	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
75	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.4	3.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
76	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	8.0	3.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
77	土器	ロクロ かわらけ・特大	(18.6)	(10.6)	5.8	内外面: 破断面に煤薄く付着 底面-回転糸切 内底-回転ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
78	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.8	肩部に正格子押印 胎土: 粗 白色粒、細礫、小礫、やや砂質 色調: 断面-黒色・黄灰色、内面-にぶい褐色、外面-にぶい赤褐色	胴部上半片
79	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.4	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫、小礫、やや砂質 色調: 内面-にぶい赤褐色、外面-黄褐~暗褐色	胴部下位~ 底部
80	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	高台径 (13.0)	現 6.7	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫、やや砂質 色調: 灰色 備考: 内面摩擦顕著 5型	体部~ 高台部片
81	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 3.5	胎土: 白色粒、小礫、やや砂質 色調: 外面-暗褐灰色、内面-褐灰色 備考: 6 a 型式	口縁部片
82	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.0	胎土: 白色粒、細礫 色調: 暗黒褐色 備考: 6 b 型式	口縁部片
83	瓦	平瓦	現長 14.6	現幅 12.3	厚 1.3~1.7	凸面-斜格子叩き+側縁平行のナデ 凹面-布目+糸切+狭端縁ヘラ調整 狭端面・側面ケズリ調整 胎土: 雲母、白色粒、小石粒、小礫 色調: 黒灰色	1/4

池状遺構 1 下層出土遺物 (図26・27)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.0	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(4.9)	1.7	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	(5.4)	1.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
7	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.5	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.6	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	4/5
9	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	2.0	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(6.0)	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.2)	(5.6)	2.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.4)	(6.4)	1.8	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
13	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	5.8	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	完形
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.4)	-	現 3.6	底面-回転ナデ+指頭調整 内面-回転ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、良土 色調: 灰白色 焼成: 良好	1/4弱
15	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	7.1	2.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
16	土器	ロクロ かわらけ・中	11.4	8.0	3.1	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・中	11.5	6.5	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
18	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	7.0	3.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
19	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	6.6	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3

20	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	7.7	3.1	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調：黄橙色 焼成：良好	略完形
21	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.0)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
22	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
23	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.2)	(8.4)	2.8	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
24	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.0	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、白色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
25	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.8	3.4	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
26	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.8)	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
27	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.8	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕+指頭調整 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
28	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.5	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
29	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(8.2)	3.1	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/4
30	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(7.4)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/4
31	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.6	3.5	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
32	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.8	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
33	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.5	3.7	底面一回転糸切+指頭調整 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/2
34	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	3/4
35	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.9	3.4	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	2/3
36	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.2	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	2/3
37	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(8.8)	3.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
38	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	(7.8)	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	1/3
39	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.4	3.6	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
40	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	8.6	3.6	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	3/4
41	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.6	3.3	底面一回転糸切+ナデ 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
42	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	(7.6)	3.5	底面一回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
43	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.3	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
44	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.4	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
45	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.6	3.5	底面一回転糸切 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/3
46	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	7.9	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
47	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.3	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	2/3
48	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.4	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/2
49	土器	ロクロ かわらけ・大	13.2	8.9	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	略完形
50	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.2)	(9.0)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
51	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.6)	(8.0)	3.4	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
52	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	(8.4)	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
53	土器	ロクロ かわらけ・大	13.8	8.8	3.3	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/2
54	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(7.6)	3.8	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、良土 色調：淡橙色 焼成：良好	1/3
55	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(9.4)	3.2	底面一回転糸切 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
56	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(10.4)	3.5	底面一回転ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	1/4
57	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.2)	(9.2)	3.2	底面一回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/6
58	陶器	常滑 片口鉢Ⅰ類	-	-	現 3.5	胎土：微砂、白色粒、黒色粒 色調：灰色	口縁部小片
59	石製品	滑石製石鍋	(21.1)	-	現 4.5	外面煤付着 石質-滑石 色調：黒褐色	口縁部1/4
60	金属 製品	釘	現長 5.8	幅 0.4	厚 0.5	鉄製釘	1/4

池状遺構 1 出土木製品 (図28~33)

1	漆器	椀	-	8.0	現 1.8	内外面黒色漆髹漆 内面：赤色系漆による漆絵 笹文・葉文 外面：赤色系漆による漆絵 土坡・葉文	内面：赤色系漆による漆絵 笹文・葉文 外面：赤色系漆による漆絵 土坡・葉文	高台形：輪高台	1/5	
2	漆器	椀	-	(7.0)	現 3.9	内外面黒色漆髹漆	内外面無文	高台形：無高台	1/5	
3	漆器	皿	-	(7.0)	現 0.5	内面：赤色漆髹漆	外面：黒色漆髹漆	内外面無文 高台形：無高台	1/5	
4	木製品	折敷	長 14.7	幅 14.9	厚 0.1	縁の四方に小孔あり	角部隅丸に加工	状態が悪いが縁がほぼ遺存	略完形	
5	木製品	折敷	長 14.9	幅 15.6	厚 0.1	縁の四方に小孔あり	角部隅丸に加工	状態が悪いが縁がほぼ遺存 面に刃物痕が残る	略完形	
6	木製品	折敷	長 18.7	現幅 20.7	厚 0.1	不規則に縁に小孔あり	縁部遺存	小孔に桜皮が依存しており、縁と折敷を結んだもの？	略完形	
7	木製品	折敷	長 19.2	幅 18.7	厚 0.2	縁に小孔あり	一部桜皮が遺存	面に細かい刃物痕 角は隅丸に加工	略完形	
8	木製品	折敷	長 18.5	現幅 16.1	厚 0.2	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
9	木製品	折敷	長 18.8	現幅 12.1	厚 0.2	角部隅丸に加工	縁に小孔あり		不明	
10	木製品	折敷	長 19.0	現幅 11.8	厚 0.1	角部隅丸に加工	縁の2カ所小孔あり			
11	木製品	折敷	長 18.7	現幅 8.3	厚 0.1	角部隅丸に加工	縁に小孔あり		不明	
12	木製品	折敷	長 25.4	現幅 8.2	厚 0.3	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
13	木製品	折敷	長 19.0	現幅 7.3	厚 0.1	角部隅丸に加工			不明	
14	木製品	折敷	長 19.0	現幅 7.6	厚 0.1	角部隅丸に加工			不明	
15	木製品	折敷	現長 19.0	現幅 8.5	厚 0.5	角部隅丸に加工	小孔あり		不明	
16	木製品	折敷	長 27.0	現幅 8.4	厚 0.2	角部隅丸に加工	不規則な位置に4カ所小孔あり		不明	
17	木製品	折敷	長 25.0	現幅 21.8	厚 0.2	小孔あり	角部隅丸に加工	2カ所縁が残る(縁幅0.2cm)	不明	
18	木製品	折敷	長 25.4	現幅 10.5	厚 0.2	小孔あり	角部隅丸に加工		不明	
19	木製品	折敷	長 27.0	現幅 7.7	厚 2.5	角部隅丸に加工			不明	
20	木製品	折敷	長 26.5	現幅 4.0	厚 0.2	縁を斜めに加工	角部隅丸に加工		不明	
21	木製品	折敷	長 15.5	現幅 4.7	厚 0.3	角部隅丸に加工			不明	
22	木製品	折敷	長 26.9	現幅 13.6	厚 0.2	縁に小孔あり	面に細かい刃物痕	部分的に焼痕	不明	
23	木製品	折敷	長 18.9	現幅 18.0	厚 0.1	3カ所に小孔あり			略完形	
24	木製品	折敷	長 19.4	現幅 6.2	厚 0.1	縁に小孔あり	面に細かい刃物痕	部分的に焼痕	不明	
25	木製品	折敷	長 18.8	現幅 6.8	厚 0.2	面に細かい刃物痕			不明	
26	木製品	折敷	長 18.7	現幅 8.2	厚 0.2				不明	
27	木製品	折敷	長 18.9	現幅 7.2	厚 0.1				不明	
28	木製品	折敷	長 19.0	現幅 11.3	厚 0.1				不明	
29	木製品	折敷	長 19.1	現幅 5.8	厚 0.1	縁に小孔あり	面に刃物痕	上下端部に孔あり	底板	
30	木製品	折敷	長 15.2	現幅 5.4	厚 0.1	小孔あり			不明	
31	木製品	折敷	長 23.5	現幅 14.7	厚 0.3	縁に小孔あり			不明	
32	木製品	折敷	長 25.3	現幅 5.8	厚 0.1				不明	
33	木製品	折敷	長 26.0	現幅 4.3	厚 0.4	面に細かい刃物痕			不明	
34	木製品	折敷	長 25.2	現幅 8.2	厚 0.3				不明	
35	木製品	折敷	長 25.0	幅 7.3	厚 0.3	小孔あり			不明	
36	木製品	折敷	長 26.0	現幅 8.7	厚 0.4	小孔あり	縁を斜めに加工？		不明	
37	木製品	曲物	径 22.8		現厚 8.6	曲物側板	側板厚0.2cm	側板の合わせは桜皮を用いる	曲物側板と接合部に小孔・木釘痕？	略完形
38	木製品	曲物	径 22.4		厚 0.9	側面2カ所小孔あり	曲げ物底板		2/3	
39	木製品	曲物	径 19.5		厚 0.5~0.9	曲物底板	遺存状態が悪い		不明	
40	木製品	曲物	径 13.0	現幅 5.0	厚 0.9	円板状	曲げ物底板？		1/2	
41	木製品	曲物	径 8.4	-	厚 0.5	曲物底板？			1/2	

42	木製品	箸状	長 16.8	幅 0.6	厚 0.5	断面円形	完形
43	木製品	箸状	長 17.6	幅 0.5	厚 0.5	断面円形	完形
44	木製品	箸状	長 18.2	幅 0.6	厚 0.5	断面円形	完形
45	木製品	箸状	長 18.9	幅 0.6	厚 0.5	断面不正円形	完形
46	木製品	箸状	長 19.0	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	完形
47	木製品	箸状	長 19.6	幅 1.6	厚 0.6	断面円形	完形
48	木製品	箸状	長 20.5	幅 0.7	厚 0.6	断面円形	完形
49	木製品	箸状	長 20.6	幅 0.7	厚 0.5	断面不整形	完形
50	木製品	箸状	長 20.8	幅 0.6	厚 0.5	断面楕円形	完形
51	木製品	箸状	長 20.9	幅 0.8	厚 0.6	断面楕円形	完形
52	木製品	箸状	現長 21.1	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	略完形
53	木製品	箸状	長 21.6	幅 0.5	厚 0.4	断面楕円形	完形
54	木製品	箸状	長 21.9	幅 0.4	厚 0.4	断面方形	完形
55	木製品	箸状	長 22.1	幅 0.7	厚 0.5	断面不正円形	完形
56	木製品	箸状	長 22.2	幅 0.9	厚 0.5	断面扁平	完形
57	木製品	箸状	長 22.8	幅 0.7	厚 0.5	断面楕円形	完形
58	木製品	串状	現長 15.3	幅 1.2	厚 0.9	断面円形	不明
59	木製品	串状	長 18.4	幅 0.8	厚 0.8	断面不整形	略完形
60	木製品	串状	長 20.2	最大径 1.8	-	側面に等間隔で刃物痕あり 断面正円形	略完形
61	木製品	串状	現長 22.2	幅 1.0	厚 0.5	断面不整形 側面焼痕	不明
62	木製品	棒状	現長 15.5	幅 1.9	厚 1.1	断面方形	不明
63	木製品	棒状	現長 13.0	幅 0.4	厚 0.4	断面方形	不明
64	木製品	棒状	現長 18.1	幅 1.0	厚 0.9	断面方形 木釘痕あり	不明
65	木製品	棒状	現長 19.0	幅 1.2	厚 0.8	断面方形	不明
66	木製品	棒状	現長 20.2	幅 0.9	厚 0.6	断面方形	不明
67	木製品	筥状	長 16.3	幅 1.7	厚 0.5	端部焼痕 断面方形	完形
68	木製品	筥状	長 17.9	幅 1.5	厚 0.5	断面方形	完形
69	木製品	草履芯	長 24.0	幅 10.2	厚 0.5	先端部：直線的・合わせ部が最先端となる 側縁部：切り取り部が頂点となる山形を呈する 切り取り部：方形 先端部：小孔あり	略完形
70	木製品	草履芯	現長 23.8	現幅 5.3	厚 0.3	先端部：曲線的 側縁部：曲線的 切込み部：方形 端部に小孔あり 遺存状態が悪く詳細不明	1/2
71	木製品	草履芯	現長 24.9	現幅 8.0	厚 0.3	先端部：側縁部にかけて丸みを帯びる・合わせ部が最先端となる 側縁部：曲線的 切り取り部：平行四辺形	略完形
72	木製品	草履芯	現長 22.8	現幅 5.2	厚 0.2	先端部：側縁部にかけて丸みを帯びる・合わせの部が最先端となる 側縁部：曲線的 切込み部：平行四辺形	3/4
73	木製品	草履芯	現長 17.8	現幅 4.0	厚 0.3	側縁部：合わせの部から側縁部にかけて先端部全体が丸みを帯びる・合わせ部は最先端よりも切り込まれる・小孔あり 側縁部：曲線的 切込み部：三角形	1/2
74	木製品	草履芯	現長 24.2	現幅 5.4	厚 0.3	先端部：直線的・合わせ部が最先端となる 側縁部：曲線的 切り取り部：三角形	1/2
75	木製品	建具	現長 25.0	幅 2.0	厚 1.7~0.9	薮戸組子？ 2ヵ所に小孔あり・木釘痕？	不明
76	木製品	建具	長 28.5	幅 2.2	厚 1.6~0.7	薮戸組子？ 2ヵ所に小孔あり・木釘痕？	不明
77	木製品	建具	現長 17.8	幅 1.3	厚 1.4	端部に仕口が残る 断面方形	不明
78	木製品	建具	長 21.8	幅 1.4	厚 1.3	両端部に仕口が残る 断面方形	不明
79	木製品	用途不明	長 7.6	幅 7.3	厚 0.8	中心部と側縁近くに2ヵ所小孔あり・木釘が遺存していた 断面：扁平なかまぼこ形 側縁部面取り加工 燭台の台座？	完形
80	木製品	用途不明	現長 5.5	現幅 8.8	厚 1.2	孔痕あり	不明
81	木製品	用途不明	現長 24.6	現幅 3.0	厚 0.3	不規則な位置に4ヵ所の小孔	不明
82	木製品	用途不明	現長 13.7	幅 2.0	厚 0.5	小孔あり 建具？	不明

83	木製品	用途不明	現長 16.0	幅 1.0	厚 0.8	断面方形	不明
84	木製品	用途不明	現長 16.1	幅 1.2	厚 0.7	端部が三角形に残存 断面方形	不明
85	木製品	用途不明	現長 20.0	幅 1.5	厚 0.9	断面方形 端部断面かまぼこ形	不明
86	木製品	用途不明	現長 33.5	幅 1.3	厚 0.9	断面かまぼこ形 端部削りが入る	不明
87	木製品	用途不明	現長 44.9	幅 1.3	厚 1.0	断面かまぼこ形 調度具部材?	不明

第3面 遺構外出土遺物 (図34)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.8	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・中	10.2	6.2	3.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	11.2	6.3	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.6	3.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	9/10
5	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.2	3.5	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	7.0	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	9/10
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.2	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
8	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.8	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
9	土器	ロクロ かわらけ・大	13.1	8.2	3.7	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	9/10
10	土器	壺?	-	(12.6)	現 9.1	底面-回転糸切? 口縁部~胴部内外面回転ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調: 黄橙色	胴~底部片

第3面 構成土出土遺物 (図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.0	3.3	1.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.8)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3弱
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(5.2)	1.5	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/4
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	5.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	(5.2)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡黄橙色 焼成: 良好	1/3強
6	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(4.3)	1.7	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	3/4強
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.5	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	5/6
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(4.1)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、やや良土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(6.0)	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.6)	6.4	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
12	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.2)	(7.0)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
13	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.3)	(7.1)	3.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	(7.2)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3強
15	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.5)	(7.2)	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3強
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.4)	3.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3強
17	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	(7.5)	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
18	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.5	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.2	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
20	土器	ロクロ かわらけ・大	(14.0)	(8.1)	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 雲母、白色粒、赤色粒、良土 色調: 白橙色 焼成: 良好 備考: 内外面白化粧?	2/3強
21	陶器	瀬戸 銅皿	(13.3)	(8.1)	3.9	胎土: 白色粒、黒色粒、細礫 色調: 胎土-灰黄~黄褐色 釉-灰黄~黄褐色 釉薬漬け掛けの痕跡あり、二次被熱のため不鮮明 備考: 古瀬戸中期I段階	1/3
22	木製品	折敷	現長 24.8	現幅 8.3	厚 0.2	面に細かい刃物痕	不明
23	木製品	折敷	現長 19.1	現幅 5.8	厚 0.1	角部隅丸に加工	不明

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑15出土遺物 (図38)							
1	土器	ロクロかわらけ・大	(13.2)	(7.8)	3.5	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2弱
2	瓦	平瓦	現長 9.4	現幅 10.0	厚 1.5~2.0	凸面-側縁平行のナデ 凹面-布目+糸切+側縁平行ナデ 狭端面・側面-ケズリ調整 胎土:雲母、白色粒、小礫 色調:黒灰色	1/6

第4面 構成土出土遺物 (図41)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.7~8.0	5.3~5.7	2.0	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.6~7.8	5.0	2.3	底面一回転糸切+板状圧痕 内底一指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形

表6 第5面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構2出土遺物 (図44)							
1	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現 6.3	胎土:微砂、白色粒、赤色粒、砂質 色調:内面-黄緑灰色、外面-暗褐色 備考:5型式?	口縁部小片

表7 出土動物遺体一覧表 (図版14)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
表土		イルカ類	肋骨片				
表土		イルカ類	尾椎			1	
表土		ウマ	P ⁴	右		3	
構成土	第1面	イルカ類	椎骨片				
池状遺構1上層	第3面	魚類	鱗鱗片				
池状遺構1上層	第3面	イワシ類	椎骨			2個	
池状遺構1上層	第3面	タイ類	歯				
池状遺構1下層	第3面	鳥類					破片
池状遺構1下層	第3面	ニホンジカ	肋骨片				
構成土	第3面	魚類					3個 破片
構成土	第3面	魚類					11個 細片
構成土	第3面	タイ類	犬歯状歯				2個
構成土	第3面	タイ類	白歯状犬歯				2個
構成土	第3面	鳥類	椎骨片				2個 焼骨
構成土	第3面	鳥類					5個 破片
構成土	第3面	鳥類					5個 細片
構成土	第3面	イルカ類	頭骨片				
土坑15	第4面	ニホンジカ	大腿骨遠位端	右		2	

表8 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<61>	<30>	21	ビット22	第1面	35	32	13	ビット54	第1面	20	20	12
土坑2	第1面	71	61	21	ビット23	第1面	27	27	24	ビット55	第1面	21	18	10
土坑3	第1面	113	94	20	ビット24	第1面	58	40	9	ビット56	第1面	45	32	19
土坑4	第1面	63	56	23	ビット25	第1面	53	49	9	ビット57	第1面	31	26	19
土坑5	第1面	65	60	21	ビット26	第1面	51	50	12	ビット58	第1面	32	28	22
土坑6	第1面	113	82	14	ビット27	第1面	31	28	18	ビット59	第1面	<29>	26	13
土坑7	第1面	70	<65>	14	ビット28	第1面	39	38	14	ビット60	第1面	28	25	18
土坑8	第1面	62	53	26	ビット29	第1面	41	-	14	ビット61	第1面	38	<25>	15
土坑9	第1面	65	60	24	ビット30	第1面	35	<30>	15	ビット62	第1面	33	32	18
土坑10	第1面	171	<114>	16	ビット31	第1面	40	<30>	12	ビット63	第1面	35	31	31
土坑11	第1面	80	<66>	15	ビット32	第1面	26	25	-	ビット64	第1面	53	46	28
ビット1	第1面	<36>	32	-	ビット33	第1面	31	28	18	ビット65	第1面	<36>	26	9
ビット2	第1面	<53>	<24>	31	ビット34	第1面	48	29	31	ビット66	第1面	55	51	28
ビット3	第1面	48	<44>	16	ビット35	第1面	49	45	16	ビット67	第1面	45	<38>	18
ビット4	第1面	45	<30>	22	ビット36	第1面	33	<26>	11	ビット68	第1面	43	21	20
ビット5	第1面	40	37	31	ビット37	第1面	44	<38>	15	ビット69	第1面	20	<11>	8
ビット6	第1面	44	33	15	ビット38	第1面	59	54	14	ビット70	第1面	28	20	9
ビット7	第1面	46	35	25	ビット39	第1面	46	<17>	21	ビット71	第1面	48	<28>	15
ビット8	第1面	51	41	14	ビット40	第1面	50	46	13	ビット72	第1面	28	<26>	19
ビット9	第1面	41	39	19	ビット41	第1面	<30>	<30>	14	ビット73	第1面	33	<30>	19
ビット10	第1面	20	17	6	ビット42	第1面	26	<22>	18	ビット74	第1面	32	26	12
ビット11	第1面	26	<25>	6	ビット43	第1面	<27>	21	17	ビット75	第1面	41	<30>	25
ビット12	第1面	30	27	15	ビット44	第1面	26	21	18	ビット76	第1面	30	29	18
ビット13	第1面	40	27	10	ビット45	第1面	29	21	18	ビット77	第1面	14	13	15
ビット14	第1面	51	38	17	ビット46	第1面	39	29	24	ビット78	第1面	23	17	6
ビット15	第1面	41	30	12	ビット47	第1面	32	<23>	14	ビット79	第1面	24	22	7
ビット16	第1面	27	26	13	ビット48	第1面	47	38	12	ビット80	第1面	19	<17>	10
ビット17	第1面	48	<45>	23	ビット49	第1面	43	<39>	17	ビット81	第1面	28	26	12
ビット18	第1面	26	22	7	ビット50	第1面	<40>	<32>	20	ビット82	第1面	38	36	25
ビット19	第1面	30	<27>	26	ビット51	第1面	50	38	35	ビット83	第1面	<36>	<18>	17
ビット20	第1面	20	<13>	22	ビット52	第1面	<33>	<32>	23	ビット84	第1面	28	25	21
ビット21	第1面	36	31	30	ビット53	第1面	46	41	33	ビット85	第1面	32	29	11

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ビット86	第1面	42	<25>	8	ビット96	第2面	30	28	13	池状遺構1P7	第3面	8	7	-
礎石建物1	第2面	<405>	<195>	15~34	ビット97	第2面	40	36	8	池状遺構1P8	第3面	11	9	-
溝状遺構1	第2面	<560>	45	25	ビット98	第2面	26	26	21	池状遺構1P9	第3面	9	<8>	-
土坑12	第2面	115	<35>	16	ビット99	第2面	30	30	7	池状遺構1P10	第3面	7	6	-
土坑13	第2面	68	<55>	12	ビット100	第2面	33	30	17	池状遺構1P11	第3面	13	10	-
土坑14	第2面	78	46	39	ビット101	第2面	29	27	19	池状遺構1P12	第3面	11	11	-
ビット87	第2面	33	25	21	ビット102	第2面	22	20	15	ビット103	第3面	44	37	17
ビット88	第2面	52	37	17	池状遺構1	第3面	<500>	450	65~75	礎板建物2	第4面	<420>	<420>	22~40
ビット89	第2面	41	35	16	池状遺構1P1	第3面	24	23	-	土坑15	第4面	<113>	<39>	39
ビット90	第2面	20	16	12	池状遺構1P2	第3面	23	18	25	土坑16	第4面	<69>	<43>	12
ビット91	第2面	38	30	13	池状遺構1P3	第3面	13	13	21	土坑17	第4面	<134>	<90>	37
ビット92	第2面	38	34	24	池状遺構1P4	第3面	18	16	31	土坑18	第4面	180	<43>	10
ビット93	第2面	42	<25>	12	池状遺構1P5	第3面	31	26	24	ビット104	第4面	43	42	26
ビット94	第2面	34	31	12	池状遺構1P6	第3面	9	8	-	溝状遺構2	第5面	<600>	77	48
ビット95	第2面	23	21	-										

※礎石・礎板建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。また、深さは柱穴掘り方の深さを記載している。

表9 出土遺物一覧表

表土				土坑4				ビット7			
産地	器種	破片数		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【かわらけ】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	白かわらけ 手づくね成形	2			かわらけ ロクロ成形	6			かわらけ ロクロ成形	10	
	かわらけ ロクロ成形	1,759				合計 6				合計 10	
【白磁】				土坑5				ビット8			
	皿	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【青磁】				【かわらけ】				【かわらけ】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1			かわらけ ロクロ成形	25			かわらけ ロクロ成形	6	
【陶器】				【金属製品】				合計 6			
中国	盤	1			釘	1				合計 6	
瀬戸	卸皿	3		土坑7				ビット9			
	皿	2		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	入子	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
	折縁深皿	3			かわらけ ロクロ成形	113			かわらけ ロクロ成形	12	
常滑	壺	1		【陶器】				合計 12			
	甕	39		土坑8				ビット13			
	壺	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	片口鉢Ⅰ類	2		【かわらけ】				【かわらけ】			
	片口鉢Ⅱ類	7			かわらけ ロクロ成形	113			かわらけ ロクロ成形	9	
【土製品】				【瓦質土器】				合計 9			
	ふいごの羽口	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	円板状製品	3		【かわらけ】				【かわらけ】			
【瓦質土器】				【瓦質土器】				【かわらけ】			
	碗	1			碗	1			かわらけ ロクロ成形	12	
	火鉢	11				合計 37				合計 12	
【瓦】				土坑9				ビット14			
	丸瓦	1		産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【石製品】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	砥石	1			かわらけ ロクロ成形	17			かわらけ ロクロ成形	12	
【金属製品】				【陶器】				ビット15			
	銭貨	7		【かわらけ】				【かわらけ】			
	釘	38			かわらけ ロクロ成形	1		産地	器種	破片数	
	刀子	1		常滑	片口鉢Ⅱ類	1			かわらけ ロクロ成形	12	
合計 1,887				合計 18				合計 12			
第1面				土坑10				ビット17			
土坑2				産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
【かわらけ】				【かわらけ】				【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	72			かわらけ ロクロ成形	44			かわらけ ロクロ成形	9	
【陶器】				合計 44				合計 9			
常滑	片口鉢Ⅰ類	1		土坑11				ビット18			
【金属製品】				産地	器種	破片数		産地	器種	破片数	
	釘	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
合計 74					かわらけ ロクロ成形	29			かわらけ ロクロ成形	11	
土坑3				【陶器】				合計 11			
産地	器種	破片数		備前	掃鉢	1		ビット20			
【かわらけ】				【瓦質土器】				【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	76			火鉢	1		産地	器種	破片数	
【青磁】				合計 31				【かわらけ】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1		ビット5				【かわらけ】			
【青白磁】				産地	器種	破片数		【かわらけ】			
	梅瓶	1		【かわらけ】				【かわらけ】			
【陶器】					かわらけ ロクロ成形	10			かわらけ ロクロ成形	4	
常滑	甕	1		合計 10				合計 4			
瀬戸	香炉?	1									
合計 80											

ビット21			ビット42			ビット66		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8		かわらけ ロクロ成形	7		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計			合計
		8			7			2
ビット22			ビット43			ビット67		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	13		かわらけ ロクロ成形	2		かわらけ ロクロ成形	5
		合計			合計			合計
		13			2			5
ビット23			ビット44			ビット68		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5		かわらけ ロクロ成形	10		かわらけ ロクロ成形	3
		合計			合計			合計
		5			10			3
ビット26			ビット49			ビット71		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	22		かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	18
		合計			合計			合計
		22			11			18
ビット27			ビット51			ビット72		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5		かわらけ ロクロ成形	28		かわらけ ロクロ成形	8
		合計			合計			合計
		5			28			8
ビット33			ビット54			ビット76		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8		かわらけ ロクロ成形	24		かわらけ ロクロ成形	4
		合計			合計			合計
		8			24			4
ビット34			ビット55			ビット77		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20		かわらけ ロクロ成形	2		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計	【金属製品】		
		20			2		釘	1
								合計
								3
ビット35			ビット56			ビット83		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	14		かわらけ ロクロ成形	2
		合計			合計			合計
		4			14			2
ビット37			ビット58			ビット84		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	34		かわらけ ロクロ成形	3		かわらけ ロクロ成形	10
		合計			合計			合計
		35			3			10
ビット38			ビット60			ビット85		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10		かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	8
		合計			合計			合計
		10			4			8
ビット40			ビット61			第1面 遺構外		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18		かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	38
		合計			合計	【陶器】		
		18			4	常滑	広口壺	1
ビット41			ビット62				片口鉢Ⅱ類	1
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	【土製品】		
【かわらけ】			【陶器】				円板状製品	1
	かわらけ ロクロ成形	7	常滑	片口鉢Ⅱ類	1	【石製品】		
		合計			合計		砥石	1
		7			1	【金属製品】		
ビット42			ビット63				刀子	2
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数		釘	2
【かわらけ】			【かわらけ】			合計		
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	4	46		
		合計			合計			
		4			4			

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	431
【白磁】		
	皿	1
	皿Ⅳ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅱ類	2
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 444

第2面

礎石建物1 ビット2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【瓦】		
	平瓦	1
		合計 7

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

土坑14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	54
【金属製品】		
	釘	3
		合計 57

ビット87		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
		合計 18

ビット88		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	23
【石製品】		
	滑石製石鍋	1
		合計 24

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	35
		合計 35

ビット90		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	16
		合計 16

ビット94		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ビット96		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
		合計 2

ビット97		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11
		合計 11

ビット98		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
		合計 5

ビット100		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	30
		合計 30

ビット101		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	56
		合計 56

ビット102		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

第2面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	745
【白磁】		
	皿Ⅳ類	2
【陶器】		
渥美	甕	1
	甕	6
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	2
		合計 760

ビット103		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
		合計 9

第3面		
産地	器種	破片数
池状遺構1 上層		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3,295
	かわらけ 手づくね成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	14
	片口鉢Ⅰ類	5
	片口鉢Ⅱ類	4
【瓦質土器】		
	碗	3

池状遺構1 下層		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2,009
【陶器】		
常滑	甕	15
	片口鉢Ⅰ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	2
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
【金属製品】		
	釘	1
		合計 2,035

【瓦】		
産地	器種	破片数
	平瓦	2
	丸瓦	2
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
【金属製品】		
	鉄滓	1
		合計 3,330

池状遺構1		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	漆器椀	2
	漆器皿	1
	漆器器種不明	1
	折敷	249
	曲物	4
	曲物(底板)	4
	箸状	41
	串状	18
	棒状	43
	篋状	2
	草履芯	6
	連筒下駄	1
	部材	5
	建具	4
	端材	3
	用途不明	46
		合計 430

池状遺構1		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	漆器椀	2
	漆器皿	1
	漆器器種不明	1
	折敷	249
	曲物	4
	曲物(底板)	4
	箸状	41
	串状	18
	棒状	43
	篋状	2
	草履芯	6
	連筒下駄	1
	部材	5
	建具	4
	端材	3
	用途不明	46
		合計 430

池状遺構1		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	漆器椀	2
	漆器皿	1
	漆器器種不明	1
	折敷	249
	曲物	4
	曲物(底板)	4
	箸状	41
	串状	18
	棒状	43
	篋状	2
	草履芯	6
	連筒下駄	1
	部材	5
	建具	4
	端材	3
	用途不明	46
		合計 430

ビット103		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
		合計 9

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
【陶器】		
常滑	甕	1
【土器】		
	壺?	1
		合計 11

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	7
	かわらけ ロクロ成形	8,045
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【青白磁】		
	合子	1

【陶器】		
瀬戸	卸皿	2
常滑	甕	14
	片口鉢Ⅰ類	3
	片口鉢Ⅱ類	2
【瓦質土器】		
	碗	2
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	3
	碁石	1
【木製品】		
	漆器皿	1
	箸状	2
	折敷	3
	用途不明	3
【金属製品】		
	釘	7
	銅滓	1
合計		8,101
第4面		
礎板建物2 ビット3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1
土坑15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
【陶器】		
常滑	甕	1
【瓦】		
	平瓦	3

【木製品】		
	漆器椀	1
	箸状	23
	経木折敷	19
	曲物(底板)	1
	串状	2
	棒状	11
	連歯下駄	1
	草履芯	2
	用途不明	11
合計		93
土坑16		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	草履芯	1
合計		1
土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【木製品】		
	箸状	1
	串状	2
合計		7
土坑18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	23
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦】		
	平瓦	1

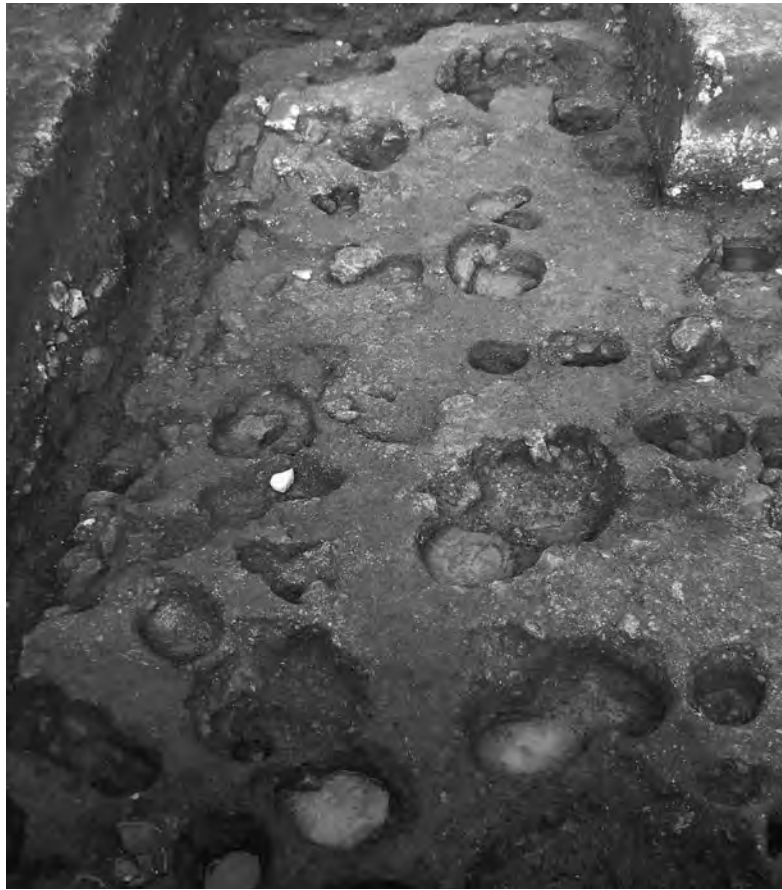
【木製品】		
	用途不明	2
合計		29
第4面構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	124
【陶器】		
常滑	甕	6
【土器】		
	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【木製品】		
	漆器椀	1
	箸状	6
	曲物	1
	串状	6
	棒状	6
	部材	5
	用途不明	1
合計		158
第5面		
溝状遺構2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計		2
第5面構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		2



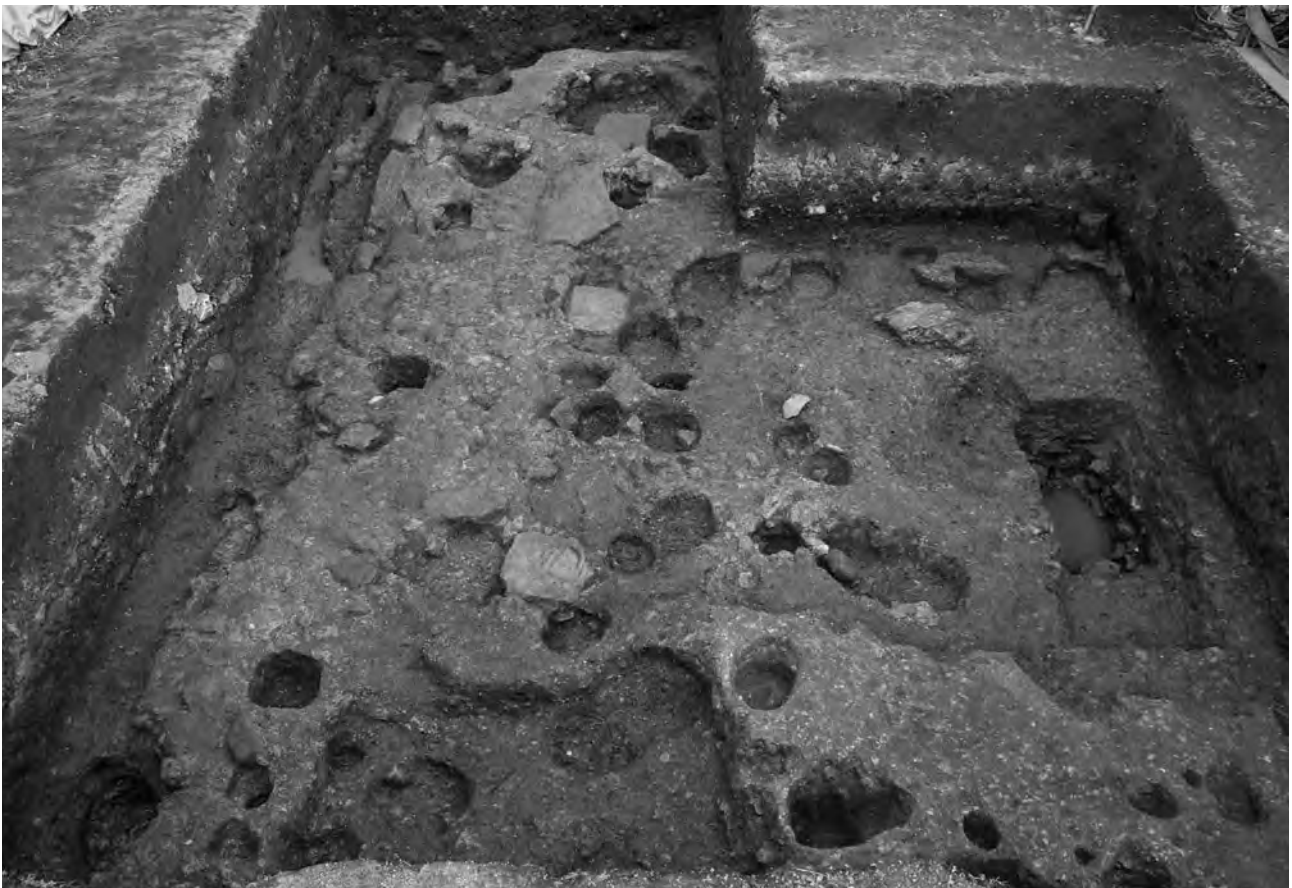
1. 調査地点遠景 (北東から)



2. 調査区北西壁土層断面 (南東から)



1. 第1面全景(南西から)



2. 第2面全景(南西から)



1. 第3面 池状遺構1 全景(南西から)



2. 第3面 池状遺構1 遺物出土状況(南西から)



3. 第3面 池状遺構1 北側護岸の検出状況(南西から)

図版 4



1. 第4面 礎板建物2ピット2～4 (北西から)



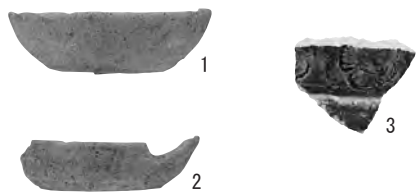
2. 第4面 礎板建物2ピット2 (南西から)



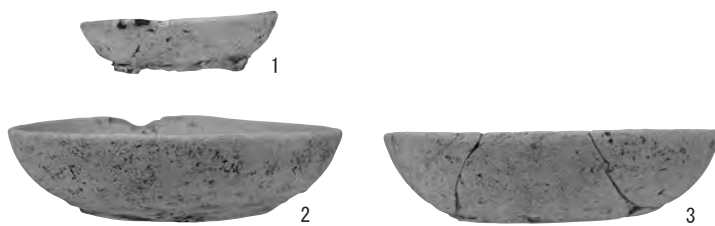
3. 第4面 礎板建物2ピット4 (南西から)



4. 第5面全景 (南西から)



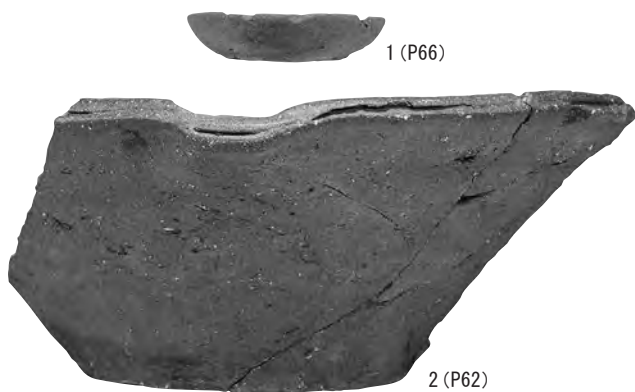
1. 第1面 土坑3出土遺物



2. 第1面 土坑7出土遺物



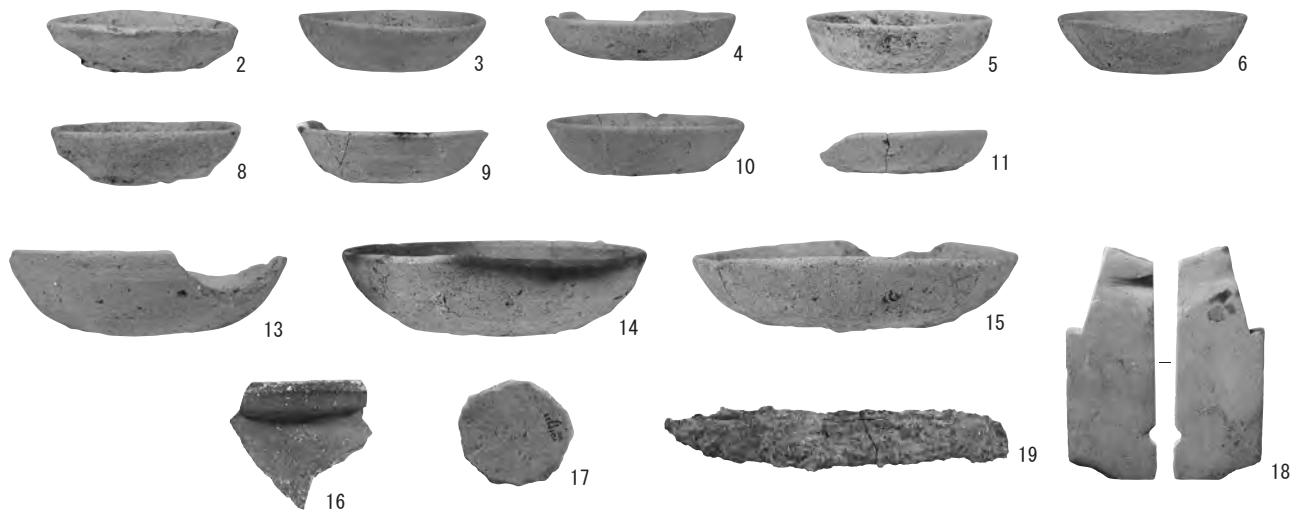
3. 第1面 土坑11出土遺物



4. 第1面 ピット出土遺物



5. 表土出土遺物



6. 第1面 遺構外出土遺物(1)

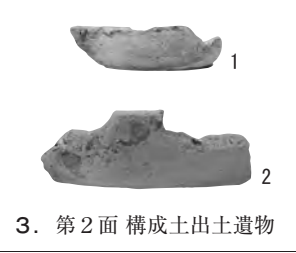
図版 6



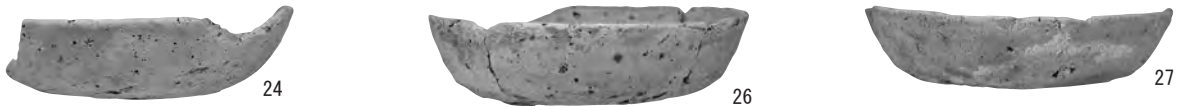
1. 第1面 遺構外出土遺物(2)



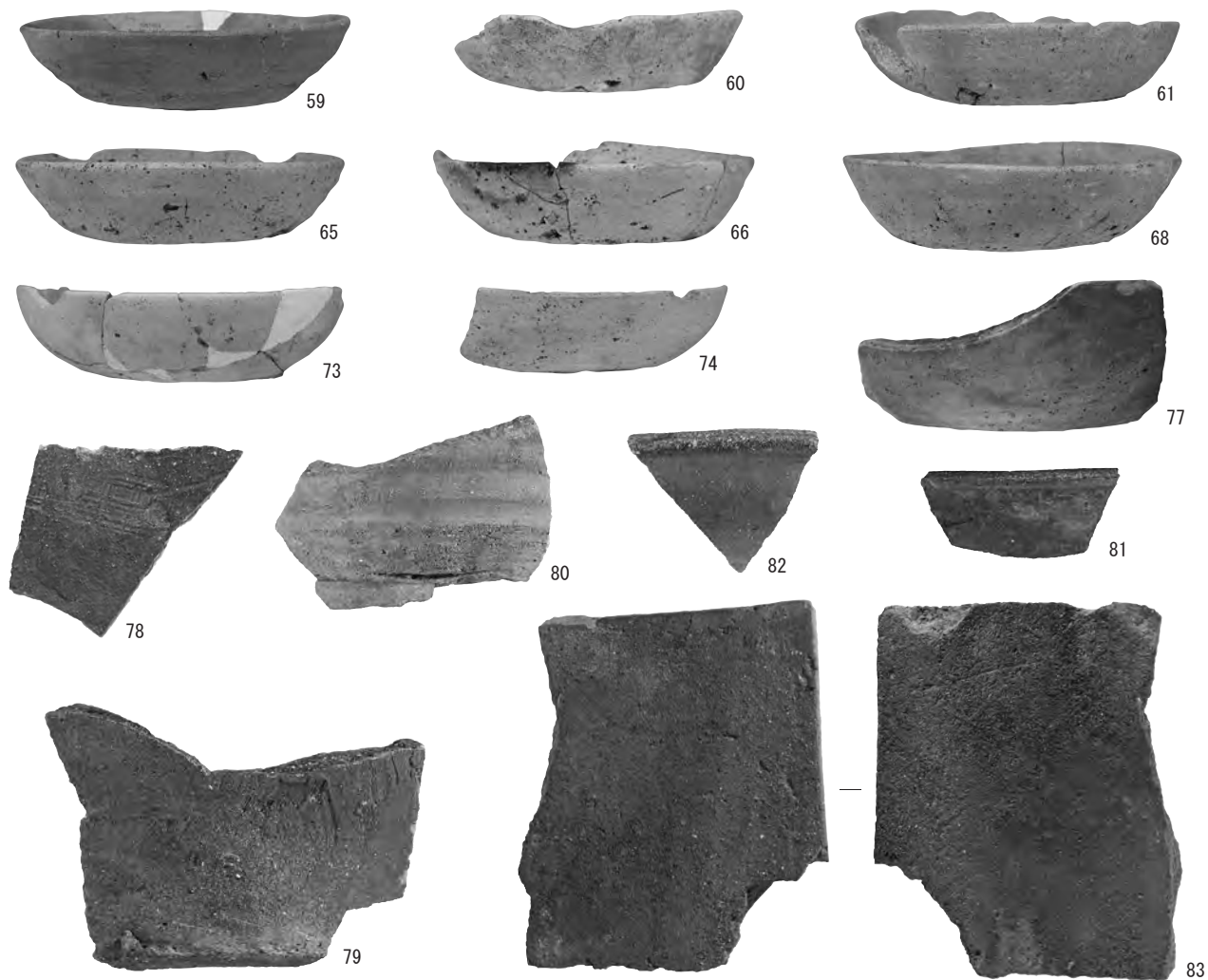
2. 第1面 構成土出土遺物



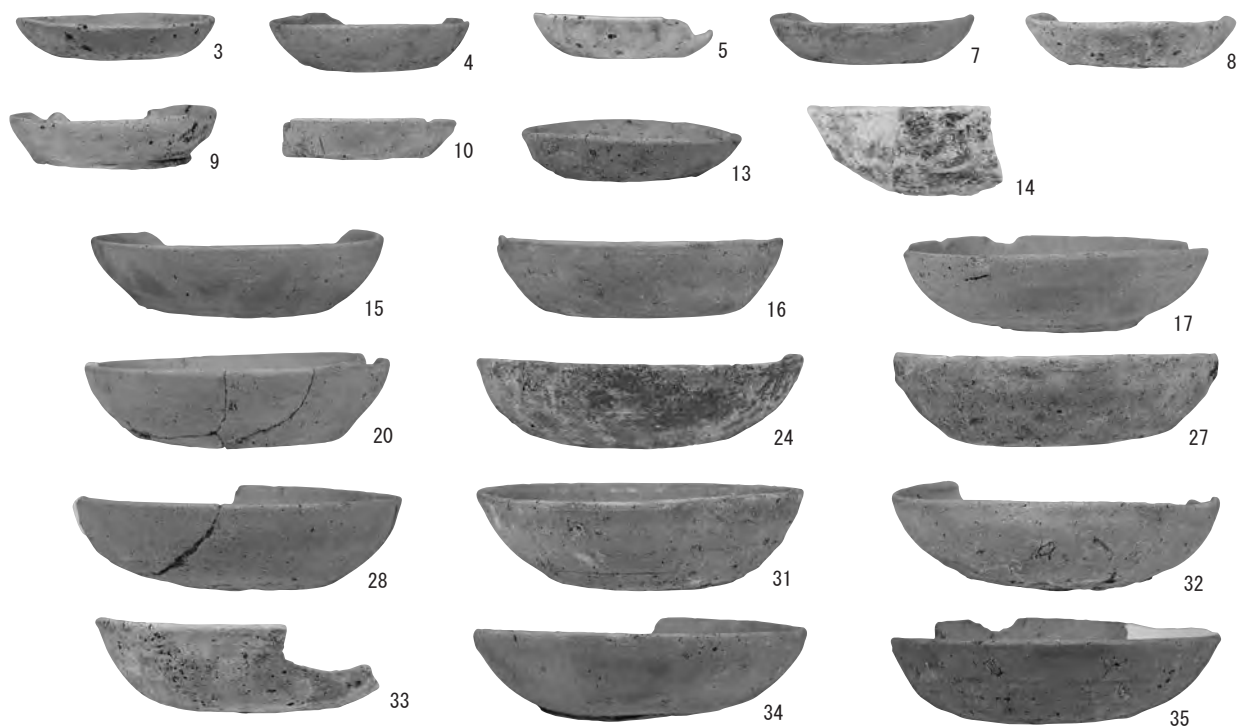
3. 第2面 構成土出土遺物



4. 第3面 池状遺構1上層出土遺物(1)

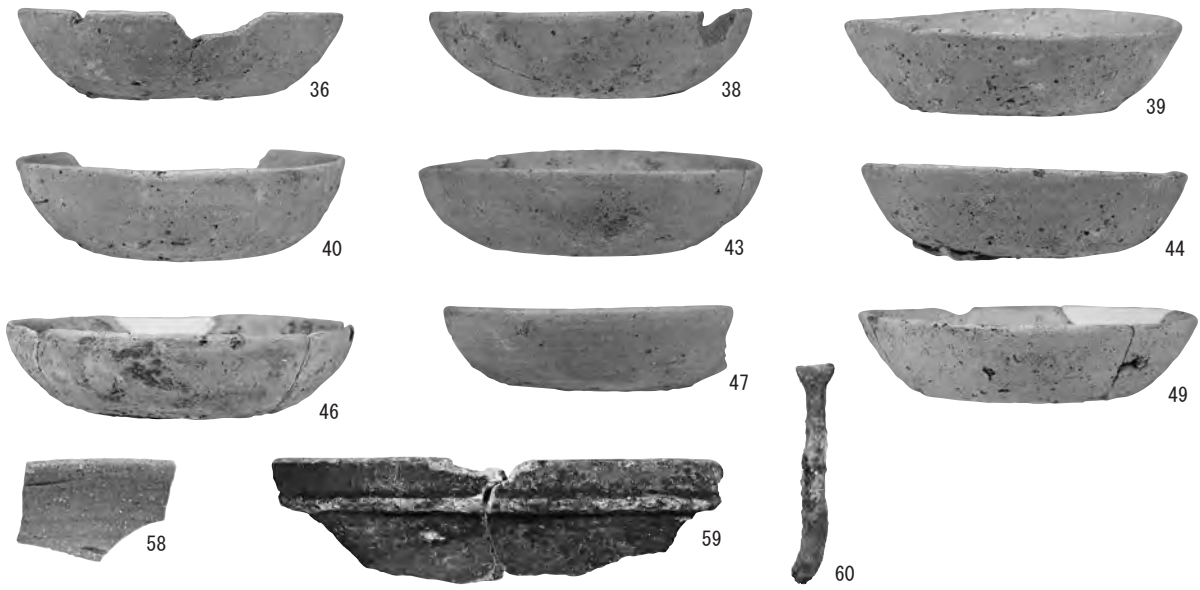


1. 第3面 池状遺構 1 上層出土遺物 (2)



2. 第3面 池状遺構 1 下層出土遺物 (1)

图版 8



1. 第3面 池状遺構 1 下層出土遺物 (2)



2. 第3面 池状遺構 1 木製品出土遺物 (1)



1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(2)

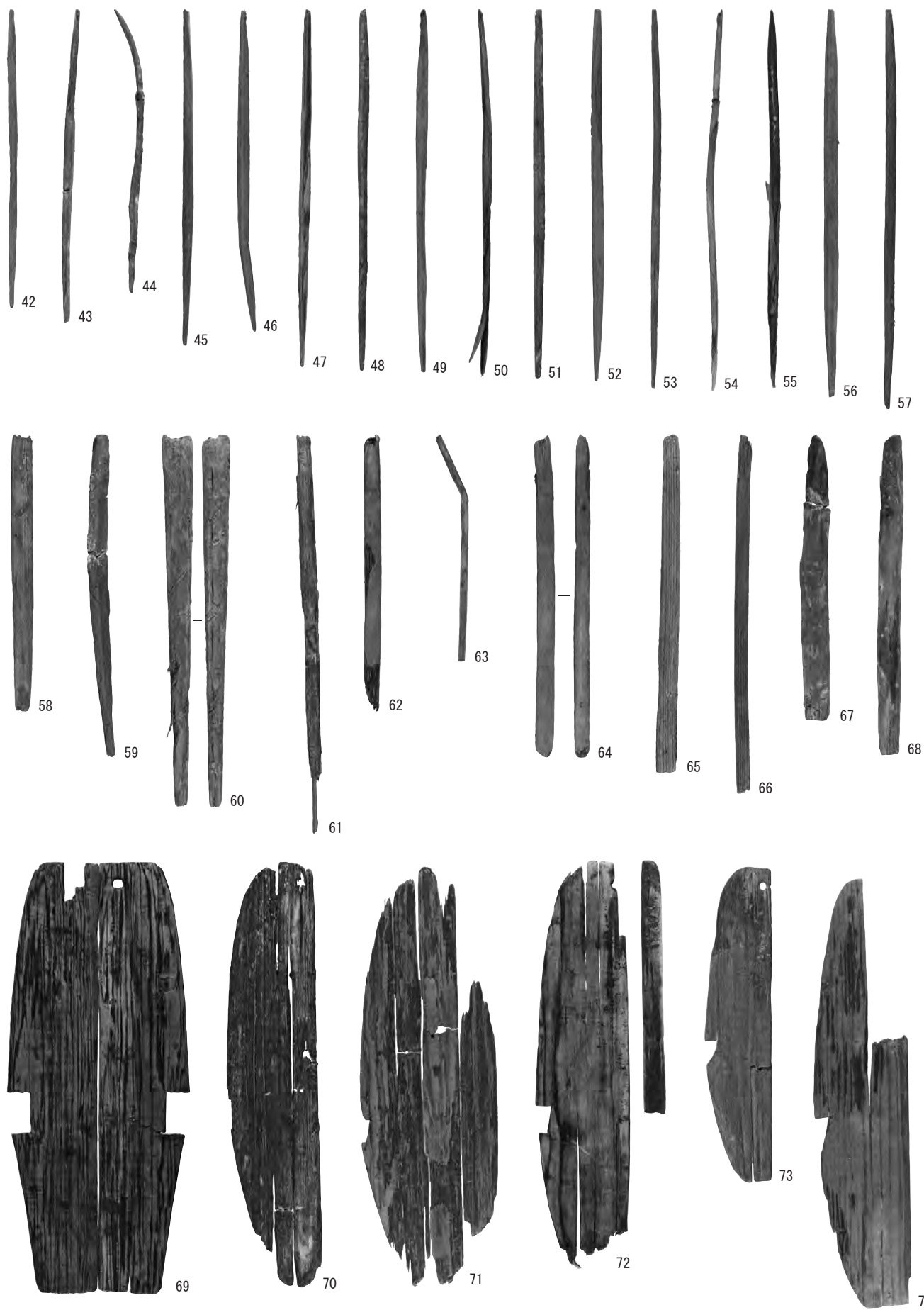


1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(3)



1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(4)

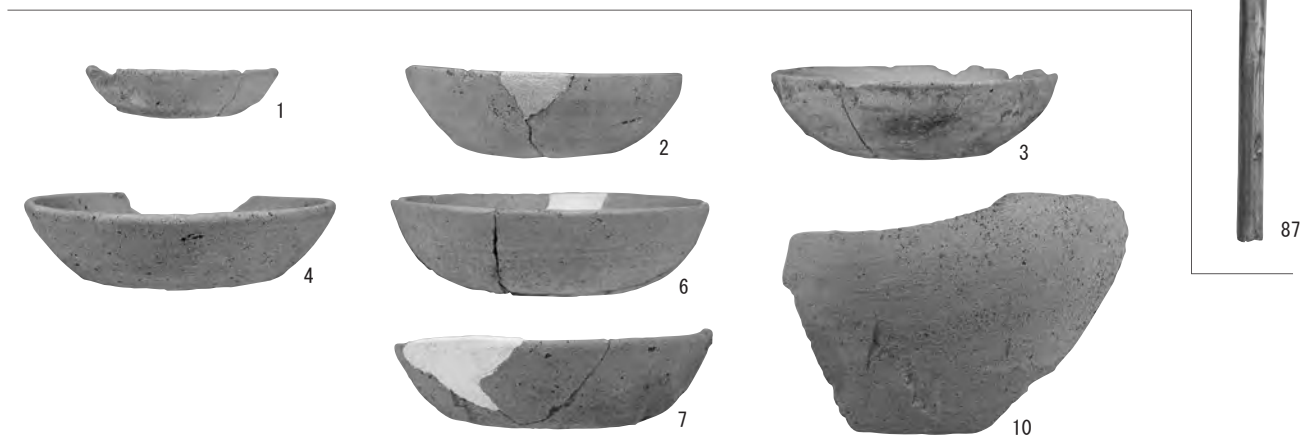
图版 12



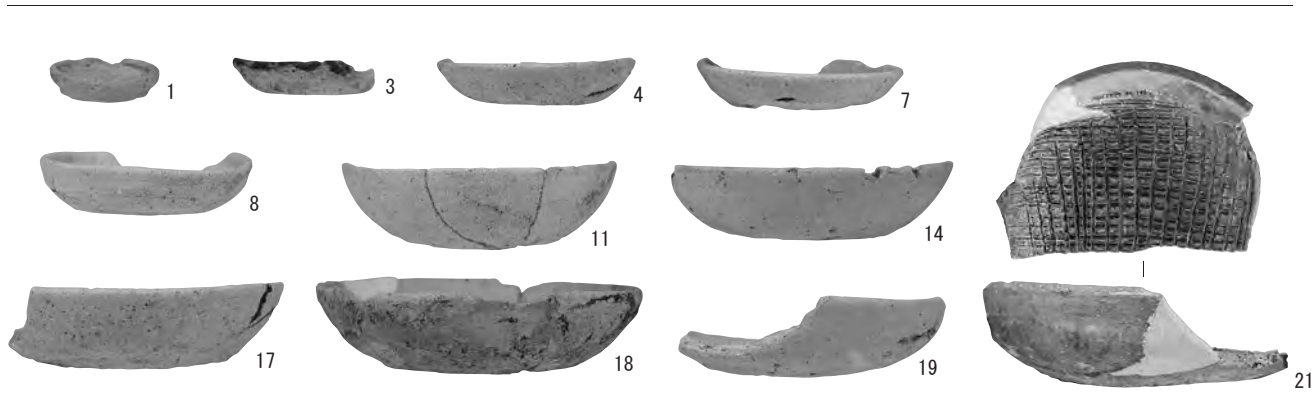
1. 第3面 池状遺構 1 木製品出土遺物 (5)



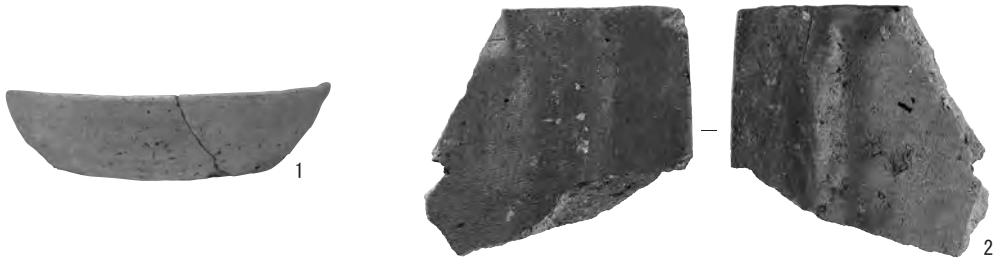
1. 第3面 池状遺構1 木製品出土遺物(6)



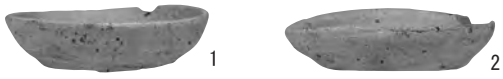
2. 第3面 遺構外出土遺物



3. 第3面 構成土出土遺物



1. 第4面 土坑15出土遺物



2. 第4面 構成土出土遺物



3. 第5面 溝状遺構2出土遺物



4. 出土動物遺体

安国寺跡 (No.174)

山ノ内字東管領屋敷147番9外地点

例 言

1. 本報は「安国寺跡」（神奈川県遺跡台帳No.174）内、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年2月12日～同年5月7日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約46㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子
調査員 赤堀祐子・平山千絵・梅岡ケイト・平井里永子
作業員 安達越郎・伴 一明・片山直文・清水政利・丹野正弘
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 第三章第9節の第9面溝状遺構9出土「呪符木簡」の积文は、特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所の松吉大樹氏にご教示を賜った。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「AKT0916」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
■ 炭層および炭化物分布範囲
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	118
第1節 調査に至る経緯と経過	118
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	118
第3節 周辺の考古学的調査	120
第二章 堆積土層	120
第三章 発見された遺構と遺物	124
第1節 第1面の遺構と遺物	124
第2節 第2面の遺構と遺物	126
第3節 第3面の遺構と遺物	130
第4節 第4面の遺構と遺物	136
第5節 第5面の遺構と遺物	139
第6節 第6面の遺構と遺物	145
第7節 第7面の遺構と遺物	151
第8節 第8面の遺構と遺物	155
第9節 第9面の遺構と遺物	156
第四章 まとめ	159

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	119	図16 第2面 土坑4出土遺物	128
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	121	図17 第2面 構成土出土遺物(1)	129
図3 調査区位置図	122	図18 第2面 構成土出土遺物(2)	130
図4 調査区配置図	122	図19 第3面 遺構分布図	130
図5 調査区北東壁 土層断面図	123	図20 第3面 溝状遺構1	131
図6 第1面 遺構分布図	124	図21 第3面 溝状遺構1出土遺物	132
図7 第1面 礎石建物1	124	図22 第3面 溝状遺構2	132
図8 第1面 遺構外出土遺物	125	図23 第3面 土坑5～13	133
図9 第1面 構成土出土遺物	125	図24 第3面 土坑13出土遺物	133
図10 第2面 遺構分布図	126	図25 第3面 ピット19・21	135
図11 第2面 切石基礎建物1	126	図26 第3面 遺構外出土遺物	135
図12 第2面 石列1	127	図27 第3面 構成土出土遺物(1)	135
図13 第2面 据鉢遺構1	127	図28 第3面 構成土出土遺物(2)	136
図14 第2面 据鉢遺構1出土遺物	127	図29 第4面 遺構分布図	136
図15 第2面 土坑1～4	128	図30 第4面 溝状遺構3	137

図31	第4面 土坑14出土遺物	137	図50	第6面 ピット58・59・62・73・75・ 78・86・88・89・91・95	148
図32	第4面 土坑15出土遺物	137	図51	第6面ピット出土遺物	150
図33	第4面 土坑14～20	138	図52	第6面 遺構外出土遺物	150
図34	第4面 土坑20出土遺物	138	図53	第7面 遺構分布図	151
図35	第4面 構成土出土遺物	139	図54	第7面 溝状遺構8	151
図36	第5面 遺構分布図	140	図55	第7面 ピット96・102・112・115	152
図37	第5面 溝状遺構4出土遺物	140	図56	第7面 ピット出土遺物	153
図38	第5面 溝状遺構4～6	141	図57	第7面 遺構外出土遺物	154
図39	第5面 溝状遺構5出土遺物	142	図58	第7面 構成土出土遺物	154
図40	第5面 溝状遺構6出土遺物	142	図59	第8面 遺構分布図	155
図41	第5面 土坑21～27	143	図60	第8面 土坑32	155
図42	第5面 ピット53	144	図61	第8面 ピット122・127・128・133	156
図43	第5面 遺構外出土遺物(1)	144	図62	第8面 ピット出土遺物	156
図44	第5面 遺構外出土遺物(2)	145	図63	第9面 遺構分布図	157
図45	第6面 遺構分布図	145	図64	第9面 板組遺構1	157
図46	第6面 溝状遺構7	146	図65	第9面 溝状遺構9	157
図47	第6面 土坑29出土遺物	146	図66	第9面 溝状遺構9出土遺物(1)	158
図48	第6面 土坑28～31	146	図67	第9面 溝状遺構9出土遺物(2)	159
図49	第6面 不明遺構1	147			

表 目 次

表1	安国寺跡 調査地点一覧表	120	表7	第6面 出土遺物観察表	165
表2	第1面 出土遺物観察表	162	表8	第7面 出土遺物観察表	165
表3	第2面 出土遺物観察表	162	表9	第8面 出土遺物観察表	166
表4	第3面 出土遺物観察表	163	表10	第9面 出土遺物観察表	166
表5	第4面 出土遺物観察表	163	表11	遺構計測表	167
表6	第5面 出土遺物観察表	164	表12	出土遺物一覧表	168

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点近景(南西から)	173	2. I区第2面全景(南西から)	175	
	2. I区調査開始時 近景 (西から)	173	3. 第2面 据鉢遺構1(北東から)	175	
図版2	1. I区北東壁土層断面(南西から)	174	図版4	1. I区第3面全景(北東から)	176
	2. II区北東壁土層断面(南西から)	174	2. II区第3面全景(北西から)	176	
図版3	1. I区第1面全景(南東から)	175	図版5	1. 第3面 溝状遺構1(東から)	177
			2. 第3面 調査風景(南西から)	177	
			図版6	1. I区第4面全景(北東から)	178
			2. II区第4面全景(北東から)	178	

	3. I区第5面全景(南西から)……178		3. 第3面 土坑13出土遺物 ……182
	4. I区第6面全景(南西から)……178		4. 第3面 遺構外出土遺物 ……182
	5. II区第5面全景(北西から)……178		5. 第3面 構成土出土遺物 ……182
	6. II区第6面全景(北西から)……178	図版11	1. 第4面 土坑14出土遺物 ……183
	7. 第5面 溝状遺構5(西から)……178		2. 第4面 土坑15出土遺物 ……183
	8. 第6面 溝状遺構7木組護岸跡 (南東から) ……178		3. 第4面 土坑20出土遺物 ……183
図版7	1. I区第7面全景(南西から)……179		4. 第4面 構成土出土遺物 ……183
	2. II区第7面全景(北東から)……179		5. 第5面 溝状遺構4出土遺物 ……183
	3. I区第8面全景(南西から)……179	図版12	1. 第5面 溝状遺構6出土遺物 ……184
図版8	1. 第9面全景(南東から) ……180		2. 第5面 遺構外出土遺物 ……184
	2. 第9面 板組遺構1(北から) ……180		3. 第6面 土坑29出土遺物 ……184
図版9	1. 第1面 遺構外出土遺物 ……181		4. 第6面 ピット出土遺物 ……184
	2. 第1面 構成土出土遺物 ……181		5. 第6面 遺構外出土遺物 ……184
	3. 第2面 据鉢遺構1出土遺物 ……181	図版13	1. 第7面 ピット出土遺物 ……185
	4. 第2面 土坑4出土遺物 ……181		2. 第7面 遺構外出土遺物 ……185
	5. 第2面 構成土出土遺物(1) ……181		3. 第7面 構成土出土遺物 ……185
図版10	1. 第2面 構成土出土遺物(2) ……182	図版14	1. 第8面 ピット出土遺物 ……186
	2. 第3面 溝状遺構1出土遺物 ……182		2. 第9面 溝状遺構9出土遺物 ……186

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である安国寺跡（神奈川県遺跡台帳No.174）の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成21年9月29日～同年10月1日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が開発予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約46㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年2月12日～同年5月7日までの3ヵ月ほどである。現地表の標高は約30.6mを測る。廃土処理の都合から調査区を2区に分け、北西側をⅠ区として平成22年2月15日～同年3月19日、南東側をⅡ区として平成22年3月24日～同年4月28日まで調査を実施した。調査はまず重機により約60cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、Ⅰ区では中世に属する第1～9面の合計9面にわたる遺構確認面が検出され、Ⅱ区ではⅠ区に対応する第3～7面の合計5面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして5月7日をもって、現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA 9）に準じた、鎌倉市三級基準点（ $X = -74383.457$ 、 $Y = -25445.426$ ）、（ $X = -74464.083$ 、 $Y = -25378.797$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.43416（標高28.922m）を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市山ノ内字東管領屋敷147番9外に位置し、「安国寺跡（No.174）」の範囲内に所在する。安国寺跡は鎌倉市の北部域に位置し、調査地点はJR北鎌倉駅の南西側を走る鎌倉街道を鎌倉方面に750mほど進んだ街道の東側に位置している。地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷の中に位置し、その谷地を鎌倉街道とJR横須賀線がほぼ並行して走っている。この開析谷に面した両側は、複雑に入り組んだ大小の谷戸が形成されており、丘陵頂部から湧出した小河川は地形に沿って低地に流れ込み、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、その流れは市域の北西部で柏尾川に合流している。鎌倉街道に向けて開けた谷戸のひとつが明月院のある明月谷で、この谷戸の並びが本遺跡の所在する東管領屋敷の地区である。

隣接する包蔵地としては、鎌倉街道沿いの北側に徳泉寺跡（No.173）、正法寺跡（No.172）、南側に保寧寺跡（No.175）があり、街道を挟んだ西側には建長寺旧境内遺跡（No.397）が南北に細長い範囲に展開している。また、この鎌倉街道沿いには、円覚寺や東慶寺、浄智寺、明月院、長寿寺、建長寺などの鎌倉を代表する寺院が集まっており、これら以外にも明月院には第3代執権北条時頼が建立した「最明寺」や

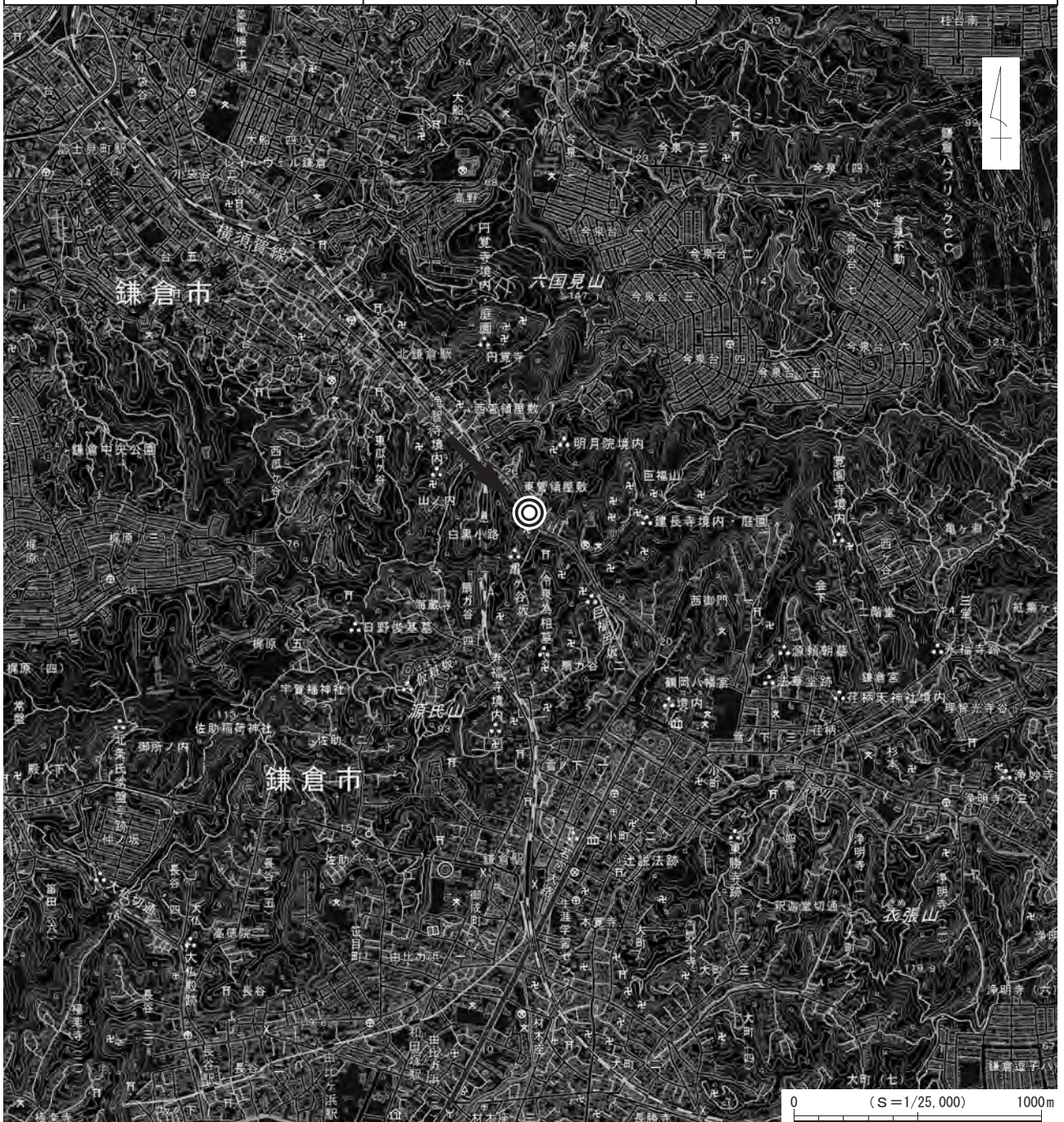


図1 遺跡位置図

第8代執権北条時宗が建立した「禅興寺」などの存在が伝えられている。とりわけ本調査地点一帯は、建長寺をはじめとする臨済宗の拠点であったといえよう。

この他に建長寺境内を描いた徳川光圀施入と伝えられている『建長寺伝延宝寺図』には、廃寺も含めて49院の塔頭が描かれている。本遺跡名の由来である安国寺跡もそのひとつで、その並びには正法寺跡や徳泉寺跡、保寧寺跡などが軒を連ねていたことが知られる。さらに、この付近の住所表記にもなっている「管領屋敷」は室町期以降に関東管領上杉氏の屋敷があった場所とされており、現在は明月院の入り口を起点に円覚寺側を西管領屋敷、建長寺側を東管領屋敷と呼称されている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。本地点は北東-南西方向に長い包蔵地範囲の南西端に位置し、鎌倉街道の東側に面している。本遺跡の調査例は今回報告する地点のみであり、周辺遺跡を含めても本地域は調査例の極めて少ない場所といえる。

鎌倉街道の東沿いに調査事例が点在し、北側から遺跡の様相をみていくと、①は山ノ内道周辺遺跡の山ノ内東管領屋敷180番10地点で、鎌倉時代後期から室町期にかけての生活面が2面で検出された(鎌倉市教育委員会 1997)。ここでは明月谷の谷戸奥から流れ出した明月川とほぼ同じ方向を示す溝が発見されている。②は山ノ内上杉邸跡の山ノ内字東管領屋敷179番39地点で、本報告に詳細な報告がなされている。調査地点からは5面にわたる中世の生活面が検出され、礎石建物や掘立柱建物、溝などの他に菟池と推定される遺構が発見されている。本遺跡の北側に隣接する徳泉寺跡の③山ノ内字東管領屋敷168番4地点からは、中世の地業1ヵ所と中世～近世に属する河川1本が検出された(永田・齋藤 2018)。調査地点が街道の東側に面しており、建長寺から流れ出る小河川の東側に隣接していることから、検出された河川はこの旧流路にあたる可能性が指摘されている。本遺跡の南側に隣接する保寧寺跡の④山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点では3面にわたる遺構確認面が調査され、15世紀代の石列や石組遺構、土坑などが検出された(手塚 1997)。調査区からは寺を想起させるような遺構は発見されていないが、舶載陶磁器や茶の湯に関連した遺物が出土したため、調査者は寺の境内であった可能性を指摘している。

表1 安国寺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	安国寺跡 (No. 174)	山ノ内字東管領屋敷147番9外地点	
①	山ノ内道周辺遺跡 (No. 136)	山ノ内字東管領屋敷180番10地点	鎌倉市教育委員会 1997
②	山ノ内上杉邸跡 (No. 170)	山ノ内字東管領屋敷179番39地点	本報告
③	徳泉寺跡 (No. 173)	山ノ内字東管領屋敷168番4地点	永田・齋藤 2018
④	保寧寺跡 (No. 175)	山ノ内字東管領屋敷133番3・9地点	手塚 1997

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～9面までの合計9面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区北東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭であった遺構が認められた。

現地表面は標高約30.6mを測り、最上部には層厚25～55cmの表土(1層)と層厚6～27cmの泥岩粒と炭化物を含む灰茶色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3層上面で検出した。確認面の



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

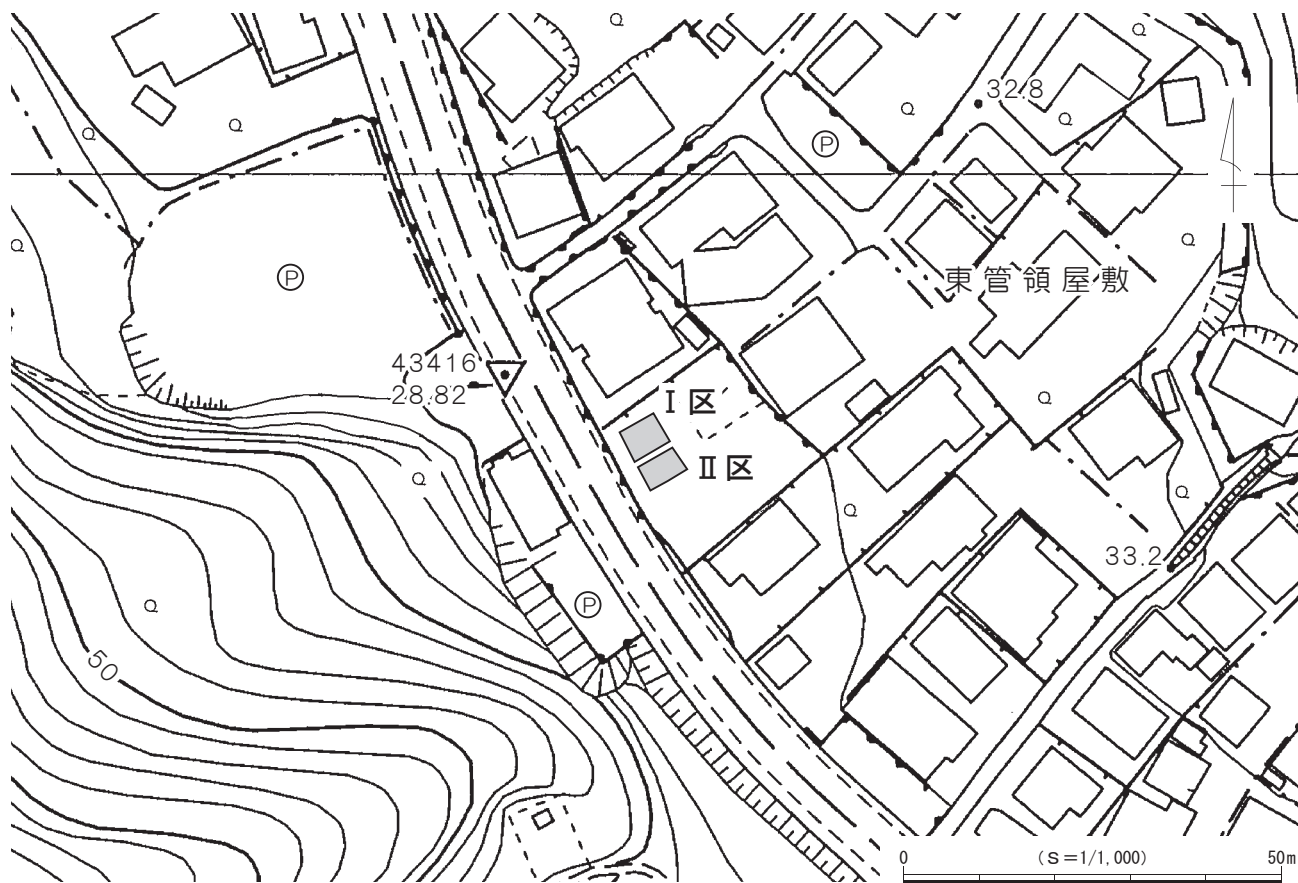
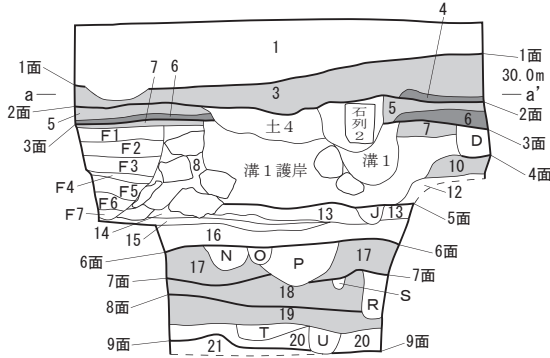


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

I 区北東壁

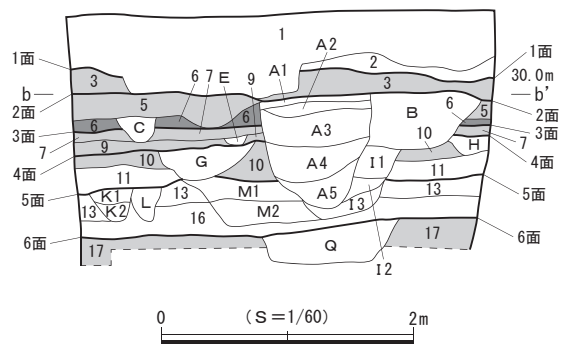


- 1層 表土層
- 2層 灰茶色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。締まりなし。
- 3層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。(第1面)
- 4層 炭層
- 5層 泥岩整地層 (第2面)
- 6層 炭化物層 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- 7層 泥岩整地層 (第3面)
- 8層 大形泥岩ブロック層
- 9層 泥岩整地層 炭化物含む。
- 10層 泥岩整地層 (第4面)
- 11層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック少量含む。締まりなし。
- 12層 暗灰色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- 13層 暗青灰色シルト (第5面)
- 14層 青灰色シルト 締まりあり。
- 15層 青灰色シルト 泥岩粒子含む。
- 16層 黒色粘質土 泥岩粒子多量に含む。
- 17層 泥岩整地層 (第6面)
- 18層 泥岩整地層 (第7面)
- 19層 泥岩整地層 (第8面)
- 20層 暗褐色有機質土
- 21層 暗青灰色粘質土 暗褐色有機質土含む。締まりなし。(第9面)

〔遺構〕

- A1層 暗茶褐色粘質土 炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- A2層 灰黄色シルト 炭化物少量含む。締まりなし。
- A3層 大形泥岩ブロック層
- A4層 暗灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- A5層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- B層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物含む。
- C層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・泥岩ブロック含む。
- D層 暗灰色シルト 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- E層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・かわらけ片含む。締まりなし。
- F1層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック微量含む。
- F2層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック含む。
- F3層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- F4層 灰黄色粘質土 やや砂質。
- F5層 灰黄色粘質土 炭化物微量含む。締まり・粘性あり。
- F6層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。締まりなし。
- F7層 灰黄色粘質土 泥岩粒子含む。締まりなし。

II 区北東壁



- G層 灰黄色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- H層 暗灰色シルト 炭化物少量含む。締まりなし。
- I1層 暗茶色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。締まりなし。
- I2層 暗灰青色粘質土 泥岩粒子・泥岩ブロック含む。締まりなし。
- I3層 暗灰青色シルト 泥岩ブロック・かわらけ片少量含む。締まりなし。
- J層 灰茶色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・貝片含む。締まりなし。
- K1層 黒色粘質土 泥岩ブロック・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- K2層 黒色粘質土 泥岩ブロック少量、炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- L層 灰黒色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- M1層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- M2層 黒青灰色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし。
- N層 焼土層 炭化物含む。
- O層 黒色粘質土 泥岩粒子・炭化物含む。
- P層 黒色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- Q層 黒色粘質土 泥岩ブロック含む。締まりなし、粘性あり。
- R層 黒色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- S層 青灰色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。
- T層 黒色粘質土 泥岩ブロック少量含む。
- U層 青灰色粘質土 泥岩ブロック多量に含む。

図5 調査区北東壁 土層断面図

標高は約30.1~30.3mを測る。3層は多量の泥岩ブロックを含む灰黄色粘質土による整地層で、層厚8~35cmである。3層の下位には部分的に炭層(4層)が認められた。第2面は5層上面で確認し、確認面の標高は29.9~30.0mを測る。5層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚5~25cmである。5層の下位には泥岩ブロックを含む炭化物層(6層)が層厚5~18cm堆積している。第3面は7層上面で確認し、確認面の標高は29.7~29.8mを測る。7層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚3~12cmである。7層の下位には大形の泥岩ブロック層(8層)、炭化物を含む整地層(9層)が堆積している。第4面は10層上面で確認し、確認面の標高は29.5~29.7mを測る。10層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚10~32cmである。10層の下位には、少量の泥岩ブロックを含む黒青灰色粘質土(11層)と暗灰色粘質土(12層)が堆積している。第5面は13層上面で確認し、確認面の標高は29.1~29.3mを測る。13層は暗青灰色シルト層で、層厚7~20cmである。13層の下位には、青灰色シルト(14・15層)が部分的にみられ、さらにその下に多量の泥岩粒子を含む黒色粘質土(16層)が、調査区全体に層厚13~25cm堆積している。第6面は17層上面で確認し、確認面の標高は28.8~29.0mを測る。17層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚30cm前後である。第7面は18層上面で確認し、確認面の標高は28.5~28.6mを測る。18層は泥岩ブロックによる整地層で、層厚10~30cmである。第8面は19層上面で確認し、確認面の標高は28.3~28.4mを測る。19層は泥岩ブロック層による整地層で、層厚12~25cmである。19層の下位には木片や木製品を主体とする暗褐色有機質土(20層)が、層厚10~20cm堆積している。遺構確認面の最下位にあたる第9面は、21層上面で確認した。確認面の標高は約28.0mを測る。21層は暗褐色有機質土を含む暗青灰色粘質土である。

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面はⅠ区では第1～9面までの合計9面、Ⅱ区ではⅠ区に対応する第3～7面の合計5面である。第1・2面の遺構はⅡ区では確認されなかったため、遺構分布図はⅠ区のみを掲載した。遺構確認面はいずれも中世に属し、検出した遺構は、礎石建物1棟、切石基礎建物1棟、溝状遺構9条、板組遺構1基、石列1条、据鉢遺構1基、土坑32基、不明遺構1基、ピット137基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～9面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は30.1～30.3mを測る。3層は多量の泥岩ブロックを含む灰黄色粘質土による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟である(図6)。Ⅰ区の東側には明瞭な整地面が残存しているが、南西側は攪乱によって広い範囲が失われ本来の様相は明らかではない。なお、Ⅱ区は遺構が検出されなかったため、遺構分布図はⅠ区のみを図示した。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物1(図7)

本址は礎石が現存するⅠ区内の配置関係から礎石建物を想定したものである。Ⅰ区の西側は攪乱が広く及んでいることから、本址の南西側は失われている可能性が高く、加えて北西・北東および南東側は調査区外に展開していることが予想され、全容を把握することはできなかった。本址は多量の泥岩ブロックを含む整地面の上に構築されており、調査区内では礎石8基を確認したが、いずれも掘り方は検出されていない。

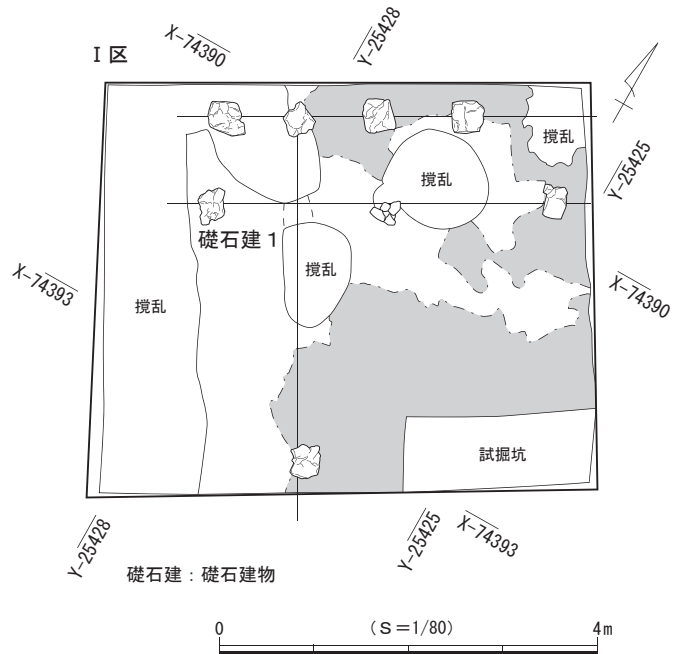


図6 第1面 遺構分布図

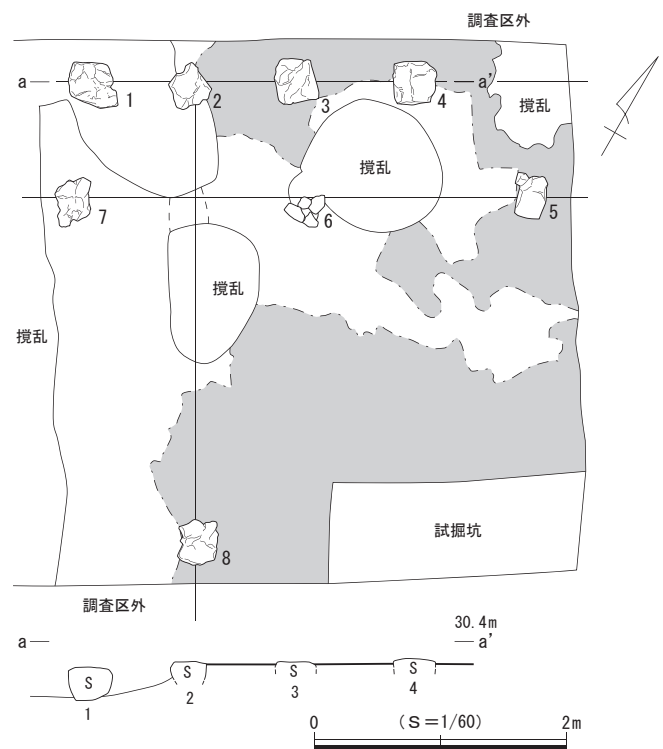


図7 第1面 礎石建物1

本址は礎石の配置から北東-南西方向の柱間(礎石1~礎石4)が4間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法はおおむね90cm等間である。北西-南東方向の規模については遺存状態が悪いため判然としないが、同じ柱列と考えられる礎石2と礎石8との距離は3.6mを測ることから、北東-南西方向の柱間寸法を参考に柱間を推定するならば4間以上の建物が想定される。I区の南東側に隣接するII区では本址の続きは確認されなかったことから、最大で5間の規模をもつと推定される。礎石1~礎石4の南側で礎石5~礎石7とした3基の礎石からなる礎石列を確認し、柱間は1.8m等間である。検出範囲から推定される主軸方位は、N-60°-Eを指す。

礎石の大きさは長さ30~37cmを測り、上面の標高は西端部に位置する礎石1のみ30.20mと他と比較してやや低いが、その他の礎石は30.25~30.28mの範囲に収まり、ほぼ一定している。

遺物は出土しなかった。

(2) 第1面 遺構外出土遺物(図8)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち5点を図示した。

1~5はロクロ成形によるかわらけである。

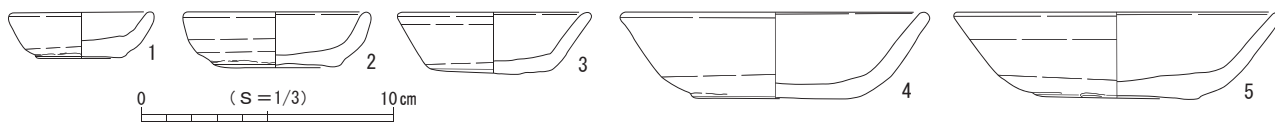


図8 第1面 遺構外出土遺物

(3) 第1面 構成土出土遺物(図9)

第1面構成土中からも遺物が出土しており、このうち11点を図示した。

1~8はロクロ成形によるかわらけであり、2・3・4・6の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。9は瀬戸産の直縁大皿、10は常滑産の甕を転用した摩耗陶片である。11は銭貨で、天聖元寶(1023年初鑄)である。

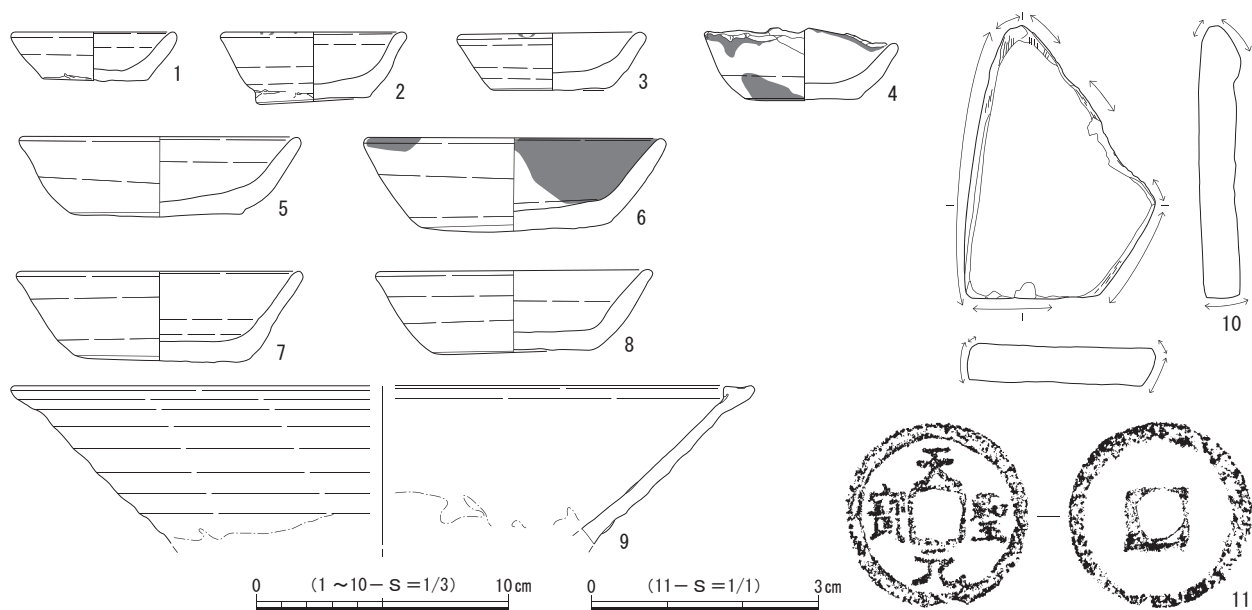


図9 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は堆積土層の5層上面で検出され、確認面の標高は29.9~30.0mを測る。5層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、切石基礎建物1棟、石列1条、据鉢遺構1基、土坑4基、ピット3基である(図10)。これらの遺構はI区の北半部を中心に検出されたが、分布は全体にまばらである。切石基礎建物1と石列1はともに切石を使用した遺構で、おそらく建物を構成していたと考えられるが調査範囲の制約からごく一部の調査にとどまり、遺構の詳細は判然としなかった。また、調査区内には明瞭な整地面が広がるが、切石基礎建物の周囲のみ確認されなかった。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉~中葉頃に属すると考えられる。

(1) 切石基礎建物

切石基礎建物1(図11)

I区の北西壁際中央に位置する。東隅を攪乱によって壊され、北西側は調査区外に続いているため、全容を把握できなかった。泥岩ブロックを密に含み焼土も含む茶褐色土の上に、砂質凝灰岩の切石を南東面が直線的になるよう列状に配置し、南側で北西へ向かって直角に折れて調査区外の北西側に続いていると考えられる。また、攪乱の北西側にあたる調査区壁際からも水平に据えられた切石が1個出土した。この切石上面の標高は30.10mを測り、配列された切石とほぼ同じであることから、本址の一部と考えられる。調査区内ではおそらく切石がコ字状にめぐっていたと推定され、その内部には焼土の堆積が認められた。規模は北東-南西方向の現存長2.47m、北西-南東方向の現存長1.85mを測る。主軸方位はN-40°-Eを指す。切石の大きさは長さ26~56cm、幅22~40cm、高さ18~20cmで、切石上面の標高は29.80~29.97mを測る。

遺物は出土しなかった。

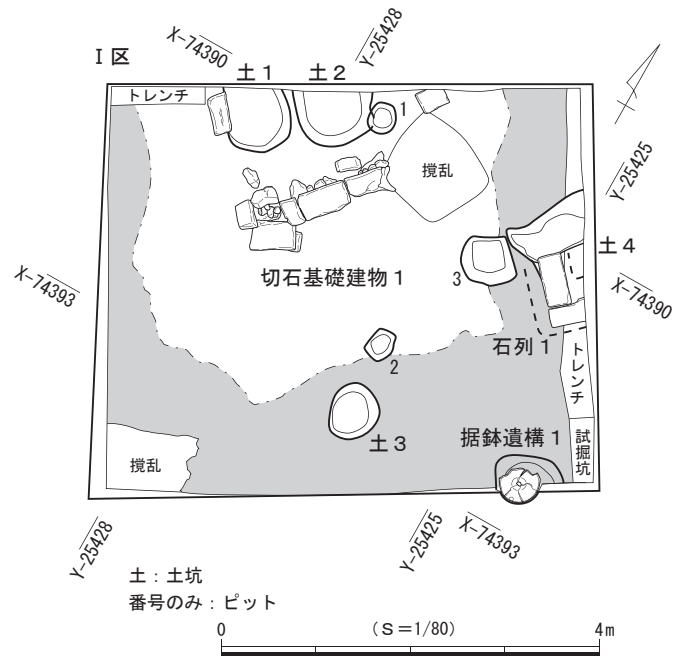


図10 第2面 遺構分布図

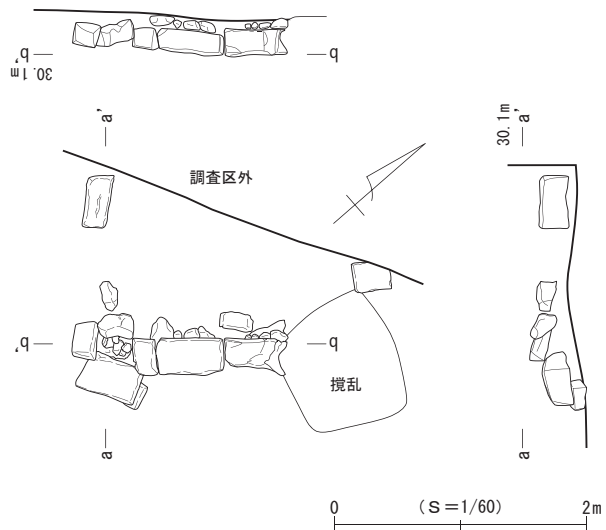


図11 第2面 切石基礎建物1

(2) 石 列

石列 1 (図12)

I 区の北東壁際中央に位置する。北東側は調査区外へと続いており、一部を調査したにとどまる。砂質凝灰岩の切石 2 個を直角に配置し、切石の上面が水平になるように埋置する。規模は北西 - 南東方向の現存長 77cm、北東 - 南西方向の現存長 40cm で、主軸方位は N - 44° - W を指す。切石の大きさは長さ 55cm、幅 26cm、高さ 39cm で、礫上面の標高は 29.95m を測る。調査区壁面の断面観察により幅 54cm、深さ 42cm の掘り方をもつことが明らかとなった。

遺物は出土しなかった。

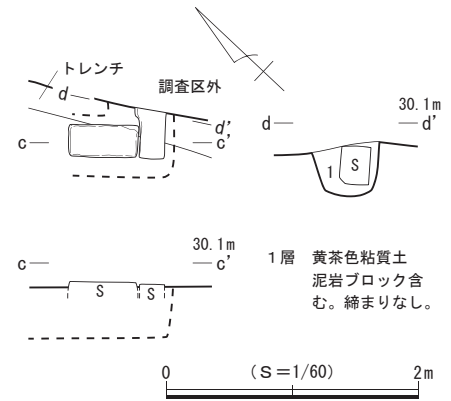


図12 第2面 石列 1

(3) 据鉢遺構

据鉢遺構 1 (図13)

I 区の東隅に位置する。調査区内では他の遺構と重複せずに単独で確認されたが、南東側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。平面形が円形と推定される掘り方の西壁寄りに、鉢の胴部下半を正位に埋置する。掘り方の底面は北東側に向かってやや傾斜し、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形状を呈し、規模は北東 - 南西方向の現存長 64cm、北西 - 南東方向の現存長 46cm、深さ 13cm で、底面の標高は 29.88m を測る。

出土遺物 (図14)

本址には鉢が据えられており、それを図示した。このほかに、かわらけ 5 点、陶器 1 点が出土した。

1 は常滑産片口鉢 II 類で、9 ~ 10 型式に比定される。

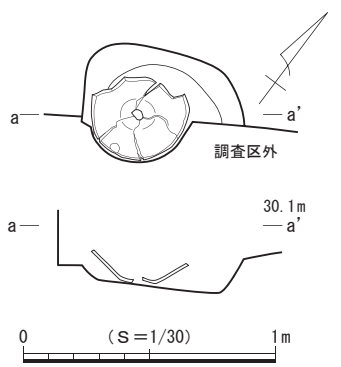


図13 第2面 据鉢遺構 1

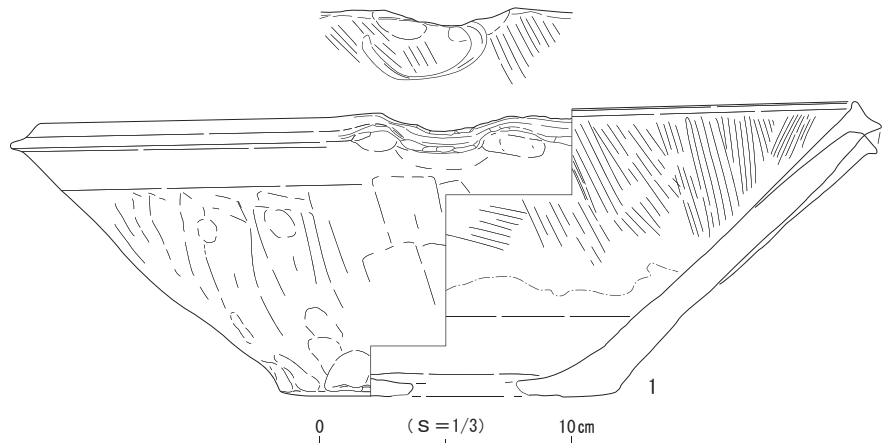


図14 第2面 据鉢遺構 1 出土遺物

(4) 土 坑

土坑 1 (図15)

I 区北東壁際の中央西寄りに位置する。切石基礎建物 1 の下位より検出され、同一の生活面における新旧関係と捉えられた。調査区内では他の遺構と重複せずに単独で確認されたが、北西側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長 78cm、短軸 69

cm、深さ24cmで、坑底面の標高は29.51mを測る。主軸方位はN-37°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑2 (図15)

I区北東壁際の中央に位置する。切石基礎建物の下位より検出され、同一の生活面における新旧関係と捉えられた。東側でピット1と重複して東壁の一部が壊され、北西側は調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面はほぼ平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長86cm、北東-南西方向の現存長69cm、深さ10cmで、坑底面の標高は29.71mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑3 (図15)

調査区南東付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸61cm、短軸53cm、深さ20cmである。坑底面の標高は29.90mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑4 (図15)

調査区北東壁際の中央北寄りに位置する。北東側が調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整長方形と考えられ、底面はほぼ平らである。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長92cm、短軸51cm、深さ26cmで、坑底面の標高は29.65mを測る。主軸方位はN-34°-Eを指す。

出土遺物 (図16)

遺物はかわらけ20点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけで、口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。

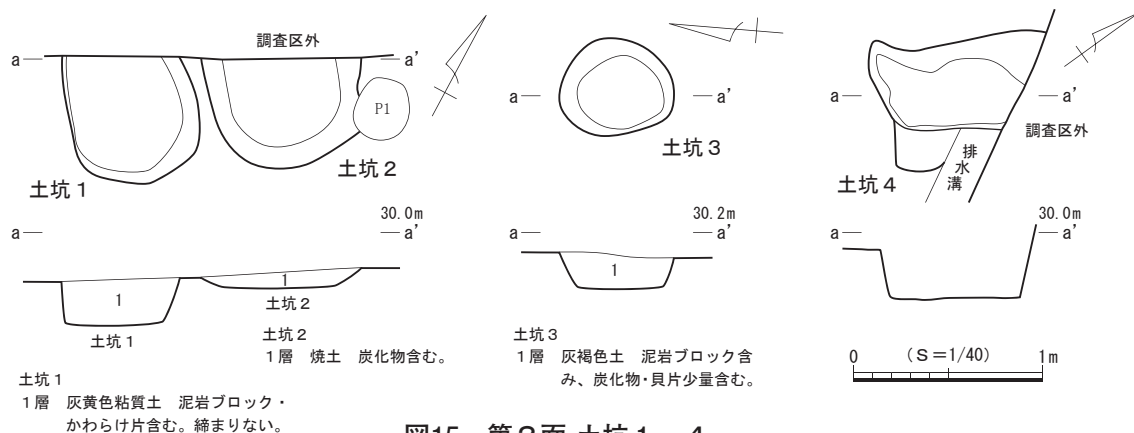


図15 第2面 土坑1～4



図16 第2面 土坑4 出土遺物

(4) ピット

第2面では、3基を検出した。いずれも調査区東半に位置する。礎石や礎板を伴うピットはなく、調査区内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は楕円形ないし隅丸方形を呈し、規模は長軸32~55cm、深さ12~69cmを測る。

ピットから遺物は出土しなかった。

(5) 第2面 構成土出土遺物 (図17・18)

第2面構成土中からも遺物が出土しており、このうち21点を図示した。

1~7はロクロ成形によるかわらけで、1の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。8・9は龍泉窯系青磁で、8は水瓶、9は太鼓胴深鉢である。10~15は瀬戸産の製品で、10・11は縁釉小皿、12は卸皿、13・14は直縁大皿、15は折縁深皿である。16は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。17~20は瓦質土器類で、17は香炉、18・19は火鉢、20は土風炉である。21は高嶋産の硯で、裏面に「主俊賢」「不有他妨有也」の刻字がなされている。

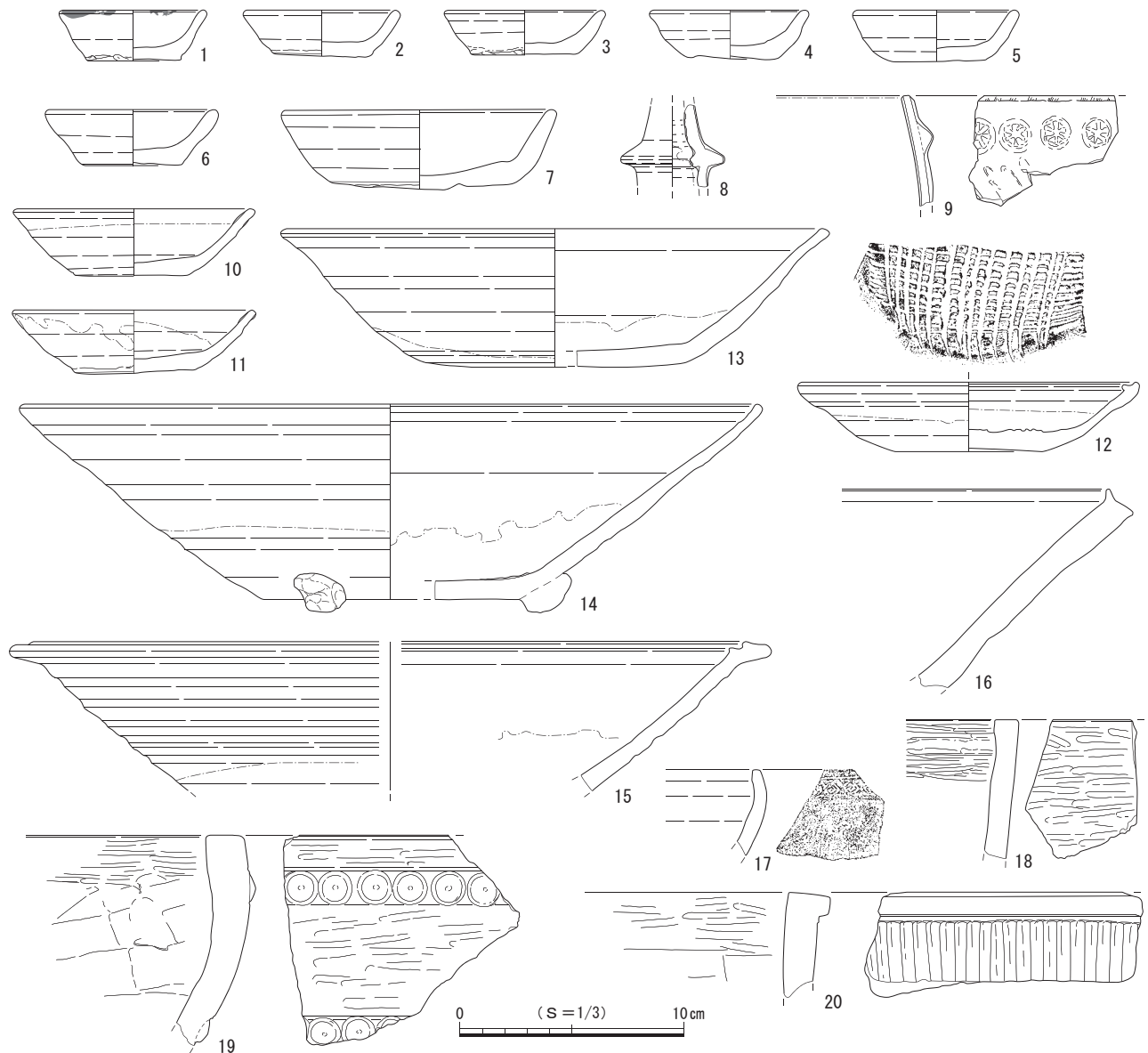


図17 第2面 構成土出土遺物 (1)

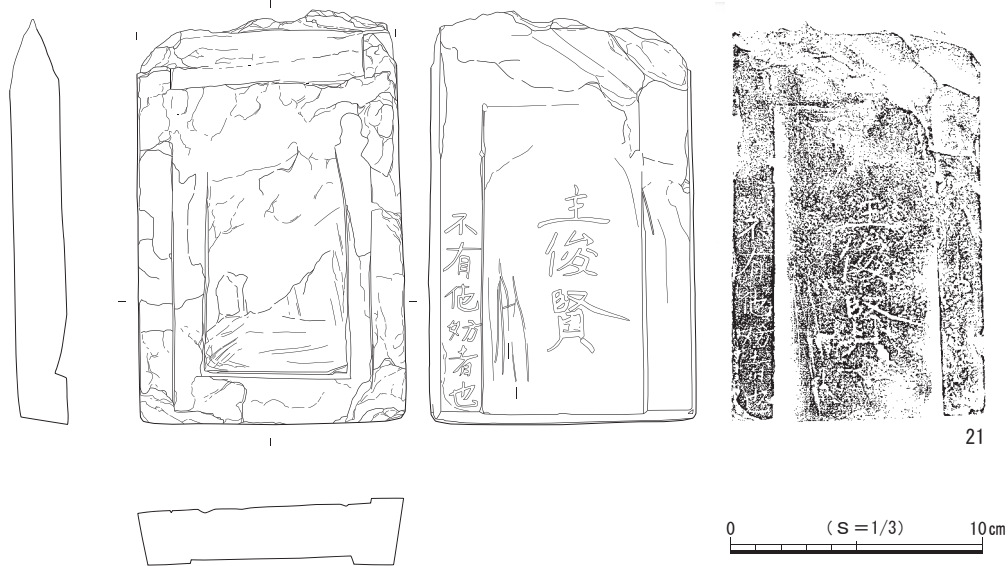


図18 第2面 構成土出土遺物(2)

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構はⅠ・Ⅱ区の堆積土層の7層上面で検出され、確認面の標高は29.7~29.8mを測る。7層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構2条、土坑9基、ピット22基である(図19)。Ⅱ区の北側に遺構の空白域が認められるが、それ以外には満遍なく分布する様相が捉えられた。なお、Ⅰ区の中央やや南を溝状遺構1が北東-南西方向に横断し、その南側に沿って明瞭な整地面の広がり方が確認された。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図20)

Ⅰ区の中央やや南に位置し、北東-南西方向に横断して調査区外へと延びている。調査区内では他の遺構と重複せず、北東-南西方向におおむね直線的に延びており、検出した規模は現存長約5.0m、幅80cm、深さは最大で73cmを測る。底面の標高は北東側で29.20m、南西側で29.14

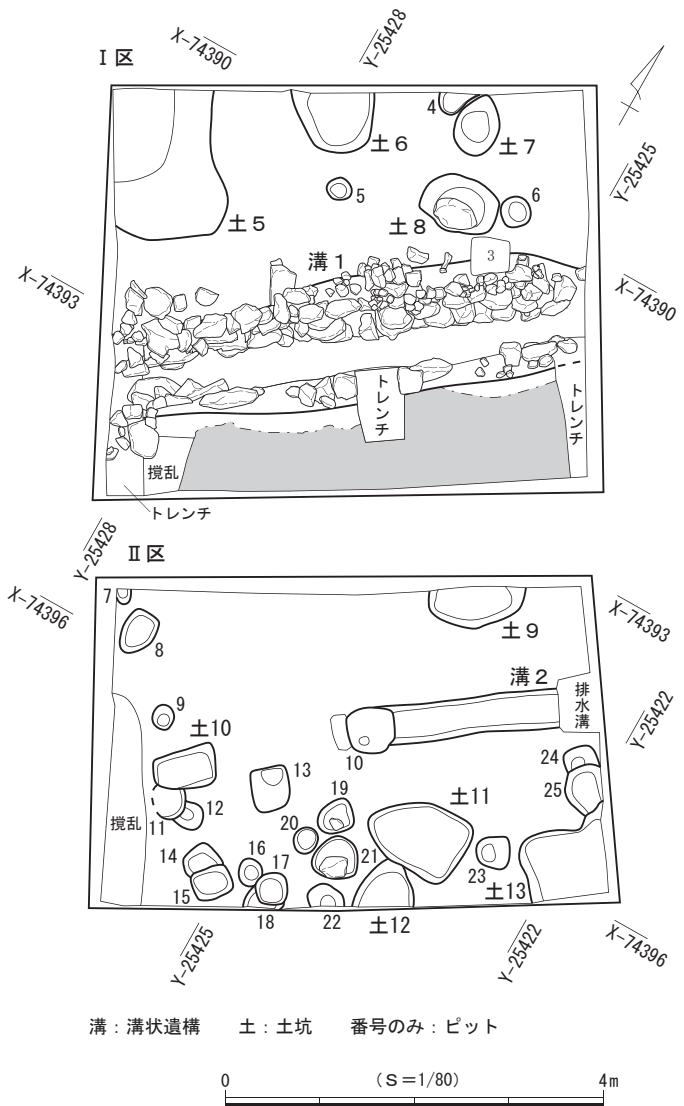


図19 第3面 遺構分布図

mで、北東から南西に向かってわずかに傾斜する。壁はやや開いて立ち上がり、逆台形を呈する。主軸方位はN-52°-Eを指す。

両側壁面には泥岩の切石を用いた護岸が築かれる。北西壁面は検出範囲では全面に切石による護岸が築かれ、部分的に崩れて配置が乱れているところもあるが、切石は北西面を斜めに揃えて3~6段に積み上げている。護岸の幅は裏込めも含めると45~100cmで、高さは60~78cmを測り、傾斜角は南西側で64度、北東側で47度である。南東壁面は切石の分布がまばらで、残存するところをみると北東側では切石の北西面を揃え3段にわたってほぼ垂直に積み上げられている。切石の大きさは長さ10cm前後のものから60cm大のものまで大小様々であり、全体にややランダムに積み上げている印象を受ける。なお、本址の南東側に沿って明瞭な整地面が検出されている。

本址の掘り方はわずかに湾曲して延びており、壁がやや開き断面形は逆台形を呈する。規模は幅1.60~1.85m、深さ65cm、底面の標高は29.14~29.20mを測る。

出土遺物(図21)

遺物は溝覆土から、かわらけ157点、磁器1点、陶器52点、瓦質土器11点、瓦4点、土製品1点、土師器1点、金属製品1点、掘り方から、かわらけ40点、磁器1点、陶器8点、瓦質土器6点、金属製品2点が出土し、このうち6点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。3~5は瀬戸産の陶器類で、3は平碗、4は天目茶碗、5は直縁大皿である。6は瓦質土器の燭台である。

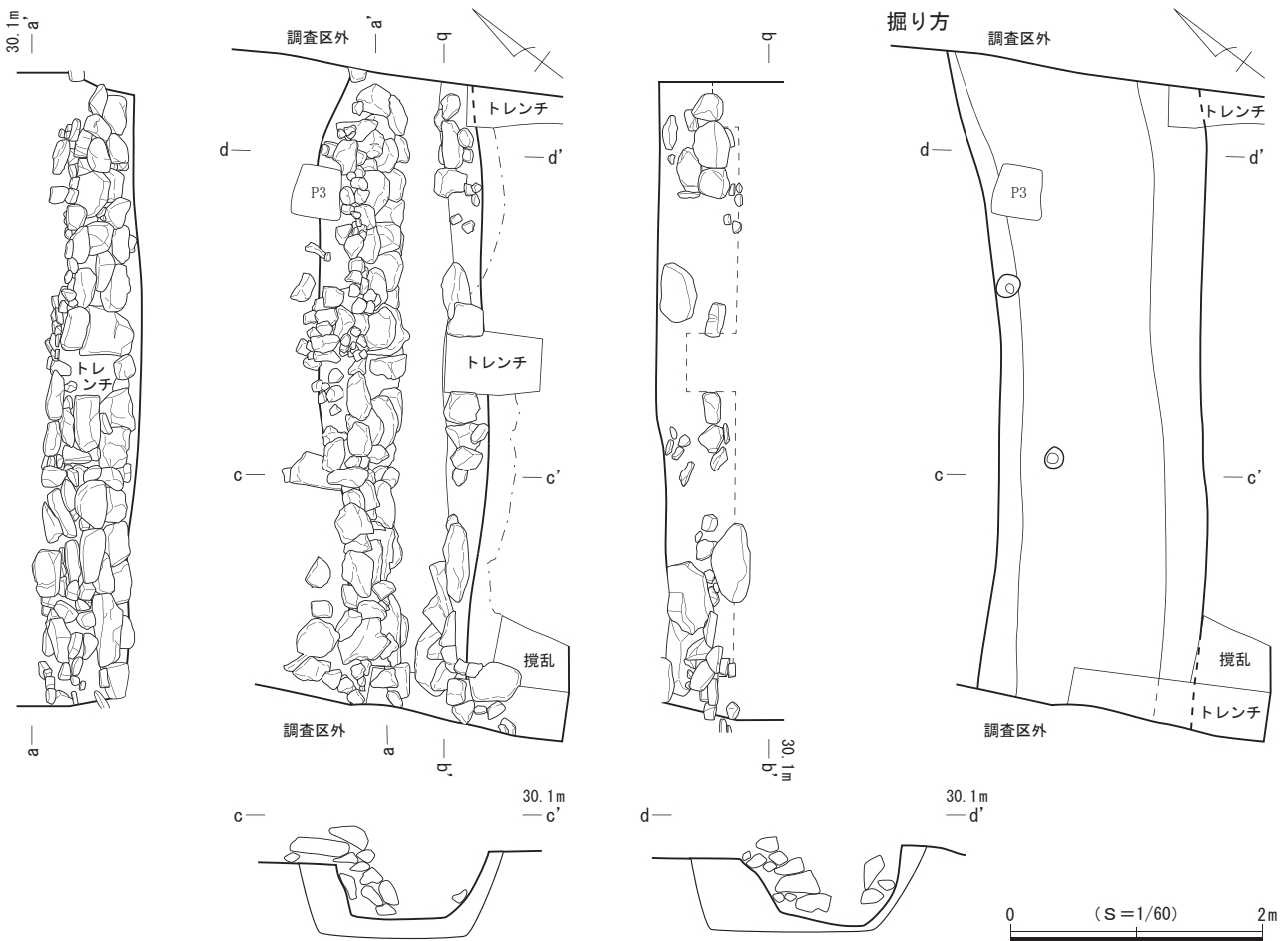


図20 第3面 溝状遺構1

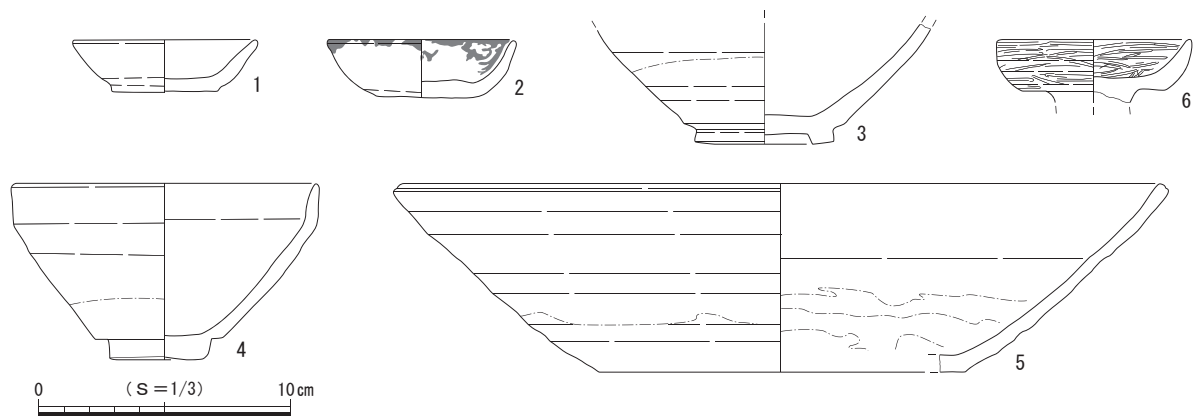


図21 第3面 溝状遺構1 出土遺物

溝状遺構2 (図22)

II区の中央から東側にかけて位置する。I区で検出された溝状遺構1と並行して北東-南西方向に直線的に延び、南西端部はピット10によって壊されるが調査区内に収まると考えられる。北東側は調査区外へと続いている。検出した規模は現存長約1.9m、幅41cm、深さ5~19cmを測り、主軸方位はN-54°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形が逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、底面の標高は中央部で29.66mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑5 (図23)

I区の西隅に位置する。調査区内では単独で検出されたが、西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整形と考えられ、底面は南に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長1.60m、南北現存長1.20m、深さ48cmで、坑底面の標高は29.10mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑6 (図23)

I区の北西壁際中央に位置する。調査区内では単独で検出されたが、北西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はほぼ平らである。西壁は大きく開き、それ以外の壁面はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長88cm、北西-南東方向の現存長61cm、深さ18cmで、坑底面の標高は29.63mを測る。

遺物はかわらけ7点、陶器5点が出土した。

土坑7 (図23)

I区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は北側が尖る略楕円形を呈し、

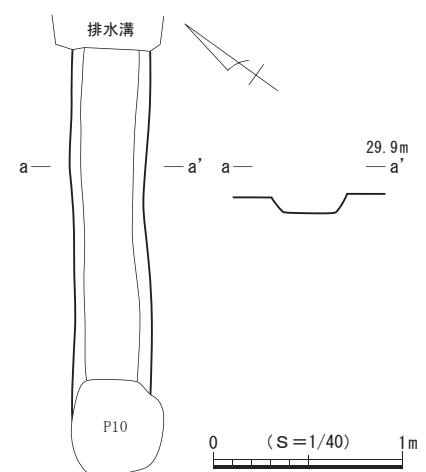


図22 第3面 溝状遺構2

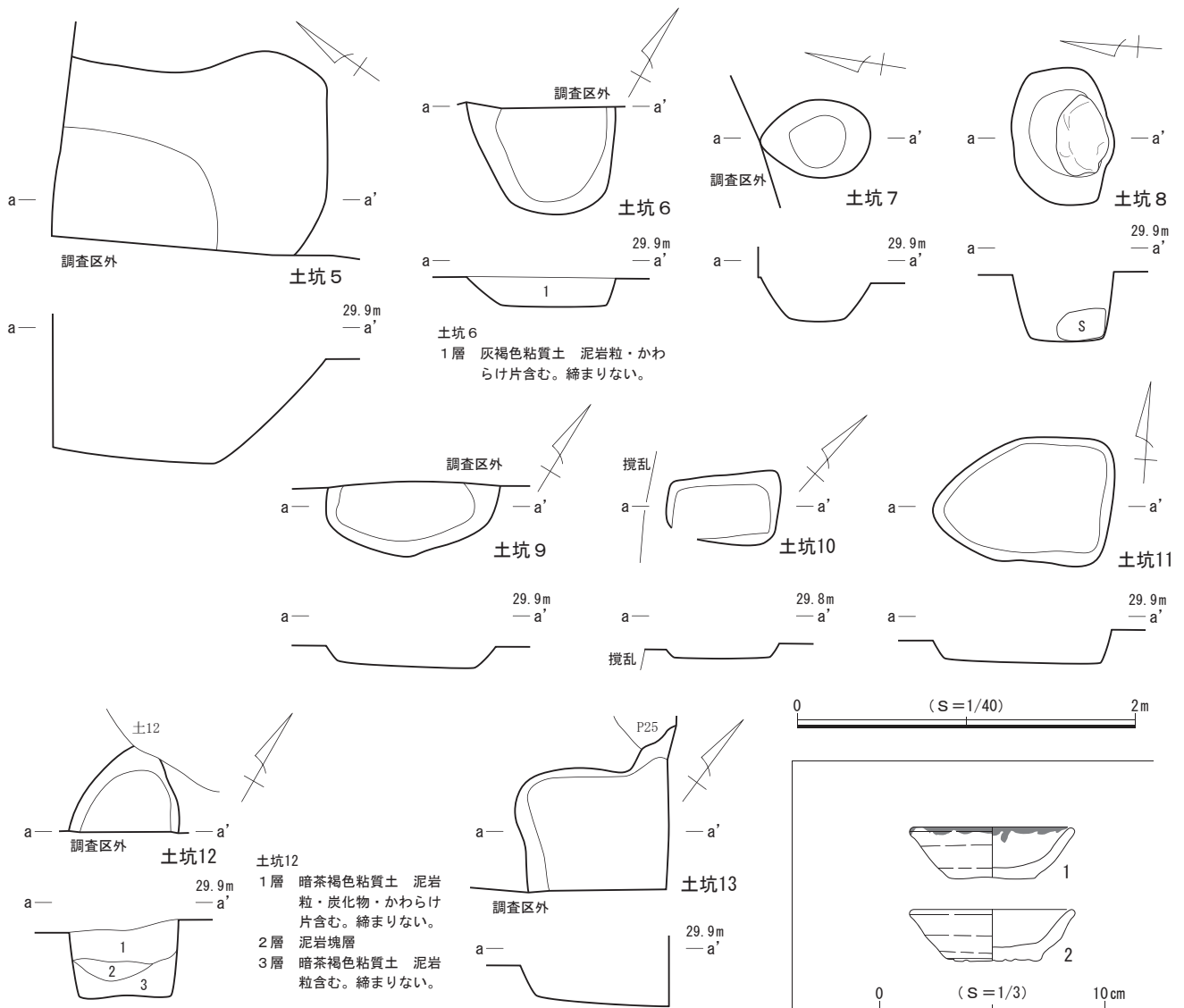


図23 第3面 土坑5～13

図24 第3面 土坑13出土遺物

底面はわずかに湾曲する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸65cm、短軸46cm、深さ26cmである。坑底面の標高は29.55mを測る。主軸方位はN-9°-Wを指す。

遺物は磁器1点が出土した。

土坑8 (図23)

I区中央北寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はごくわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形に近い形状を呈する。規模は長軸82cm、短軸60cm、深さ42cmである。坑底面の標高は29.35mを測り、主軸方位はN-84°-Eを指す。南壁寄りの底面上に、長さ45cm、幅31cm、高さ17cmを測る礫が据えられていた。礫の上下両面は平坦であり、礎石の可能性が考えられる。

遺物は出土しなかった。

土坑9 (図23)

II区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、北西側が調査区外へ延びているた

めに全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は東に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸1.04m、短軸現存長45cm、深さ14cmで、坑底面の標高は29.60mを測る。

遺物はかわらけ2点、陶器2点、金属製品1点が出土した。

土坑10 (図23)

Ⅱ区南西壁付近の中央に位置する。南側でピット11と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は隅丸長方形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸67cm、短軸44cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.56mを測る。主軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物はかわらけ8点、磁器1点、陶器3点、石製品1点が出土した。

土坑11 (図23)

Ⅱ区南東壁付近の中央東寄りに位置する。南側で土坑12と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は西側が尖り東側が直線的な不整楕円形を呈し、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.06m、短軸76cm、深さ18cmで、坑底面の標高は29.63mを測る。主軸方位はN-85°-Eを指す。

遺物は陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑12 (図23)

Ⅱ区南東壁際の中央に位置する。北側で土坑11と重複して北壁の一部が壊され、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、略楕円形と考えられ、底面は中央付近がやや高くなる。壁はほぼ垂直に立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は南北現存長50cm、東西現存長64cm、深さ24cmで、坑底面の標高は29.34mを測る。主軸方位はN-16°-Wを指す。

遺物はかわらけ2点が出土した。

土坑13 (図23)

Ⅱ区の東隅に位置する。北西側でピット25と重複して東側を壊し、東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかつた。検出範囲から平面形を推定すると、不整形と考えられ、底面は東に向かった傾斜する。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.00m、北東-南西方向の現存長90cm、深さ23cmで、坑底面の標高は14.88mを測る。

出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ7点、陶器3点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけであり、1の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。

(3)ピット

第3面では、22基を検出した。Ⅱ区の南半部に集中して分布するが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかつた。平面形は円形と楕円形、隅丸方形を基調とし、規模は長軸26~55cm、深さ3~49cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

以下、礎石が据えられたピット2基を図示し、説明する。

ピット19(図25)

Ⅱ区の中央南寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は南西側が外側に張り出す不整形円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸39cm、短軸33cm、深さ12cmを測り、礎石がピット中央東寄りの底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ14cm、幅11cm、高さ7cmを測り、上面の標高は29.68mである。

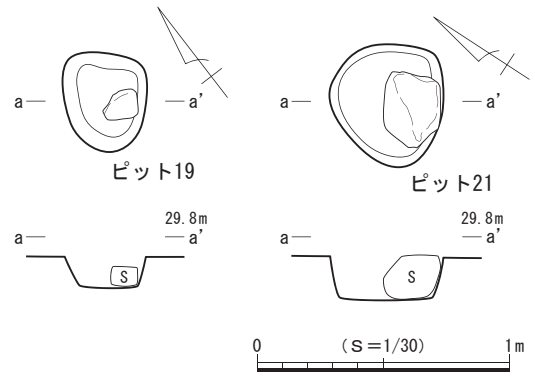


図25 第3面 ピット19・21

ピット21(図25)

Ⅱ区の南東壁付近の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は南西側が外側にやや張り出す略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸48cm、短軸45cm、深さ14cmを測り、礎石がピット南壁際の底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ29cm、幅22cm、高さ16cmを測り、上面の標高は29.74mである。

(4) 第3面 遺構外出土遺物(図26)

第3面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

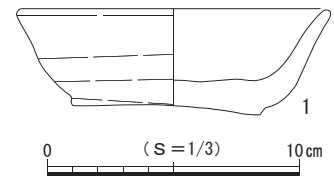


図26 第3面 遺構外出土遺物

(5) 第3面 構成土出土遺物(図27・28)

第3面構成土中からも遺物が出土しており、このうち14点を図示した。

1～7はロクロ成形によるかわらけで、3・5の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。8・9は瀬戸産の縁釉小皿、10・11は常滑産で、10はI型式の古いタイプの甕、11は片口鉢Ⅱ類である。12は瓦質土器の香炉、13は平瓦である。14は3面に使用痕が観察される砥石である。なお、鋳型の可能性がある鉄製品が出土しており、写真資料として掲載した(図版10-5)。

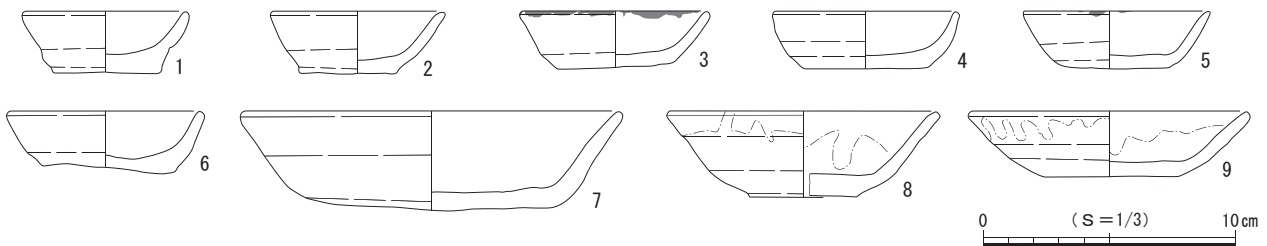


図27 第3面 構成土出土遺物(1)

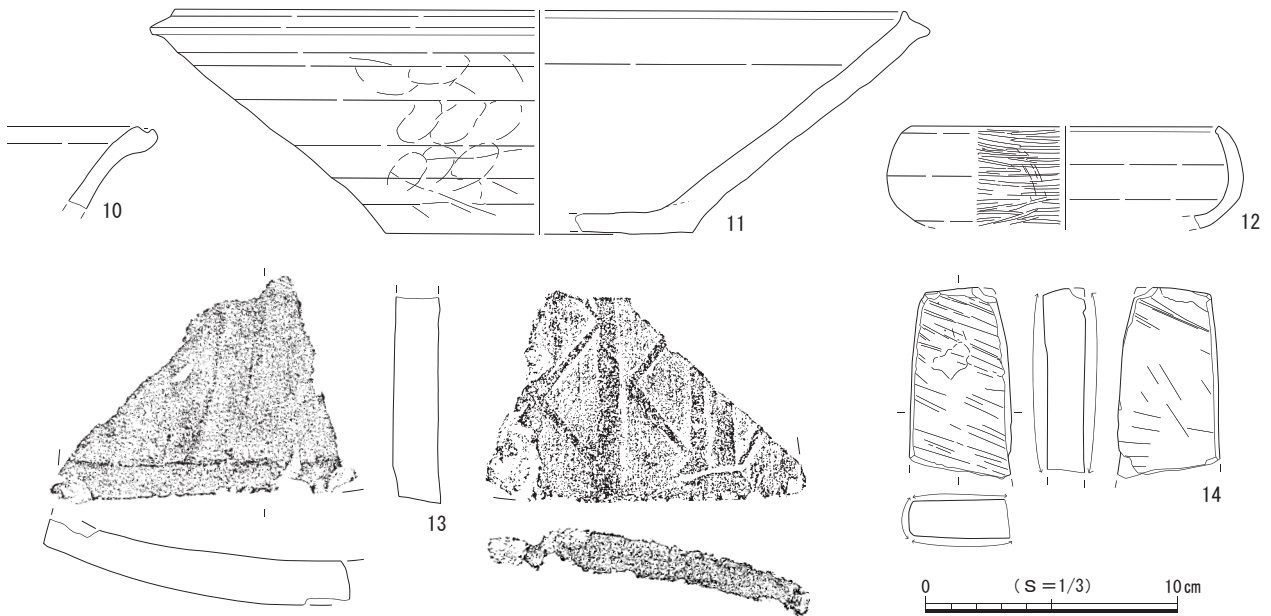


図28 第3面 構成土出土遺物(2)

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の10層上面で検出され、確認面の標高は29.5～29.7mを測る。10層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑7基、ピット19基である(図29)。I区は南半を第3面で検出された溝状遺構1によって壊されており、本来の生活面の様相は明らかでない。遺構はII区の北半に集中して検出されており、II区の南半は遺構の空白部となり明瞭な整地層が広がっている。I区では南側に遺構がまばらに分布する。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀後葉～15世紀前葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構3(図30)

I区の東隅付近に位置する。北西-南東方向にほぼ直線的に延び、北西端部は第3面の溝状遺構1によって壊され、南東端部もピット27によって壊されている。検出した規模は現存長90

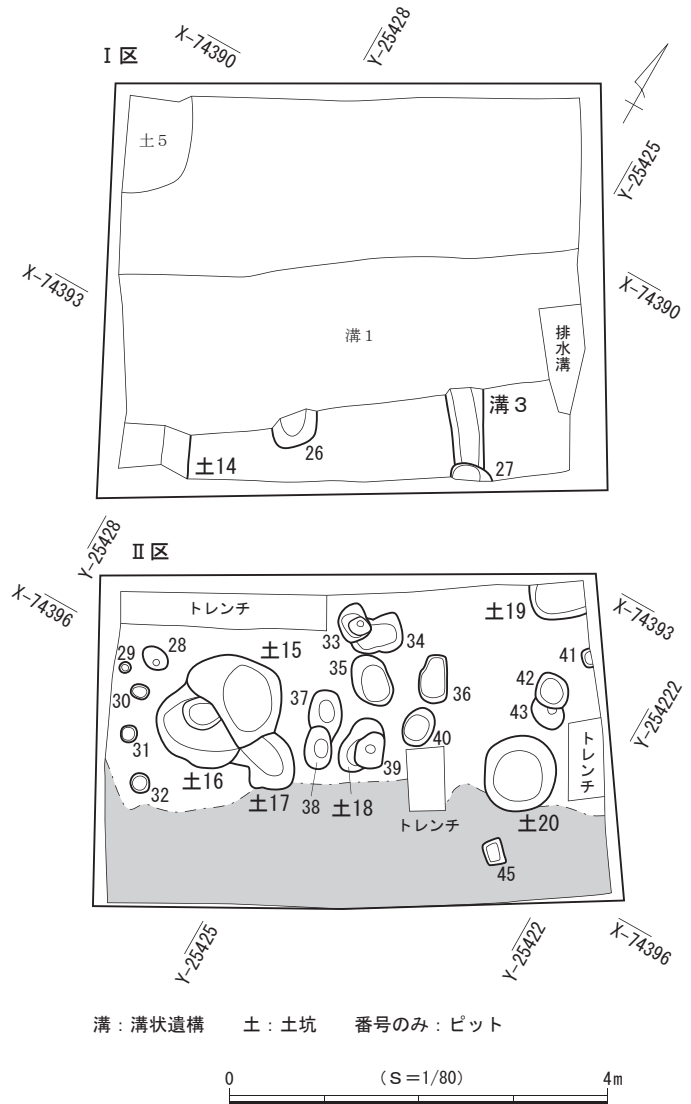


図29 第4面 遺構分布図

cm、幅30～40cm、深さ19cmを測り、主軸方位はN-36°-Wを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、底面の標高は北西端で29.31mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑14 (図33)

I区の南隅に位置する。北西側を第3面の溝状遺構1によって壊され、加えて南側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は平らで、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈すると考えられる。規模は東西現存長64cm、南北現存長48cm、深さ35cmで、坑底面の標高は29.19mを測る。

出土遺物 (図31)

遺物はかわらけ1点が出土し、それを図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

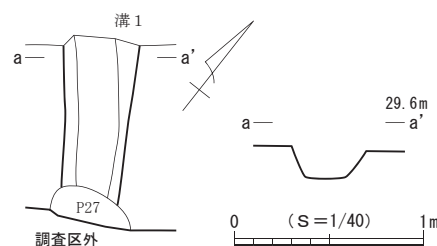


図30 第4面 溝状遺構3

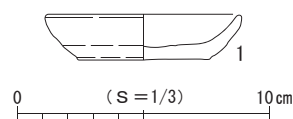


図31 第4面 土坑14出土遺物

土坑15 (図33)

II区中央の西寄りに位置する。南側で土坑16、東側は土坑17と重複し、北側と西側を壊している。平面形は西側が突出する不整楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.09m、短軸86cm、深さ61cmで、坑底面の標高は28.94mを測る。主軸方位はN-29°-Wを指す。

出土遺物 (図32)

遺物はかわらけ28点、陶器4点、土器1点、瓦質土器1点、瓦1点、金属製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形による特大のかわらけで、外面には油煤が観察され、灯明具としての使用が認められる。

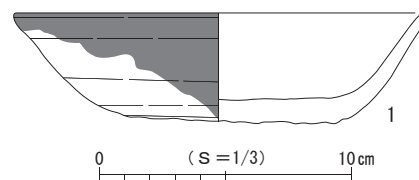


図32 第4面 土坑15出土遺物

土坑16 (図33)

II区中央の西寄りに位置する。北側で土坑15と重複して北側が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はほぼ平らで、西壁寄りに径34cm、深さ20cmを測るピットが検出された。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西97cm、南北現存長65cm、深さ48cmで、坑底面の標高は29.00mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図33)

II区の中央西寄りに位置する。西側で土坑15・16と重複して西側が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は西に向かってわずかに傾斜する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長63cm、短軸55cm、深さ41cmで、坑底面の標高は29.14mを測る。主軸方位はN-74°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

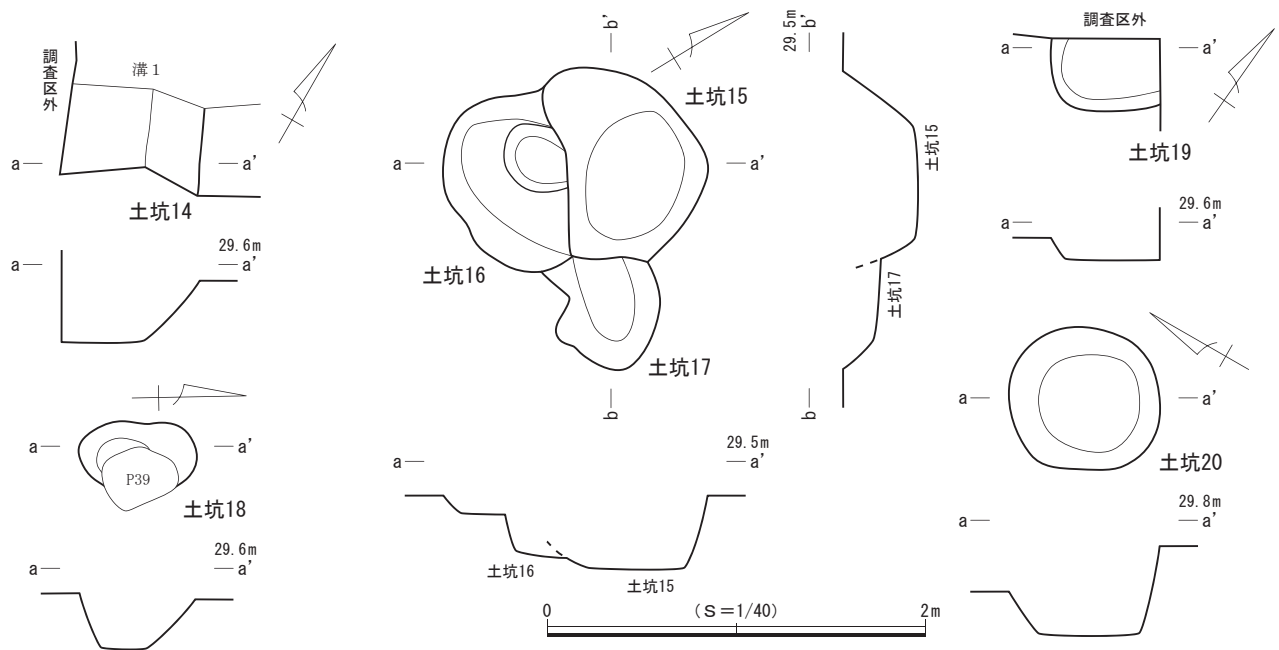


図33 第4面 土坑 14～20

土坑18 (図33)

Ⅱ区の中央に位置する。ピット39と重複して東側の大半が壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸62cm、短軸現存長34cm、深さ39cmで、坑底面の標高は29.17mを測る。主軸方位はほぼ南北を指す。

遺物は出土しなかった。

土坑19 (図33)

Ⅱ区の北隅に位置する。北側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は平らで、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長61cm、北西-南東方向の現存長58cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.41mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑20 (図33)

Ⅱ区北東壁付近の中央南寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁はわずかに開き、北壁のみやや開いて立ち上がる。断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸79cm、短軸76cm、深さ47cmである。坑底面の標高は29.20mを測る。

出土遺物 (図34)

遺物はかわらけ6点、瓦質土器1点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は瓦質土器の火鉢である。

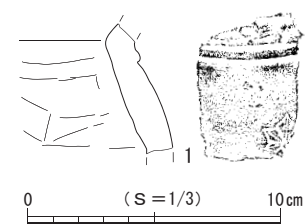


図34 第4面 土坑20出土遺物

(3) ピット

第3面では19基を検出した。主にⅡ区の北西側に分布し、Ⅰ区では南東壁付近から2基を検出したのみである。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は円形と楕円形、隅丸方形を基調とし、規模は長軸12～58cm、深さ6～45cmとばらつきがある。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

(4) 第4面 構成土出土遺物(図35)

第4面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち8点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけで、3の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。4・5は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。6は瓦質土器の香炉である。7・8は石製品で、7は硯、8は2面に使用痕跡が観察される砥石である。

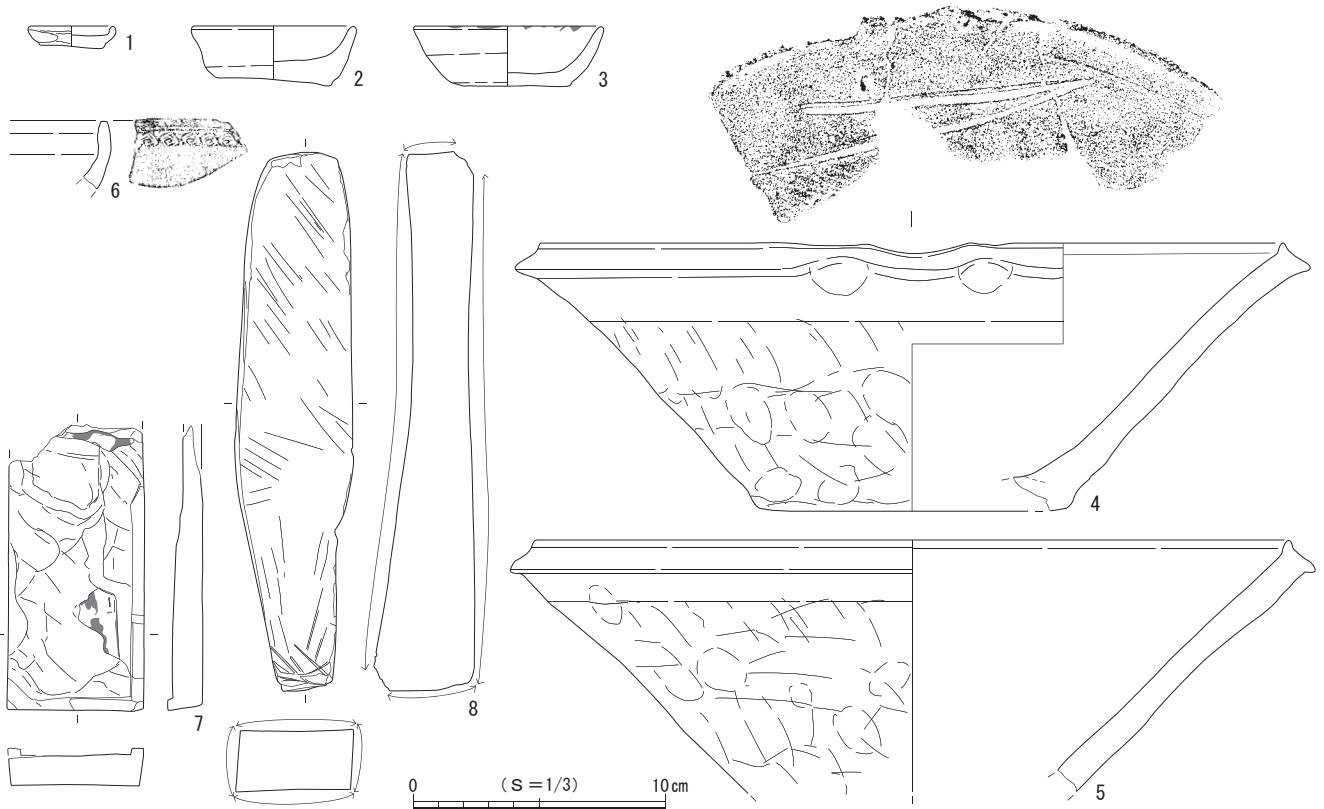


図35 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は堆積土層の13層上面で検出され、確認面の標高は29.1～29.3mを測る。13層は暗青灰色シルト層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構3条、土坑7基、ピット9基である(図36)。Ⅰ区には明瞭な整地面が全面にわたって広がり、調査区の中央から南にかけて溝状遺構が北東-南西方向に横断する。Ⅱ区は中央から南西側に遺構が偏り、重複して検出されているものもある。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、ガラス製品、木製品、金属製品などが出

土しており、これらの年代観から本面は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構 4 (図38)

I区中央から南にかけて位置する。北東-南西方向に横断し、両端部とも調査区外へと続いている。調査区内では他の遺構と重複せず、総体としてはほぼ直線的に延びるが、北西側の上端は緩やかに蛇行している。検出した規模は現存長約5.0m、幅1.48~1.80m、深さ1.0mを測り、底面の標高は北東側で28.48m、南西側で28.45mで、北東から南西に向かってごく緩やかに傾斜する。壁は南東壁と北西壁で開く角度と形状が異なっており、北西壁の北半は壁の上位に段をもち、南半では中位から上位にかけて二つの段が形成される。南東壁は中位に段をもち、断面形は逆台形状を呈する。主軸方位はN-49°-Eを指す。

両側壁面には泥岩の切石を用いた護岸が築かれる。北西壁面は検出範囲では北東側のみ切石による護岸が認められ、長さ約2m、幅約50cmにわたって切石が配列される。南東壁面は検出範囲ではほぼ全面に切石による護岸が築かれ、切石は北西面を斜めに揃えて2~4段に積み上げている。護岸の規模は現存長4.75m、幅は最大で約60cm、高さは約50cmを測り、傾斜角は南西側で77度、北東側で47度である。切石の大きさは長さ10cm前後のものから50cm大のものまで大小様々であり、一部は崩れて配置が乱れているところもあるが、全体にややランダムに積み上げている印象を受ける。

なお、本址の北西と南東側に、明瞭な整地面の広がりを確認した。

出土遺物 (図37)

遺物は覆土から、かわらけ62点、磁器1点、陶器12点、瓦質土器2点、石製品2点、木製品1点、金属製品4点、掘り方から、陶器4点、金属製品1点が出土し、このうち7点を図示した。

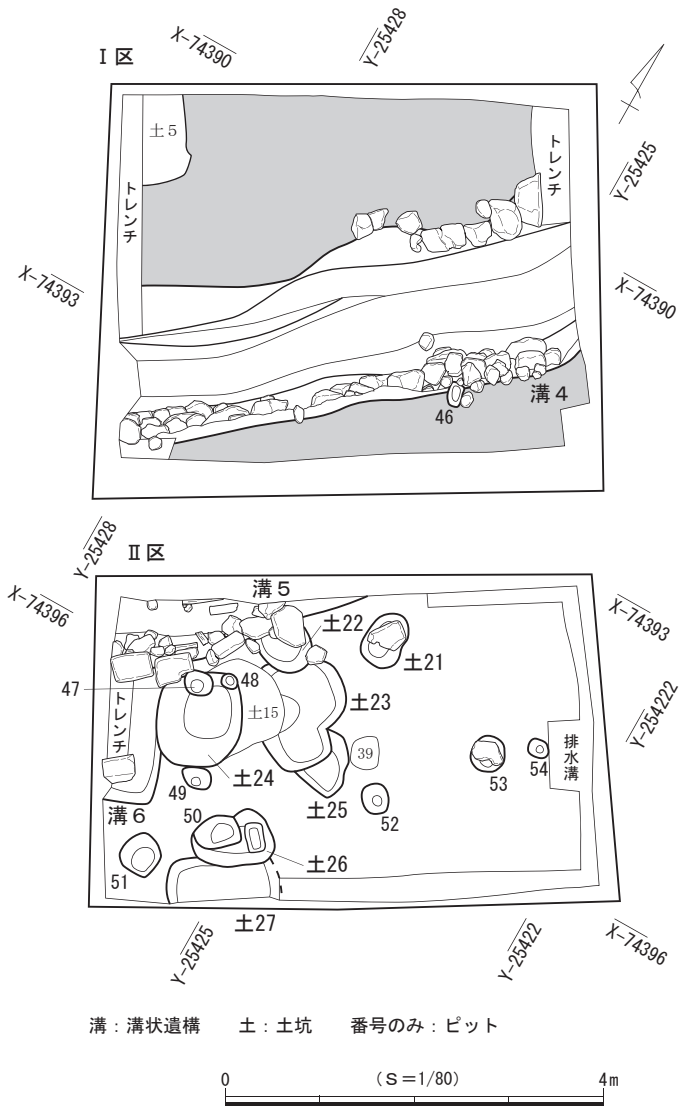


図36 第5面 遺構分布図

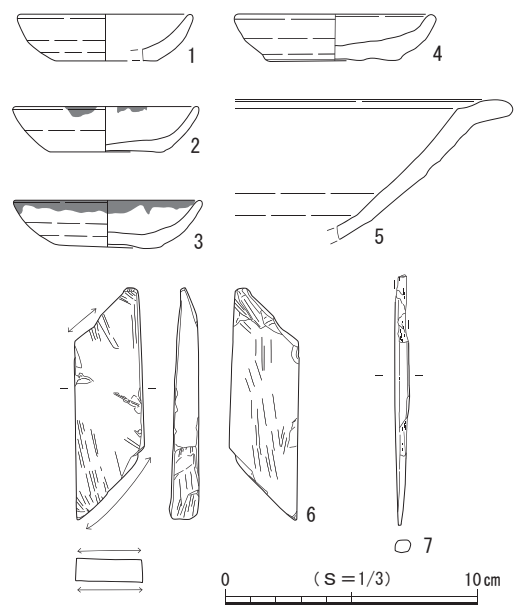
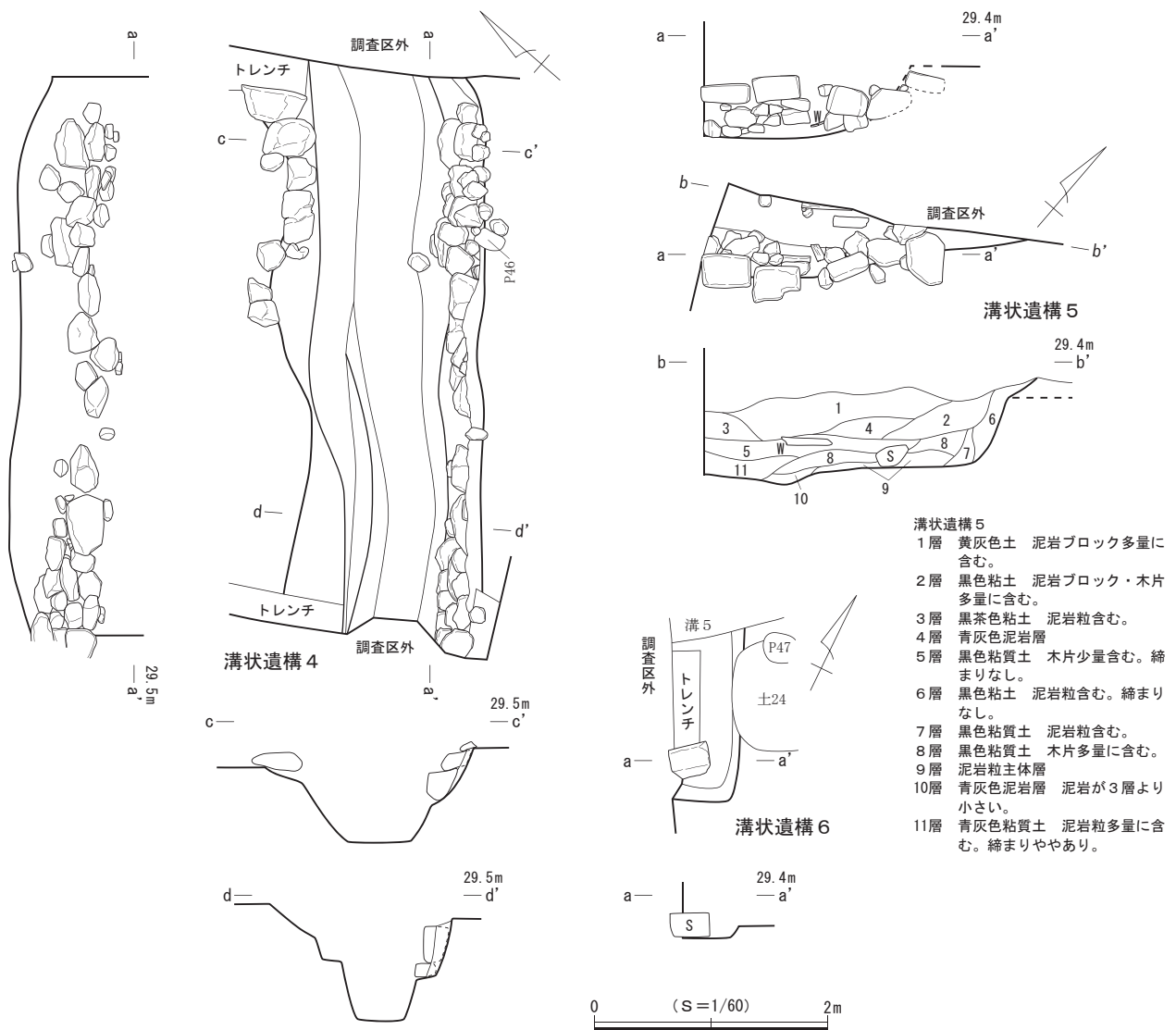


図37 第5面 溝状遺構4 出土遺物



1～4はロクロ成形によるかわらけで、2・3の口唇部には煤が付着し灯明具としての使用が認められる。5は瀬戸産の折縁深皿である。6は3面に使用痕跡が観察される砥石である。7は箸状の木製品である。なお、鉄滓が出土しており、写真資料として掲載した(図版11-5)。

溝状遺構5 (図38)

Ⅱ区西隅から北西壁中央にかけて位置する。南東壁の一部を検出したのみであり、主体は調査区外の北西側に展開していると考えられる。本址と直交して延びる溝状遺構6を南側で壊している。北東-南西方向に延びる溝で、検出した規模は現存長約2.8m、幅80cm、深さ91cmを測り、主軸方位はN-46°-Eを指す。調査区壁面の土層断面観察からは、壁はやや開いて立ち上がる様子が捉えられ、底面はわずかな凹凸をもつ。底面の標高は28.40mを測る。

壁面には切石を3～4段に積み上げた護岸が築かれている。護岸の規模は現存長2.05m、幅60cm前後、高さ50cmを測る。切石の大きさは長さ10cm未満のものから45cm大のものまで大小様々であり、一部は崩れて配置が乱れているところもあるが、全体に丁寧に積み上げている。

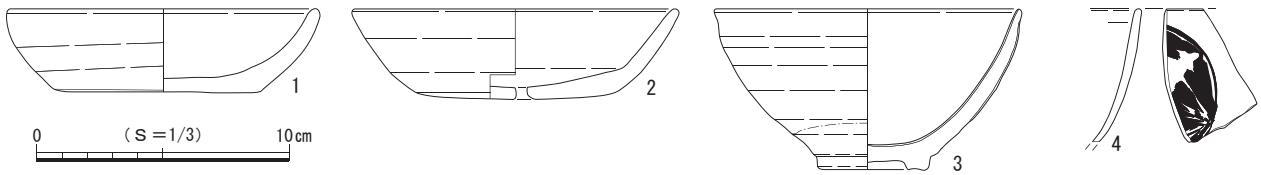


図39 第5面 溝状遺構5出土遺物

出土遺物 (図39)

遺物は覆土から、かわらけ8点、陶器4点、瓦1点、木製品3点、掘り方からかわらけ25点、陶器7点、瓦3点、木製品1点が出土し、このうち4点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけであり、2の底部中央

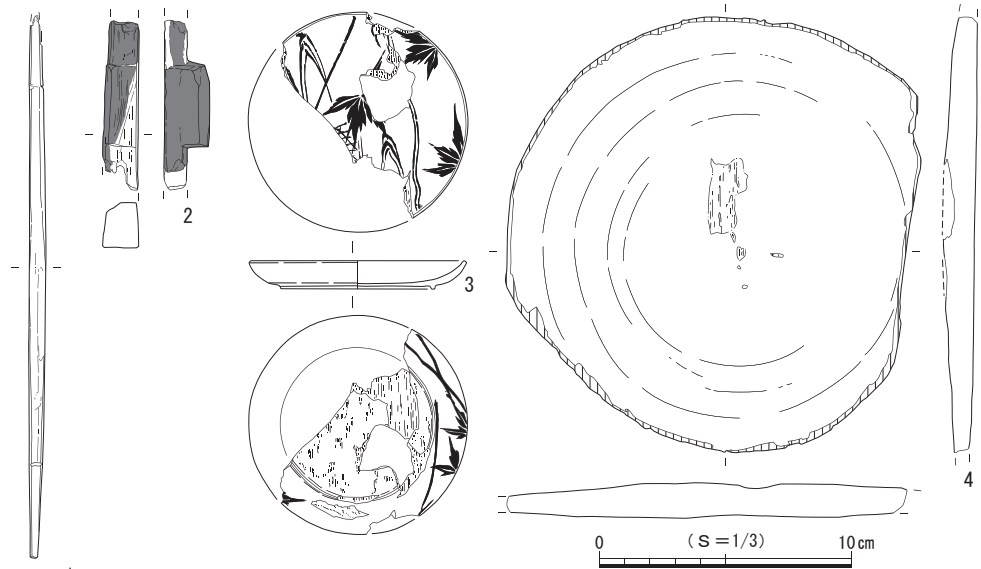


図40 第5面 溝状遺構6出土遺物

には穿孔が1ヵ所遺存する。3は瀬戸産の天目茶碗、4は漆器の椀である。

溝状遺構6 (図38)

Ⅱ区西壁際に位置する。北西-南東方向に延び、西端部は溝状遺構5によって壊されるが南側は調査区内に収まる。東側で土坑24と重複し、北東壁が壊されている。検出した規模は現存長約1.5m、幅56cm、深さ16cmを測り、主軸方位はN-23°-Wを指す。壁は南側ではやや開いて立ち上がり、底面はほぼ平らである。底面の標高は29.04mで、底面直上から長さ35cm、幅25cm、高さ20cmの切石が出土した。

出土遺物 (図40)

遺物は木製品4点が出土し、それを図示した。

1は箸状、2は用途不明の部材、3は漆器皿、4は漆器蓋である。

(2) 土 坑

土坑21 (図41)

Ⅱ区北西壁付近の中央やや東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は東側がわずかにくぼむ略楕円形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸60cm、短軸43cm、深さ18cmである。坑底面の標高は29.02mを測る。主軸方位はN-67°-Wを指す。底面の直上に長さ40cm、幅29cm、高さ26cmの礫が据えられており、礎石をもつピットであった可能性がある。

遺物は出土しなかった。

土坑22 (図41)

Ⅱ区北西壁付近の中央南西寄りに位置する。東側で土坑23と重複して北西壁を壊し、西側で溝状遺構5と重複して西壁が壊されているが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長60cm、短軸54cm、深さ21cmで、坑底面の標高は28.97mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑23 (図41)

Ⅱ区中央の北西寄りに位置する。東側で土坑25と重複して西側を壊し、北西側で土坑22、南西側で土坑15と重複して西側を壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.18m、短軸現存長97cm、深さ15cmで、坑底面の標高は29.05mを測る。主軸方位はN-58°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑24 (図41)

Ⅱ区の南西壁付近中央に位置する。南西側で溝状遺構6と重複して北東壁の一部を壊し、北側でピット47・48と重複して壊されるが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、不整形円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸99cm、短軸90cm、深さ31cmで、坑底面の標高は28.80mを測る。

遺物はかわらけ8点が出土した。

土坑25 (図41)

Ⅱ区のほぼ中央に位置する。西側で土坑23と重複して西側を壊され、全体の半分強が失われているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整形円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長61cm、東西現存長50cm、深さ11cmで、坑底面の標高は29.09mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑26 (図41)

調査区の南隅付近に位置する。

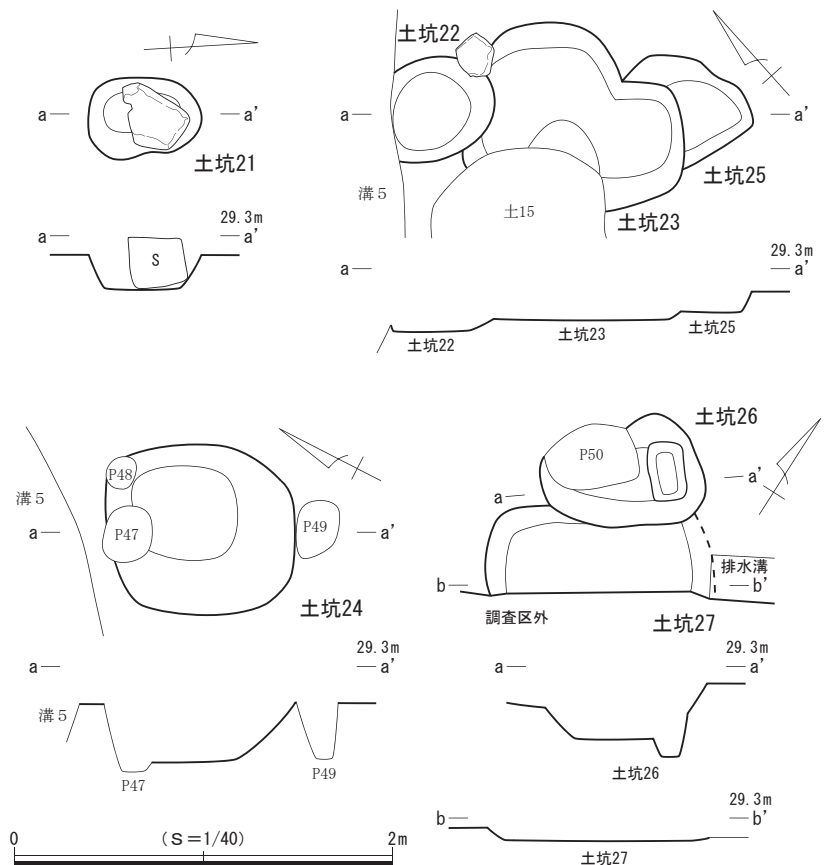


図41 第5面 土坑 21～27

南東側で土坑27と重複して北西壁の一部を壊し、西側ではピット50と重複して壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略楕円形と考えられ、底面は平らで、北東壁際から長軸30cm、深さ10cmを測る長方形のピットが検出された。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は86cm、短軸59cm、深さ38cmで、坑底面の標高は28.92mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑27 (図41)

Ⅱ区の南隅に位置する。北側で土坑26と重複して北壁が壊され、南東側は調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.10m、短軸現存長55cm、深さ8cmで、坑底面の標高は29.19mを測る。主軸方位はN-54°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

(3) ピット

第5面では、9基を検出した。Ⅰ区からは1基、Ⅱ区から8基確認された。分布は全体にまばらで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径18~48cm、深さ13~44cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)を参照されたい。

以下、礎石が据えられたピット53を図示し、説明する。

ピット53 (図42)

Ⅱ区の中央東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸38cm、短軸35cm、深さ14cmを測り、礎石がピット中央北寄りの底面上に据えられていた。礎石の大きさは長さ34cm、幅23cm、厚さ15cmを測り、上面の標高は29.18mである。

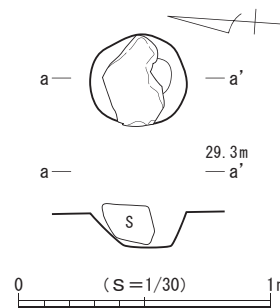


図42 第5面 ピット53

(4) 第5面 遺構外出土遺物 (図43・44)

第5面では、遺構以外から遺物が出土しており、このうち10点を図示した。

1は青白磁の皿、2は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類、3~6は瀬戸産の陶器類で、3・4は天目茶碗、5は小杯、6は広口壺である。7は備前産の播鉢である。8は瓦質土器の香炉、9は銅合金製で留具と思われる製品である。10はガラス製のトンボ玉で、乳白色と赤紫色を呈する。孔内に紐が残存していた。

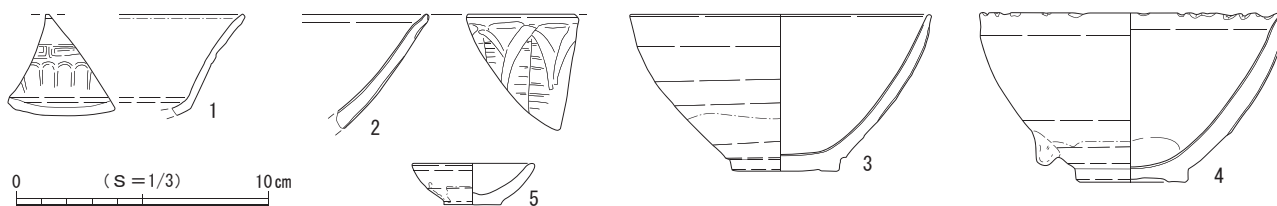


図43 第5面 遺構外出土遺物(1)

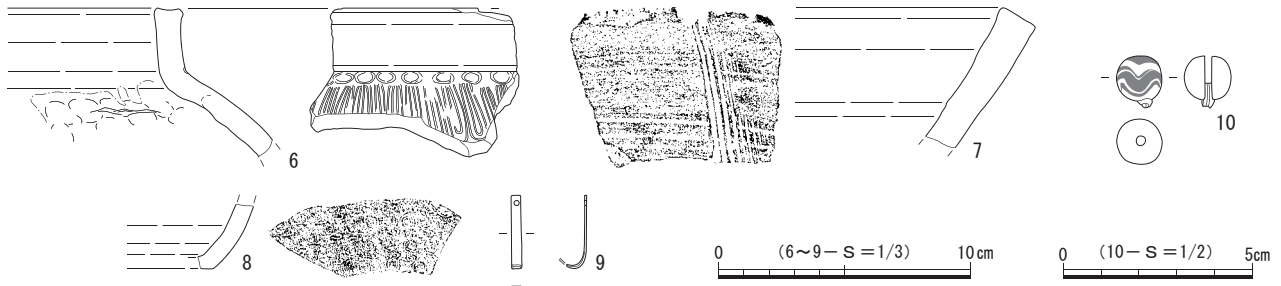


図44 第5面 遺構外出土遺物(2)

第6節 第6面の遺構と遺物

6面の遺構は堆積土層の17層上面で検出され、確認面の標高は28.8~29.0mを測る。17層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑4基、不明遺構1基、ピット41基である(図45)。I区は第5面で確認された溝状遺構4によって南東側が壊されており、遺構が失われている可能性がある。II区は全域にわたって遺構が分布し、なかには重複して検出されたものも認められる。また、II区からは土坑とピットが集中して検出され、I区の遺構群とは様相が異なっている。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品、骨製品、金属製品など出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構7(図46)

I区北西壁付近の中央に位置する。北東-南西方向に延び、南西端部は不明遺構1によって壊されるが北東側は調査区内に収まる。北東端は丸みを帯びず直線的な形状で、北西壁は外側へ膨らみ湾曲する。検出した規模は現存長約1.1m、幅39~61cm、深さ7cmを測り、主軸方位はN-43°-Eを指す。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。底面はほぼ平らで、標高は中央部で28.65mを測る。

南西部分は確認面の高さによる影響で掘り方が消失するが、北西壁の延長上から杭を伴う板材が検出され、おそらく本址に伴う木組の護岸跡と推定される。木組に用いる板材の大きさは、長さ89cm、幅10

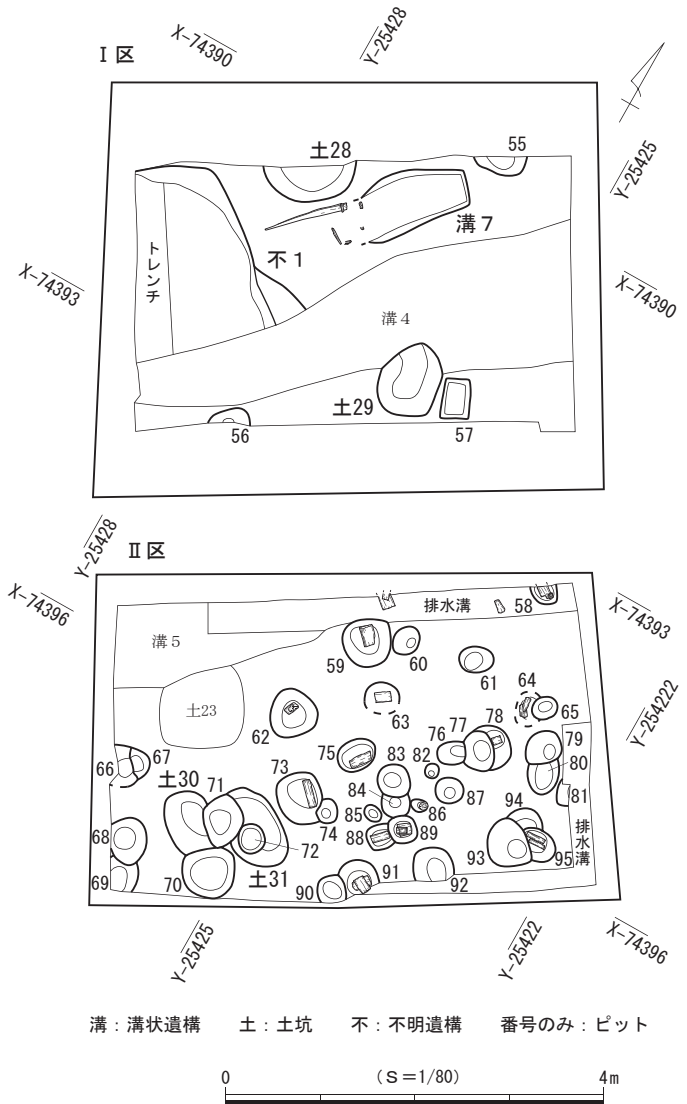


図45 第6面 遺構分布図

cm、厚さ2cmで、この木組を含めた場合の本址の現存長は約2.2mである。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑28 (図48)

I区北西壁際の中央西寄りに位置する。調査区内では他の遺構と重複せず単独で検出されたが、北西側が調査区

外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、円形ないし楕円形と考えられ、底面はわずかに湾曲する。壁は開き、西壁はなだらかに立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長98cm、北西-南東方向の現存長39cm、深さ23cmで、坑底面の標高は28.63mを測る。

遺物はかわらけ12点、磁器1点が出土した。

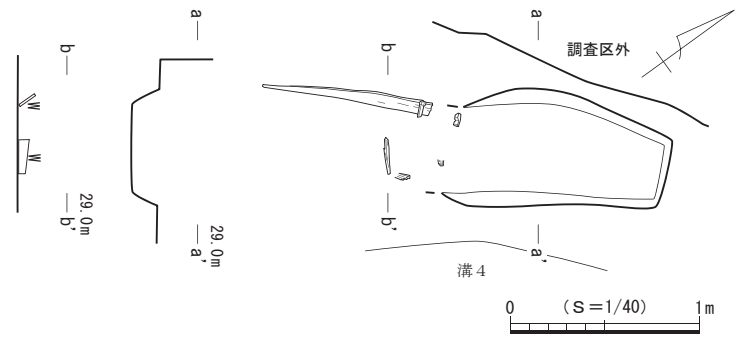


図46 第6面 溝状遺構7

土坑29 (図48)

I区南東壁際の中央東寄りに位置する。北側を第5面で確認された溝状遺構4に壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、不整楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長77cm、東西65cm、深さ42cmで、坑底面の標高は28.46mを測る。

出土遺物 (図47)

遺物はかわらけ5点、陶器1点、瓦1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は熨斗瓦である。

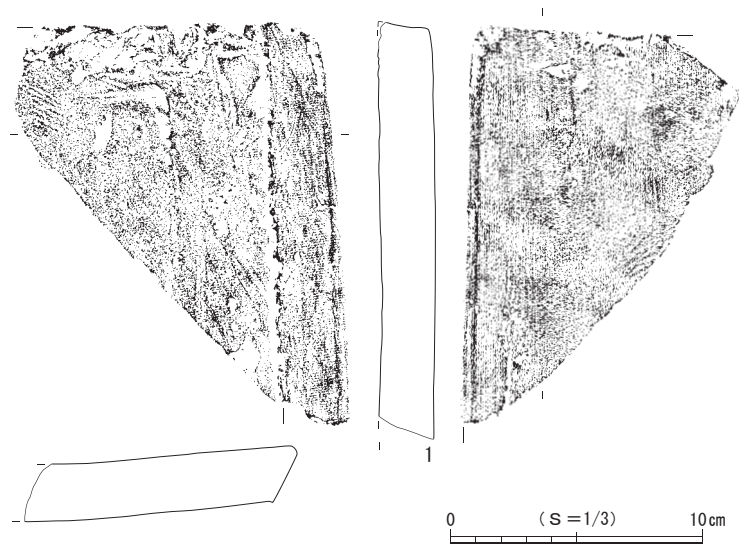


図47 第6面 土坑29出土遺物

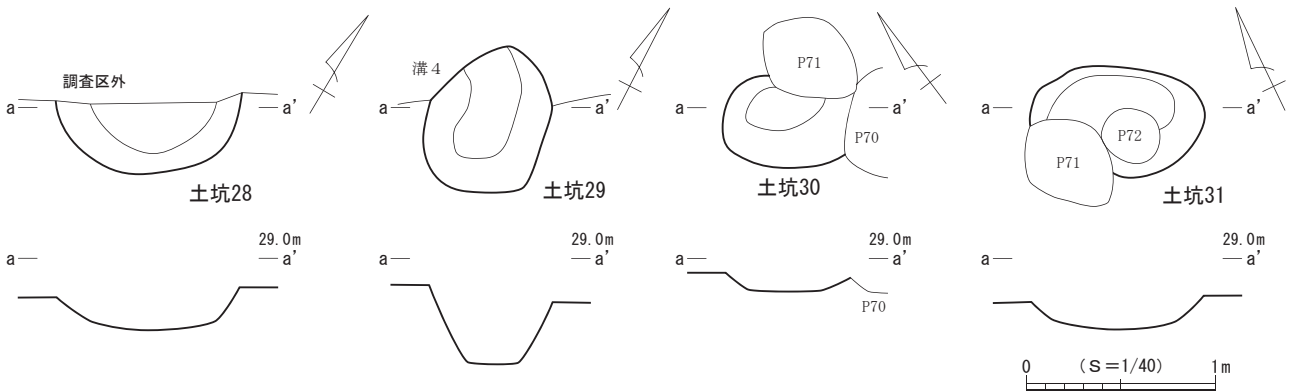


図48 第6面 土坑28~31

土坑30 (図48)

Ⅱ区の南隅に位置する。南東側でピット70、東側でピット71と重複して東側が壊されているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は平らである。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長60cm、北東-南西方向の現存長48cm、深さ17cmで、坑底面の標高は28.84mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑31 (図48)

Ⅱ区の南隅付近に位置する。西側でピット71・72と重複して壊されているが、ほぼ全容を把握できた。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸93cm、短軸58cm、深さ18cmで、坑底面の標高は28.63mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 不明遺構

不明遺構 1 (図49)

I区の西隅に位置する。南東側を溝状遺構4によって壊されており、南西側が調査区外へ広がっており、平面形および主軸方位は判然としない。ごく浅い落ち込みで、底面はほぼ平らである。壁はなだらかに立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長2.03m、北東-南西方向の現存長1.82m、深さ14cmを測る。底面の標高は28.68mを測る。

遺物は出土しなかった。

(4) ピット

第6面では、41基を検出した。ほとんどのピットがⅡ区に集中して検出され、重複するものも認められるが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径15~56cm、深さ12~47cmを測る。

以下、礎板や柱が据えられたピット11基を図示し、説明する。

ピット58 (図50)

Ⅱ区の北隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。本址の一部は北側の調査区外へ及んでおり、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形ないし略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形状と推定される。規模は南北現存長25cm、東西28cm、深さ16cmを測り、礎板が中央の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは現存長15cm、幅12cm、厚さ4cmを測り、上面の標高は28.82mである。礎板の端部は凸字状に加工されており、その凹み部分に方6cmの柱を組合わせて据えており、立ったままの状態出土した。柱の現存長は16cmを測り、上端の標高は28.60mである。

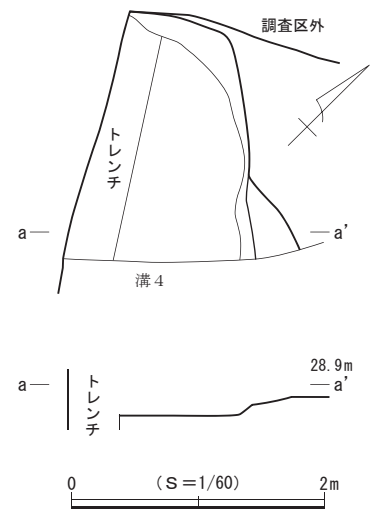


図49 第6面 不明遺構 1

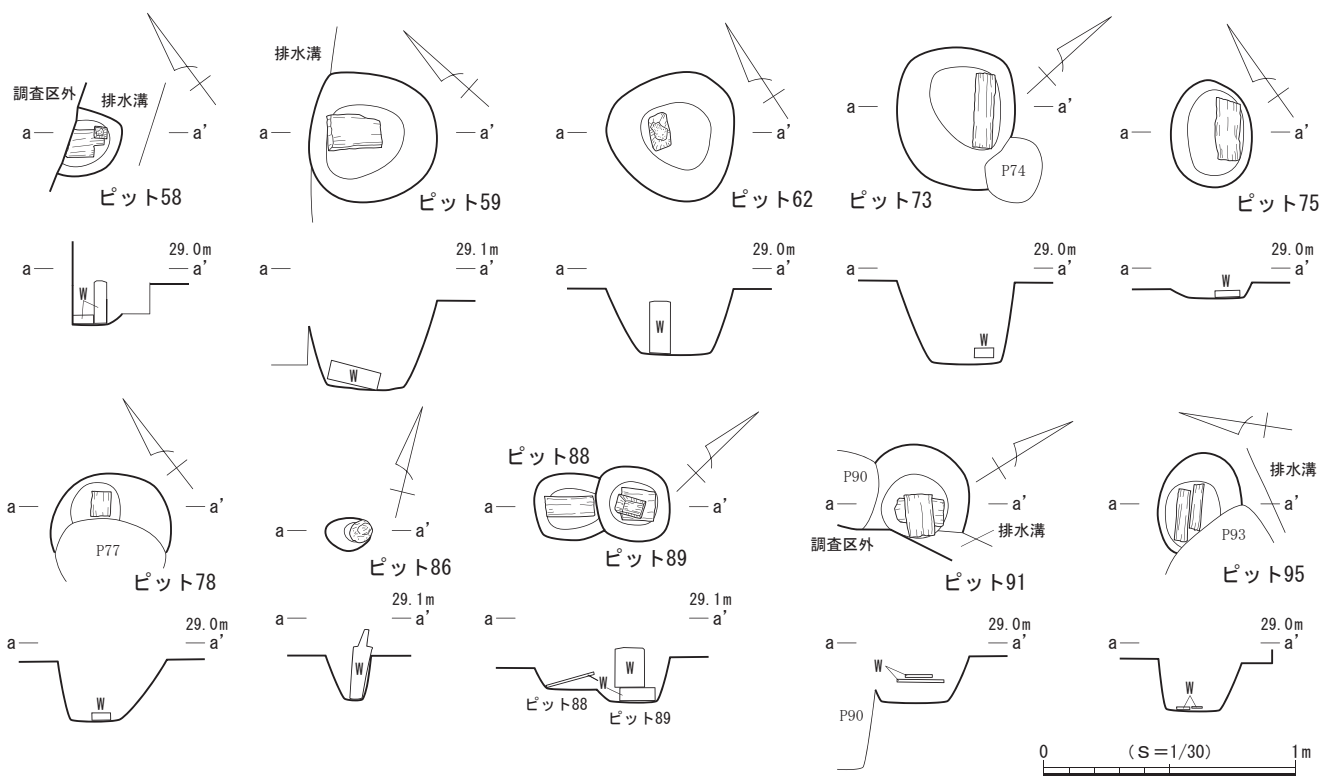


図50 第6面 ピット58・59・62・73・75・78・86・88・89・91・95

ピット59 (図50)

Ⅱ区の北西壁付近中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸56cm、短軸53cm、深さ35cmを測り、礎板がピット中央北西寄りの底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ20cm、幅14cm、厚さ6cmを測り、上面の標高は28.69mである。

ピット62 (図50)

Ⅱ区の中央西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸51cm、短軸50cm、深さ27cmを測り、中央西寄りに方13×9cm、現存長19cmの柱が立った状態で出土した。標高は柱上端が28.87cm、底面が28.66mを測る。

ピット73 (図50)

Ⅱ区の中央南寄りに位置する。本址は東側をピット74によって壊されるが、ほぼ全容を把握できた。平面形は略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸56cm、短軸47cm、深さ32cmを測り、礎板がピット中央北寄りの底面近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ29cm、幅8cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は28.69mである。

ピット75 (図50)

Ⅱ区の中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は楕円形を呈し、断面形は皿状を呈する。規模は長軸42cm、短軸33cm、深さ24cmを測り、礎板がピット中央南西寄りの底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ23cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.90mである。

ピット78 (図50)

Ⅱ区の中央北東寄りに位置する。本址は南西側をピット77によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸47cm、短軸現存長32cm、深さ26cmを測り、礎板が北壁近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ10cm、幅8cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.73mである。

ピット86 (図50)

Ⅱ区の中央南東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略楕円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸18cm、短軸13cm、深さ17cmを測り、径9cm、現存長27cmの柱が東壁際に立った状態で出土した。標高は柱上端が29.06m、底面が28.78mを測る。

ピット88 (図50)

Ⅱ区の南東壁付近中央に位置する。本址は北東側をピット89によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形ないし楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長27cm、短軸26cm、深さ13cmを測り、礎板がピット中央の底面近くに据えられていた。礎板の大きさは長さ19cm、幅8cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は28.84mである。

ピット89 (図50)

Ⅱ区の南東壁付近中央に位置する。ピット88と重複して北東壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸30cm、短軸29cm、深さ18cmを測り、礎板がピット中央の北寄りに据えられ、礎板の上には方11×8cm、現存長15cmの柱が立った状態で出土した。標高は柱上端が29.00m、礎板上面が28.83mである。

ピット91 (図50)

Ⅱ区の南東壁際中央に位置する。本址は南側をピット90によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は略円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は南北現存長42cm、東西現存長37cm、深さ19cmを測り、2枚の礎板がピット中央付近の底面から7cm上に重なって据えられていた。礎板の大きさは下方が長さ19cm、幅11cm、厚さ1cm、上方が長さ16cm、幅10cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は28.88mである。

ピット95 (図50)

Ⅱ区の東隅に位置する。本址は西側をピット93によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長40cm、短軸32cm、深さ22cmを測り、2枚の礎板がピット中央の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは南側が長さ19cm、幅4cm、厚さ1cm、北側が長さ20cm、幅6cm、厚さ1cmを測り、上面の標高はともに28.75mである。

ピット出土遺物 (図51)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表 (表12) に掲げたが、このうち2点を図示した。

1・2は金属製品で、1は釘、2は留具あるいは釘と思われる製品である。ともにピット77から出土した。

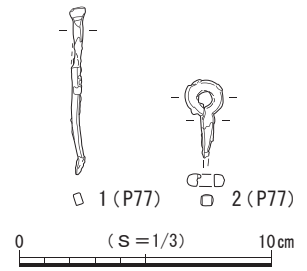


図51 第6面
ピット出土遺物

(5) 第6面 遺構外出土遺物 (図52)

第6面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち12点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は白磁の小形壺と思われる製品である。3～5は瀬戸産で、3は入子、4は折縁深皿、5は柄付片口である。6・7は常滑産で、6は7型式に比定される広口壺大、7は甕で窯印が記されている。8は軒平瓦である。9は滑石製のスタンプである。10～12はシカの中足骨による筭である。

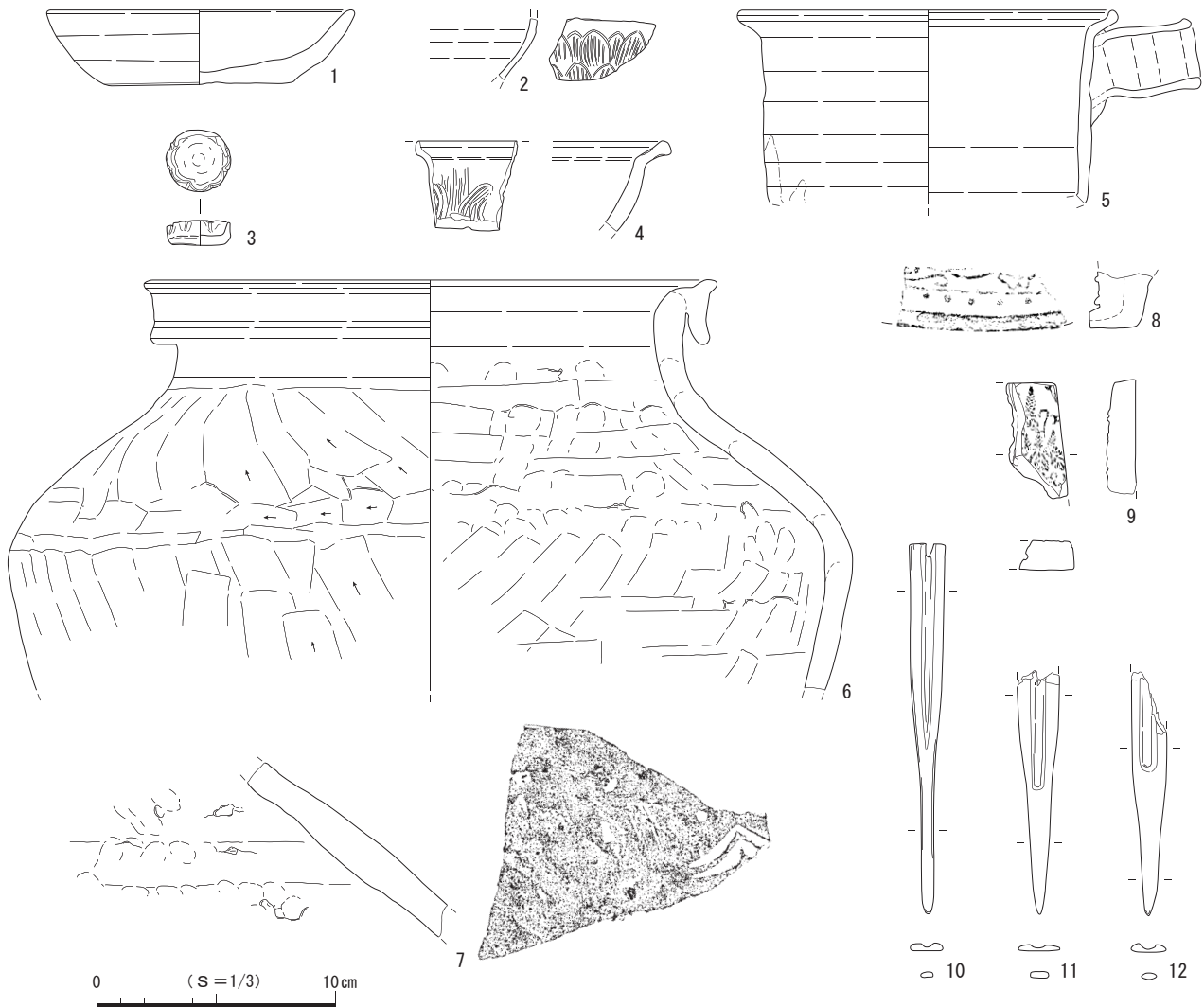


図52 第6面 遺構外出土遺物

第7節 第7面の遺構と遺物

第7面の遺構は堆積土層の18層上面で検出され、確認面の標高は28.5~28.6mを測る。18層は泥岩ブロックによる整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構1条、ピット22基である(図53)。これらの遺構は調査区全体から検出されたが、遺構密度はまばらである。また、I区の南東側は第5面で検出された溝状遺構4によって壊されており、遺構が失われている可能性がある。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、骨製品、木製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構8(図54)

I区の北西側に位置する。南側で第6面の不明遺構1と重複して壊され、北側は調査区外へと延びており全容を把握できなかった。本址は北東-南西方向におおむね直線的に延びており、規模は現存長約

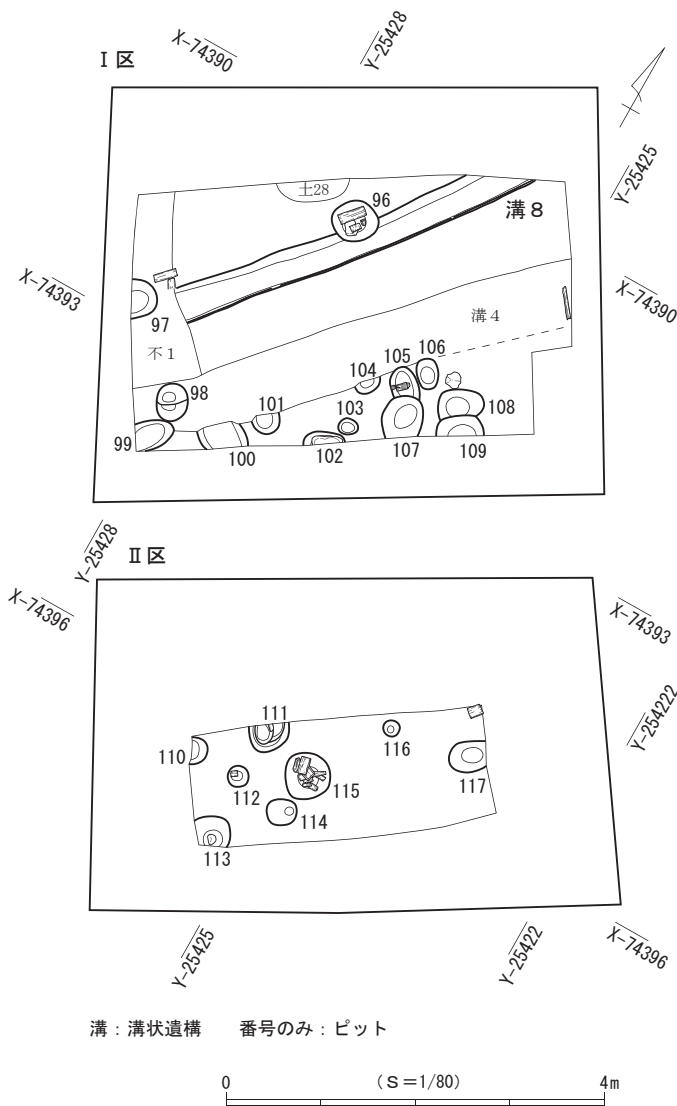


図53 第7面 遺構分布図

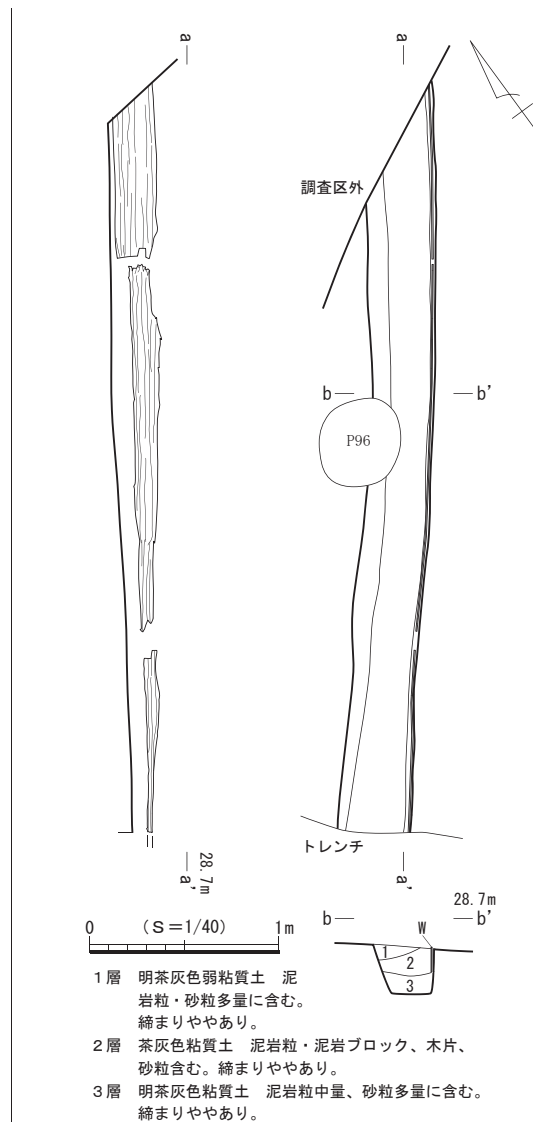


図54 第7面 溝状遺構8

4.0、幅32～37cm、深さ14～28cmを測る。底面の標高は北東側で28.28m、南西側で28.42mと南西から北東に向かって緩やかに傾斜する。北西壁は開いて立ち上がり、南東壁は垂直で板材を壁面に密着させた護岸が築かれている。調査区内では3枚の板材が確認され、最も残りの良い中央の板材の大きさは、長さ1.94m、幅7～16cm、厚さ2cm程で、溝の断面形は逆台形状を呈し、底面は平らである。主軸方位はほぼN-28°-Eを指す。

遺物はかわらけ15点、陶器4点、木製品1点が出土した。

(2)ピット

第7面では、22基を検出した。I区の南東側とII区にややまばらに分布し、I区の溝状遺構8の西側からは検出されなかった。また、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径17～50cm、深さ8～62cmを測る。

以下、礎石や礎板が据えられたピット4基を図示し、説明する。

ピット96 (図55)

I区の北西壁際中央に位置する。溝状遺構8と重複して北西壁を壊している。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸46cm、短軸44cm、深さ28cmを測り、礎石がピット中央南寄りの底面直上に据えられていた。礎石の大きさは長さ17cm、幅13cm、高さ15cmを測り、上面の標高は28.45mである。礎石の上面には2枚の礎板が据えられており、礎板の大きさは東側が長さ10cm、幅6cm、厚さ3cm、西側が長さ28cm、幅11cm、厚さ5cmを測る。礎板上面の標高は28.51mである。

ピット102 (図55)

I区の南東壁際中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びており、平面形は判然としない。断面形は逆台形を呈し、規模は北東-南西方向44cm、北西-南東方向の現存長14cm、深さ10cmを測り、礎石が底面直上に据えられていた。礎石の大きさは現存長34cm、現存幅8cm、高さ9cmを測り、上面の標高は28.53mである。

ピット112 (図55)

II区の南西側に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸22cm、短軸21cm、深さ35cmを測り、礎板が西壁際の底面から8cm上に据えられていた。礎板の大きさは長さ7cm、幅6cm、厚さ3cm、上面の標高は28.19mを測る。

ピット115 (図55)

II区の中央西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸49cm、短軸

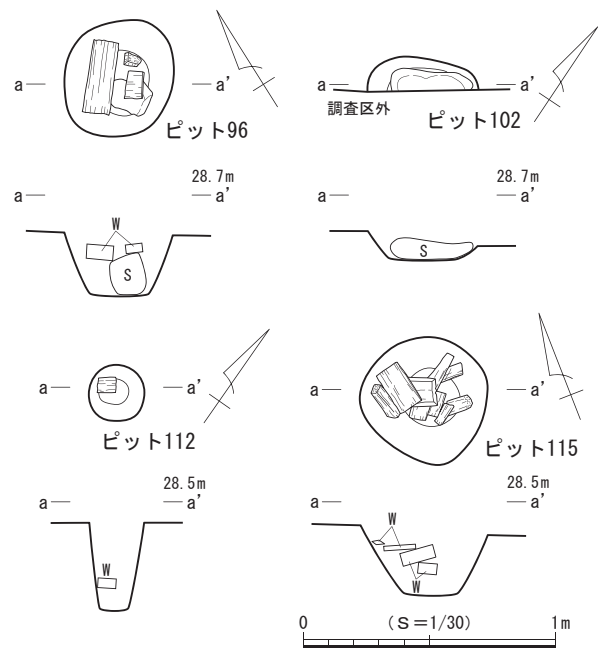


図55 第7面 ピット 96・102・112・115

47cm、深さ29cmを測り、9枚の板材が重なって出土し礎板ないし柱材と考えられる。材のうち最大のものは長さ17cm、幅10cm、厚さ1cmを測り、最上部から出土した木材上面の標高は28.36mを測る。

ピット出土遺物(図56)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)に掲げたが、このうち8点を図示した。

1・2・8はロクロ成形によるかわらけである。3～7は木製品で、3は建築部材、4は曲物、5・6は漆器皿、7は漆器椀である。出土遺構については、1・2はピット111、3～7はピット112、8はピット117から出土した。

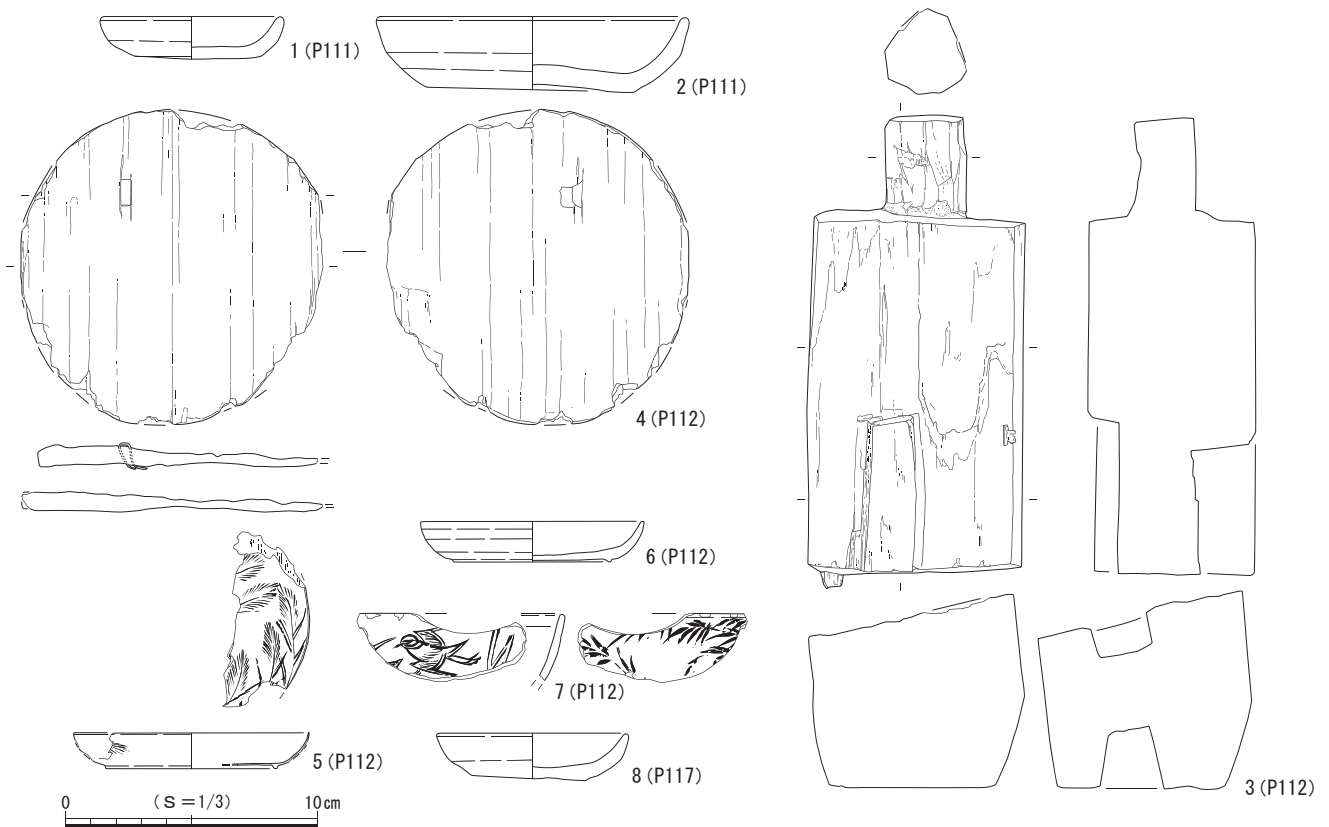


図56 第7面 ピット出土遺物

(3) 第7面 遺構外出土遺物(図57)

第7面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち22点を図示した。

1～10はロクロ成形によるかわらけである。11は瀬戸産の入子、12は山茶碗、13は瓦質土器の火鉢である。14は2面に使用痕が認められる砥石、15は滑石製の温石である。16は鉄製の釘、17～20は銭貨で、17は開元通寶(621年初鑄)、18は皇宋通寶(1038年初鑄)、19は元祐通寶(1086年初鑄)、20は天聖通寶(1023年初鑄)である。21は鹿角製の賽子、22はシカ中足骨製の筭である。

(4) 第7面 構成土出土遺物(図58)

第7面構成土中からも遺物が出土しており、このうち15点を図示した。

すべて木製品である。1は経木折敷、2～4は箸状、5～7は籠状、8・9は棒状、10は建築部材、11は杭、12～15は用途不明である。

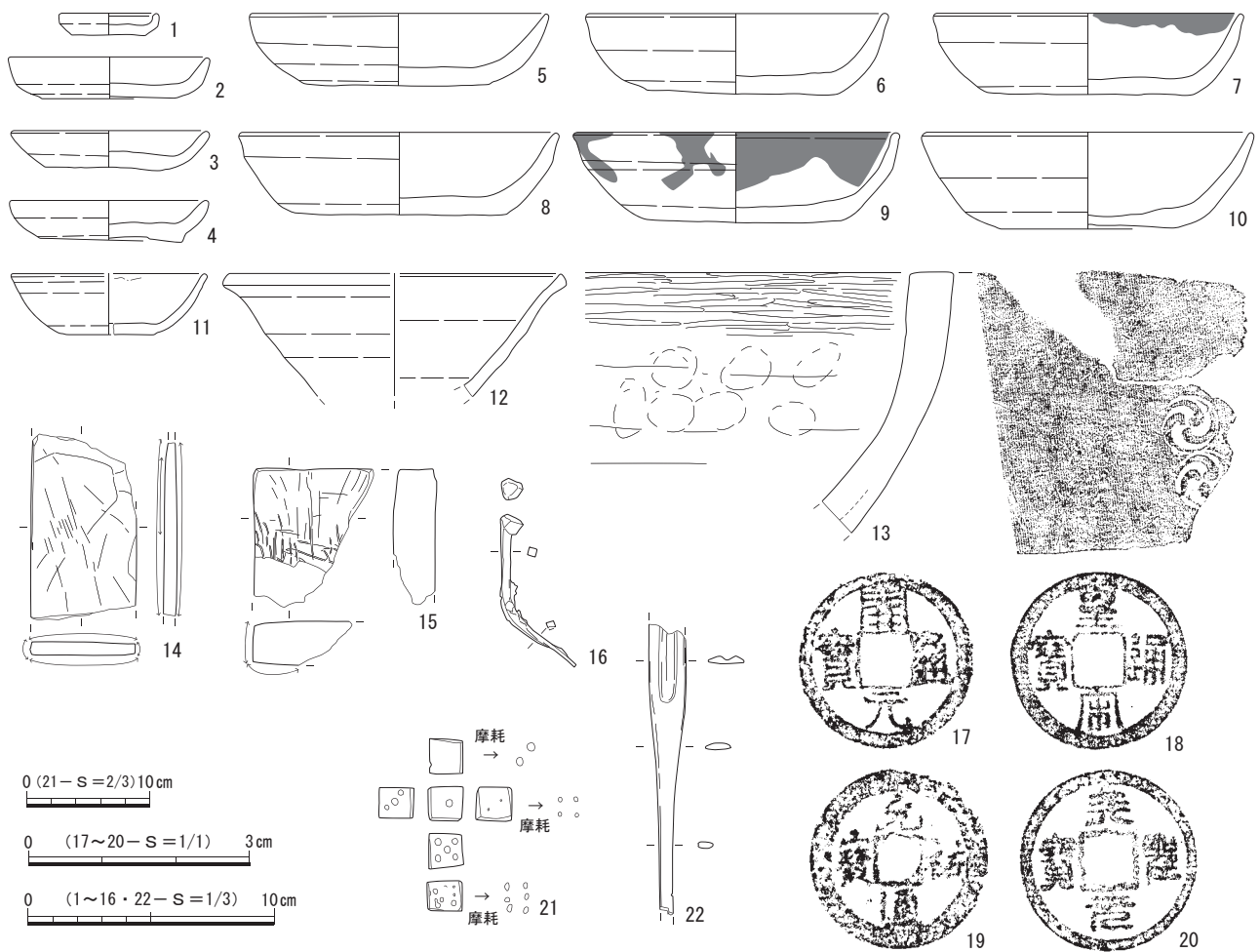


图57 第7面 遺構外出土遺物

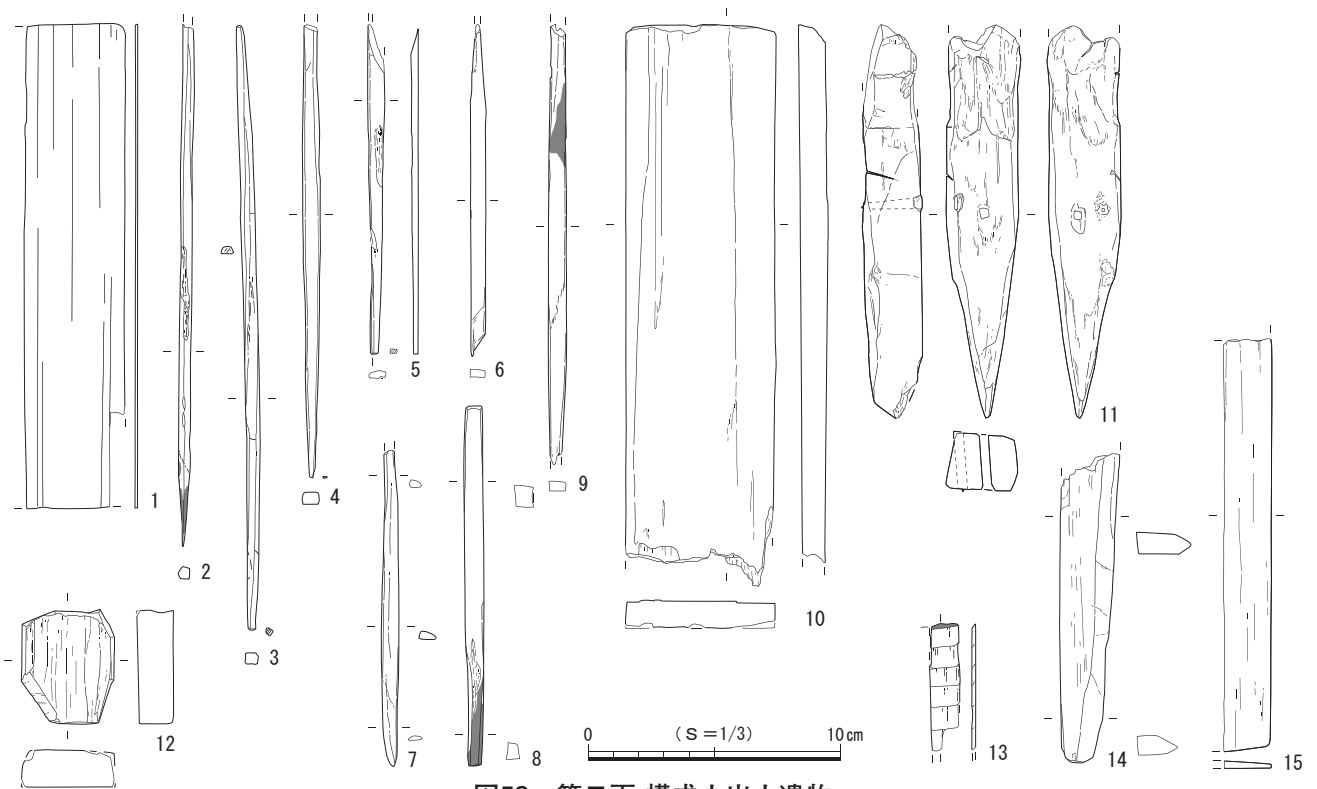


图58 第7面 構成土出土遺物

第8節 第8面の遺構と遺物

第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は28.3~28.4mを測る。19層は泥岩ブロック層による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、土坑1基、ピット17基である(図59)。これらの遺構はI区全体から検出されたが、分布密度はまばらである。

遺物は主にかわらけ、陶器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀代に属すると考えらる。

(1) 土坑

土坑32(図60)

I区の北西壁付近中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整形を呈し、底面はほぼ平らである。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸61cm、短軸56cm、深さ56cmである。坑底面の標高は27.75mを測る。

遺物はかわらけ8点、陶器2点、木製品3点、金属製品1点が出土した。

(2) ピット

第8面では、17基を検出した。調査区全体に散漫に分布し、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径18~52cm、深さ10~56cmを測る。

以下、礎板が据えられたピット3基と漆器の椀が出土したピット1基を図示し、説明する。

ピット122(図61)

I区の南西壁付近中央に位置する。本址は北西側をピット121によって壊されており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸32cm、短軸現存長28cm、深さ17cmを測り、底面の標高は28.23mを測る。漆塗りの椀がピット中央の底面直上から出土した。

ピット127(図61)

I区の南隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は円形を呈し、断面形は逆台形状を呈する。規模は長軸27cm、短軸25cm、深さ15cmを測り、礎板がピットの北壁際の底面直上に据えられていた。礎板の大きさは長さ13cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は28.24mである。

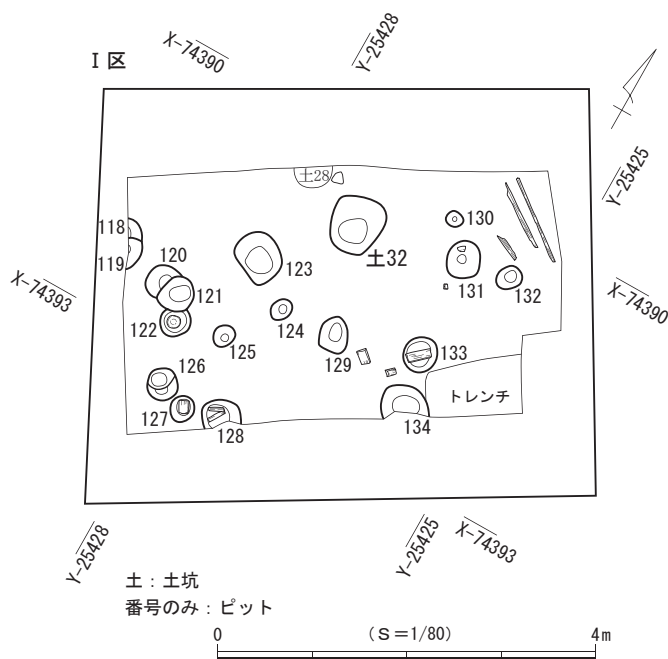


図59 第8面 遺構分布図

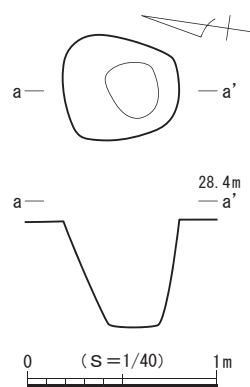


図60 第8面 土坑32

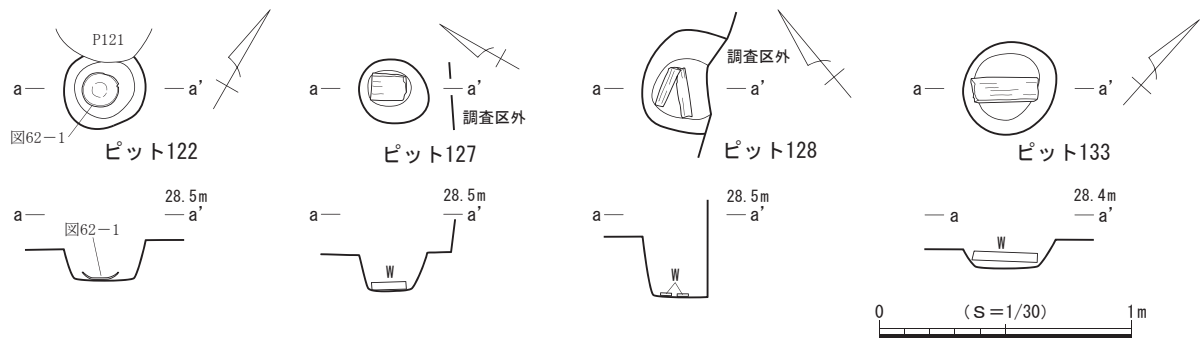


図61 第8面 ピット122・127・128・133

ピット128 (図61)

I区の南隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、本址の一部は南東側の調査区外へ延びており、全容を把握できなかった。検出範囲から推定すると、平面形は円形ないし楕円形を呈すると考えられ、断面形は逆台形と推定される。規模は北東-南西方向41cm、北西-南東方向の現存長30cm、深さ27cmを測り、2枚の礎板が北壁近くの底面上に据えられていた。礎板の大きさは東側が長さ18cm、幅5cm、厚さ1cm、西側が長さ16cm、幅4cm、厚さ1cmを測り、上面の標高はともに28.20mである。

ピット133 (図61)

I区の中央東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形を呈し、断面形は逆台形を呈する。規模は径36cm、深さ10cmを測り、礎板がピット中央の底面からわずかに浮いて据えられていた。礎板の大きさは長さ25cm、幅9cm、厚さ3cmを測り、上面の標高は28.26mである。

ピット出土遺物 (図62)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表12)に掲げたが、このうち2点を図示した。

1・2は漆器の椀である。1はピット122から、2はピット131から出土した。

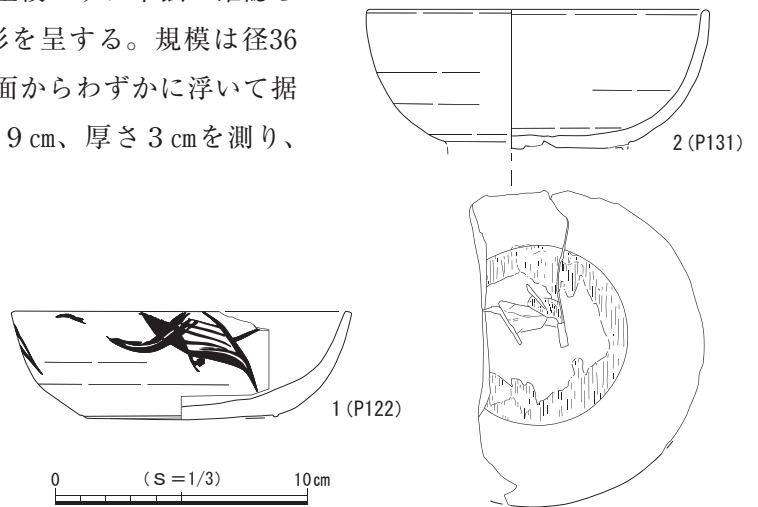


図62 第8面 ピット出土遺物

第9節 第9面の遺構と遺物

第9面の遺構は堆積土層の21層上面で検出され、確認面の標高は約28.0mを測る。21層は暗褐色有機質土を含む暗青灰色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。掘削深度の制約から、I区の東半部のみを調査し、検出した遺構は、板組遺構1基、溝状遺構1条、ピット4基である(図63)。これらの遺構は板組遺構を中心に分布しており、互いに関連をもつものであった可能性が考えられる。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、石製品、木製品、骨製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀代に属すると考えられる。

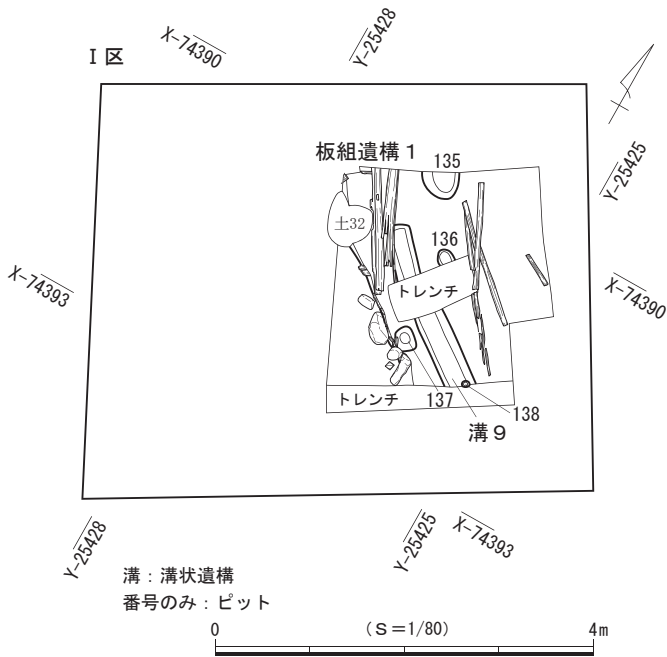


図63 第9面 遺構分布図

(1) 板組遺構

板組遺構 1 (図64)

I区中央を北西から南東方向にかけて位置する。西側で土坑32と重複して壊され、北西側と南東側、北側は調査区外に広がっているため、

平面形は判然としないが、南西側で掘り方の立ち上がりを確認した。壁面に7枚の板材が縦方向に打ち込まれ、壁の外側には長さ14~35cmの凝灰質砂岩が列状に配されている。この板材の大きさは長さ19~38cm、幅7~12cm、厚さ1cm前後を測る。掘り込みの底面には長さが最長で1.37mを測る板材が2カ所に集中して出土し、中には柄穴をもつ板材も認められる。本址の主軸方位は南西側の掘り込みを基準にすると、N-54°-Wを指すと推定される。板材の出土範囲をもとに現存規模を測ると、北西-南東方向が2.35m、北東-南西方向が2.16m、深さが40cmを測り、底面の標高は28.050mである。

遺物は出土しなかった。

(2) 溝状遺構

溝状遺構 9 (図65)

I区中央やや南寄りに位置する。北西-南東方向に延び、北西端部は調査区内に収まるが、南東側は調査区外へと続いている。南東から直線的に延びて北西端部で北側に向かってわずかに屈曲する。検出した規模は現存長約1.8m、幅24~32cm、深さ15cmを測り、主軸方位はN-52°-Wを指す。壁はやや開いて断面形が逆台形を呈し、底面は平らである。底面の標高は27.80mを測る。

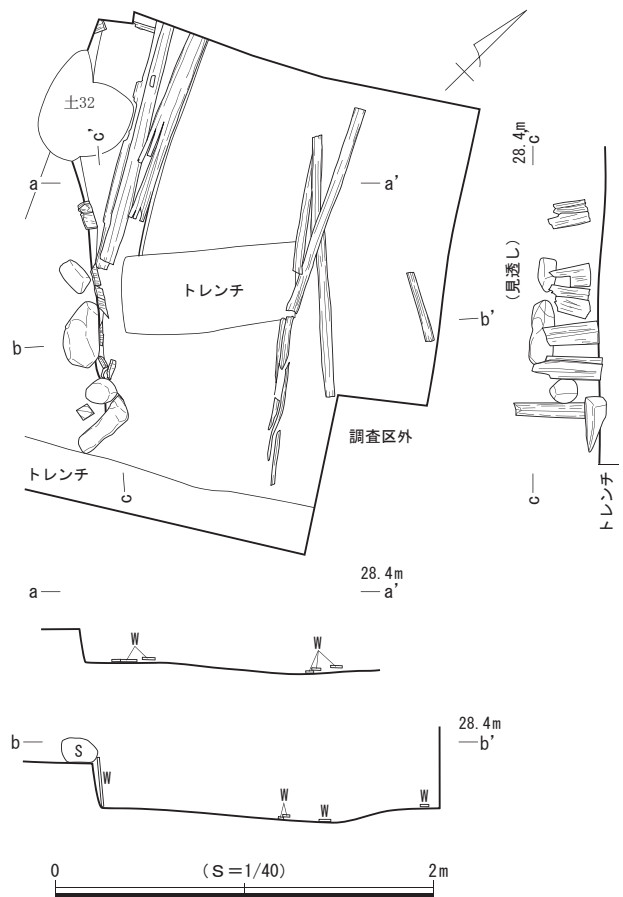


図64 第9面 板組遺構 1

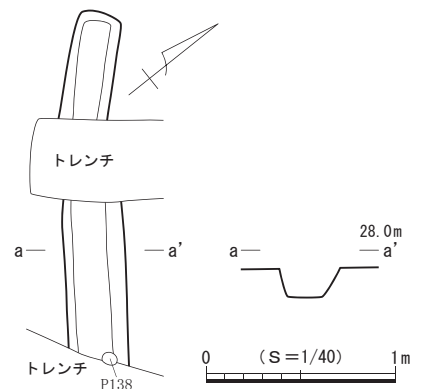


図65 第9面 溝状遺構 9

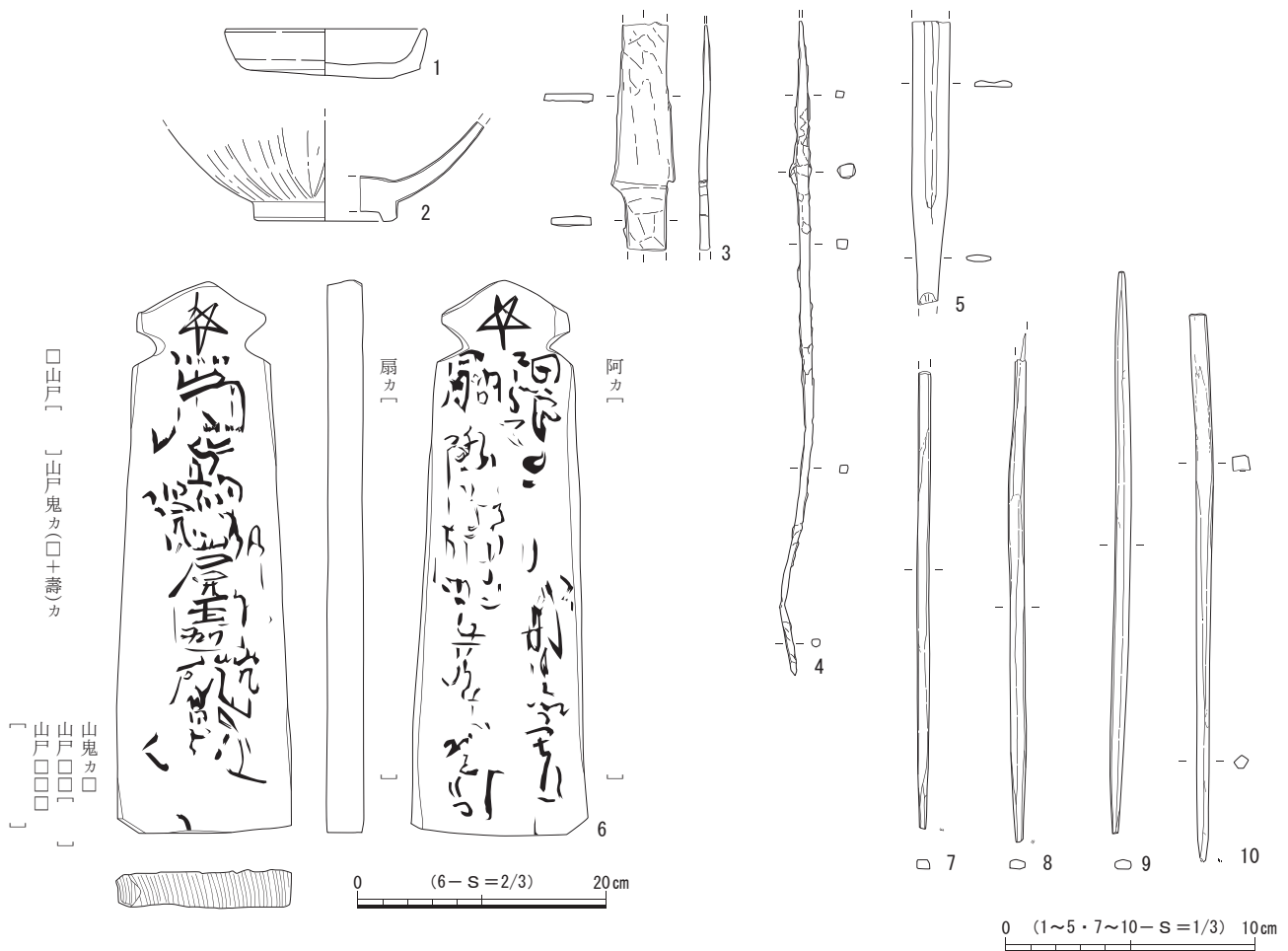


図66 第9面 溝状遺構9出土遺物(1)

出土遺物(図66・67)

遺物はかわらけ53点、磁器6点、陶器5点、石製品1点、骨製品1点、木製品13点、金属製品3点が出土し、このうち15点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類である。3・4は金属製品で、3は鑿と思われる鉄製品、4は鉄製火箸である。5はシカ中足骨製の筭である。6～15は木製品である。6は小形の呪符木簡と推定される資料で、木簡の形状は上端を山形に尖らせ、上部の両側面に切り込みが入ったもので、下端がやや広がる類例の少ないものである。墨書は表裏面に記され、その釈文を実測図に掲載した。表裏面上端には五芒星が記されていることから何らかの信仰・呪術行為に用いられた木簡と考えられる。五芒星が墨書されている呪符木簡は鎌倉内では2例目となる資料である。7～9は箸状、10は串状、11・12は連歯下駄、13は用途不明である。14は漆器の皿、15は漆器の椀である。

(3)ピット

第9面では、4基を検出した。いずれも板組遺構1と重複する位置に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径8～39cm、深さ7～24cmを測る。

遺物は出土しなかった。



図67 第9面 溝状遺構9出土遺物(2)

第四章 まとめ

今回報告する山ノ内字東管領屋敷147番9外地点は、「安国寺跡(No.174)」の範囲内に所在する。本遺跡の包蔵地範囲は鎌倉市の北部域に位置し、調査地点はJR北鎌倉駅の南西側を走る鎌倉街道を鎌倉方面に750mほど進んだ街道の東側に位置している。地形的には北西方向の大船方面に開けた開析谷の中に位置し、その谷地を鎌倉街道とJR横須賀線がほぼ並行して走っている。この開析谷に面した両側には、複雑に入り組んだ大小の谷戸が形成されている。丘陵頂部から湧出した小河川は地形に沿って低地に流れ込み、山ノ内の中央部を貫流する小袋谷川に集まり、その流れは市域の北西部で柏尾川に合流する。本地点は北東-南西方向に長い包蔵地範囲の南西端に位置し、鎌倉街道の東側に面している。本遺跡の調査例は今回報告する地点のみであり、周辺遺跡を含めても本地域は調査例のきわめて少ない場所といえる。

今回の調査では、遺構確認面は第1～9面までの合計9面であり、いずれの面も中世に属する。検出した遺構は礎石建物1棟、切石基礎建物1棟、溝状遺構9条、板組遺構1基、石列1条、据鉢遺構1基、土坑32基、不明遺構1基、ピット137基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高約30.1～30.3mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟のみである。この建物は北東－南西方向の柱間が4間以上の規模をもち、柱間寸法はおおむね90cm等間であった。また、調査区の東半部には明瞭な整地面が残存していることから、整地面に構築された規格性の高い大形建物が存在した可能性が考えられよう。Ⅱ区については第1・2面とも攪乱を受けているために遺構は確認されなかった。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高29.9～30.0mを測る堆積土層の5層上面で検出された。検出した遺構は切石基礎建物1棟、石列1条、据鉢遺構1基、土坑4基、ピット3基である。これらの遺構はⅠ区北半を中心に検出されたが、分布はまばらである。切石基礎建物1と石列1は切石を使用した遺構で、建物を構成していたと考えられるが、調査範囲の制約から詳細は判然としなかった。また、本面より出土した「俊賢」名が刻書される硯は、高嶋産として最古級であるとともに、鎌倉出土の硯としては高級品に分類される。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高29.7～29.8mを測る堆積土層の7層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、土坑9基、ピット22基である。中心となる遺構は溝状遺構1で、Ⅰ区の中央やや南側を北東－南西方向に横断して調査区外へと延びている。溝の規模は幅80cm、深さは最大で60cmを測り、北東から南西に向かってごく緩やかに傾斜する。また、両側壁面に泥岩の切石を積み上げた石組の護岸が築かれ、本址の南側には明瞭な整地面の広がり確認された。本面よりもさらに古い第5面からもほぼ同一の場所から同じ主軸方位の溝が検出されていることから、改修が行われて継続的に使用された状況がうかがわれる。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は堆積土層の10層上面で検出され、確認面の標高は29.5～29.7mを測る。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑7基、ピット19基である。遺構はⅡ区の北半に集中して検出されており、Ⅱ区の南半は遺構の空白部となり明瞭な整地層が広がっている。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀後葉～15世紀前葉に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は堆積土層の13層上面で検出され、確認面の標高は29.1～29.3mを測る。検出した遺構は溝状遺構3条、土坑7基、ピット9基である。Ⅰ区には明瞭な整地面が全面にわたって広がり、南側に溝状遺構が北東－南西方向に横断する。溝の規模は幅1.48～1.80m、深さ1.0mを測り、第3面で検出された溝状遺構とほぼ同じ場所に位置するが、規模は本面の溝状遺構の方が大きい。また、溝の両側壁面には切石による護岸が認められ、南東壁面は切石の北西面を斜めに揃えて2～4段に積み上げている。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀中葉～後葉に属すると考えられる。

〈第6面〉

第6面の遺構は堆積土層の17層上面で検出され、確認面の標高は28.8～29.0mを測る。検出した遺構

は溝状遺構1条、土坑4基、不明遺構1基、ピット41基である。Ⅰ区は第5面で検出された溝状遺構4によって南東側が壊されており、遺構が失われている可能性がある。Ⅱ区からは礎板を伴うピットが多数検出されていることから、調査区外に展開する建物を構成するピットの可能性が想定されよう。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第7面〉

第7面の遺構は堆積土層の18層上面で検出され、確認面の標高は28.5～28.6mを測る。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である。溝状遺構は第3・5面で検出された溝よりも北西寄りに位置するが、主軸方位はほぼ同じである。溝の規模は小さく、壁に板材を密着させた護岸が築かれ、規模・構造ともに第3・5面のものと異なる。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第8面〉

第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は28.3～28.4mを測る。検出した遺構は土坑1基、ピット17基で、これらの遺構はⅠ区全体から検出されたが、遺構種が限定的で分布密度はまばらである。礎板をもつピットや単独の礎板が出土しており、調査区外に展開する建物を構成するピットの可能性が考えられよう。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀代に属すると考えられる。

〈第9面〉

第9面の遺構は堆積土層の21層上面で検出され、確認面の標高は約28.0mを測る。掘削深度の制約からⅠ区の東半部のみを調査し、検出した遺構は板組遺構1基、溝状遺構1条、ピット4基である。中心となる遺構は板組遺構で、調査区外に広がっているためその平面形は判然としないが、壁面に板材が縦方向に打ち込まれ、壁の外側には砂質凝灰岩が列状に配されていた。また、掘り込みの底面には長さが最長で1.37mを測る板材が2ヵ所に集中して出土し、中には柄穴をもつ板材も認められた。本面で検出された溝状遺構やピットは板組遺構と重複する場所に構築されており、互いに関連をもち建物を構成していた可能性が考えられる。また、本面からは特筆すべき遺物として、溝状遺構9より出土した呪符木簡が挙げられる。上端には五芒星が墨書されており、同様な呪符木簡としては鎌倉内で2例目となる貴重な資料である。出土遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀代に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 鎌倉市教育委員会 1997『山ノ内道周辺遺跡発掘調査報告書』山ノ内道周辺遺跡発掘調査団
手塚直樹 1997『神奈川県・鎌倉市 保寧寺跡－第2次調査－』保寧寺跡発掘調査団
永田史子・齋藤修佑 2018「徳泉寺跡(No173)山ノ内字東管領屋敷168番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会
松吉大樹 2010「安国寺跡出土の硯について」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
馬淵和雄 2012「山ノ内上杉邸跡(No170)の発掘調査－山ノ内字東管領屋敷179番39地点－」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
森 孝子 2010「安国寺跡(No174)の調査 鎌倉市山ノ内字管領屋敷147番9, 10」『第20回 鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨』特定非営利活動法人鎌倉考古学研究所・鎌倉市教育委員会
『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第1面 遺構外出土遺物 (図8)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	5.5	3.3	1.8	底面-回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.1	4.5	2.2	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロかわらけ・小	7.4~7.9	4.2	2.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロかわらけ・中	11.9	6.2	3.5	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロかわらけ・中	12.8	6.0	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/5

第1面 構成土出土遺物 (図9)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.3	4.1	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	4.2	2.8	口唇部に煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロかわらけ・小	6.7~7.1	4.4	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロかわらけ・小	(7.5)	4.2	2.9	口唇部のほとんどを打ち欠き、その周辺および底部外面に煤付着 底面-回転糸切+ナデ消し 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
5	土器	ロクロかわらけ・中	10.8	6.5	3.2	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロかわらけ・中	10.7	5.8	3.4	口唇部内面煤付着 底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
7	土器	ロクロかわらけ・中	11.0	6.0	3.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
8	土器	ロクロかわらけ・中	11.6	6.7	4.0	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
9	陶器	瀬戸直縁大皿	(29.3)	-	現6.3	内外面上半-灰釉 胎土: 細砂粒、黒色粒、軟質 色調: 胎土-灰白色 灰釉-薄緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅳ期	1/8
10	摩耗陶片	摩耗陶片	長10.8	短7.6	厚1.4~1.6	常滑甕の陶片を転用 陶片周囲が摩耗 胎土: 粗 色調: 暗赤褐色	
11	金属製品	銭貨	直径2.5	孔径0.6	厚0.1	銭銘-天聖元寶(北宋・1023) 真書	略完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

据鉢遺構1出土遺物 (図14)

1	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	32.3	13.3	11.7	胎土: 砂粒、白色粒、泥岩粒、小石粒 色調: 橙色 備考: 内面に柵目(1単位9~10か)あり、内面摩滅、見込み部使用による穿孔、9~10型式	3/4
---	----	---------	------	------	------	---	-----

土坑4出土遺物 (図16)

1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.8)	(4.3)	2.6	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2弱
---	----	-----------	-------	-------	-----	---	------

第2面 構成土出土遺物 (図17・18)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.3	4.2	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	6.6	4.1	2.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
3	土器	ロクロかわらけ・小	6.8	4.5	2.0	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙褐色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロかわらけ・小	6.8	3.8	2.3	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
5	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	4.2	2.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙褐色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロかわらけ・小	7.3	4.2	2.5	底面-回転糸切+一部ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
7	土器	ロクロかわらけ・中	11.8	8.0	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	3/4強
8	磁器	青磁水瓶	-	-	現3.6	内外面-無文 色調: 胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考: 龍泉窯系青磁	注口部2/5
9	磁器	青磁太鼓胴深鉢	-	-	現4.9	外面-菊花文粘土貼付 内面-無文 色調: 胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考: 龍泉窯系青磁	口縁部片
10	陶器	瀬戸緑釉小皿	(10.5)	4.9	3.0	内外面口縁部-灰釉 胎土: 砂粒、黒色粒 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅱ期	1/3
11	陶器	瀬戸緑釉小皿	10.6	4.8	2.9	内外面口縁部-灰釉 胎土: 砂粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅲ期	略完形
12	陶器	瀬戸卸皿	(14.9)	(6.5)	3.1	内外面-灰釉 胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒、礫 色調: 胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考: 古瀬戸後期様式Ⅲ期	1/3
13	陶器	瀬戸直縁大皿	(23.8)	(11.5)	6.2	内外面下半-灰釉 胎土: 砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-灰-淡黄色 釉-淡緑色(内外面-刷毛塗り) 内面見込み-拭き取り) 備考: 古瀬戸後期様式Ⅱ期	2/5

14	陶器	瀬戸直縁大皿	(32.7)	(11.4)	9.3	内外面下半-灰釉 脚部1遺存 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式Ⅳ期	1/3
15	陶器	瀬戸折縁深皿	(31.8)	-	現6.6	内外面-灰釉 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色(内外面-刷毛塗り 内面見込み-拭き取り) 備考:古瀬戸後期様式Ⅲ~Ⅳ期	1/6
16	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	-	-	現8.8	胎土:砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調:にぶい橙色 備考:9~10型式	口縁部片
17	瓦質土器	香炉	-	-	現3.8	外面-印花による雷文 胎土:砂粒、白色粒 色調:暗灰色 焼成:良好	口縁部片
18	瓦質土器	火鉢	-	-	現6.2	内面口縁部および外面ミガキ 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒 色調:暗灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部片
19	瓦質土器	火鉢	-	-	現9.3	外面-連珠文貼付 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部片
20	瓦質土器	土風炉	-	-	現4.7	外面-半裁竹管状工具による縦方向の調整 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、小石粒 色調:暗灰色 焼成:良好	口縁部片
21	石製品	硯	現長16.5	幅10.6	厚1.9~2.7	長方硯 海面を1回作り替えている、裏面-「主俊賢」「不有他妨有也」の刻字 石材-頁岩(高嶋石)	4/5

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構1出土遺物(図21)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	7.2	4.1	2.1	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.4	4.0~4.2	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形
3	陶器	瀬戸平碗	-	高台径5.5	現4.8	胎土:細礫 色調:胎土-淡黄白色 釉-淡黄灰色 備考:古瀬戸後期様式Ⅰ期	1/3弱
4	陶器	瀬戸天目茶碗	12.0	3.8	7.0	胎土:密 色調:胎土-灰白~灰黄色 釉-暗茶褐~黒色 無釉部-にぶい黄褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ~Ⅲ期	4/5
5	陶器	瀬戸直縁大皿	(30.0)	(14.5)	7.5	胎土:堅緻 色調:胎土-淡黄灰色 釉-淡褐色 備考:古瀬戸後期様式	1/3弱
6	瓦質土器	燭台	7.6	-	現2.5	内外面-横ヘラミガキ 胎土:密 白色粒 色調:灰白色 焼成:良好 備考:内外面-黒色処理	燭部遺存

土坑13出土遺物(図24)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.9	3.8	2.3	口唇部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.1	4.2	2.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、やや粗土 色調:淡橙~黄褐色 焼成:良好	完形

第3面 遺構外出土遺物(図26)

1	土器	ロクロかわらけ・中	12.2	7.2~7.5	4.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
---	----	-----------	------	---------	-----	---	-----

第3面 構成出土遺物(図27・28)

1	土器	ロクロかわらけ・小	6.4	4.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
2	土器	ロクロかわらけ・小	6.8	3.9	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	3/4
3	土器	ロクロかわらけ・小	7.3	4.8	2.3	口唇部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調:淡褐色 焼成:良好	完形
4	土器	ロクロかわらけ・小	(7.2)	5.0	2.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	2/3
5	土器	ロクロかわらけ・小	7.2~7.8	4.3	2.3	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:黄灰色 焼成:良好	完形
6	土器	ロクロかわらけ・小	7.6	5.0~5.2	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:褐色 焼成:良好	3/4
7	土器	ロクロかわらけ・大	14.8	9.2	4.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ+ヘラナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:褐色 焼成:良好	4/5
8	陶器	瀬戸緑釉小皿	(10.6)	(4.2)	3.4	胎土:堅緻 黒色粒 色調:胎土-灰黄色 釉-暗茶褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ期	1/3強
9	陶器	瀬戸緑釉小皿	10.9	5.3	2.6	胎土:堅緻 細礫 色調:胎土-褐色 釉-黒色 備考:底面に重ね焼きの目跡2ヵ所遺存、古瀬戸後期様式Ⅱ期	完形
10	陶器	常滑甕	-	-	現3.3	胎土:白色粒、砂粒、細礫、砂質 色調:暗灰色 備考:1型式	口縁部片
11	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	(29.0)	(12.2)	(8.9)	胎土:白色粒、赤色粒、細礫、砂質 色調:暗褐色 備考:9型式	完形
12	瓦質土器	香炉	(12.2)	-	現4.0	外面-ミガキ 胎土:黒色粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:黒色処理	口縁~体部小片
13	瓦	平瓦	現長8.2	現幅11.5	厚1.3~1.7	凸面-大斜格子文+側縁平行ヘラナデ 凹面-広端縁ケズリ調整+側縁平行ヘラナデ 広端縁-ケズリ調整 胎土:白色粒、小礫、やや砂質 色調:黒灰色	片広端縁側小片
14	石製品	砥石	長7.6	短4.1	厚1.5~1.6	仕上砥 3面に使用痕跡 石材-粘板岩	

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑14出土遺物(図31)							
1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.6)	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	2/3

土坑15出土遺物(図32)

1	土器	ロクロ かわらけ・特大	16.2	8.5	4.4	外面-油煤付着物 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	4/5
---	----	----------------	------	-----	-----	--	-----

土坑20出土遺物(図34)

1	瓦質土器	火鉢	-	-	現5.1	外面-印花による桔梗文 胎土:雲母、褐色粒、細礫 色調:灰白色 焼成:良好 備考:外面黒色処理	胴部上半片
---	------	----	---	---	------	--	-------

第4面 構成土出土遺物(図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.3	2.5	0.9	底面-全面ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.2~6.4	4.5	2.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.3	2.4	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
4	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(29.5)	(12.3)	(10.6)	胎土:赤色粒、細礫、やや砂質 色調:暗茶褐色 備考:内面松葉状の線刻、9~10型式	1/3弱
5	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(30.0)	-	現10.0	胎土:白色粒、細礫、砂質 色調:茶褐色 備考:10型式	2/3弱
6	瓦質土器	香炉	-	-	現2.7	外面-印花による菱形雷文 胎土:褐色粒、密 色調:黒色・薄灰色 焼成:良好 備考:外面黒色処理	口縁部片
7	石製品	硯	現長11.3	幅上面(5.4) 底面5.0	厚1.5	石材-粘板岩	4/5
8	石製品	砥石	長21.4	幅2.1~4.5	厚2.5~3.8	荒砥 2面に使用痕跡 石材-粘板岩	略完形

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構 4 出土遺物(図37)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7)	(4.0)	1.9	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/4
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	(4.4)	1.8	口唇部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+一部ナデ+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	1/2弱
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.2	1.9	口縁部煤付着 灯芯痕 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	4/5
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
5	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現5.5	内外面-灰釉、胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:胎土-淡黄色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ期	完形
6	石製品	砥石	長9.2	幅2.7	厚0.8~1.2	3面に使用痕跡 石材-粘板岩	
7	木製品	箸状	現長10.0	幅0.6	厚0.5	断面隅丸・丁寧な整形	小片

溝状遺構 5 出土遺物(図39)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.7	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.9	3.6	底面-回転糸切+ナデ、内底-ナデ、底部穿孔1ヶ所 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/2強
3	陶器	瀬戸 天目茶碗	(12.0)	4.4	6.4	内外面-鉄釉 胎土:密 色調:胎土-灰白色 釉-暗黒褐色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ期	1/3強
4	漆器	椀	-	-	(5.3)	内面:黒色漆髹漆・無文 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・丸に花文)	小片

溝状遺構 6 出土遺物(図40)

1	木製品	箸状	現長21.5	幅0.7	厚0.3	断面扁平	不明
2	木製品	用途不明	現長6.7	現幅1.4	厚0.9~1.8	建築部材?	不明
3	漆器	皿	(8.7)	(6.1)	1.1	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・楓文・水文・垣文) 内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・楓文・水文) 高台形:輪高台 歪み大	2/3
4	漆器	蓋	(17.2)	(16.0)	0.8~1.4	内面:黒色漆髹漆 無文 外面:黒色漆髹漆 無文 ロクロ目が強く残る	5/6

第5面 遺構外出土遺物(図43・44)

1	磁器	青白磁 皿	-	-	現4.0	口唇部-口元 内面-雷文・蓮弁文 色調:胎土-白色 釉-灰青色	口縁~ 体部片
2	磁器	青磁 碗	-	-	現4.6	外面-鎊蓮弁文 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗Ⅱ-b類	口縁部片
3	陶器	瀬戸 天目茶碗	(11.8)	4.2	6.3	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-茶褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅰ期	1/2
4	陶器	瀬戸 天目茶碗	(11.9)	4.4	6.7	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:白色粒、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-黒褐色 備考:口唇部を意図的に打ち欠く、古瀬戸後期様式Ⅰ期	2/3
5	陶器	瀬戸 小坏	4.7	2.2	1.6	内外面-鉄釉、高台-無釉 胎土:緻密、砂粒 色調:胎土-灰白色 釉-暗褐色	完形
6	陶器	瀬戸 広口壺	-	-	現5.9	内外面頭部-灰釉、外面肩部-連続円形の印花・櫛描き文 胎土:堅緻 白色粒 色調:胎土-灰褐色、灰釉-暗オリーブ色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ期	口縁~ 肩部片
7	陶器	備前 播鉢	-	-	現5.5	内面-播目9条?一単位の播目遺存 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒、小石粒 色調:橙色	口縁部片
8	瓦質土器	香炉	-	-	現2.6	外面-ミガキ+亀甲文・S字状文の印花 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰白色 焼成:良好	胴部下位~ 底部片
9	金属製品	留具	現長2.9	幅0.4	厚0.1	板状を曲げる、銅合金	略完形
10	ガラス製品	玉	径1.2	孔径0.2	重2.8g	トンボ玉 備考:孔内に紐状の一部が残る	完形

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑29出土遺物 (図47)							
1	瓦	鬘斗瓦	現長 16.5	現幅 11.2	厚 2.2	凸面-大斜格子叩き+側縁方向ナデ、側縁・側面-ヘラケズリ 凹面-側縁方向ヘラ調整+ナデ 端面-ヘラケズリ 胎土:黒色粒、砂粒、小石粒 色調:暗灰色	1/4

ピット出土遺物 (図51)

1	金属製品	釘	現長 6.6	幅 0.3	厚 0.4	鉄製釘 出土遺構:ピット77	略完形
2	金属製品	留具?	現長 3.1	幅 0.4	厚 0.4	鉄製 環状部径:1.5 出土遺構:ピット77	略完形

第6面 遺構外出土遺物 (図52)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	7.5	3.2	底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰褐色 焼成:良好	3/4
2	磁器	白磁 小形壺?	-	-	現 2.6	外面-蓮弁文 内外面-施釉 色調:胎土-白色 釉-乳白色	胴部片
3	陶器	瀬戸 入子	2.1~2.6	2.1	1.1	ロクロ成形後に輪花状に整形 胎土:砂粒、黒色粒 色調:灰白色 備考:古瀬戸中期様式	3/4
4	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 3.8	内外面-灰釉、内面-5条の櫛描き文様 胎土:堅緻、白色粒 色調:胎土-灰白色、釉-淡緑色 備考:古瀬戸後期様式	口縁部片
5	陶器	瀬戸 柄付片口	(15.6)	-	現 8.1	内外面-灰釉 胎土:白色粒、黒色粒 色調:胎土-灰白色 釉-淡緑色 備考:古瀬戸中期様式	1/4弱
6	陶器	常滑 広口壺大	(23.3)	-	現 17.2	胎土:砂粒、白色粒、小石粒、礫 色調:暗灰褐色 備考:7型式	1/4弱
7	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.3	外面-窯印 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、礫 色調:暗灰色	肩部片
8	瓦	軒平瓦	現高 2.4	現幅 8.1	厚 2.0~2.2	瓦当-珠文・界線・唐草文 端面-ケズリ調整 胎土:砂粒、白色粒、小石粒 色調:灰色	瓦当部 下位片
9	石製品	スタンプ	現長 4.8	現幅 2.4	厚 1.2	石質-滑石	小片
10	骨製品	筭	現長 15.5	幅 0.5~1.5	厚 0.1~0.3	獣骨-シカ中足骨製	完形
11	骨製品	筭	現長 10.2	幅 0.4~1.8	厚 0.2~0.3	獣骨-シカ中足骨製	2/3
12	骨製品	筭	現長 10.2	幅 0.6~1.5	厚 0.2~0.4	獣骨-シカ中足骨製	2/3

表8 第7面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
ピット出土遺物 (図56)							

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	5.0	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット111	1/3弱
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.4	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ+ヘラナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット111	2/3
3	木製品	建築部材	長 18.1	幅 8.5	厚 6.6	仕口・柄が残る 出土遺構:ピット112	完形
4	木製品	曲物	長径 (12.4)	短径 (12.0)	厚 0.7	曲物 底板部分 曲物側板と結んだ桜皮が残る 出土遺構:ピット112	略完形
5	漆器	皿	(9.3)	(6.8)	(1.5)	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・松文) 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・松文) 高台形:輪高台 遺存状態が悪い 歪み大 出土遺構:ピット112	1/3
6	漆器	皿	(8.8)	6.2	1.6	内面:黒色漆髹漆・無文 外面:黒色漆髹漆・無文 出土遺構:ピット112	1/2
7	漆器	椀	-	-	(2.7)	内面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・千鳥文) 外面:黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(手描き・笹文) 出土遺構:ピット112	小片
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.5~4.7	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄褐色 焼成:良好 出土遺構:ピット117	完形

第7面 遺構外出土遺物 (図57)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	3.5~3.9	3.0	0.9	底面-回転糸切 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:黄褐色 焼成:良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	5.5	1.7	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6~7.9	4.9	1.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.0	5.5~5.8	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:灰黄色 焼成:良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.3~ 12.0	7.0~7.5	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙~橙色 焼成:良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.1	7.8	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	3/4
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2~ 12.4	7.7~8.4	3.3	内面-口縁部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6~ 12.8	8.4~8.6	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:橙色 焼成:良好	完形
9	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.9~8.2	3.7	内外面-口縁部煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形
10	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	7.0	(3.9)	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調:淡褐色 焼成:良好	2/3
11	陶器	瀬戸 入子	(7.8)	(3.5)	2.5	内面-見込部朱痕 胎土:微砂、褐色粒、密 色調:胎土-黄灰色 備考:古瀬戸前期様式II~III期	1/4弱

12	陶器	山茶碗	(13.6)	-	現 5.0	胎土：微砂、白色粒、黒色粒、やや砂質 色調：灰褐色	1/5弱
13	瓦質土器	火鉢	-	-	現 10.6	内面口縁部および外面ミガキ+外面左三巴文 胎土：黒色粒、細礫 色調：白灰色 内外面黒色処理 焼成：良好 備考：IV A類	口縁～胴部片
14	石製品	砥石	現長 7.6	短 4.3	厚 0.4～0.6	仕上砥 2面に使用痕跡 石材-粘板岩	
15	石製品	温石	現長 5.6	現短 4.9	厚 1.3～1.8	3面に使用痕跡 石材-滑石	
16	金属製品	釘	現長 6.2	幅 0.3	厚 0.3	鉄製釘	略完形
17	金属製品	銭貨	直径 2.3	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-開元通寶(唐・621) 書体-真書	完形
18	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.7	厚 0.1	銭銘-皇宗通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形
19	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.5	厚 0.1	銭銘-元祐通寶(北宋・1086) 書体-行書	完形
20	金属製品	銭貨	直径 2.4	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-天聖通寶(北宋・1023) 書体-篆書	完形
21	骨製品	賽子	長 0.65	短 0.6	重 0.5 g	シカの角を素材とする	略完形
22	骨製品	筭	現長 11.8	幅 0.6～1.5	厚 0.2～0.4	獣骨-シカ中足骨製	2/3

第7面 構成土出土遺物 (図58)

1	木製品	経木折敷	長 20.2	現幅 4.0	厚 0.1	隅を丸く加工	不明
2	木製品	箸状	現長 20.7	幅 0.5	厚 0.5	端部焼痕	略完形
3	木製品	箸状	長 24.0	幅 0.6	厚 0.5	断面方形	完形
4	木製品	箸状	現長 18.0	幅 0.7	厚 0.5	断面方形	不明
5	木製品	篋状	長 13.0	幅 0.7	厚 0.3	端部斜めに加工	略完形
6	木製品	篋状	現長 12.2	幅 0.6	厚 0.3	端部斜めに加工	略完形
7	木製品	篋状	現長 11.5	幅 0.7	厚 0.3	端部篋状に加工	略完形
8	木製品	棒状	長 13.3	幅 0.8	厚 0.9	端部焼痕・火鑽棒?	略完形
9	木製品	棒状	現長 17.5	幅 0.7	厚 0.4	断面方形・片面焼痕	不明
10	木製品	建築部材	現長 21.3	現幅 5.9	厚 1.1		不明
11	木製品	杭	現長 15.6	現幅 2.9	厚 2.3	端部斜めに加工・鉄釘痕・建築部材を再加工?	不明
12	木製品	用途不明	長 4.5	幅 3.7	厚 1.5	端材?	不明
13	木製品	用途不明	現長 5.0	幅 1.2	厚 0.2	片面に約0.9cm刻みで切込み痕	不明
14	木製品	用途不明	現長 11.3	幅 1.1～2.3	厚 0.9	杭?	不明
15	木製品	用途不明	現長 17.4	現幅 1.9	厚 0.2～0.3	板折敷?	不明

表9 第8面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

ピット出土遺物 (図62)

1	漆器	椀	13.6	7.7	4.3	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(3カ所に鶴文)・手描き 高台形：輪高台 出土遺構：ピット122	2/3
2	漆器	椀	(13.6)	7.2	5.5	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台 高台内面に線刻残る 出土遺構：ピット131	2/3

表10 第9面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構9出土遺物 (図66・67)

1	土器	ロクロかわらけ・小	7.6～8.0	6.6～6.8	2.0	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 内底一指ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
2	磁器	青磁碗	-	(5.8)	現 4.0	外面-蓮弁文 色調：胎土-暗灰色、釉-緑灰色 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗II-b類	1/6
3	金属製品	鑿	現長 9.2	幅 1.8～2.2	厚 0.1～0.3	鉄製鑿?	略完形
4	金属製品	火箸	現長 26.3	幅 0.3～0.5	厚 0.3～0.5	鉄製火箸	略完形
5	骨製品	筭	現長 11.4	幅 0.8～1.5	厚 0.2	獣骨-シカ中足骨製	2/3
6	木製品	呪符木簡	長 11.2	幅 2.8～3.5	厚 0.7	図66の釈文参照	完形

7	木製品	箸状	現長 18.4	幅 0.5	厚 0.4	断面方形	不明
8	木製品	箸状	現長 20.4	幅 0.7	厚 0.4	断面扁平	不明
9	木製品	箸状	長 22.6	幅 0.7	厚 0.4	断面扁平	完形
10	木製品	串状	長 22.0	幅 0.7	厚 0.6	断面方形・片端のみ加工	完形
11	木製品	連歯下駄	現長 18.5	幅 10.0	厚 4.8	遺存状態悪い	不明
12	木製品	連歯下駄	現長 17.1	幅 9.2	厚 7.1	鼻緒止めの部材残る	1/2
13	木製品	用途不明	長 10.0~6.2	幅 3.2	厚 0.6	端部焼痕・刃物痕が残る	不明
14	漆器	皿	(9.6)	(7.0)	1.1	内面：黒色漆髹漆・無文 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台	1/3
15	漆器	椀	—	(6.8)	(1.2)	内面：黒色漆髹漆・赤色系漆による漆絵(スタンプ文・竜胆文) 外面：黒色漆髹漆・無文 高台形：輪高台	1/3

表11 遺構計測表

〈 〉 = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
礎石建物 1	第1面	(360)	(270)	—	ビット 29	第4面	12	11	—	ビット 67	第6面	35	(19)	27
切石基礎建物 1	第2面	(247)	(185)	—	ビット 30	第4面	19	16	35	ビット 68	第6面	49	40	45
石列 1	第2面	77	(40)	—	ビット 31	第4面	18	17	31	ビット 69	第6面	(38)	(36)	30
据鉢遺構 1	第2面	(64)	(46)	13	ビット 32	第4面	22	20	20	ビット 70	第6面	55	54	15
土坑 1	第2面	(78)	69	24	ビット 33	第4面	37	31	30	ビット 71	第6面	53	44	22
土坑 2	第2面	(86)	(69)	10	ビット 34	第4面	(55)	40	20	ビット 72	第6面	31	29	47
土坑 3	第2面	61	53	20	ビット 35	第4面	58	39	25	ビット 73	第6面	56	47	32
土坑 4	第2面	(92)	51	26	ビット 36	第4面	51	30	13	ビット 74	第6面	25	(23)	38
ビット 1	第2面	32	29	12	ビット 37	第4面	(55)	25	29	ビット 75	第6面	42	33	24
ビット 2	第2面	33	26	12	ビット 38	第4面	45	28	38	ビット 76	第6面	(30)	24	18
ビット 3	第2面	55	51	69	ビット 39	第4面	38	30	45	ビット 77	第6面	44	35	37
溝状遺構 1	第3面	(500)	80	73	ビット 40	第4面	43	32	24	ビット 78	第6面	47	(32)	26
溝状遺構 2	第3面	(190)	41	5~19	ビット 41	第4面	20	(10)	7	ビット 79	第6面	42	36	26
土坑 5	第3面	(160)	(120)	48	ビット 42	第4面	41	36	7	ビット 80	第6面	(39)	33	15
土坑 6	第3面	(88)	(61)	18	ビット 43	第4面	(39)	(30)	31	ビット 81	第6面	(28)	(13)	15
土坑 7	第3面	65	46	26	ビット 44 (欠)	第4面	—	—	—	ビット 82	第6面	15	14	38
土坑 8	第3面	82	60	42	ビット 45	第4面	27	20	16	ビット 83	第6面	36	35	22
土坑 9	第3面	104	(45)	14	溝状遺構 4	第5面	(500)	148~180	100	ビット 84	第6面	30	(27)	21
土坑 10	第3面	67	44	11	溝状遺構 5	第5面	(280)	(80)	91	ビット 85	第6面	20	15	13
土坑 11	第3面	106	76	18	溝状遺構 6	第5面	(150)	(56)	16	ビット 86	第6面	18	13	17
土坑 12	第3面	(50)	(64)	24	土坑 21	第5面	60	43	18	ビット 87	第6面	30	27	21
土坑 13	第3面	(100)	(90)	23	土坑 22	第5面	(60)	54	21	ビット 88	第6面	(27)	26	13
ビット 4	第3面	(34)	(28)	13	土坑 23	第5面	118	(97)	15	ビット 89	第6面	30	29	18
ビット 5	第3面	26	24	11	土坑 24	第5面	99	90	31	ビット 90	第6面	(34)	34	47
ビット 6	第3面	32	31	4	土坑 25	第5面	61	50	11	ビット 91	第6面	(42)	(37)	19
ビット 7	第3面	(18)	(18)	15	土坑 26	第5面	86	59	38	ビット 92	第6面	43	(37)	19
ビット 8	第3面	55	49	13	土坑 27	第5面	110	(55)	8	ビット 93	第6面	50	44	35
ビット 9	第3面	27	23	13	ビット 46	第5面	25	15	16	ビット 94	第6面	(40)	(24)	21
ビット 10	第3面	50	49	49	ビット 47	第5面	30	25	34	ビット 95	第6面	(40)	32	22
ビット 11	第3面	(39)	(35)	3	ビット 48	第5面	18	15	32	溝状遺構 8	第7面	(400)	32~37	14~28
ビット 12	第3面	(29)	28	10	ビット 49	第5面	30	22	32	ビット 96	第7面	46	44	28
ビット 13	第3面	45	40	33	ビット 50	第5面	48	34	44	ビット 97	第7面	41	(33)	8
ビット 14	第3面	38	(33)	7	ビット 51	第5面	42	40	18	ビット 98	第7面	39	33	33
ビット 15	第3面	42	33	16	ビット 52	第5面	32	28	25	ビット 99	第7面	(46)	30	9
ビット 16	第3面	29	25	11	ビット 53	第5面	38	35	14	ビット 100	第7面	47	(29)	11
ビット 17	第3面	34	33	15	ビット 54	第5面	22	18	13	ビット 101	第7面	30	21	11
ビット 18	第3面	(32)	37	12	溝状遺構 7	第6面	(220)	39~61	7	ビット 102	第7面	44	(14)	10
ビット 19	第3面	39	33	12	不明遺構 1	第6面	(203)	(182)	14	ビット 103	第7面	21	17	15
ビット 20	第3面	28	25	18	土坑 28	第6面	(98)	(39)	23	ビット 104	第7面	28	(10)	9
ビット 21	第3面	48	45	14	土坑 29	第6面	(77)	65	42	ビット 105	第7面	(39)	28	—
ビット 22	第3面	37	(32)	16	土坑 30	第6面	(60)	(48)	17	ビット 106	第7面	32	23	16
ビット 23	第3面	35	34	30	土坑 31	第6面	93	58	18	ビット 107	第7面	(53)	43	34
ビット 24	第3面	35	(30)	15	ビット 55	第6面	55	(20)	12	ビット 108	第7面	49	(31)	18
ビット 25	第3面	(50)	(46)	18	ビット 56	第6面	(45)	(17)	31	ビット 109	第7面	50	(26)	24
溝状遺構 3	第4面	(90)	30~40	19	ビット 57	第6面	43	30	26	ビット 110	第7面	38	(19)	9
土坑 14	第4面	(64)	(48)	35	ビット 58	第6面	28	(25)	16	ビット 111	第7面	44	(33)	60
土坑 15	第4面	109	86	61	ビット 59	第6面	56	53	35	ビット 112	第7面	22	21	35
土坑 16	第4面	97	(65)	48	ビット 60	第6面	32	27	16	ビット 113	第7面	44	(38)	26
土坑 17	第4面	(63)	55	41	ビット 61	第6面	36	23	43	ビット 114	第7面	31	27	62
土坑 18	第4面	62	(34)	39	ビット 62	第6面	51	50	27	ビット 115	第7面	49	47	29
土坑 19	第4面	(61)	(58)	11	ビット 63	第6面	37	(34)	—	ビット 116	第7面	17	12	40
土坑 20	第4面	79	76	47	ビット 64	第6面	(33)	(26)	—	ビット 117	第7面	(41)	32	44
ビット 26	第4面	47	(37)	20	ビット 65	第6面	28	23	18	土坑 32	第8面	61	56	56
ビット 27	第4面	45	(20)	6	ビット 66	第6面	47	(30)	28	ビット 118	第8面	(25)	(15)	10
ビット 28	第4面	30	22	26						ビット 119	第8面	(33)	(23)	23

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ピット120	第8面	40	<30>	33	ピット127	第8面	27	25	15	ピット134	第8面	50	<37>	20
ピット121	第8面	40	37	56	ピット128	第8面	41	<30>	27	板組遺構1	第9面	<235>	<216>	40
ピット122	第8面	32	<28>	17	ピット129	第8面	37	30	24	溝状遺構9	第9面	<180>	32	15
ピット123	第8面	52	43	40	ピット130	第8面	18	16	20	ピット135	第9面	39	<33>	24
ピット124	第8面	25	20	25	ピット131	第8面	40	35	23	ピット136	第9面	<17>	17	7
ピット125	第8面	25	21	11	ピット132	第8面	28	23	27	ピット137	第9面	26	22	19
ピット126	第8面	34	32	47	ピット133	第8面	36	-	10	ピット138	第9面	8	6	19

表12 出土遺物一覧表

表土				【白磁】				第2面 遺構外			
産地	器種	破片数		器種不明				産地	器種	破片数	
【かわらけ】				【青磁】				【かわらけ】			
	かわらけ	ロクロ成形	53	同安窯系	皿	1			かわらけ	ロクロ成形	5
【青磁】				同安窯系				【陶器】			
同安窯系	碗	1		龍泉窯系	碗I類	5		常滑	甕	3	
【陶器】				器種不明				片口鉢II類			
瀬戸	碗	2		【陶器】				【瓦】			
	天目茶碗	1		中国	褐釉陶器	1			軒平瓦	1	
	盤	2			瓶類	1			平瓦	3	
	縁釉小皿	3		瀬戸	碗	2		合計 13			
常滑	甕	8			天目茶碗	1					
	片口鉢I類	1			折縁深皿	6					
	片口鉢II類	2			縁釉小皿	1					
備前	播鉢	1			直縁大皿	1					
【土器】				常滑	甕	23					
	火鉢	1			片口鉢II類	4					
【瓦質土器】					摩耗陶片	1					
	火鉢	3		【瓦質土器】							
【土製品】					火鉢	4					
	土鍋	1		【瓦】							
	土風炉	1			丸瓦	2					
【石製品】					平瓦	5					
	基石	1		【石製品】							
【木製品】					砥石	1					
	棒状	1		【金属製品】							
【金属製品】					銭貨	2					
	銭貨	3			釘	3					
	釘	6			鉄滓	1					
	鋳型状	1			器種不明	1					
合計 92				合計 209							
第1面				攪乱							
ピット1				産地				器種			
産地	器種		破片数	【かわらけ】							
	かわらけ		4	かわらけ				ロクロ成形		20	
合計 4				【陶器】							
ピット2				瀬戸	碗	1					
産地	器種		破片数		天目茶碗	1					
	かわらけ		3	常滑	甕	1					
合計 3					片口鉢II類	1					
ピット3				【瓦質土器】							
産地	器種		破片数		羽釜	1					
	かわらけ		4		火鉢	1					
合計 5				【金属製品】							
第1面 遺構外					銭貨	1					
産地	器種		破片数	合計 27							
	かわらけ		4	第2面							
合計 6				掘鉢遺構1							
第1面 構成土				産地				器種			
産地	器種		破片数	【かわらけ】							
	かわらけ		5	かわらけ				ロクロ成形		5	
合計 6				【陶器】							
常滑	甕	1		常滑	片口鉢II類	1					
合計 6				合計 6							
第3面				土坑4							
溝状遺構1				産地				器種			
産地	器種		破片数	【かわらけ】							
	かわらけ		157	かわらけ				ロクロ成形		20	
合計 157				【陶器】							
瀬戸	盤	1		産地				器種			
常滑	甕	1		【かわらけ】							
合計 22				かわらけ				ロクロ成形		20	

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	盤	5
	碗	5
	平碗	1
	天目茶碗	7
	卸皿	1
	縁袖小皿	9
	直縁大皿	1
常滑	堯	12
	片口鉢Ⅱ類	11
【瓦質土器】		
	燭台	1
	香炉	1
	火鉢	9
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【石製品】		
	器種不明	1
【土師器】		
	器種不明	1
【金属製品】		
	銅製品 器種不明	1
合計		228

溝状遺構1 掘り方		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	40
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【陶器】		
瀬戸	碗	1
	皿	1
常滑	堯	3
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	火鉢	6
【金属製品】		
	器種不明	1
	鉄滓	1
合計		57

土坑6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
【陶器】		
常滑	堯	5
合計		12

土坑7		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
合計		1

土坑9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
瀬戸	碗	1
	縁袖小皿	1
【金属製品】		
	銭貨	1
合計		5

土坑10		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	縁袖小皿	1
常滑	堯	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		13

土坑11		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	1
【金属製品】		
	器種不明	1
合計		2

土坑12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	7
【陶器】		
瀬戸	碗	3
合計		10

ビット5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【金属製品】		
	釘	1
合計		3

ビット21		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	67
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	縁袖小皿	4
常滑	堯	2
	片口鉢Ⅱ類	4
産地不明	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【土師器】		
	堯	1
合計		81

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	3
	かわらけ ロクロ成形	146
【白磁】		
	碗	1

【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	3
【陶器】		
瀬戸	盤	4
	碗	8
	天目茶碗	4
	皿	1
	卸皿	2
	縁袖小皿	4
常滑	堯	13
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	7
【瓦質土器】		
	香炉	2
	火鉢	3
【瓦】		
	丸瓦	2
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	2
	滑石製石鍋	1
【土師器】		
	堯	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	4
	器種不明 鋳型?	1
	器種不明	1
合計		216

第4面 土坑14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

土坑15		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	28
【陶器】		
瀬戸	壺	1
常滑	堯	3
【土器】		
	羽釜	1

【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
【金属製品】		
	銭貨	1
合計		36

土坑20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		8

ビット30		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット36		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
合計		5

ビット37		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 2

ビット38		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	2
	碗	1
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
		合計 5

ビット39		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
【土器】		
	羽釜	2
		合計 4

ビット42		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 4

ビット43		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 2

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	201
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
	折縁皿	2
	瓶類	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	皿	1
【陶器】		
瀬戸	盤	7
	碗	9
	天目茶碗	2
	折縁深皿	1
	卸皿	4
	縁袖小皿	4
	搦鉢	2
常滑	甕	17
	片口鉢Ⅱ類	9
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	7
【石製品】		
	砥石	7
	硯	1
	石器	1

第5面		
産地	器種	破片数
溝状遺構4		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	62
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	4
	甕	5
常滑	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
	硯	1
【木製品】		
	箸状	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	1

【金属製品】		
産地	器種	破片数
	銭貨	6
	釘	1
		合計 288

第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	6
	かわらけ ロクロ成形	176
【青磁】		
同安窯系	碗	1
	碗Ⅰ類	1
龍泉窯系	折縁皿	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	皿	1
【陶器】		
中国	天目茶碗	1
	碗	6
	平碗	2
	天目茶碗	1
瀬戸	皿	2
	折縁深皿	7
	縁袖小皿	3
	直縁大皿	2
鉄釉	極小碗	1
常滑	甕	50
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	3
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	5
	黒縁碗	1
【土器】		
	羽釜	1
	焙烙	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	4
【石製品】		
	砥石	5
	硯	1
【金属製品】		
	銭貨	7
	釘	4
	鉄滓	2
	器種不明	1
【ガラス製品】		
	玉	1
	器種不明	20
		合計 322

第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	6
	かわらけ ロクロ成形	176
【青磁】		
同安窯系	碗	1
	碗Ⅰ類	1
龍泉窯系	折縁皿	1
【青白磁】		
	梅瓶	1
	皿	1
【陶器】		
中国	天目茶碗	1
	碗	6
	平碗	2
	天目茶碗	1
瀬戸	皿	2
	折縁深皿	7
	縁袖小皿	3
	直縁大皿	2
鉄釉	極小碗	1
常滑	甕	50
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	3
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	5
	黒縁碗	1
【土器】		
	羽釜	1
	焙烙	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	4
【石製品】		
	砥石	5
	硯	1
【金属製品】		
	銭貨	7
	釘	4
	鉄滓	2
	器種不明	1
【ガラス製品】		
	玉	1
	器種不明	20
		合計 322

第5面		
産地	器種	破片数
溝状遺構4		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	62
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	4
	甕	5
常滑	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
	硯	1
【木製品】		
	箸状	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	1

第5面		
産地	器種	破片数
溝状遺構4		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	62
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	4
	甕	5
常滑	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦質土器】		
	碗	1
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	1
	硯	1
【木製品】		
	箸状	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

鉄滓		
産地	器種	破片数
		1
		合計 84

溝状遺構4 掘り方		
産地	器種	破片数
【陶器】		
瀬戸	行平鍋	4
【金属製品】		
	銭貨	1
		合計 5

溝状遺構5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	2
常滑	甕	2
【瓦】		
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器碗	1
	箸状	1
	部材	1
		合計 16

溝状遺構5 掘り方		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	25
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	1
常滑	甕	4
	片口鉢Ⅰ類	2
【瓦】		
	軒平瓦	1
	丸瓦	1
	平瓦	1
【木製品】		
	漆器蓋	1
		合計 36

溝状遺構6		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	篋状	1
	用途不明	1
	漆器皿	1
	漆器蓋	1
		合計 4

溝状遺構6		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	篋状	1
	用途不明	1
	漆器皿	1
	漆器蓋	1
		合計 4

土坑24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
		合計 8

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
【白磁】		
	碗	1
【青白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器 器種不明	1

瀬戸	広口壺	1
	天目茶碗	2
	卸皿	1
	小坏	1
	縁袖小皿	1
常滑	甕	9
備前	播鉢	1
【瓦質土器】		
	香炉	1
	火鉢	2
【瓦】		
	丸瓦	2
	平瓦	1
【土製品】		
	ふいごの羽口	1
【石製品】		
	砥石	3
【ガラス製品】		
	玉	1
【木製品】		
	漆器棒状製品	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	留具	2
	釘	1
	銅製品 器種不明	1
	鉄製品 器種不明	1
	鉄滓	1
合計 122		

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	天目茶碗	2
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計 4		

第6面		
土坑28		
産地	器種	破片数
	かわらけ ロクロ成形	12
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
合計 13		

土坑29		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【瓦】		
	鬘斗瓦	1
合計 7		

ビット40		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	箸状	1
合計 1		

ビット59		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【陶器】		
常滑	甕	1
【木製品】		
	箸状	2
	経木折敷	1
合計 9		

ビット61		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
合計 5		

ビット66		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計 1		

ビット69		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【瓦】		
	丸瓦	1
合計 2		

ビット73		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【石製品】		
	砥石	1
合計 9		

ビット77		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	31
【陶器】		
常滑	甕	4
【金属製品】		
	釘	4
	留具	1
合計 40		

ビット79・80		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
常滑	甕	3
合計 5		

ビット81		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
合計 2		

ビット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計 6		

ビット91		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計 3		

ビット93		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計 1		

ビット95		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
合計 1		

第6面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	214
【白磁】		
	碗	1
	小型壺?	1
	合子	1

【青磁】		
龍泉窯系	壺	1
【青白磁】		
	梅瓶	1

【陶器】		
	盤	1
	柄付片口	1
	碗	1
瀬戸	天目茶碗	1
	入子	1
	折縁深皿	1
	卸皿	3
常滑	甕	79
	広口壺大	1
	片口鉢Ⅱ類	4

【瓦質土器】		
	火鉢	5

【瓦】		
	軒丸瓦	1
	軒平瓦	1
	平瓦	1

【石製品】		
	滑石製スタンプ	1

【骨製品】		
	筭	3

【木製品】		
	烏帽子	2

【金属製品】		
	釘	3

合計 331		
--------	--	--

第6面 構成土		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	1
合計 1		

第7面		
溝状遺構8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	15
【陶器】		
常滑	甕	4
【木製品】		
	漆器椀	1
合計 20		

ビット98		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計 3		

ビット99		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
合計 8		

ピット101		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
【木製品】		
	箸状	1
		合計 6

ピット108		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
		合計 2

ピット111		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
		合計 4

ピット112		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	建築部材	1
	曲物	1
	漆器皿	2
	漆器椀	1
		合計 5

ピット117		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
		合計 2

第7面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	295
【白磁】		
	碗	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【青白磁】		
	碗	1
【陶器】		
中国	褐釉陶器	1
瀬戸	柄付片口	1
	入子	1
	卸皿	2
常滑	甕	12
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	碗	2
【瓦質土器】		
	火鉢	3
【瓦】		
	平瓦	6
【石製品】		
	滑石鍋加工品(温石)	1
	砥石	1

【骨製品】		
産地	器種	破片数
	筭	1
	賽子	1
【木製品】		
	漆器椀	1
	漆器皿	2
	曲物(底板)	1
【金属製品】		
	銭貨	5
	釘	1
		合計 343

第7面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	133
【白磁】		
	皿	1
	皿Ⅸ類	3
	香炉	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	1
常滑	甕	8
【瓦質土器】		
	火鉢	2
【瓦】		
	平瓦	2
【石製品】		
	砥石	1
【木製品】		
	経木折敷	1
	箸状	9
	籠状	3
	棒状	6
	建材	1
	建築部材	2
	杭	1
	用途不明	7
【金属製品】		
	釘	2
		合計 185

第8面		
土坑32		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【陶器】		
常滑	甕	2
【木製品】		
	草履芯	1
	端材	2
【金属製品】		
	銭貨	1
		合計 14

ピット121		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

ピット122		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【木製品】		
	漆器椀	1
		合計 7

ピット131		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	漆器椀	1
		合計 1

第8面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

第9面		
溝状遺構9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	53
【白磁】		
	合子	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
【青白磁】		
	梅瓶	2
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅰ類	2
【石製品】		
	砥石	1
【骨製品】		
	筭	1
【木製品】		
	呪符木簡	1
	漆器椀	1
	漆器皿	1
	箸状	3
	串状	3
	連歯下駄	2
	用途不明	2
【金属製品】		
	刀子	1
	鑿	1
	火箸	1
		合計 82



1. 調査地点近景 (南西から)



2. I区調査開始時 近景 (西から)

図版 2



1. I区北東壁土層断面(南西から)



2. II区北東壁土層断面(南西から)



1. I区第1面全景(南東から)



2. I区第2面全景(南西から)



3. 第2面 据鉢遺構1(北東から)



1. I区第3面全景(北東から)



2. II区第3面全景(北西から)



1. 第3面 溝状遺構1 (東から)



2. 第3面 調査風景 (南西から)

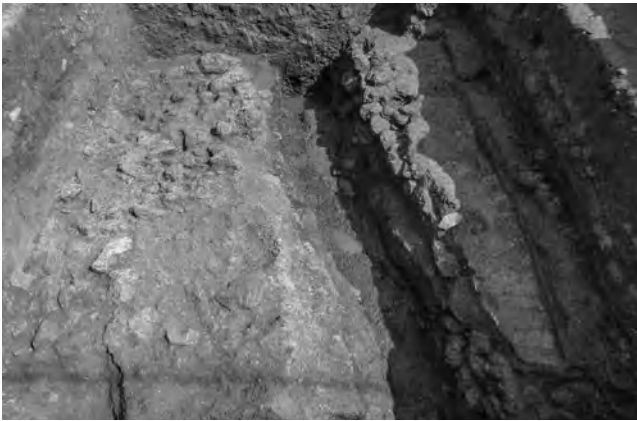
図版 6



1. I区第4面全景(北東から)



2. II区第4面全景(北東から)



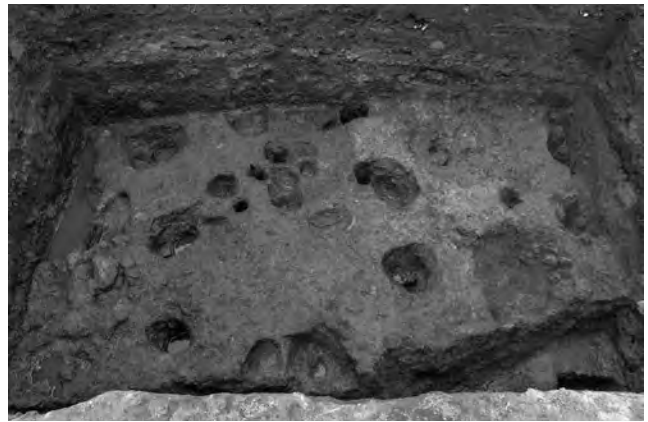
3. I区第5面全景(南西から)



4. I区第6面全景(西南から)



5. II区第5面全景(北西から)



6. II区第6面全景(北西から)



7. 第5面 溝状遺構5(北西から)



8. 第6面 溝状遺構7木組護岸跡(南東から)



1. I区第7面全景(南西から)



2. II区第7面全景(北東から)



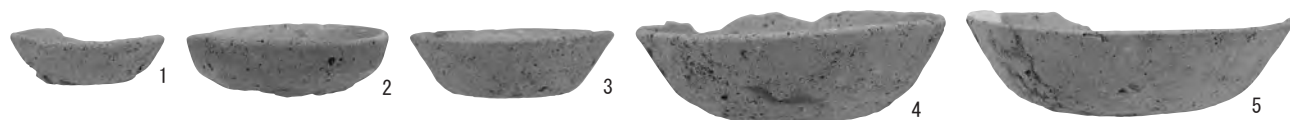
3. I区第8面全景(南西から)



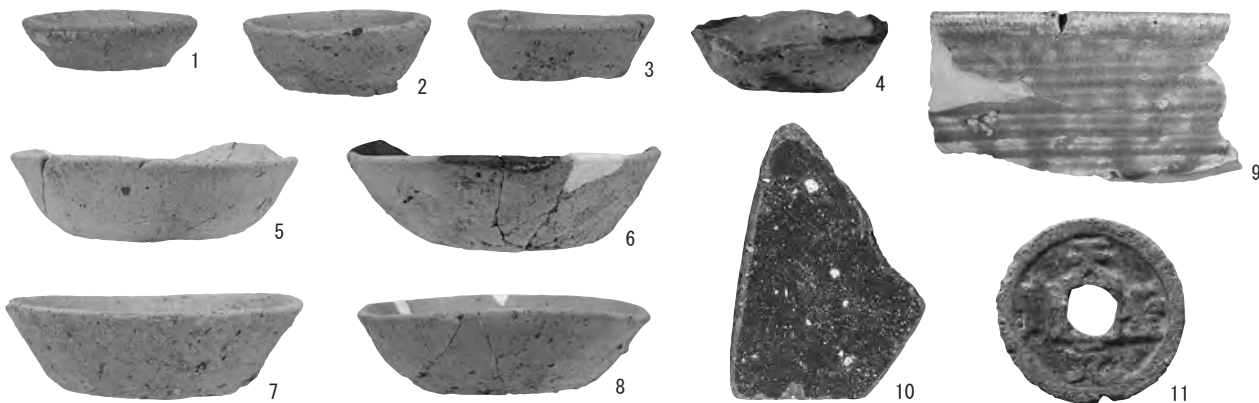
1. 第9面全景(南東から)



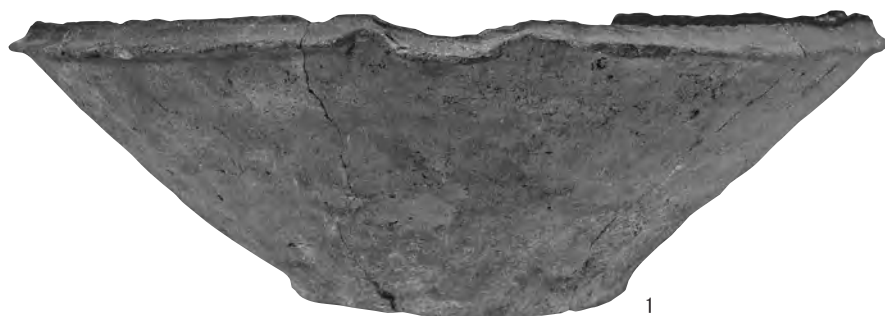
2. 第9面 板組遺構1(北から)



1. 第1面 遺構外出土遺物



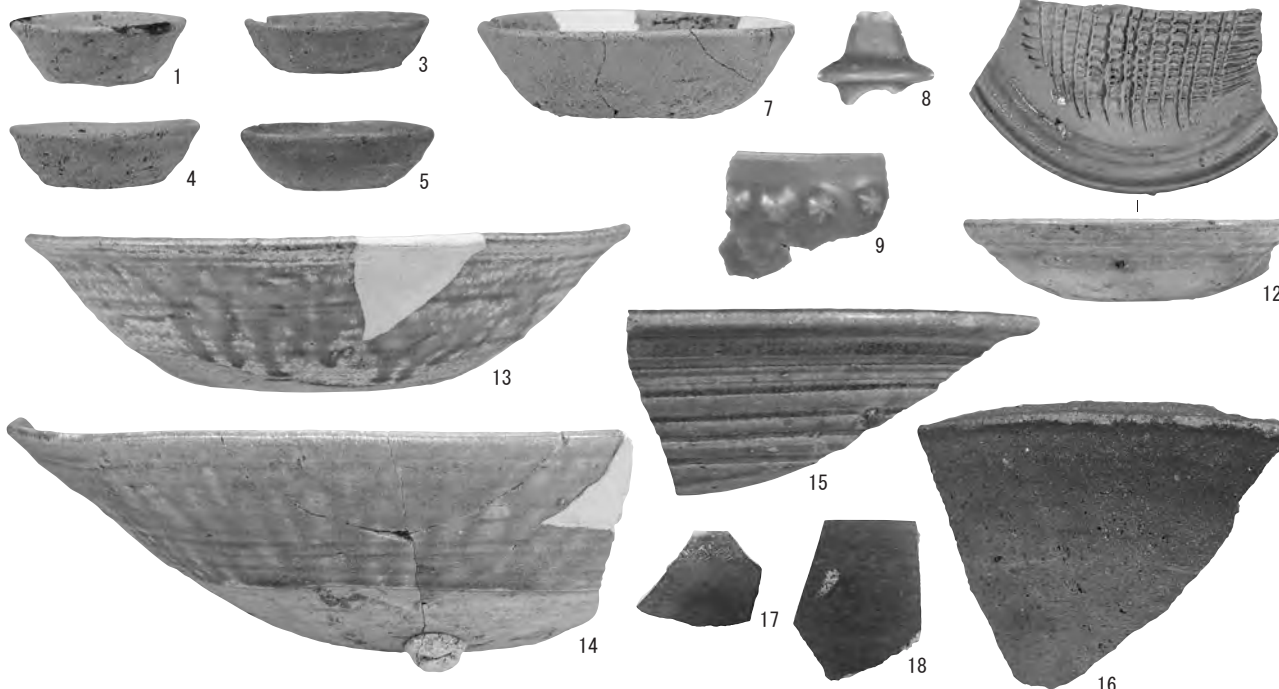
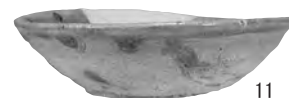
2. 第1面 構成土出土遺物



3. 第2面 据鉢遺構1出土遺物



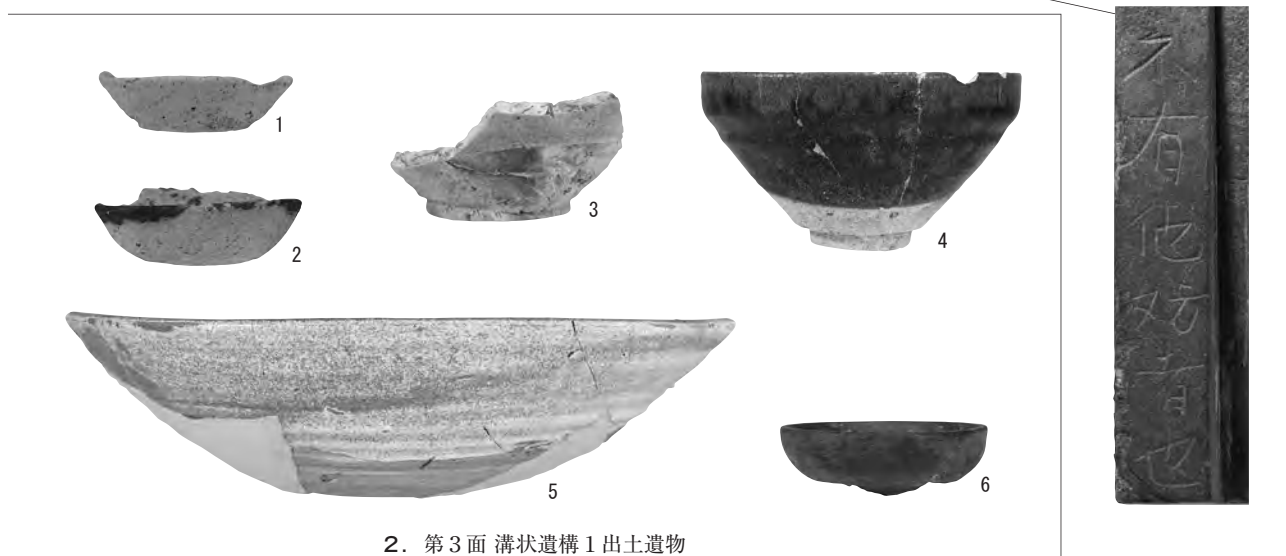
4. 第2面 土坑4出土遺物



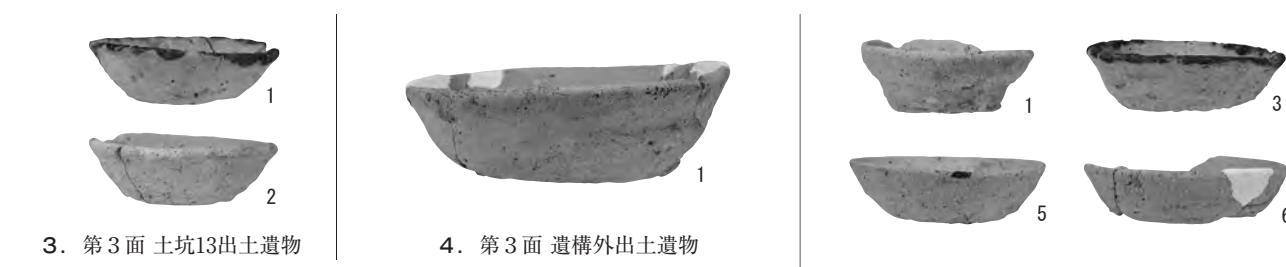
5. 第2面 構成土出土遺物(1)



1. 第2面 構成土出土遺物(2)

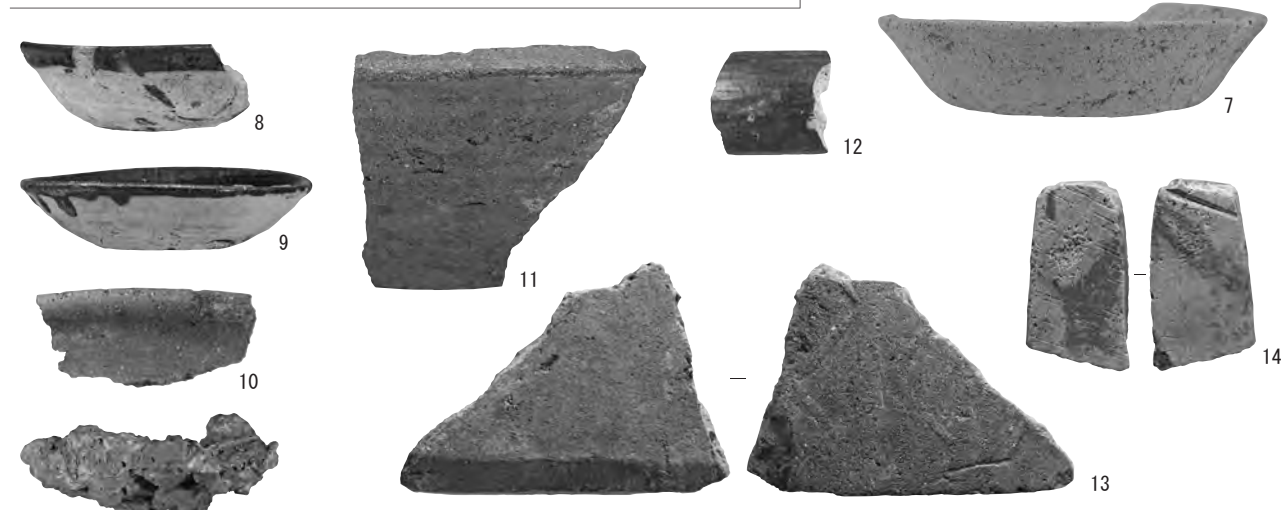


2. 第3面 溝状遺構1出土遺物



3. 第3面 土坑13出土遺物

4. 第3面 遺構外出土遺物



写真資料 (S = 1/3)

5. 第3面 構成土出土遺物



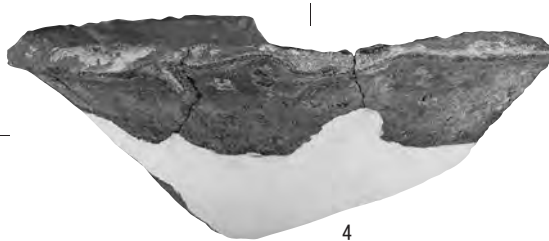
1. 第4面 土坑14出土遺物



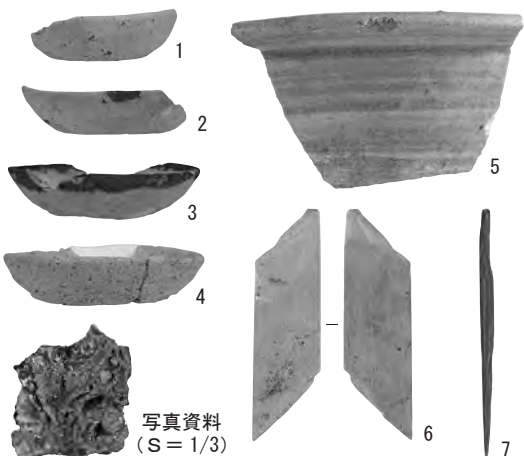
2. 第4面 土坑15出土遺物



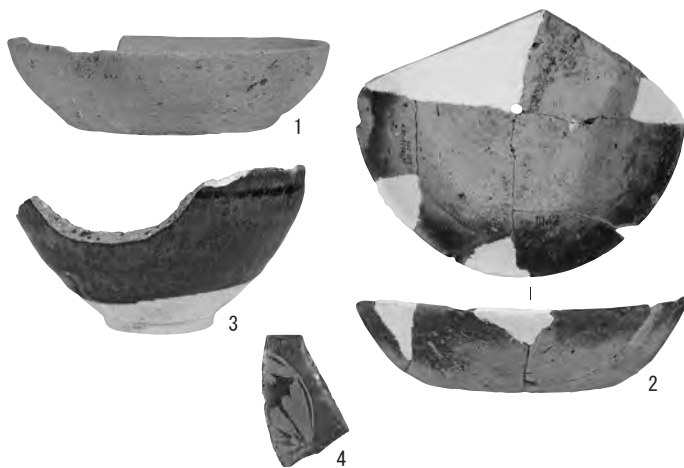
3. 第4面 土坑20出土遺物



4. 第4面 構成土出土遺物



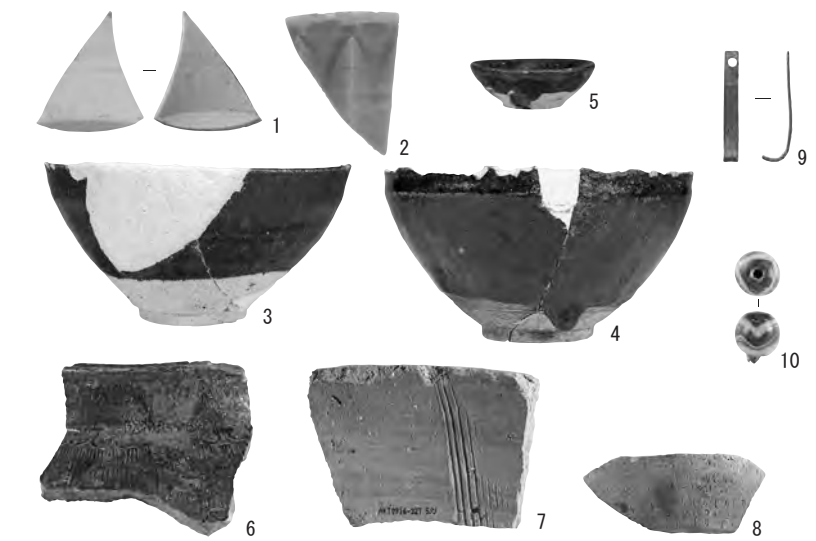
写真資料
(S=1/3)
5. 第5面 溝状遺構4 出土遺物



6. 第5面 溝状遺構5 出土遺物



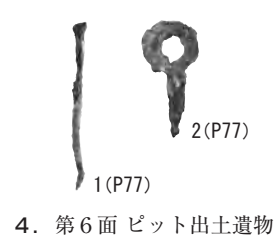
1. 第5面 溝状遺構6出土遺物



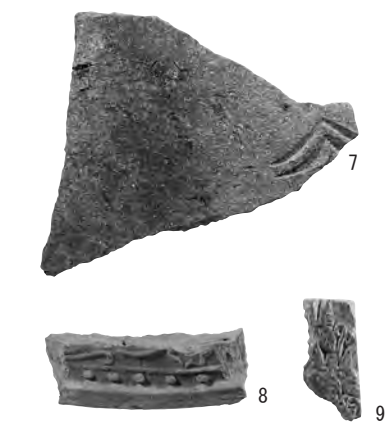
2. 第5面 遺構外出土遺物



3. 第6面 土坑29出土遺物



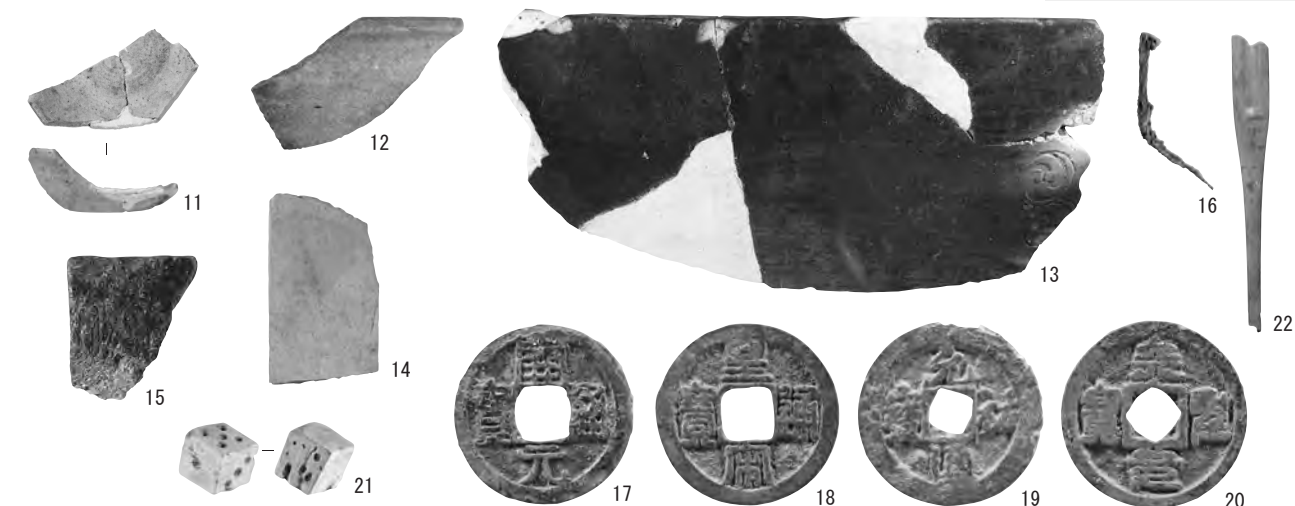
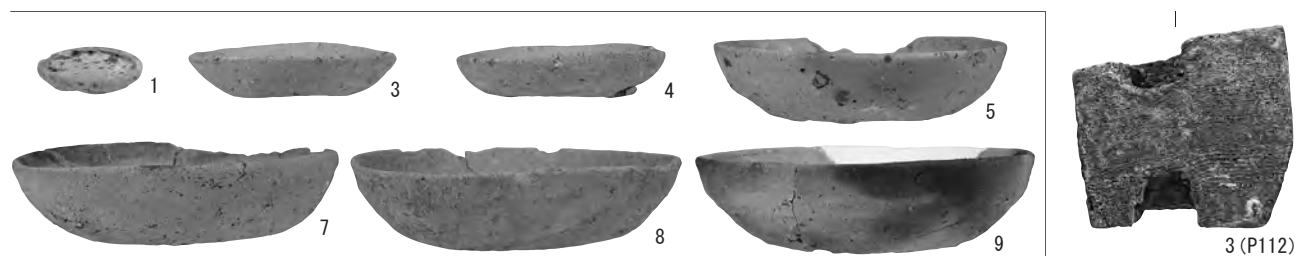
4. 第6面 ピット出土遺物



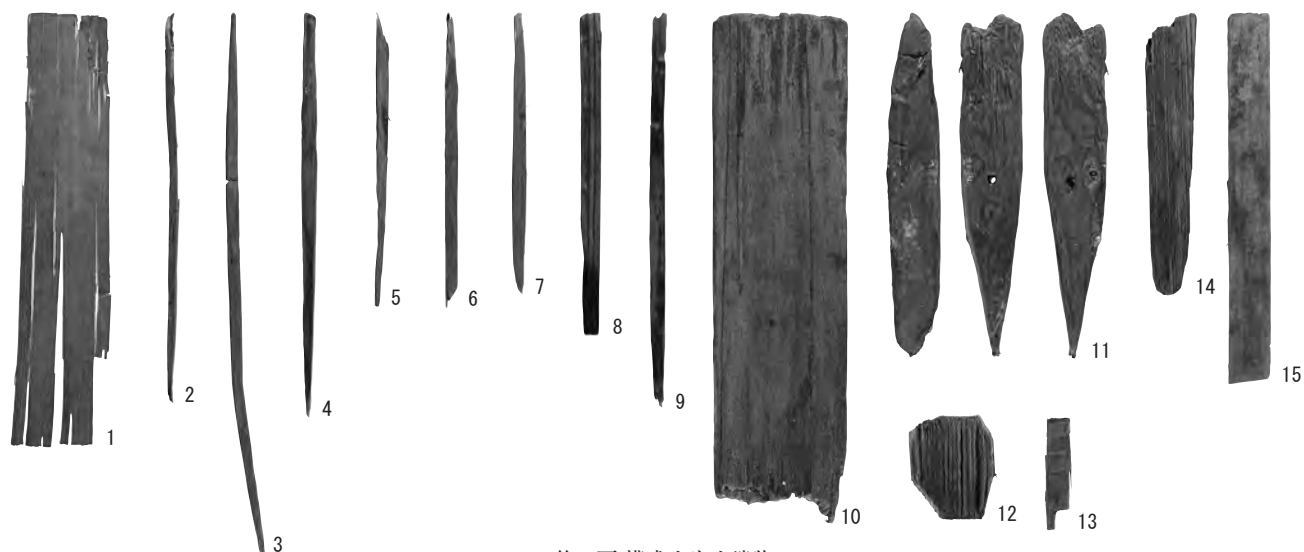
5. 第6面 遺構外出土遺物



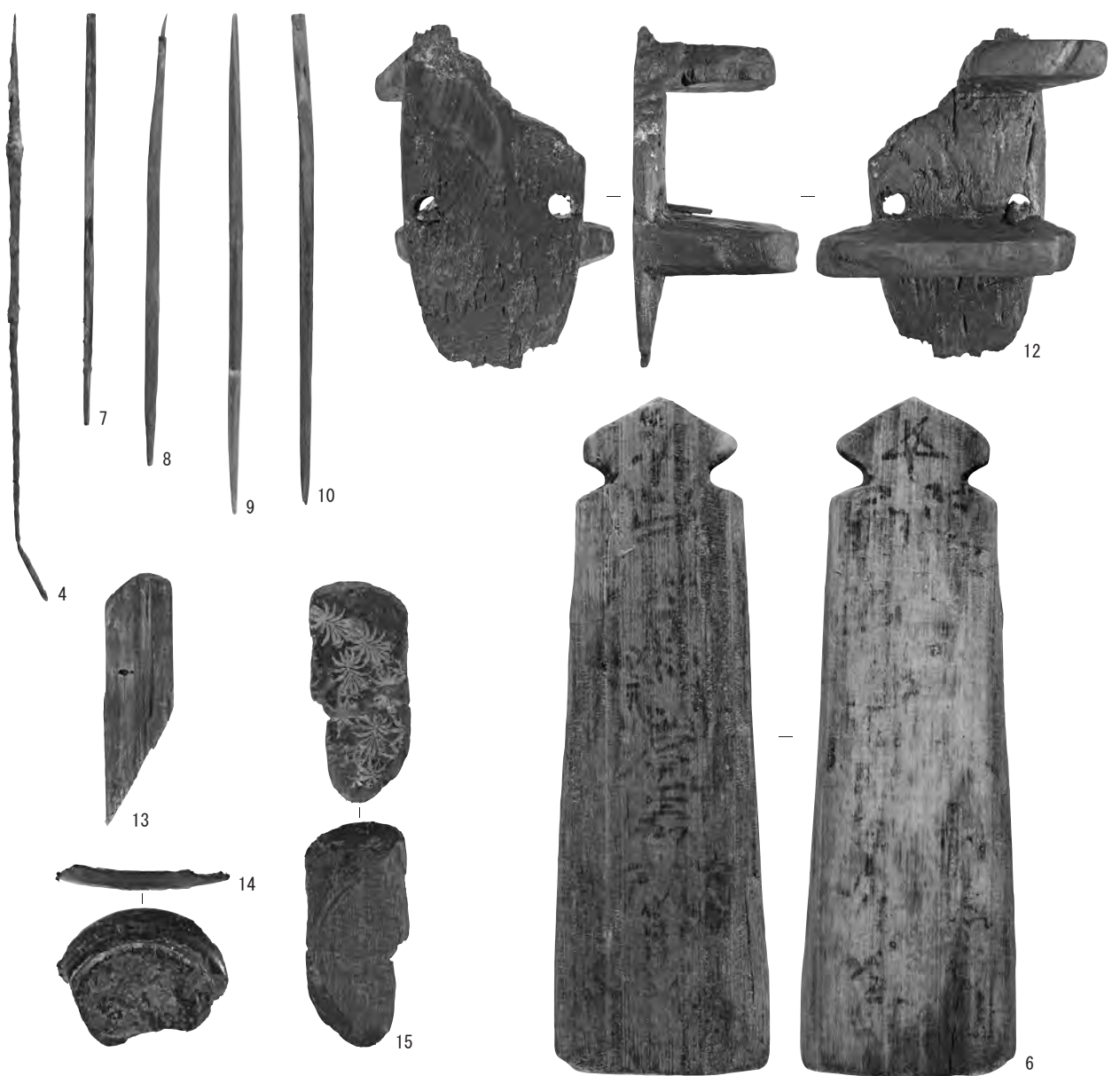
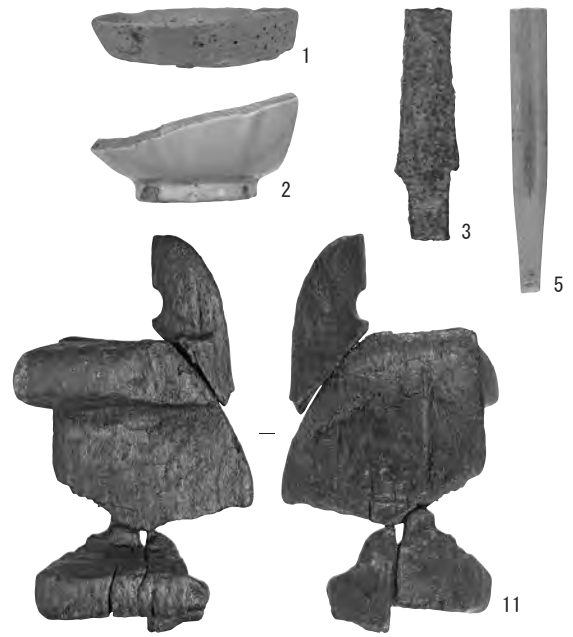
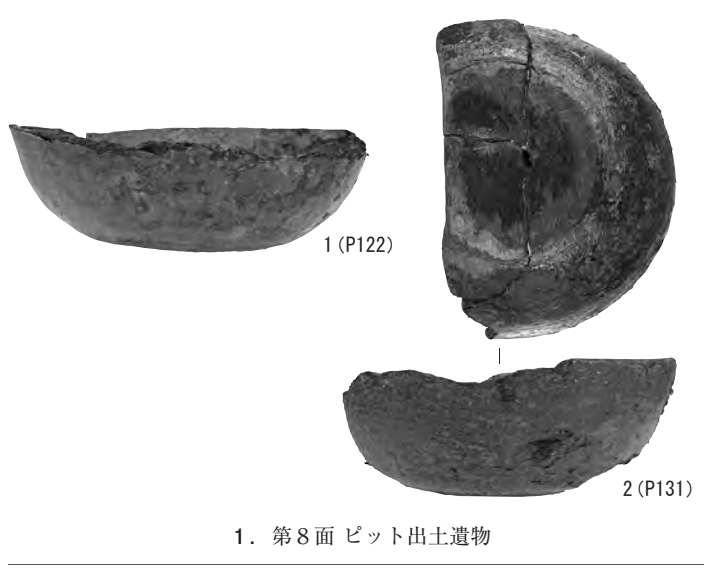
1. 第7面 ピット出土遺物



2. 第7面 遺構外出土遺物



3. 第7面 構成土出土遺物



2. 第9面 溝状遺構9出土遺物

田楽辻子周辺遺跡 (No.33)

浄明寺一丁目652番8 地点

例 言

1. 本報は「田楽辻子周辺遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.33）内、鎌倉市浄明寺一丁目652番8地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年10月10日～平成21年1月29日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約67㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子
調査員 渡辺美佐子・根本志保
作業員 牛嶋道夫・秋田公祐・鯉沼 稔・鈴木啓之・渡辺輝彦
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「DZ0814」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
□ 道路状遺構
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本品子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	192
第1節 調査に至る経緯と経過	192
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	192
第3節 周辺の考古学的調査	194
第二章 堆積土層	197
第三章 発見された遺構と遺物	198
第1節 第1面の遺構と遺物	198
第2節 第2面の遺構と遺物	200
第3節 第3面の遺構と遺物	207
第4節 第4面の遺構と遺物	209
第5節 第5面の遺構と遺物	213
第6節 第6面の遺構と遺物	215
第7節 第7面の遺構と遺物	216
第8節 第8面の遺構と遺物	217
第9節 第9面の遺構と遺物	220
第10節 第10面の遺構と遺物	222
第11節 第11面の遺構と遺物	223
第四章 まとめ	225

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	193	図14 第2面 溝状遺構1	202
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	195	図15 第2面 土坑3～14	203
図3 調査区位置図	196	図16 第2面 土坑3出土遺物	204
図4 調査区配置図	196	図17 第2面 土坑5出土遺物	204
図5 調査区南東壁 土層断面図	197	図18 第2面 土坑9出土遺物	204
図6 第1面 遺構分布図	198	図19 第2面 土坑13出土遺物	204
図7 第1面 井戸1	199	図20 第2面 ピット2	205
図8 第1面 井戸1出土遺物	199	図21 第2面 ピット出土遺物	205
図9 第1面 土坑1・2	200	図22 第2面 遺構外出土遺物(1)	206
図10 表土出土遺物	200	図23 第2面 遺構外出土遺物(2)	207
図11 第1面 遺構外出土遺物	200	図24 第3面 遺構分布図	207
図12 第2面 遺構分布図	201	図25 第3面 溝状遺構2・3	208
図13 第2面 道路状遺構1	201	図26 第3面 溝状遺構2出土遺物	208

図27	第3面	土坑15~18出土遺物	209	図43	第7面	溝状遺構9	216
図28	第3面	土坑18出土遺物	209	図44	第8面	遺構分布図	217
図29	第4面	遺構分布図	210	図45	第8面	溝状遺構10・11	217
図30	第4面	溝状遺構5出土遺物	210	図46	第8面	方形土坑1	218
図31	第4面	溝状遺構4~8	211	図47	第8面	方形土坑1出土遺物	218
図32	第4面	溝状遺構6出土遺物	211	図48	第8面	土坑20~22出土遺物	219
図33	第4面	溝状遺構7出土遺物	211	図49	第8面	遺構外出土遺物	219
図34	第4面	土坑19	212	図50	第8面	構成土出土遺物	220
図35	第4面	遺構外出土遺物	212	図51	第9面	遺構分布図	220
図36	第5面	遺構分布図	213	図52	第9面	土坑23~27	221
図37	第5面	礎石建物1	214	図53	第10面	遺構分布図	222
図38	第5面	遺構外出土遺物	214	図54	第10面	土坑28	222
図39	第6面	遺構分布図	215	図55	第11面	遺構分布図	223
図40	第6面	遺構外出土遺物	215	図56	第11面	井戸2	223
図41	第6面	構成土出土遺物	216	図57	第11面	土坑29~31	224
図42	第7面	遺構分布図	216	図58	第11面	ピット258・275	224

表 目 次

表1	田楽辻子周辺遺跡 調査地点一覧	194	表6	第5面	出土遺物観察表	230	
表2	第1面	出土遺物観察表	228	表7	第6面	出土遺物観察表	230
表3	第2面	出土遺物観察表	228	表8	第8面	出土遺物観察表	231
表4	第3面	出土遺物観察表	229	表9	遺構計測表	231	
表5	第4面	出土遺物観察表	230	表10	出土遺物一覧表	233	

図 版 目 次

図版1	1. 調査地点近景(南から)	237	2. 第5面全景(南東から)	239	
	2. 調査区南東壁土層断面(北西から)	237	図版4	1. 井戸1出土遺物	240
図版2	1. 第1面全景(北西から)	238		2. 表土出土遺物	240
	2. 第2面全景(北西から)	238		3. 第1面 遺構外出土遺物	240
	3. 第8面全景(南東から)	238		4. 第2面 土坑3出土遺物	240
	4. 第9面全景(南東から)	238		5. 第2面 土坑5出土遺物	240
	5. 第10面全景(南東から)	238		6. 第2面 土坑9出土遺物	240
	6. 第11面全景(南東から)	238		7. 第2面 土坑13出土遺物	240
	7. 第11面 ピット258(北東から)	238		8. 第2面 ピット出土遺物	240
	8. 第11面 ピット275(北から)	238	図版5	1. 第2面 遺構外出土遺物(2)	241
図版3	1. 第3面全景(南東から)	239		2. 第3面 溝状遺構2出土遺物	241

3. 第3面 土坑18出土遺物 ····· 241	2. 第6面 遺構外出土遺物 ····· 242
4. 第4面 溝狀遺構5出土遺物 ··· 241	3. 第6面 構成土出土遺物 ····· 242
5. 第4面 溝狀遺構6出土遺物 ··· 241	4. 第8面 方形土坑1出土遺物 ··· 242
6. 第4面 溝狀遺構7出土遺物 ··· 241	5. 第8面 遺構外出土遺物 ····· 242
7. 第4面 遺構外出土遺物 ····· 241	6. 第8面 構成土出土遺物 ····· 242
圖版6 1. 第5面 遺構外出土遺物(2) ··· 242	

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市浄明寺一丁目652番8で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である田楽辻子周辺遺跡(神奈川県遺跡台帳No.33)の範囲内にあたり、当該地周辺の調査状況から、地下に中世の遺構が存在することは確実であった。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画について相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした試掘確認調査が必要と判断し、平成20年5月21日～平成20年5月22日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建設予定地に広がっていることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査等の措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約67㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年10月10日～平成21年1月29日までの3ヵ月半ほどである。現地表面の標高は約16.0mを測る。調査はまず重機により約20～30cmの表土を除去することから始め、その後はすべて人力で掘り下げ調査を進めていった。調査の結果、中世に属する第1～11面の合計11面にわたる遺構確認面が検出されたため、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして1月29日をもって、現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA 9)に準じた、鎌倉市三級基準点(X = -75377.449、Y = -24439.834)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No.53209(標高12.109m)を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

本調査地点は鎌倉市浄明寺一丁目652番8に位置し、「田楽辻子周辺遺跡(No.33)」の範囲内に所在する。本遺跡の包蔵地範囲は鎌倉市街地の東方にあり、JR鎌倉駅から直線距離にして1.3kmほどの場所である。本遺跡は、蛇行しながら西流する滑川に架かる「華の橋」の東側から「大御堂橋」にかけての滑川左岸の沖積地に広がり、東西方向に長い包蔵地範囲となっている。遺跡の南側には樹枝状に開析された谷戸が連続しており、この谷戸部と丘陵部に複数の包蔵地範囲が広がっている。上流から順にみると、谷戸部には報国寺遺跡(No.306)、上杉氏憲邸跡(No.258)、釈迦堂遺跡(No.257)、勝長寿院跡(No.133)があり、丘陵部には宅間ヶ谷東やぐら、釈迦堂東やぐら群(No.157)、鎌倉城(No.87)などが位置している。また、遺跡の北端を流れる滑川右岸の沖積地には、東側から浄明寺旧境内遺跡(No.408)、杉本寺周辺遺跡群(No.158)、横小路周辺遺跡群(No.259)、大倉幕府周辺遺跡群(No.49)の包蔵地範囲が所在する。本調査地点は「釈迦堂ヶ谷」と呼ばれる開析谷の開口部付近に位置し、滑川までの距離は約60mで、調査地の現地表面の標高は約16.0mを測る。

遺跡の名称となっている「田楽」の名は、「相良家文書」正応3年(1290年)5月8日付の相良頼俊の譲状のなかにみることができ、鎌倉の釈迦堂前の土地として「その四至を注してでんがくが地とみえ」と記されている。田楽とは平安時代から行われている民間芸能であり、鎌倉時代には祭礼の際に行われ

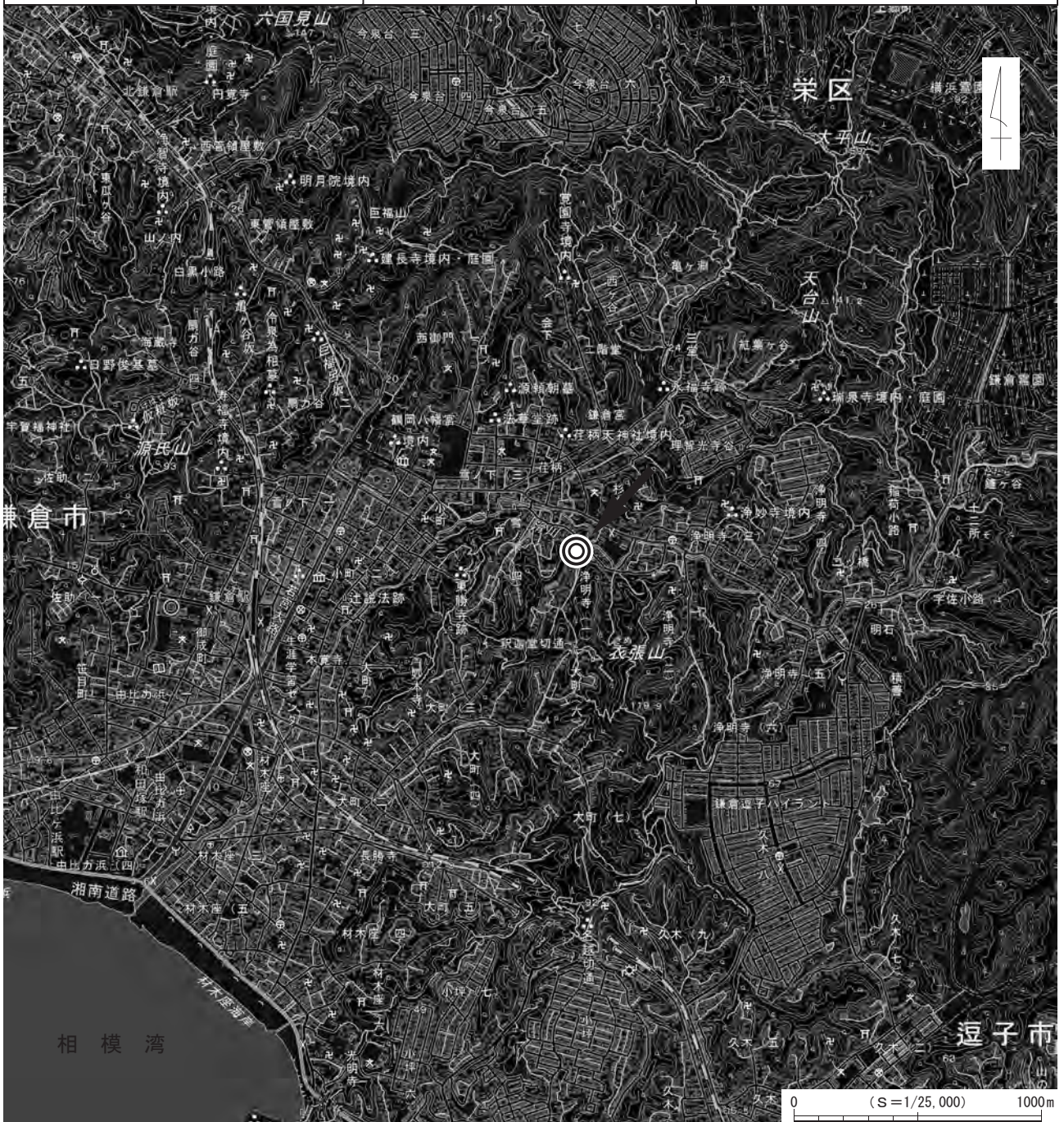


図1 遺跡位置図

るものとして定着しており、本遺跡の名称はこの地に田楽を生業とする人々が暮らしていたと推定されることに由来する。また、「辻子」とは小路よりもさらに小さい通路のことを指す言葉で、執権泰時の時代に京都から移入された表現だとされている(石井 1989)。当時の鎌倉には、田楽辻子のほかに、宇津宮辻子や大学辻子、呪師勾当辻子、唐笠辻子などの辻子があり、現在は滑川の左岸を大御堂橋から宅間ヶ谷までを結ぶ東西道路が「田楽辻子のみち」と呼ばれている。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、今回報告する地点の周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。田楽辻子周辺遺跡は滑川左岸の沖積地に東西に細長く展開し、本地点は包蔵地範囲の西側に位置している。

滑川の下流側に位置する調査地点としては、①浄明寺一丁目556番6地点、②浄明寺一丁目661番1地点、③浄明寺釈迦堂658地点の3地点があげられる。①浄明寺一丁目556番6地点では弥生時代後期から古墳時代前期の自然流路が検出され、小形埴や甕の破片が出土している(押木 2012)。中世の遺構は1面で捉えられており、13世紀～14世紀前半の南北方向に延びる溝状遺構1条と、井戸の可能性をもつ土坑状の遺構1基が検出された。「田楽辻子のみち」の南側に面する②浄明寺一丁目661番1地点では3時期の変遷をたどる中世の遺構群が発見され、13世紀前半に位置づけられる東西方向に延びる道が検出されている。この道は泥岩を用いた舗装が施され、公道的要素が強いことから、調査者は鎌倉時代前半期における「田楽辻子」に比定される可能性を指摘している(森 2000)。③浄明寺釈迦堂658地点においても東西の道が検出され、6回に及ぶ度重なる改修が行われたことが明らかとなっている(手塚 1990)。時期的には13世紀頃まで遡ることが指摘されている。滑川の上流側に位置する④浄明寺二丁目569番10地点では中世の遺構が2面で確認され、第2面から13世紀後葉から14世紀前葉の掘立柱建物が検出された(根本 2014)。また、第1面では14世紀後半から15世紀にかけての切石を用いた石組をもつ井戸が検出されており、武家屋敷と想定される居住空間の縁辺部にあたると推定されている。

田楽辻子周辺遺跡の南側、釈迦堂ヶ谷に展開する釈迦堂遺跡(No.257)の⑤浄明寺一丁目598番35地点では、中世の遺構確認面が6面で検出された(永田・齋藤 2018a)。検出された遺構種やその数は少ないものの、最下面にあたる第6面から器形復元可能な青白磁梅瓶が出土しており、特筆される。南西側に隣接する⑥浄明寺一丁目598番21地点では3面にわたる中世の遺構面が確認され、溝状遺構や石列、土坑などが検出されている(永田・齋藤 2018b)。

田楽辻子周辺遺跡の北側には杉本寺周辺遺跡(No.158)が隣接しており、⑦二階堂宇杉本912番ほか地点では広範囲の調査が行われている(馬淵・岡ほか 2002)。中世の遺構群は4期にわたる変遷が捉えられており、第1～3期における大小の掘立柱建物や柵列、井戸、土坑で構成される有力武士の武家屋敷から、第4期には据甕や竪穴状遺構からなる職能集団の活動空間へと変化したものと考えられている。

表1 田楽辻子周辺遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目652番8地点	
①	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目556番6地点	押木 2012
②	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺一丁目661番1地点	森 2000
③	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺釈迦堂658地点	手塚 1990
④	田楽辻子周辺遺跡(No.33)	浄明寺二丁目569番10地点	根本 2014
⑤	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番35地点	永田・齋藤 2018a
⑥	釈迦堂遺跡(No.257)	浄明寺一丁目598番21地点	永田・齋藤 2018b
⑦	杉本寺周辺遺跡(No.158)	二階堂宇杉本912番ほか地点	馬淵・岡ほか 2002

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～11面までの合計11面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約16.0mを測り、最上部には層厚20～30cmの表土(1層)と層厚10cm前後の暗茶褐色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3層上面で検出した。確認面の標高は約15.7～15.8mを測る。3層は泥岩ブロックと炭化物、かわらけ片を含み、締まりをもち、粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚35～55cmである。第2面は6層上面で確認し、確認面の標高は約15.3mを測る。6層は泥岩粒子や泥岩ブロックを含み、粘性のある灰茶色粘質土で、層厚6～25cmである。6層の下位には締まりの強い泥岩整地層(7層)が層厚10～20cm堆積している。第3面は8層上面で確認し、確認面の標高は約15.0mを測る。8層はやや締まりのある泥岩整地層で、層厚5～20cmである。第4面は9層上面で確認し、確認面の標高は14.9～15.0mを測る。9層は非常に締まりの強い泥岩整地層で、層厚5～20cmである。9層の下位には、少量の泥岩ブロックとかわらけ片を含む暗茶褐色粘質土(10層)が層厚5cm前後堆積している。第5面は11層上面で確認し、確認面の標高は約14.8mを測る。11層は泥岩ブロックと暗灰茶色粘土で固められた整地層で、層厚5～10cmである。11層の下位には、貝砂層(12層)と混入物がなく粘性の非常に強い灰茶色粘土(13層)がそれぞれ層厚5cm前後堆積している。第6面は14層上面で確認し、確認面の標高は約14.7mを測る。14層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、層厚5～15

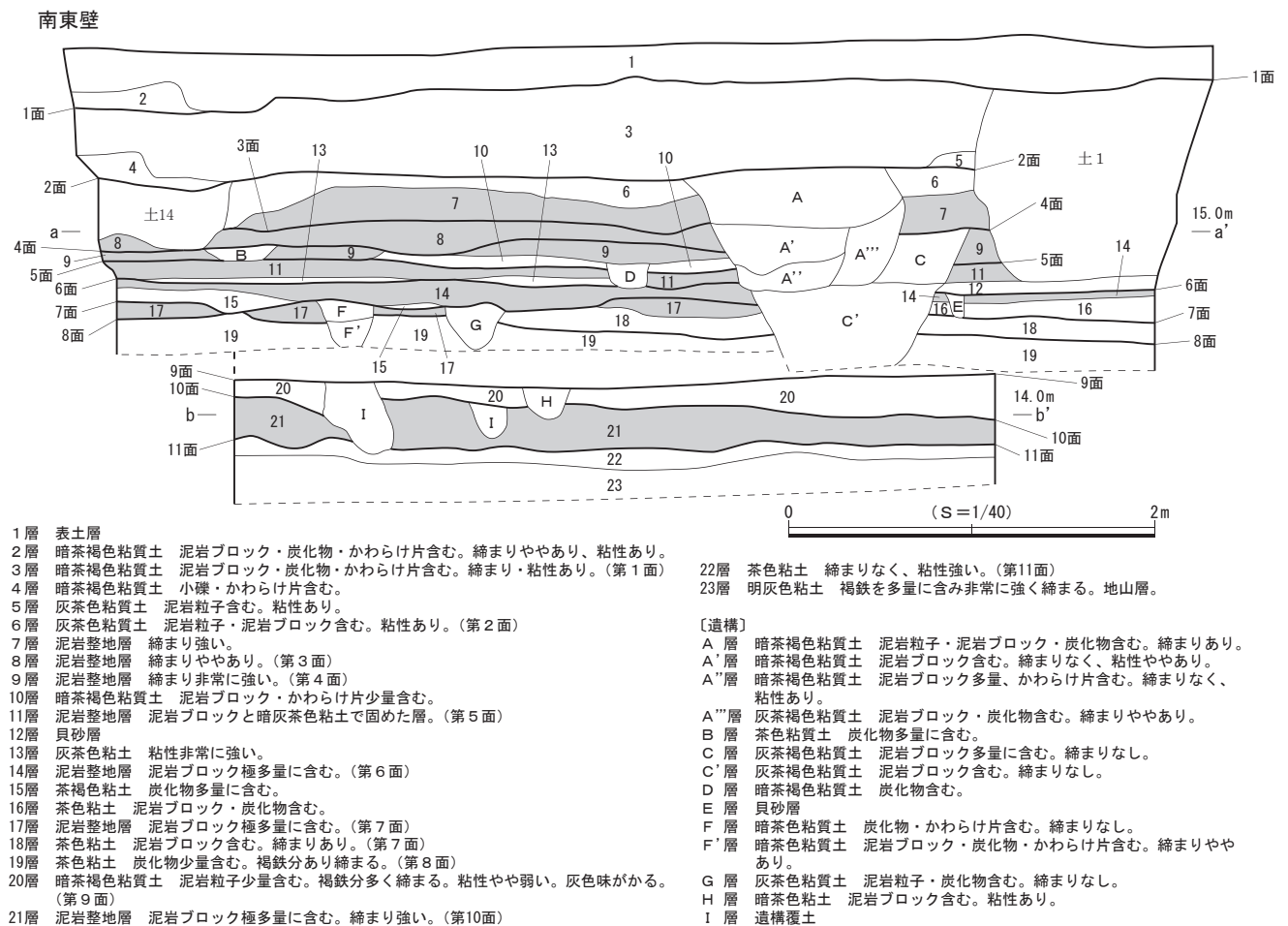


図5 調査区南東壁 土層断面図

(1) 井戸

井戸1 (図7)

調査区北東壁際の中央付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、北東壁のごく一部が調査区外に延びている。

開口部の平面形は南東側がおおむね略円形を呈する。確認面から28cm下位に幅30cm前後のテラスをもち、そこからは平面隅丸方形に掘り込まれる。壁面には厚さ3cmほどを測る板材が断片的に残存しており、縦板を組み合わせた井戸枠であった可能性が考えられる。規模は開口部で北西-南東方向1.70m、北東-南西方向1.64m、井戸枠の規模は北西-南東方向90cm、北東-南西方向78cmを測る。安全対策上、掘削深度の制限があるため井戸底は検出できず、確認面から1.2mの深さで調査を終了した。

出土遺物 (図8)

遺物は覆土から、かわらけ1点、陶器8点、瓦質土器2点、瓦2点、金属製品3点、掘り方からかわらけ28点、磁器1点、陶器15点が出土し、このうち7点を図示した。

1~3はロクロ成形によるかわらけ、4は瀬戸産の天目茶碗、5は瀬戸産の卸皿、6は常滑産の10型式に比定される甕である。1・2・5~7は掘り方からの出土遺物で、3・4は覆土からの出土遺物である。7は備前産の播鉢である。

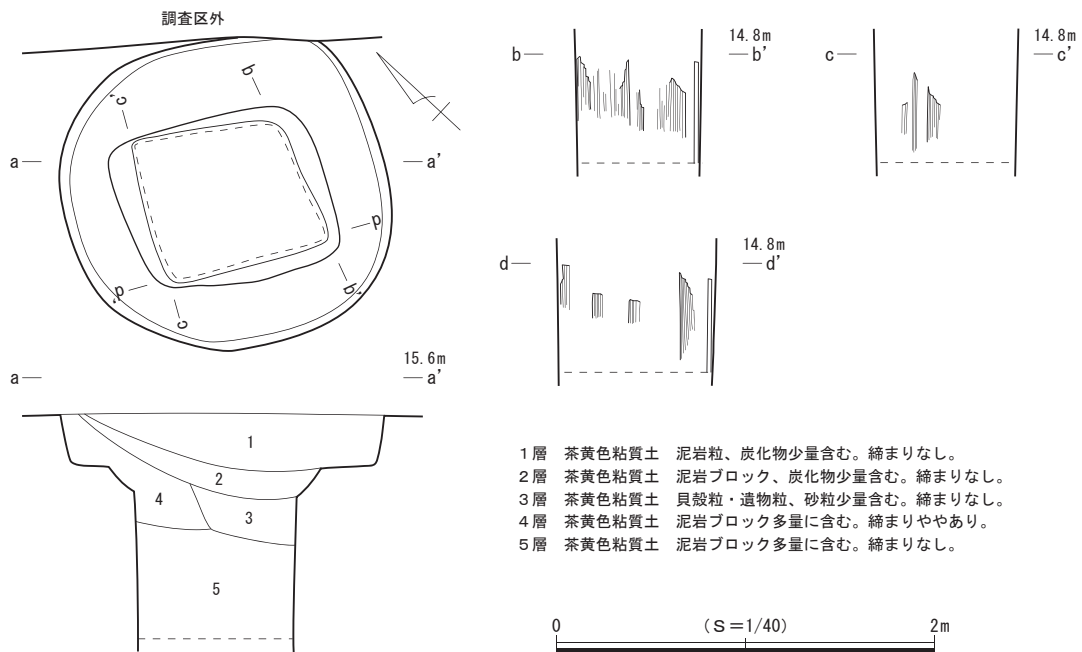


図7 第1面 井戸1

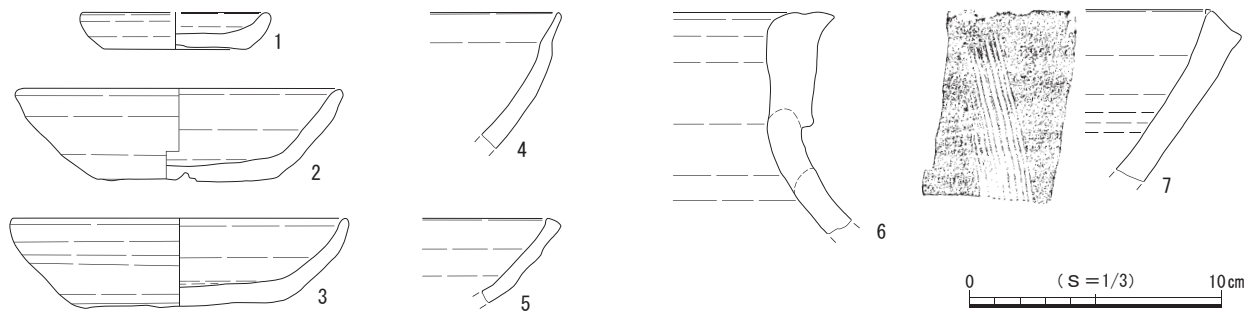


図8 第1面 井戸1 出土遺物

(2) 土 坑

土坑 1 (図9)

調査区の南隅付近に位置する。攪乱によって南西側を壊されており、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.05m、北東-南西方向の現存長81cm、深さ44cmで、坑底面の標高は15.07mを測る。

遺物は出土しなかった。

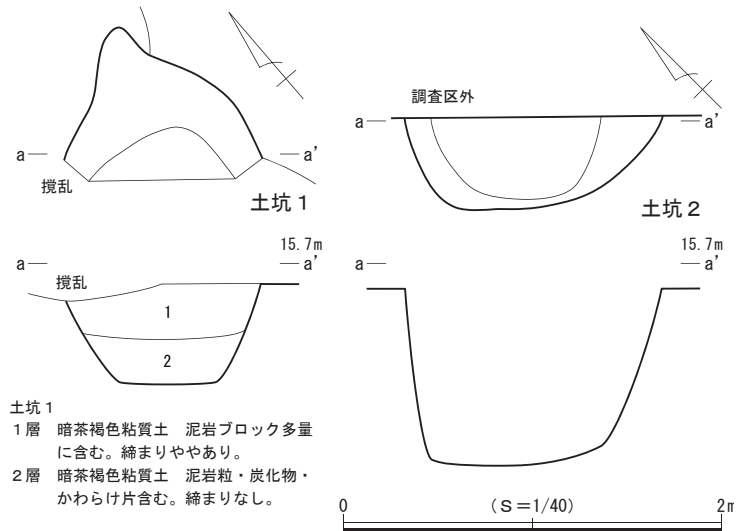


図9 第1面 土坑 1・2

土坑 2 (図9)

調査区北東壁際の中央南寄りに位置する。北東側が調査区外へ延びているために全容を把握できず、平面形や主軸方位は判然としない。底面は緩やかに湾曲し、壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.36m、北東-南西方向の現存長49cm、深さ1.36mと深く、坑底面の標高は14.65mを測る。

遺物はかわらけ 4 点、陶器 3 点が出土した。

(3) 表土出土遺物 (図10)

調査時に、少数ではあるが中世の遺物を表面採集した。このうち 2 点を図示した。

1・2はロクロ成形によるかわらけである。

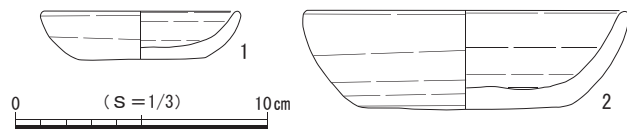


図10 表土出土遺物

(4) 第 1 面 遺構外出土遺物 (図11)

第 1 面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち 2 点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけ、2は瀬戸産の折縁深皿であり、見込み部に同心円状の櫛描文が施文されている。

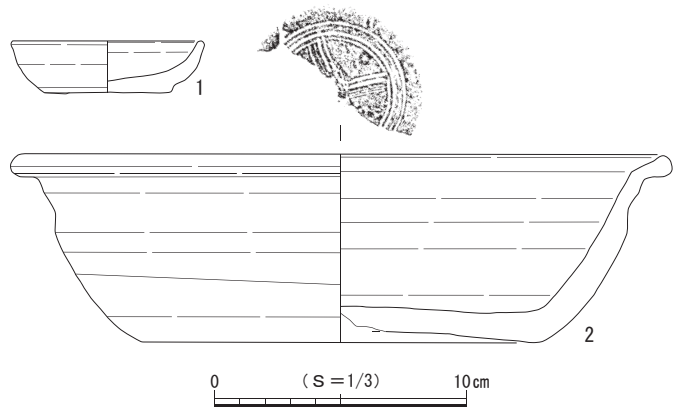


図11 第1面 遺構外出土遺物

第 2 節 第 2 面の遺構と遺物

第 2 面の遺構は堆積土層の 6 層上面で検出され、確認面の標高は約15.3mを測る。6層は泥岩粒子や泥岩ブロックを含み、粘性のある灰茶色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は道路状遺構 1 本、溝状遺構 1 条、土坑12基、ピット22基である(図12)。調査区南東部を北東-南西方向に道路状遺構が延びており、この西側の幅2.5mは遺構の空白部となっている。

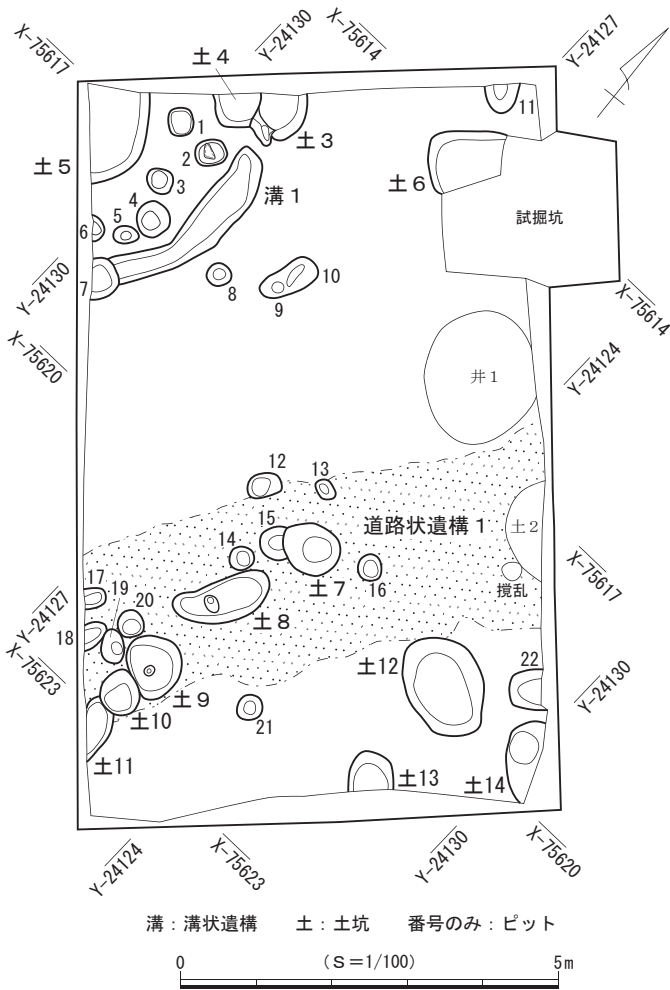


図12 第2面 遺構分布図

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は14世紀代に属すると考えられる。

(1) 道路状遺構

道路状遺構 1 (図13)

調査区の中央東寄りに位置する。北東-南西方向に延び、両端部とも調査区外へと続く。南側で土坑7~11、ピット12~20と重複し、路面が壊されている。おおむね直線と考えられるが、路面の南東側はごく緩やかに湾曲している。検出した規模は、現存長6.25m、幅2.10~2.70mを測る。掘り方は断面逆台形を呈し、深さ40cm前後を測る。泥岩粒を多量に含む土を用いて突き固めて基盤層を築き、最上部の路面にあたる部分には泥岩ブロックを敷き詰めて舗装している。主軸方位はN-34°-Eを指す。

遺物はかわらけ5点、陶器9点が出土した。

(2) 溝状遺構

溝状遺構 1 (図14)

調査区西隅に位置する。緩やかに湾曲して南北方向に延び、南端部はピット7と重複して壊され、北

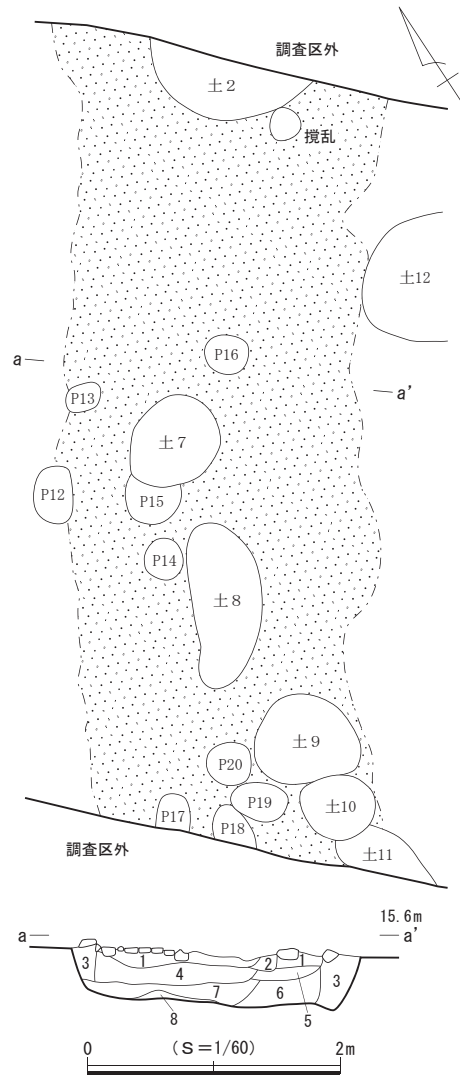


図13 第2面 道路状遺構 1

- 1層 茶色粘質土 泥岩ブロックを固く敷き詰めた層。路面。
- 2層 茶褐色粘質土 泥岩粒少量含む。締まりなし。縁石の抜き取り痕か。
- 3層 泥岩層 路面縁石。
- 4層 泥岩層 泥岩粒を突き固めた層。
- 5層 泥岩層 泥岩粒少量含む。
- 6層 泥岩層 泥岩粒をやや多く含む。
- 7層 泥岩層 泥岩粒を突き固めた層。4層より泥岩粒が大きい。
- 8層 灰茶褐色粘質土 締まりなし。

端部は調査区内に収まる。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は、現存長約2.5m、幅32～53cm、深さ15cmを測り、主軸方位は南側がN-30°-E、北側がN-7°-Wを指す。底面の標高は15.18mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 土 坑

土坑3 (図15)

調査区北西壁際の中央に位置する。西側で土坑4と重複して壊し、北西側が調査区外へ延びており、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長64cm、短軸68cm、深さ15cmで、坑底面の標高は5.17mを測る。主軸方位はN-30°-Wを指すと推定される。

出土遺物 (図16)

遺物はかわらけ23点が出土し、このうち3点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。

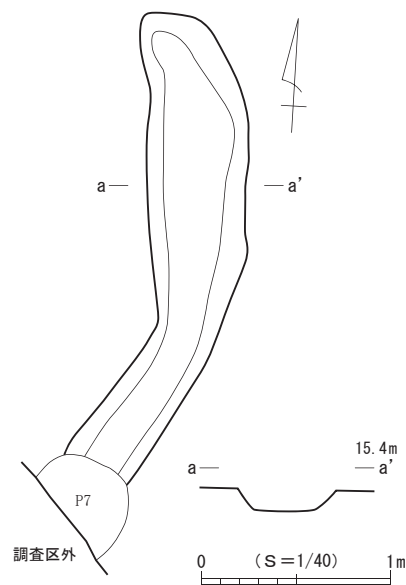


図14 第2面 溝状遺構1

土坑4 (図15)

調査区北西壁際の中央南西寄りに位置する。東側で土坑3と重複して東壁が壊され、北西側が調査区外へ延びており、平面形および主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長61cm、北西-南東方向の現存長44cm、深さ11cmで、坑底面の標高は15.20mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

土坑5 (図15)

調査区の西隅に位置する。西側が調査区外へ延びており、平面形および断面形、主軸方位は判然としない。底面は北から南に向かって傾斜し、壁は開いて立ち上がる。規模は北西-南東方向の現存長1.32m、北東-南西方向の現存長81cm、深さ22cmで、坑底面の標高は14.97mを測る。

出土遺物 (図17)

遺物はかわらけ57点、陶器6点、石製品1点、金属製品1点が出土し、このうち5点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけで、1の口唇部には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。4は常滑産の片口鉢Ⅱ類である。5は鉄製の釘である。

土坑6 (図15)

調査区北隅に位置する。東側を試掘坑によって壊されており、平面形および主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.05m、北西-南東方向の現存長83cm、深さ29cmで、坑底面の標高は15.08mを測る。

遺物はかわらけ9点、陶器4点、金属製品13点が出土した。

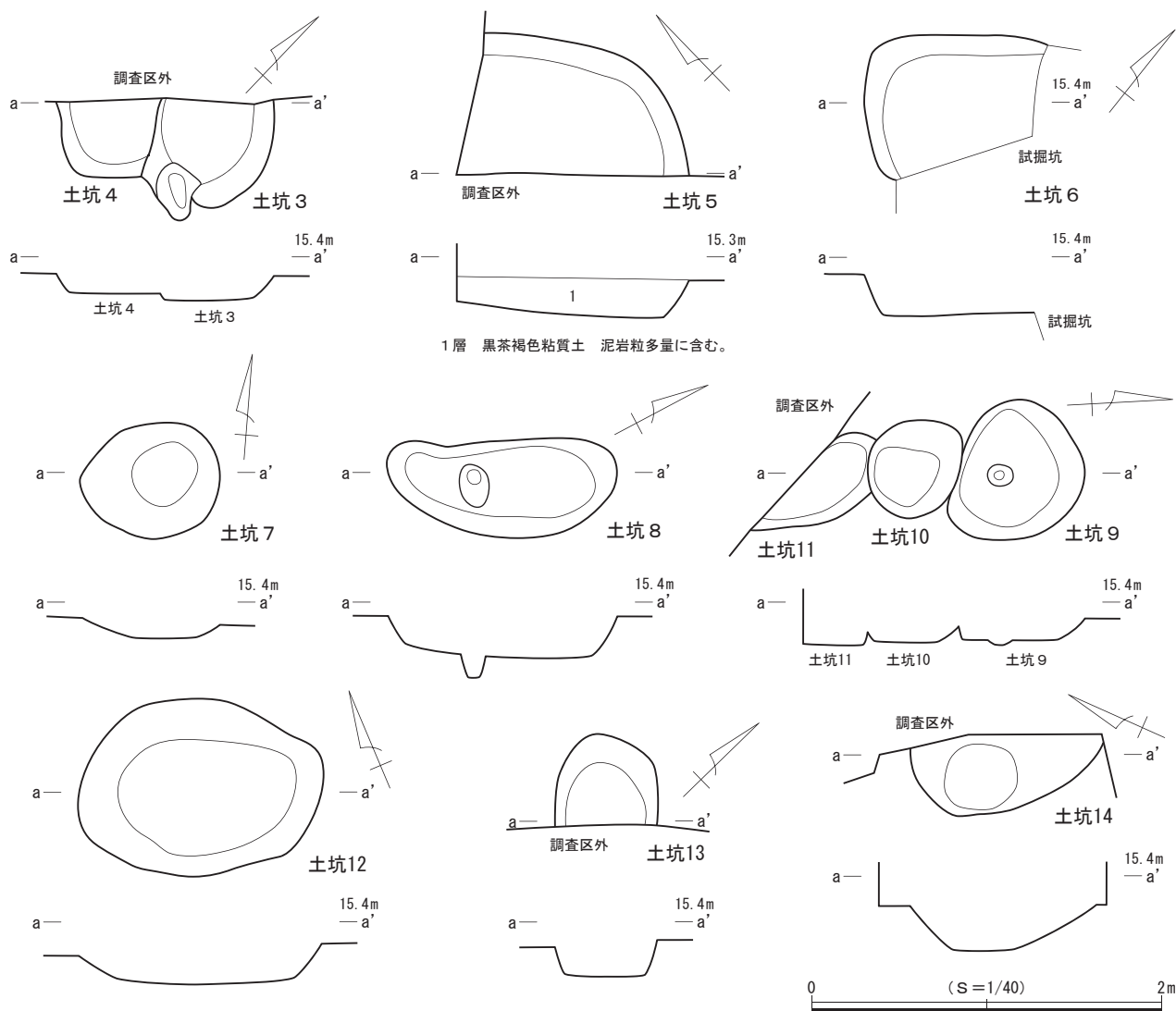


図15 第2面 土坑3～14

土坑7 (図15)

調査区中央南東寄りに位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られ、南西側ではピット15と重複し北東部分を壊している。平面形は略楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸80cm、短軸65cm、深さ13cmで、坑底面の標高は15.21mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑8 (図15)

調査区の南東部に位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られている。平面形は不整楕円形を呈し、底面はごく緩やかに湾曲しており、中央南寄りから長軸23cm、深さ12cmを測る小ピットが確認された。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.32m、短軸56cm、深さ21cmで、坑底面の標高は15.10mを測る。主軸方位はN-28°-Eを指す。

遺物はかわらけ10点、陶器4点が出土した。

土坑9 (図15)

調査区の南隅に位置する。道路状遺構1の路面を壊して作られており、南側で土坑10と重複して南壁

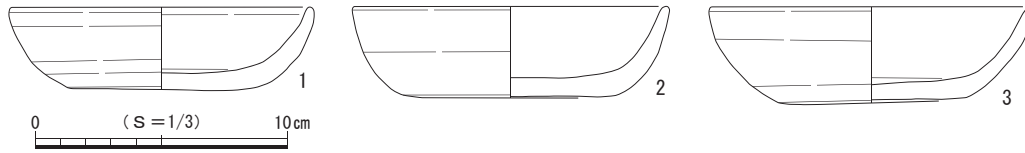


図16 第2面 土坑3出土遺物



図17 第2面 土坑5出土遺物

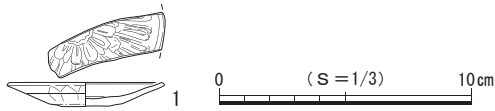


図18 第2面 土坑9出土遺物

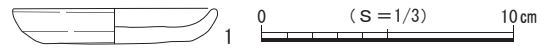


図19 第2面 土坑13出土遺物

の一部が壊されている。平面形は南側がやや直線的な不整形円形を呈し、底面はほぼ水平で中央から長軸14cm、深さ4cmの小ピットが確認された。壁は大きく開き、断面形は皿状を呈する。規模は長軸84cm、短軸71cm、深さ16cmで、坑底面の標高は15.20mを測る。

出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ40点、磁器2点、陶器2点、金属製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は白磁の小皿で、内外面に花卉状の陽刻が施されている。

土坑10 (図15)

調査区の南隅に位置する。北側で土坑9、南側で土坑11と重複し、両土坑の壁を壊している。平面形は北西側がやや尖る不整形円形を呈し、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸61cm、短軸52cm、深さ15cmで、坑底面の標高は15.19mを測る。主軸方位はN - 40° - Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑11 (図15)

調査区の南隅に位置する。北側で土坑10と重複して北側が壊され、南側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、長楕円形考えられ、底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がる。断面形は逆台形と推定され、規模は南北現存長78cm、東西現存長38cm、深さ17cmで、坑底面の標高は15.17mを測る。主軸方位はN - 14° - Wを指す。

遺物はかわらけ3点が出土した。

土坑12 (図15)

調査区東隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略楕円形を呈し、底面はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状に近い形状を呈する。規模は長軸1.42m、短軸1.02m、深さ25cmである。坑底面の標高は25mを測る。主軸方位はN - 67° - Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑13 (図15)

調査区南東壁際の中央北東寄りに位置する。南東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長52cm、北東-南西方向60cm、深さ21cmで、坑底面の標高は15.10mを測る。主軸方位はN-46°-Wを指す。

出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ8点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

土坑14 (図15)

調査区東隅に位置する。東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形状を呈する。規模は南北現存長1.10m、東西現存長46cm、深さ27cmで、坑底面の標高は14.99mを測る。

遺物はかわらけ37点、陶器4点が出土した。

(3) ピット

第2面では、22基を検出した。調査区西隅と調査区南西部に位置する道路状遺構1の付近にまとまって分布するが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径29~54cm、深さ4~27cmを測る。

以下、礎石が据えられたピット2を図示し、説明する。

ピット2 (図20)

調査区の西隅に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。検出範囲から推定すると、平面形は楕円形を呈すると考えられ、断面形は皿状を呈する。規模は長軸42cm、短軸34cm、深さ7cmを測り、礎石はピット中央西寄りの底面直上に据えられる。礎石の大きさは長さ22cm、幅12cm、高さ11cmを測り、上面の標高は15.42mである。

ピット出土遺物 (図21)

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)に掲げたが、このうち4点を図示した。

1~4はロクロ成形によるかわらけである。1~3はピット2、4はピット22から出土した。

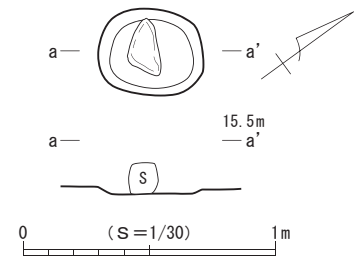


図20 第2面 ピット2

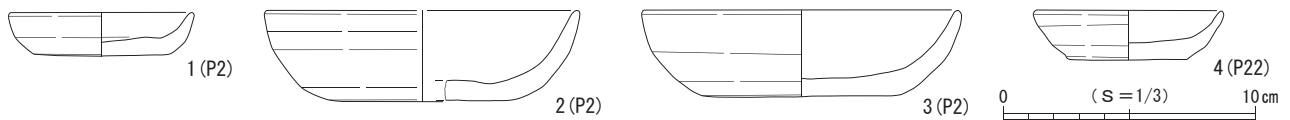


図21 第2面 ピット出土遺物

4) 第2面 遺構外出土遺物(図22・23)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち42点を図示した。

1～24はロクロ成形によるかわらけである。25～27は瀬戸産陶器類で、25は小壺I類、26は入子、27は卸皿である。28～36は常滑産陶器類で、28・29は壺、30は広口壺大、31～34は甕、35・36は片口鉢II類である。37は常滑甕破片を転用した摩耗陶片である。38・39は瓦質土器の火鉢、40は金属製品の天蓋と思われる。41は銅製の飾り釘、42は銭貨で、皇宋通寶(1038年初鑄)である。

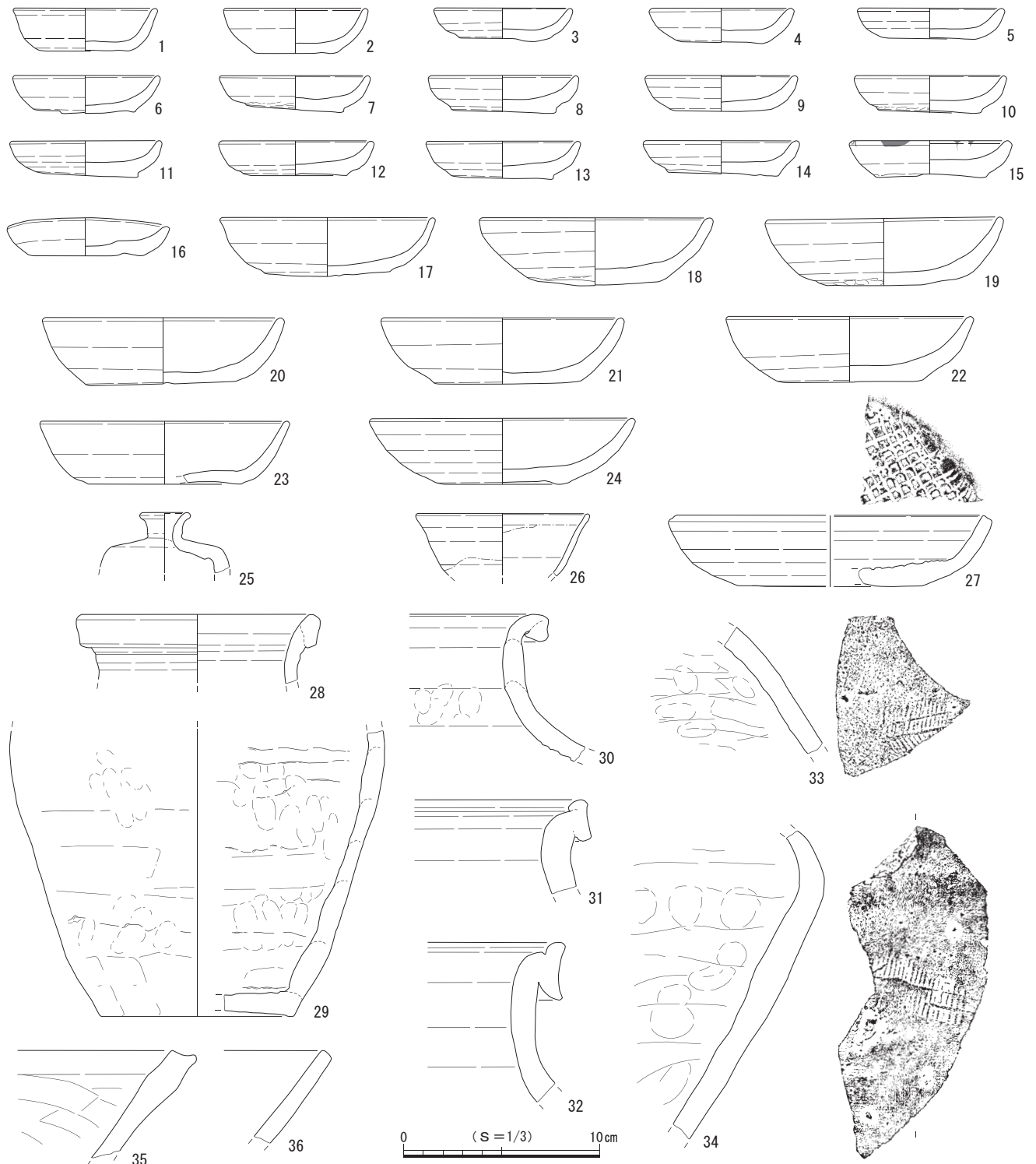


図22 第2面 遺構外出土遺物(1)

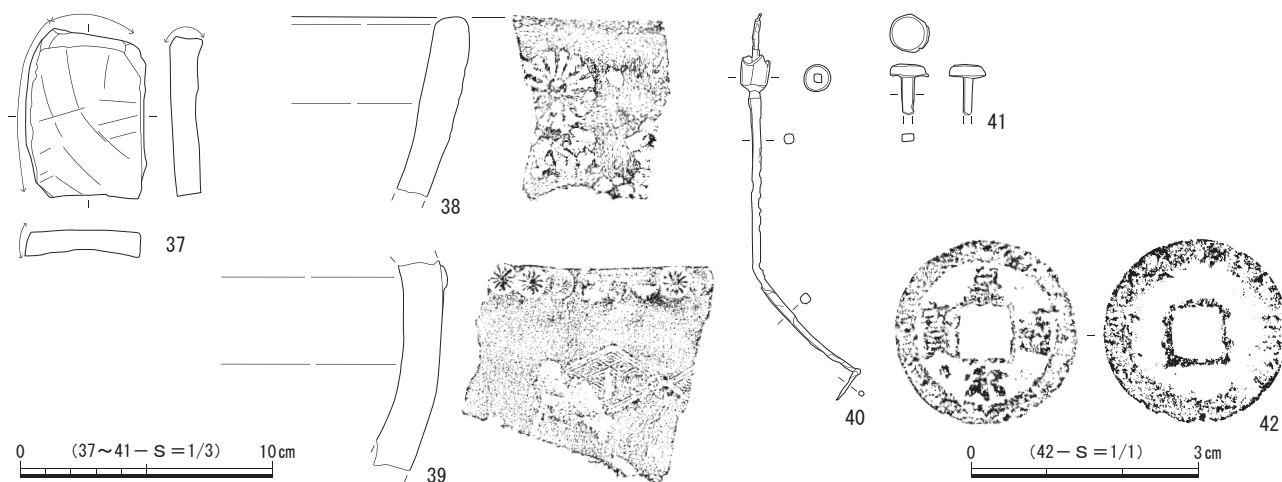


図23 第2面 遺構外出土遺物 (2)

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は堆積土層の8層上面で検出され、確認面の標高は約15.0mを測る。8層はやや締まりのある泥岩整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構2条、土坑4基、ピット3基である(図24)。調査区北半部の東西約8m、南北約5mの範囲には整地面が広がり、これに重なるように遺構群が構築されている。調査区南半は遺構空白域となっており、遺構密度は全体に希薄である。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構2 (図25)

調査区の北側に位置する。井戸1、ピット24・25と重複して中央やや東側が壊されている。北西-南東方向に延びて北西端部は調査区外へと続くが、東端部は調査区内に収まる。

本址の北東側に溝状遺構3が並行して延びており、関連をもつ可能性が考えられる。西半部は真っすぐに延びて東半部はごく緩やかに湾曲する。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は現存長約5.8m、幅18~44cm、深さ6~18cmを測り、主軸方位はN-58°-Wを指す。この北西-南東溝に直交する2条の溝が南西方向に延びており、規模は北側から現存長95cm、幅37cm、深さ10cm、

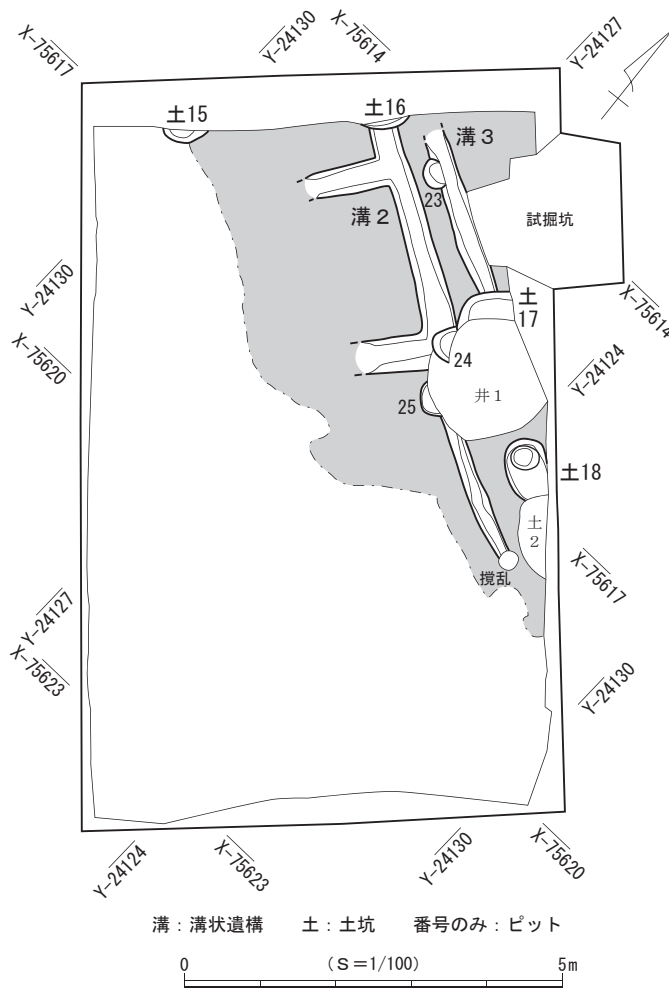


図24 第3面 遺構分布図

現存長84cm、幅48cm、深さ6cmである。底面の標高は北西側が15.07m、南東側が15.05mを測る。

出土遺物 (図26)

遺物はかわらけ12点、磁器1点、陶器4点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。口唇部には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。

溝状遺構3 (図25)

調査区の北側に位置する。北西-南東方向に延び、南東側を土坑17と井戸1によって壊され、北西端部は削平によって消滅している。本址の南西側に溝状遺構2が並行して延びており、関連をもつ可能性が考えられる。真っすぐに延びる溝で、壁は開いて断面形は皿状を呈する。検出した規模は現存長約2.2m、幅24~30cm、深さ5~10cmを測り、主軸方位はN-62°-Wを指す。底面の標高は15.07mを測る。

遺物はかわらけ1点が出土した。

(2) 土坑

土坑15 (図27)

調査区の西隅に位置する。西側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長60cm、北西-南東方向の現存長17cm、深さ15cmで、坑底面の標高は14.92mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑16 (図27)

調査区北西壁際の中央北東寄りに位置する。東側で溝状遺構2と重複して壊している。本址の大半は調査区外の西側へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長67cm、北西-南東方向の現存長13cm、深さ45cmで、坑底面の標高は14.57mを測る。

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土した。

土坑17 (図27)

調査区の北東部に位置する。南東側を井戸1によって大きく壊され、加えて北東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面は水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長77cm、北西-南東方向の現存長54cm、深さ27cmで、坑底面の標高は14.81mを測る。

遺物はかわらけ6点が出土した。

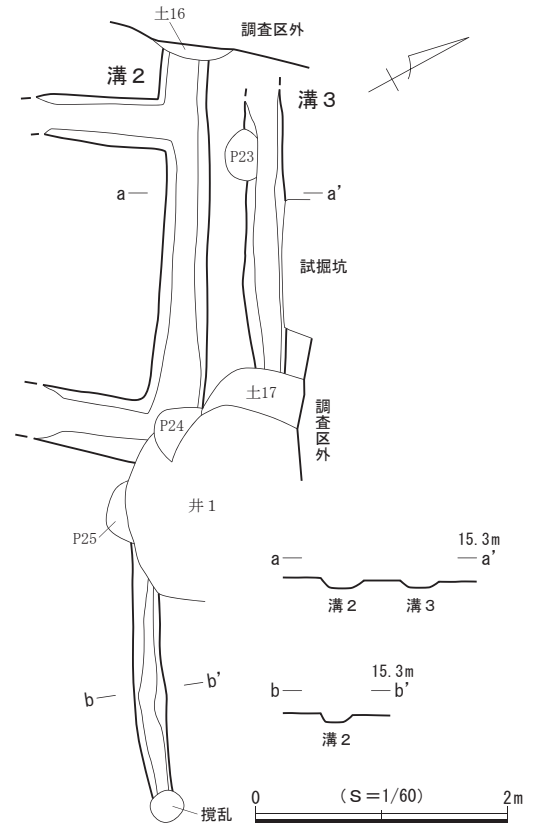


図25 第3面 溝状遺構2・3



図26 第3面 溝状遺構2 出土遺物

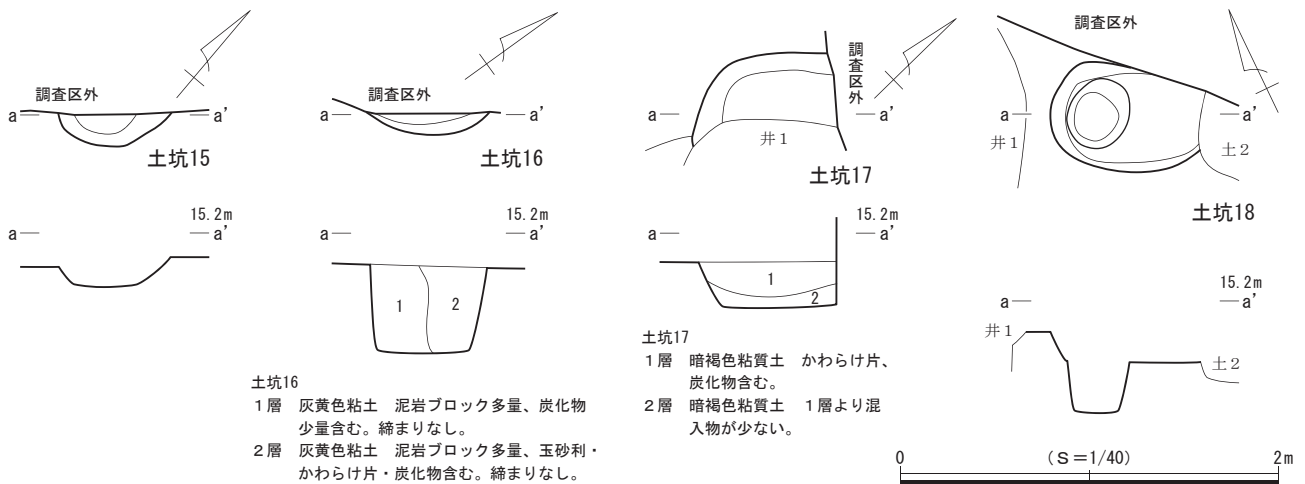


図27 第3面 土坑15～18出土遺物

土坑18 (図27)

調査区の北東壁際中央に位置する。南東側で土坑2と重複して南東側が壊され、北東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、楕円形と考えられ、底面は水平で、北西壁際から長軸38cm、深さ26cmを測るピットが検出された。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東方向の現存長78cm、北東-南西方向の現存長57cm、深さ16cmで、坑底面の標高は14.88mを測る。

出土遺物 (図28)

遺物はかわらけ2点、陶器1点、金属製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

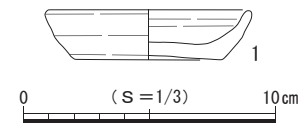


図28 第3面 土坑18出土遺物

(3) ピット

第3面では、3基を検出した。いずれも調査区北側に位置する溝状遺構と重複して分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。いずれも溝状遺構や井戸によって壊されており、平面形や規模は判然としない。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は堆積土層の9層上面で検出され、確認面の標高は14.9～15.0mを測る。9層は非常に締まりの強い泥岩整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は、溝状遺構5条、土坑1基、ピット19基である(図29)。これらの遺構は調査区全域から検出されたが、遺構密度はまばらで重複するものも少ない。溝状遺構は軸方位がほぼ揃っており、互いに関連をもつ区画施設の可能性が推定される。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構 4 (図31)

調査区の北隅近くに位置する。北東-南西方向に伸びる短い溝で、南西端部はピット31と重複して壊されている。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約1.2m、幅27cm、深さ12cmを測り、主軸方位はN-33°-Eを指す。底面の標高は14.74mを測る。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構 5 (図31)

調査区北西部に位置する。調査区内ではL字状を呈し、それぞれの両端は西と北に伸びている。屈曲部で土坑19と重複して南東壁の一部を壊され、加えて東西両端部が調査区外へと続いており全容を把握できなかった。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長が約6m、幅36~95cm、深さ5~14cmを測り、主軸方位はN-79°-Wで、途中で屈曲してN-33°-Eを指す。底面の標高は西側で14.7m、東側で14.75mを測る。

出土遺物 (図30)

遺物は陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の甕で、6b型式に比定される。

溝状遺構 6 (図31)

調査区の南東部に位置する。南北方向に真っすぐに伸びて北側で直角に屈曲し、北西-南東方向に向きを変える。他の遺構と重複せずに単独で確認した。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長が約6.2m、幅15~44cm、深さ5~13cmを測る。主軸方位はN-23°-Eで、北東端部で屈曲してN-62°-Wを指す。底面の標高は北側で14.73m、南側で14.70mを測る。

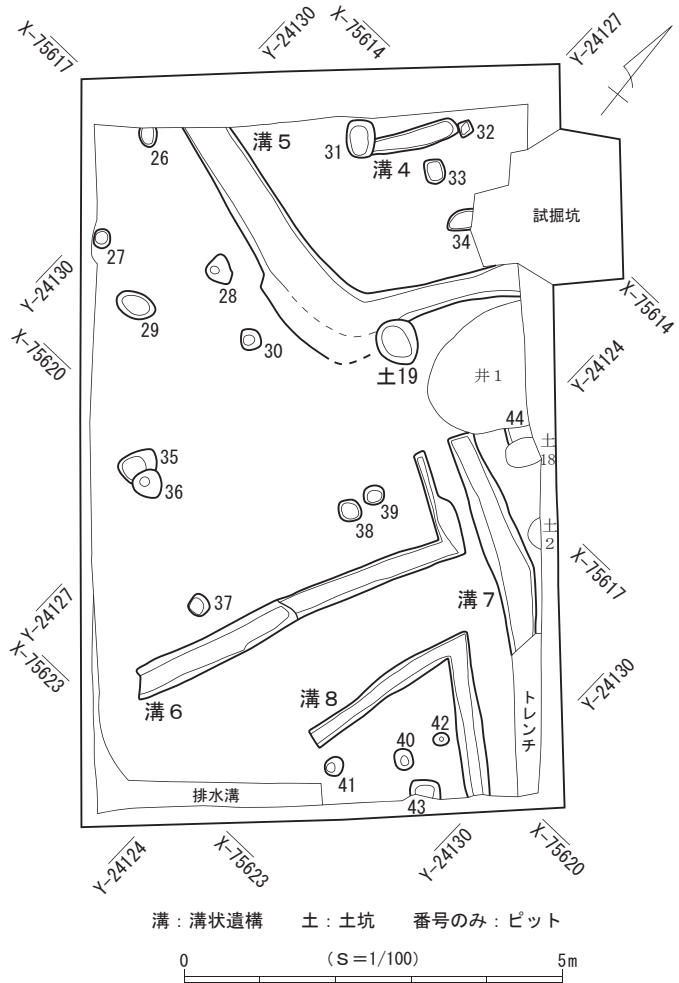


図29 第4面 遺構分布図



図30 第4面 溝状遺構5出土遺物

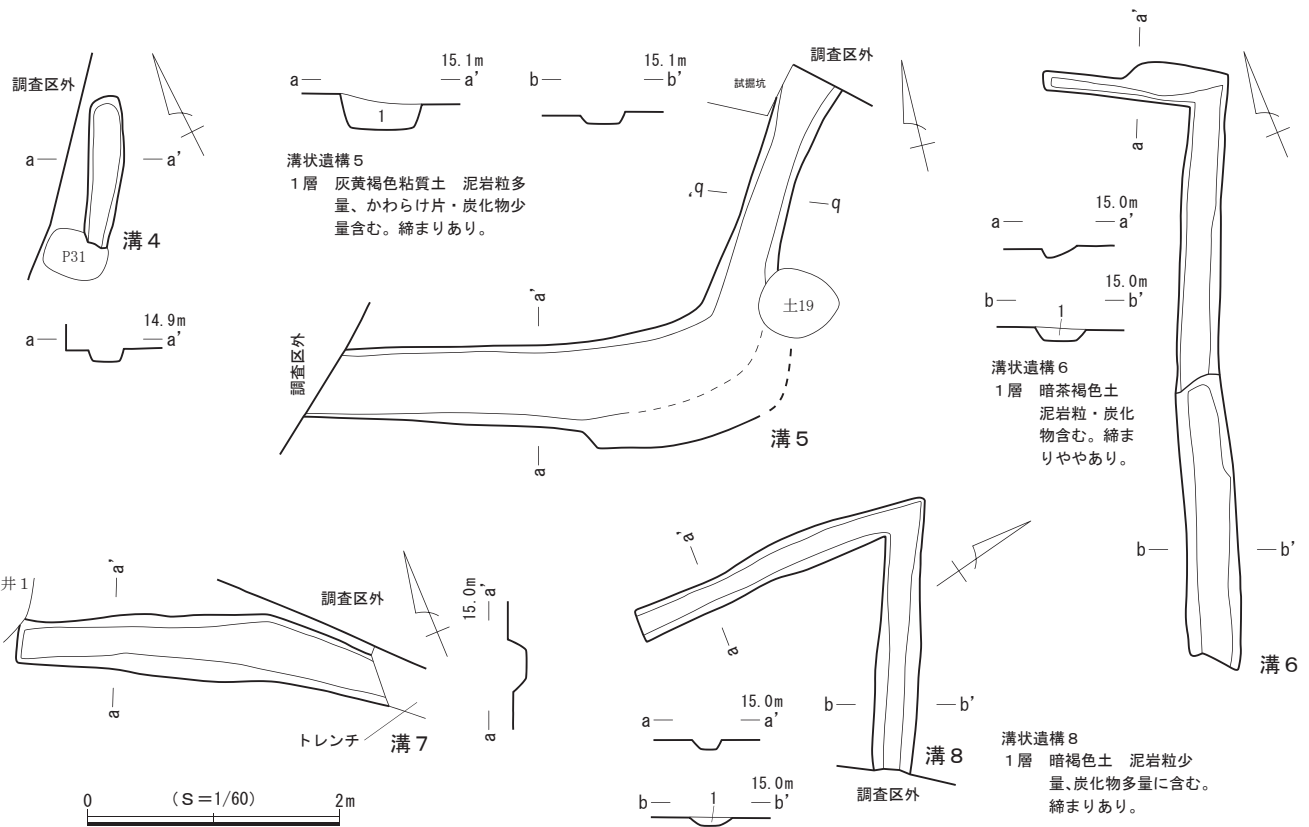


図31 第4面 溝状遺構4～8

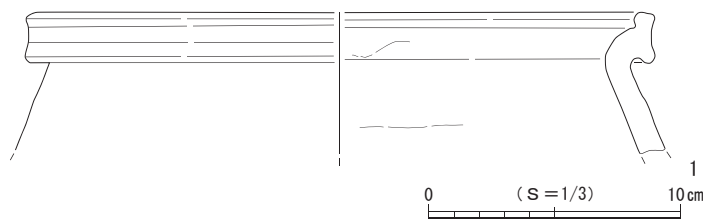


図32 第4面 溝状遺構6出土遺物

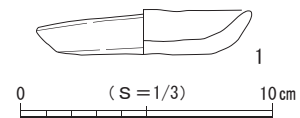


図33 第4面 溝状遺構7出土遺物

出土遺物(図32)

遺物はかわらけ1点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の甕で、6 a型式に比定される。

溝状遺構7(図31)

調査区北東壁際の中央南寄りに位置する。北西-南東方向にはほぼ真っすぐに延び、南東端部はトレンチによって失われている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.8m、幅34~53cm、深さ10~18cmを測り、主軸方位はN-68°-Wを指す。底面の標高は14.73mを測る。本址の南側に隣接して溝状遺構6が並行して延びており、関連する可能性が考えられる。

出土遺物(図33)

遺物はかわらけ8点、陶器4点、瓦質土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

溝状遺構 8 (図31)

調査区南東壁際北東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東部は調査区外へと続いており、全容は把握できなかった。鋭角的に屈曲してV字形を呈する溝で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出範囲での規模は全長約4.6m、幅23~35cm、深さ8cmを測り、主軸方位はN-12°-Eで、屈曲してN-53°-Wを指す。底面の標高は南側で14.77m、南東側で14.83mを測る。

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土した。

(2) 土 坑

土坑19 (図34)

調査区中央の北寄りに位置する。西側で溝状遺構5と重複し、東壁の一部を壊している。平面形は東側がやや尖る略円形を呈し、底面は水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸64cm、短軸55cm、深さ16cmで、坑底面の標高は14.69mを測る。

遺物は出土しなかった。

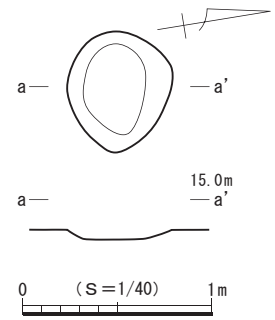


図34 第4面 土坑19

(3) ピット

第4面では、19基を検出した。調査区全域に散漫な状態で分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径19~53cm、深さ7~40cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(4) 第4面 遺構外出土遺物 (図35)

第4面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち15点を図示した。

1~7はロクロ成形によるかわらけである。5には灯芯痕跡が観察されることから、灯明具としての使用が認められる。8は中国製の褐釉壺で、双耳状の耳が貼り付けされている。9は山茶碗である。10~12は常滑産の陶器類で、10は玉縁壺、11は甕、12は片口鉢Ⅱ類である。13は土師質の火鉢である。14は金属製品の六器である。15は銭貨で、景祐元寶(1034年初鑄)である。

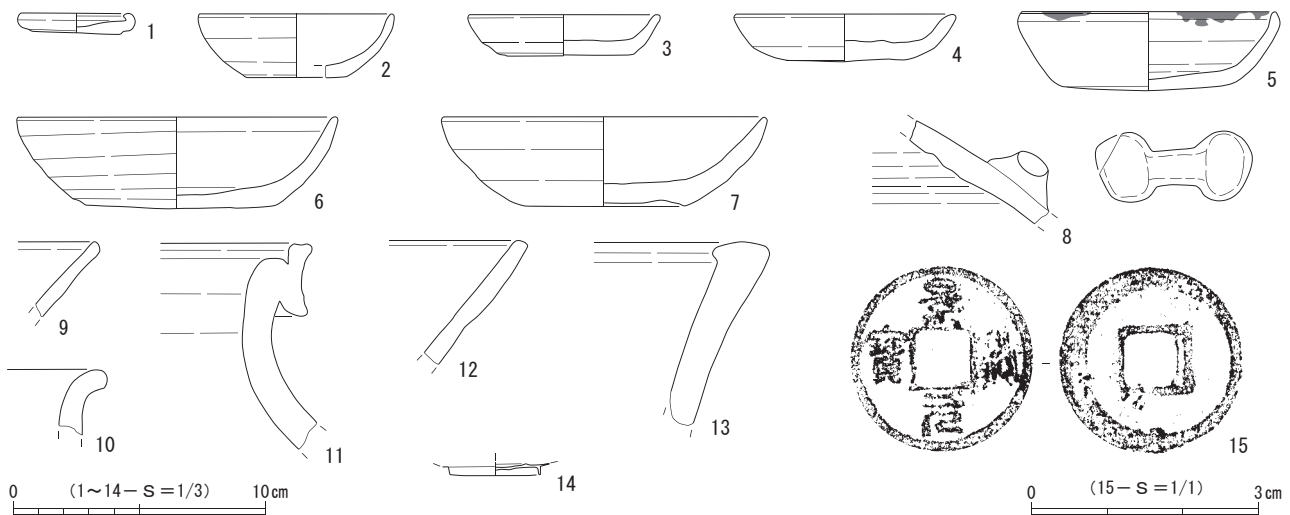


図35 第4面 遺構外出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は堆積土層の11層上面で検出され、確認面の標高は約14.8mを測る。11層は泥岩と暗灰茶色粘土で固められた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット4基で、遺構密度は全体に希薄である(図36)。調査区中央付近から東端部にかけて礎石建物が検出され、さらに調査区外の東側へ展開している。この礎石建物の外側を中心とした整地層の上面に、貝砂の分布が認められた。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～後葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物1(図37)

調査区の中央付近から東端部にかけて位置する。北側で井戸1と重複し、調査区外の北東側と南東側に展開すると予想され、全容を把握することはできなかった。調査区内ではピットが15基検出され、このうち3基(P1～P3)には礎石が据えられている。建物の周囲には柱列に沿って溝が方形に巡っており、検出範囲での溝は南西辺で約6.8m、北西辺で約4.7m、幅49～83cm、深さ11～18cmを測る。溝の西隅付近の底面に、柱のあたりと思われる径30～35cmを測る円形の硬化範囲が4カ所で確認された。

本址は北西-南東方向が2間以上、北東-南西方向が2間以上の規模をもつ建物と考えられ、柱間寸法は心々間で北西-南東列が北西から1.3m、2.1m、2.1mで、北東-南西列が2.1mを測る。検出範囲から推定される主軸方位は、N-58°-Wである。

ピットの平面形は略円形ないし楕円形を呈する。規模は長径23～62cm、深さ2～22cmと一定しないが、北西-南東列のP2～P4は長軸54～62cmの規模をもつ。礎石の大きさは長さ28～40cm、幅20～29cm、高さ14～17cmを測り、礎石上面の標高は14.8～14.85mである。なお、P10の周囲1.15×0.5mの範囲とP8の北側1.0×0.4mの範囲に炭層の堆積が認められた。

遺物は本址に伴う溝やピットから、かわらけ17点が出土した。

(2) ピット

第5面では、4基を検出した。調査区西側に3基、礎石建物1の南側に隣接して1基を確認した。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの

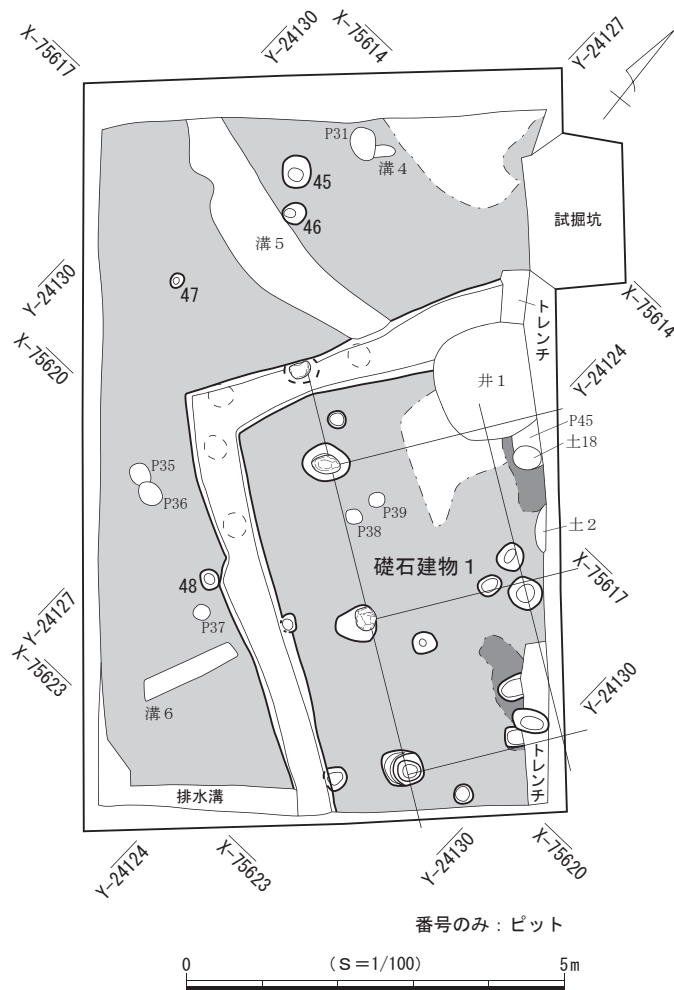


図36 第5面 遺構分布図

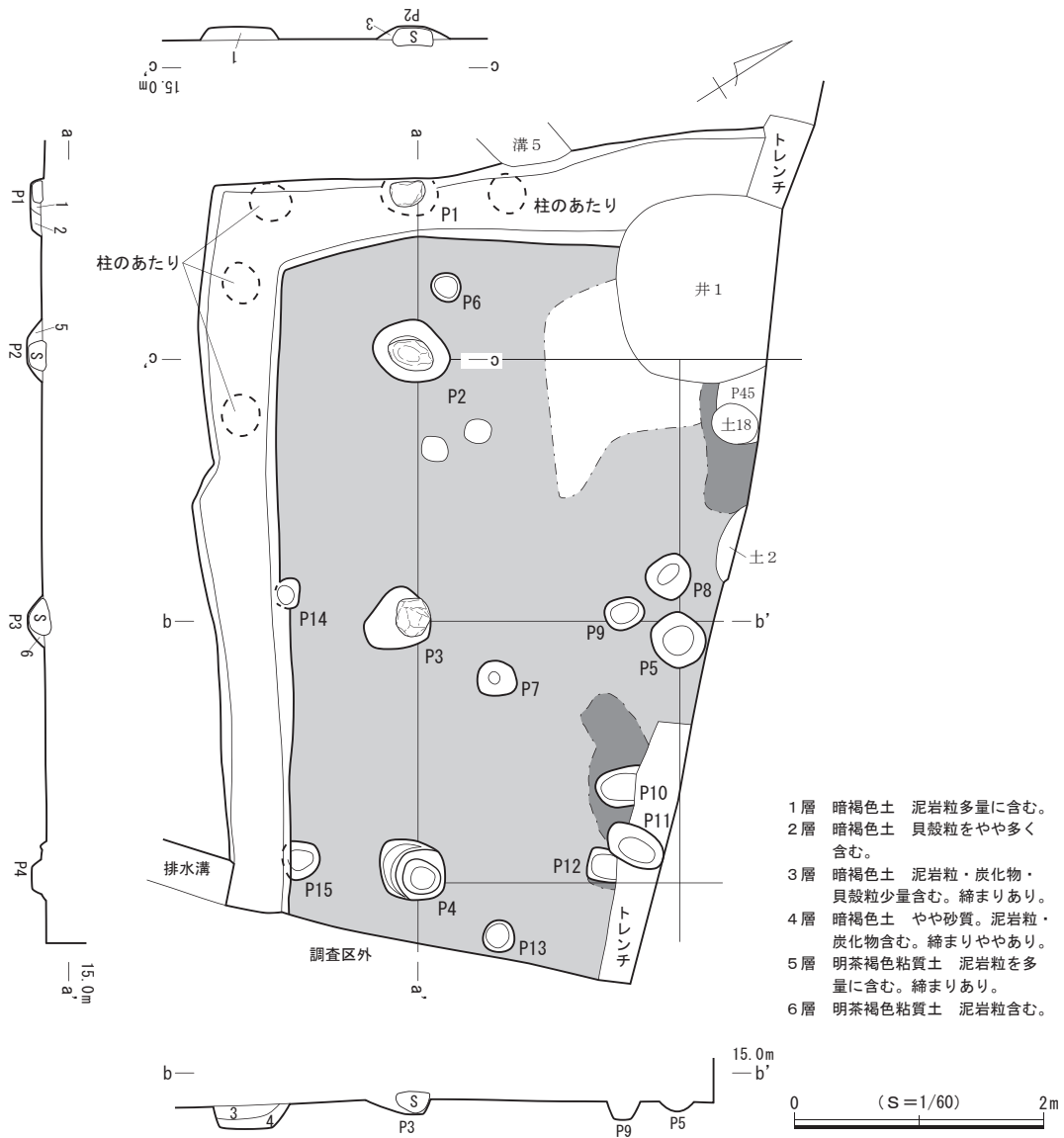


図37 第5面 礎石建物1

平面形は略円形を呈し、規模は長径20～42cm、深さ17～28cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(3) 第5面 遺構外出土遺物(図38)

第5面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち4点を図示した。

1～3はロクロ成形によるかわらけである。4は龍泉窯系青磁の坏Ⅲ-cで、見込み部に魚の貼付文がなされている。

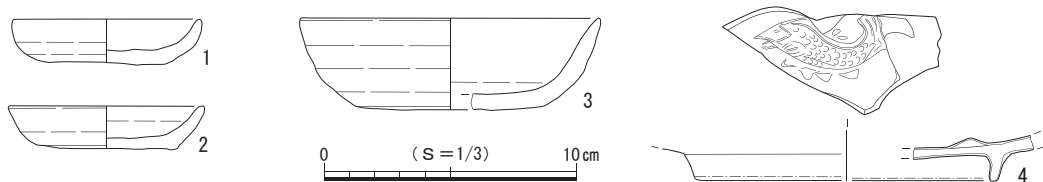


図38 第5面 遺構外出土遺物

第6節 第6面の遺構と遺物

第6面の遺構は堆積土層の14層上面で検出され、確認面の標高は約14.7mを測る。14層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構はピット23基である(図39)。調査区の北隅にピットの集中が認められるが、重複するものはほとんどなく全域に散漫な状態で分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉頃に属すると思われる。

(1) ピット

第6面では、23基を検出した。調査区の北隅にまとまるが、北西から南東にかけてごく散漫な状態な分布を確認した。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径8～42cm、深さ6～36cmを測る。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(2) 第6面 遺構外出土遺物(図40)

第6面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。

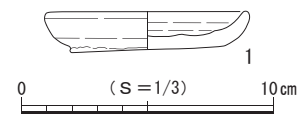


図40 第6面 遺構外出土遺物

(3) 第6面 構成土出土遺物(図41)

第6面構成土中からも遺物が出土しており、このうち9点を図示した。

1・2は手づくね成形によるかわらけ、3～5はロクロ成形によるかわらけで、3は台状の高台をもつ。6は2b型式に比定される渥美産の鉢、7は常滑産の甕で4型式に比定される。8は鹿角製の賽子、9は古墳時代中期と考えられる滑石製の勾玉であり、両端部に穿孔が施される。

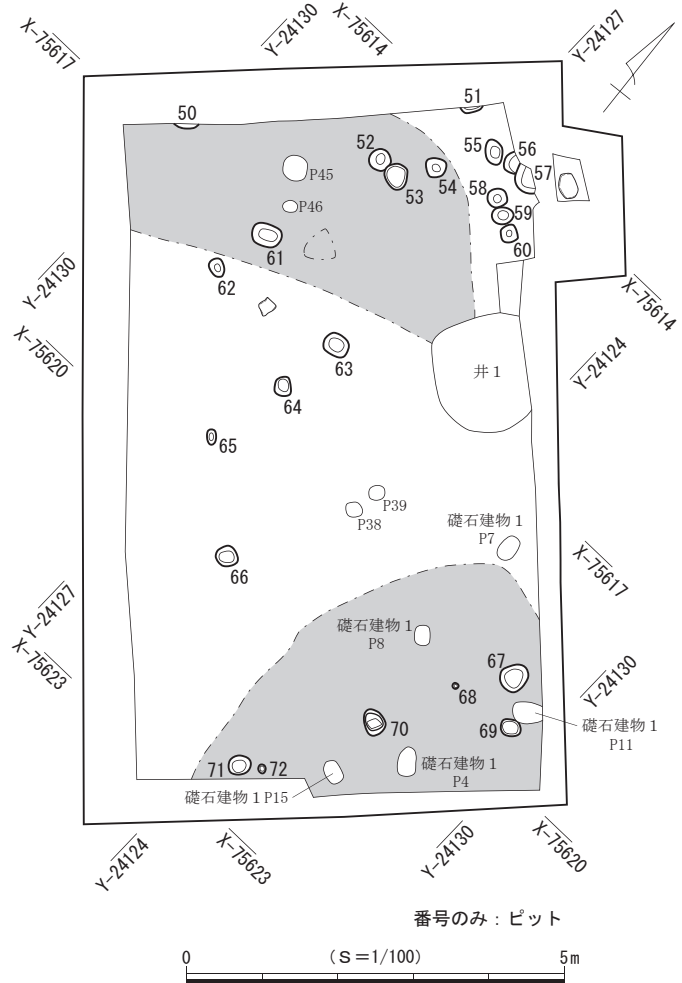


図39 第6面 遺構分布図

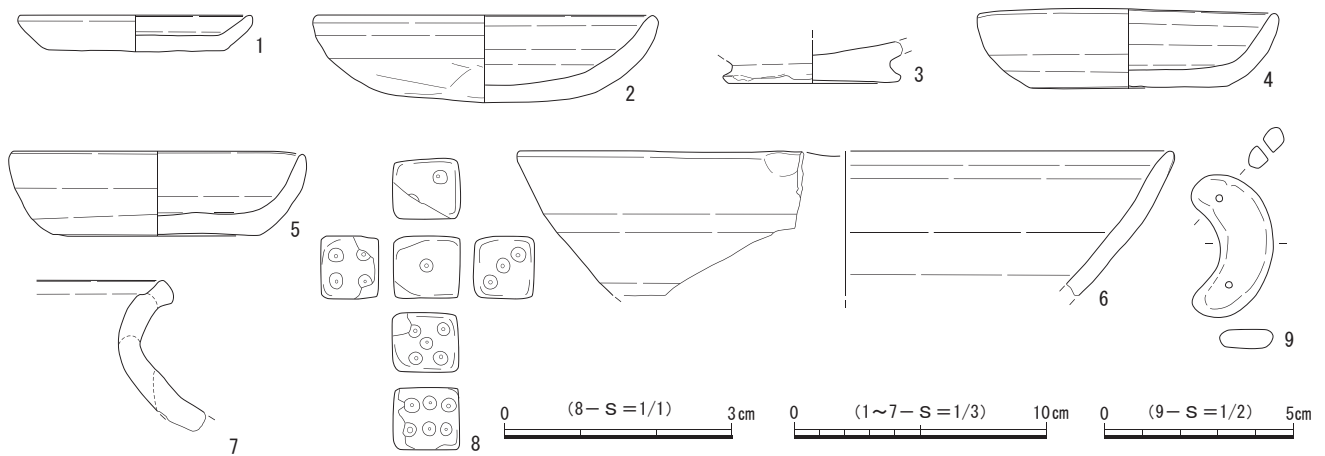


図41 第6面 構成土出土遺物

第7節 第7面の遺構と遺物

第7面の遺構は堆積土層の17・18層上面で検出され、確認面の標高は14.5~14.6mを測る。17層は極多量の泥岩ブロックを含む整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である(図42)。遺構種も遺構数も少なく、調査区全域に散漫な状態で分布する。

遺物はかわらけがわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第6面以下ということをお案して、13世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構9 (図43)

調査区東隅に位置する。「く」字状に屈曲する溝で、北端は調査区内に収まるが南側は調査区外へと続いており、全容を把握できなかった。溝が屈曲する部分でピット90と重複して、屈曲部が壊されている。壁はごくわずかに開いて立ち上がり、断面形が箱形を呈する。

検出範囲での規模は全長約2.0m、幅12~21cm、深さ3~8cmを測り、主軸方位は屈曲部の南側がN-64°-W、北側がN-21°-Eを指す。底面の標高は14.47mを測る。

遺物は出土しなかった。

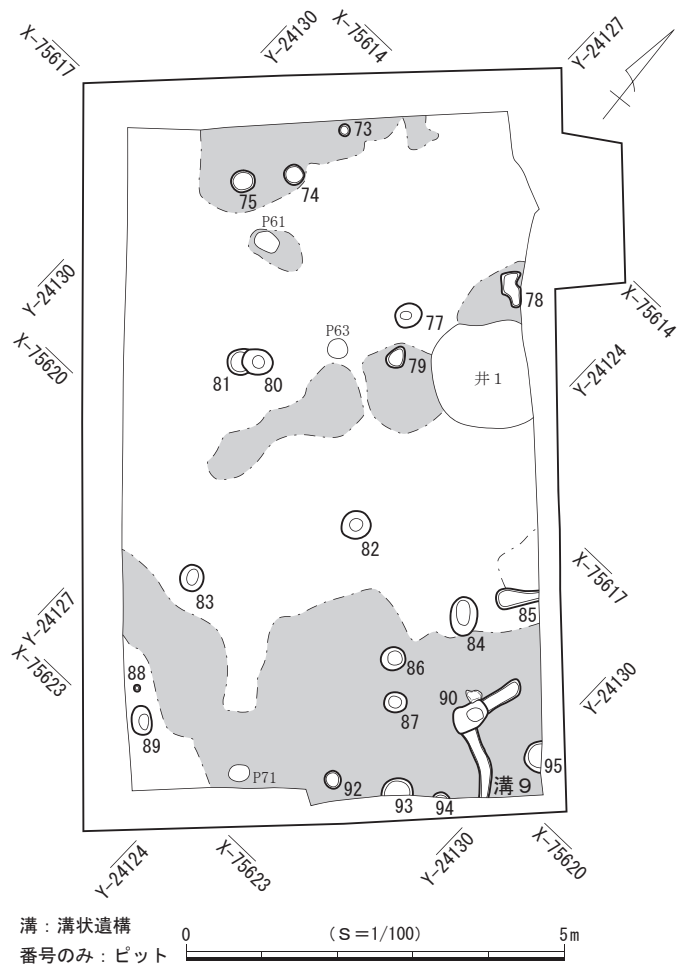


図42 第7面 遺構分布図

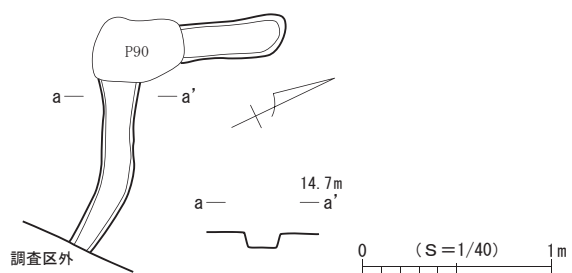


図43 第7面 溝状遺構9

(2) ピット

第7面では、22基を検出した。調査区全域にわたり散漫に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形を呈し、規模は長径9～58cm、深さ4～46cmとばらつきがある。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

第8節 第8面の遺構と遺物

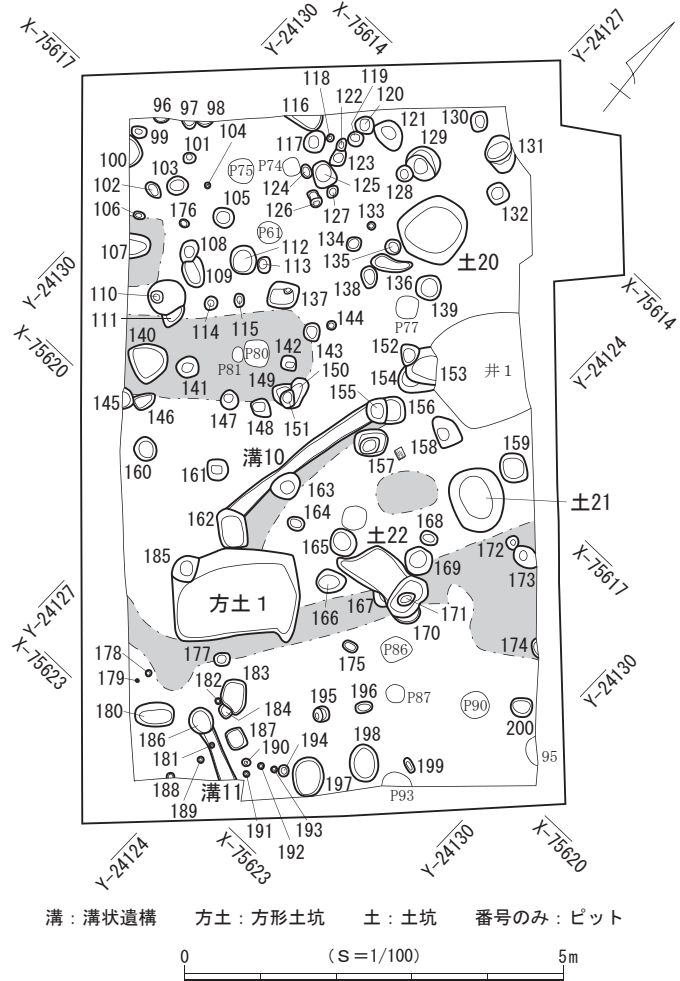
第8面の遺構は堆積土層の19層上面で検出され、確認面の標高は14.4～14.5mを測る。19層は少量の炭化物を含み、褐鉄分により締まりのある茶色粘土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構2条、方形土坑1基、土坑3基、ピット104基である(図44)。これらの遺構は調査区全域に満遍なく分布し、遺構密度は比較的高い。調査区のほぼ中央に位置する溝状遺構10を挟み、その東側と西側に帯状の整地面の広がり確認された。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀初頭～前葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構10(図45)

調査区中央に位置する。南北方向に延び、両端部はピット155とピット162によって壊されているが、調査区内に収まる。本址の東側に沿って幅10～40cmの硬く締まった整地面が帯状に延びている。ごく緩やかに湾曲する



溝で、壁はやや開いて立ち上がり、断面形が逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.3m、幅12～21cm、深さ8cmを測り、主軸方位はN-11°-Eを指す。底面の標高は14.36mを測る。

遺物は出土しなかった。

溝状遺構11 (図45)

調査区南隅に位置する。東西方向に延び、西端部はピット186と重複して壊され、東側は調査区外へと続くため全容を把握できなかった。ほぼ真つすぐに延びる溝で、壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。検出した規模は現存長約80cm、幅16～20cm、深さは3cmと浅く、主軸方位はN-67°-Wを指す。底面の標高は14.49mを測る。

遺物はかわらけ3点が出土した。

(2) 方形土坑

方形土坑1 (図46)

調査区南側に位置する。西側でピット185と重複して壁の一部が壊されている。平面形は東側の隅が突出した不整隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。壁はわずかに開いて立ち上がり、断面形は箱形を呈する。規模は長軸1.67m、短軸1.16m、深さ43cmである。坑底面の標高は14.05mを測る。主軸方位はN-41°-Eを指す。

出土遺物 (図47)

遺物はかわらけ5点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は手づくね成形によるかわらけである。

(3) 土坑

土坑20 (図48)

調査区北隅付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は不整円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸90cm、短軸85cm、深さ31cmである。坑底面の標高は14.14mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑21 (図48)

調査区北東壁付近の中央やや南東に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は楕円形を呈し、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸85cm、短軸70cm、深さ23cmである。坑底面の標高は14.26mを測る。主軸方位N-67°-Wを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑22 (図48)

調査区の南西側に位置する。東側をピット171に壊され、南側でピット167と重複して壊している。平面

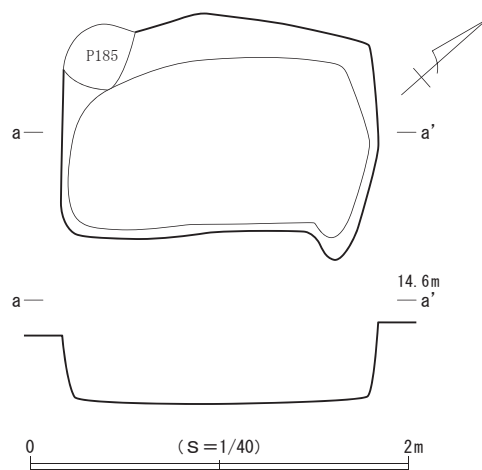


図46 第8面 方形土坑1

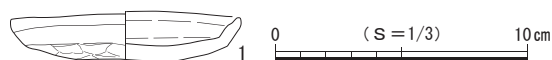


図47 第8面 方形土坑1 出土遺物

形は東西に長軸方向をもつ不整形を呈する。底面ほぼ水平で、東側はピット状に掘り込まれ深くなる。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.23m、短軸61cm、深さ29cmである。坑底面の標高は14.31mを測る。主軸方位はN-85°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

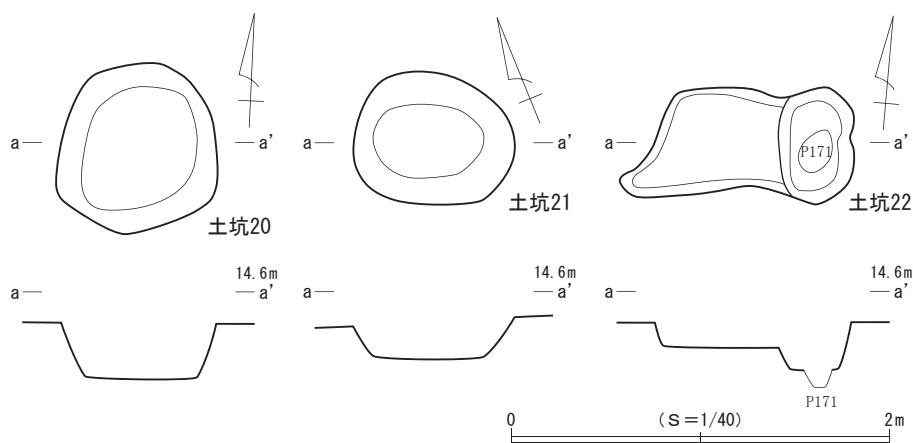


図48 第8面 土坑20~22出土遺物

(4) ピット

第8面では、104基を検出した。調査区全域にわたって満遍なく分布するが、礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形や楕円形、隅丸方形を呈し、規模は長軸4~55cm、深さ3~57cmとばらつきが大きい。

ピットからは少量ながら遺物が出土している。詳細は出土遺物一覧表(表10)を参照されたい。

(5) 第8面 遺構外出土遺物(図49)

第8面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち10点を図示した。

1は手づくね成形による白かわらけである。2・3は手づくね成形によるかわらけである。4は同安窯系青磁碗、5は龍泉窯系青磁碗I-4類、6は龍泉窯系青磁碗I-3類である。7は渥美産の鉢で2b型式に比定される。8は山皿である。9は常滑産の片口鉢I類、10は平行縄叩きとナデにより成形がなされている平瓦である。

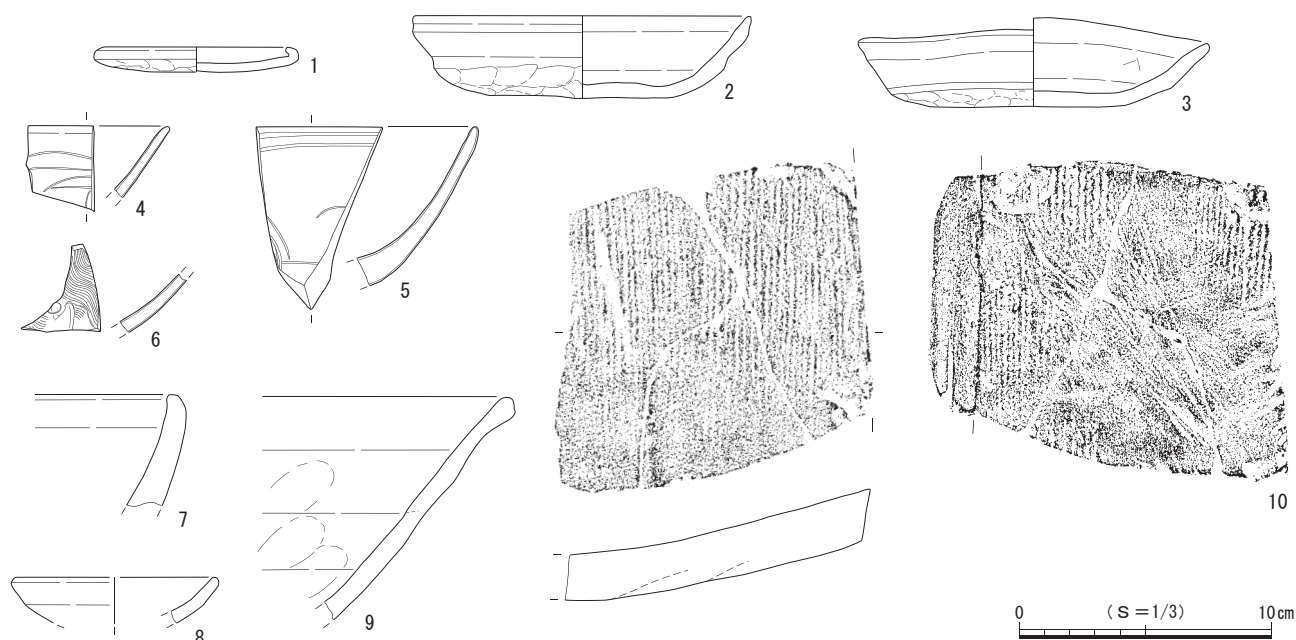


図49 第8面 遺構外出土遺物

(6) 第8面 構成土出土遺物 (図50)

第8面構成土中からも遺物が出土しており、このうち3点を図示した。

1はロクロ成形によるかわらけである。2は瀬戸産の平碗、3は琴柱形の鹿角製品である。

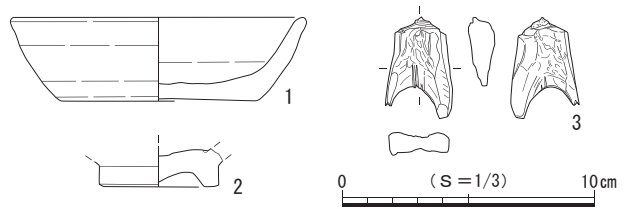


図50 第8面 構成土出土遺物

第9節 第9面の遺構と遺物

第9面の遺構は堆積土層の20層上面で検出され、確認面の標高は約14.2mを測る。20層は少量の泥岩粒子を含み、褐鉄分により締まりがあるが粘性のやや弱い、灰色みがあった暗茶褐色粘質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑5基、ピット21基である(図51)。遺構の分布は土坑が調査区南東部にまとまり、ピットは全域から散漫な状態で検出されている。

遺物はかわらけと磁器がわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第8面以下ということをお勧めして、13世紀初頭以前に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑23 (図52)

調査区のほぼ中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は長軸が北東-南西を向く長楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸77cm、短軸44cm、深さ33cmである。坑底面の標高は13.78mを測る。主軸方位はN-51°-Eを指す。

遺物はかわらけ1点が出土した。

土坑24 (図52)

調査区の南隅に位置する。北西側で第8面の方形土坑1、南側で土坑25と重複して壊されており、平面形および主軸方位は判然としない。底面はわずかに湾曲し、壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は東西1.44m、南北現存長80cm、深さ21cmで、坑底面の標高は11.61mを測る。

遺物はかわらけ5点が出土した。

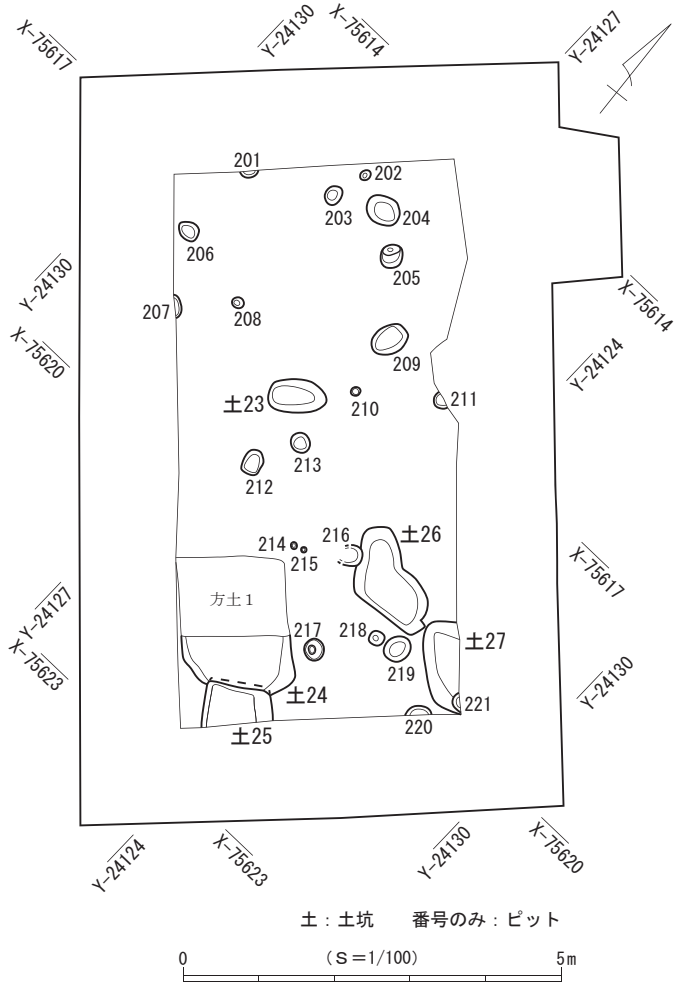


図51 第9面 遺構分布図

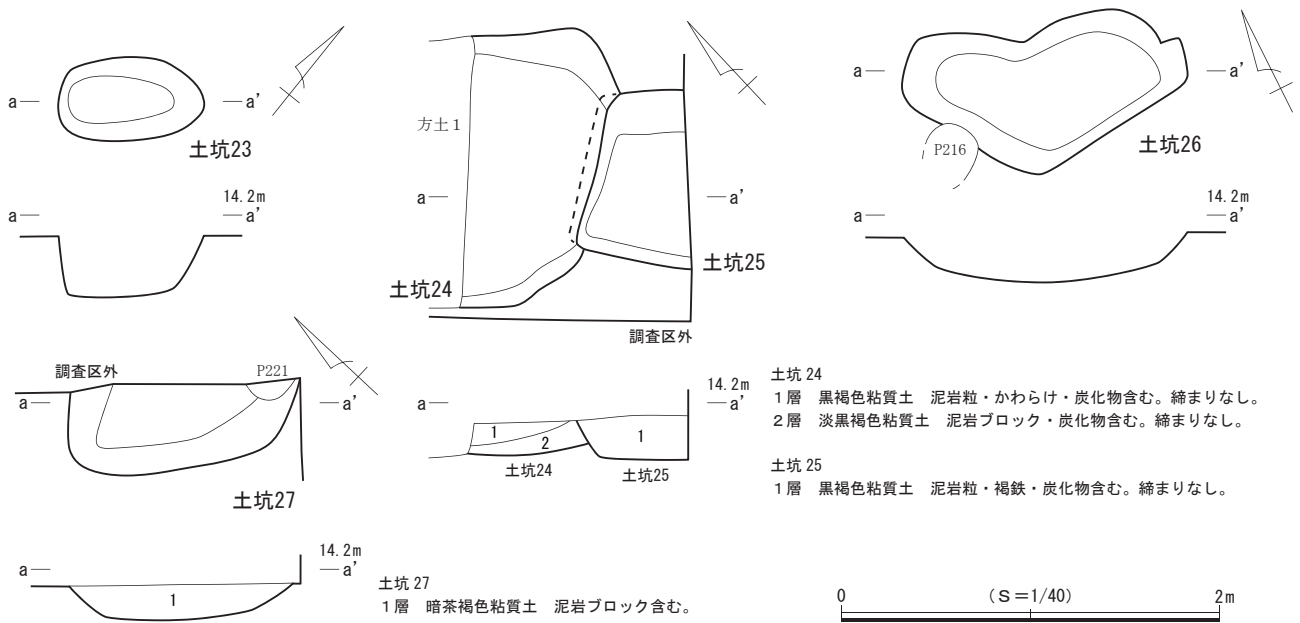


図52 第9面 土坑23～27

土坑25 (図52)

調査区の南隅に位置する。北西側で土坑24と重複して壊され、加えて南東側が調査区外へ延びているために、全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、方形を基調とすると考えられ、底面は水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長92cm、北西-南東方向の現存長57cm、深さ25cmで、坑底面の標高は13.90mを測る。主軸方位はN-54°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑26 (図52)

調査区の南東部に位置する。西側でピット216と重複して西壁の一部が壊されている。平面形は南壁が直線的で北壁に括れをもつ不整楕円形を呈し、底面は湾曲して中央がくぼむ。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は丸底状を呈する。規模は長軸1.50m、短軸70cm、深さ27cmで、坑底面の標高は13.86mを測る。主軸方位はN-86°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

土坑27 (図52)

調査区の東隅に位置する。東側が調査区外へ延びているために、平面形や主軸方位は判然としない。底面はわずかに湾曲し、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.21m、北東-南西方向の現存長48cm、深さ19cmで、坑底面の標高は13.94mを測る。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

第9面では、21基を検出した。調査区全域にわたり散漫に分布する。礎石や礎板を伴うピットはなく、建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は円形ないし楕円形

第11節 第11面の遺構と遺物

第11面の遺構は堆積土層の22層上面で検出され、確認面の標高は13.8~13.9mを測る。22層は締まりがなく粘性の強い茶色粘土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は井戸1基、土坑3基、ピット24基である(図55)。調査区全域にまばらに分布し、遺構密度は希薄である。

遺物は土師器がわずかに出土したのみであり、詳細な年代を特定することは困難である。従って、第8~10面以下ということをも勘案して、13世紀初頭以前に属すると考えられる。

(1) 井戸

井戸2(図56)

調査区南西壁際の中央に位置する。東側でピット265・268・269と重複する。南西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から開口部の平面形を推定すると、円形を呈すると考えられ、壁はわずかに開いて立ち上がる。規模は北西-南東方向2.37m、北東-南西方向の現存長1.31mを測る。掘削深度の制限があるため井戸底は検出できず、確認面から約50cmの深さで調査を終了した。

遺物は出土しなかった。

(2) 土坑

土坑29(図57)

調査区北東壁際の中央南東寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると楕円形と考えられ、底面は水平で、壁は大きく開いて立ち上がる。断面形は皿状に近い形状を呈し、規模は北西-南東方向の現存長84cm、北東-南西方向の現存長58cm、深さ7cmで、坑底面の標高は13.67mを測る。主軸方位はN-75°-Eを指すと推定される。

遺物は出土しなかった。

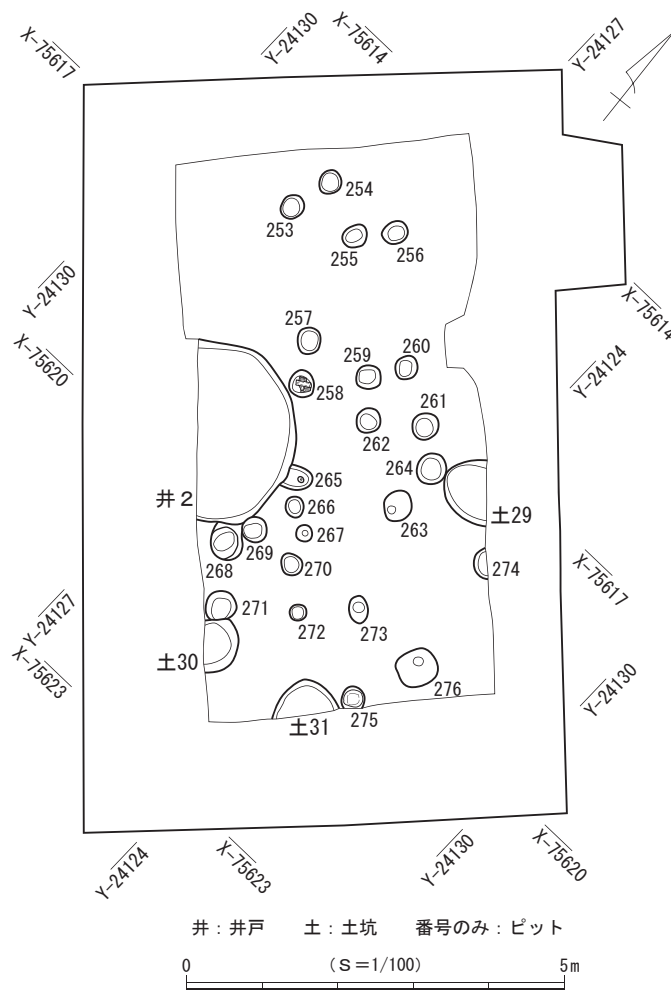


図55 第11面 遺構分布図

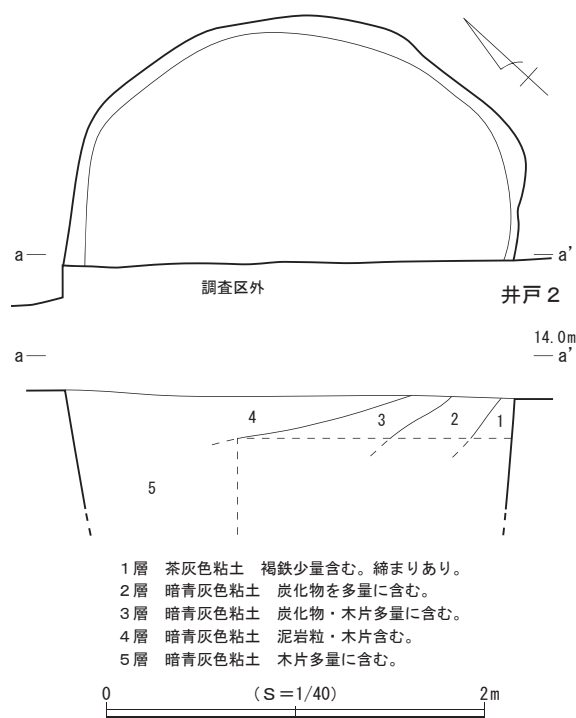


図56 第11面 井戸2

土坑30 (図57)

調査区の南隅付近に位置する。北西側でピット271と重複して南東側を壊している。南西側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は水平で、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形を呈し、規模は北西-南東方向68cm、北東-南西方向の現存長46cm、深さ8cmで、坑底面の標高は13.67mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑31 (図57)

調査区の南東壁際中央付近に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると、略円形と考えられ、底面は水平で、壁は開いて立ち上がる。断面形は逆台形を呈し、規模は南北現存長90cm、東西現存長47cm、深さ20cmで、坑底面の標高は13.66mを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) ピット

第11面では、24基を検出した。調査区全体に分布が認められるが密度は疎らで、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は確認されなかった。平面形は円形と楕円形を基調とし、規模は長径22~52cm、深さ4~39cmと径・深さともばらつきがある。

遺物は出土しなかった。

以下、礎板が据えられたピット1基と礎石が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット258 (図58)

調査区の中央北西寄りに位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認した。平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸35cm、短軸33cm、深さ14cmを測り、礎板がピット東壁寄りの底面に3枚を重ねて据えられていた。礎板の大きさは上から順に長さ19cm、幅6cm、厚さ1cm、長さ16cm、幅10cm、厚さ3cm、長さ12cm、幅5cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は13.69mである。

ピット275 (図58)

調査区の南東壁際中央に位置する。他の遺構と重複せずに単独で確認したが、南東側が調査区外へ延びているために全容を把握できなかった。検出範囲から平面形を推定すると円形と考えられ、断面形は逆台形を呈する。規模は径31cm、深さ17cmを測り、礎石がピット中央に据えられていた。礎石の大きさは長さ28cm、幅22cmを測り、上面の標高は13.84mである。

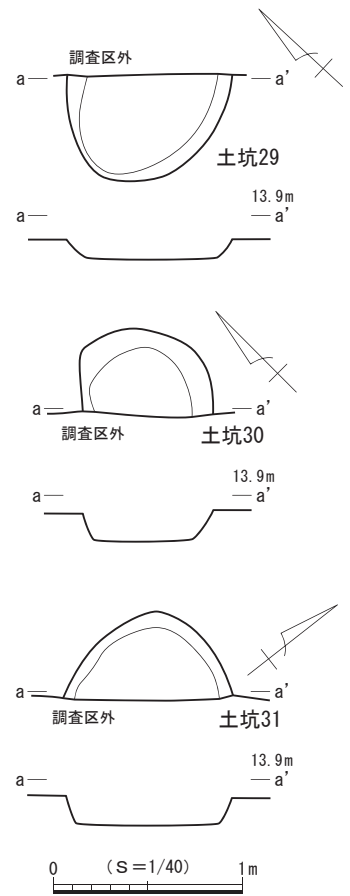


図57 第11面 土坑29~31

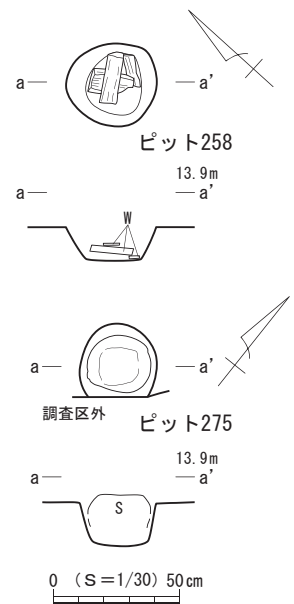


図58 第11面
ピット258・275

第四章 まとめ

今回報告する浄明寺一丁目652番8地点は「田楽辻子周辺遺跡(No.33)」の範囲内に所在する。遺跡の中では、滑川と釈迦堂川との合流地点から南西約50m付近に位置する。今回の調査では第1～11面までの合計11面で、調査面積は67㎡である。検出した遺構は、礎石建物1棟、道路状遺構1本、溝状遺構11条、井戸2基、方形土坑1基、土坑31基、ピット273基である。遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して13箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は、標高15.7～15.8mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構は井戸1基、土坑2基である。遺構群は調査区東半で検出され、遺構密度は全体にまばらである。また、調査区中央から東側にかけて、泥岩ブロックを多量に含む土層による整地面の広がり確認された。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は15世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は、標高約15.3mを測る堆積土層の6層上面で検出された。検出した遺構群は道路状遺構1本、溝状遺構1条、土坑12基、ピット22基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布しており、遺構密度としては高くはない。北東-南西方向に延びている道路状遺構の西側では、幅2.5mの空地があり、道路状遺構との関連が注意されよう。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀代に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は、標高約15.0mを測る堆積土層の8層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、土坑4基、ピット3基である。調査区北半部に広がる整地面上に遺構群が構築されていた。調査区南半は空地となっており、第2面と同様に空地の性格究明も課題となろう。本面も遺構密度は全体としては希薄である。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀初頭に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は、標高14.9～15.0mを測る堆積土層の9層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構5条、土坑1基、ピット19基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布しており、重複するものは少ない。溝状遺構は軸方位を揃えて配置しており、互いに関連性をもつものと考えられる。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は、標高約14.8mを測る堆積土層の11層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット4基であり、遺構密度は希薄である。調査区中央付近から東端部にかけて検出された礎石建物は周囲に溝を巡らせており、建物本体はさらに調査区外の東側へと延びている。また、礎石建物の外

側の整地層の上面には、貝砂の分布が認められた。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀前葉～後葉頃に属すると考えられる。

〈第6面〉

第6面の遺構は、標高約14.7mを測る堆積土層の14層上面で検出された。検出した遺構はピット23基である。調査区の北隅に集中している他では散漫な分布状況である。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第7面〉

第7面の遺構は、標高14.5～14.6mを測る堆積土層の17・18層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構1条、ピット22基である。遺構群は調査区全体に散漫に分布している。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第6面以下ということと第8面の年代観とを勘案すると、本面の遺構群は13世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第8面〉

第8面の遺構は、標高14.4～14.5mを測る堆積土層の19層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構2条、方形土坑1基、土坑3基、ピット104基である。遺構群は調査区全域に分布し、遺構密度は比較的高い。調査区中央に位置する溝10の東西には帯状の整地面の広がりも認められ、この整地面が道として機能していた可能性が高く、道・溝を基軸とした土地区画の一端が垣間みられる。

出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀初頭～前葉頃に属すると考えられる。

〈第9面〉

第9面の遺構は、標高約14.2mを測る堆積土層の20層上面で検出された。検出した遺構は土坑5基、ピット21基である。遺構群は土坑が調査区南東部にまとまり、ピットは調査区全域に散漫に分布しており、遺構密度は低い。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8面以下ということをも勘案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

〈第10面〉

第10面の遺構は、標高14.0～14.1mを測る堆積土層の21層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット31基である。遺構群は調査区の南東隅と北西隅を結んだラインよりも南側に集中している。北側は空閑地となっており、遺構密度は全体としては希薄である。

出土した遺物は極めて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8・9面以下ということをも勘案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

〈第11面〉

第11面の遺構は、標高13.8～13.9mを測る堆積土層の22層上面で検出された。検出した遺構は素掘り井戸1基、土坑3基、ピット24基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。加えて上記した6～10面、および本面では検出された遺構種とその数、遺構密度の希薄さが類似してお

り、13世紀初頭～前葉までは人的活動が活発ではない様相がうかがわれる。

出土した遺物はきわめて少なく、詳細な年代を特定することは難しいが、第8～10面以下ということをお案すると、本面の遺構群は13世紀初頭以前に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

石井 進 1989「大路・小路・辻子・辻」『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社

押木弘巳 2012「田楽辻子周辺遺跡(No.33)浄明寺一丁目556番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書28』平成23年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

手塚直樹 1990『釈迦堂田楽辻子遺跡』釈迦堂田楽辻子遺跡調査団

永田史子・齋藤修佑 a 2018「釈迦堂遺跡(No.257)浄明寺一丁目598番21地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会

永田史子・齋藤修佑 b 2018「釈迦堂遺跡(No.257)浄明寺一丁目598番35地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書34』平成29年度発掘調査報告(第5分冊) 鎌倉市教育委員会

根本志保 2014「田楽辻子周辺遺跡(No.33)浄明寺二丁目569番10」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書30』平成25年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会

馬淵和雄・岡 陽一郎ほか 2002『杉本寺周辺遺跡 二階堂字杉本912番1ほか地点発掘調査報告』杉本寺周辺遺跡発掘調査団

森 孝子 2000「田楽辻子周辺遺跡遺跡(No.33)鎌倉市浄明寺一丁目661番外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
井戸1 出土遺物 (図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.3)	(5.7)	1.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/4 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.8)	7.0	3.8	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2
3	土器	ロクロ かわらけ・大	13.3	8.5	3.6	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
4	陶器	瀬戸 天目茶碗	-	-	現 5.4	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 胎土-灰色、釉-褐~黒褐色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁~ 体部小片
5	陶器	瀬戸 卸皿	-	-	現 3.4	内面に卸目がわずかに残る 胎土: 堅緻、微砂、赤色粒、黒色粒 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁~ 体部小片
6	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.8	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 暗褐色、胎土-灰色、外面に降灰 焼成: 良好 備考: 10型式	口縁~ 体部小片
7	陶器	備前 播鉢	-	-	現 6.8	内面-10本一単位の播目 胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小石粒 色調: 褐灰色 焼成: 良好	口縁部小片

表土出土遺物 (図10)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.1	1.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.5	4.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形

第1面 遺構外出土遺物 (図11)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.0	2.1	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3
2	陶器	瀬戸 折縁深皿	(25.5)	(15.9)	7.5	底部内面中央に同心円状の櫛描文 底面一回転ヘラケズリ 胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: 胎土-黄灰白色、釉-オリーブ灰色 焼成: 良好 備考: 古瀬戸中期様式IV期	1/4

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑3 出土遺物 (図16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	11.8	7.6	3.3	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.0	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2 強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.0	3.9	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4 強
土坑5 出土遺物 (図17)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.8)	(4.0)	2.2	口唇部内外面に灯芯痕 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙灰色 焼成: 良好	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.7	1.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.1	3.6	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	4/5
4	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.6	胎土: 堅緻、小石粒、礫 色調: 褐色 焼成: 良好 備考: 3型式	口縁部小片
5	金属 製品	釘	9.0	頭部幅 0.8	頭部厚 0.5	鉄製釘 鑄造 断面方形 全体に腐食が進行 重量: 5.3g	完形

土坑9 出土遺物 (図18)

1	磁器	白磁 小皿	(6.1)	(1.9)	(1.0)	底面-ヘラケズリ 内外面-花卉状の陽刻 胎土: 精良堅緻、黒色粒 色調: 内外面-灰白色 底面-無釉 焼成: 良好	口縁~ 底部小片
---	----	----------	-------	-------	-------	---	-------------

土坑13 出土遺物 (図19)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.9	1.4	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	----

ピット出土遺物 (図21)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	5.0	1.7	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	7.0	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/4
3	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	7.3	3.5	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好 出土遺構: ビット2	1/2 強
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.6	2.0	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 出土遺構: ビット22	略完形

第2面 遺構外出土遺物 (図22・23)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.1)	(5.1)	2.2	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/2 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.2)	4.3	2.3	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/5
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.8	4.7	1.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.6	2.2	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2	4.9	1.5	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形

6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	2/3
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	1.9	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	略完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.2	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.3	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.9	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.6	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.2	1.9	口縁部内外面に灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	1.7	器形の歪み著しい 底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	6.4	3.0	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3
18	土器	ロクロ かわらけ・中	11.6	6.6	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3
19	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.2	3.4	口縁部内外面に焼成時のムラあり 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、赤色粒、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	1/2
20	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.8	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
21	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	7.4	3.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	2/3
22	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.4	3.3	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	完形
23	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	(7.9)	3.2	底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
24	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.3)	(6.8)	3.4	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/3
25	陶器	瀬戸 小壺Ⅰ類	(2.3)	-	現 3.0	胎土:堅緻、微砂、黒色粒 色調:外面~口縁部内面に施釉(オリープ灰色)、内面-灰白色 焼成:良好 備考:古瀬戸前期様式	口縁~ 肩部小片
26	陶器	瀬戸 入子	(8.7)	-	現 3.2	胎土:堅緻、微砂、赤色粒、黒色粒 色調:灰白色、内外面に降灰(オリープ灰色) 焼成:良好 備考:古瀬戸前期様式	口縁部小片
27	陶器	瀬戸 卸皿	(13.7)	(9.4)	3.6	内面-見込み部に格子状の卸目 胎土:堅緻、微砂、黒色粒 色調:灰白色、内外面に降灰(オリープ灰色) 焼成:良好 備考:古瀬戸中期様式Ⅰ期	1/4
28	陶器	常滑 壺	(11.8)	-	現 3.5	胎土:堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調:暗灰褐色 焼成:良好	口縁部小片
29	陶器	常滑 壺	-	(10.0)	現 14.6	底面-ヘラナデ、内面-指頭調整 胎土:堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調:橙色 焼成:良好	胴下半~ 底部1/3
30	陶器	常滑 広口壺大	-	-	現 7.5	胎土:堅緻、砂粒、白色粒、礫 色調:外面に降灰(灰オリープ色)、内面-暗灰褐色 焼成:良好 備考:6 a 型式	口縁~ 肩部小片
31	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.8	胎土:堅緻、白色粒、砂粒、礫 色調:暗赤褐色、口唇部内面に降灰 焼成:良好 備考:6 b ~7 形式	口縁部小片
32	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.1	胎土:堅緻、白色粒、赤色粒、砂粒、細礫 色調:にぶい赤褐色、外面-降灰(灰緑色) 焼成:良好 備考:6 b 型式	口縁部小片
33	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.0	外面-綾杉状の押印 胎土:堅緻、白色粒、砂粒、細礫 色調:外面-暗赤褐色、内面-灰黄褐色 焼成:良好	胴部小片
34	陶器	常滑 甕	-	-	現 15.8	外面-区画文状の押印 胎土:堅緻、白色粒、黒色粒、砂粒、小礫 色調:外面-緑灰色、内面-褐色 焼成:良好	胴部下半片
35	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 5.5	胎土:堅緻、微砂、白色粒、赤色粒、細礫 色調:にぶい赤褐色 焼成:良好 備考:7 ~8 型式	口縁部小片
36	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.7	胎土:堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調:外面-赤褐色、内外面に降灰(灰緑色) 焼成:良好 備考:7 ~8 型式	口縁部小片
37	陶製品	摩耗陶片	現長 6.7	現幅 4.7	厚 0.8~1.0	常滑甕の陶片を転用 陶片の周囲が摩耗 胎土:白色粒、黒色粒、小礫 色調:暗赤褐色	約完形
38	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 7.2	外面-16弁の菊花文押印 胎土:微砂、褐色粒、黒色粒、細砂 色調:黒灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部小片
39	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 8.3	外面-口唇部直下に菊花文の珠文を連続的に貼り付け、胴上半に菱文(雷文)の押印 胎土:微砂 色調:外面-黄褐色、内面-黒灰色 焼成:良好 備考:Ⅲ類	口縁部小片
40	金属 製品	天蓋?	現長 19.4	-	-	銅製品 重量:12.1 g 備考:仏像などの上にかざす笠状の装飾品の一部?	
41	金属 製品	丸釘	現長 2.0	頂部径 1.5	-	銅製品 飾り釘 重量:4.1 g	
42	金属 製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.7	厚 0.10	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-真書	完形

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構2 出土遺物(図26)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.9	1.4	口唇部内外面に灯芯痕 底面-回転糸切+ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄褐色 焼成:良好	略完形

土坑18出土遺物(図28)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	5.8	2.0	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
---	----	---------------	-------	-----	-----	---	-----

表5 第4面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構 5 出土遺物(図30)

1	陶器	常滑 甕	(22.6)	-	現 17.5	胎土: 堅緻、微砂、小礫 色調: 灰褐色、内外面に一部降灰(灰オリーブ色) 焼成: 良好 備考: 6 b 型式	口縁~ 胴部片
---	----	---------	--------	---	-----------	---	------------

溝状遺構 6 出土遺物(図32)

1	陶器	常滑 甕	(24.0)	-	現 5.6	胎土: 堅緻、微砂、白色粒 色調: 灰褐色、内外面に一部降灰(緑色) 焼成: 良好 備考: 6 a 型式	口縁部片
---	----	---------	--------	---	----------	--	------

溝状遺構 7 出土遺物(図33)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	5.2	1.8	全体に器形歪む 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	----

第4面 遺構外出土遺物(図35)

1	土器	ロクロ かわらけ・極小	4.3	3.4	0.8	コースター形 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.8)	4.0	2.5	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.4	1.6	底面一回転糸切 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2 強
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.6)	4.6	1.9	底面一回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/4 強
5	土器	ロクロ かわらけ・中	10.0	6.5	3.1	口唇部内外面に灯芯痕 口縁部やや内湾する 底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	7.6	4.7	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	6.4	3.5	底面一回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/2 弱
8	陶器	中国 褐釉壺	-	-	現 4.1	外面一対耳状の耳1カ所遺存 胎土: 緻密 色調: 胎土-灰褐色、釉-黒褐色 焼成: 良好	肩部 小破片
9	陶器	山茶碗	-	-	現 3.0	胎土: 緻密、白色粒 色調: 灰色 焼成: 良好	口縁部小片
10	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 2.6	胎土: 堅緻、白色粒 色調: 灰色 焼成: 良好	口縁部小片
11	陶器	常滑 甕	-	-	現 8.1	胎土: 堅緻、白色粒 色調: 外面-灰褐色、内面-褐灰色(一部降灰) 焼成: 良好 備考: 6 b 型式	口縁部小片
12	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 4.9	胎土: 堅緻、白色粒 色調: 外面-褐灰色、内面-褐灰色(一部降灰) 焼成: 良好 備考: 6 b 型式	口縁部小片
13	土器	土器質 火鉢	-	-	現 7.2	胎土: 砂粒、白色粒 色調: 灰色 焼成: 良好 備考: 1 b 類	口縁部小片
14	金属 製品	六器	-	高台径 3.6	現 0.5	銅製品 内面見込み部に円形の稜線を有する 重量: 9.6 g	高台部遺存
15	金属 製品	銭貨	直径 2.50	孔径 0.71	厚 0.15	銭銘-景祐元寶(北宋・1034) 書体-篆書	完形

表6 第5面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第5面 遺構外出土遺物(図38)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.1	1.8	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底一強いナデ 胎土: 微砂、雲母、白色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(7.4)	3.6	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3
4	磁器	青磁 皿	-	高台径 (11.8)	現 3.8	内面一魚の貼付文 胎土: 精良堅緻 色調: 釉-明緑灰色、断面-灰白色 焼成: 良好 備考: 龍泉窯系青磁坏皿-c 類	高台部小片

表7 第6面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

第6面 遺構外出土遺物(図40)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.0	1.6	底面一回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-----

第6面 構成土出土遺物(図41)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(9.2)	(7.5)	1.4	底面一ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3
2	土器	手づくね かわらけ・大	(13.3)	-	3.5	底面一ヘラナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/3
3	土器	ロクロ かわらけ	-	6.8	現 1.7	底部は台状形態 底面一回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、石英粒、小石粒、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	底部遺存
4	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	7.8	3.2	底面一回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・中	11.5~ 12.0	7.8~8.1	3.4	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形

6	陶器	渥美鉢	(26.0)	-	現5.7	胎土：堅緻、白色粒、黒色粒、小石粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：2b型式	口縁部小片
7	陶器	常滑甕	-	-	現6.0	胎土：堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調：黄灰色、内外面に一部降灰(オリーブ灰色) 焼成：良好 備考：4型式	口縁部小片
8	角製品	養子	一辺0.8~0.9	-	-	色調：灰白色、目-暗灰色 重量：0.6g 備考：焼けた可能性大、シカの角を素材とする	略完形
9	石製品	勾玉	長3.8	幅1.4	厚0.5	石材-滑石製 色調：暗オリーブ色 重量：6.7g 備考：古墳時代中期、5世紀代	完形

表8 第8面 出土遺物観察表

質量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	質量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

方形土坑1 出土遺物 (図47)

1	土器	手づくねかわらけ・小	8.7~9.1	-	2.0	底面-ナデ 胎土：雲母、白色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調：灰黄色 焼成：良好	完形
---	----	------------	---------	---	-----	--	----

第8面 遺構外出土遺物 (図49)

1	土器	白かわらけ・小	(7.2)	-	1.0	コースター形 成形-手づくね 底面-ナデ 胎土：微砂、黒色微粒、良土 色調：淡黄白色 焼成：良好	1/3弱
2	土器	手づくねかわらけ・大	13.0~13.3	-	3.3	底部外面に煤付着 底面-ナデ 胎土：微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：黄橙色 焼成：良好	完形
3	土器	手づくねかわらけ・大	13.3~13.9	-	3.6	器形の歪み顕著 底面-ナデ 胎土：赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調：淡橙色 焼成：良好	完形
4	磁器	青磁碗	-	-	現2.8	内面-藍刻 胎土：精良堅緻、白色粒、黒色微粒 色調：胎土-黄灰色、釉-明灰オリーブ色、内外面に小貫入 焼成：良好 備考：同安窯系青磁碗	口縁部小片
5	磁器	青磁碗	-	-	現6.3	内面-藍刻 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-白灰黄色、釉-にぶい黄褐色、内外面に小貫入 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-4類	口縁~体部小片
6	磁器	青磁碗	-	-	現2.3	内面-割花文 胎土：精良堅緻 色調：胎土-灰色、釉-オリーブ灰色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-3類	体部小片
7	陶器	渥美鉢	-	-	現4.5	胎土：微砂、白色粒 色調：暗黒灰色 焼成：良好 備考：2b型式	口縁部小片
8	陶器	山皿	(7.8)	-	現1.8	胎土：微砂、白色粒、硬質 色調：暗黒灰色 焼成：良好	口縁部小片
9	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現8.8	胎土：白色粒、細礫 色調：灰黄褐色 焼成：良好	口縁~体部片
10	瓦	平瓦	現長11.9	現幅12.7	厚1.8~2.0	凹面-側縁平行の縄叩き+ナデ 凸面-側縁平行の縄叩き+ヘラナデ 胎土：雲母、砂粒、細礫 色調：灰黄色 焼成：良好	破片

第8面 構成土出土遺物 (図50)

1	土器	ロクロかわらけ・中	(11.6)	(7.7)	3.3	内面見込み部に渦巻き状の痕跡 底面-回転糸切 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/4
2	陶器	瀬戸平碗	-	高台径4.8	現1.6	高台-削り出し 胎土：堅緻、黒色微粒 色調：外面-黄灰色、内面施釉-明緑灰色 焼成：良好 備考：古瀬戸中期様式	高台部遺存
3	角製品	琴柱形	現長3.0	最大幅2.7	厚1.0	シカの角を素材とする	一部欠損

表9 遺構計測表

() = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
井戸1	第1面	170	164	<120>	ピット16	第2面	35	31	9	ピット35	第4面	51	<35>	7
土坑1	第1面	105	<81>	44	ピット17	第2面	<30>	27	8	ピット36	第4面	39	38	27
土坑2	第1面	136	<49>	136	ピット18	第2面	<40>	29	14	ピット37	第4面	26	-	24
道路状遺構1	第2面	625	210~270	40	ピット19	第2面	45	30	-	ピット38	第4面	29	-	13
溝状遺構1	第2面	<250>	32~53	15	ピット20	第2面	35	34	4	ピット39	第4面	27	24	7
土坑3	第2面	<64>	68	15	ピット21	第2面	33	-	19	ピット40	第4面	28	24	16
土坑4	第2面	<61>	<44>	11	ピット22	第2面	54	<48>	27	ピット41	第4面	27	24	22
土坑5	第2面	<132>	<81>	22	溝状遺構2	第3面	<80/95/580>	18~44	6~18	ピット42	第4面	21	16	7
土坑6	第2面	<105>	<83>	29	溝状遺構3	第3面	<220>	24~30	5~10	ピット43	第4面	40	<25>	9
土坑7	第2面	80	65	13	土坑15	第3面	<60>	<17>	15	ピット44	第4面	<33>	<23>	40
土坑8	第2面	132	56	21	土坑16	第3面	<67>	<13>	45	礎石建物1	第5面	<550>	<210>	2~22
土坑9	第2面	84	71	16	土坑17	第3面	<77>	<54>	27	ピット45	第5面	42	37	28
土坑10	第2面	61	52	15	土坑18	第3面	<78>	<57>	16	ピット46	第5面	31	28	17
土坑11	第2面	<78>	38	17	ピット23	第3面	41	<26>	15	ピット47	第5面	20	17	17
土坑12	第2面	142	102	25	ピット24	第3面	<43>	<37>	-	ピット48	第5面	23	22	22
土坑13	第2面	<52>	60	21	ピット25	第3面	<40>	<31>	-	ピット50	第6面	<33>	<6>	9
土坑14	第2面	<110>	<46>	27	溝状遺構4	第4面	<120>	27	12	ピット51	第6面	<30>	<7>	7
ピット1	第2面	37	33	7	溝状遺構5	第4面	<600>	36~95	5~14	ピット52	第6面	29	28	6
ピット2	第2面	42	34	7	溝状遺構6	第4面	<620>	15~44	5~13	ピット53	第6面	34	30	10
ピット3	第2面	35	32	7	溝状遺構7	第4面	<280>	34~53	10~18	ピット54	第6面	27	25	20
ピット4	第2面	48	44	10	溝状遺構8	第4面	<460>	23~35	8	ピット55	第6面	34	23	36
ピット5	第2面	33	22	9	土坑19	第4面	64	55	16	ピット56	第6面	<29>	<21>	14
ピット6	第2面	<31>	<25>	5	ピット26	第4面	<25>	23	15	ピット57	第6面	<44>	<27>	14
ピット7	第2面	53	<45>	21	ピット27	第4面	25	22	15	ピット58	第6面	25	24	13
ピット8	第2面	33	30	10	ピット28	第4面	40	31	23	ピット59	第6面	28	22	14
ピット9	第2面	<47>	38	9	ピット29	第4面	53	34	19	ピット60	第6面	23	21	12
ピット10	第2面	<34>	31	8	ピット30	第4面	28	26	16	ピット61	第6面	40	29	27
ピット11	第2面	44	<42>	25	ピット31	第4面	49	37	16	ピット62	第6面	25	18	19
ピット12	第2面	46	31	19	ピット32	第4面	19	18	7	ピット63	第6面	34	27	19
ピット13	第2面	29	21	15	ピット33	第4面	32	26	11	ピット64	第6面	25	21	9
ピット14	第2面	34	31	12	ピット34	第4面	<37>	27	12	ピット65	第6面	20	13	11
ピット15	第2面	44	<36>	13						ピット66	第6面	29	27	11

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ピット 67	第6面	39	34	13	ピット 136	第8面	55	21	12	ピット 207	第9面	31	(9)	8
ピット 68	第6面	8	7	14	ピット 137	第8面	39	35	15	ピット 208	第9面	16	14	10
ピット 69	第6面	26	22	9	ピット 138	第8面	28	21	15	ピット 209	第9面	50	36	19
ピット 70	第6面	35	27	17	ピット 139	第8面	33	-	13	ピット 210	第9面	13	11	26
ピット 71	第6面	30	25	14	ピット 140	第8面	51	51	13	ピット 211	第9面	24	(14)	7
ピット 72	第6面	12	10	9	ピット 141	第8面	29	27	35	ピット 212	第9面	34	26	9
溝状遺構 9	第7面	(200)	12~21	3~8	ピット 142	第8面	20	19	13	ピット 213	第9面	27	25	35
ピット 73	第7面	15	14	4	ピット 143	第8面	24	21	24	ピット 214	第9面	9	8	3
ピット 74	第7面	26	25	13	ピット 145	第8面	29	(15)	9	ピット 215	第9面	7	-	6
ピット 75	第7面	28	26	8	ピット 146	第8面	30	20	6	ピット 216	第9面	28	(21)	-
ピット 77	第7面	35	31	41	ピット 147	第8面	25	23	40	ピット 217	第9面	28	26	42
ピット 78	第7面	58	26	9	ピット 148	第8面	26	22	16	ピット 218	第9面	20	18	52
ピット 79	第7面	30	24	8	ピット 149	第8面	(27)	(27)	20	ピット 219	第9面	36	31	17
ピット 80	第7面	41	33	40	ピット 150	第8面	44	23	29	ピット 220	第9面	35	(13)	13
ピット 81	第7面	34	(31)	8	ピット 151	第8面	21	18	50	ピット 221	第9面	26	(10)	49
ピット 82	第7面	39	36	46	ピット 152	第8面	29	24	44	土坑 28	第10面	61	60	23
ピット 83	第7面	34	31	18	ピット 153	第8面	50	(45)	31	ピット 222	第10面	16	-	17
ピット 84	第7面	51	35	10	ピット 154	第8面	(46)	(36)	12	ピット 223	第10面	15	-	13
ピット 85	第7面	(56)	27	5	ピット 155	第8面	33	27	38	ピット 224	第10面	25	23	12
ピット 86	第7面	32	30	14	ピット 156	第8面	35	(29)	28	ピット 225	第10面	41	35	21
ピット 87	第7面	29	26	15	ピット 157	第8面	44	35	40	ピット 226	第10面	31	-	25
ピット 88	第7面	9	8	7	ピット 158	第8面	43	30	52	ピット 227	第10面	35	33	14
ピット 89	第7面	39	26	9	ピット 159	第8面	38	35	21	ピット 228	第10面	32	28	5
ピット 90	第7面	49	32	35	ピット 160	第8面	32	29	16	ピット 229	第10面	24	22	16
ピット 91	第7面	欠番			ピット 161	第8面	27	-	40	ピット 230	第10面	38	27	39
ピット 92	第7面	23	21	10	ピット 162	第8面	52	36	27	ピット 231	第10面	56	27	12
ピット 93	第7面	42	(25)	28	ピット 163	第8面	38	34	37	ピット 232	第10面	27	21	12
ピット 94	第7面	(22)	(7)	8	ピット 164	第8面	23	17	-	ピット 233	第10面	46	42	18
ピット 95	第7面	41	(21)	23	ピット 165	第8面	38	35	42	ピット 234	第10面	21	18	7
溝状遺構 10	第8面	(230)	12~21	8	ピット 166	第8面	39	31	33	ピット 235	第10面	18	16	7
溝状遺構 11	第8面	(80)	16~20	3	ピット 167	第8面	(28)	(13)	23	ピット 236	第10面	22	20	14
方形土坑 1	第8面	167	116	43	ピット 168	第8面	23	18	29	ピット 237	第10面	27	25	21
土坑 20	第8面	90	85	31	ピット 169	第8面	37	36	48	ピット 238	第10面	27	26	12
土坑 21	第8面	85	70	23	ピット 170	第8面	36	(15)	7	ピット 239	第10面	27	-	9
土坑 22	第8面	123	61	29	ピット 171	第8面	25	21	38	ピット 240	第10面	30	28	19
ピット 96	第8面	(20)	(6)	3	ピット 172	第8面	18	16	6	ピット 241	第10面	33	30	23
ピット 97	第8面	(17)	(13)	12	ピット 173	第8面	37	26	13	ピット 242	第10面	22	20	11
ピット 98	第8面	(22)	(9)	8	ピット 174	第8面	(26)	(7)	7	ピット 243	第10面	27	23	32
ピット 99	第8面	20	15	3	ピット 175	第8面	20	13	5	ピット 244	第10面	28	21	20
ピット 100	第8面	(41)	(21)	6	ピット 176	第8面	13	10	21	ピット 245	第10面	38	24	38
ピット 101	第8面	16	14	24	ピット 177	第8面	21	17	15	ピット 246	第10面	25	24	15
ピット 102	第8面	25	16	17	ピット 178	第8面	8	7	5	ピット 247	第10面	27	24	33
ピット 103	第8面	28	24	11	ピット 179	第8面	4	3	4	ピット 248	第10面	27	26	20
ピット 104	第8面	7	-	9	ピット 180	第8面	51	31	14	ピット 249	第10面	27	26	15
ピット 105	第8面	27	26	15	ピット 181	第8面	7	6	6	ピット 250	第10面	25	18	21
ピット 106	第8面	15	10	10	ピット 182	第8面	7	-	9	ピット 251	第10面	28	24	22
ピット 107	第8面	32	(27)	14	ピット 183	第8面	46	34	10	ピット 252	第10面	40	27	33
ピット 108	第8面	33	22	50	ピット 184	第8面	19	(14)	11	井戸 2	第11面	237	(131)	(54)
ピット 109	第8面	(40)	28	37	ピット 185	第8面	34	31	36	土坑 29	第11面	(84)	(58)	7
ピット 110	第8面	49	45	38	ピット 186	第8面	35	31	11	土坑 30	第11面	68	(46)	8
ピット 111	第8面	(35)	(24)	6	ピット 187	第8面	29	23	14	土坑 31	第11面	(90)	(47)	20
ピット 112	第8面	37	34	45	ピット 188	第8面	10	(7)	5	ピット 253	第11面	33	29	7
ピット 113	第8面	21	17	-	ピット 189	第8面	9	-	4	ピット 254	第11面	30	29	8
ピット 114	第8面	19	16	8	ピット 190	第8面	11	10	5	ピット 255	第11面	34	29	20
ピット 115	第8面	18	13	30	ピット 191	第8面	8	-	3	ピット 256	第11面	34	29	21
ピット 116	第8面	(47)	(27)	14	ピット 192	第8面	8	-	4	ピット 257	第11面	35	30	7
ピット 117	第8面	27	29	51	ピット 193	第8面	8	-	9	ピット 258	第11面	35	33	14
ピット 118	第8面	10	-	11	ピット 194	第8面	15	13	19	ピット 259	第11面	32	31	10
ピット 119	第8面	20	-	16	ピット 195	第8面	21	20	13	ピット 260	第11面	31	29	10
ピット 120	第8面	25	22	17	ピット 196	第8面	22	14	4	ピット 261	第11面	37	34	7
ピット 121	第8面	43	32	20	ピット 197	第8面	51	41	15	ピット 262	第11面	34	31	13
ピット 122	第8面	17	12	5	ピット 198	第8面	49	38	15	ピット 263	第11面	43	37	24
ピット 123	第8面	(23)	19	11	ピット 199	第8面	20	10	10	ピット 264	第11面	40	38	12
ピット 124	第8面	18	13	6	ピット 200	第8面	28	25	8	ピット 265	第11面	(39)	32	11
ピット 125	第8面	35	30	32	土坑 23	第9面	77	44	33	ピット 266	第11面	28	24	11
ピット 126	第8面	23	15	14	土坑 24	第9面	144	(80)	21	ピット 267	第11面	22	-	39
ピット 127	第8面	15	14	30	土坑 25	第9面	92	(57)	25	ピット 268	第11面	(47)	42	26
ピット 128	第8面	22	21	14	土坑 26	第9面	150	70	27	ピット 269	第11面	33	32	28
ピット 129	第8面	42	35	57	土坑 27	第9面	121	(48)	19	ピット 270	第11面	31	27	4
ピット 130	第8面	25	21	16	ピット 201	第9面	25	(9)	9	ピット 271	第11面	41	(38)	10
ピット 131	第8面	50	(37)	53	ピット 202	第9面	15	13	11	ピット 272	第11面	22	21	9
ピット 132	第8面	27	26	16	ピット 203	第9面	47	38	12	ピット 273	第11面	36	25	17
ピット 133	第8面	11	10	8	ピット 204	第9面	47	38	31	ピット 274	第11面	41	(17)	15
ピット 134	第8面	19	18	18	ピット 205	第9面	30	28	22	ピット 275	第11面	31	(30)	17
ピット 135	第8面	21	20	11	ピット 206	第9面	40	24	24	ピット 276	第11面	52	48	31

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。また、深さは柱穴掘り方の深さを記載している。

表10 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数	【石製品】			【金属製品】		
【かわらけ】			滑石鍋	1	銭貨			
	かわらけ ロクロ成形	17	【土師器】			合計 45		
【白磁】			甍			土坑11		
	碗	1	【金属製品】			【かわらけ】		
【陶器】			銭貨			かわらけ ロクロ成形		
瀬戸	折縁深皿	2	合計 244			合計 3		
常滑	甍	2	第2面			土坑13		
備前	片口鉢Ⅱ類	2	道路状遺構1			【かわらけ】		
備前	播鉢	1	産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形		
【瓦質土器】			【かわらけ】			【陶器】		
	火鉢	1	かわらけ ロクロ成形			合計 10		
【金属製品】			【陶器】			土坑14		
	銭貨	1	かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
合計 27			常滑 甍			かわらけ ロクロ成形		
第1面			合計 14			【陶器】		
井戸1			合計 244			常滑 甍		
産地 器種 破片数			土坑3			合計 10		
【かわらけ】			産地 器種 破片数			土坑14		
	かわらけ ロクロ成形	1	【かわらけ】			産地 器種 破片数		
【陶器】			かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
瀬戸	天目茶碗	2	合計 23			かわらけ ロクロ成形		
瀬戸	折縁深皿	1	土坑4			【陶器】		
常滑	甍	5	産地 器種 破片数			【陶器】		
【瓦質土器】			【かわらけ】			常滑 甍		
	火鉢	2	かわらけ ロクロ成形			合計 41		
【瓦】			合計 3			土坑14		
	丸瓦	1	土坑5			【かわらけ】		
	平瓦	1	産地 器種 破片数			【陶器】		
【金属製品】			【かわらけ】			産地 器種 破片数		
	釘	3	かわらけ ロクロ成形			【かわらけ】		
合計 16			合計 57			かわらけ ロクロ成形		
井戸1 掘り方			【陶器】			合計 3		
産地 器種 破片数			中国 褐釉陶器			産地 器種 破片数		
【かわらけ】			常滑 甍			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	28	常滑 片口鉢Ⅰ類			産地 器種 破片数		
【青白磁】			常滑 片口鉢Ⅱ類			【かわらけ】		
	梅瓶	1	【石製品】			かわらけ ロクロ成形		
【陶器】			砥石			【陶器】		
瀬戸	鉢	1	【金属製品】			産地 器種 破片数		
瀬戸	卸皿	1	釘			【かわらけ】		
常滑	甍	10	合計 65			かわらけ ロクロ成形		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	土坑6			【陶器】		
山茶碗窯	碗	1	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
備前	播鉢	1	【かわらけ】			【陶器】		
合計 44			かわらけ ロクロ成形			【陶器】		
土坑2			常滑 甍			産地 器種 破片数		
産地 器種 破片数			常滑 甍			【かわらけ】		
【かわらけ】			【金属製品】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4	器種不明			かわらけ ロクロ成形		
【陶器】			合計 26			【陶器】		
常滑	甍	3	土坑8			産地 器種 破片数		
合計 7			産地 器種 破片数			【かわらけ】		
第1面 遺構外			【かわらけ】			【陶器】		
産地 器種 破片数			かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
【かわらけ】			【陶器】			【土製品】		
	かわらけ ロクロ成形	177	常滑 甍			ふいごの羽口		
	かわらけ 手づくね成形	47	合計 14			合計 4		
【青磁】			土坑9			産地 器種 破片数		
龍泉窯系	折縁皿	1	産地 器種 破片数			【かわらけ】		
【陶器】			【かわらけ】			【陶器】		
瀬戸	折縁深皿	3	かわらけ ロクロ成形			常滑 甍		
瀬戸	甍	4	【白磁】			【土製品】		
常滑	壺	1	小皿			合計 1		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1	【青磁】			産地 器種 破片数		
常滑	片口鉢Ⅱ類	3	龍泉窯系 碗Ⅱ類			【かわらけ】		
【瓦】			【陶器】			【かわらけ】		
	平瓦	1	常滑 甍			かわらけ ロクロ成形		
合計 1			合計 2			合計 5		

【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 7

ピット16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
【青磁】		
	折縁皿	1
【陶器】		
常滑	甕	3
【金属製品】		
	釘	1
		合計 25

ピット19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
		合計 2

ピット20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 3

ピット22		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	34
		合計 34

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1,375
【白磁】		
	小壺Ⅰ類	1
	香炉	1
	皿Ⅸ類	4
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2
	碗Ⅱ類	4
	盤	3
	折縁皿	4
	碗	1
	器種不明	16
【青白磁】		
	梅瓶	5
【陶器】		
中国	褐釉陶器	5
瀬戸	小壺Ⅰ類	5
	入子	3
	折縁深皿	3
	卸皿	5
渥美	甕	5
	壺	1
常滑	甕	220
	壺	3
	片口鉢Ⅰ類	10
	片口鉢Ⅱ類	7
	摩耗陶片	1
亀山	甕	1
備前	播鉢	1
【土器】		
	火鉢	5
	南伊勢系鍋	2
	焙烙	4

【瓦質土器】		
	瓦器碗	2
	火鉢	25
	器種不明	1
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	滑石鍋	2
【土製品】		
	ふいごの羽口	1
【金属製品】		
	銭貨	13
	銭貨塊(枚数不明)	3
	釘	15
	天蓋	1
		合計 1,761

第3面		
溝状遺構2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	12
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
常滑	甕	3
		合計 17

溝状遺構3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
		合計 1

土坑16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
		合計 6

土坑18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
【金属製品】		
	釘	2
		合計 5

ピット25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	6
【陶器】		
瀬戸	器種不明	1
渥美	皿	1
常滑	甕	2
		合計 10

第4面		
溝状遺構5		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 2

溝状遺構6		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	1
		合計 3

溝状遺構7		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	8
【陶器】		
瀬戸	皿	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	2
山茶碗窯	碗	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
		合計 13

溝状遺構8		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ピット26		
産地	器種	破片数
【青白磁】		
	梅瓶	1
		合計 1

ピット38		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
		合計 3

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	220
	かわらけ 手づくね成形	2
【白磁】		
	合子(蓋)	1
	水注	1
	碗	1
	皿	2
	皿Ⅸ類	4
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	23
	碗Ⅱ類	7
	輪花碗	1
	折縁皿	5
	器種不明	5
【青白磁】		
	梅瓶	9

【陶器】		
中国	褐釉壺	2
	壺	7
	入子	1
渥美	卸皿	1
	甕	1
常滑	甕	87
	片口鉢Ⅰ類	4
	片口鉢Ⅱ類	3
	玉縁壺	1
山茶碗窯	碗	1
産地不明	壺	1
【土器】		
	火鉢	5

【瓦質土器】		
火鉢		4
【瓦】		
平瓦		1
【石製品】		
硯		1
滑石製スタンプ		1
【金属製品】		
銭貨		3
釘		9
六器		1
合計		415

第4面 排水溝		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	14
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
	器種不明	1
【青白磁】		
	皿	3
合計		19

第5面		
礎石建物1溝		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	14
合計		14

礎石建物1ピット9		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	2
合計		2

礎石建物1ピット12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

ピット45		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
合計		1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	24
かわらけ	手づくね成形	1
【白磁】		
	壺	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	6
	坏Ⅲ類	1
	鉢	3
	器種不明	1
【青白磁】		
	梅瓶	3
	香炉	1
	水注	1
【陶器】		
常滑	甕	9
	片口鉢Ⅰ類	9
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		64

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	8
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
常滑	甕	1
山茶碗窯	碗	1
【石製品】		
	砥石	1
合計		12

第6面		
ピット55		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
合計		3

第6面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	54
かわらけ	手づくね成形	12
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
	器種不明	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
常滑	甕	2
	片口鉢Ⅰ類	1
	摩耗陶片	1

【瓦質土器】		
	碗	1
【土師器】		
	坏	1
	器種不明	2
合計		78

第6面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	13
かわらけ	手づくね成形	5
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1

【青白磁】		
	合子	1
【陶器】		
渥美	鉢	1
常滑	甕	1
【土師器】		
	坏	1

【瓦】		
	軒平瓦	1
【骨製品】		
	賽子	1
【石製品】		
	勾玉	1
【金属製品】		
	器種不明(銅製品)	1
合計		27

第7面		
ピット81		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

ピット86		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	1
合計		2

ピット88		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	1
合計		2

ピット89		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
合計		1

第8面		
方形土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	1
かわらけ	手づくね成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
	器種不明	1
合計		7

溝状遺構11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	ロクロ成形	3
合計		3

ピット118		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット125		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット127		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット150		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
かわらけ	手づくね成形	1
合計		1

ピット160		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	坏	1
合計		1

第8面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
白かわらけ	手づくね成形	1
かわらけ	ロクロ成形	8
かわらけ	手づくね成形	62
【青磁】		
同安窯系	碗	1
龍泉窯系	碗Ⅰ類	4
【陶器】		
渥美	鉢	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	1
産地不明	山皿	1
	器種不明	1

【瓦】		
	平瓦	3
【石製品】		
	砥石	1
	滑石鍋	1
【金属製品】		
	釘	4
合計		90

第8面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ 手づくね成形	1
	かわらけ ロクロ成形	76
	かわらけ 手づくね成形	195
【白磁】		
	壺	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	5
	碗Ⅱ類	1
	器種不明	1
【青白磁】		
	皿	3
【陶器】		
常滑	甍	6
	片口鉢Ⅰ類	4
	器種不明	1
瀬戸	平碗	1
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	1
	滑石鍋	1
	器種不明	1
【土師器】		
	甍	1
【須恵器】		
	甍	3
【骨製品】		
	琴柱形製品	1
【金属製品】		
	釘	3
	埴塼	1
	鉄滓	1
		合計 309

第9面		
土坑23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
		合計 1
土坑24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	5
		合計 5
ピット204		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	4
		合計 4
ピット209		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
		合計 2
ピット211		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
		合計 1
第9面 遺構外		
産地	器種	破片数
【白磁】		
	碗	1
		合計 1

第10面		
第10面 遺構外		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	器種不明	2
【木製品】		
	漆器(器種不明)	3
		合計 5
第10面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
	かわらけ 手づくね成形	6
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	3
	水注	1
【骨製品】		
	器種不明	1
		合計 15
第11面		
第11面 遺構外		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	坏	1
	甍	1
	器種不明	2
		合計 4



1. 調査地点近景(南から)



2. 調査区南東壁土層断面(北西から)

図版 2



1. 第1面全景(北西から)



2. 第2面全景(北西から)



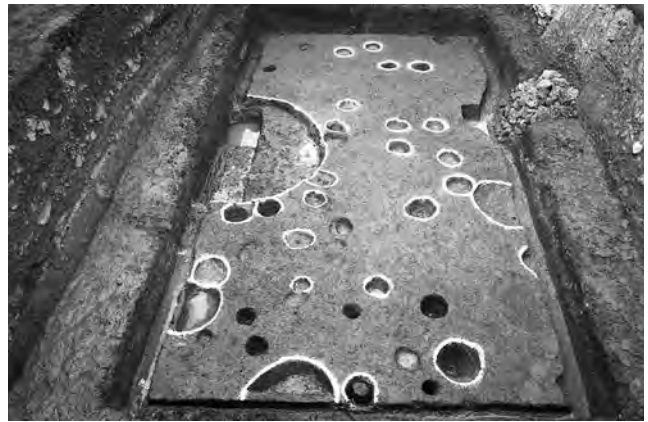
3. 第8面全景(南東から)



4. 第9面全景(南東から)



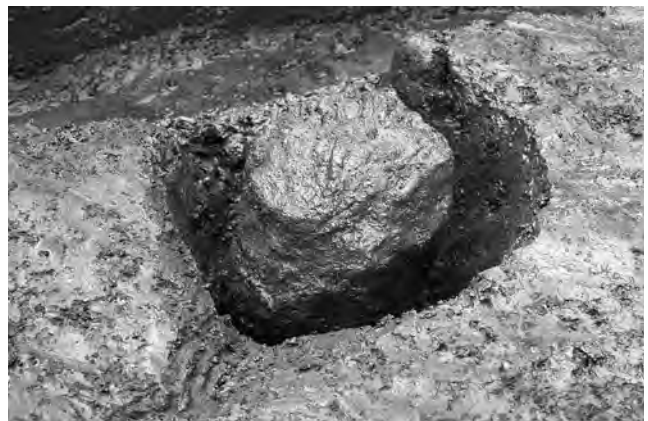
5. 第10面全景(南東から)



6. 第11面全景(南東から)



7. 第11面 ピット258(北東から)



8. 第11面 ピット275(北から)

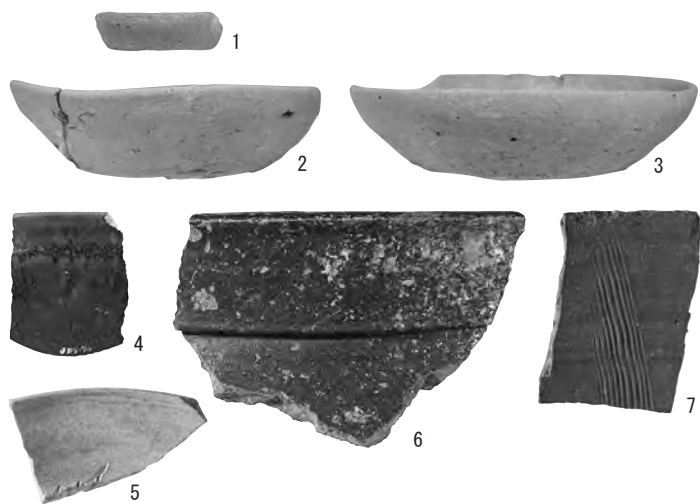


1. 第3面全景(南東から)



2. 第5面全景(南東から)

図版 4



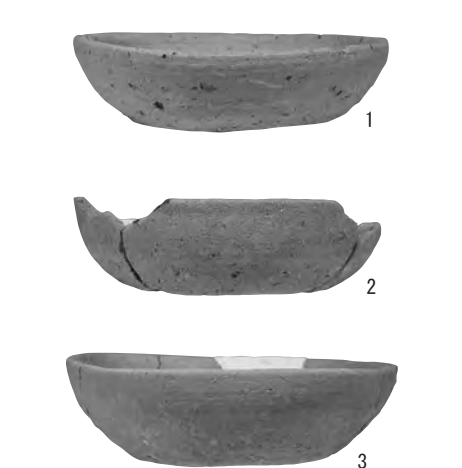
1. 第1面 井戸1出土遺物



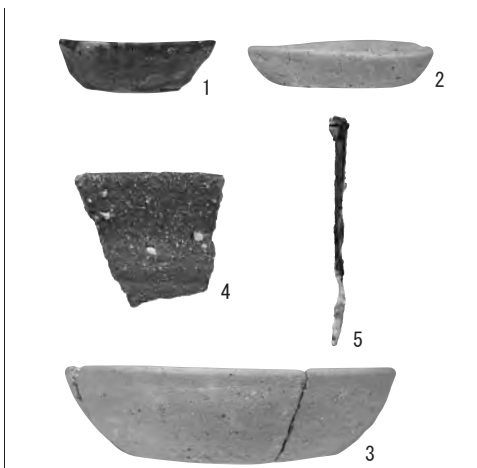
3. 第1面 遺構外出土遺物



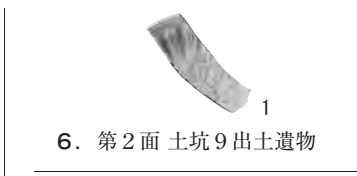
2. 表土出土遺物



4. 第2面 土坑3出土遺物



5. 第2面 土坑5出土遺物



6. 第2面 土坑9出土遺物



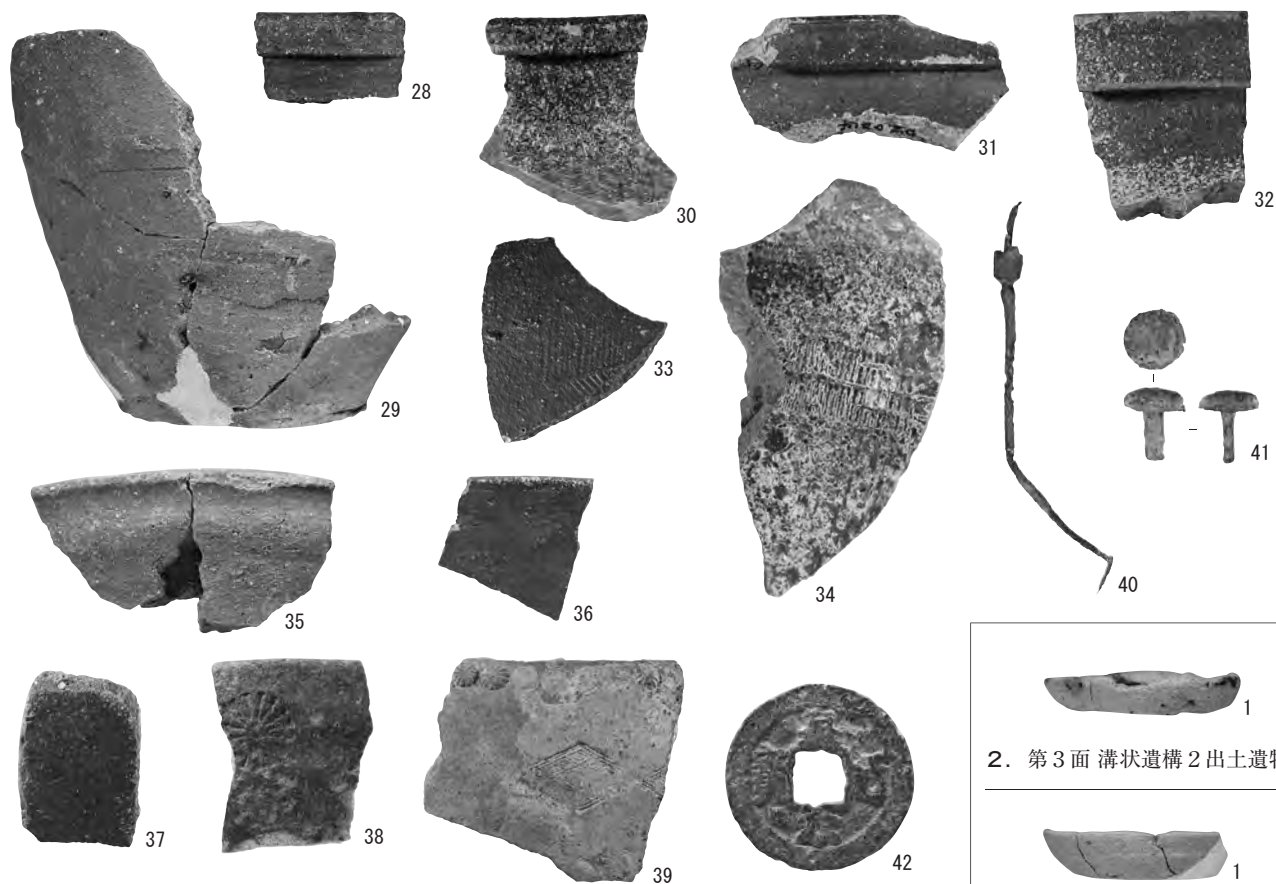
7. 第2面 土坑13出土遺物



8. 第2面 ビット出土遺物



9. 第2面 遺構外出土遺物(1)



1. 第2面 遺構外出土遺物(2)

2. 第3面 溝状遺構2出土遺物

3. 第3面 土坑18出土遺物



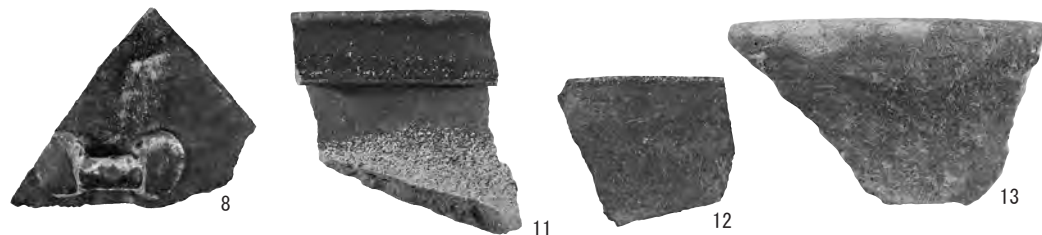
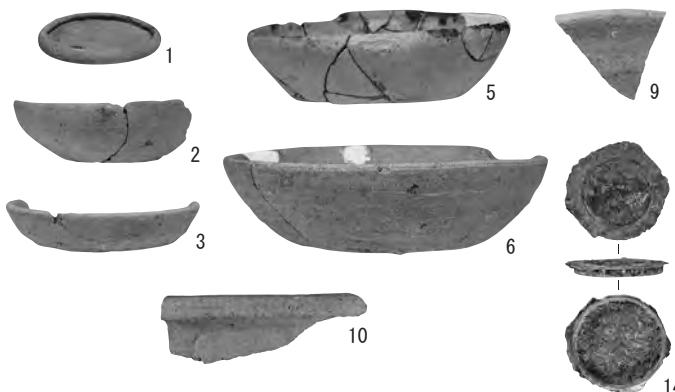
4. 第4面 溝状遺構5出土遺物



5. 第4面 溝状遺構6出土遺物



6. 第4面 溝状遺構7出土遺物



7. 第4面 遺構外出土遺物



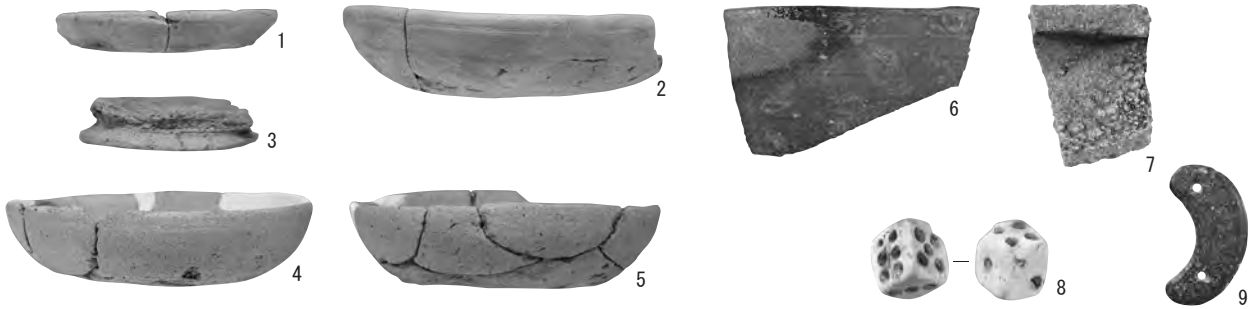
图版 6



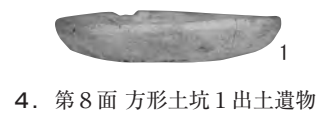
1. 第5面 遺構外出土遺物



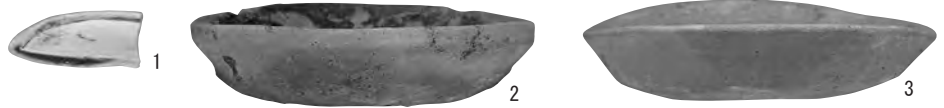
2. 第6面 遺構外出土遺物



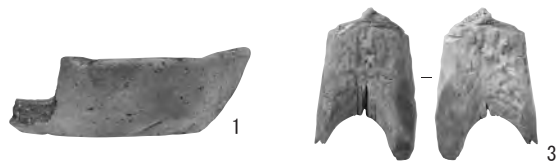
3. 第6面 構成土出土遺物



4. 第8面 方形土坑1 出土遺物



5. 第8面 遺構外出土遺物



6. 第8面 構成土出土遺物

名越ヶ谷遺跡 (No.231)

大町六丁目1708番23外地点

例 言

1. 本報は「名越ヶ谷遺跡」（神奈川県遺跡台帳No231）内、大町六丁目1708番23外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成22年5月14日～同年6月30日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約21㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 森 孝子
調 査 員 赤堀祐子・平山千絵
作 業 員 金丸義一・赤坂 進・永井隆三郎・根市真古人・倉澤六郎
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 本報に掲載した写真は、遺構を森 孝子、遺物を赤間和重が撮影した。
6. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
7. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
8. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「NG1002」とした。
9. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
10. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲
遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
11. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
12. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本品子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	247
第1節 調査に至る経緯と経過	247
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	247
第3節 周辺の考古学的調査	248
第二章 堆積土層	252
第三章 発見された遺構と遺物	253
第1節 第1面の遺構と遺物	253
第2節 第2面の遺構と遺物	253
第3節 第3面の遺構と遺物	255
第4節 第4面の遺構と遺物	258
第5節 第5面の遺構と遺物	260
第四章 まとめ	262

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	249	図13 第3面 かわらけ溜まり1出土遺物	257
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	250	図14 第3面 ピット出土遺物	258
図3 調査区位置図	251	図15 第3面 構成土出土遺物	258
図4 調査区配置図	251	図16 第4面 遺構分布図	258
図5 I・II区東壁 土層断面図	252	図17 第4面 土坑1	259
図6 第1面 遺構分布図	253	図18 第4面 土坑1出土遺物	259
図7 第2面 遺構分布図	254	図19 第4面 ピット19・20・22・27	259
図8 第2面 礎石建物1	254	図20 第4面 構成土出土遺物	260
図9 第2面 構成土出土遺物	254	図21 第5面 遺構分布図	261
図10 第3面 遺構分布図	255	図22 第5面 土坑2・3	261
図11 第3面 溝状遺構1	255	図23 第5面 土坑3出土遺物	261
図12 第3面 かわらけ溜まり1	256	図24 第5面 ピット31・33	262

表 目 次

表 1	名越ヶ谷遺跡 調査地点一覧……………	248	表 5	第 5 面 出土遺物観察表 ……………	266
表 2	第 2 面 出土遺物観察表 ……………	264	表 6	遺構計測表 ……………	266
表 3	第 3 面 出土遺物観察表 ……………	264	表 7	出土遺物一覧表 ……………	266
表 4	第 4 面 出土遺物観察表 ……………	265			

図 版 目 次

図版 1	1. 調査地点近景(北東から)……………	269	6. II区第4面全景(北から)……………	271	
	2. I区東壁土層断面(西から)……………	269	7. I区第5面全景(南から)……………	271	
図版 2	1. II区東壁土層断面(西から)……………	270	8. II区第5面全景(南から)……………	271	
	2. II区第3面全景、かわらけ溜まり1 (北から)……………	270	図版 4	1. 第2面 構成土出土遺物……………	272
図版 3	1. II区第1面全景(南から)……………	271		2. 第3面 かわらけ溜まり1 出土遺物 ……………	272
	2. I区第2面 礎石建物1 礎石1・4 (南から)……………	271		3. 第3面 ピット出土遺物……………	272
	3. II区第2面 礎石建物1 礎石2 (南から)……………	271		4. 第3面 構成土出土遺物……………	272
	4. I区第3面全景(南から)……………	271		5. 第4面 土坑1 出土遺物……………	272
	5. I区第4面全景(南から)……………	271		6. 第4面 構成土出土遺物……………	272
				7. 第5面 土坑3 出土遺物……………	272

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市大町六丁目1708番23外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である名越ヶ谷遺跡（神奈川県遺跡台帳No231）の範囲内にあたる。事業者から杭基礎工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成21年11月24日～同11月26日に4㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、中世の遺構が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される約40㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、森 孝子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成22年5月14日～同年6月30日までの約1.5ヵ月間で、調査面積は約21㎡である。現地表面の標高は約14.2mを測る。掘削に伴う排土を場内処理する都合から調査区南北に分け、北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称した。調査は重機により表土及び遺構確認面までの堆積土を50cm前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～5面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月1日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（ $X = -76294.589$ 、 $Y = -24304.949$ ）、（ $X = -76323.414$ 、 $Y = -24308.808$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。また海拔標高値は、鎌倉市三級基準点No53229（標高11.168m）を基に移設した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

名越ヶ谷遺跡（No231）は、鎌倉市街地の南東域に位置し、市街地から名越切通しに向かう県道鎌倉・葉山線の東側一帯、山陵部を除いた「名越ヶ谷」のほぼ全域が包蔵地範囲となっている。

名越ヶ谷は、市内でも広大な谷戸のひとつで、東方に延びるその奥行きは1km以上、開口部付近では幅300m以上を有し、県道鎌倉・葉山線の東側一帯は広い平地をなす。谷戸の両岸は複雑な地形から、松葉ヶ谷や花ヶ谷、山王ヶ谷、六坊ヶ谷、黄金ヶ谷などの支谷や小支谷が形成され、また谷戸中央には谷戸奥を水源とする逆川が流下している。本調査地点は、名越ヶ谷の最奥部にあたる黄金ヶ谷の開口部付近に立地し、逆川の左岸にほど近い、鎌倉市大町六丁目1708番23外に所在する。調査地点はおおむね平坦で、現地表面の標高は約12.4mである。

調査地点の遺跡である「名越ヶ谷」の地名については、『新編相模国風土記稿』鎌倉郡の項に「東方名越町より東南北三方に亘りて総名とす」とあり、「松葉ヶ谷」、「花ヶ谷」、「山王ヶ谷」、「六坊ヶ谷」、「黄金ヶ谷」などの支谷を含む谷戸群を総じて「名越ヶ谷」と称したようである。また、名越ヶ谷には、衣張山麓に水源をもつ逆川が谷戸筋のほぼ中央に沿って北東から南西に向かって流下し、鎌倉・葉山線に架かる三枚橋の先で西へ流れを変え、材木座一丁目付近で滑川に合流している。谷戸の開口部付近の標高は7m前後で、本調査地点が位置する谷戸の中ほどで12～13m、最奥部の黄金ヶ谷付近では30mを超

え、谷戸幅も狭くなっている。名越ヶ谷の両岸に発達した谷戸や小支谷は雛段状に連なり、現在ではその多くが住宅地に変貌している。遺跡地一帯の現住所表記は、鎌倉市大町三丁目・四丁目・六丁目・七丁目に属する。

図2の名越ヶ谷遺跡周辺の遺跡を俯瞰すると、本調査地点北側の支谷には大町釈迦堂口遺跡 (No.235) があり、かつては北条時政邸跡といわれた場所である。南西側の花ヶ谷の谷戸には慈恩寺跡 (No.230) が所在している。図中外となるが、谷戸開口部の南東端には安国論寺遺跡 (No.323)、また包蔵地南西の境界となる県道鎌倉・葉山線の南西側には米町遺跡 (No.245) が広がっている。

現在、谷戸の開口部南東側付近には、鎌倉時代からの法灯を今に伝える安国論寺や妙法寺が、谷戸の開口部北側奥の支谷には大寶寺が、また横須賀線の線路を越えた、すぐ南側には長勝寺が所在しており、これらは日蓮宗寺院である。その他にも名越ヶ谷内には、慈恩寺、木東寺、田代観音堂、山王堂などの寺院があったと伝えられている (貫・川副 1980、白井編 1976)。

第3節 周辺の考古学的調査

ここでは、本調査地点周辺における過去の主な調査事例について簡単に触れてみたい。名越ヶ谷遺跡内での調査事例は本地点を含めて28ヵ所ほどが知られているが、多くが谷戸の開口部付近に集中しており、谷奥側では調査密度が薄くなる傾向にあり、本地点の近隣を中心にみていくこととする。まず本地点の西側隣接地①大町六丁目1708番4地点では、4面の中世遺構面から土坑、ピットが検出され、遺物の様相から13世紀中葉～14世紀初頭の年代幅で変遷したものと考えられている (汐見・小泉 2004)。②大町四丁目1736番2外地点は、三善善信邸跡に比定されており、5面の中世遺構面が確認された (遠藤・宗臺 1998)。このうち第3・4面では丘陵側に土塁が2条検出されて、その内側から堀や掘立柱建物が発見された。それとともに出土陶磁器類に優品があることや、銅製水滴なども出土していることから、武家屋敷あるいは寺院であった可能性が想定されている。③大町六丁目1506番11の一部地点では、逆川対岸の標高16.5mと本地点より高位置に立地しており、1面の中世遺構面が確認され、13世紀後半頃の小規模な溝とピット数基が検出された (押木 2017)。また中世の整地層の下からは古墳時代後期～奈良時代の遺物、さらに下層からは弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が若干のまとまりをもって出土している。名越ヶ谷の最奥部に位置する④大町釈迦堂口遺跡では、13世紀後半頃に大規模な造成によって平場が造られ、平場から寺院などの宗教施設と考えられる掘立柱建物や火葬跡が発見された (永田 2009)。また、平場を取り巻く周囲の崖には「日月やぐら」、「地藏やぐら」などの、やぐら群が重層的に穿たれ、荘厳な葬送空間であったことが把握されている。

表1 名越ヶ谷遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1708番23外地点	
①	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1708番4地点	汐見・小泉 2004
②	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町四丁目1736番2外地点	遠藤・宗臺 1998
③	名越ヶ谷遺跡 (No.231)	大町六丁目1506番11の一部地点	押木 2017
④	大町釈迦堂口遺跡 (No.235)		永田ほか 2009

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。

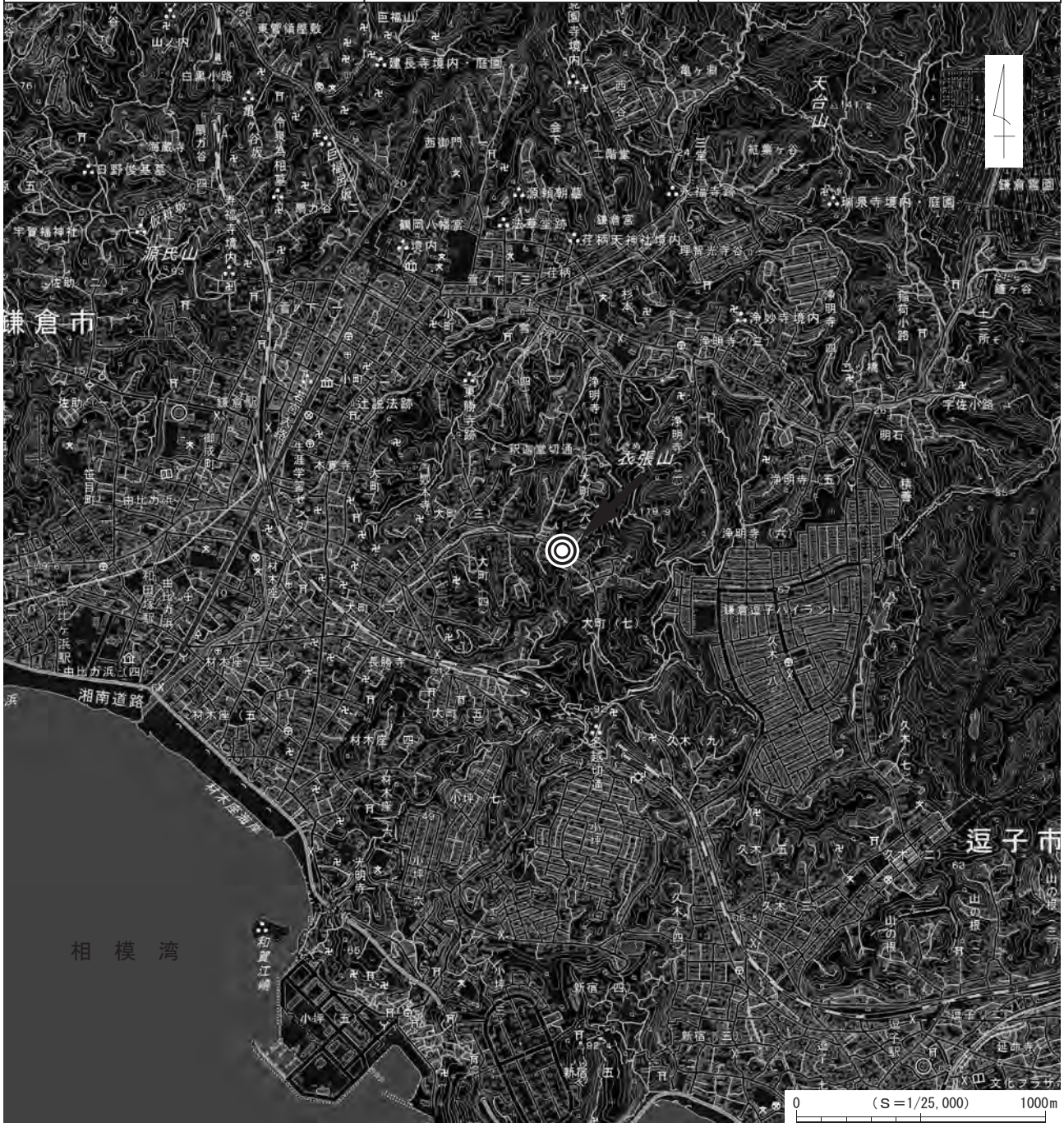
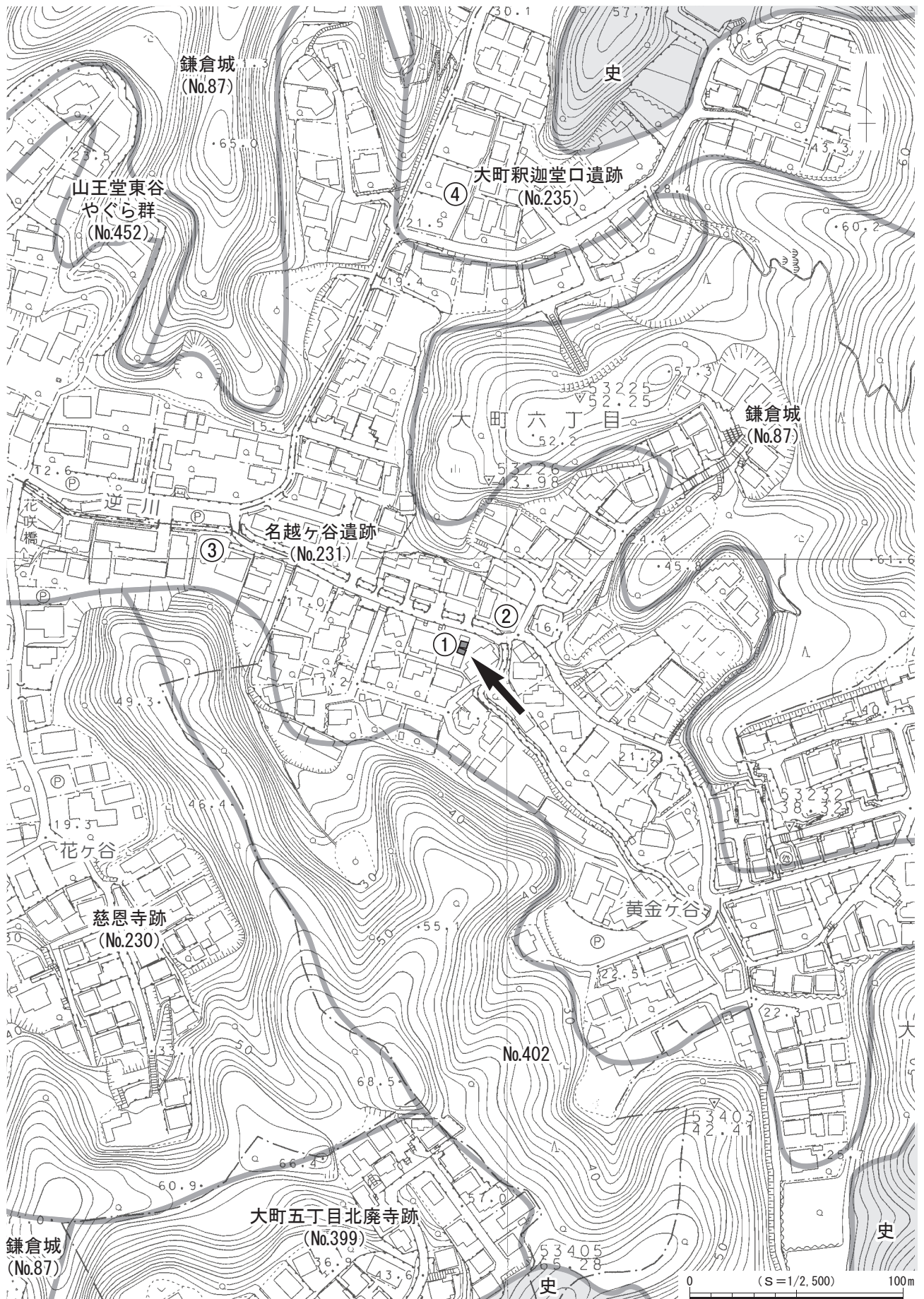


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

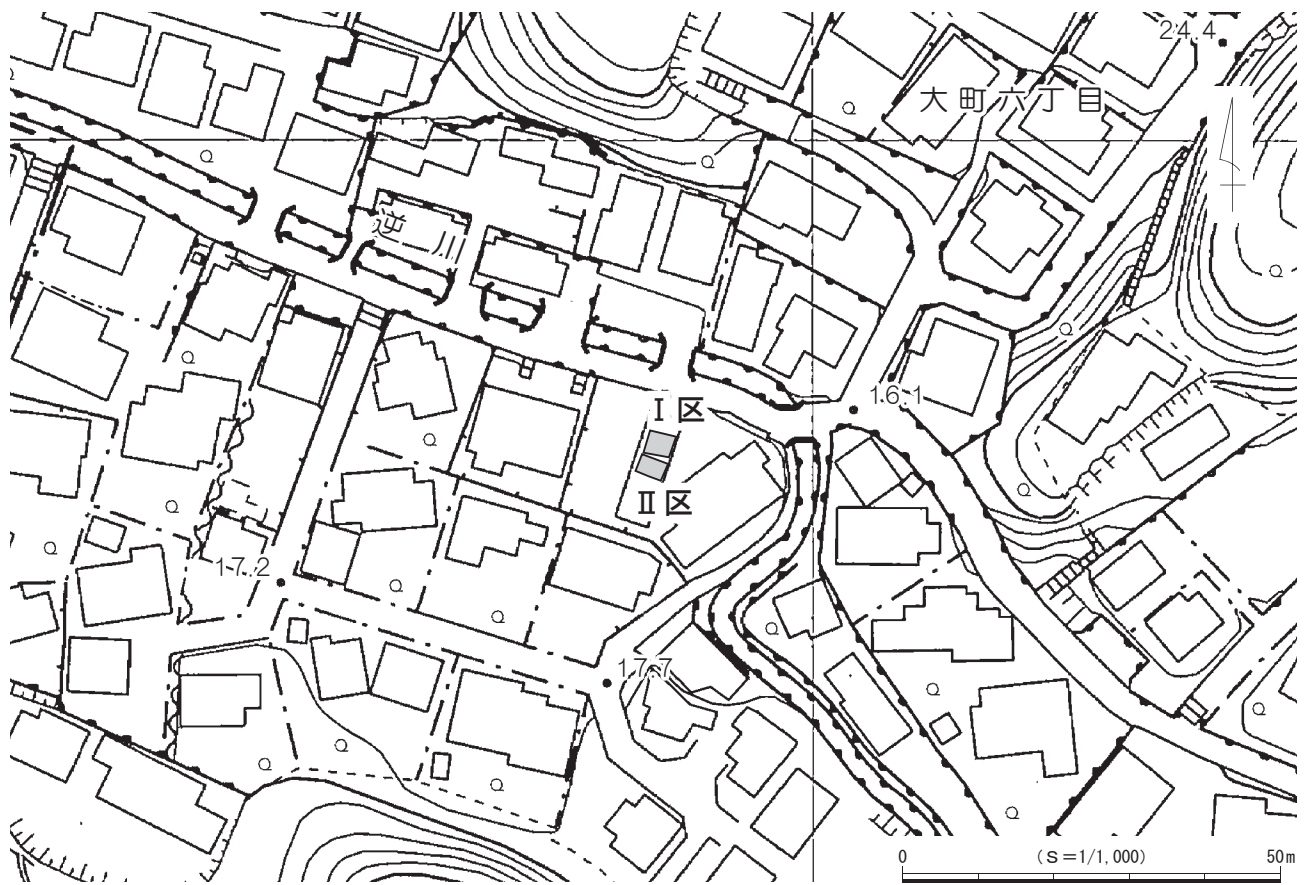


図3 調査区位置図



図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～5面までの合計5面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区東壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約12.4mを測り、最上部には層厚25～60cmの表土(1層)と層厚10～20cmの茶色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は表土を取り除いた3層上面で検出した。確認面の標高は11.8～12.0mを測る。3層は大型の泥岩ブロックと粉碎された泥岩が突き固められた整地層で、層厚5～35cmである。3層の下位には層上面に茶色砂が散布された整地層(4層)が堆積するが、遺構は確認されなかった。第2面は5・6層上面で確認し、確認面の標高は11.5～11.7mを測る。5層は泥岩による整地層で、層厚12～25cmである。6層は泥岩ブロック、炭化物、かわらけ片を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚10～20cmである。第3面は7・8層上面で確認し、確認面の標高は約11.5mを測る。7層は多量の泥岩粒と褐鉄分を含み、締まり・粘性のある黒茶色粘質土で、層厚15cm前後である。8層は少量の泥岩粒と炭化物を含み、締まり・粘性のある暗茶褐色粘質土で、層厚10～30cmである。第4面は9層上面で確認し、確認面の標高は約11.3mを測る。9層は微量の泥岩粒と泥岩ブロック、少量の炭化物、多量の褐鉄分を含み、締まり・粘性の強い茶褐色粘質土で、層厚20～40cmである。遺構確認面の最下位にあたる第5面は10層上面で確認し、確認面の標高は11.0～11.3mを測る。10層は少量の泥岩粒を含み、締まり・粘性の強い黒色粘質土で、層厚16～33cmである。10層の下位は、黒灰色粘質土(11層)および青灰色粘質土(12層)の地山層となる。

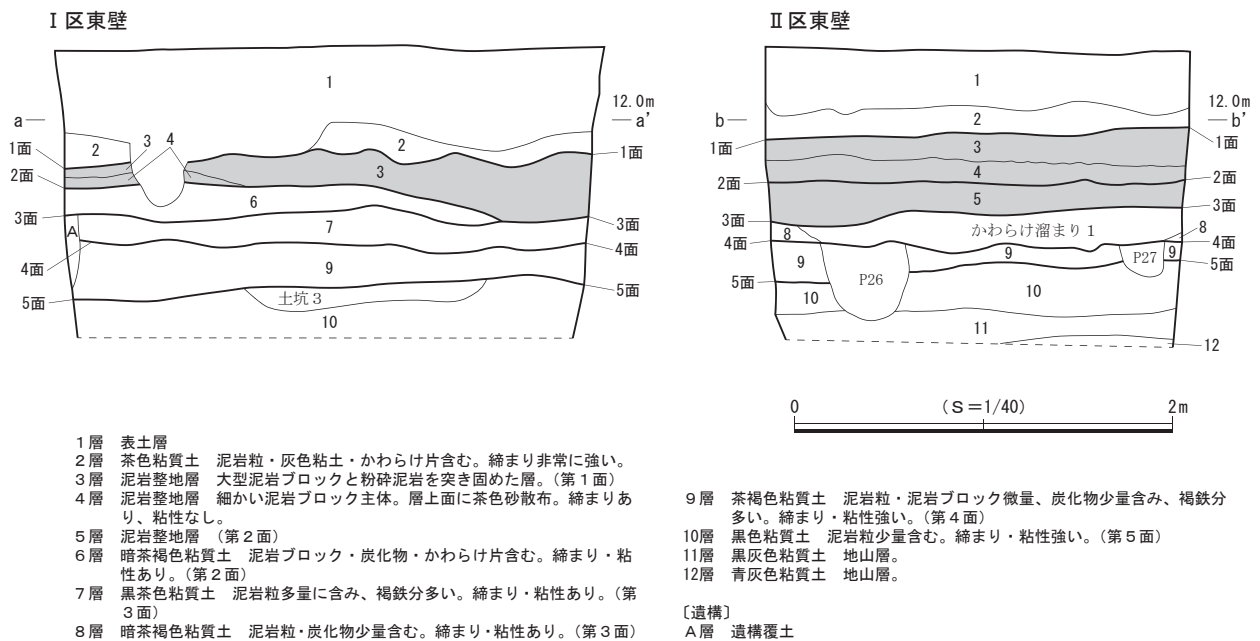


図5 I・II区東壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～5面までの合計5面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、礎石建物1棟、溝状遺構1条、かわらけ溜まり1カ所、土坑3基、ピット33基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して10箱を数える。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～5面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3層上面で検出され、確認面の標高は11.8～12.0mを測る。3層は大型の泥岩ブロックと粉碎された泥岩が突き固められた整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構はピット13基で、Ⅱ区にのみ分布していた(図6)。

遺物は主にかわらけ、磁器などが少量出土しており、詳細は不明瞭であるが本面は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

(1) ピット

第1面では、13基を検出した。いずれもⅡ区に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形を呈しており、方形がやや多い。長軸は17～47cm、深さが5～23cmである。

各ピットから遺物は出土しなかった。

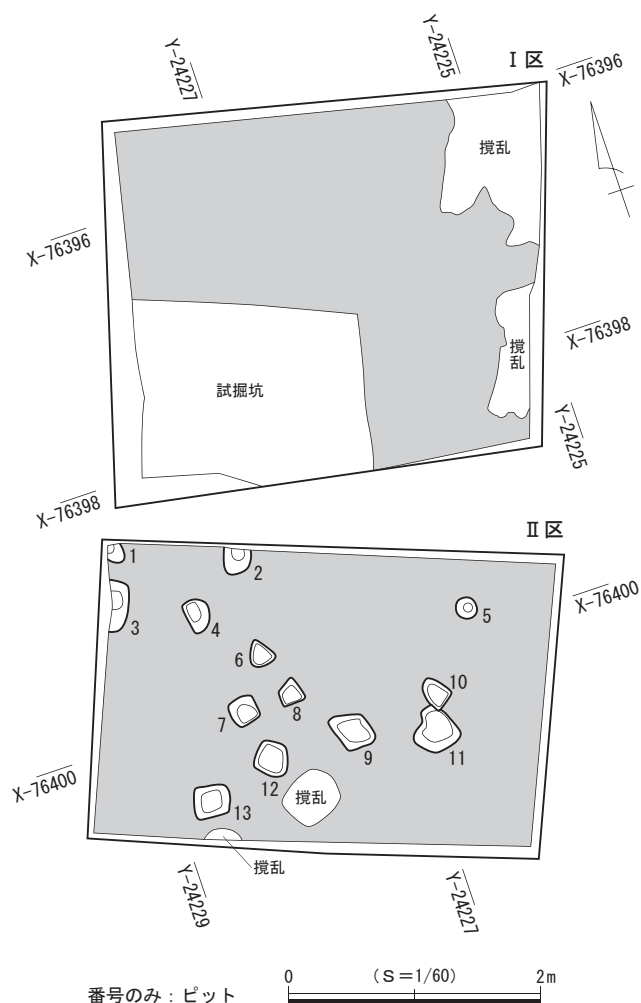


図6 第1面 遺構分布図

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は5・6層上面で検出され、確認面の標高は11.5～11.7mを測る。5層は泥岩による整地層、6層は泥岩ブロック、炭化物、かわらけ片を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット1基である(図7)。礎石建物はⅠ区南側からⅡ区にかけて位置し、ピットはⅠ区南側に位置している。

遺物は主にかわらけ、磁器などが出土しており、これらの年代観や下位遺構面の年代観から、本面は14世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 礎石建物

礎石建物 1 (図8)

I区南西側からII区西側にかけて位置する。1～4の礎石のうち1～3について、建物とみられる配置を確認した。また、4は1に伴う礎石と考えられる。北・東側に礎石はみられないため、建物の中心は未調査区にあると考えられる。そのため、全容は明らかでない。検出した規模は、心々間で北東-南西(1-2)2.10m、北西-南東(2-3)90cmを測る。1・2を結ぶ柱筋を基準にすると、建物の方位はN-36°-Wを指す。各礎石は略方形に加工され、上下面はほぼ平らである。1には柱のあたりがみられる。礎石1～3の大きさは長さ42～48cm、幅36～43cm、高さ15cm前後を測る。4はやや小さく、長さ33cm、幅31cm、高さ17cmである。

遺物は出土しなかった。

(2) ピット

I区南西側から1基検出された。試掘調査時に検出されたピットで、方形あるいは長方形を呈すると推定される。検出された範囲での規模は、北西-南東40cm、北東-南西現存長31cmを測る。

遺物は出土しなかった。

(3) 第2面 構成土出土遺物 (図9)

第2面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけで、口径8.9cmの小形品である。

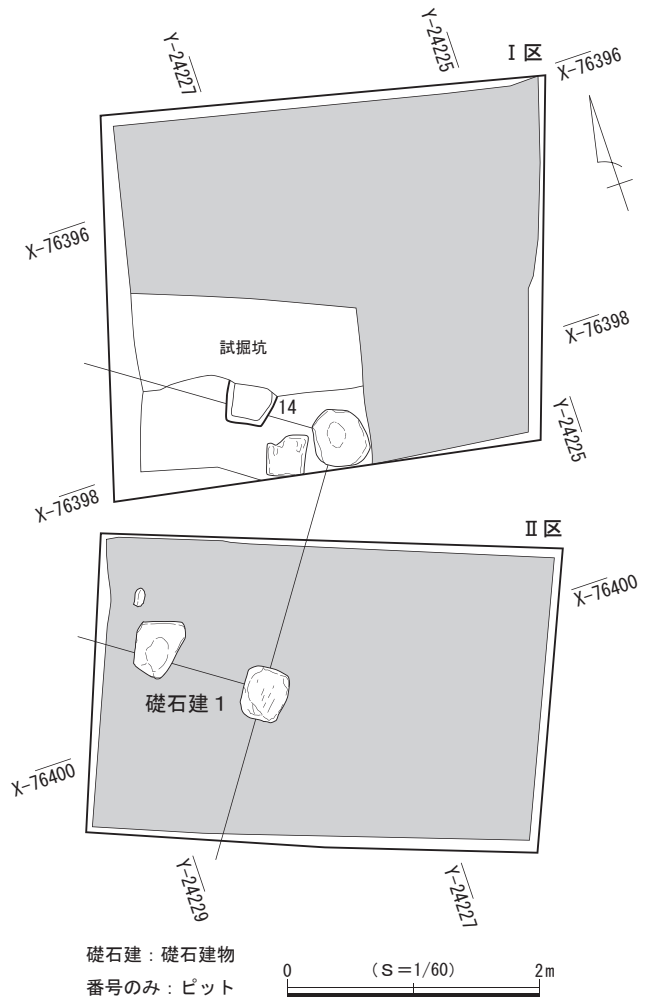


図7 第2面 遺構分布図

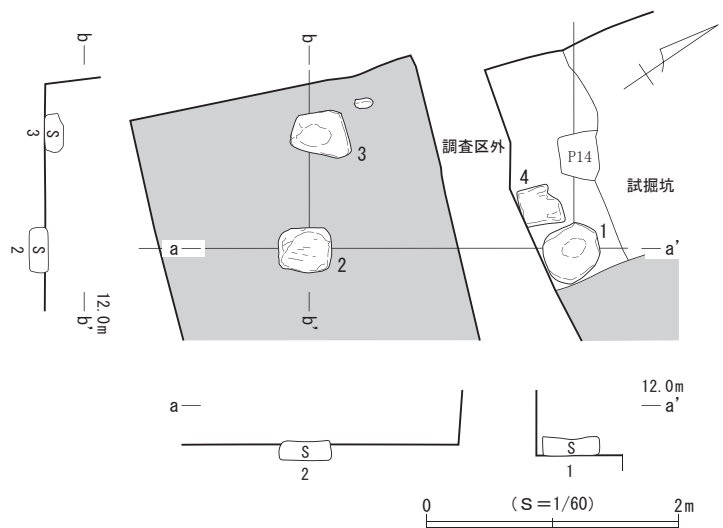


図8 第2面 礎石建物 1



図9 第2面 構成土出土遺物

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面の遺構は7・8層上面で検出され、確認面の標高は約11.5mを測る。7層は多量の泥岩粒と褐鉄分を含み、締まり・粘性のある黒茶色粘質土、8層は少量の泥岩粒と炭化物を含み、締まりと粘性のある暗茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、かわらけ溜まり1カ所、ピット3基である(図10)。溝状遺構とピットはI区東側に分布し、かわらけ溜まりはII区に位置している。完形のかわらけが多く出土しており、特にII区中央から南側にかけて分布が集中する。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、石製品、土製品、金属製品、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図11)

I区北壁際東側から東壁際南側かけてL字状に検出され、北・東側のいずれも調査区外に延びている。ピット15～17と重複して壊されている。北壁から南北方向に延び、I区中央やや南東側で屈曲し、東に向きを変えて東壁南側に延びていく。試掘坑に切られ東に向きを変え始める位置からは、溝が浅くなり南壁側が判然としない。壁は開いて立ち上がり、断面形は東側で逆台形、西側で皿状を呈する。底面中央付近は一段低くなっている。検出した規模は、現存長約1.8m、幅65～100cm、深さ17cmで、底面の標高は11.38mを測る。主軸方位はN-25°-Eで、東側に向きを変えるとN-67°-Wを指す。

遺物はかわらけ16点、陶器1点が出土した。

(2) かわらけ溜まり

かわらけ溜まり1(図12)

II区全面に位置している。調査区外に及んでいるため、II区北東隅で遺構の端が確認されているが、東壁土層断面の南隅で

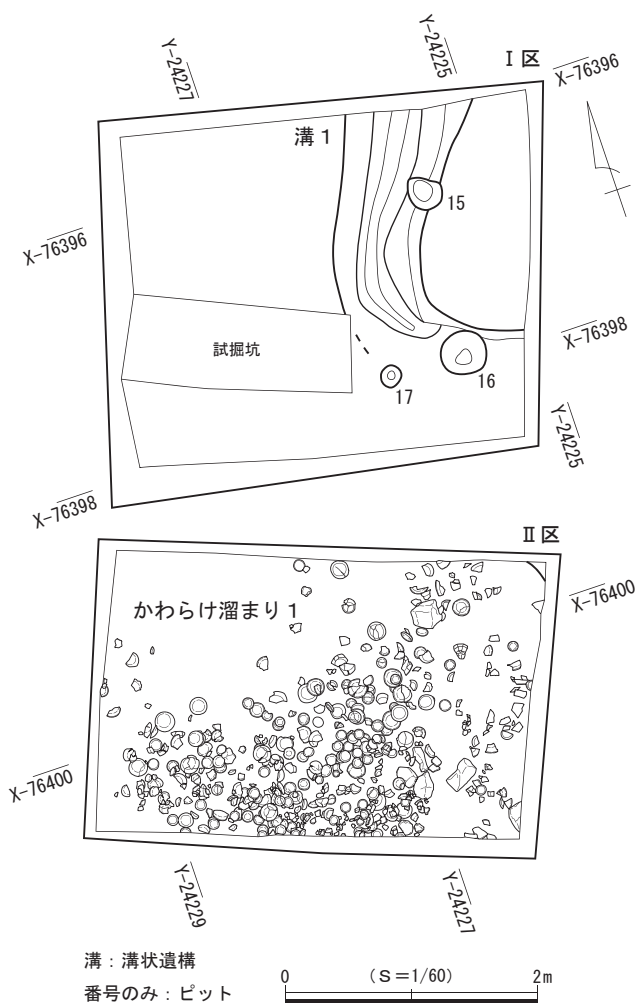


図10 第3面 遺構分布図

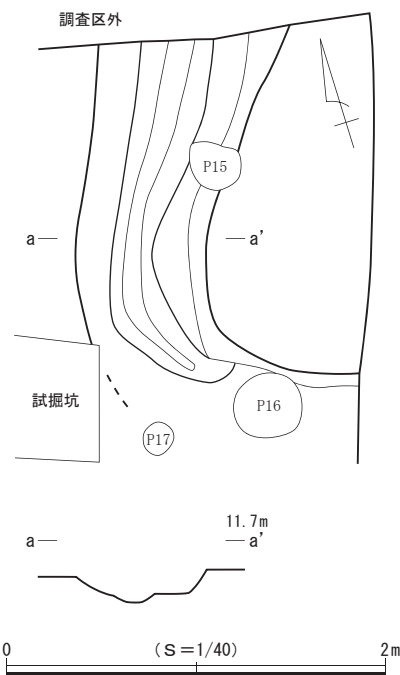


図11 第3面 溝状遺構1

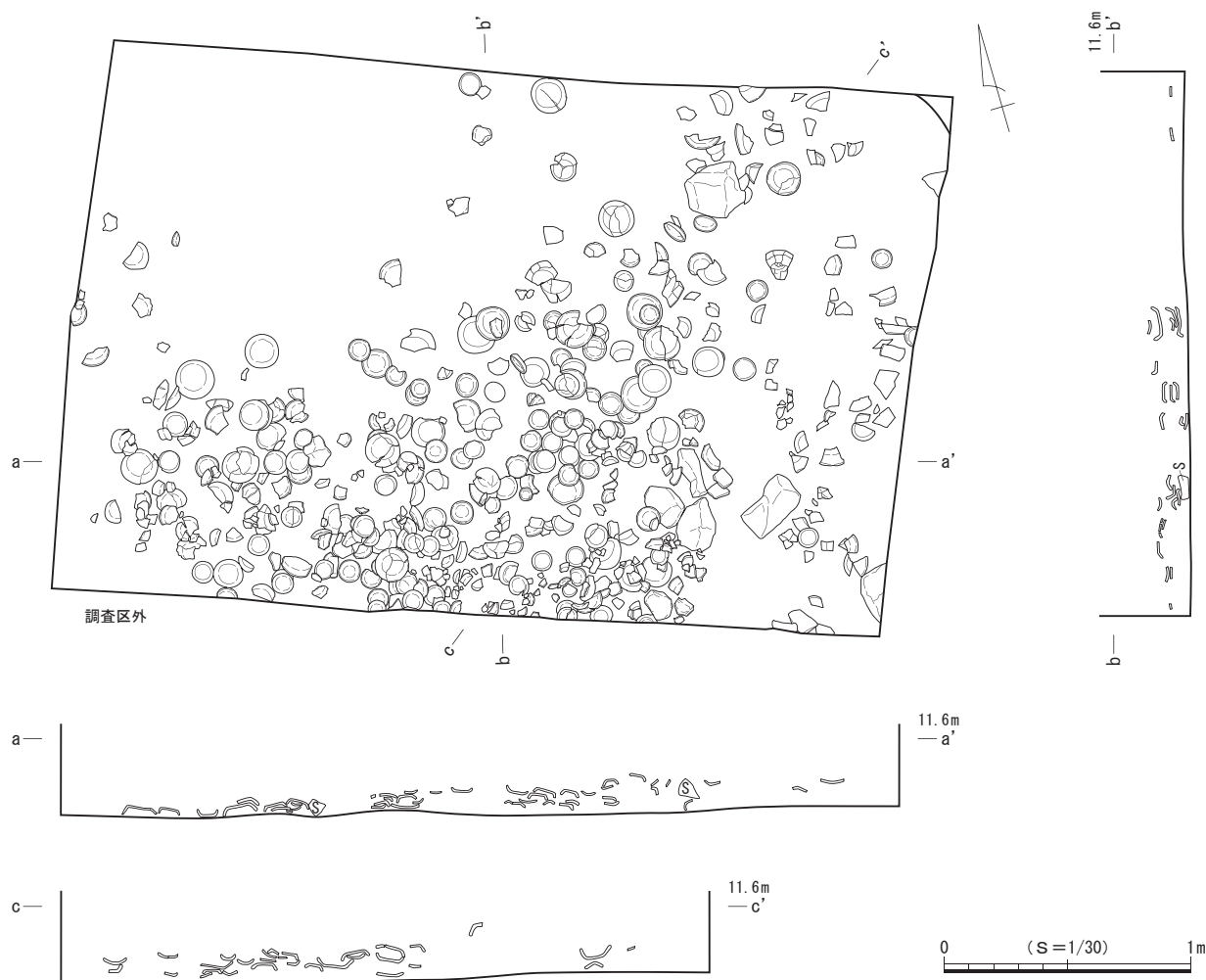


図12 第3面 かわらけ溜まり1

立ち上がりが認められること、I区に広がらないことが分かるのみで、全容は明らかでない。検出された範囲での規模は、東西約4.0m、南北現存長約2.0m、深さ21cmで、底面の標高は約11.3mを測る。完形に近いかわらけの分布範囲は中央から南側に集中している。出土状態は数個が入れ子状あるいは合わせ口状となるものが多く確認された。東側からは人頭大の泥岩ブロックも出土している。

出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ2,003点、磁器4点、陶器15点、土器1点、瓦質土器2点、石製品7点、土製品1点、金属製品4点が出土しており、このうち61点を図示した。

1～59はかわらけであり、このうち1のみ手づくね成形で他はロクロ成形で仕上げられる。1は口径4.7cmを測る極小品で内折れ形状を呈する。焼成は還元焰焼成ぎみで、胎土は黒灰色を呈する。2は耳皿、3～41は6.3～9.0cmを測る小形品、このうち3は内折れ形状を呈する。42～55は11.8～12.7cmを測る中形品、56～59は口径13.0cmを測る大形品である。16・34・44・45・47には油煤が付着し灯明具としての使用が認められ、16には煤が付着する。また、34は使用による劣化が特に著しく器面が剝離している。60は全長4.0cm、最大径0.9cmを測る細形の管状土錘である。61は基石とみられる玉随製で象牙色を呈する半透明質の小円礫であり、表裏面は微細な擦痕が入り楕円状に光沢が失われている。なお本址からは、図示資料のほかに基石とみられる黒色の小円礫が5点出土している。

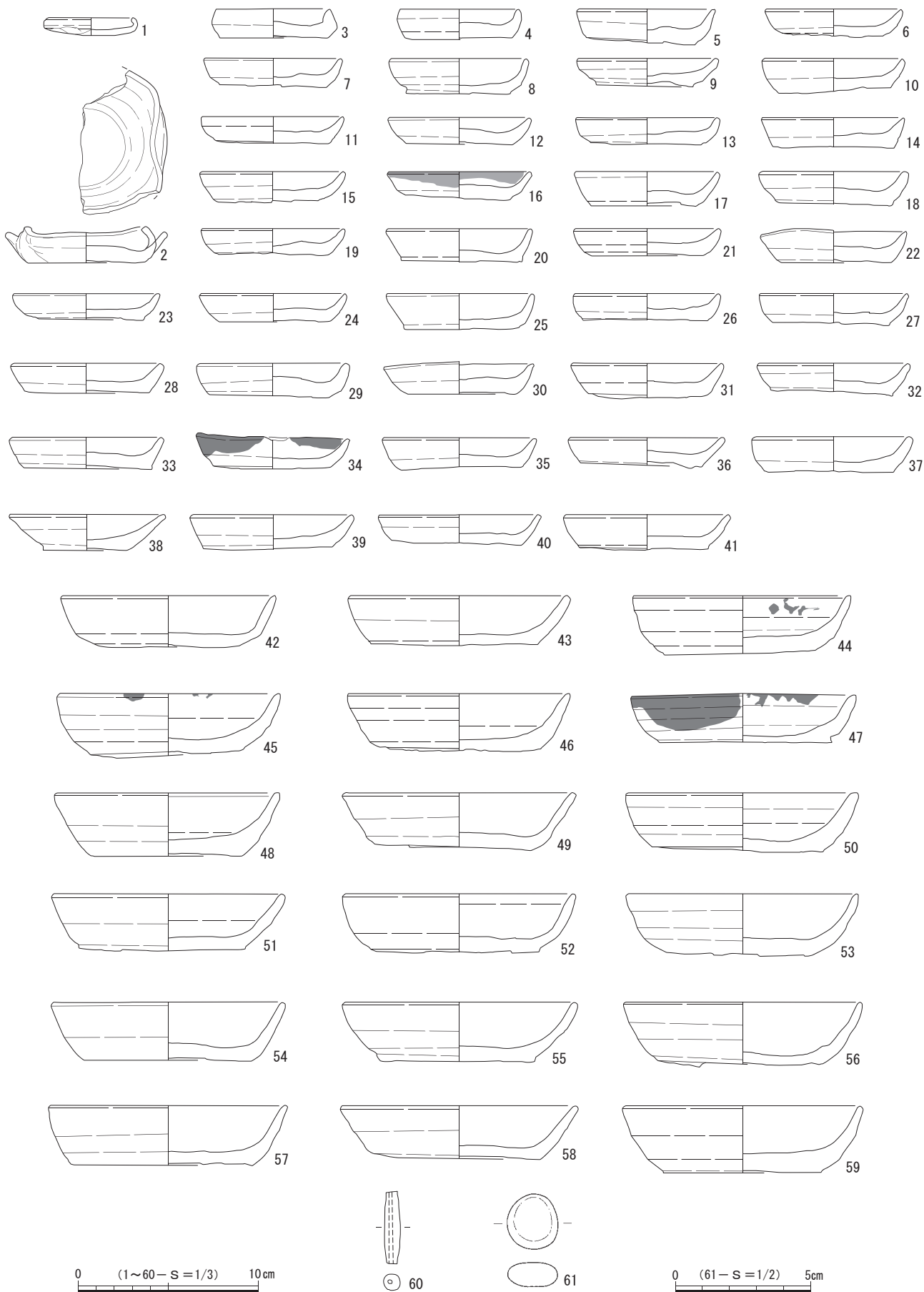


図13 第3面 かわらけ溜まり1 出土遺物

(3) ピット

第3面では、3基を検出した。I区東側に分布しており、溝状遺構1に伴う可能性も考えられる。平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径17~36cm、深さ8~31cmである。

出土遺物 (図14)

遺物は3基のピット中、2基からかわらけが出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.4cmを測る小形品である。ピット15から出土した。

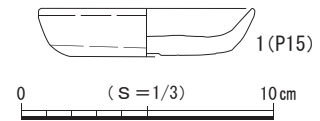


図14 第3面 ピット出土遺物

(4) 第3面 構成土出土遺物 (図15)

第3面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち7点を図示した。

1~7はロクロ成形のかわらけである。1~5は口径8.0~9.0cmの小形品、6は口径12.4cmの中形品、7は口径13.6cmの大形品である。6の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

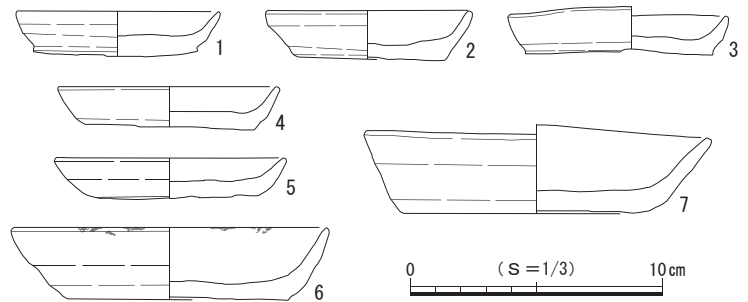


図15 第3面 構成土出土遺物

第4節 第4面の遺構と遺物

第4面の遺構は9層上面で検出され、確認面の標高は約11.3mを測る。9層は微量の泥岩粒と泥岩ブロック、少量の炭化物、多量の褐鉄分を含み、締まり・粘性の強い茶褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット12基である(図16)。遺構密度は疎らで、土坑およびピットの多くはII区に分布している。I区北西隅付近には礎石と考えられる一辺約20cmの方形礫が出土している。

遺物は主にかわらけ、石製品、土師器、土製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

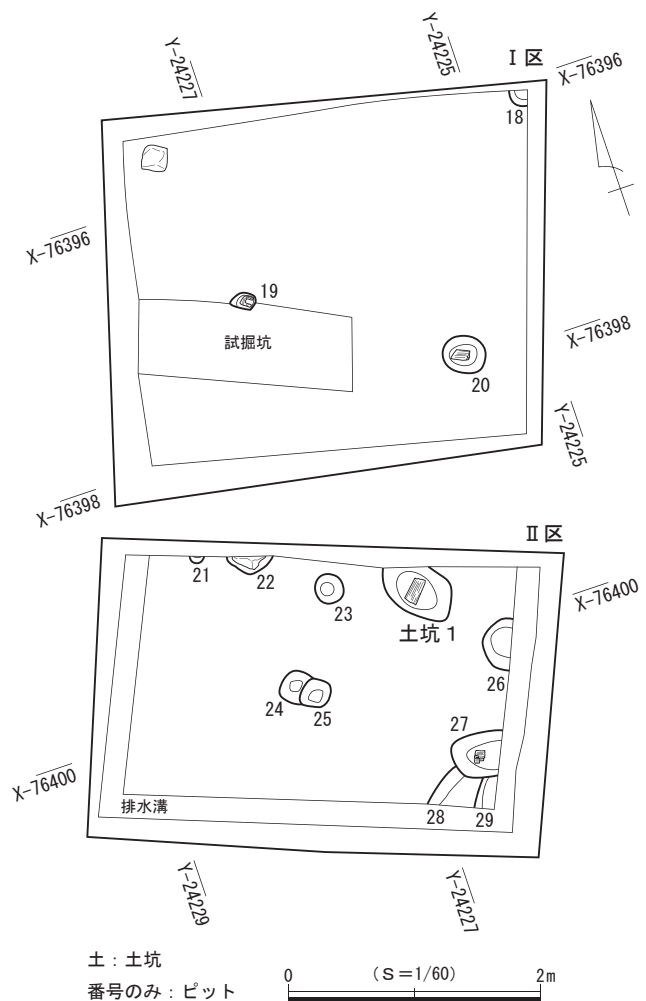


図16 第4面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑 1 (図17)

Ⅱ区北壁際中央付近に位置する。北側の一部が調査区外に及んでいる。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出された範囲での規模は長軸現存長64cm、短軸39cm、深さ31cmで、坑底面の標高は11.00mを測り、底面から2cm上に礎板が据えられていた。礎板の大きさは、長さ21cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は11.04mである。

出土遺物 (図18)

遺物はかわらけ30点、金属製品1点が出土し、このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、このうち1は口径8.0cmの小形品、2は口径13.8cmに復元される大形品である。

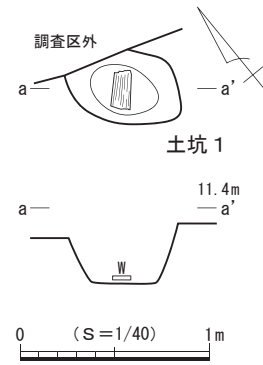


図17 第4面 土坑 1

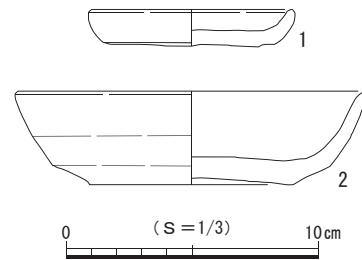


図18 第4面 土坑 1 出土遺物

(2) ピット

第4面では、12基を検出した。Ⅰ区に3基、Ⅱ区に9基あり、南側に多く分布している。礎石や礎板、柱を伴うピットが確認されたが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、方形、隅丸長方形があり、規模は長軸11~41cm、深さ3~43cmと径・深さともにばらつきがある。

遺物は12基のピット中、2基から出土した。いずれもかわらけであり、ピット23から手づくね成形が2点、ピット25からロクロ成形が25点出土した。

以下、礎石や礎板が据えられたピット4基を図示し、説明する。

ピット19 (図19)

Ⅰ区中央東側に位置する。試掘坑によって南側1/4弱が失われている。平面形は略円形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸19cm、短軸現存長13cm、深さ43cmを測り、底面の標高は10.99mを測る。ピット中央の底面には柱が密着して据えられていた。柱は東辺と中央がなく、コ字状を呈する角材で、1辺10cm四方あり、高さ12cmまで遺存していた。なお、柱の底面が第5面ピット31の底面に据えられている礎板と同一レベルにあり、両者は同一遺構あるいは建て替えによるものであった可能性が考えられる。

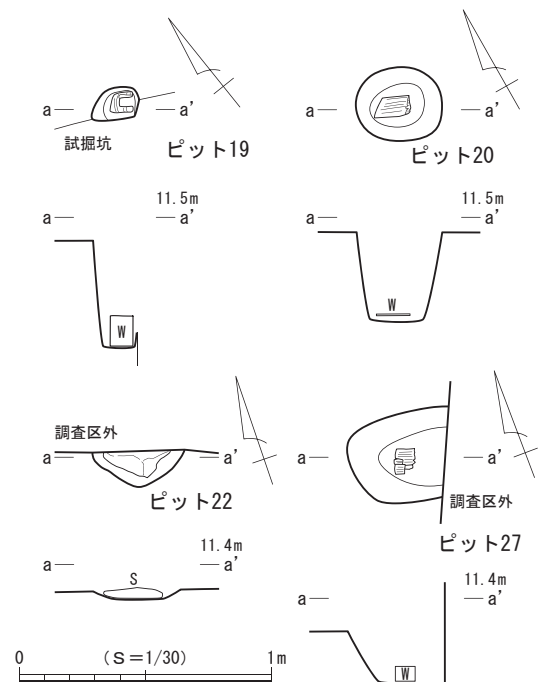


図19 第4面 ピット19・20・22・27

ピット20 (図19)

I区南東側に位置する。平面形は略円形で、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸34cm、短軸29cm、深さ29cmを測り、礎板がピット中央の底面から2cm上に据えられていた。礎板の大きさは長さ13cm、幅8cm、厚さ1cmを測り、上面の標高は11.12mである。

ピット22 (図19)

II区北壁際の西側に位置する。北側の大半が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲での規模は、長軸現存長37cm、短軸現存長14cm、深さ5cmで、底面に礎石が据えられていた。礎石の大きさは長さ27cm、高さ4cmを測り、上面の標高は11.31mを測る。

ピット27 (図19)

II区東壁際の南側に位置する。東側を排水溝掘削により破壊されているため、全容は明らかでない。ピット28・29と重複して両者の北壁を壊している。平面形は隅丸長方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長40cm、短軸36cm、深さ21cmで、底面西側に礎板が据えられていた。礎板は小片が組み合わされて配置されており、最も大きいもので長さ8cm、幅6cm、厚さ6cmを測り、上面の標高は11.13mを測る。

(3) 第4面 構成土出土遺物 (図20)

第4面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち1点を図示した。

1はかわらけの底部を利用したのであろうか、径3.0cmの円板状に研磨加工した土製品であり、表面の中心には径3.0mmを測る、非貫通の孔を穿つ。

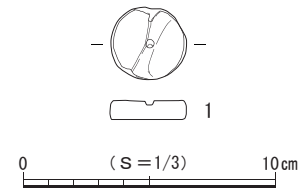


図20 第4面 構成土出土遺物

第5節 第5面の遺構と遺物

第5面の遺構は10層上面で検出され、確認面の標高は11.0～11.3mを測る。10層は少量の泥岩粒を含み、締まり・粘性の強い黒色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑2基、ピット4基である(図21)。遺構はピット33がII区にあるほかはすべてI区の北側に分布している。

遺物はかわらけ、陶器などが少量出土している。詳細は不明瞭であるが、遺物や上位面の年代観から本面は13世紀中葉頃に属すると推定される。

(1) 土坑

土坑2 (図22)

I区北壁際の中央に位置する。北側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。平面形は楕円形を呈すると推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長61cm、短軸49cm、深さ5cmで、坑底面の標高は10.99mを測る。

遺物はかわらけが5点出土した。

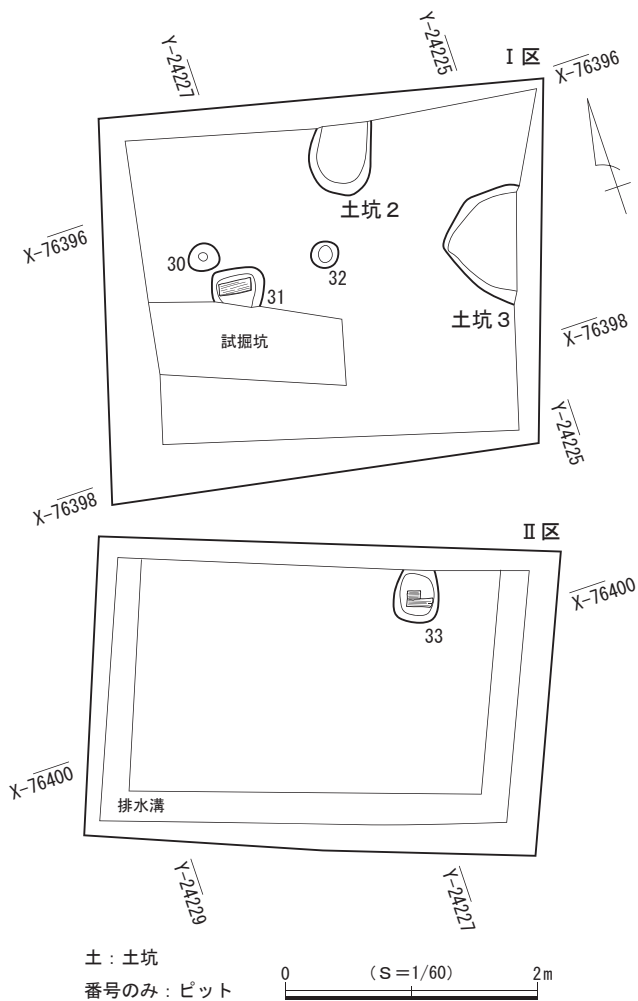


図21 第5面 遺構分布図

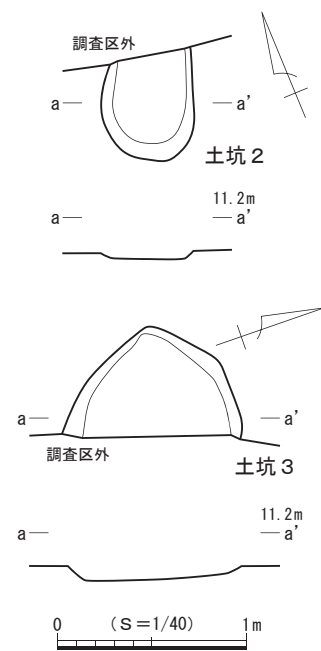


図22 第5面 土坑2・3

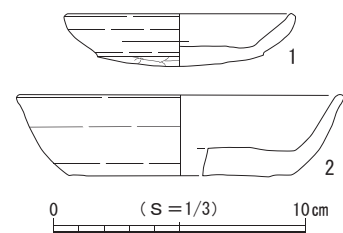


図23 第5面 土坑3 出土遺物

土坑3 (図22)

I区東壁際の中央に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。平面形は方形を呈すると推定される。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は南北95cm、東西現存長58cm、深さ9cmで、坑底面の標高は10.95mを測る。土坑内からはかわらけおよび泥岩ブロックが出土している。

出土遺物 (図23)

遺物はかわらけが52点出土し、このうち2点を図示した。

1・2はかわらけであり、このうち1は口径8.8cmに復元される手づくね成形の小形品、2は口径12.7cmに復元されるロクロ成形の中形品である。

(2) ピット

第5面では、4基を検出した。I区中央から西側にかけて3基、II区北壁際の東寄りに1基分布している。礎板を伴うピットが確認されたが、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、隅丸方形、隅丸長方形のものがあ、規模は長軸21~42cm、深さ11~35cmである。ピット31からは第4面のピット19の底面に据えられた礎板と同一レベルで礎板が検出されていることから、両者は関連をもつ可能性も考えられる。

遺物は4基のピット中、ピット31からかわらけが1点出土した。

以下、礎板が据えられたピット2基を図示し、説明する。

ピット31 (図24)

I区中央西壁寄りに位置する。試掘坑により南側の一部が失われている。平面形は隅丸方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸42cm、短軸現存長32cm、深さ11cmを測り、礎板が底面から5cm上に据えられていた。礎板の大きさは、長さ25cm、幅10cm、厚さ2cmを測り、上面の標高は10.99mである。

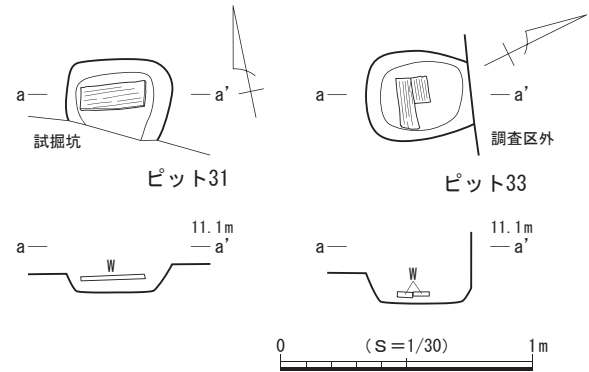


図24 第5面 ピット31・33

ピット33 (図24)

II区北壁際の東側に位置する。北側の一部が調査区外に及んでいる。平面形は隅丸長方形と推定され、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長42cm、短軸35cm、深さ16cmで、礎板が底面から3cm上に2枚並べて据えられていた。ピット中央の礎板は、長さ12cm、幅7cm、厚さ2cmを測る。やや南側に据えられている礎板は、長さ20cm、幅7cm、厚さ3cmを測る。いずれも上面の標高は10.91mである。

第四章 まとめ

今回報告する大町六丁目1708番23外地点は「名越ヶ谷遺跡(No.231)」の範囲内に所在する調査地点としては谷戸の最奥部にあたり、遺跡内においては調査事例の少ない地区である。また、谷戸の中央を流れる逆川は谷戸最奥部を水源とし、本調査地点のすぐ南側を西流している。今回の調査では第1～5面までの合計5面で遺構が検出され、調査面積は40㎡である。検出した遺構は礎石建物1棟、溝状遺構1条、かわらけ溜まり1ヵ所、土坑3基、ピット33基である。遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して10箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は標高11.8～12.0mを測る堆積土層の3層上面で検出された。検出した遺構はピット13基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面の遺構は標高11.5～11.7mを測る堆積土層の5・6層上面で検出された。検出した遺構は礎石建物1棟、ピット1基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄であるが、礎石建物の存在は本調査地点を考える上で注目されよう。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第3面〉

第3面の遺構は標高11.5mを測る堆積土層の7・8層上面で検出された。検出した遺構は溝状遺構1条、かわらけ溜まり1ヵ所、ピット3基である。溝状遺構とピットはI区東側に分布し、かわらけ溜まりはII区中央から南側にかけて分布が集中する。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉～14世紀初頭頃に属すると考えられる。

〈第4面〉

第4面の遺構は標高11.3mを測る堆積土層の9層上面で検出された。検出した遺構は土坑1基、ピット12基である。遺構群は調査区全域に散漫に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物の年代観から推定すると、本面の遺構群は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

〈第5面〉

第5面の遺構は標高11.0～11.3mを測る堆積土層の10層上面で検出された。検出した遺構は土坑2基、ピット4基である。遺構はピット33がII区にあるほかはすべてI区北側に分布し、遺構密度は希薄である。出土した遺物が少量であり詳細が不明瞭であるが、上位遺構面の年代も考慮すると、本面の遺構群は13世紀中葉頃に属すると推定される。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 2018『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 遠藤雅一・宗臺富貴子 1998「名越ヶ谷遺跡(No231)大町四丁目1736番2外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書14』平成9年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 押木弘己 2017「名越ヶ谷遺跡(No231)大町六丁目1506番11の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・小泉衣里 2004「名越ヶ谷遺跡(No231)大町六丁目1708番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書20』平成15年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 永田史子ほか 2009『大町釈迦堂口遺跡発掘調査報告書』鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

表2 第2面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
第2面 構成土出土遺物 (図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.9	6.7	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	略完形

表3 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

かわらけ溜まり1 出土遺物 (図13)

1	土器	手づくね かわらけ・極小	4.7	-	1.0	内折れ形 底面-指頭+ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黒灰色 焼成: 良好	3/4 弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(6.7~8.6)	(6.4)	2.0	耳皿 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3	5.9	1.6	内折れ形 底面-回転糸切 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3~6.6	5.4~5.9	1.7	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.8~6.0	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.2~7.5	5.0	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
7	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.9	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	略完形
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.5~5.8	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	略完形
9	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3~7.6	5.4	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
10	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	6.2	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	完形
11	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5~7.8	5.9~6.3	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
12	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.9	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	略完形
13	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
14	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.7	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡褐色 焼成: 良好	完形
15	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.5	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
16	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.9	1.6	口縁部内外面に煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
17	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	5.8	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
18	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	6.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
19	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	略完形
20	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.4~6.7	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
21	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	6.1	1.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/2 強
22	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7~8.0	6.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	完形
23	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.8	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡黄褐色 焼成: 良好	完形
24	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡黄褐色 焼成: 良好	完形
25	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7~8.0	6.3	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	完形
26	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.9	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
27	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.1	6.1~6.4	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	完形
28	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.5~6.9	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
29	土器	ロクロ かわらけ・小	8.1	6.6	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
30	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9~8.2	6.0	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 褐色 焼成: 良好	略完形
31	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.2	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
32	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2	6.8	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
33	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	7.0	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
34	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	6.5	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好 備考: 被熱し脆い	略完形

35	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0~8.4	6.5~6.7	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
36	土器	ロクロ かわらけ・小	8.2~8.5	6.7	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
37	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5	7.1	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
38	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや良土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
39	土器	ロクロ かわらけ・小	8.8	7.1	2.0	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
40	土器	ロクロ かわらけ・小	8.9	7.2	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
41	土器	ロクロ かわらけ・小	9.0	7.1	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
42	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	7.9	2.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
43	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	9.2	2.8	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	3/4
44	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.4	3.3	内面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
45	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	8.6	3.6	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
46	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	8.9	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
47	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	9.6	3.2	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
48	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	8.3	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
49	土器	ロクロ かわらけ・中	12.5	8.7	3.2	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
50	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.4	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	完形
51	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.2	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	2/3 強
52	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	9.0	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
53	土器	ロクロ かわらけ・中	12.6	8.1	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	略完形
54	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	9.3	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
55	土器	ロクロ かわらけ・中	12.7	8.5	3.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
56	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	9.2	3.6	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
57	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	9.8~10.1	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
58	土器	ロクロ かわらけ・大	12.6~13.0	8.9~9.2	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
59	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	8.8	3.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3 強
60	土製品	土錘	長 4.0	最大径 0.9	孔径 0.2~0.3	細形管状土錘 外面-手づくね 胎土: 微砂、やや密 色調: にぶい赤褐色 焼成: 良好	完形
61	石製品	基石	径 1.9~2.1	厚 0.9	重量 5.1 g	象牙色を呈する玉隨の円礫素材→使用により表裏面に微細な擦痕あり	完形

ピット15出土遺物(図14)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.4	6.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-----

第3面 構成土出土遺物(図15)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.5	1.8	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 外面-黄灰色、内面-黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0~8.3	6.0	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3~8.6	7.1~7.4	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	8.6~8.8	6.7	1.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	3/4 強
5	土器	ロクロ かわらけ・小	8.5~9.0	6.3	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.4	8.7	2.9	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3 強
7	土器	ロクロ かわらけ・大	13.6	8.5~9.5	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	略完形

表4 第4面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑1 出土遺物(図18)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.1	1.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3 強
---	----	---------------	-----	-----	-----	--	-------

2	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.8)	8.1	3.7	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3
---	----	---------------	--------	-----	-----	---	-----

第4面 構成土出土遺物(図20)

1	土製品	円板状製品	径 3.0	孔径 0.3	厚 0.8	側面-ナデ 胎土: 微砂、雲母、角閃石、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針 色調: 黄橙色 焼成: 良好 備考: 孔(未貫通)と側縁は焼成後の調整	略完形
---	-----	-------	----------	-----------	----------	--	-----

表5 第5面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑3出土遺物(図23)

1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.8)	-	2.1	底面-指頭+ヘラナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.7)	(8.7)	3.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 淡橙色 焼成: 良好	1/3強

表6 遺構計測表

() = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
ピット1	第1面	(17)	(15)	6	礎石建物1	第2面	(210)	(90)	-	ピット23	第4面	23	22	25
ピット2	第1面	21	(20)	11	ピット14	第2面	40	31	-	ピット24	第4面	25	(17)	8
ピット3	第1面	41	(15)	13	溝状遺構1	第3面	(180)	65~100	17	ピット25	第4面	22	21	16
ピット4	第1面	26	19	23	かわらけ溜まり1	第3面	400	(200)	21	ピット26	第4面	41	(23)	20
ピット5	第1面	17	16	10	ピット15	第3面	31	25	20	ピット27	第4面	(40)	36	21
ピット6	第1面	21	17	5	ピット16	第3面	36	-	31	ピット28	第4面	(34)	(33)	7
ピット7	第1面	21	-	8	ピット17	第3面	17	16	8	ピット29	第4面	(27)	(15)	21
ピット8	第1面	20	18	10	土坑1	第4面	(64)	39	31	土坑2	第5面	(61)	49	5
ピット9	第1面	31	26	8	ピット18	第4面	(15)	(13)	7	土坑3	第5面	95	(58)	9
ピット10	第1面	24	18	9	ピット19	第4面	19	(13)	43	ピット30	第5面	31	25	28
ピット11	第1面	47	37	8	ピット20	第4面	34	29	29	ピット31	第5面	42	(32)	11
ピット12	第1面	27	26	14	ピット21	第4面	11	(6)	3	ピット32	第5面	21	-	35
ピット13	第1面	29	26	10	ピット22	第4面	(37)	(14)	5	ピット33	第5面	(42)	35	16

※礎石建物の長軸・短軸は心々間の計測値である。

表7 出土遺物一覧表

表土			第3面		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			溝状遺構1		
	かわらけ ロクロ成形	26	【かわらけ】		
【青磁】			白かわらけ ロクロ成形	1	ピット15
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	かわらけ ロクロ成形	15	【かわらけ】
【陶器】			【陶器】		
常滑	甕	2	産地器種不明	1	かわらけ ロクロ成形
【金属製品】			合計	17	合計
	器種不明	1	かわらけ溜まり1		
合計			合計	30	合計
第1面			かわらけ溜まり1		
第1面 遺構外			産地	器種	破片数
産地	器種	破片数	【かわらけ】		
【かわらけ】			白かわらけ 手づくね成形	2	第3面 遺構外
かわらけ 手づくね成形	2		かわらけ ロクロ成形	1,936	産地
かわらけ 手づくね成形	2		かわらけ 手づくね成形	65	器種
合計	2		【白磁】		
第1面 構成土			碗Ⅸ類	1	かわらけ ロクロ成形
【かわらけ】			【青磁】		
かわらけ ロクロ成形	11		龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
かわらけ 手づくね成形	9		碗Ⅱ類	1	碗Ⅱ類
合計	22		【青白磁】		
【青磁】			皿	1	【陶器】
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2	【陶器】		
合計	22		常滑	甕	13
第2面			壺	1	器種不明
第2面 遺構外			器種不明	1	【土器】
産地	器種	破片数	火鉢		
【かわらけ】			【瓦質土器】		
かわらけ ロクロ成形	6		碗	1	
かわらけ 手づくね成形	6		皿	1	
合計	6		【石製品】		
第2面 構成土			砥石	1	
産地	器種	破片数	基石	6	
【かわらけ】			【土製品】		
かわらけ ロクロ成形	75		土錘	1	
かわらけ 手づくね成形	5		【金属製品】		
合計	80		釘	3	
【青磁】			器種不明	1	
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2	合計	2,037	
【土師器】			第3面 構成土		
甕	1		産地	器種	破片数
合計	83		【かわらけ】		
合計			白かわらけ 手づくね成形	1	
			かわらけ ロクロ成形	181	
			かわらけ 手づくね成形	7	
			【白磁】		
			皿Ⅸ類	1	
			【青磁】		
			龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
			【陶器】		
			常滑	甕	1
			壺	1	
			【木製品】		
			端材	1	
			合計	194	

第4面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	30
【金属製品】		
	釘	1
		合計 31

ピット23		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	2
		合計 2

ピット25		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	25
		合計 25

第4面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	28
【土師器】		
	坏	3
	甕	1
【石製品】		
	砥石	1
【金属製品】		
	釘	5
		合計 40

第4面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	31
	かわらけ 手づくね成形	185
【土師器】		
	甕	1
【土製品】		
	円板状製品	1
		合計 218

第5面		
土坑2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	5
		合計 5

土坑3		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	14
	かわらけ 手づくね成形	38
		合計 52

ピット31		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
		合計 1

第5面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	18
	かわらけ 手づくね成形	7
【陶器】		
常滑	甕	1
【土製品】		
	円板状製品	1
		合計 27

第5面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	7
		合計 7



1. 調査地点近景(北東から)



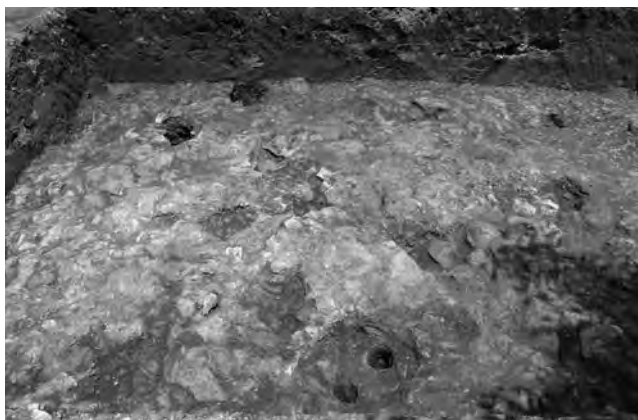
2. I区東壁土層断面(西から)



1. II区東壁土層断面(西から)



2. II区第3面全景、かわらけ溜まり1(北から)



1. II区第1面全景(南から)



2. I区第2面 礎石建物1 礎石1・4(南から)



3. II区第2面 礎石建物1 礎石2(南から)



4. I区第3面全景(南から)



5. I区第4面全景(南から)



6. II区第4面全景(北から)



7. I区第5面全景(南から)

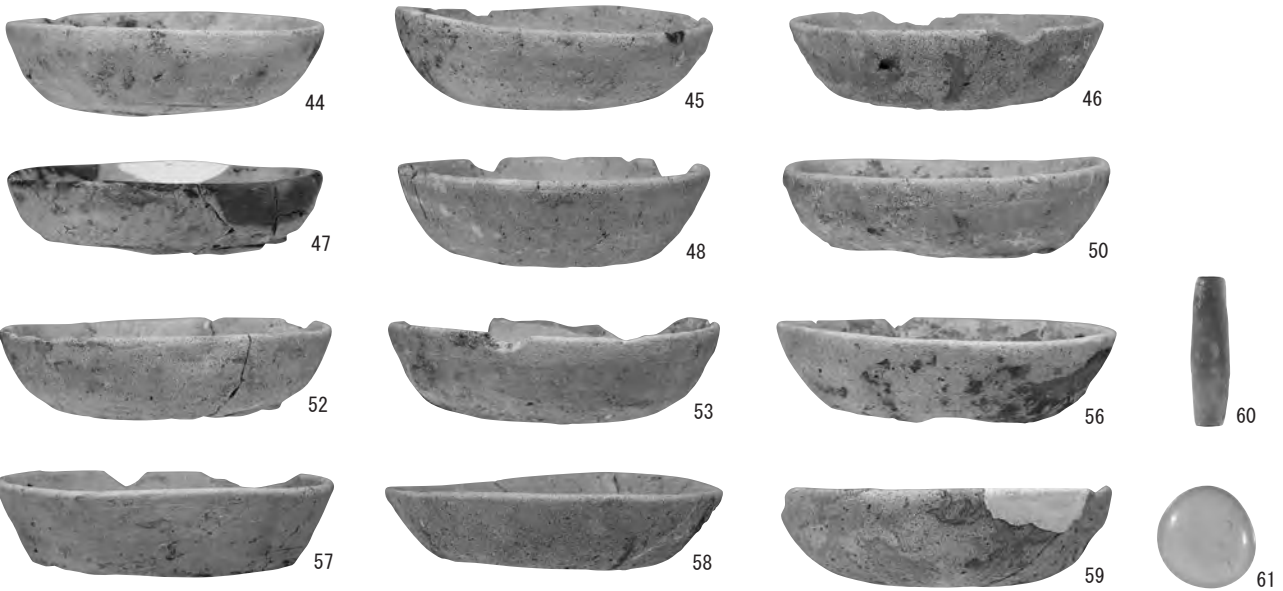
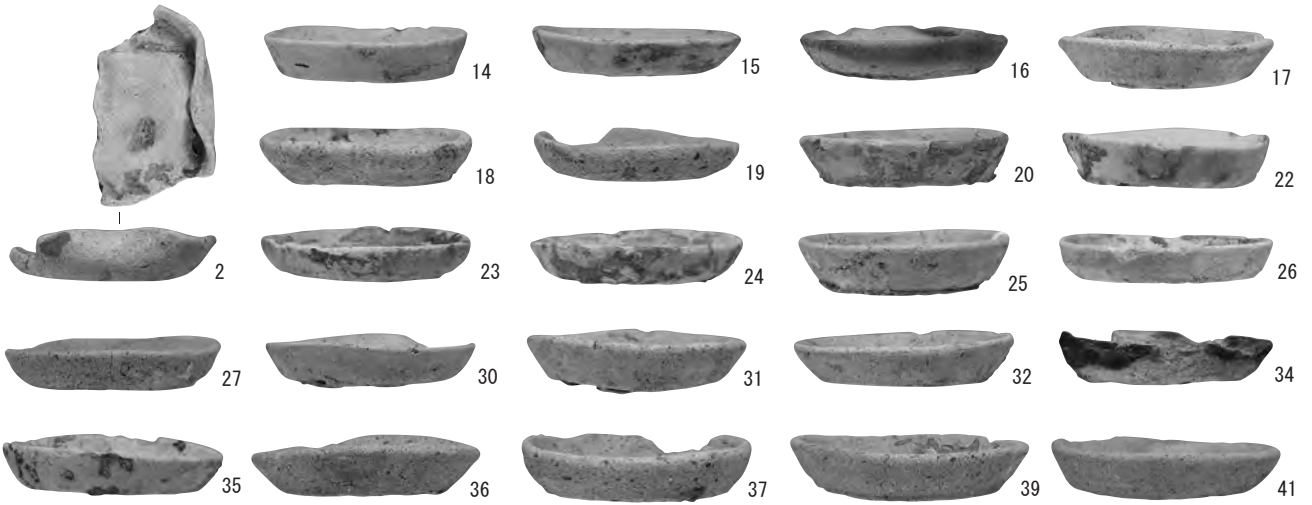
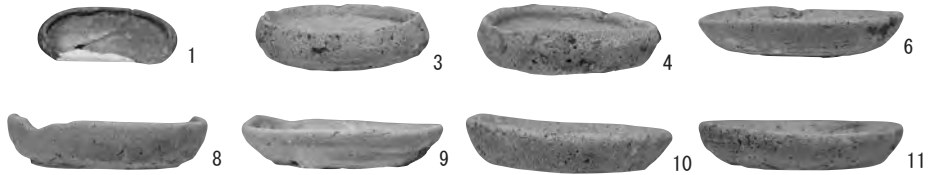


8. II区第5面全景(南から)

図版 4



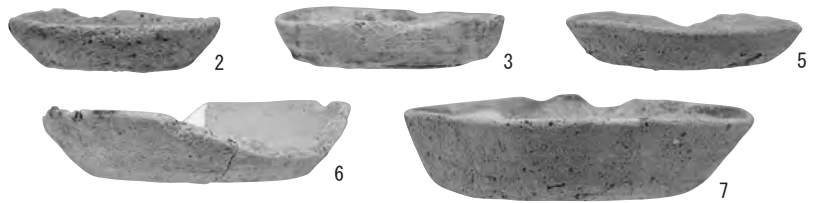
1. 第2面 構成土出土遺物



2. 第3面 かわらけ溜まり1出土遺物



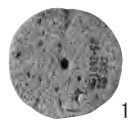
3. 第3面 ピット出土遺物



4. 第3面 構成土出土遺物



5. 第4面 土坑1出土遺物



6. 第4面 構成土出土遺物



7. 第5面 土坑3出土遺物

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座一丁目919番19地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座一丁目919番19地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年6月27日～同年7月16日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約28㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 原 廣志

調査員 梅岡ケイト・小野夏菜

作業員 倉澤六郎・金丸義一・丹野正弘・沼上三代治

（公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター）

4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を原 廣志、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系（座標系 A R E A 9）を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZY」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

遺構：■ 整地・地業範囲

遺物：■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲

12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』

瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』

渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』

貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』

13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである（順不同）。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美（玉川文化財研究所）

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	277
第1節 調査に至る経緯と経過	277
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	277
第3節 周辺の考古学的調査	278
第二章 堆積土層	283
第三章 発見された遺構と遺物	283
第1節 第1面の遺構と遺物	283
第2節 第2面の遺構と遺物	289
第3節 第3面の遺構と遺物	291
第四章 まとめ	293

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	279	図14 第1面 構成土出土遺物	288
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	281	図15 第2面 遺構分布図	289
図3 調査区位置図	282	図16 第2面 土坑11出土遺物	289
図4 調査区配置図	282	図17 第2面 土坑11～14	290
図5 調査区南壁 土層断面図	283	図18 第2面 土坑13出土遺物	290
図6 第1面 遺構分布図	284	図19 第2面 土坑14出土遺物	290
図7 第1面 土坑4出土遺物	284	図20 第2面 遺構外出土遺物	290
図8 第1面 土坑1～10	285	図21 第3面 遺構分布図	291
図9 第1面 土坑5出土遺物	285	図22 第3面 土坑15出土遺物	291
図10 第1面 土坑8出土遺物	286	図23 第2面 土坑15～17	291
図11 第1面 土坑9出土遺物	286	図24 第3面 土坑17出土遺物	292
図12 第1面 土坑10出土遺物	286	図25 第3面 構成土出土遺物	292
図13 第1面 遺構外出土遺物	287		

表 目 次

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧	280	表5 出土動物遺体一覧	296
表2 第1面 出土遺物観察表	294	表6 遺構計測表	296
表3 第2面 出土遺物観察表	295	表7 出土遺物一覧表	297
表4 第3面 出土遺物観察表	296		

図 版 目 次

図版 1	1. 調査区南壁土層断面(北から) …… 299	7. 第 1 面 構成土出土遺物(1) …… 301
	2. 第 1 面全景(北東から) …… 299	図版 4
図版 2	1. 第 2 面全景(北西から) …… 300	1. 第 1 面 構成土出土遺物(2) …… 302
	2. 第 3 面全景(北西から) …… 300	2. 第 2 面 土坑11出土遺物 …… 302
図版 3	1. 第 1 面 土坑 4 出土遺物 …… 301	3. 第 2 面 土坑13出土遺物 …… 302
	2. 第 1 面 土坑 5 出土遺物 …… 301	4. 第 2 面 土坑14出土遺物 …… 302
	3. 第 1 面 土坑 8 出土遺物 …… 301	5. 第 2 面 遺構外出土遺物 …… 302
	4. 第 1 面 土坑 9 出土遺物 …… 301	6. 第 3 面 土坑15出土遺物 …… 302
	5. 第 1 面 土坑10出土遺物 …… 301	7. 第 3 面 土坑17出土遺物 …… 302
	6. 第 1 面 遺構外出土遺物 …… 301	8. 第 3 面 構成土出土遺物 …… 302
		図版 5
		1. 出土動物遺体 …… 303

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座一丁目919番19で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）の範囲内にあたる。建築主から鋼管杭工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成20年3月3日～同年3月4日に6㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、12～14世紀の遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される28㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、原 廣志が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年6月27日～同年7月16日までの約3週間で、調査面積は約28㎡である。現地地表の標高は約6.8mを測る。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を1.1m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～2面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。さらに調査区を狭めてトレンチを掘り込んだところ、中世の地山面において遺構が検出された。そして、7月16日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系（座標系AREA9）に準じた、鎌倉市四級基準点（ $X = -76592.873$ 、 $Y = -25173.620$ ）、（ $X = -76629.429$ 、 $Y = -25174.237$ ）を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡（No.261）は、鎌倉市内中心部の南東域に位置し、国指定史跡鶴岡八幡宮境内（元八幡）にほど近い、鎌倉市材木座一丁目919番19に所在する。また、調査地点のすぐ北東側には、大船駅から久里浜駅を結ぶJR横須賀線が走行している。なお、本地点から材木座海岸までの距離は約700m強である。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡（No.245）、西は滑川の東岸を境に由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）と接し、東は能蔵寺跡（No.314）、実相寺旧境内遺跡（No.255）、弁ヶ谷遺跡（No.249）、光明寺旧境内遺跡（No.316）との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、地内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された、砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地のやや東側を南北方向に延びる道筋（小町大路）と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、やや南に下った向福寺付近で5m前後、遺構が発見された調査地点としては最も南に位置する材木座六丁

目742番4外地点(本分冊掲載)付近では4.0~4.5mほどで、近年の調査事例では海岸線に近い調査地点である。

歴史的には、相模湾に面して南西に開けた弓形の海岸は由比ヶ浜(前浜・西浜)と呼び、鎌倉時代に材木を扱う商工業者組合である「座」ができたことがこの地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7カ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千束積座・相物座・松物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港遺跡として国の史跡に指定されている。

また、本調査地点の西側には、かつての小町大路とされる道筋があり、六浦道と交差する場所にあった筋替橋から宝戒寺、本覚寺の門前を通り、大町大路を横断、乱橋を渡って材木座まで通ずる基幹道路であった。若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、本興寺、妙長寺、長勝寺、来迎寺、実相寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、捕陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、中小様々な試掘調査までを含めると、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な個人専用住宅建設に伴う調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、本調査地点を中心に示すことができた材木座町屋遺跡の北側域にあたる12地点の内容について概観したい。

地図上で最も北側に位置する①材木座一丁目910番地点(森・堀川 2001)は、遺跡包蔵地内では北端寄りにあたり、滑川の支流である逆川の左岸域に所在する。調査面積は450㎡で、調査事例のなかでは面積の広い地点である。本調査地点は国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)から北西約50mに位置する。調査で発見された遺跡の時代は中世と古代に大別され、中世ではこの地域の基幹と推測される道路やそれと直交関係にある溝、井戸、方形土坑、柱穴などが検出された。特に方形土坑からは動物骨の切断片や未加工品が多く検出され、この地域一帯が職人集団や商工業者との関わりが深い地域であることを示唆している。古代では6棟を数える掘立柱建物が検出され、これらは側柱建物であるが、中世以前の様相を知るうえで注目される。

元八幡のすぐ南に位置する②材木座一丁目893番9地点は本報告書に掲載されている。限られた面積での調査であるためその詳細は不明であるが、出土遺物から13世紀後半から14世紀前半頃のものとして推測される溝や土坑、ピットなどがわずかに確認されている。

本地点の北西約80mの道路沿いに位置する③材木座一丁目144番3地点(木村・田代 1991)は、遺跡内では最も早く調査が行われた地点である。調査面積は2本のトレンチを合わせても40㎡に過ぎず、遺構検出面は地山面の一面のみであった。遺構は柱穴や井戸、土坑、溝などで、調査区内では明確な建物は確認されていないが、柱穴列の存在からある程度の規模をもつ掘立柱建物や柵列状の遺構が想定されている。小規模な溝は、町屋の小区画や路地などの小路に伴う側溝との考えが示されている。これらは出土遺物から井戸や土坑の一部は13世紀前半に遡るとし、また確認された遺構面は14世紀前半から中頃にかけて削平されたと考えられている。

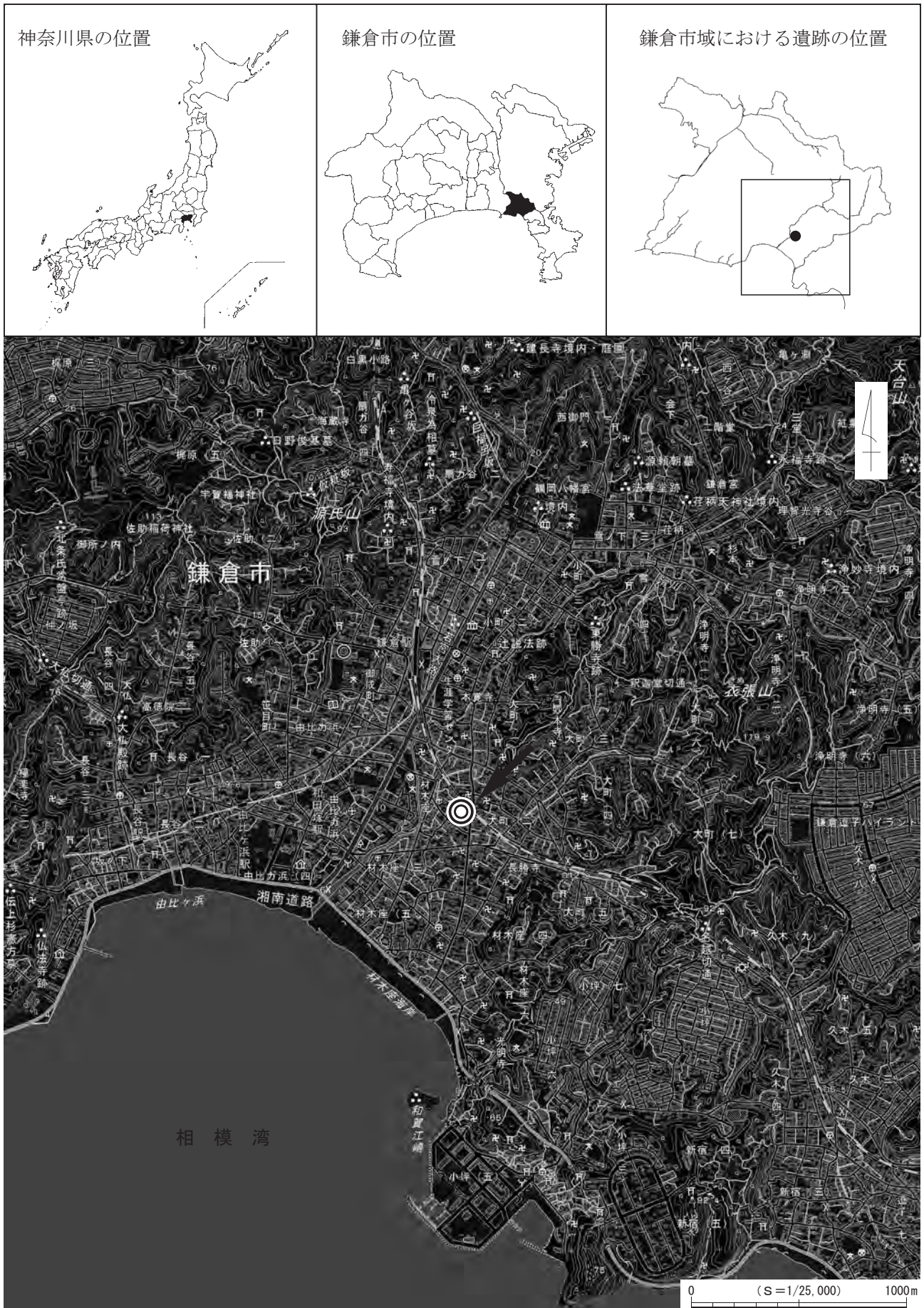


図1 遺跡位置図

道路を挟んだ斜向かいに位置する④材木座一丁目890番7地点(汐見・渡邊 2000)では、14世紀代を中心とする小規模な柱穴や方形竪穴建物、土坑、溝などが確認されているが、調査地点が狭小なこともあり、各遺構の詳細は不明である。遺構の内容から想定すると本地点も③地点と同様に町屋ないし庶民層の生活の場であったと考えられる。

小町大路の西側道路に面した⑤材木座一丁目921番5外地点(齋木・降矢 2007)でも10㎡ほどの狭小な調査地点であったが、13世紀後半から14世紀代の南北方向の溝や柱穴、土坑などが発見されている。主要な遺構は土坑と柱穴であるが、建物の復元までには至っていない。

④地点の道路を挟んだ斜向かいの南側では連続して3ヵ所、⑥材木座一丁目889番4地点(A地点)、⑦材木座一丁目889番5地点(B地点)、⑧材木座一丁目149番4地点(C地点)(降矢・齋木 2008a～c)の調査が行われている。いずれも生活痕跡は13世紀前半から確認され、3面ないし4面の生活面、遺構確認面が検出されている。⑥地点では15世紀の大小のかわらけがまとまって廃棄されたかわらけ溜まりが発見されている。

小町大路沿いの東側に位置する⑨材木座二丁目208番1地点(伊丹・渡邊 2017)では、4面にわたる生活面が検出され、13世紀前半から15世紀にかけての遺構変遷が示されている。第1面は土坑、第2面は方形竪穴建物が主体で、第3・4面は礎石をもつ柱穴が調査区全体に広がり、掘立柱建物群の存在を示唆している。特に調査地点の性格を考えるうえで、第2面の方形竪穴建物群は倉庫としての利用をうかがわせるものであり、加えて小町大路に面している調査地点であることは重要な点であろう。

小町大路からやや西に入った⑩材木座三丁目164番外地点(熊谷 2009)は、調査面積1000㎡を超える遺跡地内では最も広い調査地点である。遺構は、南北道路、溝、方形竪穴建物、井戸、土坑墓のほか、多数の柱穴や土坑など、遺構総数は合わせて1,000基を超える。これらの遺構は13世紀前半から中頃と、13世紀後半から14世紀代に大別され、調査区西端で発見された南北道路には側溝が伴っている。また、方形竪穴建物は道路に面するように配され、鑿や槍鉋といった工具類の出土や、切断痕のある石材片や鉄滓、鞆の羽口、加工痕の残る動物骨なども出土しており、調査者は石製品や鉄製品、骨角製品などの生産・加工に携わる職人集団の存在を示唆している。

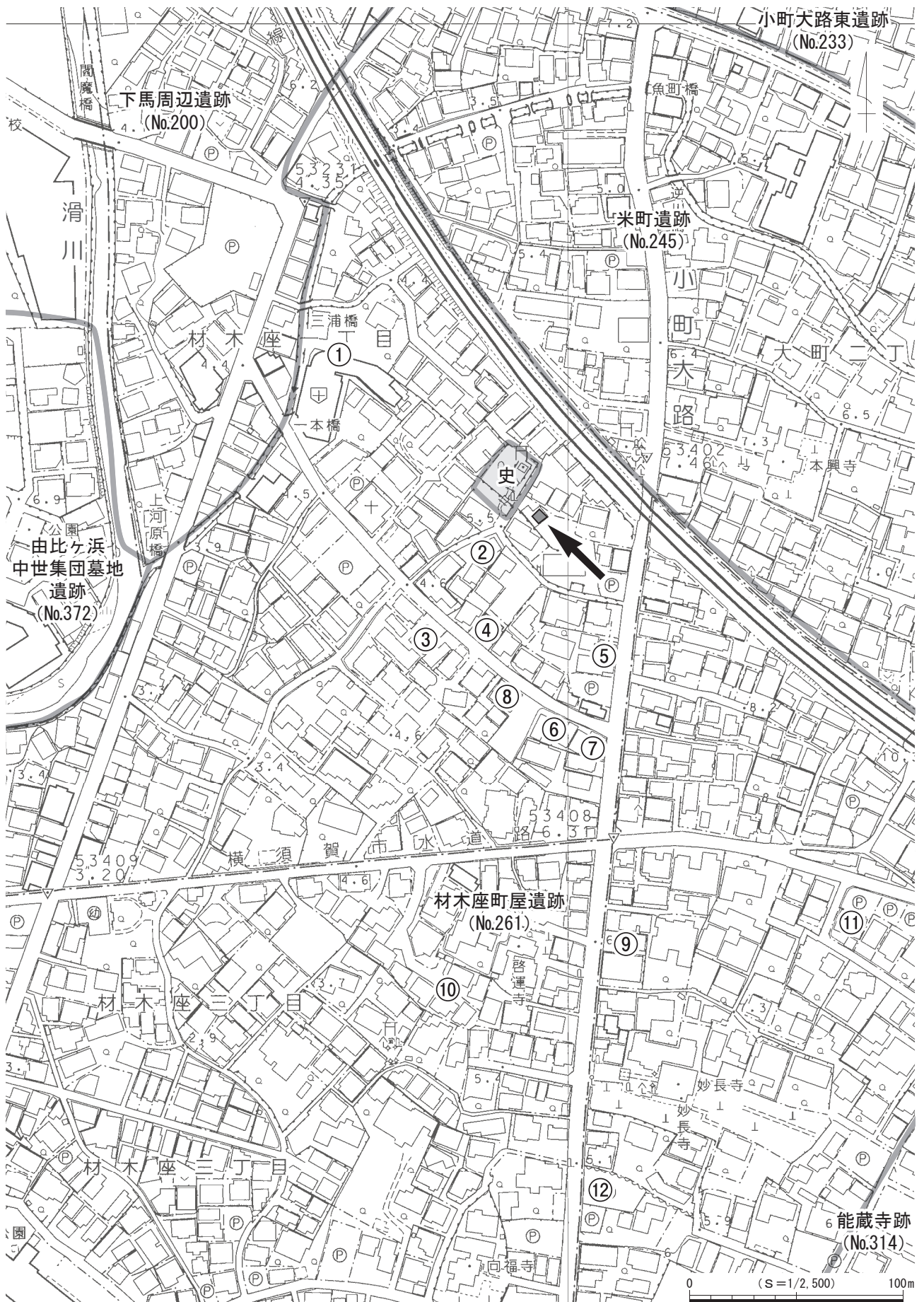
東端寄りに位置する⑪材木座二丁目217番6外地点(瀬田 1995)では、調査面積がL字状の不規則な条件にも関わらず3面にわたる生活面が確認された。遺構の中心は第2面の14世紀代の時期であるが、その主体である方形竪穴建物や方形土坑はほぼ同一主軸上にあり、特徴的な遺物として、鉾滓、取鍋、鞆の羽口などの鑄造に関わるものや、砥石や切断痕、加工痕を有する動物骨などの出土もあり、⑩同様に金属製品や骨角製品の生産・加工に携わる職人集団の可能性を示唆している。

最後に地図上では最も南側に位置する⑫材木座二丁目236番1地点(安藤 2017)は、小町大路に面し、13世紀から15世紀代にわたる遺構・遺物が検出されている。遺構は方形竪穴建物や掘立柱建物、柱穴、

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目919番19地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目910番地点	森・堀川 2001
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目893番9地点	本報告
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3地点	木村・田代 1991
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7地点	汐見・渡邊 2000
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目921番5外地点	齋木・降矢 2007
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番4地点(A地点)	降矢・齋木 2008 a
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番5地点(B地点)	降矢・齋木 2008 b
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目149番4地点(C地点)	降矢・齋木 2008 c
⑨	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目208番1地点	伊丹・渡邊 2017
⑩	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目164番外地点	熊谷 2009
⑪	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目217番6外地点	瀬田 1995
⑫	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目236番1地点	安藤 2017

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡



図3 調査区位置図

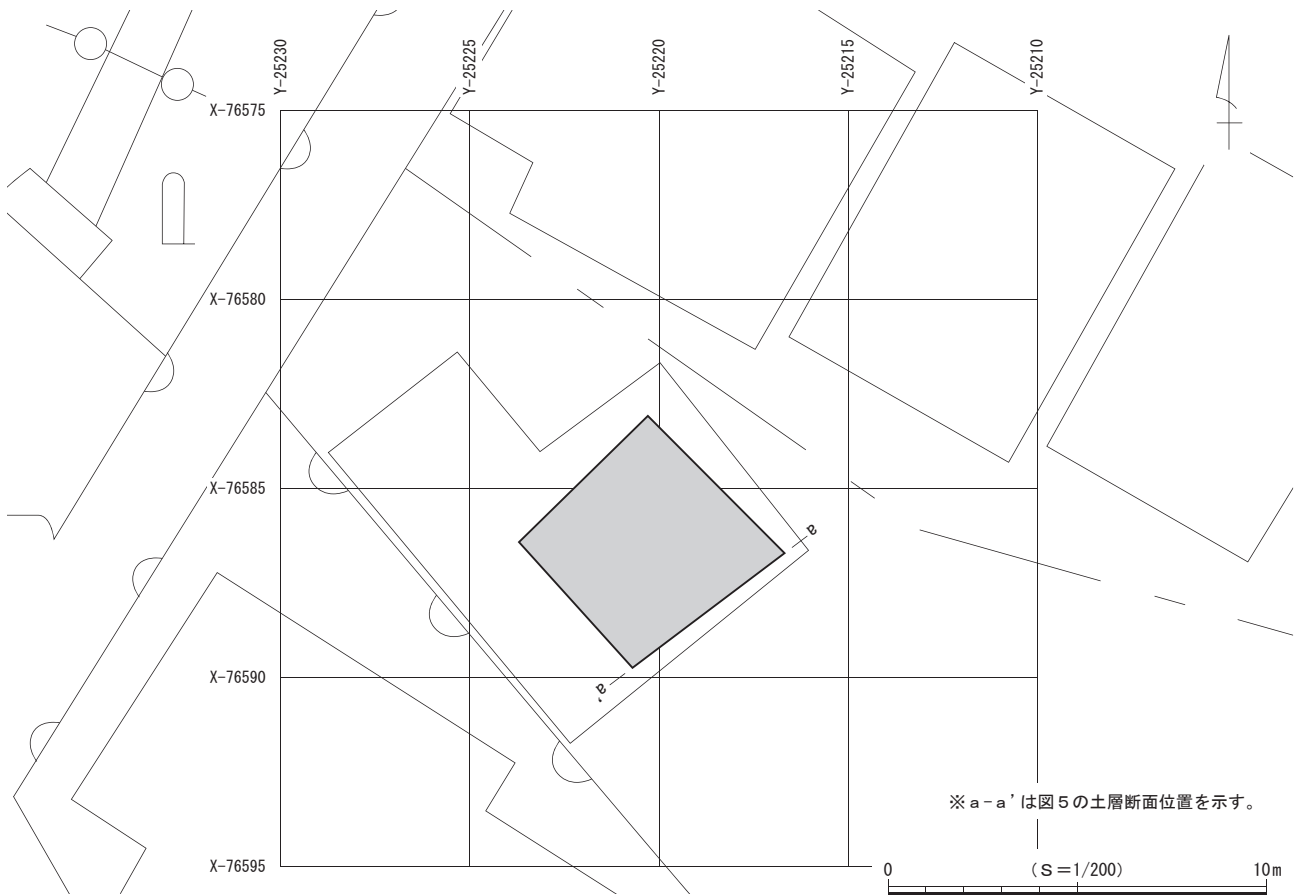


図4 調査区配置図

井戸、土坑などで、これらは東西溝の南側から発見されており、なかでも方形竪穴建物群の配置状況は⑩地点や⑪地点の遺構配置ときわめて似ており、出土遺物に韃の羽口や鉄滓などの鑄造関連が含まれていることも本地点の性格を考えるうえでの参考となろう。

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～3面までの合計3面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約6.8mを測り、最上部には層厚30cm前後の表土(1層)、以下には層厚40～50cmの締まりのない茶褐色砂質土(2層)と層厚40cm前後の締まりのある茶褐色砂質土(3層)が堆積している。遺構確認面の第1面は4層上面で確認し、確認面の標高は5.7m前後を測る。4層は締まりのある茶褐色砂による整地層で、層厚20cm前後である。4層の下位には多量の茶灰色砂ブロックを含む暗茶褐色砂(5層)が層厚15cm前後堆積する。第2面は6層上面で確認し、確認面の標高は約5.3mを測る。6層は多量の茶白色砂と茶灰色砂を含む茶褐色砂による整地層で、層厚20～40cmである。第3面は中世の地山面である7層上面で確認し、確認面の標高は5.0m前後を測る。7層は締まりのある黄灰色砂で、層厚10cm前後である。7層の下位には、8層の黄灰色貝粒砂が堆積している。

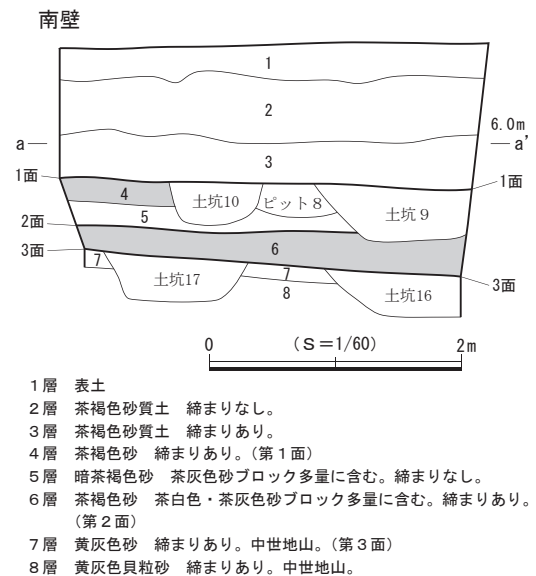


図5 調査区南壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は土坑17基、ピット8基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。なお、各面の遺構および遺構外、構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表5に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は約5.7m前後を測る。4層は締まりのある茶褐色砂による整地層で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑10基、ピット8基であり、調査区全面に分布していた(図6)。土坑1・9・10の3基は調査区外に及んでおり、攪乱および他遺構との重複のため、全容を把握できた土坑は土坑2・3・7・8の4基と少ない。

遺物は主にかわらけ、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末～14世紀前半に属すると考えられる。

(1) 土 坑

土坑 1 (図 8)

調査区北隅に位置する。北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは隅丸方形ないし楕円形を呈すると推定されるが、詳細は不明である。底面は東壁側に向かってわずかに低くなっていく。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、北東-南西方向の現存長1.65m、北西-南東方向の現存長63cm、深さ26cmで、坑底面の標高は5.70mを測る。主軸方位は南東壁を基準にするとN-46°-Eを指す。

遺物はかわらけ47点、磁器2点、陶器12点が出土した。

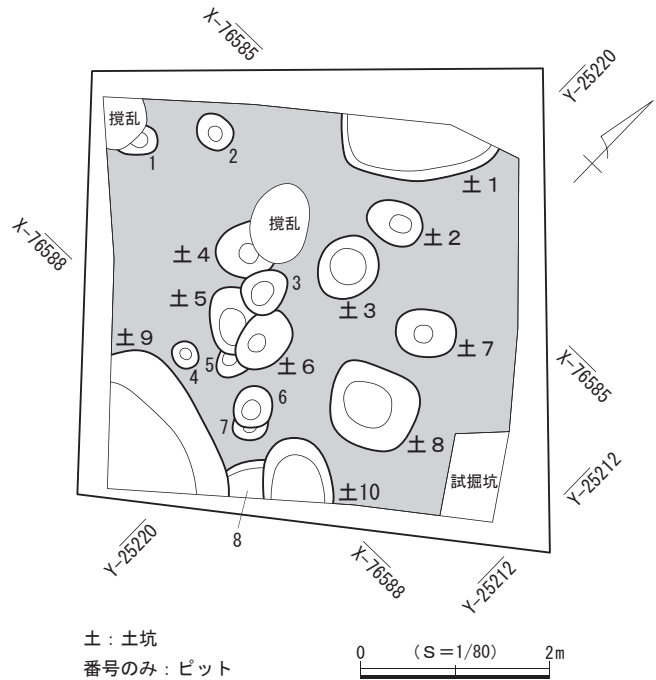


図 6 第 1 面 遺構分布図

土坑 2 (図 8)

調査区北側に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸60cm、短軸45cm、深さ17cmで、坑底面の標高は5.72mを測る。主軸方位はN-74°-Eを指す。

遺物はかわらけが2点出土した。

土坑 3 (図 8)

調査区中央付近に位置する。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸62cm、深さ18cmで、坑底面の標高は5.71mを測る。主軸方位はN-5°-Wを指す。

遺物はかわらけ3点、陶器1点が出土した。

土坑 4 (図 8)

調査区中央付近のやや西側に位置する。東側をピット3、北側を攪乱によって壊されている。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面は狭く、ほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は播り鉢状を呈する。規模は南北現存長59cm、東西63cm、深さ41cmで、坑底面の標高は5.65mを測る。

出土遺物 (図 7)

遺物はかわらけ4点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径11.9cmに復元される中形品である。

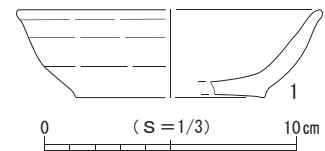
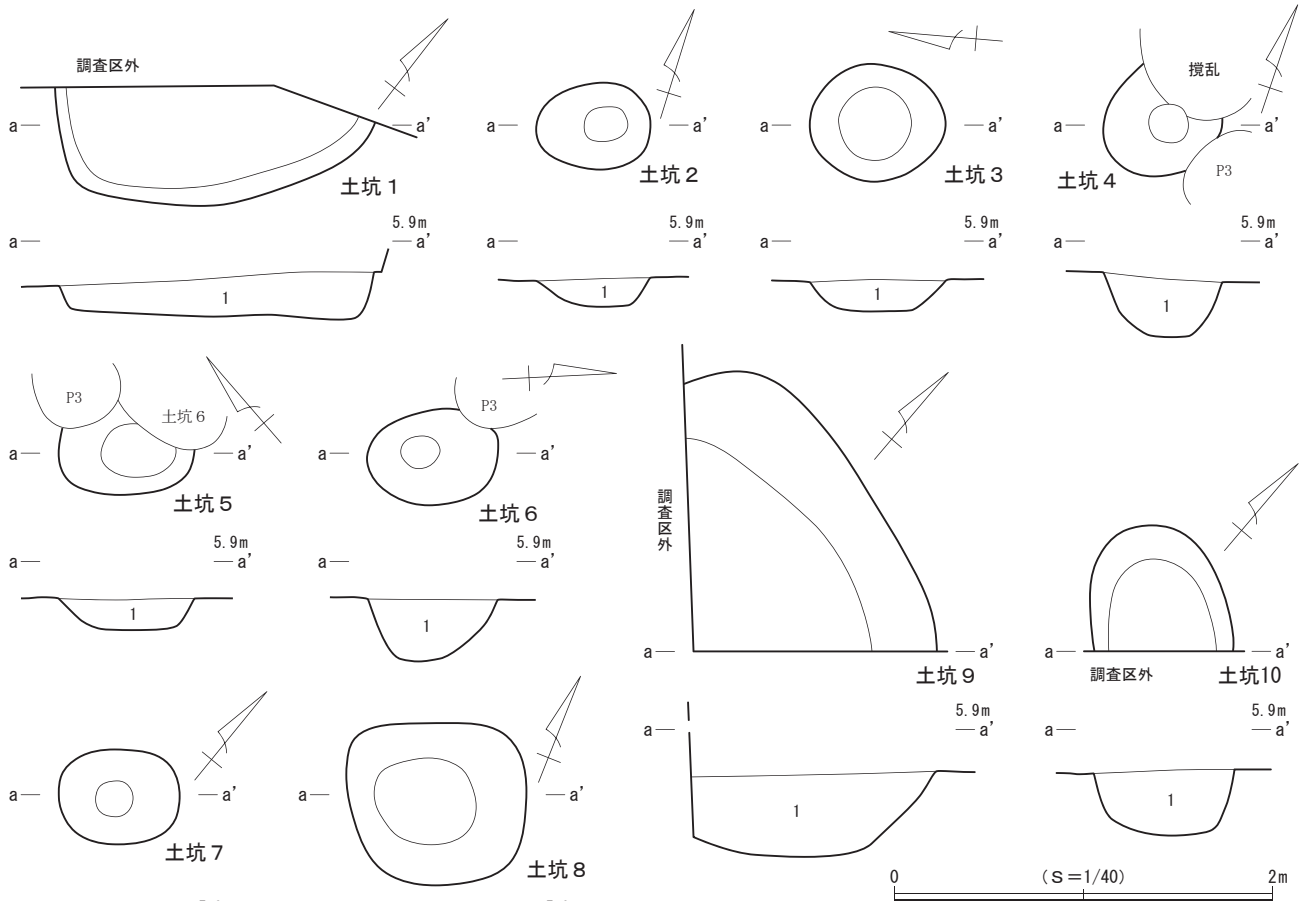


図 7 第 1 面 土坑 4 出土遺物

土坑 5 (図 8)

調査区中央のやや南西側に位置する。南側でピット5と重複して北側を壊し、北東壁を土坑6とピット3によって壊されている。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて



- 土坑 5
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物微量、貝粒少量含む。締まりなし。
- 土坑 6
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物少量、貝粒中量、かわらけ片極少量含む。締まりなし。
- 土坑 7
1層 茶褐色弱砂質土 黄灰砂、炭化物、貝粒中量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 8
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 9
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒微量、炭化物・かわらけ片含む。
- 土坑 10
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物・貝粒少量、かわらけ片微量含む。締まりなし。
- 土坑 1
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒・炭化物・貝粒・かわらけ片少量含む。締まりなし。
- 土坑 2
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物微量、貝殻多量、貝粒少量含む。締まりなし。
- 土坑 3
1層 茶褐色弱砂質土 泥岩粒微量、黄灰砂・炭化物、貝粒少量、かわらけ片含む。締まりなし。
- 土坑 4
1層 茶褐色弱砂質土 炭化物少量含む。締まりなし。

図8 第1面 土坑1～10

立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸71cm、短軸現存長50cm、深さ20cmで、坑底面の標高は5.71mを測る。主軸方位はN-49°-Wを指す。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ6点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は渥美産甕の口縁部破片であり、口縁端部内側に一条の凹線を巡らせる。

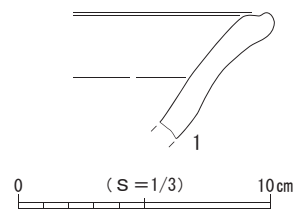


図9 第1面 土坑5出土遺物

土坑6 (図8)

調査区中央のやや南西側に位置する。南側から西側で土坑5およびピット5と重複して土坑5の東側とピット5の北側を壊し、ピット3によって北西壁の一部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は掘り鉢状を呈する。規模は長軸70cm、短軸50cm、深さ33cmで、坑底面の標高は5.63mを測る。主軸方位はN-3°-Eを指す。

遺物はかわらけ11点、陶器2点が出土した。

土坑7 (図8)

調査区東側に位置する。平面形は楕円形を呈し、底面は狭く、ほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸64cm、短軸50cm、深さ14cmで、坑底面の標高は5.74mを測る。主軸方位はN-51°Eを指す。

遺物はかわらけ6点、磁器1点、土師器1点が出土した。

土坑8 (図8)

調査区南東側に位置する。平面形はおおむね隅丸方形を呈するが、南壁側がやや短い隅丸台形状に近い。底面は東壁側に向かってわずかに高くなっていく。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸93cm、短軸86cm、深さ15cmで、坑底面の標高は5.75mを測る。

出土遺物 (図10)

遺物はかわらけ33点、磁器1点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径12.0cmを測る中形品である。

土坑9 (図8)

調査区南隅に位置する。東側でピット8と重複し、西壁側を壊している。大部分が調査区外にあるため遺構の全容は不明であるが、現存する北壁側の西端部が丸みを呈することと、断面形から平面形を推定すると、おおむね隅丸長方形を呈すると考えられる。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形と推定される。規模は長軸現存長1.91m、短軸現存長1.22m、深さ53cmで、坑底面の標高は5.57mを測る。

出土遺物 (図11)

遺物はかわらけ72点、磁器1点、陶器10点、土器1点、瓦質土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は龍泉窯系青磁碗であり、内面見込みに片彫りで略化した花文が施されるI-2類である。

土坑10 (図8)

調査区南壁側に位置する。南東側が調査区外にあり、遺構の全容は不明である。南西側でピット8と重複して北東壁側を大きく壊している。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は急角度で立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長66cm、短軸74cm、深さ38cmで、坑底面の標高は5.62mを測る。

出土遺物 (図12)

遺物はかわらけ18点、陶器3点、土製品1点、石製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は外径が最大1.5cmを測る管状土錘である。

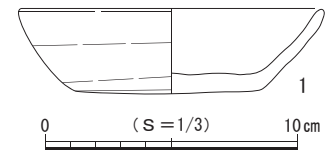


図10 第1面 土坑8出土遺物

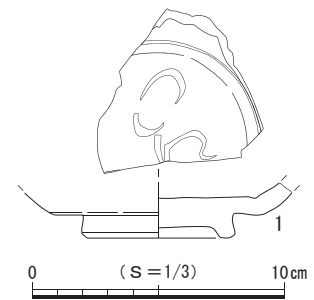


図11 第1面 土坑9出土遺物

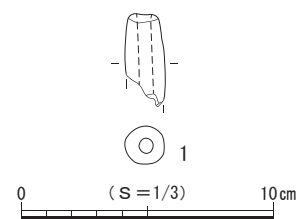


図12 第1面 土坑10出土遺物

(2) ピット (図6)

第1面では、8基を検出した。いずれも調査区の中央から西・南側に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径29~51cm、深さ17~40cmである。

遺物は8基中、ピット1~7の7基から出土し、詳細は出土遺物一覧表(表7)に掲げた。

(3) 第1面 遺構外出土遺物 (図13)

第1面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち17点を図示した。

1~3はかわらけであり、このうち1は口径7.9cmに復元される手づくね成形の小形品である。2・3はロクロ成形で、2は口径7.3cmの小形品、3は口径12.1cmに復元される中形品である。4は青白磁の碗であり、高台は浅く削り出され、体部内面には粗い櫛歯状工具による施文が施され、見込みには高台より小径の段が付く。高台内を除いて明緑灰色を呈する釉が施され細貫入を生じる。5~14は常滑産陶器であり、このうち5は壺の口縁部小破片、6~9は甕であり、口縁部形状から6は5型式、7は8型式にそれぞれ比定される。8・9は肩部に正格子目の押印が施される。10~13は片口鉢I類であり、13の内面には使用による摩耗が見られる。14は片口鉢II類と類推される口縁部破片を磨具に利用し、口縁端部から破断面にかけて研磨をしている。15は骨製品であり、メジロザメ科の椎骨に加工が施されたも

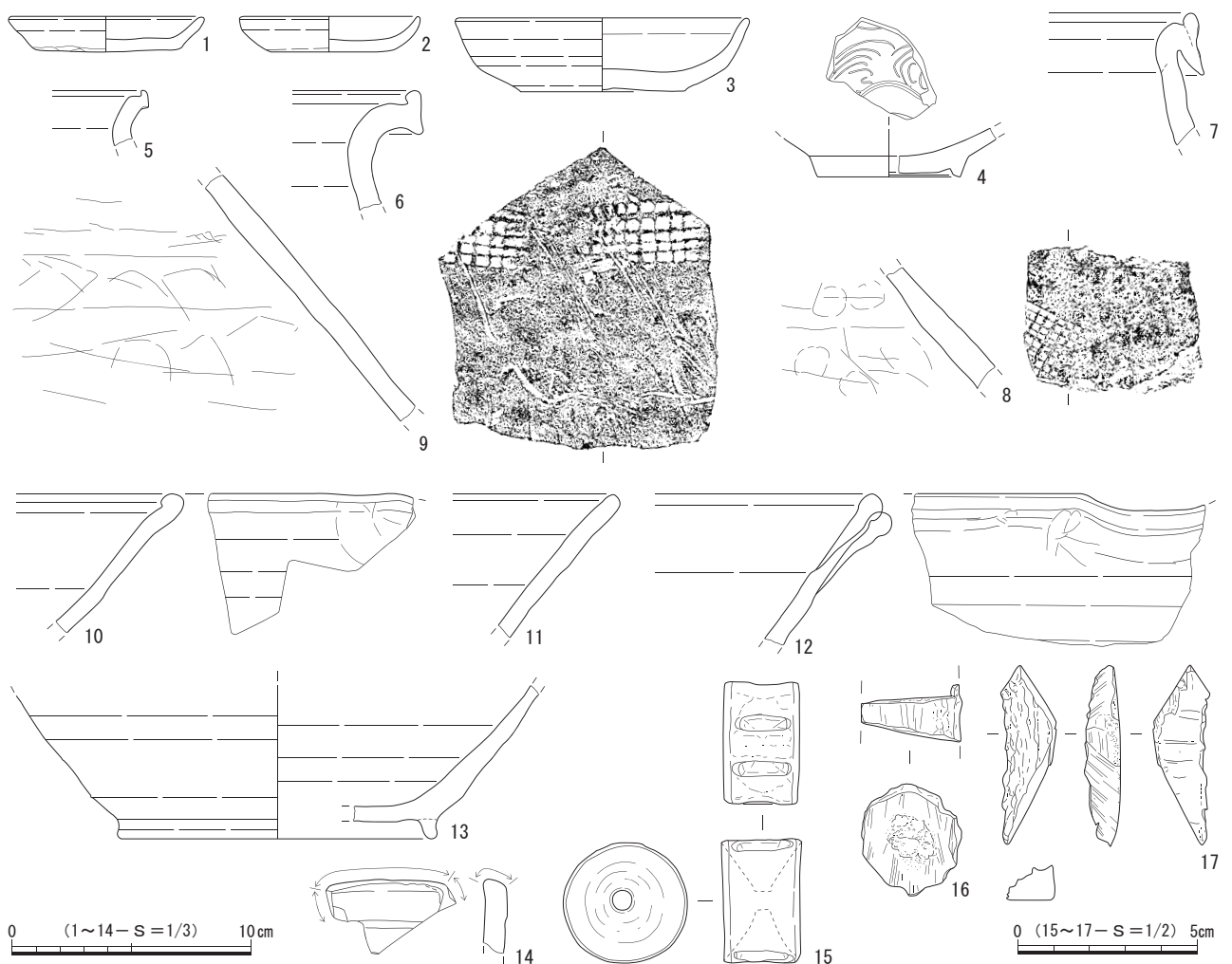


図13 第1面 遺構外出土遺物

ので、中央部に径0.5cmの円孔が貫通し、側面が使用により摩耗している。16・17は鹿角に加工を施した未成品とみられる。

(4) 第1面 構成土出土遺物(図14)

第1面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち30点を図示した。

1～17はロクロ成形のかわらけであり、1は口径4.5cmに復元される極小品、2～12は口径5.4～8.0cmの小形品、13は法量不明の底部破片であり、底部処理は静止糸切である。14～16は口径12.0～12.6cmに復元される中形品、17は口径13.0～13.6cmを測る大形品である。11は口縁部に油煤が付着し灯明具としての使用が認められる。18は白磁小壺であり、高台は削り出し。不透明の釉が体部下位～高台を除いて施される薄胎の優品である。19は龍泉窯系青磁の坏であり、口縁部が外方に屈折し端部が上方に短くつまみ上げられる。Ⅲ-3a類に比定される。20は瀬戸産の筒形容器。21は渥美産の片口鉢。

22～27は常滑産陶器であり、このうち22・23は短頸壺、24～26は甕であり、24・25は口縁部形状から6b型式に比定される。26は肩部に正格子目の押印が施される。27は片口鉢I類である。28は瓦質土器の火鉢。29は須恵器の甕であり、外面には平行叩き、内面には同心円状の叩きが施される。古墳時代後期ないし奈良時代の所産であろう。30の銭貨は、皇宋通寶(1038年初鑄)である。

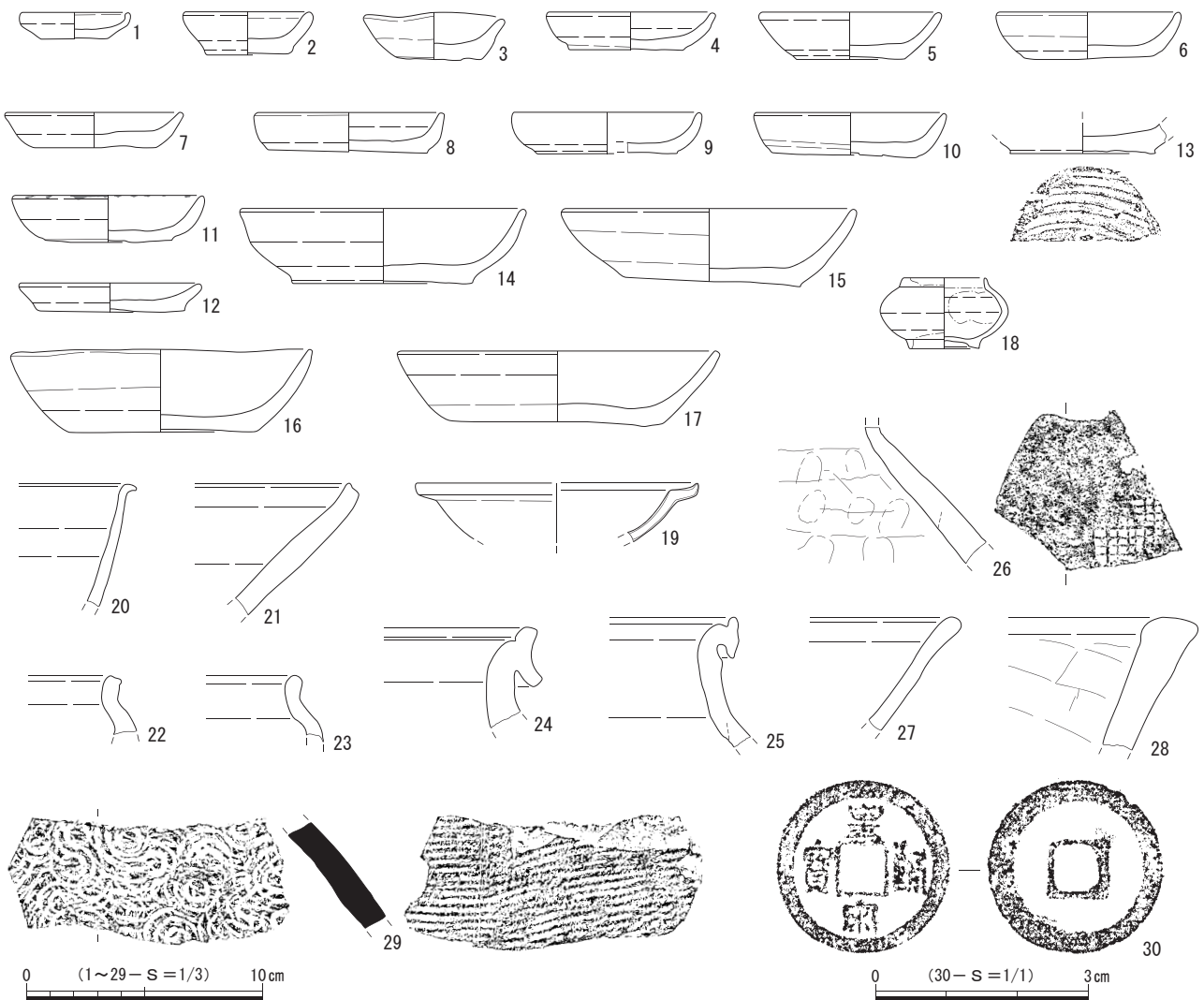


図14 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は6層上面で検出され、確認面の標高は5.3mを測る。6層は多量の茶白色砂と茶灰色砂を含む茶褐色砂による整地層で、遺構はこの整地層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は土坑4基である(図15)。調査区が狭小なため分布状況を述べることは難しいが、調査区東側にやや偏在しているように捉えられる。

遺物は主にかわらけ、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、金属製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉に属すると考えられる。

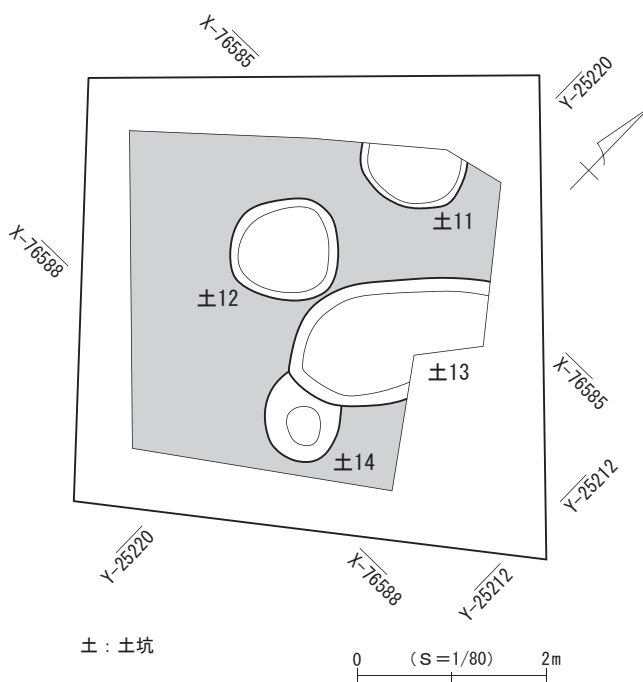


図15 第2面 遺構分布図

(1) 土坑

土坑11(図17)

調査区北隅付近に位置する。北側約半分が調査区外に及んでいる。平面形は略円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸現存長67cm、深さ17cmで、坑底面の標高は5.10mを測る。

出土遺物(図16)

遺物はかわらけ17点、陶器3点、土師器5点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.0cmを測る小形品である。

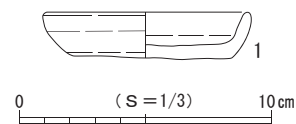


図16 第2面 土坑11出土遺物

土坑12(図17)

調査区中央付近に位置する。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁はやや開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸1.06m、深さ20cmで、坑底面の標高は5.07mを測る。主軸方位はN-45°-Eを指す。

遺物はかわらけ37点、陶器2点、土師器4点、須恵器1点が出土した。

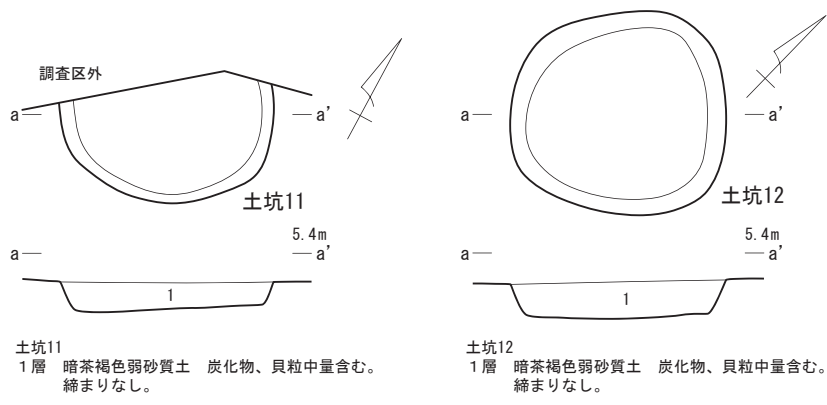
土坑13(図17)

調査区東側に位置する。北東側が調査区外に及び、南側で土坑14と重複して北壁の一部を壊している。平面形は楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長2.10m、短軸1.30m、深さ30cmで、坑底面の標高は5.00mを測る。主軸方位はN-37°-Eを指す。

出土遺物(図18)

遺物はかわらけ38点、磁器1点、陶器4点、土師器3点、土製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は全長4.3cm、最大幅2.9cmを測る管状土錘である。



土坑11
1層 暗茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量含む。
締まりなし。

土坑12
1層 暗茶褐色弱砂質土 炭化物、貝粒中量含む。
締まりなし。

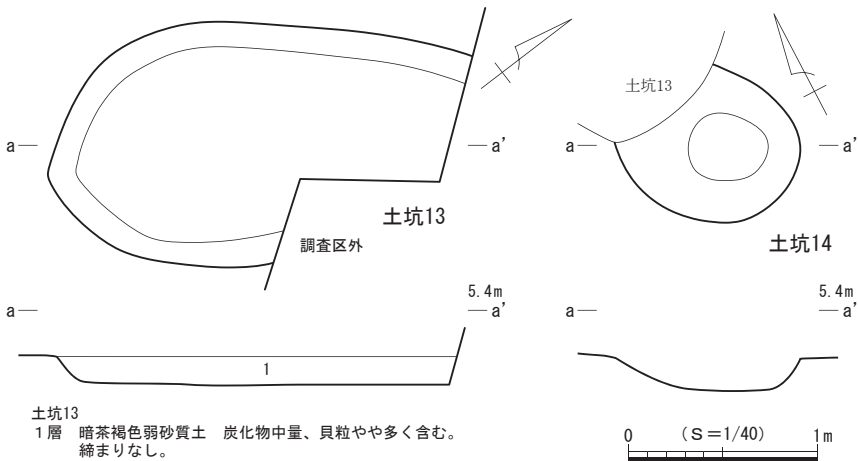


図17 第2面 土坑11~14

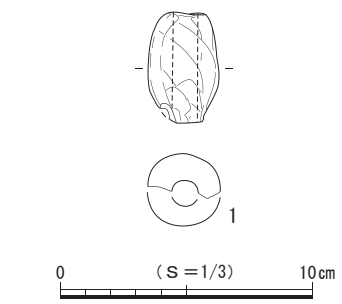


図18 第2面 土坑13出土遺物

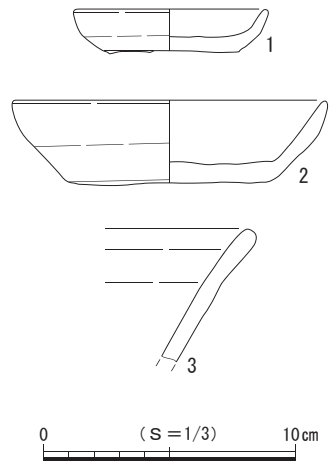


図19 第2面 土坑14出土遺物

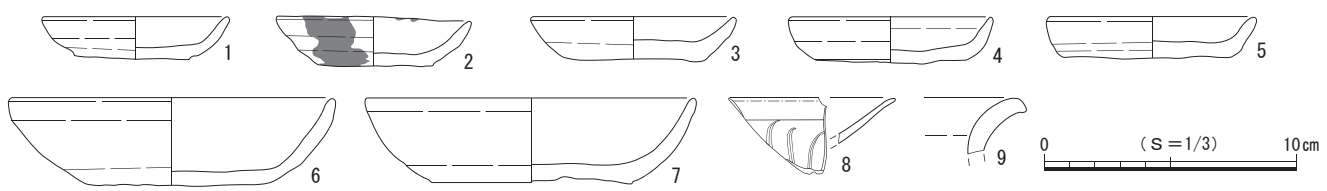


図20 第2面 遺構外出土遺物

土坑14 (図17)

調査区南側に位置する。土坑13と重複し、北壁の一部が壊されている。平面形は略円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は北西側で大きく開くほかは開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長88cm、短軸80cm、深さ17cmで、坑底面の標高は4.97mを測る。

出土遺物 (図19)

遺物はかわらけ22点、陶器3点、土師器1点、金属製品1点が出土し、このうち3点を図示した。
1・2はロクロ成形のかわらけであり、1が口径7.5cmを測る小形品、2が口径12.3cmを測る中形品、3が常滑産片口鉢I類である。

(3) 第2面 遺構外出土遺物 (図20)

第2面では、遺構以外からも遺物が出土しており、このうち9点を図示した。
1~7はロクロ成形のかわらけであり、このうち1~5は口径7.3~8.1cmの小形品、6は口径12.8cmの中形品、7は口径13.0cmに復元される大形品である。2は口縁部の内外面に油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。8は白磁碗であり、内面に縦位のヘラ描き文を施す。9は常滑産の壺である。

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面は調査区の南壁側をトレンチ状に掘り込んで調査した。遺構は7層上面で検出され、確認面の標高は5.0m前後を測る。7層は層厚10cm前後の締まりのある黄灰色砂で湧水が激しい。遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は土坑3基で、調査時には性格不明の落ち込みとしていたが、形態と規模から本報告では土坑としている(図21)。

遺物は主にかわらけ、陶器、磁器、土師器、須恵器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられる。

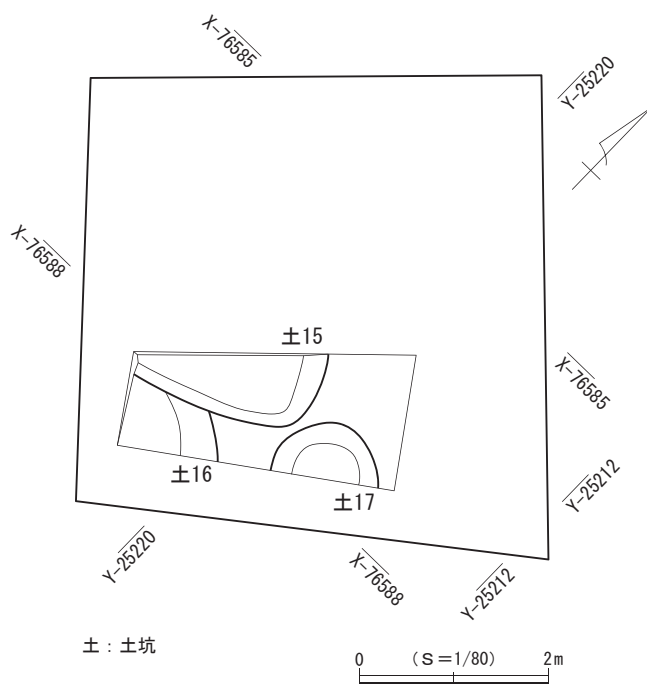


図21 第3面 遺構分布図

(1) 土坑

土坑15 (図23)

調査区南側に位置する。遺構の北西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑16と重複し、北壁の一部を壊している。平面形は隅丸長方形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長1.90m、短軸現存長80cm、深さ37cmで、坑底面の標高は4.6mを測る。主軸方位はN-65°-Eを指す。

出土遺物 (図22)

遺物はかわらけ8点、陶器7点、土師器3点、木製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は常滑産の片口鉢I類である。

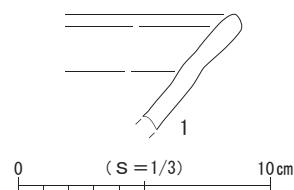


図22 第3面 土坑15出土遺物

土坑16 (図23)

調査区南隅に位置する。遺構の大部分が調査区外に及んでいる。また、土坑15と重複して北壁の一部が壊されているため、平面形および全容は不明である。底面はほぼ水平で、壁は大きく開いて立ち上が

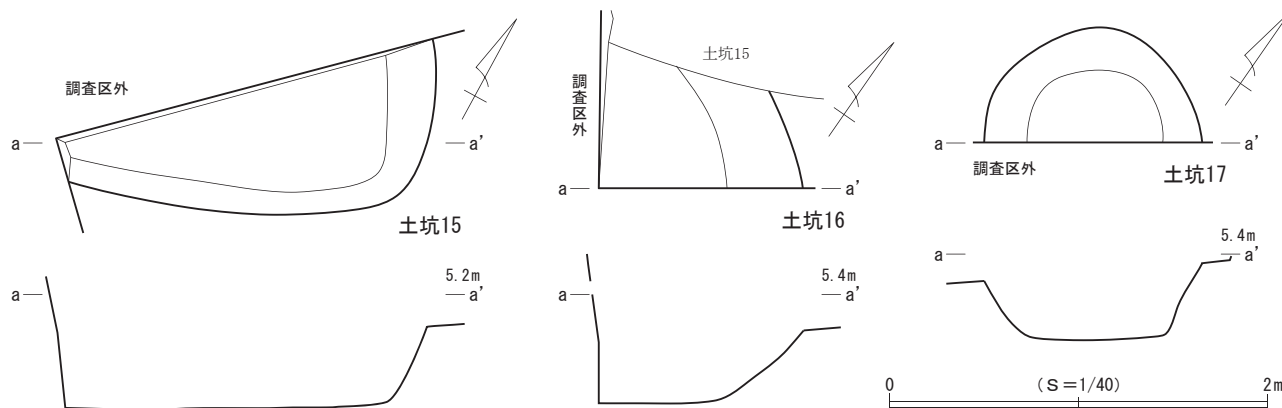


図23 第2面 土坑15～17

り、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長1.0m、南北現存長75cm、深さ26cmで、坑底面の標高は4.83mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図23)

調査区中央付近の南壁側に位置する。南側が調査区外に及んでいる。平面形は略円形あるいは楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.15m、北西-南東方向の現存長60cm、深さ35cmで、坑底面の標高は4.93mを測る。

出土遺物 (図24)

遺物はかわらけ1点、土師器4点が出土し、このうち1点を図示した。

1は土師器の甕であり、古代の所産と考えられる。

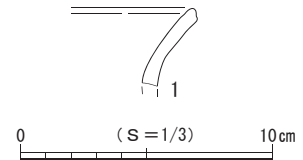


図24 第3面 土坑17出土遺物

(2) 第3面 構成土出土遺物 (図25)

第3面の遺構基盤層となる構成土からも遺物が出土しており、このうち5点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径11.8cmに復元される中形品である。2・3は龍泉窯系青磁であり、2の碗は内面に片彫による横位の区画線と略化した花文が施されるI-4類。3の皿は内面見込みに片彫によって躍動的な魚文が施されるI-2d類である。4は渥美産の壺であり、口縁部形状から2b型式に比定される。5の須恵器は古墳時代後期に比定される坏Hの蓋である。

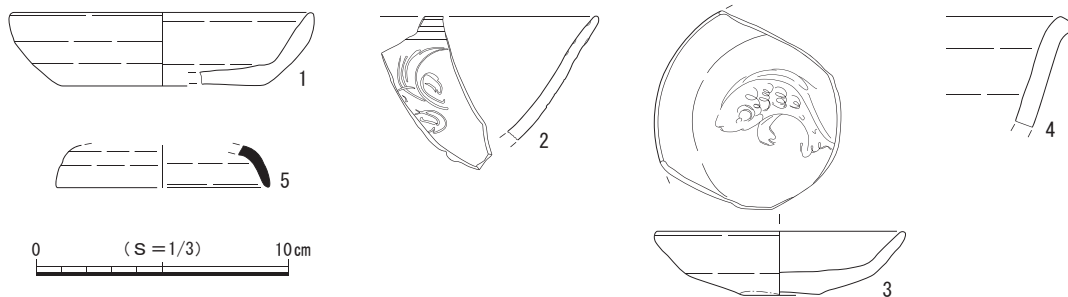


図25 第3面 構成土出土遺物

第四章 まとめ

今回の調査地点は、材木座町屋遺跡 (No.261) の北西端部付近にあたる標高5.0m前後の海浜砂層上に形成された遺跡であり、地点の北西側には康平6年(1063)に源頼義が石清水八幡宮を勧進した元鶴岡八幡宮(由比若宮)が鎮座しており、鎌倉幕府が開かれる以前から源氏とゆかりの深い地域であった。

調査の結果、いずれも中世に属する3面の遺構確認面が検出され、土坑17基、ピット8基を検出した。また、出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。

調査面積が約28㎡と狭小なため具体的な遺構の分布状況や配置などの検討は難しいが、以下、面ごとに検出した遺構と遺物について整理し、簡単なまとめをしたい。

第1面では、土坑10基、ピット8基が検出された。これらは標高5.7m前後の硬く締まった整地層に掘り込まれていた。土坑のうち、全容を把握できたものは10基中4基にとどまるが、これらは調査区全体に分布し、さらに調査区外に延びていることが把握された。本面は出土遺物から13世紀末～14世紀前半に属すると考えられる。

第2面では、土坑4基が検出された。これらは標高5.3mの硬く締まった整地層に掘り込まれており、分布はやや東側に偏っているように見える。本面は出土遺物から13世紀後葉に属すると考えられる。

第3面は、調査区南壁側をトレンチ状に掘り込んで調査した。その結果、土坑3基を検出した。これらは調査時には性格不明の落ち込みとしていたが、形態と規模から判断して土坑としたものであり、標高5.0m前後の黄灰色を呈する海浜砂層に掘り込まれている。本面は出土遺物から13世紀前葉～中葉頃に属すると考えられた。なお、本面には、古墳時代後期～古代の須恵器・土師器が少量出土していることから、周辺に当該期の遺構が埋存する可能性がある。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 安藤龍馬 2017「材木座町屋遺跡 (No.261) 発掘調査成果概要」『第27回 鎌倉市遺跡調査・研究会発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 伊丹まどか・渡邊美佐子 2017「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座二丁目208番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡 (No.261) 鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 熊谷 満 2009「材木座町屋遺跡 (No.261) の調査 材木座3-164他地点」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23』平成18年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・渡邊美佐子 2000「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目890番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 瀬田哲夫 1995「7. 材木座町屋遺跡 (No.261) 鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』平成6年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008a「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008b「材木座町屋遺跡 (No.261) 材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告

告書24] 平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

降矢順子・齋木秀雄 2008 c 「材木座町屋遺跡(No.261) 材木座一丁目149番4 地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24] 平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

告書24] 平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会

森 孝子・堀川浩通 2001 「材木座町屋遺跡の調査」『第11回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会

『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976

『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980

『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑4出土遺物(図7)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.9)	(7.5)	3.5	底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/5
土坑5出土遺物(図9)							
1	陶器	渥美 甕	-	-	現 5.0	胎土: 堅緻、白色粒、黒色粒 色調: 外面-灰黄色、内面-灰オリーブ色(降灰) 焼成: 良好	口縁部 小破片
土坑8出土遺物(図10)							
1	土器	ロクロ かわらけ・中	12.0	8.3	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
土坑9出土遺物(図11)							
1	磁器	青磁 碗	-	(6.1)	現 2.2	内面-見込み部に片彫り(花文) 胎土: 精良堅緻 色調: 釉-灰オリーブ色、断面-灰白色 焼成: 良好、硬質 備考: 太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類	高台部 2/3強
土坑10出土遺物(図12)							
1	土製品	土錘	現長 3.7	最大幅 1.5	孔径 0.6	成形-手づくね 胎土: 砂粒、雲母、白色粒、赤色粒 色調: 灰黄色 焼成: 良好	2/3
第1面 遺構外出土遺物(図13)							
1	土器	手づくね かわらけ・小	(7.9)	-	1.6	底面-指頭+ヘラナデ 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/3強
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	5.2	1.5	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4弱
3	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.1)	6.9	3.1	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 外面-灰黄色、内面-黄灰色 焼成: 良好	1/3強
4	磁器	青白磁 碗	-	(6.0)	2.0	高台部の削り出しが浅い 外面-回転ヘラケズリ痕跡、内面-櫛歯状工具による施文 胎土: 精良堅緻 色調: 胎土-灰白色、釉-明緑灰色 焼成: 良好	高台部 小破片
5	陶器	常滑 壺	-	-	現 2.3	胎土: 微砂、白色粒、黒色粒 色調: 外面-暗緑色(降灰)、内面-暗赤褐色、胎土-灰黒色 焼成: 良好 備考: 3~5型式	口縁部 小破片
6	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.0	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗褐色、外面に一部降灰 焼成: 良好 備考: 5型式	口縁部 小破片
7	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.5	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 黒褐~暗褐色、内外面に一部降灰(暗緑灰色) 焼成: 良好 備考: 8型式	口縁部 小破片
8	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.0	外面-正格子目の押印 胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 外面-暗緑色(降灰)、内面-にぶい赤褐色 焼成: 良好	肩部 小破片
9	陶器	常滑 甕	-	-	現 10.3	外面-正格子目の押印 胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、小礫 色調: 外面-黒褐色、内面-褐灰色 焼成: 良好	肩部 片
10	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 5.8	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒、小礫 色調: 灰色 焼成: 良好	口縁部 小破片
11	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 6.0	胎土: 堅緻、白色粒、砂粒 色調: 灰褐色 焼成: 良好	体部下半~ 底部
12	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 6.4	胎土: 堅緻、白色粒、砂粒 色調: 灰色 焼成: 良好	口縁部 小破片
13	陶器	常滑 片口鉢I類	-	(13.2)	現 6.4	底部-ヘラナデ 胎土: 堅緻、白色粒、砂粒、細礫 色調: 黄灰色 焼成: 良好	体部下半~ 高台部1/8
14	陶器	摩耗陶片	現長 3.1	現幅 5.4	厚 1.0	陶器片の転用 周囲に研磨痕を残す 胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗赤褐色 焼成: 良好	1/2弱
15	骨製品	用途不明品	径 2.5	孔径 0.5	厚 2.2	メジロザメ科の椎骨を加工-中心に穿孔、側面使用により摩耗	完形
16	骨製品	未成品	径 2.8~3.1	-	厚 0.5~1.1	シカの角を素材として切削加工	
17	骨製品	未成品	現長 5.0	現幅 1.5	厚 0.9	シカの角を素材として切削加工	
第1面 構成土出土遺物(図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・極小	(4.5)	2.8	1.1	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	2/3強
2	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.4)	(3.5)	1.8	底面-回転糸切+ナデ 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
3	土器	ロクロ かわらけ・小	(5.8)	3.4~3.7	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: にぶい赤褐色 焼成: 良好	略完形

4	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	4.8	1.6	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
5	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.5)	4.6	2.0	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、細礫粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3
6	土器	ロクロ かわらけ・小	7.6	5.5	2.0	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、泥岩粒、小礫、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
7	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.4)	(5.3)	1.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
8	土器	ロクロ かわらけ・小	7.9	6.8	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4
9	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.9)	(5.9)	1.8	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
10	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.0	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3
11	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(5.3)	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、海綿骨針、泥岩粒、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
12	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.6)	(6.3)	1.2	底面-回転ヘラケズリ 胎土: 微砂、赤色粒、細礫、海綿骨針、良土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3
13	土器	ロクロ かわらけ	-	(6.2)	現 1.2	底面-静止糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/2弱
14	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.0)	7.6	3.2	ナデ消し 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
15	土器	ロクロ かわらけ・中	12.2	7.5	3.3	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、細礫、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	2/3
16	土器	ロクロ かわらけ・中	(12.6)	8.0	3.5	底面-回転糸切 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	1/2
17	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0~13.6	8.4	3.2	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	3/4強
18	磁器	白磁 小壺	(3.6)	3.0	3.0	胎土: 精良堅緻、黒色微粒 色調: 胎土-薄灰白色、釉-淡青灰白色 焼成: 良好	1/2
19	磁器	青磁 環	(11.9)	-	現 2.5	胎土: 精良堅緻、黒色微粒 色調: 胎土-灰白色、釉-灰オリブ色 焼成: 良好 備考: 太宰府-龍泉窯系青磁環Ⅲ-3a類	1/7
20	陶器	瀬戸 筒形容器	-	-	現 5.2	胎土: 堅緻、黒色粒、細礫 色調: 外面-灰褐色、内面-灰オリブ色(降灰) 焼成: 良好 備考: 古瀬戸後期様式	口縁-体部 小破片
21	陶器	渥美 片口鉢	-	-	現 5.6	胎土: 堅緻、白色粒、細礫 色調: 褐灰色 焼成: 良好 備考: 2b型式	口縁部 小破片
22	陶器	常滑 短頸壺	-	-	現 2.5	胎土: 微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗赤褐色、胎土-灰黒色 焼成: 良好 備考: 2~3型式	口縁部 小破片
23	陶器	常滑 短頸壺	-	-	現 2.8	胎土: 微砂、白色粒、黒色粒 色調: 暗赤褐色、胎土-灰黒色 焼成: 良好 備考: 2~3型式	口縁部 小破片
24	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	胎土: 堅緻、砂粒、白色粒 色調: 暗赤褐色、内面に一部降灰(暗灰色) 焼成: 良好 備考: 6b型式	口縁部 小破片
25	陶器	常滑 甕	-	-	現 5.5	胎土: 堅緻、微砂、白色粒、黒色粒 色調: にぶい赤褐色、外面に降灰(にぶい褐色) 焼成: 良好 備考: 6b型式	口縁部 小破片
26	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	外面-正格子目の押印 胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 外面-暗緑色(降灰)、内面-暗赤褐色 焼成: 良好	肩部小破片
27	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 4.7	胎土: 堅緻、白色粒、細礫 色調: 褐灰色 焼成: 良好 備考: 6a型式	口縁部 小破片
28	瓦質 土器	火鉢	-	-	現 5.6	胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、海綿骨針 色調: 灰黄褐色 焼成: 良好	口縁部 小破片
29	須恵器	甕	-	-	現 4.5	外面-平行叩き、内面-同心円叩き 胎土: 堅緻、白色粒、小礫 色調: 外面-黒褐色、内面-暗褐灰色 焼成: 良好	胴部小破片
30	金属 製品	銭貨	直径 2.5	孔径 0.6	厚 0.1	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図 番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑11出土遺物(図16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	6.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
土坑13出土遺物(図18)							
1	土製品	土錘	長 4.3	最大幅 2.9	孔径 1.0	俵型 成形-手づくね 胎土: 砂粒、雲母、白色微粒、泥岩粒 色調: 黒褐~黒色 焼成: 良好	1/2
土坑14出土遺物(図19)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	5.3	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	12.3	7.5	3.4	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	2/3強
3	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 5.3	胎土: 堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、細礫 色調: 黄灰~灰色 焼成: 良好	口縁部 小破片
第2面 遺構外出土遺物(図20)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.3	4.6	1.7	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 橙色 焼成: 良好	4/5
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.5	4.6	2.0	口縁部内外面に油煤付着 底面-回転糸切+弱い板状圧痕 胎土: 微砂、白色粒、赤色粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	完形
3	土器	ロクロ かわらけ・小	8.0	5.3~5.5	1.8	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	(8.0)	(6.0)	1.9	底面-回転糸切+板状圧痕 胎土: 微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄褐色 焼成: 良好	1/3

5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8~8.1	6.7	1.7	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調：黄灰色 焼成：良好	完形
6	土器	ロクロ かわらけ・中	12.8	7.3	3.5	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗 土 色調：黄橙色 焼成：良好	4/5
7	土器	ロクロ かわらけ・大	(13.0)	8.0	3.4	底面一回転糸切+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗 土 色調：黄橙色 焼成：良好	2/3
8	磁器	白磁 碗	-	-	現 5.1	内面へラ描き文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰白色、釉-乳白色 焼成：良好	口縁部 小破片
9	陶器	常滑 壺	-	-	現 2.2	胎土：堅緻、白色粒 色調：外面-にぶい褐色、内面に降灰(暗黄褐色) 焼成：良 好	口縁部 小破片

表4 第3面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

土坑15出土遺物(図22)

1	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 4.6	胎土：堅緻、砂粒、白色粒、黒色粒、小礫 色調：灰色 焼成：良好	口縁部 小破片
---	----	-------------	---	---	----------	---------------------------------	------------

土坑17出土遺物(図24)

1	土器	土師器 甕	-	-	現 3.1	胎土：微砂、雲母、角閃石、赤色粒 色調：黄橙色 焼成：良好 備考：古代	口縁部 小破片
---	----	----------	---	---	----------	-------------------------------------	------------

第3面 構成土出土遺物(図25)

1	土器	ロクロ かわらけ・中	(11.8)	(8.1)	2.9	底面一回転糸切+ナデ+板状圧痕 胎土：微砂、雲母、白色粒、赤色粒、泥岩粒、海 綿骨針、やや粗土 色調：黄橙色 焼成：良好	1/4弱
2	磁器	青磁 碗	-	-	現 4.9	内面-体部に片彫略花文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰色、釉-緑灰 色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁碗I-4類	口縁部 小破片
3	磁器	青磁 皿	(9.8)	3.0	2.5	底面-ヘラケズリ 内面-見込み部に片彫による魚文 胎土：精良堅緻、黒色微粒 色調：胎土-灰色、釉-明緑灰色 焼成：良好 備考：太宰府-龍泉窯系青磁皿I- 2d類	2/3
4	陶器	渥美 壺	-	-	現 2.2	胎土：堅緻、白色微粒 色調：外面-黒色、内面に降灰(暗緑色) 焼成：良好 備 考：2b型式	口縁部 小破片
5	土器	須恵器 蓋	(8.4)	-	現 1.7	胎土：堅緻、白色微粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：坏皿蓋、古墳時代後期 (7世紀中~後葉)	口縁部 小破片

表5 出土動物遺体一覧(図版5)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
遺構外	第1面	魚類					4個 破片
遺構外	第1面	スズキ	主鰓蓋骨			6	
遺構外	第1面	マガイ	主上顎骨	左		1	
遺構外	第1面	メジロザメ類	椎骨				
遺構外	第1面	イルカ類	上顎骨片				
遺構外	第1面	イルカ類	肋骨				
遺構外	第1面	イルカ類	腰椎			11	3個
遺構外	第1面	ネズミ類	下顎骨				
遺構外	第1面	イス	肩甲骨	右		16	
遺構外	第1面	ウマ	I	左			
遺構外	第1面	イノシシ・シカ	肢骨				2個
遺構外	第1面	イノシシ・シカ	肢骨				2個
土坑3	第1面	イノシシ・シカ					破片
土坑5	第1面	イルカ類	頸椎			10	
土坑5	第1面	イルカ類	肋骨片				
土坑6	第1面	メカジキ	椎骨			3	
土坑9	第1面	バンドウイルカ	歯			8	2個
土坑9	第1面	ニホンジカ	上腕骨	左		18	
土坑9	第1面	ニホンジカ	踵骨	右		19	
土坑10	第1面	イルカ類	肋骨片				
土坑10	第1面	イルカ類	胸椎				
土坑10	第1面	イノシシ	I ₂	左			
ピット2	第1面	イルカ類	上顎骨片				4個
ピット5	第1面	タイ類	椎骨			2	
遺構外	第1面	イルカ類	肋骨				
構成土	第1面	カンダイ	下咽頭歯			4	
構成土	第1面	バンドウイルカ	歯			9	
構成土	第1面	イルカ類	頭骨片				
構成土	第1面	イルカ類	肋骨				5個
構成土	第1面	イルカ類	腰椎			12	2個
構成土	第1面	ウサギ	肩甲骨	左		14	
構成土	第1面	ウマ	上顎切歯	右		20	2個
構成土	第1面	イノシシ・シカ					破片
遺構外	第2面	ブリ?	歯骨	右		5	
遺構外	第2面	フグ類	前鰓蓋骨			7	
遺構外	第2面	鳥類	胸骨				
遺構外	第2面	イルカ類	肋骨				4個
遺構外	第2面	イルカ類	腰椎			13	
遺構外	第2面	イス	下顎骨	右		15	
遺構外	第2面	ウマ	距骨	右		21	
遺構外	第2面	ニホンジカ	中足骨				
構成土	第3面	ウシ	下顎臼歯	右		22	
構成土	第3面	イス	腸骨	左		17	若体
構成土	第3面	ウマ	臼歯片				
構成土	第3面	ヒト	上腕骨	右			

表6 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<165>	<63>	26	土坑9	第1面	<191>	<122>	53	ピット7	第1面	36	<23>	40
土坑2	第1面	60	45	17	土坑10	第1面	<66>	74	38	ピット8	第1面	<40>	<36>	36
土坑3	第1面	71	62	18	ピット1	第1面	<42>	30	18	土坑11	第2面	113	<67>	17
土坑4	第1面	<59>	63	41	ピット2	第1面	41	35	26	土坑12	第2面	114	106	20
土坑5	第1面	71	<50>	20	ピット3	第1面	51	45	22	土坑13	第2面	<210>	130	30
土坑6	第1面	70	50	33	ピット4	第1面	29	26	23	土坑14	第2面	<88>	80	17
土坑7	第1面	64	50	14	ピット5	第1面	35	<26>	17	土坑15	第3面	<190>	<80>	37
土坑8	第1面	93	86	15	ピット6	第1面	44	40	29	土坑16	第3面	<100>	<75>	26
										土坑17	第3面	115	<60>	35

表7 出土遺物一覧表

第1面

土坑1			土坑8			ピット3		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	47		かわらけ ロクロ成形	33		かわらけ ロクロ成形	1
【白磁】			【青磁】			【青磁】		
	碗	1	龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	龍泉窯系	器種不明	1
	皿Ⅸ類	1	【陶器】			【陶器】		
【陶器】			常滑	甍	1	渥美	甍	1
常滑	甍	11	合計			常滑	甍	2
	片口鉢Ⅱ類	1			35	合計		
合計			合計			合計		
61			61			8		
土坑2			土坑9			ピット4		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2		かわらけ ロクロ成形	69		かわらけ ロクロ成形	7
合計				かわらけ 手づくね成形	3		かわらけ 手づくね成形	2
2			【青磁】			【石製品】		
			龍泉窯系	碗Ⅰ類	1		硯	1
			【陶器】			合計		
			中国	器種不明	1	10		
			瀬戸	鉢	1			
				卸皿	1			
			常滑	甍	7			
			【土器】					
				羽釜	1			
			【瓦質土器】					
				碗	1			
			合計					
			85					
土坑3			土坑10			ピット5		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3		かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ 手づくね成形	1
【陶器】				かわらけ 手づくね成形	7	【金属製品】		
常滑	甍	1	【陶器】				釘	1
合計			瀬戸	折縁深皿	1	合計		
4			常滑	甍	1	2		
			山茶碗窯	碗	1			
			【土製品】					
				土鉢	1			
			【石製品】					
				滑石製石鍋	1			
				砥石	1			
			合計					
			24					
土坑4			ピット1			第1面 遺構外		
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数	産地	器種	破片数
【かわらけ】			【かわらけ】			【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	164
【陶器】				かわらけ 手づくね成形	7		かわらけ 手づくね成形	27
常滑	甍	1	【陶器】			【白磁】		
合計			瀬戸	折縁深皿	1		碗Ⅸ類	1
5			常滑	甍	1		碗	1
			山茶碗窯	碗	1		皿Ⅸ類	2
			【土製品】			【青磁】		
				土鉢	1	中国	小皿	1
			【石製品】			同安窯系	皿Ⅰ類	1
				滑石製石鍋	1	龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
				砥石	1		碗Ⅱ類	3
			合計				坏Ⅲ類	1
			24					
土坑5			ピット2					
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数			
【かわらけ】			【かわらけ】					
	かわらけ ロクロ成形	4		かわらけ ロクロ成形	2			
	かわらけ 手づくね成形	2	【陶器】					
【陶器】			渥美	甍	1			
瀬戸	片口鉢	1	常滑	甍	1			
渥美	甍	1	合計					
合計			4					
8								
土坑6			ピット3					
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数			
【かわらけ】			【かわらけ】					
	かわらけ ロクロ成形	11		かわらけ ロクロ成形	6			
【陶器】			合計					
常滑	甍	2	6					
合計								
13								
土坑7			ピット4					
産地	器種	破片数	産地	器種	破片数			
【かわらけ】			【かわらけ】					
	かわらけ ロクロ成形	5		かわらけ ロクロ成形	2			
	かわらけ 手づくね成形	1	【陶器】					
【白磁】			渥美	甍	1			
	器種不明	1	常滑	甍	1			
【土師器】			合計					
	甍	1	4					
合計								
8								

【青白磁】		
	碗	1
	四耳壺	1
	小壺	1
【陶器】		
瀬戸	壺	2
	小壺	1
渥美	甕	1
常滑	甕	133
	壺	2
	小壺	1
	広口壺	1
	短頸壺	2
	片口鉢Ⅰ類	22
	片口鉢Ⅱ類	7
	摩托陶片	1
山茶碗窯	碗	4
【土師器】		
	甕	7
	器種不明	2
【須恵器】		
	甕	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
	碗	1
【瓦】		
	破片	1
【石製品】		
	硯	1
	砥石	1
【骨角製品】		
	用途不明品	1
	未成品	2
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	12
	合計	414

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ ロクロ成形	371
	かわらけ 手づくね成形	33
【白磁】		
	小壺	1
	碗	1
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
	坏Ⅲ類	1
	坏	2
	碗	1
【青白磁】		
	蓋	1
	蓮弁文破片	1
【陶器】		
中国	壺	1
瀬戸	壺	2
	碗	1
	筒形容器	1
渥美	甕	2
	片口鉢	1
常滑	甕	79
	壺	2
	三筋壺	4
	短頸壺	2
	片口鉢Ⅰ類	10
	片口鉢Ⅱ類	1
山茶碗窯	碗	4
【土器】		
	火鉢	3
【土師器】		
	甕	7
【須恵器】		
	甕	2

【瓦】		
	平瓦	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	滑石製石鍋	2
	砥石	1
【金属製品】		
	銭貨	1
	釘	5
	刀子	1
	合計	550

第2面		
産地	器種	破片数
土坑 11		
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	11
	かわらけ 手づくね成形	6
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
山茶碗窯	碗	1
【土師器】		
	甕	4
	坏	1
	合計	25

土坑 12		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10
	かわらけ 手づくね成形	27
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	甕	1
【土師器】		
	甕	4
【須恵器】		
	甕	1
	合計	44

土坑 13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	10
	かわらけ 手づくね成形	28
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【陶器】		
常滑	甕	3
	片口鉢Ⅰ類	1
【土製品】		
	土錘	1
【土師器】		
	甕	3
	合計	47

土坑 14		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	20
	かわらけ 手づくね成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	2
【土師器】		
	甕	1
【金属製品】		
	釘	1
	合計	27

第2面 遺構外		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	212
	かわらけ 手づくね成形	205

【白磁】		
	碗	2
	皿Ⅸ類	2
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	2
	碗Ⅱ類	7
	碗	3
	折縁深皿	1
	坏	1
【青白磁】		
	合子蓋	1
【陶器】		
渥美	壺	1
常滑	甕	4
	壺	1
山茶碗窯	碗	4
【土器】		
	火鉢	1
	埴埴	1
【土師器】		
	甕	15
	坏	2
	器種不明	3
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	丸瓦	1
【石製品】		
	砥石	2
【金属製品】		
	釘	6
	合計	478

第3面		
産地	器種	破片数
土坑 15		
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	8
【陶器】		
渥美	甕	1
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅰ類	5
【土師器】		
	甕	3
【木製品】		
	杭	1
	合計	19

土坑 17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
【土師器】		
	甕	4
	合計	5

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	29
	かわらけ 手づくね成形	11
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	皿Ⅰ類	1
【陶器】		
渥美	甕	1
	壺	1
【土師器】		
	甕	8
【須恵器】		
	蓋	1
	合計	53



1. 調査区南壁土層断面(北から)



2. 第1面全景(北東から)



1. 第2面全景(北西から)



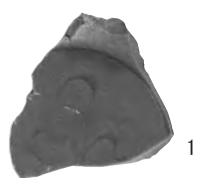
2. 第3面全景(北西から)



1. 第1面 土坑4出土遺物



2. 第1面 土坑5出土遺物



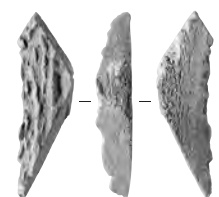
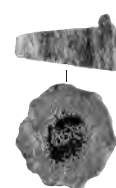
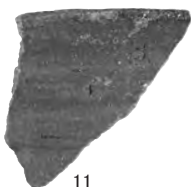
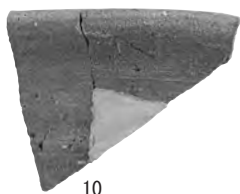
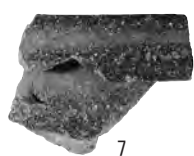
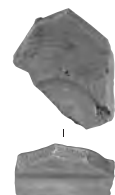
4. 第1面 土坑9出土遺物



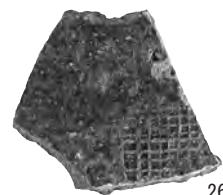
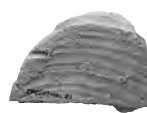
5. 第1面 土坑10出土遺物



3. 第1面 土坑8出土遺物



6. 第1面 遺構外出土遺物



7. 第1面 構成土出土遺物(1)

图版 4



28



29



30

1. 第1面 構成土出土遺物(2)



1

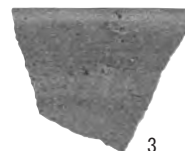


1



1

2



3

2. 第2面 土坑11出土遺物

3. 第2面 土坑13出土遺物

4. 第2面 土坑14出土遺物



1



2



3



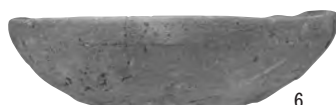
4



5



8



6



7



9

5. 第2面 遺構外出土遺物



1

6. 第3面 土坑15出土遺物



1

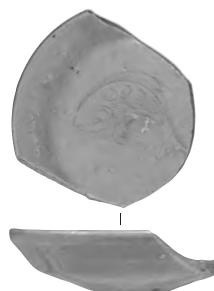
7. 第3面 土坑17出土遺物



1



2



1

3

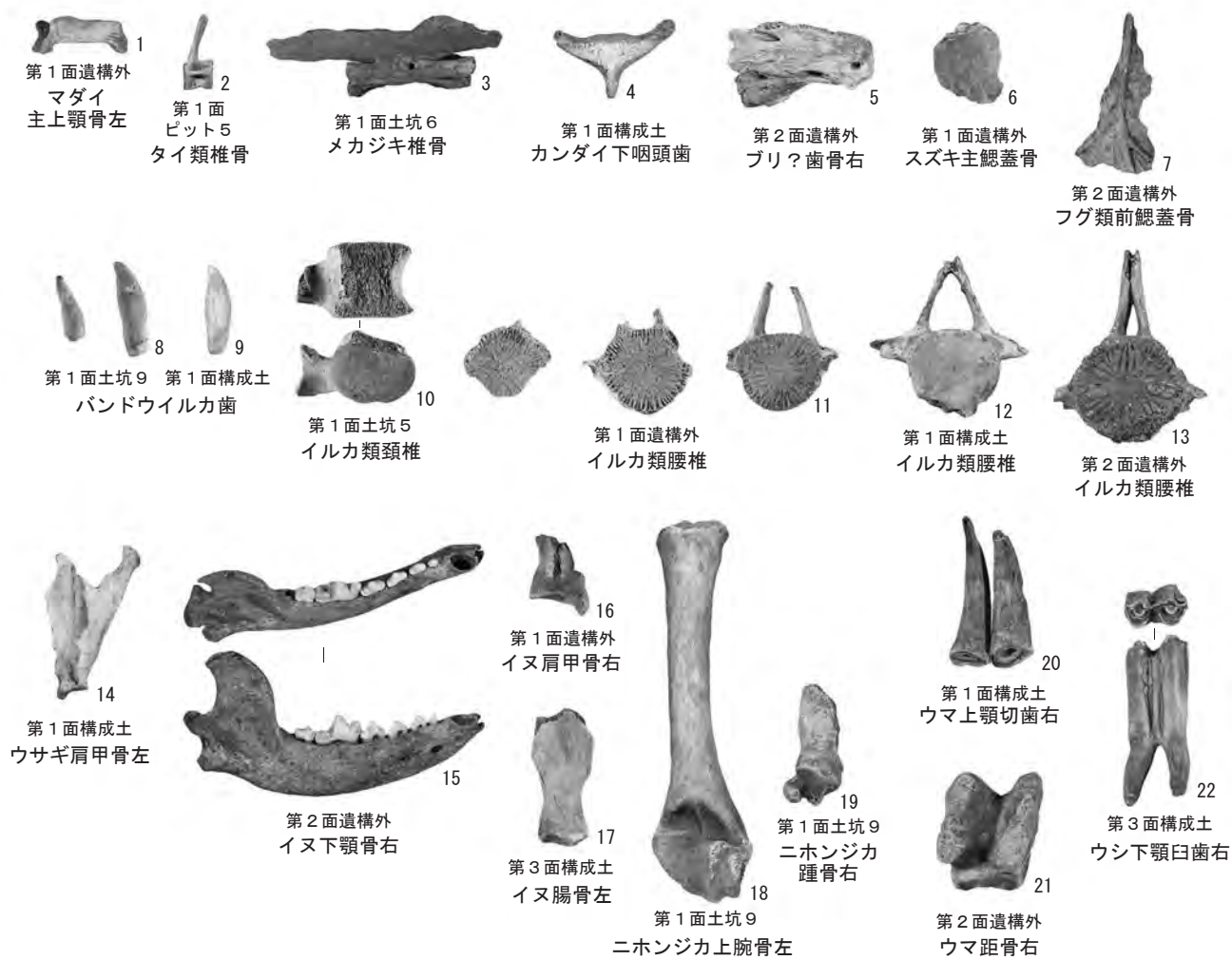


4



5

8. 第3面 構成土出土遺物



1. 出土動物遺体

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座一丁目893番9地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座一丁目893番9地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成20年7月24日～同年8月1日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約13㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 原 廣志
調 査 員 梅岡ケイト・小野夏菜・須佐仁和
作 業 員 沼上三代治・倉澤六郎・金丸義一・丹野正弘
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を原 廣志、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZS」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬 戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本晶子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目次

第一章 遺跡と調査地点の概観	308
第1節 調査に至る経緯と経過	308
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	308
第3節 周辺の考古学的調査	310
第二章 堆積土層	314
第三章 発見された遺構と遺物	314
第1節 第1面の遺構と遺物	314
第2節 第2面の遺構と遺物	316
第四章 まとめ	317

挿図目次

図1 遺跡位置図	309	図8 第1面ピット5出土遺物	315
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	311	図9 表土出土遺物	315
図3 調査区位置図	313	図10 第1面構成土出土遺物	316
図4 調査区配置図	313	図11 第2面遺構分布図	316
図5 調査区西壁土層断面図	314	図12 第2面溝状遺構1	317
図6 第1面遺構分布図	314	図13 第2面溝状遺構1出土遺物	317
図7 第1面土坑1	315	図14 第2面土坑2	317

表目次

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧	312	表4 出土動物遺体一覧	319
表2 第1面出土遺物観察表	319	表5 遺構計測表	319
表3 第2面出土遺物観察表	319	表6 出土遺物一覧表	320

図版目次

図版1	1. 調査区西壁土層断面(東から)	321	2. 第1面構成土出土遺物	322
	2. 第1面全景(北から)	321	3. 表土出土遺物	322
	3. 第2面全景(北から)	321	4. 第2面溝状遺構1出土遺物	322
図版2	1. 第1面ピット5出土遺物	322	5. 出土動物遺体	322

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座一丁目893番9で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡(神奈川県遺跡台帳No.261)の範囲内にあたり、近隣の確認調査結果から、地下に中世の遺構が存在することが確実であった。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される範囲について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、原 廣志が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成20年7月24日～同年8月1日までの約1週間で、調査面積は約13㎡である。現地表の標高は約5.4mを測る。調査は重機により表土及び遺構確認面までの堆積土を1.5m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～2面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月1日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

なお、測量に際しては日本測地系(座標系AREA9)に準じた、鎌倉市四級基準点($X = -76592.873$ 、 $Y = -25173.620$)、($X = -76629.429$ 、 $Y = -25174.237$)を基にした。このため本報告で用いている方位標の北は真北を示す。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡(No.261)は、鎌倉市内中心部の南東域に位置し、国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)にほど近い、鎌倉市材木座一丁目919番19に所在する。また、調査地点のすぐ北東側には、大船駅から久里浜駅を結ぶJR横須賀線が走行している。なお、本地点から材木座海岸までの距離は約700m強である。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡(No.245)、西は滑川の東岸を境に由比ヶ浜中世集団墓地遺跡(No.372)と接し、東は能蔵寺跡(No.314)、実相寺旧境内遺跡(No.255)、弁ヶ谷遺跡(No.249)、光明寺旧境内遺跡(No.316)との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、地内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五丁目、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地のやや東側を南北方向に延びる道筋(小町大路)と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、やや南に下った向福寺付近で5m前後、遺構が発見された調査地点としては最も南に位置する材木座六丁目742番4外地点(本分冊掲載)付近では4.0～4.5mほどで、近年の調査事例では海岸線に近い調査地点である。

歴史的には、相模湾に面して南西に開けた弓形の海岸は由比ヶ浜(前浜・西浜)と呼び、鎌倉時代に



図1 遺跡位置図

材木を扱う商工業者組合である「座」ができたことがこの地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7ヵ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千朶積座・相物座・松物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港遺跡として国の史跡に指定されている。

また、本調査地点の西側には、かつての小町大路とされる道筋があり、六浦道と交差する場所にあった筋替橋から宝戒寺、本覚寺の門前を通り、大町大路を横断、乱橋を渡って材木座まで通ずる基幹道路であった。若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、本興寺、妙長寺、長勝寺、来迎寺、実相寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、捕陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

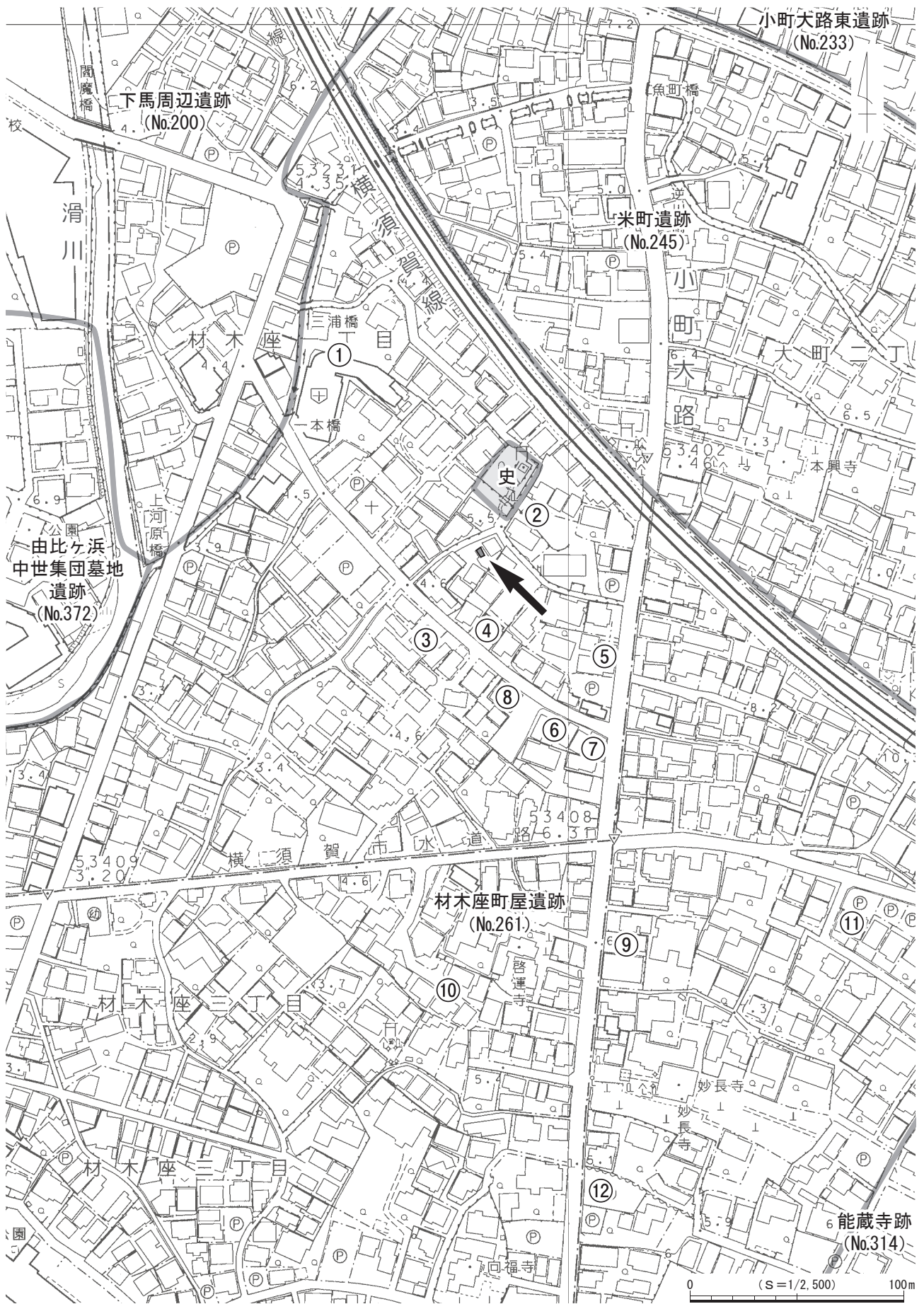
本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、材木座町屋遺跡の北側域にあたる12地点の内容について概観したい。

地図上で最も北側に位置する①材木座一丁目910番地点(森・堀川 2001)は、遺跡包蔵地内では北端寄りにあたり、滑川の支流である逆川の左岸域に所在する。調査面積は450㎡で、調査事例のなかでは面積が広い。本調査地点は国指定史跡鶴岡八幡宮境内(元八幡)から北西約50mに位置する。調査で発見された遺跡の時代は中世と古代に大別され、中世ではこの地域の基幹と推測される道路やそれと直交関係にある溝、井戸、方形土坑、柱穴などが検出された。とくに方形土坑からは動物骨の切断片や未加工品が多く検出され、この地域一帯が職人集団や商工業者との関わりが深い地域であることを示唆している。古代では6棟を数える掘立柱建物が検出され、これらは側柱建物であるが、中世以前の様相を知るうえで注目される。

元八幡の南東隅に位置する②材木座一丁目893番9地点は本報告書に掲載されている。限られた面積での調査であるためその詳細は不明であるが、出土遺物から13世紀後半から14世紀前半頃のものとして推測される溝や土坑、ピットなどがわずかに確認されている。

本地点の北西約80mの道路沿いに位置する③材木座一丁目144番3地点(木村・田代 1991)は、遺跡内では最も早く調査が行われた地点である。調査面積は2本のトレンチを合わせても40㎡に過ぎず、遺構検出面は地山面の一面のみであった。遺構は柱穴や井戸、土坑、溝などで、調査区内では明確な建物は確認されていないが、柱穴列の存在からある程度の規模をもつ掘立柱建物や柵列状の遺構が想定されている。小規模な溝は、町屋の小区画や路地などの小路に伴う側溝との考えが示されている。これらは出土遺物から井戸や土坑の一部は13世紀前半に遡るとし、また確認された遺構面は14世紀前半から中頃にかけて削平されたと考えられている。

道路を挟んだ斜向かいに位置する④材木座一丁目890番7地点(汐見・渡邊 2000)では、14世紀代を中心とする小規模な柱穴や方形竪穴建物、土坑、溝などが確認されているが、調査地点が狭小なこともあり、各遺構の詳細は不明である。遺構の内容から想定すると本地点も③と同様に町屋ないし庶民層の生活の場であったと考えられる。



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

小町大路の西側道路に面した⑤材木座一丁目921番5外地点(齋木・降矢 2007)でも10㎡ほどの狭小な調査地点であったが、13世紀後半から14世紀代の南北方向の溝や柱穴、土坑などが発見されている。主要な遺構は土坑と柱穴であるが、建物の復元までには至っていない。

地点④の道路を挟んだ斜向かいの南側では連続して3ヵ所、⑥材木座一丁目889番4地点(A地点)、⑦材木座一丁目889番5地点(B地点)、⑧材木座一丁目149番4地点(C地点)(降矢・齋木 2008 a～c)の調査が行われている。いずれも生活痕跡は13世紀前半から確認され、3～4面の生活面ないし遺構確認面が検出されている。地点⑥では15世紀の大小のかわらけがまとまって廃棄されたかわらけ溜まりが発見されている。

小町大路沿いの東側に位置する⑨材木座二丁目208番1地点(伊丹・渡邊 2017)では、4面にわたる生活面が検出され、13世紀前半から15世紀にかけての遺構変遷が示されている。第1面は土坑、第2面は方形竪穴建物が主体で、第3・4面は礎石をもつ柱穴が調査区全体に広がり、掘立柱建物群の存在を示唆している。とくに調査地点の性格を考えるうえで、第2面の方形竪穴建物群は倉庫としての利用をうかがわせるものであり、加えて小町大路に面している調査地点であることは重要な点であろう。

小町大路からやや西に入った⑩材木座三丁目164番外地点(熊谷 2009)は、調査面積1000㎡を超える遺跡地内では最も広い調査地点である。遺構は、南北道路、溝、方形竪穴建物、井戸、土坑墓のほか、多数の柱穴や土坑など、遺構総数は合わせて1000基を超える。これらの遺構は13世紀前半から中頃と、13世紀後半から14世紀代に大別され、調査区西端で発見された南北道路には側溝が伴っている。また、方形竪穴建物は道路に面するように配され、鑿や槍鉋といった工具類の出土や、切断痕のある石材片や鉄滓、轆の羽口、加工痕の残る動物骨なども出土しており、調査者は石製品や鉄製品、骨角製品などの生産・加工に携わる職人集団の存在を示唆している。

東端寄りに位置する⑪材木座二丁目217番6外地点(瀬田 1995)では、調査形状がL字状の不規則な条件にも関わらず3面にわたる生活面が確認された。遺構の中心は第2面の14世紀代の時期であるが、その主体である方形竪穴建物や方形土坑はほぼ同一主軸上にあり、特徴的な遺物として、鋳滓、取鍋、轆の羽口などの鑄造に関わるものや、砥石や切断痕、加工痕を有する動物骨などの出土もあり、⑩同様に金属製品や骨角製品の生産・加工に携わる職人集団の可能性を示唆している。

最後に地図上では最も南側に位置する⑫材木座二丁目236番1地点(安藤 2017)は、小町大路に面し、13世紀から15世紀代にわたる遺構・遺物が検出されている。遺構は方形竪穴建物や掘立柱建物、柱穴、井戸、土坑などで、これらは東西溝の南側から発見されており、なかでも方形竪穴建物や掘立柱建物の配置状況は⑩や⑪の遺構配置と類似している。

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目919番19地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目910番地点	森・堀川 2001
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目893番9地点	本報告
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目144番3地点	木村・田代 1991
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目890番7地点	汐見・渡邊 2000
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目921番5外地点	齋木・降矢 2007
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番4地点(A地点)	降矢・齋木 2008 a
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目889番5地点(B地点)	降矢・齋木 2008 b
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座一丁目149番4地点(C地点)	降矢・齋木 2008 c
⑨	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目208番1地点	伊丹・渡邊 2017
⑩	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目164番外地点	熊谷 2009
⑪	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目217番6外地点	瀬田 1995
⑫	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座二丁目236番1地点	安藤 2017

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図3 調査区位置図

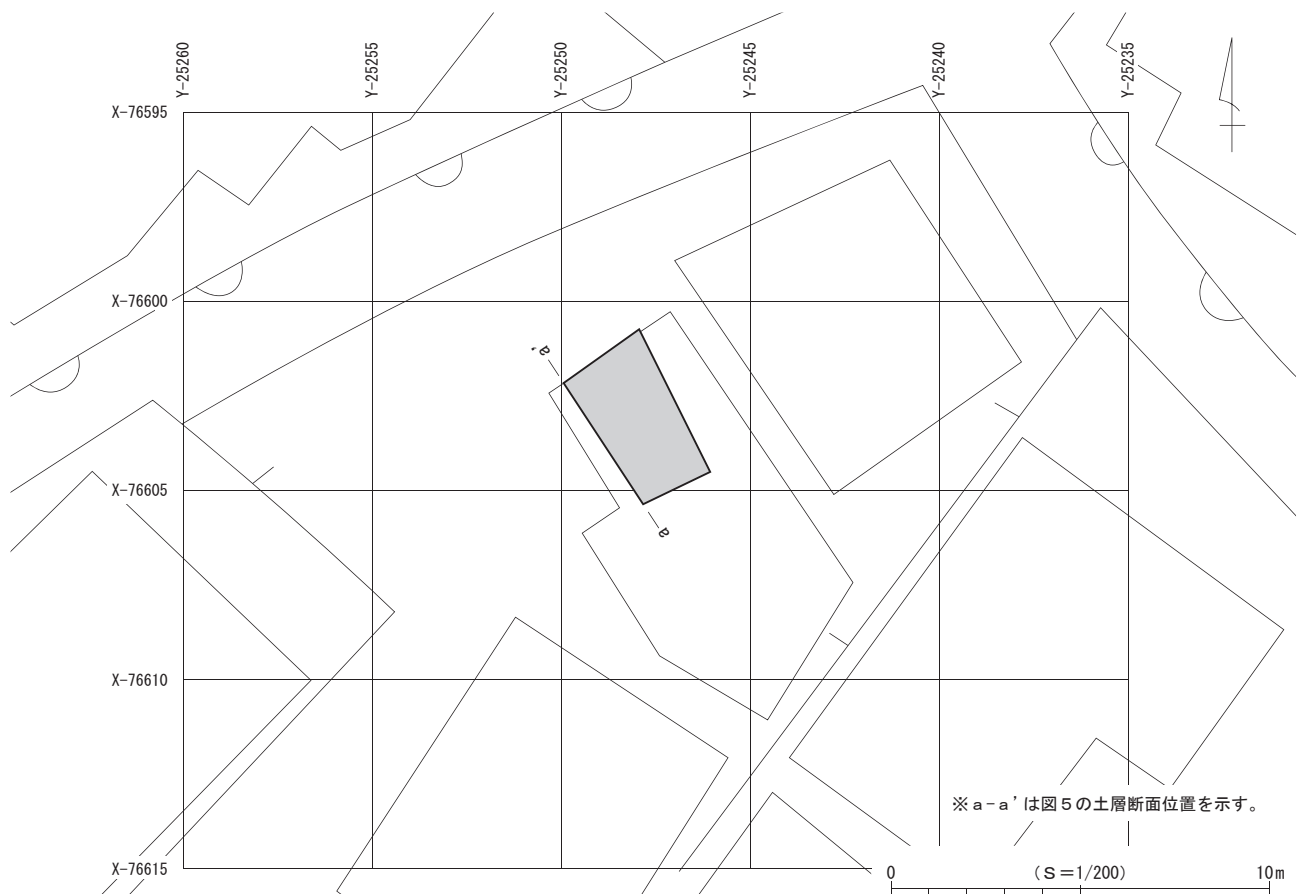
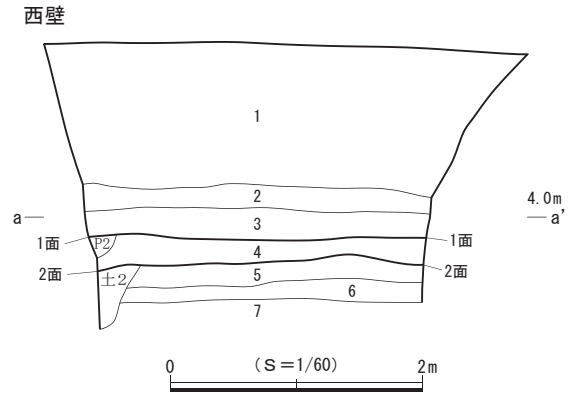


図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1面および第2面の合計2面である。ここでは、遺存状況の良い調査区西壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。

現地表面は標高約5.4mを測り、最上部には層厚120cm前後の表土(1層)、層厚15~22cmの締まりのない暗茶褐色砂質土(2層)と層厚20~25cmの貝殻粒・遺物粒を含む締まりのない暗茶褐色砂質土(3層)が堆積している。遺構確認面の第1面は4層上面で確認し、確認面の標高は3.8~3.9mを測る。4層は少量の泥岩粒と遺物粒を含み、締まりのややある暗茶褐色砂質土で、層厚13~25cmである。第2面は5層上面で確認し、確認面の標高は3.6~3.7mを測る。5層は多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土で、層厚20cm前後である。5層の下位には地山である青灰色砂が堆積している。



- 1層 表土 大小泥岩ブロックによる埋土。
- 2層 暗茶褐色砂質土 締まりなし。近代遺物混入。
- 3層 暗茶褐色砂質土 貝殻粒・遺物粒含み、砂粒少量含む。締まりなし。
- 4層 暗茶褐色砂質土 泥岩粒・遺物粒少量含む。締まりややあり。(第1面)
- 5層 茶褐色砂質土 青灰砂ブロック多量に含む。締まりなし。(第2面)
- 6層 茶褐色砂質土 5層に類似するが、締まりあり。
- 7層 青灰色砂 地山

図5 調査区西壁 土層断面図

第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1面および第2面の合計2面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、溝状遺構1条、土坑2基、ピット5基である。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して2箱を数える。なお、各面の遺構および表土、構成土からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表4に明記したので参照されたい。

以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1~2面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の4層上面で検出され、確認面の標高は3.8~3.9mを測る。4層は少量の泥岩粒と遺物粒を含み、締まりのややある暗茶褐色砂質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑1基、ピット5基であり、土坑は調査区北側、ピットは調査区中央付近から南側に分布していた(図6)。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末葉~14世紀前葉頃に属すると考えられる。

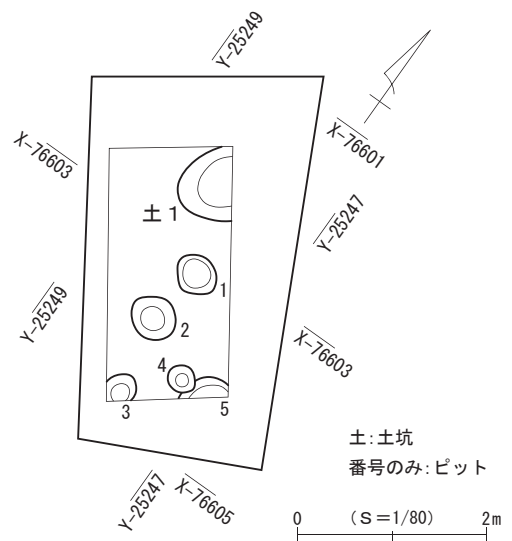


図6 第1面 遺構分布図

(1) 土 坑

土坑 1 (図7)

調査区北隅に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸方向と推定される南北現存長65cm、東西現存長75cm、深さ26cmで、坑底面の標高は3.60mを測る。

遺物は、かわらけ1点、陶器3点が出土した。

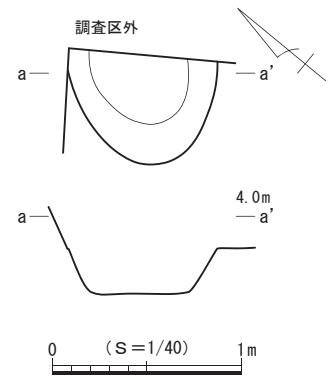


図7 第1面 土坑 1

(2) ピット

第1面では、5基を検出した。いずれも調査区の中央から南側に位置しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形、楕円形、隅丸方形で、長軸は31~52cm、深さが15~43cmである。

出土遺物 (図8)

遺物は5基から出土しており、詳細を表6に掲げた。このうち1点を図示する。

1はピット5から出土したロクロ成形のかわらけであり、口径9.4cmを測る小形品である。

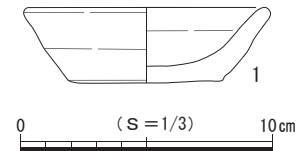


図8 第1面 ピット5出土遺物

(3) 表土出土遺物 (図9)

表土からも遺物が出土しており、このうち6点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.0cmに復元される小形品、2は口径10.0cmを測る中形品である。3は内外面に緑釉が施される口縁部の小破片であり、中国産陶器の盤と考えられるが詳細は不明である。4~6は常滑産の片口鉢I類である。

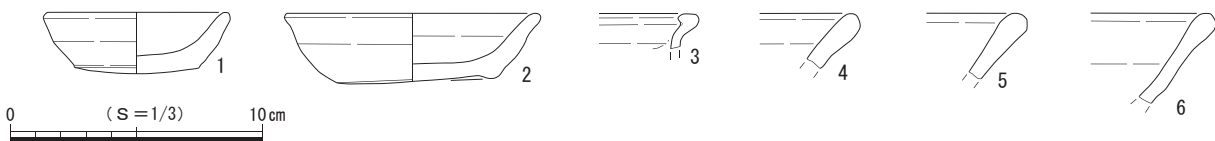


図9 表土出土遺物

(4) 第1面 構成土出土遺物 (図10)

第1面の基盤層である構成土からも遺物は出土しており、このうち7点を図示した。

1~3はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.7cmを測る小形品、2・3は口径10.8~11.7cmを測る中形品である。4はいわゆる百合口の青磁小碗であり、口縁部~体部を襞状に成形する。胎土・釉調から龍泉窯系と考えられる。5は産地不明の須恵質土器であり、口径12.6cmに復元される坏と考えられる。6は凸面に縄目の叩きが施される平瓦。7は現存長47.8cmを測り、端部に柄が作出される建築部材と類推される角材である。

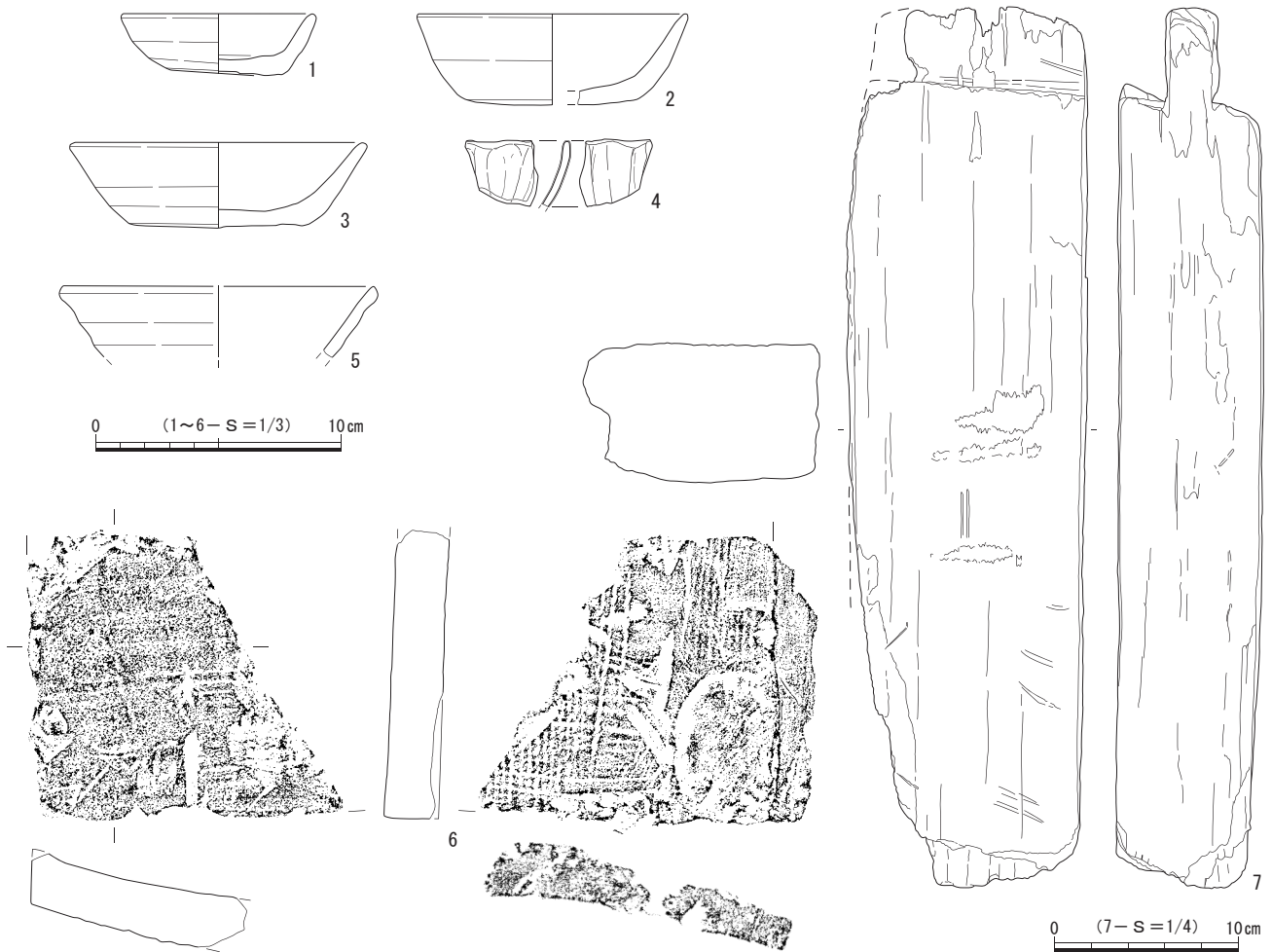


図10 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は5層上面で検出され、確認面の標高は3.6~3.7mを測る。5層は多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土で、この層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑1基である。溝状遺構は調査区西壁に沿って北西-南東方向に延び、土坑は南壁際から検出された(図11)。

遺物はかわらけ、磁器、陶器、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1 (図12)

調査区西側に位置する。北西-南東方向に延びているが調査区外に続くため、全容は明らかでない。重複関係では、調査区南西端で土坑2と重複して壊されている。直線的に掘られており、壁は大きく開いて断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.5m、現存幅75cm、深さ14cmで、底面の標高

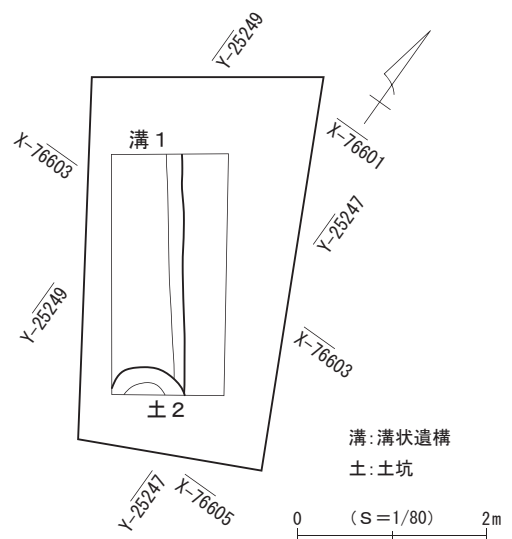


図11 第2面 遺構分布図

は3.32mを測る。主軸方位はN-36°-Wを指す。

出土遺物 (図13)

遺物はかわらけ3点、陶器7点、木製品2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は、内折れの口縁部形態をもつ手づくね成形のかわらけであり、口径8.4cmに復元される小形品である。

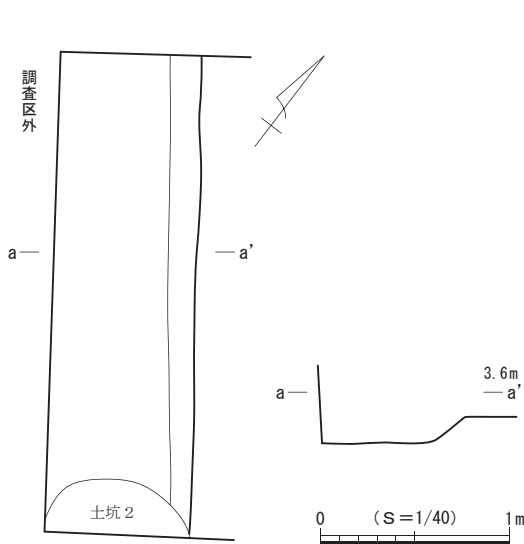


図12 第2面 溝状遺構1

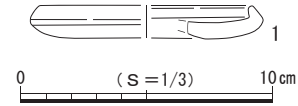


図13 第2面 溝状遺構1 出土遺物

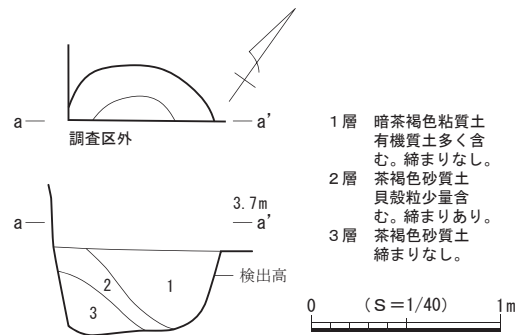


図14 第2面 土坑2

(2) 土 坑

土坑2 (図14)

調査区南壁際に位置する。南東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。溝状遺構1と重複し、南西側を壊している。検出された範囲からは略円形あるいは楕円形を呈するものと思われる。底面は東側がやや高くなり、壁は開いて立ち上がる。規模は北東-南西方向の現存長77cm、北西-南東方向の現存長29cm、確認面からの深さは45cmで、坑底面の標高は3.10mを測る。

遺物は磁器1点、陶器3点が出土した。

第四章 まとめ

今回の調査地点は、材木座町屋遺跡 (No261) の北西側にあたる。標高3.5m前後の青灰色を呈する海浜砂層上に形成された遺跡であり、地点の北東側には元八幡宮 (由比若宮) が鎮座する。調査の結果、いずれも中世に属する2面の確認面で、溝状遺構1条、土坑2基、ピット5基を検出した。また、出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して2箱を数える。

調査面積が約13㎡と狭小であることから具体的な遺構の分布状況や配置などの検討は難しいが、以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめをしたい。

〈第1面〉

第1面では、土坑1基、ピット5基を検出した。これらは、少量の泥岩粒と遺物粒を含む暗茶褐色砂質土を掘り込んで構築されていた。確認面の標高は3.8~3.9mを測る。土坑は調査区北側、ピットは調査区中央付近から南側に分布し、調査区外にも展開する様相がみられた。遺物は主にかわらけ、磁器、

陶器、瓦質土器、瓦、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は13世紀末葉～14世紀前葉頃に属すると考えられる。

〈第2面〉

第2面では、溝状遺構1条、土坑1基を検出した。これらは、多量の青灰砂を含み、締まりのない茶褐色砂質土を掘り込んで構築されていた。確認面の標高は3.6～3.7mを測る。溝状遺構は北西－南東方向を指して調査区外に延び、土坑は南東側調査区外へと展開していた。遺物は僅少であり、詳細な時期は不明瞭であるが、第1面との比較検討も踏まえて本面は13世紀後葉頃に属すると考えられる。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 安藤龍馬 2017「材木座町屋遺跡(No.261)発掘調査成果概要」『第27回 鎌倉市遺跡調査・研究会発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 伊丹まどか・渡邊美佐子 2017「材木座町屋遺跡(No.261)材木座二丁目208番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書33』平成28年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 木村美代治・田代郁夫 1991「7. 材木座町屋遺跡(No.261)鎌倉市材木座一丁目144番3」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書7』平成2年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 熊谷 満 2009「材木座町屋遺跡(No.261)の調査 材木座3-164他地点」『第19回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 齋木秀雄・降矢順子 2007「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目921番5外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書23』平成18年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫・渡邊美佐子 2000「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目890番7地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書16』平成11年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 瀬田哲夫 1995「7. 材木座町屋遺跡(No.261)鎌倉市材木座二丁目217番6外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書11』平成6年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008a「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目889番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008b「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目889番5地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 降矢順子・齋木秀雄 2008c「材木座町屋遺跡(No.261)材木座一丁目149番4地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書24』平成19年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 森 孝子・堀川浩通 2001「材木座町屋遺跡の調査」『第11回 鎌倉市遺跡調査・研究会 発表要旨』鎌倉考古学研究所 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980
- 『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
ピット5 出土遺物 (図8)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	9.4	6.0	3.0	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 灰黄色 焼成: 良好	3/4

表土出土遺物 (図9)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	(7.0)	5.0	2.4	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/4 強
2	土器	ロクロ かわらけ・中	10.0	6.2	6.2	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
3	陶器	中国 盤	-	-	現 1.4	胎土: 緻密 色調: 胎土-黄灰色、釉-緑色	口縁部片
4	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 2.2	胎土: 白色粒、小石粒、やや密 色調: 褐灰色	口縁部片
5	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 2.6	胎土: 白色粒、小石粒、やや粗 色調: 灰色	口縁部片
6	陶器	常滑 片口鉢I類	-	-	現 3.6	胎土: 白色粒、小石粒、やや密 色調: 灰色	口縁部片

第1面 構成土出土遺物 (図10)

1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	4.4	2.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	略完形
2	土器	ロクロ かわらけ・中	(10.8)	7.0	3.7	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄灰色 焼成: 良好	1/2 弱
3	土器	ロクロ かわらけ・中	11.7	6.7	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	3/4
4	磁器	青磁 小碗	-	-	現高 2.7	内外面-鬚状に成形 色調: 胎土-灰白色、釉-青緑色 産地-龍泉窯系青磁	口縁部片
5	須恵質 土器	坏	(12.6)	-	現高 2.9	胎土: 緻密、白色粒 色調: 灰色 備考: 口縁部降灰 備考: 産地不明	口縁部片
6	瓦	平瓦	現長 12.1	現幅 13.3	厚 2.2	凸面-側縁方向に縄目叩き 凹面-布目痕+端縁方向にヘラ調整、端縁-ヘラ調整 胎土: 密、雲母、小石粒 色調: 灰色 備考: 粘土級じ合わせ目?	小片
7	木製品	部材	現長 47.8	現幅 13.2	厚 2.6~2.4	端部に柄作出	

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
溝状遺構1 出土遺物 (図13)							
1	土器	手づくね かわらけ・小	(8.4)	-	1.3	口縁部内折れ 底面-指頭押さえ+ナデ 内底-ナデ 胎土: 微砂、雲母、赤色粒、良土 色調: 黄橙色 焼成: 良好	1/5

表4 出土動物遺体一覧 (図版2)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値 (mm)	写真番号	備考
表土		アカニシ	殻柱			7	2個
表土		アカニシ			殻高: 85.5		穿孔
表土		サザエ	蓋		径: 31.0		
表土		ツメタガイ					
表土		ハマグリ		左			
表土		ハマグリ					破片
ピット1	第1面	サザエ	蓋		径: 31.4		
ピット2	第1面	チョウセンハマグリ		左			
ピット2	第1面	ハマグリ		左			
ピット2	第1面	バイガイ			殻高: 52.2	3	
ピット2	第1面	バイガイ					
構成土	第1面	アカニシ	殻柱			6	2個
構成土	第1面	オオタニシ				1	
構成土	第1面	マルタニシ			殻高: 42.6	2	
構成土	第1面	サザエ	蓋		殻長: 50.0 46.0 37.3	8	3個
構成土	第1面	ツメタガイ				4	
構成土	第1面	ヤツシロガイ			殻高: 77.9	5	
構成土	第1面	イルカ類	下顎骨片				2個
構成土	第1面	イルカ類	肩甲骨	左			

表5 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模 (cm)			遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<65>	<75>	26	溝状遺構1	第2面	<250>	<75>	14
ピット1	第1面	46	41	36	土坑2	第2面	<77>	<29>	45
ピット2	第1面	51	46	21					
ピット3	第1面	<38>	<31>	15					
ピット4	第1面	31	28	43					
ピット5	第1面	<52>	<21>	29					

表6 出土遺物一覧表

表土

産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	白かわらけ ロクロ成形	1
	かわらけ ロクロ成形	146
	かわらけ 手づくね成形	1
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
	碗	2
	皿	2
	鉢	1
	器種不明	3
【青白磁】		
	合子蓋	1
【陶器】		
中国	盤	1
	壺	1
瀬戸	四耳壺	2
	壺	2
	入子	2
	蓋	1
	盤	5
渥美	器種不明	1
常滑	甕	49
	壺	2
	片口鉢Ⅰ類	11
	片口鉢Ⅱ類	2
【土師器】		
	甕	2
	器種不明	3
【瓦質土器】		
	火鉢	3
		合計 247

第1面

土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	3
		合計 4

ピット1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	17
【陶器】		
常滑	甕	3
【石製品】		
	石臼	1
		合計 21

ピット2		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
	壺	1

第2面

溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
	かわらけ 手づくね成形	1
【陶器】		
常滑	甕	6
	壺	1
【木製品】		
	箸状	1
	用途不明	1
		合計 12

土坑2		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	器種不明	1
【陶器】		
常滑	甕	3
		合計 4

【木製品】		
産地	器種	破片数
	箸状	1
		合計 4

ピット3		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
		合計 2

ピット4		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 5

ピット5		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
【陶器】		
常滑	甕	1
		合計 3

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	83
	かわらけ 手づくね成形	6
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅱ類	3
	小碗	1
	坏	1
【陶器】		
瀬戸	壺	1
	入子	2
渥美	皿	1
	甕	1
常滑	甕	37
	片口鉢Ⅱ類	3
	山茶碗	1
【須恵質土器】		
	坏	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	平瓦	1
【木製品】		
	箸状	3
	板折敷	1
	柱	1
	部材	1
	用途不明	4
		合計 154



1. 調査区西壁土層断面(東から)



2. 第1面全景(北から)

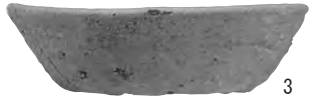


3. 第2面全景(北から)

図版 2



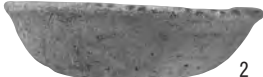
1. 第1面 ピット5 出土遺物



2. 第1面 構成土出土遺物



7



3. 表土出土遺物



4. 第2面 溝状遺構1 出土遺物



第1面構成土
オオタニシ



第1面構成土
マルタニシ



第1面ピット2
パイガイ



第1面構成土
ツメタガイ



第1面構成土
ヤツシロガイ



第1面構成土
アカニシ



表土
アカニシ



第1面構成土
サザエ 蓋

5. 出土動物遺体

材木座町屋遺跡 (No.261)

材木座六丁目742番4外地点

例 言

1. 本報は「材木座町屋遺跡」（神奈川県遺跡台帳No.261）内、材木座六丁目742番4外地点における埋蔵文化財発掘調査の報告である。
2. 発掘調査は平成21年7月21日～同年8月26日にかけて、個人専用住宅の建設に伴う国庫補助事業として鎌倉市教育委員会が実施した。調査面積は約45㎡である。
3. 発掘調査の体制は、以下のとおりである。

調査担当者 滝澤晶子
調査員 安藤龍馬 渡辺美佐子
作業員 渡辺輝彦・伴 一明・丹野正弘・鈴木啓之
(公益社団法人 鎌倉市シルバー人材センター)
4. 本報告書の作成並びに編集は鎌倉市教育委員会が行った。なお、図版作成等の報告書作成に係る基礎作業については、株式会社玉川文化財研究所に委託し実施した。
5. 出土動物遺体の鑑定は、東京国立博物館客員研究員の金子浩昌氏に依頼した。
6. 本報に掲載した写真は、遺構を滝澤晶子、遺物を赤間和重が撮影した。
7. 測量基準杭の設置にあたっては、日本測地系(座標系AREA9)を用い、図4に座標値を示した。
8. 発掘調査に係る出土品および図面・写真等の記録類は、鎌倉市教育委員会が保管している。
9. 発掘調査に係る出土品の注記については、遺跡名の略号を「ZYN」とした。
10. 遺構名称を付す際に土坑とピットの区別は、長軸規模が60cm以上の掘り込みを土坑とし、60cm未満のものをピットとして扱った。
11. 遺物挿図中の網掛け・指示は、以下のとおりである。

■ 煤およびタール状の黒色物が付着している部分・炭化範囲
12. 遺物の分類および編年には、以下の文献を参考にした。

かわらけ：鎌倉かわらけ研究会 2016『鎌倉かわらけの再検討－大倉幕府周辺遺跡の一括資料の分析から－』
瀬戸：愛知県史編さん委員会 2007『愛知県史別編 窯業2 中世・近世 瀬戸編』
渥美・常滑：愛知県史編さん委員会 2012『愛知県史別編 窯業3 中世・近世 常滑編』
貿易陶磁：太宰府市教育委員会 2000『大宰府条坊跡XV－陶磁器分類編－』
13. 出土品等整理作業の参加者は、次のとおりである(順不同)。

河合英夫・小山裕之・坪田弘子・香川達郎・西野吉論・御代七重・玉川久子・西本正憲・林原利明・赤間和重・木村百合子・田村正義・大貫由美・花本品子・浅野真里・御代祐子・鍋島昌代・水野敦子・石原むつみ・比嘉雪絵・深澤繁美(玉川文化財研究所)

目 次

第一章 遺跡と調査地点の概観	327
第1節 調査に至る経緯と経過	327
第2節 調査地点の位置と歴史的環境	327
第3節 周辺の考古学的調査	328
第二章 堆積土層	333
第三章 発見された遺構と遺物	333
第1節 第1面の遺構と遺物	333
第2節 第2面の遺構と遺物	341
第3節 第3面の遺構と遺物	345
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について	348
第五章 まとめ	349

挿 図 目 次

図1 遺跡位置図	329	図16 表土出土遺物(2)	340
図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡	330	図17 第1面 構成土出土遺物	340
図3 調査区位置図	332	図18 第2面 遺構分布図	341
図4 調査区配置図	332	図19 第2面 方形土坑1	342
図5 調査区南壁 土層断面図	333	図20 第2面 方形土坑1出土遺物	342
図6 第1面 遺構分布図	334	図21 第2面 土坑13	342
図7 第1面 土坑1~12	336	図22 第2面 土坑13出土遺物	342
図8 第1面 土坑1出土遺物	337	図23 第2面 構成土出土遺物	343
図9 第1面 土坑6出土遺物	337	図24 第3面 遺構分布図	344
図10 第1面 土坑7出土遺物	337	図25 第3面 溝状遺構1	344
図11 第1面 土坑11出土遺物	337	図26 第3面 溝状遺構1出土遺物	345
図12 第1面 土坑12出土遺物	337	図27 第3面 土坑14~21	346
図13 第1面 ピット45	338	図28 第3面 土坑21出土遺物	347
図14 第1面 ピット出土遺物	338	図29 第3面 溝状遺構1のイヌ骨出土状態(左) と全身骨格(右)	348
図15 表土出土遺物(1)	339		

表 目 次

表1	材木座町屋遺跡 調査地点一覧……………	331	一覧表……………	354
表2	第1面 出土遺物観察表……………	351	表6	出土人骨・動物遺体一覧表…………… 354
表3	第2面 出土遺物観察表……………	352	表7	遺構計測表…………… 355
表4	第3面 出土遺物観察表……………	353	表8	出土遺物一覧表…………… 356
表5	第3面 溝状遺構1 出土人骨・動物遺体			

図 版 目 次

図版1	1. 南壁土層断面(北から)……………	359	6. 第1面 ピット出土遺物……………	362
	2. 第1面南半全景(東から)……………	359	7. 表土出土遺物(1)……………	362
	3. 第1面北半全景(南から)……………	359	図版5	1. 表土出土遺物(2)…………… 363
図版2	1. 第2面南半全景(南から)……………	360	2. 第1面 構成土出土遺物……………	363
	2. 第2面北半全景(南から)……………	360	3. 第2面 方形土坑1 出土遺物 ……	363
	3. 第3面南半全景(南から)……………	360	4. 第2面 土坑13出土遺物……………	363
図版3	1. 第3面北半全景(南から)……………	361	図版6	1. 第2面 構成土出土遺物…………… 364
	2. 第3面 溝状遺構1 全景(西から)	…………… 361	2. 第3面 溝状遺構1 出土遺物 ……	364
	3. 第3面 溝状遺構1 イヌ骨出土状態		3. 第3面 土坑21出土遺物……………	364
	(東から)……………	361	図版7	1. 第3面 溝状遺構1 出土人骨・
図版4	1. 第1面 土坑1 出土遺物……………	362		動物遺体(1)…………… 365
	2. 第1面 土坑6 出土遺物……………	362	図版8	1. 第3面 溝状遺構1 出土動物遺体
	3. 第1面 土坑7 出土遺物……………	362		(2)…………… 366
	4. 第1面 土坑11出土遺物……………	362	図版9	1. 出土動物遺体(1)…………… 367
	5. 第1面 土坑12出土遺物……………	362	図版10	1. 出土人骨・動物遺体(2)…………… 368

第一章 遺跡と調査地点の概観

第1節 調査に至る経緯と経過

本発掘調査は、鎌倉市材木座六丁目742番4外で実施した個人専用住宅建設に伴う埋蔵文化財の事前調査である。

当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地である材木座町屋遺跡（神奈川県遺跡台帳No.261）の範囲内にあたる。建築主から柱状改良工事を伴う建築計画についての相談を受けた鎌倉市教育委員会は、当該工事が埋蔵文化財に与える影響の有無を確認するため、遺跡の確認と内容の把握を目的とした確認調査が必要と判断し、平成21年3月11日～同3月12日に4㎡の調査区を設定して調査を実施した。その結果、15世紀以降と考えられる遺跡が建築予定地に存在していることが判明したため、鎌倉市教育委員会は文化財保護法に基づく発掘調査などの措置を建築主と協議し、埋蔵文化財に影響が及ぶと予想される45㎡について本格調査を実施する運びとなった。発掘調査は鎌倉市教育委員会が調査主体となり、滝澤晶子が現地調査を担当した。

現地調査期間は平成21年7月21日～同年8月26日までの約1ヶ月間で、調査面積は約45㎡である。現地表の標高は5.1m前後を測る。掘削に伴う排土を場内処理する都合から調査区を南北に分け、北側をⅠ区、南側をⅡ区と呼称した。調査は重機により表土および遺構確認面までの堆積土を1.4m前後掘削し、その後はすべて人力による作業となった。調査の結果、中世に属する1～3面にわたる遺構確認面が検出され、各面において遺構を調査し、測量と写真撮影などの記録作業を行った。そして、8月26日をもって現地調査に関わるすべての業務を終了した。

第2節 調査地点の位置と歴史的環境

材木座町屋遺跡（No.261）は鎌倉市内中心部の南東域に位置し、本調査地点は材木座海岸にほど近い、鎌倉市材木座六丁目742番4外に所在する。海岸までの距離は190mほどである。

遺跡分布地図より材木座町屋遺跡の範囲を俯瞰すると、南は材木座海岸に面し、北はJR横須賀線の路線を境に米町遺跡（No.245）、西は滑川の東岸を境に由比ガ浜中世集団墓地遺跡（No.372）と接し、東は能蔵寺跡（No.314）、実相寺旧境内遺跡（No.255）、弁ヶ谷遺跡（No.249）、光明寺旧境内遺跡（No.316）との境界をなす現行道路と接する、東西約600m、南北約900mの範囲にわたる遺跡包蔵地である。また、市内の行政区画では、おおむね材木座一丁目から三丁目、五、六丁目の範囲にあたる。

地形的には、北と東西の三方を山々で囲まれた、鎌倉市街地の南東域に遺跡は位置し、遺跡包蔵地の大半は滑川東岸に広がる河川運搬物や砂堆・砂州などによって形成された、砂層上に立地することで知られている。また、周囲の海岸低地と比べ海拔標高はわずかに高く、現況の海拔は滑川から最も離れた北東側の材木座二丁目付近で8m前後を有する。包蔵地内は、南および西に向かって緩やかに傾斜し、包蔵地中央を南北方向に延びる道筋（小町大路）と交差する横須賀水道路付近で海拔約6m、海岸部に近い九品寺前の丁字路付近で5m前後、本調査地点では4.5m前後となり、遺構・遺物を伴う地点としては海岸線に最も近い調査事例の一つとなろう。

本調査地点から海岸まではわずかに190mほどで、相模湾に面して南西に開けた湾内は波も穏やかな砂浜が広がっている。この弓形の海岸を由比ヶ浜（前浜・西浜）と呼び、鎌倉時代に材木を扱う商工業

組合である「座」ができたことが地名の起源とされている(三浦編 2005)。鎌倉幕府は、府下7ヵ所を定めて交易の場所とした。それが絹座・米座・炭座・千朶積座・相物座・桧物座・馬商座(博労座)などである。相模湾の小入江の湾奥、和賀江島は鎌倉時代に築かれた港湾施設で、港の跡は現存する日本最古の築港いせきとして史跡に指定されている。

また、本調査地点の東側には、かつての小町大路とされる道筋があり、材木座海岸から乱橋を経て、大町四つ角で大町大路と交差し、小町を経て鶴岡八幡宮の東側の鳥居前に通ずる、若宮大路と並ぶ鎌倉幕府の中核をなした「大路」の一つでもある。この道筋の東西には、長勝寺、来迎寺、実相寺、妙長寺、啓運寺、向福寺、九品寺、五所神社、補陀落寺、光明寺などの寺社が建ち並び、さながら寺町の様相を呈している。これら現存する寺院以外にも多くの廃寺が存在した地域でもあった。

第3節 周辺の考古学的調査

本調査地点を含む材木座町屋遺跡の発掘調査事例は、市街地の中心部にあたる若宮大路周辺遺跡群や北条泰時・時頼邸跡、北条時房・顕時邸などの幕府の中核地区の遺跡と比べれば少ないが、中小様々な試掘調査までを含めると、これまでに60地点以上が知られている。多くは小規模な個人専用住宅建設に伴う調査地点であるため遺跡全体の性格を考えるには情報が断片的であるが、本調査地点を中心に示すことができた材木座町屋遺跡の南側域にあたる8地点の内容について概観したい。

地図上の最も北側に位置する。①材木座四丁目256番1の一部外地点の調査(汐見 2002)は、包蔵地範囲内では東側にあたる。調査面積は約103㎡で、調査事例のなかでは面積の広い地点である。方形竪穴建物と土坑を中心に遺構が重層的に発見された地点であるが、調査深度の規制からなかには完掘できなかった遺構もあった出土遺物は13世紀代に帰属するものも出土しているが、その中心は14世紀代で、15世紀前半には方形竪穴建物群は埋没していたと考えられている。

小町大路沿いの東側に位置する②材木座四丁目260番1外地点(田代 1990)の調査では、建物部分の基礎のみの調査であったため、遺構を確認したのは1面のみであるが、方形竪穴遺構や土坑、井戸、溝などが確認されている。これらの遺構は、14世紀後半以降と考えられており、なかでも方形竪穴建物の埋没時期は15世紀代と推測されている。また、遺構の性格を考えるうえで、方形竪穴建物内から出土した多量の鞆の羽口とスラグは注目される。

小町大路を隔てた②の向かいには③材木座三丁目364番1外地点(馬淵 1997)がある。報告者は遺構を上下層に大別し、それぞれの層から方形竪穴建物や方形土坑、土坑、柱穴などの遺構を抽出している。遺構出土の遺物から13世紀前半から特に後半にかけて最も賑わいをみせたことが推測でき、鎌倉幕府の開府や和賀江港の築造、港湾整備に伴ってこの一帯にも開発の手が入ったことを示していると思われる。

九品寺の丁字路の近くにある④材木座五丁目462番2地点(滝澤 2010)の調査では、3面の生活面が確認され、13世紀初頭から前半にかけての方形竪穴建物や柱穴、土坑などが発見されている。

本調査地点に近い、⑤材木座六丁目725番11地点(齊木 2013)の調査では、面積が狭いこともあって詳細は不明であるが、方形竪穴建物や土坑が確認されたことは、材木座地域における遺構群の共通したあり方といえよう。

材木座の東方、弁ヶ谷に近い、⑥材木座六丁目653番1外地点(香川 2009)では、遺構検出面を上位、下位に大別し、15世紀後半には埋没したとされる上位遺構面からは井戸、溝、ピット、胞衣皿埋納遺構、木杭、泥岩地業面などが検出され、調査者はこれらの遺構群について町屋的なあり方として捉えている。

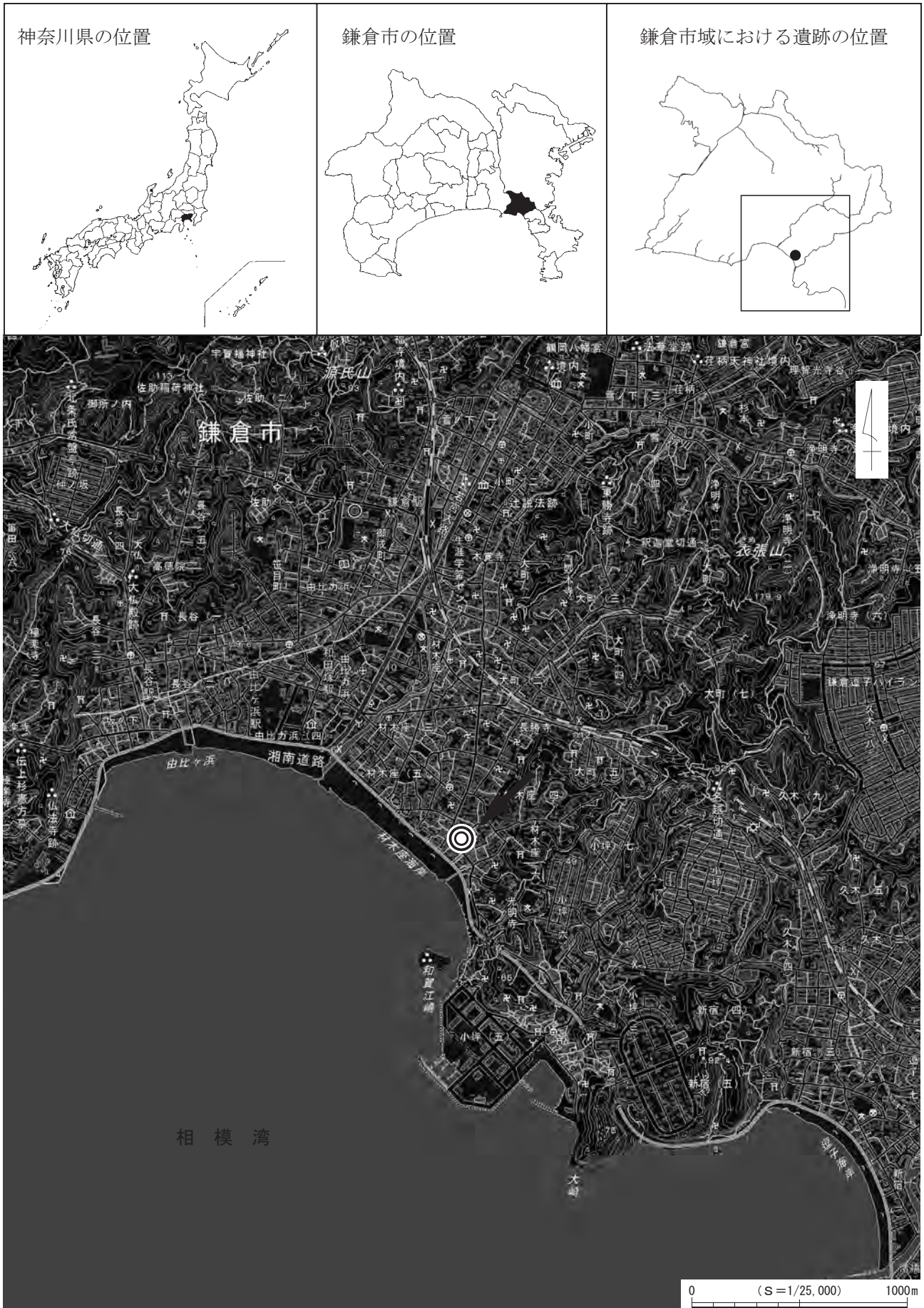


図1 遺跡位置図



※矢印は本調査地点、丸数字(表1の番号に対応)は調査地点を示す。

図2 調査区の位置と周辺の関連遺跡

また、下位遺構面では建物基礎部分の調査であったことから遺構は溝のみが確認されている。

同じく弁ヶ谷に近い、⑦材木座六丁目674番10地点(A地点)(齊木・根本・降矢 2005)の調査では、このほかに同674番15地点(B地点)、同674番8外地点(C地点)、同674番9地点(D地点)の調査が行われている。各地点はきわめて近い位置関係にありながら、それぞれ様相が異なるためまとめの項では各地点検出遺構の関係を整理し、4時期に区分して各遺構の年代を考察している。1期は12世紀末ないし13世紀前半とされる時期で、遺構は小規模な柱穴群と総柱建物になる可能性がある大形の柱穴が確認されている。2期は13世紀中頃とされる時期で、柱穴や土坑、井戸などが同一年代の遺構と推測している。3期は鎌倉が都市として賑わった頃と考えられる時期で、年代は13世紀後半から14世紀前半頃と推測している。遺構は細分される可能性もあるが、木組井戸や泥岩・凝灰質砂岩を使った道路や区画の痕跡、礎石や礎板を使ったと考えられる建物なども発見され、かつ遺物の種類も豊富であるという。4期は各地点とも後世の影響でおおかたの遺構は失われたと考えられ、14世紀後半から15世紀前半頃とされる井戸が1基だけの様相となっている。

最後に地図上では最も南側に位置する⑧材木座六丁目760番1地点(大河内・伊丹・押木 2001)は、本調査地点と同様に海浜部に近い調査地点である。和賀江島にも近く、南東約100mには光明寺、また北東約100mには補陀洛寺が所在している。調査では海拔2～3mまでの間に4面の遺構面が検出され、生活空間としては鎌倉では最も低地に立地する調査地点である。溝や木組遺構、土坑、ピットなどが発見され、遺構の多くは第2面と第3面で検出されている。これらが営まれた年代は、おおむね14世紀から15世紀前半頃とされ、また出土遺物のなかで灯明皿が多かったことや、瓦、火鉢などに混じって、華瓶・碗・皿など瀬戸窯の製品も目立つことから、調査者は本地点の性格として寺院的な景観も視野に入れて考えている。また、立地という観点からも、海浜部における生活空間としての遺跡の形成過程を考えるうえで、今次調査地点ともに参考となる調査地点と思われる。

表1 材木座町屋遺跡 調査地点一覧

番号	遺跡名	地点名	文献
本地点	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目742番4外地点	
①	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目256番1の一部地点	汐見 2002
②	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座四丁目260番1外地点	田代 1990
③	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座三丁目364番1外地点	馬淵 1997
④	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座五丁目462番2地点	滝澤 2010
⑤	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目725番11地点	齊木 2013
⑥	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目653番1外地点	香川 2009
⑦	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目674番10地点、同674番15地点、同674番8外地点、同674番9地点	齊木・根本・降矢 2005
⑧	材木座町屋遺跡 (No.261)	材木座六丁目760番1地点	大河内・伊丹・押木 2001

※遺跡Noは神奈川県遺跡台帳による。



図3 調査区位置図

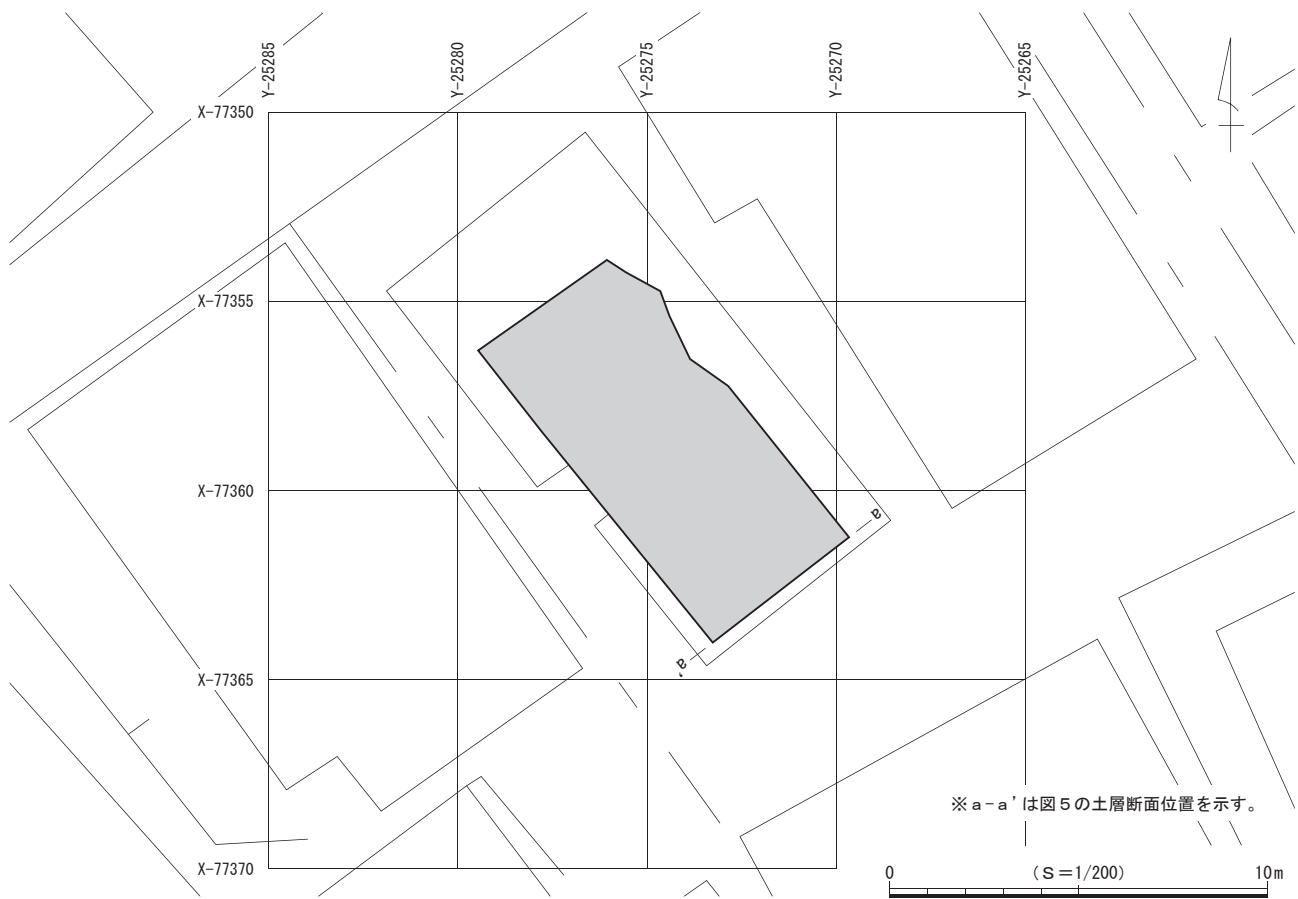


図4 調査区配置図

第二章 堆積土層

今回の調査における遺構確認面は、第1～3面までの合計3面である。ここでは、遺存状況の良好な調査区南壁面の土層断面を図示し、遺構確認面に相当する層を中心に詳述していきたい。なお、土層断面で確認されたが、平面的には不明瞭な遺構も認められた。

現地表面は標高約5.1m前後を測り、最上部には層厚100～120cmの表土(1層)、層厚40cm前後の泥岩粒・炭化物・かわらけ片を含み、締まりがやや弱く粘性のない暗茶褐色粘質土(2層)が堆積している。遺構確認面の第1面は3・4層上面で確認し、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含み、締まり・粘性のある茶褐色粘質土で、層厚25cmである。4層は泥岩ブロックとかかわらけ片を含み、締まりが弱く粘性のある暗褐色粘質土で、層厚10cm前後である。4層の下位には締まりの強い茶褐色砂質土(5・6層)が、層厚合計13～28cm堆積する。第2面は7層上面で確認し、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含み、締まり・粘性の強い灰茶褐色粘土で、層厚5～20cmである。第3面は9層上面で確認し、確認面の標高は3.0～3.1mを測る。9層はやや多くの炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、層厚30～42cmである。9層の下位には、地山である黄色砂(10層)が堆積している。

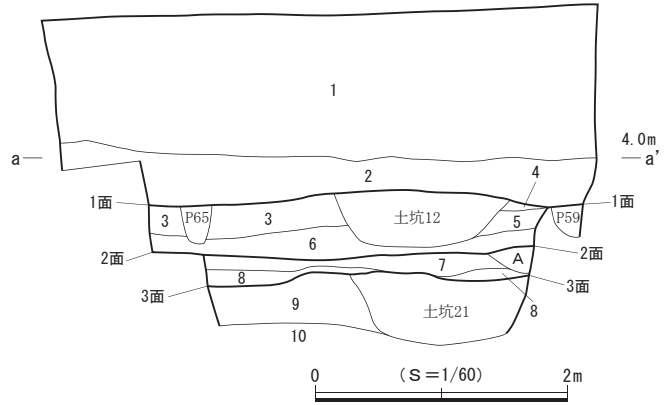
第三章 発見された遺構と遺物

今回の調査では、遺構確認面は第1～3面までの合計3面である。いずれも中世に属する遺構の確認面で、検出した遺構は、溝状遺構1条、方形土坑1基、土坑21基、ピット92基である。残土置き場の都合から、調査区の北側をⅠ区、南側をⅡ区として分割して調査を行ったが、報告に際しては両区を合わせて記述した。出土遺物は遺物収納箱(60×40×14cm)に換算して7箱を数える。なお、各面の遺構および構成土中からは動物遺体が出土しており、種別の同定結果を表5・6に明記したので参照されたい。以下、発見された遺構と出土遺物について、面ごと(第1～3面)に説明する。

第1節 第1面の遺構と遺物

第1面の遺構は堆積土層の3・4層上面で検出され、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含み、締まり・粘性のある茶褐色粘質土、4層は泥岩ブロックとかかわらけ片を含み、締まりが弱く粘性のある暗褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑12基、ピット65基であり、調査区全面に分布していた(図6)。土坑のうち10

南壁



- 1層 表土
- 2層 暗茶褐色粘質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片含む。締まりやや弱く、粘性なし。
- 3層 茶褐色粘質土 泥岩粒・炭化物多量、かわらけ片含む。締まり・粘性あり。(第1面)
- 4層 暗褐色粘質土 泥岩ブロック・かわらけ片含む。締まり弱く、粘性あり。(第1面)
- 5層 茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物含む。締まり強い。
- 6層 茶褐色砂質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片・褐鉄含む。締まりあり。
- 7層 灰茶褐色粘土 炭化物含む。締まり・粘性強い。(第2面)
- 8層 灰茶褐色砂質土 炭化物少量含む。締まりあり。
- 9層 茶褐色砂質土 炭化物やや多く、貝砂含む。締まりやや弱い。(第3面)
- 10層 黄色砂 地山

[遺構]

- A層 灰茶褐色粘質土 泥岩粒・炭化物多量、かわらけ片含む。締まりあり、粘性強い。

図5 調査区南壁 土層断面図

基は調査区外に及んでおり、攪乱および他遺構との重複のため、全容を把握できたものは1基のみである。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、骨製品、金属製品、石製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀末葉～16世紀前葉頃に属すると考えられる。

(1) 土坑

土坑1 (図7)

調査区北西隅に位置する。北・西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは隅丸長方形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、北西-南東方向の現存長78cm、北東-南西方向の現存長59cm、深さ8cmで、坑底面の標高は3.59mを測る。

出土遺物 (図8)

遺物はかわらけ5点、陶器2点が出土し、このうち1点を図示した。

1は備前産の播鉢であり、内面に粗い播目が遺存する。

土坑2 (図7)

調査区中央やや北側の西壁際に位置する。南西側の一部が調査区外に及んでいる。ピット33と重複し、北壁の一部を壊している。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸現存長87cm、短軸66cm、深さ16cmで、坑底面の標高は3.49mを測る。主軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物はかわらけ9点、陶器3点、土器1点が出土した。

土坑3 (図7)

調査区北側の東壁寄りに位置する。ピット27と重複し、北壁の一部が壊されている。平面形は卵形に近い楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は、長軸80cm、短軸62cm、深さ11cmで、坑底面の標高は3.60mを測る。主軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は磁器1点、陶器1点、金属製品1点が出土した。

土坑4 (図7)

調査区やや北側の東壁寄りに位置する。土坑5およびピット30と重複し、南東壁と北西壁の各一部が

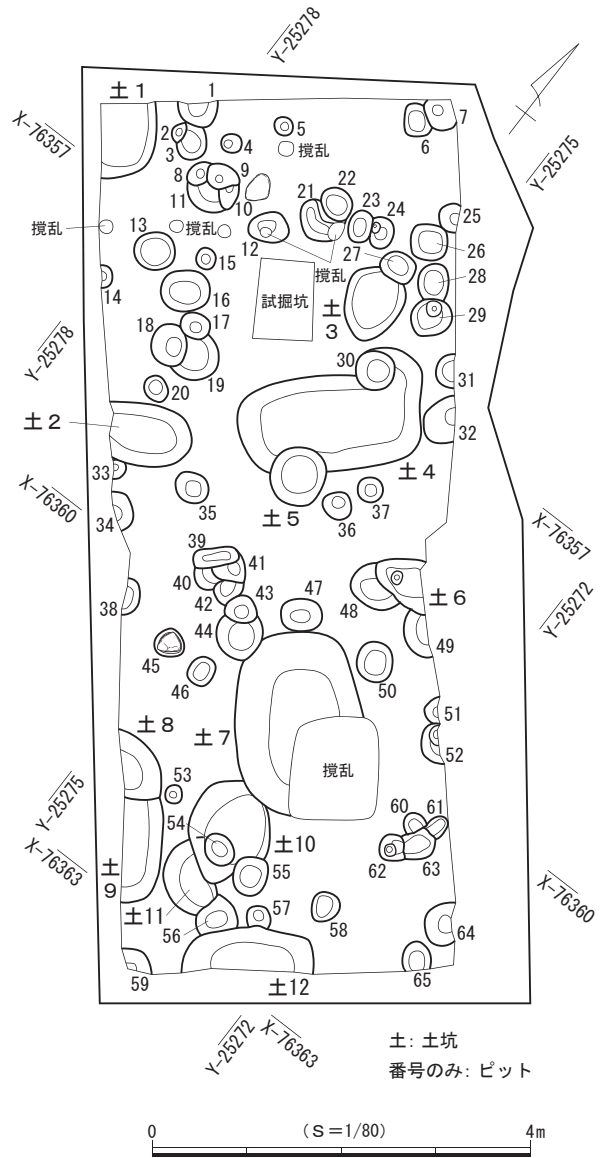


図6 第1面 遺構分布図

壊されている。平面形は隅丸長方形を呈するが、北隅がやや突出している。底面は中央に向かってなだらかに傾斜し、壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.95m、短軸1.19m、深さ9cmで、坑底面の標高は3.50mを測る。主軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物はかわらけ4点、磁器2点、陶器4点、土器1点が出土した。

土坑5 (図7)

調査区中央のやや北側に位置する。土坑4と重複し、南東壁の一部を壊している。平面形は略円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は径62cm、深さ19cmで、坑底面の標高は3.57mを測る。

遺物はかわらけ3点、陶器3点が出土した。

土坑6 (図7)

調査区中央付近の東壁際に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。ピット48・49と重複し、両者の一部を壊している。平面形は不整楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長72cm、短軸52cm、深さ31cmで、坑底面の標高は3.49mを測る。底面の西側にはピットが1基あり、深さ8cmである。

出土遺物 (図9)

遺物はかわらけ1点、陶器2点、土器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径8.3cmを測る小形品である。

土坑7 (図7)

調査区中央のやや南側に位置する。南東側に攪乱があり、約1/4が失われている。ピット44と重複し、北西壁の一部が壊されている。平面形は胴張隅丸長方形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.93m、短軸1.37m、深さ32cmで、坑底面の標高は3.32mを測る。主軸方位はN-39°-Wを指す。

出土遺物 (図10)

遺物は、かわらけ14点、磁器1点、陶器4点、土器2点、石製品1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は流紋岩素材の砥石であり、表裏面を使用面とし、研磨による変形が著しい。

土坑8 (図7)

調査区やや南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑9と重複し、北西壁を壊している。検出された範囲からは楕円形を呈するものと推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長70cm、短軸現存長64cm、深さ24cmで、坑底面の標高は3.44mを測る。

遺物はかわらけ3点、陶器1点が出土した。

土坑9 (図7)

調査区南隅付近の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、遺構の全容は明らかでない。

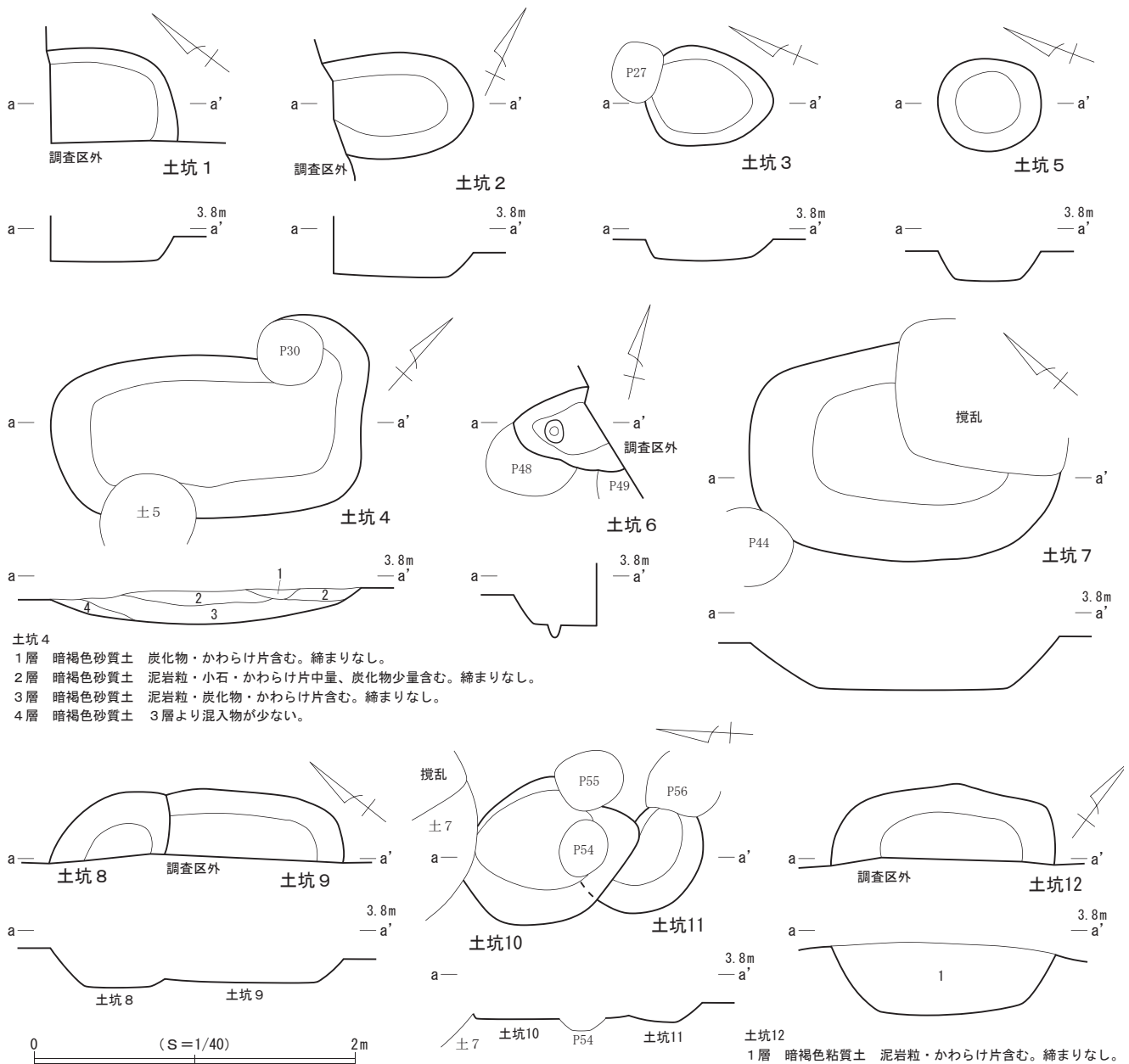


図7 第1面 土坑1～12

検出された範囲からは楕円形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形と推定される。規模は長軸現存長1.11m、短軸現存長42cm、深さ15cmで、坑底面の標高は3.47mを測る。主軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物はかわらけ4点、陶器4点、金属製品2点が出土した。

土坑10(図7)

調査区南側のやや西壁寄りに位置する。土坑7・11、ピット54・55と重複して北壁と南東壁の一部が壊され、土坑11の北壁の一部を壊している。平面形は不整楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.14m、短軸88cm、深さ13cmで、坑底面の標高は3.52mを測る。主軸方位はN-11°-Wを指す。

遺物はかわらけ3点、陶器3点が出土した。

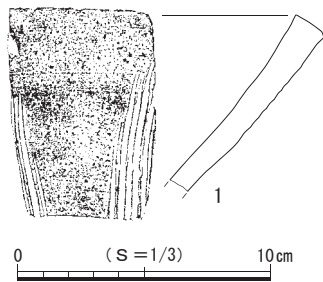


図8 第1面 土坑1出土遺物

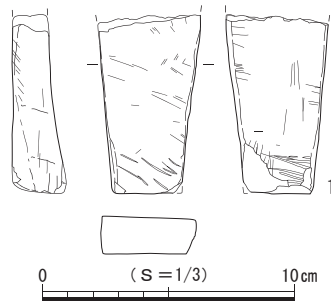


図10 第1面 土坑7出土遺物

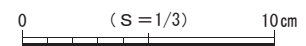
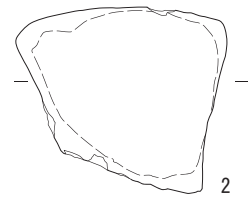


図12 第1面 土坑12出土遺物

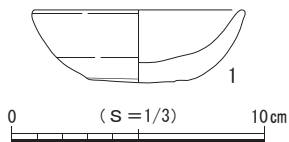


図9 第1面 土坑6出土遺物

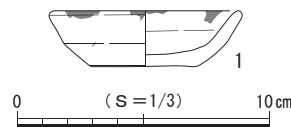


図11 第1面 土坑11出土遺物

土坑11(図7)

調査区南側のやや西壁寄りに位置する。土坑10、ピット56と重複して北壁と東壁の一部が壊されている。平面形は不整楕円形を呈すると推定され、底面は北側に向かって高くなる。壁は開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は長軸現存長70cm、短軸現存長49cm、深さ9cmで、坑底面の標高は3.50mを測る。主軸方位はN-63°-Wを指す。

出土遺物(図11)

遺物はかわらけ6点、陶器1点が出土し、このうち1点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけである。口径7.4cmを測る小形品であり、口縁部内外面に油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。

土坑12(図7)

調査区南側の南壁際に位置する。南側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。ピット56・57と重複して南壁を壊している。検出された範囲からは隅丸方形を呈すると推定され、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.38m、短軸現存長47cm、深さ45cmで、坑底面の標高は3.28mを測る。主軸方位はN-53°-Eを指す。

出土遺物(図12)

遺物はかわらけ27点、磁器1点、陶器9点が出土し、このうち2点を図示した。

1は瀬戸産の緑釉小皿であり、露胎部の内外面には煤が付着する。2は常滑産甕の破片を磨具に利用して縁辺から破断面にかけて研磨が及んでいる。

(2)ピット

第1面では、65基を検出した。調査区全域に分布しており、北側、中央、南側でややまとまりがある。しかし、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピット45からは礎石が出土している。ピットの平面形は円形、楕円形、方形のものがあ、規模は長軸19~55cm、深さ4~39cmと長軸・深さともにばらつきがある。

以下、礎石が据えられたピット1基を図示し、説明する。

ピット45 (図13)

調査区中央やや南側の西壁寄りに位置する。平面形は略円形で、断面形は皿状を呈する。規模は径30～32cm、深さ4cmを測り、礎石が底面に据えられていた。礎石の大きさは長さ24cm、幅23cm、厚さ4cmを測り、上面の標高は3.68mである。

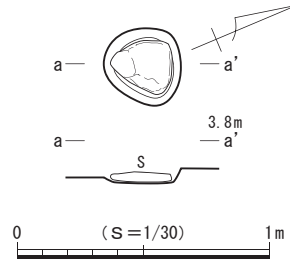


図13 第1面 ピット45

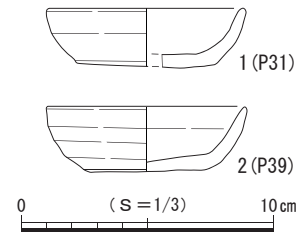


図14 第1面 ピット出土遺物

ピット出土遺物 (図14)

遺物は65基のピット中、19基から出土し、詳細は表8に掲げた。このうち2点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、口径7.7～7.8cmを測る小形品である。1はピット31、2はピット39からそれぞれ出土した。

(3) 表土出土遺物 (図15・16)

表土からも遺物が出土しており、詳細は表8に掲げた。このうち43点を参考資料として図示した。

1～7はロクロ成形のかわらけであり、このうち1～5は口径6.0～7.7cmを測る小形品、6は口径11.0cmを測る中形品、7は口径13.0cmを測る大形品である。3・4には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。8～11は龍泉窯系青磁で、このうち8・9は碗であり、8は内面見込みに草花の印文が施されるⅠ-1c類。高台内に煤が付着する。9は外面に鎬蓮弁文、内面見込みに草花の印文が施されるⅡ-c類である。10は外面に草花の浮文が施される壺、11は酒会壺の胴部下位から底部であり、外面に蓮弁が施される。

12～29は陶器であり、このうち12～17は瀬戸産である。12・13は平碗であり、14は直縁大皿、15は折縁深皿である。16は鉄釉が施された仏華瓶。17は外面と口縁部内面に鉄釉が施された袴腰形香炉である。18は長石釉が内外面に施された瀬戸・美濃産の志野皿である。19～27は常滑産で、このうち19・20は玉縁壺であり口縁部形状から19は11型式、20は11～12型式に比定される。21～23は甕であり、このうち21は口縁部形状から9～10型式に比定される。22は底部。23は胴部で外面に車輪文と格子文を組み合わせた押印が施される。24～26は片口鉢Ⅱ類であり、口縁部形状から8型式に比定される。27は壺ないし甕の湾曲した胴部破片を磨具に利用しており、表面と破断面が研磨されている。28は東播系の鉢である。29は備前産の播鉢であり、粗い播目が遺存する。30～33は瓦質土器で、このうち30～32は火鉢であり、30は口径22.8cmに復元され、外面には花文の押印が施される。31は外面に横位の沈線と四菱、円形浮文が施される。32は横位沈線区画内に菊花文、下位には円形浮文が施されるが、器面の剥離が著しい。33は口径9.0cmに復元される小形品で香炉と考えられる。外面には、横位の沈線によって区画された文様帯に四菱と「S」字状文の押印が交互に施される。34は1/2が残存する東海系の羽釜であり、口径25.6cmに復元される。内面には口縁部と体部下位に煤が付着する。35は全長3.7cmの俵形土錘である。36・37は石製品であり、このうち36は角柱状を呈する滑石の破片であり、石鍋の破片に再加工を施しているものとみられ、表面に縦位の切れ込みを入れて分割を図っている。37は粘板岩素材の砥石であり、表裏面と片側面の3面を使用する。表裏面には研磨に加えて条線が顕著に残る。38～43の銭貨は、銭銘がそれぞれ38・39が開元通寶(960年初鑄)、40が皇宋通寶(1038年初鑄)、41が至和通寶(1054年初鑄)、42が元豊通寶(1078年初鑄)、43が紹聖元寶(1094年初鑄)となる。

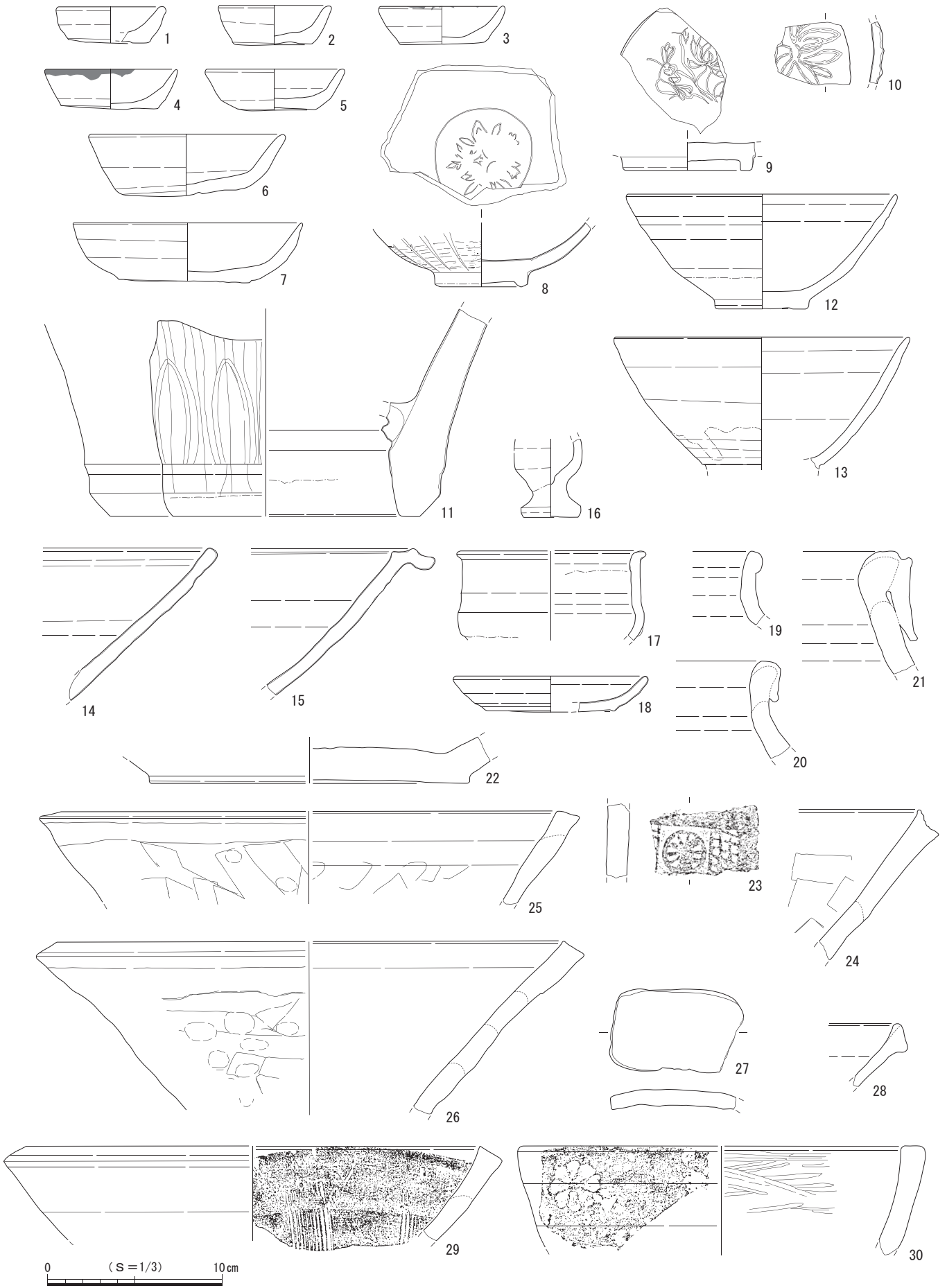


图15 表土出土遺物 (1)

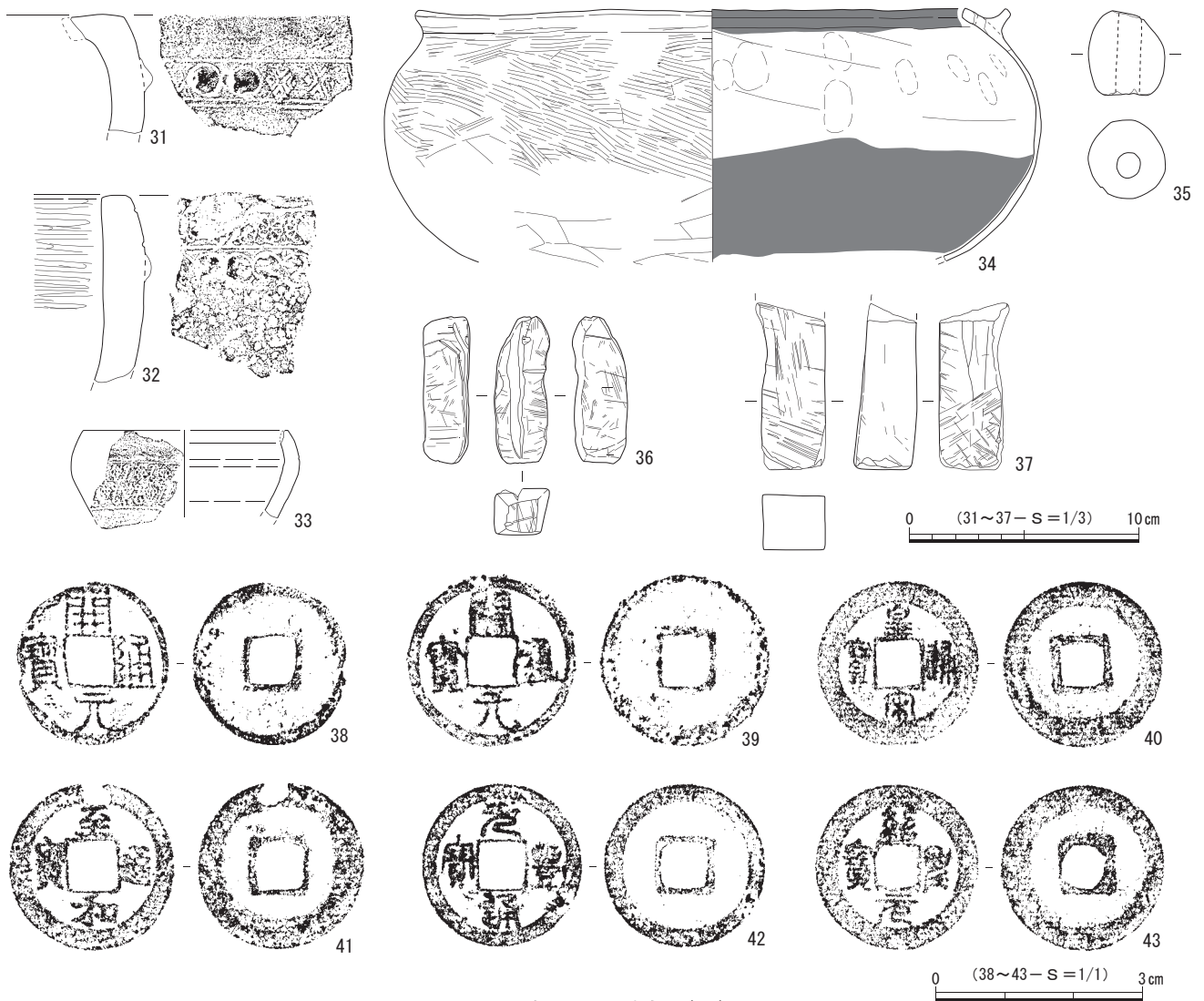


図16 表土出土遺物 (2)

(4) 第1面 構成土出土遺物 (図17)

第1面の遺構基盤層からも遺物が出土し、詳細は表8に掲げた。このうち5点を図示した。

1・2はロクロ成形のかわらけであり、1は口径7.9cmに復元される小形品、2は口径11.3cmを測る中形品である。3は瓦質土器の火鉢であり、外面には菊花と唐草の押印と円形の浮文が施される。内面には赤色顔料が付着する。4はシカの中足骨を加工した筭であり、両端部を欠損する。5は粘板岩を素材とした砥石であり、4面を使用し、研磨による変形が著しい。

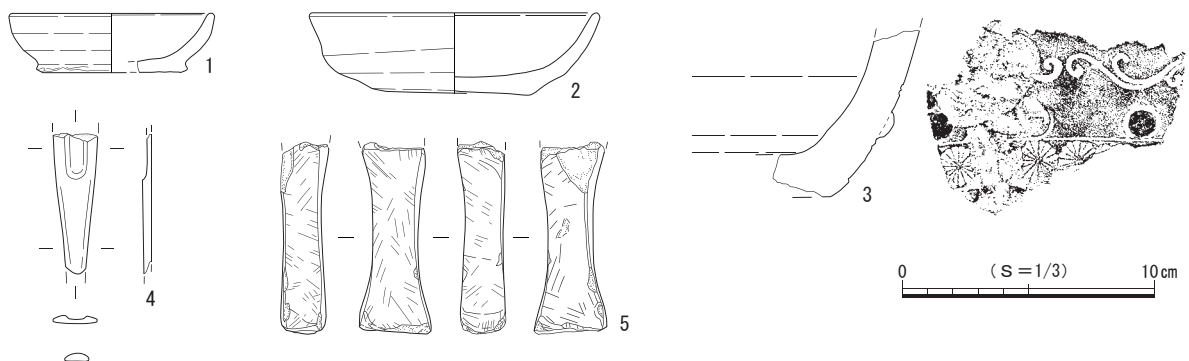


図17 第1面 構成土出土遺物

第2節 第2面の遺構と遺物

第2面の遺構は7層上面で検出され、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含み、締まり・粘性の強い灰茶褐色粘土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は方形土坑1基、土坑1基、ピット12基である(図18)。遺構の分布をみると、方形土坑と土坑は調査区南側、ピットは調査区北・東壁寄りに分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、石製品、骨製品、金属製品、木製品などが出土しており、これらの年代観から本面は15世紀中葉～後葉頃に属すると考えられる。

(1) 方形土坑

方形土坑1(図19)

調査区南側に位置する。平面形は北西側隅が矩形、南東側隅が隅丸を呈する長方形である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸2.51m、短軸1.63m、深さ41cmで、坑底面の標高は3.07mを測る。主軸方位はN-37°-Wを指す。

出土遺物(図20)

遺物はかわらけ25点、磁器4点、陶器18点、土器5点、瓦質土器1点、石製品2点、金属製品6点が出土し、このうち4点を図示した。

1は東海系の羽釜である。2・3は粘板岩素材の砥石であり、2は表裏面と端面の3面を使用し縁辺を中心にやや太く深い条線を残す。3は表面・両側縁の3面を使用し、石質は2よりきめ細かい粒子である。4の銭貨は聖宋元寶(1101年初鑄)である。

(2) 土坑

土坑13(図21)

調査区南側の東壁際に位置する。東側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは略円形あるいは楕円形を呈すると推定される。壁は大きく開いて立ち上がり、断面形は皿状を呈する。規模は北西-南東方向の現存長1.29m、南西-北東方向の現存長62cm、深さ16cmで、坑底面の標高は3.27mを測る。

出土遺物(図22)

遺物はかわらけ4点、陶器2点、瓦1点が出土し、このうち1点を図示した。

1は凸面に斜格子状の叩きが施された平瓦である。

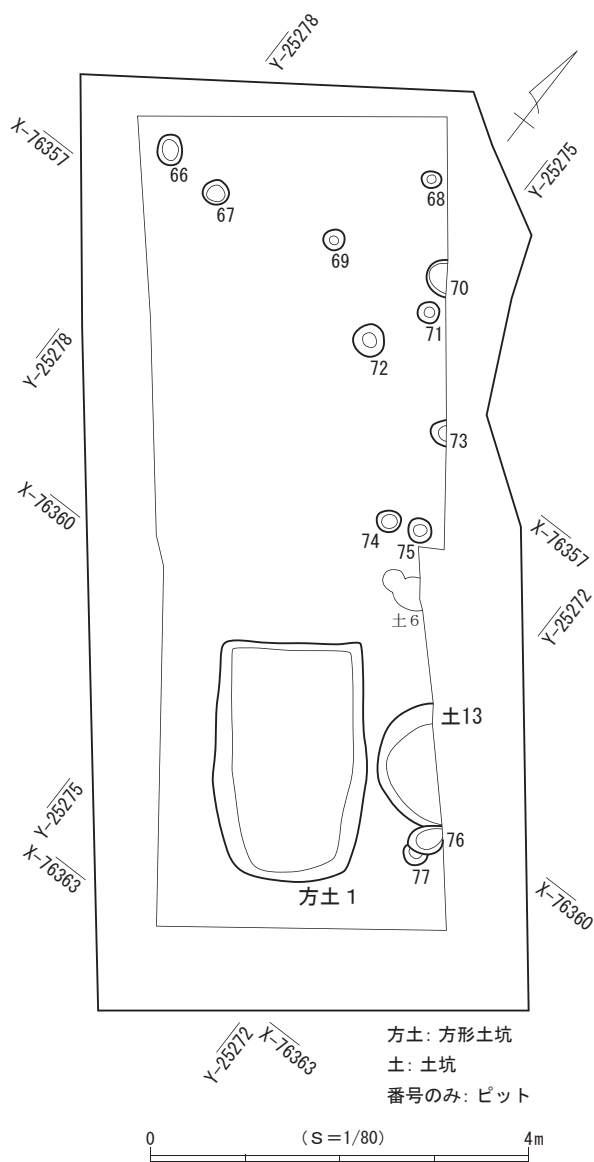
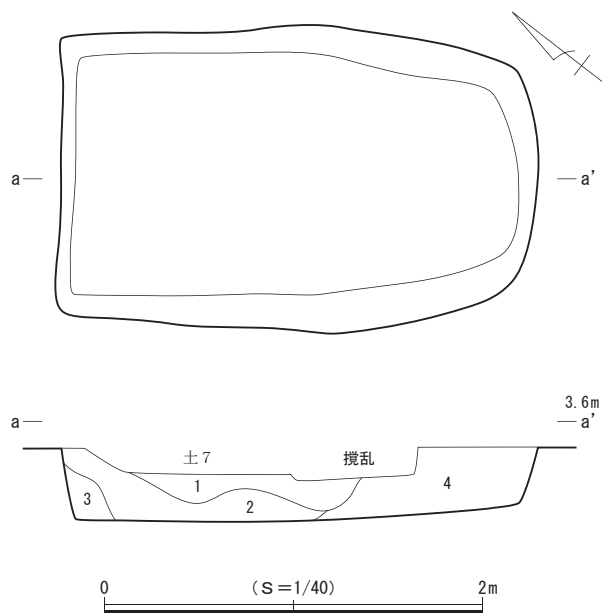


図18 第2面 遺構分布図



- 1層 暗褐色砂質土 泥岩粒・炭化物・かわらけ片含む。締まりなし。
- 2層 黒褐色砂質土 炭化物・かわらけ片・貝砂含む。締まりややある。
- 3層 暗黄茶褐色砂質土 炭化物・貝砂含む。締まりある。
- 4層 灰色粘土 炭化物極少量含む。締まりある。

図19 第2面 方形土坑1

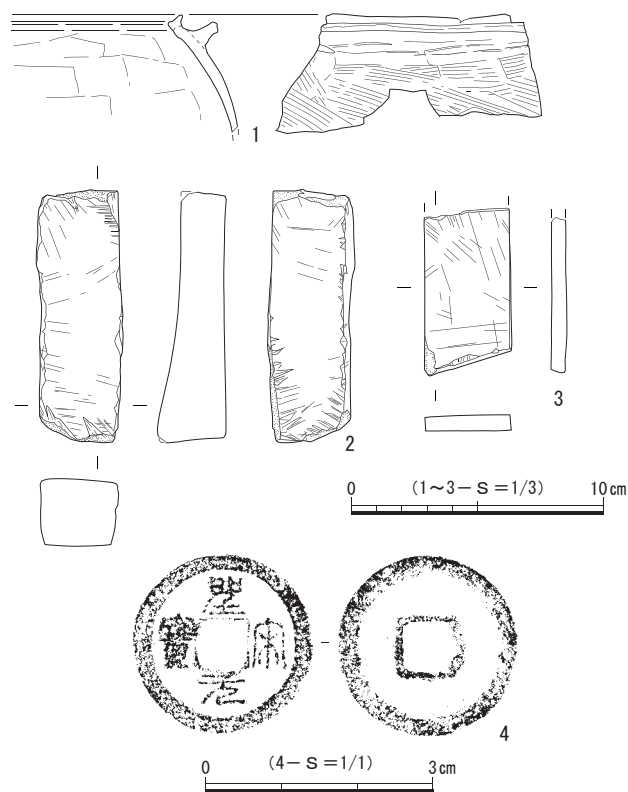


図20 第2面 方形土坑1 出土遺物

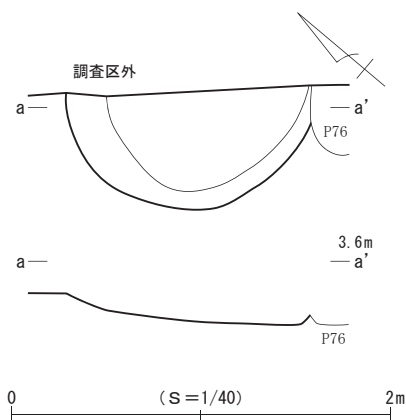


図21 第2面 土坑13

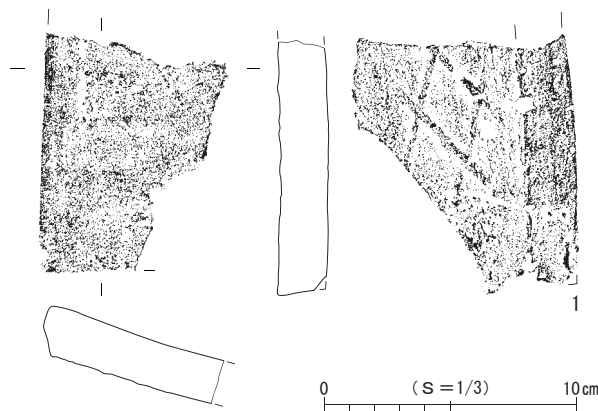


図22 第2面 土坑13出土遺物

(3) ピット

第2面では、12基を検出した。いずれも調査区の北壁および東壁付近に分布しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径21~40cm、深さ4~16cmと長径・深さともにはばらつきがある。

遺物は出土しなかった。

(4) 第2面 構成土出土遺物 (図23)

第2面の遺構基盤層となる土層からも遺物が出土しており、表8に掲げた。このうち22点を図示した。1~4はかわらけであり、1~3は口径7.0~7.6cmの小形品であり、4は口径13.4cmの大形品である。

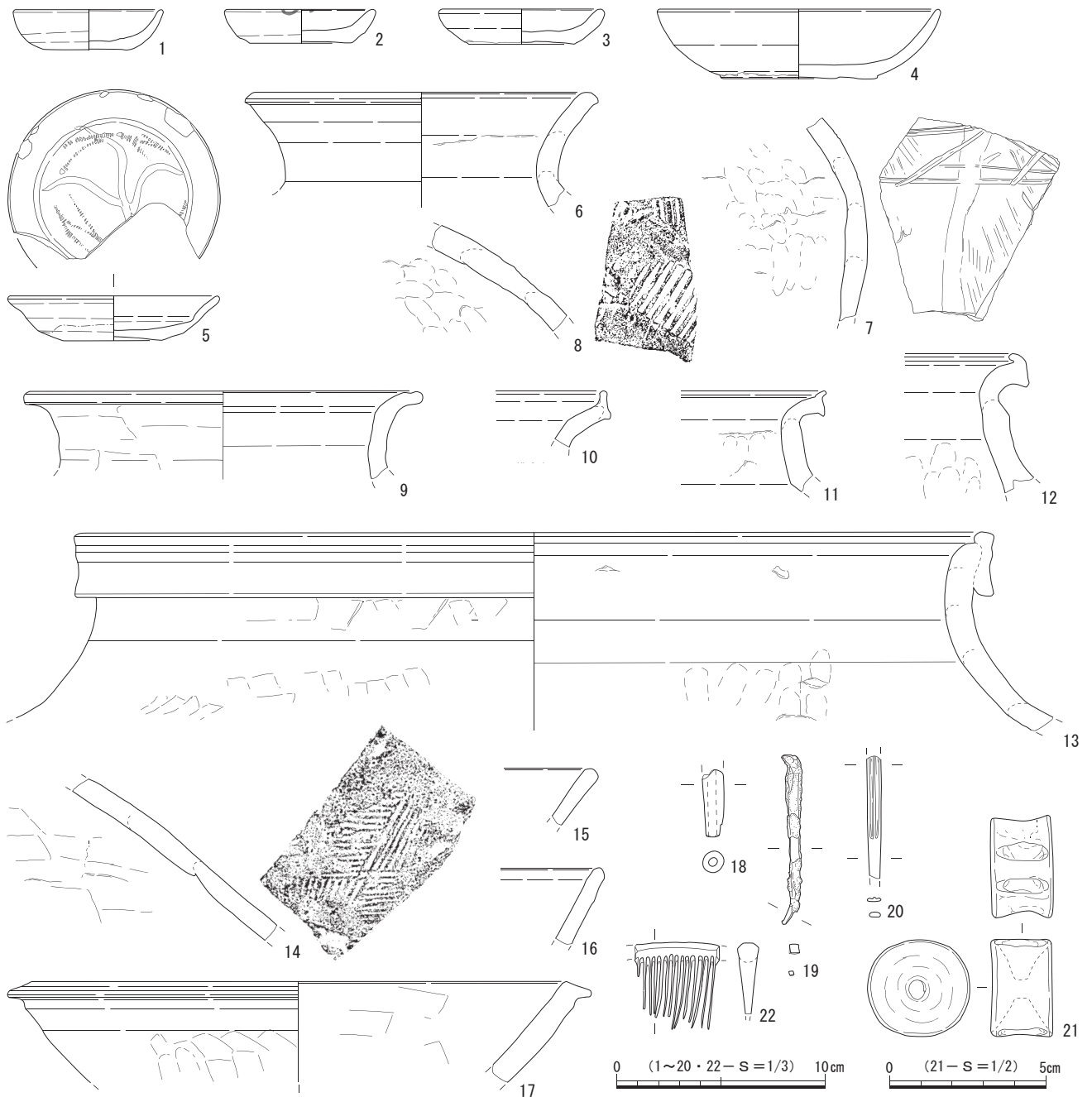


図23 第2面 構成土出土遺物

2の口縁部には油煤が付着し、灯明具としての使用が認められる。5は龍泉窯系青磁の皿である。内面見込みにヘラと櫛状工具を用いて文様が施される口径10.0cmの小形品であり、I - 2 b類に比定される。6~17は陶器であり、このうち6~8は渥美産の壺。6は口縁部~頸部、7は胴部上半~肩部であり、檜垣文であろうか、外面には横位・斜位の刻線が施される。8は肩部で縦線の押印が施される。9~17は常滑産であり、9~14は甕、このうち9~13は口縁部で、形状から9が4型式、10・11が5型式、12は6 a型式、13は9型式にそれぞれ比定される。14は肩部であり、外面には複合斜線の押印が施される。15~17は片口鉢で、このうち15・16がI類。17はII類であり口縁部形状から9型式に比定される。18は現存長3.2cmを測る管状土錘。19は現存長8.1cmを測る鉄釘。20はシカの中足骨を素材とした細身の筭であり両端部を欠損する。21はメジロザメ科の椎骨に加工が施されたもので、中心部に径0.5~0.6cmの円孔が貫通し、側面が使用により摩耗している。22の木製品は櫛歯が14本遺存する横櫛である。

第3節 第3面の遺構と遺物

第3面は9層上面で検出され、確認面の標高は3.0~3.1m測る。9層はやや多くの炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑8基、ピット15基である(図24)。遺構の分布をみると、溝状遺構は調査区北側を北東-南西方向に延び、土坑は調査区全域、ピットは調査区南側に集中して分布している。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品などが出土しており、これらの年代観や上位第2面の年代から、本面は14世紀代に属すると推定される。

(1) 溝状遺構

溝状遺構1(図24・25)

調査区北側に位置する。北東-南西方向に延び、調査区外まで及んでいる。土坑15・16、ピット78・79と重複し、すべての遺構の上端全体あるいは一部を壊している。直線的に掘られており、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。検出した規模は現存長約2.0m、幅が最大で2.27m、深さ27~35cmで、底面の標高は2.75m前後を測る。主軸方位はN-41°-Eを指す。溝の底面から10cm上より犬の全身骨がまとまって出土しており、第四章に詳細を記したので参照されたい。

出土遺物(図26)

遺物はかわらけ6点、陶器34点、瓦質土器1点、瓦4点、石製品1点が出土し、このうち7点を図示した。

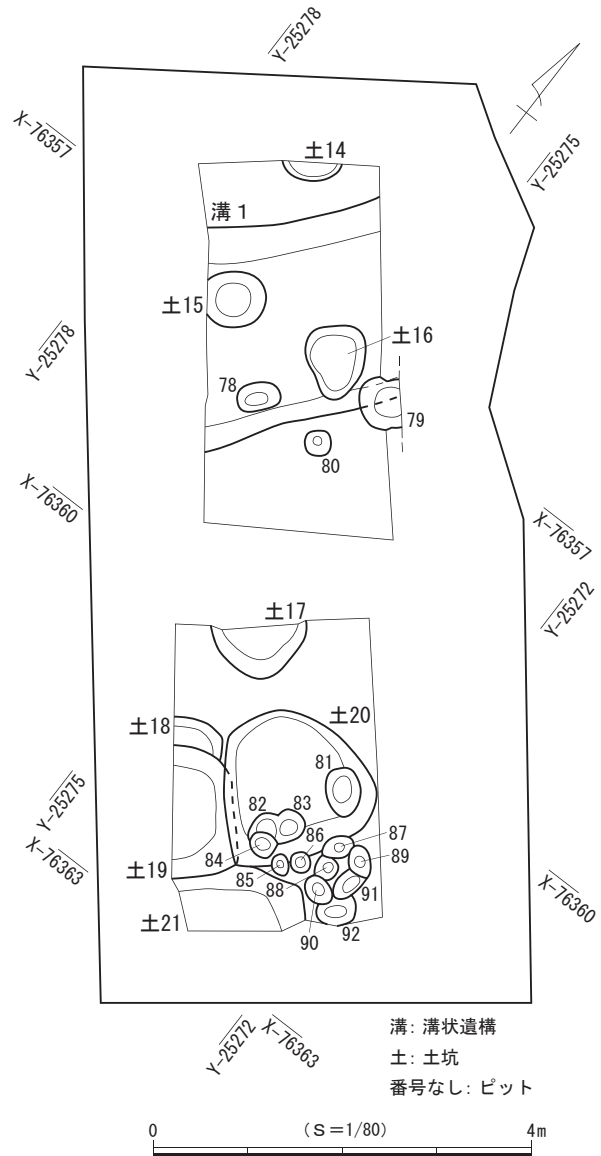
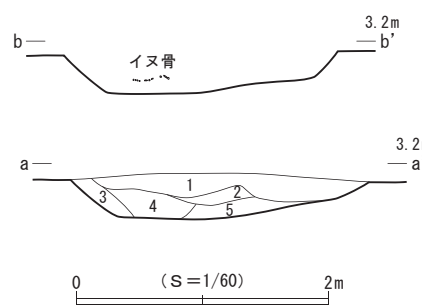
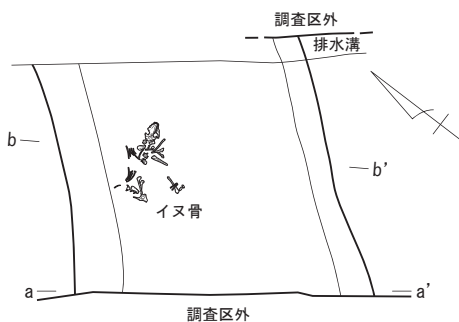


図24 第3面 遺構分布図



- 1層 暗灰褐色粘質土 炭化物・粘土含む。締まりあり。
- 2層 暗灰褐色粘質土 炭化物・灰褐色砂含む。締まりあり。
- 3層 暗黄褐色砂 炭化物・貝砂含む。締まりあり。
- 4層 暗灰褐色粘質土 1層に類似。1層より混入物が少ない。
- 5層 暗灰褐色砂質土 砂と粘質土がブロック状に混入。炭化物含む。締まりあり。

図25 第3面 溝状遺構1

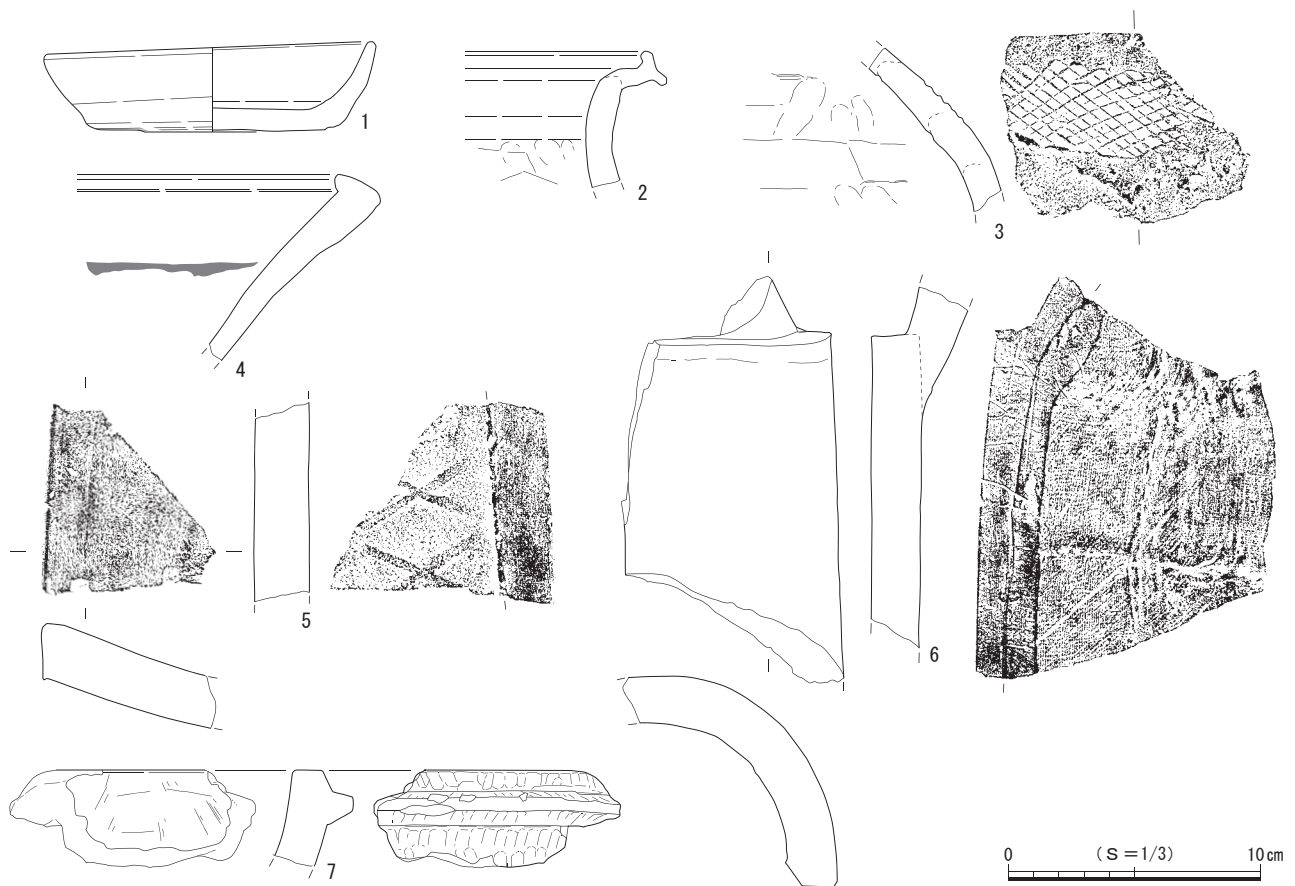


図26 第3面 溝状遺構1出土遺物

1はロクロ成形のかわらけであり、口径12.9cmを測る中形品である。2・3は常滑産の甕であり、2は口縁部形状から6 a類に比定される。3は肩部であり外面には斜格子の押印が施される。4は瓦質土器の火鉢。5は凸面に格子目の叩きが施された平瓦。6は丸瓦である。7は台形に成形された鏝が遺存する滑石製石鍋である。

(2) 土 坑

土坑14 (図27)

調査区北壁際に位置する。北側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。底面はほぼ水平で、壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長63cm、北西-南東方向の現存長20cm、深さ6cmで、坑底面の標高は3.00mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑15 (図27)

調査区北西側の西壁際に位置する。西側の一部が調査区外に及んでいる。溝状遺構1と重複し、遺構の上部が壊されている。平面形は楕円形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸現存長62cm、短軸49cm、確認面からの深さ43cmで、坑底面の標高は2.43mを測る。主軸方位はN-50°-Eを指す。

遺物は出土しなかった。

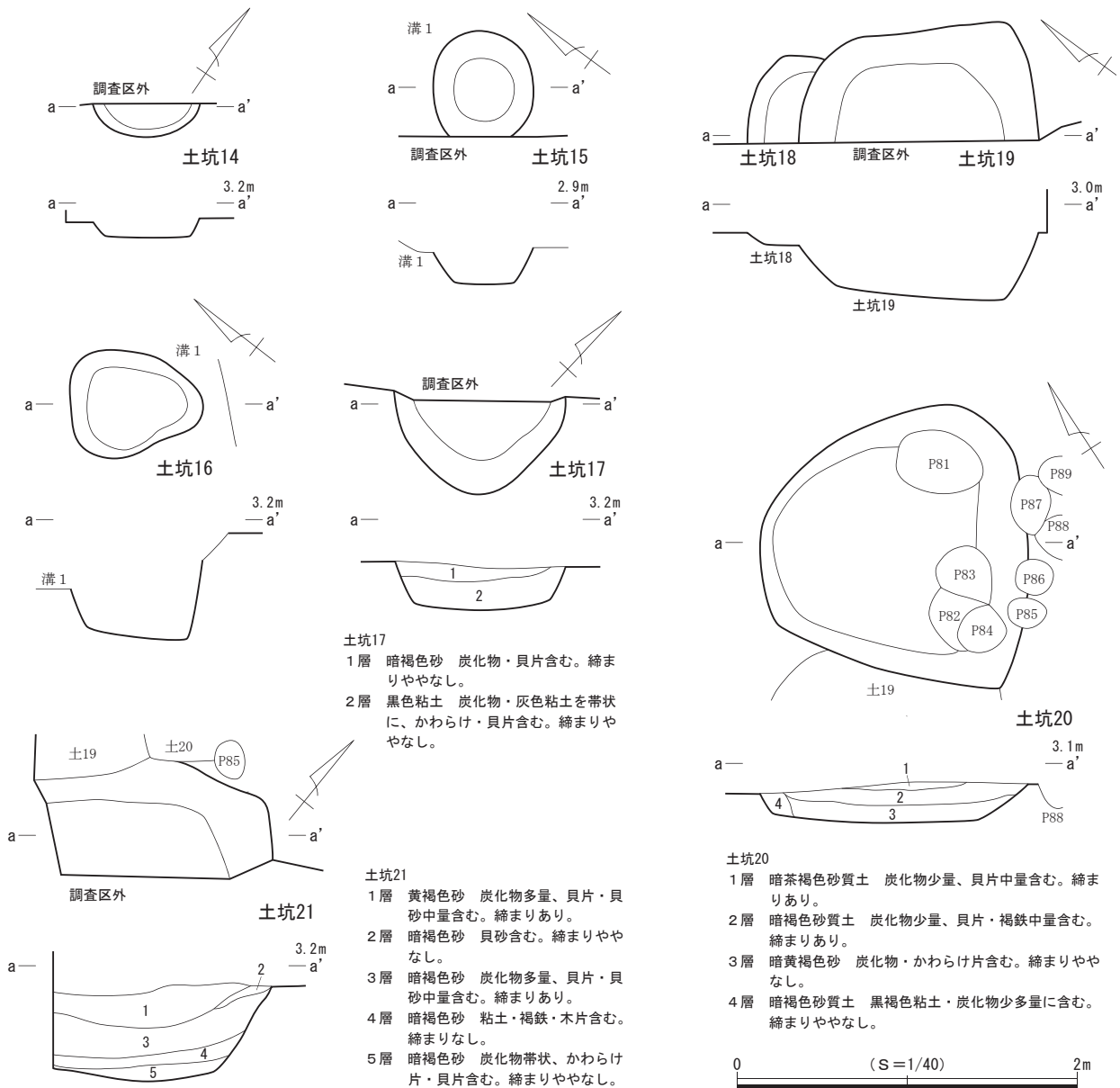


図27 第3面 土坑14~21

土坑16 (図27)

調査区北側の東壁寄りに位置する。溝状遺構1と重複し、遺構の上部が壊されている。平面形は不整楕円形を呈し、底面は北側に向かって緩やかに高くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸78cm、短軸63cm、深さ63cmで、坑底面の標高は2.50mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑17 (図27)

調査区中央付近に位置する。北側が安全対策上残された未調査部分に及んでいるため、全容は明らかでない。検出された範囲からは楕円形を呈すると推定され、底面は中央に向かってわずかに低くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西1.00m、北西-南東方向の現存長55cm、深さ27cmで、坑底面の標高は2.68mを測る。

遺物はかわらけ1点、陶器1点が出土した。

土坑18 (図27)

調査区南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及び、南側が土坑19と重複して壊されているため、全容は明らかでない。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は東西現存長67cm、南北現存長30cm、深さ8cmで、坑底面の標高は2.76mを測る。

遺物は出土しなかった。

土坑19 (図27)

調査区南側の西壁際に位置する。西側が調査区外に及んでいるため、全容は明らかでない。土坑18・20・21と重複し、土坑18の南側と土坑21の北西壁の一部を壊し、土坑20に東壁の一部が壊されている。検出された範囲からは平面が楕円形あるいは隅丸方形を呈すると推定され、底面は北側に向かって緩やかに高くなっている。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北西-南東1.41m、北東-南西方向の現存長69cm、深さ35cmで、坑底面の標高は2.45mを測る。

遺物は陶器2点が出土した。

土坑20 (図27)

調査区南側に位置する。土坑19・21、ピット81~87と重複し、土坑19の北東壁と土坑21の北西壁の一部を壊し、ピット81~87に遺構の南側が壊されている。平面形は北西側の辺が短い隅丸台形を呈し、底面はほぼ水平である。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.68m、短軸1.57m、深さ12cmで、坑底面の標高は2.76mを測る。

遺物はかわらけ1点、陶器2点が出土した。

土坑21 (図27)

調査区南隅に位置する。南および西側が調査区外に及び、土坑19・20と重複して北西壁の一部を壊されているため、全容は明らかでない。壁は開いて立ち上がり、断面形は逆台形を呈する。規模は北東-南西方向の現存長1.42m、北西-南東方向の現存長71cm、深さ55cmで、坑底面の標高は2.52mを測る。

出土遺物 (図28)

遺物はかわらけ1点、磁器2点、陶器8点、瓦2点が出土し、このうち4点を図示した。

1はロクロ成形のかわらけであり、口径13.6cmを測る大形品である。2は龍泉窯系青磁碗であり、内面に片彫の蓮花文が施されるI-2類に比定される。3は山茶碗の体部下位~底部。4は常滑産甕の肩部であり、外面に矢羽根と格子が組み合わされた押印が施される。

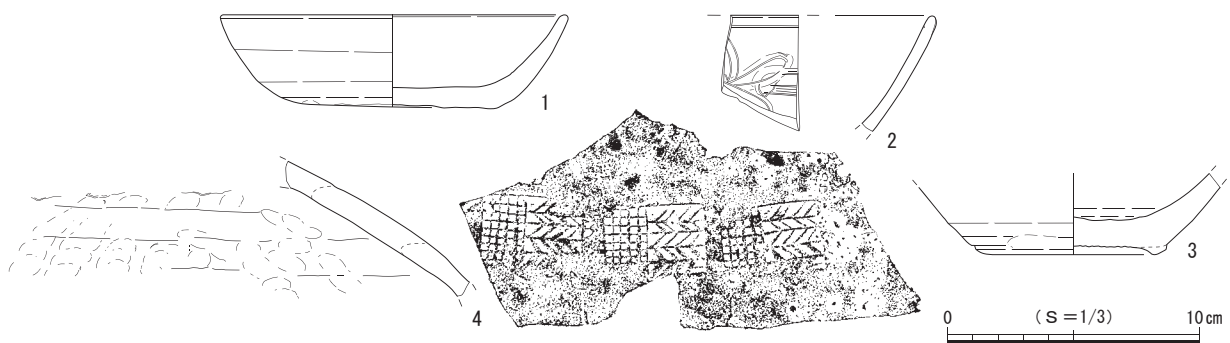


図28 第3面 土坑21出土遺物

(3) ピット

第3面では15基を検出した。調査区の北側に3基、土坑20の南側に集中して12基が分布しており、礎石や礎板を伴うピットはなく、調査範囲内においては建物などの施設を構成する規則的な配置は認められなかった。ピットの平面形は略円形あるいは楕円形で、規模は長径21~56cm、深さ10~41cmと長径・深さともにばらつきがある。

遺物は15基のピット中、3基から磁器と陶器が出土し、詳細は出土遺物一覧表(表8)に掲げた。

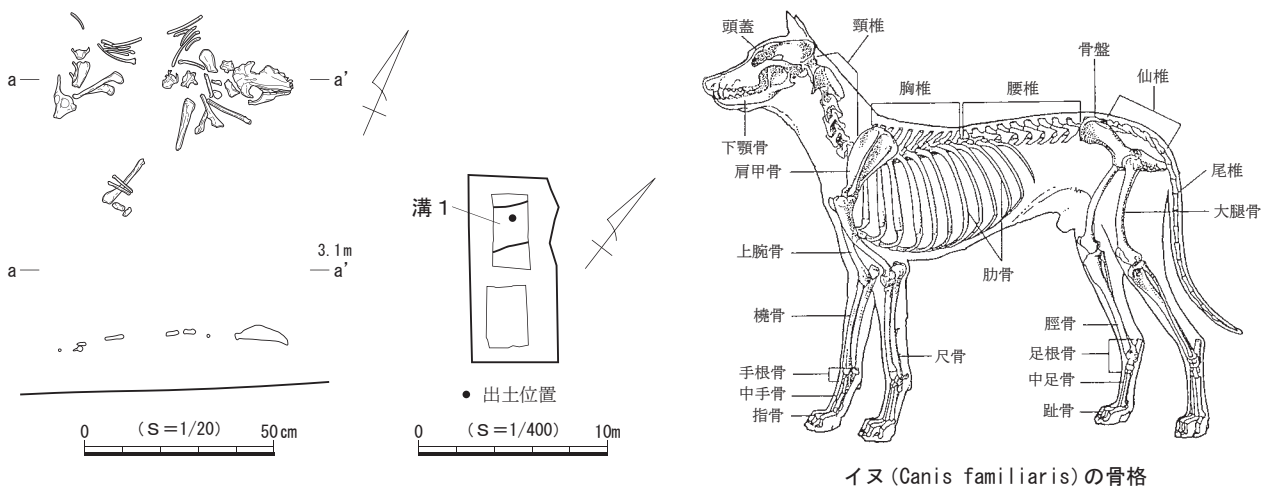
第四章 第3面 溝状遺構1から出土した動物遺体について

〈イヌ〉

第3面溝状遺構1から出土したイヌは、中級サイズのイヌである。在来のイヌ(縄文犬)よりも大きく、大陸の犬との混血種である。中世になって大陸犬が飼育された結果、このようなイヌが日本の各地で飼われるようになった。

この標本は当時のイヌの面影をよく伝えている。ただ、腰椎に癒着が生じ、寛骨の右側にも著しい変形を生じている。四肢骨には変形した状態を認めないので、歩行に差し支えることはなかったようである。なお上腕骨の滑車上孔の径が3mm程度と通常の半分くらいの大きさである。歩行や飛び跳ねるようなことをしなかった、あるいはできなかったかも知れない。歯牙は強く摩耗し、切歯は平らの状態である。推定年齢10才。

このイヌは、第3面で検出された溝状遺構1の底面よりやや浮いたところから、頭を北東に向けて仰向きの状態で出土した(図29)。身体は伸展の状態であったが、四肢の組み方は不明である。しかし右側の肩甲骨、上腕骨、橈骨、尺骨の骨端関節部分に変色がみられないので、骨が接触していたと思われる。つまり、骨が関節していたのである。四肢を曲げていた様子が推測される。出土状態の実測図があるが、姿勢を復元するまでは至らなかった。



何故か胸椎がほとんど失われていた。その一方で腰椎が癒着して動かない状態であった。骨盤をつくる寛骨のうち、左側の座骨板部分の病変も著しかった。

図29 第3面 溝状遺構1のイヌ骨出土状態(左)と全身骨格(右)

第五章 まとめ

今回報告する調査地点は、材木座町屋遺跡 (No.261) の南東部にあたり、現海岸線から約190mほど離れた、標高3.0m前後の黄色砂層上に形成された遺跡であり、今回の調査では、遺構確認面を3面検出した。調査面積は約45㎡と狭小であったが、面によっては遺構が密度高く分布していることが把握された。いずれも中世に属し、溝状遺構1条、方形土坑1基、土坑21基、ピット92基を検出し、出土遺物は遺物収納箱 (60×40×14cm) に換算して7箱を数える。

以下、面ごとに検出した遺構と出土遺物について整理し、簡単なまとめとしたい。

〈第1面〉

第1面の遺構は堆積土層の3・4層上面で検出され、確認面の標高は3.6～3.8mを測る。3層は泥岩粒と多量の炭化物、かわらけ片を含む茶褐色粘質土、4層は泥岩ブロックとかわらけ片を含む暗褐色粘質土で、これらの層を掘り込んで遺構が構築されていた。検出した遺構は土坑12基、ピット65基であり、これらが調査区全面に密度高く分布し、さらに調査区外に展開する様相を示している。ピットのなかにはピット45のように礎石を伴うものもあったが、建物などの施設を構成するような規則的配置は認められなかった。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、骨製品、金属製品などが出土し、特に常滑産や瀬戸産陶器の年代観から、本面は15世紀末葉～16世紀前葉頃に属すると推定された。

〈第2面〉

第2面の遺構は堆積土層の7層上面で検出され、確認面の標高は3.2～3.3mを測る。7層は炭化物を含む灰茶褐色粘土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は方形土坑1基、土坑1基、ピット12基である。遺構の分布をみると、方形土坑と土坑は調査区南側、ピットは調査区北・東壁寄りに分布しており、土坑とピットは調査区外の北側から東側に展開する様相を示している。遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、土器、瓦、石製品、骨製品、金属製品、木製品などが出土しているが、特に方形土坑1の東海系羽釜や遺構外出土遺物の常滑産陶器の年代観から、本面は15世紀中葉～後葉頃に属すると推定された。

〈第3面〉

第3面は堆積土層の9層上面で検出され、確認面の標高は3.0～3.1mを測る。9層は炭化物と貝砂を含む茶褐色砂質土で、遺構はこの層を掘り込んで構築されていた。検出した遺構は溝状遺構1条、土坑8基、ピット15基である。遺構の分布をみると、溝状遺構1は、調査区北側を北東-南西方向に延びて両端は調査区外に延びている。土坑は調査区全域に分布し、さらに調査区外に展開する様相を示している。ピットは調査区南側に集中して分布している。溝状遺構1は、幅が2.27mと比較的大きな溝であり、覆土からは比較的多くの動物遺体が出土した。なかでも、底面から10cmほど上から出土した成体のイヌ (図25・29) は、埋存時の状態がある程度復元でき、骨部位の状態から、推定年齢 (10才) や生前の健康状態が把握された点で特記される事象であった。そのほかに幼体のイヌ、イノシシ・シカ、イルカ、カツオ、ヒトなど動物遺体も出土している (表5)。

遺物は主にかわらけ、磁器、陶器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品などが出土しているが、これらの年代観と上位第2面の年代を考慮に入れて、本面は大枠として14世紀代に属すると推定した。

引用・参考文献(著者五十音順)

- 石井 進・大三輪龍彦編 1989『武士の都 鎌倉』よみがえる中世3 平凡社
- 大河内 勉・伊丹まどか・押木弘己 2001「材木座町屋遺跡(No.261)材木座六丁目760番1地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書17』平成12年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 香川達郎 2009『神奈川県鎌倉市 材木座町屋遺跡(No.261) - 材木座6丁目653-1外 - 発掘調査報告者』玉川文化財研究所
- 齊木秀雄 2013『神奈川県・鎌倉市 材木座町屋遺跡発掘調査報告書 - 材木座六丁目725番11地点 -』有限会社 鎌倉遺跡調査会
- 齊木秀雄・根本陸子・降矢順子 2005「材木座町屋遺跡(No.261)材木座六丁目674番10 材木座六丁目674番15 材木座六丁目674番8外 材木座六丁目674番9」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書21』平成16年度発掘調査(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 汐見一夫 2002「材木座町屋遺跡(No.261)材木座四丁目256番1の一部地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書18』平成13年度発掘調査報告(第2分冊) 鎌倉市教育委員会
- 滝澤晶子 2010『神奈川県・鎌倉市 材木座町屋遺跡(No.261)発掘調査報告書 鎌倉市材木座五丁目462番2地点 三丁目602-5の一部地点』株式会社博通発掘調査報告書第52集 株式会社博通
- 田代郁夫 1990「5. 材木座町屋遺跡(No.261)材木座四丁目260番1外」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書6』平成元年度発掘調査報告 鎌倉市教育委員会
- 馬淵和雄 1997「材木座町屋遺跡(No.261)材木座三丁目364番1外地点」『鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書13』平成8年度発掘調査報告(第1分冊) 鎌倉市教育委員会
- 『鎌倉事典』白井永二編 東京堂出版 1976
- 『鎌倉廃寺事典』貫 達人・川副武胤 有隣堂 1980
- 『鎌倉の地名由来辞典』三浦勝男編 2005

表2 第1面 出土遺物観察表

法量内() = 推定値

挿図 番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		
土坑1出土遺物(図8)							
1	陶器	備前 播鉢	-	-	現 7.0	播目条単位不明 胎土:白色粒、小石粒、密 色調:褐色	口縁部片
土坑6出土遺物(図9)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	8.3	4.0	2.9	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、海綿骨 針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
土坑7出土遺物(図10)							
1	石製品	砥石	現長 7.1	短 4.1	厚 2.1	2面に使用痕跡、両側面は製作時の整形痕(削り痕状)、一部に擦れあり 石材-流紋 岩	1/2
土坑11出土遺物(図11)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	4.1	2.2	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微 砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:褐灰色 焼成:良好	1/2弱
土坑12出土遺物(図12)							
1	陶器	瀬戸 縁釉小皿	10.2	4.1	2.4	内外面煤付着 胎土:緻密 色調:胎土-灰黄色、釉-緑灰色 備考:古瀬戸後期様 式Ⅲ期	3/4
2	陶器	摩耗陶片	長 8.4	短 7.0	厚 1.3	常滑甕の陶片を転用、陶片周囲が摩耗 胎土:白色粒、小石粒、やや密 色調:内- にぶい赤褐色、外-暗赤褐色	胴部片
ピット出土遺物(図14)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	5.4	2.4	底面-回転糸切+ナデ 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩 粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好 出土遺構:ピット31	1/2弱
2	土器	ロクロ かわらけ・小	7.8	4.5	2.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好 出土遺構:ピット39	3/4
表土出土遺物(図15・16)							
1	土器	ロクロ かわらけ・小	6.0	4.6	2.1	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥 岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	1/2
2	土器	ロクロ かわらけ・小	6.3~7.0	4.5	2.3	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	7/8
3	土器	ロクロ かわらけ・小	7.0	4.6	2.2	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微 砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
4	土器	ロクロ かわらけ・小	7.4	5.5	2.3	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲 母、赤色粒、黒色粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄灰色 焼成:良好	略完形
5	土器	ロクロ かわらけ・小	7.7	3.8	2.4	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	7/8
6	土器	ロクロ かわらけ・中	11.0	6.8	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色 粒、泥岩粒、海綿骨針、粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
7	土器	ロクロ かわらけ・大	13.0	7.5	3.5	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、黒色粒、泥 岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調:橙色 焼成:良好	7/8
8	磁器	青磁 碗	-	(7.0)	現 1.6	高台内煤付着 内面-草花印文 色調:胎土-黄灰色、釉-緑青色 備考:太宰府- 龍泉窯系青磁碗Ⅰ-1c類	底部 小破片
9	磁器	青磁 碗	-	4.5	現 3.6	外面-鎭蓮弁文 内面-草花印文 色調:胎土-灰白色、釉-青緑色 備考:太宰府 -龍泉窯系青磁碗Ⅱ-c類	1/3
10	磁器	青磁 壺	-	-	現 3.5	外面-草花文 色調:胎土-灰白色、釉-緑青色 備考:龍泉窯系青磁	胴部 小破片
11	磁器	青磁 酒会壺	-	(17.8)	現 11.9	外面-蓮弁文 色調:胎土-灰白色、釉-青緑色 備考:龍泉窯系青磁	胴~底部 小破片
12	陶器	瀬戸 平碗	(15.4)	(5.0)	6.6	胎土:やや密、黒色粒 色調:胎土-灰白色、釉-灰オリーブ色 備考:古瀬戸後期 様式Ⅰ~Ⅱ期	1/4
13	陶器	瀬戸 平碗	(16.8)	-	現 7.6	胎土:やや密、黒色粒 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:古瀬戸中期様式Ⅳ 期	1/2弱
14	陶器	瀬戸 直縁大皿	-	-	現 8.7	胎土:密、白色粒、黒色粒 色調:胎土-灰色、釉-オリーブ色 備考:古瀬戸後期 様式Ⅱ~Ⅲ期	口縁部 小破片
15	陶器	瀬戸 折縁深皿	-	-	現 8.4	胎土:密、黒色粒 色調:胎土-灰色、釉-オリーブ色 備考:古瀬戸後期様式Ⅲ期	口縁部 小破片
16	陶器	瀬戸 仏華瓶Ⅰ類	-	3.1	現 4.5	胎土:緻密 色調:胎土-灰白色、釉-黒褐色 備考:古瀬戸後期様式	1/3
17	陶器	瀬戸 袴腰形香炉	(10.4)	-	現 5.0	胎土:緻密、白色粒 色調:胎土-黄灰色、釉-黒褐色 備考:古瀬戸後期様式Ⅱ~ Ⅲ期	1/8
18	陶器	瀬戸・美濃 皿	(10.8)	(7.2)	現 2.1	胎土:緻密 色調:胎土-灰色、釉-暗灰色 備考:志野皿	1/3弱
19	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 4.2	胎土:密 色調:外-赤灰色、内-黒褐色 備考:11型式	口縁部 小破片
20	陶器	常滑 玉縁壺	-	-	現 5.6	胎土:やや密、白色粒 色調:暗赤褐色 備考:11~12型式	口縁部 小破片
21	陶器	常滑 甕	-	-	現 7.0	胎土:やや密、白色粒、小石粒 色調:暗赤褐色 備考:9~10型式	口縁部 小破片
22	陶器	常滑 甕	-	(18.2)	現 2.6	胎土:やや密、白色粒、小石粒 色調:褐色	底部片
23	陶器	常滑 甕	-	-	現 4.3	外面-格子文+車輪文押印 胎土:密、白色粒、小石粒 色調:外-灰褐色、内-褐 灰色	胴部 小破片
24	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	-	-	現 8.6	胎土:密、白色粒 色調:にぶい橙色 備考:8型式	口縁部 小破片
25	陶器	常滑 片口鉢Ⅱ類	(26.8)	-	現 5.3	胎土:粗、小石粒 色調:暗赤褐色 備考:8型式	口縁部片

26	陶器	常滑片口鉢Ⅱ類	(29.1)	-	現9.9	胎土：密、白色粒、小石粒 色調：外-暗赤褐色、内-にぶい赤褐色 備考：8型式	口縁部片
27	陶器	常滑摩耗陶片	長7.5	短4.7	厚0.9	胎土：やや密、白色粒 色調：外-灰色、内-暗褐色	胴部小破片
28	陶器	東播系鉢	-	-	現3.6	胎土：やや密、白色粒 色調：灰色 備考：Ⅶ期	口縁部小破片
29	陶器	備前播鉢	(26.0)	-	現5.4	内面-11本一単位の播目 胎土：やや密、白色粒 色調：褐色	口縁部小破片
30	瓦質土器	火鉢	(22.8)	-	現6.2	外面-花文押印、内面-黒色処理 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：Ⅲ類	口縁部小破片
31	瓦質土器	火鉢	-	-	現5.1	外面-横位沈線+四菱+円形浮文 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：Ⅲ類	口縁部小破片
32	瓦質土器	火鉢	-	-	現8.2	外面-横位沈線+菊花文押印+円形浮文 胎土：密、小石粒 色調：灰色 焼成：やや軟質 備考：ⅣB類	口縁部小破片
33	瓦質土器	香炉	(9.0)	-	現3.8	外面-横位沈線+四菱文・「S」字文押印 胎土：密 色調：黒色 焼成：やや軟質	体部小破片
34	土器	羽釜	(25.6)	-	現11.0	口縁部内面・体部内面下位煤付着 外面-ケズリ+ハケメ 胎土：雲母、赤色粒、黒色粒、小石粒、やや粗土 備考：東海系	1/2
35	土製品	土錘	長3.7	幅3.3	孔径1.0~1.1	俵形土錘 胎土：砂質、白色粒、赤色粒 色調：黄褐色	略完形
36	石製品	滑石製石鍋転用品	長6.4	短2.3	厚2.0	滑石製石鍋破片に再加工、用途不明 石材-滑石	完形
37	石製品	砥石	長7.3	短2.8	厚2.6	3面に使用痕跡 石材-粘板岩	3/4
38	金属製品	銭貨	径2.2~2.4	孔径0.7	厚0.1	銭銘-開元通寶(南唐・960) 書体-真書	完形
39	金属製品	銭貨	径2.5	孔径0.7	厚0.2	銭銘-開元通寶(南唐・960) 書体-真書	完形
40	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-皇宋通寶(北宋・1038) 書体-篆書	完形
41	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.7	厚0.1	銭銘-至和通寶(北宋・1054) 書体-真書	略完形
42	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.7	厚0.2	銭銘-元豊通寶(北宋・1078) 書体-篆書	完形
43	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-紹聖元寶(北宋・1094) 書体-篆書	完形

第1面 構成土出土遺物(図17)

1	土器	ロクロかわらけ・小	(7.9)	(5.5)	2.4	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/2弱
2	土器	ロクロかわらけ・中	11.3	5.9	3.2	底面-回転糸切+ナデ+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、黒色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/3
3	瓦質土器	火鉢	-	-	現6.6	外面-菊花文・唐草文押印+円形浮文 胎土：白色粒、赤色粒、黒色粒、砂粒 色調：暗灰色 焼成：良好 備考：内面赤色顔料付着、ⅢB類	胴部片
4	骨製品	筭	現長5.6	幅0.8~1.8	厚0.3	上部欠損 片面に凹み状加工 材質：シカ中足骨	小片
5	石製品	砥石	長7.6	幅2.9	厚1.9	中砥 4面に使用痕 石質-粘板岩	略完形

表3 第2面 出土遺物観察表

法量内()=推定値

挿図番号	種別	器種	法量(cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

方形土坑1出土遺物(図20)

1	土器	羽釜	-	-	現4.6	外面-ハケメ、内面-ヘラナデ 胎土：白色粒、赤色粒、砂粒 軟質 色調：灰白色 焼成：良好 備考：東海系	口縁~胴部片
2	石製品	砥石	長10.0	幅3.5	厚1.8~2.9	中砥 3面に使用痕 石質-粘板岩	略完形
3	石製品	砥石	長6.7	幅3.4	厚0.6	仕上砥 3面に使用痕 石質-粘板岩	
4	金属製品	銭貨	径2.4	孔径0.6	厚0.1	銭銘-聖宋元寶(北宋・1101) 書体：篆書	完形

土坑13出土遺物(図22)

1	瓦	平瓦	現長10.1	現幅7.2	厚2.0	凸面-斜格子叩き+側縁方向弱いナデ調整 凹面-側縁方向ヘラ調整 胎土：白色粒、黒色粒、砂粒、礫 色調：灰色	小片
---	---	----	--------	-------	------	---	----

第2面 構成土出土遺物(図23)

1	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	4.2	1.9	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/2
2	土器	ロクロかわらけ・小	7.0	5.0	1.6	口縁部内外面油煤付着 底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	3/4
3	土器	ロクロかわらけ・小	(7.6)	(5.1)	1.7	底面-回転糸切+弱い板状圧痕 内底-ナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：淡褐色 焼成：良好	1/3
4	土器	ロクロかわらけ・大	(13.4)	(7.4)	3.3	底面-回転糸切+板状圧痕 内底-丁寧なナデ 胎土：微砂、雲母、赤色粒、泥岩粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調：黄褐色 焼成：良好	1/4
5	磁器	青磁皿	10.0	4.7	2.1	外面-無文 内面-圏線内草文および欄描文 色調：胎土-灰白色、釉-青灰色 備考：龍泉窯系青磁ⅢI-2b類	2/3
6	陶器	渥美壺	(16.0)	-	現5.5	胎土：微砂、白色粒 色調：灰色 備考：1b~2b型式	口縁部1/6
7	陶器	渥美壺	-	-	現9.7	外面-横位・斜位の刻線 胎土：白色粒、細砂粒、礫、軟質 色調：灰白色	胴部片

8	陶器	渥美壺	-	-	現5.1	外面-縦線の押印 胎土:砂粒、白色粒、黒色粒、堅緻、良土 色調:灰色	肩部片
9	陶器	常滑甕	(18.6)	-	現4.2	胎土:白色粒、細砂粒、礫 色調:灰色 備考:4型式	口縁部小破片
10	陶器	常滑甕	-	-	現2.7	胎土:精良堅緻、白色粒、良土 色調:暗茶褐色 備考:5型式	口縁部小破片
11	陶器	常滑甕	-	-	現4.8	胎土:堅緻、白色粒、砂粒 色調:暗灰色 備考:5型式	口縁~頸部片
12	陶器	常滑甕	-	-	現6.7	胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰色 備考:6a型式	口縁~頸部片
13	陶器	常滑甕	(42.8)	-	現9.5	胎土:堅緻、白色粒、砂粒、小石粒 色調:暗茶褐色 備考:9型式	口縁部片
14	陶器	常滑甕	-	-	現7.7	外面-複合斜線の押印 胎土:白色粒、黒色粒、砂粒、礫 色調:暗赤褐色	肩部小破片
15	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現2.7	胎土:白色粒、砂粒 色調:灰色	口縁部小破片
16	陶器	常滑片口鉢I類	-	-	現3.6	胎土:白色粒、黒色粒、砂粒 色調:灰白色	口縁部小破片
17	陶器	常滑片口鉢II類	(25.6)	-	現4.8	胎土:堅緻、砂粒、白色小石粒、礫 色調:暗灰~暗灰褐色 備考:9型式	口縁部小破片
18	土製品	土錘	現長3.2	幅1.0	孔径0.4	管状土錘 胎土:雲母、赤色粒、細砂粒、良土 色調:淡橙~橙色	2/3
19	金属製品	釘	長8.1	幅0.4	厚0.4	鉄製釘 頭頂部方形	完形
20	骨製品	筭	現長5.9	幅0.5~0.7	厚0.2	上下端部欠損 片面に2条の凹み状加工 材質:シカ中足骨	小片
21	骨製品	用途不明品	径3.3	孔径0.5~0.6	厚2.0	メジロザメ科の椎骨を加工-中心に穿孔、側面使用により摩耗	完形
22	木製品	櫛	現長4.2	現幅3.1	厚1.0	櫛歯14本遺存 黒漆塗布	小片

表4 第3面 出土遺物観察表

挿図番号	種別	器種	法量 (cm)			特徴	残存率
			口径	底径	器高		

溝状遺構1出土遺物(図26)

1	土器	ロクロかわらけ・中	12.9	9.2	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-指ナデ 胎土:微砂、雲母、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:黄橙色 焼成:良好	略完形
2	陶器	常滑甕	-	-	現5.4	胎土:白色粒、砂粒、小石粒、色調:灰色 備考:6a型式	口縁部小破片
3	陶器	常滑甕	-	-	現6.5	外面斜格子押印 胎土:白色粒、砂粒、礫 色調:にぶい黄褐色	肩部小破片
4	瓦質土器	火鉢	-	-	現7.4	胎土:雲母、白色粒、赤色粒、小石粒 色調:灰色 焼成:良好 備考:Ic類	口縁部小破片
5	瓦	平瓦	現長8.4	現幅7.3	厚2.2	凸面-格子叩き 凹面-側縁方向ナデ調整 側面-ヘラ削り 胎土:砂粒、小石粒、良土 色調:灰色	小片
6	瓦	丸瓦	現長16.2	現幅9.8	厚2.0	凸面-糸切痕+端縁方向ヘラナデ+側縁方向ヘラナデ、側縁-ヘラ調整 凹面-糸切痕+布目痕+桝板圧痕 側面-ヘラ削り 胎土:砂粒、小石粒、礫 色調:暗灰色 備考:有段式丸瓦	1/3
7	石製品	滑石製石鍋	-	-	現3.8	石質-滑石 色調:灰白色	口縁部小破片

土坑21出土遺物(図28)

1	土器	ロクロかわらけ・大	13.6	7.7	3.6	底面-回転糸切+ナデ+板状圧痕 内底-ナデ 胎土:微砂、雲母、白色粒、赤色粒、小石粒、海綿骨針、やや粗土 色調:淡橙色 焼成:良好	3/4
2	磁器	青磁碗	-	-	現4.6	劃花文碗 色調:胎土-灰白色、釉-灰緑色 備考:太宰府-龍泉窯系青磁碗I-2類	口縁部片
3	陶器	山茶碗	-	7.6	現3.2	糸切痕残存、貼付高台 胎土:白色粒、砂粒 色調:灰色	1/4
4	陶器	常滑甕	-	-	現5.4	外面-格子+矢羽根押印 胎土:白色粒、砂粒、小石粒、礫 色調:にぶい黄褐色	肩部片

表5 第3面 溝状遺構1 出土人骨・動物遺体一覧表(図版7・8)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
溝状遺構1	3面	イヌ	上顎骨	左		5	幼体I、1歳未満
溝状遺構1	3面	イヌ	上顎骨	左		6	幼体II、1歳未満
溝状遺構1	3面	イヌ	頭蓋骨		全長:173.19	8	
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	右	127.8	9	関節突起間長、関節窩深:4.8
溝状遺構1	3面	イヌ	頭蓋骨	左		4	幼体
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	左		10	
溝状遺構1	3面	イヌ	下顎骨	右		7	幼体、推定4ヶ月
溝状遺構1	3面	イヌ	環椎・軸椎・頸椎			11~13	
溝状遺構1	3面	イヌ	胸椎			14	
溝状遺構1	3面	イヌ	腰椎			15	
溝状遺構1	3面	イヌ	肩甲骨	右	25		関節幅
溝状遺構1	3面	イヌ	肩甲骨	左		17	
溝状遺構1	3面	イヌ	上腕骨	左		18	
溝状遺構1	3面	イヌ	上腕骨	左	139.6		
溝状遺構1	3面	イヌ	橈骨	右			
溝状遺構1	3面	イヌ	橈骨	左	140.7	19	
溝状遺構1	3面	イヌ	尺骨	右	肘突起間:23.7		
溝状遺構1	3面	イヌ	尺骨	左		20	
溝状遺構1	3面	イヌ	中手/中足	右/左			9個
溝状遺構1	3面	イヌ	肋骨				42個
溝状遺構1	3面	イヌ	腰椎			16	癒着
溝状遺構1	3面	イヌ	陰茎骨				先端欠
溝状遺構1	3面	イヌ	寛骨+仙骨	右	全長:135.1	21	腸骨最小径:17.7
溝状遺構1	3面	イヌ	寛骨+仙骨	左		21	
溝状遺構1	3面	イヌ	大腿骨	右	156.6		
溝状遺構1	3面	イヌ	大腿骨	左		22	
溝状遺構1	3面	イヌ	胫骨+腓骨	右		24	
溝状遺構1	3面	イヌ	脛骨	左	157.6	23	
溝状遺構1	3面	イヌ	腓骨片	右/左			3個
溝状遺構1	3面	イヌ	踵骨と距骨	左		25	
溝状遺構1	3面	カツオ	歯骨			1	2個
溝状遺構1	3面	カツオ	舌顎骨			2	
溝状遺構1	3面	イルカ類	尾椎骨			3	
溝状遺構1	3面	イノシシ・シカ	肢骨片				2個
溝状遺構1	3面	ヒト	頭蓋骨	右		26	

表6 出土人骨・動物遺体一覧表(図版9・10)

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
表土		スズキ	主鰓蓋骨	右			
表土		マグロ類	椎骨			5	2個
表土		マグロ類	尾部棒状骨			7	
表土		マダイ	歯骨	右		2	
表土		魚類	椎骨片				2個
表土		魚類					2個 破片
表土		メジロザメ類	椎骨			10	11個
表土		小形のクジラ類	腰椎			15	縦に半裁している
表土		バンドウイルカ	下顎関節部分	左		11	
表土		イルカ類	頭蓋骨片				
表土		イルカ類	胸椎			13	6個
表土		イルカ類	腰椎			14	2個
表土		イルカ類	椎体関節板と破片				
表土		イルカ類					5個 破片
表土		カラス類	上腕骨	左			
表土		イヌ	寛骨	左		21	
表土		ウマ	中節骨			31	
表土		ニホンジカ	環椎			24	切痕多数
表土		ニホンジカ	大腿骨	右		28	
表土		ニホンジカ	頸椎骨				
表土		ウシ	基節骨	右		29	30と同一個体
表土		ウシ	中節骨	右		30	29と同一個体
表土		ヒト	白歯				
土坑4	第1面	カツオ類	椎骨			3	
土坑4	第1面	イルカ類					
土坑5	第1面	ノウサギ	中足骨	右		16	
土坑5	第1面	ノウサギ	中足骨			17	破損
土坑5	第1面	ニホンジカ	橈骨	右		27	2個 近位
土坑7	第1面	トリ	尺骨	右			
土坑9	第1面	マグロ類	椎骨			4	
土坑9	第1面	イヌ	肋骨片				2個
土坑9	第1面	イノシシ・シカ	肋骨				
土坑11	第1面	キツネ	中足類				
土坑12	第1面	魚類	鰭棘				
土坑12	第1面	イルカ類	下顎枝片				
土坑12	第1面	イルカ類	胸椎				

出土遺構	帰属面	種別	部位	左右	計測値(mm)	写真番号	備考
土坑12	第1面	イルカ類	肋骨				切断痕
ビット6	第1面	メジロザメ類	椎骨			8	
ビット6	第1面	獣類					破片
ビット18	第1面	鳥類					破片
ビット18	第1面	イルカ類	肋骨				
ビット19	第1面	鳥類					破片
ビット19	第1面	メジロザメ類	椎骨			9	
ビット25	第1面	マグロ類					
ビット35	第1面	イルカ類					
構成土	第1面	魚類					2個 破片
構成土	第1面	魚類	鱗棘				大型
構成土	第1面	メジロザメ類	椎骨				
構成土	第1面	マグロ類	尾部棒状骨片			6	
構成土	第1面	イルカ類	椎骨				2個
構成土	第1面	イルカ類	肋骨片				4個
構成土	第1面	イルカ類	肋骨その他				4個
構成土	第1面	イルカ類	腰椎				
構成土	第1面	イルカ類					破片
構成土	第1面	イヌ	上腕骨	右		19	幼体
構成土	第1面	イヌ	大腿骨	左		22	小型
構成土	第1面	ニホンジカ	軸椎片			25	切断痕
構成土	第1面	ヒト	大腿骨片				
方形土坑1	第2面	ウミガメ類	肢骨片				
方形土坑1	第2面	ニホンジカ	大腿骨	右			近位骨端骨
構成土	第2面	魚類	鱗棘片				35個
構成土	第2面	マダイ	主上顎骨	左		1	
構成土	第2面	カツオ類	主鰓蓋骨	左			2個
構成土	第2面	バンドウイルカ	胸椎			12	大型 切痕 椎骨片
構成土	第2面	イルカ類	腰椎				2個
構成土	第2面	イルカ類					4個 破片
構成土	第2面	イヌ	上顎片	左		18	幼体
構成土	第2面	イヌ	下顎犬歯	右			(若)
構成土	第2面	イヌ	寛骨	右		20	やや大きい
構成土	第2面	イヌ	脛骨	右		23	近位端欠
構成土	第2面	ウマ	末節骨			32	
構成土	第2面	ニホンジカ	肩甲骨	右		26	
構成土	第2面	ヒト	頭蓋片				
構成土	第2面	ヒト	下顎骨片	右		33	♂ M1のみのこる

表7 遺構計測表

< > = 現存値

遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)			遺構名	帰属面	規模(cm)		
		長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ			長軸	短軸	深さ
土坑1	第1面	<78>	<59>	8	ビット22	第1面	36	31	18	ビット55	第1面	41	35	13
土坑2	第1面	<87>	66	16	ビット23	第1面	34	24	12	ビット56	第1面	44	<38>	13
土坑3	第1面	80	62	11	ビット24	第1面	33	<24>	22	ビット57	第1面	<25>	25	12
土坑4	第1面	195	119	9	ビット25	第1面	30	<21>	18	ビット58	第1面	31	29	16
土坑5	第1面	62	-	19	ビット26	第1面	39	38	25	ビット59	第1面	<42>	<23>	26
土坑6	第1面	<72>	52	31	ビット27	第1面	37	30	13	ビット60	第1面	24	<20>	7
土坑7	第1面	193	137	32	ビット28	第1面	<39>	32	15	ビット61	第1面	<23>	19	16
土坑8	第1面	<70>	<64>	24	ビット29	第1面	43	38	39	ビット62	第1面	27	26	26
土坑9	第1面	<111>	<42>	15	ビット30	第1面	43	42	25	ビット63	第1面	<37>	29	20
土坑10	第1面	114	88	13	ビット31	第1面	36	<20>	10	ビット64	第1面	48	<30>	14
土坑11	第1面	<70>	<49>	9	ビット32	第1面	<45>	<44>	21	ビット65	第1面	<30>	30	28
土坑12	第1面	138	<47>	45	ビット33	第1面	20	<18>	12	方形土坑1	第2面	251	163	41
ビット1	第1面	42	<25>	20	ビット34	第1面	<41>	<19>	12	土坑13	第2面	<129>	<62>	16
ビット2	第1面	23	14	27	ビット35	第1面	36	31	14	ビット66	第2面	32	26	9
ビット3	第1面	39	32	19	ビット36	第1面	32	29	16	ビット67	第2面	27	26	7
ビット4	第1面	21	19	26	ビット37	第1面	26	-	14	ビット68	第2面	21	17	6
ビット5	第1面	21	19	11	ビット38	第1面	38	<16>	12	ビット69	第2面	22	-	15
ビット6	第1面	35	<29>	21	ビット39	第1面	47	21	21	ビット70	第2面	40	<21>	7
ビット7	第1面	<35>	<30>	32	ビット40	第1面	<30>	<21>	13	ビット71	第2面	23	-	16
ビット8	第1面	30	21	24	ビット41	第1面	34	<33>	16	ビット72	第2面	33	32	15
ビット9	第1面	36	27	39	ビット42	第1面	30	<27>	14	ビット73	第2面	28	<16>	13
ビット10	第1面	<25>	21	20	ビット43	第1面	35	29	14	ビット74	第2面	32	25	10
ビット11	第1面	<49>	<27>	17	ビット44	第1面	49	<47>	17	ビット75	第2面	26	25	13
ビット12	第1面	43	32	18	ビット45	第1面	32	30	4	ビット76	第2面	<40>	30	15
ビット13	第1面	44	41	10	ビット46	第1面	31	27	9	ビット77	第2面	25	<15>	4
ビット14	第1面	24	<12>	17	ビット47	第1面	43	34	20	溝状遺構1	第3面	<200>	227	27~35
ビット15	第1面	23	21	18	ビット48	第1面	<51>	49	12	土坑14	第3面	<63>	<20>	6
ビット16	第1面	52	43	19	ビット49	第1面	<55>	<25>	18	土坑15	第3面	<62>	49	43
ビット17	第1面	32	26	20	ビット50	第1面	42	38	20	土坑16	第3面	78	63	63
ビット18	第1面	44	38	27	ビット51	第1面	<29>	<16>	23	土坑17	第3面	100	<55>	27
ビット19	第1面	53	<50>	15	ビット52	第1面	42	<18>	27	土坑18	第3面	<67>	<30>	8
ビット20	第1面	29	24	16	ビット53	第1面	19	17	7	土坑19	第3面	141	<69>	35
ビット21	第1面	48	<39>	15	ビット54	第1面	27	26	19	土坑20	第3面	168	157	12

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
土坑 21	第 3 面	<142>	<71>	55
ビット 78	第 3 面	46	29	28
ビット 79	第 3 面	56	<47>	35
ビット 80	第 3 面	27	-	41
ビット 81	第 3 面	52	36	29
ビット 82	第 3 面	<32>	<31>	17

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ビット 83	第 3 面	33	<30>	17
ビット 84	第 3 面	27	25	33
ビット 85	第 3 面	22	18	11
ビット 86	第 3 面	21	-	11
ビット 87	第 3 面	35	24	14

遺構名	帰属面	規模 (cm)		
		長軸	短軸	深さ
ビット 88	第 3 面	<25>	24	10
ビット 89	第 3 面	35	24	14
ビット 90	第 3 面	34	25	12
ビット 91	第 3 面	<39>	23	14
ビット 92	第 3 面	42	<31>	14

表 8 出土遺物一覧表

表土

第 1 面

産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	134	
【白磁】			
	皿Ⅸ類	2	
	器種不明	1	
【青磁】			
同安窯系	皿	1	
龍泉窯系	碗Ⅰ類	7	
	碗Ⅱ類	2	
	坏	1	
	壺	1	
	酒会壺	1	
	器種不明	1	
【青白磁】			
	水注	1	
【陶器】			
中国	褐釉陶器	1	
瀬戸	瓶類	2	
	仏華瓶	1	
	四耳壺	1	
	壺	10	
	盤	35	
	香炉	1	
	天目茶碗	6	
	緑釉小皿	6	
	折縁深皿	2	
	直縁大皿	1	
	卸皿	9	
	行平鍋	1	
	播鉢	3	
	平碗	2	
	碗	15	
	皿	1	
	瀬戸・美濃	志野皿	1
渥美	甕	2	
常滑	甕	140	
	壺	2	
	玉縁壺	2	
	片口鉢Ⅱ類	33	
	摩托陶片	2	
東播系	鉢	1	
備前	播鉢	3	
【土器】			
	羽釜	25	
【瓦質土器】			
	碗	3	
	香炉	1	
	火鉢	6	
【瓦】			
	平瓦	2	
【石製品】			
	砥石	5	
	滑石製石鍋転用品	1	
【土製品】			
	土錘	1	
	ふいごの羽口	1	
【土師器】			
	甕	1	
【金属製品】			
	銭貨	11	
	釘	18	
	鋸	1	
		合計	511

土坑 1			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	5	
【陶器】			
常滑	甕	1	
備前	播鉢	1	
		合計	7
土坑 2			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	9	
【陶器】			
常滑	甕	3	
【土器】			
	羽釜	1	
		合計	13
土坑 3			
産地	器種	破片数	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1	
【陶器】			
常滑	甕	1	
【金属製品】			
	釘	1	
		合計	3
土坑 4			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	4	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1	
【青白磁】			
	合子	1	
【陶器】			
常滑	甕	4	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
		合計	11
土坑 5			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
瀬戸	碗	2	
常滑	壺	1	
		合計	6
土坑 6			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	1	
【陶器】			
瀬戸	碗	1	
常滑	甕	1	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
		合計	4

土坑 7			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	14	
【青磁】			
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1	
【陶器】			
瀬戸	卸皿	1	
常滑	甕	3	
【土器】			
南伊勢系	鍋	1	
	羽釜	1	
【石製品】			
	砥石	1	
		合計	22
土坑 8			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
常滑	甕	1	
		合計	4
土坑 9			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	4	
【陶器】			
瀬戸	緑釉小皿	1	
	行平鍋	1	
常滑	甕	2	
【金属製品】			
	釘	2	
		合計	10
土坑 10			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	3	
【陶器】			
瀬戸	碗	1	
常滑	甕	2	
		合計	6
土坑 11			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	6	
【陶器】			
瀬戸	折縁深皿	1	
		合計	7
土坑 12			
産地	器種	破片数	
【かわらけ】			
	かわらけ ロクロ成形	27	
【青磁】			
	碗Ⅱ類	1	
【陶器】			
瀬戸	卸皿	1	
	碗	1	

瀬戸	皿	1
	縁釉小皿	2
常滑	堯	3
	摩耗陶片	1
合計		37

ビット11		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	2
合計		2

ビット16		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	堯	3
合計		7

ビット17		
産地	器種	破片数
【陶器】		
中国	器種不明	1
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
合計		2

ビット18		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
合計		3

ビット19		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	9
【土師器】		
	堯	1
合計		10

ビット24		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		2

ビット25		
産地	器種	破片数
【青白磁】		
	梅瓶	1
合計		1

ビット26		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【金属製品】		
	釘	1
合計		2

ビット28		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		2

ビット29		
産地	器種	破片数
【土師器】		
	堯	1
合計		1

ビット30		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	2
合計		2

ビット31		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
合計		1

ビット32		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
	器種不明	1
常滑	器種不明	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
合計		5

ビット34		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	堯	1
常滑	堯	1
合計		2

ビット39		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	5
合計		5

ビット44		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	堯	1
合計		1

ビット47		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
中国	器種不明	1
常滑	堯	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		8

ビット48		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
瀬戸	盤	1
常滑	堯	3
【瓦】		
	平瓦	1
合計		6

ビット49		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	3
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
【陶器】		
常滑	堯	1
【金属製品】		
	釘	2
合計		7

第1面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	39
【青磁】		
同安窯系	碗	1
龍泉窯系	碗Ⅱ類	1
【陶器】		
瀬戸	壺	2
	瓶子	1
	盤	1
	鉢	1
	折縁深皿	1
	卸皿	2
渥美	碗	1
	堯	2
常滑	堯	72
	片口鉢Ⅰ類	9
	片口鉢Ⅱ類	1
東播系	鉢	1
【土器】		
南伊勢系	鍋	1
【土師器】		
	堯	1
【瓦質土器】		
	火鉢	2
【瓦】		
	平瓦	1
【石製品】		
	砥石	1
【骨製品】		
	筭	1
【金属製品】		
	釘	6
合計		148

第2面		
方形土坑1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	25
【白磁】		
	皿Ⅸ類	1
【青磁】		
同安窯系	皿	1
龍泉窯系	碗Ⅱ類	2
【陶器】		
瀬戸	瓶類	1
	壺	1
渥美	壺	1
常滑	堯	13
	壺	1
	片口鉢Ⅰ類	1
【土器】		
南伊勢系	鍋	3
	羽釜	2
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【石製品】		
	砥石	2
【金属製品】		
	銭貨	4
	釘	2
合計		61

土坑13		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
【陶器】		
常滑	堯	2
【瓦】		
	平瓦	1
合計		7

第2面 構成土		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	76
	かわらけ 手づくね成形	6
【白磁】		
	壺	1
	碗	1
	皿	1
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	6
	碗Ⅱ類	7
	皿Ⅰ類	1
	鉢	1
	壺	1
【陶器】		
中国	器種不明	4
瀬戸	盤	1
	壺	3
	皿	1
渥美	甕	11
	壺	3
常滑	甕	109
	壺	3
	片口鉢Ⅰ類	13
	片口鉢Ⅱ類	5
	広口壺	2
	器種不明	2
【土器】		
南伊勢系	鍋	1
	ふいごの羽口	1
【瓦質土器】		
	火鉢	3
【瓦】		
	丸瓦	3
	平瓦	5
【骨製品】		
	筭	1
	用途不明品	1
【土製品】		
	土錘	2
【須恵器】		
	蓋	1
【土師器】		
	坏	1
	甕	2
	器種不明	1
【木製品】		
	櫛	1
【金属製品】		
	銭貨	2
	釘	8
	鉄滓	1
	合計	292

第3面		
溝状遺構1		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	4
	かわらけ 手づくね成形	2
【陶器】		
中国	褐釉陶器	3
常滑	甕	26
	片口鉢Ⅰ類	2
	片口鉢Ⅱ類	2
	山茶碗	1
【瓦質土器】		
	火鉢	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	3
【石製品】		
	滑石製石鍋	1
	合計	46
土坑17		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ 手づくね成形	1
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
	合計	2
土坑19		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	甕	2
	合計	2
土坑20		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1
【陶器】		
常滑	甕	1
	片口鉢Ⅱ類	1
	合計	3
土坑21		
産地	器種	破片数
【かわらけ】		
	かわらけ ロクロ成形	1

【青磁】		
産地	器種	破片数
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	壺	1
【陶器】		
渥美	甕	4
常滑	甕	2
	片口鉢Ⅰ類	1
	山茶碗	1
【瓦】		
	丸瓦	1
	平瓦	1
	合計	13

ピット83		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	甕	1
	壺	1
	合計	2

ピット91		
産地	器種	破片数
【青磁】		
龍泉窯系	碗Ⅰ類	1
	合計	1

ピット92		
産地	器種	破片数
【陶器】		
常滑	片口鉢Ⅰ類	1
	合計	1

第3面 遺構外		
産地	器種	破片数
【陶器】		
渥美	壺	1
常滑	片口鉢Ⅱ類	1
【瓦】		
	平瓦	1
	合計	3

第3面 構成土		
産地	器種	破片数
【木製品】		
	櫛	1
	合計	1



1. 南壁土層断面(北から)



2. 第1面南半全景(東から)



3. 第1面北半全景(南から)

図版 2



1. 第2面南半全景(南から)



2. 第2面北半全景(南から)



3. 第3面南半全景(南から)



1. 第3面北半全景(南から)



2. 第3面 溝状遺構1全景(西から)



3. 第3面 溝状遺構1イヌ骨出土状態(東から)

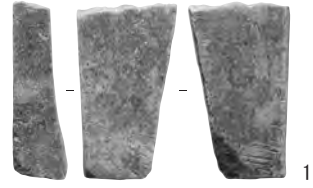
図版 4



1. 第1面 土坑1出土遺物



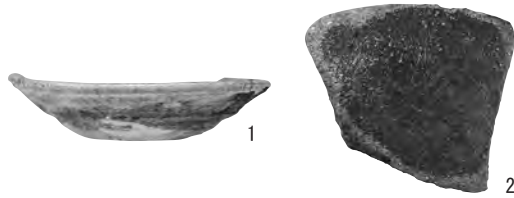
2. 第1面 土坑6出土遺物



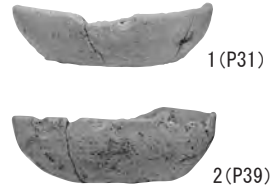
3. 第1面 土坑7出土遺物



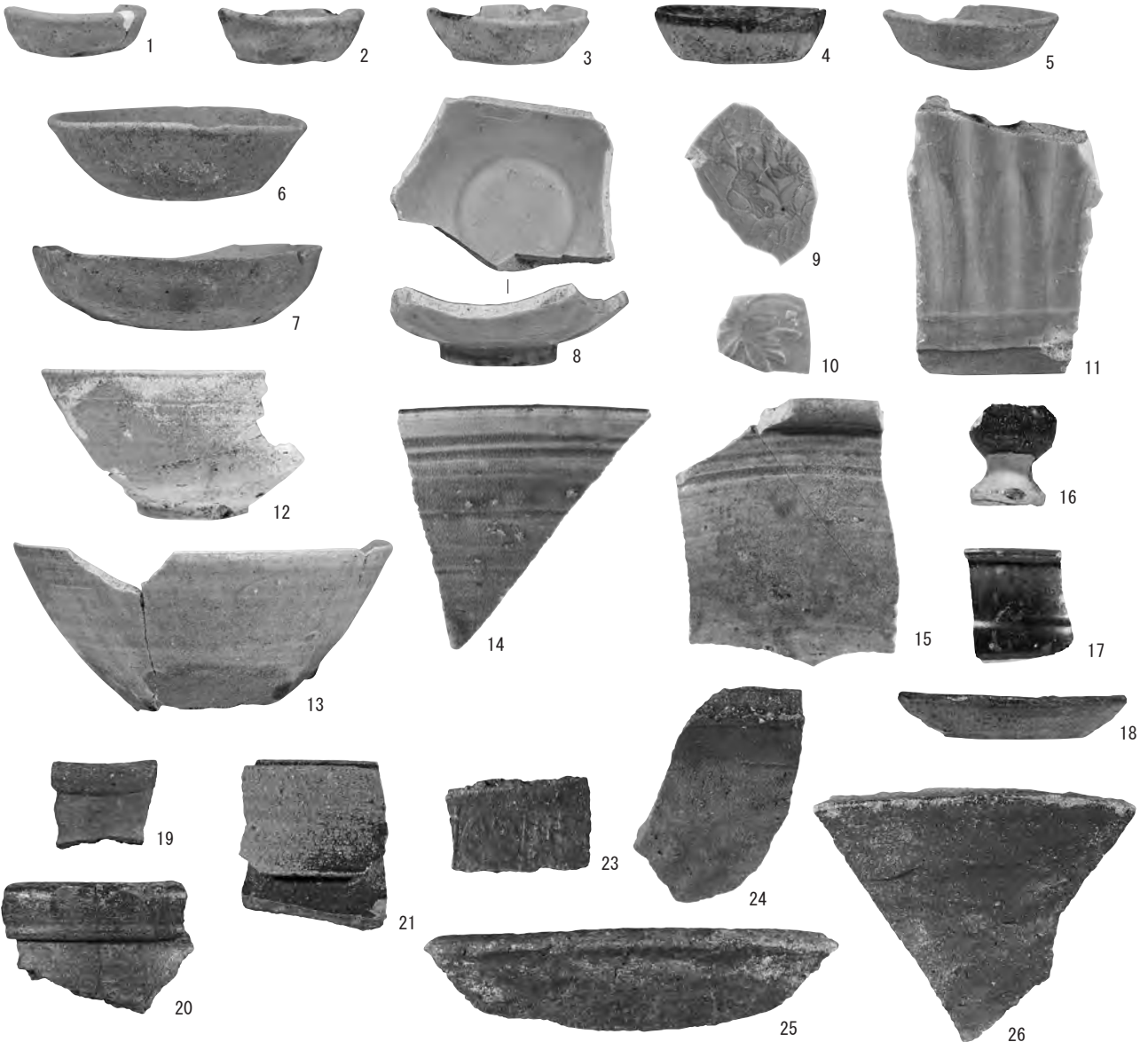
4. 第1面 土坑11出土遺物



5. 第1面 土坑12出土遺物



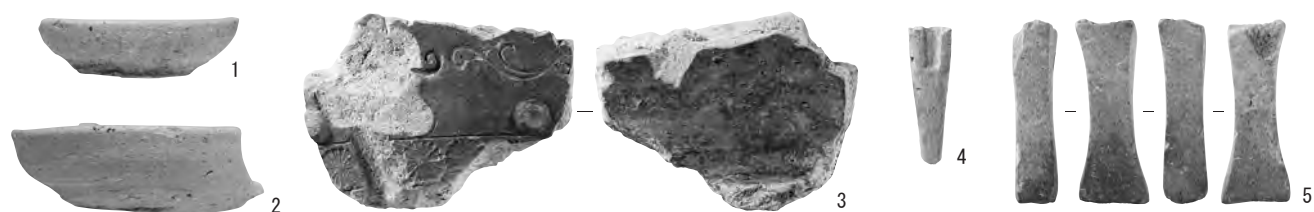
6. 第1面 ピット出土遺物



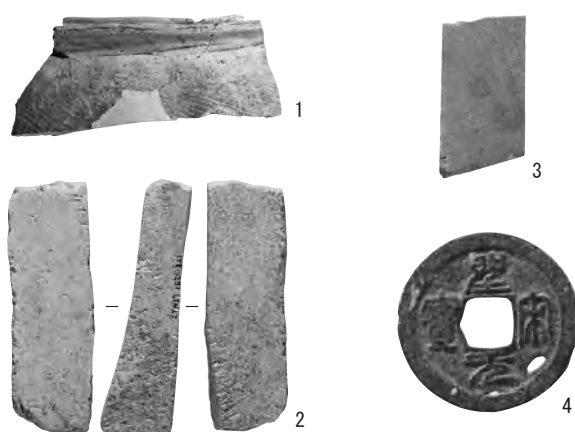
7. 表土出土遺物(1)



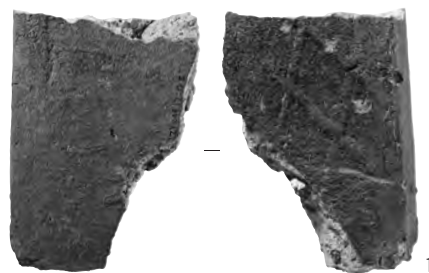
1. 表土出土遺物(2)



2. 第1面 構成土出土遺物

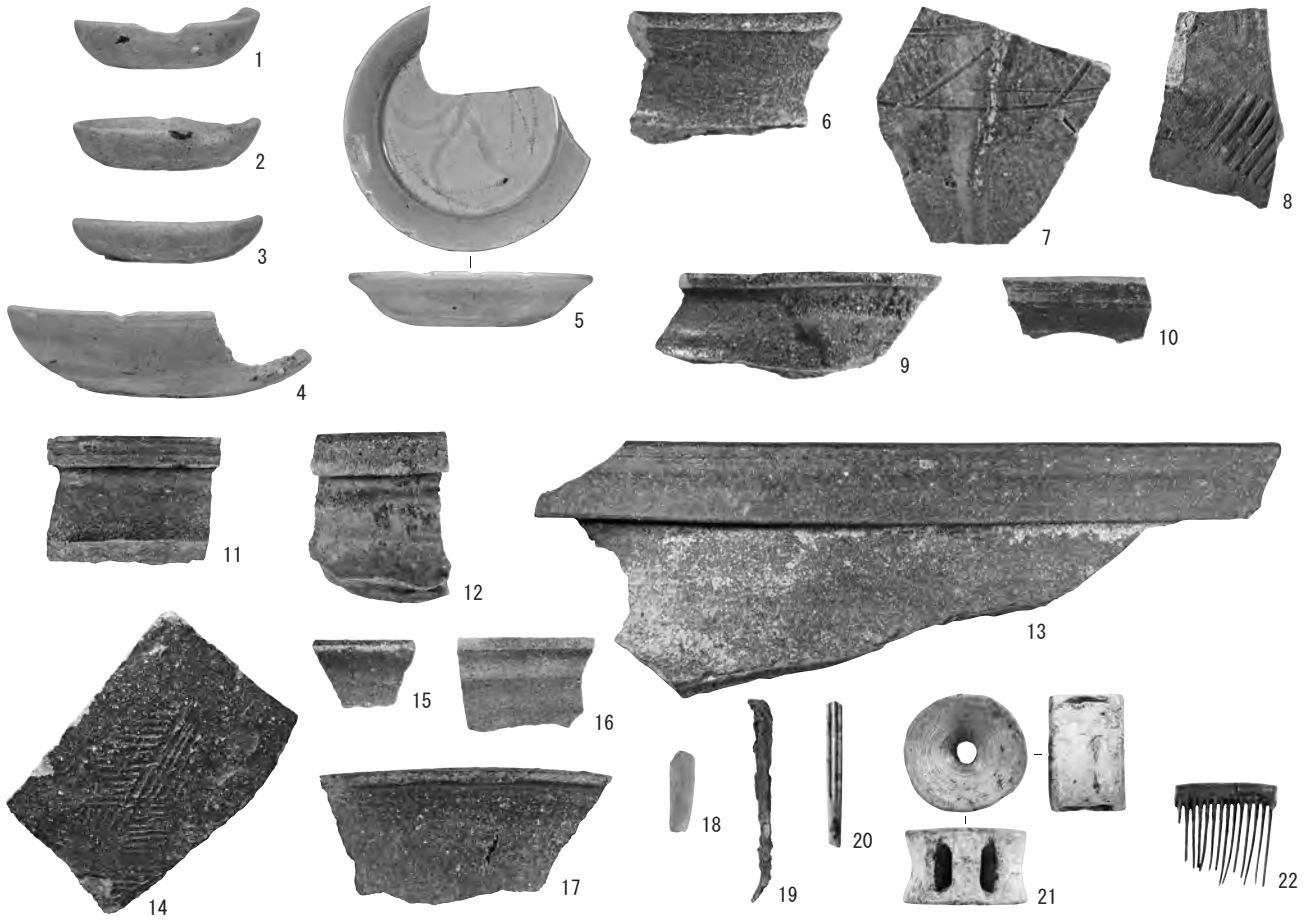


3. 第2面 方形土坑1出土遺物

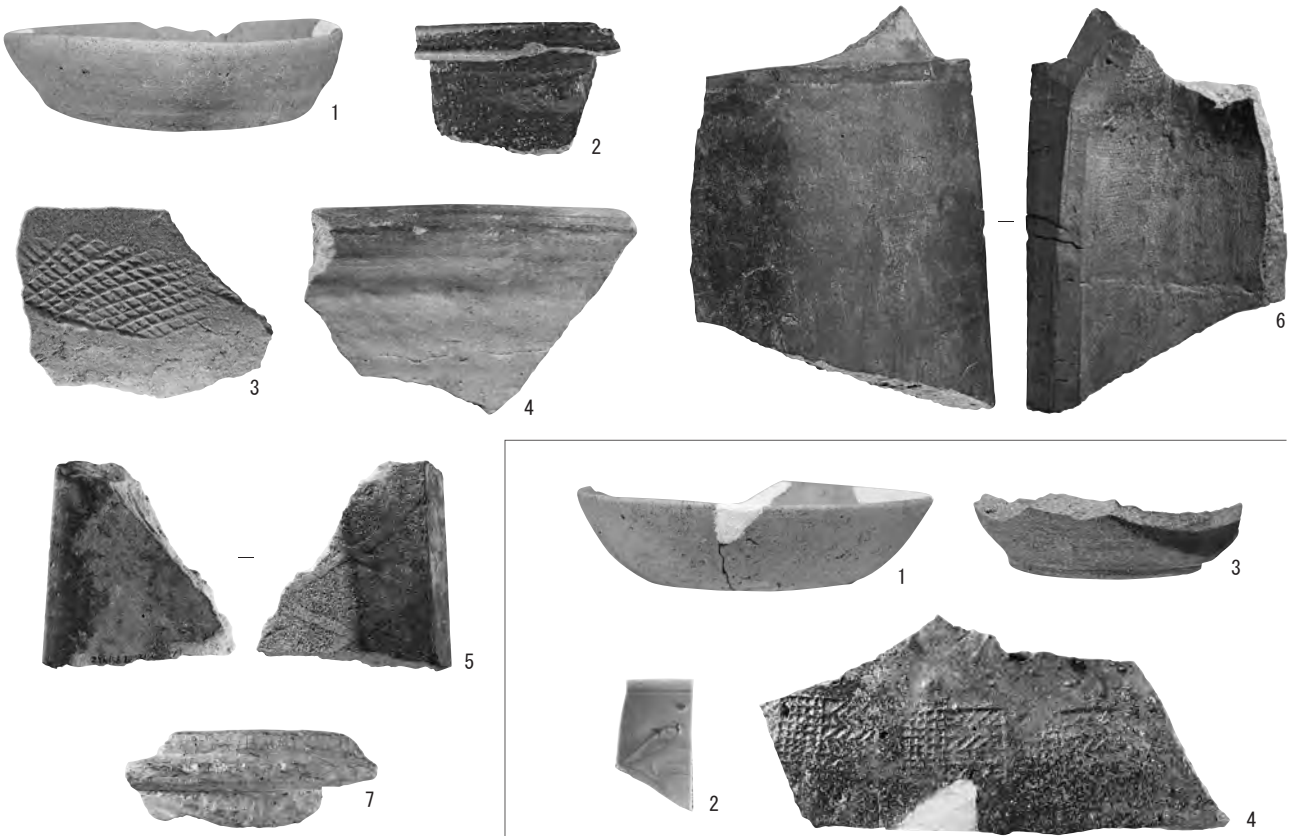


4. 第2面 土坑13出土遺物

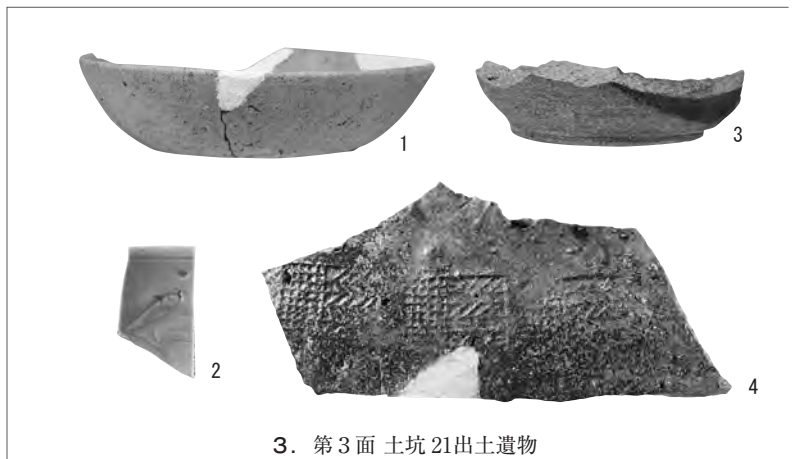
图版 6



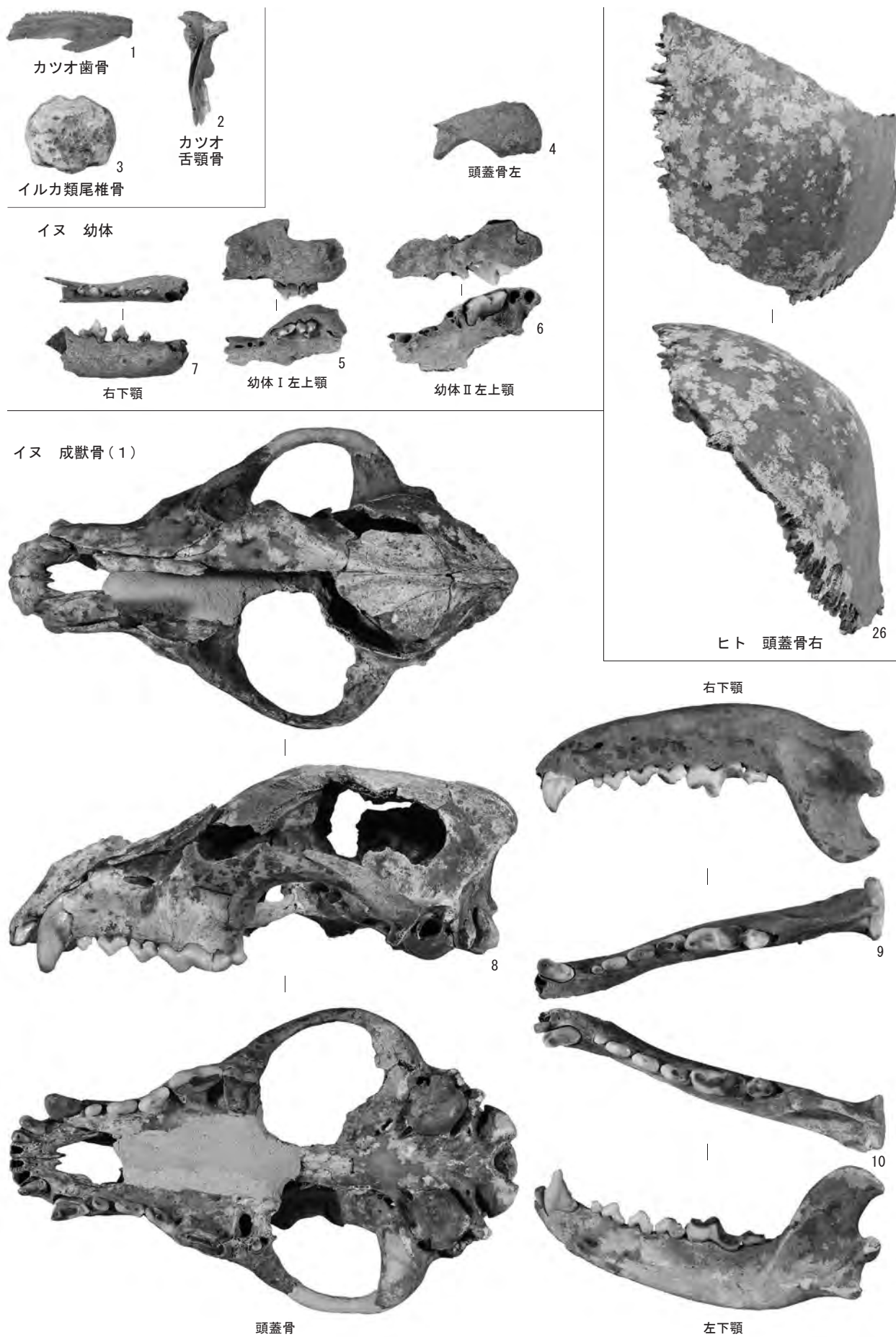
1. 第2面 構成土出土遺物



2. 第3面 溝状遺構1出土遺物



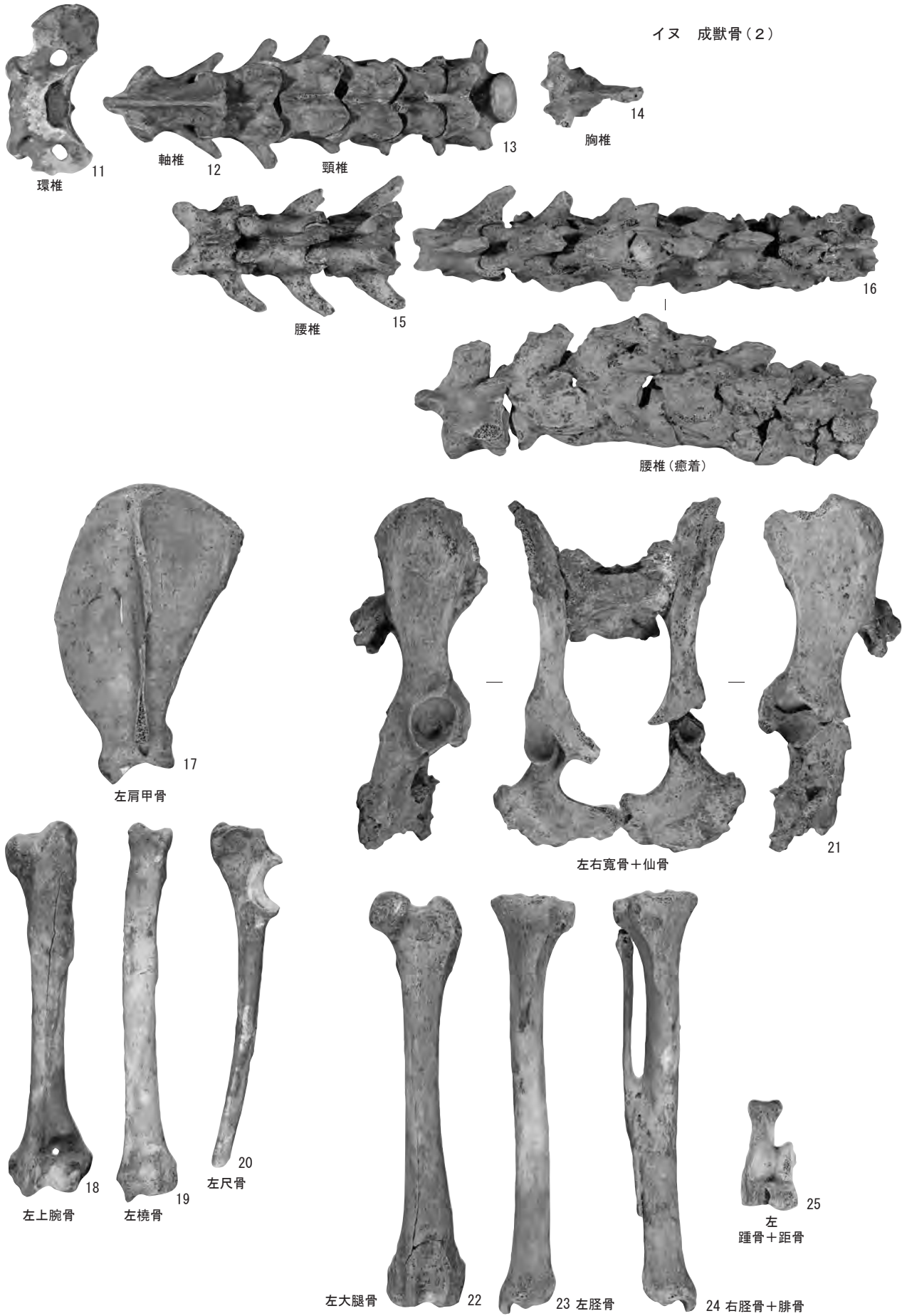
3. 第3面 土坑21出土遺物



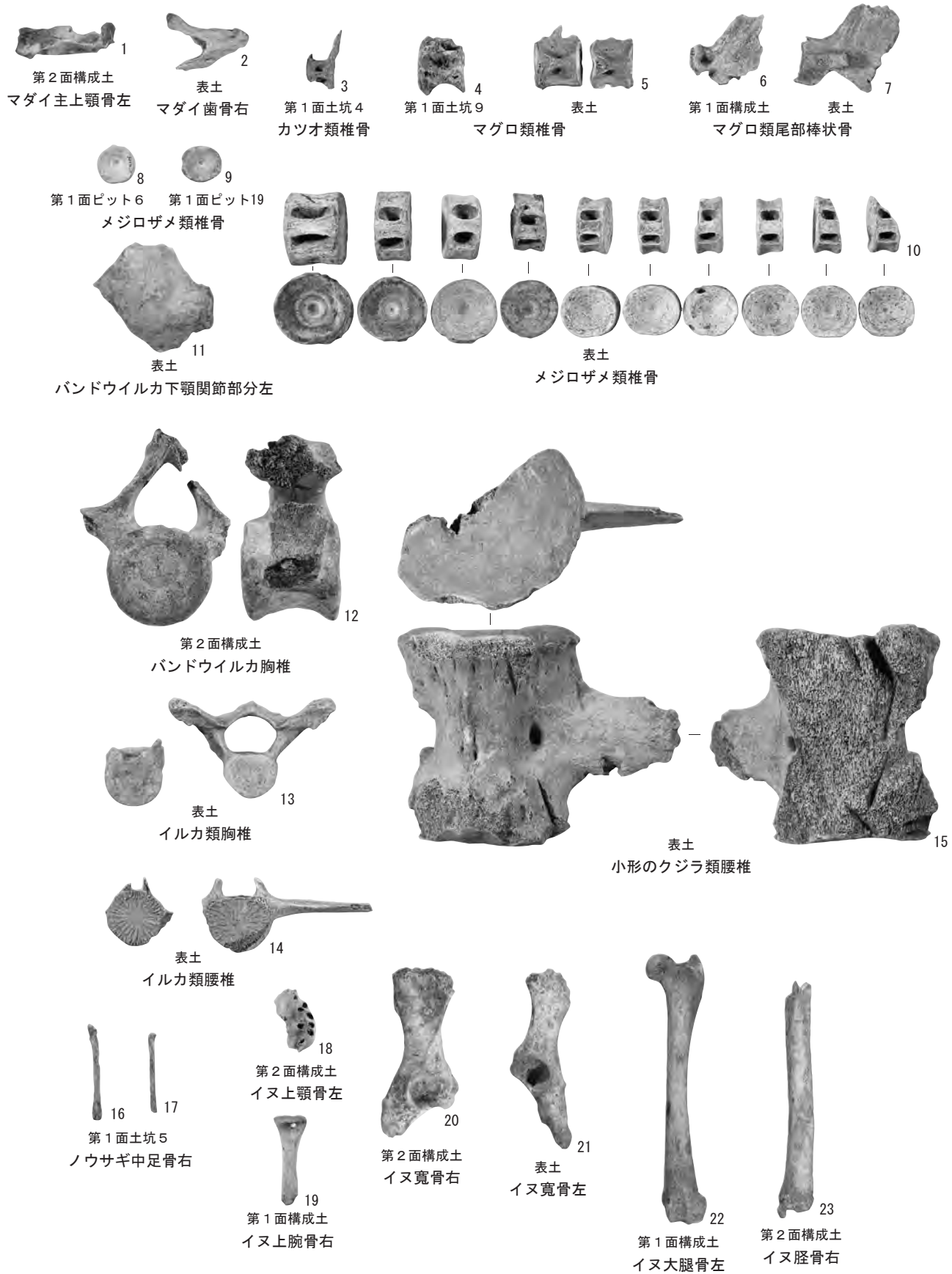
1. 第3面 溝状遺構1出土人骨・動物遺体(1)

図版 8

イヌ 成獣骨(2)

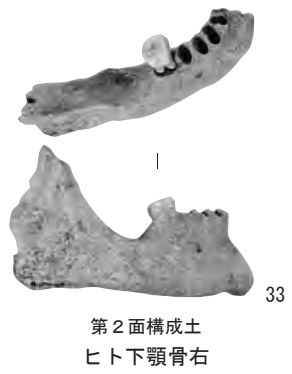
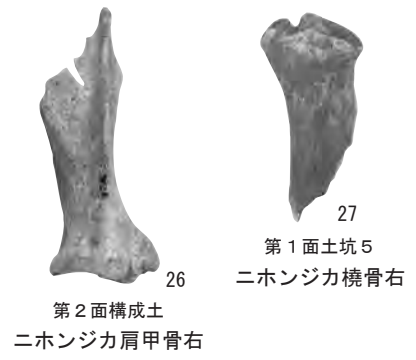
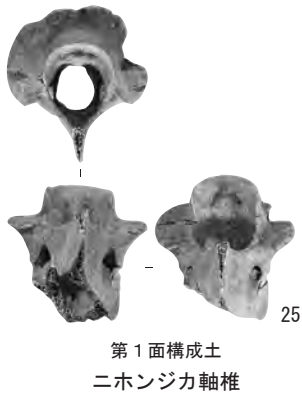


1. 第3面 溝状遺構1 出土動物遺体(2)



1. 出土動物遺体(1)

図版 10



1. 出土人骨・動物遺体(2)

報告書抄録

ふりがな	かまくらしまいぞうぶんかざいきんきゅうちようさほうこくしょ							
書名	鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書							
副書名	平成30年度発掘調査報告							
巻次	35 (第4分冊)							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者	永田史子・米澤雅美							
編集機関	鎌倉市教育委員会							
所在地	〒248-8686 鎌倉市御成町18番10号							
発行月日	西暦2019年3月29日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号					
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ゆきのした1ちょうめ 雪ノ下一丁目 ばん 421番1	14204	282	35° 19' 18"	139° 33' 15"	20100329 ～ 20100521	27	個人専用住宅 (柱状改良工事)
にしうりがやついせき 西瓜ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字瓜ヶ谷 980番3外	14204	213	35° 20' 7"	139° 32' 30"	20090216 ～ 20090316	54	店舗併用 個人専用住宅 (柱状改良工事)
やまのうちうえすぎていあと 山ノ内上杉邸跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字東管領 やしき 屋敷179番9外	14204	170	35° 20' 3"	139° 32' 56"	20081015 ～ 20081128	33	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
あんこくじあと 安国寺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 やまのうちあざひがしかんれい 山ノ内字東管領 やしき 屋敷147番9外	14204	174	35° 19' 56"	139° 33' 1"	20100212 ～ 20100507	46	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 じょうみょうじ1ちょうめ 浄妙寺一丁目 ばん 652番1	14204	33	35° 19' 16"	139° 33' 53"	20081010 ～ 20090129	67	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 おおまち6ちょうめ 大町六丁目 ばん 1708番23外	14204	231	35° 18' 51"	139° 33' 49"	20100514 ～ 20100630	21	個人専用住宅 (杭基礎工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご1ちょうめ 材木座一丁目 ばん 919番19	14204	261	35° 18' 45"	139° 33' 9"	20080627 ～ 20080716	28	個人専用住宅 (鋼管杭工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご1ちょうめ 材木座一丁目 ばん 893番9	14204	261	35° 18' 44"	139° 33' 8"	20080724 ～ 20080801	13	個人専用住宅 (柱状改良工事)
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	かながわけんかまくらし 神奈川県鎌倉市 ざいもくご6ちょうめ 材木座六丁目 ばん 742番4外	14204	261	35° 18' 20"	139° 33' 7"	20090721 ～ 20090826	45	個人専用住宅 (柱状改良工事)

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
ほうじょうこまちていあと 北条小町邸跡	城館	中世 近世	礎板建物、掘立柱建物、 土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、土製品、金属製品、 木製品	13世紀後葉～14世紀代、18 ～19世紀前葉の遺構群を検 出。柱の残る近世の掘立柱 建物を確認。
にしうりがやついせき 西瓜ヶ谷遺跡	都市	中世		かわらけ、舶載磁器、国 産陶器、土器、瓦質土器、 石製品、金属製品	15世紀前半の遺物が出土。
やまのうちうえずぎていあと 山ノ内上杉邸跡	都市	中世	礎石・礎板建物、池状 遺構、溝状遺構、土坑、 ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 金属製品、木製品、漆器	13世紀中葉～14世紀中葉の 遺構群を検出。池状遺構を 検出。
あんこくじあと 安国寺跡	社寺	中世	礎石建物、切石基礎 建物、溝状遺構、板 組遺構、石列、掘鉢 遺構、土坑、不明遺構、 ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 骨製品、金属製品、木製 品、呪符木簡、漆器	13世紀代～15世紀中葉の遺 構群を検出。石組を伴う溝 状遺構を確認。高嶋産の刻 書硯、呪符木簡が出土。
でんがくずししゅうへんいせき 田楽辻子周辺遺跡	都市	中世	礎石建物、道路状遺構、 溝状遺構、井戸、方形 土坑、土坑、ピット	土師器、かわらけ、舶載 陶磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、瓦、土製品、 石製品、骨角製品、金属 製品	13世紀初頭～15世紀中葉の 遺構群を検出。南西から北 東方向に延びる道路状遺構 と、溝が方形に巡る礎石建 物を確認。
なごえがやついせき 名越ヶ谷遺跡	都市	中世	礎石建物、溝状遺構、 かわらけ溜まり、土 坑、ピット	土師器、かわらけ、舶載 磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、土製品、石製 品、金属製品、木製品	13世紀中葉～14世紀中葉の 遺構群を検出。かわらけ溜 まりを確認。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	土坑、ピット	土師器、須恵器、かわら け、舶載陶磁器、国産陶 器、土器、瓦質土器、瓦、 土製品、石製品、骨角製 品、金属製品、木製品	13世紀前葉～14世紀前半の遺 構群を検出。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	溝状遺構、土坑、ピッ ト	土師器、かわらけ、舶載 陶磁器、国産陶器、土器、 瓦質土器、瓦、石製品、 木製品	13世紀後葉～14世紀前葉の 遺構群を検出。
ざいもくごまちやいせき 材木座町屋遺跡	都市	中世	溝状遺構、方形土坑、 土坑、ピット	かわらけ、舶載陶磁器、 国産陶器、土器、瓦質土 器、瓦、土製品、石製品、 骨製品、金属製品、木製 品	14世紀後葉～16世紀前葉の 遺構群を検出。溝状遺構か ら成犬の全身骨が出土。

鎌倉市埋蔵文化財緊急調査報告書 35

平成 30 年度発掘調査報告

(第 4 分冊)

発行日 平成 31 年 3 月 29 日

編集・発行 鎌倉市教育委員会
印刷 光写真印刷株式会社